

現代文學全集













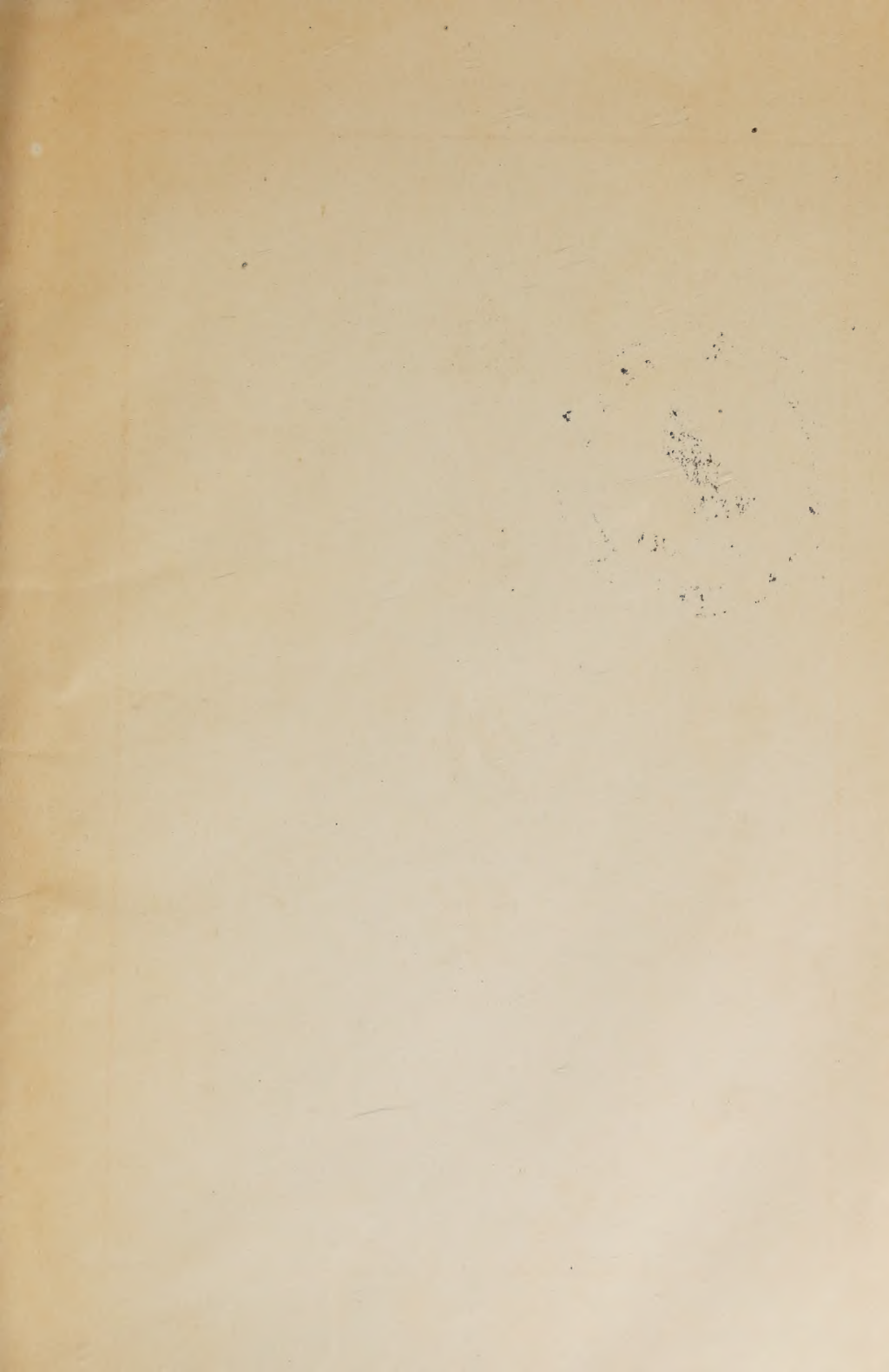
# 森鷗外集



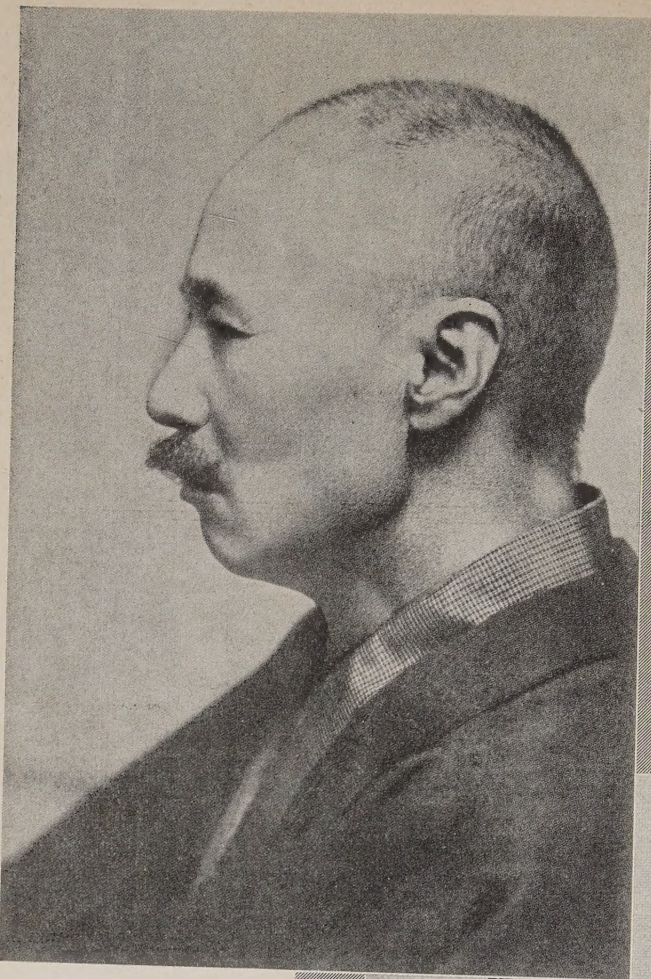
改  
造  
社  
版

杉浦非水裝幀









枯魚過河泣何時悔復  
及作書与方輿相教慎

春日  
鷗外湛



晩年の森鷗外氏と

その筆蹟



PL755.6

.G38

v. 3

森

田

水

集

日本書

文庫

# 「森鷗外集」目次

卷頭寫眞 (照影)

小傳

即興詩人……………三

うたかたの記……………一八四

舞姫……………一九五

文づかひ……………二〇六

埋木……………二一六

玉篋兩浦嶼……………二五八

日蓮聖人辻説法……………二六八

キタ・セクスアリス……………二七三

金毘羅……………三二六

生田川……………三三八

あそび……………三四四

蛇……………三五二

妄……………三六〇

心……………三七〇

百物……………三七七

雁……………三八六

高瀬……………四三八

阿部一族……………四四五

山椒大い……………四六四

細木香……………四八〇

古い手帳から……………四九七

長宗我部信親……………五〇五

沙羅の木……………五一三

我百首……………五一八

(附) 詩歌抄

年譜……………五二一





# 即興詩人

## 初版例言

一、即興詩人は璉馬の人 HANS CHRIS-  
TIAN ANDERSEN (1805—1875) の作に  
して、原本の初版は千八百三十四年に世  
に公にせられぬ。

二、此譯は明治二十五年九月十日稿を起  
し、三十四年一月十五日完成す。殆ど  
九星霜を経たり。然れども軍職の身に在  
るを以て、稿を屬するは、大抵夜間、若  
くは大祭日、日曜日にして家に在り客に接  
せざる際に於てす。予は既に、歲月の久  
しき、嗜好の屢々變じ、文致の畫一なり  
難きを憾み、又筆を擱くことの頻にして、  
興に乗じて揮瀉すること能はざるを惜  
みたりき。世或は予其職を曠しくして、  
ほしむに、述作に耽ると謂ふ。寃も亦甚  
しきかな。

三、文中加特刀教の語多し。印刷成れる  
後、我國公教會の定譯あるを知りぬ。而

れども遂に改刪すること能はず。

四、此書は印するに四號活字を以てせり。  
予の母の、年老い目力衰へて、毎に予  
の著作を読むことを嗜めるは、此書に字  
形の大なるを選びし所以の一なり。夫れ  
字形は大なり。然れども紙面殆ど餘白を  
留めず、段落猶日連續して書し、以て紙  
數をして太だ加はらざらしむることを得  
たり。

明治三十五年七月七日下志津陳魯に於いて

譯者識す

## 第十三版題言

是れ予が壯時の筆に成れる IMPROVISA-  
TIONEN の譯本なり。國語と漢文とを調和  
し、雅言と俚辭とを融合せむと欲せし、放  
膽にして無謀なる嘗試は、今新に其得失を  
論ずることを須ゐざるべし。初めこれを縮  
刷に付するに臨み、予は大いに字句を制正

せむことを期せしに、會々歐洲大戰の起る  
ありて、我國も亦其旋渦中に没するに至り  
ぬ。羽機旁午の間、予は僅に假刷紙を一閱  
することを得しのみ。

大正三年八月三十一日觀潮樓に於いて

譯者又識す

## わが最初の境界

羅馬に往きしことある人はピアツツア、バル  
ベリイニを知りたるべし。こは貝殻持てるトリ  
イトンの神の像に造り做したる、美しき噴井あ  
る、大なる廣こうちの名なり。只彼よりは水湧  
き出で、その高さ數尺に及べり。羅馬に往きし  
ことなき人もかの廣こうちのさまをば銅板畫に  
て見つることあらむ。かゝる畫にはキア、フェ  
リチエの角なる家の見えぬこそ恨なれ。わが  
ふ家の石垣よりのぞきたる三條の樋の口は水を  
吐きて石盤に入らしむ。この家はわがためには  
尋常ならぬおもしろ味あり。そをいかにといふ  
にわれはこの家にて生れぬ。首を回してわが  
稱かりける程の事をおもへば、目もくるめくば  
かりいろ／＼なる記念の多きことよ。我はいづ  
こより語り始めむかと心迷ひて爲むすべを知ら



# 森 鷗外小傳

鷗外森林太郎、諱は高湛、源姓、鷗外漁史はその號、別に觀潮樓主人、千桑山房主人、歸休庵と號す。石見國津和野藩主龜井家の臣で、家代々醫を業とし、祖父の頃まで多く藩の典醫に任ぜられた。林太郎は文久二年正月生れ、幼時は國で漢學と蘭學を受け、明治五年十一歳の時上京して獨逸語を修め、六年東京醫學校に入り、十四年卒業して醫學士となり、その冬陸軍に出仕し、十七年衛生學研究のため獨逸國留學を命ぜられ、ライプチヒ、ミュンヘン、柏林の大學に學び、二十一年九月歸朝した。その間専門醫學の外に、文學、哲學、美術、戲曲等にも就ても深い研究を積み、歸朝後は軍醫學校及び陸軍大學校の教官として衛生學を講じ、兵士の食物と日本の家居に關する實驗に従ひ、傍ら東京美術學校、慶應義塾に於て美術解剖學、審美學を講じ、又小説『舞姫』、うたかたの記』、文づかひ』等を發表し、或は衛生新説』、醫事新論』等を創刊しては醫學上の意見を吐露し、『しがらみ草紙』を發刊しては文學評論及び歐洲文藝の翻譯紹介に力めた。二十四年醫學博士となり、日清戰役より臺灣の征討に従ひ、軍醫學校長、

近衛師團軍醫部長を経て、豊前國小倉の第十二師團軍醫部長に轉じ、居ること四年第一師團軍醫部長に轉じて東京に歸つた。

日露戰役には第二軍醫部長として出征し、金州から奉天まで大小の戰闘に参加し、凱旋後軍醫學校長事務取扱から、四十年遂に陸軍軍醫總監に進み、醫務局長に補せられた。小倉赴任以來久しく文壇と遠ざかつたが、これより以後創作に、翻譯に、評論に捲き重來の勢を以て活躍を開始し、次で文學博士の學位を受け、文藝委員會委員となり、又毎年、文部省美術展覽會審査委員を囑託せられ、大正三年以後は専ら歴史、傳記の方面に筆を執り、無間の人物を闡明するに努めた。五年醫務局長を辭して豫備に入り、翌年帝室博物館總長兼圖書頭に任ぜられ、帝國美術院長、臨時國語調査會長等を兼ね、十一年七月九日六十二歳で薨去するまで、我邦文化のため努力した。

『キタ・セクスアリス』は幼年より留學までの事を性態方面から書いたものであり、『舞姫』、うたかたの記』、文づかひ』等は留學中の記念作品といふべく、又『妄想』にもこの頃の事は現れて居る。小倉時代の事は『獨身』、『鷗』二人の友』などに書かれて居るが、本集には收められぬ。

猶や、詳しい履歷と、本集所收小説の著作年代は、卷尾の年譜を参照せられたい。

林太郎が初め國から出た時は向島小梅町の父の家に同居し、十五年頃父に隨つて北千住に轉じ、獨逸から歸つた年に下谷中根岸に一戸を構へ、幾もなく下谷根岸町東照宮裏坂下に徙つた。『しがらみ草紙』を出したのは此時代の事で、幸川露伴、井上通泰、賀古鶴所、諸氏が毎夜一時二時頃までも集會して痛飲淋漓文學藝術を論じた。それから三三年して本郷駒込千駄木町五十七番地當時太田の邸というた處へ引越し、終に園子坂上の千駄木町二十一番地、所謂觀潮樓に移つたのであるが、面白い事はその五十七番地の跡に越して來られたのが漱石先生で、『吾輩は猫である』を書かれた家がそれである。園子坂の家は今紀文と稱せられた細木香以の取巻きの一人小倉是阿彌の舊宅で、それを崩した跡に觀潮樓を建築したのである。日露戰役凱旋後、千葉縣夷隅郡日在に別荘を作り、和漢の詩文集、新刊寄贈の小説類を置いて、時々休息の所として居つた。『妄想』の初めに書かれてゐるのは其處の事であり、八十八といふのも實在の別荘番である。

昭和二年十二月

森 潤三郎

観る心におなじかりき。

僧はそちを心猛き童なり、いで死人を見せむといひて、小き戸を開きつ。こゝは廊より二三級低きところなりき。われは延かれて級を降りて見しに、こゝも小き廊にて、四圍悉く髑髏なりき。髑髏は髑髏と接して壁を成し、壁はその並びざまにて許多の小龕に分れたり。おほいなる龕には頭のみならず、胴をも手足をも具へたる骨あり。こゝは高位の僧のみまかりたるなり。かゝる骨には褐色の尖帽を被せて、腹に繩を結び、手には一卷の經文若くは枯れたる花束を持たせたり。贅草、花形の燭臺、そのほかの飾をば肩胛、脊椎などにて細工したり。人骨の浮彫あり。これのみならず忌まはしくも、又趣なきはこゝの拵へざまの全體なるべし。僧は祈の詞を唱へつゝ行くと、われはひとと寄り添ひて従へり。僧は唱へ畢りていふやう。われも早晚こゝに眠らむ。その時汝はわれを見舞ふべきかといふ。われは一語をも出すこと能はずして、僧と僧のめぐりなる氣味あるきものとを驚き胎たり。まことに我が如き髑髏をかゝるところに伴ひ入りしは、いとおろかなる業なりき。われはかしこにて見しものに心を動かさるること甚しかりければ、歸りて僧の小房に入り

しとき機に生き返りたるやうなりき。この小房の窓には黄金色なる柑子のいと美しきありて、殆ど一間の中に垂れむとす。又聖母の畫あり。その姿は天使に擔ひ上げられて日光明なるところに浮び出でたり。下には聖母の息ひたまひし洞穴ありて、もゝいろちいろの花これを掩ひたり。われはかの柑子を見、この畫を見るに及びて、わづかに我にかへりしなり。

この始めて僧房をたづねし時の事は、久しき間わが空想に好き材料を興へき。今もかの時の事をおもへば、めづらしきあざやかに目の前に浮び出でむとす。わが當時の心にては、僧といふ者は全く我等の知りたる常の人とは殊なるやうなりき。かの僧が褐色の衣を着たる死人の殆どおのれとおなじきまなると共に棲めること、かの僧があまたの尊き人の上を語り、あまたの不思議の蹟を語すこと、かの僧の尊さをば我母のいたく敬み給ふことなどを思ひ合する程に、われも人と生れたる甲斐にかゝる人にならばやと折々おもふことありき。母上は未亡人なりき。活計を立つるには、銭仕事して得給ふ錢と、むかし我等が住みたりしおほいなる部屋を人に借して得給ふ僧とあるのみなりき。われ等は屋根裏の小部屋に住めり。

かのおほいなる部屋に引き移りたるはフェデリゴといふ年少き畫工なりき。フェデリゴは心敏く世をおもしろく暮らす少年なりき。かれはいとも遠きところより來ぬといふ。母上の物語り給ふを聞けば、かれが故郷にては聖母をも耶穌の稱子をも知らずとぞ、その國の名をば蓬馬といへり。當時われは世の中にいろゝの國語ありといふことを解せねば、畫工が我が言ふことを曉らぬを耳とほきがためならむとおもひ、おなじ詞を繰り返して聲の限り高きいふに、かれはわれを可笑しきものにおもひて、をりをり果をわれに取らせ、又わがために兵卒馬家などの形をゑがきあたへしことあり。われと畫工とは幾時も立たぬに中善くなりぬ。われは畫工を愛しき。母上もをりくかれは善き人なりと宜ひき。さるほどにわれはとある夕母上とフラア、マルチノとの話を聞きしが、これを聞きてよりわが技藝家の少年上をおもふ心あやしく動かされぬ。かの異國人は地獄に墜ちて永く浮ぶ瀕あらざるべきかと母上問ひ給ひぬ。そはひとりかの男の上みにはあらじ。異國人のうちにはかの男の如く惡しき事をば一たびもせざるもの多し。かの輩は貧乏人に逢ふときは物取らせて吝むことなし。かの輩は債ある



ず。又我世の傳奇の全局を見わたせば、われはいよくこれを寫す手段に苦めり。いかなる事かを緊要ならずして棄て置くべき。いかなる事かを全書圖をおもひ浮べしめむために殊更に數へ擧ぐべき。わがためには面白きことも外人のためには何の興もなきものあらむ。われは我世のおほいなる碑物語をありのまゝに飾り飾ることなくして語らむとす。されどわれは人の意を迎へて自ら喜ぶ性のこゝにもまぎれ入らむことを恐る。この性は早くもわが穢き時に、蟲の中なる雜草の如く萌え出で、やうやく聖經に見えたる芥子の如く高く空に向ひて長じ、つひには一株の大木となりて、それが枝の間にわが七情は巢食ひたり。わが最初の記念の一つは既にその芽生を見せたり。おもふにわれは最早六つになりし時の事ならむ。われはおのれより穢き子供三人に向ひたる尖帽僧の寺の前にて遊びき。寺の扉には小さき眞鍮の十字架を打ち付けたりき。その處はおほよそ扉の中段にてわれは僅に手をさし伸べてこれに達することを得き。母上は我を伴ひてかの扉の前を過ぐるときに、必ずわれを遙き抱きてかの十字架に接吻せしめ給ひき。あるときわれ又子供と遊びたりしに、甚だ穢き一人がいふやう。いかなれば

耶穌の穢子は一たびもこの群に來て、われ等と共に遊ばざるといひき。われさかしく答ふるやう。むべなり、耶穌の穢子は十字架にかゝりたればといひき。さてわれ等は十字架の下にゆきぬ。かしこには何物も見えざりしかど、われ等は猶母に教へられし如く耶穌に接吻せむとおもひき。さるを我等が口はかしこに届くべきならねば、我等はかはるゝ抱き上げて接吻せしめき。一人の子のさし上げられて僅に肩を失はせたるを、抱いたる子力足らねば落しつ。この時母上通りかゝり給へり。この遊のさまを見て立ち住まり、指組みあはせて宜ふやう。汝等はまことの天使なり。さて汝はいひさして、母上はわれに接吻し給ひ、汝はわが天使なりといひ給ひき。

母上は隣家の女子の前にて、わがいに罪なき子なるかを繰り返して語り給ひぬ。われはこれを聞きしが、この物語はいたくわが心に協ひたり。わが罪なきことは固よりこれがために前には及ばずなりぬ。人の意を迎へて自ら喜ぶ性の種は、この時始めて日光を吸ひ込みたりしなり。造化は我におとなしく軟なる心を授けたりき。さるを母上はつねに我がこゝろのおとなしきを我に告げ、わがまことに持てる長處

と母上のわが持てりと思ひ給へる長處を我にさし示して、小兒の罪なきはかの醜きバジリスコの獸におなじきをおもひ給はざりき。かれもこれもおのが姿を見るときは死なでかなはぬ者なるを。

彼尖帽僧の寺の僧にフラア、マルチノといへるあり。こは母上の懺悔を聞く人なりき。かの僧に母上はわがおとなしきを告げ給ひき。祈のこゝろをばわれ知らざりしかど、祈の詞をばわれ善く諳じて渡らすことなかりき。僧は我をかはゆきものにおもひて、あるとき我に一枚の圖をおくりしことあり。圖の中なる聖母のこぼし給ふおほいなる涙の露は地獄の微の上に落ちかかれり。亡者は争ひてかの露の滴りおつるを承けむとせり。僧は又一たびわれを伴ひてその僧舎にかへりぬ。當時わが目にとまりしは、方なる形に作りたる圓柱の廊なりき。廊に閉まれたるは小さき馬鈴薯館にて、そこにはいとすぎ

(チブレッツォ)の木二株、構櫓の木一株立てりき。開け放ちたる廊には世を過りし僧どもの像をならべ懸けたり。部屋といふ部屋の戸には戲身者の傳記より撰び出したる畫圖を貼り付けたり。當時わがこの圖を觀し心は、後になりてラファエロ、アンドレア、デル、サルトリオが作を

わが口に入らむとする「パン」を奪ふこそ心得られねといひき。われはこゝまで聞きつれど、こゝまでは見てありつれど、この時買ひに出でたる、「フオリエツタ」(一勺)の酒をひき上げて、急ぎて家にかへりぬ。

大祭日には、母につきてをちがり祝にゆきぬ。その折には菰苳もてゆくことなるが、そはをちが嗜めるおほ房の葡萄二つ三つか、さらずば砂糖につけたる林檎などなりき。われはをち御と呼びかけて、その手に接吻しき。をちはややしげに笑ひて、われに半バヨツコを與へ、果子をな買ひそ、果子は食ひ畢りたる時、迹かたもなくなくなるものなれど、この錢はいつまでも貯へらるゝものぞと教へき。

をちが住めるところは、暗くして見苦しかりき。一間には窓といふものなく、また一間には壁の上の端に、破硝子を紙もて補ひたる小窓ありき。臥所の用をなしたる大箱と、衣を藏むる小桶二つとの外には、家具といふものなし。をちがり往け、といはるゝときは、われ必ず泣きぬ。これも無理ならず。母上はをちにやさしくせよ、と我ををしへながら、我を嚇さむとおもふときは、必ずをちを案山子に使い給ひき。母上の宣たまひけるや。かく惡劇せば、好き

をち御の許にやるべし。さらば汝も、燈の上に坐して、をちと共に袖乞するならむ。歌をうたひて「バヨツコ」をめぐまるゝを待つならむとのたまふ、われはこの詞を聞きても、あながち恐るゝことなかりき。母上は我をいつくしみ給ふこと、目の球にも優れるを知りたれば。

向ひの家の壁には、小竈をしつらひて、それに聖母の像を据え、その前にはいつも燈を燃やしたり。「アエ、マリア」の鐘鳴るころ、われは近隣の子供と像の前に跪きて歌ひき。燈の光けらめくときは、聖母も、いろ／＼の細珠、銀色したる心の臓などにて飾りたる耶蘇のをさな子も、共に動きて、我等が面を見て笑み給ふ如くなりき。われは高く朗なる聲して歌ひしに、人々聞きて善き聲なりといひき。或る時英吉利人の一家族、我歌を聞きて立ちとまり、歌ひ畢るを待ちて、長らしき人われに銀貨一つ與へき。母に語りしに、そなたが聲のめでたき故、とのたまひき。されどこの詞はその後我祈を妨ぐることいかばかりなりしを知らず。それよりは、聖母の前にて歌ふごとに、聖母の上をのみ思ふこと能はずして、必ず我聲の美しきを聞く人やあると思ひ、かく思ひつゝも、聖母のわがあだし心を懷けるを嫉み給はむかと

あやぶみ、聖母に向ひて罪を謝し、あはれなる子に慈悲の眸を垂れ給へと願ひき。

わが餘所の子供に出で逢ふは、この夕の祈の時のみなりき。わが世は静けかりき。わが自ら作りたる夢の世に心を潜め、仰ぎ臥して開きたる窓に向ひ、伊太利の美しき青空を眺め、日の西に傾くとき、紫の光ある雲の黄金色したる地のうへに垂れかゝりたるをめで、時の遷るを知らざることしば／＼なりき。ある時は、遠くリナアル(丘の名にて、其上に法皇の宮居あり)と家々の棟とを越えて、紅に染まりたる地平線のわたりに、眞黒に浮き出で、見ゆる「ビニヨロ」の木々の方へ、飛び行かばや、と願ひき。我部屋には、この眺ある窓の外、中庭に向へる窓ありき。我家の中庭は、隣の家の中庭に並び、いづれもいと狭く、上の方は木の「アルタナ」物見のやうにしたる屋根にて鎖された。庭ごとに石にて甃みたる井ありしが、家々の壁と井との間をば、人ひとり僅かに通らるゝほどなれば、われは上より覗きて、二つの井の内を見るのみなりき。緑なるほうらいしだ(アデアンツム)生ひ茂りて、深きところは唯も黒くのみぞ見たる。俯してこれを見るたびに、われは地の底を見おろすやうに覺えて、こゝにも怖しき境あ



ときは期を怠らず額をたがへずして拂ふなり。然のみならず、かの輩は吾邦人のうちなる多人數の作る如き罪をば作らざるやうにおもはる。母上の問はおほよそ此の如くなりき。

フラア、マルチノの答へけるやう。さなり。

まことにいはるゝ如き事あり。かの輩のうちには善き人少からず。されどおん身は何故に然るかを知り給ふか。見給へ。世中をめぐりありく悪魔は、邪宗の人の所説おのが手に落つべきを知りたるゆゑ、強ひてこれを誘はむとすることなし。このゆゑに彼輩は何の苦もなく善行をなし、罪惡をのがる。善き加特力教徒はこれと殊にて神の愛子なり、これを附れむには悪魔はさまざまの手立を用ゐざること能はず。惡魔はわれ等を誘ふなり。われ等は弱きものなればその手の中に落つること多し。されど邪宗の人は肉體にも惡魔にも誘はるゝことなしと答へき。

母上はこれ聞いて復た言ふべきこともあらねば、便なき少年の上をおもひて大息つき給ひぬ。かたへ聞せしわれは泣き出しつ。こはかの人、の永く地獄にありて獄に苦められむつらさをおもひければなり。かの人は善き人なるに、わがために美しき畫をかく人なるに。

わが稱きころ、わがためにおほいなる意味ありと覺えし第三の人はベツボのをぢなりき。惡人ベツボといふも西班牙證の下といふも皆その人の綽號なりき。此は日ごとに西班牙證の上に御ましき。西班牙證こうちよりモンテ、ピンチヨオの上なる街に登るには高く廣き石級あり。この石級は羅馬の乞兒の集まるころなり。西班牙證こうちより登るところなればかく名づけられしなり。ベツボのをぢは庄れつき兩の足疲えたる人なり。當時そを十字に組みて折り敷き居たり。されど稱きときよりの熟練にて、をぢは兩手もて歩くこといと巧なり。其手には革紐を結びて、これに板を掛けたるが、をぢがこの道具にて歩む速さは健かなる脚もて行く人に劣らず。をぢは日ごとに上にもいへるが如く西班牙證の上に坐したり。さりとて外の乞兒の如く憐を乞ふにもあらず。唯とおのが前を過ぐる人あるごとに、詐ありげに面をしかめて「ボン、ジョオルノオ、我俗の今日はといふ如し」と呼べり。日は既に入りたる後もその呼ぶ詞はかはらざりき。母上はこのをぢを敬ひ給ふことさまでならざりき。あらず。親族にかゝる人あるをば心のうちに恥ぢ給へり。されど母上はしばし我に向ひて、そな

たのためなれば、彼につきあひおくとのたまひき。餘所の人の此世にありて求むるものをば、かの乞兒の底に藏めて持ちたり。若し臨終に、寺に納めだにせずば、そを譲り受くへき人、わが外にはあらぬを、母上は惜みたまひき。をぢも我に親むやうなところありしが、我は其側にあるごとに、まことに喜ばしくおもふこと絶てなかりき。或る時、我はをぢの振舞を見て、心に怖を懷きはじめき。こは、をぢの本性をも見るに足りぬべき事なりき。例の石級の下に老いたる盲の乞兒ありて、律きかふ人の「バヨッコ」(我々錢許に當る銅貨)一つ投げ入れむを願ひて、薄葉鐵の小筒をさらりと鳴らし居たり。我がをぢは、面にやさしげなる色を見せて、筒を押し動しなどすれど、人々その前をはいたらに過ぎゆきて、かの盲人の何の會粹もせざるに、錢を與へき。三人かく過ぐるまでは、をぢはより見居たりしが、四人めの客かの盲人に小貨幣二つ三つ與へしとき、をぢは毒蛇の身をひねりて行く如く、石級を下りて、盲の乞兒の面を打ちしに、盲の乞兒は錢をも杖をも取りおとしつ。ベツボの叫びけるやう。うぬは盜人なり。我錢を竊む奴なり。立派に癡人といはるべき身にもあらで、たゞ目の見えぬを手柄顔に、

て、この壁中に葬られたる法皇十四人、その外數千の獻身者の事を物語りぬ、われ等は石龕のわれ目に燭火さしつけて、中なる白骨を見き。(この墓には何の飾もなし。拿破里に近き聖ヤヌアリウスの「カタコンバ」には聖像をも文字をも彫りつけたるあれど、これも技術上の價あるにあらず。基督教徒の墓には、魚を彫りたり。希臘文の魚といふ字は「イヒトユス」なれば、暗に「イエソウス、クリストス、テオウ、ワイオス、ソオテエル」の文の首字を集めて語をなしたるなり。此希臘文はこゝに耶蘇基督教神子救世者と云ふ。われ等はこれより入ること二三歩にして立ち留りぬ。ほぐし來たる絲はこゝにて盡きたればなり。畫工は絲の端を控鈕の孔に結びて、蠟燭を拾ひ集めたる小石の間に立て、さてそこに蹲りて、隧道の模様を寫し始めき。われは倭なる石に踞けて合掌し、上の方を仰ぎ視むたり。燭は半ば流れたり。されどさきに貯へおきたる新なる蠟燭をば、今取り出してその側におきたる上、火打道具さへ帶びたれば、消えなむ折に火を點すべき用意ありしなり。

われはおそろしき暗黒天地に通ずる幾條の道を望みて、心の中にさまじの奇怪なる事をおもひ居たり。この時われ等が周囲には寂として

何の聲も聞えず、唯々忽ち歸え忽ち續く、物寂しき岩間の雪の音を聞くのみなりき。われはかく由なき妄想を懷きてしばしあたりを忘れ居たるに、ふと心づきて畫工の方を見れば、あな訝かし、畫工は火息つきて一つところを馳せめぐりたり。その間かれは頻に俯して、地上のものを搜し索むる如し。かれは又火を新なる蠟燭に點じて再びあたりをたづねたり。その氣色たゞならず覺えければ、われも立ちあがりて泣き出し。

この時畫工は聲を囁まして、こは何ごとぞ、善き子なれば、そこに坐りぬよ、と云ひしが、又肩を纏めて地を見たり。われは畫工の手に取りすがりて。最早登りゆくべし、こゝには居りたくなし、とむつかりたり。畫工は、そち善き子なり、畫かきてや遣らむ、果子をや與へむ、こゝに錢もあり、といひつゝ、衣のかくしを探して、財布を取り出し、中なる錢をば、ことごとく我に與へき。われはこれを受くるとき、畫工の手の水の如く冷になりて、いたく震ひたるに心づきぬ。我はいよいよ騒ぎ出し、母を呼びてますゝ泣きぬ。畫工はここの時我肩を掴みて、劇しくゆすり搖かし、靜にせずば打擲せむ、といひしが、急に手巾を引き出して、我腕を縛

りて、しかと其端を取り、さて俯してあまたたび我に接吻し、かはゆき子なり、そちも聖母に願へ、といひき。絲をや失ひ給ひし、と我は叫びぬ。今こそ見出さめ、といひく、畫工は又地上をかきさぐりぬ。

さる程に、地上なりし蠟燭は流れ畢りぬ。手に持ちたる蠟燭も、かたかなたを搜し索むる忙しさに、流るゝこといよいよ早く、今は手の際まで燃え來りぬ。畫工の周章は大方ならざりき。そも無理ならず。若し絲なくして歩を運ばば、われ等は次第に深きところに入りて、遂に活路なきに至らむと計られざればなり。畫工は再び氣を勵まして探りしが、こたびも絲を得ざりしかば、力抜けて地上に坐し、我頭を抱きて大息つき、あはれなる子よ、とつぶやきぬ。われはこの詞を聞きて、最早家に還られざることぞ、とおもひければ、いたく泣きぬ。畫工にあまりに緊しく抱き寄せられて、我が縛られたる手はみざり落ちて地に達したり。我は覺えず埃の間に指さし入れしに、例の絲を握み得たり。ここにこそ、と我呼びしに、畫工は我手を握りて、物証ほしきまでするこびぬ。あはれ、われ等二人の命はこの絲にぞ繋ぎ留められける。

われ等の再び外に歩み出たるときは、日の

りとおもひき。かゝるとき、母上は杖の尖にて窓硝子を穿め、なんぢ井に墜ちて溺れだにせずば、この窓に當りたる木々の枝には、汝が食ふべき果おほく熟すべしとのたまひき。

### 隧道、ちこ

我家に宿りたる畫工は、廊外に出づるをり、我を伴ひゆくことありき。畫を作る間は、われかれを妨ぐることなかりき。さて作り畢りたるとき、われ碑き物語して慰むるに、かれも今はわが國の詞を解して、面白がりたり。われは既に一たび畫工に隨ひて、「クリリア、ホスチリア」にゆき、昔遊戲の日まで猛獸を押し込めおきて、つねに無辜の俘囚を獅子、「イエナ」獸なんどの餌としたりと聞く、かの暗き洞の深き處まで入りしことあり。洞の裡なる暗き道に、我等を導きてくぐり入り、燃ゆる松火を、絶えず石壁に振り當てたる仲、深き池の水の鏡の如く明にて、目の前には何もなきやうなれば、その足もとまで湛へ寄せたるを知らむには、松火も觸れ探らではかなげざるほどなる、いづれもわが空想を激したりき。われは怖をば懷かざりき。それは危しといふことを知らねばなりけり。

街のはつる處に、「コリゼオ」(大觀棚)の頂

見えたるとき、われ等はかの洞の方へゆくにや、と畫工に問ひしに、否、あれよりは迥に大なる洞にゆきて、面白きものを見せ、そなたをも景色と俱に寫すべし、と答へき。葡萄酒の間を過ぎ、古の混堂の址を圍みたる白き石垣に沿ひて、ひたすら進みゆく程に羅馬の府の外に出でぬ。日はいと烈しかりき。緑の枝を手折りて、車の上に插し、農夫はその下に眠りたるに、馬は車の片側に吊り下げたる一束の秣を食ひつゝ、ひとり徐に歩みゆけり。やう／＼女神エジェリアの洞にたどり着きて、われ等は朝食を食べ、岩間より湧き出づる泉の水に、葡萄酒混ぜて飲みき。洞の裏には、天井にも四方の壁にも、すべて絹、天鵝絨などにて張りたらむやうに、緑こまやかなる苔生ひたり。露けく茂りたる蕨の、おほいなる洞門にかゝりたるさまはカラブリア州の窟間なる葡萄酒架を見る心地す。洞の前數歩には、その頃いと寂しき一軒の家ありて、「カタコンバ」のうちの一つに造りかけたりき。この家は潰れて斷壁のみぞ留めたる。「カタコンバ」は人も知りたる如く、羅馬城とこれに接したる村々を通ずる隧道なりしが、半はおのづから壞れ、半は盜人、ぬけうりする人などの隠家となるを厭ひて、石もて塞がれたるなり。當時

猶存じたるは聖セバスチアノ寺の内なる穹窿の墓穴よりの入口と、わが言へる一軒家よりの入口とのみなりき。さてわれ等はかの一軒家のうちなる入口より進み入りしが、おもふに最後に此道を通りたるはわれ等二人なりしなるべし。いかにといふに此入口はわれ等が危き目に逢ひたる後、いまだ幾もあらぬに塞がれて、後には寺の内なる入口のみ残りぬ。かしこには今も僧一人居りて、旅人を導きて穴に入らしむ。深きところには、軟なる土に掘りこみたる道の行き違ひたるあり。その枝の多き、その様の相似たる、おもなる筋を知りたる人も踏み迷ふべきほどなり。われは碑心に何ともおもはず。畫工はまた豫め其心して、我を伴ひ入りぬ。先づ蠟燭一つ點し一つをば猶衣のかくしの中に貯へおき、一卷の絲の端を入口に結びつけ、さて我手を引きて進み入りぬ。忽ち天井低くなりて、われのみ立ちて歩まるゝところあり、忽ち又岐路の出づるところ廣がりて方燈をなし、見上ぐるばかりなる穹窿をなしたるあり。われ等は中央に小き石卓を据ゑたる圓堂を過りぬ。こゝは始めて基督教に歸依したる人々の、異教の民に逐はるゝごととに、ひそかに集りて神に仕まつりしところなりとぞ。ブルデリデはこゝに



て、寺に仕ふる兒の着るものに同じかりき。母上はかく爲立て、我を鏡に向はせ給ひき。我は此日より尖帽宗の寺にゆきてちごとなり、火伴の童達と共に、おほいなる出香爐を提げて儀にあづかり、また贊卓の前に出で、讚美歌をうたひき。總ての指圖をばフラア、マルチノなしつ。われは幾程もあらぬに、小き寺のうちに住み馴れて、贊卓に畫きたる神の使の童の顔をよく記え、柱の上なるうねりたる模様を識り、睨目したるときも、醜き龍と戦ひたる、美しき聖ミケルを面前に見ることを得るやうになり、鋪床に刻みたる獨體の、緑なる蔦かづらにて編みたる環を戴けるを見てはさまづの怪しき思をなしき。(聖ミケルが大なる翼ある美少年の姿にて、惡鬼の頭を踏みつけ、槍をその上に加へたるは、名高き畫なり。)

### 美小鬟、即興詩人

萬聖祭には衆人と俱に骨龕にありき。こはフラア、マルチノの嘗て我を伴ひて入りにしところなり。僧どもは皆經を誦するに、我は火伴の童二人と共に、獨體の贊卓の前に立ちて、提香爐を振り動したり。骨もて作りたる燭臺に、けふは火を點したり。僧侶の遺骨の手足全きは、けふ額に新しき花の環を戴きて、手に鑲けき花の一束を取りたり。この祭にも、いつもの如く、人あまた集ひ來ぬ。歌ふ僧の「ミゼレエレ」(ミゼレエレ、メイ、ドミニ、一主よ、我を惡み給へ、と唱へ出す加特力教の歌をいふ)唱へはじむるとき、人々は膝を屈めて拜したり。獨體の色白みたる、獨體と我との間に渦巻ける香の烟の怪しげなる形に見ゆるなどを、我は久しく打ち目守り居たりしに、こはいかに、我身の周圍の物、皆獨樂の如くに廻り出しつ。物を見るに、すべて大なる虹を隔て望むが如し。耳には寺の鐘百ばかりも、一時に鳴るらむやうなる音聞ゆ。我心は早き流を舟にて下る如くにて、譬へむやうなく日出たかりき。これより後の事は知らず。我は氣を喪ひき。人あまた集ひて、鬱陶しくなりたるに、我空想の燃え上りたるや、この眩暈のものなりけむ。醒めたるときは、寺の閑なる構様の木の下にて、フラア、マルチノが膝に抱かれ居たり。

より後、われは怪しき夢をみることに頻なりき。それを母上に語れば、母上は又友なる女どもに傳へ給ひき。それが中には、われまことにさる夢を見しにはあらねど、見きと詐りて語りしもありき。これによりて、我を神のおん子なりとする、人々の惑は、日にけに深くなりまされぬ。さる程に嬉しき聖誕祭は近づきぬ。つねは山住ひする牧者の笛ふき(ピツフェラリ)となりたるが、短き外套着て、紐あまた下げ、矢りたる帽を戴き、聖母の像ある家ごとに進め來て、救世主の誕れ給ひしは今ぞ、と笛の音に知らせありきぬ。この單調にして悲しげなる聲を聞き、我は朝なく覺むるが常となりぬ。覺むれば説教の稽古す。おほよそ聖誕日と新年との間には、一サンタ、マリヤ、アラチェリー一の寺なる基督の像のみまへにて、童男童女の説教あること、年ごとの例なるが、我はこし其一人に當りたるなり。

吾齡は甫めて九つなるに、かしこにて説教せむこと、いとめでたき事なりとて、歡びあふは、母上、マリウチア、我の三人のみかは。わがありあふ卓の上に登りて、一たびさらへ聞かせたるを聞きし、畫工フェデリゴもこよなうめでたがりぬ。さて其日になりければ、寺のうちなる

暖に照りたる、天の蒼く晴れたる、木々の梢の  
うるはしく緑なる、皆常にも増してよろこばし  
かりき。フェデリゴは又我に接吻して、衣のか  
くしより美しき銀の鍔を取り出し、これをば  
汝に取らせむ、といひて與へき。われはあまり  
の嬉しさに、けふの恐ろしかりし事共はや悉  
く忘れ果てたり。されど此事を得忘れ給はざる  
は、始終の事を聞き給ひし母上なりき。フェデ  
リゴはこれより後、我を伴ひて出づることを許  
されざりき。フラア、マルチノもいふやう。か  
の時二人の命の助かりしは、全く聖母のおほん  
恵にて、邪宗のフェデリゴが手には授け給はざ  
る縁を、善く神に仕ふる、やさしき子の手には  
與へ給ひしなり。されば聖母の恩をば、身を終  
ふるまで、ゆめ忘るゝこと勿れといひき。

フラア、マルチノがこの詞と、或る知人の戯  
に、アントニオはあやしき子なるかな、うみの  
母をば愛するやうなれど、外の女をばことごと  
く嫌ふと見ゆれば、あれをば、人となりて後僧  
にこそすべきなれ、といひしことあるとにより  
て、母上はわれに出家せしめむとおもひ給ひき。  
まことに我は奈何なる故とも知らねど、女とい  
ふ女は側に來らるゝだに厭はしう覺えき。母上  
のところに来る婦人は、人の妻ともいはず、處

女ともいはず、我が穢き詞にて、このあやし  
き好憎の心を語るを聞きて、いとおもしろき事  
におもひ做し、強ひて我に接吻せむとしたり。  
就中マリウチアといふ娘は、この戯にて我を  
泣かすること屢なりき。マリウチアは活潑な  
る少女なりき。農家の子なれど、裁縫店にて雛  
形娘をつとむるゆる、華靡やかなる色の衣をよ  
そひて、幅廣き白き麻布もて髪を巻けり。この  
少女フェデリゴが畫の雛形をもつとめ、又母上  
のところにも遊びに来て、その度ごとに自らわ  
がいはなづけの妻なりといひ、我を小さき夫なり  
といひて、迫りて接吻せむとしたり。われ諾は  
ねば、この少女しばし武を用ゐき。或る日わ  
れまた脅されて泣き出した、さても猶穢兒  
なりけり、乳房叩ませずては、暗き止むまじ、と  
て我を掻き抱かむとす。われ慌てて逃ぐるを、  
少女はすかさず追ひすがりて、兩膝にて我身  
をしかと挟み、いやがりて振り向かむとする頭  
を、やう／＼胸の方へ引き寄せたり。われは少  
女が挿したる銀の矢を抜きたるに、豊かな髪  
は波打ちて、我身をも、露れたる少女が肩をも  
掩はむとす。母上は室の隅に立ちて、笑みつゝ  
マリウチアがなすわざを勧め囁まし給へり。こ  
の時フェデリゴは戸の片蔭にかくれて、竊に此

群をゑがきぬ。われは母上にいふやう。われは  
生涯妻といふものをば持たざるべし。われは  
フラア、マルチノの君のやうなる僧とこそなら  
めといひき。

夕ごとにわが怪しく何の詞もなく坐したる  
を、母上は出家せしむるにたよりよき性なりと  
おもひ給ひき。われはかゝる時、いつも人とな  
りたる後、金あまた得たらむには、いかなる寺、  
いかなる城をか建つべき、寺の僧、城の主と  
なりなむ日には、一カルデナアレの僧の如く、  
赤き袈裟に乗りて、金色に装ひたる僕あまた  
隨へ、そこより出入せむとおもひき。或るとき  
は又フラア、マルチノに聞きたる、種々なる穢  
身者の話によそへて、おのれ穢身者とならむを  
りのお事をおもひ、世のいかにおのれを責むと  
も、おのれは聖母のめぐみにて、つゆばかりも  
苦痛を覺えざるべしとおもひき。殊に願はしく  
覺えしは、フェデリゴが故郷にたづねゆきて、  
かしこなる邪宗の人々をまことの道に歸依せし  
むる事なりき。

母上のいかにフラア、マルチノと謀り給ひて、  
その日とはなりけむ。そはわれ知らざりしに、  
或る朝母上は、我に小き衣を着せ、其上に白衣  
を打掛け給ひぬ。此白衣は膝のあたりまで届き

べし。こは單調なる曲につれて踊り舞ふ羅馬の民の技藝なり。一人にて踊ることあり。又二人にても舞へど、その身の相觸るゝことはなし。大抵男子二人、若くは女子二人なるが、跳ぬる如き早足にて半圓に動き、その間手をも休むることなく、羅馬人に産れ付きたる、しなやかなる振をなせり。女子は裳裾を蹙ぐ。鼓をば自ら打ち、又人にも打たす。其調の變化といふは、唯遅速のみなり。サンタ、マリア、デルラ、ロツンダの街に來て見れば、こはまだいと賑はし。魚鱗の烟を風のまに／＼吹き靡かせて、前に木机を据ゑ、そが上に月柱の青枝もて編みたる籠に貨物を載せたるを飾りたるは、肉鬻ぐ男、果賣る女などなり。銅栗並べたる釜の下よりは、火熾立昇りたり。賈人の物いひかはす聲の高きは、伊太利ことば知らぬ旅人聞かば、命をも顧みざる争とやおもふらむ。魚賣る女の店の前にて、母上譏る人に逢ひ給ひぬ。女子の間とて、物語長きに、店の蠟燭流れ盡きむとしたり。さて連れ立ちて、其人の家の戸口までおくり行くに、街の上はいふもさらなり、「コロソ」の大道さへ物寂しう見えぬ。されど美しき水盤を築きたるピアツツア、ヂ、トレキイに曲り出でしときは、又賑はしきさま前の如し。

こゝに古き殿ぐりあり。意なく投げ置ねたらむやうに見ゆる、礎の間より、水流れ落ちて、月は恰も好し棟の上にぞ照りわたれる。河伯の像は、重き石衣を風に吹かせて、大なる瀧を見おろしたり。瀧のほとりには、喇叭吹くトリイトンの神二人、海馬を馱したり。その下には、豊に水を湛へたる大水盤あり。盤を繞れる石級を見れば、農夫どもあまた心地好げに月明の裡に臥したり。截り碎きたる西瓜より、紅の露滴りたるが其傍にあり。骨組太き童一人、身に着けたるものとは、薄き汗衫一枚、鞆革の袴一つなるが、その袴さへ、控鉦脱れて膝のあたりに垂れかゝりたるを、心ともせずや、「キタルル」の絃おもしろげに掻き鳴して坐したり。忽にして歌ふこと一句、忽にして又奏づること一節。農夫どもは掌打ち鳴しつ。母上は立ちとまり給ひぬ。この時童の歌ひたる歌こそは、いたく我心を動かしつれ。あはれ此歌よ。こは尋常の歌にあらず。この童の歌ふは、日の前に見え、耳のほとりに聞ゆるが儘なりき。母上も我も亦曲中の人となりぬ。さるに其歌には韻あり、其調はいと妙なり。童の歌ひけるやう。青き空を袂として、白き石を枕としたる寢ごゝろの好さよ。かくて笛手二人の曲をこそ聞

け。童は斯く歌ひて、「トリイトン」の石像を指したり。童の又歌ひけるやう。こゝに西瓜の血汐を酌める、百姓の一群は、皆戀人の上安かれと祈るなり。その戀人は今は寢て、幸ビエトロの寺の塔、その法皇の都にゆきし、人の上をも夢みらるむ。人々の戀人の上安かれと祈りて飲まむ。又世の中にあらむ限の、箭の手開かぬ少女が上をも、皆安かれと祈りて飲まむ。(箭の手開かぬ少女とは、髪に挿す箭をいへるにて、處女の箭には振りたる手あり、嫁きたる女の箭には開きたる手あり。)かくて童は、母上の脇を摺りて、さて母御の上をも、又その童の髪生ふるやうになりて、迎へむ少女の上をも、と歌ひぬ。母上善くぞ歌ひしと讃め給へば、農夫どももジャコモが旨さよ、と手打ち鳴してさゝめきぬ。この時ふと小き寺の石級の上を見しに、こゝには識る人ひとりあり。そは鉛筆取りて、この月明の中なる群を、寫さむとしたる畫工フェデリゴなりき。歸途には畫工と、母上と、かの歌うたひし童の上につきて、語り戯れき。その時畫工は、かの童を即興詩人とぞいひける。フェデリゴの我にいふやう。アントニオ聞け。そなたも即興の詩を作れ。そなたは固より詩人なり。たい例の説教を韻語にして歌へ。こ



卓の上に押しあげられぬ。我家のとは違ひて、この卓には毯を被ひたり。われはよその子供の如く、諸じたるまゝの説教をなしき。聖母の心より血汐出でたる、扉き基督のめださなど、説教のたねなりき。我願番になりて、衆人に仰ぎ見られしとき、我胸跳りしは、恐ろしさゆゑにはあらで、喜ばしさのためなりき。これ迄の小兒の中にて、尤も人々の氣に入りしもの、即ち我なること疑なかりき。さるをわが後に、卓の上に立たせられたるは、小き女の子なるが、その言ふべからず優しき姿、驚くべきまでしをらしき顔つき、調清き樂に似たる聲音に、人々これぞ神のみつかひなるべき、とさゝやきぬ。母上は、我子に優る子はいあらじ、といはまほしう思ひ給ひけむが、これさへ聲高く、あの子の養卓に畫ける神のみつかひに似たることよ、とのたまひき。母上は我に向ひて、かの女子の怪しく濃き目の色、鴉青いろの髪、をさなくて又恰惻げなる顔、美しき紅葉のやうなる手などを、繰りかへして譽め給ふに、わが心には如ましきやうなる情起りぬ。母上は我上をも神のみつかひに譬へ給ひしかども。

母上の歌あり。まだ巢こもり居て、薔薇の枝の緑の葉を啄めども、今生せむとする蕾をば見

ざりき。二月三月の後、薔薇の花は開きぬ。今は、鶯これにのみ鳴きて聞かせ、つひには刺の間に飛び入りて、血を流して死にき。われ人となりて後、しばし此歌の事をおもひき。されど「アラチエリ」の寺にては、我耳も未だこれを聞かず、我心も未だこれを會せざりき。

母上、マリウチア、その外女どもあまたの前にて、寺にてせし説教をくりかへすこと、しばしばありき。わが自ら喜ぶ心はこれにて慰められき。されど我が未だ語り厭かぬ間に、かれ等は早く聴き倦みき。われは聴衆を失はじの心より、自ら新しき説教一段を作りき、その詞は、まことの聖誕日の説教といはむよりは、寺の祭を敘したるものといふべき詞なりき。それを最初に聞きしはフエデリゴなるが、かれは打ち笑ひ乍らも、そちが説教は、兎も角もフラア、マルチノが教へしよりは善し、そちが身には詩人や令れる、といひき。フラア、マルチノより善しといへる詞は、わがためにいと喜ばしく、さて詩人とはいかなるものならむとおもひ煩ひ、おそらくは我身の内に令れる善き神のみつかひならむと判じ、又夢のうちに我に面白きものを見するものにやと疑ひぬ。

母上は家を離れて遠く出で給ふこと稀なり

き。されば或日の出すぎ、トラスチエエルヘテエエル河の右岸なる羅馬の市區なる友だちを訪はむ、とのたまひしは、我がために祭に往くごとくなりき。日曜に着る衣をきよそひぬ。中單の代にその頃着る習なりし細い胸當をば、針にて上衣の下に縫ひ留めき。領巾をば幅廣き襪に摺みたり。頭には縫とりしたる帽を戴きつ。我妻はいとやさしかりき。

とぶらひ畢りて、家路に向ふころは、はや頗る遅くなりたれど、月影さやけく、空の色青く、風いと心地好かりき。路に近き丘の上には、チブレッツォ「ピニョロ」なんどの常磐樹立てるが、怪しげなる輪廓を、鋭く空に畫きたり。人の世にあるや、とある夕、何事もあらざりしを、久しく忘れぬやうに、美しう思ふことあるものなるが、かの歸路の景色、また然る類なりき。國を去りての後も、チエエルの流のさまを思ふごとに、かの夕の景色のみぞ心には浮ぶなる。黄なる河水のいと濃けに見ゆるに、月の光はさしたり。碾穀車の鳴り響く水の上に、朽ち果てたる橋柱、黒き影を印して立てり。この景色心に浮べば、あの折の心解ける少女子さへ、扁鼓手に把りて、「サルタレロ」舞ひつゝ過ぐらむ心地す。（サルタレロの事をば聊註す

如くおもはれぬ。道の傍に十字架あり。その上には枯骸残り。こは事なき人を有したる報に、こゝに刑せられし強人の骨なるべし。これさへ我心を動すことたゞならざりき。山中の水を羅馬の市に導くは、許多の寛の敷をば、はじめこそ讀み見むとしつれ、幾程もあらぬに、倦みて思ひとまりつ。さて我は母上とマリウチアとに問ひはじめき。壊れ傾きたる墓標のめぐりにて、牧者が焚く火は何のためぞ。羊の群のめぐりに引きめぐらしたる網は何のためぞ。問はるゝ人はいかにうるさかりけむ。

アルバノに着きて車を下りぬ。こゝよりアリチアを越す美しき道の程をば徒にてぞゆく。木犀草(レセダ)又はほひあらせいとう(ヘイラントス)の花など道の傍に野生したり。緑なる葉の茂れる橄欖樹の蔭は涼しくして、憩ふ人待貌なり。遠き海をば、我も望み見ることを得き。十字架立ちたる山腹を過ぐるとき、少女の一群笑ひ戯れて過ぐるに逢ひぬ。笑ひ戯れながらも、十字架に接吻することをば忘れざりき。アリチアの寺の屋根、黒き橄欖の林の間に見えたるをば、神の使が戯に据ゑかへたる聖ピエトロの屋根ならむとおもひき。索にて牽かれたる熊の、人の如くに立ちて舞へるあり。

人あまた其周につどひたり。熊を牽ける男の吹く笛を聞けば、こは羅馬に來て聖母の前に立ちて吹く、「ビツフエリ」が曲におなじかりき。男に軍曹と呼ばれる猿あり。美しき軍服着て、熊の頭の上、背の上などに翻筋斗す。われは面白きにこゝに止らむとおもふほどなりき。ジェンツァノの祭も明日のことなれば、止まればとて返るゝにもあらず。されど母上は早く往きて、女なる女房の環飾編むを助けむとのたまへば、甲斐なかりき。

幾程もなく到り着きて、アンジェリカが家をたづね得つ。ジェンツァノの市にて、オミといふ湖に向へる方にある。家はいとめでたし。壁よりは泉湧き出で、石盤に流れ落つ。驢馬あまたを飲まむとて、めぐりに集ひたり。

料理屋に立ち入りて見るに賑しき物吾我等を迎へたり。竈には火燃えて、鍋の裡なる食は煮え上りたり。長き卓あり。市人も町人も、それに倚りて、酒飲み、醗藏にける豚を食へり。聖母の御影の前には、青磁の花瓶に、美しき薔薇花を活けたるが、其傍なる燈は、棚引く烟に壓されて、善くも燃えず。帳場のほとりなる卓に置きたる乾酪の上をば、猫跳り越えたり。鶏の糞は、我等が脚にまつはりて、踏ま

るゝをも厭はじと覺ゆ。アンジェリカは快く我等を迎へき。險しき梯を登りて、烟突の傍なる小部屋に入り、こゝにて食を饗せられき。我心にては、國の宴に召されたるかとおぼえつ。物として美しからぬはなく、「フオリエッタ」の葡萄酒と其瓶に飾ありて、いとめでたかりき。瓶の口に栓がはりに插したるは、纔に開きたる薔薇花なり。主客三人の女房、互に接吻したり。我も否とも諸とも云ふ暇なくして、接吻せられき。母上片手にて我頬を撫り、片手にて我衣をなほし給ふ。手先の隠るゝ迄袖を引き、又頸を越すまで襟を揚げなどして、やうやう心を安じ給ひき。アンジェリカは我を佳き兒なりと讃めき。

食後は面白き事はじまりぬ。紅なる花、緑なる樹を摘みて、環飾を編まむとて、人々皆出でぬ。低き戸口をくぐれば庭あり。そのめぐりは幾尺かあらむ。すべてのさま唯々一つの四阿屋めきたり。細き欄をば、こゝに野生したる薔薇の、太く堅き葉にて接たり。これ自然の籬なり。看脚せば深き湖の面いと靜なり。昔こゝは火坑といふ。庭を出で山腹を歩み、大なる葡萄酒架、茂れる「アラタノ」の林の

れを聞きて、我初めて詩人といふことあきらかにさとれり。まことに詩人とは、見るもの、聞くものにつけて、おもしろく歌ふ人にぞありける。げにこは面白き業なり。想ふにあながち難からむとは思はれず、「キタル」一つだにあらましかば。わが初の作の料になりしは、向ひなる枯肉鋪なりしこそ可笑しけれ。此家の貨物の排べ方は、旅人の目にさへ留まるやうなりければ、早くも我空想を襲ひしなり。月桂の枝美しく編みたる間にけ、おほいなる駝鳥の卵の如く、乾酪の塊懸りたり。「オルカノ」の笛の如く、金紙巻きたる燭は並び立てり。柱のやうに立てたる腸づめの肉の上には、琥珀の如く光を放ちて、「バルミジャノ」の鏡照りたり。夕になれば、燭に火を點ずるほどに、其光は腸づめの肉と「プレシチットオ」(らんかん)との間に燃ゆる、聖母像前の紅玻璃燈と共に、この幻の境を照せり。我詩には、店の卓の上なる猫兒、店の女房と僧を爭ひたる、若き「カッパチノ」僧さへ、残ることなく入りぬ。此詩をば、幾度か心の内にて吟び試みて、さてフェデリゴに歌ひて聞かせしに、フェデリゴめでたがりければ、つひに家の中に廣まり、又街を躍えて、向ひなるひものやの女房の耳にも入りぬ。女房聞きて、

げに珍らしき詩なるかな、ダンテの神曲とはかゝるものか、とぞ稱へける。

これを手始めに、物として我詩に入らぬはなきやうになりぬ。我世は夢の世、空想の世となりぬ。寺にありて、僧の歌ふとき、提香爐を打ち振りても、街にありて、叫ぶ賣人、藤く車の間に立ちても、聖母の像と靈水盛りたる瓶の下なる、小き風所の中にあつても、たゞ詩をおもふより外あらざりき。冬の夕暮、鍛冶の火高く燃えて、道ゆく百姓の立ち寄りて手を温むるとき、我は家の窓に坐して、これを見つゝ、時の過ぐるを知らず。かの鍛冶の火の中には、我空想の世の如き殊なる世ありとぞ覺えし。北山おろし騰しうして、白雲街を縋め、廣こうぢの石の「トリイトン」に氷の鬚おふるときは、我喜限なかりき。憶むらくは、かゝる時の長からぬことよ。かゝる日には、年ゆたかなる兆として、羊の裘きたる農夫ども、手を拍ちて、「トリイトン」のめぐりを踊りまはりき。噴き出づる水に雨は、晴れなむとする空にかゝれる虹の影映りて。

## 花祭

六月の事なりき。年ごとにジェンツァノにて

執行せらるゝ、名高き花祭の則は近つてぬ。(ジェンツァノはアルパノ山間の小都會なり。羅馬と沼澤との間なる街道に近し。母上とも、マリウチアとも仲好き女房ありて、かしこなる料理屋の妻となりたり。(伊太利の料理屋にて「オステリア、エヌ、クチイナ」招牌懸けたる類なるべし。席上とマリウチアとが此祭にゆかむと約したるは、數年前よりの事なれども、いつも思ひ掛けぬ事に妨けられて、ええ果さざりき。今年はず約を履まむとなり。道遠ければ、祭の前日にいで立たむとす。かしまだちの前の夕には、喜ばしきの餘に、我眠の醒ならざりしも、理なるべし。

「エツツリノ」といふ卓の門前に來しときは、目未だ知らざりき。我等は直に車に上りぬ。是れより先には、われ未だ山に入りしことあらざりき。祭の事を思ひこの喜に胸さわぎのみぞせられたる。身の邊なる自然と生活を、人となりての後、當時の情もて觀ましかば、我が作る詩こそ類なき妙品ならめ。街道の静けさ、鐵物いかめしき閤門、見わたす限途なるガムパニアの野邊に、物寂しき墳墓のころゝに立てる、遠山の裾を罩めたる濃き朝霧なり、我がためにはこたが振るべき、めでたき祕事の前兆の



れどその時戴くものは大なる帽にあらず。福の座は、かの羊の群の間に白雲立てる、カラの山より高きものぞといふ。この詞のめでたげなるに、母上は喜び給ひながら、猶訝しげにもてなし、太き息つきつゝ宣給ふやう。あはれなる兒なり。行末をば聖母こそ知り給はめ。アルバノの農夫の車より福の車は高きものを、かゝるをさな子のいかでか上り得むとのたまふ。嬬のいはく、農車の輪のめぐるを見ずや。下なる輪は上なる輪となれば、足を低き輪に踏みかけて、旋るに任せて登るときは、忽ち車の上にあるべし。(アルバノの農車はいと高ければ、農夫等かくして登るといふ。)唯ま道なる石に心せよ。市に舞ふ人もこれに習ふといふ。母上は半ば戯のやうに、さらばその福の車に、われも俱に登るべきか、と問ひ給ひしが、俄に打ち驚きてあなやと叫び給ひき。この時大なる鷺鳥ありて、さと落し來たりしに、その翼の前なる湖を撃ちたるとき、飛沫は我等が面を濕しき。雲の上にて、鋭くも水面に浮びたる大魚を見付け、矢を射る如く來りて攫みたるなり。刃の如き爪は魚の背を穿たり。さて再び空に揚らむとするに、騒ぐ波にて測るにも、その大さはよの常ならぬ魚にあれば、力を極めて引かれじ

と争ひたり。鳥も打ち込みたる爪抜けざれば、今更にその獲ものを放つこと能はず。魚と鳥との闘はいよく激しく、湖水の面よりぐまにまに幾重ともなき大なる環を畫き出せり。鳥の翼は忽ち斂まり、忽ち放たれ、魚の背は浮かと見れば又沈み。數分時の後、雙翼靜に水を徹ひて、鳥は意ぶが如く見えしが、俄にはたく勢に、鰓翼摧け折る、聲岸のほとりに聞えぬ。鳥は残れる翼にて、二たび二たび水を蹴き、つひに沈みて見えなくなりぬ。魚は最後の力を出して、敵を負ひて水底に下りしならむ。鳥も魚も、しばしが程に、底のみくづとなるならむ。我等は詞もあらで、此光景を眺め居たり。事果て後顧みれば、かの嬬は在らざりき。我等は詞少く歸路をいそぎぬ。森の末葉のしげみは、闇を吐き出だす如くなれど夕照は湖水に映じて縋にゆくてに迷はざらむ。この時聞ゆる單調なる物音は粉礫車の轆るなり。すべのさま物凄く恐ろしげなり。アンジェリカはゆく／＼怪しき老女が上を物語りぬ。かの嬬は藥草を識りて、能く人を殺し、能く人を惑はしむ。オレワアノといふ所に、テレザといふ少女ありき。ジエウゼツベといふ若者が、山を越えて北の方へゆきたるを戀ひて、日にけに瘦せ衰

へけり。嬬さらば其男を喚び返して得させむとてテレザが髪とジエウゼツベが髪とを結び合せて、銅の器に入れ、藥草を雜へて煮き。ジエウゼツベは其日より、甚も夜も、テレザが上のみ案ぜられければ、何事をも打ち棄て、歸り來ぬとぞ。我は此物語を聞きつゝ、「アエ、マリア」の祈をなした。アンジェリカが家に歸り着きて、我心は總におちむたり。新に編みたる環飾一つを懸けたる、眞鍮の燈には、四條の心に残る火を點し、一モンツアノ、アル、ボミドロ」といふ旨きものに、善き酒一瓶を添へて供せられき。農夫等は下なる一間にて飲み歌へり。二人代る／＼唱へ、末の句に至りて、座客齊しく和したり。我が子供と共に、燃ゆる燭の傍なる聖母の像のみまへにゆきて、讃美歌唱へはじめしとき、農夫等は聲を止めて、我曲を聴き、好き聲なりと稱へき。その嬉しさに我に暗き林をも、怪しき老女をも忘れ果てつ。我は農夫等と共に、即興の詩を歌はむとおもひしに、母上とてめて宣給ふやう。そちち香爐を提ぐる子ならざや。行末は人の前に出で、神のみことばをも傳ふべきに、今いかでかさる戲せらるべき。湖内の祭はまだ來ぬものを、とのたまひき。されど我がアンジェ

ほとりを過ぐ。葡萄の蔓は高く這ひのぼりて、林の木々にさへ纏ひたり。彼方の山腹の失りたるところにネミの市あり。其影は湖の底に印りたり。我等は花を探り、梢を折りて、且行き且編みたり。あらせいとうの間には、露けき橄欖の葉を織り込めつ。高き青空と深き碧水とは、乍ち草木に遮られ、乍ち又一様な限なき色に現れ出づ。我がためには、物としてめでたく、珍らかならざるなし。平和なる歡喜の情は、我魂を震はしめき。今に到るまで、この折の事は、埋没したる古城の彩石壁畫の如く、我心日に浮び出づることあり。

日は烈しかりき。湖の畔に降りゆきて、葡萄蔓纏へる「プラタノ」の古樹の、長き枝を水の面にさしおろしたる蔭にやすらひたる時、我等は纔に涼しさを迎へて、編みものに心籠むことを得つ。水草の美しき頃の、蔭にありて、徐に頷くさま、夢みる人の如し。これをも折りて編み込めつ。暫しありて、日の光は最早水面に及ばずなりて、ネミとジェンツァとの家々の屋根をさまよへり。我等が坐したところは、次第にほの暗なりぬ。我は遊ばむとて、群を離れたれど、岸低く、湖の深きを母上氣づかひ給へば、數歩の外には出でざりき。こゝには

古き「デア」の祠の址あり。その破壊して形はかりになりたる裡に、大なる無花果樹あり。萬籟は隙なきまでに、これにまつはりたり。われは此樹に攀ち上りて、環飾編みつゝ、流行の小歌うたひたり。

—Ah, ros i, rossi fiori,

Un mazzo di violi

Un gelsomino d'arore—

(あはれ、赤き、赤き花よ。

草の束よ。

戀のしるしの素馨(ジェルソミン)の花よ。)

この時あやしく暖かれたる聲にて、歌ひつぐ人あり。

—Per dar al mio bene!

(摘みて取らせむその人に。)

忽ちフランスカタチの農家の婦人の装したる媼ありて、我前に立ち現れぬ。その背はあやしき迄眞直なり。その顔の色の口立ちて黒く見ゆるは、頭より肩に垂れたる、長き白紗のためにや。膚の皺は繁くして、縮めたる絹の如し。黒き瞳は眶を填めむ程なり。この媼は初め微笑みつゝ、我を見しが、俄に色を正して、我面を打ちまもりたるさま、傍なる木に寄せ掛けたる木乃伊にはあらずや、と疑はる。暫しありていふや

う。花はそちが手にありて美しくなるべき。彼の日には福の星ありといふ。我は編みかけたる環飾を、我唇におし當てたるまゝ、惹きたる彼の方を見居たり。媼またいはいく。その月柱の葉は、美しけれど毒あり。飾に編むは好し。唇にな當てそといふ。此時アンジェリカ飾の後より出でいふやう。賢き老し、フランスカタチのフルキヤ。そなたも明日の祭の料にとて、環飾編まむとするか。さらずは日のカムパニヤのあなたに入りてより、常ならぬ花束を作らむとするかといふ。媼はかく問はれても、顧みもせず我面のみ打ち目守り、詞を續きていふやう。賢き目なり。日の金牛宮を過ぐるとき誕れぬ。名も財も牛の角にかゝりたりといふ。此時船上も歩み寄りてのたまふやう。吾子が受領すべきは、緋き衣と大なる帽となり。かくて後は、護摩焚きて神に仕ふべきか、軸の道をやるべきかし。そはかが運命に任せてむ、とのたまふ。媼は聞きて、我を屈とすべしといふ意ぞ、とは心得たりと覺えられき。されど當時は、我等惡く媼が詞の頭末を解することは能ざりき。媼のいふやう。あらず。此兒が衆人の前にて説くところは、げに格子の裏なる尼少女の歌より優しく、アルパノの山の雷より烈しかるべし。さ

の衣を着けて歩み來るは、「カルデナアレ」なり。さま／＼の宗派に屬する僧は、燃ゆる蠟燭を取りてこれに隨へり。行列のことごとく寺を離るゝとき、群衆はその後に跟いて動きはじめき。我等もこの間にありしが、母上はしかと我肩を按へて、人に押し隔てられじとし給へり。我等は人に採まれつゝ歩を移せり。我目に見ゆるは、唯々頭上の青空のみ。忽ち我等がめぐりに、人々の諸聲に叫ぶを聞きつ。我等は彼方へおし遣られ、又此方へおし戻されき。こは一頭、の仗馬の物に怯ちて駈け出したるなり。われは纔にこの事を聞きたる時、騒ぎ立ちたる人々に推し倒されぬ。目の前は黒くなりて、頭の上には瀑布の水激り落つる如くなりき。

あはれ、神の母よ、哀なる事なりき。われは今に至るまで、その時の事を憶ふことに、身うち震ひて止まず。我にかへりしとき、マリウチアは泣き叫びつゝ、我頭を膝の上に載せ居たり。側には母上地に横り居給ふ。これを圍みたるは、見もしらぬ人々なり。馬は車を引きたる儘にて、仆れたる母上の上を過ぎ、轍は胸を碎きしなり。母上の口よりは血流れたり。母上は早や事され給へり。人々は母上の目を隠らせ、その掌を合せた

り。この掌の温きをは今まで我肩に覺えしものを。遺體をは、僧たち寺に昇き入れぬ。マリウチアは手に淺病負ひたる我を伴ひて、さきの酒店に歸りぬ。きのふは此酒店にて、樂しき事のみおもひつゝ、花を編み、母上の腕を枕にして眠りしものを。當時わがいよくまことの孤になりしをば、まだ熟くも思ひ得ざりしかど、わが釋き心にも、唯々何となく物悲しかりき。人々は我に果子、くだもの、玩具など與へて、なだめ難し、おん身が母は今聖母の許にいませば、日ごとに花祭ありて、めでたき事のみなりといふ。又あすは今一度母上に逢はせむと感めつ。人々は我にはかく云ふのみなれど、互にさゝやぎあひて、きのふの鶯鳥の事、怪しき姫の事、母上の夢の事など語り、誰もく母上の死をば、豫め知りたりと誇れり。

暴馬は街はづれにて、立木に突きあたりて止まりぬ。車中よりは、人々輦四十の上を一つ二つ踏えたる貴人の驚怖のあまりに氣を喪はむとしたるを助け出だしき。人の噂を聞くに、この貴人はボルゲエズの族にて、アルバノとフラスカアチとの間に、大なる別墅を構へ、その苑にはめづらしき草花を植えて、樂とせりとなり。世にはこの翁もあやしき藥草を知ること、

かのフルキアといふ爐に方すなほふものありとぞ。此貴人の使たりとて、「リフレア」着たる襪履銀(スクデイ)二十枚入りたる囊を我に貽りぬ。

翌日の夕まだアエ、マリアの鐘鳴らぬほどに、人々我を伴ひて寺にゆき、母上に暇乞せしめき。きのふ祭見にゆきし晴衣のまゝにて、狭き木棺の裡に臥し給へり。我は合せたる掌に接吻するに、人々共音に泣きぬ。寺門には板を擔ふ人立てり。送りゆく僧は白衣着て、帽を垂れ面を覆へり。板は人の肩に上りぬ。「カッパチノ」僧は蠟燭に火をうつして、挽歌をうたひ始めた。マリウチアは我を牽きて板の旁に隨へり。斜日は蓋はざる棺を射て、母上のおん顔は生けるが如く見えぬ。知らぬ子供あまたおもしろげに我めぐりを馳せ廻りて、燭淚の地に落ちて凝りたるを拾ひ、反古を振りて作りたる筒に入れたり。我等が行くは、きのふ祭の行列の通りし街なり。木葉も草花も猶地上にあり。されど當時成したる華紋は、古少時の福と俱に、きのふの祭の樂と俱に、今や跡なくたりぬ。幽堂の穹窿を塞きたる大石を推し退け、板を下しゝに、底なる他の板と相觸れて、かすかなる響をなせり。僧等の去りしあとにて、マリ



リカが家の廣き臥床に上りしときは、母上我枕の低きを脱ひて、眩さし仰べて枕せさせ、頼みの子ぞ、と胸に抱き寄せて眠り給ひき。我は旭の光窓を照して、美しき花祭の我を喚び醒すまで、穩なる夢を結びぬ。

その目先づ目に觸れし街の有様、その彩色したる活畫圖を、當時の心になりて寫し出さむには、いかに筆を下すべきか。少しく爪尖あがりになりたる、長き街をば、すべて花もて掩ひたり。地は青く見えたり。かく色を揃へて花を飾るには、園生の草をも、野に茂る枝をも、摘み盡し、折り盡したるかと思はる。兩側には大なる緑の葉を、帶の如く引きたり。その上には薔薇の花を隙間なきまで並べたり。この帶の隙には又似寄りたる帶を引きて、その間をば暗紅なる花もて填めたり。これを街の眞の小縁とす。中央には黄なる花多く簇めて、その角立ちたる紋を成したる群を星とし、その輪の如き紋を成したる束を目とす。これよりも皆折りて造り出でけむと思はるゝは、人の名頭の字を花もて現したるにぞありける。こゝにては花と花と聯ね、葉と葉と合せて形を作りたり。總ての模様は、まことに活きたる五色の氈と見るべく、又彩石を組み合せたる狀と見るべし。されどボムベイ

にありといふ床にも、かく美しき色あるはあらじ。このあした、風といふもの絶てなかりき。花の落着きたるさまは、重き寶石を据ゑたらむが如くなり。窓といふ窓よりは、大なる眞を垂れて石の壁を掩ひたり。この眞も、花と葉とにて織りて、おほくは聖書に出でたる事蹟の圖を成したり。こゝには聖母と穉き基督とを顯せたる圖あり、ジエウゼツベその口を取りたり。顔手足なんどをば、薔薇の花もて作りたり。こあらせといふ(マチオラ)の花青き、アネモネの花などにて、風に翻りたる衣を織り成せり。その冠を見れば、ネミの湖にて摘みたる白き睡蓮(ニウムフェア)の花なりき。かしこには尊きミケルの毒龍と闘へるあり。尊きロザリアは深碧ある地球の上に、薔薇の花を散らしたり。いづかたに向ひて見ても、花は我に聖書的事蹟を語れり。いづかたに向ひて見ても、人の面は我と同じく樂しげなり。美しき衣着装ひて、出張りたる窓に立てるは、山のあなたより來し異國人なるべし。街の側には、おのがじし飾り繕ひたる人の波打つ如く行くあり。街の曲り角にて、大なる噴井のあるところに、母上は腰掛け給へり。我は水よりさしのぞきたるサチロ(羊脚の神)の神の頭の前に立てり。

日は烈しく照りたり。市中の鐘こごとく鳴りはじめぬ。この時美しき花の氈を踏みて、祭の行列過ぐ。めでたき音楽、謳歌の聲は、その近づくを知らせたり。贊、櫻の前には、兒あまた提香爐を振り動かして歩めり。これに續きたるは、こゝらあたりの美しき少女を撰り出でて、花の環を取らせたるなり。もろ肌ぬき、翼を負ひたる、あはれなる小兒等は、高阜の前に立ちて、神の仰の歌をうたひて、行列の來るを待てり。若人等は矢りたる帽の上に、聖母の像を印したる紐のひら／＼としたるを付けた。鎖に金銀の環を繋ぎて、頸に懸けたり。斜に肩に掛けたる、彩りたる紐は、黒大鵝絨の上衣に映じて美し。アルパノ、フラスカアチの少女の群は、髪を編みて、銀の筒にて留め、薄き面紗の端を、やさしく髻の上にて結びたり。エルレトリの少女の群は、頭に環かざりを戴き、美しき肩、圓き乳房の露るゝやうに着たる衣に、標の邊より、彩りたる巾を下けたり。アブルツチイよりも、大澤よりも、おほよそ近きほとりの民悉くつどひ來て、おの／＼古風を存じたる打扮したれば、その入り亂れたるを見るときは、餘所の國にはあるまじき奇観なるべし。花を飾りたる大蓋の下に、華美なる式

萬句、いつ果つべしとも覺えざりき。をぢは家を遠ざかるにつれて、驢を策たしむること少ければ、道行く人々皆このあやしき四脚に日を注げて、美しき兒なり、何處よりか盗み來し、と問ひぬ。をぢはその皮ごとに我身上話を繰返しつ。この話をば、ほとく道の曲りめごとに浚へ行くほどに、賣藥婆はをぢが長物語の酬に、檸檬水一杯を白にて與へ、をぢと我に分ち飲ましめ、又別に臨みて我に核の落ち去りたる松子一つ得させつ。

まだをぢが栖にゆき着かぬに、日は暮れぬ。我は一言をも出さず、顔を掩うて泣き居たり。をぢは我を抱き卸して、例の大部屋の側なる狹き一間につれゆき、一隅に玉蜀黍の莢敷きたるを指し示し、あれこそ汝が臥所なれ、さきには善き檸檬水吞ませたれば、まだ喉も乾かざるべく、腹も減らざるべし、と我煩を撫で、微笑みたる、その面恐しきこと譬へむに物なし。マリウチアが持ちたる囊には、猶銀錢ばかりある。駭者に與ふる錢をも、あの中よりや出し。貴人の僕は、金もて來しとき、何といひしか。かく問ひ掛けられて、我はたゞ知らずとのみ答へ、はては泣聲になりて、いつまでもこゝに居ることや、あすは家に歸らるゝことにや、と問ひ

ぬ。勿論なり。いかでか歸られぬ事あらむ。おとなしくそこに寐よ。「アエ、マリウチア」を咄ふことを忘るな。人の眠る時は鬼の醒めたる時なり。十字を截りて寐よ。この鐵檻をば吼る獅子も越えずといふ。神を祈らば、あのマリウチアの腐女が、そちに我にも難儀を掛けたるを訴へて、毒に中り、惡瘡を發するやうに呪へかし。おとなしく寐よ。小窓をば開けておくべし。涼風は夕餉の半といふ諺あり。蝙蝠をなおそれそ。かなたのこなたへ飛びめぐれど、入るものにはあらず。神の子と共に熟寐せよ。斯く云ひ畢りて、をぢは戸を鎖して去りぬ。

をぢの部屋には久しく立ち働く音聞えしが、今は人あまた集へりと覺しく、さまさまの聲して、戸の隙よりは光もさしたり。部屋のさまは見まほしけれど、枯れたる玉蜀黍の莢のさわさわと鳴らば、おそろしきをぢの父入來ることもやと、いと徐に起き上りて、戸の隙に目をさし寄せつ。燈心は二すぢともに燃えたり。卓には麴包あり、菜飯あり。一瓶の酒を置いて、可兒あまた杯のとりやりす。一人として畸形ならぬはなし。いつもの顔色には似もやらねど、知らぬものにはあらず。晝はモンテ、ピンチヨオの草を梅とし、繡帶したる頭を木の幹によせか

け、僅に唇を搔すのみにて、傍に付らせたる妻といふ女に、熱にて死に重としたる我夫を憐み給へ、といはせたるロレンツオは、高跌かきて面白げに饒舌り立てたり。（註。モンテ、ピンチヨオには公園あり。西班牙、蘭西大學院よりボルタ、デル、ボ、ロに至る。羅馬の市の過半とキルラ、ボルゲエの内苑とはこゝより見ゆ。）十指離ちたるフランチアは婦カテリナが肩を叩きて、「カワリエ、レ、トルキノ」の曲を歌へり。戸に近き二人三人は陰になりて見えわかず。話は我上なり。我胸は騒ぎ立ちぬ。あの小童物の用に立つべきか、身内に何の畸形なるところがある、と一人ぶへば、をぢ答へて。聖母は無慈悲にも、創一つなく育たせしに、大仰びて美しければ、貴族の子かとおもはるゝ程なりといふ。平なきことよ、と皆日々に笑ひぬ。普たるカテリナのいふやう。さりとて聖母の天上の飯を賜ふまでは、此世の飯をもらふすべなくては叫ばず。手にもあれ、足にもあれ、人の目に立つべき創つけて、我等が群に入れよといふ。をぢ。否々母親たに近潤ならずば、今日を待たず、善き金の蔓となすべかりしものを。神の使のやうなる善き聲なり。法皇の俗人には恰好なる童なり。人々は我齡を算へ、

ウチアは我を石上に跪かせ、「オオラ、プロオ、ノオビス（禱爲我等）を唱へしめき。

ジェンツァノを立ちしは月あかき夜なりき。

フェデリゴと知らぬ人ふたりと我を伴ひゆく。

濃き雲はアルパノの嶺を繞り。我がカムパ

ニアの野を飛びゆく輕き霧を眺むる間人々は

もの言ふこと少かりき。幾もあらぬに、我は

車の中に眠り、聖母を夢み、花を夢み、母上を

夢みき。母上は猶生きて、我にものいひ、我顔

を見てほふ笑み給へり。

## 塞 丐

羅馬なる母上の住み給ひし家に歸りし後、人

人は我をいかにせむかと議するが中に、フラア、

マルチノはカムパニアの野に羊飼へる、マリウ

チアが父母にあづけむといふ。盾銀二十は、牧

者が上にては得易からぬ寶なれば、この兒を家

におきて養ふはいふもさらなり、又心のうちに

喜びて迎ふるならむ。さはあれ、この兒は既に

半ば出家したるものなり。カムパニアの野にゆ

きては、香爐を提げて寺中の職をなさむやうな

し。かくマルチノの心たゆたふと共に、フェデ

リゴも云ふやう。われは此兒をカムパニアにや

りて、百姓にせむこと惜しければ、この羅馬

市中にて、然るべき人を見立て、これにあづく

るに若かずといふ。マルチノ思ひ定めかねて、

僧たちと謀らむとて去る折柄、ベツポのをぢは

例の木履を手につきてゐざり來ぬ。をぢは母上

のみまかり給ひしを聞き、又人の我に盾銀二十

を贈りしを聞き、母上の遺情よりは、かの金の

發落のこゝろづかひのために、こゝには訪れ來

ぬるなり。をぢは聲振り立てゝいふやう。この

孤の族にて此にあるものは、今われひとりな

り。孤をばわれ引き取りて世話すべし。その

代りには、此家に残りたる物悉くわが方へ受

け收むべし。かの盾銀二十は勿論なりといふ。

マリウチアは臆面せぬ女なれば、進み出で、

おのれフラア、マルチノ其餘の人々とこゝの始

末をば油斷なく取り行ふべければ、おのが一身

をだにもてあましたる乞丐の益なきこと言はむ

より、疾く歸れといふ。フェデリゴは席を立ち

ぬ。マリウチアとベツポのをぢとは、跡に残り

てはしたなく言ひ罵り、いづれも多少の利慾を

離れざる、きたなき争をなしたり。マリウチ

アのいふやう。この兒をさほど欲しと思はゞ、

直に連れて歸りても好し。若し肋二三本打折り

て、おなじやうなる畸形となし、往來の人の袖

に縋らせむとならば、それも好し。盾銀二十枚

をば、われこゝに持ち居れば、フラア、マルチ

ノの來給ふまで、決して他人に渡さじといふ。

ベツポ怒りて、頑なる女かな、この木履もてそ

ちか頭に、ヒアツツァ、デル、ボ、ロの通衢のや

うなる穴を穿けむと叫びぬ。われは人が間に

立ちて、泣き居たるに、マリウチアに我を推し

やり、をぢは我を引き寄せたり。をぢのいふや

う。唯々我に隨ひ來よ。我を頼めよ。この貧病

だに我方にあらば、その報酬も受けらるべし。

羅馬の裁判所に公平なる沙汰ならむや。かく

云ひつゝ、強ひて我を扯きて戸を出でたるに、こ

こには濫褻着たる童ありて、一啗の鹽を牽け

り。をぢは遠きところに往くとき、又急ぐこと

あるときは、肩れたる足を、鹽の兩脇にひたと

押し付け、おのが身と鹽と一つ體になりたる

やうにし、例の木履のかはりに走らするが常な

れば、けふもかく騎りて來しなるべし。をぢは

我をも鹽背に抱き上げたるに、かの童は後より

鞭加へて駈け出させつ。途すがらをぢは、い

つもの服はしきさまに膝し慰めき。見よ告兒。

よき鹽にあらずや。走るさまは、「コルツォ」

の競馬にも似ずや。我家にゆき着かば、樂しき

世を送らせむ。神の使もえ享けぬやうなる響應

すべし。この話の末は、マリウチアを罵る千言



人と獸と相搏たせて、前低く後高き廊の上より、あまたの市民これを見きといふ事、皆我當時の心頭に上りぬ。

そもこの「コリゼエオ」は楕圓なる四層のたてものにして、「トラエルチノ」石もてこれを造る。層ごとに組かたを殊にす。「ドロス」、「イオン」、「コリントス」の柱の式皆備はりたり。基督生れてより七十餘年の後、エスバジアンヌ帝の時、この工事を起しつ。これに役せられたる猶太教徒の數一萬二千人とぞ聞えし。楕形の並持八十ありて、これをめぐれば千六百四十一歩。平地の周匝には八萬六千座を設け、更に二萬人を立たしむべかりきといふ。今はこゝにて基督教の祭儀を執行せしむ。バイロン卿詩あり。

この場のあらむ限は  
内日刺す都もあらむ  
こにはのなからむ時は  
うちひさす都もあらじ  
うちひさす都あらざば  
あはれこの世間もあらじとぞお

もふ  
頭の上にあたりて物音こそすれ。見あぐれば

物の動くやうにこそおもはるれ。影の如き人ありて、椎を揮ひ石をたゝむが如し。その人を見れば、色倉ぎめて黒き髯長く生ひたり。これ話に聞きし猶太教徒なるべし。積み疊ぬる石は見る見る高くなりぬ。「コリゼエオ」は再び昔のさまに立ちて、幾千萬とも知られぬ人これに満ちたり。長き白き衣府たるエスタの神の巫女あり。帝王の座も設けられたり。赤條々なる力士の血を流せるあり。低き廊の方より叫聲、吼ゆる聲聞ゆ。忽ち虎豹の群ありて我前を奔り過ぐ。我はその血ばしる眼を見、その熱き息に觸れたり。あまりのおそろしさに、かの柱頭にひたと抱きつきて、聖母の御名をとなふれども、物騒がしきは未だ止まず。この怪しき物共の群りたる間にも、幸なるかな、大なる十字架の屹として立てるあり。こはわがことを過ぐるごとに接吻したるものなり。これを目當に走り寄りて、緊と抱きつくほどに、石落ち杜伊れ、人も鄙もあらずなりて、我は復た人事をしらず。人、地つきたる時は、熱すに退きたれど、身は尙いたく疲れて、われはかの木づくりの十字架の下に臥したり。あたりを見るに、怪しき事もなし。夜は靜にして、高き石垣の上には驚鳴けり。われは耶穌をおもひ、その母をおもひ

ぬ。わが母上は今あらねば、これよりは耶穌の母ぞ我母なるべき。われは十字架を抱きて、その柱に頭を寄せて眠りぬ。

幾時をか眠りけむ。歌の聲に醒めれば、石垣の頂には日の光かゞやき、一カッブチノ「僧三人蠟燭を抱りて卓より卓に歩みゆきつゝ、「キユリエ、エレイソン」(主よ、憫め)と歌へり。僧は十字架に來り近づきぬ。俯して我面を見るものは、フラア、マルチノなりき。わが色倉ぎめてこゝにあるを訝りて、何事のありしぞと問ひぬ。われはいかに答へしか知らず。されどベツボのをぢの恐ろしきを聞きたるのみにて、僧は我上を推し得たり。我は衣の袖に縋りて、我を見棄て給ふなと願ひぬ。連なる僧もわれをあはれと思へる如し。かれ等は皆我を知れり。われはその部屋をおとづれ、彼等と共に共に歌ひしことあり。

僧は我を付ひて寺に歸りぬ。壁に木板の畫を貼したる房に入り、樺櫟樹の枝さし入れたる窓を見て、われはきのふの苦を忘れぬ。フラア、マルチノは我をベツボが許へは還さじと誓ひ給へり。同寮の僧にも、このちごをば奪へたる巧兒にわたされずとのたまふを聞きつ。午のころ僧は菜蔬、麴包、葡萄酒を取り來て我

我がために作さでかなぬ事を商量したり。その何事なるかは知らねど、善きことにはあらず。奈何してこゝをば遁れむ。われは禪心にあらむ限りの智慧を絞り出しつ。固よりいづこをさして往かむと途は、一たびも思ひ計らざりき。鋪板を這ひて窓の下にいたり、木片ありしを踏臺にして窓に上りぬ。家は皆戸を閉ぢたり。街には人行絶えたり。遁るゝには飛びおるより外に道なし。されどそれも恐ろし。とつおいつする折しも、この狭き間の戸ざしに手を掛くる如き音したれば、覺えず窓縁をすべりおちて、石垣づたひに地に墜ちぬ。身は少し痛みしが、幸にこゝは草の上なりき。跳ね起きて、いづくを宛ともなく、狭く曲りたる巷を走りぬ。途にて逢ひたるは、杖もて敷石を敲き、高聲にて歌ふ男一人のみなりき。しばらくして廣きところに出でぬ。こゝは見覺あるフオオルム、ロマアナムなりき。常は牛市と呼ぶところなり。

### 露宿、わかれ

月はカピトリウム（羅馬七陵の一）の背後を照せり。セプチミウス、セエルス帝の凱旋門に登る礎の上には、大外套被りて臥したる乞兒二

三人あり。古の神殿のなごりなる高き石柱は、長き影を地上に印せり。われはこの夕まで、日暮れてこゝに來しことなかりき。鬼氣は少年の衣を襲へり。歩をうつす間、高草の底に横はりたる大理石の柱頭に蹶きて仆れ、また起き上りて帝王座の方を仰ぎ見つ。高き石がきは、纏はれたる蒿かづらのために、いよゝおそろし氣なり。青き空をかすめて、ところゝに立てるは、眞黒におほいなるいとすぎの木なり。毀れたる柱、砕けたる石の間には、放飼の驢あり、牛ありて草を食みたり。あはれ、こゝには猶我に迫り、我を窘めざる生物こそあれ。月あきらかなれば、物として見えぬはなし。遠き方より人の來り近づくあり。若し我を索むものならば奈何せむ。われは王座の如くに我前に在る「コリゼエオ」に隠れたり。われは猶きのふ落したる如き重廊の上に立てり。こゝは暗くして且冷なり。われは二あし三あし進み入りぬ。されど御難にひやく足音おそろしければ、徐に歩を運びたり。先の方には焚火する人あり。三人の形明に見ゆ。寂しきカムパニアの野邊を夜更けては過ぎじとて、こゝに宿りし農夫にやあらむ。さらずばこゝを成る兵士にや。はた盗にや。さおもへば打物の石に觸る

る音も聞ゆる如し。われは御歩して、高き圓柱の上に、木梢と蔓蘿とのおほひをなしたるところに出でぬ。石がきの面をばあやしき影往來す。處々に拙け出でたる截石の將に墜ちむとして僅に懸りたるさま、唯々蔓草のみ支へられたるかと思はる。

上の方なる中の廊を行く人あり。旅人の此古跡の月を見むとて來ぬるなるべし。その一群のうちには白き衣着たる婦人あり。案内者に續松とらせて行きつゝ、柱しげき間に、忽ち顯れ忽ち隠るゝ光景今も見ゆらむ心地す。

暗碧なる夜は大地を覆ひ來たり。高低さまさまなる木は天鵝絨の如き色に見ゆ。一葉ごとに夜氣を吐けり。旅人のかへり行くあとを見送る時、ついまつの赤き光さへ見えなくなりぬ。あたりは闇として物音絶えたり。この遺址のうちには、耶穌教徒が立てたる木卓あまたあり。その一つの片かけに、柱頭ありて草に埋もれたれば、われはこれに腰掛けつ。石は水の如く冷なるに、我頭の熱さは熱を病むが如くなりき。寐られぬまゝに思ひ出づるは、この「コリゼエオ」の昔話なり。猶太教奉ずる囚人が、羅馬の帝の厳しき仰によりて、大石を引き上げさせられしこと、この平地にて獸を御はせ、父

しときの面影なるべし。石垣の間なる、幅廣き三條の柱は、後の修繕ならむ。おもふに中古は碧にやしたりけむ。戸口の上に穴あり。これ窓なるべし。屋根の半は葺簾に枯枝をまじへて葺き、半は又枝さしかはしたる古木をその儘に用ゐたるが、その梢よりは忍冬ハカフリフオリウムの葺長く垂れて石垣にかゝりたり。

こゝが家ぞ、と途すがら一言も物いはざりしベネデットオ告げぬ。われは怪しげなる家を望み、またかの盗人の屍をかへり見て、こゝに住むことか、と問ひかへしつ。翁にドメニカ、ドメニカと呼ばれて、荒棒の汗衫ひとつ着たる嬬出でぬ。手足をばことごとく露して髪をはふり亂したり。嬬は我を抱き寄せて、あまたゝび接吻す。夫の詞少きとはうらうへにて、この嬬はめづらしき饒舌なり。そなたは薊生ふる沙原より、われ等に授けられたるイスマエル(亞伯拉罕の子)なるぞ。されどわが饗應には足らぬこととあらせじ。天上なる聖母に代りて、われ汝を育つべし。臥所はすでにこしらへ置きぬ。豆も煮えたるべし。ベネデットオもそなたも食卓に就け、マリウチアはともに來ざりしか。尊き爺(法皇)を拜まざりしか。醴豚をば忘れざりしならむ。眞鍮の鉤をも。新しき聖母の像をも。

舊きをば最早形見えわかぬ迄接吻したり。ベネデットオよ。おん身ほど物憂好き人はあらじ。わがかはゆきベネデットオよ。かく語りついで、狭き一間に伴ひ入りぬ。後にはこの一間、わがためには「ワチカアノ(法皇の宮)の廣間の如く思はれぬ。おもふに我の身を産み出し、は、此ひとつ家ならむか。

若き松欄は重を負ふこといよく人にして、長ずることいよく早しといふ。我夢想も亦この狭き處にとぞ込められて、却りて大に發達せしならむ。古の墳墓の常として、此家には中央なる廣間あり。そのめぐりには、許多の小龕並びたり。又二重の幅面き棚あり。處々色かけりたる石を鑿みて紋を成せり。一つの龕をば食堂とし、一つには靈針などを藏し、一つをば厨となして豆を煮たり。老夫婦は祈禱して卓に就けり。食畢りて嬬は我を牽きて櫛を登り、二階なる二龕にいたりぬ。是れわれ等二人の臥房なり。わが龕は戸口の向ひにて、戸口よりは最も遠きところにあり。臥所の側には、二條の木を交はせて、其間に布を張り、これにをさな子一人寐せたり。マリウチアが子なるべし。嬬が我に「アエ、マリア一唱へしむるとき、美しき色澤ある蜥蜴わが側を

走り過ぎぬ。おそろしき物にはあらず、人をおそれこそすれ、絶てものそなふものにはあらず、と云ひつゝ、かの扉をとおのが龕のかたへ遷しつ。壁に石一つ掛け落ちたるところあり。こゝより青翠見ゆ。黒き葺の葉の鳥なんどの如く風に搖らるゝも見ゆ。我は十字を切りて眠に就きぬ。亡き母上、聖母、刑せられたる盗人の手足、皆わが怪しき夢に入りぬ。

翌朝より雨ふりつゝきて、戸は開けたれどいと闇き小部屋に籠り居たり。わが帆布靴の上なる襪子をゆすぶる傍にて、嬬は學うみつゝ、我に新しき祈禱を教へ、まだ聞かぬ聖の上を語り、またこの野邊に出づる劫盜の事を話せり。劫盜は旅人を祖のみにて、牧者の家杯へは來ることなしとぞ。食は葱、麵包などなり。皆旨し。されど一間にのみ籠り居らむこと物憂きに堪へねば、嬬は我を慰めむとて、戸の前に小溝を掘りたり。この小テエエル河は、をやみなき雨に黄なる流となりて、いと緩やかにながるめり。さて木を刻み葦を截りて作りたるは羅馬よりオスチア(テエエル河口の港)にかよふなる帆かけ舟なり。雨あまり馴しきときは、戸をさして闇黒裡に坐し、嬬は字をうみ、われは羅馬なる寺のさまを思へり。舟に乗りたる聖蘇



に飲啄せしめ、さて容を正していふやう。使なき童よ。母だに世にあらば、この別はあるまじきを。母だに世にあらば、この寺の内にありて、尊き御蔭を被り、安らかに人となるべかりしを。今は是非なき事となりぬ。そちは波風荒き海に浮ばむとす。寄るところは一ひらの板のみ。血を流し給へる耶蘇、涙を墮し給ふ聖母をな忘れそ。汝が族といふものは、その外にあらじかし。此詞を聞きて、われは身を震はせ、さらば我をばいづかたにか遣らむとし給ふと問ひぬ。これより僧は、われをカムパニアの野なる牧者夫婦にあづくること、二人をば父母の如く敬ふべき事、かねて教へおきし祈禱の詞を忘るべからざる事など語り出でぬ。夕暮にマリウチアと其父とは寺門迄迎へに來ぬ。僧はわれを伴ひ出で、引き渡しつ。この牧者のさまを見るに、衣はベツポのをちのより舊りたるべし。塵を蒙り、裂けやぶれたる皮靴を穿き、膝を露し、野の花を挿したる斗帽を戴けり。かれは跪きて僧の手に接吻し、我を顧みて、かゝる美しき童なれば、我のみかは、妻も喜びてもり育てむと誓ひぬ。マリウチアは財を父にわたしつ。われ等四人はこれより寺に入りて、人々皆默禱す。われも共に跪きしが、祈禱の詞は出でざりき。我眼

は久しき馴染の諸像を見たり。戸の上高きところを舟に乗りてゆき給ふ耶蘇、賢卓の神の使、美しきミケルはいふもさらなり、蕙かづらの環を戴きたる髑髏にも暇乞しつ。別に臨みて、フアラ マルチノは手を我頭上加へ、晚餐式施行法(モオドオ、デ、セルキレ、ラ、サンクタ、メツサア)と題したる、繪入の小冊子を贈りぬ。既に別れて、ピアツツア、バルベリイニの街を過ぐとて、仰いで母上の住み給ひし家をみれば、窓といふ窓、悉く開け放たれたり。新しきあるじを待つにやあらむ。

## 曠野

羅馬城のめぐりなる大曠野は、今我すみかとなりぬ。古跡をたづね、美術を究めむと、初てテエエル河畔の古都に近づくものは、必ずこの荒野に歩をとめて、これを萬國史の一ひらと看做すなり。起てる丘、伏したる谷、おほよそ眼に觸るゝもの、一つとして史冊中の奇怪なる古文字にあらざるなし。畫にのけるや、古の水道のなごりなる、寂しき櫛形遺跡を寫し、羊の群を牽るたる牧者を寫し、さてその前に枯れたる薊を寫すのみ。歸りてこれを人に示せば、看るもの皆めでくつがへるなるべし。されど我

と牧者とは、おのゝ其情を殊にせり。牧者は久しくこゝに住ひて、この焦れたる如き草を見、この熱き風に吹かれ、こゝに行はるゝ疥癬に苦められたれば、唯々あしき方、思まはしき方のみをと思ふらむ。我は此景に對して、いと面白くぞ覺えし。平原の一面なる山々の濃淡いろいろなる線を染め出したる、おそろしき水牛、テエエルの黄なる流、これを遡る月、岸邊を來かるゝ輓負ひたる牧牛、皆目新しきもののみなりき。われ等は流に遡りて行きぬ。足の下なるは丈低く黄なる草、身のめぐりなるは草、枯れたる薊のみ。十字架の側を過ぐ。こゝ人の殺されたるあとに立してしなり。架に近きところには、盜人の屍の切り碎きて棄てたるあり。隻腕、隻脚は猶その形を存じたり。それさへ心を寒からしむるに、我柄はこゝより遠からずとぞいふなる。

此家は古の墳墓の址なり。この類の穴こゝらあれば、牧者となるもの大抵これに住みて、身を成るにも、父身を安んずるにも、事足れりとおもへるなり。用なき汗をば墳め、いらぬ碑をば來ぎ、上に草を寄せば、家すでに成れり。我牧者の家は丘の上において兩層あり。階き戸口なるコリントスがたの柱は、當初墳墓を築き

ぬものなるべし。あめ色の地に、橄欖、オリワの如く緑なる色の雲あるをば、樂土の苑圃に湧き出でたる山かと疑ひぬ。又夕映の赤きところに、暗碧なる雲の浮べるをば、天人の居る山の松林ならむと思ひて、その谷かげには、美しき神の童あまた休み、白き翼を扇の如くつかひて、みづから涼を取るらむとおもひやりぬ。

或日の夕ぐれ、いつもの如く夢ごころになりてゐるが、ふと思ひ付きて、鍼もて穿ちたる紙片を目にあて、太陽を覗きはじめつ。ドメニカこれを見つけて、そは目を傷ふわざとて目の見えぬやうに戸をさしつ。われ無事に苦みて、外に出で、遊ばむことを請ひ、許をえたる嬉しさに、門のかたへ走りゆき、戸を推し開きつ。その時一人の男、遽だしく駆け入りて、門口に立ちたる我を掻きまろばし、扉をはたと閉ぢたり。われは此人の蒼ざめたる面を見、その震ふる唇より洩れたる「マドンナ（聖母）」といふ一聲を聞きも果てぬに、おそろしき勢にて、外より戸を衝くものあり。裂け飛んだる板は我頭に觸れむとせり。その時戸口を塞ぎたるは、血ばしる眼を我等に注ぎたる、水牛の頭なりき。ドメニカはあと叫びて、我手を握り、上の間にゆく梯を二足三足のぼりぬ。逃げ込みたる男は、

あたりを見廻はし、ベネデットオが銃の壁に掛かりたるを見出しつ。これは賊なんどの入らむ折の備にとて、丸をこめおきたるなり。男は手早く銃を取りぬ。耳を貫く響と共に、烟は狭き家に満ちわたれり。われは彼男の烟の中にて、銃把を擧げて、水牛の顔を撃つを見たり。獸は隆き戸口にはさまりて前にも後にも元動かざりしなり。

これは何事をかし給ふ。君は物の命を取り給ひぬ。この詞はドメニカが纔にわれにかへりたる口より出でぬ。かの男、吾聖母の燕なりき。我等が命を拾ひぬとこそおもへ。さて我を抱き上げて、されどわがために戸を開きしはこの恩人なりといひき。男の面は猶蒼く、顔の汗は玉をなしたり。その語を聞くに外國人にあらず。その衣を見るに羅馬の貴人とおぼし。この人草木の花を愛づる癖あり。けふも採集に出で、ポルンテ、モルレにて車を下り、テエエル河に沿ひてこなたへ來しに、剛らずも水牛の群にあひぬ。その一つ、いかなる故にか、群を離れて衝き來たりしが、幸にこの家の戸開きて、危き難を免れきとなり。ドメニカ聞きて、さらばおん身を救ひしは疑もなく聖母のおんしわざなり。この童は聖母の愛でさし給ふものなれば、そ

れに戸をば開かせ給ひしなり。おん身はまだ此童を識り給はず。物語むことには長けたれば、書きたるをも、印したるをも、え讀まずといふことなし。晝かくことを善くして、いかなる形のものをも、明にそれと見ゆるやうに寫せり。「ピエトロ」寺の塔をも、水牛をも、肥えふとりたるバアテル、アムプロジオ（僧の名）をもゑがきぬ。聲は頻なくめでたし。おん身にかれが歌ふを聞かせまほし。法皇の伶人もこれには優らざるべし。そが上に性すなほなる兒なり。善き兒なり。子供には譽めて聞かすること宜しからねば、その外をば申さず。されどこの子は、譽められても好き子なりといふ。客。この子の癖きを見れば、おん身の腹にはあらざるべし。ドメニカ。否、老いたる無花果の示には、かゝる芽は出でぬものなり。されど此世には、この子の親といふもの、われとベネデットオとの外あらず。いかに貧くなりても、これをば育てむと思ひ侍り。そは兎まれ角まれ、この獸をばいかにせむ。（頭より血流るゝ、水牛の角を握りて。）戸口に挟まりたれば、たやすく動くべくもあらず。ベネデットオの歸るまでは、外に出でむやうなし。こを殺しつとて、咎めらるゝことあらば、いかにすべき。客。そは心安かれ。あるじ

は今面前に見ゆる心地す。聖母の雲に駕りて、神の使の童供に昇かせ給ふも見ゆ。環かざりしたる襦袢も見ゆ。

雨の時過ぐれば、月を踰ゆれども曇ることなし。われは走り出で、遊びありくに、嬪は戒めて遠く行かしめず、又テエルの河近く寄りしめず。この岸は土鬆ければ、踏むに従ひて類ることありといへり。そが上、岸近きところには水牛あまたあり。こは猛きにて、怒るときは人を殺すと聞く。されど我はこの物を見ることを好めり。毒蛇の鳥を吞むときは、鳥自ら飛びて其咽に入るといふ類にやあらむ。この

獸の赤き目には、怪しき光ありて、我を引き寄せむとする如し。又此部の馬の如く走るさま、力を極めて相闘ふさま、皆わがために興ある事なりき。我は見たることを沙に畫き、又歌につづりて歌ひぬ。嬪は我聲のめでたきを稱へて止まず。

時は暑に向ひひ。カムパニアの野は火の海とならむとす。渾水は惡臭を放てり。朝夕のほかは、戶外に出づべからず。かゝる苦熱はモンテ、ピンチオにありし身の知らざる所なり。かしこの夏をば、我猶記えたり。乞兒は人に小銅貨をねだり、獨包をば買はで、氷水を飲めり。二つ

に割りたる大西瓜の肉亦く核黒きは、いづれの店にもありき。これをおもへば、唾湧きて堪へがたし。この野邊にては、日やま士ぐに射下せり。我が立てる影さへ、我脚下に没せむばかりなり。水牛は或は死せるが如く、枯草の上に臥し、或は狂せるが如く、駆けめぐるなり。われは物語に聞ける亞弗利加沙漠の旅人になりたらむやうにおもひき。

大海の孤舟にあるが如き念をなすこと二月間、何の用事も朝夕の涼しき間に済ませ、終日も出でず人も來ざりき。焦く如き熱、腐りたる蒸氣の中において、我血は湧きかへらむとす。溜は涸れたり。テエルの黄なる水は生温くなりて、眠たげに流れたり。西瓜の汁も温し。土石の底に藏したる葡萄酒も酸くして、半ば煮たる如し。我等は一滴の冷露を嘗むること能はざりき。天には一縷雲なく、いつもおなじ碧色にて、吹く風は唯々熱き、シロツコ、東南風のみなり。われ等は日ごとに雨を祈り、嬪は朝々山ある方を眺めて、雲や起ると待てども甲斐なし。蔭あるは夜のみ。涼風の少し動くは日出る時と目入る時とのみ。われは暑に苦み、この變化なき生活に倦みて、殆ど死せる如くなりき。風少しく動くと覺ゆるときは、蠅蚋など群が

り來りて人の肌を刺せり。水牛の背にも、昆蟲聚りて寸膚を止めねば、時々怒りて自らテエルの黄なる流に躍り入り、身を水底に滾してこれを擲ひたり。羅馬の市にて、闇然たる午時の街を行く人は、錢の如き陰影を求めて夏日の烈しきをかこつと雖、これをこの火の海にただよひ、硫黄氣ある毒氣を呼吸し、幾時とも知られぬ惡蟲に膚を嚙まるゝものに比ぶれば、猶是れ樂土の客ならむかし。

九月になりて氣候や、溫和になりぬ。フエドリゴはこの境原を畫かむとて來ぬ。我が仕める怪しき家、却盜の屍をさらしたる處、おそろしき水牛、皆其筆に上りぬ。我には紙筆を與へて畫の繪古せよと勸め、又折もあらば迎へに來て、クラア、マルチノ、マリウチア其外の人々に逢はせばやと契りおきぬ。惜むらくはこの人久しく約を履まざりき。

## 水牛

十一月になりぬ。こゝに來しより最、快き時節なり。爽なる風は山々よりおろし來ぬ。夕暮になれば、南の國ならではの無しといふ、ただならぬ雲の色、日を影かすやうなり。こは畫工のえうつさぬところなるべく、また敢て寫さ



エル河とピンチオ山との間にあり。兩側にはいとすぎ、亞利比亞護謨の木(アカチア)茂りあひて、その下かげに今様なる石像、噴水などあり。中央には四つの石獅に囲まれたる、セソストリス時代の記念塔あり。前には三條の直道あり。即ちキア、ババキノ、イル、コルソオ、キア、リベッタなり。イル、コルソオの兩角をなしたるは、同じ式に建てたる、兩伽藍なり。歐羅巴に都會多しと雖、古羅馬のビヅツア、デル、ボ、ロほど晴やかなるはあらじ。」

我は熱き頬を獅子の口に押し當て、水を頭に被りぬ。衣や潤はむ、髪や濡れむ、とドメニカは氣遣ひぬ。キア、リベッタを下りゆきて、ボルゲエゼの館に近づきぬ。我もドメニカも、此館の前をば幾度となく通りしかど、けふ迄は心とめて見しことなし。今歩を停めて仰ぎ見れば、その大さ、その豊さ、その美しさ、譬へむに物なしと覺えき。殊に目を駭かせるは、窓の裡なる長き網の帷なり。あの内にいます君は、いま我等が識る人となりぬ。きのふその君の我家に來給ひし如く、いま我等はそのみたちに入らむとす。斯く思へば嬉しきかばかりならむ。

中庭、部屋々々を見しとき、身の震ひたるをば、われ泣して忘れざるべし。あるじの君は我

に親し、彼も人なり。我も人なり。然はあれどこの家屋のさまこゝ譬へても言はれぬ。聖と世の常の人との別もかくやあらむ。方角をなして、いろ／＼なる全身像、半身像を据ゑつけたる、白塗の廻廊のいと高きが、小き園を繞れるあり。(後にはこゝに瓦を敷き一中庭とせり。) 高き盧苔、霸王樹など、廊の柱に攀ぢむとす。構櫓樹はまだ日の光に黄金色に染められざる、綠の實を垂れたり。希臘の舞女の形したる像二つあり。力を併せて、全體一つさし上げたるがその緣少しく缺だちて、水は肩に、逆り落ちたり。丈高く立ちたる水草ありて、露けき雜葉もてこの像を掩はむとす。烈しき日に焼かれたるカムパニアの粘土に比ぶるときは、この園の涼しき、香しき奈何ぞや。

潤き大理石の梯を登りぬ。龕あまたありて、貴き石像立てり。其一つをば、ドメニカ聖母ならむと思ひ憑ひて、立ち停りてぬかづきぬ。後に聞けば、こはエスタの像なりき。これも人間に奇しき處女にぞありける。(譯者のいはく。希臘の遺の神なり。男神二人に挑まれて、嫁せずして終りぬと云ふ傳ふ。飾美しきリフレア)着たる僅出で迎へつ。その面持の優しさには、こゝの間ごとの大さ、美しさかくまでならず

ば、我胸の躍ることさへ治りしならむ。床は鏡の如き大理石なり。壁といふ壁には、めでたき畫を貼したり。その間々には、玻璃鏡を嵌め、その上に花束、はなの環など持ちたる神童の飛行せる畫きたり。又色美しき鳥の、翼を放ちて、赤き、黄なる、さま／＼の木の実を啄める畫きたるあり。かく華やかなるものをば、今まで見しことあらざりき。

暫し待つほどに、あるじの君出でましぬ。白衣着たる、美しき貴婦人の、大なる嫩き目を我等に注ぎたるを、件ひ給へり。婦人は我御宴を撫で上げ、鋭けれども優しき日にて、我面を打ち守り、さなり、君を助けしは神のみつかひなり、この見ぐるしき衣の下に、翼はかくれたるべしと宣ひぬ。主人。否、この兒の紅なる頬を見給へ。翼の生ゆるまでにはテエルの河波あまた海に入るならむ。我もこの兒の飛び去らむをば願はざるべし。さにあらずや。この兒を失はむことは、つらかるべし。媼。げにこの兒あらずなりなば、我小家の戸も窓も塞がりたるやうなる心地やせむ。我小家は暗く、寂しくなるべし。否、このかはゆき兒には、われえ別れざるべし。婦人。されど今宵しばらくは、別れるとも好からむ。二三時間立ちて迎へに來よ。

の老女も聞きしことのあるべきが、われはボル  
ゲエゼの娘なり。嬬。いかでか、と答へて衣  
に接吻せむとせしに、客はその手をさし出して  
吸はせ、さて我手を兩の掌の間に挟みて、  
嬬にいふやう。あすは此子を伴ひて、羅馬に來  
よ。われはボルゲエゼの館に住めり。ドメニカ  
は悉しとて涙を流しつ。

ドメニカはわが口より書き棄てたる反古あま  
た取り出で、客に示し、客は我頬を撫  
で、小さサルワトル、ロオザ(名高き畫工)よと  
讃め稱へぬ。嬬。まことに宜ふ如し。穢きもの  
の業としては、珍しくは候はずや。それ／＼の  
形明に備はりたり。この水牛を見給へ。この  
舟を見給へ。こはまた我等の住める小家なり。  
こは我姿を寫したるなり。鎖作なれば、色こそ  
異なれ、わが姿のその儘ならずや。又我に向ひ  
て、何にもあれ、この御方に就きて聞せよ。自  
ら作りて歌ふが好し。この童は長き物語、こま  
やかなる法話をさへ、歌に作りて歌ひ傳り。年  
長けたる僧にも劣らじと覺ゆ。客は我等二人の  
さまを見て、おもしろがり、我には疾く歌ひて  
聞せよ、と勸めつ。われは常の如く遠慮なく歌  
ひぬ。嬬は常の如くほめそやしつ。されど其歌  
をば記憶せず。唯聖母、貴き客人、水牛の三

つをくりかへしたるをば未だ忘れず。客は黙坐  
して聴きゐたり。嬬はそのさまを見て、童の才  
に驚きて詞なきならむと推し量りつ。

歌ひ畢りしとき、客は口を開きていふやう。

さらば明日疾くその子を伴ひ來よ。否、夕暮の  
かたよろしからむ。「アエ、マリア」の鐘鳴る時  
より、一時ばかり早く來よ。さて我は最早退る  
べきが、いづくよりか出づべき。水牛の塞ぎた  
る口の外、この家には口はなきか。又こゝを出  
で、車まで行かむに、水牛に追はるゝやうなる  
虞なからしめむには、いかにして好かるべきか。  
嬬。かしこの草に穴ありて、それより這ひ出づ  
るときは、石垣も高からねば、すべりおりむこ  
と難からず。わが如き老いたるものも、かしこ  
より出入すべく覺え停り。されど貴きおん方を  
果てず、梯を上りて、穴より頭を出し、外の  
方を覗きていふやう。否、善き降日なり。カピ  
トリウムに降りゆく階段にも譲らず。水牛の  
群は河のかたに遠ざかりぬ。道には賦たげなる  
百姓あまた、籐の束積みたる車を、馬に引か  
せて行けり。あの車に沿ひゆかば、また水牛に  
襲はるとも身を匿すに便よからむ。かく見定め  
て、客は嬬に手を吸はせ、わが頬を撫で、再び

あすの事を契りおきて、茂れる藪かづらの間を  
すべりおりぬ。われは窓より見送りしが、客は  
間もなく籐の車に追ひすがりて、百姓の群と  
俱に見えずなりぬ。

## みたち

牧羊三人の群を得て、ベネデットすは戸口  
なる水牛の屍を取り片附けつ。その日の物語  
は止むときなかりしかど、今はいくも記えず。  
翌朝疾く起きいで、夕暮に都に行かむと度  
に取り掛りぬ。數月の間行客の中に鎖されゐた  
我の衣はとり出されぬ。帽には美しき薔薇の  
花を插したり。身のまはりにて、最も惜しけな  
りしは履ものなり。靴とはいへど羅馬の鞋に  
近く覺えられき。

カムハニアの野道の遠かりしことよ。その照  
る日の烈しかりしことよ。ボ、ロの廣こうちに  
出で、記念塔のめぐりなる石獅の口より吐け  
る水を掬びて、我潤れたる咽を潤し、が、その  
味は人となりて後フアレルナ、チブライの酒  
なんどを飲みたるにも増して旨かりき。「北よ  
り羅馬に入るものは、ボルタア、デル、ボ、ロ  
の關を入りて、ピアツツア、デル、ボ、ロといふ  
美しく大なる廣こうちに出づ。この廣こうちデ

し。午前は旅人この堂に満ちたり。又畫工の來ていろ／＼なる畫を寫し取れるもあり。午後になれば、堂中に人影なし。此時フランチェスカの君我を伴ひゆきて、畫ときなどし給ふなり。特に我心に慍ひしは、フランチェスコ、アル

パニが四季の圖なり。「アモレットオ」といふ者ぞ、と教へられたる、美しき神の使の童どもは、我夢の中より生れ出でしものと疑はる。その春と題したる畫の中に群れ遊べるさまこそ愛でたけれ。童一人大人なる低を運すあれば、一人はそれにて鐵を研ぎ、外の二人は上にありて飛行しつゝも、水を砥の上に灌げり。夏の圖を見れば、童ども樹々のめぐりを飛びかひて、枝もたわ／＼に實りたる果を摘みとり、又清き流を泳ぎて、水を弄びたり。秋は獵の興を寫せり。手に繯取りたる童一人小車の裡に坐したるを、友なる童子二人牽き行くさまなり。愛はこの優しき獵夫に、共に憩ふべき處を指し示せり。冬は童皆眠れり。美しき女怪水中より出でて、眠れる童たちの弓矢を奪ひ、火に投げ入れて焚き棄つ。

願ふところなれど、フランチェスカの君は教へ給はざりき。君の宜ふやう。そは文にあれば、讀みて知れかし。おほよそ文にて知らるゝことは、その外にもいと多し。されど讀みおぼゆる初は、あまり樂しきものにはあらず。汝は終日樹に坐して文を手より藉かじと心掛くべし。カムパニアの野にありて、山羊と戯れ、友達を訪はむとて走りめぐることは、叶はざるべし。そちは何事かを望める。かのフアビアニの君のやうなる、美しき軍服に身をかためて、羽つきたる装を戴き、長き劍を佩きて、法皇のみ車の傍を騎りゆかむとやおもふ。さらずば美しき畫といふ書を、殘なく知り、はてなき世の事を悟り、我が物語りしよりも、週に面白き物語のあらむ限を記えむと思ふ。我。されど左様なる人になりては、ドメニカが許には居られぬにや。また御館へは來られぬにや。フランチェスカ。汝は獵母の上をば忘れぬなるべし。初め、かの栖家にありしときは、ドメニカが事を、我上をも思はざりしならむ。然るに今はドメニカと我と、そちに親きものになりぬ。この交もいつか更ることあらむ。かく更りゆくが人の身の上ぞ。我。されどおん身は、我世上の

如く果敢なくなり給ふことはあらじ。斯く云ひて、我は涙にくれたり。フランチェスカ。死にて別れずば、生きながら分れむこと、すべての人の上なり。そちが我等とかく交らぬやうにならむ折、そちが上の樂しく心安かれ、とおもひてこそ、我は今よりそちが發落を心にかくるなれ。我涙は愈々繁くなりぬ。我はいかなる故と、明には知らざりしが、斯く識されたる時、限なき辛なきを覺えき。フランチェスカは我頬を撫で、我が餘りに心弱きを諷め、かくては世に立たむをり、いと便なかるべしと氣づかひ給ひぬ。この時に人の君は、曾て我頭の上に月桂剣を載せたるフアビアニといふ士官と俱に一間に歩み入り給ひぬ。

ボルゲエゼの別墅に嫁あり。世に罕なるべき儀式を見よ。この風説は或るタカムパニアなるドメニカがあばら屋にさへ洩れ聞えぬ。フランチェスカの君はかの士官の妻になるべき約を定めて、處からずフイレンチェなるフアビニア家の莊園に遷らむとす。儀式あるべき處は、羅馬附近の別墅なり。棚いとすき佳など生ひ茂りて、四時餘なる人を戴けり。昔も今も、羅馬人と外國人と、恒に來り遊ぶ處なり。麗しく飾りたる馬車は、緑しげき棚の並木の道を走



歸路は月あかゝるべし。そち達は盗を恐るゝことはあらじ。主人。さなり。兒をばししこにおきて、買ふものあらば買ひて來よ。斯く云ひつゝ、主人は小き財囊をドメニカが手に渡し、猶何事かを語り給ふに、我は貴婦人に引かれて奥に入りぬ。

奥の座敷の美しき、賓客の貴さに、我魂は奪はれぬ。我はある壁に畫ける神童の面の、緑なる草木の間にほゝゑめるを見、あるは目ごろ半ば神のやうにおもひし、紫の襪穿ける議官、紅の袴着たる僧官達を見て、おのれがかゝる間に入り、かゝる人に交ることを訝りぬ。殊に我眼をひきしは、一間の中央なる大水盤なり。醜き龍に騎りたる、美しきアモオルの神を据ゑたり。龍の口よりは、水高く迸り出で、又盤中に落ちたり。

貴婦人のこはをの命を救ひし兒ぞ、と引き合せ給ひしとき、賓客達は皆ほゝゑみて、我に詞を掛け、議官僧官さへ領き給ひぬ。法皇の禁軍の號衣を着たる、少く美しき上官は我手を握りぬ。人々さまんの事を問ふに、我は臆することなく答へつ。その詞に、人々或は譽めそやし、或は高く笑ひぬ。主人入り來りて、我に歌うたへといふに、我は喜んで命に従ひぬ。

士官は我に報せむとて、泡立てる酒を酌みてわたしゝかば、我何の心もつかで飲み乾さむとせしに、貴婦人快く彼より取り給ひぬ。我口に入りしは少許なるに、その酒は火の如く燄の如く、脈々をめぐりぬ。貴婦人はなほ我儂を離れず、笑を含みて立ち給へり。士官我にこの御方の上を歌へと勧めしに、我又喜んで歌ひぬ。何事かを聯ねけむ、いまは覺えず。人々はわが詞の多かりしを、多量なりと稱へ、わか臆せざるを、心癒しと称めたり。カムハニアなる貧きものゝ子なりとおもへば、世の常なる作をも、天才の爲せるわざの如く、愛てくつかへるなるべし。人々は掌を鳴せり。上官は座の隅なる石像に戴かせたりし、美しき月桂冠を取り來りて、笑みつゝ我頭の上に安んじたり。こは固より戯談に過ぎざりき。されどわが幼き心には、其間に眞面目なる榮譽もありと覺えられて、又なく嬉しかりき。我は尙席上にて、マリウチア、ドメニカ等に教へられし歌をうたひ、又曠野の中なる古塔の栖家、眼の光おそろしき水牛の事など人々に語り聞せつ。時は惜めども早く過ぎて、我は嬪に引かれて歸りぬ。くだもの、菓子など多く賜り、白銀幾つか兜兒にさへ入れられたるわが喜はいふもさらなり、嬪は

衣服、器什くさんゝの外、二瓶の葡萄酒をさへ購ひ得て、幸ある日ぞとおもふなるべし。夜は草木の上に眠れり。されど仰いでおほ空を見れば、皎々たる望月、黄金の船の如く、整齊なる青雲の海に泛びて、焦れたるカムハニアの野邊に涼をおくり降せり。

家に還りてより、優しき貴女の姿、賑はしき拍手の聲、慈母の間斷えず耳目を往來せり。喜ばしきは折々我夢の現になりて、又ボルゲエセの館に通へるゝ事なりき。かの貴婦人はわが人に殊なる性を知りておもしろがり給へば、我も亦ドメニカに對する如く、これに對し物語するやうになりぬ。貴婦人はこれを興あることに思ひて、主人の君に我上を譽め給ふ。主人の君も我を愛し給ふ。この愛は、疊に料らずも我母上を、おのが車の轍にかけしことありと知りてより、愈々深くなりまさりぬ。選したる馬の母上を踏仕しとき、車の中に居たるは、この主人の君にぞありける。

貴婦人の名をフランチェスカといふ。我を率て宮のうちなる書堂入り給ひぬ。美しき書帳に對して、我が釋き問、疑なる事などするを、面白がりて笑ひ給ひぬ。後人々に我詞を語りつぎ給ふごとに、人々皆聲高く笑はずといふことな

わが學校生活なり。旅人の高山の巔に登り得て、雲霧立ち籠めたる大地を看下すとき、その雲霧の散るに従ひて、忽ち隣れる山の尖あらはれ、忽ち日光に照されたる谿間の見ゆるが如く、我心の境界は漸く開け、漸く擴がりぬ。カムパニアの野を圍める山に隔てられて、夢にだに見えざりける津々浦々は、次第に浮び出で、歴史はそのところへに人を住はせ、そのところどころにて珍らしき昔物語を歌ひ聞せたり。一株の木、一輪の花、いづれか我に興を興へざる。されど最も美しく我前に咲き出でたるは、わが本國なる伊太利なりき。我も一個の羅馬人ぞとおもふ心には、我を興起せしむる力なからむや。我都のうちに、寸尺の地として、我愛を引き、我興を催さざるものなし。街の傍に棄てられて、今は界の石となりたる、古き柱頭も、わがためには、神聖なる記念なり、わがためには、めでたき景色に心を憫ますメモノンが塔なり。(昔物語にアミノフイスといふ王ありき。エチオピアを領しつるが、希臘のアヒルレスに滅されぬ。その像を刻める塔、埃及なるデオスポリスに立てり、日出日没ごとに鳴るといひ傳ふ。) テエエル河に生ふる蘆の葉は風に飄きて、我にロムルスとレムスとの上を

語り。凱旋門、石の柱、石の像は、昔我心に本國の歴史を刻ましめむとす。我心はつねに古希臘、古羅馬の時代に遊びて、師の賞譽にばかりぬ。凡そ政界にも、教界にも、旗亭に集まるものも、富豪の骨牌卓のめぐりに寄るものも、社會といふ社會の限、必ず太郎冠者のやうなるものありて、もろ人の嘲戯は一身に聚まる習なり。學校にも亦此の如き人あり。我等少年生徒の眼は、早くも嘲戯の的を見出したり。そは我等が教師多かの中に、最眞面目なる、最怒り易き、最も可笑しき一人なりき。名をば「アバテ」ハツパス、ダアダアとなんひける。元と亞拉伯の産なるが、穢き時より法皇の教の庭に遷されて、こゝに生ひ立ち、今はこの學校の趣味の指南役、テエエル大學院の審美上主權者となりぬ。詩といふ神のめづらしき賜につきては、われ人となりて後、屢と考へたづねしことあり。詩は深山の真なる黄金の如くぞおもはるゝ。家庭と學校との教育は、さかしき鎖枷、鎖鐐などのやうに、これを索め出だし、これを吹き分くるなり。折々は初より淨き黄金にいで逢ふことあり。自然に人が即興の抒情詩これなり。さ

れど鐵山の出すものは黄金のみにあらず。白銀い出す脈もあり。錫その外卑き金屬を出す脈もあり。その卑きも世に益あるものにしあれば、只管に言ひ廢すべきにもあらず。これを磨き、これに鍊むるときは、金とも銀とも見ゆることあらむ。されば世の中の詩人には、金の詩人、銀の詩人、銅の詩人、鐵の詩人などありとも謂ふことを得べし。こゝに此列に加はるべきならぬ、堪もて物作る人ありて、強ひて自ら詩人と稱す。ハツパス、ダアダアは實にその一人なりき。ハツパス、ダアダアは當時一流の塊金づくりはじめて、これを氣象情致の迴に優れたる詩人に擲け付け、自ら恥づることを知らざりき。字法句法の輕捷なる、體制音調の流麗なる、詩にあらねども詩とおもはれ、人々の喝采を受けたり。平生ベトラルカを崇むも、その「ソネット」オ一の音調のみ會し得たるにやあらむ。さらずば、矮人觀場なりしか。又狂人にありといふなる固執の妄想か。兎まれ角まれ、ベトラルカとハツパス、ダアダアとは似もよらぬ人なるは、争ひ難かるべし。ハツパス、ダアダアは我等にかの亞弗利加と題したる、長き敘事詩の四分の一を暗誦せしめむとせしかば、幾行の涙、幾

り、白き鴉鳥は、柳の影うつれる静けき湖を泳ぎ、機泉は積み累ねたる藪の上に、逆り落つ。道傍には、農家の少女ありて、鼓を打ち舞へり。胸乳房ゆたかなる羅馬の女子は、煙く眼にこの様を見下して、車を驅れり。我もドメニカに引かれて、恩人のけふの祝に、蔭ながら與らばやと、カムパニアを立出で、別墅の苑の外に來ぬ。燈の光は窓々より洩れたり。フランチェスカとフアンビニアとは、彼處に禮を卒へつるなり。家の内より、樂の聲響き來ぬ。苑の芝生に設けたる機敷の邊より、烟火空に閃き、魚の形したる火は青天を翔りゆく。偶々ある高窓の背後に、男女の影うつれり。あれこそ夫婦の君なれと、ドメニカ耳語きぬ。二人の影は相依りて、接吻する如くなりき。ドメニカは合掌して祈禱の詞を唱へつ。我も暗きいとすぎの木の下のつゝゐて、恩人の上を神に祈りぬ。我儂なるドメニカは二人の御上安かれとつぶやきぬ。烟火の星の數知れず亂れ落つるは、我等が祈禱に答ふる如くなりき。されどドメニカは泣きぬ。こは我がために泣くなり。我が遠からず、分れ去るべきをおもひて泣くなり。ボルゲエゼの主人の君は、「ジェスキタ」派の學校の一座を買ひて我に取らせ給ひしかば、我はカム

ハニアの野と牧者の畑とに別れて、我行來のために修行の門出せむとす。ドメニカは歸路に我にいふやう。我日の明きたるうちに、おん身と此道行かむこと、今日を限なるべし。ドメニカなどの知らぬ、滑なる床、華やかなる装をや、おん身が足は踏むらむ。されどおん身は優しき兒なりき。人となりてもその優しさあらば、あはれなる我等夫婦を忘れ給ふな。あはれ、今は猶果敢なき僕もて、おん身が心を樂ましむることを得るなり。おん身が藤を焚く火を煽ぎ、栗のやくるを得つときは、我はおん身が目の中に神の使の面影を見ることが得るなり。かく果敢なき物にて、かく大なる樂をなすことは、おん身忘れ給ふならむ。カムパニアの野には薊生ふといへど、その薊には尙紅の花吹くことあり。富貴の家なる、滑なる床には、一本の草だに生ひず。その滑なる上を行くものは、臆き易しと聞く。アントニオよ。一たび貧き兒となりたることを忘るな。見まくほしき物も見られず、聞かまくほしき事も聞かれざりしことを忘るな。さらば御身は世に成りいづべし。我等夫婦の亡からむ後、おん身は馬に騎り、又は車に乗りて、昔の破屋をおとつれ給ふこともあらむ。その時はおん身に搦られし籃の中なる兒

は、知らぬ牧者の妻となりて、おん身が前にぬかつくらむ。おん身は人に騎るやうにはなり給はじ。その時になりても、おん身は我他に坐して栗を焼き、又籃を搦りたることを思ひ給ふならむ。言ひ平りて、嬬は我に接吻し、面を掩ひて泣きぬ。我心は我も刺さるゝ如くなりき。この時の苦しさは、後の別の時に増したり。後の別の時には、嬬は泣きつれど、何事をもいはざりき。既に國を出でしとき、嬬走り入りて、薊に半ば黒みたる聖母の像を、肩より剝ぎ取りて贈りぬ。こは我が屢々接吻せしものなり。まことにこの嬬が我におくるべきものは、この外にはあらぬなるべし。

### 學校、えせ詩人、露肆

フランチェスカの君は天に隨ひて塵から給ひぬ。我は「ジェスキタ」派の學校の生徒となりたり。わが日ごとの業もかはり、われに交る人の面も改まりて、定なき演劇めきたる生涯の端はこゝに聞かれぬ。時々刻々の變化のいと繁きに、歲月の遙りゆくことの早きことのみぞ驚かれし。當時こそ月々の畫圖となりて我目に觸れつれ、今に登りて首を回せば、その片々は一幅の大畫圖となりて我前に横はれり。是れ



或る日ピアツツア、ナヲホ（人なる廣こうちにて、夏の砥水を湛ふることあり）を漫歩して、積み疊れたる杵子、地に委ねたる鐵の器、破衣、その外いろ／＼の骨董を外れたる露肆の側に、古書古畫を賣るものあるを見き。こゝに卑き戲畫あれば、かしこに刃を胸に貫きたる聖母の圖あり。似も通はぬものゝ佐をなしたる中に、ふとメタスタジオが詩集一卷我目にとまりぬ。我懷には猶一「パオロ」ありき。こは半年前ボルゲエゼの君が、小遣錢にせよとて賜りし「スクデイ」の残にて、わがためには輕んじ難き金額なりき。（一「スクウド」は約我一圓五十錢に當る。十「パオリ」に換ふべし。一「パオロ」は十五錢計なり。十「パヨッチ」に換ふべし。「スクウド」「パオロ」は銀貨、「パヨッチ」は銅貨なり。）幾個の銅錢もて買ふべくば、この卷見進すべきものならねど、「パオロ」一つを手離さむはいと惜しとおもひぬ。價を論ずれども成らざりしかば、思ひあきらめて立ち去らむとしたる時、一書の題箋に「デキナ、コメデア、チ、ダンテ」が神曲と云へるあるを見出しつ。嗚呼、これこそ我がために、善惡二途の知識の木になりたる、禁斷の果なれ。われはメタスタジオの集を擲ちて、ダンテの書を握り

つ。さるに哀きかな、この果は我手の届かぬ枝になりたり。その價は二「パオリ」なりき。露肆の主人は、一錢も引かずといふに、わが銀錢は掌中に無すれども、二つにはならず。主人、こは伊太利第一の書なり、世界第一の詩なりと稱へて、おのれが知りたる限のダンテの名譽を説き出しつ。ハツパス、ダアダアには無下にひけたれたるダンテの名譽を。露肆の主人のいふやう。この巻は一葉ごとに一場の説教なり。これを書きしは、かう／＼しき預言者にて、その指すかたに向ひて行くものは、地獄の火獄を踏み破りて、天堂に抵らむとす。若き華主よ。君はまだ此書を讀み給ひし事なきなるべし。然らずば君一「スクウド」をも惜み給はぬならむ。二「パオリ」は言ふに足らざる錢なり。それにて生涯讀み厭くことなき、伊太利第一の書を藏することを得給はゞ、實にこよなき幸ならずや。嗚呼、われは三「パオリ」をも惜まざるべし。されど我手中にはその錢なきを奈何せむ。かの伊蘇普が物語に、おのがえ取らぬ果上の葡萄をば、酸しいひきといふ狐の事あり。われはその狐の如く、ハツパス、ダアダアに聞きたるダンテの難を囁り出し、その代にはいたくベト

ラルカを讀め稱へき。露肆の主人は聞半りて。さなり／＼。おのれの無學なる、固より此の如き大家を回讀せむ方は停らず。されど君もまだ歳若ければ、此の如き大家を非難すべきにあらざるべし。おのれはえ讀まぬものなり。君は未だ讀まざるものなり。されば裏むるも恥ずも、遂に甲斐なき業ならずや。唯と許かしきは、君はまだ讀まぬ書をいひおとし給ふことの奇醜なることぞといふ。われは心に慙て、我詞の全く師の口眞曲なるを自狀したり。主人も我が横直なるをや喜びけむ、書を取りて我にわたしていふやう。好し、一「パオロ」にて君に賣らむ。その代には早く讀み試みて、本國の大詩人をあしざまに言ふことを止め給へ。

### 神曲、吾友なる貴公子

何等の快事ぞ。神曲は今我書となりぬ。我が永く藏することを得るものとなりぬ。ハツパス、ダアダアが非難をば、我始より深く信ぜざりき。わが奇を好む心は、かゝ露肆の主人が言に挑まれて、愈々熾になりぬ。われは人なき處に於いて、はじめて此巻を細かむ折を、待ち兼ねるのみなりき。われは生れかはりたる如くなりき。ダンテは

下の鞭か、我等が世々のスチビオを怨む媒を  
なしたりけむ。

ペトラルカは基督曆千三百四年七月二十  
日アレツツォに生れき。いにしへの希臘羅  
馬時代にのみ眼を注ぎたりしが、千三百  
二十七年アキニヨンにてラウラといふ婦人  
に逢ひ、その戀に引かれて、又現世の詩人  
となりぬ。おのが上と世々のスチビオ（羅  
馬の名族）の上とを、千載の下に傳へむと  
長篇の敘事詩亞弗利加を著しつ。今はそ  
の甚だ意を經ざりし小抒情詩世に行はれ  
て、復た亞弗利加を説くものなし。

我等は日ごとにペトラルカの深遠なる趣味と  
いふことを教へられき。ハツバス、ダアダアの  
云ふやう。膚淺なる詩人は水彩畫師なり、空想  
の子なり。凡そ世道人心に害あること、これよ  
り甚しきものあらじ。その群にて最大なり  
とせらるゝダンテすら、我眼より見たるときは、  
小なり、極めて小なり。ペトラルカは抒情詩の  
寸錦のみにても、尙朽ちざることを得べきもの  
なり。ダンテは不朽ならむがために、天堂人間  
地獄をさへ描ひ出しゝものなり。さなり。ダン  
テも韻語をば聯ねたり。そのバビロン塔の如き  
もの、後の世に傳はりたるは、これが爲なり。

されど若しその詞だにも拉句ならましかば、後  
の世の人せめては彼が學殖をおもひて、些  
の數をば起すなるべし。さるを彼は俚言もて  
歌ひぬ。ボツカチヨオの心醉せる、これを評  
して、獅の能く泳ぎ、羊の能く踏むべき波と云  
ひき。我はその深きをも、その易きをも見るこ  
と能はず。通篇脚を立つべき底あることなし。

唯ふ昔と今との間を、ゆきつ戻りつするを見  
るのみ。我が眞理の聖使たるペトラルカを見ず  
や。既往の天子法皇を捉へて、地獄に墮すを、  
手柄めかすやうなる事をばなさず、その生れあ  
ひたる世に立ちて、男性のカツサンドラ（希臘の  
昔物語に見えたる巫女）となり、法皇王侯の嘆  
を懼れずして預言したるは、希臘悲壯劇の中な  
る「ホロス」の群の如くなりき。嘗て面り查列  
斯四世を刺して、徳の遺傳せざるをば、汝に於  
いてこれを見と云ひき。羅馬と巴里とより、  
月桂冠を贈らむとせしとき、ペトラルカは敢て  
輒ち受けずして、三日の考試に應じき。その謙  
遜なりしこと、今の兒曹も及ばざるべし。考試  
畢りて後、彼は「カピトリウム」の壇に上りぬ。  
拿剎里の王は手づから濃紫の袍を取りて、彼が  
背に被せき。これに月桂の環をわたしたるは、  
羅馬の議官なりき。此の如き光榮は、ダンテ

の身を終ふるまで受くること能はざりしところ  
なり。

ダンテは千二百六十五年フィレンチエに  
生れぬ。そのはじめの命名はツランテなり  
き。神曲に見えたるベアトリチと戀  
は、凡く九歳の頃より始りぬ。千二百九  
十年戀人みまかりぬ。是れダンテが女性性  
の美の極致にして、ダンテはこれに依りて、  
心を淨め懷を養うせしなり。アレツツォと  
ビザとの戦ありしときは、ダンテ軍人た  
りき。後政治家となりて、千三百二十一年  
ラエンナにて歿す。

ハツバス、ダアダアが講説は、いつも此の如  
くペトラルカを揚げダンテを抑ふるより外あら  
ざりき。この兩詩人をば、匂ふ草花、燃ゆる薔  
薇の如く並び立たせてもあるべきものを。ペト  
ラルカが小抒情詩をば、品よく讀んぞしめら  
れき。ダンテが作をば生徒の目に觸れしめざり  
き。我は僅に師の詞によりて、そのおもなる  
作は、地獄、淨火、天堂の三段に分れたるを  
知れりしのみ。この分けかたは、既に我空想を  
喚び起して、これを讀まむの願は、我心に溢  
れたり。されどダンテは禁斷の果なり。その  
味は竊むにあらずして知るに由なし。

が眼に就くときは、僧來りて祈禱を勧めたり。  
此處置は益々我心を安ならざらしめき。囁語  
の由りて出づるところは、われ自ら知れり。こ  
れを隠して人を欺くことの快からぬために、  
我血はいよく騒ぎ立ちぬ。数日の後、反動の  
期至り、我心は風の吹き荒れたる迹の如くな  
りぬ。

學校の書生兼しといへども、その家世、その  
才智、竝に人に優れたるは、ベルナルドオとい  
ふ人なりき。遊戯に口をおくるは符もべきなら  
ねど、あまりに情を放ちて自ら恣にするさま  
も見えき。或ときは四層の屋の棟に騎り、或と  
きは窓より窓にわたしたる板を踐みて、人の膽  
を震かしめき。凡そこの學校國に、内訌起り  
ぬといふときは、其責は多く此人の身に歸する  
ことなり。しかもベルナルドオこれを冤とす  
ること能はざるが常なりき。室内の静けさ、僧  
尼の房の如くならむは、人々の願なるに、このベ  
ルナルドオあるがために、平和はいつも破られ  
き。されど彼が戲は人を傷ふには至らざりし  
が、獨りハツパス、ダアダアに對しての振舞は、  
やゝ中傷の嫌ありとおもはれぬ。ハツパス、ダ  
アダアはこれを憎みてあはれ福の神は、直なる  
「ピニヨロ」の木を顧みて、殊を朽木に抛げ與へ

しよ抔ひひぬ。ベルナルドオは羅馬の議官の甥  
にて、その家當みさかえたればなるべし。  
ベルナルドオは何事につけても、人に殊なる  
見を立て、これを同學のものに説き聞かせて、  
その聴かざるものをば、拳もて制しつれば、い  
つも級中にて、出色の人物とてはやされき。  
彼と我とは性質太く異なるに、彼は能く我に親  
みき。唯わがあまりに爭ふ心に乏きをば、  
ベルナルドオ嘲り笑ひぬ。

或時ベルナルドオの我にいふやう。われ若し  
我拳の、一たび爾を怒らしむるを知らば、わ  
れは必ず爾を打つべし。汝は人に本性を見  
するときなきか。わが汝を嘲るとき、汝は何  
故に拳を揮ひて我面を撲たむとせざる。その時  
こそ我は汝がまことの友となるならめ。されど  
今はわれこの望を絶ちたりといひき。

わがダンテの熱く少しく平らぎたる頃なり  
き。ひと曰ベルナルドオは我前なる卓に腰掛け  
て、しばし故ありげなる笑をもらしつゝ我顔を  
見つめ居たるが、忽ち我にいふやう。汝は我に  
もまして横眉なる男なり。善くも狂言して人  
を欺くことよ。床は呪水に濡られ、身は護摩  
の煙に薰さるゝは、これがために非ずや。我知  
らじとやおもふ、汝はダンテを讀みたるを。

血は我頬に上りぬ。われは爭でかきる怪を犯  
すべきと答へき。ベルナルドオはいはく。汝が  
昨夜物語りし惡魔の事は、全く神曲の中なる  
惡魔ならずや。汝が空想はゆたかなれど、わが  
説くを厭かず聴くならむ。地獄に火微の海、瘴  
霧の沼あるは、汝が早くより知るところならむ。  
その中に閉ぢられたる亡者も亦少なからず。その  
底にゆきて見れば、恩に負きし惡鬼ども集りた  
り。「ルチフェエル」(魔王)も神に背きし報に  
て、胸を氷にとぢられたるが、その大なる口を  
ば開きたり。その口に墮ちたるは、ブルツス、  
カツシウス、ユダス、イスカリオットなり。中  
にもユダス、イスカリオットは、魔王が蝙蝠の  
如き翼を振ふ隙に、早く半身を喉の裡に没し  
たり。この「ルチフェエル」が姿をば、一たび見  
つるもの忘るゝことなし。われもダンテが詩に  
て、彼奴と相識になりたるが、汝はよべの囁語  
に、その魔王の狀を、詳に我に語りぬ。その時  
われは今の如く、汝はダンテを讀みたるかと問  
ひぬ。夢中の汝は、今より直にて、我に眞を  
打ち明け、ハツパス、ダアダアが事をさへ語り  
出でぬ。何故に覺めたる後には我を隔てむとす  
る。我は汝が秘事を人に告ぐるものにあらず。



實にわがために、新に發見したる亞米利加なりき。我々想は未だ一たびも斯く廣大に斯く豊饒なる大地を望みしことなかりしなり。その岩石何ぞ峨々たる。その色彩何ぞ奕々たる。我は作者と共に憂へ、作者と共に樂み、作者と共に當時の生活を聞き盡したり。地獄の關に刻めりといふ銘は、全篇を讀む間我耳に響くこと、世の末の裁判の時鳴りわたるらむ鐘の音の如くなりき。その銘に云く。

こゝすぎて うれへの市に

こゝすぎて 歎の淵に

こゝすぎて 浮ぶ時なき

群に社 人は人るらめ

あたゝかき 情はあれど

おぞろなき 心にたづね

きはみなき ちからによりて

いつくしき 法をうき世に

しめさむと この關の戸を

神や据ゑけむ

われは巖風に捲き起さるゝ沙漠の砂の如き、常に重く又暗き空氣を見き。われは亡魂の風に向ひて叫喚するとき、秋深き木葉の如く墜ちゆく亞當が族を見き。而れども言語の未だ血肉とならざりし世にありし靈魂の王たる人々のこゝ

にあるを見るに迫りて、我眼は千行の涙を流しつゝ、ホメロス、ソクラテウス、アルツス、キルギリウス、これ皆永く樂土の門に入ることはずしてこゝに留りたるものなりき。ダンテが筆は、此等の人に、地獄といふに負かざらむ限の、安さ樂しさを與へたれど、そのこゝにあるは、呵責ならぬ苦、希望なき恨にして、長く浮ぶ潮なき罪人の陷いるなる、毒泡連り、瘴烟立てる、深き泥沼に陥まれたる大牢獄の裡なること、よその罪人に殊ならず。われはこれを讀みて、平なること能はざりき。基督の一たび地獄に降りて、又主の傍に昇りしとき、彼は何故にこゝの露間の人々を随へゆかざりしか。彼は當時同じ不平にあへるものに、同じ憐れ垂れざることを得たりしか。われは讀むところの詩なるを忘れつ。沸きかへる膠の海より聞ゆる苦痛の聲は、我胸を衝きたり。われは、シモニストの群を見き。その浮き出でゝは、鬼の持てる鋭き鐵搭にかけられて、又沈めらるゝを見き。ダンテが敘事の生けるが如きために、其狀深くも我心に彫りつけられたるにや、晝は我念頭に上り、夜は我夢中に入りぬ。我鑒語の間には、屢く「パベ、サタン、アレップ、サタン、パベ」といふ詞聞えぬ。こはわが讀みたる神曲の文な

るを、同僚の書生はさりとも知らねば、我魂よことに惡魔に責められたるかと思ひ惑ひぬ。我場に出でゝも、我心は課程に在らざりき。師の聲にて、アントニオよ、又何事をか夢みたる、と問はるゝ毎に、われは日恐れ日恥ぢたり。されどこの儘に神曲を擲たむことは、わがなすこと能はざるところなりき。我が暮らす日の長く又苦きことは、ダンテが地獄にて負心の人の被るといふ銀金したる鉛の上衣の如くなりき。夜に入れば、又我禁斷の果に匍ひ寄りて、その惡魔に我々想の罪を數めらる。かの人を蜚しては彼に入り、一たびは烟となれど、又「フヨニックス」自ら焚けて後、再び灰より生るゝ怪鳥の如く生れ出で、毒を吐き人を傷るといふ蛇の刺をば、われ自ら我膚の上に受くと覺えき。わが夢中に地獄と呼び、罪人と叫ぶを聞きて、同僚の書生は驚き醒むることしばしなりき。或る朝老師の舍監を勤むるが、我臥床の前に來しに、われ眠れるまゝに眼を睜き、おのれ魔王と叫びもあへず、半ば身を起してこれに抱きつき、暫し角力ひて、又枕に就きしことあり。わがよなく惡魔に責めらるゝと云ふ噂は、やうやう遠くなりぬ。我床には呪水を澆ぎぬ。わ

ハツパス、ダアダア冷笑ひていふ。ダンテを詠ずとならば、定めて傑作をなすなるべし。それは聞きものなり。さはあれ式の日には僧官たちも皆臨席せらるゝが上に、外國の貴賓も來べければ、さる戲はふさはしからず。謝肉の祭をこそ待ち給ふべけれ。この詞にて、他人ならば思ひとどまるべきなれど、ベルナルドオはなかなか屈すべくもあらず。別の師の許を得て、かの詩を讀むことゝ定めき。われは本國を題として、新に一篇を草しはじめつ。

學校の規則には、詩賦は他人の助を藉ることを允さずと記したり。されどいつも雨雲に蔽はれたるハツパス、ダアダアが面に、些の日光を見むと願ふものは、先づ草稿を出して閱を請ひ、自在に塗抹せしめずてはかなはず。大抵原の語は、纔にその半を存するのみなり。さて詩の拙さは、すこしも始めに殊ならず。その始めに、唯もその弊、その手段のみなるべし。斯く改めたる作、他日よそ人に譽めらるゝ時は、ハツパス、ダアダアは必ずおのれが刪潤せしを告ぐ。こたび讀むべき詩も、多く一たびハツパス、ダアダアが手を経たるが、ひとりベルナルドオが詩のみは、遂にその日に觸れざりき。鬼角する程にその日となりぬ。馬車は次第に

學校の門に簇りぬ。老僧官たちは、赤き法衣の裾を牽きて式場に入り、美しき椅子に倚り給ひぬ。詩の題、その國語、その作者など列記したる刷ものは、來賓に頒たれぬ。ハツパス、ダアダア先づ開場の演説をなし、諸生徒は次を遂ひて詩を讀みたり。シリア、カルデア、新埃及、其外梵文英語の作さへありて、その耳ざはり愈々あやしうして、喝采の聲は愈々盛なりき。但々喝采の聲には、拍手などのみならず、高笑もまじるを常とす。

われは胸を跳らせて進み出で、伊太利を頌したる短篇を讀みき。喝采の聲は幾度となく起りぬ。老いたる僧官達も手を拍ち給ひぬ。ハツパス、ダアダア出来る限のやさしき顔をなし、手中の桂冠を動かして。伊太利語の詩もて、我後に技を奏すべきは、獨りベルナルドオあるのみにて、其次なる英語は固より賞を得べくもあらねば、あはれ此冠は我頭の上に落ちむとぞおもはれける。

その時ベルナルドオは壇に登りぬ。我はあやぶみながら友の言動に耳を傾け目を注ぎつ。友は些の怯れたる氣色もなく、かのダンテを詠ずる詩を誦したり。式場は忽ち水を打ちたるやうに鎮まりぬ。讀誦の力あるに、聴くもの皆感

動したるなり。われは初より隻句を遺さず誦じたり。されど今改めてこれを聴けば、ほとほとダンテ其人の作を聞くが如くおもはれぬ。誦し畢りし時、場に臨みたる人々は、悉く喝采せり。僧官達は席を離れ給ひぬ。式はこゝに終れるが如く、挂丸はベルナルドオがものと定めりぬ。次なる英語の詩をば、人々止むことを得ずして聴き、又止むことを得ずして拍手せしのみ。その畢るや、満場の話柄はベルナルドオがダンテの詩の上にかへりぬ。

我類は火の如くなりき。我胸は擴まりたり。我心は人々のベルナルドオがために焚ける香烟を吸ひて、ほとと酔へるが如くなりき。この時われは友の方を打ち見たるに、彼が容貌はいたく常にかはりて見えき。その面色上の如く、目を床に注ぎて立てるさまは、重き罪を犯したる人の如くなりき。ハツパス、ダアダアも亦いたく不興げなるおも持して、心こゝにあらねばか、その手にしたる桂を摘み砕かむとする如くなりき。僧官のうちなる一人、逡巡これを取りて、ベルナルドオが前に進み給ひぬ。我友は此時跪きたるが、もろ手に面を掩ひて、この冠を頭に受けたる。式畢りて後、われは友の側に歩み寄りしに、

汝が禁を犯したるは、汝が身に取て譽となすべき事なり。我は久しく汝が上にかゝることあらむを望みき。されど彼書をば、汝何處にてか獲つる。我も一部を藏したれば、汝若し蚤く我に求めば、我は汝に借しゝならむ。我はハッパス、ダアダアがダンテを罵りしを聞きしより、その良き書なるを推し得て、汝に先だちて買ひ來りぬ。われは長く机に倚ることを好まず。神曲の大いなる二巻には、我ほとゝ厭みしが、これぞハッパス、ダアダアが禁ずるところとおもひおもひ、勇を鼓して讀みとほしつ。後にはかのふみ我にさへ面白くなりて、今は早や三たび閲しつ。その地獄のめでたきよ。汝はハッパス、ダアダアの墮つべきを何處と思へる。火のかたなるべきか、氷のかたなるべきか。

わが秘事は許かれたり。されどベルナルドオはこれを人に語るべくもあらず。ベルナルドオとわれとの交は、この時より一隙密になりぬ。旁に人なき時は、われ等の物語は必ず神曲の事にうつりぬ。わがこれを讀みて感じたところをば、必ずベルナルドオに語り聞かせたり。この間にわが文字を知りてよりの初の詩は成りぬ。その題はダンテと其神曲となりき。わが買ひ得たる神曲の首には、ダンテが傳を

刻したりき。そはいたく省略したるものなりしかど、尙わが詩材とするに堪へたれば、われはこれに據りて、此詩人の生涯を歌ひき。ペアトリチエとの渾き戀、戦争の間の苦、逐客となりてアルピイ山を踰えし旅の憂き、異郷の鬼となりし哀き、皆我詩中のものなりぬ。わが最も力を用ひしは、ダンテが靈魂天翔りて、人間地獄を見おろす一段なりき。その敘事は省筆を以て、神曲の梗概を模寫したるものなりき。淨火は又燃え上れり。果實累々たる、樂園の木のごずきは、漲り落つる瀑布の水に浸されたり。ダンテが乗りたる、そら行く舟は、神章の白く大なる翼を帆としたり。その舟次第に臍りゆく程に、山々は捲り動されたり。太陽とそのめぐりなる神童の群とは、明鏡の如く、神の光明を映じ出せり。この時に遇ふものは、賢きも愚なるも、こゝろゝに無上の樂を覺えたり。

誦してベルナルドオに聞せしに、彼はこれを激稱せり。彼のいはく。アントニオよ。次の祭の日には、汝其詩を讀み上げよ。ハッパス、ダアダアいかなる面をかすらむ。面白し面白し。汝が讀むべき詩は、その外にはあらじ。斯く勸めらるゝに、われは手を押りて諾はざりき。ベルナルドオ語を續きていふやう。さらば汝はえ

讀まぬなるべし。我にその詩を得させよ。われダンテの不朽をもて、ハッパス、ダアダアを苦めむとす。汝はおのが美しき狼を抜きて、このおほそ鳥を飾らむを惜むか。讀るは汝が常の徳にあらずや。いかにゝと、勸めて止まざりき。我もその日のありさまいかに面白からむとおもへば、詩稿をば直にベルナルドオにわたしつ。

今も西班牙廣こうちの「アロバノンダ」といふ學校にては、毎年一月十三日に、祭の式行はる事なるが、當時はジェスキタ學校に、おなじ式ありき。諸生徒はおのゝその故郷の語、若くはその最も熟したる語にて、一篇の詩を作り、これを式場に持ち出で、讀むことなり。題をば自ら撰びて、師の認可を請ひ、さて章を成すを法とす。

題の認可の日に、ハッパス、ダアダアはベルナルドオにいふやう。君は又何の題をも撰び給はざりしならむ。君は歌ふ鳥の群にあらねば。ベルナルドオのいはく。否。ことしは例に違ひて作らむとおもへり。伊太利詩人の中に題とすべきものを求めたるが、その第一の大家を歌はむは、わが力の及ばざるところなり。さればわれは稍々小なるものをとて、ダンテを撰がぬ。



魂を動せども、樂はわが魂と共に、わが耳によりてわが魄を動せり。夕されば我窓の外に、一群の小兒来て、聖母の像を拜みて歌へり。その調は我にわが櫛かりける時を憶ひ起さしむ。その調はかの笛ふきが笛にあはせし描繪の曲に似たり、又或時は野邊迄の列、窓の下を過るを見て、これをおくる僧尼の和歌を聴き、昔母上を葬りし時を思ひ出しつ。我心はこしかたより行末に還りゆきぬ。我胸は押し狭めらるゝ如くなりぬ。昔歌ひし曲は虚空より來りて我耳を襲へり。その曲は知らず識らず我肩より洩れて歌聲となりぬ。

ハツバス、ダアダアが室は、我室を去ること近からぬに、我聲は覺えず高くなりて、そこまで聞えぬ。ハツバス、ダアダア人して言はしむるやう。こゝは劇場にもあらず、又唱歌學校にもあらず、讚美歌に非ざる歌の聞ゆるこそ心得られねとなり。われは黙して答へず。頭を窓の終に寄せつけて、目を街のかたに注ぎたれど、心はこゝに在らざりき。

忽ち街上より「フエリチツシイマ、ノツテエ、アントニオ」幸あらむ夜をこそ祈れ、アントニオよといふ事なり、北歐羅巴にては善き夜をとのみいふめれど、伊太利の夜の樂きより、かゝ

る詞さへ出来ぬるなるべし」と呼ぶ人あり。窓の前にて、美しく猛き岩胸に首を掛けさせ、手を軍帽に加へて我に禮を施し、振り返りつゝ馳せ去りしは、法皇の禁軍なる士官なりき。嗚呼、我はその顔を見識りたり。これわがベルナルドナなり。わが幸あるベルナルドナなり。

我生活は今彼に殊なること幾何ぞ。われは深くこれを思ふことを好まず。われは傍なる帽をとりて、日深にかぶり、惡魔に逐はるゝ如く學校の門を出でぬ。おほよそ「ジェスキタ」學校、「プロバガンダ」學校、その外この教國の學校生徒は、外に出づるとき、おのれより年長けたる、若くはおのれと同じ齡なる、同學のものに伴はるゝを法とす。稀に獨り行くには、必ず許可を請ふことなり。こゝは誰も知りたる掟なるを、われはこの時少しも思ひ出でざりき。老いたる番僧はわが出づるを見つれど、許可を得たるものとや思ひけむ、我を誰何めざりき。

### めぐりあひ、尼君

大路に出づれば馬車ひきもきらず。羅馬の人を載せたるあり、外國の客を載せたるあり、往くあり、還るあり。こゝは都の習なる夕暮の道流乘といふものにいでたる人々なるべし。銅版

書を掛けつらねたる技藝品銅の前には、人あまた立てり。その衣にまっはりて鏡を得むとするは、乞兒の群なり。されば車の間を馳せぬくことを厭ひては、こゝを行くべくもあらず。

我が車の隙を覗ひて走りぬけむとしたる時「ボン、ジョオルノオ、アントニオ」吉日をこそ、アントニオと呼ぶは、むかし聞き慣れたる忌はしき聲なり。見ゆれば、ベツポのお例の木履を手に穿きて、地上にすわり居たり。この人にか

く近づきたることは、この年頃絶てなかりき。西班牙の磔を避けてとほり、道にて逢ふときは面を掩ひて知らしめず、式の日などに諸生の群にありてこれに近づくとときは、友の身を盾に取りて見付けられぬ心がまへしたりき。ベツポは我裳裾を握りて離たずしていふやう。血を分けたるアントニオよ。そちがをぢなるベツポを知らぬ人のやうになあしらひそ。尊きジュウゼツ

ペ(ベツポはこの名を約めたるなり)の上を思はば我名を忘るゝことなからむ。暫く見ぬ隙に、おとなびたることよ。かく親しく物言はるゝ程に、道行く人は恰みて我面を見たり。我は放ち給へと叫びて裾を引けども、ベツポは容易く手をゆるめず。アントニオよ。共に驢に乗りし日の事を忘れしか。善き兒なるかな。今は丈

彼は明日こそと云ひもあへず、走り去りぬ。翌日になつても、彼は我を避けて、共に語らざりき。我は唯一人なる友を失へるやうに覺えて、憂きに堪へざりき。二日過ぎて、ベルナルドオは我頭を掻き、我手を把りていふやう。アントニオよ。今こそは我心を語らめ。桂冠の我頭に觸れたる時は、われは百千の刺もて刺さるゝ如くなりき。人々の我を譽むる聲は、我を嘲るが如くなりき。この譽を受くべきは、我に非ずして汝なればなり。我は汝が目のうちなる喜みの色を見き。汝知らずや。この時われは汝を憎みたり。おもふに我はこゝにありて、今迄の如く汝に交ることを得ざるべし。この故に我はこゝを去らむとす。試におもへ。明年の式あらむとき、われ又汝が羽毛を借らずば、人々の前に出づることを得ざるべし。我心争でかこれに堪へむ。我に勢あるをぢあり。我はこれに我上を頼みき。我は身を屈して願ひき。こはわが木だ嘗て爲さるることなり。わが敢てせざるところなり。我はその時又汝が事をおもひ出しつ。斯くわが心に負きて人に頼るも、その原は汝に在るらむやうにおもはれぬ。この故に我は汝に對して、忍びがたき苦を覺ゆるなり。我は一たびこゝを去りて、別に身を立つるよすがを求め、その上にて又汝が友とならむ。アントニオよ。願はくはその時を待て。吾は去らむ。この夕ベルナルドオは晩く歸りて床に入りしが、翌朝は彼が母校の噂諸生の間に高かりき。ベルナルドオは思ふよしありて、目的を變じたりとぞ聞えし。

ハツパス、ダアデアは冷笑の調子にていはく。彼男は流星の如く去りぬ。その光を放てると、その影を隠しゝとは、一瞬の間なりき。その學校生涯は爆竹の邊に耳を駭かす如くなりき。その詩も亦然なり。彼草稿は猶我手に留まれば、何等の忙しき作ぞ。熟くこれを讀むときは、畢竟は何物ぞ。斯くても尙詩といはるべき歟。全篇安離にして、絶て格調の見るべきなし。看て瓶となせば、これ瓶。蓋となせば、是れ蓋。劍となせば、これ劍。その定まりたる形なきこと、これより甚しきはあらず。字を剩すこと凡そ三たび。聞くに堪へざる平字の連用(ヒアツス)あり。神といふ字を下すことおほよそ二十五處。それにて詩をかうくしくせむとにや。性靈よ。性靈よ。誰かこれのみにて詩人とならむ。このとりとめなき空想能く何事かを做し出さむ。こゝに在りと見れば、忽焉としてかしこに在り。汝は才といふか。才果して何をかなさ

む、眞の詩人の貴むところは、心の土の鍛鍊なり。詩人はその題のために動さるゝこと突れ。その心は冷なること氷の如くならむを冀す。その心の生ずるところをば、先づ人をもて截り碎き、一片々に盡く視よ。かく細心して組み立てたるを、まことの名作とはいふなり。厭ふべきは熱なり、激興なり。誰かその熱に感じて、桂冠を我鼻兒の頭に加へし。その詩に更上の事實を矯め、聞くに堪へざる平字の連用をなしたるなど、皆當ち懲すべき科なるを。我はまことに甚しき不快を覺えき。かゝる事に逢ふごとに、我は健康をさへ害せられむとす。ベルナルドオのこわつば奴。ハツパス、ダアデアが批評は大抵此の如くなりき。學校の中、ベルナルドオが去りしを惜まざるものなかりき。されどその惜むことの最も深きは我なりき。身のめぐりは遽に寂しくなりぬ。書を讀みても物足らぬ心地して、胸の中には遣るに由なき悶を覺えき。さて如何してこれを散ずべき。唯々音楽あるのみ。我生活我願望はこれを樂の裡に求むるとき、始めて殘るところなく明なる如くなりき。こゝを思へば、詩には猶飽き足らぬところあり。ダンテが雄篇にも猶我心を充たすに足らざるところあり。詩は我

天氣好折、かしこに尋ねゆきて、我臥床の跡を見、嬬が經卷珠數と共に藏したる我畫反古を見、また爐の側にて燒栗を噛みつゝ昔話をせしとき、夫人は館を顧みてのたまふやう。學校は智育に心を用ゐると覺れど、作法の末まではゆきといかぬなるべし。この子の禮するさまこそ可笑しけれ。世の中に出でむ後は、これを忽にすべからず。されど、アントニオよ、心をだに附けなば、そはおのづから直るべきものだ。

學校に還らむとて館を出でしは、まだ宵の程なりしが、街はいと暗かりき。羅馬の市に竿燈を點くるは近き世の事にて、其の頃はまださるものなかりしなり。疾き杖みちに歩み入れば、平ならざる道を照すもの唯々聖母の像の御前に供へたる油燈のみなり。われは心のうちに晝の程の事どもを思ひめぐらしつゝ、徐にあゆみを選びぬ。固より咫尺の間もさやかに見えねば、忽ち我手に觸るゝものあるに驚きて、われはまだ何とも思ひ定めぬ時、耳慣れたる聲音にて、奇怪な人かな、日をさへ撞きつづきさなば、道はいよ／＼見えやならむといふ。われは喜のあまりに聲高く叫びて、きはベルナ

ルドオなるよ、嬉しくも逢ひけるものかなといひぬ。アントニオか、可笑しき再會もあるものと、友は我を抱きたり。さるにても何處よりか來し。忍びて訪ふところやある。そは汝に似合はしからず。されど我に見現されねれば是非なる道づれは。我。否けふはひとりなり。ベルナルドオ。ひとりとは面白し。汝も天晴なる少年なり。我と共に法皇の護衛に入らずや。

我は恩人大姉のこゝに來ませし喜を告げしに、吾友も亦喜びぬ。これよりは足の行くに任せて、暗路を辿りつゝ、別れての後の事どもを語りあひぬ。

### 猶太の翁

途すがらベルナルドオのふやう。我は今こそ浮世の様をも見ることを得つれ。そなた等が世にあるは、唯々世にありといふ名のみにて、まだ櫛櫛の中を出でざるにひとし。冷なる學校の榻に坐して、微の生えたるハッパス、ダアダアが講釋に耳傾けむは、あまりに甲斐なき事ならずや。見よ、我が馬に騎りて市を行くを。美しき少女達は燃ゆる如き服なざして、我を仰ぎ瞻るなり。わが貌は醜からず。われには

號衣よく似合ひたり。此街の暗きことよ、汝は我號衣を見ること能はざるべし。我が新に獲たる友は、善く我を導けり。彼等は汝が如き窮措人めきたる男にあらず。我等は御國を禮ひて畫を俵け、又折に觸れてはおもしろき話をなせり。されど其戲をもの語らむは、汝が耳の聴くに堪へざるどころならむ。そなたの世を渡るさまをおもへば、男に生れたる甲斐なくぞおもはるゝ。我はこの二三月が程に十年の經驗をなしたり。我はわが少年の血氣を覺えたり。そは我血を湧し、我胸を膨らしむ。我は人生の快樂を味へり。我唇はまだ燃え、我咽はまだ痒きに、我身はこれを受用すること酔ひたる人の水を飲むらむやうなり。斯く説き聞せられて、我はいつもながら氣沮みて聲も微に、さらば君が友だちといふはあまり善き際にはあらぬなるべしと答へき。ベルナルドオはこらへず。善き際にあらず、とは何をか謂ふ。我に向ひて道德をや説かむとする。吾友だちは汝にあしきまに言はるべきものにはあらず。吾友だちは羅馬にあらむ眼の貴き血統にこそあれ。われ等は法皇の禁軍なり。縦ひわづかの罪ありとも、そは法皇の免除するところなり。われも學校を出でし初には、汝が言ふ如き感なきにあ



高き馬に乗れば、最早我を顧みざるならむ。母の同胞の西班牙の磔にあるを訪はざるならむ。そちも我手に接吻せしことあり。そちも我宿の一束の藁を敷寝せしことあり。昔をわすれなせ。かくかきくどかるゝうるさゝに、我は力を極めて裾ひきはなち、車の間をぐりぬけて、横街に馳せ入りぬ。

我胸は跳れり。こは驚のためのみにはあらず、辱のためなりき。我はをぢがもろ人の前に我を辱めたりとおもひき。されど此心は久しからずして止み、これに代りて起りしは、これよりも苦しき情なりき。をぢが詞は一つとして儼ならず。われはまことにベツボが一人の甥なり。わがこれに對して思すくなかりしは、そも何故ぞ。若し餘所に見る人なくば、我は昔の如くをぢの手に接吻せしならむ。さるを今かく殘忍なる振舞せしは、わが罪深き名譽心にあらずや。われは自ら愧ぢ、又神に恥ぢて、我胸は燃ゆる如くなりき。

この時聖アゴスチノ寺の「アエ、マリア」の鐘の聲響きしかば、われは懺悔せむとて寺の内に入りぬ。高き穹窿の下は暗くして人影絶えたり。卓の上なる蠟燭は僅に燃ゆれども光なかりき。われは聖母の前に伏し沈みて、心の重荷

をおろさむとしつ。忽ち我側において、我名を呼ぶ人あり。アントニオの君よ。館も御奥もフイレんツエより歸り來ませり。かしこにて設け給ひし穢き服君をも伴ひ給ひぬ。今より共に往きて喜をのべ給はずやといふ。寺の内の暗さに見えざりしが、かく言はれてその人を見れば、我恩人の館なる門者の妻にてフェネルといふものなりき。年久しく相見ざりし人々に逢はせむといふが嬉しさに、われは共に足を早めてボルゲエゼの館にゆきぬ。

「アピアニの君はやさしく我をもてなし給ひ、フランチェスカの君は又母の如くいたはり給ひぬ。姫君にも引きあはせ給ひぬ。名をば「ラミニア」といふ。目の美しく光ある穢きなり。我に接吻し、我側に來居たるが、まだ二分時ならぬに、はや我に昵み給へり。かき抱きて間のうちをめぐり、可笑しき小歌うたひて聞せしかば、面白しと打笑ひ給ひぬ。館は微笑みつゝ。穢き尼君を世の中の少女の様にせせ。法皇の手づから授けられし塔君をば、今より胸にをさめたるをとのたまふ。げにこの姫君は、白かねもて造りたる十字架に基督の像つきたるを、鎖もて胸に懸け給へり。(仙太利の俗尼寺に入れむと定めたる女兒をば、夙より小尼公など呼

ぶことあり。)夫婦の君は婚禮の初、喜のあまりに始て生るべき子をば、み寺に參らせむと誓ひ給ひしなり。勢ある家の事とて、羅馬に名高き尼寺の首座をば、今よりこの姫君の爲めに設けおけりとぞ。さればこの君には、偕且の戲にも法の掟に背かぬやうなることのみをぞ勧め參らせける。小尼公は個人いたる箱取り出で、中なる穢き耶穌の像、またあまたの白衣きたる尼の像を示し給ふ。さて尼の人影を二列に立て、目ごとにかく歩ませて俵藁のにはに連れゆくとのたまひぬ。又尼どもは皆嬌めでたく歌ひて、穢き耶穌を升めりととのたまひぬ。こは皆保母が教へたるなり。我は畫かきて小尼公を慰めき。長き脱衣を着て、噴水のトリイトンの神のめぐりに舞ふ農夫、一人の制帽ひたるが上に一人の跨りたる俵儲け、いたく姫君の心にかなひて、始はこれに接吻し給ひしが、後には引き破りて棄て給ひぬ。兎角する程に、はや常に眠り給ふ時過ぎぬとて、うば抱きて入りぬ。

夫婦の君は我上を細に問ひて、今より後も助にならむと哭り、こゝに留らむ問は日ごとに訪へかしとのたまひぬ。カムハニアの野處に住める姫が事、語り出で給ひしかば、我は春秋の

て、聖母爭でか猶太の狗を顧み給はむ、疾く跳り超えよといひつゝいよく翁に迫る程に、群衆は次第に狭き圈を畫して、翁の爲むやうを見むものをと、息を屏めて覗み居たり。ペルナルドオはこの有様を見るより、前なる群衆を押して退けて圈の中に躍り入り、肥えたる男の側につと寄せて、その杖を奪ひ取り、左の手にこれを指し伸べ、右の手に劍を抜き振り翳し、かの男を叱して云ふやう。この杖をば、汝先づ跳り超えよ。猶與ふことかは。超えずは、汝が頭を裂くべしといふ。群衆は唯呆れてペルナルドオが面を打ち眺めたり。彼男はしばし夢見る如くなりしが、怒氣を帯びたる詞、鞘を拂ひし劍、禁軍の號衣、これ皆膽を寒からしむるに足るものなりければ、何のいらへもせず、一跳して杖を超えたり。ペルナルドオは男の跳り超ゆるを待ちて杖を擲ち、その肩口をしかと壓へ、劍の背もて片頬を打ちていふやう。善くこそしつれ。狗にはふさはしき暴動かな。今一たびせよ、さらば免さむといふ。男は是非なく又跳り超えぬ。初呆れ居たる群衆は今その可笑しさにえ堪へず、一度にどつと笑ひぬ。ペルナルドオのいはく。猶太の翁よ。邪魔をば早や拂ひたれば、いざ送りて得させむといふ。され

ど翁はいつの間にか逃げゆきけむ、近きところには見えざりき。

我はペルナルドオを引きて群衆の中を走り出でぬ。來よ我友。今こそは汝と共に酒飲まむとおもふなれ。今より後は、たとひいかなる事ありても、われ汝が友たるべし。ペルナルドオ。そなたは昔にかはらぬ物ずきなるよ。されど我が知らぬ猶太の翁のかた持ちて、かの癡人と争ひしも、おなじ物ずきにやあらむ。

我等は酒家に入りぬ。客は一間に滿ちたれども、別に我等に目を注ぐるものあらざりき。隅の方なる小卓に倚りて 共に一瓶の葡萄酒を酌み、友誼の永く渝らざらむことを誓ひて別れぬ。

### 猶太をとめ

學校の門をば、心やすき番僧の年老いたるが、仔細なく開きて入れぬ。あはれ、珍しき事の多かりし日かな。身の疲に酒の酔さへ加はりたれば、程なく熟睡して前後を知らず。

らぬを知りたるは、例の許を得つるならむとおもひて、深くも問ひ糺さで止みぬ。我が日ごろの行よく謹めるかたなればなりしなるべし。光陰は穩かに過りぬ。課業の暇あるごとに、恩人の許におとづれて、そを無上の樂となしき。小尼公は日にけに我に呢み給ひぬ。我は稱かりしとき寫しつる畫など取り出で、み館にもて往き、小尼公に贈るに、しばしはそれをもて遊び給へど、幾程もあらぬに破り棄て給ふ。我はそをさへ拾ひ取りて、藏めおきぬ。

その頃我は牛ルギリウスを讀みき。その六の卷なるエネエアスがキヌメエの巫に導かれて地獄に往く條に至りて、我はその面白さに感ずること常に超えたり。こはダンテの詩に似たるがためなり。ダンテによりて我作をおもひ、我作によりて我友をおもへば、ペルナルドオが面を見ざること久しうなりぬ。恰も好しワチアカノの畫廊開かるべき日なり。且は美しき畫、めでたき石像を觀、且はなつかしき友の消息を聞かばやとおもひて、われは又學校の門を出でぬ。

美しきラファエロが半身像を据ゑたる長き廊の中に入りぬ。仰座にはかの大匠の下畫によりて、門人等が爲上げたりといふ聖經の圖あり。壁を掩へるめづらしき飾畫、穹窿を填めた

らざりしが、われは敢て直ちにこれを言はず、敢て友等に知らしめざりき。われは彼輩のなすところに倣ひき。そは我意志の最も強き方に従ひたるのみ。我意馬を奔らしめて、その往くところに任ずるときは、我はかの友だちに立ち後るゝ愛なかりしなり。されど此間我胸中には、猶少しの寺院教育の滓残りゐたれば、我も何となく自ら安ぜざる如き思をなすことありき。我はをりく此滓のために戒められき。我は生れながらの清白なる身を漬すが如くおもひき。かゝる懸念は今や名残なく失せたり。今こそ我は一人前の男にはなりたるなれ。彼教育の滓を身に帯びたる限は、その人小兒のみ、卑怯者のみ。おのれが意志を抑へ、おのれが欲するところを制して、獨り鬱々として日を送らむは、その卑怯ものゝ身動ならずや。餘に饒舌りて途のついでをも顧みざりしこそ可笑しけれ。こゝはキヤキカの前なり。類なき酒家にて、羅馬の藝人どもの集ふところなり。我と共に來よ。切角の邂逅なれば、一瓶の葡萄酒を飲まむ。この家のさまの興あるをも見せまほしといふ。われ。そは思ひもよらぬ事なり。若し學校の人々、わが禁軍の上官と共に酒店にありしを聞かば奈何。ベルナルドオ。現に酒一杯飲まむは限なき

不幸なるべし。されど試に入りて見よ。外國の藝人等が故郷の歌をうたふさまいと可笑し。獨逸語あり。法朗西語あり。英吉利語あり。またいづくの語とも知られぬあり。これ等を聞かむも興あるべし。われ。否。君には酒一杯飲まむこと當の事なるべけれど、我は然らず。強ひて作はむことは君が本意にもあらざるべし。斯く降ふほどに、儼なる細道の方に、許多の人の笑ふ聲、喝采する聲いと賑はしく聞えたり。われはこれに便を得て、友の臂を担りてはいく。見よ、かしこに人あまた集りたるは何事にかあらむ。想ふに聖母の御龕の下にて手品使ふものあるならむ。我等も往きてこそ觀め。我等が往方を塞きたるは、極めて卑き際の老若男女なりき、この人々は聖母のみほごらの前にて長き圈をなし、老いたる猶太教徒一人を取り巻きたり。身うち肥えふとりて、肩幅いと廣き男あり。手に一條の杖を持ちたるが、これを翁が前に横へ、翁に跳り超えよと促すにぞありける。

凡そ羅馬の市には、猶太教徒みだりに住むことを許されず。その住むべき處をば厳しく圍みて、これを猶太街といふ。我國のメヌマの類なるべし。夕暮には、扉の門を閉ぢ、兵士を置きて人の出入することを許さず。こゝに住める猶太教徒は、歳に一たび仲間の年寄をカピトリウムに遣り、來む年もまた羅馬にあらむことを許し給はば、謝肉祭の時の競馬の費用をも例の如く辦へ、又定の日には加持力教徒の馬に往きて、宗旨がへの詔法をも聴くべし、と願ふことなり。

今枚の前に立てる翁は、こよひ此街のをぐらき方を、肩に走り過ぎむとしたるなり、モルラ。といふ戲むと集ひたりし男ども、道に遊び居たりし童等は、早くこれを見付けて、見よ人々、猶太の爺こそ來ぬれと叫びぬ。翁はさりげなく過ぎむとせしに、群衆はゆくにて立ちふさがりて通さず。かの肥えたる男は、杖を翁が前に横へて、これを跳り超えて行け、さらずは扉の門の閉ぢらるゝ迄えこそは通すまじけれ、我等は汝が足の健康を見むと呼びたり。童等はもろ聲に、超えよ、強伯罕の神は汝を助くるならむといと喧しく囃したり。翁は聖母の像を指さしていふやう。人々あれを見給へ。おん身等もかしこに跪きては、慈悲を願ひ給ふならずや。我はおん身等に對して何の事をもおかししことなし。我髪の色を憫み給はば、意なく家に歸らしめ給へといふ。杖持ちたる男冷笑ひ



かゝる女子を見しことなし。大理石もて刻めるアフロヂテの神か。されど亞刺伯種の少女なればにや、目と頬には血の温さぞ籠りたる。想へ汝、我が翁に引かれて、辭はずその家に入りしことの無理ならぬを。

廊の闇さはスチビオ等の墓に降りゆく道に護らず。木の欄ある梯は、行くに足の尖まで油斷せざる積古を、怠りがちな男にせさするに宜しかるべし。部屋に入りて見れば、さまで見苦しからず。されど例の少女はあらず。少女あらずば、われこゝに来て何をかせむ。技癢に堪へざる我心をも覺らず、かの翁は永々しき謝恩の演説をぞ始めける。その辭に綴り込めたる亞細亞風の譬喩の多かりしことよ。汝が如き詩人ならましかば、そを樂みて聞きませむ。我は恰も消化し難き饌に向へる心地して、肚のうちには彼女今か出づるとのみおもひ居たり。此時翁は感ずべき好き智慧を出しぬ。あはれ此智慧、好き折に出でなば、いかに我を喜ばしめしならむ。翁のいはく。貴きわたりに交らひ給ふ殿達は、定めて金多く費し給ふならむ。君も辛かに金なくてかなはぬ時、餘所にてそを借り給はば、二割三割などいひて、夥しき利息を取られ給ふべし。さる時あらば、必ず我許

に來給へ。利息は申し受けずして、いくばくにも御用だて侍らむ。そはイスラエルの一枝を護りたる君が情の報なりといひぬ。我は今さる望なきよし答へぬ。翁さらに語を續げて。さらば先づ平かに居給へ。好き葡萄酒一瓶あれば、そを獻らむといふ。我は今いかなる事を答へしか知らず。されどその詞と共に一間に入り來りしは彼少女なり。いかなる形ぞ。いかなる色ぞ。髪は漆の黒さにてしかも澤あり。こは彼翁の娘なりき。少女はチブリーの酒を汲みて我に與へぬ。我がこれを飲みて、少女が壽をなしととき、その頬にはサロモ王の餘波の血こそ上りたれ。汝はいかにかの天女が、言ふにも足らぬ我腕立を謝せしを知るか。その聲は世にたぐひなき音楽の如く我耳を打ちたり。あはれ、かれは斯世のものにはあらざりけり。されば其姿の忽ち見えなくなりて、唯と翁と我とのみ座に残りしも宜なり。

### 媒

この物語を聞きて、我は覺えず呼びぬ。そは自然の詩なり。韻語にせばいかに面白からむ。士官のいふやう。この時よりして我がいかにかり戀といふものゝ苦を嘗めたるを知るか。

我が幾たび空中に樓閣を築きて、又これを毀ちたるを知るか。我が彼猶太をとめに逢はむといかなる手段を盡しを知るか。我は用なきに翁を訪ひて金を借りぬ。我は八日の期限にて、二十「スクデイ」を借らむといひしに、翁快く許ひて榮然たる黄金を早上に竝べたり。されど少女は影だに見せざりき。我は三日過ぎて金返しに往きぬ。初翁は我を信ぜること厚しとは云ひしが、それには非辭も飾りたりしことなれば、今わが斯く速に金を返すを見て、翁が喜は眉のあたりに早れき。我は前の日の酒の旨かりしを辨へしかど、翁自ら瓶取り出し、顫ふ瘦手にて注ぎたれば、これさへあだなる望となりぬ。この日も少女け影だに見せざりき。たゞ我が梯を走りおりしとき、半ば開きたる窓の帷すこしゆらめきたるやうなりき。是れ我少女なりしならむ。さらば君よ、とわれ呼びしが、窓の中はしづまりかへりて何の應もなし。おほよそ其頃よりして、今日まで盡し我手段は悉くあだなりき。されど我は決して悔むことなし。我は少女が上を忘るゝこと能はず。友よ。我に力を借せ。昔エネアスを戀人に逢せしサッルニアとエヌスとをば、汝が上こそ思へ。いざ我をあやしき魔室に誘はずや。

飛行の童の圖、これ等は皆我が見慣れたるものなれど、我は心ともなくこれに目を注ぎて、わが待つ人や來るとたゆたひ居たり。欄に凭りて遠く望めば、カムバニアの野のかたなる山山の雄々しき姿をなしたる、固より厭かぬ眺なれど、鋪石に觸るゝ劍の音あるごとに、我は其人にはあらずやとワチカアノの庭を見おろしたり。されどベルナルドオは久しく來ざりき。

間といふ間を空くめぐり來ぬ。ラオコオンの群の前をも徒に過ぎぬ。我はほとゝ興を失ひて、「トルソオをも「アンチノウス」をも打ち棄てゝ、家路に向はむとせしとき、忽ち羽つきたる鴦を戴き、長靴の拍車を鳴して、輕らかに廊を歩みゆく人あり。追ひ近づきて見ればベルナルドオなり。友の喜は我喜に譲らざりき。語るべき事多ければ、共に來よと云ひつゝ、友は我を延きて奥の方へ行きぬ。

汝はわが別後いかなる苦を嘗めしかを知らざるべし。又その苦の今も猶止むときなきを知らぬなるべし。譬へば我は病める人の如し。それを救ふべき醫は汝のみ。汝が探らむ藥草の方こそは、我が唯一の頼なれ。斯くさゝやきつゝ、友は我を延いて大なる廳を過ぎ、そこを護れる禁軍の隊内兵の前を歩みて、當直士官の室

に入りぬ。君は病めりと云へど、面は紅に目は輝けるこそ訴しけれ。さなり。我身は頭項より足の先まで燃ゆるやうなり。我はそれにつきて汝が智慧を借らむとす。先づそこに坐せよ。別れてより後つ事を語り聞すべし。

汝はかの猶太の翁の事を記えたりや。聖母の龕の前にて、惡少年に宥められし翁の事なり。

我はかの惡少年を懲して後、翁猶太をば、家まで送りて得させむとおもひしに、早やいづち往きけむ見えずなりぬ。その後翁の事をば少しも心に留めざりしに、或日ふと猶太廊の前を過ぎぬ。廊の門を守る兵士に敬禮せられて、我は始めてこゝは猶太街の入口ぞと覺りぬ。その時門の内を見入るに、黒目がちなる猶太の少女あまた群をなして佇みたり。例のすぎごゝろ止みがたくて、我はそが儘馬を乗り入れたり。こゝに住める猶太教徒は全き宗門の組合をなして、その家々軒を連ねて高く聳え、窓といふ窓よりは、一ベレスヒット、バラ、エロヒムといふ祈の聲聞ゆ。街には宗徒簇りて、肩と肩と相摩するさま、むかし紅海を渡りけむ時も忍ばる。蒼端には古衣、雨傘その外骨董どもを、懸けも陳べもしたり。我胸の行くところは、古かなもの、古畫を懸く露肆の間にて、日も當てられず穢

れたる泥淖の裡にぞありける、家々の戸口より笑みつゝ仰き瞻る少女二人二人を見るほどに、何にても買ひ給はずや、賣り給ふ物あらば、儼々申し受けむと、聲々に叫ぶさま堪ふべくもあらず。想へ汝、かゝる地獄めぐりをこそダンテは書くべかりしなれ。

忽ち、傍なる家より一人の翁馳せ出で、我馬の前に立ち迎へ、我を引むこと涼風を肩に異ならず。貴き君よ、我命の親なる君よ。内び君と相見る今日は、そもゝいかなる吉日ぞ。このハノホ老いたれども、恩義を忘れぬほどの記憶はありとおぼされよ。かく語りつゞけて、末にはいかなる事をか言ひけむ、悉くは解せず、又解したるをも今は忘れられば申せなし。これよめる夜惡少年の杖を跳り超ゆべかりし翁なり。翁は我手の尖に接吻し、我衣の裾に接吻していふやう。かしこなるは我破屋なり。されど鴨居のいと低くて君が如き貴人を入らしむべきならぬを奈何せむ。かく言ひては拜み、拜みては言ふ隙に、近きわたりの者共は、我等二人のまはりを集ひ、あからめせず打ち守りたるそのうるささに堪へず。我は早や馬を進めむとしたり。この時ふと仰ぎ見れば、翁が家の樓上よりさし覗きたる少女あり。色好なる我すら

なりき。

一とせの月日は事なくして過ぎぬ。稀にベルナルドオに逢ふことありても、交情昔のごとくならず。我はそのやさしき假面の背後に、人に傲る貴人の色あるを見て、友の無情なるを恨むのみにて、かの猶太廊の戀のなりゆきを問ふに違あらざりき。ボルゲエゼの館をば頻におとづれて、主人の君、フアビアニ、フランチェスカの人々のやさしさに、故郷にある如き思をなしつ。されどそれさへ時としては胸を痛むる情みち／＼たれば、彼人々の一たび鬱めることあるときは、徑に我世の光を蔽はるゝ如く思ひなりぬ。フランチェスカの我性を警めつゝも、強ひて備はらむことを我に求めて、わが立居振舞、わが詞遣の疵を指すことの苛酷なる、主人の君のわが獨り物思ふことの人に踰えたるを戒めて、わが草木などの細かなる區別に心入れぬを咎め、我を自ら巻きて終には萎るゝ葉に比べたる、皆我心を苦むるものなりき。我齡は早く十六になりぬ。さるを斯ばかりの事に逢ひて、必ず涙を墮すは何故ぞや。主人の君は我が憂はしげなるさまを見るときは、又我頬を撫で、聖母の善き人を得給はむために、美し

き花の壓さるゝ如く、人も壓されではかなはぬが浮世の習ぞと慰め給ひぬ。獨りフアビアニの君のみは、何事をもをかしき方に取りなして、岳翁と夫人との教の嚴なることよと打笑ひ、さて我に向ひてのたまふやう。君は父上の如き學者とはならざるべし。はた妻のやうに伶俐な人ともならざるならむ。されど君が如き性もまた世の中になくて協はぬものぞと宣ふ。斯く裁判し畢りて、小尼公を召し給へば、我はその遊び戯れ給ふさまのめでたきを見て、身の憂きことを忘れ果てつ。人々は來む年を北伊太利にて暮さむとその心構し給へり。夏はジェノワにといまり、冬はミラノに往き給ふなるべし。我は來む年の試験にて、「アバテ」の位を受けむとす。人々は首途に先だちて、大いなる舞踏會を催し、我をも招き給ひぬ。門前には大篝火を焚かせたり。賓客の車には皆松明とりたる先供あるが、おのゝ其火を石垣に設けたる鐵の柵に挿したれば、火の子逆り落ちて赤き瀑布を見る心地す。法皇の兵は騎馬にて門の傍に控へたり。門の内なる小き園には五色の紙燈を吊り、正面なる大理石階には萬點の燭を點せり。階を升るときは奇香衣を襲ふ。こは級ごとに瓶花、盆栽の檸檬樹を据ゑたればなり。階の

際なる兵は肩銃の禮を施しつ。「リフレア」着飾りたる僕は堂に満ちたり。フランチェスカの君は眩きまで美かりき。珍らしき樂土鳥の羽、組緒多くつけたる白き「アトラス」の衣はこれに一層の美しさを添へたり。そのやさしき指に觸れたるときは我喜はいかなりし。廣間二つに樂の群を居らせて、客の無路の場としたり。舞ふ人の中にベルナルドオありき。金糸もて飾りたる緋羅紗の上衣、白き細袴、皆發育好き身形に適ひたり。その舞の敵手はこよひ集ひし少女の中に、すぐれて美しき一人なるべし。纖き手をベルナルドオが肩に打ち掛けて秋波を送れり。我が舞を知らざることの可憐かりしことよ。客に相識る人少ければ、我を顧みるものなし。ベルナルドオが舞果て、我傍に來りしとき、我憂は忽ち散じたり。紅なる帷の長く垂れたる背後にて、我等二人は「シャム・パニエ」酒の杯を傾け、別後の情を語りぬ。面白き樂の調は耳より入りて胸に達し、昔日の不興をば少しも残さず打ち消しつ。われ遠慮せで猶太少女の事を語り出でしに、友は唯々高く笑ひぬ。その胸の内なる痼は早くも癒えて跡なきに至りしものなるべし。友のいはく。われはその後聲めでたき小鳥を捕へたり。この鳥我戀の病を歌



われ。そは我身にはふさはしからぬ業なりと覺ゆ。さはれおん身は猶いかなる手段ありて、我をさへ用ゐむとするか。かゝる筋の事に、この身用立つべしとは、つや／＼思ひもかけず。士官否々。汝が一語をだに得ば、我事は半ば成りたるものだ。ヘライオスの語は美しき詞なり。その詩趣に富みたること多く類を見ずと聞く。汝を學びて、師には老いたるハノホを選べ。彼翁は、廐内にて學者の群に數へられたり。彼翁汝がおとなしきを見て、如にも逢はせむをり、汝がために娘に説かば、我無何ぞ協はざることを憂へむ。されど此手段を行はむには、決して時機を失ふべからず。駢足にせよ歩度を伸べたる駢足にせよ。燃ゆる海は我脈を循れり、そは世におそろしき戀の毒なり。異議なくば、あすを待たで猶太の翁を訪へ。われ。そは餘りに無理なる囑なり。我が爲すべきことの而止しからぬはいふも更なり、汝が志すところも卑しき限ならずや。その少女縱令美しといふとも、猶太の翁が子なりといへば。士官。それ等は汝が解し得ざる事なり。貨だに善くば、その産地を問ふことを須れず。友よ、善き子よ。我がためにヘライオスの語を學べ。我も諸共に學ばむとす。たゞその學び

さまを殊にせむのみ。想へ、我がいかに幸ある人となるべきかを。我。わが心を傾けて汝に交るをば、汝知りたるべし。汝が意志、汝が勢力のおほいなる、常に我心を左右するをも、汝知りたるべし。汝若し惡人とならば、我おそれくは善人たることを得じ。そは怪しき力我を引きて汝が囹の中に入るればなり。我は素より我心を以て汝が行を匡さむとせず。人皆大賦の性あり。そが上に我は必ずしも汝が將に行はむとする所を以て罪なりとせず。汝が性然らしむればなり。されど此事は、縱令成りたらむも、汝が上にまことの福を降すべきものにあらずとおもへり。士官。善し善し。我はたゞ汝に戯れたるのみ。我がために汝を驅りて懺悔の榻に就かしめむけ、初より我願にあらず。たゞ汝がヘライオスの語を學はむに、いかなる障あるべきか、そは我に解せられず。況んやそを猶太の翁に學ぶことをや。されどこの事に就きては、我等また詞を費さざるべし。今日は善くこそ我を訪ねつれ。物欲しからずや。酒飲まずや。友なる士官がかく語頭を轉じたる時、我はその特なる目なざしを見き。こはベルナルドオが學校にありしとき屢々ハツパス、ダアダに

對しなしたる目なざしなりき。友の舉動、その言語、一つとして不興のしるしならぬはなし。我も快からねば程なく暇をして還りぬ。別るときは友の恭しき常に倣して、その冷なる手は我が温なる手を握りぬ。我はわが辭退の理に慊へる、友の腹立ちしことの我儘に過ぎざるを信じたりき。されど或時は無聊に堪へずしてベルナルドオなつかしく、我詞の猶碌ならざるところありしを悔みぬ。一日散歩のついで、吾友の上をおもひつゝ、かの猶太師に入りぬ。若し期せずして其人に逢はば、我友の怒を露す便にもならむとおもひき。されど我は彼翁をだに見ざりき。門よりも窓よりも、知らぬ人面を出せり。街の兩側なる敷石の上には、例の古衣、古かねなど陳べたるその間には見苦き子供遊べり。物質はずや、物賣らずやと叫ぶ聲は、我を導にせむとする如し。少女あり。向ひの家なる友と、窓より窓へ種投けつゝ、戯れ居たり。そが一人は頗美しと覺えき。吾友の戀人はもしこれにはあらずや。我は剛らど帽を脱したり。嗚呼、おろかなる振舞せしことよ。我は人の思はむ程も影遠く、手もて額を拭ひつ。こは帽を脱したるは、少女のためならで、暑に堪へねばぞと、見る人におもはしめむとて

業を始めつ。家々の窓よりは彩粧を垂れたり。佛蘭西時刻の三點に我は「カピトリウム」に出て祭の始を待ち居たり。(伊太利時刻は日没を起點とす。かの「アエ、マリア」の鐘鳴るは一時なり。これより進みて二十四時を數ふ。毎週一度日景を瞻て、鐘を通過すること四分一時。所謂佛蘭西時刻は羅馬の人常の歐羅巴時刻を指してしかいふなり。)出窓には貴き外國人多く並みたり。議官は紫衣を纏ひて天鵝絨の椅子に坐せり。法皇の禁軍なる瑞西兵整列したる左翼の方には、天鵝絨の帽を戴ける可愛らしき令入ども群居たり。少焉あきて猶太宗徒の宿老の一行進み來て、頭を露して議官の前に跪きぬ。その真中なるを見れば、美しき娘持てりといふ彼ハノホにぞありける。式の辭をばハノホ陳べたり。我宗徒のこの神聖なる羅馬の市の一廓に栖まむことをば、今一とせ許させ給へ。歳にたたびは加特力の御寺に詣で、尊き説法を承り候はむ。又昔の例に沿ひて、羅馬人の見る前にて、コルソオを弁らむことをば、今年も免ぜられむことを願ふなり。若しこの願かなはば、競馬の費、これに勝たるものに與ふる賞、天鵝絨の幟の代、皆法の如く辨へ候はむといふ。議官は頷きぬ。(古例に依れば、この

時議官足もておも立ちたる猶太の宿老の肩を踏むことありき。今は廢れたり。)事果つれば、議官の列樂隊と共に階を下り、令人等を隨へて、美しき車に乗り遷れり。是を祭の始とす。「カピトリウム」の巨鐘は響き渡りて、全都の民を呼び出せり。我は急ぎ歸りて、かの狀師の服に着換へ、再び街に出でしに、假裝の群は早く我を逐へて日禮す。この群は祭の間のみ王侯に同じき權利を得たる工人と見えたり。その假裝には價極めて卑きものを揀びたれど、その特色は奪ふべからず。常の衣の上に粗梅の洋衫を被りたるが、その衫の上に縫附けたる襟標の紋は大いたる鈕に擬へたるなり。肩と鞆とは青茶を結びつけた。頭に戴けるは「フィノツキイ」(俗曲中にて無遠慮なる公民を代表したる役なり)の假髪にて、日に懸けたるは袖子の皮を刮りぬきて作りし眼鏡なり。我は彼等に對ひて立ち、手に持ちたる刑法の巻を開きてさし示し、見よ、分を踰えたる衣服の奢は國法の許さざる處なるぞ、我が告發せむ折に腕を噛む懺あらむと啗したり。工人は拍手せり。我は進みてコルソオに出でたるに、こゝけ早や變じて假裝舞の廣間となりたり。四方の窓より垂れたる彩粧は、唯とおほいなる欄の如く見ゆ。

家々の簷端には、無數の椅子を並べで、善き場所はこゝぞと叫ぶ際物師あり。街を行く車は皆正しき往還の二列をなしたるが、これに乗れる人多くは假裝したり。中にも月桂の枝もて車輪を貫りたるあり。そのさま四阿屋へ行くが如し。家と車との隙間をば樂しげなる人填めたり。窓には見物の人々充ちたり。そが間には軍服に假裝したる羅馬美人ありて、街上なる知人に「コンフェツチイ」の丸を擲てり。我これに向ひて、「コンフェツチイ」もて人の面を撃つは、國法の問ふところにあられど、美しき日より火箭を放ちて人の胸を射るは、容易ならぬ事なれば許し難しと警告せしに、喝采の聲と共に、花の雨は我頭上に降り灑ぎぬ。公民の妻と覺しき婦人の際立ちて飾り街へるあり。權夫(夫に代りて婦人に仕ふる者、「チチスベオ」と覺しき男これに屈したり。この時我はぬけ道の前に立ちたるが、道化役に扮扮したる一群戯に相闘へるがために、しばし往還の便を失ひて、かの婦人に向きあひむたり。我は適ちこれに對して論じてはいく。君よ。かくても善に負かざることを得るか。かくても羅馬の俗、加特力の教に背かざることを得るか。嗚呼、タルクキニウス、コルラチニウスが妻なるルクレチア(辱

ひ治しき。これある間は、よその鳥はその飛ぶに任せむのみ。その猶太廟より飛び去りしは事實なり。人の傳ふるが信ならば、今は羅馬にさへ居らぬやうなり。友と我とは又、杵を擧げた泡立てる酒、賑はしき樂は我等が血を湧しつ。ベルナルドオは又舞踏の群に投ぜり。我は獨り残りたれど、心の中には前に似ぬ樂しさを覺えき。街のかたを見おろせば、貧人の兒ども簇りて、松明より散る火の子を跳め、手を打ちて歡び呼べり。われも昔はかゝる兒どもの夥伴なりしに、今堂上において羅馬の貴族に交るやうになりたるはいかなる神のみ恵ぞ。われは帷の蔭に、跪きて神に謝したり。

### 謝肉祭

その夜は晩近くなりて歸りぬ。二日たちて人は羅馬を立ち給ひぬ。ハツバス、ダアダアは日ごとに我を顧みて、ことしは「アパテ」の位受くべき歳ぞと、いましめ顔にいふ。されば此頃は文よむ窓を離れずして、ベルナルドオをも外の友をも尋ねることなかりき。週を累ね月を積みて、試験畢る日とはなりぬ。

黒き衣、短き絹の外套。是れ久しく夢みし「アパテ」の服ならずや。目に觸るゝもの一つと

して我を祝せざるなし。街を走る吹聴人はいふも更なり、今吹き出づる「アホモオネ」の花、高く聳ゆる松の末より空飛ぶ雲にいたるまで、皆我を祝する如し。恰も如しフランチェスカの君は、臨時の費もあるべく又日ごろの勞をも忘れしめむとて、百「スクデイ」の爲換を送り給ひぬ。我はあまりの嬉しきに、西班牙磔を駆け上りて、ペツボのちぎに光ある「スクウド」一つ抛げ與へ、そのアントニオの主公と呼ぶ聲を後に聞きて馳せ去りぬ。

頃は二月の初なりき。杏花は盛に開きたり。柑子の木目を逐ひて黄ばめり。謝肉祭は既に戸外に來りぬ。馬に跨り天鵝絨の帷を建て、喇叭を吹きて、祭の前觸をする男も、ことしは我がためにかく晴々しくいでたちしかと疑はる。ことしまでは我この祭のまことの樂しさを知らざりき。程かりし程は、母上我に怪我させせじとて、とある街の角に佇みて祭の盛を見せ給ひしのみ。學校に入りてよりは、パテツツオオ、デル、ドリア」の魔作り平屋根より笑ひ戯るゝ群を見ることを許されしのみ。すべて街のこなたよりかなたへ行くことだに自由ならず。知や「カピトリウム」に登り「トラスステエル」(河東の地なり、テエエル河の東岸に當れる羅馬の

一部を謂ふ)に渡らむこと思ひも掛けざりき。かゝれば我がことしの祭に身を委れて、兒どもの様なる物狂ほしき振舞せしも、無理ならぬ事ならむ。唯々怪しきは此祭我生涯の境遇を一變するに至りしことなり。されどこれも我がむかし蒔きて、久しく忘れ居たりし種の、今縁なる葛草となりて、わが命の木に纏へるなり。

祭は全く我心を奪ひき。朝にはボ、ロの廣こうちに出で、競馬の準備を觀、夕にはコロソオの大道をゆきかへりて、店々の窓に曝せる假粧の衣類を閲しつ。我は可笑しき振舞せむに宜しからむとおもへば、狀師の服を借りて歸りぬ。これを衣て云ふべきこと爲すべきことの心にかゝりて、其夜は殆ど眠らざりき。

明日の祭は特に尊きものゝ如く思はれぬ。我喜は兒童の喜に返らざりき。横街といふ横街にはコンフェツチーの丸賣る浮鋪廣を列べて、その卓の上には色美しき貨物を盛り上げた。リ。「コンフェツチー」の丸は石灰を豌豆の大きさに煉りたるなり。白きと赤きと雜りたり。中には穀物の粒を石膏泥中に轉して作れるあり。謝肉祭の間は人々互に此丸を擲ちて戯るゝを習とす。コロソオの街を灑掃する役大は夙に



ふ餘所の歌女なり。その發音、その表情、その整  
調、みな我等の夢にだに見ざるところと聞く。

容貌も亦美し、絶だ美しと傳へらる。汝は筆を  
載せて従ひ來よ。若し世人の言半ば信ならむに  
は、汝が「ソネット」の工を盡す、これに贈る  
に堪へざらむとす。我はけふの謝肉祭に賣り盡  
して、今は珍しきものになりたる華の花束を貯  
へおきつ。かの歌女もし我心に協はゞ、我はこ  
れを贅にせむといふ。我は共に往かむことを諾  
ひぬ。すべて謝肉祭に連りたる樂をば、つゆ  
遺さずして嘗みむと誓ひたればなり。

今は我がために永く護るべからざる夕となり  
ぬ。我羅馬日記を披けば、けふの二月三日の四  
字に重囑を施したるを見る。想ふにベルナル  
ドオ如し日記を作らば、また我筆に倣はざるこ  
とを得ざるならむ。そも「アルベルト」座  
といへるは、羅馬の都に數多き樂劇部の中に  
最大なるものなり。飛行の詩神を畫ける仰座、  
オリユムボスの圖を寫したる幕、黄金を鏤めた  
る親欄など、當時は猶新なりき。欄ごとに壁に  
鈎して燭を立てたれば、場内には光の波を湧  
かしたり。女客の來て座を占むるあれば、ベル  
ナルドオ必ずその月旦を怠ることなし。

開場の樂(ウエルチュウル)は始りぬ。こは

音を以て言に代へたる全面の銀と看做さるべき  
ものなり。狂颯波を纏ちてエネエスはリユ  
ビヤの激に漂へり。風波に駭きし叫號の聲は神  
に謝する祈禱の歌となり、この歌又颯じて歎呼  
となる。忽ち柔なる笛の音起れり。是れヂド  
が戀の始なるべし。戀といふものは我が未だ知  
らざるところなれど、この笛の音は、我に琴瑟  
としてその面影を認めしめたり。忽ち角聲獵を  
報ず。暴風又起れり。樂聲は我を引いて怪しき  
巖室の中に入りぬ。是れ溫柔郷なり。一呼一  
吸戀にあらざることなし。忽ち裂帛の聲あり。  
幕は開きたり。

エネエスは去らむとす。去りてアスカニウ  
ス(エネエスの子)がために、ヘスベリヤ(晩國  
の義伊太利)を略せむとす。去りてヂドを棄て  
むとす。機むべしヂドはおのれが榮譽と平和と  
を捧げて、これを無情の人におくり、その歩猶  
未だ醒めざるなり。エネエスが歌にいはいく。  
その夢は早晩醒むべし。トロアスの兵、黒き蟻  
の群の如く我を載せて岸に達せば、その夢いか  
でか醒めざることを得む。

ヂドは舞臺に上りぬ。その始めて現はるゝ  
や、萬客屏息してこれを仰ぎ瞻たり。その態度、  
その嚴なること王者の如くにして、しかも輕  
らかに優しき態度には、人も我も慍に心を奪は  
れぬ。初めわれこのヂドといふ役を我心に畫き  
しときは、その姿いたく今見るところに殊なり  
しかど、この歌女の意外なる態度はすこしも我  
興を損ふことなかりき。その優しく愛らしく、  
些の塵滓を留めざる美しさは、名匠テファエロ  
が空想中の女子の如し。烏木の光ある髪は、美  
しく凸なる額を圍めり。深黒なる眸には、名  
狀すべからざる表情の力あり。忽ち喝采の聲は  
柱を揺さむとせり。こは未だその藝を讀むるな  
らざして、先づ其色を稱ふるなり。所以者何と  
いふに、彼は今纔に場の上りて、未だ隻音を  
も發せざればなり。彼は面に紅を潮して輕く  
會釋し、その天然の美音もて、百鍊千磨したる  
抑揚をその宣鼓調の上にあははしつ。  
友は遽に我臂を担りて、人にも聞ゆべき程な  
る聲してはいく。アントニオよ。あれこそ例の  
少女なれ、飛び去りたる例の鳥なれ。その姿を  
ば忘るべくもあらず。その聲さへ昔のまゝな  
り、われ心狂ひたるにあらずば、わがこの日利  
は違ふことなし。われ。例のとは誰が事ぞ。友。  
猶太廊の少女なり。されど彼の少女いかにして  
この歌女とはなりし。不再議なり。有りとしも  
思はれぬ事なり。友は再び眼を舞臺に注ぎて

を受けて自殺す、事は羅馬王代の末、紀元前五  
百九十年に在り）は今安にか在る。君は今の女子  
の爲すところに倣ひて、謝肉祭の間、夫を河東  
に遣りて、僧と俱に精進せしめ給ふならむ。君  
が良人は寺院の垣の内に籠りて日夜苦行し、復  
た満城の士女狂せるが如きを顧みず、其心に  
は、あはれ我最愛の妻も家に籠りて齋戒するよ  
とおもふならむ。さるを君は何の心ぞ。この時  
に乗じて自在に翼を振ひ、權夫に引かれてコ  
ルソオをそぐるありきし給ふ。君よ。我は刑法  
第十六章第二十七條に依りて、君が罪を糺さむ  
とす。語未だ畢らざるに、婦人は手中の扇をあ  
げてしたゝかに我面を撃ちたり。その撃ちかた  
の強さより推すに、我は偶々女の身上を占ひて  
善く中てたるものならむ。友なる男は、アント  
ニオ、物にや狂へると私語きて、急に婦人を扯  
きつゝ、巡查、希臘人、牧婦などにいでたちたる  
人の間を潛りて通れ去りぬ。その聲を聞くに、  
ベルナルドオなりき。さるにても彼婦人は誰に  
かあらむ。椅子を借さむとて、観棚々々（ルオ  
ジ、ルオジ、パトロニ）と呼ぶ聲いと喧し。  
われは思慮する邊うらざりき。されど謝肉祭の  
間に思慮せむといふも、固より世に備なき好事  
にやあらむ。忽ち肩失と靴の上にと鈴つけたる

戯奴アレツキノの群ありて、我一人を中に取  
巻きて跳ね廻りたり。忽ち又いと高き踊した  
る狀、師あり。我傷を過ぐとて、我を顧みて  
冷笑ひていはく。あはれなる同業者なるかな。  
君が立脚點の低きことよ。おほよそ地上にへ  
ばり着きたるものは、正を邪に勝たしむること  
能はず。我は高く擧りたり。我に代言せしむる  
ものは、天の祐を得たらむ如し。かく誇りに  
告げて大踏步に去りぬ。ピアツツア、コロンナ  
に伶人の群あり。非常を戒めむと、徐にねり  
ゆく兵隊の間をさへ、學士、牧婦などにいでた  
ちたるもの踊りくるひて通れり。我は再び演説  
を始めしに、書記の服着たる男一僕を隨へた  
るが我前に来て、僕に鐸を鳴さする其響耳  
を裂くばかりなれば、われ我詞を解し得ずして  
止みぬ。この時號砲鳴りぬ。こは車の大道を去  
るべき知らせなり。我は道の傍に築きたる境  
に上りぬ。脚下には人の頭波立てり。今やコ  
ルソオの競馬始らむとするなれば、兵士は人  
を攘はむことに力を竭せり。街の一端に近きポ  
ロの廣こうちに案を引きて、馬をば其後に並  
べたり。馬は早や焦躁てり。背には燃ゆる濕綿  
を貼り、耳後には小き烟火具を装ひ、腋には拍  
車ある鐵板を懸けたり。口際に引き傷ひたる狀

丁はやちやくにして馬の逸るを制したり。號砲  
は再び鳴りぬ。こは埒にしたる索を落す合圖な  
り。馬は旋風の如く奔りて、我前を過ぎぬ。幣  
の如く束れたる薄金はさら／＼と鳴り、彩りた  
る紐は、衆と共に飄り、蹄の觸るゝ處は火花  
を散せり。かゝる時彼鐵板は腋を打ちて、拍車  
に響ると聞く。群衆は高く叫びて馬の後に從ひ  
走れり。そのさま艦打つ波に似たり。けふの祭  
はこれにて終りぬ。

## 歌 女

衣服ぎ更へむとて家にかへれば、ベルナルド  
オ訪ひ来て我を待てり。われ。いかなれば茲に  
は來たる。さきの婦人をばいづくにかおきし。  
友は指を壓て、我を威すまねしていはく。措  
け。我等は漫闌することを好まず。さきに邂逅  
ひたるときの狂態は何事ぞ。言ふこともあるべ  
きにかゝることをばなど言ひたる。然れどもこ  
のたびは釋すべし。今宵は我と俱に夢見に往  
け。「チド」(カルタゴ女王の名にて)又樂劇の名  
となれり)を興行すといふ。音樂よの常なら  
ず。女優の中には世に稀なる美人多し。加。麻  
呂主人公に扮するは、嘗てナポリに在りしとき、  
閨府の民をして物に狂へる如くならしめきとい

男優と並び出てたり。幕三たび下りしに、呼ぶ聲いよ／＼劇しかりき。こたびはすべての俳優を伴ひ出でぬ。幕四たび下りしに、呼ぶ聲猶劇しかりき。こたびはアモンチャタ又ひとり出で、短き謝辭を陳べたり。此時我詩は花束と共に歌女が足の下に飛べり。呼ぶ聲は未だ過まねど、幕は復た開かず。この時アモンチャタは幕の一邊より出で、舞臺の前のはづれる燭に沿ひて歩み、観客に謝したり。その面には喜の色溢るゝごとくなりき。想ふにけふは歌女が生涯にて最も嬉しき日なりしならむ。されどこは特り歌女が上にはあらず。我も亦わが生涯の最も嬉しき日を求めば、そは或はけふならむと覺えき、わが目の中にも、わが心の底にも、たゞアモンチャタあるのみなりき。観客は劇場を出でたり。されど皆未だ背を散ぜず。こは樂屋の口に廻りゆきて、歌女が車に上るを見むとするなるべし。我も衆人の間に介まりて、おなじ方に歩みぬれど、後には傍へなる石垣に押し付けられて動くこと能はず。歌女は樂屋口に出でぬ。客は皆帽を脱ぎてその名を唱へたり。われもこれに聲を合せつゝ、言ふべからざる感の我胸に滿つるを覺えき。ベルナルドオはもろ人を押し分けて進み、早くも車に近寄り

て、歌女がためにその扉を開きぬ。少年の群は轆にすがりて馬を脱したり。こは自ら車を轆かむとなりき。アモンチャタは聲を願せてこれを制せむとしつれど、その聲は萬人のその名を呼べるに打ち消されぬ。ベルナルドオは歌女を車に載せ、おのれは踏板上に上りて説き慰めたり。我も轆を握りてかの少年の群と共に喜びぬ。惜むらくは時早く過ぎて、たゞ美しかりし夢の痕を我心の中に留めしのみ。歸路に珈琲店に立寄りしに、幸にベルナルドオに逢ひぬ。羨むべき友なるかな。彼はアモンチャタに近づき、アモンチャタとの語せり。友のいはく。アントニオよ。奈何なりしぞ。汝が心は動かさや。若し骨焦がれ燃ええざば、汝は男子にあらじ。さきの年我が彼に近づかむとせしとき、汝は實に我を妬げたり。汝は何故にヘアライオス語を學ぶことを辭みしか。若し辭まずば、かゝる女と並び坐することを得しならむ。汝は猶アモンチャタの我猶太少女なることを疑ふにや。我にはかく近似たる女の世にあらむとは信ぜられず。アモンチャタはたしかに猶太をとめなり。我にテプリイの酒を飲せし少女なり。少女は集を立ちし「フヨニツクス」鳥の如く、かの穢はしき猶太廟を出でつる

なり。われ。そは信じ難き事なり。我も昔一たびかの女を見きと覺ゆ。若し其人ならば、猶太教徒にあらざして加特力教徒なること疑なし。汝も熟々彼姿を見しならむ。不幸なる猶太教徒の皆負へるカイン(亞當の子)が印記は、一つとしてその面に呈れたるを見ざりき。又その詞さへその聲さへ、猶太の民にあるまじきものなり。ベルナルドオよ。我心はアモンチャタが妙音世界に遊びて、ほと／＼歸ることを忘れたり。汝は彼少女に近づきたり。汝は彼少女との語せり。彼少女は何をか云ひし。彼少女も我等と同じくこよひの幸を覺えたりしか。友。アントニオよ。汝が感動せるさまこそ珍らしけれ。「イエスキタ」の學校にて結びし氷今融くるなるべし。アモンチャタが何を云ひしと問ふか。彼少女は粗暴なる少年に車を挽かれて、且は懼れ且は喜びたりき。彼少女は面纱を緊しく引締めて、身をば車の片隅に寄せ居たり。我は途すがらかゝる美しき少女に言ふべきことの限を言ひしかど、彼は車を下るとき我がさし伸べたる手にだに觸れざりき。われ。汝が大膽なることよ。汝は歌女と相識れるにあらざして、よくもさまで馴々しくはもてなししよ。こは我が決して敢てせざる所ぞ。友。我もさこそ思へ。



詞なし。デドは戀の歡を歌へり。清き情は聲となりて肺腑より進り出づ。是時に當りて、我心は怪しく動きぬ。久しく心の奥に埋もれたるし記念は、此聲に喚び醒されむとする如し。この記念は我が全く忘れたるものなりき。この記念は近頃夢にだに入らざるものなりき。ざるを忽ちにして我はその目前に現るゝを覺えき。今は我も亦ルナルドオと俱に呼ばむとす。あれこそ例の少女なれ。あれこそ例の少女なれ。われ稱かりし時、「サンタ、マリア、アラチエリ」の寺にて聖誕日の説教をなしき。その時聲めでたき女兒ありて、その人に讃めらるゝこと我右に出でき。今聞くとこは其聲なり。今見るとこは其人にはあらずや。

エネアスは無情なる語を出せり。我は去りなむ。我は嘗ておん身を娶りしことなし。誰かおん身が婚儀の松明を見しものぞ。この詞を聞きたるとき心の心をば、デドいかに巧にその眉目の間に畫き出し。事の意外に出でたる驚き。ことばに現すべからざる痛、負心の人に對する怨、皆明かに觀る人の心に印せられき。デドは今主なる單吟に入りぬ。聲へば千尋の海底に波起りて、倒に雲霄を干さむとする如し。我筆いかで此聲を畫くに足らむ。あは

れ此聲人し胸より出づとは思はれず。姑く形あるものに喩へて言はむか。大いなる鶴の、咬潔雪の如くなるが、上りては雲を裂いて瀟氣ただよふわたりに入り、下りては波を破り一蛟龍の居るところに没し、その性命は聲に化して身を出で去らむとす。

喝采の聲は屋を撼せり。幕下りて後も、アマンチャタ、アマンチャタと呼ぶ聲止まねば、歌女は面を幕の外にあらはして、謝することあまたなびなりき。

第二齣の妙は初齣を踰ること一等なりき。

これデドとエネアスとの對歌なり。デドは無情なる夫のせめては啓行の目を緩うせむことを願へり。君が爲めにはわれリュビアの種族を辱めき。君がためにはわれ亞弗利加の侯伯に負きぬ。君がために恥を忘れ、君がために操を破りたるわれは、トロアスに向けて一隻の舟をだに出さざりき。我はアンヒイゼス、(エネアスの父)が靈の地下に安からむことを勉めき。これを聞きて我涙は千行に下りぬ。その時萬客聲を吞みてその感の我に同じきを證したり。

エネアスは行きぬ。デドは色を喪ひて慄立すること少らくなりき。その狀ニオベ(子を殺されて石に化せし女神)の如し。俄にして

渾身の血は湧き立てり。これ最早デドならず。戀人なるデド、棄婦なるデドならず。彼は生ながら經靈となれり。その美しき面は舟を吐けり。その表情の力の大きいなる、今まで共に嘆きし萬客をして、忽又共に怒らしむ。グイレンヅエの博物館に、レオナルドオ、ダ、キンチが置きたるメヅウザ(おそろしき女神)の頭あり。これを觀るもの怖れども去ること能はず。大海の底に膨泡あり。能くアフロヂテを作りぬ。その目の狀は言ふことを須たず、その口の形さへ、能く人を殺さむとす。

エネアスが舟は波を蹴て遠ざかりゆけり。デドは夫の遺れたる武器を取りて立てり。その歌は沈みてその聲は重く、忽ちにして又激越悲壯なり。同胞なるアンチアが彼を焚かむとて積み累ねたる薪は今燃え上れり。幕は下りぬ。喝采の聲は暴風の如くなりき。歌女はその色と聲とを以て満場の客を狂せしめたるなり。親棚よりも土間よりも、アマンチャタ、アマンチャタと呼ぶ聲頻なり。幕上りて歌女出でたり。その産を含める姿は故の如くなりき。男は其名を呼び、女は粉靨を振りたり。花束の雨はその頭の上に降れり。幕再び下りしに、呼ぶ聲はいよいよ劇しかりき。こたびはエネアスに扮せし

の門口より馳せ出る人こそあれ。こはベルナルドなり。満面に打笑みて。そこに立ち盡すは何事ぞ。疾く来よ。アモンチャタに引きあはせ得さすべし。彼君は汝を待ち受たり。こは我友誼なれば。なに彼君が。と我は言ひさして、血は耳廓に昇りぬ。戯すな。我をいづくにか件ひゆかむとする。友。汝が詩を贈りし人の許へ、汝も我も世の人も皆魂を奪れたる彼人の許へ、アモンチャタの許へ。かく云ひつゝ、友は我手を取りて門の内へ引き入れたり。我。先づわれに語れ。いかにして彼君の家に往くこととはなしたる。いかにして我を紹介するやにはなりし。友。そは後にゆるやかにこそ物語らめ。先づその洗みたる顔色をなほさずや。我。されどこのなよびたる衣をいかにせむ。かの君にあまりに無作法なりと思はれむ。かく言ひつゝ、我は衣など引き繕ひてためらひ居たり。友。否々その衣のまゝにて結構なり。兎角いひ争ふほどに我等ははや戸の前に来ぬ。戸は開けり。我はアモンチャタが前に立てり。

衣は黒の絹なり。半紅半碧の紗は肩より胸に垂れたり。黒髪を束ねたる紐の飾は珍らしき古代の寶石なるべし。傍に、窓の方に寄りて坐りたるは、暗褐色の粗服したる嫗なり。彼君の目の色、顔の形は猶太少女といはむも理なきにあらずと思はる。我友がむかし猶太廓にて見きといふ少女の事は、忽ち胸に浮びぬ。されど我心に問へば、この人その少女ならむとは思はず。室の内には、尙一人の男居あはせたるが、わが入り来るを見て立ちあがり。アモンチャタも亦起ちて笑みつゝ我を迎へたり。友はわざとらしき聲音にて。これこそ我友なる大詩人に候へ。名をばアントニオといひ、ボルゲエゼの族の寵兒なり。主人の姫は我に向ひて。許し給へ。おん目にかゝらむことは、寔に喜ばしき限なれど、かく強ひて迎へまつらむこと本意なく、二たび三たび止めしに、ベルナルドオの君聽かれねば是非なし。さきにはめでたき歌を賜はりぬ。その作者は君なること、おん友達より承りて、いかでおん目にかゝらむと願ひ居りしに、窓より君を見付けて、わが詞を聞かで呼び入れ給ひぬ。禮なしと思ひ給ひけむ。されどおん友達の上は、我より君こそよく知りておはすため。ベルナルドオは戯もて姫がこの詞に答へ、我は僅にはじめて相見る喜を述べたり。我頬は燃ゆる如くなりき。姫のさし伸べたる手を握りて、我は熱き唇に當てたり。姫は室にありし男を我に引き合せつ。すなはちこ

の群の樂長なりき。又嫗は姫のやしなひ親なりといふ。その友と我とを見る目なごしは廉ある如く覺えらるれど、姫が待遇のよきに、我等が興は損はるゝに至らざりき。

樂長は我詩を讀めて、われと握手し、かゝる伎倆ある人のいかなれば樂劇を作らざる、早くおもひ立ちて、その初の一曲をば、おのれに節附せさせよと勧めたり。姫その詞を遮りて、彼が言を聞き給ふな。君にいかなる憂き目を見せむとする。樂人は作者の苦心をおもはず、聽衆はまた樂人よりも冷淡なるものなり。こよひの出物なる樂劇の本讀といふ曲はかゝる作者の迷惑を書きたるものなるが、まことは猶一層の苦界なるべし。樂長の答へむとするに口を開かせず。姫は我前に立ちて語を綴ぎたり。君こゝろみに一曲を作りて、全幅の精神をめでたき詞に注ぎ、局面の體裁人物の性質、いづれも心を籠めてその趣を盡し、扱これを樂人の手に授け給へ。樂人はこゝにかゝる聲を挿まむとす。君が字句はそのために削らるべし。かしこには笛と鼓とを交へむとす。君はこれにつれて舞はしめられむ。さておもなる女優は來りて、引込の前に歌ふべき單吟の華かなるを一つ作り添へ給はでは、この曲を歌はじといふべし。全

汝は世の中を知らず、又女の上を知らねばなり。今日（けふ）はかの女（おんな）いまだ我（われ）に答へざりしかど、我（われ）には猶（なほ）多少（いくばく）の利益（えき）あり。そは少女（せうにょ）が我（われ）面（おもて）を認（し）めたることなり。我（われ）友（とも）はこれより我（われ）にさきの詩（うた）を誦（よ）せしめて聞（き）き、頗（すこ）妙（せう）なり。羅馬（ろま）日記（にっぴ）に刻（き）するに足（た）ると稱（よ）へき。我等（われら）二人（ふたり）は杯（さかずき）を舉（あ）げてアモンチャタが詩（うた）をなしたり。我等（われら）のめぐりなる客（きやく）も皆（みな）歌（うた）女（にょ）の上（うへ）を誦（よ）りて口々（くく）に之（これ）を誦（よ）め居（ゐ）たり。

我（わ）がベルナルドオに別（わか）れて家（いへ）に歸（かへ）りしは、夜（よ）ふけて後（のち）なりき。床（とこ）に上（のぼ）りしかど、いも察（さ）れず。われはこよひ見（み）し阿（あ）百（ひゃく）拉（ら）の全（ぜん）曲（きょく）を繰（か）り返（かへ）して心（こゝろ）頭（かぶ）に書（か）き出（だ）せり。ヂドが初（はじめて）め場（ば）に上（のぼ）りし時（とき）、單（ひと）吟（ぎん）に入（い）りし時（とき）、對（たい）歌（か）せし時（とき）より、曲（きょく）終（は）りし時（とき）まで、一（ひと）々（つ）肝（かん）に銘（めい）じて、其（その）間（かん）の一（いち）節（せつ）だに忘（わす）れざりき。我（わ）は手（て）を被（ひ）中（ちゆう）より伸（の）べて拍（は）ち鳴（な）らし、聲（こゑ）を放（はな）ちてアモンチャタと呼（よ）ぶ。次（つぎ）に思（おも）ひ出（だ）したるは我（わ）が心（こゝろ）血（ち）を漉（そ）ぎたる詩（うた）なり。起（お）きなほりてこれ（これ）を寫（うつ）し、寫（うつ）し畢（は）りてこれ（これ）を讀（よ）み、讀（よ）みては自（みづか）ら其（その）妙（せう）を稱（よ）へき。當（たう）時（とき）はわかれ此（この）詩（うた）のやゝ情（じやう）熱（ねつ）に過（へ）ぐるを覺（おぼ）えし（し）のみにて、その名（な）作（さく）たることをば疑（うたが）はざりき。アモンチャタは必ず我（わ）の詩（うた）を拾（ひろ）ひしならむ。今（いま）は彼（かの）少（せう）女（にょ）家（いへ）に歸（かへ）りて半（はん）ば衣（き）を脱（は）ぎ、絹（きぬ）の長（なが）椅（い）の上（うへ）に坐（ま）し、手（て）もて願（ねが）

を支（さ）へて、ひとり我（わ）の詩（うた）を讀（よ）むならむ。

きみが姿（すがた）を仰（うかが）みて、君（きみ）がみ聲（こゑ）を聞（き）くときは、おほそら高（たか）くあま翔（は）り、わたつみふかくかづきいり、かぎりある身（み）のかぎりなき、うき世（よ）にあそぶこゝちして、うたなりししいにしへのダヌテがふみをさながらに、おとにうつしてこよひこそ、聞（き）くとと思（おも）へ、うため（歌（うた）女（にょ））の君（きみ）に。

我（わ）は皆（みな）てダンテの詩（うた）をもて天下（てんか）に比（ひ）なきものとなしき。さるを今（いま）アモンチャタが藝（ぎ）を見るに及（およ）びて、その我（わ）の心（こゝろ）に入（い）ること神（しん）曲（きょく）よりも深（ふか）く、その我（わ）の胸（むね）に迫（せま）ること神（しん）曲（きょく）よりも切（き）なるを覺（おぼ）えた。その愛（あい）を歌（うた）ひ、苦（くる）を歌（うた）ひ、狂（くる）を歌（うた）ふを聞（き）けば、神（しん）曲（きょく）の變（へん）化（くわ）も亦（また）こゝに備（そな）はれり。アモンチャタ我（わ）の詩（うた）を讀（よ）まば、必（かならず）し我（わ）の意（い）を解（と）して、我（わ）を知（し）らむことを願（ねが）ふならむ。斯（ごと）く思（おも）ひつゞけて、やうやうにして眠（ね）に就（つ）きぬ。後（のち）に思（おも）へば、我（わ）は此（この）夕（ゆふ）我（わ）の詩（うた）を誦（よ）せしにはあらで、始（はじ）終（は）詩（うた）中（ちゆう）の人（ひと）をのみ思（おも）ひたりしなり。

### をかしき樂劇

翌（あした）日（にち）になりて、ベルナルドオを尋（たず）ね求（もと）むるに、何（なん）處（ところ）にもあらざりき。ピアツツア、コロンナをばあまたゝび過ぎぬ。アントニウスの像（ざう）を見（み）む

とてにはあらず。アモンチャタの影（かげ）を見る幸（さい）もあらむかとてなり。彼（かの）君（きみ）はこゝに住（す）へり。外國（がいこく）人（ひと）にして其（その）に居（ゐ）るものもあり。いかなる月（つき）日の下（した）に生（な）れあひたる人（ひと）にか。「ピアノ」の聲（こゑ）する儘（まま）に耳（みみ）聳（もも）れど、彼（かの）君（きみ）の歌（うた）は聞（き）えず。一聲（いっせい）の聲（こゑ）試（こ）みる様（よう）なるは、低（ひさ）き「バツソオ」の音（おと）なり。樂（がく）長（ちやう）ならずば彼（かの）群（ぐん）の男（おとこ）の一人（ひとり）なるべし。幸（さい）ある人（ひと）々（々）よ。殊（こと）に羨（うらや）ましきはエネエアスの役（やく）勤（しん）めたる男（おとこ）なるべし。かの君（きみ）と目（め）を見（み）あはせ、かの君（きみ）の燃（も）ゆる如（ごと）き日（ひ）なざしに我（わ）の面（おもて）を見（み）させ、かの君（きみ）と共（とも）に國（くに）々（々）を經（へ）りて、その樂（がく）を分（わ）たむとは。かく思（おも）ひつゞくる程（ほど）に、我（わ）の心（こゝろ）は快（こころ）々（々）として樂（がく）まずなりぬ。忽（たちま）ち鈴（すず）つけたる帽（ぼう）を被（ひ）れる戲（あそ）奴（に）、道（みち）化（くわ）役（やく）者（しや）、魔（ま）法（ぽう）つかひなどに打（う）ちあつたる男（おとこ）あまた我（わ）の園（えん）を跳（は）り狂（くる）へり。けふも甜（あま）肉（にく）の祭（まつり）日（にち）にて、はや其（その）時（とき）刻（とき）にさへなりぬるを、われは心（こゝろ）づかでありしなり。かゝる群（ぐん）の華（は）かなる舞（まわ）ひ、その物（もの）騒（さわ）がしき聲（こゑ）々はますく我（わ）の心（こゝろ）地（ぢ）を損（こ）じたり。車（くるま）幾（いく）輛（りやう）か我（わ）の前（まえ）を過（す）。その御（ご）者（しや）はことごとく女（にょ）装（さう）せり。忌（い）はしき行（ぎやう）装（さう）かな。女（にょ）師（し）子（し）の下（した）より露（あは）れたる黒（くろ）髭（ひげ）、あらあらしき身（み）振（ふり）、皆（みな）程（ほど）を過（す）ぎて醜（みにく）し。我（わ）はきのふの如（ごと）き此（この）間（かん）に立（た）ちて快（こころ）を取ることは能（あた）はず。今（いま）しも最（さい）後（ご）の昨（きのう）を彼（かの）君（きみ）の屋（いへ）給（たま）ふ家（いへ）に注（そ）ぎて、はや踵（かかと）を回（まわ）さむとしたるとき、その家（いへ）



ルロン、古代の力士、圓鐵板投ぐる男の儀等に肖せる假面の事など、次を逐ひて談柄となりぬ。獨りかの猶太種と覺しき老女のみはこの賑しき物語に與らで、をり／＼姫がことさらに物言掛けたる時、僅に輕く頷くのみなりき。この時姫の態度に心をつくるに、きのふ芝居にて思ひしとは、甚しき相違あり。その家にありてのさまは、世を面白く渡りて、物に拘ることなき尋常の少女なり。されどわが姫を悦ぶ心はこれがために毫しも減ぜず。この稱き振舞は却りてあやしく我心に協ひき。姫は譯もなき戯言をも、面白くいひ出で、我をも人をも興ぜさせるたりしが、俄にこゝろ付きたるやうに錶を見て、はや化粧すべき時こそ來ぬれ、今宵は樂劇の本讀のうちなる役に中り居ればとて座を起ち、側なる小房のうちに入りぬ。

門を出でたるとき、われ、汝が惠によりてゆくりなき幸に逢ひしことよ。舞臺なるを見し面白さに譲らぬ面白きなりき。されば汝はいかにして彼君とかく迄親しくはなりし。又いかにして我をさへ紹介しつる。我は猶さきよりの事を夢かと疑はむとす。友。わが少女の許を訪れしは、別にめづらしき機會を得しにあらず。羅馬貴族の一人、法皇禁軍の一將校、すべての美

しきものを敬する人のひとりとして、姫をば見舞つるなり。若し又戀といふものゝ上より云はば、この理山の半ばをだに須ゐざるならむ。されば我が姫を訪ひて、汝も前に見つる如き紹介なき客に劣らぬ、善き待遇を得しこと、復た怪むに足らざるべし。且戀はいつも我交際の技倆を進む。彼と相對するときは倦怠せしめざる程の事我掌中に在り。相見てよりまだ半時間を経ざるに、我等は頗る相識ることを得き。さてかくは汝をさへ引合せつるなり。我。さては汝彼君を愛すといふか。眞心もて愛すといふか。友。然り、今は昔にもまして愛するやうになりぬ。さきに猶太廓にて我に酒を勧めし少女の、今のアマンチャタなることは、最早疑ふべからず。わが始て向ひぬしとき、姫は分明に我を認むるさまなりき。かの老いたる猶太婦人、詞すくなく、機編めるも、わがためたは一人の證人なり。されどアマンチャタは生れながらの猶太婦人にあらず。初め我がしかおもひしは、其髮の黒く、其瞳の暗きと其境界とのために惑はされしのみ。今思へば姫は矢張基督教の民なり。終には樂土に生るべき人なり。

このタベルナルドオと芝居にて逢ふことを約しき。されど餘りの大入なれば、我はつひに再

友を見出すこと能はざりき。我は辛く一席を購ふことを得き。いづれの棧敷にも客満ちて、暑さは人を壓するやうなり。演劇はまだ始まらぬに、我身は熱せり。きのふけふの事、わがためには渾て夢の如くなりき。かゝる所に逢ひて、我心を鎮めむとするに、最も不恰好なるは、蓋し今宵の一曲なりしならむ。世に知れわたりたる如く、樂劇の本讀といふは、極めて放肆なる空想の産物なり。全篇を貫ける脈絡あるにあらず。詩人も樂人も、只當觀客をして絶倒せしめ、兼ねて許多の俳優に喝采を博する機會を與へむことを勉めたるなり。主人公は我儘にして動き易き性なる男女二人にして、これを主なる歌女及譜を作る樂人とする。絶間なき可笑しきは、盡る期なき滑稽の森羅を惹起せり。主人公の外なる人物には人のおれを取扱ふこと一種の毒藥の如くならむことを望める俳優のみ多く作り設けたり。かくいふをいかなる意ぞといふに、それは能く人を殺し又能く人を活す者ぞとなり。此醉に雜れる憐れき詩人は、始終人に制せられ役せられて、嘗へば猶奴性となるべき儚なき小卒のごとなり。

喝采の聲と花束の閃は場の上りたるアマンチャタを迎へき。その我儘にて興ある振舞、何

篇の布置は善きか悪きか。それは俳優の責にあら  
ず。「テノオレ」うたひの男も、これに譲らぬ我  
儘をいはむ。君は男女の役者々々を訪ひて項  
を曲げ色を令くし、そのおもひ附く限の註文  
を聞きてこれに應ぜざるべからず。次に来るは  
座がしらなり。その批評、その指摘、その削除  
に逢ふときは、その人いかに愚ならむも、枉  
げてこれに従はでは協はず。道具かたはそれ  
の道具を調へむは、我座の方の及ぶところに  
あらずといふ。かゝる場合に原作を改むること  
を、芝居にては曲を曲ぐといふ。畫工は某の  
烟、某の井、某の積み上げたる芻秣をばえ寫さ  
じといふ。これがためにさへ曲ぐべき詞も出  
來たるべし。最後におもなる女優又來りて、そ  
れの詞の韻脚は嚇りにくし、あの韻をば是非  
とも阿のこゑにして賜はれといふ。これがため  
にいかなる重みある詞を削り給はむも、又い  
づくより阿のこゑの韻脚を取り給はむも、そは  
唯々君が責に歸せむ。かくあまたとび改めて、  
ほとく元の姿を失ひたる曲を革に掛けたる  
とき、看客のうけあしきを見て、樂長はかな  
らず怒りて云はむ。拙劣なる詩のために、いた  
づらなる骨折せしことよ。わが譜の翼を借した  
れども、癡重なるかの曲はつひに地に墜ちた

りといはむ。

外よりは樂の聲おもしろげに聞えたり。假面  
着けたる人はこゝの街にもかしこの辻にもみち  
みちたり。たちまち拍手の音と共に聞ゆる喝采  
の響いとかしましきに、一座の人々みな窓より  
さし覗きぬ。いまわれ意中の人の傍にありて  
見れば、さきに厭はしと見つるとは様かはりて、  
けふの祭のにぎはひ又面白く、我はふたゝびき  
のふ衆人に立ち廻りて遊びたはぶれし折に劣ら  
ぬ興を覺えき。

道化役者にいであちたるもの五十人あまり、  
われ等のさし覗ける窓の下につどひ來て、おの  
れ等が中より一人の王を選舉せむとす。これに  
中りたるものは、彩りたる旗、柱の枝の環飾  
藤櫛の實の皮などを懸けたる小車に乗り選り  
ぬ。その旗のをかしく風に翻るさま、衣の紐  
などの如く見えき。王の着座するや、其頭に  
は金色に塗りて更にまた彩りたる鶏卵を並べて  
作れる笠を冠として戴かせ、其手には「マケロ  
ニ」(獨類の名)つけたる大いなる玩具の柄つき  
の鈴を笏として持たせたり。さて人々その車を  
めぐりを踊りめぐれば、王はいづかたへも向ひ  
て傾きたり。やゝありて人々は自ら車の綱取  
りて挽き出せり。この時王は窓にアマンチャタ

あるを見つけ、親しげに目禮し、車の動きはじ  
むると共に聲を揚げ。きのふは汝、けふは我。  
羅馬の牧のまことの若駒を轡に繫ぐ快きよ、  
とぞ叫びける。姫は面をさと亦めて一足退き  
しが、忽ち心を取直したる如く、亦手を櫂に  
かけて、聲高く。我にも汝にも過分なる事ぞ。  
かりそめにな思ひそといふ。群衆も亦きのふの  
歌女を見つけたりけるが、今その王との問答を  
聞きて、喝采の聲しばしは鳴りも止まず、雨の  
如き花束は樓の上なる窓に向ひて飛びぬ。そ  
の花束一つ、姫が肩に觸れて我前に落ちたれ  
ば、我はそれを拾ひて胸におしつけ、何物にも換  
へがたき寶ぞと藏めおきぬ。

ベルナルドオは祭の王のよしなき戯を無禮  
しといきどほり、そのまゝ樓を走り降りて答  
ち懲らさばやといひしを、樂長は餘のひとく  
と共にだめ止むるほどに、「テノオレ」うたひ  
の頭なる男おとづれ來ぬ。その男は歌女に初  
対面なりといふアバテ二人と外國うまれの樂  
人一人とを伴へり。續いて外國の藝人あまた打  
連れ來りて對面を請ひぬ。これにて一間に集ひ  
し客の數俄に殖えたれば、物語さへいと調子づ  
きて、さきの夕「アルジエンチナ」座にて興行  
したる可笑き假粧舞の事、詩女の導者たるアボ

れき。我は我聲の一群を左右する力ありて、譬へば靈魂の肢體を役するが如くなるを覺えき。事果てゝ後家に歸りしが、身は唯も夢中に起ちてさまよひありく、怪しき病ある人の如くにして、その夜枕に就きての夢には始終アナンチャタが我歌を喜べるさまをのみ見き。

翌日姫をおとづれぬ。ベルナルドオ、昨夜の火伴の二人三人は我に先だちて座にありき。姫のいはく、きのふ絃歌の中に「テノオレ」の聲のいと善きを聞きつといふ。我面はこの詞と共に火の如くなりぬ。それこそアントニオなれと告ぐるものあり。姫は直ちに我を引きて「ビアノ」の前に往き、俱に歌へと勸む。我は法廷に立てるが如き心地して、再三辭みたるに、人々側より促して止まず、又ベルナルドオは聲を勵まして、さては汝切角の姫の聲をさへ我等に聞せざらむとするかと責めたり。姫に手を扯かれたる我は、捕られし小鳥に殊ならず。縦ひ羽ばたきすとも、歌はでは叶はず。姫の歌はむといふに、わが知れる雙吟なり。姫は「ピアノ」に指を下して、先づ聲を擧げ、我は震ひつゝもこれに和したり。この時姫の目なさは、我に靡々ときゝやきて、我をその妙音界に迎ふる如くなりき。わが怯は已みて、我聲は朗になりぬ。

一座は啖采を吝まず、かの猶太おうなさへやさしげに飮きぬ。

このときベルナルドオは汝はいつも人の意表に出づる男ぞとつぶやきて、さて衆人に向ひ、吾友には猶かくし秘こそあれ、そは即興の詩を作ることなり、作らせて聞き給はずやといひき。啖采に酔ひたる我は、アナンチャタが一言の囁を待ちて、大膽にも即興の詩を歌はむとせり。この技は人と成りての後未だ試みざるものなるを。我は姫の「キタルラ」を把りぬ。直に不死不滅といふ題を命ぜり。材には豊富なる題なりき。しばしうち案じて、絃を撥くこと二たび三たび、やがて歌は我肺腑より流れ出たり。詩神は蒼茫たる地中海を渡り、希臘の綠なる山谷の間にいたりぬ。雅典は荒草斷碑の中にあり。こゝに野生の無花果樹の掛け残りたる石柱を掩へるあり。この間には鬼の歎息するを聞く。

むかしベリクレスの世には、この石柱の負へる穹窿の下に、笑ひさぐめく希臘の民往來したりき。そは美の祭を執り行へるなり。ライス(名娼の名)の如く美しき婦人は環飾を取りて市に舞ひ、詩人は善と美との不死不滅なるを歌ひぬ。忽ちにして美人は黄土となりぬ。當時の民の目を悦ばしたる形は世の忘るゝ所と

なりぬ。詩神は瓦礫の中に立ちて泣くほどに、人ありて美しき石像を土中より掘り出せり。こは古の瓦所の作れるところにして、大理石の衣を着けて眠りたる女神なり。詩神はこれを見て、さきの希臘の美人の像を認めき。あはれ古人が美をかうくしき迄に進めて、雪の如き石に印し、これを後昆に遺したるこそ嬉しけれ。見よや、死滅するものは浮世の權勢なり。美いかでか死滅すべき。詩神は又波を踏みて伊太利に渡り、古の帝王の住みつる城趾に躍して、羅馬の市を見おろしたり。テエル河の黃なる水は昔ながらに流れたり。されどボラダウス、コクレスが單ひし處には、今袋に薪と油とを積みてオスチアに輸るを見る。されどグルチウスが炎火の喉に身を投ぜし處には、今牧牛の青草の裡に眠れるを見る。アウグスツスよ。チツスよ。汝が雄大なる名字も、今は破れたる寺、壞れたる門の稱に過ぎず。羅馬の鷲、エビテルの猛き鳥は死して巢の中にあり。あはれ羅馬よ。汝が不死不滅はいづれの處に在る。鷲の眼は忽ち躍きて、その光は全歐羅巴を射たり。既に倒れたる帝座は、父起ちてベトルスの椅子(法皇座)となり、天下の王者は徒然してこゝに來り、その下に羅拜せり。おほよそ手



事に傾着せずして面白ける舉動を見て、人は高等なる技といへど、我はそれを天賦の性とおもひぬ。いかにといふに、姫が家にありてのさまはこれと殊なるを見ざればなり。その歌は數千の銀の鈴齊く鳴りて、柔なる調子の變化なきが如く、これを聞くもの皆頭を擧げて、姫が目より漲り出づる喜をおのが胸に吸ひたり。姫と作譜者と對して歌ふとき相代りて姫男の聲になり、男姫の聲になる條あり。この異なる技は、聴衆の大喝采を受けたるが、就中姫が最低の「アルトオ」の聲を發し畢りて、最高の「ソプラノ」の聲に移りしときは、人皆物に狂へる如くなりき。姫が輕く麗なる舞は、エトルリアの瓶の面なる舞者に似て、その一舉一動一として畫工彫工の好粉本ならぬはなかりき。われはこのすべての技藝を見て姫の天性の發露せるに外ならじとおもひき。アモンチャタがデドは妙藝なり、その歌女は美質なり。曲中には何の緣故もなき曲より取りたる、可笑しき節々を插みたるが、姫が滑稽なる歌ひさまは、その自然ならぬをも自然ならしめき。姫はこれを以て自ら遣り又人に戯るゝ如くなりき。大團圓近づきたるとき、作譜者、これにて好し、場びらきの樂を始めむとて、舞臺の前なるまこ

との樂人の群に譜を頒てば、姫もこれに手傳ひたり。樂長のいざとて杖を擧るゝと共に、耳を裂くやうなる怪しき雜音起りぬ。作譜者と姫と、旨し／＼と叫びて掌を拍てば、觀客も亦これに和したり。笑聲は殆ど樂聲を覆へり。我は半ば病めるが如き苦悶を覺えき。姫の姿は驕兒の恣まゝに戯れ狂ふ如く、その聲は古の希臘の祭に出でときといふ狂女の歌ふに似たり。されどその放縱の間にも猶やさしく愛らしきところを存せり。我はこれを見聞きて、ギドオ、レニイ(伊太利畫工)が仰塵畫の朝陽と題せるを想出しぬ。その日輪の車を繞りて踊れる女のうちベアトリチエ、チエンチイ(羅馬に刑死せし女の名)の少かりしときの像に似たるありしが、その面影は今のアモンチャタなりき。我もし彫工にして、この姿を刻みなば、世の人これに題して清淨なる歡喜となしたるなるべし。あらあらしき雜音は愈々高く、作譜者と姫とは之に連れて歌ひたるが、忽ち旨し旨し、場びらきの樂は畢りぬ、いざ幕を開けよといふとき幕閉づ。これを此曲の結局とす。姫はこよひもあまた／＼び呼び出されぬ。花束・縁の環飾、詩を寫したるむすび文、彩りたる紐は姫が前に翻りぬ。

### 即興詩の作りぞめ

この夕我と同じ年頃なる人々にて、中には我を知るものも幾人か錐りたるが、アモンチャタが家の窓の下に往きて絃歌を催さむといふ。我は崇拜の念止み難き故をもて、膽太くもまたこの群に加りぬ。唱歌といふものをば止めてより早や年ひさしくなりたるにも拘らず。姫が歸りてより一時間の後なりき。一群はピアツア、コロンナに至りぬ。出窓の内よりは猶燈の光さしたり。樂器執りたる人々は窓の前に列びぬ。我心は激動せり。我聲は應ずることなく人々の聲にまじりたり。歌の一節をば、われ一人にて唱へき。この時我は唯アモンチャタが上をのみ思ひて、すべての世の中を忘れ果てたり。さて深く息して聲を出すに、その力、その柔さ、能くかく迄に至らむとは、みづから初より思ひかけざる程なりき。火伴のものは覺えず微なる聲にて喝采す。その聲は微なりと雖、猶我耳に入りて、我はおのが聲の能く調へるに心付きたり。喜は我胸に滿ちたり。神は我身に舍り給へり。アモンチャタが出窓よりさし覗きて、身を屈し喉をなしたるときは、その喉を受くるもの殆ど我一人なる如くおもは

人の心のおもはれて。されど姫はあきて此地を立つといへば、最早その憂もあらざるべし。基督再生祭の後には歸るといへど、そも恃むべきにはあらず。これを聞きたるとき、我胸は躍りぬ。アマンチャタを見るべからざること五週に亙るべし。彼君はフイレントエの芝居に備はれ、斷食日の初にこゝを立つなりとぞ。ベルナルドは語を續きていはく。かしこに至らば崇拜者の新なる群は姫がめぐりに集ふべし。さらば舊きは忘れられむ。譬へば汝が即興の詩の如きも、その時こそ姫のやさしき目なざしに、汝に謝する色現れつれ、かしこにては思出さる暇なからむ。さはあれ一個の婦人にのみ心を傾くるは癡漢の事なり。羅馬には女多し。野に遍き花のいろ／＼は人の摘み人の采るに任するにあらずや。

この夕我はベルナルドと共に芝居に往きぬ。アマンチャタは再びデドとなりて出でぬ。その歌、その振、始に譲りざりき。完備せるものゝ上には完備を添ふるに由なし。姫が技藝はまことに其域に達したるなり。こよひは姫また我理想の女子となりぬ。その本讀の曲にての役、その平生の舉動は、例へば天上の仙の暫くこの世に降りて、人間の態をなせるが如くぞお

もはるゝ。その態も好し。されどデドの役にては、姫が全幅の精神を見るべし。姫がまことの我を見るべし。萬客は又狂せり。想ふにこの羅馬の民のむかし該撒とチツスを迎へけむ歡も、おそらくは今宵の上に出でざるならむ。曲畢りて姫は衆人に向ひて謝辭を陳べ、再びこゝに來むことを約せり。姫はこよひもあまたゝび呼出されぬ。歸途に人々の車を挽けるも亦同じ。我もベルナルドと共に車に附き添ひて、姫がやさしき笑顔を見送りぬ。

### 謝肉祭の終る日

翌日は謝肉祭の終る日なりき。又アマンチャタが滯留の終る日なりき。我は暇乞におとづれぬ。市民がその技能に感じて興へたる喝采をば、姫深く喜びたり。フイレントエはその自然の美しき、その畫廊の備れる、居るに宜しきところなれど、再生祭の後こゝに歸らむことは、今より姫の樂むところなり。姫はかしこの景色を物語りぬ。アペンニノの森林、豪貴の人の別荘の其間に基布せるビアツツア、デル、グランツカ、其外美しき古代の建築物など、その言ふところ人をして目のあたりに見る心地せしめき。

姫のいはく。我は再畫廊に往かむ。我に彫刻を喜ぶこゝろを生ぜしめしは彼處なり。プロメテウスが死者に生を與ふるに同じく、人間の心の偉大なるを、わが悟りしは彼所なり。彼畫廊に一室あり。それは最も小なる室にして、わが最も好める室なり。今若し君をかしこに在らしむことを得ば、君は能くわがむかしの喜を解し、又能くわが今日そを想起す喜を解し給はむ。この八角に築きたる室には、實に全廊の尤物を擡で陳列せり。されどその尤物の皆けおさるゝは、メデチのエヌスの石像あればなり。かくまでに生けるが如き石像をば、われこの外に見しことなし。その日は人を視る如し。あらず。人の心の底を觀る如し。石像の背後には、チチアノの畫けるエヌスの油畫二幅を懸けたり。その色彩目を奪ふと雖、こゝに寫し得たるは人間の美しきにして、彼石の現せるは天上の美しきなり。ラファエロがフォルナリイナ（作者意中の人）は心を動すに足らざるにあらず。されどエヌスの生けるをば、われあまたゝび願みざること能はず。否々。おほよそ世に彫像多しと雖、いづれか彼エヌスの台に出づべき。ラオコオンにてはまことに石の痛楚のために泣くを見る。しかも猶及ばざるところあ

の觸るべきもの、目の視るべきもの、いづれか死滅せざらむ。されどペトルスの刀いかでか鐘を生ずべき。寺院の勢いかでか墮つる期あるべき。縦ひ有るまじきことある世とならむも、羅馬は猶その古き諸神の像と共に、その無窮なる美術と共に、世界の民に崇められむ。東よりも西よりも、又天寒き北よりも、美を敬ふ人はこゝに来て、羅馬よ、汝が威力は不死不滅なりといはむ。この段の畢るや、喝采の聲は座に満ちたり。獨りアヌンチヤタは靜座して我面を見たるが、其姿はアフロヂテの像の如く、其眸には優しさこもれり。我情は猶輕き詩句となりて、唇より流れ出でたり。詩境は廣き世界より狹き舞臺に遷れり。こゝに技倆すぐれたる俳優あり。その所作、その唱歌は萬客の心を奪へり。歌ひてこゝに至りたる時、姫は頭を低れたり。そは我上とおもへばなるべし。座中の人々も、亦我敘述する所によりて我意の在るところを認めしならむ。かゝる俳優も歌歌み幕落ちて、喝采の聲絶ゆるときは、其藝術は死なむ。死して美き屍となりて、聴衆の胸に瘞められたるのみならむ。されど詩人の胸は衆人の胸に殊なり。譬へば聖母の墓の如し。こゝに瘞めらるゝものは、悉く化して花となり香と

なり、死者は再びこれより起たむ。しかしてその詩はたたび死したる藝術をして不死不滅の花となりて開かしめむ。我目はアヌンチヤタが顔を見やりたり。我心は吐き盡したり。われは起ちて體をなしたるに、人々は我を圍みて謝したり。姫は我を視て、君は深く我心を悦ばしめ給ひぬといひぬ。我は僅に唇をやさしき手に押し當てたり。

そも劇は虹の如きものなり。彼も此も天地の間に架したる橋梁なり。彼も此も人皆仰いで其光彩を喜ぶ。然はあれどその倏忽にして滅するや、彼も此も迹の尋ねべきなし。アヌンチヤタとアヌンチヤタが技とは、其運命實にかくの如し。姫はわがこれを不朽にせむとする心を、この時能く曉り得たり。姫が我を解することの斯く深かりしことは、當時我未だ知ること能はざりしが、後に至りて明かになりぬ。我は日ごとに姫をおとづれき。わづかに残れる謝肉祭の日はいつしか夢の如くに過ぎ去りぬ。されどこの間われは遺憾なくこのまつりの興を受用し盡せり。そはアヌンチヤタが我に賦したる樂天主義の賜なりき。或時ペルナルドオのいふやう。汝はやうやくまことの男とならむとす。われ等に變らぬ眞の男とならむとす。

されど汝はまだ唇を杯の縁にあてしに過ぎず。我は明かに知る、汝が唇の未だ曾て女子の口に觸れず、汝が頭の女子の肩に倚らざるを。今若しアヌンチヤタまことに汝を愛せばいかに。我。思ひも掛けぬ事かな。アヌンチヤタは我が僅に能く仰ぎ見るものゝ名にして、我手の届くべきものゝ名にあらず。彼。あらず。高くもあれ低くもあれ、アヌンチヤタとは女子の名なり。汝は詩人にあらずや。詩人は測るべからざる性あるものなり。その女子の胸の片隅を占むるや、その奥に進むべき鍵は、詩人の手にあるものぞ。我。姫がやさしき、賢しき、姫が藝術のすぐれたるをこそ慕へ。これに戀せむなどとは、われ實に夢にだにおもひしことなし。彼。汝が眞面目なるおも持こそをかしけれ。好し好し、我は汝が言を信ぜむ。汝は素より雌なんどに等しき水陸兩足の動物なり。現の世のものか、夢の世のものか、そを誰か能く辨ぜむ。汝はまことに彼君を愛せざるべし、わが愛する如く、世の人の戀するときに愛する如く愛せざるべし。されど汝が姫に對する情果して戀に非ずば、今より後彼に對して面をあかめ、火の如き日なざしめて彼に向ふことを休めよ。そは彼君のためにあしかりなむ。傍より見む



ぢさして馳せゆき、荒浪の寄するが如き群衆は  
 その後に隨ひぬ。わが踵を旋して還らむとする  
 とき、馬よ〜と呼ぶ聲俄に喧しく、競馬の  
 内なる一頭の馬、さきなる埒にて留まらず、そ  
 が儘街を引きかへし來れるに、最早馬過ぎたり  
 と心許し、群衆は、あわて騒ぐこと一かたなら  
 ず。吾心頭には稻妻の如く昔のおそろしかりし  
 さま浮びたり。瞬くひまに街の兩側に避けた  
 る人の黒山の如くなる間を、兩脇より血を流  
 し、鬘躍き、口より沫出でたる馬は馳せ來た  
 り。されど我前を過ぐるとき、いかにかしけむ  
 銃もて撃れたる如く打ち倒れぬ。怪我せし人や  
 あると、人々しばし安き心あらざりしが、こた  
 びは聖母やさしき手を信者の頭の上に掲げ給ひ  
 て、一人をだに傷け給はざりき。  
 危さの容易く過ぎ去りしは、祭の興を損ぜ  
 ずして、却りて人の心を亂し、人の歡を助け  
 たり。これよりは謝肉祭の大詰なる燭火の遊  
 (モツコロ) 始まらむとす。今まで列を成したり  
 し馬車は漸く亂れて、街上の雜選は人聲の噪  
 しさと共に加はり、空の暗なりゆくを待ち得  
 て、人々持たる燭に火を點せり。中には一束  
 を握りて、ことごとく燃せるもあり。徒なるも  
 車なるも燭を把りたるに、窓のうちに坐したる

人さへ火持たぬはあらねば、この美しき夜は地  
 にも星ある如くなり。家々より街の上へさし出  
 せる火には、いろ／＼なる提灯、燈籠ありて、  
 おの／＼功を争へり。さて人々皆おのが火を護  
 りて、人のを消さむとす。火持たぬ人は死ね(ヘリ  
 ア、アムマツアトオ、キイ、ノン、ポルタア、モツ  
 コオリ)と叫ぶ聲は、次第に喧しくなりまされ  
 り。我が持てる燭も、人に觸れさせじとする骨  
 折は其甲斐なくて、打ち減さるゝこと頻なりけ  
 れば、われ餘りのもどかしさに、智慧ある人は  
 我に倣へよと叫びつゝ、柄ながらに投げ棄てつ。  
 道の傍なる婦人數人はその燭を家々の窓の  
 窓にさし込みて、これをば誰もえ消さじと心  
 安んじ、我を指さして燭なき人の笑止さよと  
 嘲るほどに、家の童どもいつか窓に降り行き  
 て、その燭を吹き滅したり。又高き窓なる人々  
 は竿に着けたる提燈さし出して、誇靨なるを、  
 屋根に這ひ出でたる男ども竿の尖に紛れ結びた  
 るを握ひて、これをさへ拂ひ消すめり。  
 異國人にて此祭見しことなきものは、かゝる  
 折の雜選を想ひ遣ること能はざるべし。立錫の  
 地なき人ごみに、燃やす燭の數限なければ、  
 空氣は濃く熱くのみなり勝りぬ。忽ち街の角を  
 曲らむとする馬車二三輛あるを認めて頭を回し

しに、かの覆面したる翁と娘とを載せたる車は  
 我側に来りぬ。寝衣纏ひたる老紳士の燭は早や  
 消えたり。花實に扮したる娘は猶四五尺許な  
 る籐の竿に蠟燭幾本か束ねたるを着けて高く騎  
 せり。彼の紛れ結びたる竿の長足らで、我火を  
 え消さざるを見て、娘は嬉し氣に笑ひぬ。老紳  
 士は又娘の火に近づくものありと見るごとに、  
 容赦なく「コンフェツチー」の霞を進らせたり。  
 われはこれをこそと思ひければ、車の背後に飛  
 び乗り、籐の竿をしかと握るに、娘はあなやと  
 叫び、男は石膏の丸を放つこと兩より繁かりし  
 かど、屈せずしてかの竿を撓ませむとせしに、  
 竿は半ばよりほきと折れて、燭の束ははたと落  
 つ。群衆は喝采せり。娘はアントニオ、餘り  
 ならずやと怒じたり。その聲は我骨を刺すが如  
 く覺えぬ。そはアモンチャタが聲なればなり。  
 娘は籐の竿の九の有らむ眼を我頭に擲け付  
 け、續いて籠を擲け付けしに、われ驚きて跳り  
 下るれば、車ははや彼方へ進み、和陸のしるし  
 なるべし、娘のうしろざまに投じたる花束一つ  
 我掌に留りぬ。われは車を追はむとせしが、  
 雜沓甚しきため其甲斐なく、遂にとある横街  
 に身を避けつ。  
 身の周圍の混雜收りて心落つくと共に、心

り。獨我エヌと美を嬌ぶるは、君も知り給へるワチカアノのアポロンならむ。その詩神を摸したる力量は、彼エヌに於きてやさしき美の神を造れるなり。我答へて。君の愛で給ふ像を石膏に寫したるをば、我も見き。姫。否、われは石膏の型ばかり整はざるものはなしと思へり。石膏の顔は死顔なり。大理石には命あり。石はやがて肌肉となり、血は其下を行くに似たり。フイレンチエまで共に行き給はずや。さらばわれ君が案内すべし。我は姫が志の厚きを謝して、さていひけるは、さらば再生祭の後ならでは、又相見むこと難かるべしといふ。姫こたへて。さなり。聖ピエトロ寺の燈を點し、烟火戲を上ぐる折は、我等が相逢ふべき時ならむ。それまでは君われを忘れ給ふな。我はまたフイレンチエの畫廊に往きて君とけふ物語れることを想ふべし。われは常に面白きこととに逢ふごとに、我友のその樂を分たざるを恨めり。これも旅人の故郷を偲ぶたぐひなるべし。我は姫の手に接吻して、戯に。この接吻をばメヂチのエヌに傳へ給へ。姫。さては我にとてにはあらざりしか。我は決して私することなかるべしといひぬ。我は分れて一間を出でしとき夢みる人の如くなりき。

戸の外にて家の嬪に出で逢ひ、心の常ならぬけにやありけむ、われその手を取りて接吻せしに、これは善き性の人なるよとつぶやくを聞きつ。

最後の謝肉祭の日をば、飽く迄樂まむと思ひぬ。唯アマンチャタと別れむことは、猶現とも覺えず。又逢はむ日は遙なる後にはあらで、明日の朝にはあらざやとおもはる。假面をば被りたらねど、「コンフェツチイ」の粒撒ぐることは、人々に劣らざりき。道の傍なる椅子には人滿ちたり。家ごとの窓よりも人の頭あらはれたり。車のゆきかふこと隙間なく見ゆるに、その餘せる地にはうれしげなる面持したる人肩摩るほどに集へり。歩まむとする人は、車と車との隙を行くより外すべなし。音樂の聲は四面より聞ゆ。車の内より「イル、カビタノ」大尉の歌洩りたり。陸に海に立てたる勳とぞ歌ふなる。腰に木馬を結びたる童あり。首と尾とのみ見えて、四足のところは膝かけの色ある巾にて掩はれたり。童の足二つにて、馬の足の用をなせるなり。かゝるものさへ車と車との間に入れば、混雜はまた一入になりぬ。われは楔の如く車の間に介まりて、後へも先へも行くことはず。後なる車挽ける馬の沫は我耳に漉

げり。わがこれにえ堪へで、前なる車の踏板上に飛び乗りたるを、これに乗れる駝衣着たる翁とやさしき花賣娘とは、早くも惡劇のためよりは避難のためと見て取りぬと覺しく、娘は輕く我手背を敲き、例の玉のつぶて二つ投げかけしのみなれど、翁の打つ飛礫は雨の如くなりき。娘もこの攻撃を興あることにや思ひけむ、遂には翁の所爲に倣ひて、持てる籠の空しくならむとするをも臆はで唯々打ちに打つ程に、我衣は斑々として雪を被れる如くぞなりぬる。われはこの地點を守りかねて、飛びおるれば、戯奴にいでたちたる男走り來て、手に持てる采配もて、我衣を拂ひ呉れたり。

暫し避けて佇む程に、さきの車又かへり路に我を見て、再び「コンフェツチイ」を投げかけたり。わが未だ迎へ戦ふに遑あらざる時、砲聲地に震ひて、くらべ馬始まるをしらせしかば、車は皆狭き横道に入りて、翁と娘とも見えなくなりぬ。二人は我を識りたりと覺し。奈何なる人にかあらむ。ベルナルドオは今日街に見えざりき。かの翁は其人にて、娘はアマンチャタにはあらずや。

我は街の角に近き椅子に倚りぬ。砲は再び響きて、競馬は街のたゞ中をエネチャの廣こう

甚しくなりぬ。わが胸の空虚は書卷の能く  
 填むるところにあらざりき。ベルナルドオはわ  
 が無二の友なり。然るに今はその音容に接する  
 ことの厭はしくなれるぞ怪しき。嗚呼我等二人  
 の間にはアモンチャタの立てるなり。縦ひ友を  
 失はむも、彼君のためには惜からじと一たびは  
 思ひぬ。されどづらく思ひ返せば、友は我に  
 先だちて姫と交を結びぬ。わが姫と相識るこ  
 とを得しは、全く友の紹介の賜なり。われは  
 友に對して、我が姫に運ぶ情の戀にあらず、藝  
 術上の感歎なるを誓ひたり。ベルナルドオは  
 わが無二の友なり。われは今これを欺かむと  
 す。悔恨の棘は我心を刺すなり。されどわれは  
 遂にアモンチャタを忘るゝこと能はず。

アモンチャタを懷ふはアモンチャタの我に與  
 へたる歡喜を懷ふなり。されどその歡喜をな  
 しは昔日の事にして、今これが記念を喚び起  
 せば、一として悲痛に非ざるものなし。譬へば  
 亡人の肖像の笑へるが如し。その笑はたま／＼  
 以て我を泣かしむるに足る。學校にありしころ  
 人の世途の難を説くを聞きては、或課題のむづ  
 かしき、或師匠の意地わるきなどに思ひ比べて、  
 我も亦早く其味を知れりといひしことあり。  
 今やその非なるを悟りぬ。われ若し能く此戀に

克つにあらずば、此方以て世途の難を抹するに  
 足るとはいふべからず。試に此戀の前途を思  
 へ。アモンチャタは常歌の歌妓に非ずして、そ  
 の妙藝は現に天下の仰ぎ望むところなりと雖、  
 われ往いてこれに従はざ、その形迹世の落し  
 と擇ぶことなからむ。我友はこれを何とか言は  
 む。加之若し心術の上より論ぜば、我守護  
 神たる聖母もこれよりは復我を憐み給はざるべ  
 し。況や此戀は果して能く成就せむや否や。

我は口惜しきことながら、實に未だアモンチャ  
 タの心を知らざりき。我は寺に往きて聖母の前  
 に叩頭き、いかで我に己に克つ力を授け給はれ  
 と祈りて、さて頭を挙げしに、何ぞ料らむ聖母  
 の面は姫が面となりて我を悦ばせ又我を苦  
 めむとは。我は縦ひ姫再び來むも、誓ひて復た  
 逢はじとおもひ定めつ。

我は嘗て古の信徒の自ら答へ自ら傷けしを  
 聞きて、其情を解せざりしに、今や自らその偽  
 す所に倣はむと欲するに至りぬ。燃ゆるが如き  
 我血を冷さむとて、我は聖母の像のトに伏して、  
 我唇をその冷なる石の足に觸れたり。憶ひ  
 起せば、わがまだ穢き時の心安かりしことよ。  
 母の膝下に過す精進日は、常にも増して樂き  
 時節なりき。四邊の光景は今猶昨心ごとくな

り。街の角、四辻などには金銀紙の星もて  
 りたる常盤木の草寮あり。處々に懸けし招牌に  
 は押韻したる文もて精進食の名を列べ舉げた  
 り。夕になれば縁染のトに移りたる提燈を  
 吊れり。雜食品賣る此頃の店は我穢き目に空  
 想界を現せる如く見えにき。銀紙巻きたる腸詰  
 肉を柱とし、ロヂイ産の乾酪を穹隆としたる小  
 寺院中に、酪もて廻れたる羽ある童の舞ふさ  
 まは、我最初の詩料なりき。食品店の妻は我詩  
 を聞きて、ダンナの神曲なりと稱へき。當時わ  
 れは不幸にして未だこの響ある歌人のいかに世  
 を動かし、かを知らず、又幸にして未だアモ  
 ンチャタが如き容貌ある歌妓のいかに人を動か  
 すかを知らざりしなり。嗚呼、われは奈何して  
 アモンチャタを忘るゝことを得べきぞ。

われは羅馬の七寺を巡りて、行者と偕に歌ひ  
 ぬ。吾情は眞にして且深かりき。然るをこれに  
 出で逢ひたるベルナルドオは、刻薄なる語氣も  
 て我に耳語していふやう。コルソオの大道にて  
 戲謔能く人の嘲を解きしは誰ぞ。アモンチャ  
 タが家にて仰興の詩を誦んじ座客を驚し、は  
 誰ぞ。今は日に懺悔の色を帯び頬に死灰の痕を  
 印して、殊勝なる行者と伍をなせり。汝はい  
 かなる役をも辭せざる名優なるよ。此の如きは



に懸かるはアモンチャタが同乗したる男の上なり。察するにベルナルドオが故意と翁に扮したるなるべし。いで二人の家に歸るを待ち受けて確めばやと人通り少かるべき横街を駆け抜けて、姫が住めるコロンナの廣こうちに出で、戸口に立ちて待つほどに、車は果して歸り着きぬ。われは家の僮僕などの如き様して走り寄りつゝ、車より下る二人を援けむとするに、姫は我手に縋りて先おり立ちぬ。さて彼老紳士に心を着くるに、その立ちあがりゐざりおるゝ様にて、わが推せし人ならぬは早く明かになりたりしが、袴衣の裾より出でたる褐色の裳を見るに及びて、姫が家の姫なることは漸く知られぬ。姫はわがさし伸ばす手に縋りて下りぬ。われは姫の供したる人の男ならざりし嬉しさに、幸あらむ夜をこそ祈れと聲高く呼びて去らむとせしに、姫進み寄りて、惡しき人かな、早くフィレンチエに連れ行かばやといひつゝも、手さし出せるを握るに、かなたも親く握り返しつ。嬉しさに嬉しさの重なりたる我は、火持たぬ手うち振りて、火持たぬ人は死ねと叫び行きぬ。我心の中には姫が徳を頌する念満ちたり。その車の傍なる座をば樂長にも許さず、吾友にも許さず、彼姫を伴ひしこそ、姫が心の清き

證なれ。彼姫は又かゝる遊を喜ぶべき人とも見えぬに、男袴衣を身に着けて供せしを思へば、寧ろ姫を恨めせむがために、心を萌せるものなるべし。唯と姫が側なる人をベルナルドオならむと疑ひしとき、我心の喉がしかりしは、妬なるか否ざるか、そはわが考へ定めざるところなりき。

われは残れる謝肉祭の時間を面白く過さむとて、假舞の場に入りぬ。堂の内には處狭きまで燈燭を懸け列ねたり。假粧せる土地の人、素顔のまゝなる外國人と打ち雜りて、高き低き機敷を占めたり。平土間より舞臺へ幅廣き梯をわたしたるが、樂人の群の座はその梯の底となりたり。舞臺には畫紙を貼り、環飾紐飾を掛けて、客の來り舞ふに任せたり。樂人は二組ありて、代るゝ演奏す。今は酒の神なるパツコスとその妻なる女神アリアドネとの姿したる人を圍みて、貸車の御者に扮したる男あまた踊り狂ふ最中なりき。われは梯を踏みてその群に近づき、引かるゝまゝに共に舞ひしが、心樂しく身輕きに、曲二つまで附き合ひて、夜更けたる後場に歸りぬ。

眠りしは短き間に、翌朝は天氣好かりき。姫は今羅馬を立つにやあらむ。華かにして賑は

しく、熱して騒がしかりし謝肉祭は、今我を殘して去りぬ。外に出で、風に吹かれなば、心寂しきけふを思ふに足ることと思ひて、獨り街に立ち出でぬ。家々の戸は閉ざれたり。物賣る店もまだ起き出でざりき。昨日は人の波打ちしコルソオの大道には、往き交ふ人疎にして、白衣に藍色の縁取りしを衣たる靈役人の一群、霞の如く散りばひたる石膏の丸を掃き居たり。塵を掃むべき車の轆には、骨立したる老馬の繋がつゝ、側なる一團の忽林を囁めるあり。とある家の戸口には、貸車の御者が立ちて、あき箱あき籠あまた車の上に載せ、その上をば毛布もて覆ひ、背後に結び附けたる草行傘の四くなるまで鐵の鎖を引き締め居たり。この車は横街より出でたる、同じ様に根載せる車と共に去りぬ。ナポリにや行くらむ。フィレンチエにや行くらむ。耶蘇更生祭の來む日まで、羅馬は五週間の長眠をなさむとするなり。

### 精進日、寺樂

事なくして靜に日を暮せば、その永きの常にもあらで覺えらるゝと共に、謝肉祭の間の珍らしかりし事、その事の中心をなせる姫が上のみ心頭に往來せり。墳墓の如き静けさは日ごとに

語もて説き給ひし法(馬太五至七)は、今此大匠によりて色彩と形象ともて現されたるなり。吾人はラファエロと共に膝を此大匠の技倆の前に屈せむとす。此數多き預言者は、一つとして同じ人の石もて刻める摩西に劣ることなし。何等の魁偉なる人物ぞ。堂に入るものゝ心目は先づこれがために奪はるゝなり。

吾人はこゝに心目を淨め畢りて、さて頭を擧げて堂の後壁に向ふなり。下は大床より上は天井に至るまで、立錐の地を剩さざるこの大密畫は、即ち是れ一顆の寶玉にして、堂内の諸畫は悉くこれを填めむがために設けし文飾ある梓たるに過ぎず。これを世の季の審判の圖となす。

判官たる基督は雲中に立てり。使徒と聖母とは不便なる人類のために憐を乞はむとて手をさし伸べたり。死人は墓碣を揺り上げて起たむとす。恵に逢へる精靈は拜みつゝ高く翔り、地獄はその腰を開いて犧牲を呑めり。宣告を受けたる同胞の早く毒蛇に巻かれたるを、雲に駕せる雲の掬け出さむとするあり。悔い恨める罪人の拳もて我腕を撃ちつゝ、地獄の底深く沈み行くあり。天堂と地獄との間には、或は登り或は降る神將力士あまたありて、例の大膽なる遠近

法もて寫し出されたり。優しく人を恤みがほなる天使、再會して相悦べる雲ども、金笛の響に母の懷に俯したる穉子など、いづれ自然ならざるなく、看るものは覺えず身を圖中に貰きて、審判のことばに耳を傾く。ミケランジェロは蓋し能くダンテの歌ひしところを畫けるなり。

恰も好し將に沒せむとする夕日はそのなごりの光を最高列の窓より射込みたり。圖の下端なる死人の起つあたり、穢せる羅刹の罪あるものを拉き去るあたりは、早や暗黒裡に沒せるに、基督とその周囲なる天翔る雲とは猶金色に照されたり。日の入ると共に最後の燭は吹き滅されて、讀誦は全く果てたり。暗黒は審判の圖の全面を覆へり。絳聲肉聲は又湧きて、世の季の審判の喜怒哀樂皆洋々たる音となりつゝ、われ等の頭上を漲り過ぐ。

法皇は式の衣を脱ぎて、贅阜の前に立ち、十字架を拜せり。金笛の響凄じく、「ホブルス、メウス、クキット、フェチイ、チビー」の歌は起りぬ。低階の調に維る軟なる天使の聲は、男の胸より出でず、女の胸より出でず、こは天上より來れるなり。こは大使の涙の解けて旋律に入りたるなり。

われはこれを聴きて、力づき廻り、この頃に

なき歡喜は胸に滿ちたり。われはアモン・オヤタを愛し、ベルナルドオを愛せり。この瞬時の愛はかの天上の雲の相愛するに殊ならざるべし。祈禱の我に與へざりし安慰は、今音樂にて我に授けられたるなり。

### 友誼と愛情と

式終りてベルナルドオが許を訪ひぬ。手を握り襟を披きて語るに、高興は能辯の母なるを知りぬ。けふ聞きつるアレエグリー(寺樂の作者)が曲、我が夢物語めきたる生涯、我と主人との友誼は我に十分なる談資を與へたり。けふの樂はいかに我愛を拂ひし。未だ聴かざりし時の我疑懼、鬱悶、苦惱は幾何なりし。われは此等の事を殘なく物語りしが、唯これが因縁をなし、ものゝ主に我友なりしか、又はアモンチャタなりしかをば論じ究めざりき。我が今友に對して展べ聞くことを敢てせざる心の裝はこれ一つのみなりき。友は打ち笑ひて、さて一面倒なる男かな、カムパニアの羊かひの頭よりボルゲエゼの館に招かるゝまで、女子の手して育てられしさへあるに、「ジェスキタ」派の學校に在りしなれば、斯くむづかしき性質にはなりしならむ、切角の伊太利の熱血には山羊の乳を雜ぜ

我が遂にアントニオに及ばざるところぞといひぬ。吾友の言ふところは實錄なりき。されど當時我を傷ること此實錄より甚しきはあらざりしなり。

精進の最後廻は来ぬ。外國人は多く羅馬に歸り集ひぬ。ポ、ロ門よりもジョヴァンニ門よりも、馬車相驅逐して進み入りぬ。水曜日午後にはワチカアノのシクスツス堂にて「ミゼレレ」(ミゼレレ、メイ、ドミネ、憐れを我に垂れよ、主よの句に取りたるにて、第五十頌の名なり)の樂あり。われは樂を聴きて悶を遣らむがために往きぬ。聴衆は堂の内外に押し掛け居たり。前なる椅子には貴婦人肩を連ねたり。色組、天鵝絨も飾れる觀棚の背後には、外國の工者並び坐せり。法皇の護衛なる瑞西隊は正装して、その上官は鑒に唐頭を插めり。この装束は若き貴婦人に會釋せるベルナルドオには殊に好く似合ひたり。

われ裏面より埒に近き處に席を占めしに、こは歌者の席なる斗出せる棚に遠からざりき。背後には許多の英吉利人あり。この人々は謝肉祭の頃假粧して街頭を彷徨したりしが、こゝにさへ假粧して集ひしこそ可笑しけれ。推するにその打扮は軍隊の號衣に擬したるものならむ。

されど十歳許の童までこれを着けたらはいかにぞや。その華美ならむことを欲することの甚しきを證せむがために、こゝに一例を舉げむに、其人の上衣は淡碧にして銀絲の縫ひあり、長靴には黄金を鏤め、扁圓なる帽には羽毛連珠を着けたり。英吉利人のかゝる習をなししは、美しき號衣の好き座席を得しむる利益を知りたるためなるべし。我儕よりは笑を抑ふる聲洩れたり。されどわがそを可笑しと見しは、唯一瞬間なりき。

老いたる僧官達は紫天鵝絨の袍の領に貂の白き毛革を附けたるを穿て、埒の内に半圍狀をなして列び坐せり。僧官達の裾を捧げ來し僧等は其足元に蹲りぬ。教皇の傍なる小き屏は開きぬ。そこより出でたるは、白斬を戴き濃赤色の袍を纏へる法皇なりき。法皇は交椅に坐したり。侍者等は香爐を揺り動したり。紅衣の若僧の松明取りたるもの數人法皇と賛卓との前に跪けり。

讀誦は始まりぬ。(絃歌に先だちて十五章の讀誦あり。壇上に巨燭十五枝を燃やしおきて、一章終るごとに一燭を滅す。)われは心を死せる文字の間に潛むること能はず、魂を彼のミケランジェロか世に罕なる丹青の力もて此堂の

天井と四壁とに現せしめたる幻界に馳せたり。その活けるが如き預言者等の形は一個々々皆大勝の藝術論の資をなすに餘あるべし。その力量ある容貌風采とこれを圍める美しき羽ある兒の羣とは、我眼を引くこと磁石の鐵を引く如くなりき。こは畫にあらざる。清ける神人なり。エリが果を夫に贈りし智慧の木は靈智として彼處に立てり。父なる神は、占の書上の作れる如く羽ある童に擔はれたるにはあらで、その肢體の上、その風に翻る衣裳の上に、許多の羽ある童を載せつゝ、水の上を天翔り給ふ。われはけふ始めて此畫を觀たるにあらず。されど此畫の我心を動かすこと今日の如きは未だ有らず。われはけふの群集のためにや、わが然したる情のためにや知らねど、此畫中に限なき時趣あるを認めたり。或け想ふにこは我が抒情の興多き心を畫中に投じ入れたるにはあらずや。それは兎まれ角まれ、此畫に到して此情をなすは、恐らくは獨り我のみならず、こは我に先たてる幾多の詩人の亦免れざるところなりしなるべし。

險しきを行くこと夷なる如き筆力、望み瞻る方物に従ひて無遠慮たるまで肢體の尺を縮めたる遠近法は、個々の人物をして躍りて壁面を出でしめむとす。昔基督の山に在りて



エトロの寺に誘ひぬ。嘗て外國人ありて此寺の堂奥はこゝに盡きたりとおもひぬといふ、いと廣き前庭に、人あまた群れたるさま、大路の上又天使橋の上に殊ならず。羅馬の民はけふ悉くこゝに集へるなり。されば彼外國人ならぬものも、おなじ迷を起すべしと思はる。何故といふに、人愈々衆くして廳は愈々潤しと見ゆればなり。

歌は頭の上に起りぬ。伶人の群をば棚の二箇處に居らせて、其聲相應するやうにせり。群衆は洗足の禮の今始まるを見むとて押し合へり。(此日法皇老若の僧徒十三人の足を洗ひ、僧徒は法皇の手に接吻して、おのゝ「マチオラ」の花束を賜り返くことなり。)偶々貴婦人席より我らに目視するものあり。誰ぞと視ればアモンチャタなりき。彼君は歸りぬ。彼君は此堂にあり。我胸はいたく騒げり。その席幸に遠からねば、我等は詞を交すことを得たり。姫は昨日歸りしかど、樂ははや果てし後にて、僅に「アエ、マリ」の時此寺には來ぬとなり。

姫。此寺の光景はきのふ暗くて見しかた、けふのめだたきにも増してめでたかりき。聖ビエトロの墓の前なる一燈の外には何の光もなく、その光さへ、最近き柱を照すに及ばざる程なる

に、人々跪きて禱れば、われも亦跪きぬ。緘黙の裡に無量の深秘あるをば、その時にこそ悟り侍りしかといふ。側にありし例の猶太婦人は、長き紗もて面を覆ひたれば、今までそれと知らざりしに、優しく我に會釋しつ。式は早や終りぬれば、姫はおのれを車に導くべき從者や來ると顧みたれど、その影だに見えず。若き人々の姫を認めて耳語き合ふもあれば、姫は早くこの堂を出でむとおもへる如し。われは車に導かむことを請ひしに、猶太婦人は直ちに手を我肘に懸け、姫は我と並びて行けり。我は姫に我肘に倚らむことを勧むる膽なかりき。されど表口の戸に近づきて、人の籠み合ふこと甚だしかりしとき、姫は手を我肘に懸けたり。我脈には火の循り行くを覺えき。車をば直ちに見出だしつ。わが暇を告げむとせしとき、姫今は精進の時なれば何もあらねど、夕餉參らすべければ來まざるやと案内したるに、姫は快手くおのれが座の向ひなる、櫓に外套、肩掛などあるを片付け、こゝに場所あり、いさ乗り給へと、我手を把りぬ。共に車に載せむといひしならぬを、

姫の耳疎くしてかく聞き誤りたるなれば、姫ははしたなくや思ひけむ、顔さと赧めたり。されど我は思慮する遣もあらで乗り遷り、御者も亦早く車を驅りぬ。膳は豊なるにはあらねど、一として王侯の口に上すとも好かるべき饌澤品ならぬはなし。姫はフイレンチエにての事細かに語りて、さて精進日の羅馬はいかなりしと問ひぬ。こは我がためにはあからさまに答ふべくもあらぬ問なりき。

われ。土曜日には猶太教徒の洗禮あるべし。君も往きて觀給ふべきか。此詞は料らず我口より出でしが、われは忽ち彼姫の側にあるを思ひ出だして、氣遣はしげにかなたを見き。姫。否、心に掛け給ふな。御身の詞は聞えざりき。されど聞ゆとも惡しく聞くべうもあらず。唯々彼人の往かむは安ならねば、我もえ往かざるべし。そが上コンスタンチヌスの寺なる彼儀式は固より飾り愛でたからぬ事なり。(この儀式は歲ごとに基督再生祭に先だつこと一日にして行へり。猶太教徒若くは回々教徒數人をして加特力教に歸せしめ、洗禮を行ふなり。羅馬年中行事にシイ、アフ、ハイル、バツテシイモ、デイ、エブレイ、エ、ツルキイと記せり。)一僧侶は異教の人の歸依せるをもて、正法の功の所爲となし、看る人に誇れども、その異教の人のまことに心より宗旨を改むるは稀なり。われもをさ

られたり、トラップ派の僧侶めきたる制欲は身を病ましめたり、馴れたる小鳥一羽ありて、美しき聲を汝を喚び、夢幻境を出で現實界に入らしめざることを憶なれ、汝が心身の全く癒えむは人なみになりたる上の事ぞといひぬ。われ。我等二人の性は懸隔すること餘りに甚し。然るを我は怜しきまで汝を愛せり。折々は共に棲まばやとさへ思ふことあり。友。そは實に我等を温めざるのみならず、却りて何時ともなくこの交を絶つべし。友誼と戀情とは別離によりて長ず。我は時に夫婦の生活のいかに我を倦ましむべきかを思へり。斷えず相見て互に心の底まで知りあはむ程興なき事はあらざるべし。さればおほかたの夫婦は幾もあらぬに厭き果つれども、名聞を憚ると人よきとにて、其縁の絲は猶繋がれたるなり。我は思ふに、我情に一女子のために燃えむも、その女子の情に我に過ぎたらむも、その箇の相合ふ時は即ち相滅する時ならむ。愛とは得むと欲する心なり。得むと欲する心は既に得て止むべし。われ。若し汝が妻アヌンチャタの如く美しく又賢からむには奈何。友。其舊薇花の美しき間は、わが愛すべきこと慥なり。されど色香一たび失せたらむ日には、われは我心のい

かになり行くべきを知らず。汝はわが今何事を思ひしかを知らず。この心は忽ち生し忽ち滅すれど、今始めて生ぜるにはあらず。われは汝の血のいかに赤きかを見むと願ふことあらむも計られず。されどわれには智あり。汝は我友なり。わが潔白なる友なり。縱令われ等二人同じ女に懸想することあらむも、相聞ふには至らざるべし、斯く言ひつゝ友は聲高く笑ひ、我首を抱きて戯れながらにいふやう。我に馴れたる小鳥ありてその情はいと濃かなれど、この頃は些し濃かなるに過ぎて厭はしくなりぬ。思ふに汝には氣に入るべし。こよひ我と共に來よ。親友の間には隠すべきことなし。面白く一夜を遊び明さむ。さて日曜日にならば、法皇は我等が罪を洗ひ淨め給ふべきぞ。われ。否、我は共に往かざるべし。友。そは卑怯なり。汝は汝の血を傾け盡して、只だ山羊の乳のみを留めむとするか。汝が日は我日に等しく輝くことあり。われは嘗てこれを見き。汝が鬱悶、汝が苦惱、汝が懺悔、是れ畢竟何物ぞ。われあからさまに言ふべきか。是れ得むと欲して得ざるところあるなり。その得ざるところのは、赤き唇なり、軟なる膚なり。汝が假面の被りさま拙ければ、われは明白に看破せり。いざ往いてそ

の得むと欲する所しものを得よ。汝等といはは、そは卑怯なり、臆怖なり。おな。止めよ。そは餘りなる詞なり。そは我を辱むる詞なり。友。されど汝はその唇を止むじ受けざることも能はざるべし。これを聞きしとき、我血は上りて頭を衝きしが、我涙も小湧て目に溢れたり。いかなれば汝はかくまでに無情なる。我は汝を愛し汝は我を辱せむとす。アヌンチャタと汝との間にわれ立てりと思へるにはあらざや。アヌンチャタの我を視ること汝より厚しとおもへるにはあらずや。友。否、決して然らず。わが空想家ならずして思遺少きは汝も知りたらむ。されど女の事をば姑く置け。唯々心得がたきは、汝がいつも愛々といふことなり。我等二人は手を握りて友となりたり。その外には何も無し。我は汝と共に存張すること能はず。我をばたゞ此儘にてあらせよ。對話はおほよそ此の如くなりき。ベルナルドオが指筋は痛く我胸を傷けしが、別に臨みて我に握らせたる手は、遂にわれ等が交情を滅するに至らずして止みぬ。

### そさなき昔

翌日は木曜の祭日なりき。鐘の音は我を聖ビ

館は羅馬の畫廊のうちにて最も備れる一つなり。フランチェスカの君の釋き我を伴ひ往き給ひしはかしこなれば、アルバニが畫の羽ある童は皆わが年ごろの相識なり。

靜なる我室に歸りて、つらく物を思ふに、ベルナルドオはまことに彼君を戀ふるに非ず。卑しき色慾を知りて、高き愛情を解せざる男の心と、深けれども能く澹泊に、大いながらも能く抑遜せる我心とは、目を同じくして語るべからず。さきの日の物語の憎かりしことよ。彼はたゞ驕慢なり。彼はたゞ放縱なり。かくて飽くまで我を傷けたり。そはアヌンチヤタの我に優しきを始みてなるべし。初め我を紹介せしは、いかに彼男なりき。されど今その心を推すれば、好意とはおもはれず。おのが風采態度のすぐれたるを彼君に見するとき、その側に世馴れぬ我を居らせて反映せしめむためにはあらずや。さるを我歌我詩は端なく彼君の心になひぬ。姫の心はこれより萌せるならむ。さて我を又姫に逢はせじとて、かくは我を脅ししなるべし。幸にわれ好き機會を得て今は姫との交ひと深くなりぬ。姫は我を憐れり。加之姫は我戀を知りたり。かく思ひつゞけつゝ、我は枕に接吻せり。さるにても口惜しき

は、わが意氣地なき性質なり。いかなれば我は先の目直ちに彼の無禮を責めざりしぞ。かの詞にはかく答ふべかりしなり。かの辱をばかく雪ぐべかりしなり。我血は湧き上りたり。無上の快樂に無比の慍恨打ち雜りて、我は睡ること能はざりしが、曉近くおもひの外に安なる夢を結びぬ。

## 畫廊

翌朝は夙く起き、管守を訪ひて預めことわりおき、さて姫と姫とを急がせつゝ共にボルゲエゼの館に往きぬ。

畫廊はわが碑かりしとき、惠深き貴婦人の我を伴ひ往きて、おろかなる問、いまだしき感の我口より出で我言に發するごとに、面白しとて樂み笑ひ給ひしところにして、又わが獨り入りて遊び暮らしところなれば、今アヌンチヤタを導き往くこととなりたる我胸には言ひ知らず怪しき情湧り起れり。既に入りて畫を看れば、幅ごとに舊知なるごとく思はる。されど姫は却りてこれを知ること我より深かりき。姫は生れながらの官能に養ひ得たる騷亂をさへ具へたれば、その妙處として指し示すところは悉く我を服せしめ、我にその神會の尋常に非

ざるを歎ぜしめたり。

姫はジェラルドオ、デル、ノッチイの名ある作なるロオト(ソドムに住みしハランの子)とその女兒との圖の前に立てり。われはをゝしき父の面、これに酒を勧むる樂しけなる少女の姿、暗く繁りあひたる木立のあなたに見ゆる夕映の空などめでたしと釋へしに、姫我ことばを遮りて、げに／＼奇なると激せる情もて畫けるものと覺し、作者の筆の傳色表情の一面は定に貴重べし、さるを此の如き題(ロオトは其女子と通じたり)を選びしこそ心得られぬ、畫にも禮儀あり、品性あらむは我がつねに望む所なり、コルレジオオがダナエなども、己れは人の愛つらむやうには愛でず、少女ダナエを謂ふ、希臘諸神の祖なるチエウス黄金の雨となりて遺き給ひ、ベルセウスを生ませ給ふの貌はいかにも美しく、臥床の上にて黄金撒き集むる羽ある童の形もいと神々しけれど、その事餘りにみだりがはしくして、興さむる心地す、ラファエロの大なるはこゝにあり、わが知れる限は、その探るところの題、毎に高雅にして些の穢れだになし、かくてこそめでたき聖母の面影をば傳ふべかりしなれといふ。われ。仰せは理あるに似たれども、畫の妙は題の穢を忘れしむること



なき時一たび往きて觀しことあり。その折の厭ふべき模様は今に至るまで忘れず。拉きしは六つ七つばかりの猶太人の童なりき。櫛の痕なき頭髮の蓬々たるに、寺の贈なる麗しき素絹の上衣を纏へり。靴と襪とは汚れ裂けたるまゝなり。後に跟きて來たるは同じさまに汚れたる衣着たる父母なりき。この父母はおのれ等の信ぜざる後世のために、その一人の童を賣りしなるべし。われ。君はをさなき時この羅馬にありてそを見きとのたまふか。姫。然なり。されど我は羅馬のものにはあらず。われ。我は姫で君が歌を聴きしとき、直ちに君のむかし識りたる人なることを想ひき。何を何故とも言ひ難けれど、この念は今も猶失することなし。若しわれ等輪廻應報の教を信ぜば、われも君も前生は小鳥にて、おなじ梢に飛びかひぬともいひつべし。君にはさる記念なしや。何處にてか我を見しことありとおぼさずや。姫は我と目を見あはせて、絶てきる事なしと答へき。われ詞を續きて。初めわれ君は穉きときより西班牙に居給ひぬと思ひしに、今のおん詞にては羅馬にも居ましなり。我惑はいよ／＼深くなりぬ。君既にをさなくして此都に居給ひきといへば、若しこの稚き子等と共に、「アラ

チエリ」の寺にて説教のまねし給ひしことあらざや。姫。あり／＼。まことにさやうなる事侍りき。さてはかの折人々の日に留まりし童はアントニオ、おん身なりしか。われ。いかにも初めに留まりしは我なりき。されど勝をば君に譲りしなり。姫はげに思ひも掛けぬ事かなと、我兩手を把りて我面を見るに、姫さへその氣色の常ならぬを訝りて、椅子をゐざらせ、我等が方をうちまもりぬ。姫は珍らしき母會の顔を木を廻に説き聞せつ。われ。我母もその外の人々も暫くは君が上をのみ物語りぬ。その姿のやさしき、その聲の軟きをば、屏き我心にさへ妬ましきやうに覺えき。姫。その時君は金の錠附きたる短き上衣を着たまひしこと今も忘れず。その衣をめづらしと見しゆゑ、久しく記憶に残れるなるべし。我。君は父胸の上に美しき赤き鈕を垂れ給ひぬ。されど最も我目に留まりしはそれにはあらず。君が日、君が黒髪なりき。人となり給へる今も、その儼は明に残れり。始て君がデドに扮し給へるを見しとき、われは直ちにこの事をベルナルドナに語りぬ。さるをベルナルドナはそを我迷ぞといひ消して、却りておのれが早く君を見きと覺ゆる由を語りぬ。姫、そは又いかにしてと問ひし

が、その聲うち顫ふ如くなりき。われ。ベルナルドナが君を見きといふは、いたく變りたる境界なり。惡しき聞き給ひそ。ベルナルドナも後に誤れることを覺りぬ。君が髪の色濃きなど、人にしか思はるゝ端となりしなるべし。君は、君はわが加特力教の民にあらず、されば、アラチエリ」の寺にて説教のまねし給ふ筈なしとの事なりき。姫は廻の方を指さして、さては我友とおなじ教の民ぞといひしなるべしといふ。われは直にその手を取りて、わが詞のなめしきを咎め給ふたと誦したり。姫微笑みて、君が友の我を猶太少女とおもひきとて、われ争でか心に掛くべき、君は可笑しき人かなといひぬ。この話は我等の交をひと際深くしたるやうなりき。わが日頃の愛さは悉く散じたり。さてわが再び見じとの決心は、生憎にまた悉く消え失せたり。

姫はふと基督再生祭前のこの頃、既館中なる羅馬の畫廊の事を思ひ出で、かゝる時好き傳を得て往き看ば、いと面白かるべしといふに、姫の願としいへば何事をも協へむとおもふわれ、昔にボルゲゼの館の管守、門番など皆識りたれば、それは容易き事なりとて、あくる朝姫と廻とを伴ひ往かむことを約しつ。かの

事あるごとに、我は前の日には必ず氣遣ひ愛ふる習なりしが、アモンチャタに對する戀は我に彼友に抗する心を生ぜしめき。さきには友我を性格なし、意志なしと罵りき。今はわれ友に見すに我性格と我意志とをもてすべしとおもひぬ。

姫が猶太教徒の籠の内に差はれきといふ詞は、絶ず我耳の根にあり。依りておもふに、友がハノホの許にて見きといふ少女はアモンチャタなりしならむ。されど又姫にそを問ふ機會あるべきか、心許なし。

あくる日往きしときは、姫は一間にありて某の役を演じ居たり。われはおうなに物言ひころみしに、この人はおもひしよりも耳疎かりき。されどそのさま我が詞を交ふるを喜べる如し。われは前の日即興の詩を歌ひしとき、この人の嬉み聴けるさまなりしをおもひ出で、その故をたづねしに、あやしとおもひ給ひしも理なり。君の面を見、君の詞の端々を聞きて、おほよそに解したるなり、さてその解したるころはいとめでたかりき。平生アモンチャタがうたふを聴くときも亦同じ、耳の遠くなりゆくまゝに、目もて人の聲を聞くすべをば、やうやう養ひ成せりといふ。姫はベルナルドオが上

を開ひ、そのきのふ留守の間におとづれて、共に畫廊に往くこと能はざりしを惜みき。われ姫がベルナルドオを喜べるゆゑを問ふに、かの人の心さきには優れたるふしあり、われその證を見しことあればよく知りたり、猶太の徒も基督の徒も、神の日より祝ば同じかるべければ、彼人の行末を護り給ふならむといふ。やうやくにして姫はことは多くなりぬ。その姫を愛でいつくしも情はいと深しと見えたり。物語のはしより推するに、姫が過ぎ來し方のおほかたは明かなりぬ。姫は西班牙に生れき。父も母も彼國の人なり。釋くて羅馬に來つるに、ふた親はやく身まかりて、頼るべき方もなし。猶太の翁ハノホは西班牙に旅せしころ、彼親達を識りつれば、孤兒を引き取りて養へりしに、故郷なる某の貴婦人あはれがりて迎へ歸り、音樂の師に就きて學ばしめき。その頃果だててを盡しに、姫の餘りにつれなかりしかば、公子その恨にえたへて、果はおそろしき計をさへ運らしつ。その始末をば姫深く秘めかくす様なれど、姫の命も危かるべき程の事なりきとぞ。姫は彼公子に索ね出されじとて、再び羅馬に逃れ來たり。かくて昔のやしなひ親

にたよりて、人日少き猶太廟に潛み居たるは、一年半ばかり前の事といへば、ベルナルドオが逢ひしは此時なり。幾もなくして彼公子身まかりぬ。姫はこれより一身をミネルワの神(藝術の神)に捧げまつりて、その始て桂冠を戴きはナポリにての催しなりき。姫はその頃より姫のほとりを離れずといふ。語り畢りて姫は、姫の才あり智ありて、敬神の心いよく深きを稱ふこと頻りなりき。

旅館を出でしは祝射の眞盛なりき。玄關よりも怒より、小銃銃などの空射をなせり。こは精進日の終を告ぐるなり。寺々の壁畫を覆へる黒布をば、此聲とともに蔽りて落すなり。鬱陶しき時はけふ去りて、蘇生祭のうれしき月はあすよりぞ來るなる。その嬉しさはアモンチャタと姫とを祭見に誘ひ得たるにて、又一層を加へたり。

### 蘇生祭

祭の鐘は鳴りわたれり。僧官を載せたる彩車は聖ビエトロの寺に向ひて奔りゆく。車の後なる踏板には、式の服着たる僮僕あまた立てり。外國人の車馬、ところの子女の袂段に、疾き巷の往來はむづかしき程になりぬ。神使の丘

もあるべし。姫。それはめて有るべからざる事なり。藝術はその枝その葉の末までも、清淨醇白なるべきもので、理想の高潔は人を動かすこと形式の美麗に倍す。古の作者の手に成りし聖母の像を視るに、すべて硬く鋭くして、支那人の畫もかくやとおもはるれども、我はこれに打ち向ふごとに、必ず心の底に徹する如き念をなせり。この高潔といふものは、その作畫者のために缺くべからざること、度曲者に於けると同じ。名作中こゝかしに稍々過ぎたりと見ゆる節あるをば、その作者の一時の出来心と看做して、恕すこともあるべけれど、その疵瑕は遂に疵瑕たることを免るべからず。わがまことに愛づるは無瑕の美玉にこそ。われ。さらば君は變化を命題の間に求めむことをばとし給はずや。いかなる大家鉅匠にても、幅ごとに題を同うせば人の厭倦を招くなるべし。姫。否々、そは我が言はむと欲せしところにあらず。わが本意は畫工に聖母のみ畫かせむとはあらず。めでたき山水も好し。賑はしき風俗畫、颯風に抗ふ舟の圖も好し。サルワトオレ、ロオザが山賊の圖もいかで好からざらむ。われは唯藝術の境に背德を容れじとこそ云へ。わが趣味より視れば、かの「シャリア」宮なるシ

ドオニイの畫の如きすら、その巧緻その汚穢を掩ふに足らず。君は猶彼圖を記し給ふや。圖に騎りたる農夫二人石垣の下を過ぐ。垣の上に欄襖ありて、一鼯鼠、一蚯蚓、一木竈これに集り、石面には「エツト、エゴオ、イン、アルカチア」と云ふ四つの拉句語を書したり。われ。その畫はラファエロの「キオリン」彈きの隣に懸けられたるを、われも記憶す。姫。さなり。そのラファエロが落駄の見苦しき彼圖の上邊にあるこそ憾なれ。

既にしてわれ等はフランチェスコ、アルバニイが四季の圖の前に来ぬ。われは昔稱かりし日にこゝに遊び、この圖の中なる狝ある童を見て感ぜし時の事を語りぬ。姫は君が稱くて樂しき日を送り給ひしこそ羨ましかれといひて、愛をかくすやうなるさまなり。昔の身の上や思ひ比べけむと、あはれに覺ゆ。われ。君とても樂しき日少なからざりしならむ。わが初めて相見しときは、君は幸ありげなるをさな子なりき、人々に感服られたるをさな子なりき。わが再び相逢ふ日は、羅馬全都の君がために狂するを見る。餘所目には君、まことに樂しく見え給へり。さるを心には樂しとおもひ給はずや。かく問ひつゝ、我は頭を傾けて姫の面を俯し視た

るに、姫はそのそこひ知られぬ日なざしもて打ち仰ぎ、そのめでくつがへられたるをさな子は、父もなく母もなきあはれなる身となりぬ、譬へば木葉落ち盡したる梢にとまる小鳥の如し、そを籠の内に養ひしは世の人にいやしまれ疎まらるゝ猶太教徒なり、その翼を張りておそろしき荒海の上に飛び出でたるはかの猶太教徒の恵なりといひかけて、忽ち頭を掉り倒かし、あな無益なる詞にもあるかな、由縁なき人のかしと聞き給ふべき筋の事にはあらぬをといふ。由縁なき人とはわれかと、姫の手首とりてさやくに、暫しあらぬ方打ち目守りてありしが、その面には憂の影消え去りて、微笑の波起りぬ。否々、われも樂しかりし日なきにあらず。その樂しかりし日をのみ憶ひてあるべきに、君が昔語を聞きて、端なくもわが心の裡に雕られたる圖を繰りひろげつゝ、身のめぐりなるめでたき畫どもを忘れたりとて、姫は我に先だちて歩を移しき。

わがアマンチヤタと老嫗とを伴ひて旅館にかへりしとき、門守る男はベルナルドオが留守におとづれしことを告げたり。我友はこの男の口より二婦人を連れ出だし、ものゝ我なるを聞けりといふ。友の怒は想ふに堪へたり。かゝる



せり。樂の聲、人の歡び呼ぶ聲の満ちわたれる  
 ビエトロの廣こうちに来りし時、火を換ふる相  
 圖傳へられぬ。御寺の屋根々々に分ち上したる  
 數百人は、一齊に鐵盤なる松脂環飾に火を  
 點す。小き燈のかずく、忽ち大火焰と化した  
 る如く、この時聖ビエトロの寺は羅馬の大都を  
 照すこと、いにしへベトレヘムの搖籃の上に照  
 りし星にもたとへつべきさまなり。(原註。寺  
 院もそのめぐりなる家屋も、皆石もて築き立て  
 たるものなれば、この盤中の火は松脂の盡くる  
 まで燃ゆれども、火廣あるべきやうなし。) 群衆  
 の歡び呼ぶ聲はいよいよ盛になりぬ。アヌンチ  
 ヤタこの活劇を眺めたるが、遽に我に向ひて  
 いふやう。かの大穹窿の上なる十字架に火皿を  
 結び付くる役こそおそろしけれ。おもし遣るに  
 身の毛いよ慄つ心地す。われ。げに埒及の尖塔  
 にも劣らぬ高きなり。かしこに攀ぢしむるには  
 膽だましひ世の常ならぬ役夫を選むことにて、  
 預め法皇の手より香油の繩を受くと聞けり。  
 姫。さてはひと時の美觀のために、人の命をさ  
 へ賭するなりしか。われ。これも神徳をかや  
 かさむとの業なり。世には卑しき限の事に性  
 命を危くする人さへ少からず。かく語るうち、  
 車の列は動きはじめたり。人々はモンテ、ピン

チオオの頂にゆきて、遙かにかややく御寺と  
 其光を浴むる市とを見むとす。われ重ねて。御  
 寺に光を放たせて、都の上に照りわたらしむる  
 は、いとめでたき意匠にてコレレジオオが不死  
 の夜の傑作も、これよりや落想しつるとおもは  
 る。姫。さし出がましけれど、そのおん説は時  
 代たがへり。彼圖は御寺に先だちて成りたり。  
 作者は空に憑りて想ひ得しなるべく、又まこと  
 に空に憑りて想ひ得たりとせむかた、脚本あり  
 とせむよりめでたからむ。モンテ、ピンチオオ  
 は餘りに離遠すべければ、やゝ遠きモンテ、マ  
 リヨへ往かばや。こゝより市門まではいと近け  
 ればといふ。われは駁者に命じて、柱廊の背後  
 を廻らしめ、幾ほどもなく市外に出でたり。丘  
 の半腹なる酒店の前に車を停めて見るに、穹窿  
 の火の美しさ、前に見つるとはまた趣を殊に  
 して、正面の蔭こそは隠れたれ、星を隠れたる  
 火輪の光の海に漂へるかとおもはる。この景  
 色は四邊のいと暗くして、大空なるまことの星  
 の白かねの色をなして、高く隔たりたる處に散  
 布せるによりて、いよいよその美觀を添へ、人  
 をして自然の大なるすら羅馬の蘇生祭には歩を  
 讀りたるを感ぜしむ。鐘の響、樂の聲はこゝま  
 でも聞えたり。

われは車を下りて、此の稍事を買はばやと  
 店の中に入りぬ。店の前には狭き廊ありて、  
 小竈に聖母を崇きまつり、さゝやかなる燈を  
 懸けたり。わが店を出でむとて彼竈の前に來ぬ  
 ととき、忽ちベルナルドオが吾前に立ち衆がり  
 たるを見き。その面の色は、むかしジェスキ  
 タ一派の學校のこゝろみの日に、柱冠を受け戴き  
 しをりに殊ならず。眼は熱を病める如くかや  
 けり。物狂ほしく力を籠めて我臂を握り、あや  
 しく抑へ鎮めたる聲して、アントニオ、われは  
 卑しき兇行者たらむを嫌へり、然らずは直ちに  
 此劊もて汝が、偽多き胸を刺すならむ、汝は  
 臆病ものなれば辭まむも知れぬと、われは強ひ  
 て潔き決闘を汝に求む、共に來れといふ。わ  
 れは把られたる臂を引き放さむとすまひつゝ、  
 ベルナルドオ、物にや狂へると問ふに、友は焦  
 燥つ聲を抑へて、叫ばむとならば叫べ、男らし  
 く立ち向ふ心なくば、人をも呼べ、この兩腕の  
 縛らるゝ迄には、汝が息の根とめでは置かじ、  
 兵はこゝにあり、我に恥ある殺人罪を犯させじ  
 とおもはば疾く來れといひつゝ、拳銃一つ我手  
 にわたし、われを廊の外に引き行かむとす。  
 われは過與されたる拳銃を持ちながら、獨身を  
 脱せむとして争へり。女。彼君は淺はかにも汝

の巔には、法皇の徽章、聖母の肖像を染めたる旗門き動けり。ピエトロの辻には樂人の群あり。道の傍には露肆をしつらひて、もう手さし仰べたる法皇授禪の木板書、念珠などを賣りたり。噴水の銀線は日にかじやけり。柱の下には榻あまた置きたるに、家の人も賓客も居ならびたり。群衆は忽ち寺門より溢り出でたり。供養の儀式盛樂を見聞き、礎柱の鐵釘、長槍などありがたき寶物を拜み得しなるべし。廣き十字街は人の頭の波打ちて、車は相寄り一隙間なき列をなせり。僧父少童には石像の臥に攀ぢ上れるあり。全羅馬の生活の脈は今此辻に搏動するかと思はる。既にして法皇の行列寺門を出づ。藍色の衣を纏へる僧六人に昇かしたる、華美なる手輿に乗りたるは法皇なり。若僧二人大なる孔雀の羽もて作りたる長柄の翳を取りて後に隨ひ、香爐搖り動かす童子は前に列びてぞゆく。輿に引き添ひて歩めるは僧官達なり。行列の門を出づるや、樂隊は一齊に聲を揚ぐ。輿を大理石階の上に昇き上げて、法皇の姿、廊の上に見ゆるを相圖として廣き辻なる老若の群衆は跪けり。隊伍をなせる兵士もこれに倣へり。こゝかしこに立てる人の残りしは、新教を奉ずる外國人なるべし。アモンチャ

タは停めたる車の内に跪きて、その美しき目を法皇の面に注けり。われは見るべからざる法雨のこの群の上に降り瀝ぎを覺えき。廊の上より紙二ひら刷り落つ。一は罪障消滅の符、一は惡敵調伏の符なり。衆人はその片端を得むとてひしめきあへり。鐘の音再び響き、奏樂又起りぬ。われ等の乗れる車の此辻を離るゝとき、ベルナルドオが馬、側を過ぎたり。馬上の友はアモンチャと媼とに禮して、我をば顧みざりき。媼は君が友の色の蒼さよ、病めるにあらずやとさゝやきぬ。われはたいさることはあらざるべしと答へしが、我心は明に友の面色土の如くなりし所以を知りたり。而してわれは我決心の期到れるを覺えき。わが姫を慕ふ情は甚だ深し。媼にしてわれを棄てずば、我は一生を此戀に委ぬとも可なり。われは嘗て我才の戲場に宜くして、我吶の喝采を博するに足るを驗し得たれば、一たび意を決して俳優の群に投ぜば、多少の發展を見むこと難からざるべし。ベルナルドオ畢竟何爲者ぞ。その年ごろ媼に近づかむとする心にして、公正なる情なれば、われ決してこれが妨碍をなさじ。友と我との間に擇ばむは、一にアモンチャタが寸心に存ず。媼我を取らば友去れかし。友

を取らば我退かむ。この日われは机に對ひて書を成し、これをベルナルドオが許に寄せたり。筆を落すに臨みて舊情を喚び起せば、不覺の涙紙上に迷りぬ。發送せし後は心や、安きに似たれど、或は媼を失はむをりの苦痛を想ひ遣りて、プロメテウスの鷲の嘴に刺さるゝ如き念をなし、或は媼に許されて戯場を雙楫のところとなさむ日の樂余何なるべきと思ひ浮べて、獨り微笑を催すなど、ほとく心亂れたる人に殊ならざりき。

### 燈籠、わが生涯の一轉機

夕の勤行の鐘響く頃、媼と媼とを伴ひて御所の燈籠見に往きぬ。聖ピエトロの側面には中央なる大穹隆、左右の小穹隆、正面の齋端、悉く透き徹りたる紙もこ製したる燈籠を懸け連ねたるが、その掛置いと巧なれば、此莊嚴なる大厦は火鐵の輪廓もて青空に畫き出されたるものゝ如くなり。人の群れ集へること、晝の祭の時に増されるにや、車をば始足にのみ曳かせて、俤に進む事を得たり。神使の橋の上より、御寺の全景を眺むるに、燈の光は黄なるテニエル河の波を射て、遊び嬉む人の眼を蔽せたる無數の舟を照し、爰に又一段の壯觀をな

墓門より下ること二三級なる窪みに、燃え残  
りたる焚火を圍める三個の人物あり。その火影  
の早く我目に映らざりしにても、我が慌てたる  
を知るに足るべし。火の左右に身を横へたる二  
人は、還ましげに肥えたる農夫なるが、毛を表  
にしたる羊の裘を纏ひ、太き長靴を穿き、  
聖母の圖を貼けたる尖帽を戴き、短き煙管を  
銜みて對面あり。第三個は鼠色の大外套に  
くるまり、帽をまぶかに被りてついに寄りか  
かりたるが、その身材はやしく、瓶を口にあ  
てゝ酒飲み居たり。

わが渠等を認めしとき、渠等も亦我を認めき。  
肥えたる二人は齊しく銃を操りて立ち上りた  
り。客人は何の用ありてこゝに來しぞ。われ。  
舟をたづねて河をこさむとす。三人は目を合せ  
たり。甲。むづかしきたづねものかな。掣け持  
ちて旅するものは知らず、こゝ等には舟も筏も  
なし。乙。客人は路にや迷ひ給ひし。こゝは物  
騒なる土地なり。デ、チュザアリが夥伴は遠き  
處まで根を張れば、法皇はいかに劔を揮り給ふ  
とも、御腕の痛むのみなり。甲。客人はなぞて  
何の器械をも持ち給はぬ。見られよ。この銃は  
三連發なり。爲損じたるときの用心には腰なる  
拳銃あり。丙。この小刀も馬鹿にはならぬ貨物

なり。(かの身材小さき男は氷の如き短劔を抜  
き出だして手に持ちたり。)乙。早く韃に納め  
よ。年若き客人は刃物は嫌ひなるべし。客人、  
われ等に逢ひ給ひしは爲合せなり。若し惡棍な  
どに逢ひ給はば、素裸にせられ給はむ。金あら  
ば我等にあづけ給へ。

われは今三人の何者なるかを知りたり。我五  
官は鈍りて、我性命は價なきものとなりぬ。  
諸君よ、わが持てる限の物をば、悉く贈るべ  
し、されどおん身等を壓かしむるに足らざるこ  
そ氣の毒なれと答へて、われは進寄りつゝ、手  
を我兜にさし籠みたり。われは兎兎の中に猶  
盾銀二つありしを記したり。而るに我手に觸れ  
たるは、重みある財布なりき。抽き出して見れ  
ば、手組の女ものなるが、その色は曾てアマン  
チヤタが嫗の手にありしものに似たり。落人の  
盤纏にて、危急の折に心づけたる、彼嫗の  
心根こそやさしけれ。三人ひとしくさし伸ぶる  
手を持たで、われは財布の底を掴みて振ひしに、  
焚火に近き區石の上に、こがねしろかね散り布  
けり。眞物ぞと呼びつゝ、人々拾ひ取りて、勿  
體なき事かな、盗人などに取られ給はばいかに  
し給ふといふ。われ。貨物はそれ丈なり。疾く  
我命を取り給へ。生甲斐なき身なれば毫しも惜

しとはおもはず。甲。思ひも寄らぬ事なり。我  
等はロツカ、デル、バアバに仕める正直なる百  
姓仲間なり。同じ教の人を敬ふ基督の徒な  
り。酒少し残りたり。これを飲みて、かく怪し  
き旅し給ふ事のもとを明し給へ。われ。そはわ  
が祕事なり。かく答へて我は彼瓶を受け、燥き  
たる明を潤したり。

三人は何事をかさやきあひしが、小男は嘲  
み笑ふ如き面持して我に向ひ、燐き夕のかは  
りに寒き夜をも忍び給へといひて立ちぬ。渠は  
驅歩の蹄の音をカムバニアの廣野に響かせて  
去りぬ。甲。いざ客人、船を待ち給はむは望な  
き事なり。我馬の尾に縋りて潤がむこともたや  
すかられば、鞍の半を分けて參らすべし。渠は  
我を後さまに馬の背に掻き載せて、おのれは前  
の方に防り、水に墜さぬ用心なりとて、太き綱  
を我胸と肘とのめぐりに巻きて、背中合せにし  
かと負ひたり。我には手先を動かす餘地にな  
かりき。還ましき馬は前脚もて搜りつゝ流に入  
りしが、水の胸腹に及ぶころほひより、巧に泳  
ぎて向ひの岸に着きぬ。渠は河ごしは済みたり  
と笑ひて、綱を弛むる如くなりしが、こたびは  
我背を緊しく縛りて、その端を鞍に結びつけ、  
鞍をしかと掴みておはせ、墜ちなば頸の骨をや



に靡きしならむ。汝は誇らしくも、そを我に、  
そを羅馬の民に示さむとす。われを出し拔きし  
は猶忍ぶべし。いかなれば我に申辭めきたる書  
を贈りて、重ねて我を辱めたる。われ。ペル  
ナルドオ、そは皆病める人の詞なり。先づその  
手を弛めずや。われは力を極めて友の體を檢  
れ退けたり。

その時われは銃聲の耳邊に轟くを聞きたり。  
我右臂には衝動を感じたり。烟は廊下に満  
ちたり。われは又叫ぶに似て叫ぶにあらざる一  
種の氣息を聞きたり。この氣息の響は我耳を襲  
ふよりは寧ろ我心を襲ひき。發したるは我手中  
の銃にして、黒く敷石を染めたる血に塗れて我  
前に横れるは我友なり。われは喪心者の如く  
凝立して、拘束せる五指の間に牢く拳銃を握  
みたり。

わが此不應此不幸の全範圍を感じしは、酒店  
の人の罵り喚ぎつゝ走り寄りアヌンチャタと姐  
との我前に来るを見し時なりき。わがベルナル  
ドオと呼びて、その軀に抱き付かむとするに先  
だちて、姉は早くもその傍に跪き、鮮血湧  
き出づる創口を押へたり。姉はかく我友をいた  
はりつゝ、血の色全く失せたる面を舉げて、  
我を凝視せり。姉は我臂を揺り動かして、疾

く此場をと呼べり。

われは胸裂くるが如き苦痛を覺えき。われは  
叫び出せり。思ひ掛けぬ怪我なり。殺さむと欲  
せしは他なり。銃は他の我にわたしなり。わ  
れは身を脱せむとして擔條に觸れたり。アヌン  
チャタ聞き給へ。我等二人は命に懸けて君を慕  
ひしなり。君がために血を流さむことは、われ  
も厭はざるべきこと、我友と同じ。われはおん  
身が一言を聞きて去らむ。おん身は我友を愛し  
給ひしか、我を愛し給ひしか。

友の介抱に餘念なき姉は、詞のあやもしどろ  
に、疾く往き給へといひて手を握りたり。姉は  
往き給へと繰反したり。われは心もそらに再  
び、友なりしか我なりしかと叫びたり。

その時われはアヌンチャタが友の上に俯して  
肩をその頬に觸るゝを見、その聲を呑みて微  
かに泣くを聞きたり。  
次第に集りたる衆人の中より、忽ち邏卒々々  
と呼ぶ聲を聞けり。われは目に見えぬ幾條の腕  
もて拉き去らるゝ心地して、此場を通れたり。

### 基督の徒

愛せられしは友なり。この一條の青筋は我渾  
身の血を濁して、人を殺せり友を殺せりといふ

悔悟の情の頭を擡ぐるをさへ妨げむとす。  
灌木叢草を踏みしだし、棘に面を傷られ、  
袖に袖を裂かれつゝも、幾枚の葡萄酒を限れる  
低き石垣を乗り越え乗り越え、指すかたをも分  
かでモンテ、マリヨの丘を走り下るに、聖ピエ  
トロの御寺の火は、昔カインの斧りしとき、同  
胞の軀を供へたる饗卓の火の如くてを照し、  
如くなり。(譯者云。カインは亞當が第一の子に  
して、弟を殺して神に供へき。)この間幾時を  
か經たる、知らず。わが足を馳めしは、黄なる  
テエルの流の前を遮るを見し時なりき。羅馬  
より下、地中海の荒波寄するあたりまで、この  
流には橋もなし、また索むとも舟もあらざるべ  
し。この時我は我胸を噛む卑怯の蛆の兩斷せ  
らるゝを覺えしが、そは一瞬の間の事に、  
蛆は忽ち蘇りたり。われは復たいかなる決  
斷をもたすこと能はざりき。  
われはふと首を回らしてあたりを見しに、我  
を距ること數歩の處に、故壇の址あり。むかし  
ドメニカが許に養はれし時、往きて遊びし家に  
比べれば、大さは倍して荒れたることも、人な  
り。顔れ隆々たるついの石に、三頭の馬を繋  
ぎたるが皆おのゝ、懸下に吊りたる一束の芻  
を嚼めり。

らず。されど我上に關はざる如くなりき。  
 我は飢を覺えずして、たゞ燃ゆる如き湯を覺えしかば、酒を飲みつゝ四邊を見たり。隅々には脱ぎ棄てたる衣服と解き卸したる兵器とあるのみ。一角に窺の如く窪みたる處あり。その天井には半ば皮割きたる兎二つ吊り下げたり。初め心付かざりしが、その窪みたる處には一人の坐せるあり。年老いたる嫗の身うち瘦せ細りたるが、却りて背直にすくやかげなる坐りざまして、あたりに心留めざる如く、手はゆるやかに糸車を廻せり。銀の如き髪は解けたるが、片頬に際ちかゝりて、褐色なる頸のめぐりに垂るゝを見る。その墨の如き瞳は、とこしへに苧環の上に凝注せり。焚きさしたる炭の半ば紅なるが、嫗の座の畔にちりびひたるは、妖魔の身邊に引くといふ奇しき圈とも看做さるべし。まことに是れ一幅クロトの活畫像なり。(譯者云。古説に三女ありて人生運命の泰否を掌る。性命の絲を繰るをクロトと曰ひ、これを握みたるをラヘシスと曰ひ、これを斷つをアトロ波斯と曰ふ。姉妹神なり。)

人々の我事にかゝつらはざりしは、久しからぬ程なりき。忽ち判問は始まりぬ。職業は何ぞ、資産ありや否や、親戚ありや否や、不いふこと

なりき。我は徐かに答へき。わが帯び來たところのものをは、最早君等に傾け贈りぬ。かくてこの身はやうなきし貨となりぬ。縦ひ羅馬わたりに持ち往きて沽らむとし給ふとも、肩銀一つ出すものだにあらじ。廉ある生活の業をも知らず。頃日は拿破里に往きて、客に題をたまはりて、卽座に歌作りて謳はむと志したり。斯く語るついでに、われはこたび身を以て逃れたる事のもとさへ、包み藏さずして告げぬ。唯々アモンチャタが上をば少しも言はざりき。さてわが物語の終は、この上殊なる望なければ、この身を官府に引き渡して、褒美にても受け給へといふことなりき。

一人の男のいはく。さりとては珍らしき望なるかな。想ふに羅馬市には、黄金の耳環を典して、客人を贖ひ取ることを乞まざる人あるならむ。拿破里の旅稼は、その後の事とし給はむも妨あらじ。さはあれ強ひて直ちに拿破里に往かむとならば、あぶなげなく踵を越さし申さむことも、亦我等の手中に在り。留りて此樂園に居らむとならば、それも好し。こゝに在るは善き人々なるをば、客人も夙く情け給ひしならむ。されど此等の事思ひ定め給はむには、先づ快く一夜の勞を費し給ふに若かず。こゝに住

き牀あり。それのみならず、來歴ある好き食をも借し參らむ。巽風吹く頃の夕立をも、雪ふぶきをを凌ぎし夜とて、單よりはづして投げ掛くるは、褐色なる大外套なり。牀といふは卓の一端の地上に敷ける蓆なり。その男は何やらむ一座のものに言置き、「デ センチイ、オオ、ミア、ベツチイナ(降り來よ、やよ、我戀人)」と俚歌口ずさみて出行きぬ。

## 血 書

われは眠ることを期せずして、身を蓆の上になし、前の日より恐ろしき經歷は魔夢の如く我心を劫し來りぬ。されど氣疲れ力衰へたればや目眼のづから合ひ、いつとは知らず深き眠に入りて、終日復た覺むることなかりき。

醒めたる時は心地爽かになりて、前に心身を苦めつる事ども、唯々是れ一場の夢かと思はるゝ程なりき。然はれそは一瞬の間に、身の在るところを顧み、四邊なる男等の聲みたる顔付を見るに及びては、我魔夢の儼然として動すべからざる事實なるを認めざることを得ざりき。

一客あり。灰色の外套を肩に引掛け、腰に

拙き給はむといひて、靴の踵を馬の脇に加ふれば、連なる男も同じく足をはたらかせたり。かくて二匹の馬三個の人は、弦を離れし矢の如くカムバニアの原野を横ぎりたり。前なる男の長き髪は、風に亂れて我頬を拂へり。顔れたる家の傍、斷えたる水道の柱弓の畔を、夢心に過ぎゆけば、血の如く紅なる大月地平線より輾り出で、輕く白き駕騎者の首を繞りてひらめき飛べり。

## 山 案

友を殺し、女に別れ、國を去りて、兇賊の馬背に縛められ、カムバニアの廣野を馳す。一切の事、おもへば夢の如く、その夢は又怪しくも恐ろしからずや。あはれ此夢いつかは醒めむ、醒めてこの怖るべき形相は消え滅びなむ。心を鎮めて目を閉れば、冷なる山おろしの風は我頬を繞りて吹けり。

山路にさしかかると覺しき時、騎者は背後なる我を顧みて詞をかけたなり。程なく大母の蔽膝の下に息らふべければ、客人も心安くおぼせよ。良き馬にあらずや。この印璽アントニオの禰を受けたなり。小童の絹の紐も飾りて牽き往きしに、經を聽かせ水を漉せられぬれば、

今年中はいかなる惡魔の障礙をも免るゝならむ。

岩間の細徑に踏み入る頃、東の天は白みわたりぬ。連なる騎者もさし寄せて、夜は明けむとす、客人の口疾せられぬ用心に、涼傘さしせ申さむと、大なる布を頭より被せ、頭のまはり結びたれば、それより方角だに辨へられず。諸手をば縛められたり。我身上は今や獵夫に獲られたる獸にも劣れり。されど愛に心味みたる上なれば、苦しと思はでせくぐまり居たり。

馬の前足は大方仰ぐのみなれど、ともすれば又暫し坂道を降る心地す。茂りあひたる梢は頻りに我頬を拂てり。道なき處をや騎り行くらむ、覺束なし。

久しき後馬より卸して、我を推して進ましむ。かれこれ復た隻語を交へず。狭き門を過ぎて、梯を降りぬ。心神定まらず、送迎忙はしき際の事とて、方角道程よくも辨へねど、山に入ることは、ただ深きにはあらずと思はれぬ。わがその何れの地なるを知りしは、年あまた過ぎての事なり。後には外國人も尋ね入り、畫上の筆にも上りぬ。こゝは、古のツスクルムの地なり。栗の林、丈高き月柱の村立ある丘陵にて、今フラスカアチと呼べるゝ處の背後にぞ、この古跡は

あなる。「クラテエクス」、野薔薇などの枝生ひ茂りて、重圍をなせる楊列の石紋を覆へり。山のところへには深き洞穴あり、石の穹窿あり。皆草叢に掩はれて、迫り視るにあらずは知れ難かるべし。谷のあなたに聳てるはアブルツチイの山にて、沼澤を限り、この邊の景に、物凄き色を添ふ。あはれ此山の容よ。この故址斷礎の間より望むばかり、人を動すことは、またあらぬなるべし。

騎者等の我を拉き往くは、とある洞窟の一つにて、その入口は石櫛の枝といろ／＼なる薔艸とに隠されたり。我等は足を駐めつ。徐かに口笛吹く聲と共に、扉を開く響す。再び数級石磴を下る。數人の亂れ語る聲我耳に入りし時、頭に纏へる巾は取り除けられぬ。わが身は大穹窿の裏に在り。中央なる大卓の上に眞鍮の燈一つ据ゑて、許多の燈心に火を點じ、遠しける人漢數人の羊の裘着たるが、圍み坐して骨牌を弄べり。火光の照し出せる面ざしは、苦みばしりて落ち着きさるたまなり。人々は生面の客あるを見ても、絶て怪みあふることなく、我に榻を與へて坐せしめ、我に盞を與へて飲ましめ、看せむとて鹽肉圍をさへ蔽りてくれり。その相語るを聞くに、方言にて解すべか



ることを得ぬなるべし。その杯を傾けて、歌ひて我等に聴せ給へ。出来好くば六日の期を一日位は延ばすべしといふ。男は手をさし伸べて、壁となる「キタルテ」を取りて我に授けつ。賊の群は立ちて我席を繞りたり。

われはそれを把りて暫く首を傾けたり。譯する所の題は巖穴山野にて、こは我が曾て経験せざるところなり。前の夜こゝに來し時は、目を掩はれたれば甲斐なし。昔見しところを言はゞ、羅馬のボルゲエゼ・バムフィリの兩苑に、些の松林ありしに過ぎず。まことの山としては、幼かりし程ドメニカが家の窓より望みしより外知らず。已むことなくば只一たび山を見き。ジェンツァノの花祭に往きし途すがらの事なり。ネミ湖畔の高原を歩みに、道は暗く静けき森林の間を通じたり。彼祭はわが爲には悲き祭なりければ、湖畔の道にて花束つくりしことをさへ、今猶忘れでありしなり。景は心目に上り來れり。今かく物語する時間の半をだに費さずして、景は情を生じ、情は景を生ずるほどに、我は絃を振きたり。情景は言の葉となり、言の葉は波起り波伏す詩句となりぬ。且我が歌ひしところを聴け。深く湖あり。暗き林はそれを環れり。湖の畔なる巖は聳ちて天を

摩せむとす。こゝに暴鸞の巢あり。母鳥は雛等に教へて、稗き翼を振はしめ、またその目を鋭くせむために、日輪を睨ましめき。授母鳥の云ひけるやう。汝達は諸鳥の王なるぞ。目は利く、拳は強し。いでや飛べ。飛びて母の側を去れ。我目は汝を送り、我情は彼の死に臨める大鵄の鋭舌の如く汝が上を歌ふべし。その歌は不撓の氣力を題とせむといひき。雛等は巢立せり。一隻は翅を近き巖の頂に斂めて、晴れたる空の日を凝視すること、其光のあらむ限を吸ひ取らむと欲する如くなりき。一隻は高く虚空に翔りて、大鴈を畫し、林樾沼澤を下瞰するが如くなりき。岸に近き水面には綠樹の影を倒せるありて、その中央には碧空の光を蘸すを見る。時に大魚の浮べるあり。その背は覆へりたる舟の如し。忽ち彼鸞は電の撃つ勢もて、きと卸し來つ。刃の如き利爪は魚の背を攫みき。母鳥は喜、色に形れたり。然るに鳥と魚とは力相若くものなりければ、鳥は魚を擧ぐることは能はず、魚は鳥を沈むることは能はず、打ち込みたる爪の深かりしために、これを抜かむとするも、亦意の如くならず。こゝに生死の争いは始まりぬ。今まで静なりける湖水の面は、これがために搖り動され、大鴈をなせる波は相重

りて岸に迫れり。既にして波上の鳥と波底の魚と、一齊に鎮まり、鸞の翼の水面を掩ふこと蓮葉の如くなりき。忽ち鸞翼は又聳ち起り、竹を割く如き聲と共に、一翼はひと水に着き、一翼は劇しく水を鞭ひ沐飛ばすと見る間に、鳥も魚も沈みて痕なくなりぬ。母鳥は悲鳴して、巖角なる一隻の雛を顧みるに、こもいつか在那里なりて、首を仰いで高く望めば、只一黒斑の日向ひて飛ぶを見き。母鳥は悲を轉じて喜となしたり。その胸は高く躍りて、その聲は折るれども撓まぬ力を歌ひぬ。我歌はこゝに終り、喝采の聲は座に滿ちぬ。獨り我は頗きもせで、龕の前なる老女をまもり居たり。そは我が歌ひて半に至りし時、老女の絲繰る手ややく緩く、はては全く歌みて、暗き瞳の光は我面を穿つ如く、こなたに注がれたればなり。又我が能く少時の夢を喚び起して、この詩中に入るゝことの、かくまで細かなることを得しは、この老女の振舞興りて力ありければなり。媼は忽ち身を起し、健かなる歩みざまして我前に來て云ふやう。能くも歌ひて、身のしろを顧み得つるよ。呪の響はやがて黄金の響ぞ。鳥と魚との水底に沈みし時にこそ、この姥は汝が尾の隠るところを見つれ。鸞よ。いで日に向

拳銃を帯びたるが、馬に騎りたる如く長椅に跨りて、男等と語れり。穹窿の隅の方には、彼の雑種いろしたる老女の初め如く坐して練車まはせるあり。黒地に畫ける像の如し。座のめぐりには、新き炭を添へて、その煖氣は室に満ちたり。われは客の、彈は脇を擦過りたり、些の血を失ひつれど、一月の間には治すべしといふを聞き得たり。

わが頭を抬げしを見て、われを鞍に縛せし男のいふやう。客人醒め給ひしよ。十二時間の熟睡は好き保養なるべし。こゝなるグレゴリオは羅馬より好き信をもて來たり。そはおん身の喜び給ふべき筋の事なり。手を下しはおん身に極つたり。時も所も符を合す如し。驕りたる評議廳の官人は、おん身がために、容赦なくその長襪を踏まれぬと見えたり。お身の大膽なる射撃に遭ひしは、評議官の従子なりき。これを聞きてわれは倅に、命にはさはずやと問ふことを得き。グレゴリオの云はく。先づ死なで済むべし。醫者は然云ひきとぞ。驚の如き呪ありといふ。美しき外國婦人の夜を徹して護り居たるに、醫者は心を勞し給ふな、本復疑なしといひきとぞといふ。我を伴ひ來し男の云はく。われおもふに、君は男の身を銷り射

給ひしのみにあらず。女の心をも亦銷り射給ひしなり。雌雄は今雙び飛べし。君は唯こゝに在せ。自由なる快活なる生活なり。君は小なる王者たることを得べし。而してその危さは決して世間の王位より甚しからず。酒は酌めども盡きざるべし。女は君を欺きし一人の代りに、幾人をも寵し給へ。同じく是れ生活なり、餘瀝を嘗むると、満碗を引くと、唯君が選み給ふに任す云ひき。

ベルナルドオは死せず。我は人を殺さず。この信は我がために起死の藥に伴しかりき。獨りアモンチャタを失ひつる憂に至りては、終に排するに由なきなり。われは猶豫することなく答へき。我身は只君等の處置するに任すべし。されどわが嘗て受けし教と、現に懷ける見とは、浮囚たるにあらずして、君が間に伍すべきやうなし。これを聞きて、我を伴ひ來し男の顔は、忽ち嚴なる色を見せたり。盾銀六百枚は定まりたる身のしろなり。それを六日間に拂ひ給はば君は自由の身なるべく、さらずば君が身は、生きながらか、殺してか、我物とせではおかじ。こは此處の掟なれば、君が紅顔も我丹心も、寛假の縁とはならぬなるべし。六百枚なくば、我等の義兄弟となりて生きむとも、彼處なる枯井

の底にて、相擁して永く眠れる人々の義兄弟となりて終らむとも、二つに一つと思はれよ。身のしろ求むる書をば、友達に寄せ給はむか、又彼歌女に寄せ給はむか。おん身の一撃嫌となりて、一人はその心を明しあひつれば、さばかりの報恩をば、喜びてなすなるべし。斯く語りつゝ、男は又からりと笑ひて云ふ。廉き價なり。この宿の客人に、還錢のかく差賸きことは、その例少からむ。都よりの馬のしろ、六日の旅籠を思ひ給へ。われ。我志をば既に述べたり。我はさる書をも作らざるべく、又君等が夥伴にも入らざるべし。男。さてさて強情なる人かな。されどその強情は憎くはあらず。我彈丸の汝が胸を貫かむまでも、その心をば讃めて進すべし。命惜まぬ客人よ。生くといふには種々あり。少年の心は物に感じ易しといふに、吾黨がかく果なく障なき世渡するを見て、羨ましとは思はずや。そが上おん身は詩人にて、即興詩もて口を糊せむといふにあらずや。吾黨の自由不羈の境界を見て心を動かすことはなきか。客人試みに此境界を歌ひ給へ。題をば炭火の間なる不撓の氣象とも曰ふべきならむ。客人若しこれを歌はば、彼生活といひ性命といふものゝ、樂む可く愛す可きを説かざ

むことを能くし給ふならむ。此巻の中なる祈誓の歌一つ讀みて聞せ給へとて、懷より小き讀美歌集一卷取出でたり。われいと易き程の事なりとて、讀み初めに、若者の黒き瞳子には、信心の色いと深く映りぬ。暫しありて若者我手を握りて云ふやう。いかなれば汝は復た此山を出でむとするか。人情の許多きは、山里も都大路も異なることなけれど、山里は爽かに涼しき風吹きて、住む人の少きこゝめでたけれ。汝はアリチアの姫とサエリ侯との昔がたりを知るならむ。増は卑しき農夫なりき。婦は貧しき家の子ながら、美しき少女なりき。侯爵の殿は婚禮の筈には新婦が師の相手となり、宵の間にしばし花園に出でよと誘ひ給へり。増この約を婦に聞きて、婦の衣裳を纏ひ、婦の面紗を被りて出でぬ。好くこそ來つれと引き寄せ給ふ殿の胸には、匕首の刃深く刺されぬ。これは昔がたりなり。われも此の如き貴人を知たり。そは某といふ伯爵の殿なりき。又此の如き塔を知りたり。唯夫婦は此の如く打明けて物言ふ性ならねば、新枕の樂しさを殿に譲りて、おのれは新佛の通夜することなりぬ。刃の許多き胸を貫きし時、膚は雪の如くかやきぬとぞ語りし。

わが心中には異怖と憐愍と交り起りぬ。われは詞はなくて、若者の面を打まもりしに、若者又云ふやう。彼も一時なり。此も一時なり。われを女の肌知らぬものと思ひ給ふな。イギリスの老婦人ありて、年若き男女と共に、拿破里へ往かむと、此山の麓を過ぎぬ。我等は此一群を馬車より拉き卸したり。我等は三人を擒にして、財物を掠め取りつ。少女は若き男の許嫁の婦なりしならむ。顔ばせつやゝかに、目なざし涼しかりき。男をば木に括りたり。女は狼處子なりき。われはサエリ侯に扮することを得たり。贈ひの金屈きて、一群の山を下りし時、少女の顔は色褪せて、目は光鈍りたりき。深山は蔭多きけにやあらむ。

この物語にわれは覺えず面をそむけしかば、若者は分疎らしく詞を添へて、されど新教の女なりき、惡魔の子なりきとつぶやきぬ。われ等二人はしばし語なくして相對へり。若者は今一つ讀み給へと乞ひぬ。われは喜びて又尊き書を開きつ。

## 封 傳

夕ぐれにフルキアの姫歸りて、われに一裹の文書を遞與して云ふやう。山々は濕衣を被き

たるぞ。眞立するには、好き折なり。往方は遙なるに、禿けたる巖の面には麴包の木生ふることなし。腹よく折へよといふ。若者のかひなくしく立ち働きて、忙しげに供ふる餓に、われは言はるゝ儘に飢を凌ぎつ。姫は古き外套を肩に被き、手を把りて暗き廊道を引き出でつゝ云ふやう。我憐愍ぞ。驅守る兵も汝が翼を遮ることあるまじきぞ。その一裹は尊き神符にて、また打出の小槌なり。おのが寶を握り出さむまで、事關くことはあらじ。黄金も出づべし、白銀も出づべしといふ。姫は瘦せたる唇さし伸べて、洞門を掩へる薔蘿の帳の如くなるを推し開くに、外面は暗夜なりき。濕りたる濃き霧は四方の山岳を繞れり。姫の道なき處を疾く奔るに、われはその外套の端を握りて、やうやう隨ひ行きぬ。木立草むらを左右に看過して、姫は魔神の如くわれを導き去りぬ。數時の後狭き山の峽に出でぬ。こゝに伊太利の深池にめづらしからぬ薔蘿小屋一つあり。籐に藁まぜて、棟より地まで葺き下せり。壁といふものなし。燈の光は低き戸の隙間洩りたり。姫は我を延きて進み入りぬ。小屋の裡け雪へば大なる蜂窩の如くにして、一方口より出で焚きたる烟は、あたりの物を殘なく眞黒に染めた



首を低れて不敢々々汝の命は神靈靈寶にも代へ  
じといひき。人々と媼との物語はこれにて止  
み、卓を圍める一座の興趣は漸くに加はりて、  
瓶は手より手にと忙はしく遣り取りせらるゝこ  
ととなりぬ。さて食を供するに至りて、媼の中  
にはわが肩を敲きて、皿に肉塊を盛りて呉るゝ  
もありき。唯々彼媼は故の如く、空閑に坐して、  
飲食の事には與らざりき。賊の一人は火をそ  
の座のめぐりに添へて、大母よ、汝は凍ゆるな  
らむといひき。我は媼の詞につきて熟くおも  
ふに、むかし母とマリウチアとに伴はれて、ホ  
ミ湖畔に花栗作りし時、わが上を占ひしことあ  
るは此媼なりしなるべし。我運命の此媼の手  
中にありと見ゆること、今更にあやしくこそ覺  
えらるれ。媼はわれに往々破里と書かしめき。  
こは固より我が願ふところなり。されど封傳な  
くして、いかにして拿破里には往かるべきぞ。  
父總令かしこに往き着かむも、語る人とは一  
人だに無き身の、誰に頼りてか活をなさむ。  
前にはわれ一たび即興詩もて世を渡らむとおも  
ひき。されど羅馬にて人を傷けたりと知られむ  
ことおそろしければ、舞臺に出づべきことろも  
なし。されど方言をばよく知りたり、聖母のわ  
れを見放ち給ふことだにあらずば、ともかくも

かくて一日一日と過ぎゆきぬ。新に來り加はる人もあり、又もとより居たる人の去りていづくにか往けるもあり。ある日彼姬さへ、ひねもす出で、歸らざりしかば、我は賊の一人とこの山奥の留守することとなりぬ。この男は年二十の上を一つばかりも超えたるならむ。顔は卑しげなるものから、美しき髪長く肩に掛かり、その目なごしには、常にいと憂はしげなる色見え、をり／＼は又手負ひたる跡などの如きおそろしき氣に現るゝことあり。我と此男とは暫し對ひ坐して語を交ふことなく、男は手と顔に加へて物案するさまなりしが、忽ち頭を舉げて面をまもりたり。

若者わかちはふと思ひ付おもひつきたる如ごとく。おん身みは物讀ものよみ

## 大澤、地中海、忙しき旅人

世の人はボンチネの大澤（バルウヂ、ボンチネ）といふ名を聞きて、見わたす限りの曠野に泥まじりの死水をたゝへたる間を、旅客の心細くもたどり行くらむやうにおもひ做すなるべし。そはいたく違へり。その土地の豊腴なることは、北伊太利ロムバルチアに比べて猶優りたりとも謂ふべく、茂りあふ草は葉肥えて勢旺なり。廣く平なる街道ありてこれを横斷せり。

（耶穌紀元前三百一十二年アビウス、クラウヂウスの築く所にして、今猶アビウス街道の名あり。）車にて行かば座席極めて安なるべく、菩提樹の街樹は鬱蒼として日を遮り、人に暑さを忘れしむ。路傍は高草と水草と、かはるゝ濃淡の緑を染め出せり。水は井字の溝洫に溢れて、處々の澁みには、丈高き蘆葦、葉潤き睡蓮（ニユムフェア）を長ず。羅馬の方より行けば左に山岳の空に聳ゆるあり。その半腹なる村落の白壁は、鼠いろなる岩石の間に亂點して、城郭かとあやまつる。左は海に向へる背野のあなたに、チルチエオの岬（プロモントリオ、チルチエオ）の隆く起れるあり。こは今こそ陸つゞきになりたれ、古のキルクが島にして、オヂツ

セウスが舟の着きはこゝなり。（ホメロスの詩に徴するに、トロヤの戰果て、後、希臘イタカ王オヂツセウスこの島に漂流せしに、妖婦キルク舟中の一行を變じて家となす、オヂツセウス神傳の藥草にて其妖術を破りぬといふ。）霧は歩むに従ひて散ぜり。晒せる布の如き溝渠、線なる甍の如き草原の上なる薄きぬは、次第に褰け去られたり。時はまだ二月未なれど、日はやゝ暑しと覺ゆる程に照りかゞやきぬ。水牛は高草の間に群れり。若駒の馳せ狂ひて、後脚もて水を蹴るときは、飛沫高く迸り上れり。その疾く捷き運動を、畫かく人に見せばやとぞ覺ゆる。左の方なる原中に一道の烟の大なる柱の如く騰るあり。こはこの地の習にて牧者どものおが小屋のめぐりなる野を燒きて、瘴氣を拂ふなるべし。

途にて農夫に逢ひぬ。その瘦せたる姿、黄ばみし面は、あたりの草木のすくやかに生ひ立てると表裏にて、家を出でたる枯骨にも譬へつべし。驢に騎りて、手に長き楯めきたるものを執れるが、こは水牛を率て返るとき、そを驅り集むる具なりとぞ。げにこゝらの水牛の多きことその幾何といふことを知らず。草むらを見もてゆけば、斗らず黒く醜き頭と光る眼とを認め得て、こゝにも臥したるよと驚くこと問々あり。

道に沿ひて處々に郵亭を設けたり。その造りざま、小きながら三層四層ならぬはなし。こは瘴氣を恐るればなり。亭は皆白壁なれど、礎より簷端迄、緑いろなる微隙間なく生ひたり。人も家も、渾べて腐朽の色をあらはして、日暖に草緑なる四邊の景と相容れざるものゝ如し。わが病める心はこれを見て、つくゝ人生の頼みがたきを感じたり。

「アエ、マリア一の鐘響くに先だつこと一時ばかりにして、澤地のはづれに出でぬ。山脈の黄なる巖は漸く迫り近きて、南國の風光に富めるテルチナの市は、忽ち我前に横りぬ。三株の棕櫚樹高く道の傍に立てるが、その實は累々として葉の間に垂れたり。山腹の果園は黄なる斑紋ある青甍に似たり。その斑紋は橘、柑子などの枝たわむ程みのりたるなり、一農家の前に熟し落ちたる橘を堆く積みたるを見るに、餘所にて栗など摺りおとして拂き寄するさまと殊なることなし。岩山のはざまよりは、青き迷迭香（ロスマリナス）、赤き紫羅棉花など生ひ上りたるが、その嶺にはチウダレイクンが廢城の殘壁ありて、猶巍々として雲を

り。梁柱はいふもさらなり。簾の一條だに漆の如く光らざるものなし。間の中央に、長さ二三尺、幅これに半ばしたる甌爐あり。炊ぐも煖むるも、皆こゝに火焚きてなすなるべし。炭と灰とはあたり散りばひたり。奥に孔ありて小き間につゞきたるが、そのさま芋塊に小芋の附きたる如し。その中には女子一人臥して、二三人の小兒はそのめぐりに横れり。隅の方に立てる驢は、頭を延べて客を見たり。主人なるべし、腰に山羊の皮を巻き、上半身は殆ど赤條々なる老夫は、起ちて媼の手に接吻し、一語を交へずして羊の皮をはふり、驢を門口に率き出し、手まねして我に騎れと教へぬ。媼は我に向ひて、カムバニアの馬に勝るべき足どりの駒なり、幸運の門出は今ぞときやきぬ。われはその志の嬌しければ、媼の手に接吻せむとせしに、媼は肩に手を掛け、額髪おし上げて、冷なる唇を我額に當てたり。

老夫は鞭を驢に加へて、おのれもひとと引き添ひつゝ、暗き徑を馳せ出せり。われは猶媼の二たび手もて揮くを見しが、その姿忽ち重る椅に隠れぬ。心細さに馬夫に物言ひ掛くれば、聞き分き難き聲立てゝ、指を唇に加へたり。さては瘖なるよと思ひぬ。いよく心も

となくて媼の授けし寒み引き出すに、種々の書ものありと覺ゆれど、夜暗うして一字だに見え分かず。兎角して喉がたになりぬ。路は山の背に出で、裸なる嶺には些許りなる蔓草纏ひ、灰色を帯びて緑なる亞爾鮮の葉は朝風に香を送りぬ。空には星猶輝けり。脚下には白霧の遠く漂へるを見る。是れ大澤の地なり。此澤はアルパノ山下に始まりて、北エルレトリより南テラチナに至る。馬夫のしばし歩を留めし時、われは仰いで青空の漸く紅に染まりゆきて、山々の色の青天鵝絨の如くなるを祝き。偶々山腹に火を焚くものあり。その黄なる焰は晴天の星の如くなりき。われは覺えず驢背に合掌して、神の恵の大なるを謝したり。

われは漸くにして媼の賜を見ることを得き。その一通の文書は羅馬警察衙の封傳にして、拿破里公使の奥がきあり。旅人の欄には分明に我氏名を記したり。一通は父拿破里アルコネツトオ銀行に振り込みたる爲換金五百「スクデイ」の券なり。これに添へたる紙片に二三行の女文字あり。手負ひたる人の上をば、みこゝろ安く思されよ。遠からぬ程に癒ゆべしと申すことに侍り。されどしばらくは羅馬に歸り給はぬこそよろしく侍らめとあり。フルキアは我を欺か

ざりき。わがためには、これに贈す神符あらじとおもひぬ。

道は少し夷になりぬ。とみれば一群の牧者あり。草を齧きて朝餉たらべて居たり。我馬夫は兼て相識れるものと覺しく、進み寄りて手まねするに、牧者は我等にその食を分たむといふ。水牛の乾酪と麵包にて飲ものには、驢の乳あり。われは快く此の食事をしたゝめしに、馬夫は手まねして別を告げたり。さて牧者のいふやう。この徑を下りゆき給へ。只だ山を左に見て行き給はゞ、小河の流に逢ひ給はむ。そは山より街道に出づる水なり。霧晴れなば、そより街樹の長く續けるを見給ふならむ。流に沿ひて街樹の方へ往き給はゞ、程なく街道の側なる廢寺の背後に出で給はむ。その寺今は「トルレ、デ、トレ、ポンテ」とて旅館屋となりたり。

日の暮れぬ内にテラチナに着き給ふべしといひぬ。我は此人々に報せむとおもふに、拿破里にて受取るべき爲換の外には、身に附けたるものなし。されど財布をこそ人にやりつれ、さきに兜兒の裡に入れ置きし「スクデイ」二つ猶在らば、人々に取らせむのをと、かい探ぐるにあらず。馬夫には領なる紺の紛脱解きて與へ、牧者等と握手して、ひとり徑を下りゆきぬ。



ひくれたる上小便銭さへ客に交付し、安着の後決算なり。

車主は客人も零錢の御用あるべければとて、

五「バオリ」の銀貨一枚最み出して我に渡しつ。

われ。さらば食卓の好き座席と臥床とを頼むなり。明日は滞なく車を出してよ。車主。勿論にこそ候へ。聖アントニオと我馬との思召

だにくるはずば、正三時には出で立つべし。されど明日はむづかしき日に候ふ。税關の調

べ二度手形の改め三度あるべし。さらば、平かに意はせ給へとて、車主は手を帽庇に加へ、

軽く頷きて去りぬ。

誘はれたる部屋は海に向へり。折しも風輕く起りて、窓の下には長き形したる波の寄せては

又返すを見る。こゝの景色はカムパニアの景色とは全く殊なるに、いかなれば吾胸中には、少

時の住家の事、ドメニカの嬪の事など浮び出でけむ。世の中は廣けれど、眞ごころより我上を

氣遣ひ呉るゝ人、彼嬪の如きはあらじ。近きところに住みながら、屢々往きて訪ふことだにな

かりしは、我と我身の怪まるゝばかりなり。彼フランチェスカの君の如きは、我を愛し給はざるにあらねど、凡そ恩をきるものと恩をきする

ものとの間には、未だ報恩の志を果さざる

眼は、大なる溝渠ありて、縦ひ便しき情の蔓草の生ひまつはりて、これを掩ふことあらむも、能く全くこれを填むることなし。漸くにして、

ベルナルドオとアモンチャタとの上に想ひ及ぶとき、われは頬の邊の沾ふを覺えき。涙にや

ありし、又窓の下なる石垣に中りし波の碎け散りて面に渡きたるにやありし。

翌日は夜のまだ明けぬに、車に乗りてテルラチナを立ちぬ。領分境に至りて、手形改めあるべしとて、人々車を下りぬ。此の時始めて同行

の人を熟視したるに、齡三十あまりと覺しく、髪の色明く瞳子青き男我口にとまれり。何處にてか見たりけむ、心におぼえある顔なり。その詞を聞けば外國音なり。

手形は多く外國文もて認めたるに、城守る兵士は故里の語だによくは知らねば、檢閲は甚しく手間取りたり。瞳子青き男は帖一つ取

出で、あたりの景色を寫せり。げに街道に据ゑたる關の、上に二三の穴れる塔を戴きたる、その側なる天然の洞穴、遠景たるべき山腹の村落、皆好畫料とぞ思はるゝ。

わが首後よりさし覗きし時、畫工はわれを顧みて、あの大なる洞の中なる山羊の群のおもしろきを見給へと指さし示せり。その詞未だ畢

らざるに、洞の前に横へたる束藁は取り除けられたり。山羊は二頭づゝの列をなして洞より出で、山の上に登りゆけり。殿には一人の童子あり。失りたる帽を紐もて結び、褐色の短き外套を纏ひ、足には汚れたる襪はきて、鞋を括り付けたり。童は洞の上なる巖頭に歩を停めて、我等の群を見下せり。

忽ち車主の一聲の囚業を叫びて、我等に馳せ近づくを見き。手形の中、不明なるもの一枚ありとの事なり。われはその一枚の必ず我券なるべきを思ひて、満面に紅を潮したり。畫工は券の惡しきにはあらず、吏のえ讀まぬなるべしと笑ひぬ。

我等は車主の後につきて、彼塔の一つに上りゆき月を排して一堂に入りて見るに、卓上に紙を伸べ、四五人の匍匐ふ如くにその上に俯したるあり。この大官人中の大官人と覺しく、豪きうなる一人頭を擡げて、フレデリックとは誰ぞと糾問せり。書工進み出で、御免なされよ、それは小生の名にて、伊太利にていふフェデリコなりと答ふ。吏。然らばフレデリック、シイズとはそなるか。畫工。御免なされよ。それは券の上の端に記されたる我國王の御名なるべし。吏。左様か。(と聲吸一つして讀み上

凌けり。(譯者云。東「ゴトネス」族の正なり。西曆四百八十九年東羅馬帝の命を奉じて敵を破り、伊太利を領す。)

我心は景色に撲たれて夢みる如くなりぬ。

忽ち海の我前に横はるに逢ひぬ。われは始めて海を見つるなり、始めて地中海を見つるなり。水

は天に連りて一色の瑤瑤をなせり。島嶼の基布したるは、空に漂ふ雲に似たり。地平線に近

きところに、一條の烟立ちのぼれるは、エズキオの山「モンテ、エズキオ」なるべし。沖の方は

平なること鏡の如きに、岸邊には青く透きとほりたる波寄せたり。その岩に觸るゝや、鼓の

如き音立てゝぞ砕くる。われは覺えず歩を駐めたり。わが満身の鮮血は蕩け散りて氣となり、

この天この水と同化し去らむと欲す。われは小兒の如く啼きて、涙は兩頬に垂れたり。市に

大なる白壁の屋ありて、波はその礎を打てり。下の一層は街に面したる大弓道をなして、その

中には數輛の車を並べたり。こはテルラチナの驛舎にして、羅馬拿破里の間第一と稱へ

らる。

鞭聲の反響に、近き山の岩壁を動かして、驛馬の車を驛舎の前に駐むるものあり。車座の

背後には、兵器を執りたる從卒數人乗りたり。

車中の客を見れば、瘦せて色蒼き男の班に染めたる紗衣を纏ひて、傾げに倚り坐せるなり。馭者は疾く下りて、又二たび三たび其轡を鳴し、直ちに馬を續ぎ替へたり。さて護衛の士兵ありやと問へば、十五分間には揃ふべしと答へぬ。

こはゆくての山路に、フラア、チャラロ、デ、チエザレの流を汲むものありとて、當時こゝを

過ぐる旅客の雇ふものとぞ聞えし。(前者は伊太利六盜の名にして、同胞魔君の義なり。實の

氏名をミケレ、ベッツァといふ。千七百九十九年夥伴を率へて拿破里王に屬し、佛兵と戦ひて

功あり。官職を授けらる。後佛兵のために擒にせられて、千八百六年拿破里に斬首せらる。

後者も亦名ある盜なり。)客は英吉利語に伊太利語まぜて、此國の人の心鈍く氣長き爲に、

旅人の迷惑いばかりぞと罵りしが、やうやく思ひあきらめたりと覺しく、大なる粉帳を結び

て頭巾となし、兩の耳も隠るゝやうに被り、眼を閉ぢて默坐せり。馭者の語るを聞けば、この

英人は伊太利に来てより十日あまりなるべし。北伊太利、中伊太利をばことごとく見果てつ。

羅馬をば一日に看盡したり。此より拿破里にゆきて、エズキオに登り、汽船にて馬耳塞に渡り、

南佛蘭西を遊歴すべしとなり。士兵八騎はい

かめしく物具して至れり。馭者は轡を握へり。馬も車も、忽ち黃なる岩壁にそひたる間門を過ぎ去りぬ。

### 一故人

客舎の前にはたけ矮く逞ましげなる男ありて、車の去るを見送りたるが、手に持てる鞭を

揮ひて鳴らし、あたりの人に向ひていふやう。護衛はいかに嚴めしくとも、兵器の數はいかに

多くとも、我客人となりて往くことの安穩なるには若かじ。英吉利人ほど心忙しきものはな

し。馬はいつも駢歩なり。氣まぐれなる人柄かなと嘲み笑へり。われこれに離かけて、おん身

の車には既に幾位の客人をか得給ひしと問へば、隅ごとに眞心一つなれば、四人は早く備り

たり、されど二輪車の中は未一人のみなり。ナポリへと志し給はば、明後日は旭日のまだサ

ンテルモ城(ナポリ府を横斷する丘陵あり其巔の城を「カステル、サンテルモ」といふ。に刺

さぬ間に送り届け参らすべしと答ふ。爲換ありて現金なき我がためには、此勧めのいと煩し、

談合は忽ちに纏まりぬ。原註。伊太利の旅を知らぬ人のために註すべし。彼國の車主は例

として前金を受けず、途中の旅籠一切をまかな

叫びぬ。この小都會は削立千尺の大岩石の上にあり。これを貫ける街道は僅に一車を行くべし。こゝ等の家は、概ね皆平家に窓を穿つことなく、その代りには戸口を大いにしたり。戸の内なる泣く小兒、笑ふ女子は、皆襦袢を纏ひて、旅人の過ぐるごとに、手を伸べ錢を索む。馬の足振の早きときは、窓より首を出すべからず。石垣に觸るゝ虞あればなり。時ありて出窓の下を過ぐるときは、隧道の中を行くが如し。唯、黒烟の戸窓より溢れて、壁に沿ひて上るを見るのみ。

閨門を出づるに及びて、友は手を拍ちつゝ、美なる都會かなと叫びぬ。車主は顧みて否盜人の巢なり、警察の果絶ゆる間なければとて、一たび市民の半を山のあなたに徙し、その跡へは餘所より移住せしめしことあり、されどそれさへ雜草の叢に穀物の種を蒔きしに似て、何の利益もあらで止みぬ。兎角は貧の上の事にて、貧人の根絶やし出来ねば、無駄なるべしと、諭し顔に物語りぬ。

げにも羅馬とナポリとの間ほど、劫掠に便よきところはあらざるべし。奥の知られぬ橄欖の蒼林、所々に開ける自然の洞窟より、昔がたりの一目の巨人が築きぬといふ長壁のなごり

まで、いづれか身を隠し人を覗ふに宜しからざる。

友は萬羅の底に埋れたる一堆の石を指さしてキケロの墓を見よといへり。是れ無慙なる刺客の劍の纏馬第一の辯士の舌を黙せしめし處なりき。(キケロの別墅はこゝを距ること遠からざるフォルミエにあり。該撒歿後、アントニウス一派の刺客キケロを刺さむと欲す。キケロ身を以て逃れ、將にブルツスの陣に投ぜむとして、遂に刺客の及ぶところとなりぬ。時に西曆前四三年十二月七日なり。)友は語をつぎて、車主はこたびもモラヂ、ガエタ(即ち昔のフォルミエ)の別墅に車を停むるならむ、今は酒店となりて、眺望好きがために人に知らるといひぬ。

### 旅の貴婦人

山嶽は秀で、草木は茂れり。車は月桂の街衢を過ぎて客舎の門に抵りぬ。薦巾を肘にしたる房、奴は客を迎へて、盆栽花弁もて飾れる潤き階の下に立り。車を下る客の中に、稍々肥えたる一夫人あるを見て進み近づき、扶けて下らしめ、こさらに挨拶す。相識の客なればなるべし。夫人の顔色は太だ美し。その眸子の漆の如きにて、拿破里うまれの人なるを知

りぬ。

「われ等の衆人と共に、門口に近き食堂に入る時、夫人は房奴に語りぬ。こたびの道づれば婢一人のみ。例の男仲間は一だになし。かく膽太く羅馬拿破里の間を往來する女はあらぬならむ、奈何などいへり。」

夫人は食堂の長椅子に、はたと身を倚せ掛け、いたく倦じたる體にて、圓く肥えたる手もて頬を支へ、目を食單に注げり。「プロデットオ、チボレッタ、ファジャロ」とか。わが汁を嫌ふをば、こゝにても早く知れるならむ。否々、わが「アムボンポアン」の「カステロ、デ、ロラオ」の如くならむは、堪へがたかるべし。「アニメルレ、ドオラテ」に「フィノッキイ」些許あらば足りなむ。まことの晩餐をばサンタガタにてしたむべし。こゝは早く拿破里の風の吹くが快きなり。「ベルラ、ナポリ」と呼びつゝ、夫人は外套の紐を解き、宛に向へる廊の扉を開き、もろ手を擴げて呼吸したり。(此詞の中には食單の品目に見えたる料理の稱多し。「プロデットオ」は卵の羹を入れたる稀き肉羹汁、「チボレッタ」は葱、「ファジャロ」は豆、「カステロ、デ、ロラオ」は卵もて製したる菓子、「アニメルレ、ドオラテ」は膽の臓腑の料理、「フィノッキイ」は香料な



ぐるやう。「フレデリック、シイズ、パアル、テ、グラス、ド、デヨオ、ロア、ド、ダンマルク、デ、ワンダル、デ、ゴオト。」さてはそこは「ワンダル」なるか。「ワンダル」とは近ごろ聞かぬ野蠻人の名ならずや。畫工。いかにも野蠻人なれば、こたび開化せむために伊太利には來たるなり。その下なるが我名にて、矢張王の名と同じきフレデリックなり、フエデリゴなり。「ワンダル」は二千年前の日耳曼種の名なり。文に天祐に依りて璉馬の王「ワンダル」ゴオツ諸族の王などと記するは、彼國の舊例なり。書記の一人語を插みて、英吉利人なりしよと云へば、外の一人冷笑ひて、君はいづれの國をも同じやうに視給ふか、券面にも北方より來しことを記せり。無論魯西亞領なりといふ。

フエデリゴ、璉馬、この數語はわが懐しき記念を喚び起したり。璉馬の畫工フエデリゴとは、むかし我母の家に宿り居たる人なり、我を窩墓に伴ひし人なり。我がために畫かき、我に銀鍍を貽りし人なり。

關守の兵卒は手形に疑はしき廉なしと言渡しつ。この宣告の早かりしにはフエデリゴの私に贈りし「バオロ」一枚の效驗もありしなるべし。塔を下るとき、われフエデリゴに名調りし

に、この人は想ふにたがはぬ舊相識にて、さては君は可哀き小アントニオなりしかと云ひて我手を握りたり。車に上るとき、人に請ひて席を換へ、われとフエデリゴとは膝を交へて坐し、再び手を握りて笑ひ興じたり。

われは相別れてより後の身の上をつゞまやかに物語りぬ。そはドメニカが家にありしこと、羅馬に返りて學校に入りしことなどにて、それより後をばすべて省きつるなり。われは詞を改めて、さてこれよりはナポリへ往かむとすと告げたり。

むかし畫工と最後に相見たるは、カムパニアの野にての事なりき。その時畫工は早晚一たび我を羅馬に迎へむと約したり。畫工は猶當時の言を記し居りて、我にその約を履まざりしを謝したり。君に別れて羅馬に歸りしに、故郷の音信ありて、直ちに北國へ旅立つこととなりぬ。

その後數年の間は、故里にありしが、伊太利の戀しさは始終忘れがたく、このたびはいよく思ひ定めて再遊の途に上りぬ。こゝはわが心の故郷なり。色彩あり、形相あるは、伊太利の山河のみなり。わが曾遊の地に來たる樂しさを、君もおもひ遣り給へといふ。

彼問ひ我答ふる間に、路程の幾何をか過ぎければ、

む。フオンデイの税關の煩ひをも我心には覺えざりき。途上一微物に遭ふごとに、友はその詩趣を發揮して我心を慰めたり。この憂き旅の道づれには、フエデリゴこそげに願ひて無かるべき人物なりしなれ。

友は往手を指ざしていふやう。かしこなるが我が懐かしき穢きイトリの小都會なり。汝は故里の我が居る町をいかなる處とかおもへる。街衢の地割の井然たるは、幾何學の圖を披きたる如く軒は同じく出で、櫓は同じく高く、家々の並びたるさまは、檢閱のために列をなしたる兵卒に異ならず。清潔なることはいかにも清潔なり。されどかくては復た何の趣をかなさむ。イトリに入りて灰色に汚れたる家々の壁を仰ぎ見よ。その窓には太だ高きあり、太だ低きあり。大なるあり、小なるあり。家によりては異様に高き櫓の巔に門口を開けるなり。その内を望めば、纒車の前に坐せる老女あり。側なる石垣の上よりは黄に熟したる木の實の重げに生りたる枝さし出でたるべし。この參差錯落たる趣ありてこそ、好畫圖とはなるべきなれといふ。

車のイトリに入らむとするとき、同じく乗れる一客は、これフラア、ヂャフロの故郷なりと

しときは、われ早くこゝに坐して涼を貪り居たり。御物語の秘事と覺しきには、後に心付きしが、せむすべなかりしなり。されど哀れ深き御物語を聞きつとこそ思ひまゐらすれ、人に告ぐべきにはあらねば、惡しく思ひ取り給ふといふ。われは間の惡さを忍びて夫人に禮を施し、友と共に題を旋したり。友は我を慰めてぶふやう。彼夫人の期せずして我等と物言ひしは、或は他日我等に利あらむも知るべからず。斯く言へば主工格人めきたれど、われは運命論者なり。且汝の語りし所は國家の秘密などにはあらず。誰が心中の帳簿にも、此種の暗黒文字數葉なきことはあらざるべし。彼夫人の汝が言を聞きて泣きは、或は他人の語中より自家の閱歷を聴き出し、他人の杯酒もて自家の靈魂に澆きしにはあらずや。涙は已れのために出で易く、人のために出で難きこと、なべての情なればといひき。

我等は再び車に乗り途に上りぬ。四邊の草木はいよく茂れり。車に近き庭園、田圃の境には多く蘆薈を栽ゑたるが、その高さ人の頭を凌げり。處々の垂楊の枝は低れて地に曳かむとせり。

日の夕にガリリヤノの河を渡りぬ。古のミ

ンツルネエ(羅馬の殖民地)は此岸にありしなり。我好古の眼もて視るときは、是れ猶古のリス河にして、其水は蘆荻繁間の潢濁流をなして、敗將マリウスが殘忍なるズルラに追躡せられて身を此岸に潛めしも、昨の猶くぞおもはる。(紀元前八十八年ズルラ政權を得つ時、

マリウスこれと兵馬の權を爭ふ。所謂第一内訌是なり。マリウス敗れて此河岸に潛み、萬死を出で一生を得て、難を亞利加に避けしが、その翌年土を捲きて重ねて来るや、羅馬府を陥れ、兵を縱ちて殺戮せしむること五日間なりき。)此よりサントガタまでは、まだ若干の路程あるに、闇は漸く我等の車を罩まむとす。馭者は畜生を連呼して、輻輳亂下せり。拿破里の夫人は心もとながりて、頻りに車窓を覗き、賊の來りて、行李を括り付けたる索を截らむを恐るゝまなり。われ等は總に前面に火光あるを認めて、互に相慶したり。須臾にして車はサントガタに抵りぬ。

晚餐の間、夫人は何事かを思ふさまにて、いつもの靜なりき。さるをその日の斷えずが方に注げるをば、われ心に訝りぬ。翌朝車の出づべき期に迫りて、われは一盞の咖啡を啜せむために、食堂に下りしに、堂には夫人只一人在り

き。優しく我を迎へて詞を掛け、われを惡しく思ひ給ふな、總べて思ひ設けぬ事なりしなればと云ふ。われは夫人を慰めて、否、あしき人に聞かれたりとは思ひ候はず、言はであるべき事をば言ひ給ふべき方ならねばと答へき。夫人。さなり。おん身はまだ我をよくも識り給はず。

或は我を識り給ふ期あらむも知るべからず。おん身は知らぬ大都會に往き給ふといへば、かしこにて一度我家におとづれ、我夫と相識になり給はんかた宜しからむ。交際は無くて協はぬものにて、又一たび誤りてあらぬ人と相結ぶときは、悔あるべきことなりといふ。われは深くその好意を謝して、善人は隨處にありといふ諺の虚しからぬを喜びぬ。夫人は我側に寄りて、兼ねても聞き給ふならむ、拿破里は少き人には危き地なりなど云ひ、猶何事かを告げむとせしに、フエデリゴも房より出でしかば、物語はここに絶えぬ。

我等は又車に乗りたり。今は車中の客も漸く互に打解けて、はかなき世語などしつゝ拿破里の市に近づきぬ。偶々驢に騎りたる一群の過ぐるあり。我友はこれを見て、いたくめでたがりたり。新の上衣を頭より被りて、一人の襦兒には乳房を啣ませ、一人の稍々年たけ

り。「アムボンポアン」は肥肝、ペルラ、ナポリ」は美しき拿破里といふ程の事なり。」

われは友を顧みて、拿破里は最早こゝより見ゆるかと問ひしに、友は笑ひて、まだ見えず、

されどヘスベリアは見ゆるなり、アルミダの奇しき園は見ゆるなりと答へき。(譯者云。ヘスベリアは希臘語、晚國、西國の義なり、或は伊太利を斥して言ひ、或は西班牙を斥して言ふ。

されどこゝには、希臘神話にヘスベリアといふ女神ありて、西方の林檎園を守るを謂ふならむ。アルミダはタツソオが詩中の妖艶なる王女なり。基督教徒を惑はし、丈夫リナルドをアンチオピアの園に誘ひて、酒色に溺れしむ。

フエデリゴが詞の意は、山水を問ふこと勿れ、彼美人を見よとなり。)

友と廊に出で、望むに、その景色の好きと、想像の能く及ぶ所にあらず。脚の下には相子、繡襦などの果樹の林あり。黄金いろしたる實の重きために、枝は殆ど地に倒れむとす。

太高き針葉樹の園を限りたるさまは、北伊太利の樹と相似たり。この木立の極めて黒きは、これに接したる末遠なる海岸の極めて明ければなり。園の一邊の石垣の方を見れば、寄せ来る波は、古の神祠温泉の址を打てり。白帆懸けたる

大舟小舟は、徐かに高き家の軒を並べたるガエタの灣に進み入る。(原註ガエタはカエタより出でたる名なりといふ。是れキルギリウスが詩の主人公エネアスが乳媼の名にして、此港を以て其地骨の地となせるなり。灣の背後に一山の聳ゆるありて、その嶺には古戰場を見る。友は左の方を指してエズキオの岬を見よといふ。岬を轉じて望めば、火山の輪廓は一抹の輕雲の如く、美しき青海原の上に現れたり。われは小兒の情も此景物を迎へ、心の裡に名狀すべからざる喜を覺えき。

われ等は相携へて果園に下りぬ。われは枝上の果に接吻して、又地に墜ちたるを拾ひ、棗の如くに玩びたり。友の云ふやう。げに伊太利はめでたき國なる哉。北方の故郷に在りし間、常に我懷に往來せしものはこの景なり、この情なり。嘗て夢裡に吞みつる霞は、今うつゝに吸ふ霞なり。故郷の牧を望みては、此橄欖の林を思ひ、故郷の林檎を見ては、此柑子を思ひき。されど北海の緑なる波は、終に地中海の水の藍碧なるに似ず、北國の低き空は、終に伊太利の天の光彩あるに似ざりき。汝はわが伊太利を戀ひし情のいかに切なりしかを知らるか。一たび淨土を去りたるものゝ不幸は嘗て淨土を見ざ

りしものゝ不幸より甚し。我故郷なる斑駁は美ならざるに非ず。山毛櫨の林の鬱として空を限るあり。東海の水の濁くして天に連るあり。されど是れ皆猶人界の美のみ。伊太利は天國なり、淨土なり。かへすくも嬉しきは再び斯土に來しことぞと云ふ。友はわれと同じく枝なる果に接吻し、又目に喜の涙を浮べて、我項を抱き我頤に接吻せり。

火は火を呼び、情は情を呼ぶ。われは最早此舊相識に對して、胸臆を開き絨嚙を破ることを禁じ得ざりき。われは我が羅馬に在りての遭遇を語りて、高くアモンチャタの名を唱へたり。人を傷けて亡命せしこと、身を賊業に託せしことより、怪しき媼の我を救ひしことまで、一も忌み避くることなかりき。友の手は早く我手を握りて、友の眼光は深く我眼底を照せり。

忽ち吸泣の聲の背後に起るあり。背後はキケロの温泉の入口にて、月桂朱葉の枝繁りあひたれば、われは始より人あるべしとは思ひ掛けざりしなり。枝推し分けて見れば、彼温泉の入口なる石に踞して泣く女あり。そは前の拿破里の夫人なりき。

夫人は涙の額を擧げて我に謝して云ふやう。我が無禮なるを恕し給へ。君等の歩み寄り給ひ



やう。斯くても精進日なるか。天主に仕ふる日なるか。反省して苦行する日なるか。汝達がためには、春の初より冬の終迄日として謝肉祭ならぬはなし。斯く跳り狂ひ笑み戯れて、一步地獄に進み近づくなり。疾く奈落の底に往きて狂ひ戯れよといふ。僧の聲は漸く大に、我耳はこの拿破里詠を聞くこと、一篇の詩を聞く如くなりき。されど僧の叫ぶこと愈々大なれば、偶人の跳ること愈々忙しく、群衆は舊に依りて傀儡師に面し談義僧に背けり。僧は最早え堪へずして、石段を飛び下りさまに連なる男の手より聖像を奪ひ取り、そを高くかざして衆人の間に分け入りたり。見よ。これがまことの傀儡なり。汝達に眼あるは、これを視むためなり。耳あるはこれの教を聴かむためなり。「キュリエ、エレイン」主よ、慈を垂れよの義にして、歌頌の首句とぞ唱へける。聖像は流石人に敬を起さしめて、四圍の群衆忽ち跪けば、傀儡師も亦境を下りて跪きぬ。われは車の側に立ちてこれを見つゝ、心に神恩の深きと人心のやさしきとを思へり。フェデリゴは夫人のために辻の馬車を雇へり。夫人は友の手を握りて謝すと見えしが、その軟き兩脣は俄に我頭を巻きて、我唇の上には燃ゆ

## 慰藉

る如き接吻を覺えき。  
友の眠に就きし後、われは猶寝く久しく出窓に坐して、外の方を眺め居たり。こゝよりは當に廣こうちの隈々迄見ゆるのみならず、かのエズキオの山さへ眞向に見えたり。夢の裡に移り來しにはあらずやと疑はるゝ此境の景色は、われをして容易く臥床に上ることを得ざらしめしなり。目の下なる街は漸く靜になりて、燈火の數も亦減ぜり。最早眞夜中過ぎたるなるべし。

エズキオの山の姿は譬へば焰もて畫きたる松栢の大木の如し。直立せる火柱はその幹、火光を反射せる殷紅なる雲の一群はその木の巔、谷々を流れる下る熔巖はその潤く張りたる根とやいふべき。わがこれに對する情をば、いかなる詞もて寫し出すべきか、われは神と面相向へり。神の聲は彼火坑より發して直ちに我耳に響けり。神の威力、智慧、矜恤、愛憐は我胸に徹したり。その迅雷風烈を放ち出す手は、また一隻の雀をだに故なくして地に墮すことなきなり。わが久しき間の經歷は我前に現じて一瞬時の事蹟に同じく、神の扶掖輔導の絲は分

明に辨識せられたり。われは敢て自家を以て否運の兒となさじ。神の禍を轉じて福となし給へる迹は掩ふ可からざるものあればなり。初めわれ不測の禍のために母上を喪ひまゐらせき。されど故とならぬ其罪を贖はむとこそ、車上の貴人は我に字を讀り書を讀むことを教へしめ給ひしなれ。マリウチアとベツポとのわが身を爭ひて、わが全く寄邊なき身の上となりしは、寔に限なき不幸なりき。されど斯くてわれカムパニアの曠野に日を送ることなくば、かかる貴人の争でか我を認め給はむ。此の如く因果の鎗を手繰りもて行くに、われは神の最大の矜恤、最大の愛憐を消受せしこと疑ふべからず。唯々凡慮に測り知られぬは我とアモンチヤタとの上なり。ベルナルドオが姫を得むと欲せしは卑陋なる色慾にして、縦ひ深一たびその願の成らざるを憂ふとも、渠は月日を費すことなくして、その失望を慰めその遺憾を忘れしならむ。わが情はいと高くいと深くして、われ若し姫を獲たらむには、此世の中には最早何の欲望をも殘さざりしならむ。さるを姫は我を棄て、渠を取りたり。我黄金なす夢は一旦にして塵芥となり畢ぬ。こはそもいかなる故ぞや。此煩惱の間、我は忽ち「キタルラ」の音の街上に

たる子をば、腰の邊なる籠の中に隠れたる女あり。又一家族を擧げて一驢の背に託したりと覺しく、眞中には男騎りて、背後なる妻は臂と頭とを夫の肩に倚せて眠り、子は父の膝の間に介まれて策を手まさぐり居たるあり。いづれもビニエルが風俗畫の抜け出でたるかと怪まるゝばかりなり。

空氣は鼠色にて雨少し降れり。エズキオの山もカブリの島も見えず。葡萄の纏ひ付きたる高き果樹と白楊との間には、麥の露けく緑なるあり。夫人我等を顧みて、見給へ、此野はさながらに響應のむしろなり、麴包あり、葡萄酒あり、果あり、最早わが樂しき市と美しき海との見ゆるに程あらじといひぬ。

夕に拿破里に着きぬ。トレドの街の壯觀は我前に横はりぬ。(原註。羅馬及ミラノにては大街をコルソオと曰ひ、パレルモにてはカッサロと曰ひ、拿破里にてはトレドと曰ふ。)硝子燈と彩りたる燈籠とを點じたる店相並びて、卓には柑子無花果など堆く積み上げたり。道の傍には又魚鱈を焚きかねて、見渡す限、火の海かとあやまたる。雨邊の高き家には窓ごとに床張り出したるが、男女の群のその上に立ち現れたるさまは、こゝは今も謝肉祭の最中にや

とおもはるゝ程なり。馬車あまた火山の坑より焼け出でし石を敷きたる街を馳せ交ひて、間々馬のその石面の滑なるがために踵くを見る。小なる雙輪車あり。五六人これに乗りて、背後には襦袢着たる小兒をさへ載せ、又この重荷の小づけには、網床めくものを結び付けたる中に半ば裸なる賤夫のいと心安げにうまいしたるあり。挽くものは唯一馬なるが、その足は斷足なり。一軒の角屋敷の前には、焚火して、酒樽に打釘一つ掛けし中單着たる男二人、對ひ居て骨牌を弄べり。風琴「オルガノ」の響ひしく、女子のこれに和して歌ふあり。兵士、希臘人、土耳其人、あらゆる外國人の打ち雜りて、日叫び且走る、その熱鬧雜沓の狀、げに南國中の南國は是なるべし。この嬉笑怒罵の天地に比ぶれば、羅馬は猶幽谷のみ、墓田のみ。夫人は手を拍ち鳴して、拿破里々々と呼べり。

車はラルゴ、デル、カステルロに曲り入りぬ。(原註。拿破里大街の一にして其末は海岸に達す。同じ闊濶、同じ喧囂は我等を迎へたり。劇場あり。軒燈籠懸け列ねて、彩色せる繪看板を掲げたり。輕技の家あり。その群の一家族高き棚の上に立ちて客を招けり。婦は呼び、夫は喇叭吹き、子は背後より長き鞭を揮ひて爺嬢を

亂打し、その脚下には小き馬の後脚にて立ちて、前に開ける簿冊を讀む眞似したるあり。一人あり。水大の環坐せる中央に立ちて、兩臂を振りて歌へり。是れ即興詩人なり。一翁あり。巻を開いて高く誦すれば、聴衆手を拍ちて賞讃す。是れ「オランドオ、フリオゾ」を讀めるなり。(譯者云。わが太平記よみの類なるべし。讀む所はアリオストオの詩なり。)

夫人は忽ちエズキオと呼びぬ。げに／＼廣こうちの盡くる處に、彼の世界に名高き火山の半空に聳ゆるを見る。焼けたる巖の山腹を流れ下るさま、血の創より出づる如し。嶺の上に片雲あり。その火光を受けたる半面は殷紅なり。されど此偉觀の我眼に入りしは一瞬間なりき。車は廣こうちを横ぎりて、旅店「カアサ、テデスカ」の前に駐まりぬ。店の隣には、小さき傀儡場あり。一人ありてその前に立ち、道化役の偶人を踊らせ、且泣き且笑ひ、又可笑しき演説をなさしめたり。衆人は環り視て笑へり。向ひの家の石級には一倍あり。船頭らしき、肩幅濶き達しげなる男に、基督の像を列み附けたる十字架を捧げさせて説教せり。此方には聴衆いと少し。

僧は目を順らして傀儡師の方を見やりて云ふ

やきたり。我等は夫人に促されて坐せり。此時一少女ありて「ピアノ」に對ひ、短歌を唱ひ出せり。その曲は偶々アヌンチャタがデドに扮して唱ひしものと同じけれども、その力を用ゐる多少と人を動す深淺とは、固より日を同うして語るべきならず。われは只衆のなすところに倣ひて、共に拍手したるのみ。少女は又輕快なる舞の圓を弾じ出せり。男客の三人四人は、急に儼なる婦人を誘ひて舞ひはじめたり。われは避けて、とある窓龕に躲れたり。初めわれは席に入りしとき、瘦せたる小男の眼鉤懸けたるが、忙しげに此間出入するを見たり。この男が窓龕にかくれしを見て、我前に立ち留まり、慇懃なる禮をなせり。われはその何人なるを知らねども、姑く共に語らばやおもひて、エズキオの山の噴火の事を説き、その熔巖の流れ下る狀など、外より来るものゝ日を驚かす由を云ひたり。小男の答ふるやう。否。今の噴火の景などは言ふに足らず。プリニウスの書に見えたる九十六年の破裂は奈何なりけむ。灰はコンスタンチノポリスにさへ降りしなり。近き年の破裂の時も、我等拿破里人は傘さして行きしが、均しく灰降るといふも、拿破里に降るとコンスタンチノポリスに降るとは殊

なり。何事によらず、今の世は遠く古の希臘羅馬の世に及ばずと知り給へ。澆季の世は古に復さむよしもなしと、かこち顔なり。われ芝居に轉すれば、彼は遠くテスピスの車に廻りて、(世に傳ふ、テスピスは前五四〇年頃の雅典人にして、舞臺を車上にしつらひ、始めて劇を演じたりと。)希臘俳優の被りぬといふ、悲壯劇の假面と滑稽劇の假面とを列舉せり。われ又近頃禁軍の檢閲ありしを聞きつと噂すれば、彼は希臘の兵制を論じて、マケドニア歩兵の方陣の操練を細敘すること目撃の狀の如くなり。既にして彼は我に考古學又は美術史を研究し給ふやと問ひぬ。われ答へて、己れは専門の學をなさずと雖、凡そ宇宙の事は一として我研究の資料ならぬはなし、己れは詩人たむと心掛くるなりと云へば、彼手を拍ちて喜び、ホラチウスが句を朗誦し、我琴を以てヨキスの神の龜甲琴に比したり。忽ちサンタ我前に來て云ふやう。さては終に生捕られ給ひしよ。おん身等の物語は、定めてセロストリス時代の事なべし。希臘傳說に見えたる埃及王の名なり。前十四五紀の間の名ある王二人の上を混じて説けり。客人には現世の用事あり。かしこに少き貴婦人の齒手なくて

寂しげなるあり。願はくは誘ひ出して舞の群に入り給へとなり。われ逡巡して、否われは舞ふこと能はず、曾て舞ひしことなしと答ふれば、サンタ重ねて、家のあるじたる我身おん身に請はい奈何といふ。われ。まことに濟まぬ事ながら、われ若し強ひて踊り出でば、おのれ一人跌き轉ぶのみならず、敵手の貴婦人をさへ引き倒すならむ。夫人打ち笑ひて、それは好き見ものなるべしといひつゝ、フェデリゴの方に進み近づき、直ちに伴ひて舞の群に入りぬ。小男は我を顧みて、氣輕なる女なり、されど貌は醜からず、さは思ひ給はずやといふに、われはもとに仰の如く、めでたき姿なりと讃め稱へき。此よりいかなる話の運なりしか知らねど、我等二人は忽ち又古のエトルリヤ人(昔羅馬の北に住みし民)の遺し、陶器の事を論ぜざるべからざることとなりぬ。彼は此地の樂珍館内なる瓶又は壺の數々を擧げて、これに畫きし畫工に説き及ぼし、次いでその畫工の技を辯明したり。此等の陶畫は、皆濃に乘じて筆を用ゐるものなれば、一點一畫と雖、漫然これを下すべきにあらずなど云へり。彼は猶其詳なるを教へむために、不日我を樂珍館に連れ往かむと約せり。



起るを聞く。見下せば肩に輕く一領の外套を纏ひて、手に樂器を把り、戀の歌の一曲を試みむとする男あり。未だ數彈ならざるに、對ひの家の扉は響なくして開き、男の姿は戸に隠れぬ。想ふに此人を待つものは、優しき接吻と回抱となるべし。われは星斗のきらめける空を仰ぎ、又燦爛の影處々に紅を印したる青海原を見遣りたり。好しく、我は我戀人を獲たり。我戀人は自然なり。自然よ、汝はわがためにその舞やかなる天を打明けて何の隠すところもなし。汝はそよ吹く風の優しきを送りて、我欲我肩に觸るゝことを嫌はず。我は汝が美しさを歌はむ、汝が我心を動す所以を歌はむ。言ふこと莫れ、汝が心の痕は尙血を瀝らすと。針に貫かれたる蝶の猶その五彩の翼を押ふを見ずや。落ちたぎつ瀧の水の沫と散りて猶麗しきを見ずや。これはこれ詩人の使命なり。この世は東の間の夢なり。あの世に到らむには、アモンチャタも我も淨き魂にて、淨き魂は必ず相愛し相憐み、手に手を取りて神のみまへに飛び行かむ。

氣力と希望とは再び我胸に入り來れり。わが此より即興詩人として世に立たむは、なかなかに樂しかるべき事ぞと思ひ返されぬ。只、猶

心に懸るは、思人なる貴人の思ひ給はむ程奈何なるべきといふ事なり。彼人はわれ舊に依りて羅馬にありて書を讀めりとおもひ給ふならむ。彼人のわが都を逃れしさまと我新境界とを開き知り給はむには、果して何とか言はるべき。われは今宵を過ぎで書を裁して、人々に我未來の事を認め許されむことを請ふこととなしたり。我書には、子の母に言はむが如く此の纏ふことなく有の儘に、我とアモンチャタとの中を語り、我が一たび絶望の境に陥りて後、今又慰藉を自然と藝術とに求むるに至れる顛末を敘して、さて人々の憐を垂れてわが即興詩人となることを許されむを願ひぬ。われはその答を得む日までは、敢て公衆のために歌はざるべしと誓へり。これを書く時、涙は紙上に墜ちて斑をなし、われは心の中に答書の至らむこと一月の間にあらむことを祈るのみなりき。書き畢りて、われは久し振にて心安く眠に就きぬ。

翌日フエデリゴはとある横町なる貨房に移り、これは猶さきの獨逸宿屋なる、珍らしき山と海との眺ある一間に留まりぬ。われは聚珍館(エムゼオ、ボルボニイコ)、彫版、公施など尊ねめぐりて、未だ三日ならぬに、早く此都會の風俗のおほかたを知ることを得たり。

## 考古學士の家

或日房奴は我に一月の書をわたしたり。披きて讀めば、博士マレットチイと夫人サンタとの案内狀にして、フエデリゴ君をも伴ひて來ませとあり。初めはわれは同先を誤りたる書ならずやと疑ひぬ。宿屋の人に博士はいかなる人ぞと問ふに、いと名高き學者にて、考古學とやらに長け給ふと聞ゆ、その夫人近きころ羅馬より歸り給ひしなれば、客人は途上にて相談になり給ひしにはあらずやといふ。嗚呼、われこれを獲たり。これこそ前の拿破里の貴婦人なるらめ。

夕暮にフエデリゴを誘ひて往きぬ。いと廣き間に客あまた集へり。滑なる大理石の床は、蠟燭の光を反射し、鐵の格子を繞らしたる火鉢(スカルチノ)は、程好き燄さを一間の内に傾てり。

サンタと名告れる夫人は、嬉しげに我等二人を迎へて、一坐の客達に引合せ、又我等に、毫しも心をおかで家に在る如く振舞はむことを勸めたり。夫人は今宵空色の衣を着たるが、いと善く似合ひたり。我等は若し此人をして少し瘦せしめば、第一流の美人たるべきものと云ふ

を得ざりき。サンタは我手を握りて、我と共に泣きぬ。わがサンタに親むことは、此より舊に倍したり。

サンタの家は我第二の故郷となりぬ。われは日ごとにサンタと相見て、日ごとに又その相見ることの晩きを恨みつ。この婦人の家にあるさまを見るに、其戯謔も愛すべく其氣儘も愛すべし。これをアモンチャタの一種近づくべからざるべからざる所ありしに比ぶれば、因より及ぶべくあらねど、かの捉へ難き過去の幻影には、最早この身近き現在の形相を斥くる力なかりしなり。

或時我は又サンタと對坐して語れり。夫人。

近ごろボジリツポの脚好き家と顔好き女とを尋ね給ひし。わ。否、前後二たび往きしのみ。夫人。女は最早餘程おん身になじみしならむ。子供は案内者に雇はれ、主人は漁に出でて在らざりしにはあらずや。用心し給へ、拿破里の海の底は、やがて地獄なりといへば。わ。否、我心を引くものは唯景色のみなり。かの賤女いかに美しとして、決して我を誘ひ寄すること能はざるべし。夫人。吾友よ、われは明におん身の心を知れり。曩にはその心に初戀の充物したるため、些の餘地だになかりき。われは君

が初戀を陋しとせざるべし。されどその敵手なる女の、君の直きが如く直からざりしは、争ふべからざる事實なるべし。否、我話の腰を折り給ふな。さてその初戀の眞の價は兎まれ、角まれ、その君が心に充物したるもの、今や無慙にも引き放ちて棄てられ、その跡は空虚になりぬ。この空虚は何物もて填むべきか。君は昔こそ書を讀み空想に耽りて、自足れりとし給ひけめ、彼女優の一たび君を現實世界に引き出したる上は、君も亦我等と同じく血あり肉ある人となり給ひて、その血その肉はその本來の權利を求めて止まざるべし。少壯幾時かある。男元何の敢てすべからざる事あらむ。されば我に物隱さむとし給ふには及ばざるにあらずや。わ。おん説の前半は、げにさもあるべく思はれて、空虚の事などは首肯しても好し。されどそれを填むむ策をば未だ講ぜしことあらず。夫人。さらば君は猶我説を問はむとし給ふか。君の既に一たび空想を出でながら、猶再びこれに還りて、一個の空想人物とならむとし給ふが怪しきなり。アモンチャタは君が理想の女ならずや、高尙なる人物ならずや。それすら空想人物のアントニオの君を棄て、人柄下りたるベルナルドオを取りしなり。アモンチャタも男欲しかり

しなり。斯く言い掛けて、サンタは愛らしき聲して笑ひ、おん身の餘りに罪なき性なるため、我に女の口より言ひ難き事さへ言はしめ給ふこそ憎けれとて、指もて我頬を弾きたり。

旅店に還りて獨り思ふに、サンタの我を許す言は、昔ベルナルドオの我を許せし言と同じ。此頃又フェデリゴの話を聞きしに、その羅馬にありし日の經歷には、我の夢だに知らざるやうなることもありて、賤しきマリウチアさへその事に與れりといふ。世の人はわが厭ひおそるゝところのものを悦び樂むにや。アモンチャタの我を棄て、ベルナルドオを取りしなどは、現にもこれを證して餘あるが如くなり。果して然らばアモンチャタは我感情を愛して我意志を嫌ひしにやあらむ。あらず、わが意志の闕乏を嫌ひしにやあらむ、いと覺束なく心許なき事にこそ。

## 絶交書

拿破里に來てより既に一月を経ぬ。さるにアモンチャタとベルナルドオとの上に就きては、何の聞くところもあらず。或夕一封の書は到りぬ。何人のいかなる使するにかと、打ち返してこれを見るに、印はボルゲエゼ家の印にして、

夫人は再び我前に来て、さては論文はまだ結局とならぬにや、以下次號とし給へと呼び、急に我手を抱りて引き去りつゝ、聲を低うして云ふやう。おん身は餘りに人好きにはあらずや。我夫はいつも此の如くなれば、うるさき時は忍びて聴き給ふには及ばず。おん身の兎角沈み勝になり給ふは惡しき事なり。人々と共に樂み給へ。いざ我身おん相手となるべければ、何にても語り聞せ給へ、こゝに來給ひてより、何をか見給ひし、何をか聞き給ひし、何をか最もめでたしと思ひ給ひしといふ。われ。兼ておん身の告げ給ひしに違はず、拿破里はいとめでたき地なり。今日の午過ぎなりき。獨り歩みてボジリツポの巖窟に往きしに、葡萄の林の繁れる間に古寺の址あり。そこに貧しき人住めり。可哀げなる子供あまた連れたる母はなほ美しき女なりき。我は女の注ぎくれたる葡萄酒を飲みて、暫くそこに憩ひしが、その情その景、さながらに詩の如くなりきと語りぬ。夫人は示指を堅て、笑みつゝ我顔を打守り、油斷のならぬ事かな、さるいちはやき風流を給ふにこそ、否々、面をあかめ給ふことかは、君の齡にては、精進日の説法聞きて心を安じ給ふべきにはあらぬものをとささやきぬ。

夫婦の上に於て、此夕わが知ることを得たところは、いと少かりき。されどサンタが性の拿破里婦人の特色と覺し、語を出すに輕快にして直截なる、人に接するに自然らしく情ありげなるは、深く我心に銘せり。その夫は博學の人と見えたり。共に聚珍館に遊ばむには、これに増す人あるべからず。われは次第に足近く彼家に出入するやうになりぬ。サンタの待遇は漸く厚く親しくなりて、われは早くも心の底を打明けて此婦人に語りぬ。後に思へば、われは世馴れぬ節多く、男女の間の事などに味きは、赤子に異ならぬ程なれば、サンタの如き女に近づくことの多少の危険あるべきを知るに由なかりしなり。サンタが夫は卑しき饒舌家ならずして、まことに學殖ある人なりしこと、此往來の間に明になりぬ。或日われはサンタに語るに、アモンチャタと別れし時の事を以てせり。サンタは我を慰めて、ベルナルドオの心ざまを難じ、又アモンチャタの性をさへ貶め言へり。そのベルナルドオを難ずる詞は、多少我創痍に灌ぐ薬油となりたれども、アモンチャタを貶むる詞は、わが容易く首肯し難きところなりき。

サンタのいふやう。彼女儼をばわれも厭み見き。舞臺に上る身としては、丈餘りに低く、肌餘りに瘦せたりき。拿破里にありても、若き人への崇拜尋常ならざりしが、そは聲の好かりしためなり。アモンチャタが聲は人を空想界に誘ひ行く力ありき。而してその小く瘦せたる身も亦空想界に屬するものゝ如くなりしなり。おん身若し我言を非へりとし給はば、そは猶肉身なくて此世に在らむを好しとし給ふごとくならむ。假令われ男に生るとも、抱かば折るべき女には懸想せざるべしといへり。われは覺えず失笑せり。想ふにサンタは語の理に墜つるを嫌ふ性なれば、始より我を失笑せしめむとて此説をなし、ならむか。奈何といふにサンタもアモンチャタが品性の高尚なると才藝の人に優れたとをば一々認むといひたればなり。或時われは詩稿を懷にして往きぬ。こは拿破里に來てよりの近業にて、獄中のタツソ、托鉢僧など題せる短篇の外、無題一首ありき。われは愛情の犠牲なり。わが曾て敬し曾て愛しつる影像は、皆碎けて塵となり、わが寄邊なき靈魂は其間に漂へり。われはサンタに向ひ居て詩稿を讀み始めしに、未だ一篇を終らずして、情迫り心激し、われは嗚咽して聲を續ぐこと



侍ひて、エルコラノ、ボムペイに往き、それよりエズキオの山に登るべし。先づ今宵は大路まで出て、面白く時を過ぎむ。世の中は駈歩して行く如し。而して人々おのが荷を負ひたり。鉛の重きなるもあり。齎具と一般なるもあり。友は斯く語りつゝ我を促し立てゝ出で行かむとせり。嗚呼、我にも猶此の如く慰め呉るゝ友あるこそ嬉しけれ。我は黙して帽を戴き、友の後に従きて出でぬ。

### 好機會

戸を出づれば小屋掛の小劇場より賑かなる音楽の聲聞ゆ。われ等二人は群集の間に立ちてその劇場の狀を看たり。夫婦と覺しき男女、表をのみ飾りたる衣を纏ひて板敷の上に立ちたるが、客を喚ぶことの忙しさに、聲は全く聞えたり。色蒼ざめたる一童子「ビエロオ」(滑稽役)の服を着けて、悲しげに「キオリノ」彈けば、姉妹なるべし、少女二人のこれを繞りて踊るを見る。哀なるかな此人々。その運命のはかなきこと我と同じきなるべし。我は太息を抑へて友の肩に倚りたり。友は慰めて云ふやう。物思も好き程にせよ。暫くこの邊を漫歩して、汝が日の赤きを風に吹き消させ、さて共にマレット

チイ夫人の許に往かむ。夫人は汝と共に笑ひ共に泣きて、汝が服ふをも知らぬなるべし。こは我が能くせざるところにして夫人の能くするところなり。いざゞと勸めつゝ、友は我を拉きて街上を行き過り、遂に博士の家に入りぬ。

夫人は出で迎へて、好くこそ來給ひたれ、君等の定の日を持たで來給はむは何時なるべきと、兼ねてより思ひ居たりといふ。友。わがアントニオは又例の物の哀といふものに襲はれ居れば、そを少し爽かなる方に向はせむは、おん宅

ならではと思ひて参りしなり。明日は共にエルコラノとボムペイとに往きて、エズキオの山にも登らむとす。折好く噴火の狀觀あれかしと願ふのみといふ。博士聞きて友に對ひて云ふやう。そはいと好き逍遙の法なり。われも暇あら

ば共にこそ往かまほしけれ。エズキオに登らむは煩はしけれど、ボムペイの發掘の近狀を見むこと面白かるべし。われはかしこより彩色の硝子器數種を得たれば、この頃そを時代別にして小論文一篇を作りぬ。今君に見せて、彩色に關する二三の疑を質さばやと思ふなり。アント

ニオ君はしばしば「妻の許に居給へ。後には集りて一瓶の「ファレルノ」(ファレルナに座する葡萄酒を傾け、ホラチウスが詩を歌はむと云ふ。

かくて主人は友を延いて入り、我をばサンタ夫人の許に留め置きぬ。

夫人。君は又新しき詩を作り給ひしならむ。

君が面を見るにその經營慘澹とやらむいふことの痕深く刻まれたる如きを覺ゆるなり。さきにはタツノオの詩を誦して聞せ給ひしが、その句は今も我懷に往來して、時ありては獨り涙を墮すことあり。そはわが泣蟲なるためにはあらず。など少しく氣を燥やかにして我面を見て面白き事を語り聞せ給はざる。尙默して居給ふか。若し言ふべきことなくば、わがこの新し

き衣をだに譽め給へ。好く似合ひたるにあらずや。體にひとと着きてめでたからずや。詩人はかゝる些細なる事をも心に留めては叶はぬものなり。我妻のすらりと瘦せて「ビニコロ」の木

の如くなるを見給はずや。われ。そは直ちに心付き候ひぬ。夫人。おん身はまことに世辭好きなり。我妻はいつもこの通りなり。衣は緩く包み

し袂の如し。否々、面を赤うし給ふことかは。おん身も年若き男達の癖をばえ逃れ給はずと思はる。今少し多く女子に交り給へ。それ等はお

ん身を教育すべし。おん身の友と我夫とは、今その考古學の深みに蔽まり居て、身動きだにせ

ざるならむ。いざ共に「ファレルノ」を飲まむ。

筆は主公の筆なり。われは心に聖母を祈りつ  
つ、聞いてこれを讀みたり。其文に曰く。

御書狀拜讀仕候。素と拙者の貴君の  
御世話可致と決心候節、貴君の爲めに謀  
候は、當地に於いて正當なる教示を受け  
られ、社會に益ある一人物となられ候様  
にと希望候儀に有之候。然處貴君の行  
跡全く此希望と相反候は、今更是非な  
き次第と諦念候より外無之候。當初御堂  
堂不幸之砌、存寄らざる儀とは申なが  
ら、拙者の身上其禍因と連係候故、報謝  
の一端にもと志候御世話も、此の如く  
相終候上は、最早儀を償ひ券を折候と同  
じく、何の因難も無之、一切事済と看做候  
て宜かるべしと存候。然上は即興詩人  
と爲り藝人と爲りて公衆の前に出でられ  
候とも、拙者に於いて故障等可申には  
無之候。唯此際申入置度は、後日貴君の  
拙者一家に於ける從來の關係等一切口  
外下さる間敷儀に御座候。生涯當家の  
恩義忘却致さずとは先年度々申聞けら  
れ候處に有之候へども、拙者に報ずる所  
以の最大事件たる學問修行をば塵芥の如  
く棄てられ候て、今は其最小事件即ち拙

者を呼ぶに恩人を以てせられ候儀さへ、  
拙者の心に屑とせざるものと成果候段、  
歎息の外無之候。草々不宣。

われは血の胸に迫るを覺えて、兩手は力なく  
膝の上に垂れたり。泣かば心鎮まるべけれど  
も涙出でず、祈らば力着くべけれども詞出で  
ず。我は悶絶せる人の如く、頭を卓上に支へ  
て坐すること良久しかりしが、其間何の思ふ  
ところもあらざりき。われは痛苦をだに明に  
は覺えざりしなり。只心の底には言ふべから  
ざる寂しさを感じて、今は聖母さへ世の人と同  
じく我を見放し給ふかと疑ひおもへり。

フエデリゴはこゝに來ぬ。進みて我手を握り  
て云ふやう。病めるか、アントニオ。獨り物思  
ふけ惡しき事なり。汝はアモンチャタを失ひて  
不幸なりといへど、我は汝のアモンチャタを得  
て幸なるべかりしや否やを知らず。我經歷に  
徴するに、大抵わが遭遇せし所は、後に顧みる  
にわが最も宜しき所なりし也。然れども運命  
の人を引き廻すは、問と頗る手荒きものにて、  
人は之を痛苦とし不幸とするなりといふ。我は  
詞なくて、卓上の書狀を指し、友のこれを  
讀む間、これに背きて涙を拂ひつ。友は我肩  
を撫で、泣くが好し、泣かば心落着くべしと

云へり。暫しありて友は我に、此書狀を見たる  
後既に思ひ定むる所ありやと問ひたり。此時  
われは忽ち思ひ付くよしありて、友に向ひて語  
り出でぬ。聞け吾友、われは信とならむとす。

我は幼きより聖母に仕へたるがへ思ふ、淺か  
らぬ縁ありしならむ。聖母の慈悲は敗れたれ  
ば、縦ひ一たび我を棄て給ふとも、いかでか我  
體を聞き給はざることあらむ。われは空想人  
物にて、汝等と同じからず。世間に立ち交ると  
も、何の益かあるべき。若かじ、今の機到り縁  
熟せるを幸として、平和を寺院の中に求めむ  
には。友。おろかなり、アントニオ。否運に遭  
ひて志を屈せずしてこそ人たる甲斐はあれ  
汝の氣力あり技倆あるを、傲慢なる羅馬の貴  
人に見せよ、世間に見せよ。詩人は賤しき業に  
あらず。汝は才あり學あればこそ、詩人となら  
むとは思ひ立ちなれ。汝が前途は多望なり。  
されどわれおもふに、わが斯く爾を費すはい  
たづら事にはあらずや。汝が僧とならむといふ  
は、けふの黄昏の暗黒なる思案にて、あすは旭  
日の光に觸れて泡沫のごとく消え去るべきもの  
にはあらずや。兎まれ角まれ、汝が病をばわ  
が手ぬかりにて長じたりと覺し、汝は獨り籠  
り居て蟲をおこしたるならむ。あすは車一輛

見給へ、かしこの奥に見ゆる石階に掘り當てたりと云ふ。われ等はその井をさし覗くに、日光はエルコラノの市なる大劇場の石階の隅を照せり。案内者は燭を點して、われ等をして、各これを手にしめつ。降りて石階の上に立てば、誰か能く懷舊の情の胸間に散り起るを覺えざらむ。是れ千七百載の昔、羅馬の民の集ひ來て、齊しく眸を舞臺の光景に凝し、共に笑ひ共に感動し共に喝采歡呼せし處なるにあらずや。側なる低く小き戸を過ぐれば、潤き廊あり。われ等は舞臺に下りぬ。(舞臺と觀棚との間に在り。)樂人房、衣房、舞臺などを見めぐると、其結構の宏壯なるは、深く我心を感じしめき。燭光の照すところは數歩の外に出でざれども、われはその大い「サンカルロ」座に踰べしと想ひぬ。われ等の四邊は空虛幽暗寂寥にして、われ等の頭上には別に一箇の熱鬧世界あるなり。世には既に死したる人のわれ等の間に迷ひ來て相交ることありとおもへるもあり。われは今これに反して、獨り泉下に入りて身を古の羅馬人の精靈の間に賓きたりとおもひぬ。われは人々を促して梯を登りぬ。

右に轉じて一小巷に入れば、古市の一小部の發掘せられたるあり。數條の徑、小房多き數軒

の家あり。その壁には丹青の色残れり。エルコラノの市の天日に觸るゝ處は唯これのみなりといへば、工事の未だはかどらざることボムベいの比にあらずと覺し。

レジナを背にして車を馳すれば、目の及ばむ限、只大海の忽ち凝りて黒がねとなれるかと疑はるゝ平原を見るのみ。半ば埋れたる寺塔は寂しげに道の側に立てり。處々に新に造りたる人家と葡萄園とあり。博士われ等を顧みて云ふやう。この境の慘狀をばわれ目のあたり見ることを得たり。われは猶効かりき。この車轍の過ぐるところは、其時火燄の海をなし、その怖ろしき流は山岳の方より希臘塔市(ヘルレ、デル、グレコ)の方へ向ひたり。葡萄園は多く熔岩に掩はれ、父とわれとの立てる側なる岩は其光を受けて殷紅なり。寺院の火海の中央に漂へるさまはノアの船に異ならず、その燈の未だ滅せざるが微かに青く見えたり。われは生涯その時の事を忘れず。父の燃け残りたる葡萄を摘みてわれに食せしは、今も猶昨のごとしと云ひぬ。

凡そ拿破里の入江の諸市は、譬へば葡萄の蔓の梢より梢にわたたりて相連れるが如く、一市を行き盡せば一市又前に横る。(希臘塔市の次は

即トルレ、デル、アモンチャタの市なり。)道は此嶺の平野に至るまで、都會の大街に異ならず。馬に乗る人、驢に騎る人、車を驅る人など絶えず往來して、その間には男女打ち雜りたる旅人の群の一しほの色彩を添ふるあり。

初めわれはエルコラノもボムベイも深く地の底に在りと思ひき。されど其實は然らず。古のボムベイは高處に築き起したるものにして、その民は葡萄園のあなたに地中海を眺めしなり。われ等は漸く登りて、今暗黒なる燼餘の灰壘を打ち抜きたる洞穴の前に立てり。洞穴の周圍には灌木、草薺など少しく生ひ出で、この寂しき景に、些の生色あらせむと勉むるものゝ如し。われ等は番兵の前を過ぎて、ボムベイの市の口に入りぬ。

博士マレッツチは我等を顧みて、君等は古のタチウスをもプリニウスをも讀み給ひしならむ、凡そ此等の書の最も好き註脚は此市なりと云ひたり。われ等の進み入りたる道を墳墓街と名づく。許多の石碣並び立てり。二碑の前に彫鏤したる榻あり。是れボムベイの士女の郊外に往反するるときしばらく憩ひし處なるべし。想ふに當時この榻に坐するものは、碑のあたなる林木郊野を見、往來織るが如き街道を



後には人々と同じく改めて杯を把り給ひても好しといふ。夫人に斯く勧められて、われは急に酒飲むことを辭め、世の常の物語せばやと、一言二言いひ試みしが、胸の愛に詞浚みて、いかにも心苦しければ、夫人よ想し給へ、われは今快からず、さるを強ひて物語せば、そは徒におん身を惱ますに近からむと云ひつゝ、把ちて胸を取らむとせしに、夫人は忽ち我手把りて再び椅子に着かしめ、優しく我顔を目守りて云ふやう。今は歸し參らせじ。おん身は何事にか遊び給ひしならむ。心を隔て給ふことは。わが氣輕なる詞つきは、おん身の心を傷つけたらむも計られねど、そは稟賦なれば、是非なし。われはまことにおん身の上を氣遣へり。何事にか遊び給ひしならば、包まずわれに語り給へ。故里の文をや得給ひし。ベルナルドオが創のためにみまかりしにはあらざやと云ふ。初めわれは主公の書を得たることを此人に告げむ心なかりしが、斯く問はれて心弱く、有の儘に物語りぬ。さて詞を續きて、われは全く世に棄てられたり、世には一人の猶我を愛するものなしと歎歎して叫びし時、否、アントニオと云ふ聲耳に響きて、われは温き掌の我顔を撫で、忽ち又熱き唇の其上に觸るゝを覺えき。否、

アントニオ猶おん身を愛する人あり。おん身は善き人なり、可哀き人なり。夫人はかく言ひつゝ、もろ手もて我頭を抱き、その頬は我耳の邊に觸れたり、我血は湧き返りて、渾身震ひ氣息塞がりたり。此時人の足音して一間の扉は外より開かれ、主人は「エデリゴ」と共に入り來りぬ。サンタ夫人は徐に友を顧みて、好き處に來給ひたり、アントニオ君は熱を患へ給ふにやあらむ、心地惡しとのたまひつゝ、忽ち青くなり又赤くなり給ふ故、安き心はあらざりきなど云ひ、又我に向ひて、いかに、今は前の如くにはあらざるならむと云ふ。その面持すこしも常に殊ならず。われは心の底に、言ふべからざる羞と憤とを覺えて、口に一語をも出すこと能はざりき。博士は例の古語を引きて、客人、心地はいかなるにか、クビド(愛の神)の磨く箭にや中り給ひしなどいひつゝ、われ等に酒を勧めたり。夫人はわれと杯を打碰せて、意味ありげなる目を我面に注ぎ、これを乾さばや、好機會のためにと云ふに、我友點頭きてげに好機會は必ず來べきものぞ、屈せずして待つが丈夫の事なりと云ふ。この時博士も亦杯を舉げて、さらば我もその好機會のために飲まむと云ひぬ。夫人は高く笑ひて手もて我頬を撫でたり。

## 古 市

翌朝「エデリゴ」は博士「マレッツチ」と共に我客舎に來て促し立て、打ち連れて馬車に上りぬ。車は拿破里の入江を順りて行くに、爽かなる朝風は海面のより吹き來れり。友は遙にエズキオの山を指さして、あの朝の渦巻き騰る狀を見よ、今宵は興ある遊となるべきぞと云ひしに、博士首を掉りて、かばかりの朝は物の數ならず、紀元七十九年の噴火の時を想ひ見給へと云ひぬ。拿破里の町はづれを過ぎて、程なくサンジョリニイ、ガルチア、レジナの三市の相連れるを見る。そのさま一市をなせるが如し。レジナに至りて車を下れば、われ等の踐める所の脚下は、早く是れ熾盛熱灰のために埋没せられしエルコラノの古市なり。

博士に延かれて一家に入れば、その中庭に大なる枯井あるを見る。井の裏には螺旋梯を架したり。博士われ等を顧みて云ふやう。見給へ人びと。これこそは紀元千七百二十年エルボヨフ公の掘らせし井なれ。穿つこと僅に數尺にして石人現れければ、その工事は遽に止められき。これより人の手を此井に觸れざること三十年。西班牙王カルロス此に來て猶深く掘らせしに、

草もあらずなりぬ。夜はいと明けれど、強く寒き風は忽ち起りぬ。將に没せむとする日は熾なる火の如く、天をば黄金色ならしめ、海をば藍青色ならしめ、海の上なる群れる鳥嶺をば淡青なる雲にまがはせたり。眞に是れ一の夢幻界なり。灣に沿へる拿破里の市は次第に暮色微茫の中に没せり。昨を放ちて遠く望めば、雪を戴けるアルピイの山脈、氷もて削り成せるが如し。

紅なる熔巖の流は、今や日晷に迫り來りぬ。道絶ゆるところに、黒き熔巖もて掩はれたる廣き面あり。驢馬は蹄を下すごとに、先づ探りて而る後に踏みぬ。既にして一の隆起したる處に逢ふ。その狀に此熔巖の海に涌出せる孤島の如し。されど其草木は只だ丈低き灌木の疎に生ぜざるを見るのみ。この處に山人の草寮あり。兵卒數人火を圍みて葡萄酒を呑めり。(ラクリメエ、クリスチイ)とて葡萄酒の名なり。これは遊覽の客を護りて賊を防ぐものなりとぞ。われ等を望み見て身を起し、松明を點じて導かむとす。轉しき風に焰は横さまに吹き靡けられ、滅えむと欲して僅に燃ゆ。博士は疲れたりとて草寮に留まりぬ。我等の往手は巖の間なる細徑にて、熔巖の塊の跡に觸るゝもの多し。

處々道の險しき巖に臨めるを見る。

既にして黒き灰もて盛り成したる山上の山ありて、我等の前に横はりぬ。我等は皆徒立となりて、驢をば口とりの韁にあづけおきぬ。兵卒は松明振り翳して斜に道取りて進めり。灰は踵を没し又驢を没す。石片又は熔巖の塊ありて、歩ごとに滾り落つるが故に、縦に列びて登るに由なし。我等は雙脚に鉛を懸けたる如く、一步を進みては又一步を退き、只一つところにいるやうに覺えたり。兵卒は、巖近し、今一息に候と叫びて、我等を勵したり。されど仰き視れば山の高きこと始に異ならず。一時許にして僅に巖に到りぬ。われは奇を好む心に驅られて、直に踵を兵卒に接したれば、先づ足を此山の巖に着けたり。

巖は大なる平地にして、大小いろ／＼なる熔巖の塊錯落として途に横る。平地の中央に圓錐形の灰の丘あり。是れ火坑の堤なり。火球の如き月は早く昇りて、此丘の上に懸れり。我等の來路に此月を見ざりしは、山のために遮られぬればなり。忽ちにして坑口黒烟を噴き、四邊闇夜の如く、山の核心と覺しき處に不斷の雷聲を聞く。地震ひ足危ければ、人々相寄りて支持す。忽ち又千百の巨塊を放てる如き聲あり。

一道の火柱直上して天を衝き、迷り出でたる熱石は「ルビン」を嵌めたる如き觀をなせり。されど此等の石は或は再び坑中に没し、或は灰の丘に沿ひて顛り下り、復た我等の頭上に落つることなし。われは心裡に神を念じて、屏息してこれを見たり。

兵卒は、客人達は山の機嫌好き日に來あはせ給ひぬとて、我等を揮きて進ましめたり。われは初めその何處に導くべきかを知らざりき。火を噴ける坑口は今近くべきにあられけなり。導者は灰の丘を左にして進まむとす。忽ち見導者。我等の往手に火の海の横れるありて、身軀數丈なる怪しき人影のその前にゆめくを。これ我等に前だてる旅客の一群なり。我等は手足を動して熔巖の塊を避けつゝ進めり。色褪せたる月の光と松明の火とは、岩の隈々に濃き陰翳を形りて、深谷の看をなせり。忽ち又例の雷聲を聞きて、火柱は再び立てり。手も探りて漸く進むに、石土の熱きを覺ゆるに至りぬ。巖罅よりは白き蒸氣騰上せり。既にして平滑なる地を見る。こは二日前に流れ出でたる熔岩なり。風に觸るゝ表面こそは黒く凝りたれ、底は猶紅火なり。この一帯の彼方には久常の石原ありて、一群の旅客はその上に立てり。

見、又波靜なる入江を見つるならむ、今は唯々窓隔ある石屋の處々に立てるを望むのみ。屋は地震の初に受けたりと覺しき計多の創痕を留めて、その形枯欄の如く、窓は空しき眼窺かと疑はる。間々當時普請の半ばなりし家ありて、彫りさしたる大理石地、素焼の模型など、その傍に横れり。

われ等は漸くにして市の外垣に到りぬ。これに登るに幅廣き石級あり。古劇場の観劇の如し。當面には細長き一條の街ありて通ず。熔巖の板を敷けること余破里の街衢と異なることなし。蓋しこの板は遠く彼基督紀元七十九年の前にありて噴火せし時の遺物なるべし、今その面を見るに、深く車轍を印したればなり。家壁には時に戸主の姓氏を刻めるを見る。又招牌の遺れるあり。偶々その一を讀めば、石日細工の家と題したり。

家裏を窺ふに、多くは小房なり。門扉上若くは仰塵より光を探りたり。中庭の大きさは大抵僅に一小花壇若くは噴水ある一水盤を容るゝに足り、杜廊ありてこれを繞れり。壁又床牀には石目もて方圓種々の飾文を作る。白青赤などの顔料もて畫ける壁を見るに、舞妓、神物の類狗頭なる鮮明なり。博士とフェデリゴとはこ

の美麗にして久しきに耐ふる顔料の性状を論ずと見えしが、いつかバヤルデイが大著述の批評に言ひ及びて、身の何の處に在るかを忘るゝものゝ如くなりき。(バヤルデイの著カタログ、デリ、アンチイキイ、モヌメンチイ、デルコラノは大判紙十卷ありて千七百五十五年の刊行なり。) 幸に我は平生多く書を讀まざりしかば、此物語に引き入れらるゝ虞なく、詩趣ゆたかなる四圍の光景は、十分に我心胸に徹して、平生の苦辛はこれによりて全く抹せられ畢ぬ。

われ等はサルルストが故宅の前に立てり。博士帽を脱して云ふやう。縦ひ靈魂は逸し去らむも、吾輩その遺骸を拜せざらむやと。前庭には、デアナとアクテオンとの大圖を畫けり。(アクテオンは、希臘の男神の名なり、女神デアナを亘間見て、罰のために鹿に變ぜられ、畜ふ所の群犬に噬まる。) 二個の「スフィンクス」(女首獅子の石像)を脚としたる大理石の巨卓あり。傳へいふ、初めこの皓潔王の如き卓を發掘せしとき、工夫は驚喜の餘、覺えず聲を放ちて叫びぬと。されど我を動すことこれより深かりしは、色褪せたる人骨と灰に印せる美しき婦人の乳房となりき。

われ等は廣こうちを過ぎて、ユピテルの祠の

前に至りぬ。日は白き大理石の柱を照せり。其背後にはエズキオの山あり。巔よりは黒烟を吐き、半腹を流れ下る熔巖の上には濃き蒸氣簇れり。

われ等は劇場に入りて、禮絨をなせる石榻に坐したり。舞臺を見るに、その柱の石障石屏、昔のまゝに残りて、羅馬の俳優のこゝに演技せしは斯の如くぞおもはるゝ。されど今は音樂の響も聞えず、公衆の喝采に慣れたるロストウズが聲も聞えず。わが觀るところの演劇は、緣肥たる葡萄酒、行人絡繹たるサルルノ街道、其背後の暗蒼なる山脈等を道具立畫割として、自ら悲壯劇の舞群となれるホームベイ市の死の天使の威を歌へるなり。われは觀面に死の天使を見た。その翼は黒き灰と流るゝ嵐として、一たびこれを開張するときは、幾多の市村はこれがために埋めらるゝなり。

## 噴火山

熔巖は月あかりにて見るべきものとて、我等は暮に至りてエズキオに登りぬ。レジナにて驢を雇ひ、葡萄酒、貧しげなる農家など見つ騎り行くに、漸くにして草木の勢衰へ、はては片端になりたる小灌木半ば枯れたる草の



う。いかに心地や悪しき。われとても同じさまなり。こは火山の所爲にて、この郷の空氣の悪しくなるならむ。エズキオの噴火は次第に熾なり。熔巖の流は早く麓に到りて、トルレ、デル、アモンチャタの方へ向へりと聞く。今宵は激しき音の聞ゆるならむ。空氣には灰多く雜れり。山に近き處にては、木々の梢皆灰に掩はれたり。嶺の上は黒雲覆ひ重りて、爆發の度ごとに青き欲その中に立ち昇れりといふ。サンタは色蒼く、瞭常ならず耀けるが、友の詞を聞きていふやう。われも熱に躍れりと覺ゆ。されど日曜日には病を刀めて往くべし。友のために命をさへ輕んずべし。その翌日熱に苦めらるゝと前に告すとも、それは顧みるべき事ならず。友は嬉しとおもふや、あらずや、それは知るべきならねどなど、心ありげに云へり。

われは日ごとに公苑に往き戯園に入り、又心安からぬまゝに寺院を尋ねて、聖母の足の下に俯することあり。燦然え胸跳るばかりなる怖ろしき誘惑に想ひ到れば、懺悔の念轉と深く、志を遂げ功を成さむと欲する大いなる企圖を翻み思へば、祈禱の心愈々切なり。されど我靈は我肉と闘へり。わが心機の一轉すべき期は、想ふに日曜日にあるならむ。われは愚癡を得ず

して、空しく聖母の膝下を走り出でぬ。

一たび偕に義家(神楽場)に往かずや、いかなる境界をも詩人は知らざるべからずとは、吾友フエデリゴの曾て云ひしところなり。されど友は我を伴ひしことなく、我も亦獨り往かむ心を生ずることなかりき。こは見むことの願はしからざるにあらず、心の怏れたるなり。むかしペルナルドオの我にいひしことあり。汝はドメニカに育てられ、「ジェスキタ」派の學校に人となりて、その血中には山羊の乳汁雜れり。されば汝は臆病なりといひき。當時われはその無禮を怒りしが、今思ふに此言は幾分の理なきにあらず。われまことに詩人となりて、善く社會の狀態を歌はむには、先づかゝる怯懦の心を棄てざるべからず。わが此念をなし、は、夕ぐれに此市に開えたる藝家の門を過ぐる時なりき。これぞ我膽を試みるべき好機會なるべき、自ら薄奕せでもあるべし、後に相識れる人々に語るとも、必ず咎むるものはあらじなど、自ら問ひ自ら答へて、騒ぐ胸を押し鎮めつゝ門に入りぬ。こゝには嚴かなる装したる門者立てり。兩邊に燈を點じたる石階を登れば、前房あり。儼然あまた走り迎へて、我帽と杖とを受取り、我が爲めに正面なる扉を開開したり。

戸内には燈明室あまたあり。室ごとに大卓幾箇か据ゑたるを、男女打雜りたる客圍み坐せり。われは勇を鼓して先づ最も月に近き一室を大股に歩み過ぎしに、諸人は顧みむとだにせざりき。卓の上には堆く金貨を積みたり。我目に留まりしは、十年前までは美しかりけむと思はるゝ、さたすぎたる婦人の服飾美しく面に紅粉を施せるが、瘦せたる掌に骨牌緊しく握り持ちて、鸞鳥の如き眼を卓上の黄金に注ぎたるなり。若く美しき女子も二人三人見えたるが、その周囲には少年紳士群り立ちて、何事をか語るさまなりき。老若いづれはあれど、皆嘗て能く人の心を動しゝ人の、今は他の心文牌に目を注ぐやうになりしなるべし。

稍々狭き室に紅緑に染め分けたる一卓あり。客は柱文銀(コロンナトオ)といふ、その文様は依りて名づく、我二圓十五錢計に當る)一塊若くは數塊を一色の上に置く。球ありて此卓上を走り、その留まる處の色は、賭者をして倍價の銀を贏ち得しむ。彼より暇ふに、その速なることは我脈搏と同じく、黃白の堆は忽ち卓上より又忽ち卓を下る。われは覺えず兜兒を搜りて一塊の柱文銀を取り、漫然卓上に擲ちたるに、銀は紅色の上に駐まれ

導者は我等一行を引きて此火鼓を踐ましめたるに、足跡炙ぶるが如く、我等の靴の黒き地に赤き痕を印するさま、橋上の霜を踏むに似たり。處々に斷文ありて、底なる火を透し見るべし。我等は凝息して行くほどに、一英人の導者と共に歸り來るに逢ひぬ。渠、汝等の間に英人ありやと問ふに、われ、無しと答ふれば、一聲「生」と叫びて過ぎぬ。

我等は彼旅客の群に近づきて、これと同じく一大石の上に登りぬ。此石の前には新しき熔岩流れ下れり。譬へば金の熔爐より出づる如し。其幅は極めて潤し。蒸氣の此流を被へるものは火に映じて殷紅なり。四圍は暗黒にして、空氣には硫黃の氣滯ちたり。われは地底の雷聲と天半の火柱と此流とを見聞して、心中の弱處病處の一時に滅盡するを覺えたり。われは胸前に合掌して、神よ、詩人も亦汝の預言者なり、その聲は寺裏に法を説く僧侶より大なるべし、我に力あらせ給へ、我心の清きを護り給へと念じたり。

われ等は歸途に就きたり。此時身邊なる熔岩の流に、爆然聲ありて、陷井を生じ炎焰を吐くを見き。されどわれは復た戰慄ふことなかりき。一行は積灰の新に降れる雪の如きを蹴て、

且滑り且降るほどに、一時間の來路は十分間の去路となりて、何の勞苦をも覺えざりき。われもフェデリゴも心に此遊の徒事ならざりしを喜びあへり。驢に乗りて草寮に至れば、博士は跼坐して我等を待てり。促し立て、共に出づるに、風斂り月明かなり。拿破里灣に沿ひて行けば、熔岩の赤き影と明月の青き影と、波面に二條の長蛇を跳らしむ、聞説らく、昔はボツカチヨオ涙をキルギリウスの墳に灑ぎて、譽を天下に馳せたりとぞ。われ其才、固よりこれに比すべきにあらねど、けふエズキオの山の我詩思を養ひしは、未だ必ずしもむかし詩人の墳のボツカチヨオの天才を發せしに似ずばあらず。

博士はわれ等を誘ひて其家にかへりぬ。われは前度の別をおもひて、サンタ夫人との應對いかゞあらむと氣遣ひしに、夫人の優しく打解けたるさまは、毫も嚙舌に異ならざりき。夫人はわが即興の手際を見むとて、こよひの登山を歌はせ、辭を窮めて我才を讃めたり。

## 囊家

サンタのわれに優しきことは昔に變らず。されど人なき處にてこれと相見むことの護影く

て、若しフェデリゴの共に往かざるときは、必ず人の先づ集ひたらむ頃を待ちて、始ておとなふこととなしつ。現にあやしきものは人の心なり。曾て心にだに留めざりし人と、ゆくりなく浮名立てたるゝときは、その人はそもいかなる人にかと疑ふより、これに心付くるやうになり、心付けて見るに隨ひて、美しくもおもはれ慕はしくもおもはるゝことありと聞く。我が夫人に於けるも亦これに似たるなるべし。前の事ありしより、我が夫人を見る日は昔に同じからで、その豐なる肌、媚ある振舞の胸躍の種となりそめしぞうたてき。

我がナポリに來てより早や二月とはなりぬ。次の日曜日はわが「サン、カルロ」の大劇場に出づべき期なり。其日の興行はセキルラの刺手にて、その未折の終りてより、我即興詩は始まるべしとぞ掟てられし。番付には流石にわが實の苗字をしるさむことの恥かしくて、假にチエンチイと名告りたり。この運命の定まらるべき日の、切に待たるゝと共に、あるときは其成功の覺來なき心地せられて、熱病病人の如くなることあり。けふも博士の家をおとづれたれど、われは人々の背後にかくれて物言ふことも稀なりき。フェデリゴは我が物思はしげなるを見ていふや

るゝなり。われは此室を馳せ出で、此家を馳せ出でたり。我胸は怒と悲とのために裂けむとす。此夜は曉近うして縊にまどろむことを得たり。

我が「サン、カルロ」の劇場に登るべき日は明日となりぬ。これ待つ疑懼の情と、さきの夜戀の敵に出逢ひたる驚愕の念とは我をして暫くも安んずること能はざらしむ。わが聖母其他の諸聖を祈る心の切なりしこと此時に過ぐるはなかりき。われは寺院に往きて、彼の救世者流血の身に擬したる麴包を乞ひ受け、その奇しき力の我を清淨にし我を康強にせむことを禱りぬ。尊き麴包は果して我に多少の安堵を與へぬ。されどこゝに最も心にかゝる一事あり。そはアモンチャタの此地にあるにはあらずや、ベルナルドオはこれに隨ひて來たるにはあらずやといふ疑問なりき。既にしてフエドリゴは我が爲めに偵知して、アモンチャタのこゝにあらず、ベルナルドオの四日前に單身こゝに到りしを報ず。友は綿密に市の來貨簿を閲しくれたるなり。サンタの熱は未だ瘥えず、されど明日の興行には必ず往かむと誓へり。エズキオは火を噴き水を雨らすこと故の如し。而して我名を載せたる番附は早く通衢に貼り出されたり。

## 初舞臺

日暮れて劇場の馬車の我を載せ行きしは、樂劇の幕の既に開きたる後なりき。若し運命の女神にして、剪刀を手にして此車中に坐したらむには、恐らくは我は、いざ、截れと呼ぶことを得しならむ。われは只と神を頼みて餘念なかりき。

場内の逍遙場には俳優と文士と打雜りたる群ありき。中には我と同業なる即興詩人さへありて、其名をサンチニイと云ふ。平素人に佛蘭西語を教ふ。われはその群に近づきたり。會話は甚だ輕く、交ふるに笑諺を以てす。セキルラの剃手の曲の爲めに登場する俳優は、乍ち去り乍ち來り、演戲のその心を極さるること尋常の社交舞に異ならず。舞臺はその定住の地なればさもあるべし。

サンチニイの云ふやう。吾等は君に難題を與ふべし。譬へば、堅硬き胡桃の析き難きが如し。されど君は能く析き能く解き給ふならむ。われも猶初めて登場せし時の戰慄の狀を記せり。されど我智は我に秘訣を授けたり。そは閑情、懷古、伊太利風土の美、藝術、時風等、何物にも附會し易きものあるを用ひ、又人の嗜

采を博すべき段をば先づ作りて諸人じ置くことを得る事なりと云ふ。われ絶て此種の準備なしと答へしに、サンチニイ頭を掉りて、否、そは隠し給ふなり。要するに君の如き伶俐なる人には此業いと易しと耳語けり。

剃手の曲は終りて、われは獨り廣濶なる舞臺の上に立てり。座長は笑を帶びて我顔を打目守り、斷頭拳は築かれたりと耳語きて、道具方に相圖せり。幕は開きたり。斯て此大劇場の観棚に對して立てる時、わが視る所は皆へは黒洞々たる大坑に臨める如く、僅に伶人席の最前列と高き觀棚の左右の端となる人の頭を辨ずることを得るのみ。濃く温なる空氣は漲り來りて我面を撲てり。われは我精神の此の如く安く夷なるべきをば期せざりき。その狀態は固より興奮せり。而れどもその諸機に接觸し易き性は十分に備はりたり。われは自家の精神作用の緊張を覺ゆると共に、又其明徹を覺えたり。猶晴れたる冬の日の空氣の極めて冷に兼ねて極めて明たるがごとくなるべし。

看客は片紙に題を記して出し、警吏これを檢して、その法律に抵觸せざるを認めたる後、われに交付す。われは數題中に就いて其一を簡み取る自由あり。初なる一紙には侍奉紳士と題せ



り。置者は我面を注視して、其色の意に適へりや否やを問ふものゝ如し。われは又覺えず傾きたり。球は走り、我銀は二塊となりぬ。われはこれを收むるを憚りて、銀を其處に放置せり。球は走り又走りて、銀の数は漸く加りぬ。運命は我に與するにやあらむ。銀の塊は次第に大いになりて、金貨さへその間に輝けり。われは噓の燃ゆるが如きを覺えたれば、葡萄酒一和を買ひてこれに湛ぎつ。黄白の山はみるみる我前に聳えたり。忽ち球は我色に背きて、監者は冷かに我銀の山を撈ひ取りぬ。われは夢の醒めたる如くなりき。我がまことに矢ひしは柱文銀一つのみと、獨り自ら慰めて次の室に入りぬ。

こゝには數人の少女あり。中なる一人の姿貌は宛然たるアモンチャタなるが、只身軀高く稍々肥えたるを異なりとす。われは暫くこれに注目せしに、少女は我前に歩み寄りて、傍なる小卓を指し、おん敵手にはなるまじけれど、耳詰きたり。わが輕く辭みて數歩を退き去るを、少女は訝かしげに見送り居たり。奥の詰なる室には、少年紳士等打寄りて撞球戯をなせり。婦人も幾人か立ち雜りたるに、紳士中には上衣を脱ぎたるあり。われは初め此社

會の風儀のかくまで窺れたるをば想ひ測らざりしなり。入口の戸に近く、此方に背を向けて撞杖を揮へる丈高き一男子あり。今の撞ぎざまや巧なりけむ、人々喝采せしに、前に我に背牌を割めし少女も彼男子の面を覗きて、笑みつゝ何事をかさゝやきたり。男は振り向きざまにその頬に接吻し、女は嬌嗔してその男を打てり。われは遂に彼男の横顔を望み見て慥惜せり。それは餘りにベルナルドオに肖たるが爲めなり。われは進みてこれに近づくべき膽力なかりき。されどその眞のベルナルドオなりや否やを知らむことの願はしければ、傍にほの暗き室の戸の開きありたるを見て、我より窺ふべく彼より見るべからざらしむために、壁に沿ひて徐に歩み、そここれに進み入れり。天井には紅白の硝子燈を吊りたれど、わざと明闇相半して處々蔭多からしめたり。室は假の庭園なり。薄片鐵を塗りて桀となしたる苜艸は、幾箇のさゝやかなる亭に纏ひ附きて、その間には巧に盆栽の橘柚等を排べたり。亭の前なる椅には刺製の鸚鵡の止まりたるあり。冷なる風は忽より入りて、自奏器の樂聲人の眠を催さむとす。

わが此裝置を一瞥し畢りし時、彼のベルナルドオに肖たる男はこなたに向ひて足の運び輕げ

に歩み來たり。われは思慮を費すに遑あらずして、近き亭の内に潜みしに、男は面に笑を湛へて閣上に立ち留まりぬ。その面は恰も我方へ眞向になりたるが、われはそのまがふ方なきベルナルドオなることを認め得たり。渠は隣なる亭に歩み入り、長椅に身を投げ掛けて、微かに口笛を鳴し居たり。我胸裏には萬感湧起せり。ベルナルドオこゝに在り。我と他と咫尺す。われはかく思ふと共に、身うち悉く震ひわなゝくを覺えて、力なく亭内なる長椅の上に坐したり。花卉の薫、幽かなる樂聲、暗き燈火、軟なる長椅は我を夢の世界に誘ひ去らむとす。現に夢の世界ならでは、この人に邂逅すべくもあらぬ心地ぞする。少焉ありて前のアモンチャタに似たる少女は此室に入り將に進みて我が居る亭に入らむとす。われは心にいたく驚きて、身内の血の湧き立つを覺えき。その時ベルナルドオは忽ち聲朗かに歌ひはじめたり。少女は聲をやるべに隣の亭に入りぬ。衣の戦ぎと共に接吻の我聲耳を襲へり。此聲は我心を焦し爛かせり。嗚呼アモンチャタは我を去りて此廳清男子に就きしなり。この男子アモンチャタを獲てより幾時をか經し。而るに其存は早く既にこの淤泥もて埋ね成したる妖姬の身に觸

飛びしときは、終に茫々たる平野の正中なる羅馬の都城に至りぬ。鐘の如き蒼海を脚下に、カプリの島の外遠く翔りて、夕陽の雲の奥深く入りしときは、忽ち粉堞彫牆の前に横はるを見て、これは何ぞと問ひしに、少女答へて、母君の樂き給ひし城よと云ひぬ。少女は童子と樂しき日をこの城の内に送りしこと數くなりき。童子の齡漸く長ずるに及びて、少女の訪ひ來ること漸く稀になり、はてはをり／＼葡萄欄の葉の間又は柑子の樹の梢の隙より、美しき目もてそとさし覗くのみとなりぬ。童子はこれを見るごとに戀しく懷かしきこと限なく、人知らぬ愛に胸を苦めたりき。漁父は童子を伴ひて海に往き、櫓を搖し帆を揚げ、暴風と争ひ怒濤と闘ふことを教へつ。年長けて後、この少年のみなりゆきぬ。月清く波靜なる夜半に、獨り舟中にあるときは、ともすれば櫓を搖す手のおづから休み、澄み渡りて底深く生ふる藻のゆらめくさへ見ゆる水にきと目を注ぎて、瞬もせず打目守ることあり。かゝる時は昔の少女、その嬌眸を睜きて水底より覗き、或は頷き或は招げり。とある朝漁村の男女あまた岸邊に集ひぬ。そは旭日の波間より出でむとする時、一

箇の奇しく珍らしき鳥國のカプリに近き處に湧き出でたればなり。飛簷は開隙間なく立ち竝びて、その翳なきこと珠玉の如く、その光あること金銀の如く、紫雲棚りき星月麗れり、現にこの一幅の畫圖の美しきは、譬へば長虹を截ちてこれを彩りたる如し。蜃氣樓よと漁父等は叫びて、相指して嬉み笑へり。彼の漁父の子のみは獨り笑はざりき。知らずや、かの樓閣はわが昔少女と共に遊び暮し、處なるを。懷舊の念しきりにして、戀慕の情止むことなく、雙眸涙に曇る時、鳥國は忽ち滅えたり。月あかき宵の事なりき。鳥國は又湧き出でぬ。忽ち一隻の舟ありて、漁父等の立てる岬の下より、弦を離れし征箭の如く、波平かなる海原を漕ぎ出で、かの怪しき島國の方に隠れぬ。黒雲空を蔽ひて、海面には暗緑なる大波を起し、潮水倒立して一條の巨柱を成せり。須臾にして雲劍まり月清く、海面復た平かになりぬ。されど小舟は見えざりき。彼漁父の子も亦あらずなりぬ。歌ひ畢るとき、喟采の聲前に倍し、我膽力は漸く大に、我興會は漸く高し。

第三曲の題はタツソナなりき。われは一たびタツソナたりしことあり。レオノオレは即ちアマンチャタなり。我等はフェエララ宮中に相見

たり。われは周圍の苦を嘗め、懷裡に死を藏して又自由の身となり、波立てる海を隔て、ソレントオより拿破里を望み、また聖オノフリイ寺の欄柵の下に坐し、戴冠式の鐘聲カビトリウム街頭に起るを聞けり。されど冥使早く至りて其冠をわれに授けつ。是れ不死不滅の冠なりき。思想の急流は我を漂し去りて、我心跳は常に倍せり。

最後の一曲はサツフォオの死を題とす。嫉妬の苦も亦我が自ら味ひたところなり。アマンチャタが痼疾ひたるベルナルドオに吝まざりし接吻は、今憶ふも猶胸焦がる。サツフォオの美はアマンチャタに似て、その戀情の苦は我に似たり。波濤はこの可憐なる佳人を覆ひしんぬ。(十六世紀の伊太利詩人タツソナと前七世紀の希臘女詩人サツフォオとの傳は今頃を悼りて悉く註せず。) 看客は皆泣けり。拍手の聲は狂瀾怒濤の如く、幕一たび墮ちて後われは二たび幕の外に呼び出されぬ。

喜は身に滿ち兼ねて胸を壓せり。舞臺を下りて、人々の來り賀するに逢ひし時、われは瘡癥のさましたる啼泣を發したり。此タツサンニイ、フェデリゴ及二三の俳優は我が爲めに小庭を開けり。我心は嬉みたれど我舌は緘られた

り。こは人妻に事ふる男を謂ふ。中世士風の一變したるものなるべし。されどわれは未だ深く心をこれに留めしことなし。(原註。「イル、カワリエル、セルエンテ」又「チチスベオ」。今侍奉紳士と翻す。此俗本とジェノワ府商賈より出づ。その行販して郷を離るゝもの婦を一友に託す。これを侍奉紳士といふ。初め僧に託するを常とせしが、後又俗士を擇む。侍奉紳士は婦の早起盥漱する時より、深更寢に就く時に至るまで、其身邊に在りて奉侍す。他婦を顧みることとを容さず。聞く侍奉紳士中嬌愛に及ばざるもの往々にして有り。嘗て一男子の歿するや、其誄辭中侍奉紳士となりて責を負ひ任を全うすといふ語ありきと。)われは此俗を歌ふ一曲の人口に膾炙するものあるを知れど、急にこれに依りて思を構ふること能はず。(曲とは「フェミナ、デ、コスツメ、デ、マニエレ」と題するものを謂ふ、「ソネットオ」なり、ミユルレルの羅馬と其子女との巻中に收めたり。)望を第二紙に屬してこれを開きたり。紙上にはカフリと書せり。是れ亦わが爲めの難題なり。われは拿破里よりその山脈の美しきを賞しつれども、未だ一たびも此島に航せしことあらず。若し二者中一を取らば、猶侍奉紳士をこそ辭を措き易しと

せめ。われは第三紙を開きたり。題して拿破里の窟墓といふ。これも亦我未知の境なり。されど窟墓の一語は忽ち少時の怖ろしき經歷を想ひ起す媒となりぬ。フェデリゴとの漫步より地下に路を失ひたる時の心の周章など、悉く目前に浮びぬ。われは直ちに絃を撥きて歌ひ出でぬ。章句は自らにして成りぬ。われは唯自家少時の經歷を語りしのみ、唯羅馬の地下窟を以て拿破里の地下窟となしゝのみ。即興詩の末解は、一たび失ひつる絲の端を再び探り得たるの喜を叙したり。明采はあまたゝび起りぬ。われは脈絡中に三鞭酒の循るが如き感をなしたり。

われは第二曲の題として蜃氣樓を得たり。こは拿破里又シチリヤの水濱にて屢く見るゝものといへど、われは未だ嘗て見しことあらず。唯此重樓複閣の奥には、我に親しき神女棲み給ふ。これをファンタジア(空想)の君とはいふなり。われは唯々平生夢裏に遊べる境界を歌はむのみ。その中には同じ神女の宮殿あり、苑圃あり。われは急に我資材を引纏めて、一の布局を定め、一の物語となしたり。歌ひ出づるに従ひて、新しき思想は多く來り加はりぬ。先づ敘したるは荒廢せる一寺なりき。景をボジリツ

ボに取て、わざと其名をば擧げざりき。簞倒き廊朽ちて、今や漁父の栖家となりぬ。聖像を燒き附けたる窓の下に床ありて、一童子臥したり。月あかくいと静けき夜、美しき童女來りおとづれぬ。その美しきは譬へむに物なく、その身の輕きことそよ吹く風に殊ならず。兩の肩には五彩燦然たる翼生ひたり。二人は共に嬉み遊べり。少女は漁家の子を引きて、維深き葡萄園に往き、又近きわたりの山に分け入るにまだ見ぬ景色いと多く、殊に山腹の自ら開けて、その中にめでたき壁畫と數多き寶卓とある寺院の見たるなど、言へば世の常なり。或るときは共に舟に棹して青海原を渡り、聳立つエズキオの山に漕ぎ寄せつるに、山は全く水晶より成れりと覺しく、巖の底なる洪爐中に、烟渦卷き火燃え上るさま、掌に指すが如くなり。或るときは共に地下の古市に遊ぶに、唐麗屋舍悉く存じて往來繼るが如く、その殷富豐盛なること、書讀む人の遺跡を見て説き聞するところに増したり。少女は嘗て其羽を脱ぎ卸して、その童子の肩に結び、いざ共に空に翔らむといふ。おのれは風なす輕き身なれば、羽なきと羽あると殊ならずとなり。橘柚橋様の林を見下し、高くは山嶺の雲を踏み、低くは水草茂れる溜潭の上を



き女なりき。又此時は常にも増して美しく見えたり。その頬は薄紅に勻へり。形好くつややかなる額際より、平に後さまに揃けづりたる黒髪は、ゆたかなる波打ちて背後に垂れたる。譬へば古のフイダースならではえ作るまじきユノの姿にも似たるなるべし。夫人。されば君は世のために生存へ給ふべき人なり、世の寶なり、幾百萬の人をか喜ばせ樂ませ給ふらむ。ゆめ一人の人になその尊き身を私せしめ給ひそ。世の中の人、誰かおん身を戀ひ慕はざる人。おん身の才おん身の藝は、いかなる人の心をも挫きつべし。斯く云ひつゝ、夫人は我を引きて、其長椅の縁に坐せさせ、さて詞を續きて云ふやう。猶改めておん身に語るべき事こそあれ。曠昔の日おん身が物思はしげに打沈みてのみ居給ひしとき、拙き身のそを慰め參らせばやとおもひしことあり、その時より今日までは、まだしみるゝとおん物語せしことなし。いかに申し解き侍らむか。おん身は妾が心を解き説り給ひしにはあらずやと思はれ侍りといふ。嗚呼、此詞は深く我を動したる。我もしばしば或は情厚き夫人の詞、夫人の振舞を誤り解したるにはあらずやと、自ら疑ひ自ら責めしことあり。われは唯、御身が情は餘

りに厚し、我身はそを受くるにふさはしからずと答へて、夫人の手背に接吻し、自ら勵まし白ら戒めて、淨き心、淨き目もて夫人の面を仰ぎ視たり。夫人の美しく藏れたる目の深黒なる瞳は、極めて靜かに極めて重く、我面を俯視す。若し人ありて、此時我等二人を窺ひたらしむには、われその何の辭もてこれを評すべきを知らず。されどわれは聖母に譬ふことを得べし。我心は清淨無垢にして、譬へば姉と弟との心を談じ情を語るが如くなりしなり。さるを夫人の目に常ならぬ光ありて、その乳房のあたりは高く波立てり。われはその自ら感動するを以爲へり。夫人は呼吸の安からざるを覺えけむ、領のめぐりなる紐一つ解きたり。夫人は、おん身にふさはしからざる情といふものあるべしや、おん身の才あり、おん身の貌ありてとさうやきて、徐かに臂を我肩に纏ひ、きと目と目を見合せて、無際限の意味ありげなる、名狀すべからざる微笑を面に湛へ、猶其詞を繼いで云ふやう。いかなれば妾は初め君を知る明なくして、空想に耽り實世に疎き、偏僻なる人とは看做したりけむ。おん身は機微を知り給へり、機微を知るものは必ず能く勝を制す。妾が血を挾いて熱をなすものは何ぞ。妾は病まし

むるものは何ぞ。妾は痛めて何をか思へる。妾は疲て何をか夢みたる。おん身の愛憐のみ。おん身の接吻のみ。アントニオよ。妾が身を生けむも殺さむも、唯とおん身の命のまゝなり。夫人はひしと我身を抱けり。一道の猛火は夫人の朱唇より出で、我血に、我心に、我靈に燃えひろがりたり。彼時逆し、此時逆し。はたと我頂を撃つものあり。嗚呼、功德無量なる聖母よ。これはおん身の像を寫せる小廟額にして、偶々壁頭より墮ち來りしなり。否、偶々墮ち來りしに非ず。聖母は我が熱海の波に沈み果てむを思ひて、ことさらに我を喚び醒し給ひしなり。否々と呼びて、我は起ち上りぬ。我渾身の血は沸き返る熔巖にも比べべし。アントニオよ、妾を殺せ、妾を殺せ、ただ妾を棄ててな去りそと、夫人は叫べり。其險其昨、其瞻視、其形相、一として情慾に非ざるもの莫く、而も猶美しかりき。火もて盡き成せる天人の像とや謂ふべき。我身の内なる千萬條の神經は一時に震動せり。我は一語を出すこと能はずして、室を出で階を下りぬ、怖ろしき物に逐はれたらむ如く。戸の外の皆火なること、身の内の皆火なること同じかりき。蕭瑟の氣、先づ一を振てり。エス

りき。フェデリゴ打興じて曰ふやう。此男は一の明珠なり。その一失は第二のヨゼフたるにあり。(ヨゼフは童貞女の夫にして耶蘇の義父なり。)蓋ぞ薔薇を摘まざる、その凋落せざるひまに。

夜更けて後客舍に歸り、聖母と救世主との我を棄て給はざりしを謝して、いと穩なる夢を結びつ。

## 人火天火

翌朝は心地爽かに生れ更りたる如くにて、われはフェデリゴに對して心のうちの喜を語ることを得たり。身の周圍なる事々物々、皆我を慰むるものに似たり。又我心は一夜の間に老成人となりたるを覺えぬ。そは晴采の雨露の我性命樹上に墜ちて、其果實を熟せしめたるにやあらむ。われは昨夜サンタの劇場にありしを知る。いでや往きて彼夫人をたづね、その讃詞をも受けてまじし、足の運も常より輕く、マレッツチ博士の家に往きぬ。博士は繰り返しつゝよろこびを陳べて、さてその妻の劇場より歸りし後夜もすがら熱に惱みしを告げたり。又曰ふ、今は眠れり、眠醒めなば必ず快きに至るならむ、夕暮に再び訪ひ給へと。午餐にはフェデ

リゴ新に獲たる女だちと、我を誘ひ出して酒店に至り、初め白き基督淚號を傾け、次いで赤き「カラブリア」號を傾し、わが最早飲まずと辭むに追ひて、さらば三鞭酒もて熱を下せなどいひ、歡を盡して別れぬ。街に歩み出づれば、大空は照りかどやきぬ。そはエズキオの山の噴火一層の劇しさを加へて、熔巖の流愈々濶く漲り速く下ればなり。岸邊には早くそを看むとて、舟を買ひて漕ぎ出づるものあり。

「アエ、マリア」の鐘鳴り止む頃、再び博士の家に往きぬ。門に進みて婢に問へば、家にはますは夫人のみにて、目覺めて後は快くなれりとのたまへり。問難の客をばこそわれと仰せられつれど、檀那は直ちに入り給ひても宜しからむとなり。美しくして晴れがましからず、心もおのづから靜まりぬべき室なり。窓の前には厚き質の幌を垂れたるが、長く床を拂へり。鐵研ぐ愛の神の童の大理石像あり。アルガント燈は人を迷はさむと欲する如き光もてこれを照し出せり。こはわが轉瞬の間に看出したる室内のさまなりき。夫人は輕げなる輕衣を着て、素絹の長椅の上に横はりたりしが、我が入るを見て半ば身を起し、左手もて被を身に纏ひ、右手を我にさし伸べたり。

アントニオの君よ、思の儘に抱ち給ひぬ、おん身も嬉しと思ひ給ふならむ、千萬人の心は渾て君に奪はれたり、君は初め我がいかに君のために胸を跳らせ、後君の成功の期するところに倍するに及びて、いかに君のために安心の息を嚙きたるかを知り給ふまじとは、夫人が我を迎ふる詞なりき。われはその病を問ひしに、否、はや癒えむとす、君も生れ更り給へる如し、舞臺に立ち給ひしとき、君の姿は美しかりき、極めて美しかりき、興會に乗じて歌ひ給ふに及びては、この世の人とは覺えざりき、又その歌ひ給ふところは皆君が上なるやうに聞き做されたり、地下の窟に迷ひ入りし少年と畫工とは、君とフェデリゴの君とに外ならず思はれたりといふ。われ。いかにこそは言ふところの如し、我が歌ひしは皆我開眼なりしなり。夫人。しかなるべし。君は戀の喜をも知り給へり、戀の悲をも知り給へり。君は樂を享くべき福ある人なり。今よりその福を消受し給はむことをこそ祈れといふ。われ隨即きのふより心爽かなりて、四邊のものごとの我を樂ましむる由を語りしに、夫人は我手を引き寄せて我と目と目を見合せたり。その目なざしは人の心の奥深く穿ち透すものゝ如くなりき。夫人は現に美し

行くものあり。流れ下る熱質の一部、その高きが爲めに分れて、迸り落つることありて、その奇觀は岸拍つ波に似たり。その落ちて地上に留まるや、猶暫くその火紅を存じて、銀河の側に翳く星を見る如し。既にして空氣は漸くその隅角と周縁とを冷却して黒變せしめ、そのさま黒き絲もて纏める網に黄金を裹める如し。

熔巖の流れ行く先なる葡萄の幹に聖母の像を懸けたるものあり。こはその功德もて熔巖の炎を逐けむとのこゝろしらひなるべし。されど熔巖はその方轡を改めず。像を懸けたる一本の葡萄は、早く熟のために葉を焦し、その幹は傾きて、首を垂れ、隣を乞ふ如くなり。衆人の中なる浮機なる民等が眼は、その發落いかならむとこの尊き神像に注げり。幹は愈々曲り低れて、今や聖母のおほん裳裾と火の流との間數尺となりぬ。忽ち我が立てる側なるフランチェスクス派の一僧ありて、もろ手高くさし上げて叫べり。聖母は火に焼かれ給はむとす。汝等を永劫不滅の火焰の中より救ひ給ふ聖母なるぞ。早や助け出さずやといふ。衆人は皆震慄して一歩退き、畏怖の眼を睜りて、次第に搦む梢頭の尊像を抬げり。一人の女房あり。口に聖母の御名を唱へつゝ、走りて火に赴きて死せむとす。

爾時僅に數尺を剩したる烈火の壁面と女房との間に、馬を躍らして驕り入りたる一士官あり。手に白刃を抜き持ちてかの女房を逐ひ卻け、大音に呼びけるやう。物にや狂ふ女子、聖母争でか汝が援を求めむ。聖母は微振く彩りたる、罪障深きものゝ手に穢されたる影像の、灰燼となりて滅せむことをこそ願ふなれといふ。その聲はベルナルドオが聲なり。その行は、條忽の間に一人の命を助けて、その言は俗僧の妄誕をいましめ得たるなり。われはこの昔の友を敬する念を禁ずること能はずして、運命の我等二人を遠離けしを憾とせり。されど我胸は高く跳りて、今果に對ひて名告り合ふことを欲せず、又能はざりき。

### 舊 羈 勒

アントニオならずやと呼ぶ聲あり。我に迫りて手を摺れり。初はわれベルナルドオの己れを認め得たるならむとおもひしが、その面を視るに及びて、そのフアビアニ公子なるを知りぬ。公子はわが昔の恩人の甥にして、フランチェスカの君の夫なり。我を以て不義の人となし、我に訣絶の書を贈れる人の族なり。公子。こゝに逢はむとは思ひ掛けざりき。夫人に語らば定めて喜ぶことならむ。されどいかなれば我々、我を認めむとはせざりし。カステラマレに來てより既に八日になりぬ。われ。君達のこゝに在すべしとは、毫しと思ひ掛けざりき。そが上わが伺候を許し給はむや否やに知らねば。公子。現にさることありき。おん身は君にかはる男となりて、婦人のために人と決闘し、脱走したりとの事なりき。そは我とても好しとは思はず。をち君のことは短なる物語にて、その概略を知りし時は、我等もいたく驚きたり。おん身はをち君の書を獲たるならむ。その書は優しき書にはあらざりしならむといふ。我はこれを聞きつゝも、むかし羈勒の再び我身に纏るゝを覺えて、只と恩人に見放されたる不幸なる身の上を詫ちぬ。公子は我を慰めがほに、又詞を繼いで云ふやう。否々、おん身を見放さむはをち君の志にあらざ。我車に上りて共に來よ。今宵は妻のために思掛なき客を伴ひ還らむとす。カステラマレは遠くもあらず。旅宿は狭けれど、猶おん身が顔はむ程の房はあるべし。をち君の性急なるはおん身も兼ねて知れるならずや。この和陸をばわれ誓ひて成し遂ぐべしといふ。我は首を垂れてこの成ぎの覺えなかるべきを告げしに、公子は無造作に我詞を打消して、



キオの顔は炎焰害を摩し、爆發の光遠く四境を照せり。涼を願ふ煩心は、我を驅りてモロの船橋を下り、江灣に出でしめたり。我は身を波打際にはたと僞しつ。我は自ら面の灼くが如く日の血走りたるを覺えて、巾を鹹水に漬して顔の上に加へ、又水を度り來る沙風の些しをも失はじと、衣の鈕を鬆開せり。されど到る處皆火なるを奈何せむ。山腹を流れ下る燎嚴の色は海波に映じて、海もまた燃えむとす。昨を凝らして海を望めば、懸崖の間、サンタが姿のこの火焰の波を蹈みて立ち、その燃ゆる如き目などしもて我を責め我に訴ふるを視、耳邊忽ち又炎を殺せ、妄を殺せと叫ぶを聞く。われ眼を閉ぢ耳を掩ひ、心に聖母を念じて、又眼を開けば、怖るべき夫人の身は踞踏きて後に踏れむとす。そのさま火焰の羽衣を燒くかとぞ見えし。あはれ、其罪を想ふに、畏怖の念の此の如きあり。その罪を遂げたらむ後は、果して奈何なるべき。

### もゆる河

舟に召さずや、檀那、トルレ、デル、アモンチヤタへ渡しまゐらせむと呼ぶ聲は、身のほとりより起りて、そのアモンチヤタといふ語は、猶

能く思に沈みし我を喚び起せり。頭を擡げて見れば、岸近く櫂を止めたる舟人あり。燎嚴の流るゝこと一分時に三臂長なりといへり、(征太利の尺の名) 往きて看給はむとならば、半時間には渡しまゐらせむといふ。舟は袋熱を冷すに宜しからむとおもへば乗りぬ。舟人は棹取りて岸邊を離れ、帆を揚げて風に任せたるに、さやかなる端艇の快く、紅の波を凌ぎ行く。沙風雨の頬を吹きて、呼吸漸く鎮まり、彼方の岸に登りしときは、心も頗るおちゐたり。

我は心に誓ひけるやう。我は再び博士の闕を離えじ。禁ぜられたる果を指さし示す美しき蛇に近づきて、何にかはすべき。幾千の人の、これによりて我を嘲り我を侮るべけれど、猶良心に責められむには廻に優れり。聖の上なる聖母は、我を踏さじとてこそ自ら墮ち給ひけめ。斯く思ふにつけて、聖母の恵の袖に掩はれつゝ、水をも火をも避け得つべき喜は一身に溢れ、心の中に有りとあらゆる善なるもの正なるものは一齊に凱歌を奏し、我は復た心の上的小兒となりぬ。天に在す父よ、願はくは禍を轉じて福となし給へと唱へつゝ、身を終ふるまでの安樂の基を立てもしたらむ如く、足は心と共に軽く、こゝの小都會を歩み過ぎて、田圃

間の街道に出でぬ。

人叫び、人笑ひ、人歌ひ、徒にて走るものあり、大小くまぐさの車を驅るものあり。その騒しき言はむ方なし。燎嚴の流は今しも山麓なる二三の村落を襲へるなり。一群の老若男女ありて奔り逃れむとす。左に嬰兒を抱き、右に褓みを挾める村婦の、目泣き且走るあり。われは財囊を傾けてこれに贈りぬ。われは山に向ふ看者の間に介まりて、推されながらも、白き石垣もて爲切りたる葡萄園の中なる徑を登り行きぬ。衆人は先を爭ひて、燎嚴の將に到らむとする部落の方へと進めり。われは數畝の葡萄園を隔て、始めて燎嚴を望み見たり。暫間の高きなる火の海は崖を掩ひ屋を覆ひて漲り來れり。難に遭へるものは號泣し、壯觀に驚ける外國人は諷呼して、御者商人などは客を招き價を論ぜり。馬に跨れる人あり、車を驅れる人あり、燒耐燭ぐ鐘錶を圍みて呷謀せる農夫の群あり。凡そ此等の物總て火光に照し出されれば、そのさま筆舌もて描き盡すべからず。

燎嚴は同じ櫂に流れ行くものなれば、好事のものは歩み近づきて迫り視ることを得べし。杖の尖は貨幣などを插込みて、燎嚴の凝りて着きたるを抜き出し、これを有たる記念にとて持ち

我とを見くらべたり。われは身を優めてその手に接吻せむとせしに、夫人は我を顧みず、手をジェンナロにさし仰て、晚餐の友を得たる喜を述べ、夫に向ひて、エズキオの爆発はいかなりし、爆機はいつ方へ流れむとするなど問ひぬ。公子は略と見しところを語りて、我等の邂逅の事に及び、今は客として伴ひたれば昔の事を責め給ふと云へり。ジェンナロ。然なり。此人いかなる罪を犯ししか知らず。されど天才には何事を許さるべきならずや。夫人は纔に面を和げて我に會釋しつゝジェンナロに對ひて云ふやう。君のいつも面白げに見え給ふことよ。犯しし科もあらねば、免すべき筋の事もなし。けふは何の新しき事を齎し給ふ。佛蘭西新聞には何の記事かありし。昨夜はいづくにてか時を過し給ひしと問ひぬ。ジェンナロ。新聞には珍らしき事も候はず。昨夜は劇場にまゐりぬ。セキルラの剃手の僅に木齧を齧したる頃なりき。ジョゼフイインはまことに天使の如く歌ひしが、一たびアモンチャタを聞きし耳には、猶他かぬ節のみぞ多かりし。さはいへ我が往きしは彼曲のためにあらず。即興詩を聞かむとなりき。夫人。その即興詩人は君の心に協ひしか。ジェンナロ。わが期する所の上に

でたり。否、衆人の期せし所の上に出でたり。我は諷はむことを欲せず。又藝術は我等の批評もて輕重すべきものにあらず。されど我は夫人に告げむとす。夫人よ、渠の即興詩をいかなる者とか思ひ給ふ。謳者の人物はその詩中に活躍して、満場の客はこれが爲めに魅せらるる如くなりき。何等の情ぞ。何等の空想ぞ。題にはタツソあり、サツフオあり、地下窟ありき。篇々皆書卷に印して、不朽に垂るとも可なるやう思ひ候ひぬ。夫人。それは珍らしき才ある人なるべし。きのふ往きて聴かざりしこそ口惜しけれ。ジェンナロ。(我方を見て)夫人は其詩人の今宵の客なるをば、まだ知らずやとおはせし。夫人。さてはアントニオなりとか。舞臺にまで上りて、即興詩を歌ひぬとか。ジェンナロ。然なり。その歌は舞臺の上にも珍らしき出来なりき。されど夫人は舊く相識り給ふことなれば、定めて屢々その技倆を試み給ひしならん。夫人。(ほゝ笑みつゝ)まことに聴き聞きたり。まだ童なりし頃より、アントニオが技倆をば許め居りしなり。公子。その時われは早く桂の冠をさへ戴かせたり。夫人は處女なりしとき其即興詩の題となりぬ。されど今は食卓に就くべき時なり。ジェンナロ、おん身はフラン

チエスカを伴ひ往け。われは外に婦人なければ即興詩人を伴はむ。いざ、アントニオ君、手を携へて往かむと、戯れつゝ我を導けり。ジェンナロ。さるにても、フアビアニ、おん身は何故我に一たびもチエンチイの事を語らざりしぞ。公子。我家にてはアントニオと呼びならへり。その即興詩人となれるを夢にだに知らねばこそ、前の和聲の一段は生じたるなれ。アントニオは言はば我家の子なり。アントニオ、然にはあらずや。(我は公子を仰ぎ見て會釋せり。)アントニオは好き人物なり。唯と物學ぶことを嫌へり。ジェンナロ。渠は既に萬物を師とする詩人なり。いかなれば強ひて書を讀ませむとはし給ひし。夫人。(戯の調子にて)餘りに讃めちざり給ふな。我等が渠の机に對ひて數學學理に思を覃むるを期せし時、渠は拿破里の女優に懸想してうはの空なりしなり。ジェンナロ。それは多情多恨なる證なるべし。女優とはいかなる美人なりしぞ。その名をば何とかいひし。夫人。アモンチャタとて人柄も技倆も共に優れし女なりき。ジェンナロ。(盃を擧げて)アモンチャタは我も迷ひし一人なり。それは好趣味ありと謂ふべし。さらば、即興詩人の君、アモンチャタの健康を祝して一杯を仰けてむ。(我は苦痛

我を延きて車の方に往きぬ。

車に乗りてより、公子は我に別後の事を語れと迫りぬ。わが賊寨に入りしことを語るに及びて、公子は面に笑を帯びて、それは即興詩にはあらずや、記憶より出でずして空想より出づるにはあらずやといひ、又恩人の絶交書の事を語るに及びて、苛酷なり、太だ苛酷なり、されどそれはおん身の改悔すべきを期してなり、おん身を愛してなり、おん身はよもや非を遂げて劇場に出でなどはせざりしならむといふ。われは直ちに、否、昨夜出でたりと答へき。公子。それは實に大膽なる事なりき。結果はいかなりしか。われ。望外なりき。喝采の聲止まずして、幕の外に出で、謝すること再びなりき。公子。御身にかゝる成功ありしか。それは責めても事なりき。此詞は我材能に疑を挟めるものなれば、われはそを聞きて、快からずおもひぬ。されど恩恵の我口を塞げるを奈何せむ。われは大人に會はむことの心苦しさを訴へしに、公子は唯々戯に、それは説法なくては濟まぬならむ、されど説法を聴聞せむもおん身に害あらじと答へぬ。

兎角いふ程に、車は旅店の門に到りぬ。一少年の髪に焼境當て、好き衣着たるが、門前に立

てり。公子を迎へて云ふやう。フアビアニなるか。好くこそ歸り來たれ。細君は待兼ね給へり。かく云ひつゝ我を視て、扱は顔の即興詩人を伴ひ歸りしか、チェンチといふなるべし、違へりやと云ふ。公子はチェンチとは我面を顧みたり。われ。それは我が番附に書かせし名なり。公子。然なりしか。それは責めてもの思案なりき。少年。フアビアニ、御身は此人のいかに戀愛を欲ひしを想ひ得るか。昨夜おん身が「サン、カルロ」座に往かざりしこそ遺憾なれ。めでたき才藝にこそとて、我と握手し、我と相見る喜びを述べ、又フアビアニに向ひて云ふ。今宵はおん身に晚餐の馳走を所望すべし。この好調者をおん身等夫婦にて私せむとはせまじ。公子。問はるゝまでもなく、おん身は何時にても我方に歡迎せらるゝならずや。少年。さるにてもおん身は、何故に猶我等二人のために紹介の勞を取らずして、互にその名を知ることを得ざらしむるぞ。公子。そはいらぬ禮儀なり。われは熟知と相知れり。汝は我友なれば、渠は特らに紹介をば求めざるべし。渠は唯々おん身を知ることを得たるを喜ぶならむといふ。此挨拶は固より我心に慊ねど、われは又恩恵のために口を塞がれたり。少年は我方に向ひぬ。

さらばわれ自ら我身を紹介すべし。おん身の何人たるは我既に知れり。我名はジェンナロなり。國王陛下の御衛たる一將校なり。(微笑みつゝ)拿破崙の各役にて、世の人は第一に位すとぞいふ。それは低にもあらざるべし。御中わがをばは屈るこれに重きを置けり。おん身の如きを知るは、大いなる幸なり。おん身の才と云ひおん身の呪と云ひと、猶詞を綴がむとするを、フアビアニは押しとめて、止めよとて、さる挨拶を受くることは猶不慣なるべし、紹介とやらむも最早済みたるべければ、夫人の許に往かむ、かしこには又和議といふ難關あり、おん身仲裁の呪を避けずば、今の辯舌を殘し置きて其時の用に立てよと云ひつゝ、彼士官と我とを延きて、旅店の一間に進み入りぬ。われはこの生客の前にて、我身の上の大事を語らるゝを喜ばねど、二人は親しき友なるべければと自ら思ひのどめて、避れ勝に踵ひ行きぬ。やうやくにして歸り給ひしよと迎ふるは、久しく面を見ざりしフランチェスカの君なりき。公子。現にやうやくにして歸りぬ。されど二人の賓客を伴へり。夫人は一聲アントニオと云ひしが、忽又調子を更へてアントニオ君と云ひつゝ、その殿かに落つきたる日を擧げて、夫と



愚人夫婦はわが罪を宥して我を食卓に列らしめ、我を遊山に伴はむとす。豈慈愛に非ざらむや。唯、富人の手に任せて輕く扱昇するときは、その資は貧人心上の重荷となるを奈何せむ。

## 苦言

伊太利風景の美は羅馬又はカムパニアの郊野に在らず。されば我が少しくこれを觀ることを得しは、曾てネミの湖畔に遊びし時と近ごろ拿破里に來し時とのみ。こたび尋ねし勝概こそは、始めて我心を満ち足らしめ、我をして平生夢寐する所の仙郷に居る念をなましめしものなれ。凡そ外國の人などの此境を來り訪ふものは、これをその曾て見し所の景に比べて、或は勝れりとし或は劣れりともするなるべし。足本國の外を跋まざる我徒に至りては、只その魂偉珍奇なるがために魂を攝はれぬれば、今後たその勞弊をだに語ることを得ざるならむ。

素とわれは山水の語ることを得べしや否やを疑ふものなり。山水の全景は一齊に人目を襲ふ。而るにこれを筆舌に上すときは、語を果ねて句を作し、句を積みて章を作し、一の零碎の景に接するに他の零碎の景を以てす。譬へば寄木細工の如し。いかなる能辨能文の士なりとも、その描寫遺憾なきことを得ざらむ。そが上に我が臆列する所の許多の小景は、われ自らこれを前後左右に排置して寄木の如くならしむるに由なし。その排置の如きは、一に聽者讀者の空想に委ぬ。是に於いてや、我が説く所の唯一の全景は、人々の心鏡に映じて千樣萬態窮極することなし。且人をして面貌を語らしめて聽け。日は此の如し、鼻は此の如しと云はむも、到底これに終りて其真相を想像するに由なからむ。唯と君の識る所の某に似たりと云ふに至りて、僅にこれを彷彿すべきのみ。山水を談するも亦復是の如し。人ありて我にヘスベリアの好景を歌へといはれ、我は此遊の見る所を以てこれに應ふならむ。而して聽者のその空想の力を彈じて自ら描出する所のものは、竟にわが日撃せし所の美に及ばざるなるべし。蓋し自然の空想圖は迴に人間の空想圖の上にあるものなればなり。

カステラマレを發せしは天氣めでたき日の朝なりき。これを憶へば、烟立つエズキオの嶺、露けく綠深き葡萄の蔓の木々の梢より梢へと纏ひ懸れる美しき籬間、或は岩を被れる岩壁の上に顯れ或は濃き橄欖の林に遮られたる白聖の城壁など、皆猶目前に在る心地ぞする。穹窿あり大理石柱ある寢女の祠の、今や聖母の堂となりたる(マドンナ、サンタ、マリア)は、古を好む人の心を留むべき遺蹟なり。一壁崩壊して、枯體殘骨の露呈せる處に、葡萄の蔓ひ來りて、半ばそを覆ひたるは、心ありてこの悲慘の景を見せじとするにやとさへ思はれたる。

我目前には猶突兀たる山骨の立てるあり。物寂しく獨り登えたる塔の尖に水鳥の群立ち來らむを候ひて網を張りたるあり。脚底の波打際を見おろせばサレルノの市の人家碁子の如く列れり。而して會々その街を過ぐる一行ありしがために、此一寰區は特に明かなる印象を我心に留むることを得たり。角極で長き二頭の白牛一車を轆けり。車上には山賊四人を縛して載せたるが、その眼は猛獸の如く、炯々として人を射る。瞳黒く貌美しきカラブリア人あり。

鏡を負ひて、車の兩邊を駢行せり。

旅の初一日の宿をばサレルノと定めたり。この中古學問の淵藪たる市に近づくとき、ジェンナロのいふやう。縋吊は黃髮すべし。サレルノ驛境の光は今既に減せり。されど自然といふ大著述は淺ごとと鏡梓せらる。予はアントニオと同じく、師とするところ此に在りて彼に在らず

を忍びて盡せたり。夫人。そも一わたり  
の迷にあらず。職官の甥と稱當して、敵手  
には疵を負はせつれど、不思議にその場を遅れ  
得たり。かくてこたび「サン、カルロ」座には出  
でしなり。アントニオをば舊く知りたれども、  
その大膽なることかくまでならむとは、我等も  
思ひ掛けざりき。ジェンナロ。その職官の甥と  
宣ふは、近頃こゝに來て禁軍の指揮官となりし  
男ならむ。我も前の夜出逢ひしが、才氣ある好  
男子と思はれたり。想ふに情夫先づ來りて、ア  
モンチャタも繼いで至るにはあらずや。此推測  
にして差はずば、拿破里はアモンチャタが最後  
の興行とその合意の禮とを見るならむ。夫人。  
禁軍の將校たるものゝ争でか歌妓を娶るべき。  
そは家を汚すに當るべければ、われ（震ふ聲を  
えも隠さず）。名士の妾を藝術界に求めて、幸  
福と名譽とを得たるは、その例ありとこそ思ひ  
候へ。夫人。幸福は或は有らむ。名譽は有るべ  
きやうなし。ジェンナロ。否、おん身に忤ふに  
は似たれど、己れなどはアモンチャタを得ば、  
名譽此上なしとおもへり。されば人も然ならむ  
とおもふなり。そは宛まれ角まれ、アントニオ  
の君、今宵の即興を聞せ給へ。夫人は君のため  
に好き題を選び給ふべければ。夫人。それは選ぶ

までもなし。ジェンナロの好むところにしてア  
ントニオの能くするところといはゞ、題は戀愛  
と定まり居るならずや。ジェンナロ。善くこそ  
宜ひたれ。その戀愛とアモンチャタとを題とせ  
む。われ。又の口にはいかなる題をも辭まざる  
べし。今宵のみは免し給へ。心地も常ならぬや  
うなり。外套着すして汐風を受け、直ちに火山  
の熱さに逢ひ、歸るさの車にて又涼風に觸れし  
故にや。公子。アントニオも早や技藝家の自重  
といふことを覺えたりと見えたり。今宵は免す  
べければ、明日は共にベスツムに往け。かしこ  
には詩料あり。こも亦拿破里におん身が自重を  
示す手段なるべし。（我はえ辭まで會釋せり。）  
ジェンナロ。好し、渠を伴ひて行かむ。渠一た  
び希臘廟の中に立たば、神來の興忽ち動き  
て、古のビンダロスを欺く詩を得るならむ。  
公子。明日より四日の旅路なり。歸るさにはア  
マルフイとカフリとを見むとす。夫人。旅の  
事をば猶明朝からたふべし。夫人先づ起ちて  
我等は点を離れ、我は始めて夫人の手に接吻す  
ることを得たり。公子は今夜書を作りてをちに  
寄せ、我がために地をなさむと云ひぬ。ジェン  
ナロは打ち戯れて、我はアモンチャタを夢にだ  
に見む、夢なれば決闘を求むる人はあらじと云

ひて別れぬ。  
我若しこの邊を辭みなば、我生涯の運命は  
こゝに一變したるならむ。後に思へば、此邊の  
四日は我少壯時代の六星霜を奪ひ去りたるなり  
き。誰か人間を自由なりと謂ふ。いかに我は、  
目前に張りたる交錯せる網を掴み引くことを得  
べし。されど我はその網のいづれの處に結ばれ  
たるを知るに由なし。我は恩人の勸に會ひて諸  
と曰ひたり。こは我生涯の未來の幾斷のため  
に、舞臺の幕を緊しく閉づべき綱なりしを奈何  
せむ。已みぬるかな。  
われは數行の書をフエデリゴに寄せて、この  
思掛なき邂逅と小旅行とを報ぜむとす。こを  
寫し畢りしとき、我胸には種々の情の群り起  
るを覺えき。さても此夕べの事多かりしことよ。  
サンタが道ならぬ戀、ベルナルドオの再び逢ひ  
て名乗り合はざる、恩人にめぐりあひての後の  
境遇、彼といひ此といひ、此身は風のまにまに  
弄ばるゝ一片の木葉にも譬へつべき心地ぞす  
る。きのふは縁なくゆかりなき公衆の喝采を  
得て、けふは世に極なるべき美人のわが優しき  
一言を希ひ求むるに逢ふも我なり。忽ち舊道  
の縁に手繰り寄せられて、一餐の恵に頭を垂  
れ、再び素のカムハニアの孤となるも我なり。

へ、「サン、カルロ」座なる數千の客は我に何の由縁もなきに、口を齊うして嘲笑したり、われは惠深き君の我喜を分か給はむことを付りしにと答へたり。夫人。おん身の友は多かるべし。されどまことにおん身の喜を分たむもの我が如きは少からむ。おん身の情に厚きこと、心ざまの卑からぬことは、我等よく知りたり。さればこそをお君の御腹立をも申解かばやとさへ思ふなれ。おん身には好き稟賦あり。學ば一廉の人物ともなるならむ。されど今の儘にては、その才僅かに坐客の耳を悦ばしむるに足りて、未だ世に立ち名を成さむには遠あらざるべし。われ。才の拙く學の足らざるは、げにおん詞の如くなり。されどわが公衆に對せし時の成功をば、君の親しく視給はねば知らせ參らせむやうなし。只君の信ぜさせ給ふと覺しきジェンナロの君は彼夕劇場にありて、我我を賞し給ひきと申さば足りなむ。夫人。おん身はジェンナロを證人とせむとやいふ。ジェンナロは好き紳士なれど、われは其藝術上の批評には重きを置かず。劇場に集ひし一夜の公衆に至りては、いよ信ずべからず。おん身若し彼夕もろひとに辱められむには、われ深く憾とすべし。その事なくして畢りしは、まことに自

他の幸なり。おん身が場に上りしは唯一夜にして、假名をさへ用ゐねれば、かゝる夢の如きよしなしごと久しう人の記憶に残らむ憂はあらじ。三日の後は我等又拿里破に在り。そのあくる日には羅馬へ旅立ちすべし。羅馬に往きて、おん身の耐忍と勉勵とを見せよ。御身に眞の事を告ぐるは我のみぞとのたまひぬ。

### 古祠、瞽女

ベスツムは宿るべき家もなく、こゝよりかしこへの道は賊などの出没することありと聞えければ、翌日まだ暗きに一行は車に上りぬ。騎馬の憲兵は護衛として車の傍に隨へり。道の左右には柑子の林ありて、その鬱茂せる狀は深山の森にも似たるべし。セラの流を渡るときは、垂柳月桂の澄める水の面に影を倒せるを見き。荒蕪せる丘陵の間、時に氣の長せる田圃あり。道に沿ひて盧薔王樹など野生するが、皆ところ得がほに、延び育ちたり。既にして一行は一古祠の前に立てり。即ち二千年前の建立にして、その様式希臘時代の粹と稱せらる。この祠、見苦しき酒店一軒、貧しげなる人家三棟、餘も作れる小屋三つ四つ。是れ世界に名高きベスツムの村なり。いにしへは

此村蕪後名あり。見渡す限り紅の霞に掩はれたりし由物に見えたれども、今は一株をだに留めず。身薙濯て是れ縁にして、其色遙に山嶽に連れり。平地には蕪花多く、薔その外の雜草の間に咲きひろがりたり。自然の力餘ありて人間の工を加へざる處なれば、草といふ草木といふ木、おのがじし生ひ榮ゆるが中に、蘆薈、無花果、色紅なる「ビュレトルム」、インデクムなどの枝葉さしかはしたる、殊に日ざましくぞ覺えられし。

シチリアの自然、その豐饒の一面と荒蕪の一面とはこゝにあり。シチリアの希臘古祠はここにあり。而してシチリアの貧窶もまたこゝにあり。一行のめぐりには一群の乞丐來り集ひたり。その狀南海諸島の蕪人にも似たるべし。男子は長き羊の皮を、毛を表にして身に纏へり。暗褐色なる雙脚には靴を穿かず、剪らざる髪は黒き面の邊に翻り垂れたり。妬ましき途に直に美しく生ひ立ちたる娘たちのこれに隨へるを見るに、そのさま半ば赤はだかなりといふべし。膝の上まで裁り開きたる短衣は裂け綻び、鬆く肩に纏へる外衣めきたる褐色の布は平つきよこれ、長き黒髪をば項に束ね、美しき日よりは恐ろしき光を放てり。



といふ。われ答へて、自然固より師とすべし、只書冊も亦未だ棄つべからず、譬へば酒飯の並びに廢すべからざるが如しといひしに、フランチエスカの君は我言を是なりとし給ひぬ。

此時フアビアニ公子、傍より、アントニオよ、言ふは易く行ふは難きものぞ、羅馬に歸りての後は、その詞の儼ならぬを明にせよといふ。羅馬の一語は我が思ひ掛けざるところなりき。我は心の中に、復た羅馬には往かじと誓ひながら、詞に出して争はむとはせざりき。

公子は更に語を繼ぎてさま／＼の事をいひ出で、人々のこれに答へなどするひまに一行は早くサレルノに到りぬ。我等は先づ一寺院に入りたり。シエンナロ進み出でいふやう。こゝにてはわれ案内者たることを得べし。これはサレルノにてみまかり給ひし法皇グレゴリヨ七世

(獨帝と爭ひて位を逐はれ、千八十五年此に終りぬ)の遺骨を收めし龕なり。その大理石像はかしこなる贅卓の上に立てり。さてこの石棺は歴山大帝の遺骸を藏むといふ。公子。何とかいふ、歴山大帝の軀こゝにありとや。

ジェンナロ。我が聞きは然なりき、さにはあらずや、と寺僧を顧みれば、まことに仰の如しと答ふ。われつらく棺を見て、否そは誤

なるべし、歴山大帝の軀こゝに在りといはむは、歴史を誤にするに近し、この浮彫の圖様は大帝凱旋の行列なれば、かゝる誤を傳へしにや、見給へ、かしこなる寺門に近き處にもこれに似たる石棺ありて、その圖様は酒神の行列なり、彼棺は素とベスツムに在りしを、こゝに移してサレルノの一貴人の永眠の處となし、その石像をば傍に立てたり。此類の棺擲いと多し、大帝の事を圖したりとて其屍を藏むとは定め難しといふ。ジェンナロは唯々冷かに、現にさることあらむも計られずとのみ答へしに、フランチエスカの君我耳に付きて、自ら恰もがりて人を屈するは惡しき習ぞと宣ふ。我は頭を低れて人々の後に退きぬ。

晩鐘の鳴る頃、公子とジェンナロとは散歩にて出で、我は夫人に侍して客舎の軒に坐し居たり。海づらは乳の如き白色に見え、熔巖石を敷きたる街路より薔薇紅にかややける地平線のあたりまで、いと廣やかに晴れ渡り、波打際のは藍色にきらめけり。かゝる色彩の配合は羅馬の無きところなり。われ、めでたき彩繪には候はずやと云へば、夫人、見よ、雲は今フェリチツシイマ、ノツテ(幸ある夜を祈る)を言ふ時ぞ、と山嶽の方を指さし給ふ。橄欖の林に隠顯せる

富人の別業の邊よりは迥に高く、一帯の巖を摩する古城よりは又迥に低く、一帯の雲は山腹に霽引きたり。われ、彼雲の中に棲みて、大海の潮の漲落を觀ばや。夫人。さなり。かしこに仕みて即興詩を吟ぜよ。唯々聴くものなきが恨なるべし。われ。のたまふ如く、其恨は思ひ盡て難し。詩人の吟采を受くるは草木の日光を受くると同じ。周囲のタツソオが身を害ひしは、獨り懸路の關を据えられしが爲めのみにあらず。その詩の爲めに知音を得ざるを恨みしが爲めなり。夫人。われは今おん身が上を誦れり。タツソオが事を言はず。われ。タツソオは詩人なり。されば好き例と思ひて引き出でしまでに候ふ。夫人。アントニオよ、さてはおん身は自ら詩人なりと許す心あるにやあらむ。我上を誦らむときは、不朽の業ある人の名をば呼ばぬぞ好き。おん身は物に感動し易き情ありて、又能くさる情を解するより、直ちに己れの詩人たるを信ぜむとするならむ。そは世間幾多の人の具ふる所にして、又能くする所なり。これに惑ひて徒らに思ひ上がりなれば、生涯の不幸となるべきものぞといふ。われは面の火の如くなれるを覺えて、何せはさる事ながら、わが自ら深く信ずるところをば何まで申すを聞き給

刈り土を細りて、此の宏壯なる柱堂の、新に落せるものゝ如く、耽古者流の愛で翫ぶところとなるには至りしなり。圓柱は黄なるトラエルチノ石もて作られたり。(相待し上新しき地層の石にして、石灰分ある温泉の鹽類の凝りて生ずる所なり。)無花果樹はその匣に挟しかはし、野生の葡萄は柱頭迄攀ぢ上り、石質の罅隙を生じたる處には、草花の紫と「マチオラ」の紅とを見る。

我等は倒れたる一圓柱の狀の上に踞したり。ジェンナロの力に頼りて、乞兒の群を逐ひ拂ふことを得たりしかば、我等の心靜に四邊の風景を玩ぶには、復た何の妨もあらざりき。山の姿、海の色、この古神祠の頹敗の狀など、一として我情を動かさざるものなし。公子、今こそは我等がために一篇の即興詩を作すことを辭せざるならめ、と問ひ掛け給へば、夫人も頷きて同じ心を表し給ふ。われは柱を背にして立ち、少時記せしところの一歌謠の調を借りて、目前の景を歌ひ出せり。山水の美古藝術のすぐれたる遺蹟を見るにつけ、哀なるはかめしむたる少女の上にぞある。この自然の無盡蔵は誰も受くべき賜なるに、少女はそをだに受くることを得ずといふ。これ我一曲の主なる

着想なりき。歌関る比ひには、われ聲涙共に下るを禁ずること能はざりき。ジェンナロは手を拍ちて激賞し、公子夫妻はわが多少の情あるを感諾せり。

人々は石段を下りぬ。われはこれに従はむと欲して、ふと頭を回らし、われが倚りたりし柱の背後に、身を蕪高き「ミウルス」の叢に埋めて、もろ手を項に組み合せたる人あるを見き。而してそはかの目しむたる少女なりき。われはこの哀むべき少女の我歌を聞きしを知りぬ、我がその限なき不手な歌ふを聞きしを知りぬ。餘りの便なさに身を僂めてさし覗けば、袖は袖に觸れてさや／＼と鳴り、少女はさとも頭を擡げつ。われは思倣にや、その面の色のさきより蒼きを覺えたるが、少女を驚さむことのいとほしくて、身を動かすことを敢てせざりき。少女は暫し耳を翫て「アンジェロ」にやと呼びぬ。われは覺えず屏息せり。少女は又俯きて坐せり。前にアマンチャタの我に語りし希臘の神女も、石彫の像なれば瞻視をば開きたるべし。今我が見るところは殆ど全くこれに契へりといふべき。少女は祠の礎に腰掛けて、身を無花果樹と「ミウルス」との裡に埋め、手に一物を取りてこれを朱唇に宛て、面に微笑を湛へ

たり。何ぞ料らむ、その物は我が與へしところの盾銀ならむとは。

我情はこれに動かされて耐へ忍ぶべからざるに至りぬ。我は再び身を僂めて少女の額に接吻せり。少女はあなやと叫び、物に驚きたる牝鹿の如く、瞬く隙に馳せ去りぬ。その叫びし聲は我骨髓に徹し、その遠しく奔り去りし狀は我心魂を奪ひ、われは身邊の柱檣草木悉く旋轉するを覺えて、何故ともなく馳せ出し、荊奔の上を踏みしだきつゝ徐かに歩める人々を追ひ越し行きぬ。

アントニオ、アントニオと呼ぶ公子の聲聞る後に開えて、我は始めて我にかへりぬ。兎をや獵せむとする、否すば天馬空を行くとかいふ詩想の象徴をや示さむとする、と公子語を繼いで云へば、ジェンナロ、否、われ等の跬歩に塞める處を、渠は能く飛越すと誇るなるべし、いざ我が濟勝の具の渠に劣らぬを證せむとて、我傍に引き傍らうて走り出しぬ。公子後より、汝等は我が夫人の手を扯きて同じ戲をなすことを要するにやといふとき、ジェンナロは直に歩を駐めたり。

酒店に歸り着きし後は、普女は影だに見えざりき。その叫びし聲の猶絶間なく耳に聞ゆる

此群に十二歳を踰えじと見ゆる、すぐれて麗しき娘あり。アモンチャタとなるべき姿にもあらず、さればとて又サントとなるべき貌にもあらず。前にアモンチャタが物語に聞きつる、メヂチ家の愛憐神女の像は、かゝる面影あるにはあらずやと思はる。實に此少女の清き容は、人をして同抱せむと欲せしむるものにあらず、却て膜拜せむと欲せしむるものなり。

この少女は少し群を離れて立てり。褐色なる方巾偏肩より垂れたるが、巾を纏はざる方の胸と臂とは悉く現はれたり。雙脚には何物をも着けざりき。かくはかなき身と生れても、流石に粧ひ飾るの心をば持ちたるにや、髪平かに結ひ上げて、一束の菫花を挿せるが、額の上に垂れ掛れり。われその容を窺ふに、羞慙あり、慧巧あり。而して別に一種言ふべからざる憂愁の色を帯びたる如くなりき。唯その雙眸は恒に地上に注ぎて、人の面を見むことを恐るゝものゝ如し。

口々に物をふ中に、この少女のみは一言をだに發せざりき。ジエンナロ先づ進み寄りてこれに錢を與へ、手を頤の下に掛けて、此群には惜しき住き兒ぞといふ。公子夫婦もまことに然なりといひぬ。われは少女の面の紅を潮する

をみたり。少女は目を開けり。而してわれ始めてその容なるを知りぬ。

われは同じくこれに物を贈らむと欲して取てせざりき。既にして人々は乞丐の群に岩められて、酒店の軒に避けたれば、獨り立ち戻りて、盾銀一つ握らせたり。盲人の鋭き智として、少女はその常の錢ならぬを知りたるなるべし、顔は燃ゆる如くなりて、その健かに美しき唇は我手背に觸れたり。われはその接吻の渾身の血に浸み渡る心地して、速しく我手を引き退け、酒店の軒に馳せ入りぬ。

酒店は只だ一室ありて、大いなる竈殆どその全幅を占めたり。惜しげもなく投げ入れたる薪は盛に燃えあがりて、烟は袖を出づる雲の如く、騰りて黒みたる御座に至り、更に又出口を求めて室内をさまよへり。主人の蔭多き大柳樹の下にありて、眺へし朝餉の支度する間に、我等はこの烟煤の窟を遁れ、古祠を見に往くこととしたり。委它たる細徑は荊榛の間に通ぜり。

公子とジエンナロとは手を組み合せて、フランチェスカはこれに腰掛けつゝ泉かれ行く。漫步には似つかはしからぬ恐ろしき道かな、と夫人笑みつゝ云へば、案内者の一人、さのたまへど三とせの前迄は此道全く棘に塞がれたる

き、又己れが幼き頃社の圓柱のめぐりに、砂土堆く積もり居しを記え居り候ふと答ふ。

案内者は皆この詞の誤らざるを證せり。一行の後ははききの乞丐の群猶隨ひ來り、皆目を睜りて我等を打目守れり。若しわれ等にしてふとその一人の面を見ることがあるときは、その手は忽ち賜を受くるがために伸べられ、その口は忽ち「ミゼラビレ」(憐を乞ふ語)を唱へ出すなり。若女はいづち往きけむ見えず。われはあはれなる少女の、獨りいかなる道の邊に蹲り居るかを思ひ遣りぬ。

我等は一の劇場と一の平和神祠との迹なる斷礎の上を登り行きぬ。ジエンナロ人々を顧みて、あはれ平和と演劇との二つのもの、いかなればかく迄相親むことを得たぞと云ふ。(劇場の徒の多く相嫉妬するを諷するにや。)我等は海神祠の前に立てり。世にはこれを「パジリカ」とぞいふ。近き頃、彼ボムベイの古市と同じく、闇黒の裡より出でゝ人の遺忘を喚び醒したるものは、此祠と穀神祠となり。この祠の荊棘に鎖され、土石に埋められたること幾百年ぞ。幸に外國の一畫師ありてこゝを過ぎ、柱尖の僅に露出せるを見、その美を喜びて寫し歸りしより、世の人こゝに注目し、終に棘を



人のことごとくこれを賞することを得ざるを憾とす。此地は廣義鐵里の間、四時春なる芳園にして、其中央なる石級上にアマルフィの市あり。西北の風絶て至ることなければ、寒さといふものを知らず。風は必ず東南より起り、棕櫚樹の氣を帯びて、清波を渉り来るなり。

市の層疊して高く聳ゆる状は、戯園の観棚の如く、その白壁の人家は皆東國の制に従ひて平屋根なり。家ある處を踰えて上り、山腹に還るものは葡萄酒なり。山上には城堡もて繞らされたる古城ありて雲を撐ふる柱をなし、その傍には一株の「ビニロ」樹の碧空を摩して立てるあり。

舟の着く處は遠淺なれば、舟人は我等を負ひて岸に上らしめたり。岸には岩窟多くして、水に浸されたと否ざるとあり。小舟三つ四つ水なき處に引上げたを、好き遊びどころにして、子供あまた集へり。身に挂けたるは、大抵襦袢一枚のみにて、唯、稀に短き中單を襲ねたるが雜れり。(ラツアロオネ)といふ、賤民(立坊杯の類)の裸程なるが煖き沙に身を埋めて午睡せるあり。その常に戴ける褐色の帽は耳を隠すまで深く引き下げられたり。寺院の鐘は鳴り渡れり。紫衣の若僧の一行あり。頌を唱へて過

ぐ。捧げる所の碇像には、新に摘みたる花の環を懸けたり。

市の上なる山の左手に、深き洞穴に隣れる美しき大僧堂あり。今は外人の旅館となりて、凡そこゝに來らむ程のもの一人としてこれに投ぜざるはなし。夫人をば輿に載せて昇かせ、我等はこれに隨ひて深き岩海を瞰る。一行は僧堂の前に留りぬ。内暗き洞穴は我等に向ひて其勝を開けり。穴の裏には十字架三基ありて、耶穌と二賊との像これに懸り、巖上に彩色衣を着て大いなる白き翼を負ひたる數人の天使跪けり。皆美術品などいふべき限のものにはあらず、木もて彫り斑にいろどりたるまでなり。されど信仰の温き情は影を此拙作の上に留めて、おのづから美を現せり。

小き中庭を歩みて宿るべき部屋々に登り着きぬ。我室の窓より見れば、烟波渺茫として、遠きシチリアのあたりまで只と一目に見渡さる。地平線の際に、しろかね色したるものゝ點々數ふべきは舟なり。

ジェンナロは我を遊歩に誘はむとて來ぬ。いに詩人よ。共に麓のかたに降り行きて、かしの風景の美のこゝに殊なりや否やを見むとお

もはずや。少くも女性の美は麓のかたの優れたること疑ふべからず。こゝの隣房なる英吉利婦人の色着ぎめて心冷なるは、我が堪ふこと能はざる所なり。おん身も女子を見ることをば嫌ひ給はぬならむ。恕し給へ、こは我ながらおろかなる問なりき。女子を見ることを嫌ひ給はねばこそ、君はこゝらわたりを彷徨ひて、我は又この邂逅の奇縁を結ぶことを得つるなれ。斯く戯れつゝ、ジェンナロは我を促し立て、石灘を下り行けり。途すがら又いふやう。猶忘れ難きは彼の日しひたる娘の美しさなり。拿破里に歸りての後、カラブリア酒誂へむをりは、かたの娘をも共に取寄せむとぞおもふ。我血を沸きたしむる功は此も彼に譲らざるべし。

我等は市街に歩み入りぬ。アマルフィの市は裏める貨物をみだりに堆積したる狀をなせり。羅馬なる猶太街の狭きも、これに比べては尙通衢大路と稱するに足るならむ。こゝの街といふは、まことは家と家の間に通じ、又は家を貫きて通じたるろぢの類のみ。或るときは狭く長き歩廊を行くが如く、左右に小き窓ありて、許多の暗黒なる房に連れり。或るときは巖壁と石垣との間に、二人並び歩むに堪へざるばかりの道を開けるが、暗くして曲り、濕りて穢れ、

を、怪しとおもひてつく／＼聴けば、それは我心跳のかく聞做さるゝにぞありける。嗚呼卑むべきは我心にもあるかな。少女が胸中の苦を永言して、これをして深く生涯の不幸を感じしめ、終にはその額に接吻して驚かしたるは何事ぞや。そが上にかの接吻は我が姫女に與へたる第一の接吻なり。少女の貧しきを侮り、その日しひたるを奇貨として、我は我が未だ嘗て敢てせざりしところのものを敢てしたり。我はベルナルドオを輕佻なりとせり。而るに我が爲すところも亦此の如し。現に塵の世に生れたる人、誰か罪業なきことを得む。いかなれば我は自ら待つことの實くして、人を責むることの酷なりしぞ。われ若し再び婢女に逢はば唯も地上に跪いてこれに謝せむ。

一行は車に上りてサレルノに歸らむとす。我は心に今一度婢女を見むことを願ひしが、人に問ふことを憚りたり。忽ちジェンナロの案内者を顧みて、さるにても彼の目しひたる娘はいかにしたると問ふを聞く。案内者の一人答へてララが事にて候ふや。海神祠のほとりにやあるらむ。常に彼處にあることを好めばといふ。ジェンナロは「ベルラ、デキナ」神々しきまで美しき子よとなり」と呼びて、手もて接吻の眞似し

たり。車は動き出しぬ。さては彼子の名をばララといふとこそ覺ゆれ。われは駁者と背合せに乗りたれば、古祠の柱列のやうやく遠ざかりゆくを見やりつゝ、耳には猶少女の叫びし聲を聞きて、限なき心の苦しさを忍び居たり。

路傍に「チンガニイ」族の一群あり。火を溝渠の中に焚きて食を調へたり。手に小鼓を把りて、我等を要して卜策せむとしつれど、駁者は馬に策ちて進み行きぬ。黒き瞳子の眼電の如き少女二人、暫し飛ぶが如くに車の迹を追ひ來りしが、ジェンナロはこれをも美しと愛で稱へき。されどララの氣高きには比ぶべうもあらざりき。

夕にサレルノに還りぬ。明日はアマルフイイに往きて、それよりカブリに廻りて還らむとなり。公子の宣給ふやう。拿破里に還らば、留まることが一日にして羅馬へ立たむとぞ思ふ。アントニオが準備も暇取ることあらじと宣給ふ。われは羅馬に往くことを願はねど、例の恩誼に口を塞がれて、僅かに、老公のおほん憤の氣遣はれてとのみ云ひしに、そはわれ等申し解くべしと答へて我に詞を繼がしめ給はず。兎角する程に、賓客のおとづれ來て、會話はこゝに絶え、我不幸なる運命もまた定まりぬ。

## 夜 襲

天氣好き日の朝舟出して、海より望めばサレルノの美しさは又一しほなるを覺えぬ。筋骨逞ましき男六人、船を揺せり。晝にしても見まほしき美少年一人、柁の傍に蹲りたるが、名を問へばアルフォンソと答ふ。水は緑いろにして透き徹り、硝子もて張りたる如し。右手なる岸の全景は、空想のセミラミスや築き起し、唯と是れ一大苑囿の波上に浮べる如くなり。その水に接する處には許多の洞窟あり。その狀柱列の迫持を戴けるに似て、波はその門に突入り、その内にありて戯れ遊べり。突き出たる巖壁に城あり、城矢の邊には、一帯の雲ありて徐かに靡き過ぎむとす。我等は大島小島（マヌウリイ、ミスウリイ）を望みて、程なく彼マサニエルロとフラキオ、ジョオヤとの故郷の緑い濃き葡萄丘の間に隱見するを認め得たり。（マサニエルロは十七世紀の一擧の首領なり。オベエルが樂曲の主人公たるを以て人口に膾炙す。フラキオ、ジョオヤは羅針盤を創作せし人なり。）

伊太利に名どころ多しと雖、このアマルフイイの右に出づるもの少かるべし。われは天下の

て、この男は商人なり、舞臺に出で、即興詞といふ者を歌ふを業とす、されば拿破里の婦人をはことごとく迷はしたれど、生來頑なること石の如く、世に謂ふ女嫌ひなどいふものによ、まだ婦人に接吻したることなしといへり、珍らしき人にあらずやといへば、主人、さる人は世に有りがたからむとて笑へり。ジェンナロ語を續きてわれはそれとは表裏なり、あらゆる美しき女を愛し、あらゆる美しき女に接吻し、あらゆる美しき女の身方となりて、到るところ人の心をやはらぐ、されば美しき女に接吻を求むるは我權利なり、我が受け納るべき租税なり、これをばおん身も拂ひ給はざるべからずといひて、つとあるじの手を握りたり。女主人。われは人の心やはらげ給ふといふおん恵に與らむことを願はず、さればさる租税をもえ納め侍らず。我租税をば、我夫自ら來りて收め取る習なり。ジェンナロ。その夫はいづくにあるか。女主人。さまで遠からぬところにあり。ジェンナロ。われは拿破里に居れども、いまだかくまで美しき手を見つことあらず。此上に接吻一つせむといはゞ、償いばくを求め給ふ。女主人。盾銀一つにては貴かるべきか。ジェンナロ。さらば盾銀二つ出さば、肩をも

任せ給ふべきか。女主人。否、それは千金にも換へ難し。それは吾夫の特權なり。この對話の間、女あるじは我等に酒を侑めて、ジェンナロの慣慣しきをも惡む色なく、尙暫く無邪氣なる應答をなし居たり。我等はあるじのまことは十四歳にて、去年同じ里の美少年某と結婚せしこと、その夫は今拿破里にありて明日歸り來るべきこと、二人の子どものあるじの妹にて夫の留守の間來り舍れることなど、話の裏より聞き出せり。ジェンナロは二人の小娘に、在列斯銀一つ(伊太利名「カルリノ」約十五錢五厘)與ふべければ薔薇の花束得させよといひて、それを遠ざけ、あるじに迫りて接吻せむとしたり。初めは嗣もてきまぐに誘ひたれどその職なかりき。次には戲のやうにもてなし、掻き抱きたれど、女はいち早く擦り服けたり。終には路易金一つ(ルイドルと云ふ、約九圓七十八錢)取出し、指もて握みて女の前にきらめかし、只だ一たびの接吻を許さば、これをおん身におくるべし、この金あらば、めでたき飾物あまた買はるべし、その黒き髪に映好きものを擇み試みむは、いかに樂かるべきぞなど、繰返して説き勧めつ。女は我を指して、あちらのおん力は、おん身に比ぶれば迥に善きなりと云へり。わ

れ女の手を取りて、努彼詞に耳付けむとなし給ひそ、彼黄金の色に目を注がむとなし給ひそ、彼男は惡しき人なり、願はくは彼男にの面當に、われに接吻一つ許し給へといひぬ。女はきと我面を見たり。われ重ねて、さきに彼男の我上を語りし中に、唯ひとつの事實あり。われ未だ一たびも女の唇に觸れずといひしは是なり、我唇は清淨なり、われに接吻し給ふは小兒に接吻し給ふと同じといひぬ、ジェンナロ。さて、狡猾なる事を言ふものかな。女をくどく方便のみはわれ汝に優れりと覺えつるに、今は汝又我を凌がむとす。女主人。否々、御身は金をこそ持ち給へれ、心さま善ならぬ人なり。我が黄金をも何ともおもはず、接吻をも何とも思はぬをおん身に見せむため、我はこの詩人の方に接吻すべし。斯く言ひ畢りて、女主人は雙手もて我頬を押へ、我唇に接吻して、家の内に走り入りぬ。日の入り果てし頃、われは獨り山上なる寺院の一房に坐して、窓より海を眺め居たり。波頭の残紅は薔薇色をなして、岸打つ潮に自然の節奏を聞く。舟人は漁舟を陸に曳き上げたたり。若色漸く至れば、新に點したる燈火その火を増して、水面は碧色にかやけり。一時四圍は



級をやり級を降りて、その窮極するところを知らず。我等はをり／＼身の戸外に在るを忘れて、大いなる蔵屋の内を彷徨ふ念をなせり。所燈を懸けて階を照すを見る。而して山上は日猶高かるべき時刻なりしなり。

既に我等は稍々閑謐なる處に出でたり。

一の石橋あり。こなたの巖端よりかなたの巖端に架したり。橋下の辻は市内第一の大造なるべし。二少女ありて「サタレロ」の舞を演ぜり。

貌めでたく膚褐いろなる裸體の一童子、傍に立ちてこれを見るさま、愛の神童に彷彿たり。人の説くを聞くに、この境寒を知らず。數年前寒と稱せられしとき、寒暑針は猶八度を指したりといふ。(寒暑針はレオミュウ式ならむ。)

巖頭に小さき塔ありて、美しき入江の景色、遠く大小二島の邊まで見ゆる處より、蘆薈、「ミュルツス」の間を通ずる迂曲せる小みちあり。これを行けば、幾もあらぬに、穹窿の如く茂りあへる葡萄の下に出づ。我等は羽を覺えぬれば、葡萄園のあなたに白き屋臺の縁櫓の間より見ゆるを心あてに歩をそなたへ向けたり。輕暖の空氣の中には草木の香みち／＼て、美しき甲蟲あまた我等の身邊を飛びめぐれり。

到り着きて見れば、この小家のさまの畫趣多きこと言はむかなし。壁には近き故郷より掘り出したる石柱頭と石磨石脚とを塗り籠めて飾とせり。屋上に土を盛りて園とし、柑子の樹又はくさ／＼の蔓草類を栽ゐたるが、その枝その勢四方に垂れ下りて、緑の天簾絨もて掩へる如し、戸前には薔薇叢ありて花盛に開けるが、殆ど野生の狀をなせり。六つ七つばかりの美しき小娘二人その傍に遊び戯れ、花を摘みて環となす。されどそれより一際美きは、此家の門口に立ち迎へたる女子なり。髪をば白き桌布のて束ねたり。その瞻視の情ありげなる、睫毛の長く黒き、肢體の品高くすなほなる、我等をして覺えず恭しく帽を脱し禮を施さざることをばざらしめたり。

ジエンナロ進み近づきて、きては此家あるじこそは、土地に匹敵なき美人なりしなれ。疲れたる旅人二人に、一杯の飲を恵み給はむやと云へば、いと易き程の御事なり、戸外に持ち出でてまゐらせむ、されど酒は只一種ならでは貯へ侍らずと笑ひつゝ答ふ。その眞白なる齒に、唇の紅はいよく美さを増すを覺えき。ジエンナロ。酒はいかなる酒にもあれ、君の酌みて給はらむに、旨からぬことやある。美し

き娘の酌める酒をば、われ平生嗜みて飲めり。女主人。されどけふは美しき娘のあらねば、色香なき人妻の酌みてまゐらすを許し給へ。

ジエンナロ。さらば君ははや主ある花となり給ひしにや、そのうら若さにて。女主人。否、われははや年多くとりたり。この時作聽したりしわれ、おん身の芳絶いくばくぞと伺ひぬ。想ふにこの女子まだ十五ばかりなるべけれど、吾丈伸びて恰好なれば、行酒女神の像の粉本とせむも似つかはしかるべし。女主人はわが何の爲めに開ひしかを疑ふものゝ如く、我面を暫し守りて二十八歳と答へつ。ジエンナロ。そはまことに好き年紀にて、殊におん身には似あひたり。さるにても人の妻となりてより幾年をへ経給ひし。女主人。最早十とせあまりになりぬ。かしこなる娘たちに問ひ試み給へかしといふ。この時先に門の口にて遊び居たりし二人の娘、我等が前に走り來りぬ。われは故意と娘等に向ひて、これは汝たちの母なりやと問ひしに、娘等はあましげに主人を見て、さなり／＼と頷きつゝ右ひだりより主人に倚り添ひたり。女主人は酒もち來りて薦めたり。その味はいとめでたかりき。我等は杯を舉げてあるじの健康を祝したり。ジエンナロわれを指さし

らずと云ひ、起ちてかなたの窓を開きつ。手帳をわたさむとして差し伸べたる新婦の手をば、外より握りたりと覺しく、手帳ははたと音して窓の外に落ちたり。ジェンナロの頭は此響と共に窓の内に顯れたり。新婦は走りてこなたの窓のほとりに來つ。これより後我は明に二人の詞を辨ずることを得るに至りぬ。

ジェンナロ。さらば君はわが感謝のために君の手に接吻するをだに許し給はぬにや。物落しし人の拾ひ主に謝するは世の習ならずや。そが上に走りてこゝに來つれば、喉乾きて堪へ難し。我に一杯の酒を飲ませ給ふとも、誰かはそれを惡しき事といはむ。何故に君は我がそこに入らむとするを拒み給ふぞ。新婦。否、かく夜ふけておん身と物言ひ交すに影障き事なり。疾くおん身の手帳を取りて歸り給へ、我は窓を鎖すべきに。ジェンナロ。我はおん身の手を握らでは歸らず。おん身のけふ我に惜みて、彼馬鹿者に與へ給ひし接吻を取り返さでは歸らず。新婦は周章の間に一聲の笑を洩せり。否々。君は人の與へざる所のものを奪はむとし給ふにや。君強ひて奪はむとし給はば、われまた誓ひて與へざるべしといふ。ジェンナロは哀れげなる聲していふやう。我等の相見るはこれを限なる

を思ひ給へ。われは再び此地に來るものにあらず。さるを君は我が手を握らむといふをだに聽き納れたまはず。我胸には君に言ふべき事さばなれど、我が手を握らむの願の外は、われ敢て口に出さじ。聖母は我等に何とか教へ給ふぞ。人は兄弟姉妹の如く相愛せよとこそ宜給へ。われはおん身の兄弟なり。我黄金をおん身と分ちて、おん身の艶やかなる姿を飾る料となさむとこそ願へ。貴き飾を身に着け給はば、おん身の美しき幾倍なるべきぞ。おん身の友だちは皆おん身を羨むべし。されど我とおん身との中をば世に一人として知るものなからむ。斯く云ひも果てず、ジェンナロは一躍して窓より入りぬ。新婦は高く聖母の名を叫べり。

われは表の窓に走り寄りて、力を極めて其扉を打ちたり。硝子はからりと鳴りたり。我は目に見えぬ威力に驅らるゝもの、如く、走りて裏口に至り、得物もがなと見廻す傍の、葡萄架の横木引きちぎりつ。女はニコオロにやと叫べり。さなり、我なりと、われは假聲して答へたり。室内の燈消ゆると共に、ジェンナロは窓より跳り出で、いち足出して逃げて行く。其外套は風に翻れり。ニコオロよ、いかにしておん身は歸りし、これも聖母の御恵にこそとい

ひつゝ、女は窓に走り寄りぬ。その聲は猶梗けり。われは吃りて、恕し給へ君と叫びぬ。あなやと呼ぶ女の聲と共に、扉ははたと鎖され、われは茫然として獨り窓外に立てり。

暫しありて、我は新婦の靜かに歩ゆみ、戸を開き、戸を閉ぜ、鑰を下す響を聞き、今は心安しとおもひて、そと歸途に就きぬ。われは心中に無量の喜を覺えたり。かくてこそわれは晝間の接吻に報い得つるなれ。若し彼女主人にして敢め守護の功を測り知りたらむには、渠は猶一たび接吻することを辭せざりしなるべし。

俯堂に歸りしは恰も晚餐の時なり。人々は我が外に出でしを知らざるさまなり。食卓に就きて程經ぬるに、ジェンナロのみ來ざりければ、フランチェスカの君は心を勞し、公子はあまたたび人を馳せて、その歸るを候はせぬ。ジェンナロはやうやくにして來りぬ。漫步して岐に迷ひ、農夫に教へられて總に歸ることを得つといふ。夫人その姿を見て、げにおん身の衣は綻びたりといへば、ジェンナロ手もてその破れたる處を握み、この端の斷れたるは轉にかゝりて跡に残りぬ、われは直ちに心附きぬれど、奈何ともすること能はざりき、このあたりにて

寂として聲なかりき。忽ち歌曲の聲の岸より起るあり。こは漁父の妻子と共に歌ひ出せるにて、子どもらしき「ソプラノ」の音は低き「バツソ」の音にまじりたり。一種の言ふべからざる情は我胸に溢れて、我心はこれがために震ひ動けり。一の流星あり。その疾きこと、摩石火の如く、葡萄の林のあなたに隕ちぬとぞ見えし。けふ我に接吻せし氣輕なる新婦の家も亦彼林のあなたにあり。われは彼女主人の美かりしを思い出で、又彼海神祠の畔なる舊女之美しかりしをもひ出でしが、その背後には心と身と皆美しかりしアヌンチャタありて、その一たび點したる火は今も猶我身を焦せり。我は餘りの堪へ難きに、口に聖母の御名を唱へて、瓶裡の舊液一輪滴み、そを唇に押し當てつゝ心には猶アヌンチャタが上を思へり。われは情に堪へずして、僧堂を出で、海の方へ降り行きぬ。即ち星渾を浴びたる波の岸に碎くる處、漁父の歌ふ處、涼風の面を撲つ處なり。歩みて晝間過ぎし所の石橋の上に至りぬ。この時一人の身に大外套を被り、忙しげに我後を馳せ去りたるあり。われはその姿勢態度を見て、直ちにそのジェンナロなるを知りぬ。ジェンナロは鷺地に走りて、曾て憩ひし白屋の家に向へり。我は心

ともなく、その後に跟ひ行きぬ。家の窓よりは燈火の影現れたるが、彼の外套着たる姿は其光に照されて、窓の直下に浮び出でぬ。われは葡萄架の暗き處に攀れ、石に踞して其狀を覗ひ居たり。帷を引かざれば、室の内外の光景は明白に我眼に映せり。この家の裏の方、側廂に通ずる大なる梯の室内より見ゆる處に、別に又一つの窓あるをも、われは此時始めて認め得たり。

室内には一小卓を安んじ、上に十字架を立てたるが、燈をばその前に點せるなり。二人の小娘は衣を脱して、白き汗衫を鬆やかに身に纏ひ、卓の下に跪きて讚美歌を歌へり。姉なる新婦も亦二人の間に坐せり。我日に映じたる此一幅の圖はラファエロの筆に成りたる聖母と二天使との圖と擇むことなかりき。新婦の漆黒なる瞳子は上に向ひて、その波紋をなせる髪は白き髪に亂れ落ち、もろ手は曲線美しき胸の上に組み合されたなり。

われは屏息してこれを窺ひ居て、我脈搏の尤進するを覺えたり。既にして三人は立ちあがりぬ。新婦は二兒を延ぎて梯を上り、しばらくありて靜かに傍廂の戸を閉ぢ、獨り梯を下り來りぬ。さて窓に近きところを往來して、物取り

片付けなどし、ふと何事かを思ひ出でしものゝ如く、簾の前に坐して、その抽箱より紅色の手帳一つ取り出だしつ。打ち返し見ては、笑み、聞き見むとするさまなりしが、忽ち又打ち掉りて、手快く抽箱の中に投じたり。そのさま密事して父母などに見られしに異く小兒に似たりき。

暫くして裏の方なる窓を敲く音す。新婦は驚きて頭を擡げ、耳敏て聞けり。敲く音は又響きて、何事かを戸外にて言ふ如くなれど、其詞は我が居るところには聞えず。新婦は忽ち聲高く呼べり。檀那は何とて斯く遅くこゝに來給ひしぞ。何の用のおはすにか。うしろめたき事には侍らずやといふ。戸外の人は又何やらむ言ひたり。新婦。さなり。おん詞はまことなり。おん身は手帳を忘れ置き給へり。さきに妹に持せて、麓なる宿屋まで遣りたれど、かしこにてはさる檀那は宿り給はずといひぬ。定めて山の上に宿り給ふならむ。つとめて又持たせ遣らむとこそ思ひ侍りしなれ。手帳は現にここに在り。斯く云ひて、新婦は抽箱よりさきの手帳を取出色せり。戸外の人は何やら言へり。新婦は首を掉りて、否々、門の口をばえひらき付らず、おん身のこゝに來給はむは宜しか



而してカブリの風流天地はこれと相對せり。いにしへチペリウス帝が香をきはめ情を繼にし、灣頭より眸を放ちて拿破里の岸を望みきといふはこゝなり。

舟人は帆を揚げたり。我等は風と波とに送られて、漸くカブリの島邊に近づきぬ。水のまことの清き、まことの明きを知らむと欲せば、この海を見ざるべからず。舷に倚りて水を望めば、一塊の石、一叢の藻、歴々として數ふべく、晴れたる日の空氣といへども、恐らくはこの玲瓏透徹なからむとぞおもはるゝ。

カブリの島は唯一面の近づくべきあるのみ。その他は皆削り成せる斷崖にして、その地勢拿破里に向ひて級を下るが如く、葡萄園と橘樹橄欖の林とは交るゝこれを覆へり。岸に沿へる處には、數軒の蟹戸と一棟の哨舎とを見る。稍々高き林木の間に、屋瓦の叢を成せるはアンナア、カブリの小城會なり。一橋一門ありてこれに通ず。一行は棕櫚の木立てるバガアニイが酒店の前に歩を留めつ。

我等はこゝに朝食して、公子夫婦は午時まで休憩し、それより驢を倩ひてチペリウス帝の別荘の址を訪はむとす。われは憩はむこゝろなければ、ジェンナロと共に此島を一周し、南

に突き出でたる大石門をも見ばやとて、漕手二人を呼び、岸なる舟に乗り還りぬ。

風少し起りたれば、我等は行程の半ばかり帆の力に頼ることを得べし。巖壁に近き處には、漁人の網を張りたるあれば、舟はこれを避けて沖の方に進みぬ。既にして奇景の面目を驚すに足るものを見る。灰色なる巨石の直立すること千丈なるあり。その頂は天を摩し、所々僅に一石塊を容るべき罅隙を存じて、蘆荷若くは紫羅欄これに生じたり。青き焰の如き波に洗はれたる低き岩段には、紅殻の毛足族(クリノイデア)いと繁く着きたるが、その紅の色は水を被りて愈々紅に、岩石の波に觸れて血を流せるかと疑はる。

既にして我等は海を右にし島を左にする處に至りぬ。水を吞吐する大小の窟許多ありて、中には波の返す毎に僅かに其天井を露すあり。こは彼妙音の女怪のすみかにして、草木繁茂せるカブリの島は唯これと蓋へる屋上たるに過ぎざるにやあらむ。

漕手の一人なる白髪翁のいふやう。這裏には惡しきもの住めり。人若し過て此門に入るときは、多くは再びこれを出づることを得ず。その或は又出づるものは、痴なるが如く狂せ

るが如く、復た尋常人間の事を解せずといふ。往手のかたに稍々大なる一窟あり。されど若し舟に棹してこれに入らむとせば、帆を卸し頭を屈するも、猶或は難からむか。舵取りの年少き男のいふやう。これ魔窟なり。黄金珠玉その内にみちゝたれど、これを採らむとするものは妖火のために身を焚かる。げにいふだに恐ろしき事なり。尊きルチアよ。(サンタ、ルチア)

我を護り給へといふ。ジェンナロ。彼妙音の女怪の一人此舟の中に来ぬこそ殘惜しけれ。その容色はいと好しとぞ聞く。さるものを往遇せむは、わが徒の難んぜざるところぞ。われ。おほよそ女といふ女のおん身の言に従はぬはあらざるべければ、化しやうのものなりとも、其數には洩れぬなるべし。ジェンナロ。接吻し同抱するは波濤の常態なれば、その上に泛べるもの之に倣ふべき筈ならずや。實ては彼アマalfイイの女房をなりとも、共に載せて來べかりしものを。げに得易からぬ女なり。然おもひ給はずや。おん身も一たびは彼唇の味を試み給ひぬ。われはその人前にておとなしぶりたるを怪しとおもふなり。憾むらくはおん身はその夜のさまを見給はざりき。その迎ふる情の熱きは我が送る情の熱きに譲らざりき。ジェンナロ

斯くまで道を失はむとは、流石に思掛けざりき、日暮の景色を弄ぶ中、俄に暗くなりしを見て、近道より歸らむとおもひしが事の原なりといふ。一座は此遊の可笑しき話柄を得たりとて打ち興じ、杯を舉げて、此迷失兒の健康を祝しつ。こゝの葡萄酒はいと旨きに、人々酔を帶び、歡を竭して分れぬ。

わが寢室に入りしとき、隣室なるジェンナロは上衣を脱ぎ襦袢一つとなりて進み來り、いとさかしげに笑ひつゝ、掌を我肩上に置きて、書見つる美人の爲めに思を勞すること莫れといふ。われ。然か宜給へど、接吻をばわれ博し得たり。渠。そは固よりなり。されどわれを始終織子たりしものと思ひそ。われ。織子たりしや否やは知らず。唯織子らしかりしは事實なり。渠。われは未だ曾て織子たりしことなし。おん身若し能く秘密を守らば、われは敢て告ぐるところあらむとす。われ。何事まれ語り給へ。われは誓ひて餘所に洩さるべし。渠。さらば包まず語るべし。われは歸るに故意と手帳を遺れ置きぬ。そは日暮れて再び往かむ爲めなり。原と女といふものは、只二人向ひ居ては頑ならぬが多し。さて我は再び往きぬ。衣の綻びたるは、塙を踰え籬を穿ちし時の過な

り。われ。さらば女はいかなりし。渠。書見しよりも美しかりき。美しくして頑ならざりき。わが預め度りし如く、さし向ひとなりては何のむづかしき事もなかりき。おん身が得しは只一つの接吻なりしが、わが得しは千萬にて總て残る限なき爲合なりき。これよりはその時のさまを樂しき夢に見むとぞおもふ。便なきアントニオよと語りもあへず、ジェンナロはおのが臥房に跳り入りぬ。

### たつまき

僧堂を辭し去る朝、大空は灰色の紗を被せたる如くなりき。岸には腕たしかなる漣手幾人か待ち受け居て、一行を舟に上らしめたり。繩を解きてカブリに向ふ程に、天を覆ひたりし紗は次第に斷れて輕雲となり、大氣は見澄み透りて、水面には一波の起るをだに認めず。美しきアマルフィは巖のあなたに隠れぬ。ジェンナロは後を指さして、かしこにてはわれ薔薇を摘み得たりと云ふ。われは頷きて、心の中にはこの男の強顔なことよ、まことは舟のゆくては茫たる蒼海にして、その抵る所はシチリアの島なり、あらず、亞フリカの岸

なり。ゆん手の方は巖石屹立したる伊太利の西岸にして、所々に人なる洞穴あり。洞前に村落あるものは、其幾個の人家、わざと洞中より這ひ出で、背を日に曝すものゝ如く、洞の直ちに水に臨めるものゝ前には、漁人の火を焚き食を調へ又は小舟に多兒を乗れるあり。

絨下の水は碧くして油の如し。試みに手をもて探れば、手も亦水と共に碧し。舟の影の水に落ちたるは極て濃き青色にして、鱗の影は濃淡の紋理ある青蛇を書けり。われは聲を放ちて叫びぬ。げに美しきは海なる哉。若し彼蒼の大いなるを除かば、何物か能く之と美を競ふべき。我は幼かりし時、地に仰臥して天を觀つるを思ひ出でぬ。今見る所の海は即ち當時見し所の天にして、譬へば夢の一變して現となれるが如し。

舟はイ、ガリリといふ巖より成れる三小嶼の傍を過ぎぬ。そのさま海底より石塔を築き上げて、その上に更に石塔を偏し掛けたる如し。青き波は緑なる石を洗へり。想ふに風雨一たび到らば、このわたりは群狗吹ゆてふ鳴門(スギル)の怪の栖なるべし。不毛にして石多きミネルワの岬は、颯るが如き潮これを纏れり。いにしへ妙音の女怪の住めりきといふはこゝなり。

瀟氣は我顛頂の上に注げり。

われは心ともなく手を伸べて身邊を摸し、何物とも知られぬながら、堅き物の手に觸るゝを覺えて、しかとこれに取り付きたり。我疲勞は甚だしく、我身には復た血なく、我骨には復た強なきに似たり。我魂は天上の法廷に招かれ、我骸は海底に横れるにやあらむ。われは纔にアマンチャタと呼びて、又我眼を閉ぢたり。

われはこの人事不省の境にあること久しかりしならむ。既にしてわれは己れの又呼吸するを覺え、我疲勞の稍々恢復すると共に、我意識は稍々明なりき。我身ほ冷にして堅き物の上に在り。こは一の巨巖の頭なるべし。而して此巖は高く天半に聳えたるものゝ如く、彼の光ある碧色の瀟氣のこれを繞れる狀は、前に見しと殊なることなし。又は碧穹隆をなして我を覆ひ、怪しき圓錐形の雲ありてこれに浮べり。雲の色は天と同じく碧かりき。四遠寂として音響なく、天地皆墓穴の静けさを現す。われは寒氣の骨に徹するを覺えたり。われは徐かに頭を擡げたり。我衣は青き火の如く、我手は磨ける銀の如し。されどこの怪しき身の虚き影にあらずして、實なる形なるは明なりき。我は疲

れたる腦髓に鞭うちて、強ひて思議せしめむとしたり。われは眞に既に死したるか、又或は猶生けるか。われは手を展べて身下の碧氣を探りに、こは冷なる波なりき。されどその我手に觸れて火花を散らす狀は、酒精の火に殊なれども、略々前に見つる龍卷に似て、碧き光眼を射たり。こはわが未だ除かざる驚怖の幻出する所なるか、將た未だ滅えざる記念の化現する所なるか。暫しありて、われは手をもてこれを摸することを敢てしたるに、その堅くして冷なること石の如くなりき。摸して後邊に至れば、手は堅く滑なる大壁に觸る。その色は暗碧なること夜の天色の如し。

そもわれは何處に在る。前に身下に積氣ありとおもひしは、燃ゆれども熱からざる水なりき。我四圍を照すものは、彼燃ゆる水なるか、さらば彼穹隆と巖壁と皆自ら光を放つものなるか。こは幽冥の境なるか、わが不死の靈魂の宅なるか。われは現世に此の如き境ありとおもふこと能はず。凡そ身邊の物、一として深淺種々の碧光を放たざることなく、我身も亦内より碧火を發して、その光明は十方を照すものゝ如し。

身に近き傍に大石級あり。琅玕もて削り成せるが如し。これに登らむと欲すれば、巖扉密に鎖して開くべからず。推するに、こは天堂に到る階級にして、其門扉は我が爲めに開かざるならむ。我は一人の怒を齎して地下に入りぬ。ジェンナロはいかにしたるぞ、又二人の舟人はいかにしたるぞ。

われは獨り此境に在り。我母を懷ひドミニカをおもひ、フランチェスカの君をおもひ、我記憶の常に異ならざるを知りぬ。さればわが見る所のものは、必ず幻影に非ざるならむ。我は故の我なり。只と在るところの境の幽明いづれに屬するかを辨ずること能はざるのみ。

後邊の壁に疎隙ありて、一の大きな物を安んず。手もて摸すれば銅の鉢なり。その内には金銀貨を盛りて溢れむと欲す。われは此異境の異の愈々益々甚しきを覺えたり。

地平線に接する處に、我身を距ること甚だ遠からず、青光まばゆき一星ありて、その清淨なる影は波面に長き尾を曳けり。われは俄に彼星の、譬へば日月の蝕の如く、其光をふを見たり。既にして黒き物の其前に現るゝあり。詭視すれば、一葉の舟の、海底より湧き出でましたらむ如く、燃ゆる水の上を走り來るに



が此詞は遂に我をして耐へ忍ぶこと能はざらしむるに至りぬ。我はいと冷かに、されどわが彼夕見しところは、いたくおん詞と違へりといひぬ。ジェンナロは驚きたる面持して、暫し我を打ち守りつゝ、何とかいふ、おん身の詞は解し難しと問ひ返しつ。われ重ねて、おん身の女子にもてはやされ給ふべきをば、われ歸ばかりも疑はねど、彼夕はわれふと同じ處に落ち合ひてまことのさまを目撃したり、さればわれは始よりおん身の詞の戲言なるべきを知りぬといふ。ジェンナロは猶訝しげに我顔を見て一語をも出さざりき。われ微笑みつゝジェンナロが前夜の口吻を眞似て、おん身のけふ我に惜みて彼馬鹿者に與へ給ひし接吻を取返さずは歸らずといひたり。ジェンナロの面は血色全く失せて、さてはおん身は立聞せしか、おん身は我を辱めたリ、我と決闘せよといふ。其聲極て冷に、極めてあらゝかなりき。わが實を述べたる一語の、此の如く渠を激せむことは、わが預期せざる所なりき。われは徐かに、ジェンナロよ、そはよも眞面目なる詞にはあらじといひて、其手を握りしに、ジェンナロは手を引き面を背け、舟人に陸に着けよと命ぜり。老いたる方の漕手客へて、舟を停むべきところは、さきに漕ぎ出でし

ところの外絶て無ければ、是非とも島を一周せでは叶はずといひつゝ、鰭を掻き手を急にしたり。舟は深碧の水もて繞されたる高き岩窟に近づきぬ。ジェンナロは杖を擲ひて舷側の水を打てり。われは正怒り悲みて、傍より其面を打ち目守りぬ。爾時年少き漕手いと慌だし、龍巻(ウナ、トロムバ)と叫べり。その際視たる方を見れば、ミネルリの岬より起りて、斜に空に向ひて堅立せる一道の黒雲あり。形は圓柱の如く、色は濃墨の如し。その四邊の水、恰も鍋中の湯の滾沸せるが如くなり。ジェンナロはいづかたに避くるかと問へり。少年は後々といへり。われ。されば又全島を巡らむとするか。少年。風なき方の岩に沿うて漕がむ。龍巻は島を離れて走る如し。翁。此小舟の若し岩に觸れて砕けずば幸なり。語未だ畢らず、龍巻の鰭は一轉せり。一轉して吾舟の方に進めり。その疾きこと颯風の如し。舟若し高く岸頭に吹き上げられずば、必ず岩根に傍ひて千尋の底に壓し沈めらるべし。われは翁と共に鰭を握りつ。ジェンナロも亦少年を扶けて勤けり。されど風聲は早く我等の頭上に鳴りて、狂瀾は既に我等の脚下に翻れり。二人の漕手は異口同音に、尊きルチア、助け給へと叫びつゝ、鰭を掻て、跪

拜せり。ジェンナロ鰭を翻して、など鰭を掻つと叱すれども、二人は喪心せるものゝ如く、天を仰いで臥坐す。われは忽ち乗る所の舟の、木葉の旋風に弄ばるゝ如きを覺て、暗黒なる物の左舷に迫るを視、舟は高く登り行けり。飛瀑の如き水は我頭上に濺ぎ、身は非常なる氣壓の加はるところとなりて、眼中血を逆らしめむと欲するものゝ如く、五官の能既に應じて、わが絶えざること縷の如き意識は唯々死々と念ずるのみ。われは終に昏絶せり。

### 夢幻境

わが再び眼を開きし時の光景は、今猶目に在ること、彼壯大なる火山の活畫の如く、又彼沈痛なるアモンチヤタの別離の記念の如し。我身が縛れるものは、八面皆碧色なる瀧氣にして、俯仰の間物として此色を帯びざるはなかりき。試みに臂を舉ぐれば、忽ち無數の流星の身邊に飛ぶを見る。われは身の既に死して無際空間の氣海に漂へるを覺えたり。我身は將に昇りて天に在せる父の許に往かむとす。然るに一物の重く我頭上を壓するあり。是れ我罪障なるべし。此物はわが昇天を妨げ、我身を引いて地に向へり。而して冷なること海水の如き

アニ公子と夫人フランチェスカとを見たり。されど彼語を出し、は、我手を握りて、眞面目な思慮ありげなる目を我面に注ぎたる未知の男なりき。我は廣濶にして敝明なる一室に臥せり。時は白晝なりき。われは身の何の處にあるを知らずして、只熱の脈絡の内に發りたるを覺えき。わがいかにして救はれ、いかにしてこゝに來しを審にすることを得しは、時を経ての後なりき。

きのふジェンナロとわれとの歸り來ざりしとき、人々はいたく心を苦め給ひぬ。我等を載せて出でし舟人を探ぬるに、こも行方知れずとの事なりき。さて島の南岸に沿ひて、龍巻ありしを聞き給ひしより、人々は早や我等の生きて還らざるべきを思ひぬ。搜索の爲めに出し遣られし二艘の舟は、一はこなたより漕ぎ往き、一はかなたより漕ぎ戻りて、末遂に一つところに落ち合ふやうに旋てられしに、その舟若歸り來て、舟も人もその踪跡を見ずといふ。フランチェスカの君は我のために涙を墮し給ひ、又ジェンナロと舟人との上をも惜み給ひぬと聞えぬ。その時公子の宣給ふやう。かくて思ひ棄てむは、猶そのてだてを盡したりといふべからず。若し舟中の人にして、或は浪に打ち揚げられ、

或は自ら涸着きて、嚴のはざまなどにあらむには、人に知られて飢渴の苦難を受けもやせむ。いでわれ親ら往いて求めむとて、朝まだきに力強き漕手四りを倩ひ、湊を舟出して、ここかしこの洞窟より嚴のはざまで、名残なく尋ね給ひぬ。されど彼魔窟といふところには、舟人辭みて行かじといふを、公子強ひて説き勧め、草木生ひたりと見ゆる岸邊をさして漕ぎ近づかせしに、程近くなるに従ひて、人の偲れ臥したりと覺しきを認め、さてこそ我を救ひ取り給ひしなれ。われは縁なる灌木の間に横はり、我衣は濱風に吹かれて半ば乾きたりしなり。公子は舟人して我を舟に扶け載せしめ、おのれの外套も被ひ、手の尖胸のあたりなど擦り温めつゝ、早く我呼吸の未だ絶え果てぬを見給ひぬといふ。われはかくてこゝに伴はれ、醫師の治療を受けつるなりけり。

さればジェンナロと二人の舟人とは魚腹に葬られて、われのみ一人再び天日を見ることゝなりしなり。人々は我に當時の事を語らしめたり。われは光まばゆき洞窟の中に醒めしを始とし、目しひたる少女を載せ來し翁に逢へるに至るまで、そのおほよそを語らしに、人々笑ひて、それは熟ある人の寒き夜風に觸れ、半醒半夢

の間にありて妄想せるならむといへり。げにわれさへ事の餘りに怪しければ、夢かと疑ふ心なきにしもあらねど、また熟と思へばしかはあらじと思ひ返さるることを得ず。かへすゝも奇しく怪しきは、彼洞天の光景と舟中の人物となり。

我物語を傍聴せし醫師は公子に向ひ頭を傾けて、さては君の此人を捜し得給ひしは彼魔窟の時なりけるよといひぬ。公子。さなり。さりとて君は世俗のいふ魔窟に、まことの魔ありとは、よも思ひ給はじ。醫師。それは輒く答へまつべうもあらぬ御尋なり。自然は謎語の鉤鎖にして吾人は今その幾節をか解き得たる。

我心は次第に爽かなりぬ。抑もわが見し洞窟はいかなる處なりしぞ。舟人の物語に、この石門の奥に光りかゞやくところありといひしは、わが漂ひ着きし別天地を斥して言へるにはあらざるか。かの怪しき翁の舟の、狭き穴より潛り出しをば、われ明かに記憶せり。夢まぼろしにてはよもあらじ。さらば彼洞窟は幽魂の往來するところにして、我は一たび其境に陥り、聖母の恵によりて又現世に歸りしにや。われはかく思ひ憂ひつゝも、わが掌を組み合せて彼舟中の少女の上を懷ひぬ。まことに彼少

ぞありける。

その漸く近づくを候へば、静かに鰯を搖すものは一人の老翁なり。鰯の一たび水を打つごとに、彼は薔薇花を染め出せり。舟の舷に一人の蹲れるあり。その形女子に似たり。舟は漸く近づけども、二人は口に一語を發せず、その動かざること石人の如く、動くものは唯が翁が手中の鰯のみ。忽ち聲ありて、一の長大息の如く、我耳に入り來りぬ。その聲は曾て一たび聞けるもの、如くなりき。

舟は岸に近づきて鰯を割き、我が起ちて望める邊に漕ぎ寄せられたり。翁が手は鰯を放てり。女子はこの時もろ手高くさし上げて、哀に悲しげなる聲を揚げ、神の母よ、我を見棄て給ふな。我は何を畏みてこゝに來たりと云へり。われは此聲を聞き一聲ララと叫べり。舟中の女子は彼ベスツム古祠の畔なる舊女なりしなり。

ララは我に對ひて起ち、聲振り絞りて、我に光明を授け給へ、我に神の造り給ひし世界の美しさを見ることを得させたまへと祈願したり。その聲音は尋常ならず。譬へば泉下の人の假に形を現して物言ふが如くなりき。我即興詩は漫りに混沌の籟を穿ちて、少女に宇宙の美

を教へき。今や少女は期せずして我前に來り、我に眼を開かむことを請へり。われは少女の聲の我心魂に徹するを覺えて、口一語を出すこと能はず、只手と少女の方にさし伸べたるのみ。少女は再び身を起して、我に光明を授け給へと唱へかけしが、張り詰めし氣や弛みけむ。小舟の中にはたと伏し、舷側なる水ははら／＼と火花を飛ばしつ。

翁は暫く身を屈して、少女のさまを覗ひ居たるが、やをら岸に登りて、きと眼を我姿に注ぎ、空中に十字を書し、彼大銅鉢を抱いて舟中に移し、己も讀いて乗りうつれり。われは思慮するに遑あらずして、同じく舟に上りしに、翁は我を迎へむともせず、さればとて又我を拒まむともせず、只口を閉りて我を眺るのみ。翁は又鰯を握りて、彼青き星に向ひて漕ぎ行けり。冷なる風は舟に向ひて吹き來れり。舟は巖窟の中に進み入りて、我等の頭は巖に觸れむとす。われは身をララの上に俯したり。忽ちして舟は杳茫として涯なき大海の上に出でぬ。頭を回らせば、斷崖千尺、斧もて削り成せる如くにして、乗る所の舟は崖下の小洞穴より潛り出でしなり。

新月の光は怪しきまでに清澄なりき。斷崖の

一隅に翁の形をなしたる低き岸あり。灌木疎疎に生じて、深紅の花の開ける草之に雜れり。岸邊には一隻の帆船を繋げるを見る。翁は小舟を其側に留めしに、少女は期する所ある如く、身を起して我に向へり。われはその手に觸るゝことをだに敢てせずして、心の裡に我が遇ふ所の夢に非ず幻にも非ず、さればとて又現にも非ず、人も我も遊魂の陰界に相見するものなるべきを思ひぬ。少女は、いざ藥草を采りて給へと云ひて、右手を我にさし着けたり。われは鬼に役せらるるもの、如く、岸に登りて彼香しき花を摘み、束ねて少女に遞與しつ。この時われは堪へ難き疲を覺えて、そのまゝ地上に倒れ臥したり。われは猶首を擡げて、翁が手快くララを彼帆船に抱き上げ、わが摘みし花束をも移し載せて、自らこれに乗りうつり、小舟を舷に結び付けて、帆を揚げて去るを見たり。されど我は身を起すこと能はず、又聲を出すこと能はずして、徒らに身を悶え手を振るのみ。我は死の我心に迫りて、心の裂けむと欲するを覺えたり。

## 蘇生

かくては性命の虞はあらじとは、如て我耳に入りし詞なりき。われは眼を開いてファビ



ざらむとす。その二はわが宿を出でし次の日に  
来しものなる由、房奴われに語りぬ。これを讀  
むに唯々二三行の文あり。心誠なるものゝお  
ん身の爲め奴かれとおもへるありて、今宵おん  
身の來まきむことを願ふとのみ書きて、末に昔  
の友なる女と署し、會合の家を指し示せり。  
其三はこれと同じ手して書けるものなり。その  
文左の如くなりき。

よしなき御疑念など起し給はで、御出下  
されかしと、ひたすら御待申上候。御  
別申上候節は實に思ひ掛けぬ事にて、胸  
騒ぎ魂消えて、申上ぐべき詞をもえ辨へ  
侍らざりしかど今は御許にてても、あわた  
だしかりし當時の事を思ひ葉て給ひつら  
むと存じ候。御許にて思ひ違へ給ひしに  
はあらずやと思はるゝ節も候へども、そ  
はすべて御日にかゝりたる上にて申解く  
べく候。只一刻も早く御日にかゝり度  
御待申上ぐるより外無御座候。かしこ。  
末には又昔の友なる女と署したり。會合の  
家は知らぬ巷に在れど、サンタならではかゝる  
文書くべき婦人あるべうもあらず。われは今更  
彼婦人に逢ひて何とかすべきと思ひぬれば、御  
返事もやあると促しに來し男を呼び入れて、

詞短かにいひぬ。われは遽かに思ひ定むる事あ  
りて、拿破里を去らむとす。今までの厚き御患  
は誓ひて忘れ侍らじ。御日に掛かりて御暇乞  
すべきなれど、あわたしき折なれば、唯々こ  
の由御使に申すなりといひぬ。フエデリゴには  
數行の書を作りて遣し置きつ。その概略は今物  
書くべき心地もせねば、精しき事の顛末をば、  
羅馬に到り着きて後にこそ告ぐべけれ、手を握  
らで別れ去ることの心苦しさを察せよといふ  
程の意なりき。

暇乞にとては、何處へも往かざりき。街上  
にてベルナルドオの面を見むことの影護く、  
又此地に來てより交を結びし人には、相見む  
ことの願はしくもあらねば、われは旅寓の一室  
にたれこめて此日を暮さむとおもひ居たり。さ  
るを公子の車を眺へ置きたれば、共に醫師の  
家訪はずやと宣給ふがことわりなれば、随ひ  
て行きぬ。小く心安げなる家にて、年長けたる  
姉の家政を掌るあり。質直なる性質眉目  
の間に現はれて、むかしカムパニアの野邊にあ  
りける時、鞠育の恩を受けしドメニカに似たる  
ところあり。されど此は教育ある人なれば、起  
居振舞のみややかなる、いろ／＼なる藝能あ  
る、日を同じうして語るべくもあらざるなる

べし。  
翌朝われは先づエズキオの山を仰ぎ見て別を  
告げたり。巔は深く烟霧の裏に隠れて、われ  
に送別の意を表せむとせざる如し。是日海原  
はいと靜にして、又我をして洞窟と稱女との夢  
を想はしむ。嗚呼、此拿破里の市も、今よりは  
同じ夢中の物となりたるならむ。

房奴はけふの拿破里日報(ディアリオ、デ、ナポ  
リ)を持ち來りぬ。披きて見れば我假名あり。  
さきの日の初舞臺の批評なりき。いかなる事を  
書けるにかと、心忙しく讀みもて行くに、先づ  
空想の膽にして、章句の美しかりしを稱へ、  
恐らくは是れパンジエツチイの流を貽めるもの  
にて、摸倣の稍々甚しきを嫌ふと斷ぜり。パ  
ンジエツチイといふ人はわれ夢にだに見しこと  
あらず。われは唯々我大賦の情に本づきて歌ひ  
しなり。想ふに彼批評家といふものは、おのわ  
常に摸倣の筆を用ふるより、人の藝術も亦然な  
らむと思へるにやあらむ。末の方には例に依り  
て、獎勵の語を添へたり。いはく。此人終に名  
を成すべき望なきにあらず、今の見る所を以  
てするも、曾非凡なる材能たることを失はざる  
べし、空想感情感應の諸性具備したりと見ゆれ  
ばなりとあり。此評は悪しき方にはあらわど、

女は我を救へる天使なりき。

年經て我夢の夢に非ざることは明かになりぬ。彼洞窟は今カブリ島の第一勝、否伊太利國の第一勝たる琅玕洞(グロッタ、アツウラ)にして、舟中の少女も亦實にかのベスツムの艷女アラなりしなり。

## 歸途

公子夫婦は我を率て拿破里に歸らむために、猶カブリに留まること二日なりき。二人の我を待つ言動は、如の程こそ屢々我感情を傷ふこともありつれ、遭難の後病弱の身となりては、親族にも稀なるべき人々の看護の難有き身にしみて、羅馬へ伴ひ行かむと云はるゝが嬉しとおもはるゝやうになりぬ。そが上かの洞窟の内に遭遇せし怪異と、萬死を出でゝ一生を獲たる幸とは、いたくわが興奮したる腦髓を刺激して、我をして無形の威力の人心運命を左右することの復た疑ふべからざるを思はしめぬれば、我は公子夫婦の羅馬へ往けと勧め給ふを聞きて、又直ちにその聲を以て運命の聲となさむとしたり。わが健康の漸く故に復らむとする頃、公子夫婦は又我床頭において、何くれとなき語り慰め給ひき。夫人、アントニオよ。おん

身の往方まだ知れざりし程は、我等は屢々おん身の爲めに泣きぬ。おん身の不思議に性命を全うせしは、聖母の御恵なりしならむ。今はおん身情強きも、よも再び拿破里に住みて、ベルナルドオと面をあはせむとは云はぬならむ。公子。そは勿論なるべし。われ等は只々羅馬に伴ひ歸りて、曾て過ありしアントニオは地中海の底の藻府となりぬ、今こゝに來たるはその昔幼く可哀ゆかりしアントニオなりと云はむ。夫人。さるにても便なきはジエンナロなり。オも人に優れ情も深かりしものを、いかなれば神は未猶遠き此人の命を助けむとはし給はざりけむ。惜みても餘あることならずやなど宣給へり。

醫師は屢々病状をおとづれて、數時間を我室に送れり。この人は拿破里に住みて、いまは用事ありて此カブリに來居たるなりといふ。第三日に至りて、醫師我を診して健康の全く故に復りたるを告げ、已れも我等の一行と共に歸途に就きぬ。醫師の我を健全なりといふは、形體上より言へるにて、若し精神上より言はば、われは自ら我心の健全ならざるを覺えき。わが少壯の心は、かの含羞草といふものゝ葉と同じく萎み卷きて、曩に一たび死の境界に臨みて

よりこのかた、死の天使の接吻の痕は、猶明かに我體の上に存せり。公子夫婦の我と醫師とを引き連れて舟に上り給ふとき、我は澄み渡る海水を見下して、忽ち前日の事憶ひ起し、澄しく心を動したり。今日影のうらゝかに此海水の縁を照すを見るにつけても、我は永く此底に眠るべき身の、恙なくて又此天日の光に浴するを思ひ、涙の頬に流るゝを禁ずること能はざりき。人々皆優しく我を慰めたり。フランチェスカの君は我を稱へ、我を呼びて詩人となし、醫師に我が拿破里の劇場に上りて、即興詩を歌ひしことを語り給ひしに、醫師驚きたる面持して、さてはかの謳者は此人なりしか、公衆の稱歎は尋常ならざりき、重ねて技を演じ給はば、世に名高き人ともなり給はむものをなどいへり。風の餘り好かりければ、初めソレントより陸に上るべかりし航路を改め、直ちに拿破里の九江を指して進むこととなりぬ。われは拿破里の旅寓に入りて、三通の書信に接したり。その一は友人フェデリゴが手書なり。フェデリゴはきのふイスキアの島に遊び、三日の後ならでは還らずとの事なりき。明日の午頃には人々こゝを立たむと宣給へば、われはこの唯一一人なる友にだに、暇乞することを得

を避けむと欲することなく、却て二馬の足振の猶太に遅きを恨みき。譬へば死の宣告を受けたるものゝ、早く苦痛の境を過ぎて彼岸に達せむことを願ふが如くなるべし。

車はボルゲンゼの館の前に駐まりぬ。僮僕は我を誘ひて館の最高層に登り、相接せる二小房を指して、我行李を卸さしめき。

少選ありて食卓に呼ばれぬ。われは舊恩人たる老公の前に出で、身を僂めて拜せしに、

アントニオが席をば我とフランチェスカとの間に設けよと宣給ふ。是れ我が久し振にて耳にせし最初の一語なりき。

會話の調子は輕快なりき。われは物語の昔日の過に及ばむことを慮りしに、この御館を遠ざかりたりしことをだに言ひ出づる人なく、老公は優しき舊に倍して我を款待し給ひぬ。されどわれは此一家の復た我に厚きを喜ぶと共に、人の我を想するは我を輕んずる所以なるを思ふことを禁じ得ざりき。

## 教育

ボルゲンゼ家の宮殿は今わが居處となりぬ。人々の我をもてなし給ふさまは、昔に比ぶれば優しく又親しかりき。時として我を輕んずるや

うなる詞、我を侮るやうなる行なきにしもあらねど、そはわが爲め好かれとて言ひもし行ひもし給ふなれば、憎むべきにはあらざるなるべし。

夏は人々暑さを避けむとて餘所に遷り給へば、われ獨り留まりて大廈の中にあり。涼しき風吹き初むれば人々歸り給ふ。かくて我は漸く又此境遇に安んずることとなりぬ。

我は最早カムパニアの野の童にはあらず。最早當時の如く人の詞といふ詞を信ずること、宗教に志篤き人の信條を奉ずると同じきこと能はず。我は最早ジェズキタ派學校の生徒にはあらず。最早教育の名をもてするあらゆる束縛を甘んじ受くること能はず。さるを憾むらくは人々、猶我を視ることカムパニアの野の童「ジェズキタ派學校の生徒たる日と異ならざりき。此間に處して、我は六とせを経たり。今よりしてその生活を顧みれば、波瀾層疊たる海面を望むが如し。好くも我はその波濤の底に埋没し畢らざりしことよ。讀者よ、わが物語を聞くことを辭まざる讀者よ。願はくは一氣に此一段の文字を讀み去れ。われは唯ま省筆を用ゐて、その大略を敘して已みなむとす。この六年の歴史はわが受けし精神上教育の

歴史なり。この教育は人の師たるを好むものゝことさらに設けたる所に於て、不便なる我はこれを身に受けざることを能はざりしなり。人々は我を善人とし、我に棄て難き機根ありとして、競ひて自ら教育の任を負へり。恩人はその恩を以て我に臨みて我師たり。恩人ならぬ人はわが人好きに乘じて僭して我師となれり。我は忍びて無量の苦を受けたり。そは教育といふを以ての故なり。

主公はわが學の膚淺なるを責め給へり。我はいかに自ら勵まむも、わが一書を讀みたる後、何物か我胸中に残れると問はゞ、そはたゞ其巻冊の裡より我心に適へるものを抽き出し得たりといふのみにて、譬へば蜂の百花の上に翼を休めて、唯一味の蜜を採らむが如くなるべし。こは老公の喜び給ふところにあらざりしなり。家の常の賓客、その他われを愛すといふ人々には、おのゝその理想ありて、われを測るにその合理想の尺度をもてす。人々いかでかわが成績に甘んずることを得む。數學者はアントニオあまりに空想に富みて、冷靜の資なしと云ひ、儒者はアントニオの拉阿語に精しからざることよと云ひ、政治家は稠人の前にありて、ことさらに我に問ふにわが知らざるところの政治上の



當日の公衆の喝采に比ぶるときは、その冷かなること著しとおもはる。われは此新聞紙を疊みて行李の中に藏めたり。そは他年わが拿破里の遭遇の悉く夢ならぬを證せむ料にもとてなり。嗚呼、われ拿破里を見たり、拿破里の市を彷徨せり。わが得しところそも幾何ぞ、わが失ひしところはたそも幾何ぞ。知らず、フルキアの預言は既に實現し盡せりや否や。

われ等は拿破里を出立ちたり。葡萄我たる丘陵は見る／＼烟雲の間に沒せり。一行は羅馬に向ひて行くこと四日なりき。わが行くところの道は、二月の前にフェデリゴ、サンタの二人と與に行きし道なりき。モラの旅亭に來て見れば、柑子の林は今花の眞盛なり。われは再び我祝言をサンタに偷み聽かれし木蔭に立寄りたり。人の離合聚散の測り難きこと、また今更に驚かれぬ。イトリの放隘を過ぐる時、われはフェデリゴが上を憶ひ起しつ。旅券を閲する國境には、けふも洞穴の中に山羊の群をなせるあり。されどフェデリゴが筆に上りし當時の牧童は見えざりき。

○一行はテルラチナに宿りぬ。夜明くれば天氣晴朗なりき。あはれ、美しき海原よ。汝は我を懷抱し我をゆり動かして、我にめでたき夢を

見させ、我をかう／＼しきララに逢はせき。今はわれ汝に別れむとぞする。水の天に接する處には、猶エズキオの山の雄々しき姿見えて、立昇る煙の色は淡き藍色を成し、そのさま清明にして而も幽微に、譬へば霞を以て顔料となし、かどやく空の面に畫ける如し。われは大息して呼べり。さらば／＼、いで我は羅馬に入らむ。我墓穴は我を待つこと久し。

われは曾て怪しき媼フルキアとさまよひありきし山を望みき。われはジェンツァノ市を過ぎて、我母の車に觸れてみまかり給ひし廣こうちを見き。路の傍なる乞兒は我衣服の卑しかなぬを見て、われを殿様と呼べり。むかし母に手を拉かれて祭を見し貧家の子幸ありといはむか、今ボルゲエ家の賓客となりて歸れる紳士幸ありといはむか、そは輒く答へ難き問なるべし。

一行はアルバノの山を踰えたり。カムパニアの曠野は我前に横れり。道の傍なる、萬羅深く鎮せるアスカニウスの墳は先づ我眼に映ぜり。古墓あり、水道の殘礎あり、而して聖彼得寺の穹窿天に聳えたる羅馬の市は、既に日晷の中に在り。(アスカニウスは昔アルバ、ロンガの基を立てし人なり。是れ拉何人の始めて市を

成せる處にして、後の羅馬市はこれより生ぜりといふ。)

車の聖ジョワンニの門(ボルタ、サン、ジョワンニ)より入るとき、公子は我を顧みて、いかに樂しき景色にはあらずやと宣給へり。「ラテラノ」の寺、丈長き尖柱、「コリゼエオ」の大厦の址、トラヤヌスの廣こうち、いづれか我舊夢を喚び返す媒ならざる。

羅馬は拿破里の熱鬧に似ず。コレンオの大路は長しと雖、繁華なるトレドの街と異なり。車の密より道行く人を睨ふに、むかし見し人も少からず。老いたる教師ハツパス、ダアダアのボルゲエ家の車の章に心づきて、蹣跚たる歩を住め我等を禮したるは、おもはずなる心地せらる。コンドツチイ街、(キヤ、コンドツチイ)の角を過ぐれば、むかしながらのベツポが手に展まがひの木片を裝ひて、道の傍に坐せるを見る。

フランチェスカの君の、やう／＼我家に歸り着きぬと宣給ふに答へて、まことにさなりと云ひつゝ、我は心の内に名狀し難き感情の迫り來るを覺えき。我は今曾て訣絶の書を賜ひし舊恩人を拜せざるべからず。その待遇は果していかなるべきか。我はこゝに至りて、復たこれ

はあらざるか。それを離れてわれ我執ありといふは、わが人の恩蔭を被りたる貧家の孤たるを以てにあらずや。

名よりして言はむか 我は貴族にあらず。されど心よりして観むか、我豈賤人ならむや。されば我は人に侮蔑せらるゝごとに、必ず深き苦痛を忍べり。いかなれば我は赤心を捧げて人々に依頼せしに、人々は我をして驕の柱と化すること彼オト(亞伯拉罕)の甥が妻の如くならしめしぞ。是に於いてや、惇厚の情は一時我心の上に起り來りて自信自重の意識は緊縛をわが心の心に加へ、此緊縛の中よりして、増上慢の鬼は昂然として頭を擡げ、我をして平生我に師たる俗客を脚底に見下さしめ、我耳に附きて語りて曰はく。汝の名は千載の後に傳へらるべし。彼の汝に師たるものゝ名は、これに反して全く忘らるべし。縱令忘れざらむも、その偶々存ずるは汝が周囲の桎梏として存じ、汝が性命の杯中に落ちたる毒藥として存ずるならむといふ。われはタツソオの上をおもへり。持せるレオノオレよ。驕傲なるフェルラの朝廷よ。その名は今タツソオによりて僅に存ずるにあらずや。當時の王者の宮殿は今瓦石の一堆のみ、その詩人を拘禁せし牢舎は今巡拜者

の靈場たりなど、おもへり。此の如き心の卑むべきは、われ自ら知る。されど所謂教育は我をして此の如き心を生ぜしめざることをばず。われ若し彼教育を受けて、此心をだに生ぜざりせば、われは性命を保ちて今に到るに由なかりしなり。わが潔白なる心、敬愛の情は、一言の獎勵、一顧の恩恵を以て雨露となし、に、人々は却りて毒水を灌ぎてこれを腐枯せしめしなり。

今の我は最早昔の如き無邪氣の人ならず。さる人々は猶無邪氣なるアントニオと呼べり。今の我は絶えず書を読み、自然と人間とを觀察し、又自ら我心を顧みて己の長短利病を察にせむとせり。さる人々は始終物學をせぬアントニオと呼べり。この教育は六年の間續きたり、否、七年ともいふことを得べし。されど六とせ目の年の末には、早く多少の風波の我生涯の海の面に噪ぎ立つを見たり。この教育の六年の間、猶書かまほしき事なきにあらねど、今より顧みれば、皆流れて毒水一滴となり了んぬ。こは門地なく金錢なき才子の常に飽き常に服するところのものにして、此毒水は此類の才子の爲には、人の呼吸するに慣れたる空氣に異ならずといふべきならむ。

われは「アバテ」となりぬ。われは又興詩人として名を羅馬人の間に知られぬ。そは「チベリナ學士會院」アカデミア、チベリナ」の演壇の我が上りて詩藝を読み、又即興詩を吟ずることを許し、がためなり。されどフランチエスカの君は、會院の吟誦には吟采を得ざるものなしといふをもて、わが自負の心を抑へ給へり。

ハツパス、ダアダアは會院中の最も名高き人なり。その名の最も高きは、その演説し著述することの最も多きがためなり。院内の人々一人としてハツパス、ダアダアの限内にして女を排し、衰頹に過てるを知らざるものなし。されど人々は猶この翁の稿を會院に掲ぐるを甘んじせり。ハツパス、ダアダアは愈々意を得て、只管書きに書き説きに説けり。ある日我詩藝を聞し、評して水彩畫となし、ボルゲエゼ家の人々に謂ふやう。アントニオに才藻の萌芽ありしをば、嘗て我生徒たりしとき認め得たりしに、惜いかな其芽は枯れて、今の作り出すところは畸形の詩のみ。アントニオは古の名家の少時の作を世に公にせしものあるを見て、或はおのれのを梓行せむとすることあらむか。そは世の嘲を招くに過ぎず。願はくは人々彼を諷めて、さる無謀の企を思ひ留まらしめ給

事をもてし、われを苦めて自ら得たりとし、遊戯をもて性命とせる貴公子は、また我と馬相を論じて、わが馬を愛することの己れの身を愛するごとくならざるを怪み、貴族にして汚吉ある一婦人の、まことは人に超えたる知あるにあらざして、漫りに批評に長ぜりと稱せられたるは、また我詩稿を嘲弄せむと欲し、我に一枚づつ寫して早せむことを求めたり。その外、ハツパス、デアデアの如く、むかし有望の少年たりしわが、ハオ盡き想涸れたるを歎ずるものあり、舞踏を善くする某の如く、わが舞場に出で、姿勢の美を闊くを憐むものあり、文法に精しき某の如く、わが往々讀に代ふるに句を以てするを難するものあり。就中フランチェスカの君は、もろ人の我を褒むるに過ぎて、わが慢心のこれがために長すべきを惜むとて、毎に峻厳と威儀とをもて我に臨まむとし給へり。おほよそ此等の薄は滴々我心上に落ち來りて、われは我心のこれが爲めに硬結すべきか、さらずば又これが爲めにその血を瀝らし盡すべきをおもひたりき。

我心は一物に迷ふごとに、その高尚と美妙と方面よりして強く刺戟せられ深く悦懽す。われは獨り閑室に坐するとき、首を回して彼の

我師と稱するものを憶ふに、一種の奇異なる感の我を襲ひ來るに會ひぬ。世界は譬へば美しき少女の如し。その心その姿その粧は、わが目を注ぎ心を傾くところなり。さるを靴工は、彼の穿ける靴を見よ、その身上第一の飾はこれぞと云ひ、縫匠は、否、彼の着たる衣を見よ、その裁ちざまの好きことよ、その色あひを吟味し、その縫際に心留むるにあらでは、少女の姿を論ずべからずと云ひ、理髮師は、否々、彼の美しき髪のかに結られたるかを見ずやと云ひ、語學の師はその會話の妙をたへ、舞の師はその舉止のけだかさを讃む。彼の我師と稱するものは、この工匠等に異ならず。されどわれ若し憚ることなくして、人々よ、我も一々の美を見ざるにあらねど、我を動かすものは彼に在らずしてその全體の美に在り、是れ我職分なりと曰はど、人々は必ず陽に、げにげに我等の教ふところは汝詩人の日の視るところより低かるべしと曰ひつゝ、陰に我愚を笑ふなるべし。

天地の間に生物多しと雖、その最も残忍なるものは蓋し人なるべし。われ若し富人ならば、われ若し人の廬下に寄るものならずば、人々の旗色は忽ちにして變ずべきならむ。人々の聰明

ぶり博識ぶりて、自ら處世の才に長けたりげに振舞ふは、皆我が食客たるをもてにあらずや。我は泣かまほしきに笑ひ、唾せむと欲して却りて首を屈し、耳を傾けて俗士婦女の蟬を囁むが如き話を聴かざるべからず。所謂教育は果して我に何物をか與へし。而從腹誦、抑鬱不平、自暴自棄などの惡難陋習の、我心の底に萌し、より外、又何の効果も無かりしなり。

十の指は我があらゆる暗黒面を指し、却りて我をして我に一光明面なしや否やを思はしめ、我をして自ら己の長を覓め、自ら己の能を街はしめたり。而して彼指は又この影を顧みて自ら喜ぶ情を指して、更に一の暗黒面を得たりとせり。

人々はわが我見の強くして闇きを難せり。政治家のわが我見を責むるは、われ心を政況に委ねざればなり、馬を愛する貴公子のわが我見を責むるは、われ馬を品し馬に乗りて居諸を遷ること能はざればなり、曾て又一少年の審美學の書に耽るものありしが、其人は我にいかに思惟し、いかに吟詠し、いかに批評すべきを教へ、一朝わがその授くる所の規矩に遵はざるを見るに及びては、忽又わが我見を責めたり。これはわが我執あるにはあらで、人々の我執あるに



籠中の鳥なり。こたび家に歸り給ふは、譬へば先づ絲もてその足を結びおき、暫し籠より出だして翺翔せしむるが如くなるべし。傷ましきことの極ならずや。

わが姫の面を見しは午餐の時なりき。げに人傳に聞きつる如くおとなびて見え給へど、世の人の美しとてもはやす類の姿貌にはあらざるべし。面の色は稍よ蒼かりき。唯、惠深く情厚きさまの、さながらに眉目の間に現れたるがめでたく覺えられぬ。

食卓に就きたるは近親の人々のみなり。されど一人の姫に我の誰なるを告ぐるものなく、姫も又我面を認め得ざるが如くなりき。さてわれは姫に對ひてかたばかりの詞を掛けしに、その答へと優しく、他の親族の人々と我との間に、何の軒輊するところもなき如し。こは此御館に來てより、始ての款待ともいひつべし。

人々は打解けてくさくさの物語などし、姫は笑ひ給ふ。われは覺えず興に乗じて、その頃羅馬に行はれたりし一口話を語りぬ。姫はこれをも可笑しとして笑ひ給ふに、外の人々は遽かに色を正して、中にもかゝる味なき事を可笑しとするは何故ならむなどいふ人さへあり。われ。しか宜給へど、今語りしは近頃流行の一口話にて、

都人士のをかしとするところなるを奈何せむ。夫人。否、おん身の話は掛詞の類のいと卑しきをさげとせり。人の腦髓のかくまで淺はかなる事を弄ぶことを嫌はざるは、げに怪し限ならざるや。嗚呼、我とても争でかことさらに此の如き事のために、我腦髓を役せむや。我は唯と世の人の多く語るところにして、我が爲めにもをかしとおもはるゝものなるからに、人々の一餐を博する料にもとおもひし迄なり。

日暮れて客あり。數人の外國人さへ雜りたり。われは晝間の譴責に懲りて、室の片隅に隠れ避け、一語をだに出ださざりき。人々は團の形をなして、ペリイニイといふものゝめぐりに

集へり。この人の略略と我と同じくして、その家は貴族なり。心爽かにして頓智あり、會話も甚巧なれば、人皆その言ふところを樂み聴けり。忽ち人々の一齊に笑ふ聲して、老公の聲の特さらに高く聞えければ、われは何事ならむとおもひつゝ、少しく歩み近づきたり。然るに我は何事かを聞きし。晝間我が語りて人々の咎に逢ひし、彼一口話は今ペリイニイの口より出でて人々に喝采せらるゝなりき。ペリイニイは一句を添へず又一句を削らず、その口吻態度些の我に殊なることなくして、人々は此の如く笑ひ

しなり。語り畢る時、老公は掌を撫して、側に立ちて笑ひ居たる姫に向ひ、いかにをかしき話ならずやと宜給へり。姫、まことに仰せの如くに侍り、けふ午の食卓にて、アントニオが語りし時より然かおもひ侍りきと答へ給ふ。その語調はいと溫和にて、怨み憤る色もなく辨へ難ずる色もなし。われは心の内にて、この優しき小尼公の前に跪かむとしたり。この時フランチェスカの君も、げに／＼をかしき物語なりきと宜給ふ。われは心の跳るを覺えて、そと人々に逸さかり、身を長き幌の蔭に隠して、窓の外なる涼しき空気を呼吸したり。

この一口話の事をば、われ唯唯一の例として、かく詳にはしるしなり。これより後も、日としてこれに似たる辱を被らざることなかりき。唯、小尼公のすゞしき目の我面を見上げ、衆人の罪惡の爲めに代りて我に謝するに似たるありて、われはその辱の嘲昔よりも忍び易きを覺えたり。苟におもふに我にはまことに弱點あり。それを何ぞといふに、影を顧みて自ら喜ぶ性ありて、難きを見て屈せざる質なきことなり。そもこの弱點はいづれの處よりか生ぜし。生を微蔑の家に稟けしにも因るべく、最初に受けし教育にも因るべく、又恆に人の塵

へとぞいひける。

アモンチャタが上はつゆばかりも聞えざりき。アモンチャタは我が爲めには隔世の人たり。されどこの女子は死に臨みて、その冷なる手も我胸を壓し、これをして事ごとに物ごとに苦痛を感じることも常ならざらしめしなり。ナボリの旅と當時の記憶とは、なつかしく美しきものながら、今はその美しさの彼メツウザに逢ひて化石したるにはあらずやおもはれたり。(メツウザは希臘神話中の恐るべき處女神にして、これを祝るものは忽ち石に化したりといふ。)煖き異風の吹くごとに、われはベスツムの温和なる空氣をおもひ出して意中にララが姿を畫き、ララによりて又その邂逅の處たる怪しき洞窟に想ひ及びぬ。われは彼物教へむとする賢き男女の人々の間に立ちて、上校の兒童の如くなるるとき、心にはむかし賊業にて博せし喝采と「サン、カルロ」座にて聞きつる譚呼の聲を思ひ、又人々の我を遇すること極めて冷なるが爲めに、身を室隅に聚けたるとき、心にはむかしサンダがもろ手さし伸べて、我を棄てて去らむよりは寧ろ我を殺せと叫びしことをおもひぬ。六とせは此の如くに過ぎ去りて、我齡は二十六になりぬ。

## 小尼公

フアビニア公子とフランチェスカ夫人との間に生れし姫君の名をばフアミニアといひぬ。されど搖籃の中において、早く神に許嫁せさせ給ひしより、人々小尼公とのみ稱ふこととなりぬ。この小尼公には、むかし我手にかき抱きて、をかしき書などかきて慰めまつりし頃より後、再び見ゆることを得ざりき。小尼公は教育の爲めにとて、四井街の尼寺にあづけられ給ひしより、早や六とせとなりぬ。境内を出で給ふことなく、母君なるフランチェスカの夫人ならでは往きて逢ふことを許されねば、父君すら一たびも面を合せ給ふことあらざりき。われ等は唯一人傳に姫君の今は全く人となり給ひて、その學藝をさへ人並ならず善くし給ふを聞きしのみ。

寺の掟に依るに、凡そ尼となるものは、授戒に先だてる數月間親々の許に還り居て、浮世の歡を味ひ盡し、さて生涯の暇乞して俗縁を斷つことなり。この時となりて、再び寺に入るにそが儘我家に留まるとは、その女子の意志の自由に委ぬといへど、それは只掟の上の事のみにて、まことは幼きより尼の装したる土偶

を敬ばしめ、又寺に在る永き歲月の間世中の罪深きを説きては感しすかし、寺院の靜かにして戒行の尊きを説きては勧め誘ひ、必ず寺に歸り入らしむる習なりとぞ。

是より先きわれは四井街の邊を過ぐるごとに、この尼寺の築泥の蔭にこそ、わが嘗て抱き慰めし姫君は居給ふなれ、今はいかなる姿にかなり給ひしと、心の内におもひ續けざることなかりき。一日われは尼寺に往きて、格子の奥にて尼達之讚美歌を歌ふを聴きしことあり。あの歌ふ人々の間に小尼公はおはさずやおもひしかど、流石心に咎められて、教子として寺に宿れるものゝ、彼歌樂の群に加はるや否やを問ひあきらむることを果さざりき。既にしてわれはこのもろ聲の中より、一人の聲の優れて高く又清く、一種言ふべからざる凄切の調をなせるものあるを聞き出しつ。その聲のアモンチャタが聲にいと好く似たりければ、把住し難き我空想は忽ちはかなき舊歡の影をおもひ浮べて、彼ボルゲエ家の少女の事を忘れぬ。

次の月曜日にはフアミニアこそ歸り來べけれど、老公宣給ひぬ。この詞はあやしく我情を動して、その人と成りしさまの見まほしきは上の常ならざりき。想ふに小尼公も亦我と同じき

るならむ。是れ一種の精神上の治療法なり。われは明かに我が期するところの難きを知る。ざるを猶これを取てするものは、深く自ら「ダキツト」の一篇の傑作なることを信じたればなり、又小尼公の優しき目の暗に我を鼓舞するに似たるあるに感じたればなり。

我詩は一として自家の閑歴に本づかざる者なし。此篇も亦然なり。首段は牧童たるダキツトの事を敘す。即ち我が釋かりし頃、ドメニカにはぐゝまれてカムパニアの茅屋に住めりし時の境界に外ならず。フランチェスカの君聞もあへず、それは汝が上にあらずや、汝がカムパニアの野にありし時の事に非ずやと叫び給へば、老公笑ひて、それは豫期すべき事なり、いかなる題に逢ひても、自家の感情をもてこれに附會することをを得るはアントニオが長技ならずやと答へ給ふ。ハツパス、ダアダアは噎れたる聲振りに絞ていふやう。句々洗練の足らざるが恨なり、ホラチウスの教を知らずや、唯と放置せよ、放置してその熟するを待てといへり、おん身の作も亦然なり。

人々は早く既に一紐をわが美しき彫像に加へしなり。我は猶二三章を読みしかど、只と冷澹にして輕浮なる評語の我耳に詣り入るあるのみ。

み。人々は又我肺腑中より流れ出でたる句を聞きて、古人某の集より剽竊せるかと疑へり。嗚呼、初め我が人をして聳聽せしむべく、悦せしむべき句ぞとおもひしものは、今は人々の一顧にだに償せざらむとす。我は第二折の末に到りて、興全く盡きぬれば、人々に謝して讀むことを止めたり。此に至りて、自ら我手中の詩篇を顧みれば、復た前の締約たる姿なくして、彼三王日の前夜フイレンチエ市を擔ひ行くなる「ベファアナ」といふ個人の、面色極めて奇醜にして、日には硝子球を嵌めたるにも譬へつべきものとなりぬ。是れ聽來の口々より噉きたる毒氣のわが美の影圖をして此の如く變化せしめしにぞありける。

おん身のダキツトは市井の俗人をだに殺すことなからむ、とはハツパス、ダアダアが總評なりき。人々は又評して宜給ふやう。篇中往々好き處なきにあらず。それは情深きと無氣なるとの二つに本づけりとなり。我は頭を低れて口に一語を出さず、罪囚の刑の宣告を受けるやうなる心地にて、人々の前に擬せり。ハツパス、ダアダアは再びホラチウスの教を忘れ給ふなと繰返しつゝも、猶慇懃に我手を握りて、詩人よ、懃めよと云ひぬ。我は室の一隅に退きた

りしが、暫しありて同じハツパス、ダアダアが耳聾き人の癖とて、聲高く「ファビニア」公子にきさやくを聞きつ。そは杜撰彼篇の如きは己れの未だ嘗て見ざるところぞとの事なりき。

人々は我詩を解せざらむとせり。又我を解せざらむとせり。こは我が忍ぶこと能はざるところなり。室の隣には、開爐に炭火を熾きたる廣間あり。われはこれに退き入り、手に詩卷を把りて、爪甲の掌を穿たむばかりに握りたり。嗚呼、我夢は一瞬の間に醒め、我希望は一瞬の間に破壊せられたり。我身は神の御姿の模造ながら、自ら顧みれば苦惱の器に殊ならず。われは我鐘愛の物、我がしばし接吻せし物、我が心血を澆ぎし物、我が性命ある活思想とも稱すべき物をもて、熾火の裡に擲ちたり。我詩卷は炎々として燃え上れり。忽ちアントニオと叫ぶ一聲我身遂より起りて、小尼公の優しき腕の袖中の詩卷を攫まむとせし時、事の慌忙しさに足踏みすべししたるなるべし、この天使の如き少女はあと叫びて、横ざまに身を火爍の間に墮しつ。我は夢心地の間に姫を抱き起しつ。人々は何事やらむと馳せ集へり。

フランチェスカ夫人は華母の御名を唱へつ。我手に抱き上げられたる姫は、眞蒼なる顔もて



下に倚る境遇にも因るなるべし。我は胸に溢れ口に發せむと欲するところのあるごとに、必ず先づ身邊の管で我に恩恵を施したる人々を顧みて、自ら我舌を結び、終に我不屈不撓の氣象を發展するに及ばずして止みぬ。若し日から痛護して評せばこそ謙讓の一端なるべし。されどその弱點たることは到底掩ふべからざるを奈何せむ。

今の勢をもてすれば、その恩義の絆を斷たむこといとむづかし。人々は我にいかなる苦痛を與へ給はむも、我が受けたるところの恩義は飽くまで恩義なり。そは人々なかりせば、我は或は饑渴の爲めに苦められけむ計り難きが故なり。我が人々の爲めに身にふさはしき業して、恩義に酬いむとせしことは幾度ぞ。我は報恩の何の義なるかを知らざるにあらず、良心のいかなるものなるかを解せざるにあらず。いかなれば人々は此良心の發動、報恩の企圖を妨碍して、天才は俗事に用なしといひ、又思想多きに過ぎて世務に適せずといふぞ。若しまことに天才を視ること此の如く、思想を視ること此の如くならば、そは天才をも思想をも知らざるなり。

その頃我は大關を題として長篇を作りぬ。この詩は字々皆我心血なりき。昔の不幸なる懸

と拿破崙客中の遭遇とは、常に胸裡に往來して、侯爵家の人々の所謂教育は斷えず胸臆を刺戟し、我を驅りて詩國に入らしめ、我心頭には時として我生涯の一篇の完璧をなして浮び出づることあり。その中にはいかなる瑣細なる事も、いかなる厭ふべく苦むべき事も、一として満分の詩趣を具へざるはなかりき。我中情は此の如く詠歎の聲を迫り出して、我をしてダキツトの故事の最も當時の感興を寓するに宜しきを覺えしめしなり。

詩成りて、我は復たその名作たるを疑はざりき。而して我は神に謝する情の胸に溢るゝを見たり。そは我平生の習として、一詩句を得るごとに、未だ嘗て神の我靈魂を護りて、詩思を生ぜしめ給ふを謝せざることあらざればなり。此作は我心の密技を露すべき樂波なりき。我は自ら以爲へらく。人々若し我此作を讀まば、その我に苦痛を與ふことの非なるを悟りて、善く我を遇するに至るならむと。

詩成りて、作者より外、未だ一人の肉眼のこれに觸れたるものあらず。この塵を蒙らざる美の影圖は、その氣高きこと彼「ワチカアノ」なるアポロン神の像の如く、儼然として我前に立てり。嗚呼、この影圖よ。今これを知りたる

ものは唯だ神と我とのみ。我は學に會院に往きてこれを朗讀すべき日を樂み待てり。

さるを一日「アビニア」公子と「フランチェスカ」夫人との優しさ常に留するを覺えければ、我は此二恩人に對して心中の秘密を守ること能はざりき。こは小尼公の來給ひしより二三日の後なりきと覺ゆ。公子夫婦は聞きて、さらばその詩をば我等こそ最初に聽くべけれと宣給ふ。我は直ちに諾しつれど、心にはこの未讀の發落いかにと氣遣はざることを能はざりき。さて我詩を讀むべき夕には、老公も席に出て給ふ筈なりき。此日となりて又期せずしてハツパス、ダアダの侯爵家を訪ふに會ひぬ。フランチェスカはこれを留めて、渠にも我が讀むべき詩を聽かしめむといひぬ。われは此翁の偏執の念強くして人の才を妬み、特に平生我を喜ばざるを知れり。公子夫婦の心冷なる、既に好き聴衆とすべきならぬに、今又此毒舌の翁を復つ。我が本讀の前兆は太だ佳ならざるが如くなりき。

我胸の跳ることは、嘗て「サン、カルロ」座の舞臺に立ちし時より甚しかりき。若し我が期するところの効果にして十分ならば、人々はこれを聽きて、その常に我を遇する手段の正しからざるを悟り、未來に於いて自ら改むるに至

神の徳、天國の平和をば歌はで、人の業、現世の争奪を歌ふは何故ぞ。おん身は世の人に福を授け給ふことも多かるべけれど、又禍を遣し給ふことも少からざるならむ。われ。否。詩人の人を歌ふは隨即神を歌ふなり。神は己れの徳を表さむとて、人をば造り給ひしなり。姫。おん身の宜給ふところには、わが諸ひ難き節あれど、われは我心を明すべき詞を求め得ず。人の心にも世のたまふまひにも、げに神の御心は顯れたるべし。さればそを指し示して、世の人をして神の懷に歸り入らしめむこそ、詩人の務とはいふべけれ。さるを却りて世の人を驅りて、おそろしき存咄争奪の境界に墮ちしめむとする如くなるは、好しとおもはれず。そは兎まれ角まれ、おん身はいかにして即興の詩を歌ひ給ふか。われ。題を得るときは思想は招かずして至るものなり。姫。さなり。其思想は神の賜ふ所なること人皆知る。されどそを句とし、章とし、それに美しき姿しらべを賦し給ふは奈何。われ。君は尼寺に居給ふとき「アサルモス」の歌を聴き、又古の聖の上を綴りたる韻語を學び給ひしならむ。さてある時端なく一の思想の浮び出づるに逢ひて、これと與に會て聞ける歌、曾て聞ける韻語を憶ひ得給ひしこと

はあらずや。憶むらくは、おん身はかゝる機會を逸し給ひて、筆とりて其思想を寫さむことを試み給はざりしなり。おん身若しそを試み給ひしならば、思想の全き形の心頭に顯れたるものは凝りて散ぜず、句は句を生じ章は章を生じ、詩は無意識の間になりしならむ。こは唯我一人の経験ながら、詩人の製作といふものはかくあらむとおもふなり。われは詩を作るごとに、我詩の前世の記憶の如く、前身の搖籃中にて聞けし歌の名残の如きを感じず。われは創作すと感ぜず、われは復誦すと感ず。姫。その思想といふものも、いかなるが詩となすに宜しかるべきか知るよしなけれど、わが尼寺にありし時、ふと物の懷かしき如き情、遠きに馳する如き情の胸に溢ることあり。その懷かしきは何ぞ、その馳するは何をあてぞといはゞ、われ自ら答ふるところを知らず。されど夢に吾夫たるべき耶蘇を見、又聖母を見るときは、我心はこれに慰められたり。かゝる情も詩となるべしや否や、覺束なし。館に歸りての後は、耶蘇聖母の夢に見え給ふこと稀にして、華やかなる浮世の事、罪深き人間の事のみ夢に入りぬ。されば唯、尼寺に返らむことこそ願はしけれ。アントニオよ。おん身は親しき友なれば告ぐべし。われはこの

頃漸く心の汚れむとするを覺ゆるなり。それは粧ひ飾らむとする頃起りて、人の美しと與むるが喜ばしくなれるにて知らる。尼寺の人々に知られたるは、何とかいはれむ。われ。世に君の如く淨き心あるべしや。われは唯、我心の君に似ざるを懼づるのみ。今我目もて見るときは、君の心の淨きは、昔稱くて此御館に居給ひし日に殊ならず。(われはかく言ひて姫の手に接吻せり) 姫。その頃おん身の我を抱き給ひしこと、我が爲めに畫かきて賜はりしことをば、まだ忘れ得らず。われ。おん身の其畫を看まると、破り棄て給ひしをも、われは忘れず。姫。そを憎しとおもひ給ひしや。われ。世の人は我胸中なる美しき繪の限を破り棄てぬれど、われはそれすら憎むことなし。

### 落 節

わが小尼公に親む心は日にけに増さり行きぬ。われは世の人の皆我敵にして、唯、小尼公のみ身方なるを覺えき。

暑き二箇月の間は、館の人々チリに遊ば給ひぬ。わがその群に入ることを得ずるは、恐らくは小尼公の緩慢に由れるなるべし。撒菴の茂き林、石走る瀧津瀬など、自然の聖かに美

母上を仰ぎ見つゝ、足すべりて爐の中に倒れ、手少し傷け侍り、アントニオなかりせば大いなる怪我をもすべかりしをと宜給ひぬ。われは激しき感情に襲はれて、口に一語を發すること能はず、只と喪心せるものゝ如くなりき。

姫は右手を劇しく燒き給へり。一家の騷擾は一方ならず。彼問ひ此答ふる繁き詞の中にも、幸にして人の我詩巻を問ふ者なく、我も亦黙ありければ、ダキットの詩篇の事は終に復た一人の口の上ることなかりき。あらず、後に至りてこれに言ひ及びし人唯一人あり。そは我が爲めに翼を焦し、天使なりき。嗚呼、小尼公なかりせば、われは全く厭世の淵に沈み果てしならむ。われをして人の心の猶頼むべきを覺えしめ、われをして少時の淨き心を喚び返さしめたるは、げにこのボルゲエ一家の守護神たる小尼公なりき。小尼公の手は痛むこと十四日の間なりき。我胸の痛むことも亦十四日の間なりき。

ある日われは獨り姫の病牀に侍することを得て、わが久しく言はむと欲するところを言ふことを得たり。われ。フラミニアの君よ。願はくは我罪を許し給へ。君は我が爲めに其苦痛を受け給へり。姫。否、その事をば再び口に出し

給ふな。又ゆめ餘所に洩し給ふな。そが上に、さのたまふはおん身自ら欺き給ふにてこそあれ。我足のすべりしは事實なり。おん身若し扶け起し給はずば、わが怪我はいかなりけむ。されば我はおん身の恩を荷へり。父母も然か思ひて、御身のいちはやく救ひ給ひしを感じ給ひぬ。獨り此事のみにはあらず。父母の御身を愛し給ふ心のまことの深さをば、おん身は未だ全く知り給はぬごとし。われ。そは宜給ふまでもなし。

わが今日あるは皆御家の賜なり。かくて一日ごとに我が受くるところの恩澤は加はりゆくなり。姫。否、さる筋の事をいふにはあらず。わが二親のおん身を遇し給ふさまをば、此幾日の間に我熟く知れり。二親はかくするが好しとおもひ給ふなれば、そは奈何ともし難けれど、總ておん身を惡しとおもひ給ひてにはあらず。殊に母上の我に對しておん身を譽め給ふ御詞をば、おん身に聞せまほしきやうなり。師の尼君の宜給ふに、おほよそ人と生れて過失なきものあらじとぞ。憚あることには侍れど、おん身にも總て過失なしとはいひ難くや侍らむ。

例之ばおん身は、いかなれば一時怒に任せて、彼美しき詩を焚き給ひし。われ。そは世に残すべき價なければなり。唯と焚くことの遅かりし

こそ恨なれ。姫。否々、われは世の人の心の險しきを憶得たり。靜かなる尼君の如の内にありて、優しき尼達に交らむことの願はしきや。われ。げに君が深き御心にては、しかおもひ給ふなるべし。我心は汚れたり。恵の泉の甘きをば忘れ易くして、一滴の毒水をば繰返し味ふこと、まことに罪深き業にこそ侍らめと答へぬ。

この館には一人として我を憎むものなし。されど尼寺の心安きには似ず。こは小尼公の獨り我に對し給ふとき、屢々宜給ひし詞なり。われはこの姫をもて我感情の守護神、わが清淨なる思想の守護神とし、漸くこれに心を傾けつ。想ふに姫の歸り來給ひしより、館の人々の我を遇し給ふさま、面色よりいはむも諸氣よりいはむも著く溫和に、著く優渥なるは、この優しき人の感化に因るなるべし。

姫は數々我をして平生の好むところを語らしめ給ひぬ、詩を談せしめ給ひぬ。興に乗じて古人の事を談ずるときは、われは自ら我辯舌の暢達になれるに驚きぬ。姫はもろ手の指を組み合せて、我面を仰ぎ見給ふ。姫。おん身の如く詩をもて業とするは、まことに人生の幸福なるべし。されど神の豫言者たるべき詩人の、



りし日の事を語りて、地下の石箱に入りて路を失ひし話より、ジェンツァノの花祭に老公の馬車の我母を轢殺せし話に至りしときは、姫の驚一方ならざりき。姫は我手を捻りて、我面を打目守り、その事をば館の人々まで一たびも我に告げざりき、さては我族の御身に負ふ所はいと大いなりと宣給ひぬ。カムパニアの姫ドメニカには、姫深き同情を寄せ給ひて、おん身は定めて今もちたらずおとづれ給ふなるべしと宣給ひぬ。われは少しく心に恥ぢながら、去年は唯二たび訪ひしのみなれど、彼方より尋ね來たるごとに、些の小づかひ錢をば分ち與ふるを例とすと答へぬ。

われは姫に促されて、我自傳を語りつゞけ、ベルナルドオの上に及び、又アマンチャタの上に及びぬ。されど我面に注ぎたる姫の涼しき目は、我をして繼に戀愛を説き嫉妬を説くこと能はざらしめき。われは話頭を轉じてナボリの紀行に入り、ララの事を語り、こたびは又サンタの事にさへ及びぬ。

最も姫の心に慨ひしはララなり。姫の宣給ふやう、アマンチャタは美しくもありしなるべく、賢しくもありしなるべし。されど面を公衆の前に曝すことを憚らず、浮薄なる貴公子を戀

ひ慕へるなど、われはいかなる詞もて評すべきを知らぬながら、その人のおん身の妻とならざりしをば喜ぶなり。ララはこれに異にて、まことにおん身の爲めの守護神なるべし。おん身の靈の天上に在らむ時、先づ來りて相見むものはララならずして誰ぞやと宣給ひぬ。

サンタをば姫いたく怖れ給ひて、燃ゆる山、濶き海の景色はいかに美しからむも、かゝる怖ろしき人の住める地に往かむことは、わが願にあらず、おん身の恙なかりしは、聖母の御恵なりと宣給ふ。われは此詞を聞きて、さきに包み藏して告げざりしサンタとの最後の會見の事を憶ひ起しつ。現に我頭を撃ちて我夢を醒まししは、尊き聖母の御影なりき。姫若しわが當時の惑を知らば、猶我に許すに善人をもてすべしや否や。我肉身の弱きことは、よその男子に殊ならざりしなり。姫は又我に迫りて、嘗て即興詩人として劇場に上りし折の事を語らしめ給ひぬ。山深き賊寨にて歌はむは易く、大都の舞臺にて歌はむは難かるべしとは、姫の評なりき。われは行李を探りて、かの拿破里日報を出して姫に見せつ。姫は先づ當時の評語を讀みて、さて知らぬ都會の新聞紙のいかなる事を載せたるかを見ばやとて、あちこち翻し見給ひしが、

忽ち我面を仰ぎ視て、おん身はアマンチャタの同じ時ナボリに在りしをば、まだ我に告げ給はざりきと宣給ふ。われはこの思ひ掛けぬ詞に、アマンチャタの争でかとつぶやきつゝ、彼新聞紙に目を注ぎつ。われは此一枚の紙を手にとりしこと幾度なるを知らねど、いつも評語をのみ讀みつれば、アマンチャタの事を書ける雜報あるには心付かざりしなり。姫の指ざし給ふ雜報には、アマンチャタ明日登場すべしとあり。その明日といへるは即ち我が拿破里を發せし日なり。われは姫と目を見合せて、暫くはものいふこと能はざりき。既にして我は纔に口を開き、さるにても我が再び面をあはせざりしは、せめてもの幸なりきといひぬ。姫。さは宣給へど、今其人に逢ひ給はざいかに。定めて喜ばしと思ひ給ふならむ。われ。否、われは悲しと思ふべし。何を故といふに、わが昔崇仰せしアマンチャタは今亡せたり、昔の理想の影は今消えぬ。わがこれと思ふは泉下の人を思ふ如し。さるを若しそのアマンチャタならぬアマンチャタ又出で、冷なる眼もて我を見ば、瘡なむとする心の卽は復た綻びて、却りてわれに限りき苦痛を感ぜしむるなるべし。いと暑き日の午後、われは共同の廣間にいで

しき景色の我心を動かすことは、嘗てテラチナに來て始て海を眺つる時と殊なることなかりき。この山のたゞずまひ、この風の清く涼しきに、我は復たナボリの夢を喚び起すことを得たり。我は羅馬の塵多き街、焦げたるカムバニアの野、汗流るゝ午景を背にせしを喜びて、人々の我を伴ひ給ひしを謝したり。

小尼公の侍女と共に、驢に騎りてチナリの谷間に遊び給ふときは、我はこれに随ひ行くことを許されたり。姫は頗る自然を愛する情に富みて、我に些の寫生を試みしめ給ひぬ。荒蕪たるカムバニアの野の盡くるところに、聖彼得の塔の涌出したる、橄欖の林、葡萄の圃の緑いろ濃く山腹を覆ひたる、瀑布幾條か漲り墮つる巖の上にチナリの人家の簇りたるなど、皆かつゝ我筆に上りしなり。

終の圖に筆を染むる時、姫の宜給ふやう。かく施より眺むれば、この落ちたぎつ水の勢は、早晩巖石を穿ち碎き、押し流して、その上なる人家も底なき流臺に陥らずやと怖しく思はるゝと宜給ふ。われ。まことに宜給ふ如し。されどそを愛へずして、彼家々に栖る人の笑ひ樂みて日を送れるこそ神の恵ならめ。神は憫むべき人類のために、おそろしき地下のさまを掩ひ

隠し給ふとおぼし。君は此水をすらおそろしと見給へども、ナボリの市の地下のさまはいかなるべきか。此は水なり、彼は火なり。かしこの民は、沸き返る熔巖の釜の上に生涯を送れるなりと答へぬ。我又語を續きて、エズキオの火山の形わが其巔に登りし時の事、エルコラノとボムベイトの來歴など、姫に聞えまつりしに、姫は耳を傾け給ひて、館に還へりての後、猶大深の彼方の珍らしき事どもを語り聞せよと宜給ひぬ。

姫は海のいかなるものなるを想ひ見ることはせずと宜給ふ。それは親しく海と云者を觀給ひしは唯一たびにて、それさへ山の巔より、地平線を限れる一帯の銀色したる物を認め給ひしに過ぎざればなり。われは姫に告げて、まことの海原は我脚底に又一の碧空を視る如しと云ひしに、姫は手を組み合せて、神の此世界を飾り給ひしことの極みなく奇しきをたゞへ給ひぬ。この時我は、その奇しく妙なる世界を背にして、狭き尼寺の庫の内に籠らむとし給ふ御心こそ知られねと云はむと欲せしが、姫の思ひ給はむ程のおぼつかなくて黙しつ。ある日姫と我等とは、荒れたる神尼寺の傍に立ちて雲霧の如く漲り下る二條の大瀑を下瞰したり。一道の白き水煙

は、小暗き林木を穿ちて逆立し、その末は青き空氣の中に散じ、日光はこれに觸れて彩虹を現じ出せり。側なる小瀑の上なる岩窟には、一群の鶴ありて巢を營みたり。その時ありて大なる園を書きて、我等の脚下を飛ぶや、噴水と共に亂れて、見る目まばゆき程なり。姫は歎賞すること久しうして、我に即興を求め給へり。われは平生夢寐の間に往來する所の情の、終に散じ終に銷すること此飛泉と同じきを想ひて、忽ち歌ひ起していはく。人生の急端は須臾も留まることなし。太陽同じく照すといへど、一滴一沫よりして見れば、その光を吐きその温を彼らざるあり。惟と美妙の天光明は全景を覆ひ盡すのみと云ひぬ。姫は我歌を廻り留めて、止めよ、われは悲傷の詞を聞かむことを願はず、汝が心まことに樂しからずば、如く我が爲めに歌ふことを休めよと宜給ひぬ。姫の我を信じ給ふことの厚きは、我が姫を信ずることの厚きに殊ならず。ある時姫の詞に、いかなる故とも知る由なけれど、館に往來する他の男子には語り難き事をも、おん身には語り易し、御身の親しきは父母に劣らざる心地すといはれしことあり。されば我もまた心を置かで、何くれとなく物語するやうになりぬ。幼か

われ若しおん身の憂はしき面を見て別れ去らば、尼寺に入りて後に屢々御身の上を氣づかならむ、かくてはおん身に罪障を増させ給ふなりと宣給ふ。その聲は我が爲めに、瀕死の人の氣息を聞くが如くなりき。

出立ち給ふ前の日の夕となりぬ。姫は神色常の如く、父君と老公とに接吻して、あすの別の事を語り給ふ。其詞つきの、唯々假初の旅路杯に出立ち給ふにかはらぬぞ、なかくに哀なりける。アントニオに暇乞せずといふは、

フアビアニ公子の聲なり。座上にて、獨り此君のみは面に憂の色を帯び給へり。我は趨りて姫の前に出で、白く細き右手に接吻せり。姫はアントニオと我名を呼び掛け給ひしが、流石にしばし口籠りて、世に幸ある人となり給へ、さらばとて、我額に接吻し給ふ。われは夢心に其間を走り出で、我室に泣きに入りぬ。

終にその目とはなりぬ。空は晴れ渡りて、日は麗かに照りぬ。我は父君母君の盛妝せる姫を贅卓の前に導き行き給ふを見、歌頌の聲を聞き、けふの式を拜まむとて来り集へる衆人の我四邊を圍めるを覺えき。されど僧徒の群に引かれてつくゑの前に跪き給へる、天使の如き姫君の、色白く優しげなる面のみは、我心の上

に殊に明かなる印象を與へて、年經ての後も消ゆることなかりき。我は僧等の姫が頭上の紗を剥きて、雲の如き髣髴の亂れ墜ちて兩の肩を掩へるを見、これを斷つ剪刀の響を聞きつ。僧等は淺裏の美しき衣を脱がせて、姫を板の上に臥させまつり、下に白き布を覆ひ、上に又髣髴の文様ある黒き布を重ねたり。忽ち鐘の音聞えて、僧等の口は一齊に轉歌を唱へ出しつ。かくて姫は此世を隠れましとなり。爾時尼院に連れる廊下の前なる黒漆の格子擧りて、式の白衣を着たる一群の尼達現れ、高く天使の歌を歌ふ。僧官は姫の手を取りて扶け起しつ。姫は早や天に許嫁し給ひて、御名さへエリザベッタと改まりぬ。我は姫の群衆の上に投じ給ふ最後の一瞥を望み見たり。一人の故夢の尼は姫の手を引きて入りぬ。黒漆の格子は下りて、姫の姿、姫の裳裾は見えなくなりぬ。

### なきあと

ボルゲエベ家の館は賀客絡繹たり。エリザベッタの天に許嫁せしを賀するなり。フランチェスカ夫人は面に微笑を浮べて客に接し給へど、その良心のまことに平なるにあらざるをば、われ猶能くこれを知れり。

フアビアニ公子は我を招きて一包の金を賜ひぬ。汝は好き方人を失ひぬれば、氣色すぐれず見ゆるも理なきにあらざる。姫は我に此金を残しおきて、カムパニアの媼に與へむことを頼み聞えぬ。想ふに姫はドメニカの上を汝に聞きて知りたりしなるむ。持ち往きて與へよとなり。

死は蛇の如く我心を纏へり。我は自殺の念の一種の旨味あるを覺えて、心に又此念の生じ來れるを怖れたり。御館の廣き間ごとくに、我はうらさびしき空虚を感じせり。我はこゝを出で、カムパニアの野に往かむことの樂しかるべきをおもひぬ。そは我搖籃のありつる處、ドメニカが子もり歌の響きし處の、今更に懐しき心地したればなり。

カムパニアの廣き野は、この頃の暑さに焦げ爛れて、些の生氣をだに留めざりき。黄なるテエルの流の、層々の波を滾し去るは、そをして海に没せしめむが爲めなるべし。われは又萬籟の壁にまとい屋根にまとい、小さな石屋を見たり。是れ實にわが少時の天地なりしなり。門の戸は開けり。われは姫の我を見て喜ぶべきを思ひて、胸に樂しく久哀なる一種の感を起しつ。先に此家をおとづれてより、早や一と



しに、緑なる萼草の纏ひ付きたる窓檻の下に、  
姫の假寐し給へるに會ひぬ。纖手もて頬を支へ  
て眠りたるさま、只と戯に目を閉ぢたるやう  
に見えたり。胸の波打つは夢見るにやあらむ。  
忽ち微笑の影浮びて、姫の眼は醒めぬ。アント  
ニオそこにありや。われは料らずも眠りて、料  
らずも夢見たり。おん身はわが夢に見えしは何  
人の上なりとかおもふ。われ。ララにはあらず  
や。この答はわが姫の目を閉ぢたるを見し時、  
心に浮びし人を指して言へるのみなりしに、期  
せずして申りしなり。姫。さなり。われはララ  
と共に飛行して、大海の上を渡りゆきぬ。海  
の中には一の島ありき。その山の巔はいと高  
きに、われ等は猶おん身の物思はしげなる面持  
して石に踞して坐し給ふを見ることを得つ。ラ  
ラは翼を振ひて上らむとす。われはこれに従は  
むとして、羽揺るごと後に後れ、その距離千尋  
なるべく覺ゆるとき、忽ち又ララとおん身との  
我側にあるを見き。われ。そは死の境界なるべ  
し。生きて千里を隔つるものも、死しては必ず  
相逢ふ。死は惠深きものにて、我に我が愛する  
ところのものを與ふ。姫。われは遠からず尼寺  
に歸らむとす。これより後の我生涯は、おん身  
の爲めには死せると同じ。おん身は能く我を忘

れずして、死後相見むことを期し給はむや。姫  
の此詞はいたく我心を動して、我をして軌ち  
答ふること能はざらしめき。  
ある日フランチェスカ夫人は姫を伴ひてキ  
ラ、デステの園の中をぞろありきし給へり。  
我も亦許されてその後に従ひぬ。園は高き緑  
杉あるをもて世に聞えたるどころなり。一行の  
人工の噴泉ある長き曲樹の間を歩むとき、路上  
に樞機を纏ひたる貧人の群の草を抜くありき。  
われそが一人に「パオロ」銀一箇、我二十錢餘を  
與へしに、姫もまた微笑みつゝ一箇を與へ給ひ  
ぬ。草抜く人は「美しき姫君と姫君とに聖母の  
御恵あれかしと呼びたり。フランチェスカ夫人  
はこれを聞きて高く笑へり。われは熱血の身を  
焦すを覺えて、姫の面を覗ふことを敢てせざり  
き。われは今明に姫の我が爲めに離れ難き人  
となりしを覺りぬ。されど此情は嘗てアモンチ  
ヤタの爲に發せしと迥に殊にて、又ララに對し  
て生ぜしとも同じからず。アモンチヤタの才と  
色とは殆ど我をして狂せしめ、ララの理想め  
きたる美は魔力を吾頭上加へ、茲に皆我を  
してその人を我物にせむ願を起さしめしなり。  
獨り小尼公に至りては、我友情を催すこと極  
て深きに、われは却りて又我慾念のこれが爲め

に抑へらるゝを覺えき。  
幾もあらぬに我等は又輕馬に歸りぬ。姫は  
二三週の後には尼寺に返り給ふべく、返り給ひ  
ては直ちに覆面の式を行はせらるべしと傳ふ。  
姫の長き髪はこれを截り、その身には生きなが  
ら囚衣を被らしめ、靜歌を歌ひ鐘音を鳴し、  
法の如く假に葬りて、さて大に許婚せる人とな  
りて再生せしむ。是れ式のあらましなり。姫は  
面に喜の色を湛へてこれを語りぬ。われは聞  
くに忍びずして、いかなれば君は自ら瘞穴を穿  
ちて自ら下り入らむとはし給ふぞといひぬ。姫  
は色を正して、さる詞を人にな聞せそ、此塵の  
世に心牽かるゝことおん身の如くならむも拙  
し、少しは後の世の事をと思へかしと宣給ふ。  
その聲きへ常たらぬに我はいたく驚きぬ。  
霎時ありて、姫は詞の過ぎたるを悔み給ひしに  
や、面に紅を潮して我手を取り、アントニオ  
とても我心の平和を破り、我に要なき物思せ  
させむとはあらざるべしと宣給ふ。我は詞な  
くて姫の金蓮の下に臥し轉びつ。  
別の舞踏會は御館にて催されぬ。われは姫  
の最後に色ある衣を着給ふを見き。是れ人々  
の生贅の点を飾れるなり。姫は我傍に歩み  
寄りて、おん身も人々の歡を分か給はずや、

に立ち、格子窓を仰ぎ視たり。我は自らことわりて、誰かわが此墳墓を展るを難ずることを得むと云ひぬ。これよりして、我足は日として四井街に向はざることなく、偶々識る人に逢ふことあれば、散歩のゆくてはサルラ、アルパニなりと欺きつ。

我足の尼寺の築泥の外に通ふこと愈々繁く、我情の迫ること愈々切に、われはこの通路の行末いかなるべきかを危まざることはざるに至りぬ。果せる哉、ある暗き夕我が尼寺の一窓の微に燈光を洩せるを仰ぎ見て、心に小尼公をおもふ時、忽ち傍よりアントニオと呼ぶものあるを聞きつ。アントニオ、おん身はこゝに何をか爲せる。我は頭を回して公子の面を認め得たり。公子は直ちに我を促して共に歸りぬ。公子は途上復たわれと一語を交へざるに、われは心に公子の思はむ程の恥かしくて、その面を見ることを敢てせざりき。我室に入りて相對せし時、公子容を改めて宜給ふやう。アントニオよ。御身の病はまだ痊えずと學し。少しく世の人に立ち交りて、氣鬱を散ぜむかた、身の爲めに宜しからむ。曩にはおん身一たび翼を張りて飛ばむとせしを、われ強ひて抑留し、おん身をして久しく樊籠の中にあらしめき。そは我過

にはあらざりしか。人各々意志あり。行かむと欲するところに行き、住まらむと欲するところに住まりて、さて不幸に遭はば、それは自ら作せなれば、悔ゆることもあらざるべし。おん身は最早童にあらば、人の監督を受けることをば喜ばざるべし。この頃醫師に謀りしに、これも轉地を勧めたり。拿破里の方をば既に見つれば、こたびは北伊太利を見に往けかし。一とせの間の費をば、われいかにともすべし。此館にありし間の我等の待遇には、おん身は或は嫌ざりしならむ。されど又世間に出で、は、誠の心もおん身待つ人少きことを忘れ給ふな。われ等は未來一年の間のおん身の振舞を見て、過去に我等の待遇のおん身に利ありしか利あらざりしかを驗すべしといはれぬ。

公子は我答を待たずして室を出で給ひぬ。こは我に謀るにあらずして我に命ずるものなればなり、我に命ずるは我を逐ふものなればなり。世途は艱難ならむ。されどその我を毒すること今の生涯に孰與ぞ。今や公子はわれに自由を與へ給ふ。こは仙方なり、靈藥なり。われは只その仙方靈藥の與るの如く我御病を癒し、我に苦痛を與ふるを感ずるのみ。去らむかな、羅馬を去らむかな。いでや、記念の花の匂へる南國

を出で、アペンニノの山を踰え、雪深き北地に入らむ。アルピイおろしの寒威は、恰も好し、我が沸きかへる血を鎮むるならむ。いでや、沼島のエネチアに住かむ、わたつみの配てふエネチアに往かむ。神よ、我をして復た羅馬に歸らしむること勿れ、我記念の墳墓を訪はしむること勿れ。さらば羅馬、さらば故郷。

### 鼻 首

車は物寂びたるカムパニアの野を走りぬ。サン、ピエトロの寺塔は丘陵のあなたに隠れぬ。既にして我はモンテ、ソラクテの側を過ぎ、山を踰えて、ネビの市に入りぬ。明月は市の奥き巷を照せり。一僧の清淨の前に立ちて説法するあり。群衆は活聖マリアの聲に和しんむに隨ひて去れり。われはこれを避けて歩を轉ぜり。蔓蘿に包まれたる水道のほとりこれを圍める橄欖の茂林とは、懸瀉たる一幅の圖となして、わが刻下の情に慟へり。われは又前に過ぎたる門を出でたり。門外に人廢あり。その城壘たりしと寺觀たりしとを知らず。今の街道はその廣間を貫きて通ぜり。側なる細徑を下れば、小房の蜂窠の如きありて、當奈塵と石生長とは其壁を掩ひ盡せり。進みて一の廣間に入るに、

せを經ぬ。先に羅馬にて彼娘を見しより、早や八月を經ぬ。此間われは娘を忘れたりしならず、起臥ごとに思ひ出で、小尼公にも語り聞せつ。されどチナリの避暑、御館にかへりて後の心の憂などは、我を妨げてカムバニアに來させざりしなり。家の見え初めてより、われは娘の歡び迎ふる詞を想像しつゝ、歩を早めたりしが、家の門近くなりては、又覺音の疾く聞えむことを恐れて、ぬきあしゝつゝ進み寄りぬ。門口より見るに、土間の中央に籐を折り加べて火を燃やし、大なる鐵の鉢を吊りたり。その下に火を吹く童ありて、こなたへ振り向くを見ればピエトロなり。昔はわれ此童の搖籃を護りしことありしに、此頃はいと逆しきものにぞなりぬ。聖ジュゼツベ、旦那の來ましつるよ、さきに來ましゝより早や久しくなり候ふとして、立ち上りて迎へぬ。わがさし伸ばす手に、童の接吻せむとするを遮りつゝ、われ、無面目も忘れしよとおもへるならむ。忘れたるにはあらずとことわりつ。童、否、母もさは思ひ候はざりき、生存へたらばいかに嬉しとおもふらむものを。われ、何とか言ふ。ドメニカは最早世にあらずとか。童、地の下に埋めてより、既に半年になりぬ。病みしは僅に二日ばかりなり

しが、その間アントニオ、アントニオとのみ呼ぶが続け候ひぬ。わがかく旦那の御名をいふを無禮しとおもひ給ふな。母は唯一日アントニオを見て死なむといひき。今宵はおもはれし日の午過ぎて、われは羅馬の御館に參りに、旦那はチナリに往き給ひし後なりき。歸りて見れば、母は息絶えたり。言ひ畢りて、ピエトロは手もて面を掩ひぬ。

ピエトロが物語は、句ごとに言ごとに、我を胸を刺す如くなりき。恩情母に等しきドメニカが、死に垂むとして我名を呼びしとき、我は避暑の遊をなして、心のどかに日を暮しつ。娘の餘命いくばくもあらぬをば、われ争で知らざらむ。何故に我はチナリに往くに先だちて、一たび娘の計には來ざりしぞ。我はかくても猶自ら辯護して、我は善き人ぞといはむとするか。

われは彼金包を取りいで、我身邊に帶び來りし錢をも添へて、悉く童に與へつ、童は土間に跪きて、我を天使と呼べり。我が爲めには此詞の嘲諷の意あるが如く聞えて、我は此家の内にあるに堪へず、一つの憂をもて來し身の、今は二つの憂を懷きて、逃ぐるが如く馳せ去りぬ。

## 未 練

カムバニアの野より御館までは、いかにして歸り着きけむ知らず。われは限なき苦惱を覺えて、我臥床の上に偃れ臥しゝに、忽ち高熱を發して人事を知らざること三晝夜なりき。看病にはフエネルラとて、婢ひたる女を附けられしかば、幸に我譚語も人に怪まるゝことあらざりしならむ。されどフアビニア公子の屢々病床に來給ひぬといふは、猶胸苦しき心地ぞする。

我恢復は頗る遅かりき。館の人に見舞はるるごとに、我は勉めて面を和げ、快げにもてなせども、胸の中心苦しきは嘗へむに物無かりき。此間人々は一たびも小尼公の名を我前に唱ふることなかりき。かくて小尼公の尼寺に入り給ひしより、六週の後となりし時、醫師は始めて我に戶外を逍遙することを許しつ。

我は期する所あるに非ずして、ホルタ、ピアの傍に立ち、目を四井街の方に注ぎつ。されど我は猶心に懨りて、尼寺の門に到ることを果さざりき。二三日の後、我は新月の光を遙ひて、又同じところに來しに、こたびは自ら禁ずること能はずして、進みて灰色の寺壁の下に



たる如し。この細大二流は、わが立てる巖の前に至りて合し、幅濶き急流となり、乳色の渦巻を生じて底なき深谷に漲り落つ。雷の如き響は我胸を鼓盪して、我失望我苦心と相應じ、我をして前に小尼公の爲めにチアリの瀧の前に立ちて、即興の詩を吟ぜし時の情を憶ひ起さしむ。げにや、碎け、消え、死するは自然の運命なること、獨り此瀑布のみにあらず。

導者はわれを導みていふやう。昨年英吉利人とひとり山賊に撃ち殺されしは、此巖の上にての事なりき。賊はサビノの山のものなりといへど、羅馬とテルニイとの間に出没して、人その踪跡を審にすること能はず。警吏は直ちに來りて、そが夥伴なる三人を捕へき。われはその車上に縛せられて市に入るを見たり。市の門にはフルキアの老女立ち居たり。老女は天の下の奇しき事どもを多く知れるものにて、世には法皇の府の僧官達も及ばざること遠しとぞいふ。その時老女の車上の賊に向ひて語りしは、何事にかありけむ、例の怪しき詞なれば、傍聴せしものは辨へ知らむ由なかりき。さるを後には老女を彼賊の同類なりとし、ことし數人の賊と共に彼老女をさへ勿ねて、ネビの石垣の上に梟けたりと語りぬ。

## 妄想

自然と云ひ人事と云ひ、一として我心の愛を長ずる媒とならざるものなし。暗黒なる橄欖の林はいよく濃き陰翳を我心の上に加へ、四邊の山々は來りて我頭を壓せむとす。われは飛ぶが如くに、甲といふ里を走り過ぎて、早く海に到らむことを願へり。風吹く海に、下なる天の我を載すること上なる天の我を覆ふが如くなる處に。

我胸は愛を求むるが爲めに燃ゆ。是より先き此火は既に二たび點ぜられしなり。昔のアモンチヤタは我が仰ぎ瞻しところ、我が新に醒めたる心の力もて攀ぢむと欲せしところなるに、憾むらくは我を棄てて人に往けり。今のフラミニアは我を眩せしめず、我を狂せしめずして、漸く我心と膠着すること、寶石のまばゆからざる光の、久しきを經て貴きことを覺えしむるが如くなりき。フラミニアは我手を握ること、妹の兄の手を握る如く、我にこれを接吻することとを許すこと、妹の兄に計す如く、又我を説き慰め、我が爲めに祈りて世の穢を受けざらしめむとして、その度ごとに知らず識らず鐵を我心に没せしめたり。我はこれを愛すること計慮の

婦を愛するが如くならず。されどその人の婦とならむをば、われまた冷に傍より看ること能はざりしならむ。今やフラミニアは死せり、現世の爲めには亡人の數に入りたり。世にはこれを抱き、その唇に觸るゝことを得るものなし。是れ我が賣てもの恩澤也。

海に往かむ、往いて海の驚くべき景を觀む。是れ我が新なる境界なり。エネチアよ、水に泛べる都城よ、ハドリアの海の女王よ、願はくは我をして重れる山と黒き林とを過ぐることを須めず、空に翔り波を凌ぎて汝と會することを得しめよとは、我が當時の夢なりき。

初め我は先づフイレンチュに往き、かしこよりボロニア、フェルラを經て、エネチアに達せむと欲せしに、今は忽ち前の計畫を擲ち、スポレットオより雇車を下り、暗夜身を郵便車に託して、アベンニノの嶺を踰え、ロレットオの地をさへ、尊き御寺を拜まずして馳せ過ぎつ。

山道を登りて巔に至りし時、我は早く地平線上一帯の銀色を認めたり。是はハドリア海なり。脚下に大波の層疊せるを見るは、群衆の起伏せるなり。既にしづ波の上に、橋竿の林立せるを辨す。種々なる旗章は其尖に翻

地に委ねたる石柱の頭と瓦石の堆とは高草の底に没し、こゝかしこに色筋子の斷片を留めたる尖瓶式の窓をば幅廣き葡萄の若葉物珍らしげにさし覗き、數丈の高きなる増壁の上には荆棘叢り生ぜり。偶も月光の一の壁面を照すを見れば、半ば剝蝕せられたる鮮畫は、前に貫かれたる聖セバスチアノの像を物せり。此廣間は絶えず遠雷の如き響ありて、四壁に反響す。われその響を追ひて狭き戸を潛り出でしに、道は「ミユルツス」と葡萄との鬱茂せる間に窮まりて、脚底干仞の斷崖を形づくれり。一の瀑布ありてこれに懸る。月光其泡沫を射て、銀丸を擲つ如し。凡そ此等の景は、なべて世の好奇心あるものを動かすに足るものなるべし。されど當時の私の憂鬱に沈め、或は等閑に看過しつらむも知るべからず。幸に我は此境に在りて、別に一事に遭ひたり。我は其事を我心上に血畫して復た消滅すべからざらしめし故に、亦併せて此景の詳なることを記し得たり。

岸に沿ひて一條の細徑あり。迂廻して初の街道に通ず。われは高崖を分け小草を踏み行きしに、月は高き石垣の上を照して、三人の色蒼ざめたる首の、鐵格の背後より、我を覗ふ見たり。こは山賊を梟せるなりき。ネビの人の

此壁の上に梟首するは、羅馬の人のアンジエロ（ポルタ、デル、アンジエロ）の上に梟首するに殊ならず。首を鐵籠中に置くことは同じ。常の我ならば、遠く望みて走り去るべきに、此頃の痛苦は我に哲學思想を興へ、我をして冷眼もてこれを視ることを敢てせしめき。嗚呼、王侯の前に屈せざりし首よ、人を殺し火を放つ計を出し、首よ、深山の荒蕪に似たる男等の首よ、今は屍に身を籠中に託すること、人に馴れたる小鳥の如し。近づくこと一步にして見れば、刎ねられてよりまだ日を經ざるものと覺しく、兎眉猶生けるがごとし。既にして我は中央なる首級の少しく異なるものあるを認め得たり。こは分明に老女の首なりしなり。我はこの褐いろの鬚半ば開ける眼、格子の外に洩れ出で、風に亂るゝ銀髪を凝視して、我脈膊の忽ち充進するを覺えき。われは眼を壁に懸けたる石版に注げり。版には土地の習にて、梟せられたるものゝ氏名と其罪科とを彫りたり。果せるかな、中央に老女フルキア、フラスカチの産と記せり。われはいたく感動して、覺えず歩み退くこと二三歩なりき。嗚呼、嘗て一たび我性命を救ひ、我に拿破里に至る盤纏を給せしフルキアは、今此梟木の上より我と相見るなり。この藍色なる

唇は、嘗て我額に觸れしことあり。この物言はざる口は、嘗て我に未來の運命を語りしことあり。汝は我福祿を預言したり。汝の猛き驚は日邊に到らずして其翼を折けり、世のまがつみと戦ひてネミの湖に沈みたり。われは涙を濯いでフルキアの名を呼び、盤散として閭門の外なる街道に歩み旋りぬ。

翌朝トビを獲してテルニイに携りぬ。こは伊太利疆内にて最も美しく最も大なる瀑布ある處なり。われは案内者と共に、購して市を出で、暗く茂れる橄欖の林に入りぬ。濕ひたる雲は山巔に棚引けり。我は羅馬以北の景をみて、その概れ皆陰鬱なるに驚きぬ。大澤の畔の如くならず、テルラチナなる橄欖の林の樹欄を交へたるが如くならず。されど我は猶此感の我中情より出でたるにあらざるかを疑へり。

道は一苑を過ぎて、嚴壁と激流との間なる街地に入りぬ。その木は皆鬱蒼たる橄欖なり。これを行く間、われは早く水沫の雲の如く平空に騰上して、彩虹の其中に現せるを見き。蝦夷石南と「フルツス」一の路を來げるを、押し分けつゝ攀ぢ登りて見れば、大瀑は山の絶頂より起り、削れる如き嚴壁に沿ひて倒下す。側に一支流ありて、迂曲して落つ。其狀銀色の帯を展べ

ち聲を放ちて我少年の歌に和したり。  
嗚呼、是れ皆熱の爲めに發せし謔語のみ、苦痛の餘なる躁狂のみ。我に心の光明を授け給ひし神よ、我運命の柄を握り給ふ神よ。我は御身の我罪を問ひ給ふことの刻薄ならざるべきを知る。人の心中には舌頭に上すべからざる發作あり、争鬭あり。是れ吾人の清廉なる守護神の膝を惡魔の前に屈する時なり。世の能く欲して能く遂ぐる人々は、我がいたづらに欲せしところに就いて、自在に評論せよ。されど汝等は裁決せされ。さらば汝等は裁決せられざるならむ。汝等は呪詛せされ。さらば汝等は呪詛せられざるべし。我は實に此の如く思議せり。此の如く思議して、復た舊の詞を出すこと能はずして夥たり。舟は穩に我夢を載せて、北のかたエネチアに向へり。

## 水の都

曉に起きて望めば、前面早く家々の壁と寺塔とを辨ずることを得たり。そのさま譬へば帆を揚げたる無數の舟の横に列れるが如し。左のかたにはロムバルディアの岸の平遠なる景を畫けるあり。遙に地平線に接してはアルピイの山脈の蒼靄に似たるあり。われはこれを望みて、

彼蒼の廣大なるを感ぜり。天球の半は一時に影を我心鏡に映ずることを得たるなり。

爽涼なる朝風は我感情を冷却せり。我は心裡にエネチアの歴史を繰り返して、その古の宮、古の繁華、古の獨立、古の權勢乃至大海に配すといふ古の大統領の事を思ひぬ。

(エネチア共和國に「ドオジェ」を置きしは、第八世紀より千七百九十七年に至る。)既にして舟は漸く進み、鹹澤(ラグワナ)の上なる個々の人家を見るに、その壁は黄を帯びたる灰色を呈し、古代の様式にもあらず、又近時の設計にもあらねば、要するに好觀にあらざりき。名に聞えたるマルクススの塔は思ひしよりも高からず。舟は陸と鹹澤との間を進めり。後なるものは曲りたる堤の如く、海中に斗出した。土地は全體極めて卑しとおぼしく、岸の水より高きこと僅に數寸なるが如し。偶と數戸の小屋の群を成せるあれば、指さして市と云ふ。こゝかしこには一叢の木立あり。其他は渾て是れ平地なりき。

われはエネチアの既に甚だ近きを覺えしに、今傍人に問へば猶一里ありと答ふ。而して此一里の間は、皆漸留せる沼澤の水のみ。處々には泥土の島嶼の狀をなして頭を露せるあり。その上には一鳥の足を留むるなく、一莖の草の萌え

出づるなし。沼澤の中に、深き渠を穿ちて、柁を立て泥を支ふるあり。是れ舟を行る道なり。われは始めて「ゴンドラ」といふ舟を見き。皆黒塗にして、その形狭く長く、波を微りて走ること張を離れし箭に似たり。通りて視れば、中央なる船房にも黒き布を覆へり。水の上なる板とやいふべき。拿破里の水は岸に近づくても猶藍いろなるに、こゝは漸く變じて汚れたる緑となれり。偶と一鳥の傍を過ぐるに、その家々は或は直ちに水面より起れる如く、或は廢れたる舟の上に立てる如し。最も高き石壁の頂に、幼き耶穌を抱ける聖母の御像ありて、この荒涼なる天地を眺め居給ふ。水の淺きところは、別に一種の鵝綠色をなし、一面深き淵に接し、一面は黒き泥土の島に接す。日は明くエネチアの市を照して、寺々の鐘は皆鳴り響けり。されど街衢は閑として人影なきに似たり。船渠を覗へば、只一舟の横れるありて、こゝにも人を見ざりき。

我は舟を彼水上の柁に託して、水の衝に入りぬ。樓屋軒をならべて石階の梯は直ちに水面に達し、復た犬ばしり程の土をだに着けず。家家の宮門は水に架して橋梁の如く、中庭は大なる井の如し。この中庭には舟に帆掛けて入る



れり。光景は略々拿破里に似たれど、エズキオの山の黒嶺を吐けるなく、又カブリの島の港口に横れるなし。此夜の夢に、我はフルキアのおうなとフラミニアの君とに逢ひしに、二人皆面に笑を湛へて、君が福祉の棕櫚は緑ならむとすと告げたり。

眠醒めしとき、日は旅店の窓よりさし入りたり。房の来りていふやう、客人よ、エネチアに渡る舟は今帆を揚げむとす、猶留りてこのわたりの景色を觀むとやし給ふといふ。否、舟あるこそ幸なれ。さらば直ちにエネチアに往かむと答へつ。我心は何故とも知る由なけれど、唯と推され轉かるゝ如くなりき。われは埠頭におり立ちて、行李を搬び來らしめ、目を放ちて海原を望み見た。さらば、我故郷、われは足の此上を離れむとするに臨みて、いよく、なる世界の我が爲めに開くべきを感じ。北伊太利國の自然の全く相殊なるべきは始より疑ふべからず。就中エネチアは盛飾せる海の配偶にして、他の伊太利諸市と全く其趣を異にすべきこと明なり。我が乗るところの此舟は、即ちエネチアの舟にして、翼ある獅子の旗は早く我が舟上に翻れり。帆は風に震きて舟は忽ち成海に駛り出で、我は艀板の上に坐し

て、巖岩なる波の起伏を眺め居たるに、傍に一少年の蹲れるありて、エネチアの俚語を歌ふ。其歌は人生の短きと戀愛の幸あるを言へり、こゝに大概を意譯せむか。其辭はいはく、

朱の唇に觸れよ、誰か汝の明日猶在るを知らむ。戀せよ、汝の心の猶少く、汝の血の猶然き間に。白髪は死の花にして、その咲くや心の火は消え、血は米とならむとす。來れ、彼輕舸の中に。二人はその蓋の下に隠れて、窓を寒き戸を閉ぢ、人の來り覗ふことを許さざらむ。少女よ、人は二人の戀の幸を祝はざるべし。二人は波の上に漂ひ、波は相推し相就き、二人も亦相推し相就くこと其波の如くなり。戀せよ、汝の心の猶少く、汝の血の猶然き間に。汝の幸を知るものは、唯と不言の夜あるのみ、唯と起伏の波あるのみ。老に至らむとす、氷と雪ともて汝の心汝の血を殺さむ爲めに。少年は一節を呟ふごとに、其友の群を顧みて、互に相領けり。友の群は劇場の舞群の如くこれに和せり。まことに此歌は其辭卓犖にして其意放縱なり。さるを我はこれを聞きて轉歌を聞く思ひをなせり。老に至らむとす。少壯の火は消えなむとす。我は尊き愛の香油を地上に瀉して、これを焚いて光を放ち熱を發せしむるに及

ばざりき。こゝに濫用して人に觸せしならねど、遂に徒費して天に背きしことを免れず。そも我は誓約の良心を縛するあるにあらず、責任の云爲を妨ぐるあるにあらずして、何故に我前に湧ける愛の泉を汲まざりしぞ。かく思ひ續ければ、一種の言ふべからざる情は我胸に溢れた。これに名づけて自ら懣ざる情ともいふべきか。こゝは我徳火の勢を得て、我智慧を煥くにやあらむ。

我がサンタを畏れて走り避けしは何故ぞ。聖母の像の壁上より落ちぬればなり。否々、鋪びたる釘はいづれの時か折れざらむ。まことに我をして走り避けしめしものは、我脈絡中なる山羊の乳のみ、「ジェズキタ」派學校の教育のみ。われはサンタの體色を憶ひ起して、心目にその燃ゆる如き目なざしを見心扉にその湧せる如き聲音を聞き、我と我を嘶り我と我を卑めり。何故に我に世上の男子の如く、ベルナルドオの如くなることを得ざる。愛を求むるは我心にあらずや。我心は神の授け給ひし光明にあらずや。さらば愛を求むるは神にあらずや。此時我は此の如くに思議せり。此の如くに思議して、エネチアの繁華をおもひ、その女ありて雲の如くなるをおもひ、我血の猶然せるをおもひ、忽

舟はもとの旅館の階下に留まりぬ。われは又蹣跚として階を上り、おぼつかなき孤客の夢を結びぬ。

## 風 風

羅馬より齎したる紹介状は、我をして相識を得しめ、我をして所謂朋友あらしめたり。人々は我を「アパテ」と喚べり。我言の善きをば人皆褒め、我才をば人皆稱せり。羅馬なる恩人は常に我不快なる事を告げ、中にはことさらに我に不快からざるべき事どもを探り覓めて、そを我に告ぐる如くなりしに、今はさる詞を耳にすることなし。羅馬にては常に長上にのみ交ることとて、フラミニアの姫の情あるすら、我をして抑壓の苦を忘れしむること能はざりしに、今は心にさる負荷を覺ゆることなし。苦言を聞かざるは、信ある友なきなりといへば、こゝには信ある友は絶て無きなるべし。

われは大統領の館の輪奐の美を討ねて、その華麗を極めたる空しき殿堂を經廻り、おそろしき活地獄の圖ある鞠間所を觀き。われは彼四面皆塞りたる橋の、小舟通ふ溝渠の上に架せられたるを渡りぬ。是れ館より牢獄に往く道にして、名づけて歎息橋と曰ふとぞ。橋に接する處

は即ち牢井なり。廊に點じたる燈火は僅かに狭き鐵格を穿ちて、最上層の獄を照し出せり。此層の如きは、これを下層に比するときは、猶晴やかなる房と稱すべきならむ。濕ひて菌を生じたる床は、週に溝渠の水函の下にあり。あれ、此房の壁は幾何の人の歎息と叫喚とを聞きつる。われは愕然として肌膚の粟を生ずるを覺え、急に舟を呼んで薄赤なる古宮殿の獅子を刻める石柱の前を過ぎ、鹹澤の方に向ひぬ。舟の指すところは即ち所謂岸區なりき。

われは岸區に近づくとき、何物をか見し。こには一の大いなる墓田ありき。外國人と新教徒とはこの水と水とに掩まれたる一帯の土の、殆ど時々刻々洗ひ去らるゝ狀をなせる處に埋めらるゝなり。白き人骨は沙の表に露れて、これが爲めに哭するものは、只く浪の言あるのみ。

漁父の危きを冒して沖に出でたるとき、その妻そのいひなづけの妻などの、坐して夫の舟の歸るを待つは、此岸區なりといふ。颶風の勢少しく挫けたるとき、こゝに坐したる女子の、彼恢復せられたるエルザレム中の歌を歌ひ、耳を傾けて夫の聲のこれに應ずるや否やを覗ひしこと幾度ぞ。さるをその懐かしき夫の聲の終

に應ずることなく、可憐の女子の獨り不説の海に對して口は復た歌ふこと能はず、日は空しく沙上の鵜鵝を見、耳は徒らに岸打浪の音を聞きて、暮色の漸く死せる古都を掩ふを覺えしこと又幾度ぞ。

この時濤たる畫圖は我心目に上りて消えず、我情調はこれに一層の悲慘の色を添へむとせり。わが對するところの自然は、無常と塵埃との觀を惹き起すこと、一の寺院の如くなりき。

フラミニアの姫の詞は、此時端なく憶ひ出されぬ。詩人は神の豫言者にあらずや。何故に詩人は神の徳を頌せむことを勉めざる。嗚呼、我は忽ち此詞の眞理なることを感得せり。不滅なる詩人の心は不滅なる神をこそ詩料とすべきなれ。日前の榮華に泡沫の五彩の色を現ずるに異ならずして、その生ずる時はやがてその滅する時なり。われは忽ち興到り氣衝ふを覺えしに、忽ち又興散じて氣衰ふるを覺え、悄然として舟に上り、大海に臨める岸區に着きぬ。

海はやゝ浪立てり。われは行立してアマalfライの灣を憶ひ起しつゝ、日を轉じて身邊を顧みれば、波のもとに來し蘆草と小白との間に坐して、草畫を作れる男あり。われは其姿に些の見おほえあるをもて、徐にこれに近づくほどに

べけれど、船艫を旋さむことは難かるべし。海水は其の緑なる若皮をして、高く石壁に攀ぢ登らしめ、凝々たる大理石の宮殿も、これが爲めに水中に沈まむと欲する状をなし、人をして危殆の念を生ぜしむ。況や金蒲半ば剥けたる大窓の剝らざる板もて固まれたるありて、大魔の一部まことに朽敗になんむとしたるをや。既にして梵鐘は聲を敛めて、楫の水を撃つ音より外、何の響をも聞かずなりぬ。われは猶未だ人影を見ずして、只々美しきエネチアの間の戸の如く波の上に浮べるを見るのみ。

舟は轉じて他の水路に入りぬ。その幅頗る狭くして石橋あまたかゝれり。こゝには人ありて、或は橋を渡りて家の間に隠れ、或は石壁の門を出入す。されど街と名づくべきものは、水路の外有ることなし。舟人の楫を留めたるとき、われは何處に往くべきぞと問ひぬ。舟人は家と家との間を通ずる、橋の側なる隣き巷を指さし教へつ。兩邊の家に住める人は、おの／＼六層樓上の窓を開いて、互に手を握ることを得べく、この日光を受けざる巷は、僅に三人の並び行くことをゆるすなるべし。我舟は既に去りて、身邊また寂として人を見ず。

あはれエネチアとは是か、海の配偶と云ひ、

世界第一の富強者と云ひしエネチアとは是か。われは名に聞えたるマルクスの廣こうちに入りぬ。こはエネチアの心胸と稱すべき處にして、國の性命は此に存ずといふなるに、その所謂繁華は羅馬のコロソオに孰與ぞ、又拿破里の市に孰與ぞ。石の遺持の下なる長き廊道にけ、書肆あり珠玉店あり繪畫鋪あれども、足を其前に留むるもの多からず。唯々骨董店の前には、幾個の希臘人、土耳其人などの彩衣を纏ひて、口に長き煙管を啣み、黙坐したるあるのみ。口は「マルクス」寺の屋根の鍍金せる尖と寺門の上なる大いなる銅馬とを照して、チュペルス、カンチア、モレア等の舟の赤橋の上なる徽章ある旗は垂れて動かず。數千の鴿は廣こうちを飛びかひて、梵石の上に養れり。

われは進みてポンテ、リアルトオに到りて、いよ／＼斯土の風俗を知りぬ。エネチアは大なる悲哀の郷なり、我主觀の好き對象なり。而して此郷の水の上に泛べること、古のノアの舟と同じ。われは小き舟を下りて、この大いなる舟に上りしなり。

日の夕となりて、模糊として力なき月光の全部を被ひ、隨處に際立ちたるは霧を生ぜしとき、われはいよ／＼エネチアの眞味を領略することを得たり。死せる都府の沈寂の氣は、光明に宜しからずして幽暗に宜しければなり。われは客亭の窓を開いて立ち、黒き小舟の矢を射る如く黒き波を截り去るを望み、前の舟人の歌ひし戀の歌を憶ひ起せり。われは此時アメンチヤタを恨みき。いかなれば彼佳人は我を棄ててベルナルドオに奔りしぞ。こは誠實を去りて輕薄に就きしにあらずや。われは此時フラミニアをさへ恨みき。いかなれば彼少女は我を棄てて尼寺に入りしぞ。こは情愛を去りて平和に就きしにあらずや。我胸は一種の言ふべからざる空虚を感じたり。我胸はあらゆる我を喜ばせしものとあらゆる我を慰めし者とを一掃して去らむと欲せり。然るにかく思議する間、終始我心の前に往來するものは、可愛きアラと罪深きサンタとの面影なりき。われは蹣跚として階を下り、舟を喚びて水の橋を逍遙せり。二人の舵手は相和して歌ふ。其歌は古の懷復せられたるエルザレム（ジェルザレムノ、リベラアタ）の調にあらず、大統領の族絶えて、獅子の翼の外人に縛せられてより、エネチアの民はその歌謡の上の國粹をさへ失ひつるなり。われは獨語して、いでや人生の渦裏に投じて、人生の樂を受用し、惜ひて餘蘊なからしめむと云ふとき、



てり。ボツジョの興は風浪の高きに從ひて高く、掌を抵ちて哄笑し、海に對して快哉を連呼せり。此興は我に感じ傳はりて、我は胸中の苦悶の天地の忿怒に壓倒せらるゝを覺え、亦ボツジョの聲に應じて叫びぬ。

暮色は急に襲ひ至りぬ。我等は亭に入りて、當座の女をして良酒を供せしめ、續けざまに數杯を傾けて、此自然の活劇を玩べり。忽ちボツジョの聲を放ちて歌ふを聞きつ。其曲は嘗て此地に來りしとき舟中にありて聞きしと同じき戀の歌なり。われ杯を舉げて、エネチアの美人の健康のために飲まむと云へば、ボツジョ、さらば我は羅馬の美人のために飲まむと云ふ。若し相識らぬ人の、我等の狂態を見たらむには、定めて尋常時に及びて行樂する徒となすなるべし。ボツジョのいふやう。女子の美は羅馬に若くはなし。君はいかにおもひ給ふか。憚ることなく答へ給へ。われ。そは我が首肯する所なり。ボツジョ。さもあるべし。されど伊太利第一の美人は此エネチアにこそあれ。憾むらくは君未だ市長の女を見給はず。清楚なると此の如きは、世の絶て無くして僅に有るところにして、これをや精神上の美とは云ふべき。若しカノワにして此女を識りたらましかば、そ

の三美の像の最も少きをば、必ず此女の姿によりて摸し成しならむ。(カノワは彫所なり。ボツサニヨに生れエネチアに歿す。三美の像は獨逸ミュンヘンに在り。) われは嘗て晚餐式ありしとき、寺院にて見、又聖摩西の劇場にて一たび見たり。その高根の花に似て、仰ぎ看るだに容易からぬを恨むものは、獨り我のみにはあらず。おほよそエネチアの少年紳士にして同じ恨を抱かぬはあらざるならむ。只だ人々と我と相異なるは、彼は懸想し我は懸想せざるのみ。我俗眼もて見れば、彼人は餘りに天人めきたり。されど天人は崇拜の對象とすべきならむ。アパテはいかに思ひ給ふといふ。われは此語を聞いて、フラミニアの事を思ひ出し、喜の色は我面より消え失せたり。ボツジョ。酒は好し。風波は我筵の爲めに歌舞す。いかなれば君愁の色を見せ給ふぞ。われ。市長は客を招き筵を張ることありや。ボツジョ。稀にそのことなきにあらず。されど招請を慣むこといと嚴なり。矧や彼人は物に怯るゝと鹿子の如く、同じ席に列るものもたやすく近づくこと能はざるを奈何せん。われは必ずしもかの人心より此の如しと説かず。そは人にめづらしがられむとてかく振舞ふ女も少からねばなり。そが上

に彼人の身上には明白ならざる處なきにしもあらず。わが聞くところに依れば、市長に二人の妹ありて、皆久しく遠國に住めりき。その最も少き方の妹は希臘人に嫁きたりしに、その夫婦の間に彼の奇しき少女はまうけられぬといふ。今一人の妹は猶處子なり、しかも老いたる處子なり。四とせ前心頃彼の少女を伴ひて歸り來りしは、此の老處子に他ならざりき。

夜の如き闇黒は急に酒亭を覆ひて、ボツジョが語の腰を折りたり。あなやと驚、際もあらず、赫然たる電光は身邊を繞り、次いで雷聲大に震ひ、我等二人をして覺えず首を低れて、十字を空に畫かしめつ。

酒亭の女主人色を變じて馳せ來りて云ふやう。氣の毒なることを出来り候ひぬ。岸區の僥れたる舟人六人未だ海より歸らずして、就中憐むべきアニエゼは子供五人と共に岸に坐して待てり。いかになり行くことならむ。只と聖母の御恵を祈らむより外術なしといひぬ。忽ち歌頌の聲はわれ等の耳に入れり。戸を出でて視へば、彼の激浪倒立すること十丈なる岸頭に、一群の女子小兒の立てるあり。小兒等は十字架を捧げ持てり。群のうちに一人の年少き女の、地に坐して海上を凝視せるあり。この

男は身を起して此方に向へり。こは我がエネチアに来てよりの新相識の一人なる貴族の少年にて名をポツジョといふものなりき。

ポツジョのいふやう。こゝにて君と相見むとは思ひ掛けざりき。この怒り易く情み難きハドリアの海の、能く君を招き致したるは、唯、その紅波白浪の美あるがためか、そも、別に美なるものありて、この岸區に住めるにはあらざるかといひぬ。我等は互に進み寄りて手を握りつ。

人の語を聞くに、ポツジョは盡才ありて資力なき人なり。その人に對する言語動作は活潑にして、聞と放縱なるかときへ疑はるゝ節あれども、まことはいみじき服世家なり。言ふところはドン、ホアンを欺く蕩子なる如くにして、まことは聖アントニウスの誘惑を峻拒する氣概あり。無外氣なること赤子の如く、胸中一事を包蔵するに堪へざるものに似て、智を恃める士流は遂にその底蘊を窮むること能はず。こは深き愛に中れるが爲めなるべけれど、その愛は貧か懣か、そも、別に尋常ならざる秘密あるか。これを知るもの絶て無しとぞ。われは人の若語を聞きて、かねてよりポツジョに親まんとことを願ひしかば、今ゆくりなくこれに逢ひ

て、心にこの邂逅を喜び、早く胸の狭霧のこれがために晴るゝを覺えき。

ポツジョは海を指さしてかゝる青く波立てる大面積は羅馬の無き所なり、おほよそ地上の美なるもの海に若くはなかるべし、宜なり海はフロデテの母にしてと云ひさし、少し笑ひて、又エネチア歴代の大統領の末亡人なりといへり。われ。海を愛する心は、エネチアの人物に深かるべき理あり。海は己れが母なるエネチアの母にして、己れを愛撫し己れを游嬉せしむる祖母なればなり。ポツジョ。その氣高かりし海の女の今は頭を低れたるぞ哀なる。われ。フランドン帝の下にありて幸ありとはいふべからざるか。ポツジョ。われは政治を解せず。エネチア人は今も不平を説くことを須めざるなるべし。されどわが解するところのものは美妙なり。陸上宮殿の柱。像たらむは、海の女王たらむことの崇高なるには若かず。おもふに君の美妙を崇拜し給ふことと我に殊ならざるべければ、君はかしこより來る彼美の呼び迎ふをも辭み給はばならむ。こは識る所の酒亭の娘なり。共に往き給はずやといふ。わればポツジョと少女に誘はれて、海に枕める小家に入りぬ。酒は旨し。友は善く談ぜり。誰かポツジョが輕快なる繪と

悦むの色とを見て、その厭世の客たるを知り得む。我は共に坐すること二時間ばかりなりしに、舟人は急に我を呼びて歸途に就かむことを促せり。こは颯風の候ちりて、岸區とエネチアとの間なる波は、最早小舟を危うするに足るが故なりと云へり。ポツジョは耳を翫てたり。何とか云ふ。颯風は我が久しく觀むことを願ひしところなり。「アバテ」も暫く我と共に留まり給へ。日の暮るゝまでには風ぐべし。若風がずは、枕をこの茅屋根の下に安くして、波の音を聞くこと、昔よりも歌を聞きしが如くせむといふ。我は舟人を顧みて、舟を要せば別に雇ふべければ、汝達は去留自在にせよといひて、暇を取らせつ。

須臾にして波濤洶々の音漸く高く、風力の衝突は頻りに全屋を撼せり。我とポツジョとは皆に戶外に出て、瞻望したり。時に夕陽は電怒したる海の暗緑なる水を射て、大波の起る處雪花亂れ翻れり。地平線に近き邊には、層雲堆を成して、招夷の其間より閃爍せるさま、幾箇の火山の噴坑を開けるに似たり。我等は忽ち二三の舟の紙上の黒點の如く彼雲に映ずるを見しが、忽ち又これを失へり。岸を瞰む水は、石に觸れて倒立し、鹹沫は飛んで二人の面を撲

期したりしなり。

我はチチアノの賛といふ題を得たり。即興はおもふまゝなる喝采を博して、古名匠の賛はわが自賛となりぬ。されどチチアノは海を畫く人ならざりしが爲めに、われは此題を利用して我志を果すに由なかりき。

主婦は我に近づきていふやう。君の如く自家の伎藝もてかくあまたの人を樂ましめ感ぜしめむは、いかに快き事なるべきか。われ。詩人第一の快事は詩の成功なり。主婦。さらば能くその快きを題として歌ひ給はむや。君の辭を措き給ふことの容易げなるよりわれ等は、頻りに請ふことの無禮げなるをさへ忘れむとす。われ。こゝに一の奇術あり。そは人々皆詩人となりて、能く詩人の快を體驗することなり。われは此術を善くすれども、かゝる術の常として、報なくしては演ずべきにあらず。わが此詞は果して坐客をして耳を敬てしめ、人々は争ひ進みて、願はくはその奇術を見ることを得むと云へり。我は側なる卓を指さして、報せむと思ふ

方々は、金錢にもせよ珠玉首飾の類にもせよ、此上に出し給へと云ひぬ。婦人の一人は戯に、さらば我はこの黄金の鎖を置かむと云ひて、言ふところの品を卓上に擲てり。一男子は笑ひ

つゝ、さらば我は骨牌の爲めに帶び來れる此金残らずを置かむと云ひて、その財寶を擲てり。われ。人々よ、我詞は戲言にあらず、人々は再び其品を得給ふまじといふに、満座の客は、さもあらばあれ君が奇術こそ見まほしけれと、金銀指環、鎖の類を堆く卓上に積みたり。軍服着たる一老人、若しその奇術奇ならざるときは、われは我が「ツカアチ」二個(約三圓三八錢)を取り返すことを得むかといひしに、ポツ「ジヨ」は我に代りて、若し疑はしとおもひ給はば、夥伴に入り給はでもあるべきにと答へぬ。人々はこれを聞きて打笑ひ、只管我が演じいだす所のいかなるべきを俟ち居たり。

われは將に口を開かむとするに臨みて、神の我に光明を與へ給ふを覺えたり。先づエネチアの配偶なる、威力ある海を敘し、それより海の兒孫なる航海者に及び、性命を一輩に託する漁者に及び。次に前々の日撃せしところに就きて颯風を敘し、岸に臨みて翹望せる婦幼に及び、十字架を落す兒童とこれを拾ひて高く擧ぐる漁翁とに及び。我は殆ど歌ふところのもの、即ち神の御聲にして、我身の唯これ聲を發する器具に過ぎざるを覺えき。時に廣座の間寂として人なきが如く、處々に巾もて涙を拭

ふものあるを見る。われはこれより茅屋のうちに、孤兒の憐れむべき生活を敘し、賑恤の必要と其效果とに及び。われは人間の快きは取るに在らずして與ふるに在り、與ふる快きは即ち神の御心にして、此心あるものは誰か眞の詩人たらざらむと云へり。我聲の威力、その幅員は曲の末解に至りて強さと大さとを加へき。我曲は能く衆人を感動せしめき。我が卓上の物を取りてポツ「ジヨ」に交付し、これに救助の事を託せしときは、喝采の聲を撼したり。爾時一の年わかき婦人ありて、我前に來り跪き、我手を握り、その涙に潤へる黒き瞳もて我面を見上げ、神の母の報は君が上にあれと呼びたり。われは婦人の黒き瞳を見て、實て夢中に相逢ひたる如き念をなし、深くこれに動されぬ。婦人は此言をなし畢りて、纔におのれの舉動の矩を踰えたるを曉れりとおぼしく、臉に火の如き紅を上げて席をすべり出でぬ。

座客は皆我傍に集ひて、わが博愛の心を稱へ、わが即興の作を讃む。ポツ「ジヨ」は我を擁して、幸ある友よ、人の仰き視ることをだに敢てせざる美人は、膝を君が前に屈せしにあらずやとさゝやけり。われ。渠は何人なりしか。ポツ「ジヨ」。エネチア第一の美人なり。市長の姪な



女は赤子に乳房を銜ませたるに、別に年稍と長

ぜる一兒の膝に枕したるさへありき。忽ち一道

の雷火下り射ると共に、颶風は引き去らむと欲

する状をなせり。地平線には小き稲妻亂れ起り

て、暗碧なる浪の尖なる雪花はほの／＼と白み

來れり。彼女は俄に蹶起して、舟はかしことに

呼べり。われ等はその指す方に一の黒點あるを

認め得たり。黒點は次第に鮮かになりぬ。時に

一人の老漁ありて、褐いろなる無底帽を戴き

指を組み合せて立ちたりしに、不意にあなやと

叫べり。聲未だ畢らざるに、我等は黒點の泡立

てる巨濤の蔭に隠るゝを見たり。果せるかな老

るに由なかりしが爲めなり。

## 感動

翌晩われはボツジヨとエネチア屈指の富人某

の家に會せり。こはわが出納の事を託したる銀

行の主人なり。會するものはいと多かりしか

ど、席上一の我が相識れる婦人なく、又一の我

が相識らむことを欲する婦人なかりき。

會話は昨夜の暴風の事に及べり。ボツジヨは

舟人の横死と遺族の窮乏とを語りて、些少な

棄捐のいかに大いなる功德をなすべきかを諷し

試みたれども、人々は只そは笑止なることな

るかなとて、肩を聳かして相視たるのみにて、

タルラ」の琴を抱きて人々に題を求めつ。忽ち

一少女の應ずる色なく目を我面に注ぎてエネ

チアと呼ぶあり。男子幾人か之に應じてエネチ

ア、エネチアと反復せり。そはかの少女の頗る

美なるが爲めなり。われは絃を理めて、先づエ

ネチア復古の豪華を説きたり。人々は歴史と空

想とを編み交ぜたる我詞章に耳を傾けつゝ、彼

過去の影をもて此現在の形となすにやあらむ、

その眼光は皆輝けり。われは心中にララをお

もひサンタをおもひつゝ、月明かなる夜、寒水

に枕める出窓の上に、美人の獨りたゝずめる狀

を敘したり。婦人等はこれを聞きて、諷ふもの

に由なかりしが爲めなり。

## 感動

翌晩われはボツジヨとエネチア屈指の富人某

の家に會せり。こはわが出納の事を託したる銀

行の主人なり。會するものはいと多かりしか

ど、席上一の我が相識れる婦人なく、又一の我

が相識らむことを欲する婦人なかりき。

會話は昨夜の暴風の事に及べり。ボツジヨは

舟人の横死と遺族の窮乏とを語りて、些少な

棄捐のいかに大いなる功德をなすべきかを諷し

試みたれども、人々は只そは笑止なることな

るかなとて、肩を聳かして相視たるのみにて、

タルラ」の琴を抱きて人々に題を求めつ。忽ち

一少女の應ずる色なく目を我面に注ぎてエネ

チアと呼ぶあり。男子幾人か之に應じてエネチ

ア、エネチアと反復せり。そはかの少女の頗る

美なるが爲めなり。われは絃を理めて、先づエ

ネチア復古の豪華を説きたり。人々は歴史と空

想とを編み交ぜたる我詞章に耳を傾けつゝ、彼

過去の影をもて此現在の形となすにやあらむ、

その眼光は皆輝けり。われは心中にララをお

もひサンタをおもひつゝ、月明かなる夜、寒水

に枕める出窓の上に、美人の獨りたゝずめる狀

を敘したり。婦人等はこれを聞きて、諷ふもの

他日おん身の許嫁の妻に掛けさせ給ふべき品なり、作りし人もその心ありしなるべしと詞を添へつ。われは料らずも眉を蹙めて、我に許嫁の妻なし、未來にも亦さる人なからむと叫びぬ。マリアの面には失望の色をあらはせり。そはこの贈を取次ぎて我を悦ばしめむことを期せしが故なり。われは手に環珞を捧げて、心にこれをマリアに與へむことを願ひぬ。マリアの顔の紅を潮せしは、我心を忤り得たるにやあらむ、覺束なし。

## 末 路

とある夕わが爲換金を取扱ふ商家を尋ねしに、主人の妻のいふやう。近頃はおん身の來給ふこと稀になりぬ。そは市長の許に往き給ふことの頻なるが爲めなるべし。我家にはマリアの如き美しき人あるにあらねば、誰かおん身の足の彼方にのみ向くを理ならずとせむ。マリアは今エネチア第一の美人にして、御身はエネチア第一の才子におはすれば、彼此似つかはしき中なるに、マリアが所有なりといふカラブリアの地面はいと廣しといへば、おん二人の生計さへ豐かなることを得べきならむ。御身若し早く心を決めて誓約をだになし給はば、エネチア全

市の男子一人としておん身を羨まざるものなからむといふ。われ。いかなれば我をさまで利己心多きものとはし給ふぞ。わがマリアを尊むは、あらゆる美しきものを尊む情に外ならず。これをしも愛と謂はば、何人かマリアを愛せざらむ。縱ひわれマリアを愛せむも我心は又決してその財産に左右せらるゝことなかるべし。主人の妻。否、さてはおん身はつまさだめするものゝ先づ心得べき事あるを知り給はぬなるべし。狼麝に満ち酒窖に満ちて、始めて夫婦の間の幸福は全きものぞ。古き諺にも、生活を先にし戀愛を後にすといへるにあらずやと云ひぬ。

人の我上をかくおもへる、既に我が忍ぶべきところならず。況や面りこれを語るをや。我は喜んで市長一家の人々と交れども、此の如き嫌疑を受くることを甘んじて、猶その家に入すべくもあらず。今宵も市長の家を訪ふべかりし我は、歩を轉じてエネチアの狭き巷をさまよひめぐりぬ。相向へる二列の家は、簷と簷と殆ど相觸れむとし、市店の燈を張ること多きが爲めに、火光は斜らぬ眼もなく、十女の往來縦るが如くなり。渠水を望めば、燈影長く垂れて、橋を負へる石弓の下に、「ゴンドラ」の舟

の箭よりも疾く駛るを見る。忽ち歌聲の耳に入るあり。諺聽すれば、是れ戀愛と接吻との曲なり。迷路の最も遠き處に一軒の稍々大なる家ありて、火の光よりそよりも明かに、人多く入りゆくさまなり。こはエネチアの歌多き小芝居の一にして、座の名をば聖ルカスと云へりとぞ。大抵樂劇の一組ありて、日ごとに二曲を興行すること、拿破里の「フェニチエ」座に同じ。初の一曲は午後四時に始まり六時頃には早く終り、次なる曲は夕の八時より始まる。素より精しき技藝、高き趣味をこゝに求むべきにはあらねど、此の音楽に耳を悦ばしめむとする下層の市民の願をばこれによりて遂げしむることを得べく、又旅人などの逍遙の爲めに來り觀るす少からざるべし。觀劇の料は甚だ廉く晝夜とも空席を留めぬを例とす。

招牌を仰げば「ドンナ、カリテア、レジナ、デ、スパニア」「西班牙女王カリテア夫人」と大書し、作諸者の名をばメルカダントと註せり。われ心の中におもふやう。かゝる時にこそ、我眠終にかムハニアの野なる山羊の乳汁を啗らして、温き血環れるを人に示すべきなれ、我が世就れたることのベルナルドオにもフニデリゴにも劣らぬを示すべきなれ。兎も角も一たび此場内

り。一の老婦人ありて我に歩み近づきて、君は最早我を忘れ給ひしか。そは理なきにあらず、唯と一たび相見てより後、年あまた経ぬればと云ひつゝ、我に手をさし伸べたり。われ。一たび相見しことある御方とは知れど、何時何處にての事とおもひ定め難しといふに、老婦人、我同胞は醫師にて拿破里に居たり、君はボルゲンゼ家の公子と共に兄を訪ひ給ひぬといふ。我。まことに言給ふ如し。こゝにて逢ひまつらむとは思ひ掛けざりしなり。老婦人。拿破里の弟は妻なかりし故、われに家政をとりまかなはせしに、四とせ前にみまかりぬ。今はこゝなる兄の許に住めり。我姪はその性人と殊なれば、一たび家に歸らむといひ出で、は、思ひ留まるべくもあらず。又こそ御目にかゝらめとて、老婦人は出で去りぬ。ポツジョは再び我にさゝやくやう。かへすんゝも幸ある友よ、市長の妹の君が相識にて、君と再會を約せしは願ひてもなき事ならずや。エネチアの少年紳士にして君を羨まぬものはあらず。人々は遠距離にありてだに心に傷を負へるを、君は敵の陣地に入ることなれば、注意して自ら護り給へといふ。市長の姪の去りしには、座客氣付きぬれど、皆その心の懐しきこと姿の美しきにかはらずとて、

讃め稱へて已まざりき。善行は心に光明を與ふ。われは久しぶりに心の中の快活を感じて、ポツジョと杯を碰せ、此より兄弟の如くならむことを誓ひぬ。家に歸りしは夜半なりき。直ちに眠に就くべき心地ならねば、窓に坐して清風明月に對せり。渠水波なく、古宮空しく聳ゆる處、我が爲めには神話中の夢幻界を現じ來れり。我は兒童の如く合掌して祈禱したり。父よ、我諸惡を免せ。我に氣力を賦して善良の人たることを得しめよ、我をして此の羞慚の心なく、彼尼院中なるフラミニアを懷ふことを得しめよ。

翌朝は身極めて爽快なりき。我は舟人を喚びて市長の家に往くことを命ぜしに、舟人そのオテルロ宮(バラツツオオ、ドテルロ)なるを告げたり。オテルロとは彼シェクスピアの戯曲エネチアの黒人の主人公にして、市長の家は其舊館なれば、英吉利人は此地に來る毎に必ずこれを尋ねること、マルクス寺又は武庫に殊ならずといふ。

市長の一家は歡びて我を迎へ、主人の妹なるロオザ夫人は、亡弟の記念と拿破里の繁華とを語りて、我に再遊の願の甚だ切なるを告げ、主人の姪なるマリアは我をして復たララの姿を

見、フラミニアの才を見る心地せしめき。マリアとララの相作たるは驚くべき程なり。さるにても身に纏褸を纏ひて、屢に一束の華花を挿みし乞丐の女、能くエネチア第一美人と美を競ぶること不思議なれ。是より我は頻りに此家に往來して、ロオザ夫人の爲めにダンテの神曲、アルフイエリ、ニコリイニ(竝に詩人の名)等の集を朗讀せり。ポツジョもわが紹介によりて市長の常の客となることを得たり。即興詩人としての我名は漸くエネチアの都に傳はり、美術會院(アカデミア、デル、アルテ)は一日我を招きて技を奏せしめき。われはダンドロのコンスタンチノポリス征服とマルクス寺の餉馬とを題として即興の詩を歌ひ、會員證を授與けられたり。(ダンドロはエネチアの大統領なりき。千二百三十二年コンスタンチノポリスを征服す。即所謂第四次十字軍なり。されどその頃我は別に一物の此會員證より貴きものを得つ。そは極めて細かなる貝を組織もて貫きたる環珞なり。岸區の漁者の遺族は我がために作りてポツジョに託し、ポツジョはマリアにあづけ置きぬ。ある日マリアは我が往きて訪ふを待ちて、美しく愛らしきものならずやと云ひつゝ、我手にわたし、ロオザ夫人は、何より、



し。當時は年もまだ若くて、聲はマリブランの如くなりきとぞ。されど今はしも薄落ちたり。こはかゝる伎もて名を馳せし人の常なり。暫くは目の天に中するが如き位にありて、世の人の讃歎の聲に心惑ひ、おのが伎の時々刻々降りゆくを曉らず、若し此時に當り早く謀をなさざるときは、公衆先づ其演奏の前に殊なところあるを覺ゆべし、かゝるなりはひする女子の習として、財を獲ること多しといへども、隨ひて得れば隨ひて散じ、暮年の計をおもはねば、その落魄もいと速なり。君のこの女優を見給ひぬといふは、羅馬にての事にやありけむ。われ。然り。其頃面を見ること二三度なりき。紳士。さらば變化の甚しきを覺え給ふならむ。人の噂には、四五年前に重き病に罹りてより、聲はたとつづれぬといふ。その人の爲めにはいと笑止なる事ながら、聴衆の過去の美音を喝采せざるをば、奈何ともすべからず。いざ、昔のよしみに拍手し給へ。われも應援すべしとて、先づ激しく掌を打ち鳴しつ。平土間なる客二三人、何とかおもひけむ、これに和したるに、叱々と呼びて、この過當の褒美にあらがふもの少からず。女王はこの毀譽を心に介せざる如く、首を擧げて場を下りに、紳士見

送りて、我等はトロヤ人なりきとつづきぬ。(原語、フィムス、トロエス)は猶已矣と云はむが如し。

代りて場に上りしは、此曲の女主人公にして、これに扮せるは二八ばかりの女子なりき。色好む男の一瞥して心を動すべき肉おき煙かに、目なざし燃ゆる如くなれば、喝采の聲は屋を撼せり。此時むかしの記念は我胸を衝いて起し。羅馬の市民のアモンチャタの爲めに狂ひし狀はいかなりしぞ。いにしへの帝王の凱旋の儀をまねびつる、アモンチャタが車のよそほひはいかなりしぞ。わが崇拜の念はいかなりしぞ。さるを今はこの尋常なる容色にすらけおされ畢んぬ。あはれ、薄倖なるベルナルドオは身病み色衰ふるに及びて君を棄てしか。さらば、君は始より眞成にベルナルドオを愛せざりしか。君が唇のベルナルドオの額に觸れしをば、われ猶記す。君争でかベルナルドオを愛せざらむ。思ふにかの無情男子は君が色を愛して、君が心を愛せざりしなり。

アモンチャタは再び場に上りぬ。老いたるかな、衰へたるかな、只是れ屍の脂粉を傳けて行くもののみ。われは覺えず肌に粟生ぜり。われもアモンチャタが色に迷ひし一人なれ

ども、その才の高く情の優しかりしをば、わが戀愛に蔽はれたりし心すら、猶能く認め得たりき。縱令色は衰ふとも、才情はむかしのまゝなるべし。かへすも惡むべきはベルナルドオが忍びて彼才彼情を棄てつるなる哉。我心緒は此不幸なる女子を憐み、彼無情なる友を憎むが爲めに、亂るゝこと麻の如くなりき。傍なる紳士は、我面色の土の如くなるを見て、いかにし給ひしぞ、不快なるにはあらずやと問ひぬ。此棧敷の餘りに暑き故なるべしと答へつゝ、我は起ちて劇場の外に走り出でぬ。

胸中の苦悶は我を驅りて、狭きエネチアの巷を、縱横に走り過ぎしめしに、ふと立ち留りて頭を掻くれば、われは又前の劇場の前に在り。時に一人の老僕ありて、入口に貼りたるけふの名題を剃き取り、代ふるにあすのをもてせむとす。われは進みて此僕の耳に付き、アモンチャタの宿はいづこぞと問ひしに、僕は首を廻して我顔を打目もり、アモンチャタと宣給ふか、そはアウレリアの誤なるべし、けふもアウレリアが部屋をばおとづれ給ひし増那達いと多かりき。宿に案内しまゐらすは易けれど、歸るにはまだ些の隙あるべしと答ふ。われ。否、アモンチャタなり。けふ女王の役を勤めし人な

に入りて、美しき女優の面を見ばや。若し興なくば、曲の終るを待たで出でむも、妨あらじともひぬ。入場券を買ふに、小き汚れたる牌を與へつ。我觀棚は極めて舞臺に近き處なりき。

此劇場には高下二列の觀棚あり。平間をばいと低く設けたり。されど舞臺の小なること、給仕盆の如しとも謂ふべし。あはれ、此舞臺にいくばくの人か登り得べきとおもふに、例の小芝居の習として、中むかしの武弁の上をしくめる大樂劇の、行列の幕あり戦鬪の幕あるものをさへ興行するなるべし。觀棚は内壁の布張汚れ裂けて、天井は鬱鬱きまで低し。少焉ありて、上衣を脱ぎ、襦袢の袖を擡げたる男現れて、舞臺の前なる燭を點しつ。客は皆無遠慮に聲高く語りありあり。又少時ありて、樂人出で、奏樂席に就きぬ。これを視るに、只是れ四奏の一組なりき。彼と云ひ此と云ひ、今宵の受用の覺來なかるべき前兆ならぬものなけれど、われは猶せめて第一折を觀むとおもひて、獨り觀棚に坐し居たり。

場内の女客に美しきはあらずやと左を顧み右を盼しかど、遂にさる者を認め得ざりき。忽ち隣席に就く人あり。こは嘗て某の筵にて相見しことある少年紳士なりき。紳士は笑み

つゝ我手を握りて云ふやう。こゝにて君に逢はむとは思ひ掛けざりき。君はその邊の消息を知り給ふか知らねど、かゝる處にては、折々面白き女客と肩を並ぶることあり。かくて薄暗き燈火は、これと親む、嫌となるものなりと云ひぬ。紳士の詞は未だ畢らぬに、傍より叱々と警むる聲す。そは開場の曲の始まれるが爲めなりき。

音樂は心細きまで微弱なりき。幕は開きたり。只と見る、男子三人女子二人より成れる一群の唱和するを。その骨相を看れば、座主は俄に賦畀の間より登席し來りて、これに武士の服を衣せしにはあらずやと疑はれぬ。隣席の紳士は我を顧みて、餘りに力を落し給ふな、單吟には稍々觀る可きものなきにあらず、此組にも好き道化役あり、大劇場に出だしても恥かしからぬ男なりなど云ふ。この時今宵の曲の女王は、侍姫に扮せる二女優と共に場に上りぬ。紳士肩を擡めて、さては女王は葉なりしか、全曲は最早一錢の價にあらざるべし、あはれジャンネツテならましかばとつぶやきぬ。女王は身の丈甚だ高からず、面の輪廓鋭くして、黒き目は稍々陥りたり。衣裳つきはいと悪し。無遠慮に評せば、擬人せる貧窶の姫嬪の

装束したるとやいふべき。さるを怪むべきは此女優の舉止のさま都雅にして、いたく他の人とは異なる事なり。われは心の中に、若し少き美しき娘に此行儀あらば奈何ならむとおもひぬ。既にして女王は進みて舞臺の終に點し連ねたる燈火の處に到りぬ。此時我心は我目を疑ひ、我胸は劇しき動悸を感じたり。われは暫くの間、傍なる紳士に其名を問ふことを敢てせざりき。われ。此女優の名をば何とかいふ。紳士。アモンチャタといへり。歌ふことを善くせぬに、その顔はせきへこれが儼をなすに足らねば、顧みる人なきもことわりなり。此詞は句々腐蝕する藥の如く我心の上に印せり。われは瞠目結坐して心を喪ふものゝ如くなりき。

女王は歌ひはじめき。否、こはアモンチャタが聲ならず。微かにして恃なく、潤りて響かず。紳士。この喉には此の修行の痕あるに似たれど、氣の毒なるは聲に力なきことなり。われ。(強く胸を押して鎮めて。)さきには維馬、拿破里に響を贈せたる西班牙生れの少女ありしが、この女優は偶々其名を同じうして、色も聲もこれに似ること能はざりしよ。紳士。否、この女優こそはその名譽あるアモンチャタがなれの果なれ。盛名一時に馳ぎしは七八年前のことなるべ

して、詐りて猶ほ生きたるものゝ如くし、又脂粉を塗りて場に上ることとなりぬ。されど流石に人を驚さむことの心苦しうて、わざと燈燭の数少き、薄暗き小劇場に出づるにこそ。おん身の記憶に存じたるアモンチャタは早や死して、その遺像は只だかしこの壁にありといひぬ。われは此詞を聞きて、向ひの壁を仰ぎ看しに、一面の大畫幅あり。枠を飾るる黄金の光の、燦然として四邊を照るさま、室内貧乏の模様と、全く相反せり。圖するところはデッドに扮したるアモンチャタが胸像なりき。氣高く麗しきその面輪、威ありて險しからざる其顔際、皆我が平生の夢想するところに異ならず。我視線は覺えずすべりて、壁間の畫より座上の主人に移りぬ。アモンチャタは面を掩ひて、世の人の我を忘れし如く、おん身も今は我を忘れて、疾く往き給へといふ。われ。否、われ争でか往くことを得む、争でか此儘に往くことを得む。おん身は聖母の恵を忘れ給ふか。聖母はおん身を救ひ給はむ。我等を救ひ給はむ。アモンチャタ。おん身は衰運に乗じて人を辱めむとはし給はざるべし。むかし交はり侍りし時より、おん身の心のさる殘忍なる心ならざるを知る。さらばおん身は何故に、世舉りて我を譽め我に誤ふ時我

を棄て去り、今ことさらに我が世に棄てられたる殘軀の色も香もなきを訪ひ給ふぞ。われ。情なき事をな官給ひそ。我争でかおん身を棄つべき。我を棄て給ひしは、我を逐ひて風塵の巷に奔らしめ給ひしは、おん身にこそあれ。かく言はむ、おん身は我を自ら擲らざるものとやし給はむ、さらば只と我を匿逐せしものは我運命なり、我因果なりとやいはむ。此詞機に出でて、アモンチャタはその猶美しき目を睜り、ことはなくて我面を凝視し、その色を失へる唇はものいはむと欲する如くに動きて又止み、深き息徐ろに洩れて、日は地上に注がるゝこととしばらくなりき。アモンチャタは忽ち右手を擧げて、緩にその額を撫でたり。一の秘密の神とおのれとのみ知れるありて、此時心頭に浮び來りしにやあらむ。アモンチャタは再び口を開きぬ。我は君と再會せり。此世にて再會せり。再會していよ、君が情ある人なることを知る。されど善報は既に凋れ、白鶴は復た歌はずなりぬ。おもふに君は聖母の恩澤に浴して、我に殊なる好き運命に逢ひ給ふなるべし。今はわれに唯一つの願あり。アントニオよ、能くそを慫へ給はむかといふ。われ手に接吻して、いかなるおん望にもあれ、身にかなふ事ならば

といふに、アモンチャタ、さらばこよひの事をば夢とおぼし棄て給ひて、いまより後いついづくにて相見むとも、おん身と我とは識らぬ人となりなむこと、是れわが唯一つの願ぞ、さらば、アントニオ、これより善き世界に生れ出でなば、また相見ることあらむとて、我手を握りぬ。苦痛の重荷に押し据えられたる我は、アモンチャタが足の下に伏しまるるに、アモンチャタ徐かに扶け起し、すかして戸外に伴ひ出でぬ。我は小兒の如くすかされて、小兒の如く泣きつゝ、又來むを許し給へ、許し給へと繰返しつ。月は、さらばといふ最後のひとこゑに鎖されて、われは空しく暗黒なる廊の中に立てり。街に出づれば、その時黒は屋内に殊ならざりき。神よ。おん身の造り給ふところのものの中に、かゝる不幸もありけるよと、獨り泣きつゝ、我は叫びぬ。此夜は家に返りて些の眠をだに得ずして止みぬ。

翌日はわれアモンチャタが爲めに百千の計畫を成就し、百千の計畫を破壊して、終には身の甲斐なきを歎くのみなりき。嗚呼、われは素とカムパニアの野の葉兒なり。羅馬の貴人は我を霜す雨露に似て、實は我を縛する繩索なりき。恃むところは單に一の技藝にして、若し意を決



りといふに、僕は暫し目を睨りて、訝しげに我を見居たるが、さてはあの瘦骨を尋ね給ふか、楠那は別に御用ありての事なるべければ、案内しまゐらせむ、されどこれも歸らむは一時間の後なるべし、そが上に人に問はるゝことなき女なれば、出で御目に掛かるべきか、魯東なしとつぶやきぬ。好し、さらば一時間の後の事にすべければ、こゝにて我が來むを待てと契り置きて我は洋邊に往き、舟を雇ひて、何處をあてともなく漕ぎ行かせつ。

我心緒はいよゝ亂れに亂れぬ。只々心中に往來する切なる願は、今一たびアマンチャタと相見て、今一たびこれに詞をかはさむといふことのみ。嗚呼、アマンチャタはまことに不幸なりき。されど我はその不幸を救ひ得べき地位にあざりしを奈何せむ。指す方もなき水上の逍遙ながら、痛苦に逐はるゝ我心は、猶船脚の太だ迎きを得えぬ。

一時間の後、舟を初めの岸に繫げば、老僕は早く劇場の前に立ちて待てり。引かるゝまゝに、いぶせき巷を縫ひ行きて、遂にとある敗屋の前に出でしとき、僕は屋根裏の小さき窓に燈の影の微かなるを指ざしたり。僕は先に立ちて暗き梯を登りゆくに、我は詞もあらでその後に隨ひ

ぬ。僕は戸外の鈴索を牽いたり。内より誰ぞやといふは女の聲なり。マルコオ、ルガノと名乗ると共に、戸はあきて、我等は暗黒なる一室の中に立てり。聖母を畫けりと思はれ小幅の前に捧げし燈明は既に減えて、燈心の猶燃るさま、一點の血痕の如し。忽ち頭の上に月の軋る音して、魯東なき火の光洩れ來しとき、我は側に小き梯あるを認めつ。御尋の女はあれにといふ老僕の手に、些の銀貨を握られれば、あまたゝびぬかづき謝して、直ちに戸外に出で去りぬ。わが最後の梯を登りゆくとき、一人の女の小き絹の片にて髪を裹み、潤き暗色の上衣を着たるが入口に現れて、あすの名題や變りし、蹶き給ふな、マルコオと云ひつゝ迎へぬ。我はつと室内に進みぬ。

我はアマンチャタと相對して立てり。あな、おん身は何人ぞ。何の爲に此には來ましと、驚きたる女主人は問ひぬ。我は一聲アマンチャタと叫べり。暫し我面を打まもりし主人は、再びあなやといひもあへず、もろ手も顔を掩ひつ。何人にもあらず、昔の友の一人なり、むかしおん身の恵にて、あまたの樂しき時を過し、あまたの幸福ある日を送りしものなり、何の爲めにか來べき、唯だ今一たび相見むの願ありて

來つるのみといふ我聲は恥かしき途次ひぬ。アマンチャタは靜に手を垂れて頭を擧げたり。肉落ちて血色なく、死人の如き面なれど、これのみは年も病も元氣はざりけむ、暗黒にして、流津海のそひなきにも響へつべき瞳は、磁石の鐵を吸ふ如く、我面に注がれたり。アンドニオかくて御身と相見むとは、つやゝ思ひ掛けざりき。同じ憂き世の山路なれど、おん身はそを登る人、われはそを降る身なれば、相見て又何をかいふべき。疾く行き給へと口には言へど、つれなき涙は眶に餘りて、頬の上に墮ち來りぬ。われ。それは餘りに情なし。われはおん身の今不幸なるを知りぬ。むかし一言の白、一日の介もて、萬人に幸福を與へしおん身なるを。アマンチャタ。幸福は妙齡と美貌とに伴ふ者にて、才と情との如きは、その願みるところにあらずとを奈何せむ。われ。おん身は病に臥し給ひきとは實か。アマンチャタ。病はいと重く、一とせの久しきにわたりしかど、死せしは我容色と我吾聲とのみなりき。公衆は此二つの屍を併せ藏せる我身を棄てたり。醫師はこの死を假死なりとなし、我身は果敢なくもこれを信じたりき。我身は舊に依りて衣食を要するに、平生の蓄をば病の爲めに用ひ盡しぬれば、彼死を秘

に解釋あり。戀は固より盲なるものなり。その戀の神なるアモオルをこそ、むかしおん身は見つるならめ。今おん身の心のマリアに惹かるるは、戀の神の所爲なれば、人の噂は遠からず事實となりて現るゝならむ。われ。否、マリアはさて置き、何人をも我は終身娶らざるべし。友。そは又輒くは信じ難き豫言なり、おん身にふさはしからで我にふさはしかるべき豫言なり。好し、さらばわれ君と誓はむ。おん身若し我に先ちて妻を持たば、婚禮の日に三鞭酒二瓶を飲ませ給へ。われ。尤も好し。その酒をば君こそ我に飲ましめ給はめ。

友は我を拉いて市長の許に至りぬ。市長とロオザとは戲言まじりに我無怖を諷め、おとなしきマリアは局外に立ちて主客の争をまもり居たり。ロオザが杯を擧げて、我健康を祝せむとする時、友は急に遮りて、否々、凡そ婦人たるものは、決してアントニオが健康を祝すべからず、そは此男終身娶らずと誓ひぬればなりといふ。市長。そは「アバテ」の天才より産まれし思想中の最も惡しきものなり。されどそを吹聴せむも氣の毒なり。友。吾意は御主人とは異なる。かゝる惡しき思想をば梟木に懸けて、その腦裏に根を張らざるに乘じて、枯らし盡さ

ざるべからずといひぬ。作殺美酒は我前に陳ぜられて、我をしてアモンチャタの或は飢渴に苦むべきを想はしめぬ、辭して出づるとき、ロオザは我に日ごとにおとづれて、シルキオ、ペリコの集を朗讀すべきことを契らしめき。

わが日ごとに市長の家に往くこと、はや一月となりぬ。此間我は絶てアモンチャタが消息を聞くこと能はざりき。ある夕例の如く市長がりとおとづれしにマリアは思ふところありげにて、顔には深き憂の痕を印したり。朗讀舉りて、ロオザ席を起ちて去りぬ。我とマリアとの陪席者なくて對坐するはこれを始とす。我は冥々の裡に、一の凶音の來り迫るを覺えながら、強ひて口を開きて、ペリコの政客たる生活の其詩に及ぼし、影畫を説き出しつ。マリアは忽ち容を改めて、「アバテ」の君と呼び掛けたり。その聲調は、始めて我をしてさきよりの月旦評の毫もマリアが耳に入らざりしを悟らしめき。「アバテ」の君。我はおん身に語るべきことあり、此會談は我が瀕死の人と結びし約束の履行なり、日ごろ疎からぬおん身に聞かせまつることながら、これを語る苦しさをば察し給へといふ。その面は色を失ひて、唇は打顫へり。我が、あ何事のおはせしぞと驚き問ふ時、マリアは

兜兒の中より、一封の書を取出て、さて語を續ぎて云ふやう。不可思議なる神の御手は、我を延きておん身の生涯の秘密の裡に立ち入らしめ給ひぬ。されど心安くおもひ給へ。われは沈黙を死者に誓ひしが故に、ロオザにだに何事をも語らざりき。秘密の何物なるかは、此封を開かば明ならむ。これを我手に受けてより、はや二日を過ぎぬ。今おん身にわたしまゐらせて、我は約を果し侍りぬといふ。われ、その死者とは何人ぞ。此書は何人の手より出でしぞと問ふに、マリア、そは御身の秘密なるものをとて、起ちて一間を出でぬ。

家に歸りて封を啓けば、内より先づ二三枚の紙出たり。先づ取上げた一枚は我手して鉛筆もてしるせる詩句なりき。紙の下端には墨汁もて十字三つを劃したるさま、何とやらん碑銘にまぎらはしくおぼゆ。此詩句は、わが初めてアモンチャタを見つるとき、鞭棚より舞臺に投げしものなり。さては此一封をマリアに託しきといふはアモンチャタなりしか。死せしはアモンチャタなりしか。

紙の間に別に重封の書ありて、アントニオ様へとうは書せり。遙しく裂きて中なる書をとりにだすに、いと長き消息の、前半は墨濃く筆

して、これによりて身をたてむとせば、成就の望なきにしもあらず。されども技藝の聲價、技藝の光榮は、總令其極處に詣らむも、昔のアマンチャタが境遇の上に出づべくもあらず。而るにそのアマンチャタの末路は奈何なりしぞ。

假に彩虹の色をやとし、飛泉の水の、末はポンチニの沼澤に沈み去るに似たらずや。

思慮はたい一つところを馳せ廻るに似て、一日一夜は過ぎぬ。次の朝には、胸中暗かに今一たび相見むの願を存ずるのみなりき。われは再びさきの狭き巷に入り、晝猶暗き梯を上りぬ。鎖されたる戸をほとくと叩けば、腰曲りたる老女入口に現れて、貸家見に来たまひしや、檀那がたの御用には立ち難く候はむといふ。今まで住みし人はと問へば、きのふ立ち退き候ひぬ、何かは知らず、火急なる事ありと覺して、いとあわたとし見え候ひぬ。われ。行方をば知り給はぬか。老女。旅にとは申し、が、いづくにかあらむ。バツア、トリエステ、フェルラなどにはや候はむと、答へもあへず戸を鎖したり。直ちに劇場に往きて見れば、これも鎖されたり。近隣の人に聞けば、きのふ打留なりきといふ。

アマンチャタはいづくにか之きし。ペルナル

ドオなかりせば、彼人は不幸に陥らで止みしならむ。否、彼人のみかは、我も或は生涯の願を遂げ、即興詩人の名を成して、借老の契を全うせしならむか。嗚呼、絶ゆる期なき恨なるかな。

友なるボツジヨおとづれ来ていふやう。何といふ顔色ぞ。恐しき哭風もぞ吹く。若しその熱き風胸より吹かば、中なる鳥の埃及人の火紅鳥ならぬが、焦がれ死するなるべし。野にゆきては芙のうちに赤き實を啄み、空に上りては盆裁の薔薇花に止まりてこそ、鳥は健かにてあるものなれ。わが胸の鳥の樂を血の中に歌ひ籠めて、我におもしろく世を渡らするを見ずや。

殊に詩人たらむものは、庭の花をも芙の實をも知り、天上の瀟氣にも下界の靄霧にも拂つ鳥を畜へては協はずといふ。我。是の如く詩人を觀むは、早きに過ぐるには非ずや。友。基督は地獄に下りて極惡の幽鬼をさへ見きと聞く。天の澄めると地の濁れと相觸れてこそ、大事業大制作は成就すべけれ。否、かくてはわれ汝が爲めに設法するにや似たらむ。われはさる設法のためにこゝに來しにあらざる。われは市長一家の使節なり。おん身の伺候を憚ること三日なりしは、ロオザに聞きつ。何といふ亡狀ぞや。

疾く往きて刑を負ひて罪を謝せよ。但し憐念の申請もあらば聽くべし。われ。此二三日は不快の爲めに門を出ざりき。友。そは拙き申請なり。他人は知らず、我はそを諸はざるべし。さきの夜樂劇に往きしは何人なりけむ。しかも

劇場は、かの頻りに鞭種の主人公たりしアウレリアが出づる劇場なりしならずや。されどおん身もかゝる路傍の花の爲めに頭を痛めしにはあらじ。兎まれ角まれ、けふの午餉にはおん身を市長の家に伴ひ行かでは、我責務の果し難きを奈何せむ。われ。今は包み隠さず告ぐべし、わが暫く市長を訪はざりしは、世のさかしらの厭はしければなり。市長の娘の美くて、カラブリアに廣き地所を持てるを、わが彼家に出入する目的物なるやうに言ひ做すものあればなり。友。其噂は珍らしからず。カラブリアの地所は知らず、マリヤが美しきは人も我も認むるところにて、おん身がその崇拜者の一人なるをば、われとても疑はざるものを。われ。崇拜とは過ぎたり。むかし我が愛せし盲の子に姿貌の似たればこそ、われはマリヤに心を寄せしなれ。友。マリヤが目も拿破里なるをちの治療にて、始めて開きしものと聞けば、盲ひたる子に似たりといはむも、その由なきにあらねど、我には別



君も知らせ給ひし友なるおうなの俄に病  
み臥し、爲め、モラ、デ、ガエタに留ま  
ること一月ばかりに候ひき。かくて拿破  
里に着きて聞けば、私の着せし前日の  
夜、チエンチイといふ少年の即興詩人あ  
りて、舞臺に出でたりと申喚に候。こは  
必ず君なるべしとおもひて、人に問ひ  
候へば、果してまがふかたなき戀人に  
ておはしましき。友なるおうなは消息し  
て君を招き候ひぬ。こなたの名をばわざ  
とあるきで、旅店の名のみしるしは、  
情ある君の何人の文なるをば推し給ふべ  
しと信じ居たるが故に候ひき。おうなは  
再び文をおくり候ひぬ。されど君は來給  
はざりき、使の人の文をば讀み給ひぬと  
いふに、君は來給はざりき。剩へ君は  
邊に物におそるゝ如きましまして、羅馬に  
還り給ひぬと聞き候ひぬ。當時君が振舞  
をば、何とか判じ候ふべき。私は君の  
誠ありげなる戀のいち早くさめ果てしに  
驚き候ひしのみ。私とても、世の人の  
めでくつがへるが儘に、多少驕慢の心を  
も生じ居たる事とて、思ひ切られぬ君を  
思ひ切りて、獨り胸をのみ傷め候ひぬ。

さる程に友なるおうなみまかり、その同  
胞も續きてあらずなり、私は形影相形  
すとも申すべき身となり候ひぬ。されど  
年猶少く色未だ衰へずして、身には習ひ  
おぼへし技藝あれば、舞臺に上るごとに、  
萬人の視線一身に萃まり、喝采の聲我心  
を酔はしめて、しばし心の憂さを忘れ候  
ひぬ。是れまことのアンチヤタが最終  
の一年に候ひき。私はボロニアに赴く  
旅路にて、ふと病に染まり候ひぬ。初  
こそは唯々かりそめの事とおもひ候ひつ  
れ。君に棄てられまつりてよりの、人知  
れぬ苦痛は、我が病に抗すべき力を奪ひ  
て、一とせが程は頭をだにえ抬げず候  
ひき。こゝに君に棄てられぬと書きしを  
ば、許させ給へ。私はその頃、君の猶  
我身を忘れ給はで、世の人の皆我身を顧  
みざるに至りて、今一たび我手に接吻し  
給ふべきをば、夢にだに思得候はざり  
しなり。二とせの間、劇場にて貯へし  
金をば、藥餌の料に費し盡し候ひぬ。  
病は痊えぬれども、聲潰れたれば、身を  
助くべき藝もあらず、貧しきが上に貧し  
き境界に陥り、空しく七年の月日を過

して、料らずも君にめぐりあひ候ひぬ。  
君はこよひの舞臺にて、むかし羅馬の通  
衢を驅るに凱旋の車をもてせしアンチ  
ヤタがいかに賤客に嘲られ、口笛吹きて  
叱責せられたるかを見そなはし給ひしな  
るべし。私は運命の燈まりしと共に、  
胸狭くなりしを自ら覺え居候。扱見苦し  
き假住ひに御下され候時、我日を復ひ  
し面紗の忽ち落つるが如く、君の初より  
眞心もて我を愛し給ひしことを悟り候ひ  
ぬ。汝こそは我を風塵中に還ひ出しつれ  
とは、君の御前なりしかど、私のいかに  
君を慕ひまゐらせ、いかに君の方へ手  
をさし伸べ居たりしをば、君のしろしめ  
さざりしを如何せむ。私は再び君に見  
ゆることを得て、君の温なる唇を我  
手背に受け候ひぬ。今や戸外に送りい  
しまゐらせて、私は再び屋根裏の一室  
に獨坐し居り候。この室をば直ちに立退  
き申すべく、此エネチアをも直ちに立去  
り申すべく候。アントニオの君よ。願は  
くは我が爲めに徒に慙き悲み給ふな。  
私は世には棄てられ被へども、聖母は  
私を護り給ふこと、君を護り給ふに同

のはこびも飽なれど、後半は震ふ筆もて微かに  
覺束なくしるされたるを見る。其文に曰く。

文して戀しく懷かしきアントニオの君に  
申上り。今宵はゆくりなくも、おん目  
に掛り候ひぬ、再びおん口にかゝり候ひ  
ぬ。こは久しき程の願にて、又此願の  
かなはむ折をいと恐ろしくおもひしも、  
久しき程の事にて候。譬へば死をば幸を  
齎すものぞと知りつゝも、死の到來すべ  
き瞬間をば、限なく恐ろしくおもふが  
如くなるべく候。この文認め候は、君に  
見えてより數時間の後に候へども、君の  
これを讀ませ給はむは、數月の後なるべ  
きか、或は又月を踰えざるべきかとも存  
ぜられ候。世の人の言に、われとわが姿  
に用で逢ひしものは、遠からずして死す  
と申候へば、わが常の心の願にて、我心  
と同じものになり居たる君に逢ひまゐ  
らせたるは、我死期の近づきたるしるし  
なるべくやなど思ひつゞけり。いかな  
れば我心は君をえ忘れず、いかなれば君  
は我心と化し給ひて、幸ある時も、福  
に逢へる時も、君は我心を離れ給はざり  
けむ。今より思ひ廻らし候へば、そは君

が世に棄てられたるアモンチャタを棄て  
給はぬ唯一の恩人にましませばならむと  
存り。されど君の今に至りて猶我身を  
棄て給はざる御恩は、決して故なき人の  
上に施し給ひしには候はずと存り。  
君の此文を見給はむ時は、私は世に亡  
き人なるべければ、今は憚ることなく申  
上候はむ。君は我戀人にておはしまし候  
ひぬ。我戀人は、昔世の人にもてはやさ  
れし日より、今またく世の人に棄て果て  
られたる日まで、君より外には絶て無か  
りしを、聖母は、現世にて君と我との一つ  
にならむを許し給はで、二人を遠ざけ給  
ひしにて候。君の我身を愛し給ふをば、  
彼の不幸なる日の夕に、彈丸のベルナル  
ドオを傷けし時、君が打明け給ひしに先  
だちて、私は疾く曉り居り候ひぬ。さ  
るを君と我とを遠ざくべき大いなる不幸  
の、忽ち目前に現れたるを見て、我胸  
は塞がり我舌は結ばれ、私は面を手負  
の衣に隠し、隙に、君は見えずなり給ひ  
ぬ。ベルナルドオの痕は命を限すに及ば  
ざりしかば、私は其治不活生不の君  
が身の上なるべきをおもひて、須臾もべ

ルナルドオの側を離れ候はざりき。憶  
ふに、此時のわが振舞は君に疑はれまゐ  
らせしことのものとや候ふべき。私は  
久しく君の行方を知らず、人に問へども  
能く答ふるもの候はざりき。數日の後、  
怪しきおうな尋ね來て、一ひらの紙を我  
手にわたすを見れば、まがふ方なき君の  
手跡にて、拿破里に往くと認めあり、  
御名をさへ書添へ給へれば、おうなの云  
ふに任せて、旅行券と路用の金とをわた  
し候ひぬ。旅行券はベルナルドオに仔細  
を語りて、をぢなる議官に求めさせしも  
のに候。ベルナルドオは事のむつかしき  
を知りながら、我言を納れて、強ひてをぢ  
君を説き動し、趣に候。幾もあらぬ  
に、ベルナルドオが痕は名残なく癒え候  
ひぬ。彼人も君の御上をば、いたく氣遣  
居たれば必ず悪しき人と御思ひ做しなさ  
るまじく候。ベルナルドオは痕の痊えし  
後、我身を愛する由聞え候ひしかど、  
私はその低ならぬを覺りながら、君  
をおもふ心よりうべなひ候はざりき。  
ベルナルドオは羅馬を去り候ひぬ。私  
は直ちに拿破里をさして旅立候ひしに、

りき。我はしばし相對して物語しつれど、心に言はむと欲する事の、口に言ひ難ければ、問はるゝことあるごとに、あらぬ答をのみしたりき。ロオザは忽ち我手を把りて口を開きて云ふやう。おん身は深き憂に沈み居給ふとおぼし。われ等の君がまことの友たるを知り給はば、打開けて物語し給へと云ふ。われ。さなり。君は何事をも知り給ふならむ。ロオザ。否われは未だ何事をも知らず。マリアこそは聞きつこともあらめ。(マリアは鼻じろみて、その詞を遮らむとしたり。)われ。おん身二人には、われ又何事をか隠し候ふべき。初よりの事のもとすゑを打開けむ我が心やりなれば、煩はしけれど聞き給へとて、われは昔語をぞ始めける。よるべなき。孤なりし生立より、羅馬にてアモンチャタと相識り、友なりけるベルナルドを傷けて、拿破里に逃れ去りし慘劇まで、涙と共に語り出でしに、可憐なるマリアの掌を組合せて、我面を仰ぎ見るさま、我記憶の中に残れるフラミニアが姿に髣髴たり。われはマリアが面前にありて、ララが事、琅玕洞の事のみは、語ることを憚りたれば、直ちにエネチアにての再會の段に移りて、アモンチャタの末路を敘し畢りぬ。ロオザ。おん身の上に、さる深き關聯ある

べきをば、初め少しも知らざりき。さきの日尼寺の病室より、讀らぬ女の文とゞきて、今生死の際に在るものなるが、マリアに逢ひて申し残したき事ありといへば舟にてかしこに伴ひゆき、われは尼達の許に留まりて、マリアを病人の室に遣りぬ。マリア。かくてその人に逢ひ侍りぬ。記念の一封をばさきに渡しあはれせつ。我。アモンチャタはその時何とか申し候ひし。

マリア。人知れずこれをアントニオに渡し給へといひぬ。おん身の上をば、妹の兄の上を語るにむやうに語りぬ。爾時アモンチャタが唇は血に染まり居たり。死は遽に襲ひ至りて、アモンチャタはわが面をまもりつゝこときれ侍りと、語りもあへず、マリアは泣き伏したり。われは詞はあらで、マリアの手を握りつ。

われは寺院に往きてアモンチャタが爲めに祈禱し、又その墓に祈禱す。此地の墳域は、高き石垣もて水面より築き起されたるさま、いにしへのノアが舟の洪水の上に泛べる如し。草むらの中に黒き十字架あまた立てるあたりに歩み寄れば、わが尋ねる墓こそあれ。只是一片の石に、アモンチャタと彫り付けた。一基の十字架の上に、緑の色の猶鮮なる石柱の環を懸けたるは、ロオザとマリアとの手向なるべし。

われは墓前に跪きて、亡人の佛をしひび、更に頭を回して情あるロオザとマリアとに謝したり。

## 流 離

その頃ファビアン公子の書狀届きしに、文中公子のわがエネチアに留まること四月の久しきに至るを怪み、強ひてにはあらねど、我にミラノ若くはジェノワに遊ばむことを勧めたる一節あり。われつらく念ふやう。わが猶此地に留まれるは、そも何の故ぞや。此地にはけに兄弟に等しきボツジョあり、姉妹に等しきロオザ、マリアあれど、是等の交は永遠なるべきものにあらず。中にも女友二人の如きは、相見ることゝ我が悲哀の記憶を喚び醒すことを免れず。われは悲哀を懷いてエネチアに來ぬ。而してエネチアは更に我に悲哀を興へしなり。われは遽にエネチアを去らむと欲する心を生じて、そを告げむために、市長の家をおとづれた。

月光始めて渠水に落つころほひ、我は二女と市長の家の廣間なる、水に枕める出念ある處に坐し居たり。マリアはすでに一たび燈火を呼びしかど、ロオザがこの月の明きといふまゝ、



にかるべく候。アントニオの君よ、さきには我を思ひ棄て給へと申候へども、未練ともおぼさばおぼせ猶親しかりし人のみまかりしを思ひ給ふが如く、我を思ひ給はむことのみは望ましく存じ候。涙は讀むに隨ひて流れ、わが心の限の涙と化して融け去るを覺えたり。此より下は、かすかなる薄霞の痕新にして、數日前に寫されしものと知る。

苦を受ける月日も最早些子を餘し候のみと存じ候。今まで受けつるあらゆる快樂の聖母の御恵なると等しく、今まで受けつるあらゆる苦痛も亦聖母の御恵と存じ候。死は既に我胸に迫り候。血は我胸より漲り流れ候。いま一回轉して漏刻の水は傾け盡され申すべく候。人の傳へ候ところに依れば、エネチア第一の美人は君がいひなづけの妻となり居候由に候。私の死に臨みての願は、御二人の永く幸福を享け給はむことのみに候。あはれ、此數行の文字を託すべき人は、その人ならで又誰か有るべき。その人のわがしの請を容れて、こゝに來給ふべきをば、何故か知らねど、牢く信じ居候。

生死の境に浮沈し居る此の身の、一杯の清き水を求むべき手は、その人の手ならではと存じ候。さらば、アントニオの君よ。私の此土に在りての最終の祈禱、彼土に往きての最初の祈禱は、君が御上と、私の徒らに願ひて元果さず、その人の幸ありて成し遂げ給ふなる、君が偕老の契の上とに在るのみなることを、御承知下され度存じ候。今更練言めき候へども、聖母の我等二人を一つにし給はざりしは、其故なからずやは。私は世人にもてはやされ讃め稱へられて、慢心を増長し居候ひぬれば、君にして當時私を要り給ひなば、君の生涯は或は幸福を完うし給ふこと能はざりしにはあらずやと存じ候。さらば、アントニオの君よ。過ぎ去りしは苦痛、現然せるは安樂にして末期は今と存じ候。アントニオの君よ。又マリアの君よ。私の爲めに祈禱し給へかし。

アマンチヤタ

悲歎の極には聲なく涙なし。我は茫然として涙に濡れたる遺書を瞻視すること久しかりき。暫しありて、猶封中より落ち散りたりし一ひら

二ひらの紙を取り上げ見れば、一はわが拿破里に往くとしして、フルキアのおうなに渡し、筆の蹟あり。又一はベルナルドオがアマンチヤタに與へし文にして、負傷の爲めに床に臥したりし程の、懇なる看護の恩を謝し、今はよしなき望を絶ちて餘所の軍役に服せむとおもへば、最早羅馬にて相見ることあらじと書せり。嗚呼、おもひの外のことなるかな。アマンチヤタは初より我を戀ひたりしなり。我が拿破里に往くことを得しは、アマンチヤタの恵なりしなり。拿破里の旅店より書を寄せて、相見むことを求めしはアマンチヤタにしてサンタにはあらずしなり。その恩情、窮なきアマンチヤタは今や亡き人となりしなり。さるにてもアマンチヤタはマリアを病床に招き寄せて、いかなる事を物語りし。既にマリアをわがいひなづけの妻といへば、巷説は早くアマンチヤタの病床に聞え居りて、マリアさへ其口より、さがなき人の言草を聞きつるなるべし。再びマリアの面を見むは影蹤き限なれども、アマンチヤタの爲めにも我が爲めにも天使に等しきマリアに、一ことの謝辭を述べずして止まむやうなし。

舟を備ひて市長の家に往きしに、ロオザとマリアとは一と間の中にありて手爲事に餘念な

繹として、そのさまいと樂しげなれども、われは獨り心の無聊に堪へざりき。

白晝となりてより、我無聊は愈々甚だしければ、又車を驅りてこゝを立ち、一の平原に入りぬ。

綠草の鬱茂せるさまはポンチニイの大澤に譲らず。瀑布の如くなる大柳樹は古塚を掩ひ、所々に聖母の像を安じたる寶卓を見る。像の古りたるは色褪せて、これを圍める彩畫ある板壁さへ半ば朽ちて地に委ねたれど、中には聖母の丹粉猶鮮かなるものなきにあらず。御者はその古きに逢ひては顧みだにせねど、その新なるを見るごとに、必ず脱帽して過ぐ。われはその何の心なるを知らずして、唯々聖母の貴きすら、色褪せては人に崇めらるゝことなきを歎じたり。

キチエンツアを過ぎぬれど、バラチオ中興時代の名ある畫師が美術も光明を我胸の闇に投ずること能はざりき。エロナは始めて稍々我心を動したり。石級のコリゼエオに似たるありて、幸に兵燹を免れ、人をして小羅馬に入る感あらしむ。柱列の間なる廣き處は、今稱關となり、演戲場の中央には、板を列ね幕を張りて、假に舞臺を補理ひ、旅役者の興行に供せり。夜に入りて我は試に往きて看つ。エロナの市人の石榻に坐せるさまは、猶古のごとく

にて、演ずる所の曲をば、「ラ、ジュネレントオラ」と題せり。役者の群は、エネチアにて見しアマンチャタが組なりき。アウレリアはこよひも此樂曲の主人公に扮したり。一張の「コントロール」に氣服さるゝ若干の管絃なれど、聴衆は喝采の聲を惜まざりき。趨りて場を出づれば、月光遍く照して一塵動かず、古の劇場の石壁石柱は巋然として、今の破れ小屋のあなたに存じ、廣大なる黑影を地上に印せり。

我はカフレツチイ第を訪ひぬ。昔カフレツチイ、モンテキイの二豪族相爭ひて、少年少女の熱情を遮り斷ちしに、死は能くその合ふべからざるものを合せ得たり。シエクスピアアがものしつる「ロメオ、エンド、ジュリエット」の曲即ち是なり。此第はロメオが初てジュリエットに來り見えて共に舞ひし所にして、今は一の旅館となりぬ。われはロメオの夜なく通ひけむ石の階を踐みて、曾て盛に聲樂を張りてエロナの名流をつどへしことある大いなる舞臺に上りぬ。潤き窓の下鋪板に達するまでに切り開かれたる、丹青目を眩したりけむ壁畫の今猶微かに遺れるなど、昔の豪華の跡は思はるれど壁の下には石灰の桶いくつともなく並べ据ゑられ、鋪板には芻秣、藁などちりばひ、片隅には見苦

しき馬具と農具との積み重ねられたるを見る。まことに榮枯盛衰のはかなきこと、夢まぼろしはものかは。さればこの假の世を、フラミニアの厭ひしも、アマンチャタの去りぬるも、なかなか慰む方ありやといふべき。

月の末にミラノに着きぬ。新に交を求めむ心なければ、人の情の紹介幾通ありしを、一としてその宛名の家にとどくることなかりき。一夜「ラ、スカラ」座に入りて樂曲を聴きたり。帷を垂れたる六層の緞棚も、積あまりに大いにして客常に少ければ、却りて我をして一種の寂寥と沈鬱とを覺えしめき。奏する所の曲は「タツソ」にして、主なる女優はドニチエツチイといふものなりき。一折畢るごとに、客の喝采してあまたゝび幕の外に呼び出すを、愛らしき笑がほして謝し居たり。わが前世の眼は、この笑の底におそろしき未來の苦惱の潛めるを見て、あはれ此美人目前に死せよ、さらば世間もこれが爲めに泣くことなかくに少かるべく、美人も世を恨むことおのづから淺からむとおもひぬ。「バレットト」の舞には玉の如き輝き娘逆打連れて踊りぬ。われはその美しきを見るにつけて、血を嘔くおもひをなしつゝ、悄然として場を出でたり。

に、主客三人は猶月光の中に相對せり。マリアはロオザに促されて、穴居洞の歌を歌ひぬ。聲と情との調和好き此一曲は、清く軟かなる少女の喉に上りて、聞くものをして積水千丈の底なる美の窟宅を想見せしむ。ロオザ。この曲には吾節より外、別に一種の玲瓏たる精神ありとはおぼさずや。われ、海に宜給ふごとし。若し精神といふもの形體を離れて現せば、應に此詩の如くなるべし。マリア。生れながらに目しなる子の世界の美を想ふも亦是の如し。ロオザ。さらば口開きての後に、實世界に對せば、初の空想の非なることを知るならむ。マリア。實世界は空想の如く美ならず。されど又空想より美なるものなきにあらず。語頭は直ちにマリアが初め盲目なりし事に入りぬ。こはボツジョが早く我に語りしところなれども今はわれ二女の口より此物語を聞きつ。ロオザは兄の手術を讀め、マリアも亦その恩恵を稱へたり。マリアの云ふやう。目しひなりし時の心の取償ばかり奇しきは莫し。先づ身におぼゆるは日の暖さ、手に觸るゝは神社の圓柱のたいなる、霸王樹の葉の潤き、耳に聞かばさまゝの人の聲音などなり。一の官能の闢くるものは、その有るところの官能もて無きところのものを補ふ。人の

天青し、海青し、華の花青しといふを聴きて、われは華の花の香を聞き、そのめでたきを推し擴めて、天のめでたかるべきをも海のめでたかるべきをも思ひ遣りぬ。祖根の光明闇きときは、意根の光明却りて明なるものにやといふ。これを聞く我は、テラが髪に插みし華の花束と、ベスツム祠の圓柱とを憶ひ起すことを禁ずること能はざりき。語頭は轉じて自然の美に入り、ロオザは拿破里の山水の景の慕はしさを説き出せり。われはこの好機會を得て、エネチアを去る意を洩しつ。そは思ひも掛けぬ事かなとロオザ訝れば、さては最早再び此地には來給ふまじきかとマリア氣遣ふさまなり。否々、ミラノまで往かば、又此地を経て羅馬に還らむとこそ思ひ候へと我は答へつれど、實はまだこを立ちていつ方に往かむと、おもひ定めざりしなり。

わがエネチアに別るゝ涙を見せしは、アマンチヤタが墓とマリアが居間とのみなりき。墓に詣てゝは、石上に残れる輪廓の一葉をみて、夾袋の中に藏めつ。われは此石の下に、唯々一團の塵を留むるのみなるを知る、アマンチヤタが魂の聖母の御許に在りその影の我胸中に在りて、此石の下なる塵のわが執着すべき價ある

ものにあらざるを知る。されどわれは猶低徊して此方數尺の地を去ること能はざりき。市長の家に往きては一家の人々とボツジョとの饗宴を受けたり。市長は三鞭酒の盃を擧げて別を告げ、ボツジョはめぐる車の云々といふ旅の曲と、自由なる自然に遊ぶ云々といふ鳥の歌とを唱ひぬ。ロオザは、君若し妻を還り給はば、曾に我家に來給へ、我は吾が物語の中なる彼し人を愛する如く、君の伴ひ來給はむ其人をも愛せむといひ、マリアは唯々健かに樂げにて、又我家をおとづれ給へといひぬ。

ボツジョは例の「ゴンドラ」の舟にて、フジナまで送らむとて、我と共に立出づれば、ロオザとマリアとは出急に立ちて、粉帳を打振りぬ。別に臨みてボツジョは聲高く笑ひつゝ、許嫁の女極まらば、彼約束を忘るなといひぬ。われは、けふさる戲言いふことかはと戒めつゝも、心の中にその笑顔の涙を掩ふ假面なるをおもひて、尙に友の情誼に感じぬ。

車は情なくして走り、一塵の縁を成せるフレンドの側を過ぎ、車楊の列と美しき別業とを見、又遠山の黛の如きを望みて、夕暮にハツアに着きぬ。聖アントニウスの七穹隆は、恰も好し月光に耀けり。柱列の間には行人絡



ロオザを敬すると殊ならざるを見ながら、譲りて我をもてマリヤに戀するものとなすなれ。

われは逍遙の爲めに市の外、廓より出て、武具の辻(ピアツツア、ダルミイ)を過ぎ、拿破崙の凱旋塔の下に至りぬ。世のいはゆるセムビ

オオネの門(ポルタ、セムビオオネ)とは是なり。

塔は猶未だ其工事を終らず、板がこひを繞らし

て、これに格子戸を装ひたり。戸より入りて見

れば、新に大理石もて彫り成せる大いなる馬二

頭地上に据えられ、青銅はほしいまゝに長じ

て鉄石を掩はむと欲す。四邊には既に刻める柱

頭あり、粗ごなしたる石塊あり。許多の工人

は繞るが如くに來往せり。

時に一の旅人ありて我を距ること數歩の處に

立ち、手簿を把りて導者の言を記せり。年の頃

は三十ばかりなるべし。胸には拿破崙の勳章二

つを懸けたり。此旅人の迫持の石柱を仰ぎ見る

に及びて、我はそのベルナルドオなるを識りぬ。

彼方も亦直ちに我を認め得つとおぼしく、何の

猶豫ふさまもなく、我側に歩み寄りて我胸を抱

き、めづらしきかな、アントニオ、われ等の相別れし夕は賑やかなりき、われ等は祝砲をさへ放ちたり、されど想ふに我等の友情は舊の如くなるべしといひぬ。我は肌を粟を生ずる心地しつ

つ、纔に口を開きて、さてはベルナルドオなりしよ、圖らざりき、おん身と伊太利の北のはてなるアルビイ山の麓にて相見むとはと答へつ。

我等は共に歩みて劇場の邊に往き、轉じて市の廓に入りぬ。ベルナルドオは追すがら語りて

いふやう。汝は此地を指してアルビイ山の麓といへり。われはまことのアルビイの巔に登りて世界の四極を見たり。曩に拿破崙に在りし時、獨逸士官等の、瑞西の山水を説くを聞き、一たび往いて觀むことを願ふこと漸く切なるに、

汽船もて速し易きジェノワを距ること遠くもあらぬを知れば意を決して往くこととしつ。シヤムニイの露をも渡りぬ。モンブランの頂にも、

ユングフラウの頂にも登りぬ。現にユングフラウは「ベルラ、ラガツツア」に美少女なれど、

かくまで冷かなる女子は復た有るべからず。これよりはジェノワに往きて、約束せし妻とその

父母とを訪はむとす。もはや眞面目なる一家のあるじとならむも遠からぬ程なるべし。汝若し我が昔日の生涯を語らず、彼の馴るゝ小鳥の

事、愛らしき歌妓の事などを秘せむと誓はば、われは汝を伴ひてジェノワに往くべし。いかに三日の後に我と共に發足せずやといひぬ。われ

不々、我は明日此地を立たむとす。ベルナルドオ。そは何處へ往くにか。われ。エネチアに往くなり。ベルナルドオ。汝が漫遊の日程は、

よも變更を容さぬにはあらざるべし。枉げて我言に従はずや。われはベルナルドオにかく説き

勧められて、反復しておのれのエネチアに往かざるべからざるを辯じ、果は自らこの漫然日を

衝いて發せし語の、實にその故あるが如きを覺ゆるに至りぬ。

われは客舟に返りて、不可思議なる力に役せらるゝものゝ如く、倉皇我行李を整へ、ある

じに明朝の發轍を告げたり。此夜は臥床に入れども、胸打ち騒ぎて熱を病むものゝ如く、眼を

なきざること久しかりき。翌朝ベルナルドオを訪ひて、我が爲めに善くその未來の妻に傳へむ

ことを頼み聞え、忙はしく車を驅りてエネチアに向ひぬ、二月前に去りしエネチアに。

### 心疾身病

車はフジナに到りぬ。われは又泥深き海、灰色の石垣、「マルクス」寺の塔を望むことを得たり。怪むべし、われは足一たびエネチアの地を踏むと齊しく、吾心の劇變せるを覺えき。今までエネチアへ、エネチアへと呼びし意欲は俄に迹を載めて、一種の言ふべからざる羞慚の情生

ミラノの客舎の無聊は日にけにまきり行き  
て、市長の家族も、親友と稱せしボツジョも我  
書に答ふることなかりき。われは或ときは蔭多  
き寓をそぐりありきし、或ときは一室に枯坐し  
て新に戯曲の稿を起しつ。曲の主人公はレオ  
ナルドオ、ダ、キンチなりき。レオナルドオの住  
みしは此地なり。その不朽の名畫晩餐式はこゝ  
に胚胎せしなり。その戀人の尼寺の垣内に隠れ  
て、生涯相見ざりしは、わがフラミニアに於け  
る情と古今同揆なりとやいはまし。

われは日ごとにミラノの大寺院に往きぬ。此  
寺はカルララの大大理石もて、人の力の削り成し  
し山ともいふべく、月あかき夜に仰ぎ見れば、  
峻潔雪を敷く上半の屋蓋は、高く碧空に聳え  
て、幾多の簷角、幾多の塔尖より石人の形の現  
れたるさま、この世に有るべきものともおもは  
れず。晝その堂内に入れば、採光の程度ほど羅  
馬の「サン、ピエトロ」寺に似て、五色の窓硝子  
より微かに洩るゝ日光は、一種の深秘世界を幻  
出し、人をして唯一の神こゝに在すかと觀ぜし  
む。ミラノに来てより一月の後、我は始めて此寺  
の屋上に登りぬ。日は石面を射て白光身を繞  
り、こゝの塔かしこの龕を見めぐらせば、宛然  
立ちて一の大達に在るごとし。許多の聖者戯

身者の像にして、下より望み見るべからざるも  
のは、新に我目前に露呈し來れり。われは絶頂  
なる救世主の巨像の下に到りぬ。ミラノ全都の  
人煙は螺旋の如く我脚底に畫かれたり。北に  
は暗黒なるアルビイの山聳え、南には稍々低き  
藍色のアペンニノ横はりて、此間を隔むるもの  
は、唯と縁なる郊原のみ。譬へばカムパニアの  
野を變じて一の花井多き園圃となしたらむが如  
し。われは臆を決して東のかたエネチアを望  
みたるに、一群の飛鳥ありて、列を成してかな  
たへ飛び行くさま、一片の帛の風に翻弄せらる  
るに似たり。われはマリアを憶ひ、ロオザを憶  
ひ、ボツジョを憶へり。昔幼かりし時、母とマ  
リウチアとに伴はれて、ネミの湖に往きしか  
へるさ、アンジェリカが我に物語りし事こそあ  
れ。その物語は今我空想に浮び來ぬ。オレワア  
ノにテレザといふ少女ありき。戀人なるジユウ  
ゼツペが山を踰えて北の國に往きしより、戀慕  
の念止むことなく、日を経るに従ひて瘦せ衰  
へぬ。フルキアの老嫗はテレザの髪とその藏め  
居たりしジユウゼツペの髪とを銅鏡に投じて、  
奇しき藥師と共に煮ること數日なりき。ジユウ  
ゼツペは他郷に在りしが、我毛髪の從鏡中に入  
ると齊しく、今まで忘れ居つるテレザの慕はし

くなりて、醒めては現に其聲を聞き、寝ては夢  
に其姿を視そぐり旅のやどりを立出で、  
おうなが鏡の下に歸りぬといふ。エネチアには  
我髪を煮る鏡あるにあらねど、わがこれを憶ふ  
情は、恰も幻術の力の左右するところとなれる  
が如くなりき。われ若し山國の産ならば、此情  
はやがて世に謂ふ思鄉病なるべし。(歐洲人は  
思鄉病は山國の民多くこれを患ふとなせり。)さ  
れど父エネチアのわが故郷ならぬを奈何せむ。  
われは依然として此寺の屋上より降りぬ。  
客舎に歸れば、卓上に一刺の書あるを見る。  
こはボツジョが許より來れるなり。これを讀む  
に、袂を分ちてより第二の書を作る云々と書せ  
り。さらば友の初の一書は我手に入るに及ばず  
して失はれしなるべし。エネチアには何の變り  
たる事もあらねど、マリアは病に臥したり、そ  
の病のさま一時は性命をさへ危くすべくおもは  
れぬれど、今は早や恢復に近し。猶戶外には出  
でずとなり。本文には、例の戲言多く物して、  
まだミラノの少女に擒にせられずや、三鞭酒を  
な忘れそなど云へり。われは讀み畢りて、ボツ  
ジョが滑稽の天性にして、世の人のそれを假面と  
看做すことの誤れるを信ぜむとせり。さればこ  
そ同じ無稽の巷説は、わがマリアを敬すること

は人影早や絶えたり。われは屍をほとくと蔵きしに、寺僧は我が爲めに門を開きつ。それは曾てわが市長に伴はれて來ぬる時、我にチヤノとカノリとの墓を指し教へしことあれば、猶我面を見知り居たりしなり。寺僧は我心を計り得て、君は遺骸を見に來給ひしならむ、今は猶寶卓の前に置かれたれど、あすは箱に藏めらるべしとて、燭を點して我を導き、鑰匙取り出で、側なる小き戸を開きつ。寺僧と我との足音は、穹窿の間に寂しき反響を喚起せり。寺僧の柩はかしこに指して、立ち留まるがまゝに、我はひとり長廊を進めり。聖母の御影の前に、一燈微かに燃え、カノワが棺のめぐりなる石人は臆氣なる輪廓を畫けり。寶卓に近づけば、卓前に三つの燈の點せられたるを見る。草花のかをり高き邊、覆はざる柩の裏に、唯き花辦の紫に埋もれたる屍こそあれ。長なる黒髪を額に縮れて、これにも一束の薔花を插めり。是れ瞑目せるマリアなりき、我が夢寐の間に忘るゝことなかりしラナなりき。われは一聲、ララ、など我を棄て去れると叫び、千行の涙を屍の上に灑ぎ、又聲ふりしぼりて、近け、わが心の妻よ、われは誓ひて復た此世の女子を娶らじと呼び、我指に嵌めし環を抽きて、その屍の

指に還し、頭を俯して屍の額に接吻しつ。爾時我血は水の如く冷えて、五體戰ひをのゝき、夢とも現とも分かね間に、屍の指はしかと我手を握り屍の唇は徐かに開きつ。われは毛髪倒に豎ちて、卓と柩との皆獨樂の如く旋轉するを覺え、身邊忽ち常闇となりて、頭の内には只、奇しく妙なる音樂の響を聞きつ。

忽ち温なる掌の我額を摩するを覺えて、再び目を開きしに、燈は明かに小き卓の上を照し、われは我枕邊の椅子に坐し、手を我頭に加へたるもの、ロオザなるを認め得たり。又一人の我臥床の下に蹲まりて、もろ手もて顔を掩へるあり。ロオザの我に一匙の藥水を薦めつつ熱は去れりと云ふ時、蹲れる人は徐かに起ちて室を出でむとす。われ。ララ、暫し待ち給へ。われは夢におん身の死せしを見き。ロオザ。それは熱のなし、夢なるべし。われ。否、我夢は夢にして夢に非ず。若しこれをしも夢といは、人世はやがて夢なるべし。マリアア。われはおん身のララなるを知る。昔はおん身とベスツムに相見、カフリに相見き。今この短き生涯にありて、幸にまた相見ながら、爭でか名告りあはて止むべき。我はおん身を愛す。語り畢りて手をさし伸ばせば、マリアは跪きて

我手を握り、我耳背に接吻したり。數日の後、我はマリアと柑子の花香しき出窓の前に對坐して、この可憐なる少女の清淨なる口の、その清淨なる情を語るを聞きつ。少女の語りけらく。わが幼かりし時は、唯、日の暖きを知り、草花の香しきを知るのみなりき。或時、チンガニイ族のおうなありて、我目の必ず開く時あるべきを告げしが、その時期はいつなるべきか、絶て知るよしあらざりき。ベスツムの古銅の下にて、おん身の唇の暖きこと、日の暖きが如くなるを覺えし夕、彼おうな夢に見えて、汝のやしなひ親なるアンジェロとともに、カプリの島なる窟に往け、アンジェロは富貴を喪べく、汝はトビアスの如く、(舊約全書を見よ)光明を獲べしと云ひぬ。醒めて後アンジェロに語れば、これも同じ夜に同じ夢を見き。アンジェロは我を伴ひて島に渡りしに、天使はおん身に似たる聲して我名を呼び、我に藥師を與へき。歸りて之を授むとする時、ロオザが兄なる人我等の仕める草寮に憩ひて、我目の開くべきを見窮め、我を拿破崙に率て往きぬ。手術は功を奏せり。ロオザが兄なる醫師は、我を養ひて子となし、希臘にてみまかりし子の名を取りて、我をマリアと呼びぬ、ある日



じ、人の汝は何故に復た來れると問はひ、辭の答ふべきなからむと氣遣ふやうになりぬ。

われは直ちに袴袴に入りて、衣服を改め、身の疲れたるをも顧みで、市長の家に往きぬ。戸の首を被れる屋簷と高き窓とに近づくとき、怪しき映象は我胸に浮びぬ。そはわれ若しマリアが結婚の席に往きあはひかといふことなりき。われは此念の頭を拾へ来るを見て、又急にこれを抑へ、否、われは求婚の爲めに往くならねば、そも亦妨なしと云ひぬ。されど我心は遂に全く平なること能はざりき。

門を叩けば僕出で迎へて、あるじはおん身來まされ、案内することを須みされと宜給ひぬといふ。そのさま吾が至るを期したるに似たり。廣間には幌を卸して、閑として物音を聞かず。われは是れデステモナが悲歎せし處なるべし、されどオテルロの苦痛はこれより甚しかりしならむとおもひぬ。わが此時恰も此念をなし、も亦頗るあやしき事なり。既にして導かれてロオザが房に入るに、こゝも幌を垂れて日光を遮りたれば、外より入るものはその暗きに驚かむとす。わがミラノにて覺えし奇しき情、我を驅りてエネチアへ來させし奇しき情は、忽ち起りて、その幻術に似たる力は一層の強さを加

へ、我手足は震栗せり。われは手もて壁を支へ、僅に地に倒れざることを得たり。

主人は温顔もて我を迎へ、我身を回して、再見の喜を述べたり。われは二婦人の何處に在るを問ひぬ。彼等は親族と共にハツアに住きたり、二三日の後ならでは歸り來ざるべしといふ。その面色その態度を察するに、何とやらん言を構へて我を欺く如くなり。されどわれは又此人の平生を顧みて、わが疑の邪推なるべきをおもへり。主人は我を留めて晩餐を供せり。卓に就きたる間、我は限なき寂寞を感じ、又主人の面の爽かならざるを覺えぬ。われはおそるおそるその不興の因由を問ひしに、主人頭を掉りて、否、益なき訴訟の事ありて、些の不安を感じするに過ぎず、ボツジヨは久しくおとづれず、おん身さへ健康すぐれ給はざる如し、兎も角も此一盃を傾け給へといひつゝ、我前なる杯に葡萄酒を注がむとせしに、忽ちその手を駐めて、おん身は心地悪しきにあらずやと叫びぬ。そは我面色の土の如く變じたればなるべし。われは室内の物の旋風の如く動搖するを覺えて、そのまゝはたと地に倒れぬ。

此より我は半醒半睡の間にあること淺きなるを知らず。市長は時として我臥床の傍に坐し

て、われに心を安んじて全快を待たむことを勧め、レオザの遠からず來りて病を癒すべきを告げたり。或日家の内騒がしく、人の到着しつと覺しきさまなりしに、忽ちロオザは目前に來ぬ。その面には憂の色を帯びたり。その日の暮つかた、われは家内の又さきにも増して物騒がしきを覺え、側なる奴婢に問はむとするに、一人として我に答ふるものなし。階下の室には人多くゆき、する足音頻に、屋外の大渠には小舟の漕音賑はしかりき。われは暫し目濁みしに、ふとマリアの死せることを知り得たり。さきにはボツジヨ我にマリアの病を告げて、その病は癒えぬと云へり。されど病は所發して、マリアは既に死し、家人は我に秘して、こよひそを葬るなり。われは明かにロオザの祈禱の聲を聞き、ロオザの草花もて飾れる棺は明かに心目の前にあらはれぬ。忽ち我は病の既に去りて力の既に復せるを感じ、蹶然として臥床より起ち、人の我側に在らざるに乘じて、壁に懸けたる外套を纏ひ、岸邊なる小舟を招きて、「デイ、フアラリイ」の聲に往かむことを命じつ。こは市長が累世の墓ある處にして、われは曾て一たび其墓を窺ひしことありき。夜は暗くして、

「アエ、マリア」の鐘と共に閉せられたる門の前に

さにて海底に達し、その門闕の幅も亦略々百  
 フラツチヨリ

伊尺ありとぞいふなる。さればその日光は  
 積水の底より入りて、洞窟の内を照し、窟内の  
 萬象は皆一種の碧色を帯び、鱗の水を打ちて  
 飛沫を見るごとに、紅薔薇の花弁を散らす如く  
 なるなれ。ララは合掌して思を凝らせり。その  
 思ふところは必ずや我と同じく、曾て二人のこ  
 こに會せしことを憶ひ起すに外ならざるべし。  
 彼アンジェロの獲つる金は、むかし人の魔穴を  
 怖れて、敢て近づくとばかりし時、海賊の匿  
 しおきつるものなるべし。

巖穴の一點の光明は忽ち失せて、第二の舟  
 は窟内に入り來りぬ。そのさま水底より浮び出  
 づるが如くなりき。第三、第四の舟は相繼いで  
 至りぬ。凡そこゝに集へる人々は、その奉ずる  
 所の教の新舊を問はず、一人として此自然の奇  
 觀に逢ひて、天にいます神父の功德を稱へざる  
 ものなし。

舟人は俄に潮満ち來と叫びて、忙はしく鰭を  
 搖かし始めつ。それは満潮の巖穴を塞ぐを恐れて  
 なりき。遊人の舟は相衝みて洞窟より出で、我  
 等は前に渺茫たる大海を望み、後に琅玕洞の石  
 門の漸く細りゆくを見たり。

### オフエリヤの歌

(水沫集の  
 於面影より)

いづれを君が戀人と  
 わきて知るべきすべやある  
 貝の冠とつく杖と  
 はける靴とぞしるしなる

かれは死にけり我ひめよ  
 渠はよみぢへ立ちにけり  
 かしらの方の苔を見よ  
 あしの方には石たてり

板をおほふきぬの色は  
 高ねの雪と見まがひぬ  
 涙やどせる花の環は  
 ぬれたるまゝに葬りぬ

### 花薔薇

(前同)

わがうへにしもあらなくに  
 などかくおつるなみだも  
 ふみくだかれしはなさうび  
 よはなれのみうきよかは

### ミニョンの歌

(前同)

#### 其一

「レモン」の木は花さきくらき林の中に  
 こがね色したる柑子は枝もたわゝにみのり  
 晴れて青き空よりしづやかに風吹き  
 「ミルテ」の木はしづかに「ラウレル」の木は高

くもにそびえて立てる國をしるやかなたへ  
 君と共にゆかまし

#### 其二

高きはしらの上にやすくすわれる屋根は  
 そらたかくそばだちひろき間もせまき間も  
 皆ひかりかゝやぎて人がたしたる石は  
 ゑみつゝ己れを見てあないとほしき子よと  
 なぐさむるなつかしき家をしるやかなたへ  
 君と共にゆかまし

#### 其三

立ちわたる霧のうちに驢馬は道をたづねて  
 いなゝきつゝさまよひひろきほらの中には  
 もゝ年経たる龍の所えがほにすまひ  
 岩より岩をつたひしら波のゆきかへる  
 かなつたかしき山の道をしるやかなたへ  
 君と共にゆかまし

アンジェロは、忽ち醫師のもとに来て、われは命の久しからざるべきを知りぬ。我が貯へし金を譲らむ人ララならではあらざるべし、先づこれをあげまゐらせむとて、金あまた取出て逗留すること數日にして眠るが如くみまかりぬ。われはさきの夜の席にて、おん身の舟人の不幸を歌ひ給ふを聞き、おん身の聲を聞き知りて、直ちにおん身の脚下に跪きぬ。アモンチャタが末期の詞に我に希望の光明を與へしと、おん身のつれなき旅立の我を病に臥さしめしとは、おん身自ら推し給へといひぬ。

われはマリアと贊卓の前に手を握りぬ。おほよそ市長の家にゆきかふものは、皆歡喜の聲を發しつれど、其聲の最も大いなるはポツジョなりき。越ゆること二日にして、我等はロオザと俱に田舎の別墅に移りぬ。こはアンジェロが遺産もて買ひしものなりき。ポツジョは一書を我別墅に寄せて、飄然としてエネチアを去りぬ。その書には、唯左の數句あるのみなりき。曰く、我は汝と賭して贏ちたり、されど實に贏ちしは我に非ざりきと。憐むべし、ポツジョが意中の人は、即亦我意中の人なりしなり。

フアビアニ公子とフランチェスカ夫人とは、わが好き妻を得しを喜び、かの腹黒きハツパス、

ダアダアさへ皺ある面に笑を湛へて、我新婦を祝したり。わが昔の知人の儘に生き残れるは、西班牙磔の下なるベツボのをぢのみにて、その「ボン、ジヨオルノ（好日）」の語は猶久しく行人の耳に續くるべし。

### 琅玕洞

千八百三十四年三月六日の事なりき。旅人あまたカブリ島なるバガニイが客令の一室に集ひぬ。中にカラブリア産の一美人ありて、群客の目を眩せり。その美しき黒き瞳はこれに右手を借したる丈夫の面に注げり。是れララと我となり。吾等は夫婦たること既に三年、今エネチアに至る途上、再び此島に遊びて、昔日奇遇の跡を問はむとするなり。室の一隅には、又一老婦のもる手を幼女の肩に掛けたるあり。容貌魁偉なる一外人この幼女を愛する餘りに、覺束なげなる伊太利語もてその名を問ふに、幼女は遽に答ふべくもあらねば、老婦代りてアモンチャタと答へつ。こはララが生みし子に附けし名にて、そを外人に告げたるはロオザなり。

われ進みて之と語を交へて、その璉馬人なるを知りぬ。嗚呼、是れ畫工フェデリゴと彫匠トオルワルトゼンとの猶人なり。フェデリゴは今

故郷に在り、トオルワルトゼンは猶馬に留れりと聞く。現に後者が技術上の命脈は斯土に在れば、その久しくこゝに居るもまた宜なるかな。

我等は群客と共に岸の下りて舟に上りぬ。舟はおの／＼二客を舳と艫とに載せて、漕手は我との乗りたるは眞先に進みぬ。カブリ島の級狀をなせる葡萄園と橄欖林とは忽ち跡を沒して、我等は矗立せる岩壁の人に導ゆるを見る。綠波は石に觸れて碎け、紅花を開ける水草を洗へり。

忽ち岩壁に一小隙あるを見る。その大さは舟を行るに堪へざるものゝ如し。我は覺えず聲を放ちて魔穴と呼びしに、舟人打ち微笑みて、そは昔の名なり、三とせ前の事なりしが、獨逸の畫工二人ありて洞ぎて穴の内に入り、始めてその景色の美を語りぬ。その畫工はフリスとコオピツシュとの二人なりきと云ひぬ。

舟は石穴の口に到りぬ。舟人は舳を棄て、手もて水をかき、われ等は身を舟中に横べしに、ララは屏息して緊しく我手を握りつ。暫しありて、舟は大穹窿の内に入りぬ。穴は海面を抜くこと一併尺に過ぎねど、下は百併尺の深



き事を見むも知られず。おん連れの方と共に、こなたへ来たまはずや。」と笑みつゝ、勸むる、その聲の清きに、いままれ客は耳傾けつ。

「マリイの君の居給ふ處へ、誰か行かざらむ。人々も聞け、けふ此ミネルワの仲間に入れむとて伴ひたるは、巨勢君とて、遠きやまとの畫工なり。」とエクステルに紹介せられて、隨來ぬる男の近寄りて會釋するに、起ちて名乗りなどするは、外國人のみ。さらぬは坐したる儘にて答ふれど、侮りたるにもあらず、此仲間の癖なるべし。

エクステル、「わがドレスデンなる親族訪ねにゆきは人々も知りたり。巨勢君にはかしこなる畫堂にて逢ひ、それより交を結びて、こたび巨勢君、こなる美術學校に、しばし足を駐めむとて、旅立ち玉ふをり、われも俱にかへり路に上りぬ。」人々は巨勢に向ひて、はる／＼來ぬる人と相識れるよこびを陳べ、さて「大學にはおん國人も、をり／＼見ゆれど、美術學校に來たまふは、君がはじめなり。けふ着きたまひしことなれば、『ピナコテエク』また美術會の畫堂なども、まだ見玉はじ。されど餘所にて見たまひし處にて、南獨逸の畫を何とか見たまふ。こたび來たまひし君が目的は奈何」など

口々に問ふ。マリイはおしとめて、「しばししばし、かく口を揃へて問はるゝ、巨勢君とやらむの迷惑、人々おもはずや。聞かむとならば、靜まりてこそ。」といふを、「さて女主人の嚴しさよ。」と人々笑ふ。巨勢は調子こそ異様なれ、拙からぬ獨逸語にて語らういぬ。

「わがミュンヘンに來しは、このたびを始とせず。六年前にこゝを過ぎて、索遜にゆきぬ。そのをりは『ピナコテエク』に懸けたる畫を見しのみにて、學校の人々などに、交を結ぶことを得ざりき。そは故郷を出でし時よりの目あてなるドレスデンの畫堂へ往かむと、心のみ急がれしゆゑなり。されど再びこゝに來て、君等がまゝとゐに入ることとなりし、その因縁をば、早く當時に結びぬ。」

「大人氣なしといひけたで聞き玉へ。甜肉の祭はつる日の事なりき。『ピナコテエク』の館出でし時は、雪いふ晴れて、街の中道なる竝木の枝は、一つ／＼薄き氷にてつゝまれたるが、今點ぜし街燈に映じたり。いろ／＼の風したる衣を着て、白くまた黒き百眼掛けたる人々群をなして往來し、こゝかしこなる窓には毛氈垂れて、物見したり。カル、の辻なる『カッフェエ、ロリアン』に入りて見れば、おもひ／＼の假裝色を

争ひ、中に雜れる常の衣もはえある心地す。みなこれ、コロッセウム、ピクトリヤなどいふ舞踏場のあくを待ちたるなるべし。

かく語る處へ、胸あてにつづけたる白前垂掛けし下女、麥酒の泡だてるを、ゆり越すばかり盛りたる例の大杯を、四つ五つづゝ、とつ手を寄せてもろ手に握りもち、「新しき梅よりとおもひて、遅うなりぬ。許したまへ。」とことわりて、前なる杯飲みほしたり人々にわたすを、少女、「こゝへ、こゝへ」と呼びちかづけて、まだ杯持たぬ巨勢が前に置かす。巨勢は一口飲みて語りつぎぬ。

「われも片隅なる一榻に腰掛けて、賑はしきさま打見るほどに、門の戸あけて入りしは、きたなげなる十五ばかりの伊太利栗うりにて、焼栗盛りたる紅筒を、堆く積みし箱がいこみ、『マロオニイ、セニヨレ』。栗めせ、君と呼ぶ聲も勇ましき、後につきて入りしは、十二三と見ゆる女の子なりき。舊びたる煙匠頭巾、ふか／＼と被り、凍えて赤うなりし兩手さしのべて、淺き日籠の縁を持ちたり。目籠には、常盤木の葉、敷きかされて、その上に時ならぬ華花の束を、愛らしく結びたるを載せたり。『ファイエルヘン、ゲフェルリヒ』(すみれめせ)と、うなだれたる

# うたかたの記

上

幾頭の獅子の捲ける車の上に、勢よく突立

ちたる、女神パワリアの像は、先王ルウドキヒ

第一世が此凱旋門に据ゑさせしなりといふ。そ

の下よりルウドキヒ町を左に折れたる處に、

トリエント産の大大理石にて築きおこしたるおほ

いへあり。これパワリアの首府に名高き見もの

なる美術學校なり。

校長ピロツチイが名は、をちこちに鳴りひゞ

きて、獨逸の國々はいふもさらなり、新希臘、

伊太利、璉馬などよりも、こゝに來りつどへる

彫工、畫工數を知らず。日課を畢へて後は、學

校の向ひなる、「カツフェエ、ミネルワ」といふ

店に入りて、珈琲のみ、酒くみかはしなどして、

おもひくゝの戯す。こよひも瓦斯燈の光、半

ば開きたる窓に映じて、内には笑ひさぐめく聲

聞ゆるをり、かどにきかゝりたる二人あり。

先に立ちたるは、かち色の髪のそゝけたるを  
厭はず、幅廣き襟飾斜に結びたるさま、誰が

目にも、ところの美術諸生と見ゆるなるべし。

立ち止りて、後なる色黒き小男に向ひ、「こゝ

なり」といひて、戸口をあけつ。

先づ二人が面を撲つたばこの烟にて、遽に

入りたる日には、中なる人をも見わきがたし。

日は暮れたれど暑き頃なるに、窓悉くあけ放

ちはせで、かゝる烟の中に居るも、習となり

たるなるべし。

「エクステルならずや、いつの間にか歸りし。」

「なほ死なでありつるよ、」など口々に呼ぶを聞

けば、彼諸生はこの群にて、馴染あるものなら

む。その間、あたりなる客は珍らしげに、後

につきて入來れる男を見つめ居たり。見つめら

る人は、座客のなめなるを厭ひてか、暫し肩

根に皺寄せたりしが、とばかり思ひかへしゝに

や、僅に笑を帯びて、一座を見渡しぬ。

この人は今着きし汽車にて ドレスデンより

來にければ、茶店のさまの、かしことゝと異  
なるに目を注ぎぬ。大理石の圓卓幾つかある  
に、白布掛けたるは、夕餉畢りたる迹をまだか

たづけざるならむ。裸なる卓に倚れる客の前

に据ゑたる上やきの盃あり。盃は圓筒形に

て、銅德利四つ五つも併せたる大さなるに、弓

なりのとつ手つけて、金蓋を蝶番に作りて覆ひ

たり。客なき卓に珈琲碗置いたるを見れば、

みな倒に伏せて、絲底の上に砂糖、幾塊か

盛れる小皿載せたるをかし。

客はみななりも洋菓もさまゝなれど、髪もけ

づらず、服も整へぬは一樣なり。されどあなが

ち卑しくも見えぬは、流行理想世界に遊ぶやか

らなればならむ。中にも際立ちて賑しきは中央

なる大卓を占めたる一群なり。餘所には男客

のみなるに、獨こゝには少女あり。今エクステ

ルに併はれて來し人と目を合はせて、互に驚

きたる如し。

來し人はこの群に珍らしき客なればにや。ま

た少女の姿は、初めて逢ひし人を動かすに餘あ

らむ。前此廣く飾なき斬を被りて、年は十七八  
ばかりと見ゆる顔はせ、エヌスの古彫像を欺け  
り。そのふるまひには、自ら氣高き處ありて、  
かいなでの人と覺えず。エクステルが隣卓な  
る一人の肩を拍ちて、何事かを語居たるを呼び  
て、「こなたには面白き話一つする人なし。此  
様子にては骨牌に近れ球蹴に走るなど、忌はし

し時は、モンゴリア形の狭き目も光るばかりなりき。「いしくも語りけるかな」と呼ぶもの二人三人。エクステルは冷淡に笑ひて閑居たりしが、「汝たちも其下圖見にゆけ、一週が程には巨勢君の『アトリエ』とゝのふべきに」といひき。マリイは物語の半より色をたがへて、目は巨勢が唇にのみ注ぎたりしが、手に持ちし杯さへ一たびは震ひたるやうなりき。巨勢は初此まゝとゝに入りし時、已に少女の我すみれうりに似たるに驚きしが、話に聞きほれて、こなたを見つめたるまなざし、あやまたず是れなりと思はれぬ。こも例の空想のしわざなりや否や。

物語畢りしとき、少女は暫し巨勢を見やりて、「君はその後、再び花うりを見たまはざりしか」と問ひぬ。巨勢は直ちに答ふべき言葉を得ざるやうなりしが、「否。花賣を見し其夕の汽車にてドレスデンに立ちぬ。されどなめなる言葉を咎め給はずばきこえ侍らむ。我すみれうりの子にもわが『ロオレイ』の畫にも、をりくたがはず見えたまふはおん身なり。」

この群は聲高く笑ひぬ。少女「さては書額ならぬ我々と、君との間にも、その花うりの子立てりと覺えたり。我を誰とかおもひ玉ふ。」起ちあがりて、眞面目なりとも戯なりとも、知ら

れぬ様なる聲にて、「われはその華花うりなり。君が情の報はかくこそ。」少女は卓越しに仰びあがりて、俯きゐたる巨勢が頭を、ひら手にて抑へ、その額に接吻しつ。

この騒ぎに少女が前なりし酒は覆へりて、裳にかゝり、卓の上にこぼれたるは、蛇の如く這ひて、人々の前へ流れよらむとす。巨勢は熱き手掌を、兩耳の上におぼえ、驚く間もなく、またこれより熱き唇、額に觸れたり。「我友に目を廻させたまふな。」とエクステル呼びぬ。人々は半ば椅子より立ちて「いみじき戲かな」と一人がいへば、「われらは繼子なるぞくやしき」と外の一人いひて笑ふを、餘所なる卓よりも、皆興ありげにうち守りぬ。

少女が側に坐りたりし一人は、「われをもすさめ玉はむや」といひて、右手さしのべて少女が腰をかき抱きつ。少女は「さては禮儀知らずの繼子どもかな、汝等にふさはしき接吻のしかたこそあれ。」と叫び、ふりほどきて突立ち、美しき目よりは稻妻出づと思ふばかり、しばし一座を睨みつ。巨勢は唯呆れに呆れて見居たりしが、この時の少女の姿は、すみれうりにも似ず、「ロオレイ」にも似ず、さながら凱旋門上のパワリアなりと思はれぬ。

少女は誰が飲みほしけむ珈琲碗に添へたりし「コップ」を取りて、中なる水を口に銜むと見えしが、唯一嘆。「繼子よ、繼子よ、汝等誰か美術のまゝならざる。フイレンチエ派學ぶはミケランジェロ、キンチイが幽霊、和蘭派學ぶはルウベンス、フアン、デイクが幽霊、我國のア

ルブレヒト、デュウレル學びたりとも、アルブレヒト、デュウレルが幽霊ならぬは稀ならむ。會堂に掛けし「スツヂイ」二つ三つ、直段好く賣れたる喫には、われらは七星われらは十傑、われらは十二アボステル」と撞に見たてしてゐらればめ。かゝるえり唇にミネルワの唇いかで觸れむや。わが冷たき接吻にて、満足せよ。」とぞ叫びける。

噴きかけし霧の下なる此演説、巨勢は何事とも辨へねど、時の翰聲をいやしめたる、諷刺ならむとのみは推測りて、その面を打仰ぐに、女神パワリアに似たりとおもひし威厳少しもくづれず、言畢りて卓の上におきたりし手袋の酒に濡れしを取りて、大股にあゆみて出でゆかむとす。皆すさまじげなる氣色して、「狂人」と一人いへば、「近きに報せでは止まじ、と外の一人いふを、戸口にて振りかへりて、「遺恨に思ふべき



首を擡げもあへでいひし聲の清き、今に忘れず。  
この童と女の子と、道連れとは見えねば、童の  
入るを待ちて、これをしほに、女の子は来しな  
らむとおもはれぬ。」

「この二人のさまの殊なるは、早くわが目を射  
き。人を人とおもはぬ、殆ど憎げなる栗うり、  
やさしくいとほしげなるすみれうり、いづれも  
群居る人の間を分けて、座敷の真中、帳場の  
前あたりまで来し頃、そこに休み居たる大學々  
生らしき男の連れたる、英吉利種の大狗、いま  
まで腹這ひて居たりしが、身を起して、背をく  
ぼめ、四足を伸ばし、栗箱に鼻さし入れつ。そ  
れと見て、童の拂ひのけむとするに、驚きた  
る狗、あとに跟着て来し女の子に突當れば、『あ  
なや』とおびえて、手に持ちし目籠とり落した  
り。莖に錫紙巻きたる、美しきすみれの花束、  
きら／＼と光りて、よみに散りばふを、好き物  
得つと彼狗、踏みにじりては、衝へて引きちぎ  
りなぞす。ゆかに燐燐の温まりにて解けたる、  
靴の雪にぬれたれば、あたりの人々、かれ笑ひ、  
これ罵るひまに、落花狼藉、なごりなく泥土に  
委ねたり。栗うりの童は、逸足出して逃去り、  
學生らしき男は、欠しながら狗を叱し、女の  
子は呆れて打守りたり。この蕙花うりの忍びて

泣かぬは、うきになれて涙の泉涸れたりしか、  
さらずば驚き惑ひて、一日の生計、これがため  
に止まむとまでは想ひにざりしか。しばしあり  
て、女の子は碎けのこりたる花束二つ三つ、力  
なげに拾はむとすると、帳場の女の知らせ  
に、こゝの主人出でぬ。赤がほにて、腹突き  
だしたる男の、白き前垂したるなり。太き拳  
を腰にあて、花賣りの子を暫し睨み、『わが店  
にては、暖簾師めいたるあきなひ、せさせぬが  
定なり。疾くゆきぬ。』とわめきぬ。女の子は唯  
言葉なく出でゆくを、満堂の百眼、一點の涙  
なく見送りぬ。」

「われは珈琲代の白銅貨を、帳場の石板の上に  
擲げ、外套取つて馳出て見しに、花賣の子は、  
ひとりしく／＼と泣きてゆくを、呼べども顧み  
ず。追付きて、『いかに、善き子、蕙花のしろ取  
らせむ、』といふを聞きて、始めて仰見つ。その  
おもての美しき、濃き藍いろの目には、そこひ  
知らぬ憂ありて、一たび顧みるときは人の腸  
を断たむとす。囊中の『マルク』七つ八つありし  
を、から籠の木の葉の上に置いて與へ、聲きて  
何ともいはぬひまに、去立りしが、その面、そ  
の目、いつまでも目に付きて消えず。ドレスデ  
ンにゆきて、畫堂の額うつすべき許を得て、エ

クス、レダ、マドンナ、ヘレナ、いづれの圖に  
向ひても、不思議や、すみれ賣のかほはせ霧の  
如く、われと畫額との間に立ちて障礙をなし  
つ。かくては所詮、我業の進まむこと覺束なし  
と、旅店の二階に籠もりて、長椅子の覆革に穴  
あけむとせし頃もありしが、一朝大勇猛心を奮  
ひおこして、わがあらむ限の力をこめて、此  
花賣の娘の姿を無窮に傳へむとおもひたちぬ。  
さりけれどわが見し花うりの目、春潮を眺むる  
喜の色あるにあらず、暮雲を送る夢見心ある  
にあらず、伊太利古跡の間に立たせて、あたり  
に一群の白鳩飛ばせむこと、ふさはしからず。  
我空想はかの少女をラインの岸の根に居らせ  
て、手に一張の琴を抱らせ、吟唱の聲を出させ  
むとおもひ定めにき。下なる流にはわれ一葉の  
舟を泛べて、かなたへむきてもろ手高く擧げ、  
面にかぎりなき愛を見せたり。舟のめぐりには  
数知られぬ、『ニックセン』、『ニムフエン』な  
どの形波間より出で、擲擲す。けふ此ミューン  
の府に來て、しばし美術學校の『アトリエ』借  
らむとするも、行李の中、唯此一畫巻、これを  
おん身等師友の間に譲りて、成しはてむと願ふ  
のみ。」

巨勢はわれ知らず話しりて、かくいひ畢り

るが、濃き五色にて書きし、窓硝子を洩りてさしこみ、薄暗くあやしげなる影をなしたる裡に、一人の女の逃げむとすまふを、ひかへたるは王なり。その女のおもて見し時の、父の心はいかなりけむ。かれは我母なりき。父はあまりの事に、しばしためたひしが、「計したまへ、陛下」と叫びて、王を推倒しつ。そのひまに母は走りのきしが、不意を打たれて倒れし王は、起き上りて父に組付きぬ。肥えふとりて多力なる國王に、父はいかでか敵し得べき、組敷かれて、剛なりし如露にてした、か打たれぬ。この事知りて諫めし、内閣の祕書官、チイグレルは、ノイシュワンスタインなる塔に押籠めらるべき筈なりしが、救ふ人ありて助けられき。われは其夜家において、二親の歸るを待ちしに、下女来て父母歸り玉ひぬといふ。喜びて出迎ふれば、父は早かれて歸り、母は我を抱いて泣きぬ。「少女は暫らく黙しつ。けきより曇りたる空は、雨になりて、をりゝ窓を打つ雫、はらはらと音す。巨勢いふ。「王の狂人となりて、スタルンベルヒの湖に近き、ベルヒといふ城に遷され玉ひしことは、きのふの新聞にて讀みしが、さては其頃よりかゝる事ありしか。」少女は語を絶きて、「王の繁華の地を嫌ひて、

田舎にのみ住み、晝寝て夜起きたまふは、久しき程の事なり。獨逸、佛蘭西の戦ありし時、加特力派の國會に打勝ちて、普魯西方につきし、王が中年のいさをは、次第に暴政の噂に掩はれて、公けにこそ言ふものなけれ、陸軍大臣メルリンゲル、大蔵大臣リイデルなど、故なくして死罪に行はれむとしぬるを、其筋にて秘めたるは、誰知らぬものなし。王の晝寝し玉ふときは、近來みな御られしが、囁語にマリイといふこと、あまたいびひたまふを聞きしものありといふ。我母の名もマリイといひき。望なき戀は、王の病を長ぜしにあらずや。母はかほばせ我に似たる處ありて、その美しさは宮の内にて類なかりきと聞きつ。「父は間もなく病みて死にき。交廣く、もの惜みせず、世事には極めて疎かりければ、家に遺財つゆばかりもなし。それよりダハハウエル街の北のはてに、裏屋の二階明きたりしを、借りて住みしが、そこに遷りてより、母も病みぬ。かゝる時にうつろふものは、人の心の花なり。数知らぬ苦しき事は、わが痴き心に、早く世の人を憎ましめき。明年の一月、謝肉祭の頃なりき。家財衣類なども賣盡して、日々の烟も立てかぬるやうになりしかば、貧しき子供の群

に入りてわれも華花賣ることを覺えつ。母のみまかる前、三日四日の程を安く送りしは、おん身の賜なりき。」一母のなきがら片付けなどするとき、世話せしは、一階高くすまひたる仕立屋なり。あはれなる孤ひとり置くべきにあらずとて、迎取られしを喜びこと、今おもひ出して口惜しき程なり。仕立屋には、娘二人ありて、いたく物ごのみして、みづから街ふさまなるを見しが、迎取られてより何へば、夜に入りて屢々客あり。酒など飲みて、はては笑ひ罵り、歌うたひなどす。客は外國の人多く、おん國の學生なども見えしやうなりき。或る日主人われにも新しき衣着よといひしが、そのをり我を見て笑ひし顔、何となく怖ろしく、子供心にもうれしとはおもはざりき。午すぎし頃、四十ばかりなる知らぬ人來て、スタルンベルヒの湖水へ往かむといふを、主人も俱に勧めき。父の世に在りしとき、伴はれてゆきし嬉しき、猶忘れざりしかば、しづしと語ひしを、「かくてこそ善き子なれ」とみな笑めつ。連れなる男は、途にてもやさしくのみ扱ひて、かしこにては「パワーリア」といふ座敷船に乗り、食堂にゆきて物喰はせつ。酒もすゝめたれど、それは慣れぬものなれば、辭みて飲ま

事は、月影にすかして見よ、額に血の迹はとどめじ。吹きかけしは水なれば。」

## 中

あやしき少女の去りてより、程なく人々あらけぬ。歸り路にエクステルに問へば、「美術學校にて雛形となる少女の一人にて、『フロイライン・ハンスルといふものなり。見たまひし如く奇怪なる振舞するゆゑ、狂女なりともいひ、また外の雛形娘とちがひて、人に肌見せねば、かたわにやといふもあり。その履歴知るものなけれど、教ありて氣象よの常ならず、汗れたる行なれば、美術諸生の仲間には、喜びて友とするもの多し。善き首なることは見たまふ如し。」と答へぬ。巨勢「我畫かくにもようあるべきものなり。『アトリエ』とゝのはむ日には、來よと傳へたまへ。」エクステル「心得たり。されど十三の花實娘にはあらず、裸體の研究、危しとはおもはずや。」巨勢「裸體の雛形せぬ人と君もいひしが。」エクステル「現にいれたり。されど男と接吻したるも、けふ始めて見き。」

エクステルがこの言葉に、巨勢は赤うなりしが、街燈暗きシルレル、モヌメント」のあたり

なりしかば、友は見ざりけり。巨勢が「ホテル」の前にて、二人は袂を分かぬ。

一週ほど後の事なりき、エクステルが周旋にて、美術學校の「アトリエ」一間を巨勢に借されぬ。南に廊下ありて、北面の壁は硝子の窓に半を占められ、隣の間とのへだてには唯帆本絨の帳あるのみ。頃はみな月半ばなれば、旅立ちし諸生多く、隣に人もあらず、業姑ぐべき憂なきを喜びぬ。

巨勢は畫額の架の前に立ちて、今入りし少女に架の側なる下畫を指さししめて、「君に聞かれしはこれなり。面白げに笑ひたはばれ玉ふときは、さしもおもはれぬど、をり／＼君がおも影の、こゝにをらせむ人物にいとふさはしきとあり。」

少女は高く笑ひて、「物忘したまふな。おん身が『ロオレイ』の本の雛形、すみれ賣の子は我なりとは、先の夜も告げしものを。」かくいひしが俄に色を正して、「おん身は我を信じたまはず。げにそれとも無理ならず。世の人は皆我を狂女なりといへば、さおもひたまふならむ。この聲戲」とは聞えず。

巨勢は半信半疑したりしが、忍びかてて少女にいふ。「餘りに久しくさいなめ玉ふな。今も我

が額に燃ゆるは君の唇なり。はかなき戯とおもへば、しひて忘れむとせしこと、幾度か知らねど、迷は遂に晴れず。あはれ君がまことの身の上、苦しからずば聞かせ玉へ。

窓の下なる小机に、いま行李より出したる舊繪入新聞、造ひきたる油の具の鍋筒、粗末なる烟管にまだ巻烟草の端の残れるなど載せたるその片端に、巨勢はつら杖つきたり。少女は前なる藤の椅子に腰かけて、語りいでぬ。

「まづ何事よりか申さむ。此學校にて雛形の鑑札受くるときも、ハンスルといふ名にて通しれど、それは我眞の名にあらず。父はスタインバハとて、今の國王に愛でられて、ひと時榮えし畫正なりき。わが十二の時、王宮の冬園に夜會ありて、二親みな招かれぬ。宴闌なる頃國王見えざりければ、人々驚きて、移殖し熟帶脚木いやが上に茂れる、硝子屋根の下、そこかこゝかと瘦しめとめつ。園の片隅にはタンダ

ルデニスが刻める、フアウストと少女との名高き石像あり。わが父のそのあたりに來し時胸割くるやうなる聲して、「助けて／＼」と叫ぶものあり。聲をしるべに、黄金の宮階おほひたる、『ギオスク』（四阿屋の戸口に立寄れば、周りに植ゑし櫻欄の葉に、瓦斯燈の光文へられた



屋の曇さよ。早や學校の門もさゝるゝ頃なるべきに、雨も晴れたり。おん身とならば、おそろしきこともなし。共にスタルンベルヒへ行き玉はずや」と側なる帽取りで戴きつ。そのさま巨勢が共に行くべきを、つゆ疑はずと覺し。巨勢は唯母に引かるゝ、襷子の如く従ひゆきぬ。門前にて馬車雇ひて走らするに、程なく停車場に來ぬ。けふは日曜なれど、天氣惡しければにや、近郷より歸る人も多からで、こゝはいと静なり。新聞の號外賣る婦人あり。買ひて見れば、國王ベルヒの城に遷りて、容體穩なれば、侍醫グツデンも護衛を弛めさせきとなり。汽車中には湖水の畔にあつさ避くる人の、物買ひに府に出でし歸るさなるが多し。王の噂いと喧し。「まだホオヘンシユワンガウの城に居たまひし時には似ず、王の心鎮まりたるやなり。ベルヒに遷さるゝ途中、ゼエスハウプトにて水求めて飲みたまひしが、近きわたりなりし漁師等を見て、やさしく傾きなどしたまひぬ。」と訛みたることばにて語るは、かひもの籠手にさげた老女なりき。

車走ること一時間、スタルンベルヒに着きしは夕の五時なり。かちより往きてやう／＼一日路の處なれど、はやアルペン山の近さを、唯何

となく覺えて、このくもらはしき空の氣色にも、胸悶きて息せらる。車のあちこちと廻來し、丘陵の忽開けたる處に、ひろ／＼と見ゆるは湖水なり。停車場は西南の隅に在りて、東岸なる林木、漁村はゆふ霧に包まれてほかに認めらるれど、山に近き南の方は一望きはみなし。

案内知りたる少女に引かれて、巨勢は右手な石段を上ぼりて見るに、こゝは「パワリア」の庭といふ「ホテル」の前にて、屋根なき所に石卓、椅子など並べたるが、けふは雨後なればしめじめと人け少し。給仕する僕の黒き上衣に、白の前掛けしたるが、何事かをかつぶやきつゝも、卓に倒しかけたる椅子を、引起して拭ひぬたり。ふと見れば片側の軒にそひて、つた夢からませたる架ありて、その下なる圓卓を圍みたるひと群の客あり。こは此「ホテル」に宿りたる人々なるべし。男女打ちまじりたる中に、先の夜「ミネルワ」にて見し人ありしかば、巨勢は往きてものいはむとせしに、少女おしとどめて、「かしこなるは、君の近づきたまふべき群にあらず。われは年若き人と二人にて來たれど、愧づべきはかなたに在りて、こなたにあらず。彼はわれを知りたれば、見玉へ、久しく座にえ忍びあへで隠るべし。」とばかりありて、彼美術諸生は果して

起ちて「ホテル」に入りぬ。少女は僕を呼びかちづけて、座敷船はまだ出づべしやと問ふに、僕は飛行く雲を指さして、この覺來なきそらあひなれば最早出でざるべしといふ。さらば車にてレオニに行かばやと付けぬ。

馬車來ぬれば二人は乗移りぬ。停車場の傍より、東の岸邊を奔らす。この時アルペンおろしさと吹來て、湖水のかたに霧立ちこめ、今出でし邊をふりかへり見るに、次第々々に鼠色になりて、家の棟、木のいたゞきのみ一きは黒く見えたり。御者ふりかへりて「雨なり。雨衣、かぶべきか」と問ふ。「否」と應へし少女は巨勢に向ひて、「こゝちよの此遊や。むかし我命喪はむとせしも此湖の中なり。我命拾ひしもまた此湖の中なり。さればいかでとおもふおん身に、眞心打明けてきこえむもこゝにてこそと思へば、かくは誘ひまつりぬ。『カツフェエ、ロリアン』にて取かしき目にあひけるととき、救ひたまはりし君また見むとおもふ心を命にて、幾歳をか經にけむ。先の夜「ミネルワ」にておん身が物語聞きしときのうれしき、日頃木のはしなどのやうにおもひし美術諸生の仲間なりければ、人あなづりして不敵の振舞せしを、はしたなしとや見玉ひけむ。されど人生いくばくもあらず。

ざりき。ゼエスハウプトに船はてしとき、その人はまた小舟を借り、これに乗りて遊ばむといふ。暮れゆくそらに心細くなりしわれは、早やかへらむといへど、聴かずに漕出で、岸邊に添ひてゆくほどに、人け遠き葦間に來しが、男は舟をそこに停めつ。わが年はまだ十三にて、初は何事ともわきまへざりしが、後に男の面色もかはりておそろしく、われにもあらで、水に躍入りぬ。暫しありて我にかへりしときは、湖水の畔なる漁師の家にて、貧しげなる大婦のものに、介抱せられて居たりき。歸るべき家なしと言張りて、一日二日と過す中に、漁師夫婦の質朴なるに馴染みて、不幸なる我身の上を打明けしに、あはれがりて娘として養ひぬ。ハンスルといふは、この漁師の名なり。」

「かくて漁師の娘とはなりたれど、弱き身には舟の櫂取ることもかなはず、レオニのあたりに、富める英吉利人の住めるに雇はれて、小間使になりぬ。加特力数倍する養父母は、英吉利人に使はるゝを嫌ひたれど、わが物讀むことなど覚えしは、かの家なりし雇女教師の恵なり。女教師は四十餘の處女なりしが、家の娘のたかぶりとるよりは、我を愛すること深く、三年が程に多くあらぬ教師の藏書、悉く讀みき。ひ

がよみはさこそ多かりけり。又ふみの種類もまぢまちなりき。クニツゲが交際法あれば、フムボルトが長生術あり。ギョオデ、シルレルの詩抄半ばじゆしてキヨオニヒが通俗の文學史を綴き、あるはルヴブル、ドレスデンの書堂の寫眞繪、繰りひろげて、テエヌが美術論の證書をあさりぬ。」

「去年英吉利人一族を率ゐて國に歸りし後は、然るべき家に奉公せばやとおもひしが、身元整からねば、ところの貴族などには使はれず、この學校の或る教師に、端なくも見出されて、雛形勤めしが縁になりて、遂に鑑札受くることとなりしが、われを名高きスタインバハが娘なりとは知る人なし。今は美術家の間に立ちまじりて、唯面白くのみ日を暮せり。されどグスタアフ、フライイタハは流石そら言ひしにあらざ。美術家ほど世に行儀悪きものなれば、獨立ちて交るには、しばしも消斷すべからず。寄らず、障はらぬやうにせばやとおもひて、計らず見玉ふ如き不思議の辭者になりぬ。をりくは我身、みづからも狂人にはあらずやと疑ふ程なり。これにはレオニにて讀みしふみも、少し祟をなすかとおもへど、若し然らば世に博士と呼ばるゝ人は抑といかなる狂人ならむ。われ

を狂人と罵る美術家等、おのれらが狂人ならぬを憂へこそすべきなれ。英雄豪傑名匠大家となるには、多少の狂氣なくてはかなはぬことは、ゼネカが論をも、シエクスピアが言をも待たず。見玉へ、我學問の博きを。狂人にして見まほしき人の、狂人ならぬを見るその悲しき。狂人にならでもよき國王は、狂人になりぬと聞く、それも悲し。悲しきことのみ多ければ、畫は蠅と共に泣き、夜は蠅と共に泣けど、あはれといふ人もなし。おん身のみは情なくあざみ笑ひ玉はじとおもへば、心のゆくまゝに語るを咎め給ふな。嗚呼、かういふも狂氣か。」

## 下

定なき空に雨歇みて、學校の庭の木立のゆるげるのみ曇りし窓の硝子にすかして見ゆ。少女が語聞く間、巨勢が胸には、さまゝの感情戦ひたり。或ときはむかし別れし妹に逢ひたる兄の心となり、或ときは魔國に僞れ伏たるエヌスの石像に、獨りめめる彫工の心となり、或るときは又麗女に心動され、われは墮ちじと戒むる沙門の心ともなりしが、聞きをはりし時は、胸騒ぎ肉顫ひて、われにもあらで、少女が前に跪かむとしつ。少女はつと立ちて、「この都

乗らせ、われは楢取りて漕出でぬ。雨は歇みたれど、天猶曇りたるに、暮色は早く岸のあなただに來ぬ。さきの風に揺られたるなごりにや、楢敵くほどの波は猶ありけり。岸に沿ひてベルヒの方へ漕ぎもどす程に、レオニの村落果つるあたりに來ぬ。岸邊の木立絶えたる處に、眞砂路の次第に低くなりて、波打際に長椅子据ゑたる見ゆ。蘆の一叢舟に觸れて、さわ／＼と聲するをりから、岸邊に人の足音して、木の間を出づる姿あり。身の長六尺に近く、黒き外套を着て、手にしほめたる蝙蝠傘を持ちたり。左手に少し引きさがりて隨ひたるは、髪も髪も皆雪の如くなる翁なりき。前なる人は俯きて歩みきぬれば、縁邊の暗に顔隠れて見えざりしが、今木の間を出で、湖水の方に向ひ、しばし立ちとどまりて、片手に帽をぬぎ持ちて、打ち仰ぎたるを見れば、長き黒髪を、後さまにかきて廣き額を露はし、面の色灰のごとく蒼きに、窪みたる目の光は人を射たり。舟にては巨勢が外套を背に着て、蹲まり居たるマリイ、これも岸なる人を見居たりしが、この時俄に驚きたる如く、「彼は王なり」と叫びて立ちあがりぬ。背なりし外套は落ちたり。暗はさきに脱ぎたるまゝ、酒店に置きて出でたれば、亂れたるこが

れ色の髪は、白き夏衣の肩にたを／＼とかゝりたり。岸に立ちたるは、實に侍醫グッデンを引つれて、散歩に出でたる國王なりき。あやしき幻の形を見る如く、王は惚恍として少女が姿を見てありしが、忽一聲「マリイ」と叫び、持ちたる傘投棄て、岸の淺瀬をわたり來ぬ。少女は「あ」と叫びしが、その儘氣を喪ひて、巨勢が扶ける手のまだ及ばぬ間に、倒れしが、傾く舟の一揺りゆらるゝと共に、うつ伏になりて水に墜ちぬ。湖水はこの處にて、次第々々に深くなりて、勾配ゆるやかなりければ、舟の停まりしあたりも、水は五尺に足らざるべし。されど岸邊の砂は、やう／＼粘土まじりの泥となりたるに、王の足は深く陥りて、あがき自由ならず。その隙に隨ひたりし翁は、これも傘投棄て、追ひすがり、老いても力や衰へざりけむ、水を蹴て二足三足、王の領首むづと握りて引展さむとす。こなたは引かれじとするほどに、外套は上衣と共に翁が手に残りぬ。翁はこれをかいやり棄て、猶も王を引寄せむとするを、王はふりかへりて紐付き、彼此たがひに聲だに立てず、暫し揉合ひたり。

是れ唯一瞬間の事なりき。巨勢は少女が墜つる時、僅に裳を掴みしが、少女が蘆間隠れの杓に強く胸を打たれて、沈まむとするを、やうやうに引揚げ、汀の二人が争ふを跡に見て、もと來し方へ漕ぎかへしつ。巨勢は唯奈何にもして少女が命助けむとおもふのみにて、外に及ぶに遑あらざりしなり。

レオニの酒店の前に來しが、こゝへは寄らず、是より百歩が程なりと聞きし、漁師夫婦が葎屋をさして漕ぎゆくに、日はや暮れて、岸には「アイヘン」、「エルレン」などの枝繁りあひ廣がりて、水は入江の形をなし、蘆にまじりたる水草に、白き花の咲きたるが、ゆふ闇にほの見えたり。舟には解けたる髪の水にまみれしに、藻屑かゝりて倒れふしたる少女の姿、たれかあはれと見ざらむ。をりしも漕來る舟に驚きか、蘆間を離れて、岸のかたへ高く飛びゆく聲あり。あはれ、こなたは少女が魂のぬけ出でたるにはあらずや。

しばしありて、今まで木影に隠れたる葎屋の燈見えたり。近寄りて、ハンスルが家はこゝなりや、とおとなへば、傾きし簷端の小窓明きて、白髪の老女、舟をさしのぞきつ。一ことしも水の神の眷求めたるよ。主人はベルヒの城へきのふより驅りたられて、まだ歸らず。手當して見むとおもひ主はば、こなたへ。と落付きたる



うれしとおもふ一彈指の間に、口張りあけて笑はずば、後にくやしとおもふ日あらむ。」かくいひつゝ、被りし袴を脱棄てゝ、こなたへふり向きたる顔は、大理石脈に熱血跳る如くに、風に吹かるゝ金髪は、首打振りに長く嘶ゆる駿馬の鬣に似たりけり。「けふなり。けふなり。きのふありて何かせむ。あすも、あさても空しき名のみ、あだなる聲のみ。」

この時、二點三點、粒太き雨は車上の二人が衣を打ちしが、瞬くひまに繁くなりて、湖上よりの横しづき、あらゝかにおとづれ来て、紅を潮したる少女が片頬に打ちつくるを、さし覗く巨勢が心は、唯そらにのみやなりゆくらむ。少女は伸びあがりて、「御者、酒手は取らずべし。疾く驅れ。一策加へよ、今一策。」と呼びて、右手に巨勢が頭を抱き、己れは項をそらせて仰視たり。巨勢は架の如きり女が肩に、我頭持たせ、たい夢のこゝちして其の姿を見たりしが、彼凱旋門上の女神パワリアまた胸に浮びぬ。

國王の棲めりといふベルヒ城の下に來し頃は、雨細く劇しくなりて、湖水のかたを見わたせば、吹寄する風一陣々、濃淡の縷縷おり出して、濃き處には雨白く、淡き處には風黒し。御者は車を停めて、「しばしが程なり。餘りに濡れて

客人も風や引き玉はむ、又舊びたれども此車、いたく濡らさば、主人の唄に逢はむ。」といひて、手早く母衣打掩ひ、又一鞭あしゝ急ぎぬ。

雨猶をやみなくふりて、神おどろくしく鳴りはじめぬ。路は林の間に入りて、この國の夏の日はまだ高かるべき頃なるに、木下道ほの暗うなりぬ。夏の日に蒸されたりし草木の、雨に濡ひたるかをり車の中に吹入るを、濡したる人の水飲むやうに、二人は吸ひたり。鳴神のおとの絶間には、おそろしき天氣に怯れたりとも見えぬ、ナハチガル鳥の、玲瓏たる聲振りたてゝしばなけるは、淋しき路を獨りく人の、こゝとさらに歌うたふ類にや。この時マリイは諸手を巨勢が項に組合せて、身のおももりを持たせかけたりしが、木蔭を渡る稲妻に照らされたる顔見合せて笑を含みつ。あはれ二人は我を忘れ、わが乗れる車を忘れ、車の外なる世界をも忘れたりけむ。

林を出でゝ、坂路を下るほどに、風村雲を拂ひさりて、雨も亦歇みぬ。湖の上なる霧は、重ねたる布を一重二重と剝ぐ如く、束の間に晴れて、西岸なる人家も、また手にとるやうに見ゆ。唯こゝかしこなる木下蔭を過ぐるごとに、梢に残る風に拂はれて落つる露を見るのみ。

レオニにて車を下りぬ。左に高く聳ちたるは、所謂ロットマンが岡にて、「湖上第一勝」と題したる石碑の建てる處なり。右に伶人レオニが開きぬといふ、水に臨める酒店あり。巨勢が腕にもろ手からみて、纏るやうにして歩みし少女は、この店の前に來て岡の方をふりかへりて、「わが雇はれし英吉利人の住みしは、此半腹の家なりき。老いたるパンスル夫婦が漁師小屋も最早百歩が程なり。われはおん身をかしこへ、伴はむとおもひて來しが、胸騒ぎて堪へがたければ、此店にて慰はゞや。」巨勢は現にもとて、店に入りて夕餉跳ふるに、「七時ならでは整はず、まだ三十分待ち玉はではかなはじ、といふ。こゝは夏の間のみ客ある處にて、給仕する人も其年々に雇ふなれば、マリイを識れるもなかりき。

少女はつと立ちて、棧橋に繫ぎし舟を指さし、「舟漕ぐことを知り玉ふか。」巨勢、「ドレステンにありし時、公園のカラ池にて舟漕ぎしことあり。善くすといふにあらねど、君獨りわたさむほどの事、いかで做得ざらむ。」少く、庭なる松子は濡れたり。さればとて屋根の下は、あまりに暑し。しばし我を載せて漕玉へ。」巨勢は脱ぎたる夏外套を少女に被せて小舟に

## 舞

## 姫

石炭をば早や積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと前にて、熾熱燈の光の晴れがましきもやくなし、今宵は夜毎にこゝに集ひ来る骨牌仲間も「ホテル」に宿りて、舟に残りしは余一人のみなれば。

五年前の事なりしが、平生の望足りて、洋行の官命を蒙り、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新からぬはなく、筆に任せて書き記したる紀行は日ごとに幾千言をかなしけむ、當時の新聞に載せられて、世の人にもはやされしかど、今日になりておもへば、碍き思想身の程知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍げにしるしを、心ある人はいかに見けむ。こたびは途に上りしとき、日記も物とて買ひし冊子もまだ白紙のまゝなるは、獨逸にて物學せし間に、一種の「ニル、アドミラリイ」の氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

げに東に還る今の我は、西に航せし昔の我

ならず、學問こそ猶心に飽き足らぬところも多かれ、浮世のうきふしをも知りたり、人の心の頼みがたき言ふも更なり、われとわが心さへ變り易きをも悟り得たり。きのふの是はけふの非なるわが瞬間の感觸を、筆に寫して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ緣故なる、あらず、これには別に故あり。

嗚呼、ブリンダイシイの港を出で、より、はや二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交を結びて、旅の憂さを慰めあふが航法の習なるに、微恙にことよせて房の裡にのみ籠りて、同行の人々にも物言ふことの少きは、人知らぬ恨に頭のみ悩ましたればなり。此恨は初め一抹の雲の如く我心を掃けて、瑞西の山色をも見せず、伊太利の古蹟にも心を留めさせず、中ごろは世を厭ひ、身をはかなみて、腸、日ごとに九廻すともいふべき慘痛をわれに負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一點の翳とのみなりたれど、文讀むごとに、物見るごとに、鏡に映る影、聲に應ずる響の如く、限なき懷舊

の情を喚び起して、幾度となく我心を苦む。嗚呼、いかにしてか斯恨を銷せむ。若し外の恨なりせば、詩に詠じ歌によみし後は心地すがしくもなりなむ。これのみは餘りに深く我心に鑢りつけたればさはあらじと思へど、今宵はあたりに人も無し、房奴の來て荒氣線の鍵を振るには猶程もあるべければ、いで、その概略を文に綴りて見む。

余は幼き日より嚴しき庭の訓を受けし甲斐に、父をば早く喪ひつれど、學問の荒み衰ふることなく、舊藩の學館にありし日も、東京に出で、豫備寮に通ひしときも、大學法學部に入し後、太田豊太郎といふ名はいつも一級之首にしろされたるに、一人子のわれを力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には學士の稱を受けて、大學の立ちてよりその頃までにまたなき名譽なりと人にも言はれ、某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、樂しき年を送ることとせばかり、官長の覺え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我名を成さむも、我家を興さむも、今ぞとおもふ心の勇み立ちて、五十を踰えし母に別るゝをもさまで悲しとは思はず、遑々と家を離れてベルリンの都に來ぬ。

聲にていひて窓の戸さゝむとしたりしに、巨勢は聲ふりたて、「水に落ちたるはマリイなり、そなたのマリイなり」といふ。老女は聞きも畢らず、窓の戸を明け放ちたるまゝにて、櫓橋の畔に馳出で、泣くく巨勢を扶けて、少女を抱きいれぬ。

入りて見れば、半ば板敷にしたるひと問のみ。今火を點したりと見ゆる小「ランプ」窓の上に微なり。四方の壁にゑがきたる粗末なる耶蘇一代記の彩色畫は、煤に包まれておぼろげなり。薪火焚きなどして介抱したれど、少女は蘇らず。巨勢は老女と屍の傍に夜をとほして、消えて迹なきうたかたのうたてき世を啣ちあかしつ。

時は耶蘇曆千八百八十六年八月十三日の夕の七時、バワリヤ王ルウドキヒ第二世は、湖水に溺れて殞せられしに、年老いたる侍醫ゲッデンをこれを救はむとて、共に命を殞し、顔に王の爪痕を留めて死したりといふ、おそろしき知らせに、翌十四日ミュンヘン府の騒動はおほかたならず。街の角々には黒縁取りたる張紙に、此訃言を書きたるありて、その下には人の山をなしたり。新聞紙外には、王の屍見出だしたるをりの模様、にさま／＼の臆説附けて賣るを、

人々争ひて買ふ。點呼に應ずる兵士の正服つけて、黒き毛織るしバワリア鍬戴きたる、警察吏の馬に騎り、または徒立にて馳せちがひたるなど、雜沓いはむかたなし。久しく民に面を見せたまはざりし國王なれど、流石にいたましがりて、憂を含みたる顔も街に見ゆ。美術學校にも此騒ぎにまぎれて、新に入りし巨勢がゆくへ知れぬを、心に掛くるものもなかりしが、エクステル一人は友の上を氣づかひ居たり。

六月十五日の朝、王の柩のベルヒ城より、眞夜中に府に遷されしを迎へて歸りし、美術學校の生徒が「カッフエ、ミネルワ」に引上げし時、エクステルはもしやと思ひて、巨勢が「アトリエ」に入りて見しに、彼はこの三日が程に相貌變りて、著るく瘦せたる如く、「ロオレライ」の畫架の下に跪きてぞ居たりける。

國王の横死の噂に掩はれて、レオニに近き漁師ハンスルが娘一人、おなじ時に溺れぬといふこと、問ふ人もなくて止みぬ。

## わが星

(水床集より)

おもひをかけしわが星は  
光をかくしいづこにて  
たれのためにかかゞやける  
心もそらに浮くもの  
かゝるおもひをふきはらふ  
この夕暮にかぜもがな  
すゞしく茂る夏木立  
なにをやさしくそよぐらむ  
緑色こき大ぞらは  
なにをやさしく見下せる  
あるかひもなき世の中の  
卯月しりてや天の月を  
鳴きてすぎゆくほとゝぎす  
しでの山路のしるべせよ

野 梅  
(前同)

めづる人なき山里は  
うばからたち生ひある  
籬のもとに捨てられて  
雨にうつろひ風にちり  
世をわびげなる梅の花  
あひみるにこそ悲しけれ



き。危きは余が當時の地位なりけり。されどこれのみにては、尙ほ我地位を復へすに足らざりけむを、日比伯林の留學生の中に、或る勢力ある一群と余との間に、面白からぬ關係ありて、彼人々は余を猜疑し、又遂に余を讒誣するに至りぬ。されどこれとても其故なくてや。

彼人々は余が俱に麥酒の杯をも舉げず、球突き棒をも取らぬを、頑固なる心と欲を制する力とに歸して、且つは嘲り且つは嫉みたりけむ。されど是れ余を知らねばなり。嗚呼、この故よしは、我身だに知らざりしを、怎でか他人に知らるべき。我心はかの合歡といふ木の葉に似て、物觸れば縮みて避くむとす。我心は處女に似たり。余が幼き頃より長者の教を守りて、學の道をたどりしも、仕の道をあゆみしも、皆な勇氣ありて能くしたるにあらず、耐忍強の力と見えしも、皆な自ら欺き、人をさへ欺きたるにて、人のたどらせたる道を、ただ一條にたどりしのみ。餘所に心の亂れざりしは、外物を棄て、顧みぬ程の勇氣ありしにあらず、唯、外物に恐れて自ら我手足を縛せしのみ。故郷を立ちいづる前にも、我が有爲の人物なることを疑はず、又た我心の能く耐へむことを深く信じたり。

嗚呼、彼も一時。舟の横濱を離るゝまでは、天啼豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾を濡らしたるを我れ乍ら怪しと思ひしが、これぞなか／＼に我本性なりける。此心は生れながらにやありけむ、又た早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけむ。

彼人々々嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を、赤く白く面を塗りて、赫然たる色の衣を纏ひ、珈琲店に坐して客を延く女を見ては、往てこれに就かむ勇氣なく、高き帽を戴き、眼鏡に鼻を挟ませて、普魯西にては貴族めきたる鼻音にてもいふレエベマンを見ては、往てこれと遊ばむ勇氣なし。これらの勇氣なければ、彼活潑なる同郷の人々と交らむやうもなし。この交際の疎きがために、彼人々は唯く余を嘲り、余を嫉むのみならず、又た余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が冤罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を隔し盡す嫌なりける。或る日の夕暮なりしが、余は凱苑を散歩して、ウンテル、デン、リンデンを過ぎ、我がモンビシユウ街の橋居に歸らむと、クロステル巷の古寺の前に來ぬ。余は彼の燈火の海を渡り來て、この狭く薄暗き巷に入り、樓上の木欄に干し

たる敷布、綿袴などまだ取入れぬ人家、頗る長き猶太教徒の翁が戸前に佇みたる居酒屋、一つの梯は直ちに樓に達し、他の梯は穴居の鍛冶が柄家に通じたる貸家などに向ひて、四空の形に引籠みて立てる、此三百年前の遺跡を望む毎に、心の恍惚となりて暫し佇みしことは幾度なるを知らず。

今この處を過ぎむとするとき、鎖したる戸門の扉に倚りて、聲を吞みつゝ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えす。我足音に驚かされてみかへりたる面、余に小説家の筆なければこれを寫すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたけに愁を含める目、半ば露を宿せる長き睫毛に掩はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深く我心の底までは徹したるか。

彼は料らぬ深き歎きに遣ひて、前後を顧みることなく、こゝに立ちて泣くにや。わが臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覺えず側に寄り、何故に泣き玉ふか。ところに鬱鬱なき外人は、却りて力を借し易きこともあらむ。一といひ掛けたるが、我ながらわが大膽なるに呆

余は模倣たる功名の念と、檢束に慣れたる勉強力とをもちて、忽ちこの歐羅巴の新大都會に立てり。何等の光彩ぞ、我目を射むとするは。何等の色澤ぞ、我心を迷はさむとするは。菩提樹下と譯するときは、幽靜なる境なるべく思はるれど、この大道の如きウンテル・デン・リンデンに來て兩邊なる石だゝみの人道を行く隊々の少女を見よ。胸張り肩聳えたる上官の、まだ維廉一匹の街に臨める窓に倚り居たりなりければ、様々の色に飾り成したる禮装をなしたる、妍き少女の巴里まねびの都したる、彼も此も目を驚かさぬはなきに、車道の土塵青の上を苔もせて走るいろ／＼の馬車、雲に聳ゆる樓閣の少しとぎれたる處には、暗れたる空に夕立の音を聞かせて漲り落つ噴井の水、遠く望めばブランドブルク門を隔て、綠樹枝をさし交はしたる中より、穹天に浮び出でたる凱旋塔の女神の像、この許多の景物目睫の間に聚まりたれば、始めてこゝに來しもの、應接に違なきも宜なり。されど我胸には狭ひいかなる境に遊びても、あだなる美觀に心をば動さじの誓ありて、つねに我を襲ふ外物を遮り留めたりき。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ、おほやけ

の紹介狀を出だして東來の意を告げし普魯西の官員は、皆快く余を迎へ、公使館よりの手つゞきだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教へもし傳へもせむと約しき。喜ばしきは、わが故郷にて、獨逸、佛蘭西の語を學びしことなり。彼等は始めて余を見しとき、いづくにていつの間にかくは學び得たると問はぬことなかりき。

さて官事の暇あるごとには、かねておほやけの許をば得たりければ、ところの大學に入りて政治學を修めむと、名を簿冊に記させしむと月ふた月と過す程に、おほやけの打合せをば報告書に作りて送り、さらぬをば寫し留めて、つひには幾巻をかなしけむ。大學のかたにては、研き心に思ひ計りしが如く、政治家になるべき特科のあるべうもあらず、此か彼かと心迷ひながら、二三の法家の講義に列ることにおもひ定めて、謝金を收め、往きて聴きつ。

かくて三年ばかりは夢の如くにたちしが、時來れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ、余は父の遺言を守り、母の教に従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず學びし時より、官長の善き働き手を得たりと覺ます

が喜ばしきにたゆみなく勤めし時まで、たゞ所動的器械的人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大學の風にあたりたればにや、心の中なになく安んず、奥深く潛みたりしまことの我は、やうやく表にあらはれて、きのふまでの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我身の今世に雖飛すべき政治家になるにも宜しからず、また書く法典を讀じて獄を斷する法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。

余は私におもふやう、我母は余を活きたる字書となさむとし、我長官は余を活きたる條例となさむとやしけむ。字書たらむは猶ほ堪ふべけれど、條例たらむは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題にも、極めて丁寧にいられしたる余が、この頃より官長に寄する書には連りに法制の細目に拘ふべきにあらぬを論じて、一たび法の精神をだに得たらむには、紛々たる萬事は破竹の如くなるべしなど、廣言しぬ。又た大學にては法科の講義を傳所にして、歴史文學に心を寄せ、漸く蘆を嚼む境に入りぬ。官長はもと心のまゝに用ゐるべき器械をこそ作らむとしたりけめ。獨立の思想を懷きて、人なみならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべ

少女は驚き感ぜしきま見えて、余が辭別のた  
めに出したる手を、臂にあてたるが、はらく  
と流つる熱き涙を我手の背に漑ぎつ。

嗚呼、何等の惡因ぞ。この恩を謝せむとて、  
自ら我僑居に來し少女は、シヨオベンハウエル  
を右にし、シルレルを左にして、終日兀坐する  
我讀書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。  
この時を始めて、余と少女との交漸く繁く  
なりもて行きて、同郷人にさへ知られければ、  
彼等は速了にも、余を以て色を舞姫の群に漁ず  
るものとしたり。われ等二人の間にはまだ癡狀  
なる歡樂のみ存したるを。

その名を斥さむは憚あれど、同郷人の中に  
事を好む人ありて、余が屢々芝居に入出して、  
女優と交るといふことを、官長の許に報じつ。  
さらぬだに余が頗る學問の岐路に走るを知りて  
憎み思ひし官長は、遂に旨を公使館に傳へて、  
我官を免じ、我職を解いたり。公使がこの命  
を傳ふる時余に諷ひしは、若し即時に郷に歸ら  
ば、路用を給すべけれど、若し猶こゝに在らむ  
には、公の助をば仰ぐべからずとのことなり  
き。余は一週日の猶豫を請ひて、とやかうと思  
ひ煩ふうち、我生涯にて尤も悲痛を覺えさせ  
たる二通の書狀に接しぬ。この二通は殆ど同

時に發したるものなれど、一は母の自筆、一は  
親族なる某が、母の死を、我がまたなく慕ふ  
母の死を報じたる書なりき。余は母の書中の言  
をこゝに反覆するに堪へず、涙の迫り來て筆の  
運を妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、この時まででは餘所目  
に見るより清白なりき。彼は父の貧きがため  
に、充分なる教育を受けず、十五の時に舞の師  
のつりに應じて、この取づかしき業を教へら  
れ、「クルズス」果ては後、「キクトリヤ」座に出  
で、今は場中第二の地位を占めたり。され  
ど詩人ハックレンデルが當世の奴隸といひし如  
く、果なきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて  
繋かれ、晝の温習、夜の舞臺と緊しく使はれ、  
芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、  
美しき衣をも纏へ、場外にてはひとり身の衣  
食も足らず勝ちなれば、親腹からを養ふもの  
はその辛苦奈何ぞや。されば彼等の仲間にて、  
賤しき限りなる業に墮ちぬは稀なりとぞいふな  
る。エリスがこれを道れしは、おとなしき性質  
と、剛氣なる父の守護とに依りてなり。彼は幼  
き時より物讀むことをば流石に好みしかど、手  
に入るは卑しき「コルボルタージュ」と唱ふる貸  
本屋の小説のみなりしを、余と相識る頃より、

余が借したる書を讀みならひて、漸く趣味をも  
知り、言葉の詠をも正し、いくほどもなく余に  
寄するふみにも誤字少なくなりぬ。かゝれば  
余等二人の間には先づ師弟の交りを生じたる  
なりき。我が不時の免官を聞きしときに、彼は  
色を失ひつ。余は彼が身の事に關りしを包み  
隠したれど、彼は余に向ひて母にはこれを秘め  
玉へと云ひぬ。こは母の余が學費を失ひしを知  
りて余を疎んぜむを恐れてなり。

嗚呼、委しく爰に寫し出さむも要なれど、  
余が彼を愛する心の俄に強くなりて、遂に離  
れ難き中となりしは此折なりけり。我一身の大  
事は前に横りて、洵に危急存亡の秋なるに、  
この行ありしをあやしみ、又た誹る人もある  
べけれど、余がエリスを愛する情は、始めて相  
見し時よりあさくはあらぬに、いま我數命を擲  
み、又た別離を悲みて伏し沈みたる面に、鬢  
の毛の解けてかゝりたる、その美しき、いぢらし  
き姿は、余が悲痛感觸の刺激によりて常ならず  
なりたる臍髓を射て、恍惚の間にこゝに及び  
しを奈何にせむ。  
公使に約せし日も近づき、我命はせまりぬ。  
このまゝにて郷にかへらば、學成らずして汚名  
を負ひたる身の浮ぶ瀬あらじ。さればとて留ま



れたり。

彼は驚きてわが黄なる面を打守りしが、わが眞率なる心や色に形はれたりけむ。一君は善き人なりと見ゆ。彼の如く、聞くはあらじ。又た我母の如く。一暫し涸れたる涙の泉は又た溢れて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救ひ玉へ、君。わが恥なき人とならむを。母はわが彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬りては協はぬに、家に一錢の時だになし。」

跡は秋歌の聲のみ。我眼はこのうつむきたる少女の顫ふ項にのみ注ぎたり。

「君が家に送り行かむに、先づ心を鎮め玉へ。」

聲をな人に聞かせ玉ひそ。こゝは往來なるに。彼は物語するうちに、覺えず我肩に倚りしが、この時と頭を擡げ、又始めてわれを見たるが如く、恥ぢて我側を飛びのきつ。

人の見るが厭はしきに、早足に行く少女の跡に附きて、寺の筋向ひなる大戸を入れば、缺け損じたる石の櫓あり、これを上ぼりて、四階目に腰を折りて滑るべき程の戸あり。少女は鋪びたる針金の先きを振ち曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中よりしはがれたる老嫗の聲して、「誰ぞ」と問ふ。エリス歸りぬと答ふる間も

なく、戸をあらゝかに引開けしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦の痕を額に印せし面の老嫗にて、古き獸綿の衣を着、汚れたる上靴を穿きたり。エリスの余に會料して入るを、かれは待ち兼ねし如く戸を開くたて切りつ。

余は暫し呆然として立ちたりしが、ふと油燈の光に透して戸を見れば、エルンスト、ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と註したり。これすぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ争ふごとき聲聞えしが、又た靜になりて戸は再び明きぬ。さきの老嫗は慇懃におのが無禮の振舞せしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨にて、右手の低き窓に、眞白に洗ひたる麻布を懸けたり。左手には粗末に積上げたる煉瓦の窓あり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を掩ひし臥床あり。伏したるはなき人なるべし。寢の側なる戸を開きて余を導きつ。この處は所謂「マンサルド」の街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向ひて斜に下れる梁を、厚紙にて張りし下の、立たば頭の支ふべき處に臥床あり。中央なる机には美しき紙を掛けて、上には書物一二巻と寫眞帖とを列べ、陶瓶にはこゝに似

合はしからぬ高き花束を生けたり。それが傍に少女は聲を帯びて立てり。

彼は僂れて美なり。乳の如き色の頬は燈火に映じて微紅を潤したり。手足の纖く、真なるは、貧家の女に似ず。老嫗の室を出し跡にて、少女は少しく訛りたる言葉にて云ふ。「許し玉へ。君をこゝまで導きし心なきを。君は善き人なるべし。我をばよも憎み玉はじ。明日に迫るは父の葬、たのみに思ひしシャウムベルヒ君は彼を知らでやおはさむ。彼は、キクトリヤ」座の座頭なり。彼が抱へとなりしより、早や二年なれば、事なく我等を助けむと思ひしに、人の愛に附けこみて、身勝手なるいひ掛けせむとは。

我を救ひ玉へ、君。金をば薄き給金を析きて還し參らせむ。總令我身は食はずとも。それもならずば母の言葉に。彼は涙ぐみて身をふるはせたり。その見上げた目には、人否とはいはせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、又自ら知らぬにや。

我が隠しには二三「マルク」の銀貨あれど、それに足るべくもあらねば、余は時計をはつして机の上に置き、「これにて一時の急を凌ぎ玉へ。質屋の使のモンビシユウ街三番地に太田と尋ね來む折には借を取らすべきに。」

いふものならむと始めて心づきしは母なりき。嗚呼、さらぬだに覺束なきは我身の行末なるに、若し眞なりせばいかにせまし。

今朝は日曜なれば家に在れど、心は樂しからず。エリスは床に臥すほどにはあらねど、小き

鐵爐の畔に椅子さし寄せて言葉寡し。この時戸口に人の聲して、程なく応にありしエリス

が母は、郵便の書狀を以て來て余にわたしつ。見れば見覺えある相澤が手なるに、郵便券は普

魯西のものにて、消印には伯林とあり。訝りながら披きて讀めば、頼みの事にて豫め知らするに由なかりしが、昨夜こゝに着せられし天方

大臣に跟きてわれも來たり。伯の汝を見まほしとのたまふに疾く來よ。汝が名譽を恢復する

も此時にあるべきぞ。心の心急がれて用事をのみいひ遣るとなり。讀み畢りて茫然たる面もち

を見て、エリスは、「故郷よりのふみなりや。惡しき便にてはよも。」彼は例の新聞社の報酬

に關する書狀と思ひしらむ。「否、心にな掛けそ。おん身も名を知る相澤が、大臣と俱にこゝに來てわれを呼ぶなり。急ぐといへば今よりこそ。」

かはゆき獨り子を出し遣る母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみえもやせむと思へばならむ、

エリスは病をつとめて起ち、上襦袴も極めて白きを選び、丁寧にしまひ置きし「ゲエロック」といふ二列ぼたんの服を出して着せ、襟飾りさへ余が爲めに手づから結びつ。

「これにて見苦しとは誰れも得言はじ。我鏡に向きて見玉へ。何故にかく不興なる面もちを見せ玉ふか。われも諸共に行かまほしきを。」少し

し容をあらためて、「否、かく衣を更め玉ふを見れば、何となくわが豊太郎の君とは見えず。一

又少し考へて、「縱令富貴になり玉ふ日はありとも、われをば見棄て玉はじ。我病は母の宜ふ

如くならずとも。」

「何、富貴。余は微笑したり。『政治社會などに』出でむの望みは絶ちしより幾年をか經ぬるを。大臣は見たくもなし。唯年久しく別れたりし友

にこそ逢ひには行け。」エリスが母の呼びし一等ドロシケは、輪下にきしる雪道を窓の下まで來ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套

を背に披ひて手をば通さず、帽を取りてエリスに接吻して樓を下りつ。彼は泫りし窓を明け、亂れし髪を朔風に吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。

余が車を下りしは「カイゼルホーフ」の入口なり。門者に祕書官相澤が室の番號を問ひて、久

しく踏み慣れぬ大理石の梯を登り、中央の柱に「アリュツシュ」を被ひし「ゾファ」を据ゑつけ、正面には鏡を立てたる前房に入りぬ。外套をばこゝにて脱ぎ、廊をつたひて室の前まで往

きしが、余は少し踟蹰したり。同じく大學に在りし日に、余が品行の方正なるを激賞したる相澤が、けふは怎なる面もちして出迎ふらむ。

室に入りて相對して見れば、形こそ舊に比べれば肥えて逞ましくなりたれ、依然たる快活の

氣象、我失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。別後の情を細敘するにも違あらず、引かれて大臣に謁し、委託せられしは獨逸語にて記せる

文書の急を要するを翻譯せよとの事なり。余が文書を受領して大臣の室を出でし時、相澤は跡より來て余と午餐を共にせむといひぬ。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路は概ね平滑なりしに、轉軻數奇なるは我身の上なりければなり。

余が胸臆を開いて物語りし不幸なる閱歷を聞きて、かれは屢々驚きしが、なか／＼に余を諷めむとはせず、却りて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の華ししとき、彼は色を正し

て諷むるやう、この一段の事は素と生れながらなる弱き心より出でしなれば、今更に言はむも

らむには、學費を得べき手だてなし。

此時余を呼けしは今我同行の一人なる相澤謙吉なり。彼は東京に在りて既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編輯長に説きて、余を社の通信員となし、伯林に留まりて政治學藝の事などを報道せしむることとなしつ。

社の報酬はいふに足らぬほどなれど、棲家をもつし、午餐に行く食店をもかへたらむには、微なる暮しは立つべし。兎角思案する程に、心の誠を顯はして、助の綱をわれに投げ掛けたるはエリスなりき。かれはいかに母を説き動かしけむ、余は彼等親子の家に寄寓することとなり、エリスと余はいつの間にか、有るか無きかの財産を合せて、憂きがなかにも樂しき月日を送りぬ。

朝の珈琲果つれば、彼は溫習に往き、さらぬ日には家に留まりて、余はキヨオニヒ街の間口せまく奥行のみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出で、彼此と材料を集む。この裁り開きたる引窓より光を取れる室にて、定りたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に借して已れは遊び暮す老人、取引所の業の隙を餘みて足を休むる商人などと臂を並べ、

冷なる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ、小をんなが持て來し一盞の珈琲の冷むるをも顧みず、明きたる新聞の細長き板ぎれに插みしを、幾種ともなく掛け聯ねたるかたへの壁に、いく度となく往來する日本人を、知らぬ人は何とか見けむ。又た一時近くなるほどに、溫習に往きたる日には返り路によぎりて、余と共に店を立出づること常ならず輕き、掌上の舞をもなしえつべき少女を、怪み見送る人もありしなるべし。

我學問は荒かぬ。屋根裏の一燈微に燃えて、エリスが庫裏よりかへりて、椅に寄りて縫ものなどする側の机にて、余は新聞の原稿を書けり。昔の法令條目の枯葉を紙上に掻寄せしとは殊にて、今は活潑々たる政界の運動、文學美術に係る新現象の批評など、彼此と結びあはせて、力の及ばむ限り、ピヨルネよりは寧ろハイネを學びて思を構へ、様々の文を作りし中にも、引續きて維廉一世と佛得力三世との劇組ありて、新帝の即位、ビスマルク侯が進退如何などの事に就ては、故らに詳かなる報告をなしき。さればこの頃よりは思ひしよりも忙はしくして、多くもあらぬ藏書を繰き、舊業をたづぬること難く、大學の籍はまだ刪られねど、謝金を收

むることの難ければ、唯一つにしたる講筵だに往きて聴くことは稀なりき。

我學問は荒かぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにといふに、凡そ民間學の流布したることは、歐洲諸國の間にて獨逸に若くはなからむ。幾百種の新聞雜誌に散見する議論には、頗る高尚なる多きを、余は通信員となりし日より、曾て大學に繋ぐ通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、讀みては又讀み、寫しては又寫す程に、今まで一筋の道をゆみ走りし知識は、自ら綜括的になりて、同郷の留學生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に到りぬ。彼等の仲間には獨逸新聞の社説をだに善くはえ讀まぬがあるに。

明治廿一年の冬は來にけり。表街の人道にてこそ沙をも捲け、鋪をも揮へ、クロステル街のあたりは凸凹坎坷の處は且ゆめれど、表のみは一面に氷りて朝に戸を開けば飢を凍えし雀の落ちて死にたるも衰れなり。室を溫め、爐に火を焚きつけても、壁の石を徹し、衣の細を穿つ北歐羅巴の寒さは、なか／＼に堪へがたかり。エリスは二三日前の夜、舞臺にて卒倒しきとて、人に扶けられて歸り來しが、それより心地あしとて休み、もの食ふごとに吐くを惡阻と



上に墮したり。余が大臣の一行に随ひて、ペエテルブルクに在りし間に余を圍繞せしは、巴里絶頂の騎舎を、氷雪の裡に移したる王城の粧飾、故らに黄蠟の燭を幾つともなく點したるに、幾星の勳章、幾枝の「エボレット」が映射する光、彫鏤の工を盡したる「カミン」の火に寒さを忘れて使ふ宮女の肩の閃きなどにて、この間佛蘭西語を最も圓滑に使ふものはわれなるがゆゑに、賓主の間に周旋して事を辨ずるものもまた多くは余なりき。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日毎に書を寄せしかばえ忘れざりき。余が立ちし日には、いつになく獨りにて燈火に向はむことの物憂さに、知る人の許にて夜に入るまでもの語りし、疲るゝを待ちて家に還り、直ちに寝ねつ。次の朝目醒めし時は、猶獨り跡に残りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出でし時の心細さ、かゝる思ひをば、生計に苦みて、けふの日の食なかりし折にもせざりき。これ彼が第一の書の略なり。

また程經てのふみは頗る思ひせまりて書きし如くなりき。文をば否といふ字にて起したり。否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。君は故里に頼もしき旅なしとのたまへば、此地に

善き世渡のたつきあらば、留り玉はぬことやはある。又我愛にて繋ぎ留めでは止まじ。それも協はで東に還り玉はむとならば、親と共に往かむは易けれど、か程多き路用を何處よりか得む。怎なる業をしても此地に留りて、君が世に出で玉はむ日をこそ待ためと常に思ひしが、暫しの旅とて立出で玉ひしよりこの二十日ばかり、別離の思は日にけに茂りゆくのみ。秋を分つたはた一瞬の苦難なりと思ひしは迷なりけり。我身の常ならぬが漸くにしるくなりし、それさへあるに、縱令如何なることありとも、我をば勢な棄て給ひそ。母とはいたく争ひぬ。されど我身の過ぎし頃には似て思ひ定めたるを見て心折れぬ。わが東に往かむ日には、ステツチンわたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せむとぞいふなる。書きおくり玉ひし如く、大臣の君に重く用ゐられ玉は、我路用の金は兎も角もなりなむ。今は只管君がベルリンに還り玉はむ日を待つのみ。

嗚呼、余は此の書を見て始めて我地位を明視し得たり。恥かしきはわが鈍き心なり。余は我身一つの進退につきても、又我身に係らぬ他人の事につきても、果斷ありと自ら心に誇りしが、此果斷は順境にのみありて、逆境にはあ

らず。我と人との關係を照さむとするときは、概みし胸中の鏡は曇りたり。

大臣は既に我に厚し。されどわが近眼は唯だおのれが盡したる職分をのみ見き。余はこれに未來の望を繋ぐことには、神も知るむ、絶えて想判らざりき。されど今こゝに心づきて、我心は猶ほ冷然たりし歟。先に友の勧めしときは、大臣の信用は屋上の雲の如くなりしが、今は稍やこれを得たるかと思はるゝに、相澤がこの頃の言葉の端に、本國に歸りての後も俱にかくてあらば云々といひしは、大臣のかく宜ひしを、友ながら公事なれば明には告げざりし歟。今更おもへば、余が輕卒にも彼に向ひてエリスとの關係を絶たむといひしを、早く大臣に告げやしけむ。

嗚呼、獨逸に來し初に、自ら我本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと思ひしが、こは足を縛して放たれし鳥の暫し狼を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の絲は解くに由なし。冀にこれを繰つりしは、我某省の官長にて、今はこの絲、あなあれ、天方伯の手中に在り。

余が大臣の一行と共にベルリンに歸りしは、恰も是れ新年の旦なりき。停車場に別を告げ

甲斐なし。とはいへ、學識あり、才能あるものが、いつまでか少女の情にかゝづらひて、目的なき生活をなすべき。今は天方伯も唯だ獨逸語を利用せむの心のみなり。おのれも亦伯が當時の免官の理由を知れるが故に、強て其成心を動かさむとはせず、伯が心中にて曲庇者なりなれど忘はれむは、朋友に利なく、おのれに損あればなり。人を薦むるは先づ其能を示すに若かず。これを示して伯の信用を求めよ。又彼少女との關係は、縱令彼に誠ありとて、縱令情交は深くなりきとて、人材を知りてのこひにあらず、慣習といふ一種の情性より生じたる交なり。意を決して斷て。是れその言のあらましなりき。

大洋に舵を失ひしふな人が、遙なる山を望む如きは、相澤が余に示したる前途の方鍼なり。されどこの山は猶ほ重霧の間に在りて、いつ往きつかむも、否、果して往きつばとて、我中心に満足を與へむも定かならず。貧きが中にも樂しきは今の生活。棄て難きはエリスが愛。わが弱き心には思ひ定めむよしなかりしが、始らく友の言に従ひて、この情絲を斷たむと約しき。余は守る所を失はじと思ひて、おのれに敵するものに抗抵すれども、友に對して否と

はえ對へぬが常なり。

別れて出づれば風は面を撲てり。二重のガラス窓を緊く鎖して、大いなる陶爐に火を焚きたる、ホテル一の食堂を出でしなれば、薄き外套を透る午後四時の寒さは殊さらに堪へ難く、膚栗立つと共に、余は心中に一種の寒さを覺えき。

翻譯は一夜になし果てつ。「カイゼルホーフ」へ通ふことはこれより漸く繁くなりもて行く程に、初めは伯の言葉も用事のみなりしが、後には近比故郷にてありしことなどを舉げて余が意見を問ひ、折に觸れては道中にて人々の失錯ありしことどもを告げて打笑ひ玉ひき。

一月ばかり過ぎて、或る日伯は突然われに向ひて、「余は明旦、魯西亞に向ひて出發すべし。隨ひて來べきか」と問ふ。余は數日間、かの公務に邁なき相澤を見ざりしかば、此間是不意に余を驚かしつ。「いかで命に従はざらむ。」余は我恥を表はさむ。この答はいち早く決斷していひしにあらず。余はおのれが信じて頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答の範圍を善くも量らず直ちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、そのなし難き心づきて、強て當時の心虚

なりしを掩ひ隠し、耐忍してこれを實行すること屢なり。

此日は翻譯の代に、旅費へ添へて賜はりしを持て歸りて、翻譯の代をばエリスに預けつ。これにて魯西亞より歸り來むまでの費をば掩ひつべし。彼は醫者に見せしに常ならぬ身なりといふ。貧血の性ありしゆゑ、幾月か心づかでありけむ。座頭よりは休むことあまりに久しければ籍を除いたりと言ひおこせつ。まだ一月ばかりなるに、かく嚴しきは故あればなるべし。旅立の事にはいたく心を悩ますとも見えず。偽りなき我心を厚く信じたれば。

鐵路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意ともなし。身にあはせて借りし黒き禮服、新に買ひ求めしゴタ板の魯延の貴族譜、二三種の辭書などを、小「カバン」に入れしのみ。流石に心細きことのみ多き此頃なれば、出で行く跡に残らむも物憂かるべく、又た停車場にて涙こぼしなどしたらむには影護かるべけれどとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出しやりつ。余は旅装整へて戸を鎖し、鍵をば入口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

魯國行につきては、何事かを敘すべき。わが舌人たる務めは忽地に余を載せ去りて、青雲の

猶ほ人の出入盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覺えず。我腦中には唯だ我は免すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ滿ちたりき。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寝ねずと覺ぼしく、炯然たる一星の光、暗き空にすかして明かに見ゆるが、降りしきる驚の如き雪片に、乍ち掩はれ、乍ち又顯れて、風に弄ばるゝに似たり。戸口に入りしより疲を覺えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這ふ如くに梯を登りつ。庖厨を過ぎ、室の戸開きて入りしに、机に倚りて櫛櫛縫ひたりしエリスは振り返りて、「あつ」と叫びぬ。いかにかし玉ひし。おん身の姿は。」

驚きしも宜なりけり。蒼然として死人に等しき我面色、帽をばいつの間に失ひ、髪は蓬ろに亂れて、幾度か道にて跌き倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪に汚れ、處々は裂けたれば。

余は咎へむとすれど聲出でず、膝の頻りに戦かれて立つに堪へねば、椅子を握まむとせしまでは覺えしが、その儘に地に倒れぬ。

人事を知る程になりしは數週の後なりき。熟劇して謔語のみ言ひしを、エリスが慰みにみとる程に、或日相澤は尋ね來て、余がかれに隠

したる顛末を審らに知りて、大臣には病の事のみ告げ、よきやうに締置きしなり。余は始めて病牀に待するエリスを見て、その變りたる姿に驚きぬ。彼はこの數週の内にかく瘦せて、血走しし目は窪み、灰色の頬は落ちたり。相澤の助に日々の生計には窮せざりしが、此恩人は彼を精神的に役したり。

後に聞けば彼は相澤に逢ひしとき、余が相澤に與へし約束を聞き、又かの夕べ大臣に聞え上げし一語を知り、俄に座より躍り上がり、面色さながら土の如く、「我豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺き玉ひしか」と叫び、その場に倒れぬ。相澤は母を呼びて共に扶けて床に臥せせしに、暫くして醒めしときは、日は直視したるまゝにて傍の人をも見知らず、我名を呼びていたく罵り、髪をむしり、蒲團を嚙みなどし、父連に心づきたる様にて物を探り計めたり。母の取りて與ふるものをば悉く抛ちしが、机の上なりし櫛櫛を與へたるとき、探りみて顔に押しあて、涙を流して泣きぬ。

これよりは騒ぐことはなけれど、精神の作用は殆ど全く廢して、その癡なること赤兒の如くなり。醫に見せしに、過劇なる心勞にて急に起りし「バラノイア」といふ病なれば、治癒の見込

なしといふ。ダルドルフの瀧狂院に入れむとせしに、泣き叫びて騒かず、後にはかの櫛櫛一つを身につけて、幾度か出しては見、見ては欲歇す。余が病牀をば離れぬど、これさへ心ありてにはあらずと見ゆ。たゞをり／＼思ひ出したるやうに「藥を、藥を」といふのみ。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を漉さしは幾度ぞ。大臣に隨ひて歸東の途に上りしときは、相澤と議りてエリスが母に徴なる生計を營むに足るほどの資本を與へ、あはれなる狂女の胎内に遺し、子の生れむをりの事をも頼みおきぬ。

嗚呼、相澤謙吉が如き良友は世にまた得がたかるべし。されど我腦裡に一點の彼を憎むころは今日までも残れりけり。

### わかれかね

わかれかね心はうちにのこるともしらでや  
ひとの戸をばさすらむ

『水沫集の「於面影」より』



て、我家をさして車を驅りつ。こゝにては今も除夜に眠らず、元旦に眠るが習なれば、萬戸寂然たり。寒きは強く、路上の雪は稜角ある氷片となりて晴れたる日に映じ、きら／＼と輝けり。車はクロステル街に曲りて、家の入口に駐まりぬ。この時窓を開く言せしが、車よりは見えぬ。馭丁に「カバン持たせて梯を登らむとする程に、エリスの梯を駆け下るに逢ひぬ。彼が一聲叫びて我頭を抱きしを見て馭丁は呆れたる面もちにて、何やらむ髭の内にてぶひしし聞えず。

「善くぞ歸り來玉ひし。歸り來玉はずば我命は絶えなむを。」

我心はこの時までも定まらず、故郷を憶ふ念と榮達を求むる心とは、時として愛情を壓せむとせしが、唯だ此一刹那、低徊踟躕の思は去りて、余は彼を抱き、彼の頭は我肩に倚りて、彼が喜びの涙ははら／＼と肩の上に落ちぬ。

「幾階か持ちて行くべき。」と鐸の如く叫びし馭丁は、いち早く登りて梯の上に立てり。

戸の下に出迎へしエリスが母に、馭丁を勞ひ玉へと銀貨をわたして、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて室に入りぬ。一瞥して余は驚きたり、机の上には白き木綿、白きレネ

スなどを堆く積み上げたりければ。

エリスは打失ひつゝこれを指して、「何とか見玉ふ、この心がまへを。」といひつゝ、一つの木綿ぎれを取上げしを見れば襦袢なりき。わが心の樂しさを思ひ玉へ。産まれむ子は君に似て黒き瞳子をや持ちたらむ。この瞳子。嗚呼、夢にのみ見しは君が黒き瞳子なり。産れたらむ日には君が正しき心にて、よもあだし名をばたらせ玉はじ。彼は頭を垂れたり。「釋しと笑ひ玉はむが、寺に入らむ日はいかに嬉しからまし。一見上げたる日には涙満ちたり。

二三日の間は大臣をも、たびの疲れやおはさむとて敢て訪はらず、家の中にみ籠り居りしが、或る日の夕暮使して招かれぬ。往きて見れば待遇殊にめでたく、魯西亞行の勞を問ひ慰めて後、われと共に東に歸へる心はなきか、君が學問こそが測り知る所ならね、語學のみにて世の用をばなすべし、滯留の餘りに久しければ、様

様の係累もあらむと、相澤に問ひしに、さることなしと聞きて落居たりと宜ふ。その氣色辭むべくもあらず。あなやと思ひしが、流石に相澤の言を偽なりともいひ難きに、若しこの手に縋らずば、本國をも失ひ、名譽を挽きかへさむ道をも絶ち、身はこの廣漠たる歐洲大都の

人の海に葬られむかと思ふ念、心頭を衝いて起れり。嗚呼、何等の特操なき心ぞ、「承はり侍り」と應へたるは。

黒がねの箱はありとも、歸りてエリスに何とかはむ。「ホテル」を出でしときの我心の錯亂は、譬へむに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思に沈みて行く程に、往きあふ馬車の馭丁に幾度か叱せられ、驚きて飛びのきつ。暫くして不圖あたりを見れば、歌苑の傍に出でたり。倒るゝ如くに路の邊の梯に倚りて、灼くが如く熱く、椎にて打たるゝ如く響く頭を榻背に持たせ、死したる如きさまにて幾時をか過しけむ。劇しき寒さ骨に徹すと覺えて醒めし時は、夜に入りて雪は繁く降り、帽の庇、外套の肩には一寸許も積りたり。

最早十一時をや過ぎけむ、モハビッド、カルル街通ひの鐵道馬車の軌道も雪に埋もれ、گرانデンブルヒ門の畔の瓦斯燈は淋しき光を放ちたり。立ち上がらむとするに足の凍えなれば、兩手にて擦りて、漸やく歩みうる程にはなりぬ。足の運びの抄らねば、ホテル街まで來しときは、夜半をや過ぎたりけむ。こゝ迄來し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル・デン・リンデンの酒家、茶店は

を、われ一個人にとりては斯くおもひぬ。」かく二人の物語する間に、道はデウベン城の前にいでぬ。園をかこめる低き鐵柵をみぎひだりに結ひし眞砂路一線に長く、その果つるところに舊りたる石門あり。入りて見れば、しろ木樅の花咲きみだれたる奥に、白雲塗りたる長葺の高どのあり。その南のかたに高き石の塔ありて埃及の尖塔にならひて造れりと覺ゆ。けふの泊のこことを知りて出迎へし、リフレエ着たる下部に引かれて、白石の階のぼりゆくとき、園の木立を洩るゆふ日朱の如く赤く、階の兩側に蹲りたる人首獅身の「スフィンクス」を照したり。わがはじめて入る獨逸貴族の城のさまいかならむ。さきに遠く望みし馬上の美人はいかなる人にか。これらも皆解きあへぬ謎なるべし。

四方の壁と穹窿とは、鬼神龍蛇さまざまの形を畫き、「トルウヘ」といふ長楕めきたるものをところ／＼に据ゑ、柱には刻みたる獸の首、古代の橋、打物などを懸けつらねたる間、いくつかが過ぎて、樓上に引かれぬ。

ピュロウ伯は常の服とおぼしき黒の上衣のいと寛きに着更へて、伯爵夫人とともにもこゝに居り。かねて相識れる中なれば、大隊長と心よげに握手し、われをも引合はさせて、胸の底より出

づるやうなる聲にてみづから名乗り、メエルハイムには「よくぞ來玉ひし、と軽く會釈しぬ。夫人は伯よりおいたりと見ゆるほどに起居重けれど、こゝろの優しき目の色に出でたり。メエルハイムを傍へ呼びて、何やらむしはしき、やくほどに、伯、「けふの疲さぞあらむ。まかりて憩ひ玉へ。」と人して部屋へ誘はせぬ。

われとメエルハイムとは一つ部屋にて東向なり。ムルデの河波は窓の直下のいしづゑを洗ひて、むかひの岸の草むらは緑まだあせず。そのうしろなる柏の林にゆふ雲かゝれり。流めての方に折れ、こなたの陸膝がしらの如く出でたるところに田舎家二三軒ありて、眞黒なる粉ひき車の輪中空に聳え、ゆん手には水に枕みてつき出したる高殿の一間あり。この「バルコン」めきたるところの窓、打見るほどに開きて、少女のかしら三つ四つ、をり疊なりてこなたを覗きしが、白き馬に騎りたりし人はあらざりき。軍服ぬぎて鹽卓の傍へ倚らむとせしメエルハイムは、「かしこは若き婦人がたの居間なり、無禮なれどその窓の戸疾くさしてよ、とわれに請ひぬ。

日暮れて食堂に招かれ、メエルハイムと俱にゆくをり、「この家に若き姫達の多きことよ、」

と問ひけるに、「もと六人ありしが、一人は吾友なるフアブリス伯に嫁ぎて、のこれは五人なり。」「フアブリスとは國務大臣の家ならずや。」「さなり、大臣の夫人はこゝのあるじの姉にて、吾友といふは大臣のよつぎの子なり。」「

食卓に就きてみれば、五人の姫達みなおもひのおもひの如したる、その美しきいづれはあらぬに、上の一人の上衣も裳も黒きを着たるさま、めづらしと見れば、これなむさきに白き馬に騎りたりし人なりける。外の姫たちは日本人めづらしく、伯爵夫人のわが軍服袋めたまふ言葉の尾につきて、「黒き地に黒き紐つけたれば、プラウンシユワイヒの上官に似たり、と二人いへば、桃色の顔したる末の姫、「さにてまなし、とまだいわけなくもいやしむ色を包まていふに、皆をかしさに堪へねば、あかめし顔を汁盛りし皿の上に低れたれど、黒き衣の姫は臍だに動きざりき。暫しありて碎き姫、さきの罪贖はむとやおもひけむ、「されどかの君の軍服は上も下も黒ければイ、ダや好みたまはむ、といふを聞きて、黒き衣の姫振向きて睨みぬ。この目は常にをち方にのみ迷ふやうなれど、一たび人の面に向ひては、言葉にも増して心をあらはせり。いま睨みしさまは笑を帯びて叱りきと覺ゆ。われ

わがザツクセン軍閥につけられて、秋の演習にゆきしをり、ラアゲキツツ村の邊にて、對抗は既に果て、假設敵を攻むべき目とはなりぬ。小高き丘の上に、まばらに兵を振りて、敵と定めおき、地形の波面、木立、田舎家などを巧に櫓に取りて、四方より攻寄するさま、めづらしき壯麗なりければ、近郷の民こゝにかしこに群をなし、中に難じたる少女等が黒天鵝絨の胸當をなまし、小肌伏せたるやうなる縁袂き等、嗚れがましう、小肌伏せたるやうなる縁袂きに艸花插したるものをかして、携へし目がね忙しくかなたこなたを見廻す程に、向ひの岡な

九月はじめの秋の空は、けふしもこゝに稀なるあゝ色になりて、空氣透徹りたれば、殘る隱なくあざやかに見ゆるこの群の眞中に、馬車一輛停めさせて、年若き貴婦人いくたりか乗りたればさまゝの衣の色相映じて、花一叢、にしき一團、日もあやに、立ちたる人の腰帶、半りたる人の袴の紐などを、風ひらくと吹離かしたり。その傍に馬立てたる白髪のは角扣紐どめにせし緑の獵人服に、うすき櫛いろの袴を戴けるのみなれど、何となく由ありげに見ゆ。すこし引下がりて白き脇袢へたる少女、わが目かねはしばしこれに留まりぬ。鋼鐵いろの馬のり衣、裾長に着て、白き薄きぬ巻きたる黒帽子を被りし身の櫛げだかく、今かあなたの森陰より、むらくと打出でたる獵兵のいさましと見むとて、人々騒げどかへりみぬさま心憎し。

一殊なるかたに心留めたまふものかな。といひひきつゝ、吾肩を拍ちし長き八字髭の明色なる少年士官は、おなじ大隊の本部につけられたる中尉にて、男爵フォン、メエルハイムといふ人

(206)



音絶えぬ。

主人の伯は小部屋より出で、「物くるほしきイ、ダが當座の曲は、いつものことにて珍らしからねど、君はさこそ驚きたまひけめ」とわれに會釋しぬ。

絶えしものゝ音が耳にはなほ聞えて、うつつごゝろならず部屋へ還りしが、こよひ見聞しことに心奪はれていもねられず。床をならべしメエルハイムを見れば、これもまだ醒めたり。問はまほしきことはさはなれど、流石に憚るところなきにあらねば、さきの怪しき笛の音は誰が出しゝか知りてやおはする、「と僅にいふに、男爵こなたに向きて、「それにつきては一條のもの語あり、われもこよひは何ゆゑ寐られねば、起きてかたり聞かせむ」と語りぬ。

我等はまだ煖まらぬ臥床を降りて、まどの下なる小机にゐむかひ、烟草煙らすほどに、さきの笛の音、また窓の外におこりて、乍ち斷えたちまち續き、ひな驚のこゝろみに鳴く如し。メエルハイムは唇咬して語りいでぬ。

「十年ばかり前のことなるべし、こゝより遠からぬブリヨオゼンといふ村にあはれる孤ありけり。六つ七つのとき流行の時疫にふた頼みななくなりしに、缺唇にていと醜かりければ、か

へりみるものなくほとゝ饑に迫りしが、ある日麵包の乾きしやあると、この城へもとめに来ぬ。その頃イ、ダの君はとばかりなりしが、あはれがりて物とらせつ。玩の笛ありしを與へて「これ吹いて見よ」といへど、缺唇なればえ唄まず。イ、ダの君「あの見るしき口なほして得させよ」とむつかりて止まず。母なる夫人聞きて、幼きものゝ心やさしうかくいふなればとて醫師して縫はせ玉ひぬ。」

一その時よりかの童は城にとゞまりて、羊飼となりしが、賜はりしもてあそびの笛を離さず、後にはみづから水を削りて笛を作り、ひたすら吹きならふほどに、たれ教ふるものなければど、自然にかゝる音色を出すやうになりぬ。」

「一昨年の夏わが休暇たまはりてこゝに來たりし頃、城の一族とほ乗せむとて出でしが、イ、ダの君が白き駒すぐれて疾く、われのみ續きゆくをり、狭き道のまがり角にて、かれ草うづ高く積みし荷車に逢ひぬ。馬はおびえて一躍し、姫は辛うじて鞍にこらへたり。わがすくひにゆかむとするを待たで、傍なる高草の裡にあと叫ぶ聲すと聞く間に、羊飼の童飛ぶごとくに馳寄り、姫が馬の轡きは緊と握りておし鎮めぬ。この童が牧場のいとまだにあれば、見えがくれ

にわが跡慕ふを、姫これより知りて、人してものかづけなどはし玉ひしが、いかなる故にか、目通を許されず。童も姫がたまゝ逢ひても、こと葉かけたまはぬにて、おのれを姫ひ王ふと知り、はてはみづから避くるやうになりしが、いまま遠きわたりより守ることを忘れず、好みて姫が住める部屋の窓の下に小舟繫きて、夜も枯草の裡に眠れり。」

聞畢りて眠に就くころは、ひがし窓の硝子はやほの暗うなりて、笛の音も斷えたりしが、この夜イ、ダ姫おも影に見えぬ。その騎りたる馬のみるゝ黒くなるを、怪しとおもひて善く視れば、人の面にて缺唇なり。されど夢ごゝろには、姫がこれに騎りたるを、よのつねの事のやうに覺えて、しばしまた眺めたるに、姫とおもひしは「スフィンクス」の首にて、睡なき日なかば開きたり。馬と見しは前足おとなしく竝べたる獅子なり。さてこの「スフィンクス」の頭の上には、鸚鵡止まりて、わが面を見て笑ふさまいと憎し。

つとめて起き、窓おしあぐれば、朝日の光對岸の林を染め、微風はムルデの河づらに細紋をゑがき、水に近き草原には、ひと群の羊あり。萌黄色の「キツテル」といふ衣短く、黒き脇を

はこの末の姫の言葉にて知りぬききに大隊長がメルハイムのいひなづけの妻ならむといひし、イ、ダの君とは、この人のことなるを。かく心づきてみれば、メルハイムが言葉も振舞も、この君をうやまひ愛づと見えぬはなし。さては此中はビエロウ伯夫婦もこゝろに許したまふなるべし。イ、ダといふ姫は丈高く瘦肉にて、五人の若き貴婦人のうち、此君のみ髪黒し。かの善くものいふ日を餘所にしては、ほかの姫たち立ちこえて美しくおもふところもなく、眉の間にはいつも皺少しあり。面のいろの蒼う見ゆるは、黒き衣のためにや。

食終りてつぎの間にいづれば、こゝはちひさき座敷めきたるところにて、軟き椅子、「ゾフ」などの脚きはめて短きをおほく据ゑたり。こゝにて珈琲の饗應あり。給仕のをとこ小盡に焼酎のたぐひいくつか注いだるを持てく。あるじの外には誰も取らず、たゞ大隊長のみは、「われ一個人にとりては『シャルトリヨオズ』をこそ」と一息に飲みぬ。此時わが立ちし背のほの暗きかたにて、「一個人、一個人」とあやしき聲して呼ぶものあるに、おどろきて顧みれば、この間の隅にはおほいなる鏡がねの籠ありて、そが中なる鸚鵡が、かねて聞きしことある大隊

長のこと葉をまねびしなりけり。姫達「あな生憎の鳥や」とつぶやけば、大隊長もみづからこわ高に笑ひぬ。

主人は大隊長と巻烟草喫みて、銃獵の話せやと、小部屋のかたへゆく程に、われはさきよりこなたを打守りて、めづらしき日本人にもいひたげなる末の姫に向ひて、「このさかしき鳥はおん身のにや」と多みつゝ問へば、「否、誰のとも定かねど、われも愛でたきものにこそ思ひ侍れ。さいつ頃までは、鳩あまた飼ひしが、あまりに馴れて身に繫はるものをば、イ、ダいたく嫌へば、皆人に取らせつ、この鸚鵡のみは、いかにしてかあの姉君を憎めるがこぼれ幸にて、いまも飼はれ侍り。さならずや」と鸚鵡のかたへ首さしだしていふに、姉君憎むてふ鳥は、まがりたる嘴をひらきて、「さならずや、さならずや」と繰返しぬ。

この隙にメルハイムはイ、ダひめの傍に居寄りて、なに事かこひ求むれど、盡りてうけひかざりしに、伯爵夫人も言葉を添へたまふと見しが、姫と立ちて「ピアノ」にむかひぬ。下部いそがしく燭をみきひだりに立つれば、メルハイムは「いづれの譜をかまゐらすべき」と樂器のかたはらなる小卓にあゆみ寄らむとせ

しに、イ、ダ姫「譜なくとも」と辭ひて、おもむろに下す指尖木端に觸れて起すや金石の響。しらべ繁くなりまさるにつれて、あさ霞の如き色、姫が隙際に顯れ來つ。ゆるらかに幾尺の水晶の念珠を繰るときは、ムルデの河もしばし流をといむべく、忽ち迫りて刀槍齊く鳴るときは、むかし行旅を脅し、この城の遠祖も百年の夢を破られやせむ。あはれ、この少女のこゝろは恆に狭き胸の内に閉ぢられて、こと葉となりてあらはるゝ便なれば、その纖々たる指頭よりほとばしり出づるにやあらむ。唯覺ゆ、絲聲の波はこのデウベン城をたゞよはせて、人もわれも浮きつ沈みつ流れゆくを。曲正に閑になりて、この樂器のうちに潛みしさまゝの絃の鬼、ひとりひとりに聲なき怨を訴へをはりて、いまや諸侯たてゝ泣響むやうなるとき、訝かしや、城外に笛の音起りて、たゞくしうも姫が「ピアノ」にあはせむとす。

彈じほれたるイ、ダ姫は、暫く心附かでありしが、かの笛の音ふと耳に入りぬと覺しく遽にしらべを亂りて、樂器の筐も碎くるやうなる音をせさせ、座を起したるおもては、常より着かりき。姫たち顔見合せて「また姉唇のをこなる業しけるよ、」とさゝやくほどに、外なる笛の

姫はほとく走るやうに塔の上口にゆきて、こなたを顧みれば、われも急ぎて追付き、段の石をば先に立ちて踏みはじめぬ。ひと足遅れてのぼり来る姫の息促りて苦しげなれば、あまたび休みて、漸う上にいたりて見るに、こゝはおもひの外に廣く、めぐりに低き鐵欄干をつくり、中大に大なる切石一つ据ゑたり。

今やわれ下界を離れたるこの塔の巔にて、きのふアラゲキツツの丘の上より遙に初對面せしときより、怪しくもこゝろを引かれて、いやしき物好にもあらず、いなる心にもあらねど、夢に見、現におもふ少女と着向ひになりぬ。こより望むべきザツクセン平野のけしきはいかに美しくとも、茂れる林もあるべく、深き淵もあるべしとおもはるゝこの少女が心には、いかでか若かむ。

險しく高き石級をのぼり來て、臉にさしたる紅の色まだ褪めぬに、まばゆきほどなるゆふ日の光に照されて、苦しき胸を鎮めむためにや、この巔の眞中なる切石に腰うち掛け、かの物いふ腕をきとわが面に注ぎしときは、常は見ばえせざりし姫なれど、さきに珍らしき空想の曲かなでし時にもまして美しきに、いかなればか、某の刻みし墓上の石像に似たりと

もおもはれぬ。

姫はこと葉忙しく、「われ君が心を知りての願あり。かくいはいきのふはじめて相見て」と葉もまだかはさぬにいかでと怪み玉はむ。されどわれはたやすく惑ふものにあらず。君演習

濟みてドレスデンにゆき玉は、王宮にも招かれ國務大臣の館にも迎へられ玉ふべし」といひかけ、衣の間より封じたる文を取り出で、われに渡し、「これを知れず大臣の夫人に肩け玉へ、人知れず」と頼みぬ。大臣の夫人はこの君の伯母御にあたりて、姉君さへかの家にゆきておはすといふに、始て逢ひしこと國人の助を借らでものことなるべく、またこの城の人に知らせじとならば、ひそかに郵便に附しても善からむに、かく氣をかねて希有なる振舞したまふを見れば、この姫こゝろ狂ひたるにはあらずやとおもはれぬ。されどこはたゞしばしの事なりき。姫の日は能くものいふのみにあらず、人のいはぬことをも能く聞きたりけむ、分疏の様に語を續きて、「フアラリス伯爵夫人のわが伯母なることは、聞きてやおはさむ。わが姉もかしこにあれど、それにも知られぬを願ひて、君が御助を借らむとこそおもひ侍れ。こゝの人への心づかひのみならば、郵便もあれど、それすら

獨出づること稀なる身には、協ひがたきをおもひやり玉へ。」といふに、げに故あることならむとおもひて諾ひぬ。

入日は城門近き木立より虹の如く洩れたるに、河霧たち添ひて、おぼろけになる頃塔を下れば、姫たちメルハイムが話しはてゝわれ等を受付け、うち連れて新にともし火をかきやかしたる食堂に入りぬ。こよひはイ、ダ姫きのふに變りて、樂しげにもてなせば、メルハイムが面にも喜のいろ見えにき。

あくる朝ムツチエンのかたをこゝろざしてこを立ちぬ。

秋の演習はこれより五日ばかりにて終り、わが隊はドレスデンにかへりしかば、われはゼエ、ストラアセなる館をたづねて、さきにフオン、ビュロウ伯爵が娘イ、ダ姫に接ひしことを果さむとせしが、固よりところの習にては、冬になりて交際の時節來ぬ内、かゝる貴人に逢はむことたやすからず、隊附の士官などの常の訪問といふは、玄關の傍なる一間に延かれて、名簿に筆染むることなればおもふのみにて止みぬ。

その年も隊務いそがはしき中に暮れて、エルベがは上流の雪消にはちす葉の如き氷塊、み



のらはしたる童、身の丈きはめて低きが、おどろなす赤き髪ふり亂して、手に持ちし鞭面白げに鳴らしぬ。

この日は朝の珈琲を部屋にて飲み、書頭隊長と俱にグリーンマといふところの銃獵仲間の會堂にゆきて演習みに來たまひたる國王の宴にあづかるべき筈なれば、正服着て待つほどに、あるじの伯は馬車を借して階の上まで見送りぬ。われは外國士官といふをもて、將官、佐官をのみつどふるけふの會に招かれしが、メエルハイムは城に残りき。田舎なれど會堂おもひの外に美しく、食卓の器は王宮よりはこび來ぬとて、純銀の皿、マイセン燒の陶のものなどあり。この國のやき物は東洋のを粉本にせしといへど、染いだしたる草花などの色は、我邦などのものに似もやらず。されどドレスデンの宮には、陶ものゝ間といふありて、支那日本の花瓶の類おほかた備れりとぞいふなる。國王陛下にはいま始めて謁見す。すがた貌やさしき白髪の翁にて、ダンテの神曲譯したまひきといふヨハン王のおん裔なればにや、應接いと巧にて、「わがザツクセンに日本の公使置かれむをりは、いまの好にて、おん身の來るを待たむ、」など懇に聞えさせ玉ふ。わが邦にては舊きよしみある人

をとて、御使選ばるゝやうなる例なく、かゝる任に當るには、別に經歷なうては協はぬことを、知らしめさぬなるべし。こゝにつどひし將校百三十餘人の中に、騎兵の服着たる老將官の貌きはめて魁偉なるは、國務大臣フアリイス伯なりき。

夕暮に城にかへれば、少女等の笑ひさめく聲、石門の外まで聞ゆ。馬車停むところへ、はや馴染みし末の姫走りきて、「姉君たち『クロケツト』の遊したまへば、おん身も夥になりたまはずや、」とわれに勧めぬ。大隊長、「姫君の機嫌損じたまふな。われ一個人にとりては、衣服脱ぎかへて憩ふべし。」といふをあとに聞きなして隨行くに、尖塔の下の園にて姫たちいま遊の最中なり。芝生のところゝに黒がねの弓伏せて植あおき、靴の尖もて押へし五色の球を、小槌揮ひて横さまに打ち、かの弓の下をくぐらするに、巧なるは百に一つをも、失はねど、拙きはあやまちて足舐撃ちぬとあわてふためく。われも正劍解いてこれに雜り、打てども打てども、球あらぬ方へのみ飛ぶぞ本意なき。姫たち聲を併せて笑ふところへ、イ、ダ姫メエルハイムが肘に指突掛けてかへりしが、うち解けたりとおもふさまも見えず。

メエルハイムはわれに向ひて、「いかに、けふの宴おもしろかりしや、」と問ひかけて答を待たず、「われをも組に入れたまへ、」と群のかたへ歩みよりぬ。姫達は顔見あはせて打笑ひ、「あそびには早倦みたり、姉きみと共にいづくへか往きたまひし、」と問へば、「見晴らしよき岩角わたり迄ゆきしが、この尖塔には若かず、小林ぬしは明日わが隊とゝもにムツチェンのかたへ立ちたまふべければ、君たちの中に一人塔の巔へ案内し、粉ひき車のあなたに、汽車の烟見ゆるところを見せ玉はずや、」といひぬ。

口疾きするの姫もまだ何とも答へぬ間に、「われこそ」といひしは、おもひも掛けぬイ、ダ姫なり。物おほくいはぬ人の習とて、遽に出し、こと葉と共に、顔さと赤めしが、はや先に立ちて誘ふに、われは訝りながら隨ひゆきぬ。あとにては姫達メエルハイムが周圍に集まりて、「夕餉までにおもしろき話一つ聞かせ玉へ、」と迫りたりき。

この塔は園に向きたるかに、窪みたる階をつくりてその巔を平にしたれば、階段をのぼりおりする人も、巔に立ちたる人も下より明に見ゆべければ、イ、ダ姫が事もなくみづから案内せむといひしも、深く怪むに足らず。

りける。

王族廣間の上のはてに往着きたまひて、國々の公使、またはその夫人などこれを圍むとき、かねて高廊の上に控へたる狙撃隊の樂人がひと聲鳴らす鼓ととも「ポロネズ」といふ舞はじまりぬ。こはたゞおのゝ右手にあひての婦人の指をつまみて、この間をひと周するなり。列のかしらは軍装したる國王、紅衣のマイニンゲン夫人を延き、つゞいて黃絹の裾引衣を召したる妃にならびしはマイニンゲンの公子なりき。僅に五十對ばかりの列めぐりははるとき、妃は冠のしるしつきたる椅子に倚りて、公使の夫人邊を側に居らせたまへば、國王向ひの座敷なる骨牌卓のかたへうつり玉ひぬ。

この時まことの舞踏はじまりて、群客たちこめたる中央の狭きところを、いと巧にめぐりありくを見れば、おほくは少年士官の宮女邊をあひ手にしたるなり。わがメルハイムの見えぬはいかにとおもひしが、げに近衛ならぬ士官はおほむね招かれぬものをと悟りぬ。さてイ、ダ姫の舞ふさまいかにと、芝居にて眞眞の俳優みるこゝちしてうち護りたるに、胸にささびの自然花を袖のまゝに着けたるほかに、飾といふべきもの一つもあらぬ水色ぎぬの裳裾、狭き

間をくぐりながら携ふぬ輪を畫きて、金剛石の露絨るゝあだし貴婦人の服のおもげなるを救きぬ。

時進るにつれて黃燦の火は次第に炭の氣におかされて暗くなり、燭淚ながくしたるゝりて、床の上には斷れたる紗、落ちたるはな片あり。前座敷の間、食卓にかよふ足やうゝ繁くなりたるをりしも、わが前をとほり過ぐやうにして、小首かたぶけたる顔こなたへふり向け、なかば開けるまひ扇に、願のわたりを持たせて、「われをば早や見忘れやし玉ひつらむ」といふはイイダ姫なり。「いかで」といらへつゝ、二足三足跟きてゆけば、「かしこなる物の間見たまひしや、東洋産の花瓶に知らぬ草木鳥獸など染めつけたるを、われに釋きあかさむ人おん身の外になし、いざ、一といひて伴ひゆきぬ。

こゝは四方の壁に造付けたる白石の棚に、代々の花工藝に志ありてあつめたまひたる國のおほ花瓶、かぞふる指いとなきまで並べたるが、乳の如く白き、琉璃の如く碧き、さては五色まばゆき蜀錦のいろなるなど、底になりたる臺より浮きいで、美はし。されどこの宮居に慣れたるまらうと達は、こよひこれに心留むべくもあらねば、前座敷にゆきかふ人のをりゝ

みゆるのみにて、足をとどむるものほゝりなかりき。

緋の淡き地におなじいろの濃きから草織出したる長椅子に、姫は水いろぎぬの裳のけだかきおほ襷の、舞の後ながらつゆ頰れぬを、身をひねりて横ざまに折りて腰掛け、斜に中の棚の花瓶を扇の尖もてゆびさしてわれに語りはじめぬ。

「はや去年のむかしとなりぬ。ゆくりなく君を文づかひにして、おや申すたつきを得ざりければ、わが身の事いかにおもひとり居ひけむ。されど我を煩惱の闇路よりすくひいで玉ひし君、心の中には片時も忘れ侍らず。」

一 近日本邦の風俗書きしふみ一つ二つ買はせし讀みしに、おん國にてけ親の結が縁ありて、まことの愛知らぬ大姫多しと、こなたの旅人のいやしむやうに記したるありしが、こはまだよくも考へぬ言にて、かゝることはこの歐羅巴にもなからずや。いひなづけするまでの交際久しく、かたみに心の底まで知りあふ甲斐は否とも諸ともいはるゝ中にこそあらめ、貴族仲間にては早くより目上の人にきめられてゐる大姫、こゝろ合はでも辭まむよしなきに、日々にあひ見て思むこゝろ飽くまでつりし時、これに添はす

どりの波にたゞふとき、王宮の新年はなん／＼しく、足元あやふき蠟磨きの寄木を踐み、國王のおん前近う進みて、正服うるはしき立姿を拜し、それよりふつか三日過ぎて、國務大臣フオン、フアブリス伯の夜會に招かれ、塊太利、パワリア、北亞米利加などの公使の挨拶畢て、人々こほり菓子に赴を下す隙を暇ひ、伯爵夫人の傍に歩寄り、事のもと手短に陳べて、首尾よくイ、ダ姫が文をわたしぬ。

一月中旬に入りて、昇進任命などにあひし士官とともに、奥のおん見えをゆるされ、正服着て宮に参り、人々と輦なりに一間に立ちて臨御を待つほどに、ゆがみよろぼひたる式部官に案内せられて妃出でたまひ、式部官に名をいはせて、ひとり／＼ことを掛け、手袋はづしたる右の手の甲に接吻せしめ玉ふ。妃は髪黒く丈低く、樹いろの御衣あまり見映せぬかはりに、は聲音いとやさしく、「おん身は佛蘭西の役に功ありしそれがが族なりや、など懇にものし玉へば、いづれも嬉しとおもふなるべし。したがひ來し武の女官は奥の入口の圓の上まで出で、右手に摺みたる扇を持ちたる儘に直立したる、その姿い／＼氣高く、鴨居柱を欄にしたる一面の油畫に似たりけり。われは心ともな

くその面を見しに、この女官はイ、ダ姫なりき。こゝにはそも／＼奈何して。

王都の中央にてエルベ河を横ぎる鐵橋の上より望めば、シユロスガッセに跨りたる王宮の窓、こよひは殊更にひかりかゞやきたり。われも數には漏れて、けふの舞踏會にまねかれたれば、アウグスツスの廣こうちに餘りて列をなしたる馬車の間をくぐり、いま玄關に横づけにせし一輦より出でたる貴婦人、毛革の肩掛を隨身にわたして車箱の裡へかくさせ、美しくゆひ上げたるのがわ色の髪と、まばゆきまで白き領とを露して、車の扉開きし劍佩びたる殿守をかへりみもせて入りし跡にて、その乗りたりし車はまだ動かず、次待ちたる車もまだ寄せぬ間をはかり、槍取りて左右にならびたる熊毛氈の近衛卒の前を過ぎ、赤き氈を二筋に敷きたる大理石の階をのぼりぬ。階の兩側のところ／＼には黃羅紗にみどりと白との縁取したる「リフレエ」を着て、濃紫の袴を穿いたる男、項を屈めて瞬もせず立ちたり。むかしはこゝに立つ人おの／＼手燭持つ習なりしが、いま廊下、階段に瓦斯燈用ゐることゝなりてそれは止みぬ。階の上なる廣間より、古風を存ぜし吊燭臺の黃蠟の火遠く光の波を漲らせ、數

知れぬ勳章、肩じるし、女服の飾などを射て、祖先よの油畫の肖像の間に挟まれたる大鏡に照反へされたる、いへば尋常なり。

式部官が突く金縛りたる杖、「パルケット」の板に觸れてとう／＼と鳴りひびけば、天鵝絨の扉の扉一時に音もなくさあきて、廣間のまなかに一條の道おのづから開け、こよひ六百人と聞えし客、みなくの字なりに身を曲げ、背の中程までも裁りあけてみせたる貴婦人の頸、金糸の縫襷ある軍人の襟、また明色の高髻などの間を王族の一行過りたまふ。眞先にはむかしながらの卷毛の大假髪をかぶりたる今人二人、ひきつゝいて王妃兩陛下、ザツクセン、マイニンゲンのよつぎの君夫婦、ワイマル、シ、オンベルヒの兩公子、これにおもなる女官數人隨へり。ザツクセン王宮の女官はみにくしといふ世の噂むなしからず、いづれも顔立よからぬに、人の世の春さへはや過ぎたるか多く、なかにはおい雛みて助一つ／＼に數ふべき胸を、式なればえも隠さで出したるなどを、顔越しにうち見るほどに、心待せしその人は來下して、一行はや果てなむとす。そのときまだ年若き宮女一人、服めきてゆたかに歩みくるを、それかあらぬかと打仰げば、これなむわがイ、ダ姫な



なる一枝の笛のみなりきと聞きつ。」

かたりをはるとき午夜の時計ほがらかに鳴りて、はや舞踏の大休となり、妃はおほとのごもり玉ふべきをりなれば、イ、ダ姫あわたりしく座を起ちて、こなたへ差しのばしたる右手の指に、わが唇の觸るゝとき、咽の觀兵の間に設けし夕餉にいそぐまらうと、群立ちてこゝを過ぎぬ。姫の姿はその間にまじり、次第に遠ざかりゆきて、をりゝ人の肩のすきまに見ゆる、けふの晴衣の水いろのみぞ名残なりける。

### アテネ人の歌(SCHOTTELUS)

死なめ、國と家のためにこそ、身は。國は汝が國、家は汝が家。いざや、うち立て、仇防ぐため。孫子護ると、笑みて棄つる身。進め、わかうどよ、しばしもためらはで。仇におちめや背後見せめや。恥づべからずや、わかうどためらひて、勇む翁に手負ひ、死なせば。死ぬべきは、まだ波打てる黒髪に春花嬌さん若き身。女子の愛でし匂残りたらん、雄叫の迹消えぬ顔にも。

(『沙羅の木』の「譯詩」より)

### 一夜のやど(SHODIMANN)

はてにけり  
塵と飛ぶ  
軍はなほ  
夜あらしの  
せだんのいくさ  
帝王の御座  
進みてやまず  
ふきあるごと

あるだんぬ  
寺名ある  
喉かわき  
山川も  
はやくも過ぎつ  
市もよぎりぬ  
足なうらは燃ゆ  
ゆくてささへず

あつき日の  
岩にそひ  
あな奇しき  
日かたぶき  
葡萄酒を  
のぼりてぞゆく  
さかひに來しよ  
宿かるころに

木立ある  
城ありて  
岩まより  
流れ入る  
月のいただき  
山の野に俯す  
おちたぎつ水  
まるぬの川に

世はなれし

此仙境に

けがれ香  
自然てふ  
たひらぎの  
いれんことをし  
母のふところ  
夢をぞきそふ

山隈に  
樂園の  
楡の葉の  
人につくれる  
かりのやどりに  
そよぎを聞けば  
しばしわすれつ

ひとりだに  
胸に満つ  
問はまほし  
いつの日か  
音には立てねど  
しじまの訴  
人道の春  
うつつに來べき

そのときは  
うき雲の  
いくさせず  
國々は  
妬も忌も  
消えてあと無く  
血しほながさず  
むつびに生きん

うるはしき  
夜あくれば  
縦隊は  
いざ進め  
仙境のゆめ  
やがてぞ醒めし  
はやつくられぬ  
あたる都へ

(『歌日記』の「隨石」より)

る習、さりとてはことわりな世や。」

「メエルハイムはおん身が云なり。惡しといはば辯護もやしたまはむ。否、われとてもその直なるこゝろを知り、貌にくからぬを見る目なきにあらねど、年頃つきあひしすゑ、わが胸にうづみ火ほどのあたまりも出来ず。たゞ臆ふにはゆるは彼方の親切にて、ふた親のゆるし、交際の表、かひなき借さるゝこともあれど、唯二人になりたるときは、家も園もゆくかたもなういぶせく覺えて、こゝろもなく太息せられても、かしら熱くなるまで忍びがたうなりぬ。何ゆゑと問ひたまふな。それを誰か知らむ。戀ふるも戀ふるゆゑに戀ふるとこそ聞け、嫌ふもまたさならむ。」

「あるとき父の機嫌好きを覗得て、わがくるしさいひ出でむとせしに、氣色を見てなれば言はず。『世に貴族と生れしものは、賤やまがつなどの如くわが盛なる振舞、おもひもよらぬことなり。血の權の實は人の權なり。われ老たれど、人の情忘れたりなど、ゆめな思ひそ。向ひの壁に掛けたるわが母君の像を見よ。心もあの貌のやうに嚴しく、われにあだし心おこさせ玉はず、世のたしみをば失ひたれど、幾百年の間にやしき血一滴ませしことなき家の

譽はすくひぬ。』といつも軍人ぶりのこと葉つきあらゝしきに似ぬやさしきに、兼ねてといはむかく答へむとおもひし略胸にたゝみたるまゝにてえもめぐらさず、唯心のみ弱うなりてやみぬ。」

「固より父に向ひてはかへすこと葉知らぬ母に、わがこゝろ明して何にかせむ。されど貴族の子に生れたりとて、われも人なり。いまゝしき門閥、血統、旁信の土くれと看破りては、我胸の中に投入すべきところなし。いやしき戀にうき身變さば、姫ごぜの恥ともならめど、この習俗の外にいでむとするを誰か支ふべき。カトリック教の國には尼になる人ありといへど、こゝ新教のザツクセンにてはそれもえならず。そよや、かの羅馬教の寺にひとしく、禮知りてなされ知らぬ宮の内こそわが家穴なれ。」

「わが家もこの國にて聞えし族なるに、いま勢ある國務大臣フアブリス伯とはかきなる好あり。この事おもてより願はしいと易からむとおもへど、そのの慥はぬは父君の御心うごかし難きゆゑのみならず。われ性として人とともに歎き、人とともに笑ひ、愛憎二つの目もて久しく見らるゝことを嫌へば、かゝる望をかれに傳へ、これにいい繼がれて、あるは勧められ、あ

るは諒められむ煩はしさに堪へず。泥んやメエルハイムなどの如く心淺々しき人に、イ、ダ姫を嫌ひて避けむとすなどゝ、おのれ一人にのみ係ることのやうにおもひ做されむこと口惜しからむ。われよりの願と人に知られて寄づかへする手立もがなとおもひ悩む程に、この國をしばしの宿にして、われ等を路傍の岩木などのやうに見もすべきおん身が、心の底にゆるぎなき誠をつゝみたまふと知りて、かねて我身いとほしみたまふフアブリス夫人への消息、ひそかに頼みまつりぬ。」

「されどこの一件のことはフアブリス夫人こゝろに秘めて族にだに知らせたまはず、女官の闖入あればしばしの務にとて呼寄せ、階下のおん望もだしがたしとて遂にとゞめられぬ。」

「うき世の波にたゞよはされて泳ぐこと知らぬメエルハイムがごとき男は、わが身忘れむとてしら髮生やすこともなからむ。唯痛ましきはおん身のやどりたまひし夜、わが絲の手とゞめし童なり。わが立ちし後も、よなゝ腕をわが窓の下に繋ぎて臥しゝが、ある朝半小屋の扉あかぬにこゝろづきて、人々岸邊にゆきて見しに、波虚しき船を打ちて、残れるはかれ草の上

次高音諸ひの婦人、「それは餘に酷ならむ。ロシニが友といはるゝ君なれば、將來の樂といふものを好みたまはぬは怪むべきにあらず。此度の曲の中にも、人の倦むべき處なきにあらず、また面白き處もあり。」

ロシニが友は打開きて、「將來の樂といふ派に、おもしろき處あらむとは、おのれは思ひかけず、」とつぶやきぬ。

「されど君もワグネル、ベリオスなどを、非凡の人なりとは思ひたまふべし。彼等は音樂の世界に一生面を開きしこと疑ふべきならねば。」

「君がたまふ一生面は、鬼の假面かぶりて人を嚇す類なりとは知りたまはずや。ワグネル、ベリオスはげに凡人ならざるべし。唯これに附和する輩の心こそ知られぬ。世には『ミュージック、デクリプティフ』といふ新發明の樂を説くものあり。何ぞと問へば、一揆おこしたらむやうに叫びあふ『キオリン』の響のみ。これに題して該撒が死と云ひ、ホラチエルとクリアチエルの

既と云ひ、エズキオの噴出と云ふ。聞く人は何事にか感動すべき。徒に頭痛の種となるべきのみ。」

かくいひてロシニが友は高く笑ひ、さていふ。「ステルニイが曲には何事かを巧に寫しだいし

たる。才なき人の心のさまにや。」

「惡魔には珠を含みたり。彼ベカロの水鏡も、と次高音うたひはいひかけしが、「見たまへ、ステルニイのはや來と見ゆるを。たゞ離別の一ふしに心をつけ玉へ」といふ。

樂長と親しき友の一群とに伴はれて、ステルニイは壇に上りぬ。獨逸うまれの「ピアノ」の師匠は、嬉しげに彼が面を見つめたるを、かゝることに慣れたるステルニイなれば、日にこれに答へ、一同に輕く禮をなして、倚譜架の前に立ち、鷹の眼を睜きて、伶人の一隊を見わたすに、「キオリン」の組一人關けたり。「關けたるは誰ぞ、」と問ふ。

「キオリン」の組の人々は、顔見あはせて聞えぬやうにあらぬ男の名をいひ、「彼は猶病みたりと斷りいはせぬ、」とつぶやく。樂長、「彼が病院を出でしより幾日か立ちたる。彼はをりく、試の席にはいでぬことあり。」

ステルニイは笑みつゝ、「それを君は谷めたたまはぬにや、」といぶかりて問ふ。

樂長は愧ぢたるさまなり。「彼は眞の席にて錯せぬものなれば、深くも責め候はざりしなれど、不都合なことはいふまでもあらねば、

必ず罪を正し候はむ。」

ステルニイは肩を聳かして、「罪したまふはえうなし。されど次の試には關けたる人のなからむこそ願はしけれ、」

言畢りて架を敲きつ。

彼が指揮するさまは、エルデイの花々しき、ヘクトル、ベリオスの物凄きには似ず、一種の面目を見へたり。初のはたらきは靜にて、殆ど疲れたるやうなり。面は睫毛も動かさざるごとく、見るまに目かじやき、唇のほとり引きつけたるやうになり、胸に波打てり。曲の頂點に到れば次第に高く手を舉げて、鳥の翼を舒ばす如く、地を離れて飛ばむとし、忽然沈みたる面色を見せ、いたく疲れたる如くなるは其辭なり。命にや障らむと「ピアノ」の師匠は氣を採み、ロシニが友はこけ威しなりとて憎みたり。

曲の初は果してわが思ひし如くなり、とロシニが友は刺れど、「ピアノ」の師匠はなだれの落ちたる如き音を聞き、背に冷汗を流したりといふ。

この處をば一たび繰返して、溫習は猶欠の日を期して止みつ。次高音うたひはこの時表ぬぎすて、ロシニが友を一目見て立ちあがり、式の如くに笑を帯びて歌ひはじめぬ。聲は戲曲に



## 第一回

「アルフォンス、ド、ステルニイ氏は十一月にブルクセルに來て、自ら新曲惡魔の合奏を指揮すべし」と白耳義獨立新聞の紙上に出でしとき、府民は目を側だてたり。

樂人は肩を樂かし、肩を噛みてステルニイが音に通ずることの深からざるを刺り、又府民が郷土の樂人を蔑にして外をのみ求むる癖あるを憤りき。樂を知らざる府の富豪は、いづになくこれに應じて、ステルニイが噂をなすことと八日ばかりなりき。噂は大抵彼が情事に關する話にて、其餘人たる伎倆につきては、隻語をだに聞かざりき。かく評判ありしも秋の頃に、語るべき事の少なかりければなるべし。

ステルニイはその頃伶人として名を博したるしのみかは、社交上にも獅子と仇名せられて、人を凌ぎたりき。名ある貴婦人の彼を戀慕ひしものあり。ジ・ルジ、サンが彼のために書きし種史といふものさへ世に傳はれりき。今其書の名

## 第二回

を何といひしやらむ、知る人なきのみ。又某侯の夫人はかれがために硫酸のみて死にき。五年前なりしが、彼は忽然跡を潜めて合奏をなさず、新曲を梓に上すこともせずなりぬ。今や新曲「惡魔」の名と俱に彼が名は萬人の口に上りて、世の人は訝り、伶人は笑ひぬ。

惡魔の曲の試を始めむと定めしは十一月五日のゆふべなりき。

「格蘭、ダルモニイ」の樂堂には、早や人々集まりたり。常の試のをりに増して、瓦斯燈の数も多けれど、暗き客座と怪しげなる煙閃く指揮臺とのさま、何となく物ずく、瓦斯、ほこり、濕りたる布の臭、空氣の裡に満ちて、鼠色なる霧は後に入りし人の衣の上に凝りて、潤ひたる光を放ちたり。堂内に坐しても門外の天氣のあしき思ひやらる。おどけたる話ひての譚筆なりに下ぶとりしたる顔にて、毛だらけなるが、美しく褐いろになりたる上「シャツ」を

見せ、長靴の黄なる泥を敲き落し、裏返して捲き上げたる袴の下の端を伸ばして仰したる、髪をおどるなす諸ひめの、心地あしといひあひて、懷中藥取りかはしたる、伶人どものしぶくんに樂器をいぢりて、節を成さざる「キオリン」の音の間にをり／＼截れたる絲の耳を裂くやうなる響をせさせたるなど、見聞くもの皆何となくさまじきさまなり。

人の世話にて仲間入りしたる素人二人あり。一人は獨逸うまれの「ピアノ」の師匠にて、將來の樂に酔ひたり。一人はところのものにて、人にロシニが友とあだなせらる。

調子は合ひたり。こゝかしにて「キオリン」の一手二手、試みたる聞ゆ。瓦斯の煙はかすかに鳴りたり。諸女らは寒がりて足踏みならし、赤くなりたる手をすりあはせたり。ステルニイはまだ來ず。

ロシニが友は諸女らの側に寄りて相談したる次高音語に向ひて、「御身には氣の毒なり。ステルニイは將來の樂といふものにのみ耽りたる人なれば、彼が曲を歌はせむとするは、人の喉を苦むる最上の手段とやいふべからむ。彼が曲中の『アライ』を歌ふは、今まで得たる音樂上の快樂の罪滅ぼしなるべし。」

何となく重たげなる、ひら地にて流れ多きふるさとのさまに似たる所ありき。その心ざまは夢みる如く穩にて、又燃えあがる如くはげしく、いづれとも定めがたかりき。

この人のおひ立ちし街は、ルエウ、ラアエスタインとて、高く低く曲りて、臭きこと堪へがたきところなり。モンタニユ、ド、ラ、クワルのセント、グチエウレに向ふかの背にあたりたれど、世には殆どことを知るものなからむ。

都の開明は、この街の隣までは来たれど、そこよりは入らず。貴人の車も、このあやしげなる街を驅りて過ぐることなし。白耳義は平遠の地なれど、その都は丘多し。この街の高く低く、定めなきも、それに依れるなれど、その幅の狭きに併せて、車の入るを防ぐに足れり。これが習となりて、この街の民は、多く其家が街の半ばまで、引きのばしたり。

民のしわざと汚れたるさまとは、街にみなみの國の風情を興へたり。天然のおほ石を恣に組みあはせたる道の上には、半ば腐りたる野菜の屑、南京鬼の革糊紙もて作りし花の凋れたる、ふりたる舞の手袋、灰などさまの塵あくたうづたかく、そのたゞ中をゆるくと流るゝは黒き水なり。

ぬしなき大あり。足きはめて長く、「ヒュエネ」といふ、黙めきて、背曲り毛ぢれたるが、食を求めて、鹿芥の裡をさまよふさま、コンスタンチノポリスにて見たるに似たり。研ぎもの師、また其外のいやしき業に日を送るもの、時候によりて、日のあたり善き處にすまひ、又陰をもとめて座を占めたり。ねまきのまゝにて、髪も蓬なす女ども、窓より首つき出して、はてなもの物語す。さらぬは紅く腫れたる兩の拳を、腰のあたりに推しあて、門口にたゞずみ、日をしばだゝきて、時の這ひもてゆくを見やりたり。

軒端揃はず、狭くして高きあれば太くして低きあり。その低きものは、上より壓されて、土中にめりこみたる如く、赤みどり色の、おそろしげなる屋根をいたゞきたり。かしここの窓には、小さき鉢植の木あり、また布を垂れて深く藏したるもあり。家なみのところゝには、きたなげなる酒店あり。赤黒くぬりたる戸の上に、白く「ヒール、フルコオプト、メン、ドラック」にては酒を賣ると題したり。

これより裏の街々は、ゲザが若かりし頃、みな見ちがへ易きほど相似たりしが、尤も汚れたるはルエウ、ラアエスタインなりき。ねぶたげな

る街の物おとを破りて、をりく開ゆるは枯つくる槌と石きざむ響との聲のみ。年を経て灰色になりし寺の後壁には、あやしげに大なる十字架倚りかゝりたり。これに縛りつけられて、濟度しがたき衆生を見おろしたる耶穌基督の光明は、煤にて包まれたり。街を流るゝ水の、あまりに濁りたらぬ日には、色硝子張りたる、狭き寺の窓、これに映じたり。

この間にてゲザはおひ立ちぬ。母はかの時の過ぐるを門口に立ちて見る女の一人なりき。美しき白耳義の女子なれば、身のたけ高く、少しおもたげなる處ありて、手足は白く肥えて力あり。おもての色は紅さしたる乳汁のやうなり。白き歯を見せて、輕く開きたる朱唇、まはりに薄くれなゐの色ある鼻翼、少し飛びいだしたるやうなる目、ルベンスが畫のマグダレナに似たる獅子色の髪の波打ちたる、これ其姿のあらましなり。芝居に出でぬとき、また門口に立たざるときは、屋根裏の一間なる蒲團の上に坐して、絶えずもの讀みたり。そのふみは古道具店にて、何人か買來たりし数年前の畫人雜誌にて、中には多く盜侠の事など書いたり。ラアエスタインの女はかはるゝこれを讀みて、心の養となししなり。

似たる「レシタタイフ」に起りて、泣く如き「メロヂイ」に入る。

嗚呼眞の「メロヂイ」なり。工を弄したる迹なくして、「往情深きさま、モツアルトにもをさき劣らじとおもはるゝに、少し沈鬱の氣象を含ませたり。ロシニが友はおもひかけずといふやうなる面持す。

をりくゝに挟みたる粗大なる「インテルメツチイ」を除いては、惡魔の曲は步ごとに其妙を加へて、人間界が天堂を失ひて泣くといふ心を寫したる離別の段に至りて其頂點に達したり。俗人ども皆一時に立ちて、覺えず喝采するに、ステルニイ涙を流して、「かゝる喜はけふ迄知らざりき。諸君の盡力は肝に銘じて忘れざるべし」と謝す。「ピアノ」の師匠は狂せむとし、ロシニが友は「剽竊なり。恐ろしき剽竊なり。されど何處よりか得たる。」とつぶやきゝ愈々不平なる面持す。

この後にはいと醜き尾を附けたれど、今迄の美しき處を思ひて、人々咎めず。如を帯びて敬禮す。されど人々怪しとおもふのみにて、其故を解せざりき。

ステルニイはこれより某伯の夫人の車に乗りにて、モンタニユ、ド、ラ、クウルの街を上ら

せ、かしこにて貴人の優しき聲して響むるを聞きて、豊かな饌に向はむとす。車の「惡魔」與行の赤き貼札の前を過ぐるとき、ステルニイは其前に立ちたる男を見たり。

それは敗れたる「フイルツ」の帽を耳まで被りて、古く毛の被れたる衣を纏ひ、踵のすれたる靴を穿きたる肩廣き男なりき。

前なる車に交へられて、ステルニイが車のしばし止まりたるをり、彼はこの男の横顔をのぞきしに、不思議なり、ステルニイ色蒼ざめて青天鵝絨の車の蒲團の上に後さまに倒れぬ。

立ちたる男は酒に耽りて、面のいたく變りたるを、ステルニイはその昔識りてやありし。

いかにとも知られねど、此男の姿は遠ゆく人の目にも立ちて、何ともなく氣味惡し。流れ肩に力なげなる身の構、歩むさまに哀れげに見ゆるに、其風世の常ならず。燃えけむ焔の迹猶残りにて故ありけなり。少し厚きに過ぎたりと見ゆる赤き唇、大なる鼻、廣き額、目は半ば閉ぢて物を見るときもなきさまなるが、目を懼るゝ猛獸の如く、又世を厭ひ果てゝおのれがゆくべき狭き路の外を見じと誓ひし人の如し。此面に表はれたるは舊き悲痛と新しき感溺となり。

程なく道にゆるみのつきたれば、伯家の車は

客を載せて馳去り、彼あやしき男は「バタ」店に入りて、焼酎賣る机の前に立ち、「ジユネウル」一杯と叫びぬ。

### 第三回

この人は誰ぞ。

おほ空のをりくゝ地に下して、解かせむとする謎語の一つなり。されど地は、この謎語のあまりに怪しきために、これをえ解かずして、そ

がまゝに葬らむとす。この人はもとブルクセルの市街にて生れぬ。母は「ド、ラ、モンネエ」といふ芝居のうたひめにて、父は匈牙利の樂人なり。

匈牙利の樂人とのみにては、猶そのいかなるものなるかを知らがたからむ。かしこには「チゴイネル」だねの樂人ありて、隊を成して歐羅巴人の小の都に往來し、乍ち來り、乍ち去り、野馬の生滅に似たる社會をなすなり。この人の父もさる類なりきといへり。

母の名をマルガレエタ、ファン、ザイレンといふ。その子の名は、はゝかたの祖父の匈牙利名にて、姓も外戚の姓をつぎたり。こはその子のまだ生れぬ間に、父の逃去りたりければなり。

このゲザ、ファン、ザイレンが擯きときは、黒き髪圓き顔を圍みて、瞳を點じたる如く、身の



裡にてつぶやきて出でぬ。ゲザは何心なく雑誌を讀みたりしが、さらでだに印刷善からぬ紙の上に、きら／＼と光るものありて、字を掩ひたれば、摩りのけむとして見るに、こけ母の涙なりき。

ゲザはいつもの如く戸口に錠をも掛けず、床に入りしが、朝目醒めて見れば、母の床は背のまゝなり。驚きて一聲二聲、「母様、母様」と呼びぬ。

童ながらも、此聲の母に聞ゆべきにあらざるは、明に知りたれど、唯我胸の閉ぢたるを開かむためにかくは呼びぬ。さて獨起きて衣を着て、街に走りいでぬ。

いと寒き朝なりき。融けたる雪に、水かさ増したる街の溝は、朝風にさび波立ちたり。赤き朝日の丸は、鏡に寺の窓を射て、灰色なる壁の内より、悲しげなる「オルゲル」の音洩れきこゆ。

ゲザは泣きいだして、「母様、母様」といよく聲高く呼びぬ。マルガレタは常に子を愛することを忘れざりければ、理なるべし。

童はかなた、こなたを見れば、物言ふべき人もなし。母に乘てられて、よるべなき身なりとは、此時恰りぬ。ルエウ、ラアエスタインの子の物わかり早さよ。

この時瘦せて細長き手にて、ゲザが肩を抑ふ人あり。見れば我側に立ちたるは知らぬ人にもあらず。マルガレタが屋根裏借りたる家の二階に住める老人なりき。色の青きは、彼十字架にかけられたる耶穌の人形に殊ならず、面に悲を帯びたるさへ、かれに劣らず見えたり。「ぶびんさよ、母に乘てられて。」

ゲザは覺えず下唇を噛みて、顔の色赤くなり、此人の手を振りおとしつ。人の憫を受くるつらさをこのをり始めて覺えたるなるべし。老人は猶もやさしく童の頭を摩りて、「母を憎しとな思ひそ。戀はかゝるものなり。」ゲザはその顔打守りて「戀とは」と問ひぬ。

老人は聲暖して、「病なり。熱ある病なり。これを煩ふ人は美しき夢見て、きたなき樂するものぞ。」

#### 第四回

ガストン、デリレオと名乗れる此人をば、ルエウ、ラアエスタインにて誰も知りたれど、唯、トロオキイゲル、ヘル（哀しげなる君）とのみ呼びぬ。年は四十と五十との間なるべし。面は黄にて、ふるびたる象牙の彫物に似たるころあり。まだ黒き髪は長く、すなはなるを、額を

掩ふやうにかきて、煩悩生やしたり。暮き盛の外は必ず赤裏つけたる濃き藍色の外装きて街を歩みぬ。

こゝへ還りしは七月の前たるべし。行違ふ小兒の頭を摩り、女の前通りすぐるたびに禮ををかんねば、皆善き人なりといへど、誰も交るものなし。

マルガレタは飄落する前に、子供の行末のこと、くれ／＼も頼みたる文一通、此人の戸口の郵便箱に投入れおきつ。常には手紙の入りたることなきこの箱を、ことさらに探りたるは、天晴人を講る才ありてのことならむ。デリレオが妻は世をさりとて、跡に残りし一人娘は、男世帯にてをしへ育てむこと難ければや、佛蘭西へやりて、家にあらず。此人は情深き性なるに、生涯おもひの儘に人をも愛し、人にも愛せられしことなければ、今の淋しき忘れなく、深く案じわづらふこともなくて、ゲザを迎へ取らむと思定めて、「朝食に來よ」とやさしくいひて、童の手を引き我家に伴ひいりぬ。

朝食果て、デリレオは机に向ひぬ。都て世慣れぬ人は、益なき事にもすぢ立つる癖あるものなり。彼この童のために教育の時間わりを作り、いまより十年が程に此童の用あるべき品

ねぶたきまでに怠り、力なきまでに人好く、ゲザには甘言のみかけて、いつの頃よりか、此家に迷ひきたりし灰色の大猫にも、やさしくのみしつ。唯束の間の快楽知りたるのみなれば、月の初には子に旨きもの食はせ、月の終には人に物借りて暮しぬ。

ゲザはいとけなき時より音楽を好みて、まだ物もえいはいころ、母の抱きて小歌うたふを聞き毎に目をみひらきて、母の顔を打まもりぬ。

始めてこの子に「キオリン」を教へしは、マルガレタが友某なり。ゲザが進歩は驚くべき程速なりき。その隙に母の困苦甚しうなりしかば、吾子の「キオリン」弾くを奇貨として、これに頼らむとする心起りぬ。まだ九歳なりしゲザは、幾程もなく、その頃「グラン、サブロン」に假小屋掛けたりし藝人仲間に雇はれて「キオリン」を弾くこととなりたり。この藝人仲間といふは、美男の軽わざ師一人、モラロとて極めて醜き矮人一人、驢馬一頭、猿四匹なり、驢馬には三本のあしにて行く藝ありといへど、恐らくは藝を須たずして、かく行くならむ。

この仲間に髪長く、胸いと狭き「スピネット」弾きあり。敗れたる器より、あやしげなる「ワルツア」「ボルカ」などの曲を打ち出だせり。

ゲザが役は年老いたる筋ふきの女と共に、この男の業を助くるなり。あはれ、この男、生涯に「たび」輕歌なりともかなでたしといへど、その望かなふべきか、いかに。

この仲間は、日ごとに午後二時より四時まで、技を奏するに、その小屋は常に空し。ゲザは樂屋の上に坐して、心ともなく「キオリン」弾きて、小屋の浅敷を見仰すに、輕わざ師は白粉つけて粧ひ、紅衣袴、頭にこがねの環をはめて、蹄燈がへりし、また倒に横木に懸りなどす。又矮人は半身黄に半身青き肉じゅばん着て、赤き毛の生えたる大頭ふりたて、卓狼なる戯し

たり。喝采を得るは、いつも矮人なり。小猿は顔ひながら、覺えたる技をなせり。銀屑、瓦斯、檢の皮猿などの胸わたるき臭絶えず來りて鼻に入れり。暫くしてえ堆へねばくさみす。また暫くしてねぶたくなりて、「キオリン」の巧動くことゆるし。この時、「いざく、いかにかしたる」と足ざりして責むるは、例の「スピネット」弾きなり。驚きて目を開けば、下袴敷の端に坐して、これもねぶたげなる母と、おもはず目を見あはせたり。ゲザは力づきて又彈く。母は芝居のひまあるごとに必ずこゝに來居たり。それをゲザは

我「キオリン」聞きに來たりとのみおもひぬ。ある日ゲザは、矮人モラロとものあらそひして、この仲間の屋を解かれぬ。されど母の小屋に入ることは猶止まざりけり。

さる程に、四月某の日の事過ぎ、風動くふきて、雨窓を打ち、いと寒きに、いまは業なくなりたるゲザは、あやしく傾きて、四脚よろめく机に兩臂つきて、兩手の握指を耳の穴にあて、素と母の微びし古雑誌の怪談に讀耽りて、月の外にて冬と春とのおそろしき戦するをも知らでありけり。そこへ、遽しく入り來し母は、吃りながら、「晩食は調へておしいれの中にあ

り、わが歸は遅かるべければ待たでたうべよ」といひき。母の遅くかへらむといふは、常のことなれば、ゲザは「さらば」と答へしのみ、讀みかけたる書をする、母の顔見むとだにせず。母は出でゆきしが、まだ五分もたぬに歸りぬ。ゲザ「物を忘れたまひしか。」母「さなり。」母の顔はいと赤く、そこか、こゝかと物を捜すやなりしが、忽ち身を屈めて童の頭を抱き、二たび三たび接吻し、又童の頭をわが胸におしあて、「すこやかにてあれかし、と口の

人のために靴を磨き、又人に金を配ることなりといへり。げに彼はこの外に使ひかたなかりしならむ。後にマダム、スタエルが分派の母の代を辭せしとき、これに就くべき婦人を求めむとて出でし三百人の組にも、デリレオ居たりといひ傳ふ。かゝる由なき事にデリレオは家財を失ひ、平生の望は霧の如くに消えて、うしろめたきことのみ多かりければ、しばし身を浮世の外に置いて、人にわれを忘れられ、われも亦人を忘れむとおもひぬ。されど彼も猶一つの望をば懷きたり。そは例の小説を世に公にせむとおもふ果敢なき願なり。

いまの所にてデリレオが業といふは、樂譜寫して錢を獲るのみ。これも昔ルソオがせしなりはひなりと思へば、賤しと嫌ふべきにあらずと、自ら諦めたるなるべし。

二三年が程に、ゲザは美しき少年となりぬ。心さしく情深きことは、デリレオが教へて人並に勝れたり。されどサン、シモンの殘黨を師としたのめば、男らしき性の開けたるもことわりならむ。ゲザが傾のやうく醒めて夢みる如くなりて、思慮に整ひたるふしなきを見て、心あるものは行末覺束なしとおもひぬ。その仕事するを見るに、熱を病める如く勉強するときあ

りき。又いたく倦みて一事だになさざる時ありき。久しく忍びて、物をしとげむとする力は絶えてなかりき。教課の上にては、心にて悟ること人に優れたれど、記憶などの力を頼みては、よの常の音樂傳習所生徒に一籌を輸すること多し。「キオリン」をしる師は、これらの性質に心もとめず、只進歩の早きのみ見ていたく喜び、かしこ、こゝの好事家に引合せなどしつ。

ゲザが「キオリン」は、譜によりて巧に弾くのみならず、をりに觸れて當座の曲をなすに、凡人の及ばぬところありと師は褒めたまへき。

沈みたる性の人多きフルクセルにて、ゲザが破格の音樂は聴く人を驚かし、その「チゴイネル」種なりといふ噂高きと共に、色黒き美しき顔を変づるもの少からず、絶頂のほめ詞は必ず「コム、セエ、チガシ」の語なりき。

或る日ゲザは始めて音樂會に出で、公衆の前にて技を奏せむとするに、若き人の癖として、自負心強く、時刻遅しとのみおもふを、デリレオ我事のやうに憂へて、食はず、寐ず、「もしし損ずることありても、心になかけそ、」とうるさきまで諒めつつ。

ゲザは此諫に腹立ちて、帽を額深く被りて、走出で、足ぶみしてリュウ、ラアエスタインをゆ

きつ戻りつすれば、デリレオは胸のみ痛めて、部屋の内を驅廻りたり。場にとるときとなりては、デリレオが心配いよく、甚しく、いかに悶むれども座敷に入らず、樂屋の出口に立ちて息を凝らし、兩手にて耳を塞ぎて居たり。

忽ちおそろしき響、おさへし手を洩りて、デリレオが耳に入りぬ。驚きて手を放ちたる老人は、初火事起りしかと疑ひしが、あらず、此響は幾百人の叩き拍手の聲なりき。デリレオは夢の如く、樂屋に跳り入りてゲザを抱きぬ。藝人は皆手を擲りて祝し、前途の事さまゝにいひて褒めそやすを、世間知らぬ少年なれば、おほやうに聞きたりしが、前なる戸の俄にあきて、兩手さしのべ入り來たりし美男子の面を見て、流石のゲザも驚きぬ。その人はアルフオ

ンスド、ステルニイなりき。

「今宵を過ぎて、おん身に近づきにならむとおもへば來ぬ。わがよろこびをも受けたまへ。」ゲザは聞きて、今まで仰ぎしたりし項を垂れて、慄ひて冷たき手を、此名高き「ピアノ」弾きに握らせぬ。

## 第六回

アルフオンスド、ステルニイ。此名の響善



を考へ出して記すも、さる類ならむ。その際に硯青染めの壁紙はりたる部屋を、あち、こちと見廻りたる童は、帝國時代の道具の角張りたる、ルイ、フィリップ時代の道具の曲りくねりたると、打交れる飾付のあはれげなるを、珍らしげに見つ。

壁に掛けたるは嘗て一たび名高かりし畫工の作れる圖にて、「ア、モン、セلامي」(贈我親友)云々と題したる縁の文字猶讀まる。その側には黒欄に挟みし詩人某某の自筆あり。眞中には早がきの肖像一つあり。稀なる美人の白き「アトラス」絹の衣きて、首に玉をつなぎし紐を結び、頭に小き冠を戴きたるなり。

ゲザ、「こは女王にや。」デリレオはまだ物書きでありしが、面をあげて、「そはガルチエリなり。」ゲザは「さなりや」と答へしが、心には何ともえわきまへざりき。

宜なり、まだ碑き身には、ガルチエリが當時、世に聞えたるうたひ女にて、妙藝の名は、無類の噂と共に高かりしことを知らざりしも。しばしありてデリレオは語を續きて、「かれも女王なりき。うたひ女の王なりき。」

ゲザは猶圖を打守りて、「おん身はその人を知り玉ひしや。」デリレオは徐に、「かれは吾妻

なりき。」

ゲザ、「さらば此女王はおん身をいたくかははがりしならむ。」こは主人をうれしがらせむとおもひていへるなり。

デリレオはこの言葉や胸につかへけむ、顔打そむけつ。此肖像の前には大理石造の卓に載せたる青色の古花瓶ありて、絶えず新しき花束を插したり。

## 第五回

迎取りてより程もなきに、デリレオは童がうまれつき音楽を書くべきものなるを看破りたれば、ブルクセルの音楽傳習所にて評判好き「ネオリン」弾き某といへる師を頼みて、其業を學かせぬ。その他の教は、デリレオ自ら授けたり。この人の説にては、善き教ありといふは、假名づかひ正しく物書くことを覺え、廣く書籍讀むことなりき。

主人の骨折は一方ならねど、ゲザは兎角假名遣へてかきぬ。これとはうらうへにて、著るく進みたるは讀書の方なり。デリレオが愛讀の書「エッセ、ユ、ド、モンタニユ」はや讀畢へて、その自作の小説「プロメトリス」に遷りぬ。此書は梓行の書肆に達すること十年、例の濃き藍色の

外套と共に老いたるものにて、一種えならぬ臭ありて、通篇ふるびたる社會改良的思想を寫出したり。その發端は「メエルヘン」に似て、その結末は對美歎なり。

クごとくに此小説を讀みかきせらるゝを、ゲザは耳欲て聞けど一言をもえ解かざりき。

けに二人は珍らしき一對なり。生涯に何一つしだいしたることもなく、つか穴に片足ふみこみたる翁の忙しさ、身によの常ならぬ才能ありと自ら信じて、行末きはみなきやうにおもふ少年の氣の開けさ、彼は果敢なき今の世を厭ひて、斷えず三十年代の夢を喚びかへし、此は醒睡なき心に將來の樂しさのみおもひぬ。二人は疑もなき空想家なり。されど最氣の毒なるは子デリレオの方なるべし。

憐むべし、デリレオ。彼は世に所謂萬能の人なりしが、生涯何事をも得達せざりき。音楽、繪畫、文學、經濟、いづれも時の女第もなく究めつ。その頃社會改良論の盛に起りしを見て、彼は又いたくこれを信じ、サン、シモンが徒に從ひて、後にて結ぶ巾單を着け、我名書きし鉢巻をしめなどしたりき。

人の噂には初サン、シモンの徒が分業の手づかきをなしゝとき、デリレオの受持ちしは、

しきものなり。當座の曲を善くすることはシヨペンにも劣らず。唯其途おなじからぬのみ。きのふはシエクスピアの語を引き、今日は「マルササ」を「トカイエル」に劣れりといひき。(竝に酒名)顔は喰ひつきたき程美し。

世の七不思議に、又一不思議添へたりといふ、少年の「フオリン」彈きの評判、早くブルクセルの貴族社會に高く、某の侯爵夫人はあるとき、ゲザのために夜會を開きしが、この折切角の評判、今少しにて泥土に委ぬべかりきとぞ。

その夕暮には、ステルニイが世話至らざる所なく、兼ねて自ら誂へて興へし漆靴穿かせ、白き襟飾の端まで手づから引直しておのれが車に乗せ、侯家のやかたへ伴ひぬ。冷むべし、ゲザが自重の心は、早く彼古き兵器にて美しく飾り、珍しき黒色の鍔二領を据えつけたる玄關にて掛けぬ。公衆に對しては、獅子にも似たる勇氣を見せし少年、今は子供らしくもステルニイに寄りすがりて、僅に座に進むほどに、侯爵夫人はステルニイを出迎へて、「評判の世界の不思議とやらを連れて來玉ひしや。」

この夫人薄色の髪に、細き顔を圍ませ、遠くならず愛相好く、また極めて活潑なるに、劇しき度の近視なれば、「ロニエツト」といふ柄つき

の眼鏡、片時も目より離すことなし。その世界の不思議とやらといひし聲の裏に、何となく可笑しとおもふ心を含みたるやうなるは、此社會の習にや。

「これこそ其人なれ。名はゲザ、ファン、ザイレン。いかにおもしろき名とは思ひきさずや。」とステルニイ答へき。さて言葉をつぎて、「この子はまだ人みしりする癖あれば、其心し玉ひてよ。」夫人、「それはまことにや。それは面白し。總て美人には自重の心あるこそ善けれ。其心は藝人に似合ふものなり。この子の目の美しきよ。」と例の眼鏡にて見て、「侯爵もこの目をほめ玉ひぬ。治まことの「チガン」種のやうなり。頃日シエ

エクシアの語を引きぬとか、われもいたく笑ひぬ。」外の客來にければ、「ステルニイ、君はこゝを内のやうにしたまふことなれば、この子にも心おかせ玉ふな。」是れぞ夫人が人みしりする童を扱ふ仕方なりける。

ステルニイはしばし童を片隅に置きしが、程もなく又引出して、男女さま／＼の客に引合せつ。ゲザは努めて人に應せぬやうに見せたり。婦人は皆やさしくもてなし、何につけても此少年の肩持つやうに見ゆれど、さればとて言葉をかくるものもなし。一座はゲザが目の前にてゲ

ザが事のみ語れど、物いふものなれば、彼人々はゲザを肖像の如くおもひたるか、さらば佛蘭西語解せぬ人とおもひ謬りしかと疑はる。ゲザは猶目の前に立ちたるに、人に向ひてこれを譽め、これをながめ、遂には外の人に向ひて外の話するを見るも心悪き限ならむ。

ゲザは薄き水を踏む心地して、寒からぬに慄ひぬ。渾て身のめぐりのものを見るに、皆ひかり耀きて、又いと冷なり。上等社會に行はるゝ靜なる聲は、大に耳を痛むる如し。實に人々の言葉は、ゲザが燃ゆるやうなる頬を打つこと、輕けれど痛き雪片の如くなりき。

ゲザは泣かまほしう思ひぬ。世界の不思議と稱へられ、柄ある眼鏡にて覗かれ、さま／＼に評せらるれど、心ありて顧みる人なきに。

物語の中に、あの子はラアエスタイン街にて生れぬと云ふ人あり。婦人方口々に、ラアエスタインとはいづくの街にか、ラアエスタインとは何の事になどいへば、そを婦人の方々に聞えむは、彈ありと答ふ。それは又實にや、されど善き育の見えるはいかに、げに早しきものらしき處、絶えてなし。唯「チガン」に似たるのみなりなど婦人いひあへり。これを聞くゲザは恥を感めらるゝ心地しつ。

かりしことは、冷淡になりて、批評の眼に誇る今の人にはわからぬなるべし。當時の音楽世界にて、二三の「ピアノ」弾きの占めたる名譽は、神も若かざるべく、其首に肩りし人はステルニイなりき。ステルニイに逆上せて狂人となるさまは、さながら時疫の如く、かれが技を奏する街々にはびこりぬ。後言するものは、此響を藝よりは人品に依れりといひき。

ステルニイが人となり、所謂「ホム、ア、シユクセエ」にて、品格善しといはるゝほど身だしなみし、氣象高しといはるゝほど物に拘らず、才ありといはるゝほど口惡く、非凡なりといはるゝほど輕薄にて錢づかひ荒し。顔かたちは美しきに、髪を新様々に斬らせて、額を掩ふやうにかき、衣は僅に過去りたる流行の形を用ゐて、毫も藝人の癖見ゆる異態を成さず。父は佛蘭西の外交官にて、財産は二萬五千「フラン」ありと人皆知れど、この財産はかへりて伊太利の某婦人のかたみなりといふことは、誰も知らざりき。

ステルニイが「ピアノ」は珠の雨を降す如く、花を鎖に編みたる如し。技藝の調和に深く心を用ゐて、手を下すに及びては、つとめて卑しからざらむことを求めたり。さればこれを聴くに、いつにても一敵の誤なければ、よの常の妄に

指板を撃つものに似るべくもあらざりき。

何牙利生れの名高き「ピアノ」弾き某といへるは、嘗て之を誇りて、「ステルニイが技は貴女子の指より出づる如し」といひき。此言は早くもステルニイが耳に入りしが彼は僅に微笑したるのみにて、舊に依りて其「ピアノ」を撫づること、愛子を斥ぶやうなりき。當時世人の耳は實に樂器を虐使する者に倦みたれば、この優しきふるまひは、却りて人を動かすに足れりなり。彼が交る所は最貴きわたりのみ。されど同業のものをも、常に引立つるやうにすと噂せられぬ。

ステルニイはまことに能なきに非ず。されど「ゲザ」が始めて逢ひしときは俗慮胸に滿ちて、名利をのみ事とする人なりき。その人をも世をも欺くに至りしは、後の事なり。世俗に推されて、餘りに高き礎に上りし後の事なり。この位を守らむとするには、別にせむすべなかりしなるべし。思ふにステルニイならぬ人を、かほど力に臨えたる位に置かば必ず目くるめきて墮ちむ。

人を引立つるは、ステルニイが得意のわざなれば、こたびも「ゲザ」が手を握りしのにては、足れりとせず、「オテル、ド、フランドル」へ次の日の朝來なば、行末のことをも相談せむと哭り

おきて、さて他の藝人にもそれ／＼に挨拶し、涙を頬に傳はせたる「デリレ」が手をも握り、つひには又「ゲザ」が肩を叩きて去りぬ。

今日の會主が催し、晩餐の席にては、「ゲザ」は一盞をも食はず、又一言もものいはず、顔の色蒼ざめて、日はきはみなき空をのみ見やりたり。この未來の空には、無垠世界湧出して、金葉球果の樹茂りあひたるも見ゆべく、刺なき薔薇の花分けゆけば、美しき女神、神を賜ひて、月桂の梢は唯おのづから我前に打墜くなるべし。かの光を怯るゝ猛獸に似たる日は當時なほ青空を飛ぶ鷺の眼にて、おそろしき夏の日をも憚らざりけむ。

## 第七回

能あれどまだ名を成さざる、若き藝人をもてなすことの厚きに、「ゲザ」深く感じぬ。二たび三たび引續きて朝食に招かれ、果はステルニイが「オテル」の置ものゝやうにせられぬ。或時は「オリン」抱いて來させ、當座の曲にあはせて、我「ピアノ」弾き、こゝにてもステルニイは人の心を奪ふことの難からぬを知りぬ。或時は又共に語りて、童の言を可笑しとして高笑す。人に逢ふことにいふ、「我、チガンの童見しや。珍ら



がためには只神の如くなりき。ステルニイは大いなる幼児、早や止めよ、と慰むるを、人々打見て、ゲザが技にも増して貴みぬ。

或る日ゲザは「シメエル」とは奈何なる物ぞ、とステルニイに問ひかけぬ。

こは午前、の事にて、佛人ボオドレエルが著したる「悪の花」といふ書を、解せぬながら翻へし居たるゲザが口より出でし問なりき。ステルニイは日本絹の黄なる寝衣をきて、その様大なる毛藍花といふ草花めきたるが、書きかけたる手紙をおきて、仲をなしたるさま、顔の色の蒼ざめたるも際立ちて、十五年來一夜も穩に眠らぬ人と知られたり。

「シメエル」とは奈何なる物ぞ、とゲザ再び問ひぬ。

「なに、『シメエル』とか。そは羽ある女怪の名なり。」とふりかへりて答ふ。

「さなりや。」と臉を低れて、暫し考ふるさまなりしが、又目を開きて、「さては劫を歴たる女怪なりと見ゆ。」

「まづ左様のものならむ。」

ステルニイは足を温めむとて、「カミン」爐の前に椅子を寄せつ。「堪へがたき寒さかな。そなる『シャルトリ』オズ」を。それにて善し。

修行を積みし女怪とおもふも可ならむ。常の女怪は人の腕を持ちたれば、それを枕に樂みて身を滅すものあり。『シメエル』の手にはおそろしき爪ありて、人の心を揺裂くことあり。常の女怪は人を沼に引入れるれど、『シメエル』は人を天に招きのぼさむとす。天は達しがたきものなるに、沼に入り、泥の中にはまりては、なかなか樂しきことあるものなり、限なく樂しきことあるものなり。されどそは汝がまだ知らぬ境なり。」とゲザが耳をつまみて引きつ。

ゲザは呆れたる面持して閑居たりしが、ステルニイが講釋は半ば分らざりしなり。「されど我等の中、天に達するものなきにはあらざるべし、美術の天に、『ワルハルラ』(樂士)に、『パントオン』(人を神に崇めたる祠)に。唯々早く途に上るをこそ善しとすべきならぬ。」かく言ふは、多く讀みて少しく解したる若き人の口吻なるべし。

「さなり。天に達するものなきにしもあらず。」とステルニイは微笑しつ。「ミケランジェロ、ラファエロ、ベネトオフエン、と輩は數へつ。」

「シエエクスピア、ミルトン、モツアルト、レオナルド、ダ、キンチ。」とステルニイは高く笑ひながら言ひつきたりしが、「されど天に達す

るには、非常の力なくては協はじ。又人にあらむとせば、その瀧氣を吸ふために、一種の軀を備ふべきものならむ。」

ステルニイは斯くいひて軽く欠しつ。彼は嚴しく「シメエル」(不朽を謀らむとする妄想)を遠ざけて常の女怪と遊びたはぶれ、その女怪に心を奪はれざる一人なりき。

ゲザは猶心に落ちざる節ありと覺しく、「さて『シメエル』には皆羽あるものにや、と問ふ。」

「否、羽なきもいと多し。されどそは怖るゝに足らず。人を功名の道に誘ふなどは、そのえなきぬことにて、彼等は唯四足を泥に植ゑて、月に向ひて吠ゆるものぞ。」

「されど。」

猶問はむとするゲザが口を遮りて打笑ひ、「我學問は早やこれ迄なり。猶疑あらば、呼鈴鳴らして、會話辭書取りにやるべし。」

## 第八回

七年ばかりたちて、五月半ばに、ゲザ久し振りにてブルクセルにかへり來ぬ。ステルニイが勢に、官費と貴人の獻金とを得たるゲザは巴里にゆきて、當時名高かりし師を訪ね、「牛オリン」を學びぬ。巴里にては、學びもし、又遊び

「今宵は君がみ聲を聞くこと出来ぬにや。」と婦人幾人かステルニイに迫りて問ふ。

「我輩をいかでか。我は今宵世話役の積なり。それさへあるに頭痛みて耐へがたし。」

今やゲザが技を奏すべき時來たりぬ。胸の動悸は激しくなりて、頭のあたりまで響き、常の我をばいづくにか失ひて、指を絃上に加へしときは、唯是れ衆人の前に推出されて、遽に度を失ひし田舎人のやうなりき。

メンデルソンの「ゲ、モル」調の半ばにて、忽ち曲を忘れ、慌てて絶えし音を繼がむとして、聞きぐるしき過をなし、やうく彈じはてぬかゝる拙き技は、げに珍らしかるべし。ステルニイは失望の色を面にあらはし、ゲザは地の底にも入りたく思ひぬ。

拍手の聲かしこみに聞えざるにあらねど、それは毫も聞かざりし人と、聞けど解せざりし人とのみにて、多くは唯肩を擡かして、「ステルニイの人に心酔する可笑しさよ。」といひき。

ステルニイはゲザが斯く拙き曲を聞かせしこと、前後に無きを明して、あはれなる少年のために無實の罪を雪がむとおもひしが、人々は唯、「我等はおん身を咎めむと思はず、おん身は人に心酔し玉ふ癖あれば」とのみ云ひて取上げず。

一座ははかなき物語し、笑ひ、賞むるともなしに酒茶を管めなどしたりしが、美しき貴婦人一人、衆人の使に立ちて、ステルニイに一曲を求むるほどに、こなたは心よげに受引きて、腕を未然に知りたる面の色晴やかに、「ピアノ」に向ひぬ。

さて曲を終りて、ゲザが傍に歩寄り、「我兒よ、心を鎮めて、我が外に聞く人あるをしばし忘れ玉へ。さらば先に我に聞かせしことある當座の曲に似たるもの、出来ぬことよあらじ。こは汝が身の上にもかゝることなり、我も汝が變めらるゝを聞きたきに。」

此言葉にゲザは自ら奮起して、「君が辱にならぬやうに、一曲を試みては止まじ。」と口の裡につぶやきしが、而の色は眞蒼になりて、身うち慄ひ、手に「キオリン」取りし時、眼一たび輝きて、忽ち黒き睫毛の背にかくれぬ。

その時童が日の前には、火の雨降るやうに見え胸の中には激うづまき起りて、狂へる如く戀ふる如き物の音耳を衝きたり。

あはれ此曲、夢中にや成りし、さらずば、遠き父のふる里より木がらしや吹送りし、さらずば又、悲しげなる救世主の見卸し玉ふ、あやしき街の戸口にて、我兒を眠らせむと歌ひし母が、

夫より傳はりたる節々を、また此童に傳へやしけむ。

唯聞く、ゲザが手中の「キオリン」には、乍ち歌ひ、乍ち泣けるを。匈牙利の「チガン」ならで、かゝる聲音を出し得るものあらむや。

人を酔はしむる節奏、溢るやうなる音の曲折情と樂との亂狂へる風雨雷電。さて最後の一聲は虚空に向ひて放ちたる歡呼なりき。

ゲザは目をみはり、息を凝らして立てり。彼は自ら力限の技を奏せしを知りたり。彼は耳を翫てたり。されど公衆の前にて受けし如き喝采は、此上等社會に無きものにて、唯秋風枯葉を捲く如き聲座に満ちて、遙か後の方より、而白し。珍らし。人の猶くならず。「チガン」などいふ語聞ゆるのみ。

この有様にゲザは頭を低れしが、忽ち翌日の前を飛ぶ如き心地しつ。ステルニイはさし寄りて、輕く肩を打ち、「好し、好し。それにて名譽は回復したり。」と慰め、笑を帯びて人々の方に向ひ、「これにても我を心酔したりとの玉ふや。」

ステルニイが此言葉はゲザには聞えず、ゲザは唯ステルニイが手に熱き唇をおし當て、涙をはらうとこぼして泣きぬ、ステルニイは彼

イン街にきぬ。この時胸を締めらるゝ如き心地して、何となく苦しく、踵を旋らさむかとおもふほどなりしが、却りて足は進み／＼ぬ。遠見には濕ひたる金井かじやきて、此中古建築法の痕を留めし街と、黒き寺壁に倚りかゝりたる救世主とは、金地に畫きたる如し。「デリレオ君は居玉ふか。」と門口を洗ひたる（こゝには珍らしき暇つぶしならむ）婢に問ひぬ。フラミア語は久しく操はねば、唇を出づることいと難かりき。婢は驚きて面を擧げしが顔さぬ。ガザは胸を壓がして門口に入り、足音高く梯を登り、戸を敲けど答なし。入りて見れば、縁なる砒石の壁紙昔のまゝにて毒氣を吹く如し。されどガザが養父と二人にて住みけるをりに比ぶれば、室内何處となく清らにて、娼を呈するやうに見えたり。人を醒はせ、人を眠らしめむとする香氣に襲はれて、向ひを見れば、ガルチエリが像の下なる、缺け損じたる花瓶に、美しき罌粟の花束をいけたり。こは「パヲオ、ド、ニイス」と名高き大輪の花なり。

此間の戸はあきたるに、次の間の建添へ、硝子張の中に、圓き卓を前にさし向ひに坐りたるは、ガストン、デリレオとそれが娘となり。

ガザはおどろきながら、娘の姿を見て、暫し

我を忘れりたり。かゝる輪廓正しき顔貌は、伊太利にてこそ見しこともあれ。頭は小さき方なるが、希臘形の強き兩肩の上に据わりて、蒼白く變化しななき面に、黒く光れる目、燃ゆる如き唇、際立ちて附きたり。

この子はまだ十七なれど、北國の少女の常なる角張りたる態度なく、身うちすべて豊に、人を醒はしむる氣を吹きて何處となくませたり。一言にていへば伊太利の「モルビデツツァ」（肌の軟さ）を具へたり。

ガザは少女の姿に見とれて立ちたるを、デリレオ頭を擡げて見しが、顔さし伸べて、日に向ひたるやうに瞬する有様に、ガザはほゝゑみて一步進みぬ。

「ガザならずや。」此聲未だ畢らぬに、悲しげなる君は養子を抱きて、彼も此も喜の涙を灑ぎつ。しばしありてデリレオは、ガザを少し推しのけて、つく／＼其姿を見、また引寄せて抱き、「いかに暫く又こゝに留まるべしや」といふ、その聲は慄ひぬ。

ガザ「父上、おん身の許し玉ふ限、こゝに留まりて、靜に著述をなさむとおもひ侍り。されど我が居るべき場所も、はやあらじと見ゆれば、近きところにて一間借るべし。」また娘の方を見て、

「妹とはまだ近づきにならず。引合せ玉へ。」

デリレオ、「げに、さなり。アンネツト、こはかねて噂せしガザ、ファン、ザイレンなり。中善くせよ。ガザ、おん身は妹に接吻一つせよ。」

夕飯果つる頃、灰色のかはたれ時は、ブルクセルの金光を鎖し盡し、僅に街燈の火ありて狭き紅を溝の水面に印し、又寺窓の色硝子を射るあるのみ。

ガザは彼綠色の室にて、最軟なる椅子に倚り、デリレオに著述の見込を話しつつ。アンネツトは黙して聞けり。獨りその大なる目は闇にかがやきたり。

ガザが言は極なく長けれど、デリレオは謹みて聞き、唯をり／＼そはいと面白からむといふのみ。遠き市の賑は、微なる子守歌のやうに此ラアエスタイン街に洩來り、夜に入りて罌粟の香氣次第に濃くなり、時として冷き白石板の上に、枯れて落つる花薔の音聞ゆ。

## 第九回

罌粟の花は薄に棄てられ、さま／＼の花市ガルチエリが像の前に枯れぬ。五月は六月になり、六月は七月になりぬ。ガザはいまも猶夜な／＼わが著作の見こみを養父にかたりメ



もして、人に尋められ、又嫁まれ、三鞭酒の杯  
舉ぐる手つきを覚え、禮を守らざる男を憎む婦  
人と、禮を守る男を憎む婦人とを見分くる術を  
得たり。

ゲザがはじめての旅かぜぎには、名高きイタ  
利の歌姫と、それよりも名高きメエレンの座  
元とを同行したりしが、途々に桂冠を得た  
こと幾度といふことを知らず。ニツツアに至  
りしとき、歌姫の身の上につきて、「キオロンセ  
ロ」弾きの男と争ひ、遂にこれに決闘を言込み  
て座元を辱めつ。

されど座元マリンスキイはかゝる瑣事を  
心に留めず、實利をのみ心掛くるものなりけれ  
ば、二月後は巴里にて亞米利加ゆきの一行を募  
りし時、再び巨額の給金にてゲザを雇はむとせ  
しに、ゲザは懷中に蓄へたる、前度の旅かせ  
ぎの利益金數千「フラン」を頼みて、技を賣らむ  
よりは譜を作るこそ我本意なれ、と答へき。ゲ  
ザは當時二十四歳、この齡には已に不朽の業を  
なし、樂人も少からぬをゲザが公にせしもの  
としては、十年ばかり前に印刷せしめし「レエウリ  
イ」(夢曲)あるのみなりき。此曲は白人著作の  
習として、美しく仕立て、首に少年作者の像を附  
けたる一冊子にて、フオオプウル、サン、ジェ

ルメンにて家ごとに購はれ、それより外へは出  
でざりき。

その後紙に上し、ものは少からねど、これを  
完うせしことなし。さるを猶自ら著作に富める  
やうに思ひしはこれを完うせむと思立ちだに  
せば、直ちに成らむと信じければなり。曾て筆  
取りて紙に臨みしこと屢ありしが、さまぐ  
の意匠亂れおこりて捉ふるに由なかりき。唯  
僥倖だにあらば、事は成るべし。されど閑とい  
ふものは、巴里にて價貴き貨物なり、貴人なら  
でこれを得むこと難からむ。この時想起し、は  
ブルクセルなり。かの「ゴチック」風の寺院高く  
聳えて、臨き街は曲りくねり、加特力教人を醉  
はしめ、草木繁り、生路塞がりたるブルクセル  
なり。ブルクセルなつかしと思ふ心止みがたく  
て、ゲザは途に上りぬ。

時は五月半ばなりき。こはブルクセルの美  
しき時節なり。日は雨と久しく曠ふことなく、  
唯折々小ぜりあひをなして大氣を淨め、こがね  
色したる霧は虚空に満ちて、遠方を見えずなり  
たる街道を夢物語のやうに包み、「セント、ゲ  
ズウレ」寺の「ゴチック」風の石塔のめぐりに光  
まばゆき彩雲を起し、公園の青草に「アロンド」  
なる面紗を被せたり。げに怪しきは此濕りたる

澤、此金色の澤となりたる日影、此春ごとに灰白  
なるブルクセルを包める佛頭光なり。

園中の石像は今や、藁の帽子を脱ぎすてたり。  
日光は彼六月初旬に失せぬべき春の蕪を温  
く心地よく吐きたる木々の若葉の間をすべりぬ  
け、中に横れる枝の輪囷として色黒きあたり  
に白かね色の輪廓を作り、十圍もあるべき巨  
幹に澤ある大光斑を印し、おもしろげに露を帶  
びたる若葉の上に落ちて、透きとほりたる木の  
葉の影と捉迷藏の戯をなしたり。

オラニエン太子が家の前には、白きと薄紫  
なるといり雜りたる花、ゆたかに頭を掉  
り、御苑のわたりには華花の如く若き、ロデン  
ドロン咲亂れて海をなしたり。この上を有る  
か無きかの温き風、花の香に飽きて吹けば、  
これに觸るゝもの眠を催さむとす。是れ北國  
ながらの「シロツユ」風なるべし。

ゲザはガアル、ドノ、ミダイよりアウルワアを  
横ざりてラアエスタインに向ひ、すこやかに歩  
をはこび來しが、物として面白からぬはなく、  
皆故人の如く、我を迎ふるやうなりき。暫し行  
きては立留りて、後を見かへり、獨り打ち笑み、  
又行き又住まり、殆ど世を忘れたる様なりしが  
今モンタニユ、ドラ、クウルを曲りてラアエスタ

ゲザは、「なに、費（つ）や。われも已（すで）に久（ひさ）しうおん身（み）等（ら）が恵（めぐ）にあづかりたれば、そればかりの事（こと）はいかにともせむ。」といひしが、彼は女僕（めやく）マドモアセル（マドセル）イルマに贈（くわ）りし金の（かね）頗（う）多（た）かりしを忘（わす）れたるにてこの時（とき）急（いそ）ぎて我（われ）室（むろ）にかへりて、銀行（ぎんぎん）紙幣（し）二三枚（まい）取出（し）きとおもひて見（み）れば、囊底（ふし）唯（ただ）二十（にじゅう）「フラン」の貨幣（かへい）一つのみなりき。暫（しば）しは呆（だ）れて頭（かぶ）を搔（か）きしが、忽（たち）又（また）打（う）笑（わら）ひて虚（うつろ）になりし財（ぜ）囊（なう）を養父（やうふ）に持（も）てきて見（み）せ、「いまこそわが高（たか）慢（まん）らしき言（こと）を笑（わら）ひ玉（たま）へ。わが富（とみ）はこれのみなり。さはいへ、暫（しば）しのことなり。我（われ）頭（かぶ）にも我（われ）手（て）にも黄金（こがね）の源（みなもと）はあるものを。唯（ただ）仕事（しごと）にかゝる興（きよう）だに來（き）ば、唯（ただ）少（せう）しの熱（あつ）だに起（お）らば、おん身（み）は我（われ）「オペラ」の艸（くさ）藥（やく）のおきどころを知らずや。」

八月（はつ）の末（すえ）女（め）優（う）イルマ、ブルクセル（ブルクセル）を去（さ）りぬ。ゲザが心（こころ）は鬱（ふさ）々（ふさふさ）として樂（たの）まず。この心（こころ）は業（わざ）に就（つ）く結（むす）となりぬ。彼はある朝（あした）例（れい）の著（ちやう）作（さく）の熱（あつ）を得（え）たりとて、譜（ふ）を寫（か）くべき紙（かみ）を陳（ちん）べ、手（て）にてこれ（これ）を平（へい）にし、靴（が）「ペン」を藏（かく）り、屋（や）根（ね）裏（うら）の一（いち）室（むろ）に唯（ただ）一つありし脚（あし）あやふき小机（こき）に臥（ふ）をもたせ、一行（いっけう）かきては忽（たち）又（また）消（き）し、欠（か）伸（しん）し、みづから苦（くる）しさに堪（た）へぬやうなりしが、暫（しば）し散（さん）歩（ぽ）したる後（あと）にこそとて公苑（こうえん）に出（い）で、時（とき）々（とき）精神（しんけん）にひゞく聲（こゑ）にきゝほれて歩（あゆ）を停（と）め、ま

た行人（かうじん）につき當（あた）り、物思（ものおも）はしげに椅子（いす）に腰（こし）掛けつ。彼は忽（たち）ち左右（さゆう）の頭（かぶ）顚（てん）のあたりを押（お）へつ。此（こゝ）時（とき）一曲（いっく）ありて心中（しんちゆう）を流（なが）れり。

ゲザは急（いそ）ぎて室（むろ）に還（かへ）り、只（ただ）管（くだ）書（か）きに書（か）いたり。ガストン（ガストン）が役所（やくしよ）よりかへりて、二度（にど）目の朝食（ちうしき）をなす頃（ころ）ははや過（す）ぎて、次（つぎ）の食（た）の時（とき）となりしが、ゲザはまだ頭（かぶ）を譜（ふ）紙（し）の上（うへ）に低（た）れて書（か）けり。紙（し）の散（さん）りたるは、二（に）ひら三（さん）ひら床（とこ）の上（うへ）にあり。戸（かど）を叩（たた）く人（ひと）あれど、知（し）らねば答（こた）へず。ガストン（ガストン）入（い）りて、「わが子（こ）、けふは何（なん）とてひねもす顔（かほ）見（み）せぬぞ。病（や）めるにはあらずや。」

ゲザはあやしき夢（ゆめ）を喚（よ）覺（さ）されたる如（ごと）く、眼（め）を睜（ひら）けたりしが、「否（いな）、仕事（しごと）するなり」と答（こた）へき。その面（おもて）は眞（ま）眞（ま）にて、その手（て）は慄（おそ）ひたり。デリレオ（デリレオ）は強（きやう）ひてすゝめて、一時（いちとき）なりとも業（わざ）を停（と）め、何（なん）にても少（せう）し食（た）へといひき。ゲザは溢（あふ）りながら引（ひ）かれてゆき、食（た）卓（た）に向（む）ひしが何（なん）一つ食（た）はず、何（なん）一つ言（こと）はず、唯（ただ）一（いち）ところを見（み）詰（つ）めたるさま、怪（あや）しきものを視（み）る人（ひと）の如（ごと）し。食（た）後（あと）には此（こゝ）間（ま）の中（なか）を歩（あゆ）みて、聯（れん）絡（らく）なき曲（きょく）をつぶやくやうに唱（な）へ、をり／＼古（ふる）き「ピアノ」の木（き）板（ばん）を押（お）へて、唇（くち）を堅（か）く閉（し）ぢたるまゝにて、音（おと）一つ發（は）するけ、ある大（おほ）なる、「フィナレ」の終（は）つところなるべし。また「オルケステル」の群（ぐん）を指揮（し）するまねして、

手（て）を空（くう）中（ちゆう）にふり動（うご）かし、速（はや）に床（とこ）を強（きやう）く踏（ふ）みて、旨（よ）し／＼と叫（な）びぬ。

デリレオ（デリレオ）はむかし詩（し）人（じん）、樂（がく）人（じん）など多く交（まじ）りしことあれば、これ（これ）を止（とど）めませず。彼は狂（くる）人（じん）、不（ふ）幸（こう）に陥（おと）りたる人（ひと）、その外（ほか）著作（さく）をなす人（ひと）に對（たい）する心（こころ）にて、ゲザ（ゲザ）をやさしく扱（あつか）ひぬ。されどアンネット（アンネット）はゲザ（ゲザ）が心（こころ）知（し）らねば、いつも艸（くさ）重（じゆう）にもてなすには似（に）ず、いま聲（こゑ）高（たか）く笑（わら）ひしを、ゲザ（ゲザ）又（また）いつになく腹（はら）立（た）て、善（よ）く休（やす）み玉（たま）へ、と輕（かろ）くいひて去（さ）りぬ。此（こゝ）夜（よ）はゲザ（ゲザ）喚（よ）までその「オペラ」を作（つく）りき。

これより數（すう）日（にち）の間（ま）はゲザ（ゲザ）食（た）はず、眠（ね）らず、面（め）色（しき）變（か）はりて、餓（う）所（しよ）目（め）には樂（たの）しからざるやうなりしが、みづからは言（こと）ふにいはれぬ愉快（うけき）を覺（さ）えき。デリレオ（デリレオ）は、「あまりに働（はたら）きて精神（しんけん）を傷（や）ること勿（な）れ、聲（こゑ）を失（うし）ふやうに空（くう）想（さう）をも失（うし）ふことありといはずや。唯（ただ）程（ほど）を守（まも）れかし。」と諫（いさ）むれど、ゲザ（ゲザ）は美（うつく）しき頭（かぶ）を打（う）ち振（ふ）りて、口（くち）をなかなば閉（し）ぢて笑（わら）ひぬ。おもふに養父（やうふ）がいひしことは耳（みみ）に入（い）らざりしならむ。

ある日（ひ）ゲザ（ゲザ）は喜（よろこ）ばしげに聲（こゑ）を擧（あ）げ、第五（ご）齣（くわ）を造（つ）畢（は）りしが、第三（だい）第四（だい）の兩（りゆう）齣（くわ）はまだ形（かたち）もなきに、空（くう）想（さう）忽（たち）ち絶（た）えぬ。天（てん）馬（ば）は蓋（おほ）しかれを抛（な）落（らく）したり。天（てん）馬（ば）はあまりに鞭（むち）打（う）たるゝときはかく情（なさけ）な

ロゼイ」二つ三つ「キオリン」にて彈いて聞かせ、合歌のこのところの見こみはかうと「ピアノ」にてまれ、その度ごとに面白からむといはせ、當座の曲多く作り、夢ごころにて精神のうちに響く怪しき聲を聞き、さて何一つ仕出さざりき。

ゲザはガストンが家の向ひなる洗濯婆の住みの一間を借りて、居どころと定めたれど、ほとほと朝より夕までガストンが家に來て、アンネットとともに面白き時をすごしつ。

ガストン、デリレオはいまおのがために役を見付けて、めづらしくもこれに名を署せしが、こは娘のためを思ひてならむか。役といふは芝居の書記にて、その外に或る新聞の雜錄を支持したり。それにて事足るほどの金をば福けつ。いまこの家に入るものは、貧しさをば見て、みだりなる満足のさまを見るなるべし。これアラエスティン街の富なり。

このやり放しの中に、ゲザは快く日を送りつ。かれがためには坐りごころよき椅子一つありて、その兩側の手すりに腕をもたせて、未來の望を語り、その背に頭をもたせて、「ハポラル」烟草の煙のゆくへを見やるはおもしろく、またかれが臨む食卓の上には、いつも一瓶の好き「ボルドオ」酒あるぞ嬉しき。

ゲザは何もなさざるゆゑ、これを掩ふにたよりある長き食事を悦べり。珈琲飲むときには、アンネット向ひに坐りて、をりく一匙づゝ取りて飲むことあるを樂としたり。また日を銷するには、はや世の中にいひ傳ふる人なき樂譜を涉獵り、名のかくれたる詩人の作りしものを求めなす。その中にて氣に入りたる句を得たるときは、誇大なること葉にてこれを譽め、二たび三度、甚しきは二十度もアンネットに讀みて聞かす。彼は一語も佛蘭西語を解せざる門外の婢によみて聞かせても善きはずなり、されど門外の婢は、アンネットのやうなる美しき笑顔なきをいかにせむ。さて此句を新に譜に作りて、舊びたる「ピアノ」に上ぼして弾くに、この器は血氣の少年の作りし激しき曲を、慄ふ聲にて導くさま、老祖母の墓に片足ふみ入りて戀の歌をうたふ如し。

かゝるをりにはアンネットはその句を歌はせらるゝことあり。アンネットが聲はうるはしき「コントラルト」調なるに、ゲザよるこぼせむとて、力を極めて歌ひぬ。ゲザは飽足らぬ面持して、いまだ少し様子があつたし、いまだ少し氣を入れてよ、といひ、指失にて少女が胸の邊をさして、こゝに何を感ぜざるか、と繰返して問ふ。少

女は打笑みたりしが、忽ち赤くなりて面をそむけつ。

ガストンは始よりゲザと娘とを兄妹の投にしたれば、何の面倒もなく、治りきはめて善かりき。父は娘がゲザのまはりにて立働き、かれがためにさまぐの用を足して悪き癖をつけ、をりく大なる目にてかれを見るに心づかざりき。

ゲザがアンネットに對するさまは、初め冷淡にて、その優しきは兄の妹にやさしきに似たりしなり。七月の末には冷淡の度いつもよりも甚しく、ゲザは少しラエスティン街を忘れて、當時「ガレリイ、サント、ユベル」の芝居に居りて、ブルクセルに倦みたる巴里の女優に交りたりき。

アンネットはこのさまに、相貌變るまで妬みしが、ゲザは何ゆゑに少女の様子に常ならぬか知らで過ぎぬ。

ある日ゲザは少女が瘦せたる頬の邊を優しく摩りて、「奈何せしか、何ゆゑに悲しげなる、街の空氣のあまりに悪しきためならむ、父上、この子をしばし海邊へやり下はすや。」

ガストンは肩を聳かして、「残念なれどわれはさる費を出すこと能はず」と答へき。



## 第十一回

十一月の末つかたの事なりき、或る夕暮ゲザはしげに縁いろの部屋に申入りて、「父上、アンネツト、と呼びぬ。デリレオに何事ぞと問はれて、「ステルニイが手紙届きし、次の週にはブルクセルに來むと書いたり」といふ。アンネツトは望を失ひたる様子にて、「あまり慌ただしくのたまふゆる、富の大籤引得たまひしか、さらずば月に五千フランにておん身を雇ふものありとの事ならむとおもひしに。」

「ゲザが不平の色を見て取りし養父は優しく、「娘が心づきな言葉をあしうな聞きそ。ステルニイといふ人を奈何なる人とも辨へねば、おん身が喜をも解せざりしならむ。」此夕ゲザは少女にステルニイが上悉しく語り、おのれが十年以來の實際の事をも告げき。

## 第十二回

少女は解し得たり、ステルニイといふ樂人の聲價いかなるかといふことを。今はゲザも少女が客を迎ふころの冷ならむを憂へざるべし。それもことわりなり。今はブルクセルの府内、到る處ステルニイが名を聞かざることなきやうになりぬ。新製の菓子、新形の漆靴、又は手拭など、皆ステルニイが好といひ、小兒の遊にもステルニイが合奏のさまをのみ見つ。當時の小兒のかゝる遊をなしは、今の世にて「コンシユル」とマレンゴの役とを演ずるに同じかるべし。

アンネツトはこの頃唱歌ならひに行けり。これもゲザが少女可哀がりての爲なり。アンネツトと共に唱歌習ふ少女等は唯ステルニイが事のみ物語りぬ。

教子の一人は「モンネエ」の樂長を伯父に持ちたりしが、或日ステルニイが伯父の家に忘れおきたる手袋なりとて、稽古所へ持て來しを、人々微塵に引裂き、争ひて手袋に收めつ。この蘇革のきれを二十年間胸に掛けたる少女もありきとぞ。

ステルニイが名譽は當時其極處に達したりき。その最後の魯西亞行は、いにしへの戰國の民が凱旋の王を迎ふる如く、オデツサに入りしときは祝砲轟き、モスクワに入りしときは大學の書生群をなしてその車を迎へ、はては車前の馬を脱して手づからこれを牽き、街の兩側の窓よりは、婦女の擲ちし花束、雨より繁く、ペエテルブルクに入りしときは某の大侯の夫人おの

が宮居を明け渡して旅館にせしめ、疊居の人々より贈りし裘、桂冠、金剛石嵌めたる環、「カキア」盛りたる大樽など許多の外に、純金の「サモワル」(茶器)さへありきと聞えぬ。

ゲザはこれ等の噂を洩らすことなくアンネツトに語りしかせしが、魯西亞の貴婦人が争ひてステルニイを寵し、渠に卻けられしゲオルグ家の侯爵夫人は、興行の最中に短銃にて自殺せしことには及ばざりき。

ステルニイが着きしときは、ゲザもガル、ドニ、ノオルといふ停車場まで出迎へしが、ブルクセルの民の過半、場の内外に集りたれば、唯一握手を得たるのみ。その時ステルニイは「オテル、ド、フランドル」に投ずる積なれば明朝來よといひき。

翌朝「オテル」に往きて見しに、ステルニイは机に向ひて、左手額を支へ、右手筆を握りて、塗抹したる跡多き樂譜の稿をながめ居たり。顔は鋭くなりたり。斷えず上流の人と交はりしためにや、神經質を帯びて際立ちたる動作、機械的に人を敬ふ癖など、渾て一種名狀しがたき容體を養ひ得たりと見ゆ。想ふにステルニイは今眼を開きたるまゝにて眠るやうになりしなるべし、兎の如く、又宮中に伺候する人々の如く。

きものなりとぞ。彼は墮落されて下界にあり。さきに見し上天の境はいま烟の如し。

頭痛甚しく、沈鬱の症となりて見れば、さきに作りし曲邊に駭ふべきものなりし如く、いまは前に善きところのみ見し代りに惡きところのみ見て、これを古人の作に比べ、齒を切りて額を撃てり。

ゲザは今おのれが作りしものを渾て過激にて可笑しきやうに思ひて、唯極めて冷淡なる樂を弄び、好みてバハが「シヤコンヌ」を弾き、シヨペンが「ノツツルノ」は我神經を傷めといへり。

彼が態度は重き病をわづらひて、今將に治に就かむとする人の如く、衣は緊りなく、膝はふらふらとゆらぎ、常に綠いろの部屋之最暗き隅に坐して、頭を手掌にもたせ、日を見詰めたるまゝ空しく時を過しつ。

あるときおのれが作を「オオリン」にて試みしが慌たしく樂器を擲ちて、例の椅子に倒れかゝり、自ら爪を噛み、忽ち痙攣のやうに泣きいだしぬ。アンネットはこれを見て恥かしげに近寄り、かれが頭を壓て、「ゲザ、才ある人はかくまで悲しきものにや、」と問ひぬ。

ゲザは聞きて少女を我膝の上にかき抱き、髪を、目に、唇に接吻するを少女は、はじめ驚

き、中ごろはうれしく、後にはまた恥かしくなりて避けむとす。ゲザは少女が身をばゆるしたれど、手を取りて放たず、やさしき聲して、「アンネット、おん身はわれを嫌ひ玉はぬにや。おん身は我妻となり玉ふべしや。今とはいはじ。わが名高き樂人となりたる上の事なり。われに力はなくとも、おん身を力にて名高くなむ。」

少女は赤うなりて、「わが如きおろかなる少女を何とかし玉ふべき」とさゝやくに、こなたは戯れて、「おろかなりとも、わが心に協ふを奈何せむ、」といふ。

少女は頭を垂れてゲザが手に接吻し、身をずらして、ゲザが椅子の下なる低き踏臺の上に坐りぬ。ガストンは還りてこのさまを見、二人がいひなづけを許しつ。

## 第十回

ゲザがアンネットを愛づる心は日にけに深くなりて、アンネットはいままでの恥しげなる様子棄て、戯れに抗抵する如き癖を見せたり。

最早二人を兄妹と看做すべきにあらねば、デリオはゲザと少女との交際を夕のみとし、その外日に一たび共に散歩することを許しつ。

樂しきはこの日ごとの散歩なり。アンネット

は好みて人氣繁き街を歩み、舊唐の前に立駐りては、「おん身名高き人になり玉はどあの飾買うて玉はれ、」などいふ。その飾といふは美しき紐、こがね色の靴などなれば、ゲザは心にゑみて翌朝のぞみの品に短き文を添へてやりなす。かゝる費はこの頃人に樂を教へて得らるゝなりけり。

ゲザはまた好みて少女を引き立て、人けなく淋しき公園にゆき、霜月の風物凄く、木々の梢を鳴らすとき、浮世を忘れて、唯夢の如くならび行けり。をりく道に大なる水たまりあるとき

はゲザあたりに人なきを幸に少女を抱いてわたり。少女はゲザが腕に身を寄掛けて、かれが餘り氣拔けたるやうなるとき、手に力を入れて呼解し、「何か少し話して聞かせ玉へ、」と請ふ。この時ゲザ濕ひたる目にて少女が面をみ、

「おん身が愛らしきことよ、」とのみいひ、繼ぐべき言葉を知らず。

ゲザは戀に物みな忘れ、退屈極なき情人なりき。この頃彼はまた著作をはじめ、前のやうに奮ふことはなけれど、勉めて業を取りたり。

「オペラ」のかたは暫く打ち置き、今殆ど作りをはりしは、ダンテが地獄の段を「オラトリウム」やうの譜にせしものなりき。

がら聞くべし。譜を作らむためのみとは思はれねば。」

食間デザはおのれが祝事をステルニイに告げしに、ステルニイ驚きたる面持して、「さてはかゝる事ありしか。おん身がためには、それより痛なるしぐさあらざるべし。若し荷且の戀のあまり久く結ばれたるならば、我力にて救出さむとおもひしが、結婚の約束したりと聞きては力及ばず。意外なる事かな。おん身が年にて妻を娶り、一家のあるじとならむは、これ身の破滅なり、これ自ら墓穴を掘るに同じ。かく言へばとて、おん身が軀を埋むる墓穴とな思ひそ。埋むるはおん身が墓ならむ。おん身が軀はよの常の交をなして、淺々しき徳義のために縛せられ、これがために榮ゆるなるべし。おん身は『オ、ルデルメン』のやうに肥ゆべし。洗禮は頻に行はるべし。よぢれ上りたる袴を穿きて、樂譜の冊子をお胸に挿み、街より街へと走りめぐりて、人に音楽を教へ、芝居に出で、『オ、リン』ひきの首座を占めむとおもふより外には、望なき身となるべし。若しその眞中に立ちて調整ふる杖を揮はむとおもはゞ、是れ望の絶頂ならむ。馬鹿らしきよ。おん身が背には旅仲間の勸進元の杖をこそ受くべきなれ。安

樂なる家中の椅子の軟き撥條入りの革に、まだうら若き才子の頭を据へべきことかは。短てや汝が頭を据ゑむとする張革の裏には、羽毛多からむとおもはれず(娼家は貧しかるべし)。然しそはおん身が問はざるころならむ。藝に倦みて憩はむとするに、善き遁辭にあらば、おん身はそれに安堵するならむ。おもふに馬鈴薯盛りたる藝も、汝がためには恰好の臥床なるべし。」

デザ聞きもあへず。「おん身が言は無宗旨の論に似たり。おん身は愛情の上の無神論者なり。」此答を聞きて、デザが夸張の癖まだ止まぬを知るべし。又語を續きて、「われとても明日日婚禮を挙げむとはいはず。位置定まりての後ならでは、夫婦にはならざる積なり。」「責めてもの事なり。敵手は誰ぞ。教子の一人なるべし。昨大りたる市人の娘にて、『プロンド』なる少女ならずや。」

「少女は我養父の娘なり。」

「さてはガルチェリが産みし子ならむ。それを御身は妻にせむとおもへるにや。妻に。」  
デザ小聲になりて、「その愛らしきをおん身は想得ざるなるべし。」

ステルニイは、「ガルチェリが産みし子の美

しく愛らしかるべきを、争でか想得ざらむ、といひて、目に夢みるごとく、戀ふること色をあらはし、さて言葉を續きて、「されどそれを妻にせむとおもふこそ訝しけれ。おん身はガルチェリが性を知らぬなるべし。」

デザは唇を噛みて、「我養父はガルチェリを得てみづから幸なりとおもひき。」

「いかにも幸なりとは思ひしならむ。ガルチェリがために狂せしは、彼のみにはあらざりけり。彼はガルチェリが癖を離れても、みづから幸なりとおもひしならむ。デリレオが夫婦の間の事をば、己れも善く知りたり。今は昔語になりたれど、藝人の仲間には猶これを傳ふるものあり。唯人の名をば早や錯りたり。われはデリレオといふ名を忘れざりき。彼はおん身が親類なれば。又彼はわれに初戀せさせし女の夫なれば。」

デザ驚きたるさまにて、「言葉忙しく、「ガルチェリがおん身の初戀の女なりとか。」

ステルニイは掌にて額を按へて、苦々しく笑ひぬ。「さなり。わがガルチェリに逢ひしは『ダゲウル』の座敷にての事なり。我師はまだ十八にならぬ程にて、容貌は女子の如くなりき。我戀はきこそをかしかりけ。ガルチェリは只



ゲザが一間に入るを見て、こなたへ振向き、「慈なかりしや。又相見ること嬉しけれ。いつもおん身と目を合はするときは、若やぐやうなる心地す。おん身が餘りに久しくブルクセルに留まりたるを聞きて、思惑ふのみなりき。何事ありての滞留ぞ。今頃はマリンスキイと海山のあなたにあるべきに。」

ゲザは面を赤めて、吃りながら答へき。「彼約束をば破りたり。この身を縛られむも望ましからざりしゆゑ。」「彼約束をば破りて、怠惰ものにやなりたる。」ステルニイが我子に對するやうなる待遇は故の如くなりと知るべし。「さてもおん身の肥えたることよ。少年の技術家には似つかはしからぬことなり。われを見よ。骨と皮とのみ。今は何事をかなしたる。目的ありや、奈何。」ゲザ。「怠惰のものにはならず。人に樂を教へて、忙しき日を見る身なれば。」

ステルニイ。「なに、人に樂を教ふとか。不思議なることを聞くものかな。それよりはマリンスキイと亞米利加へ往きて、金を掘るかた遙に優りたらむに。『キオリン』ならふ少女に美しきは少きものを。おん身が業はそれのみにあらず。教授時間の外は何事をかなしたる。」

ゲザ、譜を作るのみ。見ればおん身もおな

じ業をなし玉ふやうなるが。」

ステルニイは、「否、我境界にては、譜を作らむことと思ひも寄らず」と答へつゝ忙はしく草稿を疊紙の中へ收め、「明けても暮れても、汽車の一室、合奏の座敷。かゝる境界には早や厭果てたり。唯欲しきものは、四週間ばかりの休暇なり。馬鈴薯添へたる『ピフステエキ』、田舎の空氣、花畑と心おかれぬ友一人。」

この時戸を敲く音して、從者入り來り、何事かいはむとするを、ステルニイ遮りて、「われは不在なりといひしに。」

從者、「されど例の伯爵の君なれば。」

ステルニイ、「没分嘆嘆かな。われは不在なりといはずや。客は何人にもあれ。」

從者の退くを待ちて、ステルニイ不興に、「あのとほりなり。十五分の間には、十人の客に逢はねばならず。これ程五月蟬き生活は少かるべし。その上、いつも同じ戯して、いつも同じやうに喝采せらるゝも苦しき限ならずや。」

「いかに喝采の聲に厭きたまひぬとて、一たび口笛の音聞かむとは願ひたまはじ」とゲザ笑みつゝいひしに、ステルニイ少し面色變はりて、先づ少年の顔をながめ、次に樂譜を收めたる疊紙を見つ。されど少年の顔は常の如く優しきに、

ステルニイが疑ひ忽ち晴れぬ。

暫しありてゲザ遠慮なく言出づるやう。「けにおん身が世わたりのあまりに忙しくて、譜を作る暇なきは惜むべきことなり。おん身の出しものは、今まで書更の外なかりき。何にても少し見せ玉はずや。」

ステルニイは顔に鐵寄せて、「餘り他人には見せたくなし。公にせぬうちに勾失せなば、いと惜しかるべければ。」

ゲザが面は朱を漉きたるやうになりぬ。「餘り他人には、他人には。」

ステルニイは聲高く笑ひぬ。「昔の癖はまだ失せずや。おん身を怒らせむとはおもひ掛けざりき。あれはふと言ひ損ぜしなり。誰かおん身を他人扱ひにすべき。我著述といふべきもの出來たらば、最初に見すべきはおん身なり。されど此疊紙の中なるは、見るに足らぬものなり。おん身も知りたる某の侯爵夫人が、わざ／＼維也納まで手紙を寄せての頼なれば、辭まむやうなく、責寒きに作りしものなり。所謂姫の『パレット』、眞面目なる沙汰にはあらず。いかに、我心は分りつらむ。機嫌をなほして、その鈴索を引いて呉れよ。早や朝食喰ふべき時なり。おん身が此地に留まりたる眞の理由は喰ひな

こゝ來れ。この家を見むとてにはあらず。」  
 娘にも増して心を痛むるは、父のデリレオなり。靈ばみたる行李より舊き禮服を掘出し、その醜陋の臭を帯びて、襟の太きところは公民王の時の趣味を見せたるをも厭はず、これを身に付けて、彼室より此室へとさまよひありき、「ハンカチーフ」引出して壁に挂けたる畫の欄を拂ひ、半ば暗うなりたる鏡の前に立ちて、慄かしげに斜脱し、露ふ指尖にて大なる「アトラス」の襟飾を整へなどす。この襟飾は縫とりいと美しき「パチスト」の汗衫の黄ばみたると共に、ルイ・フイリツプが世に時めきしものと見えたり。  
 ゲザは一家の騒しきさまを見て、戯に嘲りたれど、心の中には大事の前なれば、さもあるべきことと思へるなるべし。  
 八時の時計響くときは、皆厠に波打たせ、八時を過ぐること五分になりしときは、デリレオ、「彼君は來ぬやらむ」とつぶやき、十五分過ぎしときは、アンネット訝かしげに結髪の方を見やりて、「彼君は慥におん身に約し玉ひしか」と問ひぬ。八時三十分になりしとき、外の廊のわたりに物音するを聞き、失望に慣れたるデリレオは「斷りの使にはあらずや」といひき。  
 「デリレオ君の住居はこゝなりや」と梯の上にてうら問ふ聲はいとみやびたり。老いたる新聞記者デリレオは左手の裾と人さしゆびもて、おのが頬を擦り、強ひて鎮まりたるさまを見せむとしたり。アンネットは身を匿しつ。  
 二三秒にして扉開き、あやしき緑いろの座敷に入來りしは、氣高き明髪（アロンド）の男なり。着たる裘を戸の外にて脱がざりしため、しばしは度を失ひたるやうなりしが、そは眞に一瞬間の事にて、ゲザ動寄りてこれを脱がするや否や、ゲザが引合せの禮をなさむとするを遮りて、デリレオが手を優しく握り、われらは舊識なるものをといふ。デリレオは輒くこれを受けば、無禮なるべしとおもひて、手を動かしてとめむとせしに、ステルニイ重ねて、「君はその昔ダグウル伯爵夫人の許にておち合ひし情癡の少年を、はや忘れやし玉ひけむ。こなたにては、當時君がわれを憐み、われに友情を寄せたまひしことを忘れ侍らず。君が友情はまことに我を慰めき。當時は君と我と殆ど同病相憐むやうなるさまなりしが、後には君のみ福を蒙けたまひき。」かくいひつゝステルニイは壁に挂けたるガルチェリが像を仰見たり。そのいち早き日には此油畫を見出すこと何の苦もなかりしなるべし。

デリレオはこのやさしき言葉を聞き、目に涙を添へ、親しく客の手を握りたり。  
 さてといひかけて、ステルニイは面白げにゲザが顔を見たり。君がわれに約し玉ひしは、この再會のみにあらずき。この外に猶生面の人に引合せ玉ふべき筈なりしが。  
 ゲザは後を見かへりて、「おろかなる子ならずや。恥かしとて隠れたりと覺ゆ。」言畢りて次の間に出でしが、かなたより優しく促す聲聞えたり。「いざいざ、子供らしき振舞して、人へ笑はれ玉ふな。」ゲザが腕に依りて、面には羞を帯び、唇には熱を見せて出でたる少女は、氷の如く冷なる指尖をステルニイが掌の内におきたり。  
 心迷ひたる如くステルニイはしばし少女を見詰めて居たりしが、みづから抑へて輕く少女が手を握り、唇におし當て、「かく恨々しきを怪み玉ふな。君が結髪の方の爲には年久しき友にて、又君が母御のためには崇拝者の一人なりき。」さてデリレオに向ひて、「餘りに面影の似玉ひたれば、ほとゝおそろしき心地しつ。おもふに母御の再來にやおはすらむ。」  
 ラアエスライン街にてステルニイが優しきはげに類なるべし。されどこの優しきは、彼が

我を嘲笑ひしのみ。我戀は片思にて、遂に協ふ期なかりき。それより早や二十年を經たれど、ガルチエリといふ名我耳に入るときは、蒸熱き氣わが脈絡の中をめぐり如き心地す。さても彼の美しかりしことよ。其姿、其容、其變容。彼が髪は暗色なりしが、額、項の邊に赤き光ありき。その光あるところは黄金の粉をふり掛けたる如くなりき。そが上にその立居振舞の大やうなりしこと。」

ステルニイは忽ち語路を斷ちて、空を見詰めたり。ガルチエリといふ記念は、此人の胸の瘡痕なり。ゲザは友人の面を變はりたるを見て、おのれも氣色安ならずなりぬ。

ゲザ、「かくまで類稀なる美人のいかなれば我養父の妻にはなりけむ。」

ステルニイ、「いかなれば。いかなれば。ガルチエリは聲を潰され、戀人を失ひ、病身になりぬ。其齡は三十八なりき。デリレオは座ある家の子にて、嘗て慈善事業のために失ひし金は少なからぬ、猶残りたることを妻を養ふには餘ありき。デリレオは妻におもひの儘の物をせさせしに、妻は娘一人を産みて半年ばかりの後、由緒あやしき波蘭人と墮落しつ。おん身が娶らむといふ少女は、そのとき跡に遺し、娘なるべし。

程經て後、デリレオはある屋根裏すまひにて、病みおとろへたる妻に邂逅ひ、優しくもまた我が家につれ歸りて、その終を見届けつ。おもへば憫むべき男なりけり。ガルチエリを娶りしは、固より親戚の言葉に負き、朋友の諫を用ひての事なりき。今は財産もなくなられたれば、さてこそラエスタイン街には還りしなれ。デリレオが運命は果敢なかりき。されど一年半ばかりの間、ガルチエリが傍に居りしは、せめてもの事なるべし。」

言畢りてステルニイは暫し空を見詰めて物案じするさまなり。

ゲザは進寄りて輕く其臂を按へ、「おん身が斯くまで牢記して忘れたまはぬガルチエリが面影を傳へて、その罪障を傳へざる少女なれば、わがこれを娶らむとおもふも宜ならずや。」

ステルニイは少し苦味を帯びたる笑を漏しつ。「少女が年はいくつぞ。十六か十七か。」

ゲザ頷きて、「先づその位なり。」

ステルニイは、「その位にて性質の知られぬ様やある」とつぶやき、指にて卓を敲きて、腕の節をなしたり。ゲザは面をあかくせしが、歌の節をなしたり。ゲザは深くおん身を愛すれども、少焉ありて、「われは深くおん身を愛すれども、今のやうなる語氣にて物言はるときは、いかに

にも堪へがたければ、先づ兎も角も我結愛の妻に逢ひて、さてわが善く懷びしか、見誤りしかの判斷を聞かせよ。ラエスタインの街をおそろしと思はずば、近きに我養父の家に招きて茶一つ薦むべし。」

ステルニイ、「いつにても善し。明日にても、明後日にても。おん身が家の人は早起ならむ。朝疾く出掛に寄るべし。」

數分時の後、ゲザ咽乞して歸るを、ステルニイ戸の外まで送りて、梯の欄越に、「さらば明後日の朝八時頃に往くべし。おん身が結愛の妻こそ見たけれ。」

### 第十三回

ラエスタイン街の十番には、けふしもさも事ありげに見えたり。蒸したての菓子のは、梯にも廊にもみち／＼たり。アンネットはおもての色絶間なく變りて、道具のおき處、幾度となく草むるもかしこゝの損じたるを掩はむとてなるべし。手を收めて後美しき日に、繡の壁を見て、「彼君はこのあばら家をいかにか見玉ふらむ」とおそる／＼いふを、ゲザは、笑みながら慰めて、額に接吻し、輕く頬のわたりを敲き、心をな苦めそ。吾友は汝を見むとて



「ゲザが見臺に載せしは、おのが作りし「ダンテが地獄」の曲の一段にて、「ネッソン、マジオル、ドロオ」(Nessun maggior dolore)と題したるものなりき。この段は世に珍らしき結構にて、「キオリン」の絲聲舊歡のかたみを喚起して、媚ぶるが如き調をなすとき、肉聲は低く柔なる夢寐中の調に始まりて、腸を斷つ苦惱の調に終るやうに作りたり。こはゲザが著作中にて最得意の一段なれば、少女が歌ひ畢りしとき、ゲザが頬は燃ゆる如くなりき。爾時ステルニイは覺えず手を木板の上より滑落させて、ゲザが面を乾と見詰め、「こはおん身が作か。」

ゲザは頷きぬ。

「さらばおん身がために賀せむ。疑もなき傑作なり。」言畢りてステルニイはその少年の友を擁きたり。

十一時に垂とせし頃、ステルニイは用事ありとて辭し去りぬ。それ迄にはゲザは自作の曲の種々の節を弾かせ、いづれをも面白しと稱へき。

ゲザは客を送りてアエスタイン街を出で、賑はしき處まで隨行きしが、ステルニイは何事かを思居たりけむ、言葉ずくなにのみもてなしたり。ゲザ聲高く、「おん身が見たるところは

いかに、「といひしに、ステルニイわれに返りし如く、「結果好きこと必定なり」と答へき。ゲザ笑ひて、「結果好しとは。我夫婦の間の結果にや。」この反問は意外に出でたりと覺しく、ステルニイは慌てたるさまにて、「なに、その事か。ガルチェリの後はじめてかく美しき女を見たり。それさへあるに、聲のめでたさ。マリブランはものかは。」

「さて」とゲザが問はむとせしとき、二人は恰もプラス、ロアリアルに來ぬ。ステルニイ急に友を顧みて、「かしこに車あり。最早無かるべきかと思ひて氣遣ひたりしに。さらば。明日は『地獄』を皆持て來よ。」

言畢りてステルニイは車を招き寄せ、これに飛乗りて去りぬ。

アエスタイン街にては此夕物語いと繁かりき。デリレオは頬紅きこと三鞭酒飲みし如くにて、常に増して能辯なり。ゲザは少女に向ひて、ステルニイが褒めし節々、おちなく語傳ふれど、少女は眼足らで喚起されし硯兒の如く、何事をもうるさがりたり。少女は唱歌のいつになく拙かりしを悔いて、返らぬことをつぶやき、平生父の言葉多きを喜べに似ず、けふはすこしも耳を借さず、果は眉を蹙めて、父上の部屋

の中を彼方此方と歩み玉ふを見れば、目眩きて堪へがたしといへり。デリレオ聞いて、興を損で、椅子に倚りしに、少女は今更に氣の毒がり、許し玉へとかこちて、忽ち泣出でぬ。

ゲザは少女を膝の上に抱上げて、代りて涙を拭ひ、かにかくと言慰め、その頬を撫でつゝ父に向ひ、「この子はあまり引籠りてのみ世を送ればこそ、些細の事にもかく劇しく感動するならめ。この子の心慰めむ術もがな。」

父は苦々しきおも持して應へざりき。

ステルニイは夜の三時すぎに客舎の梯を上りぬ。けふも衆人のおれを喝采せしことは常の如くなりしが、何故か心樂まず。

「路なる童も今は吾名を知り、掃除人足さへ振返りて、あれこそ名人のステルニイなれと指せり。されどわれ死なば、能く何物をか遺さむ。」

『ピアノ』の曲譜一つ二つはあれど、それは後人の笑を招くのみなるべければ、「かく獨言ちて思に沈める時、ゲザが歌は心の中に響きわたれり。寒からぬに膚栗立ちぬ。忽ち又美しきアン

ネットが事をおもひ出でゝ額を撫でつ。「一家の中なる生活あまりに静ならば、藝術の行末覺束なからむといひしが、彼がためにはその憂はなかりけり。彼少女は猶睡れり。されど母より

ためには何の苦をもなさざりしなり。おのれが永く居らむことをおそるゝ處にも、しばしは遊びて興ありとおもふは、富貴の人の癖なり。ステルニイがこの家にての心は、斯の如くなりしのみ。

デリレオに向ひては、彼を敬しておのれを抑へ、ゲザに對しては、半ば朋友間の調子を取り、半ば父の子を遇する如き氣色を見せて、これに戯れたり。さて二碗の茶を喫みて、菓子の意味を讀め、おのが飢に誇りたり。デリレオは其禮服とおなじ舊さの説にて、げに昔の趣味には善く協ひたりけむと思はるゝことを語りいだしぬ。

面の色蒼さめ、一たびも口を開かで、客に對坐したるガルテリが娘は鼻白みて仰見むともせず。

さてありながら、少女は客の姿をも、その振舞をも洩らさず見たり。客はラアエスタイン街より外へ廻らむ心構に、集會に赴く時の服を着けたるが、この服はいとよく似合ひたり。少女がためには、客の白き襟飾、その「ジレエ、アン、キヨオル」、その式の如くなる髪形のなど、皆尊くのみ見ゆるなるべし。

ステルニイは屢優しく言葉を掛けしが、少

女は唯こと葉すくになに應ずるのみ。

會話のあまりにはえぬに、客はデリレオに向ひて、「娘御は音楽のおんたしなみあるべし、いかに。」

「唱歌少し學ばせしこと侍り。」

「み聲は定めて。」ステルニイはガルテリに似たるべしといはむとせしが語を舉へざりき。

ゲザ、傍より、「何なりとも少し歌うて聞かせずや。強ひてはいはじ。されど賓人のために。」

「そはいかに嬉しからむ、とステルニイ引取りていひき。少女は答をもなさで、夢の中にさまよひありく人の如き姿にて立上り、「スピネット(樂器)の側にゆき、譜を倚譜架の上に載せたり。譜はマルテニの作にて名高き「戀の樂」と題したるものなりき。ステルニイ、いち早く彈き方にならむといひしに、少女は羞を含みて顔きつ。少焉ありてこの貧しげなる緑いろの部屋に、不朽の戀の歌の中にて最不朽なる言葉、柔く哀なる聲に擽はれて漂ひたり。全歐羅巴の唱歌女生徒の力の猶未だ減すこと能はざるは此曲なるべし。」

Paisir d'amour ne dure qu'un instant  
Chagrin d'amour dure toute la vie——  
(戀の樂てふものは唯ひと時のものな

れど、戀の苦娘は絶えざらむ、人の命のつくるまで。)

少女は式の如く兩手を軽く握めたりしが、頭をば式にかゝはらで右の肩に枕けたるさま、その重さに堪へざる如く見えたり。その聲は微におそるゝ胸より洩出でたり。聲の胸のうちに震ふさまは、抑へたる激戯の如くなり。

少女が側に歩寄りたるゲザは、客に向ひて、「おん身を恐れてなるべし。常には臆細き少女にあられど。」とつぶやき、「ボオウル、フチイ、シヤア(あはれなる小猫といふことなり)」といひて、アンネットが髪を撫でつ。

この罪なき戯も、見るに忍びざる如く、ステルニイは眉を蹙めて、デリレオの方に向ひ、「變らぬ聲なり。少しも變らぬ聲なり。善くも似たることよ。」さて少女に、「いま一つ歌うて聞かせたまはずや。吾願なれば。」

ゲザは積疊たる譜の中より手づから寫したる一枚を引出し、これを見臺に載せ、「一心を措かて歌へ」とアンネットに説き勧め、白じ、スピネットの上なりし「キオリン」を取り、「此曲は聲と「キオリン」とに作りたるなり。ステルニイ「ア」の聲を。」

ステルニイは頼まれて「ア」の聲を弾出しつ。

マリンスキイが雇入の事を聞きしときのアンネットが喜は、ゲザがためには意表に出でにき。アンネットはいさましく、「おん身がかゝる名家になりしをば、今までも知らざりき」といひぬ。

「雇はれて行くべきか、」と問ふゲザが聲は震ひ、その眼には涙みちたり。アンネットは暫し驚き呆れたるさまにてゲザが面を打守りしがおん身はことわらむとおもひ玉ひしか。富める人になりて、アメリカより歸らむ時をおもひ玉はずや」とつぶやきぬ。

ゲザは猶「たびといき吐きしが、」頭を屈めてアンネットが額に接吻し、「まことにおん身が言ふ如し。わが猶豫ひしは臆病なりき。」

ゲザはマリンスキイが影に入りぬ。

数日の後アエスタイン街にめづらしく立派なる會食ありき。座につらなりたるゲザは日ごろ嗜むものを皆その儘におきて食はず。デリレオは勉めて雑話をなし、哀しげなる一座の光景を掩ひ隠さむとして、胡椒を果汁の上にふりかけ、最後に震ふ手もて杯を舉げ、ゲザが歸郷の早からむことを祈るといひぬ。

今までは興ありげにゲザが出發の日を數へしアンネットは、この時に至りて刻々別離の苦

を覺ゆる如く、面の色變り、饑には手だに觸れず、また一言をも出さずなりぬ。その目の中には限なき苦痛見えたり。ゲザあはれがりて引き寄せ、血色なくなりたる頬を撫でしに、少女は咽び泣きてゲザが體にからみ付き、繰返して、「ひとり残して往き玉ふな」といひぬ。

この理なき言葉にはゲザ答へず、唯優しくもてなして謙し慰め、さて父に向ひて、「つとめて此子を慰め玉へ。折々は芝居にも伴ひゆき、時候好くならば、すぐに田舎へ引越し、興あるべき書を撰びて讀み聞かせ玉へ。我等二人に面白きやうなる書は惡し。此子に面白かるべきものあるべし。」

アンネットは涙の中より父に向ひて、「この人より善き人、世にあるべきか、」とかつゝいふ。

この時婢入り來りて、「車はロアイアル廣こうちへ待ちて居り。ゲザ様の荷物を取らむとて、會社の役人來ぬ、」といふ。ゲザは仰いで時計を見、「最早時刻なり。泣き歇め玉へ。」とアンネットをすかしつ。

アンネットは猶繰返して、「ひとり残してゆき玉ふな、」と泣きつゝいふ。

ゲザは少女の軟き腕をしひて引きほどき、

言葉もなくデリレオが手を握り、走りて出でぬ。街に降り立ちしとき、樓の上に窓を推しひらく音して、アンネットが「かへり玉へ」と呼ぶこゑす。ゲザは仰ぎ見て「さらば」といひしのみ、足を速めてロアイアル廣こうちに向ひぬ。

汽車の出でむとするとき、「ブロード」にて春高く、毛革の外套を被たる人、車の踏板の邊に駈け付けた。リ。「ステルニイ」と呼びしゲザが聲の中には感激の情みちみたりき。

「わが來べきことをば知りつらむ。某の許に居りしが、いまだ一度あひて開運を祝せむとおもひて、人目をぬすんで來ぬ。」

車掌室の扉を開けばゲザは入りぬ。

ステルニイは再びよろこびをのべたり。

ゲザは車の窓より半身を出して、「おん身が親切はいつまでも忘れざるべし。嫌ならずば明日あが様子を見て呉れよ。」

「明日は必ずおとづれて、おん身が機嫌よく立ちしことを話さむ。」

車の動きはじむるとき、ステルニイは猶笑を含みてさしまねきたり。

別るゝときのステルニイが顔はやさしく、親切氣なる笑がほなりき。ゲザが念頭に残りし友の顔もまたやさしく、親切氣なる笑顔なりき。



は熱情を傳へ、父よりは神經質を傳へたりと覺ゆ。その姿のめでたさ。」

#### 第十四回

この頃ステルニイは心さわがしくなりて、名聞を好むことむかしに倍する如く見え、「ピアノ」弾く手も變りたり。強ひて非凡ならむと欲して、あやしき聲に陥り、指に任せて木板を敲きちらすを、聴衆は夢中にて響め、批評家はいみじき發達なりと稱へたれどステルニイが胸はなか／＼に安からざりき。

ラエスタイン街の溝は凝りて流れず、基督の像のもろ手よりは氷柱長く垂れ、みどり色の座敷の窓硝子には、この頃の裸に時ならぬ花咲き出でぬ。されどアンネットは唇いつも燃えて、掌いつも熱かりき。あるきさま足を曳く如く見えて、立振舞に夢心地ならずやと疑はるところあり。目は遠きところをのみ見たる如し。今迄は戀愛の火に對して、子供らしき感情をありの儘に見せ、絶えて氣を兼ねることなかりしに、近ごろはいづくよりか他人行儀出でて、ゲザが言葉をは「一も二もなく守り、時ありては又故もなく怒を帯びて、そのいひつけに負くことあり。さてかくつれなくもてなすこと久う

なりて後、俄におもひ立ちしやうに、また心を籠めてゲザに親み、涙を流して口頃の無禮を謝びなどす。ゲザはこの定なき振舞を見れどもあながち心にかけず、をり／＼面白からずおもはるゝ事あるをも、病める子供の所爲のやうに、ただ知らず顔に看過しぬ。とあるゆへ落、ゲザと父とは例の文學美術の話に深入して、あたりの事を打忘れたるをりしも、いま迄こと葉少く、思ふことありげに、馬尾装束たる剛き長椅子の片隅に倚り居たりしアンネットおきなほりて小き頭を擡げ、なにやらむ聞くやうなりき。

この時輕く扉を叩く人あり。ゲザもデリレオもまだ聞きつけぬ間に、アンネット忙しく入り玉へと呼びぬ。扉は開きぬ。「邪魔にはおぼさずや」と優しきこゝろ音にて會釈し、此間に入るはアルフオンス、ド、ステルニイなり。

數日の後ゲザ外稽古を畢りて歸りしが、「こはいぶかし、アンネット、こゝには前庭の香残り。ステルニイ來ざりしか」と問ひぬ。「次の合奏の切符をもて來ぬ」と答へし少女は面を擡げざりき。

障なくば明日來よ。語るべきことあり。ステルニイ。

この口上がきをばゲザある夕おのが室にて

見出しつ。翌朝正直に「オテル、ド、フランドル」にゆきしに、ステルニイ出で迎へて、「金おほく減くる心はなきか。」

ゲザ、「問はるゝ迄もなし。我が窮したるをば、御身も知らずや。例の曲を用ゐるべき機會ありとの事か。」

ステルニイ、「まだその口をば見出さねど、外に善きことあり。それがしが昨日得し電報を見ればキナンスキイが臂を折りたるために、マリンスキイは食はせて一萬「フラン」の月給にて、上等の「キオリン」ひきを雇はむといふ。おん身は雇はるゝ心なきか。」

ゲザは頭を低れて小ごゑになり、「幾月の旅ならむか」と問ひかへしつ。

ステルニイほゝ笑みて、「六月、おそくとも八月をば越さじ。返事をば明日聞かむ。よもや船に酔ふことをおそるゝ男にはあらざるべし。」

ゲザ、「その事にはあらず。されど一應アンネットにも相談すべし。六月か八月かといへば、短き間にもあらず。道も随分遠し。アンネットはおそらくは承知せざるべし。然しおん身が心入の程はありがたし。」

かく答ふところへド部來て、貴き客の刺を通じければ、ゲザは避けて歸りぬ。

祭壇の氣の裡にみち／＼たるは、けふの祭の記念なる護摩の煙、蠟燭のゆえん、洞るゝ花のほひなり。家々の壁には猶供物卓を倚せかけたるあり。卓のめぐりの木葉は萎び、花は枯れたり。ゆたかなる薔薇、やさしき向日葵、おとなしき木犀草の花、皆敷石の上に落ちて、人に踏まれ泥にまみれたり。

ゲザがロアイアル廣こうちにて車より下るとき、五色の縁とりたる帽を戴き、紅の「シヨオル」を引掛けたる女ありて、道の上なる花を拾はむとあわたとしく身を屈めつ。彼は法師の行列に逢ひては躲れ避くる女の一人なり。その家はラアエスタイン街にあれば、ゲザにおもてを知られたりき。ゲザはあはれに思ひて手を衣のかくしに入れ、二十「フラン」の貨幣一つ探り出して取らせしに女は首を擧げて、鋭く患人の面を見、一禮して俄に紅粉を粧うたる顔をもむけつ。

ゲザはラアエスタイン街に來ぬ。清よりは穢らはしき瓦斯立ち昇れり。蚊は雲の如く群りて四邊を鬧うしたり。基督の像の姿はいつよりも悲しげなり。行違ふ人は多く會釋せり。「ヒュエネ」といふものめきたる瘦狗どもは尾を掉りて近づき、中には冷なる鼻をゲザが手にお

し付くるあり。デリレオが家の平間にて青物あきなふ女に「誰もうちには居らぬか」と問へば、主人の君も嬢様も不在なり」といふ。便ながりて、「散歩に出でしにや」と問へば、「否、然にはあるざるべし。嬢様は寺にまゐられぬと覺ゆれば、最早歸り玉はむ。寺は鎖さるべき時なれば。若しセント、グツウレ」の寺に往きたまはば、出逢ひ玉ふべし。」

ゲザは寺の方へ馳去りぬ。その背後にはラアエスタイン街の女房共集りて彼を笑へり。

## 第十六回

大小さま／＼の街、車輛の如く集りたる凸凹ある辻に立てるは、「セント、グツウレ」の寺なり。造作は輕くして看透すべく、勢はあたりを拂ひて、エグモント、オホンの魂のさまよふ市に響ゆるはこの寺の塔なり。寺の壁の黒くなれるは神の名をかたりて罪惡をかきし人々のために喪に居るかと疑はれ、寺の冷なる堂よりは墓穴に似たる陰森の氣出で、人の面を撲てり。

ゲザは進み入りぬ。堂の内はほの暗く、柄いろにして飢みたる榻としらけたる墓の同座とあたりは、深き影に掩はれてよくも見えず。

こゝに坐したる人数は最早いと少し。アンネツトはいづくと守ぬれど、たやすくは見出されざりき。

日に觸れたるは老女二三人の磕頭きたる。青き前垂したる子供の足をつまんで、銅燈の水を掬はむとしたる、二人の乞兒の門の傍に立ちたるのみ。式は早や果て、高座には留めざりき、見るがうちに子供は外面に歩み出で、老女等もあらずなりぬ。

ゲザは又日を四方に放ちて覺めしが甲斐なかりき。やうやく高座に近きて祈のこと業一つ二つ陳べむとす。あやしげなる汎神教を奉ずるデリレオには育てられぬれど、猶加特力の祭に心引かるゝは、釋き折の母の狀残りたるなるべし。

その時忽ち大息つく人ありと覺えて、影暗き方を見れば、わが足許に近く蹲踞りたるものあり。喜胸に溢れて却りて胸苦うなりぬ。「アンネツトにはあらずや、アンネツト」と繰返してさゝやきしに、うづくまりたる人は影の中より立ち現れぬ。アンネツトはしばしゲザが面を打守りたりしが、一聲細く叫びて身をふるはせ、倅なる杜に倚りてわづかに自ら支へつ。

ゲザは隣りの迎へざまに驚き來れ、怒を帶

# 第十五回

南米諸國にブラジリアかけて黄熱盛に行はれければ、マリンスキイが一群は豫め定めし時を待たで歸郷の途に就くこととなりぬ。

期に先だちて雇を解かれしために少し削られたる給金を受取り、誇張を極めたる批評ある新聞一束とアンネットがために買ひし紐育チ

フアニの飾二種とを持ちて、ゲザは彼一群の人々を載せて歸るべき「アルカデア」號の汽船に乗り遷りぬ。

アンネットをおもふゲザが心はいと切なりき。ブルクセルを立ちし時、少女が氣色あまりあしかりければ、別れたりし間のかなたの悲おもひ遣らるゝまゝに、復相見む折の喜もまた一入ならむとおもひぬ。ゲザは不意にかへりて少女を喜ばせばやおもひぬ。その時の少女が目はいかならむ。船中に眠りても、忽ち歡の聲をあげ、アンネットと呼びて醒むること屢なりき。

ゲザが歸思矢の如き講をば一行の人皆知りたり。ゲザはアンネットが事を人々に語りぬ、アンネットとステルニイとが事を。人々は皆ゲザを可哀がりて、アンネットが様をおもひ遣り、

無理ならぬゲザが歸思を慰むるうちに、ステルニイを興むるをば怪みけるが、ある低音うたひの翁は氣遣ひて、「あれはおそろしき人なれば、構へて心許し給ふな」と諷めつ。

ゲザは其諷を惡く取りて怒の色をあらはし、低音うたひをきびしく責めしが、翁は唯ほゝゑみて相手にせざりき。

夥の中にジュセツピナといふ娘ありき。赤き髪ゆたかに生えて解きたるときは踵に達せり。色青く、黒き目圓く、鼻低く、口大なれば、その顔おのづから醜醜めきたり。されどこの娘にも女らしきところありて、微笑むときは愛敬あり。その絶間なくほゝゑむさまは、何事ありても喜ぶことなき人に似たり。ゲザはこの少女にアンネットが事を話すこと屢なりき。少女はいつも耳を傾けて聴き、時としては泣きぬ。少女はこの群の最高音うたひなり。中音うたひの男を夫にしたる次高音うたひは品行自慢にて好深ければ、ジュセツピナとは中善からず。

巴里にて夥を解かむとせしとき、ジュセツピナはゲザが頭を抱いて親吻しつ。おなじ別離の式をば品行自慢の次高音うたひもせしが、ジュセツピナは小さき黄金の十字架をわたり、小牌にて、「こはわが始めて尊き吻餐(宗門の式)」に列

りし時、母上に貰ひし物なれば、おん身が結髪の行末を祝せておくりまゐらす、我持物の中に御身が結髪の人におくらむ程のもの此外にはあらじ、といひぬ。藝人のうちには婚禮のをりよろこびに往くべしと契るもありき。

ゲザは人々にわかれて巴里を出でぬ。頃しも六月の末の半にて聖屍祭に當れりき。停車場ごとに白衣きたる娘幾人かありて、折々は加特力教の法師の行列、遠きところに見え、その歌は世になき人の聲の如く、旅人の耳に震ひ響きぬ。

夕暮にブルクセルに着きて車を雇ひ、モンタニエ、ド、ラ、クールの角へと命ずるに、こゝの駈者の癖とて、さも面倒らしく、さもうるさげに高低不定の道をあゆませたり。北國の夏の常なる蒸す如き暑はこの市を掩へり。空氣の人を壓し、人の息を塞がむとするは、花卉をそだつる室の裡に入りたる如く、また餘りに爐火を熾にしたる部屋に居る如し。地上の物はつゆばかりも動かずして、唯本街の旗胡の旗にすこしの戦を見る。きのふの雨の餘波なる路上の水潦は蒸氣を立たせたり。大空にはまたの雨健に雲やうやく聚れり。いづかたに向ひても、地平線にあたりに微なる雷の音を聞く。重く又哀に



り。猶覺えてやおはする。われ等二人が造りしは屋氣樓なりき、美しき屋氣樓なりき。」木の頂の戦ぎは劇しくなりぬ。少女は身を反らせ、面を擧げて、夢見る如くゲザが顔を守り、「誰も見ねば親嘴して」とさゝやきぬ。この親嘴は長く、燃ゆるやうなりき。アンネットは微笑みて、かすかに「今一度」といひしが、其聲はなかに消されぬ。再び親嘴せし後、ゲザ、「浮世はいかにうれしく、めでたきものなるか、けふまでは知らざりき。」咽ぶ如き聲は長く木々の上をわたりぬ。アンネットは我にかへりし如く、夕立の來ぬ間に歸らばや、といふ、其聲は忽ち鋭く聞えぬ。二人は踵を旋しつ。

## 第十七回

結髪むすみげの妻に、ジュセツピナが十文字の飾を遞與し、とき、ゲザはいひき。「これをお身に付けさせむとはあらねど、せめては大事に藏めおき玉へ、こはジュセツピナがためには最も大切なるものなりしを譲り呉れたるなれば。」

ゲザはこの時かの歌女のあはれげなる姿にて、羞を含みて、優しくもかの飾をおくりしとき、の事を物語りぬ。アンネットは家の闕にて

ゲザに別るゝとき、かの飾に接吻しつ。さて、「父は今省真夜中ならでは歸り玉はさるべし、さらば」とさゝやく。ゲザは暫しアンネットが顔を打守りたりしが、さてあるべきにあらねば、明日こそまた相見めとて別れぬ。

ゲザは歸りて、かの十番の家に向ひたる、昔の小部屋にあり。獨り坐してこよひの事を思ひつづけた。嬉しくて、却りてまた物苦しきやうなる情は脈といふ脈を張らしむ。アンネットが斯く人を迷はしむるやうに美しく見えしことは今日まであらざりき。又斯く心を攪るやうに親しく物言ひしことも今日まであらざりき。少女が優しき微笑、少女が大なる目の照りわたれりしなどおもひ出せば、そのさま猶我が胸のありたりを離れざる心地す。かの少女と夫婦になりたらむ折の樂はいかなるべきか。まことに思ひ遣るにも餘あるべし。

されど少女は病めりといひき。これを思ひ出せば、寒き風一陣、暖なる夢の中にぞ吹き入る。おもふに少女はまことに病めるならむ、いたく病めるならむ。その親しかりしは別に臨みての親みにやありけむ。その美しかりしは。こゝまで思ひつゞくる程に、おそろしき憂ゲザを襲ひ來ぬ。

折しもあれ、月の外を吹くは毎に情を作なせる、蒸す如き風なりき。枯れなむとする花の香は、腐るものの臭に雜りて窓より入り來れり。

あまりに心に掛りければ、ゲザはアンネットが窓の方を見やりぬ。窓は開きたり。優しき頭は窓の外に顔さし伸べて、こなたを望めり、青き色を帯びたる月の光は、彼方なる古家の壁に落ちて、少女が優しき姿の影畫を眞黒に寫し出したり。

人氣絶えて、眠れる如き街を隔てゝ、ゲザは「アンネット、アンネット、」と呼びぬ。

少女のほゝゑめるは、かはたれ時の灰いろなる紗を隔てゝ見ゆ。少女は「安らげく臥させ玉へ、」と微にいひ、小きもろ手を肩にあてて、親嘴の形をなし、さて窓を鎖しつ。ラエスタイン街は鉛の如く重くろしき沈黙に掩はれた。ゲザは幸に酔ひたり、心の底にアンネットが微笑を包みて、彼は眠りぬ。

まだ朝の五時にもならぬ頃、前なる街はあやしく賑はしうなりぬ。ゲザは醒めたり。外の面には物に激せられたるやうなる聲、忙はしき聲、喧嘩、火事を出し、家あるにや。さわがしさはいよいよ増りぬ。何事にかあらむ。ゲザはいそぎ衣を衣て梯を下りぬ。

びたる聲にて、「アンネット、いかにかせし。我面を見ておそるゝは何事ぞ。」

少女は頭を掉りぬ。その顔色の灰の如く見えたるは、薄闇き寺堂の内なればにや。「かく遠に來り玉はむとは、おもひかけざりければ。それが上に病身なれば。」

「病めりとか。さては無理ならざりき。わが俄に呼び掛けしを怪しきものゝやうにや思ひけむ。先觸なしに歸りて喜ばせむとおもひしは、誠におろかなる心なりき。」かく謝罪して、身の寺内にあるをも忘れ、引寄せむとするを振り拂ひて、「こゝにては」と四邊を見廻はしぬ。さてアンネットはゲザが肘に身を持たせて寺を出でぬ。

空氣は濕りて鬱陶しげなり。雲は低く垂れたる。適ま燕「羽力なげに辻を横ざりて飛び去りぬ。寺の内の薄闇きに比ぶれば外面は猶明かりき。

ゲザは暮はしげに目を少女が面に注ぎつ。色は死人の如く青く、頬は昔より狭く、唇は昔より赤く、目は昔より大なり。昔の美しさは重味ありて、全くその形にありしに、いまは口鼻のめぐりに細なる線あらはれ、目のあたりは物おもしげなる影生じて、その風情人を惱

さむとす。

「おん身がかくまで美しきをば早や忘れたりき」といふゲザが聲は強き情に壓されて僅に洩れ出でたり。アンネットは笑みつゝ仰ぎ見しが、その笑は狂ほしげに怪しかりき。笑ふとき目のまはり影の濃くなりしために、顔の美しさはいや増したり。

この時ゲザはアンネットが顔の何物にか酷く脅たるをおもひ出し、が、その物をばおもひ得ざりき。色褪めて凋れ掛り、よわ／＼しき頭を街の敷石に持たせたりし薔薇の花にはあらじ。然らば何物なりけむか。然なり、いまこそ想得たれ、アンネットが今の面の少しジュセツピナに似たるを。

初に輕くゲザが肘に掛けたりし手は、今親しげに腕にからみ付きたり。ゲザがラアエスタイン街に曲らむとせしとき、少女は留めて、「すこし迂路なれど公園を歩みて歸らばや。おん身が好みて往き玉ひしところ／＼を見て歸らむはいかに。」

「よくぞ心づきし」と答ふる聲に喜はみち渡れり。

満るゝ花の香は猶空氣の中に漲りて、其間には新しき「アカシア」の花のほひ雜れり。

二人は公園に入りぬ。園の中には人氣なかりき。黒き木の頂を折々わたる風は震ひ職く如くなり。

ゲザ、「おん身はまことに病身なりや。」

「然なり」と答へしアンネットが聲は低く高りて、やうやう抑へたる苦痛の叫の如くなりき。暫くしてアンネットは劇しく、いかなれば我をひとり残して往きたまひし。」

「我を出し遣り玉ひしは君ならずや」とゲザ戲のやうに答へぬ。

「げにそは眞なり」と少女は輕くいひぬ。

二人はしばし言葉なかりき。天は次第に暗くなりぬ。少女は遽に立ち留まりて「秋の頃いづも水潦ありしはこゝなり。おん身はその時我を拖いて渡り玉ひしが、猶を忘れ玉はずや。一ゲザは笑みつゝ頷きぬ。又二足三足ゆきしところに大なる石盤ありて、夕日のしらけたる影は水の面に浮びたり。

アンネット、「こゝはおん身がニツツア(伊太利)の事を語り玉ひしところなり、神使の人江の事を。」

ゲザは又ほゝゑみぬ。とかくして或る石像の下に出でぬ。アンネット、「こゝはおん身が我にボルヂゲラの莊をおくらむとのたまひし處な

もはれて、此迷は少しく生き残りたる人を慰む。  
まことに死別の苦を知るは、なき人の遺體を葬りたる後にあり。常の日の習、つねの日の需など我に迫り來りて、「いつ迄か汝は死と相戯れむとすらむ、われは我が權利を求む」といふとき、まことの死別の苦ははじめて知らるるものなり。

あはれなるアンネットを墓田に送りて、父と共に歸りて見れば、緑いろなる宅を取り片付けて、アンネットが日ごろ用ゐなれたる物を藏めて、食卓には二人前の食の準備整ひたり。

ゲザが悲痛はこの時忍び難うなりぬ。

今は若き「キオリン」弾きと、老いたる新聞書きと相向ひて居り。二人は何をも食はざりき。

ゲザは言葉なかりき。デリレオはゲザが手をさすりて、連りに、「あはれなる我子」とさゝやきぬ。

俄にゲザは眼を父が顔に注ぎ、聲をかすめて、「誰なりしか父上」と問ひぬ。デリレオは下の方を見て、膝の上なる巾をつまさぐり、「われは知らず」と答へぬ。

「父上よ、何とかの玉ふ」とゲザはいきまきたり。

「われは始終の事を、つゆばかりも知らざりき。

アンネットはわれには打ち明けざりき。わが疑心の心をおこし、は、ついこの頃のことなり。」デリレオはこの言葉の中に、次第に慚愧の色をあらはしたるのみ。

「さもあらばあれ、アンネットが誰にか心を寄するを、よも絶えて知り玉はぬことはあらざりしならむ」といふゲザは、目に怒、頬に恥を見せたり。

「かれが迷はまことに鬼ありて魅するが如くなりき。」老人はかく語りて口を閉ぢ、おそろしき秘密あるが如く、復た一言をも出さざりき。

一日々々と悲しくのみ暮しぬ。デリレオは勤めれば、また常の如く出入す。ゲザは緑いろなる部屋にありて、獨り物をおもへり。かれは再び旅立したむとせず。かれは故人に逢はむことを願はず、わが未來の幸を語り聞かせし故人にかくはかなき中に、猶慕はしき人ひとりあり。

それはステルニイなりき。

ステルニイの人の愛を解し、人の歎を慰むるさまは、めづらしく優しく、ほとゝ婦人の如くなりき。そが上に、わが未來の幸の頼み難かるべきをば、かれその初にいひき。かれはわがこの歎に逢ひたるを怪みもせざるべし。

ゲザは人にステルニイが在處を尋ねしに、い

ま英吉利にありといへり。ゲザは書をおくりて、アンネットが俄にみまかりしことを告げ知らせ、さていはく、「また巴里に來むをりは我に知らせよ。われもかしこに引き越して、暫く汝が側にて業を操るべし。この浮世にて、なほ我を慰むべきものは、唯だ汝が交りのみ。」

この文には何の答もあらざりき。ゲザはデリレオが家に遷りて、アンネットが居りし緑いろなる部屋に住みき。

ある日少女が用ゐ慣れたる机に向ひて、封筒やあると、引き出しの隅を掻い探るほどに、板の隙間に介まりて、ちぎれ残れる小さき手紙の端あり。取りて見れば、まがふ方なきステルニイが筆の迹なり。

「うれしさいかばかりなるべき。リユウド、ラ、モンタニニにて、一時に逢ひまゐらせむ。君を慰むるステルニイ。」

ゲザは再び讀み返し、鈍く、おろかなる目なざし、四邊を見まはし、が、胸を射抜かれたる人の如く、もろ手を高くしし仰げし、氣を喪ひて鋪板の上に仆れぬ。

緩なる熱病に侵されて、ゲザは寐に就きしが、僅に残りたる病後の人となりて、一間の髪疎になりたる病後の人となりて、一間の



空氣はまだ濕りたり。朝日はまだ澤なきに、かすかなる紅の色残りたり。屋根の上には雀の常にもまして、寂しく啼けるあり。デリレオが家の前には人立したり。いかなる人にかと見れば、まだ夢のよくも醒めざるにや、指もて睡を擦りたる女の、髪はおどろなしたるあり、仕事にとて出で立ちたりと覺しき職人體の男あり。いづれも座敷の腐りし肉をねらふ鴉の群などの如く、眼を光らせ、頭長くさし伸べて、近う寄りむとひしめいたり。中にて物言ふは野菜あきなふおろななり。その面には珍しきものを目のあたり見きといふ慢心あざやかにあらはれたり。ゲザはその言葉をかたへ聞せしが、はじめは何の事とも辨へざりき。されど暫しありて、やうやう事の情を曉りつ。おろなはいひき。「いま俵をくすりやへ遣りぬ。されど最早間にあはざりき、間にあはざりき。」

「デリレオの君が卒中にてもせしと言ふにや、」とゲザ問ひしに、「なに、デリレオの君のいかで、」と人々いへるが中に、女ばらの顔打ち背けたるもありき。「死なれたるはアンネット嬢なり。」ゲザは目くるめきぬ。「何故ありて、アンネットが。」

魂も身に流はで、ゲザは梯を上りぬ。あわ

たゞしくアンネットが部屋戸を開きつ。この部屋をばかねて熟く知りたり。こはゲザが母かりし程、母と共に住みたりしところなり。唯だそのさま今は昔にかはりて、美しく飾りたり。老いたるデリレオは小き臥床の縁に腰掛けて、あまりの事に涙も出でざる目を見張りて、白き布に掩はれたるものを打ち守りて居り。

「爺御よ、とゲザは呼びぬ。

老人は此聲におどろかされて跳ね起きたり。身うち悉く震はせ、手を額に加へたるが、あはれに黄ばみたる顔には肉の顔見えたり。

「あはれと思へ、と呼びし聲はきれゝゝになりて、吃りて、僅に聞ゆるのみ。「あはれと思へ。娘は悔いなり。娘はみまかりぬ。」

ゲザは布を引き退けつ。白き床の上に臥したるアンネットは別の時の微笑をなほ唇のあたりに見せたり。臘の如くに色あせたれど、なかなか美しく、はげらざりき。

十四箇月の前、初めて相見し折の青き衣を身に着けて、ジュセツピナが十字形の飾をば頭に掛けたり。

世の中に数あり。いかなる手も、これに觸れむには、優しき足らざるべく、いかなる胸も、これを突めむには、強き足らざるべし。これに

向ふ人は、言葉はなくて、顔のみ解かる。この救をおもひ遣れば、畏きもいふ前に出でたるやうに、一種の敬おこるべし。

ゲザが心いかでかこれに向ひて怨ずることを得む。少女が身に着けたる青き衣は、その賢ごとに聲をなして、「許し玉へ、」といふに似たり。「許し玉へ。わが破りし愛には、われいかでか訴ふべき。われは優しく、嬉しかりける初の処童に訴へむとす。結髪之妻には許されまじき事をも、妹と思はれし我には許し玉へ。」

ゲザがこゝろ争でかこれに向ひて怨ずることを得む。ゆうべの親嘴は猶彼が唇の上に燃えたり。

結髪之禮の指環をば抜きて、状態の中に收め、これを臥床の傍なる小卓の上においたり。状態の上には裸き手して、筆太に書いたる文字あり。「戀しき兄上にかへしまつる。神よ。兄上を護りませ。」

ゲザは指環を少女が冷なる指に戻して、その手に接吻したり。

生死のわかれ路はまことにあやしきものなり。生者は死者の屍を目の前に見る間、その相隨りたることのいかばかり流きを知らず。死せる身に對してする事も、なき人知らむとお

のまはりには朽ち腐りたる土の臭を帯びて、早く  
磨れたる思想を懷きたれば、廻りたる屍の死  
したる語を採ふに似たり。

## 第十八回

白耳義獨立新聞には、「惡魔」は近き世にあら  
はされたる樂譜の上乗なりとあり。

俗人等は「惡魔」の中には不朽なるべき節々い  
と多しといひあへり。

「惡魔」は大喝采を博したり、と上等社會の  
人々は物語りす。

さればラアエスタイン街までも「惡魔」の噂  
聞えぬ。十とせあまり前にはバガニニにさへ比  
べられ、今は人知らぬモンネエの俗人の末に列  
なりたる、衰へ果てし「キオリン」弾きもこの噂  
を聞きつ。

デリレオが身まかりてより久しうなりぬれ  
ど、ゲザはなほおなじ古家に住めり。少しばか  
りなる財産の残りしをも、養父が老病の藥餌  
のしろにつかひ畢んぬ。今は唯だ僅に朝夕の  
烟を立つるのみ。

心は闇くなり、力は衰へたるに、酒にさへ  
耽りたれど、今も折々は何事にまれ爲さばやと  
おもふ念生ぜざるにあらず。されどいつも色

色の事ありてこれを妨ぐ。ステルニイが「惡魔」  
の曲の合奏を指揮すべしといふことを聞きしと  
き、かれが怒は極めて劇しかりき。いかなれば  
ステルニイは我に出逢ふべきことをおそれ、  
再びこのブルクセルには來むとすらむ。さてつ  
ぶやきてはいく。否々、世の人の皆我を忘れた  
る如く、ステルニイも我が世にありといふこと  
を、つゆ念頭におかざるならむ。さらばステ  
ルニイは我を死せりとおもへるならむ。ゲザ若  
し世にあらば、その名聲の絶えて聞えずなるべ  
きにあらねば。

ゲザは限なき苦惱を覺えき。この苦惱は結髪  
の妻の歿りしが故にもあらず、心を傾けたりけ  
る友の我を欺きしが故にもあらず。ゲザが前に  
立ち現れたるは、滅びたる技倆の鬼なりき。  
「惡魔」は近き世にあらはされたる樂譜の上乗  
なりとか。利分もなきこと哉。諺の皮を「ゲ  
ザ」はかくつぶやきぬ。

ステルニイが作譜の技倆をば、冷やかな心もて  
早く測り知りたり。おもひ出せばステルニイが  
當座の曲、その剽竊し主意を失ひたる節こそ  
可笑しけれ。さいつ年ある貴婦人に頼まれて、  
「バレット」の曲を作らむとせしときも、ステル  
ニイは徒に心のみ苦めて、日を果ぬれども稿を

脱すること能はざりしを、當時交深かりけれ  
ば、嗤嗟の間に作りてやりぬ。かの「バレット」  
の曲のみは、その頃評判よかりきとぞ聞えし。  
ざるを今ステルニイ大作譜家となりぬとか。

わが受持の譜の一段をば、ステルニイが手並  
いかにと、眼を鋭くして見渡せども、間のみ  
多くてよしあしを知らむやうなし。  
兎角するほどに二度目の試の目になりぬ。  
初度の折の如く、こたびも假病して休まむかと  
もおもひしが、それも心ならず。何ともわかぬ  
ど、胸引き緊むやうなる感ありて、我身は「ゲ  
ラン、ダルモニイ」の樂堂へ引き寄せられき。こ  
たび來しは「ピアノ」教ふる女とロシニが友との  
みにはあらず。ブルクセルにて名を知られたる  
しろとの俗人は皆壇のめぐりに聚ひぬ。樂を  
知りたる貴婦人は平間の前列を占めて踏段に向  
ひて居り。一座の氣色は何となく改まりたり。  
心待する熱はありあふ人々の脈に漲りたり。  
中には評判きあてて高きものを迎ふる心には  
雜り易き疑念を懷けるもあれど、そは一座の少  
數のみ。嘗て忙はしき交際官なりしシルワ伯  
は、暇あるごとに「キオリンセル」を弁ふ人なる  
が、しきりにけふの曲のすぐれたりといふ噂  
を説きて、貴婦人に聞かせたり。ステルニイが

うちを漸う歩きまはるやうになりしとき、ゲザは先づ紙と筆とをたづねき。書かむとするは、ステルニイに送るべき文なり。かれは日毎に稿を屬しては、また引き裂いて抛げ遣りつ。病める間、うみの母も及ばぬ看病せしデリレオは、おし止めて、「心をな苦めそ」と繰り返していへど、ゲザは太息つきて、「これを出しやりて我心を輕うせむ」といふくも、書いたる文をば出しやらざりき。ある日ゲザは忽ち悟るところある如く、「この事は文に書くべきにあらず。わが名譽をとり返さむには、まのあたり言ふに若かず」といひしが、これよりは養生に心を用ゐて、また文かゝむとはせざりき。

ゲザは又ものおもひの中に目を送りぬ。その悲には燃ゆる如き恥糺りたり。結髪けつぱつの妻の事、むかしの友の事を問ふ人に逢ふこともやあらむと思ふごとに、血雨の類にのぼり來て、家の内にはことなる人のなき時も、壁にのみぞ向はれる。

時ありて結髪けつぱつの妻を欺き汚したる友の事をおもひ出せば、心を狂はしめむとする怒氣おこり來りて、總身戦けり。さてかの友のその昔われに竭しきさまの情誼、その交際の優しさ、その聲音の誠ありげなりしなどにおもひ及

びては、ゲザは頹頹のあたりを按へて太息をつき、かゝる人のいかなればかゝる事をなし出だしけむと訝りぬ。

幾日か立ちぬれど、ゲザはステルニイを破ねに出でむとせざりき。かれはいたく人を忤れに、晝の間はデリレオが家をしばしも離れねど、身漸う健になりたれば、今はとて夜に入りてより出で歩くやうになりぬ。ゲザは年尙若かりければ、興を買ひ、自ら忘れむのをと、狼なる筈にも死るることあれど、かれは人々の戯れるをりも、色着ぎめ、目を遠きところに注ぎて、言葉もなく片隅に坐するのみ。

ゲザはこれを面白からずとして程なく止めつ。後には愛を忘るゝ術を餘所に求めて、やうやう酒に耽るやうになりぬ。

音楽をば殆ど全く打ち棄てたり。何を何故ぞといふに、音と、昔の記念を喚び起さぬはなかりければなり。縱令食を得むためにすとも、せめて樂を奏する業を棄て果つるに至らざらましかば、斯くまで衰ふことはあらざりけむ。惜むらくは、亞米利加より持ち歸りたる金ありて、かれの酔ひ癡れて世を渡るにさし支なかりき。

デリレオはわが愛で育てつる子のかく望を絶ちて悲痛にのみ沈み、そのめでたき材能も次第

にいひがひなく廢れゆくを見るに元堪へず、をりをり行末の事をばいかにかすると問へど、ゲザは唯だあけられる聲にて、「われもいつかは再び勤むるときあらむ、されど今はあまりに愛きに堪へねば」と答ふるのみなりき。浮世に遠きラアエスタイン街の片蔭に、ゲザが身はやうやう沈み果てなむとす。むかし養父なるデリレオが沈み果てし如くに。

おほよそ大都會といふ大都會には、ラアエスタイン街に似たる街あるものなり。巴里にはかかるところといふ多し。事の敗に逢ひ、心の苦を負へる人は、敵に嘲られむことをおそれ、友にはまたやさしき中に侮を包みたる憫の目にて見られむことを嫌ひて、かゝるところに遁れ入れり。この類の人も身を終ふるまで、かくまであやしき闇の世界にあらむとはおもはず。その初の心にては、しばしこゝに恥を掩ひて、創の癒えむ時を待たむとするのみ。この類の人はその自ら設けたる配所にて、さまざまの計畫をなし、再び世にあらはれて、會黨の扉を雪がむと、美しき夢を見るなり。されどこの夢や、絶えて眞になりしことなし。

その故奈何といふに、かゝる街は墳墓なり。年經てこの淋しき世界より出で來りし人は、身



「ゲザは唯だ聞きに聞きたりしが、その「キオリン」の弓は俄に動かずなりぬ。日の前に浮ぶは緑いろなる部屋壁なり。ステルニイは微笑みて「スピネット」に向ひたり。我側には愛らしき少女ありて、式の如く兩手を軽く握め、頭をば重さに堪へぬやうに右の肩に傾けたり。あゝ、これ「ネツソン、マジオル、ドロオレ」の段なり。

聴衆は物狂ほしく呼びぬ。俗人の群は立ちあがりて掌を拍てり。しろうと俗人は境のめぐりに集りぬ。折しもあれ、こは何事ぞ。息もたえずに、唇の上には泡沫を見せ、眼の裏には怒を輝かして境の上なるステルニイが前に馳せ寄るは「キオリン」ひきの一人なり。一盗人、人殺し」と咬腹れたる聲にて叫びつゝ、「キオリン」の弓振り翳して、ステルニイが面を打ち、氣を張ひて鋪板の上に倒れたり。

ステルニイは徐に額を撫でたり。いかなる變に遭ひても度失ふことなく、斷頭臺にのぼりても、猶餘勇を示しつべき、世慣れたる魂は、かゝる事には動ぜずとおぼしく、人々の氣を張ひたる「キオリン」ひきを睨みて出づるを見送りつゝ、今しも逆寄りたる「オルケステル」の長に向ひて、「譫妄狂といふものゝ興りしなるべし。さりながらわれをかゝる目にあはせ玉ひ

しはおん身が無念ならむ。」人々は席に戻りて、試はまたはじまりぬ。「キオリン」ひきをば昇かせて家にやりぬ。ゲザはわれに還りて、箒筭といふ箒筭、手篋といふ手篋を掻きさがしつれど、「地獄」の曲の原稿は一ひらもあらで、作りかけの「オペラ」の斷簡のみ、こゝかしこより出でぬ。

## 第十九回

犯罪街と渾名せらるゝブルワア、エクステリヨールとビュット、モンマルトルとの間に一條の巷あり。世を離れたることは、ラアエスタイン街の如くならねど、貧しきことはかの街より甚しかるべし。ラアエスタイン街には、十字架に懸りたる基督の像ありて、我手だにかく釘づけにせられずば、汝達をこの胸に引き寄せて、煖めてもやるべけれど、かくせられては力なしといはむやうなれど、こゝにはこれだになし。ラアエスタイン街には彩りたる寺の窓より光洩れて、貧苦と罪惡とを照せども、こゝにはこれだになし。古き寺は既に潰れて、新きはいまだ立たず。

ビュット、モンマルトルの假造りの塚にあやしげなる吊鐘あり。職人の仕事場か、さらずば

汽車の驛にあるべき鐘のやうなる唯して、斷末魔とおぼしき加特力教少しばかりを興、醒めたる共和の民の敗宅にひびかせ遣れり。

こゝには古本屋せきあひたり。おぼくは尨犬に守らせたる木つくりの骨董店の、風にゆらぎたるもあり。

このモンマルトルの一區には珍らしき事一つあり。こゝにて賣るものをば、必ず反古に包みたり。畫をかきたるあり。文を書きたるあり。譜を書きたるあり。人の面を吹くものは、波びたる技藝の生活のなごりの塵なり、夢にのみ見つる盛氣様の焚け失せたるのこんの灰なり。數かぎりなき貸部屋には、年若き藝人あまた住めり。こゝは世に何事もえ成すまじきもの共なり。又年老いたる藝人あまたあり。こゝは世に何事もえ成さざりしもの共なり。恥を知らずして猥なる行するものと、憤を吞みこみ、瀧清に苦むものとに打ち繼りて、力めて、疲れ果てたる空想家さまよへり。

ボオドレエが作りし散文小説といふものに、疲れ果てゝ倒れむとしたる三人の、おのおの背の上におそろしきシメエル、女怪の形したる不阿を誂らむとする妄想を負ひたるあり。「シメエルは鋭き爪を人々の肩尖に立て

作譜の力かほどならむとは、われもそのかみは思はざりきと伯もいへり。

「われもしか思はざりき」とロシニが友もつづきぬ。「ステルニイはいかにしてかの曲を作りけむ。そはわが解せぬことなり。されどかの曲の優作することは争はれず。何等の「メロヂイ」ぞ、人を麗し、人の神経に偷み入り、人の血にしみ込まむとするは。まことに彼曲を奏するときは、鬼物ありて聲波の間をさまよふ如し。

某の侯のいはく。「大いなる器は鳴く成り上がるものと聞く。婦人がたの中には、猶ほおぼえ玉ふもあるべし。ステルニイがあるととき『チゴイネル』の童を伴ひ来て、その業を誇り示し、ことあり。あれはいかになりぬらむ。世に神童といひはやされし童の、まことに天晴なるものになりしことは、昔よりなかるべし。」

「童とは紐付きたる衣を着たりし尙僕の子のことにや」と一人の貴婦人いふ。

「否、さにあらず。紐付きたる衣を着たりしとは別なり。わがいふはラアエスティン街より伴ひ來し子の事なり。」侯はかく分疏せしかど、貴婦人の群には、ひとりとしてゲザが事をおもひ出すものなかりき。「そはいかなる童にかありし」と人々問ふに、侯「させるものにはあらね

ど、神童のためしにとて引きつるなり。當座の曲の妙なること、かの童の如きは稀なりき。されど後にはいかに成りゆきけむ。」貴婦人等も聞きて、「げにさることもありけり。かの童のなりゆきこそ知らまほしけれ」といふ。

この問答の間に一座の氣が動きぬ。壇に交れるはステルニイなり。掌を拍ちて迎ふるものあり。進み近づきて手を握るものあり。身を曲げて禮するものあり。

かれは倚譜架に歩み寄りて、俗人の群を見渡しつ。この群にはけふ開けたる人なかりき。この時かれは忽ち色を失ひつ。打拍杖を取りたる手は、力なげに腕に垂れたり。されどかれを崇拜したる貴婦人の目は、光を帯びて彼がかたを仰ぎ見たり。かれは架を敲きつ。寂しくなれる廣間に響き渡るは、冗なる聲多き「惡魔」の曲の初段なり。

聴衆は望を失ひて肩を聳かしつ。ゲザは卑む色を見せて口角を引き下げたり。ゲザは初め俯きたりしが、今はやうう頭を擡げ、後には膽大くなりて、むかしは我本尊ともあがめ、我世界とも頼みステルニイが面に、眼を注ぎて苦笑せり。

暫くして「アルト」調ひの女最初の歌を謳ひ

つ。聴衆は電氣に撲たれたる如く震ひ、魂を喪ひたる如く耳を傾けたり。そが中に誰にも増して耳を欲てたるはゲザなりき。

ゲザが胸にはあやしき感おこりて、身うち悉く震ひぬ。この感は暖なる少年の樂の如く、喜餘りて狂へるこゝろの如くなりき。この感にはむかし彼歌をみづから書き記し、ときの感なりき。我曲を聴く樂は、我曲を偷まれたる怒を抑へて、その起るを妨げたり。ゲザは一たび喪ひたる魂を、人ありて再び得りかへししやうなる心になりぬ。かれは唯だこれを聴きて餘念なかりき。

喝采はいよいよ高くなりぬ。ゲザは夢心地になりて、人と共に「キオリン」を弾いたり。ところどころにステルニイがみづから插みたる冗なる聲あるに違ひて、ゲザはうるさげに肩を曲げたり。

「絶妙の處は今ぞ」と聴衆のうちにさやく聲下。「これは棄てられたる人の對歌とて、不朽の價ある節なり。」

別るゝ人の聲は怨むが如く、訴ふるが如く、これに雜りたる神の童の歌は、やさしく、軟に、忽ち斷え、忽ち續きて、過ぎ去りし歡の夢を喚ひ起さしむ。

なるかとおもはるゝ小兒のもろごゑは、耳に満ちたり。かれはこの時に限なき疲を覺えき。

若かりし程はブルクセルより巴里への旅をば旅ともおもはざりしを、いかなれば今日ばかり疲れけむ。かれが頭はやうやく低れて胸についたり。この假寐の夢にゲザはブルクセルの公園なる眠ぶたげに懸ける木の下を、アンネットに肘をかしてそゝろあるきす。こゝには大いなる水たまりありて赤き罌粟のはな月二つ三つその上に浮び、青き空のいろはこれに映じたり。かれは少女に向ひて、我にはまことの天才あれば、ゆくすゑは大いなる業を成さむとさゝやきぬ。

美しき少女の暖なる身、われに寄り添ふとおぼえて、ゲザはおどろきて醒めぬ。目の前には袖つきたる青き前垂して、白き帽子を被りたる小娘ありて、冷き指を假寐したる人の手に觸れ、「闇は早や鎖さるゝに、醒め玉はずや」といふ。

空には「アンゲルス」の祈誓(の)神の使マリアが許に來ぬといふ祈誓の鐘の聲響きわたれり。ゲザは立ちあがりて、丘を下りぬ。物のくさる濕氣の臭丘のほとりより立ちのぼりて、きれぎれなる霧は次第にモンマルトルの貧苦の境を罩めむとす。

ゲザは部屋に歸りて燈を點じ、身懷ひしつ

つ一間の隅々に眼をくばりつ。こゝの壁をばもと柑子いろの地に青き文をおきたる紙にて張りしものなるが、單調なるよごれ色にぞ今はなりたる。一方には灰いろの「カミン」爐に鐵のおほひしたるありて、その爐板の上には素焼の瓶に鮮し、おなじ家に部屋を借りたる、かの中音うたひの男の話を聞けば、こゝに据ゑたる人形はヲオドリヨイユといふ人の作なり。ヲオドリヨイユはいにしへのミケランジェロにも劣らざるべき彫工なりしが、情なき公衆はこの天才を顧みざりき」と中音うたひ云ひき。「なに、天才ありきとか。とゲザはこの厭ふべき人形を見つて叫びぬ。「かゝるものを造りし男には、よの常の才だになかりけむものを。」ゲザは天才といふ言葉のかくまで濫に用ゐらるゝを歎きぬ。

「さなり、さなり。」と中音うたひ答へき。「世に藝術の妙を知らせむとて、かれは産を傾け、力を費して、「エクチエ、ホオモオ」こゝにこそ其人はあれといふ拉甸語なり、かくいひて、ピラッスが基督を猶太人に引きあはするところを刻みき。されど大理石は價高きものなり。かれは癡症になりて酒に耽り、つひにはかゝるものゝみ作るやうになりき。

ゲザはこの言葉を聞きて身ぶるひしつ。「その人は今いかにかなりし。自殺をや遂げつる。」

中音うたひ、「否、かれは猶世にあれど、その業をば止めて、娘の世話になりたり。薬人の娘いかなるものなるかは、君も知り玉はむ。昔は親子の縁を葺きたりといひて、遂ひ出し、娘なれど、今はその世話になりて、何事をも忘れたる如し。かれはたゞ娘の上をのみ忘れしにあらず、世事をば總て忘れ果てたり。暖き部屋に居りて、をり／＼は「アブサント」酒一杯飲み、球突の戯するを、かれはこよなき樂とせり。その宿は「オテル、ド、ナンシイ」とてこの街の隅なり。往いて見むとおもひ玉は明日伴ひまゐらせむ。若き薬人其はをり／＼かれに馳走して、可笑しき藝術論を聞くことあり。」

ゲザが部屋に歸りて先づおもひ出でたるは、「オテル、ド、ナンシイ」に住めりといふミケランジェロが事なり。ゲザは爐板の上なる人形をしばし打ち眺めてありしが、猶熱く見むのをと、その一つを取りおろして、ほの暗きラムプにさし付けたり。塑像を顧る眼をも、ゲザ流石に具へたれば、このあやしき人形にも、こゝかしこに名匠の手の牙残りたるを見出しつ。ゲザは覺えず聲を放ちて泣きぬ。持ちたる手



て、その肉を掻き破らむとしたり。このモンマルトルの区内に住める藝人もおの／＼その「シメエル」を負ひたり。その疲極まりて倒れむとしつゝも荷ほ倒れざるは、未だ重荷を卸さざればなり。その「シメエル」の消ゆるときは、即ちこれを負ひたる藝人の臨終の期日なり。この區のうちに、材能なきに材能ありとおもへる藝人群をなしたり。されどこの痴なる人の間には、をり／＼まことの名人の老いて世に棄てられたるあり。かゝる人は最早影だになくなりたるむかしの譽を、取り返さばやとおもひまどひて、唯だ埃の上にのみ名を署するなり。

こゝの人は皆夢の中に日を送ひて、魂はつねに本通りのかたに飛べり。かしこは僥倖の街なればなり。その息を屏め、耳を欲てゝ來ぬものを待つ心は、博奕する人の徒なる望に智を減ぼし、髓を枯らすにや似たらむかし。

とある朝モンマルトル區なるステンケルク街といふところの最も卑しき貨部屋に還る人ありき。こは藝人のカリフォルニアと聞えたる巴里に迷ひ來ぬるゲザ、ファン、ザイレンなりき。かれはラアエスイタン街を住み憂くおもひて佛蘭西には還りしなるべし。

汽車の中にて邂逅ひし中言うたひの男、この

貨部屋をばかれに教へき。こゝはいと靜なるところにて、勉強して業を成すには究竟なりといへば、ゲザは喜びてその教に従ひぬ。ゲザは今もなほ業をなして名を成さむとおもへるなり。

むかし或る貴族のおくりし上等の「キオリン」ありしを賣り拂ひて、かれは千フランの金を懐にしたり。かの「キオリン」を千フランに賣らむは、ほと／＼途に投げ棄つるにおなじと思ひき。されど此巴里行は身を立つる基とおもへば、樂器一つは物かは、おのが脈のうちを流るゝ血を賣らむも容易かるべし。

遙からずして我新作を出さむをりは、喝采の聲雷の如くならむ。その時にはステルニイもわが前に俯して、頭をばえ舉げざるべし。悲憤の念は胸に通りて、握り詰めたる指の爪は手背にも通るべき程なれど、ゲザは自ら抑へて、その氣色なか／＼に落着いて見たり。ステルニイが戴ける冠は原と足れ贗品なれば、まことの主なる我、いまより勉めてまた此の如き著作を出さば、かの冠をかれが頭上より拉き落さむこと、なんでふ事のあるべき。

いさゝかななる才を懷けるものにも、一生涯にひと度は凱歌をうたふ時あるものなり。いはむや我はよの常の才にあらず、我には天才あるものを。

のを。

巴里に還りてのはじめの日には、ゲザは心地すが／＼しうおぼえぬ。中言うたひの男はゲザを促し立てゝ、まことの本通りをせざる歩せむといふ。まことの本通りとは、新オペラとマドレヌとの間をいへるなり。ゲザは大都人のごみのところを五月蝋しとおもひてこれを辭み、中言うたひが都に來たる田舎人の習として、忙はしげに巴里の真中さして行くを見送りつゝ、おのれは獨ビニット、モンマルトルのかたに足を運びつ。

とみれば草木疎なる小公園を、丘の上に開けるありて、あやしげなる木づくりの梯をかけた。

ジャン、ゼリゼエ、バルク、モンソオ扨にて遊ぶ華奢なる子供とは殊にて、身は瘦せ、顔は垢つき、破れたる衣を着たる小兒あまた、朱の如く赤き砂道の上につどひたり。園のあなたは、荒蕪にて、石灰の塵を帯びたる草ところ／＼に生えたるが、向ひの破屋の檐下まで續きたり。巴里はこゝより幾里かあらむと疑はる。

ゲザは園の中に据ゑたる木の長椅子に腰懸けたり。ゆくすゑは職工になりて人を罵る聲なるか、さらずば卑しき女になりて妄りに笑ふ聲

の沙汰ありといひ、その座をば俗人ばらの亂行  
場にて、今にも滅ぶべきものなりといひ、人に向  
ひておのれがその群に入らざりしを物怪の幸  
なりと誇りぬ。モンマルトル區のうなる頭  
茶屋に飾はれて、衣食に不自由なきほどの給料  
を受けるやうになりしは、この頃の事なり。

ゲザはこの男に著作中の「オペラ」の一節を聞  
かせよと所望せらるゝこと頻なれど、はじめは  
辭みて應ぜざりき。されどこの男の氣色にも、  
わが作譜の業をなすといふを、眞偽いかにとあ  
やぶむさま見ゆることの心苦しければ、今は我  
より求めて聞せむとするに至りぬ。形ばかりな  
る古き「ピアノ」に向ひて、時を吝まず弾いて聞  
かせ、をりくはしは噎れて空洞なる聲張りあ  
げて、「アライ」を歌ひぬ。今は「そは面白から  
む」といふ人の誰なるを問はぬやうになりしな  
り。弾き果てゝゲザは興なき興に乗じ、眼  
をひからせ、もろ手打ち振て、「いかに、規模の  
おほいなるを見玉へ」と誇顔にいふさま、むか  
しの謙遜には似ずなりぬ。

ある日ゲザ中音うたひの男の部屋をおとつれ  
て、共に「カミン」煙の前に坐し、さま／＼の物  
語せし折、かの男指もて絨れたる髪を掻き上げ  
ながら、「おん身が天才もおん身を養ふには足  
らじとおぼゆ」といひき。

ゲザは眉を蹙めて敵手の面を見つめたり。  
かの男はやさしく、「あしくな聞き玉ひそ。お  
ん身が「オペラ」ほどの大作の興行せらるゝまで  
には、猶歳月の立つべきを、かくて居玉はむは、  
あまりに謀なきに似たるべし。それ迄の繋とお  
もひてさるべき糊口の業をもし下はずや。」

ゲザはといきつきて、「短き譜を作らばいか  
に。『ロオマンヌ』のやうなるものを。」

中音うたひ「それは錢にならざるべし。『ロオマ  
ンヌ』など作るものは、これを歌はすべき歌女、  
をんな役者などと相結びて、その歌を流行らす  
るなり、おん身縱令かゝる因縁を求め得玉ひて  
も、かゝるものを作らむとて、切角の力を碎き  
玉はむは益なかるべし。それよりは俗人の群に  
入りて、『キオリン』彈き玉はむかた、なか／＼  
に優りたらむ。」

「さなり、座に出でむは一つの手段なるべし。」  
と答へしゲザはひそかに我指の闊くなりたるを  
思ひて、身も震ふほどなれど、この恥を人に言

ふべきならねば、「それもよけれど、座の勤は  
あまりに五月蝋かるべし。度々の試を奈何せ  
む。をりくは夜に入ることあらむ。」といひ  
まぎらはしつ。

中音うたひ、「否、さる煩はしき業は御身には  
出来ざるべし。それは著作のためにいみじき妨  
ならむ。わが心當りはさるむづかしき位置には  
あらず。試などいふことはなき處なり。」

ゲザは「そはいかなる處にか」と微なる聲し  
て問ひぬ。

中音うたひ、「われこのごろ「オテル、ド、ナン  
シイ」にて、ある曲馬師の群なる茶利役とちか  
づきになりぬ。性の善き男なりき。興行の場所  
はブルワア、ロシニシエアルなりとぞ。最  
上等の曲馬にはあらねど、體裁わるき處には  
あらず。おん身が上をかの茶利役に習しこゝろ  
みしに、丁度「キオリン」ひき一人聞けたりとい  
へば。」

中音うたひが言葉はいまだ畢らぬに、ゲザは  
跳り上りて、無禮なる友の部屋をのがれ出でぬ。  
ゲザはこれより後はかの男に物いふことなか  
りき。

ゲザが力は次第に衰へゆきぬ。脈の中をば、  
冷えかゝりたる鉛の如き血、濃みながら流る。

のいたく震ひければ、人形は床の上にはたと墮ちて、そのまゝ微塵になりぬ。されど部屋の貸主は、直打あるものとおもはねば、償を求めむともせざりき。

ゲザは酒を絶ちしに、胸は緊めらるゝやうにて、目の前には紅の雲の國をなしてまろがりゆくあり。おそろしき疫に、身は痺えたる如くなりき。されど彼は復た飲まむともせず、作譜にとりかゝりぬ。初の程は例の「オペラ」の局を結ぶも遠からじとおもはれぬ。隔く間に書き終りたる譜の紙、身のほとりに堆をなせり。勢づきて唯だ書きに書く程に、忽ち空想の絲絶えしかど、ゲザは深くも意に介せざりき。かく製作の力弛むことは、壯なる時にもありければなり。また興の動かむをりまでは、しばらく鑑を寄へて、今まで書いたるを刪潤せばやとおもひて、こゝろみに翻し見るに、こはいかに、我ながら通曉しがたきまで妄なる節おほく、ところどころには拍子の全く脱ちたるあり、地は皆きれふなりき。中にはめざましく美しきところあれど、そはいと稀なれば、唯だ是れ灰燼のうちに残りたる立派なる斷礎にぞ似たりける。心にかゝるはこれのみならず。樂譜に用ゐる符標のうちに忘れたるもの少からず。これをおも

ひ出さむとて、夜を通して藏書の中なる作譜譜を閲し、あくる朝また始より書き改めなどすることありき。

遺作もなき一小段をも書損なきやうに仕上げるは、堪へがたきまで難儀になりぬ。心を專にし、思を凝すやうなことは、最早及ばずなりぬと覺し。されどゲザは骨をば惜まざりき。唯だ堪へ忍びてなさば、いつかは出来上がる期あらむと、みづから志を勵ますものから、生憎に紙の上にたばしるものは涙なり。ゲザは業の成らぬうちに、錢の盡きむことを恐れければ、節儉すること甚しく、今は柑子いろの部屋より屋根裏に引き遷りぬ。食事も日に一たびとしたり。髪は白くなりぬ。物いはむとすれば口咽り、もの書かむとすれば手慄ふ。夕暮に清き空氣を吸はむとビュツト、モンマルトルにゆくが習となりたれば、かしこに遊ぶ小兒は皆この翁の面を見識るやうになりぬ。ゲザが木の長椅子に坐して、手に鉛筆を持ち、膝の上に手帳をおき、空を眺みて何事やらむつばやくとき、小兒等は近く寄り来て、やさしく挨拶す。嬉しければ愛らしき片頬を撫で、時によりて一人を抱きて膝の上に載するに、おそ

るゝ色もなし。昔がたりなどして聞かせば、さぞ喜ばむとおもへど、言葉出でず。

ある日ゲザは、オサンを抱いて來ぬ。子供心に協ふやうにし勉めて、短き踊の曲を奏づるに、酒を絶ちてより指儀に剛くなりて、手に持たたるりさへ震ふを、尊きものゝ手前も恥づかしとおもひぬ。されど子供のために、この曲もおもしろきにや、さま／＼の戲したりしを、皆打ち描きて、聴きに來ぬ。中には手を背後に組みて、頭を少し仰向け、心を飽めて聞くもありき。さらぬは興に乗じて、相抱きて舞ひ狂へり。

さて子供のために、當座の曲を奏でむとするほどに、指頭より流り出づる聲の、何とやらむ耳惜れたるに心づきて、おもひ廻せばこれはこれ、三十年の昔「サブロン」なる曲馬小屋にてつねに弾きし節なりき。

ゲザはこれのみを樂にして、日ごとに「オサン」を抱きてきたなき公園にゆきぬ。あはれる子供の喝采もいまはかれが消を際すやうになりぬるなり。

中音うたひの男との交はゆる／＼深なりぬ。この男はオペラ座にゆきて試験を受けつるに、採用せられざりしかば、その試験には依怙



早きれゝゝにならむとす。あすは新しきをもて  
來べし。落着きたらば、少し食べよ。力づくや  
うに。」かく言ひて、手づから暖めたる汁を飲  
ませつ。

ゲザは物をもいはず、言ふが儘になりたり。  
汁もいつになく旨かりき。日ごろの苦痛、日ご  
ろの恥辱をば、かくやさしく款待さるゝことの  
嬉しさに乍ち忘れて、眠ぶたきまでに心おち居  
ぬ。ゲザは言葉はあらで、母の手に接吻しつ。  
母の目には喜の色見えたり。「曲馬所の帳  
場をば六時に開けば、今は往かでは協はず、八  
時頃にはまた來べし。それまで眠りて心をやす  
めよ。」

言畢りてゲザが額に接吻して出でゆきぬ。  
ゲザは眠りぬ。夢にはむかしの事浮びぬ。浮  
びしは歿りし結髪(むすかみ)の妻(つま)の事にもあらず、我を  
欺(あそ)きし友(とも)の事にもあらず。浮びしは苦痛なき記  
念なり。

ゲザは夢にラアエスタイン街にかへりぬ。人  
を酔はさむとする花の香は身を繞れり。目の前  
には色めだたき壘(たい)の花束あり。枯れたる花び  
らは大理石の板の上に墮ちて、かすかに聲をな  
せり。

ゲザが心鹿は跳りて、いふにいはれぬ苦痛ま

た起りぬ。今これにて心満ち足らば、我身は底  
なき淵に沈み果てむ。

ゲザは起き上りぬ。逃げ去るべきか。自殺す  
べきか。かれは脱ぎ棄てたる上衣を取りあげし  
が、上衣はあへなくも手より落ちて、身はまた  
臥床の上に仆れぬ。かれが魂は碎けて、慷慨  
にも苦痛にも堪へずなりぬ。四壁のみ立てる屋  
根裏の間を、この時あやしき神ありて飛び過  
ぎぬ。こは絶望の神なりき。この神の手には一  
束の罌粟の花を取りたりき。

日は月と立ち、月は年と立ちぬ。その日暮し  
の藝人多きパウルワア、ロシエアアルとクレ  
リシイとの間に、しばし見らるゝ男あり。  
才高く、翁進びて、風に亂るゝ白髪は頬のあた  
りを打てり。これゲザ、フアン、サイレンがな  
れる果なり。

顔はまだ美しけれど、心を喪ひたるやうに  
鈍く見ゆ。折々立ち留まりて頭を延べ、手を耳  
の後にあつるは、遠方の物の音を聞かむとする  
如し。しばしありて頭を掉り、大息つきて又歩  
きはじむ。

かれは母の許に住めり。母も、繼父も、弟妹  
も、むかし名譽ありし人なりとて敬ひかしづけ  
り。

淨き衣を着せられ、旨き食にて養はれ、何  
につけても善く扱はるれば、今は不幸の身なり  
とも思はず。待たるゝものは食事のみ、又一杯  
の「グログ」のみ。

かれは心やさしく、言葉寡く、人には親切  
にて、母に頼まれたる用をば嚴重に行へり。  
常には「カミン」煙の前なる腕木ある大椅子に倚  
りて、睡れる如く、醒めたる如し。

をりゝは心の狂ひたるやうなることあり。  
譜を書くべき紙に、忙はしげに何やら書きて、  
その反古身のほとりに堆をなせり。かゝる時は  
人々につくろふあたり、倨傲の色見えて、故なき  
に怒り罵り、わが行末の業を見よといへり。さ  
れど人々は意に介することなし。

かゝる疾の作ること漸く稀になり、又おこ  
りてもその間短うなりぬ。

モンマルトルの「ラテエ」とてかれを知らぬ人  
なし。畫工はその横顔を戲畫に作り、路なる童  
はその通るを見るごとに、肘にて知らせあひて、  
痛なる翁のえらがをかしとて笑へり。

日の前にはいつも摩舞へり。耳には蝴蝶の寝れ  
て羽打つ如き音聞ゆ。食粗なれば羞足らず、  
つひには聲に就くやうになりぬ。

人善きゲザなれば、おなじ家に仕めるもの一  
人として氣の毒がらぬはなし。部屋は貸主さへ  
酷くは扱ひ得ず。食をおくりて食はするもの  
あり。臥床を整へて寐するものあり。新聞紙  
もて来て貸すものあり。ゲザはかゝる恵を受く  
るごとに、恥づかしげに微笑み、遠方にのみ注  
ぎたる目にて禮を陳べ、人去れば半睡半醒の境  
に入れり。

ある日の午過ぎの事なりき。夢とも現ともわ  
かぬ間に、軟なる手にて我額を撫づるものあ  
りと覺えて目を開きつ。臥床に居寄りて、項を  
屈め、我額を覗き込みたるは、老いても猶美し  
き女なりき。白くはなりぬれど、まだ豊なる  
髪は、やさしく老いたる面を圍みたり。嬢は  
口籠りながら「ゲザよ」と呼びぬ。その聲は遙な  
るところより聞ゆる如くなりき。

ゲザはおもひ掛けねばおどろきぬ。かく呼び  
し聲は我母の聲なりき。我臥床に居寄りて立て  
るは、相見ること二十五年なる我母なりき。

ゲザが母はフェルナンドオといふ輕業師の妻  
になりてより久うなりぬ。中言うたひの男が話

し、ブルワア、ロシユシアアルの曲馬場  
の主はフェルナンドオ夫婦なるが、この頃は仕  
合せよく世を安う渡れり。ゲザが母は土氣にこ  
そありつれ、もとより惡しき人にはあらざりき。

棄てて、出でし後も、しばし我子はいかになり  
しかと心に掛けて、人して捜らせしに養親に  
厚くもてなされて、上等社會の人に交れりと  
聞えたれば、心や、落居るものから、上等社  
會の人に交れりといふに膽を奪はれて、近づ  
かむともせで止みぬ。されど遠くよりはゲザが  
姿を見て、心を慰むること屢なりき。とか  
くする程にゲザが名世の中に聞えずなりぬ。さ  
るにこの頃相識りし中言うたひのアウグスチ  
イが汽車にて道づれになりて、おなじ家に住めり  
といふ珍らしき友の事を語るをしばし聞きし  
が、その名をばきのふ始めて知りぬ。

マルガレタはこの顛末を涙ながらに物語り  
て、その間汚れたる枕を握る直し、食おほひ  
の巾の皺になりたるを伸ばしなす。ゲザはた  
だするが儘になりて、をり／＼は口の内にて禮  
をいひなどすれど、あまりに意外なる再會な  
れば、何事とも思ひ分かず。

母はゲザが應ぜぬに氣おくれして、聲をかす  
めて語りつぎていふやう。「おん身が『キオリン』

ひきしを聞きしことあり。幾年前の事なりけ  
む。ところはニツツアなりき。わが子とおもへ  
ば、面目あることにおもひぬ。その時おん身の  
作りし譜を買ひ、今猶持てり。巻の首にはおん  
身が像ありき。美しき姿なりき。」

ゲザはこゝまで聞きて、顔を含の中に埋め、  
死に瀕みたる人の如く息たえ／＼なりき。この  
苦痛を見て、母は今までの遠慮を忘れ、「あはれ  
なる子よと耳語きつゝ、ゲザが白うなりたる髪  
を撫りつゝ、むかし軟き緑髪をさすりしやうに。  
母、あまりに思ひな屈しそ。おん身に天才あり  
といふこと、おん身に世の人のつらかりしこと  
をば、われ皆知れり。これよりは看病怠なく、  
おん身が本復の日を待たむ。體だに健になら  
ば、また何事が成らざらむ。わが家に引き移れ  
かし。誰も邪魔はせじ。唯だ邪魔にならぬやう  
に世話してやらむ。人の來ぬやうなる小き部屋  
もあり。そこにて心任せに仕事せよ。」  
ゲザは徐に面を挙げしが、劇しき暖に瘦せ  
窪みたる胸はゆすられたり。母はゲザが骨立し  
たる肩の下に手をやりて、少し擁へ上げ、疲れ  
果てたる頭を我胸に寄せかけて、呼吸のたやす  
く出来るやうにしつ。さて涙聲になりて、「い  
たらも瘦せたることよ。この汗衫はいかに。最

次第につよく 船ぐに

ふところろづき おぼぞらを  
ふりさけみれば、こはいかに。

水とそらとの さかひより  
車輪のごとき ぐろくもの

まろがりいでて、たちまちに

そのななかばを おぼはんとす。

うねりの波の おともせで

ちかづきよすと おもふまに、

風たち海わき 雨そそぎ

いかづちさへに なりいでぬ。

この時のれる わがふねは

風にもまるる 木葉に似て、

みなそこ深く かづき入り、

なみの上たかく のせられつ。

櫓をおすわれは いきしにの

さかひは今と ならひえし

おす手ひく手の 陰陽

てだてをつくすと 見るほどに

女ノ童らの うたふこゑ

みにひびきて 目さめたり。

乙姫。  
そはおそろしき おんゆめを

おん身はごらん なされしよな。

くがに歌と たたかふも、

うみに波濤と あらそふも、

そは人間の 命ならん。

あめかぜしらぬ このくににて

わらはとともに くらすをば

おん身はうれしと おぼさぬか。

太郎。

いやとよ。思はぬ 夢といへど、

まことは日ごろ わがむねに

つつめることの いつしかに

こりてゆめとや なりぬらん。

渦して水を おもふごと

このとし月の 平和に倦み

いまは 事業の したはしく

なりぬるものか、おぼつかな。

乙姫。

さらばわらはが 恩愛の

なさけをあだに したまひても。

太郎。

おう。かくいはば つれなしとも

なさけなしとも おぼさんが、

さいつころより なにゆゑか

をりをりころ たのしまず、  
事もなきに 氣をいらち、

女ノ童らを しかりもし、

はてはやさしき おん身にさへ

つらきことばを きかせしを

さぞあやしまれし ことならん。

わが身ながらも けふまでは

そのゆゑさだか ならざりしに、

いまのゆめにて さとりえたり。

ここのみやゐの しづけさは

えだをならさん 風だになく、

ひでりもせねば あめもふらず、

いとめでたしとは おもへども、

たえまなく吹く 湯津柱の

はなのかをりに 息つきて、

返てずぬるまぬ ゐのみづに

ひびにのんどを うるぼさんは、

たひらかなるにも やすきにも

ほどもこそあれ。わがむねの

さばかり悶え もだえしは

この平和にこそ よりつらめ。

さきに風波を ゆめみしとき、

身うち 血汐 沸き返り

氣も晴晴と なるほどに、

ひごろのうたがひ やぶれしぞ。  
色も香もある おことを棄て、



玉篋 兩浦 嶋

上ノ巻

上手高三重に朱欄干。御簾を垂る。中央より少し下手に寄せ井筒。桔槔。その上に桂の木。

第一節

赤女。十五六歳の女ノ童。赤鯛の冠。  
口女。十歳許の女ノ童。樂器を持つ。鯛の冠。  
女ノ童大勢。赤女と同じ年頃なるをば赤女率ゐる。口女と同じ年頃なるをば口女率ゐる。皆魚の冠。後の者は種種の樂器を持つ。

赤女等の群。(共に歌ふ。口女等の群樂器を弄ぶ。)

「きずなき玉と すみわたる  
みづのふかさは いくちひる。

いろなきものも かきなれば、  
あをあをとして そこ見えず。」

「人は知らねど そのそのの  
雄 塚 ととのほり  
照りかがやける たかどのに  
くしきをとめぞ 住みたまふ。」

(歌ひつつ入る。樂の群も共に入る。御簾を卷く。)

第二節

下手に唐櫃。錦の覆ひあり。鏡臺、櫛篋。  
浦島太郎。凡に倚りて假寐す。  
乙姫。  
口女。

乙姫。

おん目のさめて 候か。

太郎。

おもひもかけぬ 夢なりしよ。

乙姫。

みけしきすぐれず 見えたまふは、  
肉きゆめにも 見たまひしか。

太郎。

よろこびありて なけなき  
このみやるに 年を経て  
ひさしくわすれし 上國の  
くるしきさまを まのあたり。

乙姫。

さてはあの人間の 世のさまを。  
太郎。

いかにもわれは 世にありし  
むかしのごとく ただひとり  
かがみにまがふ うなばらに  
小ぶねをうけて こぎいでたり。  
鉤をおろせば 釣絲の  
わづかにゆらぐ そよかぜに  
おもてをふかせ こちよく  
ときうつるを 知らずして、  
ただ釣るほどに つるほどに、  
松魚に鯛に かずしれぬ  
獲ものにこころを うばはれて、  
かへらんことを わすれぬたり。  
かかるをしも わが舟の

(衣を大に着す。赤女盥を持ちて下手より出づ。井を汲む。銀の八角の釣瓶より水を盥にうつす。口女八稜鏡を掛けたる臺を出す。赤女二重に上り盥を避む。)

赤女。

いつにない

このお支度は。

乙姫。

兄のきみは

人間の世へ かへらんとて

このおん支度。

赤女。(驚く。)

さてもわるい

おぼしたちに

あの人間と いふものは

はがねをきたひて 鉤となし、

いとをむすんで あみとなし、

うをといふうをを とりこにし、

あまつさへその かばねをば

あるは胎に きりくだき

あるはかまいり ひあぶりの

むごいしおきに あはすとやら。

わらはも口女も これからは

小海老や蟹を あひてにして  
いたづらごとは せぬゆゑに、  
おもひとどまり たまはれかし。

(此中乙姫髪を撫で付く。)

太郎。(立つ。)

洞天仙境の ゆめさめて、

またひとのよへ。さらばさらば。

(二重を下る。)

乙姫。(赤女口女と續きて下る。)

いまがわかれか。

太郎。(釣瓶竿に目を付く。)

このさをを

とどめおかんは おことのため

やくなきうれへの たねならん。

もとのうらわに たちかへる

身のまもりにも なりぬべし。

あれをはづして

乙姫。

とらせよとか。

きみとはじめて あひみしとき

手にとりましし あのさは

のちのちまでの おもひでにと

このゐにかけしを はづせとか。

さ、あれをはずしてよ。

赤女。

はいはい。

(口女と釣瓶を上げ置き竿を手繰り下し横木よりはづす。竿赤女の手に残る。太郎乙姫井の側に寄る。乙姫井筒に手を掛け夫を仰ぎ見る。)

乙姫。

いまさらいふも おろかなれど、

ここにきましし はじめのころ

あかぬあそびの てずきみに

あのかつらのきの えだを折り

髪にかざして もろともに

このゐにうつす みづかがみ

たがひにかけを 見くらべて

をみかはししも きのふのやう。

ゐはかれねども なさけの泉

いつか涸れたる。 かなしさよ。

太郎。

いざ、その竿を。

乙姫。

あ、これをし。

ちとせかはらぬ ちぎりぞと

いひしはむかし、 いまはただ

しばしのわかれを をしませて。(太郎留る。)

このみやゐを たちさらんは、  
ころぐるしき かぎりなれど、

おことは自然、われは人、

おことは物の おのづから

成るをよろこび、われはまた

ことさらに事を 爲さんとすれば、

ふたりのころは、合ひがたし。

乙姫。

ええ。(胸を押ふ。)げにわらはは つみふか

くも

異類のおんみを などしたひし。

ひとたびこを さりたまはば、

またあふことも あるまじと

おもへば、かなしき このわかれ。

(太郎に縋り泣く。涙まことの玉となり

て、はらはらと落つ。)

太郎。(振り離して 後向になり口を押ふ。)

われもおぼゆる この咎。

乙姫。(俯して玉を見る。)

これが涙と いふものか。

(口女唐櫃の上より 錦の覆ひを取り、ゐ

ざりより玉を包む。)

太郎。

よしなきちぎりに 鯨人の

なみだをここに みるあはれき。

とは云へ男兒の ころざし、

おもひたちては すてられず。

すなどりしたりし そのむかし

わが着しきぬを いだされよ。

乙姫。

はあい。(口女に。)口女よ。ここに來よ、

そなたはいにしへ 釣鉤に

のんどをきずつけ 瘡となりし

便なき身ながら さかしとて、

赤女とふたり 身ぢかく召し

つかふもひさしき ほどのこと。

赤女をばあね そなたをいもとと

わが子のやうに おもふぞや。

そなたもききしか、兄のきみは

われらをすてて、おそろしき

人間の世に ゆきたまへば、

のころわらはは けふよりは

たれとともにか ものいはん。

そなたとおなじ くちなしの

色なく彩なく くらすべし。

あのからびつの みけしをこれへ。

(口女唐櫃より衣を出す。)

太郎。(衣を解く。)

われもおことと さざめごとの

かたれどつきぬ それならで、

いまよりのちは 口舌を

事業のあたと おもひつつ

おなじく口を つぐむべし。

乙姫。(衣を受け取り 夫の後に立つ。)

みぐしのみだれて 候へげ、

いでなでつけて まゐらせん。

赤女はぬぬか。

### 第三節

前の人人。

赤女。

赤女。(出づ。)

召したまふは。

乙姫。

みぐしだらひを。

赤女。

はいはい。 (入る。)

乙姫。

吾兄のみぐしに さはらんも

けふがなごりに ならんかと

おもへばかなしや。



おんとほつおやに ましましし  
うらしまぬしの ひとりにて  
うせたまひける むかしのごと、  
海界とほく 鯉釣

鯛釣りほこり ひをかさね

ゆくへもしれず なりぬるか  
いふのみにして、 ことなるまで  
世のうたがひは かかるまじ。

第二ノ漁師。(花道より出づ。)

ただいま贅肉の 道筋に

あやしきをとこ ちかづくを

ささへとどめて 候へども、

わがいへざとに わがかへるを

邪魔ばしすなと ききいれず、

つかつかこれへ まゐり 候。

あれあれかしこに。

(後ノ太郎始め一同花道に向く。)

狭五郎。

なんと申す。

## 第五節

前の人人。

太郎。

(第三ノ漁師前に立ち弓にて支へつつ後  
すざりに出づ。太郎左に包をかかへ右  
に釣竿を持ち、静かに歩み出づ。後より  
第四ノ漁師太刀を抜き出づ。睨み合ひて  
花道に留る。)

第三ノ漁師。

おしてとほらん ものあらば、

いのちをたてと きみのおほせ、

第四ノ漁師。

あやしきものと 存ずるゆゑ、

第三ノ漁師。

いんとすれども 矢もたたず、

第四ノ漁師。

きらんとすれど きずつかず、

第三ノ漁師。

これまでおして まゐり 候。

狭五郎。(立ち向ふ。)

しや推参なり なにもものぞ。(たじたじとな  
る。)

後ノ太郎。(立ち向ふ。)

奇怪のくせもの ごさんなれ。

そもそものなんぢが よそほひは

われらとともに いさなどり

海のならひはひ するものと  
見えはみゆれど、 おぼろなる  
よにもかがやく にしきのつつみ  
たばさみたるだに あやしきに、  
いれどいられず きれどきれぬ  
ふしぎを見せて ちかづくは、  
めでたきわれらの かしまだちの  
さまたげせんと するにやあらん。  
てなみをみせん。 そのけ。

太郎。 おう。

むかしにかはらず いさましき

ふるさとびとの ころかな。

そらにきらめく いなづまの

赫たるいかり、 おい木に風

いはほに波の あらそひは、

いくももとせの ひさしきま

わすれのたれど、 いまこそは

われもさめたれ。 わがさとに

わがゆくみちの さまたげすな。

後ノ太郎。

なにわが里とは ことをかしや。

この筒川の むらびとの

みしらぬなんぢ そのかかずや。

おう。おもひよりたる ことこそあれ。

この不老のゐに いくちとせ

うきしづみせし この鏡の（釣瓶を取る）

獲せば返らぬ みづにかへ、（水を傾く、口

女に）――

あの派の玉と 鏡をこれへ、（口女二重に

上り二品を取り渡す）――

なみだとともに （珠を釣瓶に入る）

心をこめ（息を嘘き込む）

しつらひなせる たましくしげ、（鏡に蓋を掩

ふ）

これをわが兄に まゐらせん。（錦に包む。

夫の方へ向く。）

またあふことの あらんまで

このはこをゆめ あけたまふな。

せめては可憐 小汀まで

きみを見おくり まゐらせてん。

口女はくしげを（画を渡す） 赤女はあの

おん釣竿を 持て。

赤女。

はい。

乙姫立つ。赤女口女それぞれ物を持ち

後に続く。太郎下手へ往きかかる。道具

暮。）

## 下ノ巻

曉近き臙夜。中央より上手へ海の書割。

沖合に丹塗の大舟數艘。隊 幢小幡を

立つ。上手のはづれに龜甲の紋付の幕。

下手奥松林。熊手四五本松に寄せ掛けあ

り。松林の下手はづれに端舟見ゆ。燎

籠に篝火。

## 第四節

後ノ浦島太郎。上ノ巻の太郎と同年位。色

黒く逞しき土。牀凡。

鰯ノ狭五郎。五十歳位の郎黨。

漁師大勢。太刀弓箭。

後ノ太郎。

舟よそほひは ととのへりとな。

もはやほどなく のぼる日と

ともに扶桑の 地を離れ、

武運もひらく あさびらき、

名を千載に かがやかさん。

狭五郎。

ちちのみことも おん身のごと

國をさまれば すなどりし

あたおこる日は たちはきて、

田村將軍の はたしたに

えぞが千島の はてまでも

武名を馳せさせ たまひしが、

それはまだせまき 國內のこと。

こたびのきみの くはだては

とほき化外の 地にわたari

一ヶ國をも 切りしたがへ

ちちのみことの みいさをにも

まさるいさをを たてんため。

さればおいたる 身ながらも

この餘川の むらびとと

なりはてんかと なげきしに、

いきがひありて このたびの

おんともになつ うれしきよ。

第一ノ漁師。（花道より出づ。狭五郎に。）

磐固の地には ただいままで

なにの異變も 候はず。

狭五郎。（頷く。後ノ太郎に。）

磐固のものは おきたれど、

ふなでの邪魔に なるべきこと

もはやあらじと おもはれ候。

われらのゆきて かへらぬにも、

たまをば(地を指す)。舟に つみゆきて、  
秋毫をだに おかさざる

いくさのたすけに せらるべし。

後ノ太郎。

げに糧こそは ころして

たくはへたれど 金銀の

ことにはうとき わがともがら

そのそなへをば かきたるに、

れがうてもなき さいはひなり。

ものども、たまを はきよせて

狭五郎。

ふねに舁きゆけ。

皆皆。

はッははあ。

第一ノ漁師。

さいはひなるかな。まつばかく(熊手を取る)

第二ノ漁師。

さとのわらはの すておきし

第三ノ漁師。

げにもくまでの

第四ノ漁師。

ありけるよ。

(皆皆熊手を取る。その他の漁師 幕をは  
づして玉を受く。幕を取れば向うに日の

出。松林より 鶉啼き立つ。)

後ノ太郎。

はや日の出。いで うちたたん。(立つ。)

太郎。

事業をわかき わがすゑに

つたへおこなふ ことをうる、

これもひとつの 不老不死。

われはこれより やまふかく

かたちをかくし、ひとのよの

なりゆくさまを 目守りてん。

さらばひとびと。

後ノ太郎。

さらばさらば。

相圖の角を 吹かしめよ。

(端舟の方へ歩み寄る。狭五郎旗を振る。

舞臺裏にて角を吹く。太郎杖に倚り見送  
る。幕。)

### 玉簪兩浦嶼自註

玉簪兩浦嶼。

兩浦嶼の上に玉簪と置きたるは、はたらき  
なきに似たれど、俗に云ふ玉手箱なりと思は

ば、故なく冠辭を据ゑたるには優れりとも  
いふべし。

井筒。桔槔。桂の木。

日本紀神代の卷、彦火火出見尊の海神の宮

にゆき給ひし條に、門の前に井あり、井の上

に湯津柱 樹ありと云へるに本づく。同じ書

の雄略紀に、浦島子のゆきしは蓬萊山なれ

ば、海神の宮にはあらず。されど蓬萊山の景

物は、一つだに記されず。釋日本紀に引ける

丹後國風土記にも、たゞ蓬山とあるのみなり。

こゝには俗説に浦島太郎龍宮にゆきぬと云ふ

を取りて、神代の卷の海神の宮の景物を用ゐ

たり。

赤女。赤鯛の冠。口女。鯛の冠。

日本紀の本文には、赤女鯛を飲みて、口疾あ

りし由云へり。されど異本には、鯛を飲みし

は赤女ならで、口女なりと云へり。赤女は鯛

なり。口女は鯛なり。なよしとは今ふいいな

なるべし。こゝには口女鯛を飲みてより瘡に

なりぬとしたり。女童大勢は風土記に、隣里

幼女等、紅顔戲接。仙歌寥亮、神舞逶迤と

あるを取れり。

雉 噪ととのほり。 てりかいやける



いざ。

太郎。

いざ。

後ノ太郎。

いざ。(詰め寄る。二人緋れ竿半ばより折る。)

あやしきは

にしきのつゝみ。しさいあらん。

(手を掛く。引き合ふ。錦ほぐる。匣と鏡と離れ落つ。匣より無量の眞珠こぼれ散り、その邊球を布きたる如くなる。)

白雲棚引き出づ。太郎よろよろと後に倒る。此間波の音聞ゆ。後ノ太郎後へさがり白雲を見上ぐ。太郎竿のをを杖にし立つ。白髪になり居る。)

皆皆。

やややややや。

後ノ太郎。(老人と見て敬ふ。心持。)

つかのまに

かはりしさまの いぶかしさよ。

(太郎左に杖をつき右に鏡を拾ひ上げ顔を見る。)

そもそも おん身は なんびとぞ。

かくいふわれは としひさしく

この學吉に いさりする  
海士の長にて 候が、

とほつおやより よおなじく  
浦島太郎と なのり候。

太郎。

なに、浦島ノ 太郎とな。

さらばおんみの とほつおやに

やへのしほぢに こぎいりて

かへらぬひとの ありときかざや。

後ノ太郎。

げにげに。ことし 天長の

二年を距ること 三百年、

大泊瀬幼武ノ 天皇の

みよしろしめす 二十二年

月さやかなる あきのよに

とほつおやなる 浦島は

ひとり小ぶねを こぎいでしが、

いくひふれども おほぞらに

雲なく、海に なみなくして

ひととかへらず ふねもかへらず、

たれいふとなく わたつみの

かみのみやゐに ゆきぬとて、

けふまでもよの かたりぐさ。

それをおん身の とひたまふは。

太郎。

その浦島こそ このおきな。

おんみはわが裔。ただならぬ  
ふなよそほひは なにゆゑぞ。

後ノ太郎。(下に居る)

わが父なりし 浦島らの

とほきえみしを うちしより、

平安城の みよさかえ、

みつぎするもの 歸化するもの

ひきもきらねど もののふの

ころは匿かず、ひのものと

武名をなほも あげんため、

わたつみこえて とほつくにへ

わたらんとこそ おもひ候へ。

太郎。

おう。いさましや。わたつみの

かみのみやこを わがいでしも

おなじころよ。さりながら

おもふは先祖。

後ノ太郎。

行ふは

子孫にこそあれ。

太郎。

齊しし

鯉釣リ鯛釣リほこり。

萬葉集、堅魚釣鯛釣リ。

白雲。

萬葉集に、白雲之、自箱出而、常世邊、柵引

去者とあり。後の書、例之は故事談には、紫

雲西に飛ぶなどあり。浦島子傳、續浦島子傳

記皆同じ。元亨釋書には匣を紫雲霞と名づ

く。此等は續日本後紀の歌に、紫雲泛引

且とあるより出でたるなるべし。

白髮。

萬葉集に、黒有之、髮毛白斑奴

墨吉。

萬葉集、墨吉之、岸爾出居而。

天長二年。

浦島子の蓬萊山にゆきしは、雄略天皇二十二

年秋七月なりと、雄略紀にあり。歸りし年

はさだかならず。風土記に、三百餘載を經

たりと云ひ、本朝神仙傳には、漸く百年を

過ぐと云へり。いづれも浦島子が三年(萬葉

集、三歳之間爾)と思ひて許多の年を經ぬる

をいふ。さるを風土記の三百餘載より推し

て、天長二年乙巳に歸りぬとすること、俗

本日本後紀などや始なるべき。こゝにはこれ

に據る。浦島年代記には三百年を經ぬと云へ

ば、天長元年となるべく、浦島倭物語に

は、天長三年二月上旬とせり。

平安城。

平安邊都は延暦十三年なれば、天長二年よ

り三十一年前なり。

山深く形をかくし。

萬葉集には、由余由余波、氣左倍絶而、後達、

壽死邪流とあり。さるを釋日本紀に引ける

天書に、神使を得たりと云へり。續浦島子傳

記には、後代地仙と號すと書けり。大日本史

これに據りて辭を修め、後録形頤神

棲息巖阿、不知所終と記せり。

角。

後の世の舟軍に一番貝、二番貝、三番貝など

あり。古代の事なれば角を吹くこととす。

※

西瓜黄なる核は瑠璃の黒斑かな

ほきと折る秋の腰や繪の文度

くしげあけし浦嶋が子や秋の蝶

(歌日記より)

過現未

われ走る

柳を疾風

拍車に腋の

駒の鬚

丈なる髪ぞ

追ふは誰そ

にび色衣

三人五人

骨立つ腕に

焰を發つ

われ駢る

旭にゑらぎの

裾け散けよ

昨日の影に

今日に驚く

え知らじ明日の

我姿

拂ふごと

血にじむ

戦ごと

解け驕く

見え隠れ

あらず百千

揮る鞭の

えりんにす

齒かがやく

えりんにす

追ひすがり

汝達は

我姿

(歌日記の「無名草」より)

たかどのに。

日本紀、海神の宮のところに、雄、埴、整頓、臺宇、玲瓏とあり。

浦島太郎、乙姫。

日本紀の水江浦島子、風土記の水江浦嶋子、萬葉集の水江之浦島兒を後の世に浦島太郎と云ふ。近松の浦島年代記には、浦島太郎久壽、爲永太郎兵衛の浦島太郎倭物語には、浦島太郎久富などときへ記せり。日本紀に、浦島子の逢へるは、たぐ女とあり。風土記には、その婦人みづから天上仙家之人と名告れり。萬葉集には、海若神之女とあり。後の世に乙姫と云ふ。近松、爲水の浮瑠璃皆然なり。

おとひめは次女にや。されど姉ありきとも聞えず。

舳舻。

舟の動搖するなり。

うねりの波。

大曲線を爲して、雷立てず寄せ来る波。暴風

の兆。

おす手ひく手の陰陽。

櫓を押し又引く強弱なり。

鯨人。

博物志、鯨人泣而出珠滿盤。諺曲の合浦

は此故事を作れり。

釣瓶なり。日本紀、美人、玉鏡をもて水を汲むとあり。

かへせばかへぬ水。

太平廣記の太公と妻馬氏との話に、太公曰、若能離更合、覆水定難收。

しつらひなせる玉匣。

風土記に玉匣、多麻久志義、萬葉集に玉篋、宮、箱などとあり。玉手箱の名、古く

物に見えぬ由は燕石雜志にも云へり。八角の鏡を匣として用ゐしは新案なり。浦島太郎

倭物語には、玉手箱を寶珠の名ときへ作りなせり。

錦に包む。

續浦島子傳記に、玉匣を送る、包むに五綵之錦繡を以てし、緘するに萬端の金玉を以てす。

ゆめあけたまふな。

風土記、慎莫開見、萬葉集此箇開勿動。

可憐小汀。

日本紀、彦火火出見尊無目簀に入りて、海底にいたり給ふ條に、可憐小汀にて、鏡より出で、忽ちに海神の宮にいたり給ふ。

丹塗の大船。隊、輔小幡。

丹塗の船は古へ朝鮮を討ちし時の船なり。輔幡は昔の軍に用ゐしもの。

鐵にて作り、舟軍に用ゐしもの。

後、浦島太郎。

浦島子の歸りて逢ふは、風土記にたぐ郷人と書けり。故事談には、百七婦に逢ふとあり。浦島年代記に、七世の孫久富と云ふを出せり。こは下瀬長谷部國長と云ふものの浦島が系圖を窺みて、かく名告れるなり。浦島太郎倭物語には、六世の孫浦島六次太夫時久、時久の子千努、羽之助清光、幼名龜若あり。

鰯ノ狹五郎。

日本紀異本、海神魚を召して鉤をたづぬるところに、鰯、廣、鰯狹とあるを鰯に用ゐたり。

田村將軍。

田村麻呂の蝦夷を討ちしは、延暦十年なり。浦島太郎の歸りし年を天長二年としたれば、三十四年前なり。

筒川。

浦島子の故郷は、日本紀に丹波國餘社郡筒川。風土記に與謝郡日置里筒川村とせり。



いうて、内うちを持もつて行いかしませ。  
日朗にちろう。滾ぎんみて焚くきし油あぶらにも、永劫えいこく身光みんこうの報うあり。そんなら貰もらうて歸かへりませう。  
妙めう。(笑わらふ。)それは何なんのお經きやうやら。早はやう寄よつて取とつて行いかしませいなあ。  
(日朗にちろう橋はしを渡わたりて去さる。妙めう暫しばし見送みおくりて、下手下手に行いきかかると。

善春ぜんしゅん。(日朗にちろうとすれ違ちがひ橋はしを渡わたり來きて。)妙殿めうだん。まだそれに居をられたか。某たれは今年ことしゆくりなくも、御お的てき始はじの交まじり名なに加くへられ、今朝けさより由よし比ひヶ濱はまにて、おん試しにあづかりしが、若もしおん身みが日參にっさんの、いづもの時刻じこくに遅おそれんかと、事ことの果はつるを待まちあへず、米町こめまち通とほりをひた走はしりに、御邸ごていのほとり迄まで引ひき返かへし、お跡あとを慕したうてまゐつてござる。

妙めう。(萎しなれたるこなし。)そのお志こころは、よう存ぞんじて居ゐりますけれど、先頃さきごころ父ちちがお勸すすめ申まをして、あなたもどうぞ聖人せいじん様さまへ、御歸依ごきい遊あそばすやうにと、くれぐれ申まをしましたのを、おん聽人きじんがないのみか、聖人せいじん様さまを賣ばい僧そうぢやと、あなたが仰おほしやりましたとやら。それからといふものは、切角きかくお尋遊じんぎゆばしても、留とど守しと申まをせと父ちちのいひつけ、所詮しよせん願ねがは協きやうはぬものと、妾わらわはもろ諦念ていねんめて居ゐります。(憂うれひのこなし。)

善春ぜんしゅん。さてはさやらの譯わけでおりやるか。たとひ御父ごちち上うへは何なんと仰おほせられうとも、おん身みの心こころが變かはらずば、此善春このぜんしゅんは引ひかぬ所存しよぜん。必ず氣きにばしかけられな。

妙めう。あなたに逢あうて御親ごしん切きな、そのお詞ことばを聞きくうちには、つい末頼すゑたのりもしいやな心こころにもなりまされど、又お日ひにかゝる迄までは、苦勞くるわうの絶間はなげはござんせぬ。妾わらわの心こころをよう知しつた、母上ははうへの御病氣ごびやうきは、日ひに重おもり行いくばかり。その御平癒ごへいよの祈願いのりぢやとて、かうして一人參ひとりさんのを、父ちちが許ゆるせばあなたにも、人ひとのうるさい大路だいじながら、たま／＼お日ひに掛かられます。二道ふたみちかけた願ねがひを、八幡はちまん様さまにも通とほらぬやら。どりや、遅おそくならぬうち、急いそいで行いつてまゐりませう。

(花道はなみちへ入いる。善春ぜんしゅん残のこり、心配しんぱいの思入おもひいれ。  
老若らうじやくの群ぐん慌忙わうまうだしく橋はしを渡わたり來きり。又説教えつしやうに來たのぢやろ、一めでたい正月しょうげつに忌まはしいなどの白しろありて、舞臺ぶたいに留とどまる。)

善春ぜんしゅん。さては噂うわさの日連ひづれが、けふも説法せっぽうに出いでたよな。去年こぞの夏なつより、名越なごなる往還わうわんに高座こうざを補理しゆりひ、諸宗しよそうを置はり替かへ聞きながら、ただ餘所事よところごとに思おもひ居ゐりしに、比企ひき殿だんの惡深あくふかき爲

め、我身われみの仇あだとなつておぢやる。憎にくき法師はふしの何事なんじを説とくやらん。

(群集ぐんしゆ又またどよめき。)そりや來居きこつた。)と叫きこぶ。中には石瓦いしゐを拾ひろひ、橋はしに向むかひて擲なづものあり。)

日蓮にっれん。(檜ひのき窓まどにて面おもてを掩おほひ、橋はしを渡わたりて出いで、舞臺ぶたいに留とどまり、笠かさを右手みぎてに持もち。)やら願ねがはしの人々ひとや。國くにに教をの地ちを拂はらひ、目のあたりなる遊樂いうらくに、永劫えいこく盡つくせぬ苦くる難がたを忘れ、あだに過ぎゆく月日つきひを惜おぼまで、そのをり／＼の節物せつぶつを、祝いわふ心こころぞおどましき。たま／＼信者しんしやと呼よばるゝものも、聲こゑばかりなる念佛ねんぶつして、殊勝じゆくつ顔かほなる笑止わらひどまりさよ。(群ぐんの中なかつより一念佛いちねんぶつがなんで笑止わらひどまりぢや。)おう、法然はふぜんがさかしらの、選擇せんぎ集しゆの毒どくに酔ようては、その笑止わらひどまりさがわかるまいの。教きやう主しゅなる釋迦しやくぢや佛ぶつを、もてあそびにするものさへあるを、帷子かたびらノ里さとに行い脚あしして、われまのあたりに見みしことあり。念佛ねんぶつは無間地獄むくわんじやくの業因ごういん。禪宗ぜんそうは天魔てんま波旬はしゆんの邪法じやぽう。

禪僧ぜんそう。(上手うへより來きかかり。)やよ、御僧ごそう。御身ごみの尊たうむ釋尊しやくそんが、大迦葉だいけあつに直傳ちくでんせし、我宗門わそうもんを邪法じやぽうとは。

日蓮にっれん。御身ごみ尊たうむ諸師しよしの經文きやうもんたる、楞伽りやうか并ならに金剛こんかう般若はんにやは、皆是みなれ末顯まげん眞實しんじつにて、いはゆる教外きやうがい

# 日蓮聖人辻説法

## 人物

日蓮 三十四歳

徒弟日朗 十一歳

比企大學三郎能本 五十餘歳

同娘妙 十八歳

進士ノ太郎善春 二十餘歳

禪僧

放下

老若男女

## 場所

鎌倉小町ノ大路

## 時代

建長七年正月

(上手奥より斜に夷堂橋。正面名越切通方面丘陵林木の遠見。下手大路東側の築地。午後曇天。貴賤の往来あり。傘を持ち、「雪にならねば好いが」などいふものあり。放下の鏡子を弄ぶを童部等

環り視る。)

放下。(歌ふ。)

面白の里のさかえや。

鎌倉の山のあらしに、

雪の下の雪吹きちらし、

色深き花やにほはん。

しだり柳は風にもまるる、

ふくら雀は竹にもまるる、

騎射の犬は馬にもまるる、

茶臼は掬木にもまるる、

げにまこと忘れたりとよ、

こぎりこは放下にもまるる、

こぎりこの二つの竹の

よよを重ねてをさまる御代や。

(日朗花道より油壺を持ち出て出づ。)

第一の童部。(放下の技を見たりしが、花道の方を顧みて。)みんな見い。名越の小法師が来るわ。

(童部等皆花道へ向く。放下下手に入り、

日朗舞臺へ来る。)

第二の童部。ほんにさうぢや。師匠に飲ませる酒がな買うて来たのぢやろ。

第一の童部。(立ち向ひて。)そりや何ぢや。酒か。

日朗。御慈悲には酒といふものはおりない。

第二の童部。酒ぢやなうて般若湯とやらか。

日朗。お身達の知らぬ事。御佛前に上げる燈明の油ぢや。

第一の童部。そりや虚言ぢや。借せ。嗅いで見て呉れるわ。

(手を壺に掛く。日朗取らせじと争ふを、

強ひて奪ふとき、壺を墜して破る。妙塗

笠を被り、橋を渡り来て、覗ふ。童部等馳

せ去る。日朗額みずして上手へ歩む。)

妙。(笠を取り、呼び掛く。)日朗様、日朗様。

(日朗立ち留まり、顧みる。)まあ、物怪な事

でござんしたなあ。それにしても器はこれは

る、油は流れる。お前の跡をも見ずに行かし

ますは、何と思うての事でござんする。

日朗。これはた器、流れた油が、見ればとて

何となりませうぞ。

妙。(笑ふ。)ほんにさうでござんすなあ。お

う、好い事がある。松葉谷へ歸らせますに

は、大町は道筋ぢや程に、妾がさう申したと

日蓮。いかでか證のおりやるまい。

(群を見て憚る思入。雪降り出づ。群の中より、「雪ぢや」、「どりや往かう往かう」、「お武家、しつかりせられい」など呼ぶ。群次第に散り、上手下手に入る。日蓮拾石に腰を掛け、善春に。)

和殿はそれを聞かうとや。

善春。(日蓮の下手に跪き。)なかなか。御身の天魔と編し給ふ、禪門の二祖すらも、膝を埋むる雪のうちに、立ちて教を聞きつとかや。御身の證とせらるるは。

日蓮。和殿も先より聞かれし如く、我説法は折伏を旨とし、邪を破し正を顯すに、忌み憚るところなければど、國家の盛衰、政道の善惡は、むざと言ふべきではおらない。わが見るところを申さうぞなら、相州人となり聰明におはし、累世の積威大いにして、四方に靡かぬ草木なく、世は泰平と見ゆれども、貴賤の風俗日々に亂れ、上下歸依する宗門は、かたばかりなるものとなつて、三寶の跡斷滅せり。

さあるに依つて此年頃、天災地妖荐に起り、破國の萌風に現る。されど爰に將來の一大難あり。かの藥師經に説かせ給ふ、他國侵逼難とは是ぢや。國民早く迷を醒まして、捍

ぎ遏めん覺悟せずば、わが大八洲の山川國土も、胡馬の蹄に掛けられん。こは折を得て柳營に、勘文もて申さうと、筆で存ずる所なれど、和殿に爰で告げ申すぢや。(此詞のうち雪強く降る。)

能本。(傘さして上手より出で、日蓮に。)こはおもひがけなや。聖人にはこれに居さしましたか。(日蓮に傘をさし掛く。)

善春。(能本に。)珍らしや、比企殿。(雪又疎に降る。能本空を仰ぎ見て傘をつぼむ。)

日蓮。(能本に。)さても進士殿とやらんは、和殿の知人にて候ひしよ。生得利根の人と存じて、さきより問合いたしておぢやる。

善春。(能本に。)げに聖人の御上をば、ししばは御許にて承りながら、某家味にして玉石を辨たず、空しく月日を過しに、縁ありてけふ値遇しまゐらせ、教を聴聞いたしておぢやる。只だ怪かしう存するは、邪宗横行の報の爲め他國來りて我疆を、侵すとの御詞。武を三韓に難かし、我日本を何ものか、觸れ侵し申さうぞ。

能本。その敵國は蒙古でおりやる。某折々太宰府の牒狀を洩れ承るに、此國東方總管

を志すこと三十餘年。わが唇商の國たるべき、高麗の王微力なればその侵略の衝に當り、彼の勢を挫かんともの、我國ならで外に

おりない。そもそも蒙古のぬしの祖先は、北

陲の曠野に居りて、鷹を手馴らし狩くらに、

その目を送るものなりしが、水草を逐ひ居を

移す、些の部落を剪り從へ、そが酋長とな

りしより、子孫漸く勢を得、北方の強國

となつておぢやる。殊に國王の弟呼必賚は、

大理を征して勳功高く、祖父鐵木眞の遺訓に

基づき、宇内を併吞せんずと志し、月時も已む

ときなし。我國民の力を戮せ、奮ひ起つべき

時ぞ此時。聖人の御詞を、これにて會得さ

せられたい。

(此白のうちに雪一しきり強く降る。妙花

道より笠を被りて出で、人々を見て笠を取

取り、蹲る。)

善春。はは、忝なや。その御詞を承りて、

迷の雲霧解れておりやる。身不肖ながらこれ

よりは、聖人の御身方

妙。そんならあなたも聖人様に。

善春。何が授、歸服せいで何といたさう。(空を

仰ぎ。)これ、其笠を。

(妙の笠を取り、日蓮に搭ぐ。日蓮笠を取



別傳は、佛説に乖背し因果を變無す。これを邪法と申すのぢや。

禪僧。輕忽の事を聞くものかな。相州殿の歸依深き、建長寺の道隆禪師も、御身が目には邪法の人か。

日蓮。なか／＼。御僧みづから言はれた。

禪僧。あな、無益。勇猛直前の志はおはさうが、一念の顧慮は百萬の魔障、世間の豪傑は出世の丈夫にあらず。御身の面目はや見えた。白刃の頭に臨まんとし、ゆめ周章めさるなよ。(顧みずして下手へ入る。)

日蓮。はははは、たとひいかなる檀越ありとも、究竟邪法は邪法ぢやまで。まづ眞言は亡國の、大惡法と申すべし。(群の中より「説法ぢやなうて難言ぢや」「打ち倒せ」などいふ。)

律は國家の蠱毒。皆是れ墮獄の惡道ぢや。(群騒ぎ立つ。中より賤しき男一人進み出で、「わぬしが地獄に墮ちぬ先に、こゝで舌を抜いてやる」と叫び、日蓮の笠に手を掛く。日蓮手を放つ。男よろめき善春に撞き當たる。)

善春。(撞き放す。男油に滑り、倒れて又立つ。 )やあ、委なくも三品中務卿ノ親王のおはします、大倉御所に程近き、此小町ノ大

路にて、よし何事のあらうとも、暗喙の味尾絶ぢやぞ。(賤しき男笠を持ちたるままト手に逃げ入る。善春日蓮に。 )いやなに、御僧。某は北條殿の家の者、進七ノ太郎と申すものでおりやる。先の程より見てあれば、鎌倉山の風靜に、山比ヶ濱邊の波騒がぬ、太平の世を教なき濁世と罵り、利へ、諸宗の立義を誹謗して、市びと等の怒を激し、忍辱の衣を石瓦に、何とて撲たしめらるるぞ。

日蓮。おう、その不審尤もなれど、昔不轉苦陸は、上慢の比丘等の杖にあたりて、一乗の行とし給ふ。法を説き教を布くに、杖木瓦石をいとはうや。

善春。さらば御身の法とするは。日蓮。わが法こそは大學尊が、靈山八年に説かせ給ひし、正直捨權の實乘なれ。此妙法蓮華經に比ぶれば、爾前四十餘年の權宗は、慈父の穉子に與へたる竹馬草雞に殊ならず。その妙法とは。

善春。眞如は。日蓮。やがて衆生當體。我性の眞如はありながら、煩惱の闇に迷ひ、佛性の蓮を持ちながら、無明の酒に酔ひ癡れたる、衆生の身

こそ悲しけれ。善春。さて其妙法蓮華の功德は。日蓮。それ世間の蓮華は夏開けしも冬開かず。淤泥に生じて陸地に生ぜず。風にまわれ波に沈み、氷に閉ぢられ炎に萎む。わが妙法の蓮華は然らず。三世不變の花なれば、春夏秋冬ときはなり。遍一切處の蓮なれば、六趣三有に徧く咲けり。善惡一如の蓮なれば、惡業の厚薄を選まず。邪正不二の花なれば、煩惱の淤泥にも生じ、十惡の風にまわれず、五逆の波にも沈まず、紅蓮の氷にも閉ぢられず、焦熱の炎にも萎むことなし。一たび妙法蓮華經と唱ふるときは、一切の佛、一切の法、一切の菩薩、一切の聲聞、一切の梵王帝釋閻魔法王日月衆星大神地神、乃至地獄餓鬼畜生修羅、一切衆生の佛性を、只一言に喚び顯す。譬へば籠のうちの鳥啼けば、空飛ぶ鳥の來り集り、空飛ぶ鳥の集れば、籠の鳥の出でんと欲するが如し。我身の佛性顯るれば、梵天帝釋の佛性、來りて加護し給はんこと、何の疑候ふべき。

善春。さらばその妙法のみ正眞の教にして、今行はるゝ宗門は邪教なりとの謔がおりやるか。

## 午タ・セクスアリス

金井湛君は哲學が職業である。

哲學者と云ふ概念には、何か書物を書いてゐると云ふことが伴ふ。金井君は哲學が職業である癖に、なんにも書物を書いてゐない。文科大學を卒業するときには、外道哲學とのLectures前の希臘哲學との比較的研究とか云ふ題で、餘程へんなものを書いたさうだ。それからと云ふものは、なんにも書かない。

併し職業であるから講義はする。講座は哲學史を受け持つてゐて、近世哲學史の講義をしてゐる。學生の評判では、本を澤山書いてゐる先生方の講義よりは、金井先生の講義の方が面白いと云ふことである。講義は直觀的で、或物の上に強い光線を投げることがある。さう云ふときに、學生はいつまでも消えない印象を得るのである。殊に縁の遠い物、何の關係も無いやうな物を藉りて來て或物を説明して、聴く人がはつと思つて會得すると云ふやうな事が多い。Salpêtrierは新聞の雑報のやうな世間話を材料帳に留めて置いて、自己の哲學の材料にし

たさうだが、金井君は何をでも哲學史の材料にする。眞面目な講義の中で、その頃青年の讀んでゐる小説なんぞを引いて説明するので、學生がびつくりすることがある。

小説は澤山讀む。新聞や雑誌を見るときは、議論なんぞは見ないで、小説を讀む。併し若し何と思つて讀むかと云ふことを作者が知つたら、作者は憤慨するだらう。藝術品として見るのでは無い。金井君は藝術品には非常に高い要求をしてゐるから、そこいら中にある小説は此要求を充たすに足りない。金井君には、作者がどう云ふ心理的狀態で書いてゐるか云ふことが面白いのである。それだから金井君のためには、作者が悲しいとか悲壯なとか云ふ積りで書いてゐるものが、極めて滑稽に感ぜられたり、作者が滑稽の積りで書いてゐるものが、卻て悲しかつたりする。

金井君も何か書いて見たいと云ふ考はをりをり起る。哲學は職業ではあるが、自己の哲學を建設しようなどとは思はないから、哲學を書

く氣は無い。それよりは小説か脚本かを書いて見たいと思ふ。併し例の藝術品に對する要求が高いために、容易に取り附けないのである。

そのうちに夏目金之助君が小説を書き出した。金井君は非常な興味を以て讀んだ。そして技癢を感じた。さうすると夏目君の「我輩は猫である」に對して「我輩も猫である」といふやうなものが出る。「我輩は犬である」と云ふやうなものが出る。金井君はそれを見て、ついつい嫌になつてなんにも書かずにしまつた。

そのうち自然主義と云ふことが始まつた。金井君は此流義の作品を見たときは、格別技癢を感ぜなかつた。その癖面白がることは非常に面白がつた。面白がると同時に、金井君は妙な事を考へた。

金井君は自然派の小説を讀む度に、その作中の人物が、行住坐臥、造次顚沛、何に就けても性欲的寫象を伴ふのを見て、そして批評が、それを人生を寫し得たものとして認めてゐるのを見て、人生は果してそんなものであらうかと思ふと同時に、或は自分が人間一般の心理的狀態を外れて性欲に冷淡であるのでは無いか、特に「我輩」とても名づくべき異常な性癖を持つて生れたのではあるまいかと思つた。さう云

りて起つ。）

能本。(善春に。)さらば御身は日暮れぬ中、松

葉ヶ谷の御菴室へ、御供申してくれさしめ。

妙。(父の傍により。)からなるからは妾の願

能本。はて、忙しない。邸に歸つて言ふが好い

てや。

(傘を開き、妙を傘の下へ入る。暮。)

### 馬の影 (明治三十七年六月 二十二日於北大廟裏)

見わたせば 萬里一色 黄なる土

地に印す 紫の 馬の影

その影を 朝日照れば ゆん手に見

その影を 夕日照れば めてに見て

獲もの迫ふ さつをの如く すすみゆく

生憎に 單子は遠く 通れしよ

(歌日記より)

### 我馬痛めり

わが馬やめり

つねはすぐれて

足掻疾き馬

けふおくれたり

ひねもすゆきて

道はいく里ぞ

黄なる畑土

かぎりしられず

丈に満たざる

高きごしに

つれなる馬の

とほさかる見ゆ

ゆきなやみつ

わが馬嘶ゆ

夕日うつき

わが馬嘶ゆ

わが馬嘶ゆ

わが馬嘶ゆ

(歌日記より)

### 馬賊

満洲に 馬おほけれど

我ならで 誰かは騎らん

起てばゆく 人なき里を

血流れて 蹄をひたす

潜むとき 鬼神しらず

風死して 草に聲なし

わが項 誰にか曲げん

わが命は 人なべて聴く

怯れたる ものは疾く去れ

去りてゆけ 官の馬隊に

※ 埒の外に 野ぶし山だち

まで廣き くにはらゆかし

遅ること 千歳のなかば

らもとなさに 泣く長はなしや

荊菰の みだれ世しのぶ

れ現に なしし人はも

わかき夢を あは

わかき夢を あは

わかき夢を あは

わかき夢を あは

(歌日記より)



れないかも知れないと思つた。

そこで金井君の何か書いて見ようといふ、衆望の希望が、妙な方向に向いて動き出した。金井君はこんな事を思つた。一體性欲と云ふものが人の生涯にどんな順序で發現して來て、人の生涯にどれだけ關係してゐるかと云ふことを徴すべき文獻は甚だ少いやうだ。藝術に猥褻な繪などがあるやうに、pornographはどの國にもある。婬書はある。併し其は眞面目なもので無い。總ての詩の領分に戀愛を書いたものはある。併し戀愛は、よしや性欲と密接な關係を有してゐるとしても、性欲と同一では無い。裁判の記録や、醫者の書いたものに、多少の材料はある。併しそれは多く性欲の變態ばかりである。Kousanの懺悔記は随分思ひ切つて無遠慮に何でも書いたものだ。子供の時教へられた事を忘れると、牧師のお嬢さんが握まへてお尻を打つ。それが何とも云へない好い心持がするので、知つたことをわざと知らない振をして、間違つた事を云つたり何かして、お嬢さんに打つて貰つた。所が、いつかお嬢さんが情を知つて打たなくなつたなどといふことが書いてある。これは性欲の最初の發動であつて、決して初戀では無い。その外、青年時代の記事には

性欲の事もちよいちよい見えてゐる。併し性欲を主にして書いたものでないから飽き足らない。Osakuraは生涯を性欲の犠牲に供したと云つても好い男だ。あの男の書いた回想記は一大著述であつて、あの大部な書物の内容は、徹頭徹尾性欲で、戀愛などにまぎらほしう處は無い。併し拿破崙の名聞心が甚だしく常人に超越してゐるために、その自傳が名聞心を研究する材料になりにくいと同じ事で、性欲界の豪傑 Cuvier の書いたものも、性欲を研究する材料にはなりにくい。譬へば Herodas の Holoss や奈良の大佛が人體の形の研究には適さないやうなものである。おれは何か書いて見ようと思つてゐるのだが、前人の足跡を踏むやうな事はしたくない。丁度好いから、一つおれの性欲の歴史を書いて見ようか知らん。實はおれもまだ自分の性欲が、どう萌芽してどう發展したか、つくづく考へて見たことが無い。一つ考へて書いて見ようか知らん。白い上に黒く、はつきり書いて見たら、自分が自分で分かるだらう。さうしたら或は自分の性欲的生活が normal だか abnormal だか分かるかも知れない。勿論書いて見ない内は、どんなものになるやら分らない。隨て人に見せられるやうなものに

なるやら、世に公にせられるやうなものになるやら分らない。とにかく暇なときにぼつぼつ書いて見ようと、こんな風な事を思つた。そこへ獨逸から郵便物が届いた。いつも書籍を送つてくれる書肆から届いたのである。その中に性欲的教育の問題を或會で研究した報告があつた。性欲的と云ふのは安でない。Sexual は性的である、性欲的では無い。併し性と云ふ字があまり多義だから、不本意ながら欲の字を添へて置く。さて教育の範圍内で、性欲的教育をせねばならないものだらうか、せねばならないとした處で、果してそれが出来るだらうかと云ふのが問題である。或會で教育家を一人、宗教家を一人、醫學者を一人と云ふ工合に、おの其向の authority とすべき人物を選んで、意見を叩いたのが、此報告になつて出たのである。然るに三人の議論の道筋はそれぞれ別であるが、性欲的教育は必要であるか、然り、做し得らるであらうか、然りと云ふ答に歸着してゐる。家庭であるが好いといふ意見もある。學校であるが好いと云ふ意見もある。とにかく爲るが好い、出來ると決してゐる。教へる時期は固より物心が附いてからである。婚姻の前に給を見せると云ふ話は我國にもあるが、それを

ふ想像は、この小説などを讀んだ時に起るものでは無かつた。併しそれは Germinal やなんぞで、労働者の部落の人間が、困厄の極度に達した處を書いてあるとき、或る男女の逢引をしてゐるのを觀きに行く段などを見て、さう思つたのであるが、その時の疑は、なんで作者がさう云ふ處を、わざとらしく書いてゐるだらうと云ふのであつて、それが有りさうで無い事と思つたのでは無い。そんな事もあるだらうが、それを何故作者が書いたのだらうと疑ふに過ぎない。即ち作者一人の性欲的寫象が異常ではないかと思ふに過ぎない。小説家とか詩人とか云ふ人間には、性欲の上には異常があるかも知れない。此問題は Lombroso なんぞの說いてゐる天才問題とも關係を有してゐる。Mabius 一に根柢を有してゐる。併し海峽日本で起つた自然派と云ふものはそれとは違ふ。大勢の作者が一派に起つて同じやうな事を書く。批評がそれを人生だと認めてゐる。その人生と云ふものが、精神病學者に云はせると、一一の寫象に性欲的色彩を帯びてゐるとでも云ひさうな風なのだから、金井君の疑惑は前より餘程深くなつて來

て、僕の前に出して、繪の中の何物かを指さして、かう云つた。

「しづさあ。あんたはこれを何と思ひんさるか。」

娘は一層聲を高めて笑つた。僕は覗いて見たが、人物の姿勢が非常に複雑になつてゐるので、どうもよく分らなかつた。

「足ぢやらうがの。」

をばさんも娘も一しよに大聲で笑つた。足では無かつたと見える。僕は非道く侮辱せられたやうな心持がした。

「をば様。又來ます。」

僕はをばさんの待てと云ふのを聴かずに、走つて戸口を出た。

僕は二人の見てゐた繪の何物なるかを判斷する知識を有せなかつた。併し二人の言語舉動を非道く異様に、しかも不愉快に感じた。そして何故か知らないが、此出來事をお母様に問ふことを憚つた。

※

七つになつた。

お父様が東京からお歸になつた。僕は瀋の學問所の址に出來た學校に通ふことになつた。

内から學校へ往くには、門の前のお城の西のはづれにある木戸を通るのである。木戸の番所の址がまだ元の儘になつてゐて、五十ばかりのぢいさんが住んでゐる。女房も子供もある。子供は僕と同年位の男の子で、襦袢を着て、いつも二本棒を垂らしてゐる。その子が僕の通る度に、指を衝へて僕を見る。僕は肝惡と多少の畏怖とを以て此子を見て通るのであつた。

或日木戸を通るとき、いつも外に立つてゐる子が見えなかつた。おれはあの子はどうしたかと思ひながら、通り過ぎようとした。その時番所址の家の中で、ぢいさんの聲がした。

「こりい。それう持つてわやくをしちやあいけんちふのに。」

僕はふいと立ち留つて聲のする方を見た。ぢいさんは胡坐をかいて草鞋を作つてゐる。今叱つたのは、子供が藁を打つ槌を持ち出さうとしたからである。子供は槌を措いておれの方を見た。ぢいさんもおれの方を見た。濃い褐色の皺の寄つた顔で、曲つた鼻が高く、頬がこけてゐる。目はぎよろつとしてゐて、白目の裡に赤い處や黄いろい處がある。ぢいさんが僕にかう云つた。

「城様。あんたあお父さまとおつ母さまと夜何

をするか知つてをりんさるかあ。あんたあ癖坊ぢやけん知りんさるまあ。あははは。」

ぢいさんの笑ふ顔は實に恐ろしい顔である。

子供も一しよになつて、顔をくしやくしやにして笑ふのである。

僕は返事をせずに、逃げるやうに通り返した。跡にはまだぢいさんと子供との笑ふ聲がしてゐた。

道道ぢいさんの云つた事を考へた。男と女とが夫婦になつてゐれば、その間に子供が出來ると云ふことは知つてゐる。併しどうして出來るか分らない。ぢいさんの云つた事は其邊に關してゐるらしい。其邊になんだか祕密が伏在してゐるらしいと、こんな風に考へた。

祕密が知りたいと思つても、ぢいさんの云ふやうに、夜日を醒ましてゐて、お父様やお母様を監視せようなどとは思はない。ぢいさんがそんな事を言つたのは、子供の心にも、profunationである、養育であると云ふやうに感ずる。お社の御簾の中へ土足で踏み込めといはれたと同じやうに感ずる。そしてそんな事を云つたぢいさんが非道く憎いのである。

こんな考へはその後木戸を通る度に起つた。併し子供の意識は斷えず應接に違あらざる程の



少し早めるのである。早めるのは、婚禮の直前まで待つては、其内に間違があると云ふのである。話は下級生物の繁殖から始めて、次第に人類に及ぶと云ふのである。初に下級生物を話すとはいふが、唯植物の雄蕊雌蕊の話をして、動物も亦復是の如し、人類も亦復是の如しでは何の役に立たない。人の性的生活をも詳しく説かねばならぬと云ふのである。

金井君はこれを讀んで、暫く腕組をして考へてゐた。金井君の長男は今年高等學校を卒業する。假に自分が息子に教へねばならないとなつたら、どう云つたら好からうと考へた。そして非常にむづかしい事だと思つた。具體的に考へて見れば見る程詞を措くに窮する。そこで前に書かうと思つてゐた、自分の性的生活の歴史の事を考へて、金井君は問題の解決を得たやうに思つた。あれを書いて見て、どんなものになるか見よう。書いたものが人に見せられるか、世に公にせられるかより先に、息子に見せられるかと云ふことを検して見よう。金井君はかう思つて筆を取つた。

※

六つ時の時であつた。

中國の或る小さいお人名つ御城下にゐた。廢藩置縣になつて、縣廳が鄰國に置かれることになつたので、城下は俄に寂しくなつた。

お父様は殿様と御一しよに東京に出て入らつしやる。お母様が、最も最う大分大きくなつたから、學校に遣る前から、少しづつ物を教へて置かねばならないと云ふので、毎朝假名を教へたり、手習をさせたりして下さる。

お父様は藩の時徒士であつたが、それでも土堀を繞らした門構の家には住んでをられた。門の前はお溪で、向うの岸は上のお蔵である。

或日お稽古が済むと、お母様は機を織つて入らつしやる。僕は遊んでまゐります」と云ふ一聲を残して驅け出した。

此邊は屋敷町で、春になつても、柳も見えねば櫻も見えない。内の堀の上から眞赤な椿の花が見えて、お米藏の側の奥櫓に薄緑の芽の吹いてゐるのが見えるばかりである。

西鄰に空地がある。石瓦の散らばつてゐる間に、げんげや華の花が咲いてゐる。僕はげんげを摘みはじめた。暫く摘んでゐるうちに、前の日に近所の子が、男の癖に花なんぞを摘んで可笑しいと云つたことを思ひ出して、急に身の

周囲を見廻して花を棄てた。幸に誰も見えなかつた。僕はぼんやりして立つてゐた。助れた麗かな日であつた。お母様の機を織つてお出なされる音が、きいんとんきいんとん聞える。

空地を隔てて小原と云ふ家がある。主人は亡くなつて四十ばかりの後家さんがゐるのである。僕はふいと其家へ往く氣になつて、表口へ廻つて驅け込んだ。

草履を脱ぎ散らして、障子をがらりと開けて飛び込んで見ると、をばさんはどこかの知らない娘と一しよに本を開けて見てゐた、娘は赤いものづくめの著物で、髪を烏田に結つてゐる。僕は子供ながら、此娘は町の方のものだと思つた。をばさんも娘も、ひどく驚いたやうに顔を上げて僕を見た。二人の顔は眞赤であつた。

僕は子供ながら、二人の様子が當前で無いのが分つて、異様に感じた。見れば開けてある本には、綺麗に彩色がしてある。

「をば様。そりやあ何の繪本かなう。」

僕はつかつかと側へ往つた。娘は本を伏せて、をばさんの顔を見て笑つた。表紙にも彩色がしてあつて、見れば女の大きい顔が書いてあつた。

をばさんは娘の伏せた本を引つたくつて開け

であることである。もつと小さい時に、足で無いものを足だと思つたのも、無理はないのである。一體かう云ふ畫はどの國にもあるが、或る體の部分にこんなに大きくかくと云ふことだけは、世界に類が無い。これは日本の浮世繪師の發明なのである。昔希臘の藝術家は、神の形を製作するのに、額を大きくして、顔の下の方を小さくした。額は靈魂の舍るところだから、それを引き立たせるために大きくした。顔の下の方、口のところ、咀嚼に使ふ上下の顎に齒なんぞは、卑しい體の部分であるから小さくした。若しこつちの方を大きくすると、段段猿に似て来るのである。Camperの面角が段段小さくなつて来るのである。それから腹の割合に胸を大きくした。腹が顎や齒と同じ關係を有してゐると云ふことは、別段に説明することを要せない。飲食よりは呼吸の方が、上等な作用である。その上昔の人は胸に、詳しく言へば心の臓に、血の循環では無く、精神の作用を持たせてゐたのである。その額や胸を大きくしたと同じ道理で、日本の浮世繪師は、こんな畫をかく時に、或る體の部分の大ききしたのである。それがどうも僕には分らなかつた。

肉浦園と云ふ、支那人の書いた、けしからん猥褻な本がある。お負に支那人の癖で、その物語の組立に善惡の應報をこじつけてゐる。實に馬鹿げた本である。その本に未央生と云ふ主人公が、自分の或る體の部分が小さいやうだと云ふので、人の小便するのを覗いて歩くことが書いてある。僕もその頃人が往來ばたで小便をしてゐると、覗いて見た。まだ御城下にも辻便所などはないので、誰でも道ばたでしたのである。そして誰のことも小さいので、畫にうそがかいてゐると判斷して、天晴發見をしたやうな積りでゐたのである。

これが僕の可笑しな繪を見てから實世界の觀察をした一つである。今一つの觀察は、少し畫ににくいが、眞實のために強ひて書く。僕は女の體の或る部分を目撃したことが無い。その頃御城下には湯屋なんぞは無い。内で湯を使はせてもらつても、親類の家に泊つて、館所の人に湯を使はせてもらつても、自分だけが裸にせられて、使はせてくれる人は著物を著てゐる。女は往來で手水もしない。これには甚だ窮した。學校では、女の子は別な教場で教へるになつてゐて、一しよに遊ぶことも絶えて無い。若し物でも云ふと、すぐに友達の間で嘲弄する。そこで女の友達といふものは無かつた。實に

は娘の子もあつたが、節句とか法事とか云ふので來ることがあつても、餘所行の著物を著て、お化粧をして來て、大人しく何か食べて歸るばかりであつた。心安いのは無い。唯内の裏に、誰の時に小人と云つたものが仕んでゐて、その娘に同年位なのがゐた。名は勝と云つた。小さい蝶蝶を結つてをりをり内へ遊びに來る。色の白い頬つべたの勝らんだ子で、性質が極素直であつた。この子が、氣の毒にも、僕の試験の對象物にせられた。

五月雨の開れた頃であつた。お母様は相變らず機を織つて入らつしやる。蒸暑い午過で、内へ針爲事に來て、臺所の手傳をしてゐる婆あさんは晝寢をしてゐる。お母様の笹の音のかが、ひつそりしてゐる家に響き渡つてゐる。

僕は實處の蔵の前で、硝子の尻に紙を開けて飛ばせてゐた。花の一ぱい咲いてゐる百日紅の木に、蝶が來て鳴き出した。覗いて見たが、高い處で取れさうに無い。そこへ勝が來た。勝も内のもが晝寢をしたので、寂しくなつて出掛けて來たのである。

一歩びませうやあ。これが何である。僕は忽ち一計を案じ出した。

新事實に襲はれてゐるのであるから、長く續けてそんな事を考へてゐることは出来ぬ。内に歸つてゐる時などは、大抵そんな事は忘れてゐるのであつた。

※

十になつた。

お父様が少しづつ英語を教へて下さることになつた。

内を東京へ引き越すやうになるかも知れないと云ふ話がをりをりある。そんな話のある時、聞耳を立てると、お母様が餘所の人に云ふなど仰やる。お父様は、若し東京へでも行くやうになると、餘計な物は持つて行かれないから、物を選び分けねばならないと云ふので、よく藏にはひつて何かして入らつしやる。藏は下の方には米がはひつてゐて、二階に長持や何かが入れてあつた。お父様のこのお爲事も、容でもあると、すぐに止めておしまひになる。

何故人に云つては悪いのかと思つて、お母様に問うて見た。お母様は、東京へは皆行きたがつてゐるから、人に云ふのは好くないと仰やつた。

或日お父様のお留守に藏の二階へ上つて見

た。蓋を開けた儘にしてある長持がある。色々な物が取り散らしてある。もつと小さい時に、いつも床の間に飾つてあつた鏡櫃が、どうしたわけか、二階の奥中に引き出してあつた。甲冑と云ふものは、何でも五年も前に、長州征伐があつた時から、信用が地に墜ちたのであつた。お父様が古かね屋にでも遣つておしまひなさるお積りで、疾うから藏にしまつてあつたのを、引き出してお置になつたのかも知れない。

僕は何の氣無しに鏡櫃の蓋を開けた。さうすると鏡の上に本が一冊載つてゐる。開けて見ると、綺麗に彩色のしてある繪である。そしてその繪にかいてある男と女が異様な姿勢をしてゐる。僕は、もつと小さい時に、小原のをばさんの内で見たと同じ種類の本だと思つた。佛しもう大分それを見せられた時よりは智識が加はつてゐるのだから、その時よりは熟く分つた。Dichangelatoの壁畫の人物も、大膽な遠近法を使つてかいてあるとは云ふが、こんな繪の人物には、それとは違つて、随分無理な姿勢が取らせてあるのだから、小さい子供に、どこに手があつた足があるやら辨へにくかつたのも無理はない。今度手も足も好く分つた。そして兼て知りたく思つた秘密はこれだと思つた。

僕は面白く思つて、幾枚かの繪を繰り返して見た。俄しここに注意して置かなければならぬ事がある。それはかう云ふ人間の振舞が、人間の欲望に關係を有してゐると云ふことは、その時少しも分らなかつた。Schopenhauerはかう云ふ事を云つてゐる。人間は容易に醒めた意識を以て子を得ようと謀るものではない。自分の風の繁殖に手を着けるものではない。そこで自然がこれに愉快を伴はせる。これを欲望にする。この愉快の欲望は、自然が人間に繁殖を課せしめようとするのである。こんな餌を與へないでも、繁殖に差支の無いのは、下等な生物である。醒めた意識を有せない生物であると云つてゐる。僕には、此繪にあるやうな人間の振舞に、そんな餌が伴はせてあるといふことだけは、少しも分らなかつたのである。僕の面白がつて、繰り返して繪を見たのは、唯まだ知らないものを知るのが面白かつたに過ぎない。

Neuerdeに過ぎない。Wissbegierdeに過ぎない。小原のをばさんに見せて貰つてゐた、嶋田喬の娘とは、全く別様な眼で見たのである。さて繰り返して見てゐるうちに、疑念を生じた。それは或る體の部分か馬鹿に大きくか



そこのお長屋のあいてゐるのにはひつて、婆あさんを一人雇つて、御飯を焚かせて暮らしてお出になる。

お父様は毎日出て、晩になつてお歸になる。

僕の行く學校をも捜して下さると云ふことであつた。お父様がお出掛になると、二十ばかりの上さんが勝手口へ来て、前掛を膨らませて歸つて行く。これは婆あさんが米を盗んで、娘に持たせて遣るのであつた。後にお母様がお出になつて、此事が知れて、婆あさんは逐ひ出された。僕は餘程ぼんやりした小僧であつた。

一しよに遊んでくれる子供も無い。家職のものの子で、年が二つばかり下なのゐるが、初めて逢つた日に、お邸の池の鯉を釣らうと云つたので、嫁になつて一しよに遊ばない事にした。家扶の娘の十二三になるのを頭にして、娘が二三人ゐるが、僕を見ると遠い處から指さしなんぞをして、囁きあつて笑つたり何かする。これも嫌な女どもだと思つた。

御殿のお次に行つて見る。家従と云ふものが二三人控へてゐる。大抵烟草を飲んで雑談をしてゐる。おれがゐても、別に邪魔にもしない。そこで色々な事を聞いた。

最も、屢話の中に出て来るのは、吉原と云ふ

地名と奥山と云ふ地名とである。吉原は彼等の常に夢みてゐる天國である。そしてその天國の莊嚴が、幾分かお邸の力で保たれてゐると云ふことである。家令はお邸の金を高い利で吉原のものに貸す。その緣故で彼等が行くと、特に優待せられるさうだ。そこで手ん手に吉原へ行つた話をする。聞いてゐても半分は分らない。又半分位分るやうであるが、それがちつとも面白くない。中にはこんな事を云ふ男がある。

「こんだあ、あんたを連れて行つて上げうかあ。綺麗な女郎が可哀がつてくれるぜえ。」

さう云ふ時にはみんなが笑ふ。

奥山の話は榛野と云ふ男の事に連帶して出るのが常になつてゐる。家従どもは大抵菊石であつたり、獅子尊であつたり、反商であつたり、満足な顔はしてゐない。それと違つて榛野と云ふのは、色の白い、脊の高い男で、髪を長くして、油を附けて、項まで分けてゐた。此の男は何と云ふ役であつたか知らぬが、先づ家従どもの上席位の待遇を受けて、文書の立案と云ふやうな事をしてゐた。家従どもはこんな事を云ふ。

「榛野さあどのやうに大事にして貰はれば、こつちとら奥山へ行くくえど、錢う拂うて楊子を引いても、ろくに話もしてくれんけえ、ほん

つまらんいたう。」

榛野は此仲間この仲間の Alomia であつた。そして僕は程無く此の男のために Aphrodite たり、また Pansophone たる女子どもを見ることを得たのである。

お庭の蟬の聲の段段やかましくなる頃であつた。お父様の留守にぼんやりしてゐると、淫靡と云ふ家従が外から聲を掛けた。

「しづさあ。居りんさるかあ。今からお使に行くけえ、一しよに來んされえ。浅草の觀音様に連れて行つて上げう。」

觀音様へはお父様が一度連れて行つて下すつたことがある。僕は喜んで下駄を引つ掛けて出た。

吾妻橋を渡つて、並木へ出て買物をした。それから引き返して、中店をぶらぶら歩いた。龜の形をしたおもちやの縁で吊したのを、澤山持つて「器械の龜の子、選り取つた、選り取つた」などと云つてゐる男がある。龜の首や尾や四足がぶるぶると動いてゐる。淫靡は繪草紙屋の前に立ち留まつた。おれは西南戦争の銅繪を見てゐると、淫靡は店前に出でゐる、帯封のしてある本を取り上げて、店番の年増にかう云ふのである。

「うむ。あの縁から飛んで遊ばう。」

かう云つて草履を脱いで縁に上つた。勝も附いて来て、赤い緒の雪踏を脱いで上つた。僕は先づ跣足で庭の苔の上に飛び降りた。勝も飛び降りた。僕は又縁に上つて、尻を糞つた。

「かうして飛ばんと、著物が邪魔になつて行けん。」

僕は活潑に飛び降りた。見ると、勝はぐづぐづしてゐる。

「さあ。あんたも飛びんされえ。」

勝は暫く困つたらしい顔をしてゐたが、無邪氣な素直な子であつたので、とうとう尻を糞つて飛んだ。僕は口を圓くして覗いてゐたが、白い脚が二本白い腹に續いてゐて、なんにも無かつた。僕は太いに失望した。(Perry)でballerを踊る女の肢の間を覗いて、羅の縞り込である金糸の光るのを見て、失望する紳士の事を思へば、罪のない話である。

※

その歳の秋であつた。

僕の國は盆踊の盛な國であつた。舊曆の盂蘭盆が近づいて来ると、今年は踊が禁ぜられるさうだと云ふ噂があつた。併し縣廳で他所産の

知事さんが、僕の國のものに遊ぶのは好くないと云ふので、默許すると云ふ事になつた。

内から二三町ばかり先は町である。そこに屋敷が掛かつてゐて、夕力になると、踊の囃子をするのが内へ聞える。

踊を見に往つても好いかと、お母様に聞くと、早く戻るなら、往つても好いと云ふことであつた。そこで草履を穿いて駆け出した。

これまでも度度見に往つたことがある。もつと小さい時にはお母様が連れて行つて見せて下つた。踊るものは、表向は町のものばかりと云ふのであるが、皆頭巾で顔を隠して踊るのであるから、侍の子が澤山踊りに行く。中には男で女妝したものもある。女で男妝したものもある。頭巾を着ないものは百眼と云ふものを掛けてゐる。西洋でするCanoeは一月で、季節は違ふが、人間は自然に同じやうな事を工夫し出すものである。西洋には、收穫の時の踊は別にあるが、その方には假面を被ることは無いやうである。

大勢が輪になつて踊る。覆面をして踊りに来て、立つて見てゐるものもある。見てゐて、氣に入つた踊手のゐる處へ、いつでも割り込むことが出来るのである。

僕は踊を見てゐるうちに、覆面の連中の語をするのがふいと耳に入つた。騒りあひの男二人と見える。

「あんたあやうべ愛宕の山へ行きんさつたらうがの。」

「謠を云ひんさんな。」

「いいや。何でも行きんさつたちふ事ぢや。」

かう云ふやうな問答をしてゐると、今一人の男が側から口を出した。

「あそこにやあ、朝行つて見ると、いろいろな物が落ちてをるげな。」

跡は笑聲になつた。僕は穢い物に障つたやうな心持がして、踊を見るのを止めて、内へ歸つた。

※

十一になつた。

お父様が東京へ連れて出て下つた。お母様は跡に残つてお出なすつた。いつも手傳に来る婆あさんが越して来て、一しよにゐるのである。少し立てば、跡から行くと云ふことであつた。多分家屋敷が賣れるまで残つてお出なすつたのであらう。

舊藩の殿様のお邸が向嶋にある。お父様は

麻が手眞似で掛けさせた。圓顔の女である。物を云ふと、薄い唇の間から、鐵漿を刺がした歯が見える。長い烟管に煙草を吸ひ附けて、吸口を袖で拭いて、例の鼻から上を動かさずに、涅槃に出す。

「何故拭くのだ。」

「だつて失禮ですから。」

「榛野で無くては、拭かないのは飲まして貰へないのだね。」

「あら、榛野さんにだつていつでも拭いて上げまさあ。」

「さうかね。拭いて上げるかね。」

こんな風な會話である。詞が二様の意義を有してゐる。涅槃は僕がその第二の意義に對して、何等の想像をも盡き得るものとは認めてゐない。女も僕をば空氣の如くに取り扱つてゐる。併し僕には少しの不平も起らない。僕は此女は嫌であつた。それだから物なんぞを云つて貰ひたくは無かつた。

涅槃が楊弓を引いて見ないかと云つたが、僕は嫌だと云つた。

涅槃は間もなく楊弓店を出た。それから猿若町を通じて、橋場の渡を渡つて、向嶋のお邸に歸つた。

同じ頃の事であつた。家從達の仲間、銀林と云ふ針置がゐて、折折彼等の詰所に來て話してゐた。これはお上のお療治に來るので、お國ものでは無い。江戸兒である。家從は大抵三十代の男であるのに、此男は四十を越してゐた。僕は家從等に比べると、此男が餘程賢いと思つてゐた。

或る日銀林は銀座の方へ往くから、連れて行つて遣らうと云つた。その日には用を済ませてから、銀林が京橋の側の寄席に這入つた。

晝席であるから、餘り客が多くは無い。上品に見えるのは娘を連れて町家のお上さんなどで、その外多くは職人のやうな男であつた。

高座には話家が出て饒舌つてゐる。徳三郎と云ふ息子が象棋をさしに出てゐた。夜が更けて歸つて、閉出を食つた。近所の娘が一人欠張同じやうに閉出を食つてゐる。娘は息子に話して

掛ける。息子がをぢの内へ往つて留めて貰ふより外は無いと云ふと、娘が一しよに連れて行つてくれると頼む。息子は聴かずにずんずん行くが、娘は附いて來る。をぢは通物である。通物とは道義心の乏しいなる人物と云ふことと見える。息子が情人を連れて來たものと通物する。息子が辯解するのを、恥かしいので言を左右に

記してゐるのだと思ふ。息子は黙然してゐる娘は、物性の事と思つてゐる。そこで二人はをぢに二階へ追ひ上げられる。夜具は一人前しか無い。解いた帯を、縦に敷布圍の真中に置いて、跡から書くので雙腋が anachronism になるが、權太を兩分したやうにして、二人は寝る。さて一寐入して日が醒めて云々と云ふのである。僕の耳には、まだ東京の詞は慣れてゐないのに、話家はべらべらしやべる。僕は後に西洋人の講義を聞き始めた時と同じやうに、一しよう懸命に注意して聴いてゐると、銀林は僕の顔を見て笑つてゐる。

「どうです。分かりますかい。」  
「うむ。大抵分かる。」  
「大抵分かりやあ澤山だ。」  
今までしやべつてゐた話家が、起つて腰を屈めて、高座の横から降りてしまふと、入り替つて第二の話家が出て來る。一替りあひまして替り樂も致しませんと謙遜する。一般方のお道樂はお女師でございますと改題を置く。それから職人がうぶな男を連れて古座へ行くと云ふ話をする。これは古座入門とも云ふべき話である。僕は、なるほど東京と云ふ處は何の智識を授けするにも便利な土地だ、と思つて聴



「お上さん。これを騙されて買つて行く奴がまだありますか。はははは。」

「それでもちよいちよい賣れますよ。一向つまらない事が書いてあるのでございますが。おほほほ。」

「どうでせう。ほんとうのを賣つてくれませんか。」

「御談を伺やいます。なかなか當節は警察がやかましうございまして。」

帯封の本には、表紙に女の顔が書いてあつて、その上に「笑ひ本」と大字で書いてある。これはその頃繪草紙屋にあつただまし物である。中には一口噺か何かを書いて、わざと祕密らしく帯封をして、かの可笑しな畫を欲しがるものに賣るのである。

僕は子供ではあつたが、問答の意味をおほよそ解した。併しその問答の意味よりは、淫麻の自在に東京詞を使ふのが、僕の注意を引いた。そして淫麻は何故これ程東京詞が使へるのに、お屋敷では國詞を使ふだらうかと云ふことを考へて見た。國もの同志で國詞を使ふのは、固より當然である。併し淫麻が二枚の舌を使ふのは、そのためばかりでは無いらしい。彼は上役の前で淳樸を敗ふために國詞を使ふのではあ

るまいか。僕はその頃からもうこんな事を考へた。僕はぼんやりしてゐるかと思ふと、又餘り無が氣で無い處のある子であつた。

觀音堂に登る。僕の物を知りたづめる僕は、僕の日を、唯眞摯な格子的に、櫻子の、櫻子の覺來ない邊に注がせる。蹲んで、體を鯉のやうに曲げて、何かぐづぐづつて所つてゐるおさん達、あさん達の背後を、堂の東側へ折れて、をりをりかちやかちやと云ふ寢錢の音を聞き集めて堂を降りる。

此邊には乞食が澤山ゐた。その間に、五色の沙で書畫をかいて見せる男がある。少し廣い處に、大勢の見物が輪を作つて取り巻いてゐるのは、居合ぬきである。淫麻と一しよに暫く立つて見てゐた。刀が段段に掛けてある。下の段になるだけ長いのである。色色な事を饒舌つてゐるが、なかなか抜かない。そのうち淫麻が、つと退くから、何か分からずに附いて退いた。振り返つて見れば、錢を集める男が、近處へ來てゐたのであつた。

楊子店のある、狭い巷に出た。どの店にもお白いを附けた女のあるのを、僕は珍らしく思つて見た。お父様はここへは連れて來なかつたのである。僕は此女達の顔に就いて、不思議な

觀察をした。彼等の顔は、當前の人間の顔では無いのである。今まで見た、普通の女とは違つて、皆一種の morose した顔をしてゐる。僕の今この詞を見て云へば、此女達の顔に凝結した表情を示してゐるのである。僕はその顔を見ながら思つた。何故皆揃つてあんな顔をしてゐるのであらう。子供に好い子をお爲と云ふと、變な顔にする。此女達は、皆その子供のやうに、變な顔をしてゐる。眉はなるだけ高く、甚だしきは憂の生際まで吊るし上げてある。目をなると、鼻から上を動かさないやうにしてゐる。どうして云ひ合はせたやうに、こんな顔をしてゐるだらうと思つた。僕には分からなかつたが、これは賣物の顔であつた。これは prostitution の相貌であつた。

女はやかましい聲で客を呼ぶ。「ちよいと、檀那と云ふのが尤も多い。「ちよいと」とはつきり聞えるものもあるが、多くは、ちいと聞える。「紺足袋の檀那」なんぞと云ふ奴もある。淫麻は紺足袋を穿いてゐた。

「あら、淫麻さん。」  
一瞬錢い呼吸がした。淫麻は其店にはひつて腰を掛けた。僕は果れて立つて見てゐると、淫

走はしをしてくられて、親切しんせつらしい話はなをしてゐた。その頃書生しやうせいの金平きんへいと云つた彈豆だんず書生しやうせいの羊羹やうかうと云つた焼芋やきいもなどを食たはせられた。但しその親切しんせつは初はじから少し粘ねばりがあるやうに感じて、嫌きらであつたが、年長者ねんちやうに禮れいを缺かいてはならないと思ふので、忍しのんで交際かうさいしてゐたのである。そのうちに手てを握にぎる。頰摩きんまをする。うるさくてたまらない。僕ぼくには Uring たる素質そしつは無い。もう歸り掛かに寄よるのが嫌きらになつたが、それまでの交際かうさいの情力じやうりきで、つい寄らねばならないやうにせられる。或ある日寄つて見ると床とこが取つてあつた。その男おとこがいつもよりも一層いっしやううるさい舉動きどうをする。血ちが頭かぶに上あつて顔かほが赤あかくなつてゐる。そしてとうとう僕ぼくにかう云つた。

「君きみ、一寸いちじゆんだから此中このうちへ這入はいつて一しよに寢給ねたまへ。」

「僕は嫌だ。」

「そんな事を云ふものぢやない。さあ。」

僕ぼくの手てを取とる。彼かれが熱あつして來れば來るほど、僕ぼくの厭惡えんごと恐怖こふふとは高たかまつて來る。

「嫌だ。僕は歸る。」

こんな押問答おしもんたをしてゐるうちに、鄰の部屋そりのへやから聲こゑを掛ける男おとこがある。

「だめか。」

「うむ。」

「そんなら應援えんえんして遣る。」

鄰室りんしつから廊下らうかに飛び出す。僕ぼくのゐた部屋へやの破障子やぶしをがらりと開けて跳り込む。此男このおとこは粗暴そぼうな奴やつで、僕は初はじから交際かうさいしなかつたのである。此男このおとこは少くも見かけの通の奴やつで、僕ぼくを釣つた男おとこは偽善者ぎぜんしやであつた。

「長者ちやうしやの云ふことを聽かなけりやあ、布團蒸ふだんむしにして急いそして遣れ。」

手ては詞ことばと共に動いた。僕は布團ふだんを頭かぶから被せられた。一しよゝ懸命けんめいになつて、跳ね返さうとする。上うへから押へる。どたばたするので、書生しやうせいが三人覗のぞきに來た。「よせ、よせ」などと云ふ聲こゑがする。上うへから押へる手が弛む。僕はやうやう跳ね起きて逃げ出した。その時書物の包とインク壺いんくちやうとをさらつて來たのは、我ながら敏捷びんぎやうであつたと思つた。僕はそれからは寄宿舎きふしやへは往いかなかつた。

その頃僕ぼくは土曜日どようびごとに東先生とうしやうせいの内うちから、向嶋むかしまのお父様おとうさまの處へ泊り行つて、日曜日の夕方ゆふがたに歸るのであつた。お父様おとうさまは或る省の判任官はんにんくわんになつてをられた。僕はお父様に寄宿舎きふしやの事を話した。定めてお父様おとうさまはびつくりなさるだらうと思ふと、少しもびつくりなさらない。

「うむ。そんな奴やつがをる。これからは氣きを附けんと行かん。」

かう云つて平氣へいきでをられる。そこで僕は、これも當めなければならぬ辛酸しんさんの一つであつたと云ふことを悟さとつた。

※

十三じふさんになつた。

去年こぞお母様おははさまがお國くにからお出でになつた。

今年の初はじに、今まで學んでゐた獨逸語ドイツごを廢めて、東京英語學校とうきやうえいごがくにはひつた。これは文部省ぶんぶしやうの學制がくせいが代つたのと、僕が哲學ていがくを遣りたいと云ふので、お父様にねだつたとのためである。東京へ出てから少しの間獨逸語ドイツごを遣つたのを無駄むだ骨こつを折つたやうに思つたが、後になつてから大分役やくに立つた。

僕は寄宿舎きふしやすまひになつた。生徒せいとは十六七位いふたのが極きよく若いので、多くは二十代である。服装ふくそうは殆皆小倉こくらの袴はかまに紺足袋こんたびである。袖そでは肩の邊までたくし上げてゐないと、竹筴たけはしだと云はれる。

寄宿舎きふしやには貸本屋かほんやの出入でいりが許ゆるしてある。僕は貸本屋かほんやの常得意じやうとくいであつた。馬琴ばしんを讀む。京傳きやうでんを讀む。人が春水はるみづを借りて讀んでゐるので、又

いてゐる。僕は此時「おかんこを頂戴する」と云ふ奇妙な詞を覺えた。併し此詞には、僕は其後寄席以外では、どこでも遭遇しないから、これは僕の記憶に無用な負擔を賦課した詞の一つである。

※

同じ年の十月頃、僕は本郷壹岐坂にあつた、獨逸語を教へる私立學校にはひつた。これはお父様が僕に鐵山學をさせようと思つてゐたからである。

向嶋からは遠くて通はれないと云ふので、その頃神田小川町に住まつてをられた、お父様の先輩の東先生と云ふ方の内に置いて貰つて、そこから通つた。

東先生は洋行がへりで、攝生のやかましい人で、盛んに肉食をせられる外には、別に贅澤はせられない。唯酒を随分飲まれた。それも役所から歸つて、晩の十時か十一時まで翻譯なんぞをせられて、其跡で飲まれる。奥さんは女丈夫である。今から思へば、當時の大官であの位閨門のをさまつてゐた家は少なからう。お父様は好い内に僕を置いて下すつたのである。

僕は東先生の内にゐる間、性欲上の刺激を

受けたことは少しも無い。強ひて記憶の線を手繰つて見れば、或るときかう云ふ事があつた。僕の机を置いてゐるのは、應接室と臺所との間であつた。日が暮れて、まだ下女がランプを點けて来てくれない。僕はふいと立つて臺所に出了た。そこでは書生と下女とが話をしてゐた。書生はかう云ふことを下女に説明してゐる。女の器械は何時でも用に立つ。心持に關係せず

云ふ語を出して見て記憶してゐた。或るとき獨逸人の教師が化學の初歩を教へて、硫化水素をこしらへて見せた。そして此瓦斯を含んでゐるものを知つてゐるか問うた。一人の生徒がEulerと答へた。いかにも腐つた卵には同じ臭がある。まだ何かあるかと問うた。僕が起立して聲高く叫んだ。

「Furz !」

「Was ? Bitte, noch einmal !」

「Furz !」

教師はやつと分かつたので顔を眞赤にして、そんな詞を使ふものではないと、懇切に教へてくれた。

學校の課業はむづかしいとは思はなかつた。お父様に英語を習つてゐたので、Adlerとか云ふ人の字書を使つてゐた。獨英と英獨との二冊になつてゐる。退屈した時には、mentisと云ふ語を引いてZeungengeliedと云ふ語を出したり、putridaと云ふ語を引いてBehemといふ語を出したりして、ひとりで可笑しがつてゐたこともある。併しそれも性欲に支配せられて、そんな語を面白がつたのでは無い。人の口の上せない隠微の事として面白がつたのである。それだから同時にふはと云ふ語を引いてFurzと

學校には寄宿舎がある。學校が濟んでから、寄つて見た。ここで始めて男色と云ふことを聞いた。僕なんぞと同級で、毎日馬に乗つて通つて来る蔭小路と云ふ少年が、彼等寄宿生達の及ばぬ戀の對象物である。蔭小路は餘り課業はよく出来ない。薄赤い頬つべたがふつくりと膨らんでゐて、可哀らしい少年であつた。その少年と云ふ詞が、男色の愛身と云ふ意味に用ゐられてゐるのも、僕のために新知識であつた。僕に歸り掛に寄つて行けと云つた男も、僕を少年視してゐたのである。二三度寄るまでは、馳



は到底免れないのであつたかと思ふ。

幸に鰐口は硬派では無かつた。どちらかと云へば軟派で、女色の事は何でも心得てゐるらしい。さればとて普通の軟派でも無い。軟派の連中は女に好かれようとする。鰐口は固より好かれようとしたとて好かれもすまいが、女を土苴の如くに視てゐる。女は彼のために、唯性欲に満足と與へる器械に過ぎない。彼は機會のある毎に其欲を遂げる。そして彼の飽くまで冷靜なる眼光は、蛇の蛙を覗ふやうに女を覗つてゐて、巧に乘すべき機會に乘するのである。だから彼の醜を以てして、決して女に不自由をしない。その云ふところを聞けば、女は金で自由になる物だ。女に好かれるには及ばないと云つてゐる。

鰐口は女を馬鹿にしてゐるばかりでは無い。あらゆる物を馬鹿にしてゐる。彼の目の中には神聖なるものが絶対的に無い。折折僕のお父様が寄宿舎に尋ねて來られる。お父様が、伴は子供同様であるから頼むと挨拶をなさると、鰐口は唯はあはあと云つて取り合はない。そして黙つてお父様の僕に訓戒をして下さるのを聞いてゐて、跡で聲いろを遣ふ。

「精出して勉強しんされえ。鰐口君でもどなた

でも、長者の云ひんさることは、聽かにやあ行けんぜや。若し附に落ちんことがあんなら、どう云ふわけできう爲にやなんのか、分りませんちうて、教へて貰ひんされえ。わしはこれで歸る。主曜には待つとるから、來んされえ。あはははは。」

それからはお父様の事を「來んされえ」と云ふ。今日あたりは又來んされえの來る頃だ。又最中にありつけるだらうなんぞと云ふ。人の親を思ふ情だからつて何だからつて、いたはつてくれると云ふことは無い。「あの來んされえが君のおつかさんと拳尾んで君を拵へたのだ、あはははは」などと云ふ。お國の木戸にゐたお爺さんと擽ぶこと無しである。

鰐口は講堂での出來は中くらゐである。獨逸人の教師は、答の出來ない生徒を塗板の前へ直立させて置く例になつてゐた。或るとき鰐口が答が出來ないので、教師がそこに立つてゐると云つた。鰐口は塗板に背中を持たせて空を噓いた。塗板がたりと鳴つた。教師は火のやうになつて怒つて、とうとう草事に云つて鰐口を禁足にした。併しそれから教師も鰐口を憚つてゐた。

教師が憚るくらゐであるから、級中鰐口を憚

らないものは無い。鰐口は僕に保護を加へはしないが、鰐口のゐる處へ來て、僕に不都合な事をするものは無い。鰐口は外出するとき、僕にかう云つて出て行く。

「おれがをらんと、又穴を覗ふ馬鹿もの共が來るから、用心してをれ。」

僕は用心してゐる。寄宿舎は長屋造であるから出口は兩方にある。敵が右から來れば左へ逃げる。左から來れば右へ逃げる。それでも心配なので、あるとき向嶋の内から、短刀を一本そつと持つて來て、懷に隠してゐた。

二月頃に久しく天氣が続いた。毎日學課が済むと、塙生と運動場へ出て遊ぶ。外の生徒は二人が盛砂の中で角力を取るのを見て、丸で狗兒のやうだと云つて冷かしてゐた。やあ、黒と白が喧嘩をしてゐる、白、負けるななどと聲を掛けて通るものもあつた。塙生と僕はこんな風にして遊んでも別に話はない。僕は貸本をむやみに讀んで子供らしい空想の世界に住してゐる。塙生は教場の外ではちつとしてゐない性なので、本などは讀まない。一しよに遊ぶと云へば、角力を取る位のものであつた。

或る寒さの強い日の事である。僕は塙生と運動場へ行つて、今日は寒いから騒ぎにしようと

借をして讀むこともある。自分が梅屋の丹治郎のやうであつて、お蝶のやうな娘に嫁はしたら、愉快だらうと云ふやうな心持が、始めて此頃萌した。それと同時に、同じ小倉棧足袋の仲間にも、色の白い日暮立の好い生徒があるの、自分の醜男子なることを知つて、所詮女には好かれないだらうと思つた。此頃から後は、此考が永遠に僕の意識の底に潛伏してゐて、僕に十分の得意と云ふことを感ぜさせない。そこへ年齢の不足と云ふことが加勢して、何事をするにも、友達に暴力で壓せられるので、僕は陽に屈服して陰に反抗すると云ふ態度になつた。兵家 Clausewitz は受動的抵抗を弱國の應に取るべき手段だと云つて居る。僕は先天的失戀者で、そして境遇上の弱者であつた。

性欲的に觀察して見ると、その頃の生徒仲間には軟派と硬派があつた。軟派は例の可笑しな畫を見る連中である。その頃の貸本屋は本を壁に高く積み上げて、笈のやうにして背負つて歩いた。その荷の土臺になつて居る處が箱であつて抽斗が附いてゐる。此抽斗が例の可笑しな畫を入れて置く處に極まつてゐた。中には貸本屋に借る外に、藏書としてさう云ふ繪の本を持つてゐる人もあつた。硬派は可笑しな畫なん

ぞは見ない。平田三五郎と云ふ少年の事を書いた寫本があつて、それを引張り合つて讀むのである。鹿兒島の草なんぞでは、これが毎年元旦に第一に讀む本になつてゐると云ふことである。三五郎と云ふ前髪と、其兄分の鉢鬘奴との間の戀の歴史であつて、娘がある。難當がある。末段には二人が相踵いで戰死することになつてゐたかと思ふ。これにも挿畫があるが、左程見苦しい處はかいてないのである。

軟派は數に於いては優勢であつた。何故と云ふに、硬派は九州人を中心としてゐる。その頃の豫備門には鹿兒嶋の人は少ないので、九州人と云ふのは佐賀と熊本との人であつた。これに山口の人の一部が加はる。その外は中國一圓から東北まで、悉く軟派である。

その癖硬派たるが書生の本色で、軟派たるは多少影護い處があるやうに見えてゐた。紺足袋小倉袴は硬派の服裝であるのに、軟派も其眞似をしてゐる。唯軟派は同じ服裝をしてゐても、袖をまくることが少ない。肩を怒らすことが少ない。ステッキを持つてもステッキが細い。休日に出する時なんぞは、そつと絹物を著て白足袋を穿いたり何かする。

そして其白足袋の足はどこへ向くか。芝淺草の湯屋店根津吉原品川など思所である。不問津足袋で外出しても、軟派は好く町湯に行つたものだ。湯屋には硬派は行くことが無いでは無いが、行つても二階へは登らない。軟派は二階を當に行行く。二階には必ず女がゐた。その頃の書生には、かう云ふ湯屋の女と夫婦約束をした人もあつた。下宿屋の娘なんぞよりは、無論一層下つた貨物なのである。

僕は硬派の軟派であつた。何故と云ふのに、その頃の寄宿舎の中では、僕と殖生庄之助と云ふ生徒とが一番年が若かつた。殖生は江戸の日醫者の子である。色が白い。目がぼつちりしてゐて、唇は朱を點じたやうである。體はしなやかである。僕は色が黒くて、體が武骨で、その上田舎育である。それであるのに意外にも硬派は殖生を附け廻さずに、僕を附け廻す。僕の想像では、殖生は生れながらの軟派であるので免れるのだと思つてゐたのである。

學校にはひつたのは一月である。寄宿舎では二階の部屋を割り當てられた。同室は鯉川と云ふ男である。此男は晩學の方であつて、級中で最年長者の一人であつた。白帯石の顔が長くて、前にしやくれた顴が尖つてゐる。瘦せてゐて脊が高い。若し此男が硬派であつたら、僕

細のちらつくのを見たときのやうな心持がするだらうなあ。」

逸見が怒るかと思ふと大違で、眞面目に返事をする。

「そりやお情所から出たものぢやと思つて見ることもあるたい。」

「あははは。女なら話を極めるのに、手を握るのが、少年はどうするのだい。」

「やつぱり手ぢやが、こぎやんして。」

と宮裏の手を掴まへて、手の平を指で押して、承諾するときは其指を握るので、嫌なときは握らないのだと説明する。

誰やら逸見に何か歌へと勧めた。逸見は歌ひ出した。

「雲のあはやから 鬼が穴う突ん出して 縛で縛るよな尻をたれた。」

甚句を歌ふものがある。詩を吟ずるものがある。眠機關の口上を真似る。聲色を遣ふ。そのうちに、錦も瓶も次第に虚になりさうになつた。軟派の一人が、何か近い處で好い物を發見したと云ふやうな事を云ふ。そんなら今から往かうと云ふものがある。此間門限の五分前に出ようとして留められたが、まだ十五分あるから大丈夫出られる。出てさへしまへば、明日證

人の證書を持つて歸れば好い。證書は、印の押してある紙を貰つて持つてゐるから、出来ると云ふやうな話になる。

盲汗仲間はやがやわめきながら席を起つた。鯨口も一しよに出てしまつた。

僕は最中にも食ひ厭きて、本を見てゐると、椅子を忍足で上つて来るものがある。獵銃の音を聞き慣れた鳥は、獵人を近くは寄せない。僕はラングを吹き消して、窓を明けて屋根の上に出て、窓をそつと締めた。露か霜か知らぬが、瓦は薄じめりにしめつてゐる。戸袋の蔭にしがんで、懷にしてゐる短刀の櫛をしつかり握つた。

寄宿舎の窓は皆兩戸が締まつてゐて、小使部屋だけ障子に明がさしてゐる。足音は僕の部屋に這入つた。あちこち歩く様子である。

「今までラングが付いてをつたが、どこへ往つたきやんの。」

逸見の聲である。僕は息を屏めてゐた。暫くして足音は部屋を出て、椅子を降りて行つた。短刀は幸に用立たずに済んだ。

※

十五になつた。

日課は相變らず苦にもならない。暇さへあれば貸本を読む。次第に早く讀めるやうになるので、馬琴や京傳のものは殆ど讀み盡した。それからよみ本と云ふものの中で、外の作者のものを讀んで見たが、どうも面白くない。人の借りてゐる人情本を讀む。何だか、男と女との關係が、美しい夢のやうに、心に浮ぶ。そして餘り深い印象をも與へないで過ぎ去つてしまふ。併しその印象を受ける度毎に、その美しい夢のやうなものは、容貌の立派な男女の享ける福で、自分などには企て及ばないと云ふやうな氣がする。それが僕には苦痛であつた。

塙生とは矢張り一しよに遊ぶ。暮春の頃であつた。月曜日の午後塙生と散歩に出ると、塙生が好い處へ連れて行つて遣らうと云ふ。何處だと聞けば、近處の小料理屋なのである。僕はそれまで蕎麥屋や牛肉屋には行つたことがあるが、お父様に連れられて、飯を食ひに王子の扇屋に這入つた外、御料理と云ふ看板の掛かつてゐる家へ這入つたことが無いのだから、非道く驚いた。

「そんな處へ君はひとりで行けるか。」

「ひとりぢやあない。君と行かうと云ふのだ。」

「そりやあ分かかつてゐる。僕がひとり」と云ふの



云ふので、嚙錢をして遊んで歸つてみると、鰻口うなぎぐちの處へ、同級の生徒が三人寄つて相談をしてゐる。問食の相談である。大抵問食は、彈豆か燒芋で、生徒は鰻金をして、小使に二錢の使賃を遣つて、買つて來させるのである。今日はいつもと違つて、大いに奢ると云ふので、旨汁と云ふことをするのださうだ。てんで出て何か買つて來て、それを一しよに鍋に叩き込んで食ふのである。一人の男が僕の方を見て、金井はどうしようかと云つた。鰻口は僕を横目に見て、かう云つた。

「芋を買ふ時とは違ふ。小僧なんぞは仲間に這入らなくても好い。」

僕は條を向いて聞かない振をしてゐた。誰を仲間に入れるとか入れないとか云つて、暫く相談してゐたが、程無く皆出て行つた。

鰻口の性質は平生知つてゐる。彼は權威に屈服しない。人と荷も合ふと云ふ事が無い。そこまでは好い。併し彼が何物をも神聖と認めたために、彼のものが苦痛を感ずることがある。その頃僕は彼の性質を刻薄だと思つてゐた。それに、彼が漢學の素養があつて、いつも机の上に韓非子を置いてゐたのも、與つて力があつたのだらう。今思へば刻薄と云ふ評は黒星に中

つてゐない。彼は cynic なのである。僕は後に Theodor Vischer の書いた Cynismus を讀んでゐる間、始終鰻口の事を思つて讀んでゐた。Cynic と云ふ語は希臘の Kyne 犬と云ふ語から出てゐる。大學などと云ふ譯語があるからは、犬的と云つても好いかも知れない。夫が穢いものへ鼻を突込みたがる如く、犬的な人は何物をも穢くしなくては氣が済まない。そこで神聖なるものは認められないのである。人は神聖なるものを多く有してゐるだけ、弱點が多い。苦痛が多い。犬的な人に逢つては叶はない。

鰻口は人に苦痛を覺えさせるのが常になつてゐる。そこで人の苦痛を何とも思はない。刻薄な處はここから生じて來る。強者が弱者を見れば可笑しい。可笑しいと面白い。犬的な人は人の苦痛を面白がるやうになる。

僕だつて人が大勢集つて煮食をするのを、ひとりぼんやりして見てゐるのは苦痛である。それを鰻口は知つてゐて、面白半分に仲間に入れないのである。

僕は皆が食ふ間外へ出てゐようかと思つた。併し出れば逃げるやうだ。自分の部屋であるのに、人に勝手な事をせられて逃げるのは残念だと思つた。さればと云つて、口に唾の滴くのを

呑み込んでゐたら彼等に笑はれるだらう。僕は外へ出て最中を十錢買つて來た。その頃は十錢最中を買ふと、大袋に一ぱいあつた。それを机の下に抛り込んで置いて、ランプを附けて本を見てゐた。

その中旨汁の仲間が段段歸つて來る。炭に石油を打つ掛けて火をおこす。食堂へ鍋を取りに行く。醬油を汲みに行く。買つて來た鰻節を掻く。汁が煮え立つ。てんでに買つて來たものを出して、鍋に入れる。一品鍋にはひる毎に笑聲が起る。もう煮えたと云ふ。まだ煮えないと云ふ。鍋の中では箸の白兵戰が始まる。酒は其頃唐物店に賣つてゐたやうと云ふのである。黒い瓶の肩の怒つたのに這入つてゐる燒酎である。直段が安いさうであつたから、定めて下等な酒であつたらう。

皆が折折僕の方を見る。僕は澄まして、机の下から最中を一つ宛出して食つてゐた。

日が利いて來る。血が頭へ上る。話が下へ下つて來る。旨汁の仲間には硬派もあれば軟派もゐる。軟派の宮裏が硬派の逸見にかう云つた。

「どうだい。逸見なんざあ、雪隠へはひつて下の方を覗いたら、僕なんぞが裾の間から緋縮

顔をしてゐる男にさう云ふ男が澤山ある。寄宿舎にゐる年長者にもさう云ふ男が多かつた。それが僕のやうな少年を抑へ、常套語であつたのだ。僕はそれを試みた。併し人に聞いたやうに愉快で無い。そして跡で非道く頭痛がする。強ひて彼の可笑しな輩なんぞを想像して、反復して見た。今度は頭痛ばかりでは無くて、動悸がする。僕はそれからほめつたにそんな事をしたことは無い。つまり僕は内から促されてしたので無くて、入智慧でしたので、附焼でしたので、だめであつたと見え。或る日曜日に僕は向嶋の内へ歸つた。歸つて見ると、お父様がいつもと違つて煙たい顔をして黙つてをられる。お母様も心配らしい様子で、僕に優しい詞を掛けたいのを控へてお出なさるやうだ。元氣よく歸つて行つた僕は拍子抜けして、暫く二親の顔を見籠めてゐた。

お父様が、煙草を呑んでゐた煙管で、常よりひどく灰吹をはいて、口を切られた。お父様は煙草は上らない。いつも雲井と云ふ煙草を上るに極まつてゐたのである。さてお話を聞いて見ると、僕の罪惡とも思はなかつた罪惡が、お父様の耳に入つたのである。それは彼の手に關係する事では無い。塙生との交際の事である。

同じ學校の上の級に沼波と云ふのがあつた。僕は顔も知らないが、先方では僕と塙生との狗兒のやうに遊んでゐるのを可笑しがつて見てゐたものと見える。この沼波の保證人が向嶋にゐて、お父様の基の友達であつた。そこでお父様はかう云ふ事を聞かれたのである。

金井は寄宿舎ぢやうで一番小さい。それに學課はよく出来るさうだ。その友達に塙生と云ふのがある。これも相應に出来る。併し二人の性質は丸で違ふ。金井は落着いた少年で、これからぐんぐん伸びる人だと思ふが、塙生は早熟した才子で、鋭敏過ぎてゐて、前途が明るい。二人はひどく仲を好くして、一しよに遊んでゐるやうだが、それは外に相手が無いから、小さい同志で遊ぶのであらう。ところが此頃になつて、金井のためには、塙生との交際が頗る危険になつたやうである。塙生は金井より二つ位年上であらう。それが江戸の町に育つたものだから、都會の惡影響を受けてゐる。近頃ひとりで料理屋に行つて、女中共におだてられるのを面白がつてゐるのを見たものがある。酒も呑み始めたらしい。尤も甚だしいのは、或る楊弓店の女に帶を買つて造つたと云ふことである。あれは墮落してしまふかも知れない。どうぞ金

井が一しよに墮落しないやうに、引き分けてもらいたいものだと思ふことを、沼波が保證人に話したのである。

お父様は此話をして、何か塙生と一しよに悪い事をしはしないか。したなら、それを打明けて云ふが好い。打明けて云つて、これから先しなければ、それで好い。とにかく塙生と交際することは、これからは止めねば行かぬと仰やるのである。お母様が側から沼波さんもお前が悪い事をしたと云つたのでは無いさうだ、お前は何かしたのではあるまい、これからその塙生と云ふ子と遊ばないやうにすれば好いのだと仰やる。

僕は悲しく入つた。そして正直に塙生に料理屋へ連れて行かれた事を話した。併しそれが塙生の祝宴であつたと云ふことだけは、云ひにくいので云はなかつた。

塙生と絶交するのは、餘程むづかしからうと思つたが、實際殆ど自然に事が運んだ。塙生は間もなく落第する。退學する。僕は其退學を失つてしまつた。

僕が洋行して歸つて妻を買つてからであつた。或日の留守に、塙生庄之助と云ふ名刺を置いて行つた人があつた。株式の賣買をしてゐる

は、大きいひとに連れられずに行けるか云ふのだ。一體君はもう行つたことがあるのか。」

「うむ。ある。此間行つて見たのだ。」

植生は頗る得意である。二人は暖簾を潜つた。「入らつしやい」と一人の女中が云つて、僕等を見て、今一人の女中と口引き袖引き笑つてゐる。僕は間が悪くて引き返したくなつたが、

植生がずんずん這入るので、しかた無しに附いて這入つた。

植生は料理を誂へる。酒を誂へる。君は酒が飲めるかと云ふと、飲まなくても誂へるものだ云ふ。女中は物を運んで来る度に、暫く笑ひながら立つて見てゐる。僕は堅くなつて、口取か何かを食つてゐると、植生がこんな話をし出した。

「昨日は實に愉快だつたよ。」

「何だ。」

「をちの年賀に呼ばれて行つたのだ。さうすると、藝者やお酌が大勢来てゐて、まだ外のお客が集まらないので、遊んでゐた。そのうちのお酌が一人、僕に一しよに行つて庭を見せてくれると云ふだらう。僕はそいつを連れて庭へ行つた。池の縁を廻つて築山の處へ行くと、黙つて僕の手を握るのだ。それから手を引いて歩いて愉快だつたよ。」

「さうか。」

僕は一語を讀することを得ない。そして僕の頭には例の夢のやうな美しい想像が浮んだ。な程植生なら、綺麗なお酌の手を引いて歩いても、好く似合ふだらうと思つた。植生は美少年であるばかりでは無い。物なども相應にきつぱりしたものを著てゐるのであつた。

かう思ふと共に、僕は其事が、いかにも自分には縁遠いやうに感じた。そして不思議にも、人情本なんぞを讀んで空想に耽つたときのやうに、それが苦痛を感じさせなかつた。僕は此事實に出くはして、卻つてそれを當然の事のやうに思つた。

植生は間もなく勘定をして料理屋を出た。察するに、植生は女の手を握つたために祝宴を設けて、僕に馳走をしたのであつたらう。

僕は其頃の事を思つて見ると不思議だ。何故かと云ふに、人情本を見た時や、植生がお酌と手を引いて歩いた話をした時浮んだ美しい想像は、無論無愛の萌身であらうと思ふのだが、それがどうも性欲その物と密接に關聯してゐなかつたのだ。性欲と云つては、此場合には適切で無いかも知れない。此戀愛の萌と云ふと、

tionstrieb とは、どうも別別になつてゐたやうなのである。

人情本を見れば、接吻が、西洋のなんぞと丸で違つた性質の接吻が敘してある。僕だつて、戀愛と性欲とが關係してゐることを、悟性の上から解せないことは無い。併し無愛が寂しく思はれる割合には、性欲の方面は發動しなかつたのである。

或る記憶に残つてゐる事柄が、直接にそれを證明するやうに思ふ。僕は此頃悪い事を覺えた。これは甚だ書きにくい事だが、これを書かないやうでは、こんな物を書く甲斐が無いから書く。西洋の寄宿舎には、青年の生徒にこれをさせない用心に、兩手を被布團の上に出して寝ると云ふ規則があつて、令監が夜見廻るとき、その手に氣を附けることになつてゐる。どうしてそんな事を覺えたと云ふことは、はつきりとは分からない。あらゆる穢いことを好んで口にする鯉口が、いつも其語をしてゐたのは事實である。その外、少年の顔を見る度に、それをするかと思ひ、小娘の顔を見る度に、或る體の部分に毛が生えたかと云ふことを決して忘れない人は澤山ある。それが教育と云ふものを受けた事の無い卑賤な男なら是非が無い。紳士らしい



たばかりださうだが、これも純然たる東京詞である。

「あら。金井さんですか。まあお上んなさいよ。」

「はい。併し爺一君がゐませんのなら。」

「お父さんが釣に行くと言ふので、附いて行つてしまひましたの、爺一がなくなつたつて好いではございませんか。まあ、ここへお掛なさいよ。」

「はい。」

僕はしぶしぶ縁側に腰を掛けた。奥さんは不精らしく又少しゐざり出て、片膝立てて、僕の側へ、體がひつ附くやうにすわつた。汗とお白いと髪と油との匂がする。僕は少し胸へ退いた。奥さんは何故だか笑つた。

「好くあなたは爺一のやうな子と遊んでおやんなさるのね。あんなぶあいさうな子つてありません。」

奥さんは目も鼻も口も馬鹿に大きい人である。そして口が四角のやうに僕は感じた。

「僕は爺一君が大好きです。」

「わたくしはお嫌。」

奥さんは頬つべたをおつ附けるやうにして、横から僕の顔を覗き込む。息が顔に掛かる。それ

の息が妙に熱いやうな気がする。それと同時に、僕は急に奥さんが女であるといふやうなことを思つて、何と無く恐ろしくなつた。多分僕は蒼くなつたであらう。

「僕は又來ます。」

「あら。好いぢやありませんか。」

僕は慌てたやうに起つて、三つ四つお辭儀をして驅け出した。御殿のお庭の植込の間から、お池の水が小さい堰を踰して流れ出る溝がある。その縁の、杉葉の生えてゐる砂地に、植込の高い木が、少し西へゐざつた影を落してゐる。僕はそこまで驅けて行つて、仰向に砂の上に寝轉んだ。すぐ上の處に、淺竹の燃えるやうな花が簾簾と咲いてゐる。蟬が盛んに鳴く。その外には何の音もしない。「日の神はまだ目を醒まさない時刻である。僕はいろいろな想像をした。」

それから、僕は爺一と話をしても、爺一の母親の事は口に出さなかつた。

※

十五になつた。

去年の暮の試験に大入汰があつて、どの級からも退學になつたものがあつた。そしてこの級

の候補者は過半数派から出た。植生なんぞのやうなちびさへ一しよに退治られたのである。逸見も退學した。併しこれはつい昨今急激な軟化をして、著物の袖を長くし、袴の裾を長くし、天を指してゐた櫻欄のやうな髪に香油を塗つてゐたのであつた。

此頃僕に古賀と兄嶋との二人の親友が出來た。

古賀は鰐骨の服つた、四角な、緒の顔の大男である。安達と云ふ美少年に特別な保護を加へてゐる處から、服装から何から、誰が見ても硬派の錯錯たるものである。それが去年の秋頃から僕に近づくやうに努める。僕は例の短刀の橋を握らざることを得なかつた。

然るに淘汰の跡で、寄宿舎の部屋割が極まつて見ると、僕は古賀と同室になつてゐた。朝口は顔に嘲弄の色を浮べて、かう云つた。

「さあ。あんたあ古賀さあの處へ往つて可笑がつて貰ひんされえか。あはははは。」

例のとほりお父様の顔色である。此男は少しも僕を保護してはくれなかつた。併し僕は構はぬのが難行かつた。彼のさうした言動動け始終僕に不愉快を感じしめるが、とにかく彼も一種の奇矯な性格である。同級の友人が彼に贈

ものだと云ひ置いて歸つたさうだ。

※

同じ歳の夏休に向嶋に歸つてゐた。

その頃、好い友達が出来た。それは和泉橋の東京醫學校の預科にはひつてゐる尾藤おふでと云ふ同年位の少年であつた。裔しげ一のお父様はお邸の會計で、文案を受け持つてゐる榛野はしのなんぞと同じ境遇を受けてゐる。家もお長屋の郷同志である。

僕のお父様はお邸に近い處に、小さい地面附の家を買つて、少しばかりの品にいろいろな物を作つて樂んでをられる。田圃を隔てて引舟の通が見える。裔一がそこへ遊びに来るか、僕がお長屋へ往くか、大抵離れることは無い。

裔一は平べつたい顔の黄いろ味を帯びた、しんねりむつとりした少年で、漢學がよく出来る。菊池三溪を最良にして居る。僕は裔一に借りて、暗雪樓詩鈔を讀む。本朝虞初新志を讀む。

それから三溪のものが出るからと云ふので、僕も淺草へ行つて、花月新志を買つて來て讀む。二人で詩を作つて見る。漢文の小品を書いて見る。

先づそんな事をして遊ぶのである。裔一は小さい道徳家である。植生と話をする

には、僕は進んで放しで、少しも自分を拘束するやうなことは無かつたのだが、裔一と何か話してゐて、少しでも野卓な詞、猥褻な詞などが出ようものなら、彼はむきになつて怒るのである。彼の想像では、人は進士及策をして、冠生のお嬢様を如何かに思はれて、それを正妻に迎へるまでは、色事などをしてはならないのである。それから天下に名の聞えた名士になれば、東坡なんぞのやうに、藝者にも大事にせられるだらう。その時は紹のハンカチに詩でも書いて遣るのである。

裔一の處へ行かうちに、裔一が父親に連れられて出て、ゐない事がある。さう云ふ時に好く、長い髪を項まで分けた榛野に出くはす。榛野は、僕が外から裔一を呼ぶと、僕がはひらないうちに、内から障子を開けて出て、歸つてしまふ。裔一の母親があとから送つて出て、僕に会いそを云ふ。

裔一の母親は繼母である。ある時裔一と一しよに暗雪樓詩鈔を讀んでゐると、眞圓の手古奈の事を詠じた詩があつた。僕は、ふいと思ひ出して、「君のお母様はほんとうで無いさうだが、容めはしないか」と問うた。「いいや、容めはしない」と云つたが、彼は母親の事を話すのを嫌ふやうであつた。

嫌ふやうであつた。

或る日裔一の内へ往つた。八月の晴れた日の午後二時頃でもあつたらうか。お宅屋には、どれにも竹垣を結び廻らした小庭が附いてゐる。尾藤の内庭には、縁日で買つて來たやうな植木が四五本次第もなく植ゑてゐる。日が砂地にかつかつと照つてゐる。御殿のお庭の植込の茂みでやかましい程鳴く蟬の聲が聞える。障子をしめた尾藤の内はひっそりしてゐる。僕は竹垣の間の小さい柴折戸を開けて、いつものやうに聲を掛けた。

「裔一君。」

返事をしない。

「裔一君はゐませんか。」

障子が開く。例の髪を項まで分けた榛野が出る。色の白い、撫肩の、春の高い男で、純然たる東京詞を遣ふのである。

「裔一君は留守だ。ちつと僕の處へも遊びに來給へ。」

かう云つて長屋郷の内へ歸つて行く。鳴海絞の浴衣の背後には、背中一ぱいある、派手な模様が有る。尾藤の奥さんが實際にゐざり出る。水淺葱の手がらを掛けた丸髷の髪を兩手でいぢりながら、僕に聲を掛ける。奥さんは東京へ出

「君は卒業しても、官員や教師にはならんのかい。」

「そりやあ、なるかも知れない。併しそれになるために學問をするのでは無い。」

「それでは物を知るために學問をする、つまり學問をするために學問をすると云ふのだな。」

「うむ。まあ、さうだ。」

「ふむ。君は面白い小僧だ。」

僕は憤然とした。人と始めて話をしておし、まに面白い小僧だは、結末が餘り振つてゐ過ぎる。僕は例の倒三角形の日で相手を睨んだ。古賀は平氣でにやりにやりに笑つてゐる。僕は拍子抜けがして、この無邪氣な大男を憎むことを得なかつた。

その日の夕かたであつた。古賀が一しよに散歩に出ると云ふ。鰯口なんぞは、長い間同じ部屋にゐても、一しよに散歩に出ようと云つたことは無い。とにかく附いて出て見ようと思つて、承諾した。

夏の初め、氣持の好い夕かたである。神田の通りを歩く。古本屋の前に来ると、僕は足を留めて覗く。古賀は一しよに覗く。其頃は、日本人の詩集なんぞは一冊五錢位で買はれたものだ。柳原の取附に廣場がある。ここに大きな傘を開

いて立てて、その下で十二三位な綺麗な女の子にかつぽれを踊らせてゐる。僕は Victor Hugo の Notre Dame を讀んだとき、Emmerle とか云ふ寶石のやうな名の附いた小娘の事を書いてあるのを見て、此女の子を思出して、あの傘の下でかつぽれを踊つたやうな奴だらうと思つた。古賀はかう云つた。

「何の子だか知らないが、非道い日に合はせてゐるなあ。」

「もつと非道いのは支那人だらう。赤子を四角な箱に入れて四角に太らせて見せ物にしたと云ふ話があるが、そんな事もしかねない。」

「どうしてそんな話を知つてゐる。」

「唐初新話にある。」

「妙なものを讀んでゐるなあ。面白い小僧だ。」

こんな風に古賀は面白い小僧だを連發する。柳原を兩國の方へ歩いてゐるうちに、古賀は蒲焼の行燈の出でゐる家の前で足を留めた。

「君は鰻を食ふか。」

「食ふ。」

古賀は鰻屋へはひつた。大串を眺める。酒が出る、ひとりで面白さうに飲んでゐる。そのうちに咽に痰がひつ掛かる。かつと云ふと思ふと、縁の外の小庭を圍んでゐる竹垣を越して、

痰が向うの路地に飛ぶ。僕はあつけに取られて見てゐる。鰻が出る。僕はお父様に連れられて鰻屋へ一度行つて、鰻飯を食つたことしか無い。古賀がいくらだけ焼けと金で眺めるのに先づ驚いたのであつたが、その食ひやうを見て更に驚いた。串を抜く。大きな切を箸で折り曲げて一口に頬張る。僕は口には出さないが、面白い奴だと思つて見てゐたのである。

その日は素直に寄宿舎に歸つた。寝るとき、明日の朝は起してくれえ、頼むぞと云つて、ぐうぐう寝てしまつた。

朝は四時頃から外があるくなる。僕は六時に起きる。顔を洗つて來て本を見てゐる。七時に賄の拍子木が鳴る。古賀を起す。古賀は眠むさうに目を開く。

「何時だ。」

「七時だ。」

「まだ早い。」

古賀はくるりと寝返りをして、ぐうぐう寝る。僕は飯を食つて來る。三十分になる。八時には日課が始まるのである。古賀を起す。

「何時だ。」

「七時三十分だ。」

「まだ早い。」



つた詩の結句は、竹窗後靜にして韓非を讀むと云ふのであつた。人が彼を畏れ懼る。それが間接に、僕のためには保護になつてゐたのである。

僕はこの間接の保護を失はねばならない。そして斯る危険なる古賀の室へ引き越さねばならない。僕は覺えず慄然とした。

僕は獅子の窟に這入るやうな積りで引き越して行つた。植生が、君の日は基織を上にした三角だと言つたが、その倒三角形の日のがいよいよ稜立つてゐたであらう。古賀は本も何も載せて無い破机の前に、鼠色になつた古毛布を敷いて、その上に胡坐をかいて、ちつと僕を見てゐる。大きな顔の割に、小さい眞圓な口には、喜の色が溢れてゐる。

「僕をこはがつて逃げ廻つてゐた癖に、とうとう僕の處へ來たな。はははは。」

彼は破机一笑した。彼の顔はおどけたやうな、威嚴のあるやうな、妙な顔である。どうも悪い奴らしくは無い。

「割り當てられたから爲方が無い。」

随分無愛想な返事である。

「君は僕を逸見と同じやうに思つてゐるな。僕はそんな人間ぢやあない。」

僕は黙つて自分の席を熱望し始めた。僕は子供の時から物を散らかして置くといふことが大嫌である。學校にはひつてからは、學科用のものと外のものを選び分けてきちんとして置く。此頃になつては、僕のノオトブツクの数は大變なもので、丁度外の人の癖はある。そのわけは一學科毎に二冊あつて、しかもそれを皆收場を持つて出て、重要な事と、唯參考になると思ふ事とを、聴きながら選り分けて、開いて置ねてある二冊へ、ペンで書く。その代り、外の生徒のやうに、寄宿舎に歸つてから清書をするとは無い。寄宿舎では、其日の講義のうちにあつた術語だけを、希臘拉丁の語原を調べて、宗

の爲事は殆そそれ切である。人が術語が覺えにくくて困ると云ふと、僕は可笑しくて留まらない。何故語原を調べずに、器械的に覺えようとするのだと云ひたくなる。僕はノオトブツクと參考書とを同じ順序にシエルフに立てた。黒と赤とのインキを瓶のひつくり反らない用心に、菓子箱のあいたのに、並べて入れたのに、ペンを添へて、机の向うの方に置いた。大きい吸取紙を廣げて、机の前の方に置いた。其左に厚い表紙の附いてゐる手帖を二冊重ねて置いた。

一冊は日記で、寝る前に日付の記事をきちんと締め切るものである。一冊は學問に關係の無い事件の備忘録で、表題には生利にも紺珠と云ふ二字がペンで篆書に書いてある。それから机の下に忍ばせたのは、貞丈雜記が十冊ばかりであつた。その頃の貸本屋の持つてゐた最も高尚なものは、こんな風な隨筆類で、僕もやうに馬琴京傳の小説を卒業すると、隨筆類になるより外無いのである。こんな物の中から何かしら見出だしては、例の紺珠に書き留めるのである。

古賀はにやりとやり笑つて僕をする事を見てゐるが、貞丈雜記を机の下に忍ばせるのを見て、かう云つた。

「それは何の本だ。」

「貞丈雜記だ。」

「何が書いてある。」

「此邊には裝束の事が書いてある。」

「そんな物を讀んで何にする。」

「何にもするのでは無い。」

「それでは詰まらんぢや無いか。」

「そんなら、僕なんぞがこんな學校にはひつて學問をするのもつまらんぢや無いか。官員になるためとか、教師になるためとか云ふわけでもあるまい。」

「ヨロの前では寸毫も假借せられない。中にも、土曜日の午後には白足袋を穿いて外出するやうな連中は、人間では無いやうに云はれる。僕の性欲的生活が繰延になつたのは、全く此三角同盟のお蔭である。後になつて考へて見れば、若し此同盟に古賀がゐなかつたら、此同盟は陰氣な、貧血性な物になつたのかも知れない。幸に荒日を持つてゐる古賀が加はつてゐたので、互に制裁を加へてゐる中にも、活氣を失はないのであることを得たのであらう。

或る土曜の事である。三人で吉原を見に行かうと云ふことになる。古賀が案内に立つ。三人共小倉袴に紺足袋で、朴齒の下駄をがらつかせて出る。上野の山から根岸を抜けて、通新町を右へ折れる。お商黒溝の側を大門に廻る。吉原を縦横に闊歩する。軟派の生徒で出くはした奴は災難だ。白足袋がこそこそと横柄に曲るのを見送つて、三人一度にどつと笑ふのである。僕は分れて、今戸の渡を向嶋へ渡つた。

※

同じ歳の夏休は、矢張去年とほりに、向嶋の親の家で暮らした。その頃はまだ、書生が暑中に温泉や海濱へ行くと云ふことは無かつた。

親を歸省するのが精神であつた。僕のやうな、判任官の子なんぞは、親の處に歸つて遊んでゐるより上の愉快を想像することは出来なかつたのである。

相變らず尾藤喬一と遊ぶ。喬一の母親はもうゐない。悪い噂が立つたので、棒野は免職になつて國へ歸る。尾藤の母親も國の里方へ返されたのである。

喬一と漢文の作り競をする。それが困じて、是非ほんとうの漢文の先生に就いて造つて見たいと云ふことになる。

その頃向嶋に文淵先生と云ふ方がゐられた。二町程の田圃を隔てて隅田川の土手を望む處に宅を構へてをられる。二階建の母屋に、庭の池に臨んだ書齋がある。土蔵には唐本が一ぱいはひつてゐて、書生が一抱づつ抱へては出入をする。先生は年が四十二三でもあらうか。三十位の奥さんにお嬢さんの可愛いのが二三人あつて、母屋に住んでをられる。先生は渡廊下で續いてゐる書齋にをられる。お役は編修官。月給は一百圓。手車で出勤せられる。

僕のお父様が羨ましがつて、あれが清福と云ふものぢやと云うてをられた。その頃は百圓の月給で清福を得られたのである。

僕はお父様に頼んで貰つて、文淵先生の内へ漢文を直して貰ひに行くことにした。書生が先生の書齋に案内する。どんな長い物を書いて持つて行つても、先生は「どれ」と云つて受け取る。朱筆を把る。片端から句讀を切る。句讀を切りながら直して行く。讀んでしまふのと直してしまふのと同時である。それでも字眼などがあると、標を附けて行かれるから、照應を打ち壊されることなどはめつたに無い。度度行くうちに、

十六七の嶋田喬が先生のお給仕をしてゐるのに出くはした。歸つてからお母様に、今日は先生の内の一番大きいお嬢さんを見たと言つたら、それはお召使だと仰やつた。お召使と云ふには特別な意味があつたのである。

或日先生の机の下から唐本が覗いてゐるのを見ると、金瓶梅であつた。僕は馬琴の金瓶梅しか讀んだことは無いが、唐本の金瓶梅が大いに違つてゐると云ふことを知つてゐた。そして先生なかなか油斷がならないと思つた。

※

同じ歳の秋であつた。古賀の體格が悪い。病氣かと思へばさうでも無い。或日一しよに散歩に出て、池の端を歩いてゐると、古賀がから云

十五分前になる。僕は前晩に時間表を見て揃へて置いたノオトブックとインクとを持って出掛けて、古賀を起す。

「何時だ。」  
「十五分前だ。」

古賀は黙つて跳ね起きる。紙と手拭とを持って飛び出す。これから雪隠に往つて、顔を洗つて、飯を食つて、教場へ駆け附けるのである。

古賀鶴介の平常の生活はこんな風である。

折折古賀の友達で、兒嶋十二郎と云ふのが遊びに来る。その頃綿草紙屋に吊るしてあつた、錦繪の源氏の君のやうな顔をしてゐる男である。體ぢゆうが青み掛かつて、白い。綽號を青大将と云ふのだが、それを云ふと怒る。尤も此名は、兒嶋の體の或る部分を浴湯で見て附けた名ださうだから、怒るのも無理はない。兒嶋は酒量が無い。言語も舉動も貴公子らしい。名高い洋學者で、勅任官になつてゐる人の弟である。十二人目の子なので、十二郎といふのださうだ。

どうして古賀と兒嶋とが親しくしてゐるだらうと、僕は先づ疑問を起した。さて段段觀察してゐると、觸接點がある。

古賀は父親をひどく大切にしてゐる。その癖

父親は鶴介の弟の神童じみたのが夭折したのを惜んで、鶴介を不肖の子として扱つてゐるらしい。鶴介は自分が不肖の子として扱はれれば扱はれるだけ、父親の失つた子の穴填をして、父親に安心させねばならないやうに思ふのである。兒嶋は父親が亡くなつて母親がある。母親は十何人と云ふ子を一人で生んだのである。これも十三人目の十三郎と云ふのが才子で、その方が可哀がられてゐるらしい。併し十三郎は才子である代りに、やや放縱で、或る新聞雑誌所の女に思はれたために騒動が起つて新聞の續物に出た。女はもと縦簾所を出してゐる男の雇かで、年の三十も違ふ主人に脅迫せられて身を任せて、妾の様になつてゐた。それが十三郎を慕ふので、主人が嫉妬から女を虐遇する。女は十三郎に泣き附く。その十三郎が勅任官の家の若殿だから、新聞の好材料になつたのである。そのため、十三郎は或る立派な家に養子に貰はれてゐたのが破談になる。母親は十三郎のために心痛する。十二郎は其母親の心を慰めようと、熱心に努めてゐるのである。

僕は古賀と次第に心安くなる。古賀を通じて兒嶋とも心安くなる。そこで三角同盟が成立した。

兒嶋は生息子である。彼の性欲的生活は零である。

古賀は不斷酒を飲んでぐうぐう寝てしまふ。併し月に一度は荒日がある。さう云ふ日には、己は今夜は暴れるから、君はおとなしくして寝ろと云ひ置いて、廊下を踏み鳴らして出て行く。誰かの部屋の外から聲を掛けるのに、戸を締めて寝てゐると、竿竹で戸を打ち破ることもある。下の級の安達と云ふ美少年の處なぞへはひり込むのは、さういふ晩であらう。荒日には外泊することもある。翌日歸つて、しをしをとして、昨日は罪になつたと云つて悔んでゐる。

兒嶋の性欲の獸は眠つてゐる。古賀の獸は縛つてあるが、をりをり縛を解いて暴れるのである。併し古賀は、恰も今の紳士の一小部分が自分の家庭だけを清潔に保たうとしてゐる如くに、自分の部屋を神聖にしてゐる。僕は偶然此の神聖なる部屋を分つことになつたのである。

古賀と兒嶋と僕との三人は、寄宿舎全體を白眼に見てゐる。暇さへあれば三人集まる。平生性欲の獸を放し餌にしてゐる生徒は、此の三



※

十六になつた。

僕はその頃大學の豫備門になつてゐた英語學校を卒業して、大學の文學部にはひつた。

夏休からは僕は下宿生活をする事になつた。古賀や兒嶋と毎晩のやうに寄席に行く。一項悪い癖が附いて寄席に行かないと寝附かないやうになつたこともある。講釋に厭きて落語を聞く。落語に厭きて女義太夫を聞く。寄席の歸りに腹が減つて蕎麥屋に這入ると、妓夫が夜鷹を大勢連れて來てゐて、僕等は其百鬼夜行の姿をランプの下に見て、覺えず戰慄したこともある。併し仲までお安く」と云ふ車などにはとうとう乗らずにしまつた。

多分生息子で英語學校を出たものは、兒嶋と僕と位なものだらう。文學部にはひつてからも、三角同盟の制裁は依然としてゐて、兒嶋と僕とは舊阿家であつた。

是歳は別に書く程の事も無くて暮れた。

※

十七になつた。

是歳にお父様が、世話をする人があつて、小菅

の監獄署の役人になられた。某省の屬官をしてをられたが、頭が支へて進級が出来ない。監獄の役人の方は、官宅のやうなものが出来てゐて、それに住めば、向嶋の家から家賃がある。月給も少し好い。そこで意を決して小菅へ越されたのである。僕は土曜日に小菅へ行つて、日曜日の晩に下宿に歸ることになつた。

僕は依然として三角同盟の制裁の下に立つてゐるのである。休日の前日が來て、小菅の内へ歸る度に通町町を通る。吉原の方へ曲る角の南側は石の玉垣のある小さい社で、北側は古道具屋である。此古道具屋はいつも障子が半分締めである。其障子の片隅に長方形の紙が貼つてあつて、看板かきの書くやうな字で「秋貞」と書いてある。小菅へ行く度に、往にも反にも僕は此の障子の前を通るのを樂にしてゐた。そして此の障子の口に娘が立つてゐると、僕は一週間の間何となく満足してゐる。娘がゐる無しと僕は一週間の間何となく物足らない感じをしてゐる。

此娘はそれ程稀な美人と云ふのでは無いかも知れない。唯薄紅の顔がつやつやと露が垂るやうで、はつちりした目に形容の出来ない愛敬がある。洗髪を嶋田に結つてゐて、赤い物など

は掛けない。夏は派手な浴衣を着てゐる。冬は半衿の掛かつた錦襖か何かを着てゐる。いつも新しい前掛をしてゐるのである。

僕は此頃から、ずつと後に大學を卒業するまで、いや、さうでは無い、それから二年目に洋行するまで、此娘を僕の美しい夢の主人公にしてゐたに相違無い。春のなまめかしい自然でも、秋の物寂しい自然でも、僕の情緒を動かすことがあると、ふいと秋貞と云ふ名が唇に上る。實に馬鹿らしい訣である。何故と云ふのに、秋貞といふのは其店に折折見える、紺の前掛をした、瘦こけた爺さんの屋號と名前の頭字とに過ぎないのである。此娘は何と云ふ娘だと云ふことを僕は知らないものである。併し不思議と云へば不思議である。僕が顔を見てから足掛五年の間、此娘は母でゐる。僕の空想の中に娘でゐるのは不思議では無いが、此娘が實在の娘でゐるのは不思議である。僕は例の美しい夢の中で、若しや此娘は、僕が小菅へ復する人力車を留めて話をし掛けるのを待つてゐるのではあるまいかとさへ思つたこともある。併しまさか現の意識でそれを信ずる程の詩人にもなれなかつた。餘程年が立つてから、僕は偶然此娘の正體を聞いた。此娘はおきあの近所の寺

つた。

「今日は根津へ探險に行くのだが、一しよにいくかい。」

「一しよに歸るなら、行つても好い。」

「そりやあ歸る。」

それから古賀が歩きながら探險の目的を話した。安達が根津の八幡樓と云ふ内のお職と大變な關係になつた。女が立て引いて呼ぶので、安達は殆ど學課を全廢した。女の處には安達の寢巻や何ぞが備へ附けてある。女の持物には、悉く自分の紋と安達の紋とが比翼にして附けてある。二三日安達の顔を見ないと癢を起す。古賀がどんなに引き留めても、女の磁石力が強くて、安達はふらふらと八幡樓へ引き寄せられて行く。古賀は淺草にある安達の親に、donn-のした。安達と安達の母との間には、悲痛なる對話があつた。さて安達の寄宿舎に歸るのを待ち受けて、古賀が「どうだ」と問うた。安達は途方に暮れたといふ様子で云つた。「今日は母に泣かれて困つた。母が泣きながら死んでしまふといふのを聞けば、氣の毒ではある。併し女も泣きながら死んでしまふと云ふから、爲方が無い」と云つたと云ふのである。古賀は此話をしながら、憤慨して涙を翻し

た。僕は歩きながら此話を聞いて、「なる程非道い」と云つた。さうは云つたが、頭の中では憤慨はしない。戀愛と云ふものの美しい夢は、斷えず意識の奥の方に潜んでゐる。初めて梅曆を又借をして讀んだ頃から後、漢學者の友達が來て、剪燈餘話を讀む。燕山外史を讀む。情史を讀む。かう云ふ本に書いてある、青年男女の戀愛がひどく羨ましい、妬ましい。そして自分が美男に生れて來なかつたために、この美しいものが手の届かない理想になつてゐると云ふことを感じて、頭の奥には苦痛の絶える隙が無い。それだから安達はさぞ愉快だらう、縱令苦痛があつても、其苦痛は甘い苦痛で、自分の頭の奥に潜んでゐるやうな苦い苦痛ではあるまいと云ふ思遣をなすことを禁じ得ない。それと同時に僕はこんな事を思ふ。古賀の單純極まる性質は愛すべきである。併し彼が安達のために煩悶する源を考へて見れば、少しも同情に値しない。安達は寧ろ不自然の回抱を脱して自然の懷に走つたのである。古賀が此話を兒嶋にしたら兒嶋は一しよに涙を翻したかも知れない。いかにも親孝行は此上も無い善い事である。親孝行のお蔭で、性欲を少しでも抑へて行かれるのは結構である。併しそれを爲し得な

い人間がゐるのに不思議は無い。兒嶋は性欲を欠込の義坑にしてゐる。古賀は性欲を折折掃除をさせる雪隠の桶にしてゐる。此二人と同盟になつてゐる僕が、同じやうに性欲の満足を求めずにゐるのは、果して僕の手柄であらうか。それは頗る疑はしい。僕が若し兒嶋のやうな美男に生れてゐたら、僕は兒嶋ではないかも知れない。僕は神聖なる同盟の祭壇の前で、こんな不潔な思遣を費してゐたのである。僕は古賀の跡に附いて、始めて藍染橋を渡つた。古賀は西側の小さい家にはひつて、店者と話をする。僕は關際立つてゐる。此家は引手茶屋である。古賀は安達が何日と何日とに來たかと云ふやうな事を確めてゐる。店のものは不精不精に返辭をしてゐる。古賀は暫くしてしをしをして出て來た。僕等は黙つて歸途に就いた。安達は程無く退學させられた。一年ばかり立つてから、淺草區に子守女や後家などに騒がれる美男の巡查がゐるといふ評判を聞いた。又數年後、古賀が淺草の奥山で、唐桔づくめの頬のこけた凄顔の男に逢つた。奥山に小屋掛けをして興行してゐる女の唄技師があつて、その情夫が安達の末路であつたさうだ。

此話を郷の植木屋が聞いた。お父様が島に物を作る相談をせられるので、心安くなつてゐた植木屋である。此植木屋のお上さんが、親切にもかういふ提議をした。植木屋にお蝶と云ふ十四になる娘がある。體は十六位かと思えるやうに大きい。併し若旦那よりは上手であらう。これを貸してくれようと思ふのである。お母様は同意なすつた。僕も初から女を置くと思ふことは反對してゐたが、鼻を垂らして赤ん坊を背負つてゐたのを知つてゐる、あのお蝶なら好からうと思ふので、同意した。

お蝶は朝来て夜歸る。むくむくと太つた鼻は垂らさない。嶋田に結つてゐる。これは僕のお召使になつてゐたので、自ら好んで結つて貰つたのださうだが、大きな顔の上に小さい嶋田が載つてゐる工合は随分可笑しい。

飯の時にはお蝶がお給仕をする。僕はその様子を見て、どうしても蝶では無くて蛾の方だなどと思つてゐる。見るとも無しに顔を見る。少し壁に向いて附いた肩の下に、水平な目がある。内眦の處が妙にせましくなつてゐる。俯向いて其目で僕を見ると、滑稽な帯びた愛敬

がある。

お蝶はよく働く。僕は飯の時に給仕をさせるだけで、跡は何をしてゐようと構はない。お菜は何にしませうと思つて來ると、何でも好いから、お前の内で拵へるやうな物を拵へると云ふ。そんな風で二週間程立つた。

或ひ今日は親類の内に往つてゐると聞いてゐた尾藤翁一が來た。僕は學科の本に讀み厭きてゐたので、喜んで話しかけたが、翁一はひどく萎れてゐる。僕は不審に思つた。

「君どうかしてゐるやうぢや無いか。」

「僕は本科にはひることは廢めた。」

「どうして。」

「實は君には逢はずに國へ立つてしまはうと思つたのだ。ところが親父に眼を來て聞けば、君がゐると云ふので、つい逢ひたくなつて遣つて來た。」

お蝶が茶を持つて出た。翁一は茶を一息に飲んで話を續けた。翁一の學食は父親の手から出てゐない。木柵町に店を出してゐる伯父が出してゐたのである。その伯父の所帯が左前になつたので、いよいよ廢學をしなくてはならぬやうになつた。そこで國へ歸つて小學校の教員でもしようかと思つてゐる。併し教員になるに

しても、その旁何か進みたい。西洋の學問をするには、素養が不十分な上に、新しい本を買ふのは容易で無い。そこで一時の凌ぎにと云つて、伯父の出してくれた金の大部分は漢籍にしてしまつた。それを持つて國へ引込んで讀むと思ふのである。

僕は氣の毒でたまらなかつた。併し何とも云ひやうが無い。意味の無い慰めなんぞを云ふと、翁一は怒り兼ねない。爲方無しに黙つてゐた。

間もなく翁一は歸ると云つた。そして立ちさうにして立たずに、頗る唐突にこんな事を云ひ出した。

「僕の伯父の立ち行かなくなつたのは、元はをばの爲だ。」

「をばさんはどんな人なんだ。」

「伯父が一人でゐたときの女中だ。」

「ふむ。」

「それがどうしても離れないのだ。女房に内助なんと思ふことを要求するのは無理かも知れないが、訣の分らない奴が附いてゐて離れないと云ふものは、人生の一大不幸だなあ。左様なら。」

翁一はふいと歸つて行つた。僕はあつ氣に取られて跡を見送つた。戸口に



の住職が爲送をしてゐたのであつた。

つまらない話。序にも、一つ同じやうな話を話さう。お父様の住まつてお出になる、小菅の官舎の郷に十三ばかりの娘がある。それが

琴の稽古をしてゐる。師匠は下谷の杉勢と云ふのであるが、遠方の事だから、いつも代稽古の

娘が来る。お母様が聞いて入らつしやるに、郷の娘が弾いても、代稽古に來る娘が弾いても、餘

り好い音がしたことはない。それが或日丸で變つた音がした。言つて見れば、今までのが寢惚

けた音なら、今度のは目の醒めた音である。お母様が郷の奥さんに其事を話すと、あれは琴を

商賣にしてゐる人では無い。杉勢の弟子で、五軒町に住んでゐる娘である。代稽古に來る娘

が病氣なので、好意で來てくれたと云ふことであつた。そのうちその琴の上手な娘が、お母

様に褒められたのを聞いて、それではいつか往つて弾いて聞かせようと云つた。

それから折折内に寄るので、僕が休日に歸つてゐて落ち合ふこともある。子供の時に Hy-

droce, blus でもあつたかといふやうな頭の娘で、髪がやや薄く、色が蒼くて、下脛が紫

色を帯びてゐる。性質は極勝氣である。琴はいいにも virtuos の天賦を備へてゐる。それが若

し琴を以て身を立てようとする人であつたら、師匠に破門せられて、別に一流を起すと云ふ質

かも知れない。此娘が段段お母様と親密になつて、話の序

に、遠廻しのやうで、實は腹を人に、僕の妻になつたといふことをほのめかすのである。お

母様が、倅も卒業すれば、是非洋行をさせねばならぬが、卒業試験の點數次第で、官費で遣

られるか、どうか知れないと話す、と、わたしがお金を持つてゐれば、有るだけ出して學資

にして戴きたうございますなどと云ふ。お母様にも此娘の伶俐なのが氣に入る。そこ

で身元などを問ひ合はせて見られる。このお麗さんと云ふ娘は可なりの役を勤めてゐた十放の

娘で、父親に先立たれて、五軒町の借屋に母親と一しよに住んでゐる。併し妙なことは、

其家にお見いさんと云ふのがゐて、餘程お人好と見えて、お麗さんに家隸のやうに使はれてゐ

る。それが實は培養子に來たものだといふことである。母養子に來たのではあるが、お麗さん

は其人の妻になりたくないから、家を其人に遣つて、自分はどこかへ娘に行きたいと云つてゐる。そしてお麗さんの望に、少くも學士位な人を夫に持たせたいと云ふのださうだ。そこで僕

が其選に中つたといふ訣である。

お母様にはそのお見いさんと云ふものゝ氣に氣に入らない。僕は此の伶俐で、氣な娘

が嫌では無いが、早く妻を持たせしむゝ氣はないのだから、此話はどうなるとも無しに、水が砂地に吸ひ込まれるやうに、立消になつてしま

つた。これは性欲問題では勿論無い。そんならと云つて、戀愛問題とも云はれまい。云はば起り掛

かつて止んだ談話に過ぎないが、思ひ出したから書いて置く。お麗さんは望にほりに或る學士の奥さんになつて横濱あたりにゐると云ふこと

である。

※

十八になつた。

夏休の間の出来事である。卒業試験が近く

なるので、どこかいつもより静かな處にゐて勉強したいと思つた。さいはひ向嶋の家が借手

が無く明いてゐる。そこへ書物を持つてはひ

る。お母様が二三日來てゐて、品物をして下さる。併し材料さへ集めて置いて貰へば、僕が自炊をすると云ふのである。お母様は覺えないと仰やる。

つた。

お蝶の精神が神経かの情態に、何か變つたところがあつたかどうか、戀愛が芽生えてゐたか、性欲が動いてゐたか、それとも僕の想像が跡形も無い事を描き出したのであつたか、僕はとうとう知らずにしまつた。

※

十九になつた。

七月に大學を卒業した。表向の年齢を見て、二十になつたばかりで學士になるとは珍らしいと人が云つた。實は二十にもなつてはゐなかつた。とうとう女と云ふものを知らずに卒業した。これは確に古賀と兒嶋とのお蔭である。そして兒嶋だけは、僕より年は上であつたが、矢張女を知らなかつたらしい。

その當座宴會がむやみにある。上野の松原と云ふ料理屋が其頃盛であつた。そこへ卒業生一同で教授を請へた。

數寄屋町、同朋町の藝者やお酌が大勢來た。宴會で藝者を見たのはこれが始である。

今でも學生が卒業する度に謝恩會と云ふことがある。併し今からあの時の事を思つて見ると、客も藝者も風が變つてゐる。

今は學士になると、別に優遇はせられないまでも、ひどく粗末にもせられないやうだ。あの頃は僕なんぞをば、藝者が丸で人間とは思つてゐなかつた。

あの晩の松原の宴會は、はつきりと僕の記憶に残つてゐる。床の間の前に並んでゐる教授がたの處へ、卒業生が交る交るお杯を頂戴しに行く。教授の中には、わざと卒業生の前へ來て胡坐をかいて話をする人もある。席は大分入り亂れて來た。僕はぼんやりしてすわつてゐると、左の方から僕の鼻の先へ杯を出したものがあつた。

「あなた。」

藝者の聲である。

「うむ。」

僕は杯を取らうとした。杯を持つた藝者の手はひよいと引込んだ。

「あなたぢやありませんよ。」

藝者は窘めるやうに、ちよいと僕を見て、僕の右前の方の人に杯を差した。笑談では無い。笑談を妝つてもゐない。右前にゐたのは某教授であつた。藝者の方には、殆ど背中を向けて、右隣の人と話をしてをられた。僕の目には先生の紹の羽織の紋が見えてゐたのである。先生は

やつと氣が附いて杯を受けられた。僕がいくらばんやりしてゐても、人の前に出した杯を横から取らうとはしない。僕は羽織の紋に杯を差すものがあらうとは思ひ掛かなかつたのである。

僕は此時忽ち醒覺したやうな心持がした。嘗へば今まで波り渦巻の中にゐたものが、岸の上に飛び上がつて、波の騒ぐのを眺めるやうなものである。宴會の一座が純客觀的に僕の目に映ずる。

教壇でむつかしい顔ばかりしてゐた某教授が相好を崩して笑つてゐる。僕のすぐ脇の卒業生を掴まへて、一人の藝者が、一あなた私心名はボオルよ、忘れぢやあ嫌よと云つてゐる。お玉とでも云ふのであらう。席にゐただけのお酌が皆立つて、笑談半分に踊つてゐる。誰も見るものは無い。杯を投げさせて受け取つてゐるものがある。お酌の間へ飛び込んで踊るものがある。置いてある三味線を踏まれさうになつて、慌てて退ける藝者がある。さつき僕にけんつくを食はせた藝者はねえさん様と見えて、頻りに大喧を出して駆け廻つて世話を焼いてゐる。

僕の左二三人目に兒嶋がすわつてゐる。彼はぼんやりしてゐる。僕の醒覺前の態度と餘り

掛けてある簾を透して、冠木門を出て行く友の姿が見える。白地の浴衣に夢禪帽を被つた喬一は、午過ぎの日のかつかつと照つてゐる、かなめ垣の道に、黒い短い影を落しながら、遠ざかつて行く。

喬一は置土産に僕を諷諭したのである。僕は一寸腹が立つた。何も其位な事を人に聞かなくとも好いと思ふ。それも人による。萬事に掛けて自分よりは鈍いやうに思つてゐた喬一には、出過ぎた話だと思ふ。その上お蝶が何だ。こつちはお蝶で女とも何とも思つてはゐないのでは無いか。人を識らないのだ。宛も亦甚だしいと思つたのである。

机に向いて讀み掛けてゐた本を開ける。どうも喬一の云つたことが氣になる。僕はお蝶を何とも思つてはゐない。併しお蝶はどうだらう。僕とお蝶とは殆ど話と云ふものをしないから、お蝶が何と云つたと云ふやうな記憶は無い、何か記憶に留まつた事は無いかと思ふと、ふいと今朝の事を思ひ出す。今朝散歩に出た、出るときお蝶は蚊屋を疊み掛けてゐた。三十分も歩いたと思つて歸つて見ると、お蝶は疊んだ蚊屋を前に置いて、口は空を見てぼんやりしてすわつてゐた。もう疾くに片付けてしまつてゐるだらうと思つたのに、意外であつた。その時僕は少し懶けて來たなと思つた。あの時お蝶は三十分が間も何をも思つてゐたのだらう。かう思つて、僕は何物かを發見したやうな心持がした。

此時から僕はお蝶に注意するやうになつた。別な日でお蝶を見る。飯の給仕をしてくれる時に彼の表情に注意する。注意して見ると、かう云ふ事がある。初の頃は俯向いてはゐたが、度度僕の顔を見ることがあつた。それが此頃は殆ど全く僕の顔を見ない。彼の態度は確に變つて來たのである。

僕は庭などを歩くとき、これまでは臺所の前を通つても、中でことと云はせてゐるのを聞きながら、其方を見ずに通つたのが、今度は見て通る。物なんぞを洗ひ掛けて手を休めて、空を見て、ちつとしてゐるのが目に附く。何か考へてゐるやうである。

又飯の給仕に來る。僕の觀察の目が次第に鋭くなる。彼は何も云はず、顔も上げずにゐるが、彼の神経の情態が僕に感應して來るやうな氣がする。彼の體が電氣が何かの蓄積してゐる物體でもあるやうに感ぜられる。そして僕は次第に不安になつて來た。

僕は本を見てゐても、臺所の方で音がすれば、

お蝶は何をしてゐるのかと思ふ。呼べば直に來る。來るのは當りまへではあるが、呼ぶのを待つてゐたと思ふ。夕かたになると暇をして勝手の方へ行く。そして下駄を穿いて出て、戸を結める音がするまで、僕は耳を敏くしてゐる。そして其間の時間が餘り長いやうに思ふ。彼は歸り掛けて、僕に呼ばふのを待つてゐるので無いかと思ふ。僕も不安はいよいよ加はつて來たのである。

その頃僕はこんな事を思つた。屋藤喬一は鋭敏な男では無い。併し彼は父親の處にゐる時も、伯父の處にゐる時も、僕の内とは違ふ雰圍氣の中に栖息してゐたのである。そこで一寸茶を持つて出ただけのお蝶の態度を見て、何物かを發見したのであるまいかと思つた。

或日お母様がお出なすつた。僕はもう向處は嫌になつたから、小菅に歸らうと思ふと云つた。お母様は、そんな事なら、何故葉書でもよこさなかつたかと仰やる。僕は、切角手紙を出さうと思つてゐた處だと云つた。實はお母様のお出なすつたのを見て、急に思ひ附いたのである。僕はお母様に、お蝶と植木屋のものに跡を片附けさせて歸つて下さるやうに頼んで置いて、本を二三冊持つて、ついで出て、小菅へ歸



明のあるお多福が、僕を見て、あれで我慢をする  
と云ふやうなことは無いにも限るまい。併し  
我慢をしてくれるには及ばない。そんな事はこ  
つちから辭退したい。そんなら僕の靈の側は  
どうだ。餘り結構な靈を持ち合はせてゐると  
も思はないが、これまで色色な人に觸れて見た  
ところが、僕の靈がさう氣恥かしくて、包み  
隠してばかりゐなければならぬやうにも思は  
ない。靈の試験を受ける事になれば、僕だつ  
て必ず落第するとも思はない。さて結婚の風俗  
を見るに、容貌の合合はあるが、靈の合合は  
無い。その容貌の合合でさへ、媒をするもの  
の云ふのを聞けば、いつでも先方では見合を要  
せないといつてゐると云ふことだ。女は好嫌  
を言はない。唯こつちが見て好嫌を云へば好い  
と云ふのだ。娘の親は賣手で、こつちが買手で  
でもあるやうだ。娘は九で物品扱を受けてゐ  
る。羅馬法にでも書いたら、奴隷と同じやうに、  
畜畜としてしまはねばならない。僕は綺麗なお  
もちゃを買ひに行く氣は無い。

産んだ覚えは無いと、憤慨に堪へないやうな口  
氣で仰る。これには僕もひどく恐縮せざる  
ことを得ない。それから男が女を擇ぶやうに、  
女も男を擇ぶのが正當な見合であると云ふこ  
とも、お母様は認めて下さらない。お母様の仰  
やるには、おほかそんな事を言ふのは、男女同  
權とか云ふ話と同じ筋の話だらう。昔から町  
家の娘には、見合で婿をこゝとわると云ふことが  
あつた。侍の娘は男の魂を見込んで、婿に往  
くのだから、男の顔を見て彼此云ふ筈は無い。  
それが日本ばかりの事であつても、好い事なら  
好いでは無いか。併しお父様のお話を聞いたう  
ちに、西洋の王様が家練を鄰國へ遣つて婿を見  
させると云ふ話があつた。さうして見れば、西  
洋でも王様なんぞは日本流に婿を取られると見  
えると、かう仰やる。僕は西洋の事なんぞは、  
なるだけ云はないやうにしてゐるのに、お母様  
に西洋の例を引いて辯じ附けられて、僕は少し  
狼狽した。

僕の方にはまだ云ひたい事は澤山有つたが、  
此上反駁を試みるのも悪いと思つて、それ切に  
してしまつた。

此話をしても間も無く、お父様の心安くして  
入らつしやる安中と云ふ醫者が來て、或る大名  
華族の末家の令嬢を貰へと勧めた。令嬢は番  
町の一條といふ書家の内にをられる。いつでも  
見せて遣ると云ふことである。お母様は例に依  
つてお勸なされる。

僕はふと待つて見る氣になつた。それが可笑  
しい。そのお嬢さんを見ようと思ふのでは無く  
て、見合といふものをして見ようと思ふのであ  
つた。少し無責任な事をしたやうではあるが、  
僕はどんなお嬢さんでも貰はないと極めてゐた  
わけでは無い。貰ふ氣になつたら貰はうとだけ  
は思つてゐたのである。

三月頃でもあつたか。まだ寒かつた。僕は安  
中に連れられて、番町の一條の内へ行つた。黒  
い冠木門のある陰氣なやうな家であつた。主人  
の居間らしい八疊の間に通された。安中と火鉢  
を圍んで雜談をしてゐると、主人が出て逢はれ  
た。五十ばかりの男で、磊落な態度である。畫  
の話などをする。暫くして奥さんが令嬢をつ  
れて出られた。

主人夫婦は色色な話をして座を持つてをられ  
さうかと云ふ。僕は酒は飲まないと云ふ。主人  
がそんな何を御馳走しようかと云つて、首を  
仰げる。その頃僕は鯛酒に惱まされてゐて、内

變つてゐないやうだ。その前に一人の藝者がゐる。縮つた體の權衡が整つてゐて、顔も美しい。若し眼窩の縁を際立たせたら、西洋の繪で見る「エト」のやうになるだらう。初め膳を持つて出て配つた時から、僕の注意を惹いた女である。傍輩に小幾さんと呼ばれたら、僕の耳に留まつたのである。その小幾が頻りに兒嶋に話し掛けてゐる。兒嶋は不精不精に返詞をしてゐる。聞くと無しに對話が僕の耳にはひる。

「あなた何が一番お好き。」

「橋饅が旨い。」

眞面目な返詞である。生年二十三歳の堂堂たる美丈夫の返詞としては、不思議では無いか。今日の謝恩會に用ゐる卒業生の中には、搜してもこんなのがゐないだけは慥である。頭が異様に冷になつてゐた僕は、間の悪いやうな可笑しいやうな心持がした。

「さう。」

優しい聲を残して小幾は席を立つた。僕は一種の興味を以て、此出来事の成行を見てゐる。暫くして小幾は可なり大きな井を持つて來て、兒嶋の前に置いた。それは橋饅であつた。

兒嶋は宴會の終るまで、橋饅を食ふ。小幾は

其前にきちんとすわつて、橋饅の束が一つ一つ兒嶋の美しい唇の奥に隠れて行くのを眺めてゐた。

僕は小幾がために、兒嶋のなるたけ多くの橋饅を、なるたけゆつくり食はんことを祈つて、黙つて先へ歸つた。

後に聞けば、小幾は下谷第一の美人であつたさうだ。そして兒嶋は唯此美人の繁げ來つた橋饅を食つたばかりであつた。小幾は今某政黨の名高い政治家の令夫人である。

※

二十になつた。

新しい學士仲間を追追口を捜して、多くは地方へ教師になり行く。僕は卒業したときの席順が好いので、官費で洋行させられることになりさうな噂がある。併しそれがなかなか極まらないので、お父様は心配してお出なさる。僕は平氣で小菫の官舎の四疊半に寝轉んで、本を見てゐる。

遊びに來るものもめつたに無い。古賀は某省の參事官になつて、女房を持つて、女房の里に同居して、そこから役所へ通つてゐる。兒嶋はそれより前に、大阪の或會社の事務員になつ

て、東京を立つた。それを送りに新橋へ行つたとき、古賀が僕に囁きた。「僕のかかあになつてくれると云ふものがあるよ。妙ではないか。」これは誰送したのでは無い。兒嶋に比べては、餘程世情に通じてゐる古賀も、流石三伶同盟の一隅だけあつて、無邪氣なのである。僕は妙とも何とも思はなかつた。

僕にも縁談を持つて來るものがある。お母様の考では、繼ひ洋行をさせられるにしても、妻は持つて置く方が好いと云ふのである。お父様には別に議論は無い。そこでお母様が僕にお勧めなさるが、僕は生返詞をしてゐる。お母様には僕の考が分らない。僕は父考はあつても云ひたくない。云ふにしても、頗る云ひにくいやうな氣がする。お母様は根氣好くお尋なさる。僕は或日いついつい追ひ詰められて、こんな事を云つた。

妻と云ふものを、どうせいつか持つことになるだらう。持つには嫌な奴では困る。嫌か好かをこつちで極めるのは容易である。併し女だつて嫌な男を持つては困るだらう。生んで貰つた親に對して、かう云ふのは、恩義に背くやうではあるが、女が僕の容貌を見て、好だと思ふと云ふことは、一寸想像しにくい。或は自知の

名でも好いかと云ふと、好いと云ふ。僕は嚴重に秘密を守つて貰ふと云ふ條件で承知した。その晩歸つて何を書いたら好からうかと、寝ながら考へたが、これと云ふ思付も無い。翌日は忘れてゐた。その次の朝、内で鈴木田正雄時代から取つてゐる讀賣新聞を見ると、自分の名が出てゐる。哲學科を優等で卒業した金井湛氏は自由新聞に筆を取られる云云と書いてある。僕は驚いて、前前晩の事を思ひ出した。そしてかう思つた。僕は秘密を守つて貰ふ約束で書かうと云つた。その秘密を先方が守らない以上は、書かなくても好いと思つた。

さうすると露波から催促の手紙が来る。僕は條件が破れたから書かないと返詞をする。とうとう露波が遣つて來た。「どうも讀賣の一條は實に濟まなかつた。どうかあの一條だけは勘辨して、書いてくれ給へ。さうで無いと、僕が社員に對して言を食むやうになるから。」

「ふむ。併し僕があれ程云つたのに、何だつて君は讀賣なんぞに吹聴するのだ。」  
「僕が何で吹聴なんかをするものかね。」  
「それではどうして出たのだ」

そりやあかうだ。僕は社で話をした。勿論君

に何も云はない前から、社で話をしたのだ。僕が仙珠吟社へ請待せられて行つて君に逢つたと云ふと、社長を始め、是非君に何か書かせてくれると云ふ。僕は何とも思はずに受け合つた。そこで君に話して見ると、なかなか君がむつかしい事を云ふ。それを僕が蘇張の舌で口説き落したのだ。それだから社に歸つて、僕は得意で復命したのだ。讀賣へは誰か社のものが知らせたのだらう。それは僕には分らない。僕は荊を負ふことを辭せない。不蜘蛛になつてあやまる。どうぞ書いてくれ給へ。」

「好いよ。書くよ。併し僕には新聞社の人の考に分らない。僕がこれまでに無い一番若い學士だとか、優等で卒業したとか云ふので、新聞に名が出た。そいつにどんな物を書くか書かせて見ようと云ふやうな訣だらう。そこで僕の書くものが旨からうが、まづからうが、そんな事は構はない。Sensation is sensation だらう。併しさう云ふのは、新聞經營者として實に短見ではあるまいか。僕の利害は云はない。新聞社の利害を云ふのだ。それよりは黙つて僕の匿名で書いたものを出してくれる。それがまづければそれなりに消滅してしまふ。いくらまづけても何故あんなものを出したかと、社が非難せられ

る程の事もあるまい。萬一僕の書いたものが旨かつたら、あれは誰だと云ふことになるだらう。その時になつて、君の社で僕を紹介してくれたつて好いでは無いか。そこで新聞社に具眼の人があつて、僕を發見したとなれば、社の名譽では無いか。僕はさう曰く行かうとは思はない。併し文學士何の某と云ふやうな名ばかりを振り廻すのが、社の側でもあるまいと思ふから云ふのだ。」

「いや。君の云ふことは一一尤だ。併しそんな話は、戰國の人君に禮樂を起せと云ふやうなものだええ。」

「さうかねえ。新聞社なんと云ふものは存外分らない人が寄つてゐるものと見えるねえ。」  
「いやはや。これは御挨拶だ。あははははは。」

こんな話をして露波は歸つた。僕は露波が歸るとすぐに机に向つて、新聞の二段ばかりの物を書いて、郵便で出した。こんな物を書くに、推敲も何もいらなないと云ふやうな高慢も、多少無いことは無かつた。

翌日それを第一面に載せた新聞が届く。夜になつて肩いた原稿であるから、餘程の繰合せをしてくれたものだと思ふことは、僕は後に聞いた。露波の體狀が添へてある。



ではよく蕎麥掻を食つてゐた。そこで、御近所に蕎麥の看板があつたから、蕎麥掻を御馳走にならうと云つた。主人がこれは面白い御注文だと云つて笑ふ。奥さんが女中を呼んで云ひ付ける。

令嬢は此時まで奥さんの右の方に、大人しくすわつて、膝に手を置いてをられた。ふつくりした丸顔で、目尻が少し吊り上がつてゐる。俯向かないで、正面を向いてゐて、少しもわるびれた様子が無い。顔にはこれと云ふ表情も無かつた。それが蕎麥掻の注文を聞いて、思はずにつこり笑つた。

僕は蕎麥掻の注文をしてしまつて、兒嶋の橋鈍にも譲らないと思つて、ひとりで可笑しがつた。暫くは蕎麥の話が榮える。主人も蕎麥掻は食べる。或る時病氣で、粒立つた物が食べないので、一月も蕎麥掻ばかり食つてゐたと云ふ。奥さんが、あの時はほんとに呆れたと云つて、氣が附いて僕にあやまる。

僕は蕎麥掻を御馳走になつて歸つた。主人夫婦に令嬢も附いて、玄關まで送られた。

歸道に安中が決答を促したが、僕は何とも云ふことが出来ない。それは自分でも分らないからである。僕はお嬢さんを非常な美人とは思

ない。併し随分立派なお嬢さんだとは思つてゐる。品格はたしかに好い。性質は分らないが、どうもねちくれた處なぞが有りさうには無い。

素直らしい。そんなら貰ひたいかと云ふと、少しも貰ひたく無い。嫁では決して無い。若し自分の身の上に關係が無い人であつて、僕が評をしたら、好きな娘だと云ふだらう。併しどうも貰ふ氣になれない。なる程立派なお嬢さんが、あんなお嬢さんは外にもあらう。何故あれを特に貰はねばならないか分らないなどと思ふ。そんな事を考へては、嫁に貰ふ女は無くなるだらうと、自ら駁しても見る。併しどうも貰ふ氣になれない。僕は、こんな時に人はどうして決心をするかと疑つた。そして、或る人は性欲的利便を受けて決心するのであるまいか。それが僕には開けてゐるので、好いとは思つても貰ひたくならないのでは無いかと思つた。僕が何か案じてゐるのを安中は見て取つて、「いづれ改めて伺ひます」と云つて、九段の上で別れた。

内へ歸ると、お母様が待ち受けて、どうであつたかとお問なさる。僕は猶豫する。

「まあ、どんな御様子な方だい。」  
「さうですねえ。容貌端正と云ふやうなお嬢さん

です。目が少し吊り上がつてゐます。著物は僕には分らないが、黒いやうな色で、下に白襟を襲ねてゐました。帯に懷劍を挿してゐても似合ひさうな人です。」

僕のふいと云つたが、お母様にはひどくお氣に入つた。懷劍を持つてゐさうなと云ふのが、お母様には頼もしげに思はれるのである。そこで随分熱心に勧められる。安中も二度返詞を聞きに来る。併し僕はつひつひ決心を與へずにしまつた。

程經て此お嬢さんは、僕の識つてゐる宮内省の役人の奥さんになられたが、一年ばかりの後

に病死せられた。

※

同じ年の冬の初であつた。

來年はいよいよ洋行が出來さうだと云ふ噂がある。相變らず小菅の内にぶらぶらしてゐる。

千住に詩會があつて、會員の宅で順番に月次會を開く。或日その會で三輪崎露波と云ふ詩人

と近附になつた。その露波が云ふには、自分は自由新聞の詞藻欄を受け持つてゐるが、何でも好いから書いてくれないかと云ふ。僕はこと

たと云つて来た。揃ひましたは變だとは思つたが、然程氣にも留めなかつた。露波が先に立つて門口に出て車に乗る。安齋も僕も乗る。僕は「大千住の先の小菅だよ」と車夫に云つたが、車夫は返詞をせずに泥棒を上げた。

露波の車が眞先に驅け出す。次が安齋、殿が僕と三臺の車が續いて、飛ぶやうに駆ける。掛簾をして、提灯を振り廻して、御成道を上野へ向けて行く。兩側の店は、大抵戸を締めてゐる。食物店の行燈や、蠟燭なんぞを賣る家の板戸に嵌めた小障子に移る明りを、をりをり見えて、それが逆の後へ走るかと思ふやうだ。往來の人は少ない。偶々出逢ふ人は、云ひ合せたやうに、僕等の車を振り向いて見る。

車はどこへ行くのだらう。僕は自分の経験は無いが、車夫がどこへ行くとき、こんな風に走るかと思ふことは知つてゐる。廣小路を過ぎて、仲町へ曲る角の邊に來たとき、安齋が車の上から後に振り向いて、「逃げませう」と云つた。安齋の車は仲町へ曲つた。

安齋は遺傳の病疾を持つてゐる。體が人並で無い。こんな車の行く處へは行かれないのである。

僕は車夫に、「今の車に附いて行け」と云つた。

小菅に歸るには、仲町へ曲つてはだめであるが、とにかく露波と別れさへすれば、跡はどうでもなると思つたのである。僕の車は猶豫しながら、仲町の方へ泥棒を向けた。

この時露波の車は一旦三橋を北へ渡つたのが、跡へ引き返して來た。露波は車の上から大聲にどなつた。

「おい。逃げては行けない。」

僕の車は露波の車の跡に續いた。露波は振り返り振り返りして、僕の車を監視してゐる。

僕は再び脱走を試みようとはしなかつた。僕が強ひて争つたなら、露波もまさか亂暴はしなかつたのだらう。併し極力僕を引張つて行かうとしたには違ひ無い。僕は上野の辻で、露波と喧嘩をしたくは無い。その上僕には負けじ魂がある。僕は露波に馬鹿にせられるのが不愉快なのである。此負けじ魂は人をいかなる罪惡の深みへも落し兼ねない。頗る危険なものである。僕も此負けじ魂のために、行きたくも無い處へ行くことになつたのである。それから僕を露波に附いて行かせた今一つのFictiorのあるのを忘れてはならない。それは例の未知のものに引かれる Kuglerende である。

二臺の車は大門に入つた。露波の車夫が、「お

茶屋は」と云ふと、露波が叱るやうに或る家名をどなつた。何でも Astucidae 族の皮の堅い動物の名である。

十二時を餘程過ぎてゐる。兩側の家は皆戸を締めてゐる。車は或る大きな家の締まつた戸の前に止まつた。露波が戸を叩くと、小さい江戸を開けて、體の恐ろしく敏速に伸屈をする男が出て、茶屋がどうかのやうに云つて、露波と小聲で話した。暫く押問答をした末に、二人を戸の内に案内した。

二階へ上ると、露波はどこか行つてしまつた。

一人の中年増が出て、僕を一間に連れ込んだ。細長い間の狭い、兩側は障子で、廊下に通じてゐる。廣い側の一方は、開き戸の附いた黒塗の簾簾に、眞鍮の金物を繋ぐ打つたのを、押入れのやうな處に切り嵌めてある。朱塗の行燈の明りで、漆と眞鍮とがびかびか光つてゐる。廣い側の他の一方は、四枚の襖である。行燈は箱火鉢の傍に置いてあつて、箱火鉢には、文火に大きな上瓶が掛かつてゐる。

中年増は僕を此間に案内をして置いて、どこか行つてしまつた。僕は例の黒羽二重の台莖色になつたのを著て鐵の長烟管を持つた儘で、箱火鉢の前の座布團の上に胡坐をかいた。

此新聞は今でもどこかにしまつてある筈だが、今出して見ようと思つても、一寸只附かない。何でも餘程變なものを書いたやうに記憶してゐる。頭も尻尾も無いやうな物だつた。その頃は新聞に雑誌と云ふものがあつた。朝野新聞は成島柳北先生の雑誌で賣れたものだ。眞面目な考證に洒落が交る。論の奇抜を心掛け。句の贅束を視ふ。どうかすると其警句が人口に膾炙したものだ。その頃僕は某教授に借りて、Eckstein の書いた feuilleton の歴史を讀んでゐたので、先づ雑誌の體裁で、西洋のfeuilleton の趣味を加へたものと思つて書いて見たのだ。

僕の書いたものは、多少の注意を引いた。二三の新聞に尻尾に乗つたやうな投書が出た。僕の書いたものは抒情的な處もあれば、小さい物語めいた處もあれば、考證らしい處もあつた。今ならば人が小説だと云つて評したのだらう。小説だと勝手に極めて、それから雑誌にも劣つてゐると云つたのだらう。情熱と云ふ語はまだ無かつたが、有つたら情熱が無いとも云つたのだらう。文學などと云ふ語もまだ流行しなかつたが、流行つてゐたら此場合に使はれたのだらう。その外、自己辯護だなど云ふ罪名

もまだ無かつた。僕はどんな藝術品でも、自己辯護で無いものは無いやうに思ふ。それは人生が自己辯護であるからである。あらゆる生物の生活が自己辯護であるからである。木の葉に止まつてゐる雨蛙は青くて、壁に止まつてゐるのは土色をしてゐる。草むらを出没する蜥蜴は背に緑の筋を持つてゐる。沙漠の砂に仕込んでゐるのは砂の色をしてゐる。Mimicry は自己辯護である。文章の自己辯護であるのも、同じ道理である。僕は幸にそんな非難も受けなかつた。僕は幸に僕の書いた物の存在権をも疑はれずに済んだ。それは存在権の最も覺えない、智的にも情的にも、人に何物をも與へない批評と云ふものが、その頃はまだ發明せられてゐなかつたからである。

一週間程立つて、或日の午後霧波が父遣つて來た。社主が先日書いて貰つたお禮に馳走をしたいと云ふのだから、今から一しよに來てくれろと云ふ。相客は原口安齋と云ふ詩人だけで、霧波が社主に代つて主人役をすると云ふのである。

僕は車を雇つて、霧波の車に附いて行つた。神田明神の側の料理屋にはひつた。安齋は先へ來て待つてゐた。酒が出る。藝者が來る。とこ

ろが僕は酒が飲めない。安齋も飲めない。霧波が一人で飲んで一人で騒ぐ。三人の客は、社主と書生との間の子と云ふ風で、最も社主に似ている。二人は神飛白の細入に同じ狩装を着てゐる。安齋は大人しいが氣の利いた男で、霧波と一しよには騒がないまでも、藝者と話もする。杯の取遣もする。

僕は仲間はずれである。その頃僕は、お父様の國で廉のある目にお著なすつた紋附の黒羽二重のあつたのを、お母様に爲立て直して貰つて、それが丈夫で好いと云ふので、不斷著にしてゐた。それを著た儘で、霧波に連れられて出たのである。そして二尺ばかりの鐵の煙管を持つてゐる。これは例の短刀を持たなくても好くなつた頃、丁度煙草を吞み始めたので、護身用だと云つて、拵へさせたのである。それで煙袋のやうな煙草入から雲井を城み出して吞んでゐる。酒も飲まない。口も利かない。

併しその頃の講武所藝者は、随分變な書生を相手にし附けてゐたのだから、格別驚きもしない。むやみに大層を出して、霧波と一しよに騒いでゐる。

十一時半頃になつた。女中がお車が揃ひまし



ないか、若しさうなら、その男とは餘り交際し  
ない方が好からうと仰やつた。お母様は黙つて  
お出なすつた。僕は、三輪崎とは氣象が合は無  
いから、親しくする積ではないと云つた。實際  
さう思つてゐたのである。

四疊半の部屋に歸つてから、昨日の事を想つ  
て見る。あれが性欲の満足であつたか。戀愛の  
成就はあんな事に到達するに過ぎないのである  
か。馬鹿馬鹿しいと思ふ。それと同時に僕は意  
外にも悔といふ程のものを感ぜない。良心の呵  
責と云ふ程のものを覺えない。勿論あんな處へ  
行くのは、悪い事だと思ふ。あんな處へ行かう  
と預期して、自分の家の關を越えて出掛けるこ  
とがあらうとは思はない。併しあんな處へ行き  
當つたのは爲方が無いと思ふ。譬へて見れば、  
人と喧嘩をするのは悪い事だ。喧嘩をしようと  
志して、外へ出ることは無い。併し外へ出て  
ゐて、喧嘩をしなければならぬやうになるか  
も知れない。それと同じ事だと思ふ。それから  
或る不安のやうなものが心の底の方に潜んでゐ  
る。それは若しや悪い病氣になりはすまいかと  
云ふことである。喧嘩をした跡でも、目が立つ  
てから打身の痛み出すことがある。女から氣  
を受けたら、それどころでは無い。子孫にまで

禍を遺すかも知れないなどとも思つて見る。  
先づ翌日になつて感じた心理上の變動は、こん  
なものであつて、思つたよりは微弱であつた。  
そのうへ、丁度空氣の受けた波動が、空間の隔  
たるに従つて微かなるやうに、此心理上の  
變動も、時間の立つに従つて薄らいだ。

それとは反對で、ここに僕の感情的生活に  
一つの變化が生じて來て、それが日にまはつ  
きりして來た。何だと云ふと、僕はこれまで、  
女に對すると、何となく尻尾をして、いく地無く  
顔が赤くなつたり、詞が續けたりしたものだ。  
それが此時から直つたのである。こんな譬は、  
誰かが何處かで、つくに云つてゐるだらうが、  
僕は騎士として「三」を受けたのである。  
此事があつてから、當分の間は、お母様が常に  
無い注意を僕の上に加へられるやうであつた。  
察するに、世間で好く云ふ病附と云ふことがあ  
りはすまいかとお思なすつたのだらう。それは  
杞憂であつた。

僕が若し事實を書かないのなら、僕は吉原と  
云ふ處へ往つたのがこれ切だと云ひたい。併し  
少しも偽らずに書かうと云ふには、ここに書き  
添へて置かねばならない事がある。それはずつ  
と後であつた。僕は一度妻を迎へて、その妻に

亡くなられて、二度目の妻をまだ迎へずにゐた  
時であつた。或る秋の夕方、古賀が僕の内へ遊  
びに來た。歸り掛に上野邊まで一しよに行かう  
と云ふことになつた。さて門を用掛けると、三  
枝と云ふ男が來合せた。僕の縁家のもので、古  
賀をも知つてゐるから、一しよに來ようと思ふ。  
そこで三人は青石横町の伊豫紋で夕飯を食ふ。  
三枝は下情に通じてゐるのが自慢の男で、こ  
れから吉原の面白い處を見せてくれようと思ひ  
出す。これは僕が嫌だと云ふので、餘りお察し  
の如過ぎたのかも知れない。古賀が笑つて行か  
うと云ふ。僕は不精不精に同意した。

僕等は大門の外で車を下りる。三枝が先に立  
つてぶらぶら歩く。何町か知らないが、狭い横  
町に曲る。どの家の格子にも女が出てゐて、外  
に立つてゐる男と話をしてゐる。小格子とい  
ふのであらう。男は大抵紳士である。三枝は  
其一人を見て、好い男だなあと云つた。いなせ  
とでもぶぶやうな男である。三枝の理想の好  
男に紳士者のうちにあると見える。三枝は、  
一寸失敬と云ふかと思へば、小さい四辻に  
擔荷を卸して、豆を煎つてゐる爺さんの處へ  
行つて、彈豆を一袋買つて林に入れる。それ  
から少し歩くうちに、古賀と僕とを顧みて、「こ

神田で焼酎を五六杯飲ませられたので、咽が乾く。土瓶に手を當てて見ると、好い加減に冷えてゐる。傍に湯呑のあつたのに注いで見れば、濃い番茶である。僕は一息にぐつと飲んだ。

その時僕の後にしてゐた襖がすうと開いて、女が出て、行燈の傍に立つた。芝居で見たおいらんのやうに、大きな袴を結つて、大きな櫛笄を挿して、赤い處の澤山ある胴拔の裾を曳いてゐる。目鼻立の好い白い顔が小さく見える。例の中年増が附いて來て座布団を直す、そこへすわつた。そして黙つて笑顔をして僕を見てゐる。僕は黙つて眞面目な顔をして女を見てゐる。

中年増は僕の茶を飲んだ茶碗に目を附けた。「あなた此土瓶のをあがつたのですか。」

「うむ。飲んだ。」

「まあ。」

中年増は變な顔をして女を見ると、女が今度はおざやかに笑つた。白い細かい齒が、行燈の明りできらめいた。中年増が僕に問うた。

「どんな味がしましたか。」

「旨かつた。」

中年増と女とは二たび目を見合せた。女が

二たびおざやかに笑つた。齒が三たび光つた。土瓶の中のはお茶では無かつたと見える。僕は何を飲んだのだから、今も知らない。何かの煎茶であつたのだらう。まさか外用茶ではなかつたのだらう。

中年増が女の櫛笄を取つて片附けた。それから立つて、黒塗の簀笥から桂を出して女に被せた。派手な堅綿のお仕縮緬に、紫襷子の襟が掛けである。此中年増が所謂番新と云ふのであらう。女は黙つて手を通す。珍らしく纖い白い手であつた。番新がかう云つた。

「あなたもう遅うございますから、ちとあちらへ。」

「寝るのか。」

「はい。」

「己は寝なくても好い。」

番新と女とは三たび目を見合せた。女が三たびおざやかに笑つた。齒が三たび光つた。番新がつと僕の傍に寄つた。

「あなたお足袋を。」

此褌衣婆が僕の紺足袋を脱がせた手際は實に驚くべきものであつた。そして僕を柔かに、しかも反抗の出来ないやうに、襖のあなたへ連れ込んだ。

八疊の間である。正面は床の間で、袋に入れた琴が立て掛けてある。黒塗に蒔繪のしてある衣箱が縦に一間を爲切つて、其一方に床が取つてある。婆あさんは柔かに、しかも反抗の出来ないやうに、僕を横にならせてしまつた。僕は白狀する。番新の手腕はいかにも巧妙であつた。併しこれに反抗することは、絶對的不可能であつたので無い。僕の抵抗力を麻痺させたのは、慥に僕の性欲であつた。

僕は露段に構はずに、車を云ひ附けて歸つた。小菅の内に歸つて見れば、戸が締まつて、内はひっそりしてゐる。戸を叩くと、すぐにお母様が出て開けて下すつた。

「大さう遅かつたね。」

「はい。非常に遅くなりました。」

お母様の顔には一種の表情がある。併し何とも仰やらない。僕にはその時のお母様の顔がいつまでも忘れられなかつた。僕は唯「お休なさい」と云つて、自分の部屋にはひつた。時計を見れば三時半であつた。僕はその儘床にもぐり込んでぐつすり寝た。

翌日朝食を食ふとき、お父様が、三輪崎とか云ふ男は放縱な生活をしてゐるので、酒を飲めば、飲み明かさねば面白くないと云ふ風では

故意とするのである。

「婆あ。」

「なんですよ。あなた、顔に顔がでられて来ましてよ。熱いお湯で拭きなさい。」

お上は女中に手拭を絞つて来させて、望月君に顔を拭かせる。苦味ばしつた立派な顔が、綺麗になる。僕なんぞの顔は拭いても拭き榮がしないから、お上も構はない。

「金井さん。ちよいと。」

お上が立つ。僕は附いて廊下へ出る。女中がそこに待つてゐて、僕を別間に連れて行く。見たことも無い藝者がゐる。座敷で呼ばせるのは種が違ふと見える。少し書きにくい。僕は、衣帯を解かずとは、貞女が看病をする時の事に限らないと云ふことを、此時教へられたのである。

今度は事實を曲げずに書かれる。その後、待合には行つたが、待合の待合たることを経験したのは、これを始めの終であつた。

数日の間の例の不安が意識の奥の方にあつた。併し幸に何事も無かつた。

暖くなつてから、或日古賀と吹抜亭へ圓朝の話を聞きに行つた。すぐ傍に五十ばかりの太った爺さんが藝者を連れて來てゐた。それが貞

女の藝者であつた。彼と僕とはお互に空氣を見るが如くに見てゐた。

※

同じ年の六月七日に洋行の辭令を貰つた。行く先は獨逸である。獨逸人の處へ稽古に行く。壹岐坂時代の修行が大いに用立つ。

八月二十四日に横濱で舟に乗つた。とうとう妻を持たずに用立したのである。

※

金井君は或夜ここまで書いた。内ぢゆうが寝靜まつてゐる。兩戸の外は五月雨である。庭の植込に降る雨の、鈍い柔な音の間に、亜鉛の桶を走る水のちやらちやと云ふ聲がする。四片町の通は往來が絶えて、傘を打つ點滴も聞えず、ぬかるみに踏み込む足駄も響かない。

金井君は腕組をして考へ込んでゐる。

先づ書き掛けた記録の續きが、次第も無く心に浮ぶ。伯林の Unter den Linden を西へ曲つた處の小さな珈琲店を思ひ出す。Café Keitel である。日本の留學生の集る處で、蟹屋蟹屋と云つたものだ。何通りつても女に手を出さず

にゐると、或晩一番美しい女で、どうしても日本人と一しよには行かないと云ふのが、是非金井君と一しよに行くと云ふ。聴かない。女が痼癢を起して、Helinge のコップを床に打ち附けて壊す。それから Kristinasse の下宿屋を思ひ出す。家主の婆あさんの姪と云ふのが、毎晩肌襦袢一つになつて來て、金井君の寝てゐる寢臺の縁に腰を掛けて、三十分づつ話をする。「をばさんが起きて待つてゐるから、唯お話だけして來るのなら、構はないと云ひますの。好いでせう。お婆では無くつて。」肌の温まりが金を隔てて傳はつて來る。金井君は食佛法の第何條かに依つて、三箇月分の宿料を拂つて逃げる。毎晩夢に見ると書いた手紙がいつまでも來たのである。Letztes の戸口に赤い灯の附いてゐる家と思ひ出す。緑にせた明色の髪に金粉を傳けて、肩と腰と言訣ばかりの赤い著物を著た女を、客が一人宛傍に引き寄せてゐる。金井君は、「已は肺病だぞ、傍に來るとうつるぞ」と叫んでゐる。維也納のホテルを思ひ出す。臨時に金井君を連れて歩いてゐた大官が手を引張つたのを怒つた女中がゐる。金井君は馬鹿氣た敵愾心を起して、出發する前日に、今夜行くぞと云つた。「あの右の廊下の突き當りです



「こた」と云つて、ついで或店にはひる。馴染の家と見える。

二階へ通る。三枝が、例の仲居の敏捷な男と、彈豆を撮んで食ひながら話をする。暫くして僕は鼻を衝くやうな狭い部屋に案内せられる。ランプと烟草盆とが置いてある。煎餅布團が布いてある。僕は座布團が無いから、爲方なしにその煎餅布團の眞中に胡坐をかく。紙巻烟草に火を付けて吞んでゐる。裏の方の障子が開く。女がはひる。色の眞着な、人の好きさうな年増である。笑ひながら女が云ふ。

「お休なさらないの。」

「己は寝ない積だ。」

「まあ。」

「お前はひどく血色が悪いでは無いか。どうかしたのかい。」

「ええ。胸膜炎で二三日前まで病院にゐましたの。」

「さうかい。それでゐて、客の處へ出るのはつらからうなあ。」

「いいえ。もう心持は何ともありませんの。」

「ふむ。」

暫く顔を見合せてゐる。女が矢張笑ひながら云ふ。

「あなた可笑しうございますわ。」

「何が。」

「かうしてゐては。」

「そんなら腕角力をしよう。」

「すぐ負けてしまふわ。」

「なに。已もあまり強くは無い。女の腕と云ふものは馬鹿にならぬものださうだ。」

「あら旨い事を仰やるのね。」

「さあ来い。」

煎餅布團の上に肘を突いて、右の手を握り合つた。女は力も何もありはしない。いくら力を入れて見ると云つてもだめである。僕は何の力をも費さずに押へ附けてしまつた。

障子の外から、古賀と三枝とが聲を掛けた。

僕は二人としよに歸つた。これが僕の二度目の吉原通であつた。そして最後の吉原通である。序だから、ここに書き添へて置く。

※

二十一になつた。

洋行がいよいよ極まつた。併し辭令は貰はない。大學の都合で、夏の事になるだらうと云ふことである。

いろいろな縁談で、お母様が頭に氣を揉んで

お出なさる。

古賀が、後後のために好からうと云ふので、僕を某省の参事官の望月君と云ふ人に引き合せて。此人は某元老の婿さんである。下谷の大茂と云ふ待合で遊ばれる。心安くなるには、矢張その待合へも行くが好いと云ふことになる。折折行く。變者を四五人呼んで、馬鹿話をして歸る。その頃は物價が安くて、割前か三四圓位であつた。僕は古賀の勤めてゐる役所の翻譯物を受け合つてしてゐたので、懷中が温であつた。その頃は法律の翻譯なんぞは二枚三圓位取れたのである。五十圓位の金はいつも持つてゐた。ところが、僕が一しよに行くと、望月君がきつと酒ばかり飲んで歸られる。古賀が云ふには、「あれは君に遠慮してをられるのかも知れない、僕が遠慮の無いやうにして遣らう」と云つた。そして或晩古賀がお上に話をした。僕が此時古賀に抗抵しなかつたのも、藝者はどんな事をするものかと思ふ。Nouvelle があつたからだらう。

一月の末でもあつたか。寒い晩であつた。いつもの通三人で、下谷藝者の若くて綺麗なのを集めて、下らない事をしゃべつてゐる。そこへお上がはひつて来る。望月君が妙な聲をする。

能力では無い。Impotentでは無い。世間の人は性欲の虎を放し飼にして、どうかすると其背に騎つて、滅亡の谷に墜ちる。自分は性欲の虎を馴らして抑へてゐる。羅漢に跋陀羅と云ふのがある。馴れた虎を傍に寝かして置いてゐる。童子がその虎を怖れてゐる。Bhadra とは賢者の義である。あの虎は性欲の象徴かも知れない。唯馴らしてあるだけで、虎の怖るべき威は衰へてはゐないのである。

金井君はかう思ひ直して、靜に巻の首から読み返して見た。そして結末まで讀んだときには、夜はいよいよ更けて、雨はいつの間にか止んでゐた。樋の口から石に落ちる點滴が、長い間を置いて、聲を打つやうな響をさせてゐる。

さて讀んでしまつた處で、これが世間に出されようかと思つた。それはむづかしい。人の皆行ふことで人の皆ふは無いことがある。

Prudery に支配せられてゐる教育界に、自分も籍を置いてゐるからは、それはむづかしい。そんなら何氣なしに我子に讀ませることが出来るか。それは讀ませて讀ませられないこともあるまい。併これを讀んだ子の心に現はれる効果は、豫め測り知ることが出来ない。若しこれを讀んだ子が父のやうになつたら、どうで

あらう。それが幸か不幸か。それも分らない。Defeat が詩の句に、「彼に服従するな、彼に服従するな」と云ふのがある、我子にも讀ませたくはない。

金井君は筆を取つて、表紙に拉句語で

### VITA SEXUALIS

と大書した。そして文庫の中へぱたりと投げ込んでしまつた。

(明治三十八年五月六日)  
(劉王屯を發して學寮屯に至る)

春風や種蒔く器叩く人

杏あか李しろあとは綠なり

兵站や積荷卓なす桃の村

馬上十里黄なるてふてふ一つ見し

(明治三十八年六月十九日)  
(於奉)

えりきらひ白き扇を買ひにけり

人前を脈脈として團扇かな

(「うた日記」より)

### 學校

(明治三十七年十月三十日)  
十里河

沙河ちかき  
おほやけの  
ふるさとの  
なつかしと  
學校の  
こまやかに  
そを見れば  
天翔  
うらやみし  
軍令は  
身を捨つる  
世のほまれ  
あはれあはれ  
師とたのむ  
生死の  
おほやけの  
人言を  
人言に  
哀とおもひぬ

會戦はてて  
事しげき日に  
わこが父來ぬ  
よみてもゆけば  
試験のさまを  
しるしおこせつ  
寄宿舎ごもり  
鳥の翼を  
昔しのばゆ  
おごそかなれど  
ますらたけをは  
もとむるならじ  
學生の身は  
人し批判ぞ  
關路なりける  
事しげけれど  
かへりみぬ我  
ほださるる子を

戦の場にもまして  
まなごらが  
學の  
庭や  
苦しかるらん

(「歌日記」より)

よ。春を穿いて入らつしつこは嫌。」響の物に應ずる如しである。咽せる様に香水を部屋に蒔いて、金井君が廊下をつたつて行く。香足袋の音を待つてゐた。Minchen の珈琲店を思ひ出す。日本人の群がいつも行つてゐる處である。その常客に、やや無頼漢肌の土地の好男子の連れて来る、凄味掛かつた別品がある。日本人が皆其女を褒めちぎる。或晩その二人連がゐるとき、金井君が便所に立つた。跡から早足に便所にはひつて来るものがある。忽ち瘦せた二本の臂が金井君の頸に絡み附く。金井君の唇は熱い接吻を覺える。金井君の手は名刺を一枚握らせられる。旋風のやうに身を回して去るのを見れば、例の凄味の女である。番地の附いてゐる名刺に「十一時三十分」と云ふ鉛筆書きがある。金井君は自分の下等な物に關係しないのを臆病のやうに云ふ。同國人に、面當をしようといふ氣になる。そこで冒險にも此 Reauté Yons に行く。腹の皮に妊娠した時の痕のある女であつた。此女は無路に著て行く衣裳の質に入れたあるのを受けるために、こんな事をしたと云ふことが、跡から知れた。同國人は荒肝を抜かれた。金井君も随分悪い事の眼をしたのである。併し金井君は一度も自分から攻勢を取らね

ばならない程強く性欲に動かされたことは無い。いつも陣地を守つてだけはゐて、砲い、砲い。と餘計な負けじ魂とのために、をりをり必要な衝突をしたに過ぎない。金井君は初め筆を取つたとき、結婚するまでの事を書く積であつた。金井君の西洋から歸つたのは二十五の年の秋であつた。すぐに貰つた初め細君は長男を生んで亡くなつた。それから暫く一人でゐて、三十二の年に十七になる今の細君を迎へた。そこで初は二十五までの事は是非書かうと思つてゐたのである。さて一日筆を置いて考へて見ると、彼の不必要な衝突の偶然に繰り返されるのを書くのが、無意味ではあるまいかと疑ふやうになつた。金井君の書いたものは、普通の意味で云ふ自傳では無い。それなら是非小説にしようと思つたかと云ふと、さうでも無い。そんな事はどうでも好いとしても、金井君だとして藝術的價値の無いものに筆を著けたくは無い。金井君は Isolde の云ふ、dunysos 的なものをだけを藝術として視ては無い。Apollon 的なものをとも認めてゐる。併し戀愛を離れた性欲には、情熱のありやうがないし、その情熱の無いものが、奈何に自叙に適せないかと云ふことは、金井君も到

底自覺せずにはゐられなかつたのである。金井君は斷然筆を絶つことにした。そしてつくづく考へた。世間の人は今の自分を見て、金井君は年を取つて情熱が無くなつたと云ふ。併しこれは年を取つたためでは無い。自分は少年の時から、餘りに自分を知り抜いてゐたので、その悟性が情熱を萌芽のうちに枯らしてしまつたのである。それが、いつまらない動機に誤られて、受けなくても好いことを受けた。これは餘計な事であつた。結婚をするまでこのを受けずにゐた方が好かつた。更に一步を進めて考へて見れば、果して結婚前にこのを受けたのを餘計だとするのなら、或は結婚もしない方が好かつたのかも知れない。どうも自分は人並はづれの冷淡な男であるらしい。金井君は一旦かう考へたが、忽ち又考へ直した。なる程、このを受けたのは餘計であらう。併し自分の悟性が情熱を枯らしたやうなのは、表面だけの事である。永遠の氷に掩はれてゐる地極の底にも、火山を突き上げる猛火は燃えてゐる。Michelangelo は青年の時友達と喧嘩をして、拳骨で鼻を叩き潰されて、鼻を戀愛に絶つたが、卻て六十になつてから Vittoria Colonna に逢つて、珍らしい戀愛をし遂げた。自分は無



は可笑しい。人が灰を掻き廻して、火箸を妙な處に歪めて置くと、博士はそれをいつもの場所につきんと立てる。人に驚いて顔を見られて、はつと氣が付いて、獨で氣の毒がるのである。或時博士の内へ、新しい下女が来た。その下女が火鉢を持って来ると、火箸を半分以上灰に埋めて寝かして持つて来る。博士は度々小言を言つて直させた。その下女は八王子のものであつた。それから餘程立つてから、博士が八王子へ講演に頼まれて行つたことがある。宿屋へ着いて見ると、火鉢に火箸が寝かしてある。灰に半分埋めてある。博士は釋然として、成程これだなと獨言を言つたのである。

博士は手を火鉢に翳して、こん度はゆつくり四邊を見廻した。すると新築の座敷であるのに、肝掛窓の障子に大きい穴が一つ開いてゐるのが目に附いた。直に腹り潰さしたいのであるが、小野博士は一夜泊の宿屋で障子を張り替へさせたなどといふ逸話を、新聞に書かれてもしては大變だと思つて熬へた。さて障子が氣になつたので、ついと立つてその障子を開けて見れば、相應に峻しい山で、見上げると、松の大木が竝んで立つてゐる裾に、赤土が透いて見えつゝ。空が晴れて風が無いので、寒くはない。

暫く眺めてゐる處へ、下女が来て、お風爐が宜しうございますと云つた。博士は草包から着替の綿衣を出して、今まで着てゐた洋服と着替へて、又草包の處へ行つて、手拭やらしヤボンやら出して、その跡へ時計と金いれを入れて置いて、湯に降りて行つた。

湯から上つて来ると、頼んで置いた床屋が来る。博士は宿屋で湯から上ると、いつでも濡手拭の置場に困る。けふも嫌なのを我慢して、廊下の手擦に掛けて置く。日本の宿屋にトアレットのないのは一大缺點だとは、餘り身綺麗にする方でもない博士のいつも言つてゐる事である。

博士は廊下に置いてある籐の椅子に腰を掛けて、顔を剃らせることにした。床屋が湯を貰ひにいつた間、博士は外を眺めてゐる。手擦の下は、幅一間ばかりの帯のやうな地面を残して、崖になつてゐる。崖の縁には、芝生に小松がとびとびに植ゑてある。その下は人力車のやうやう摩れ違ふ位の道で、道に沿うて小川が流れてゐる。向岸には農家らしい、寂しい家の背戸が見える。その先には家の屋根や木立がところどころ見えて、その上に羅を張つたやうな霧が棚引いてゐるのである。

下の道には夫で人通りがない。博士はふと東京の内の事を思ひ出した。今時は細君が六つになる姉嬢を連れて、弟の赤ん坊を女中に抱かせて、湯屋から歸つて来る頃だなど思つたのである。赤ん坊は、細君が男の子を欲しい欲しいと云つてゐるうちに生れたので、やうやう六箇月になつてゐる。それでも、もう博士の顔を見覚えて、博士が小さい、まだ自由にならない手を握まへて何か言ふと、圓い目を半月形にして、唇の間から舌の尖を少し出し出して笑ふのである。博士の目には、この赤ん坊の顔が浮んだ。

床屋が湯を持つて来て、顔を剃り始めた。剃りながら、滑な大阪詞でいろいろな問はず語をする。年は五十を越してゐるらしい。若い時には男自慢であつたかと思はれるやうな、羞びた青年とでも云ひたい男である。大阪かと云へば、「さやうだす」と答へるが、諸國に賣の江戸兒があるやうに、四國九州には賣の大阪ものが多から、眞偽は覺えない。話は一月にはいつの年でも土地が寂しいといふことから、客の多い頃の繁榮に移つて、果は金毘羅様の御利益といふことになる。こんな不思議があつた、こんな謎のやうな事實があつたと、どの客にも話すものと見えて、新聞の三面記事を読み上げる

# 金 毘 羅

冬の休暇に、四國へ心理學の講演に輦まれて出掛けた文學博士小野翼君は、高松市で講演を済まして、一月十日に琴平まで来て、象頭山の入口にある琴平華壇にはひつた。

博士を請待した有志者の一人で、中學教員をしてゐる小川光といふ、緒顔のでつぷり太つた男が、萬事世話を焼いてくれて、わざわざ此所まで送つて來た。

琴平華壇には、一月頃に客は一人も無い。博士は中二階になつてゐる、十五疊敷の廣間に通された。参考書に着換を入れた小革包を大きな床の間に置かせて、その前に敷いてあつた座布團をずつと横の方にゐざらせて、霜降の洋服に寛く包まれてゐる、瘦せた體をその上に置いた博士は、團を隔てて、次の間の風爐と茶道具との置いてある處に据わつてゐる小川に聲を掛けた。

「さあ、小川君こつちへおはひり下さい。」

「いや、さぞ御疲勞でございませう。」  
「なあにわたくしなんぞよりか、君の方がどの

位骨を折られたか知れませんが、講義なんといふのも、自分で新しく組み立てて、それに使ふ材料も選り抜いた上に、聴く人が退屈しないやうに、かういふ處で人に感動を興へようといふ箇所まで工夫して置いて爲るとなると、なかなか容易ではないでせう。わたくしなんぞは行きあたりばつたりで進るのに、生れつきキツト

は無いろ、辯は悪いと來てゐるのだから、さぞ諸君がお困でしたらう。その代り、わたくしの方では、實は濟まない程骨を折つてゐないので、韓事をしてお出になつたあなたの方のお小折と比べものになりはしません。さあ、どうぞこちらへ。」

博士は火鉢の向側へ座布團を直して、小川をそこへ迎へるのである。小川は少し狭過ぎる黒の洋服に無理に詰め込んだやうな、太つた體を窮屈さうに廣間に持ち込んで、座布團より遙か手前に蹲つた。

「まだお食事までには大分時間がございます、今日は丁度土地のものが讃岐山參詣をいたす

目でございますから、先生も御參詣なさつてはいかがでございませう。山の景色を御覽になつても宜しいかと存じますが。」

「さうですなあ、まあ、それをお敷なすつて、どうかお樂に。わたくしは參詣よりか、湯にでもはひつて來ませう。」

「なる程。その方がお疲が戻つて宜しうございませう。いづれ後程伺ひます。」

小川は廣間をゐざり出て、櫓を下りて行つた。博士は近眼目金を脱して、ハンケチで拭いて、鞘に入れて、襦子窓の處に居るある机を持つて來て傍へ引き寄せて、目金を硯箱の脇に置いた。博士は自分の書齋でも、目金を同じ處に置くのである。教壇で目金を脱した時は、横まつて白墨の箱の脇に置くのである。そこで四邊を一寸見ると、次の間から廊下に出る障子の

開いてゐるのが氣になる。それを締めようか、次の間との間の襖を締めようかと考へて、襖の方を締めた。

博士はこれで落着いたといふ様子で、火箸を取つて炭の盆であるのを直して、火箸をきちんと揃へて、火鉢の隅に立てた。火箸一つでも、立て様が積まつてゐる。立てる場所も極まつてゐる。人と火鉢を圍んでゐる時なんぞ

「別に用事ありませんし、丁度舟に間に合ひさうですから。」

「さやうでございますか。實は會にはひつてゐる土地のものが二三人ございますので、今晚お泊になるなら、どちらかへお伴を致しまして、

お話を伺ふ筈でございますでしたが、それでは致し方がございません。唯今も下へ一人參つてを

りまして、お立の事を承つたものですから、大相殘念がつてをりました。」

「いや。そんな事があつたのですか。併し駄目ですよ。わたくしは會話が下手で。」

「いえ。どう致しまして。唯お出下さるばかりで、皆難有があるのでございます。」

博士は女中の持て來た茶を飲んで、飲んだ跡の茶碗に又茶を注いで、割箸を洗つて半紙で拭いて膳の上に置いた。食べてゐる間でも、膳に

汁が翻れると、半紙を出して拭く。物を食べさして置くといふことが嫌で、尤で手を着けずに

置くか、さうでなければ残らず食べてしまふ。それで茶か何か遣つてゐるのかと思ふと、さう

ではないのである。

女中が膳を持つて起つと一しよに、博士はそこらに出してある物を革包に片付け始めた。小川は體を前に乗り出すやうにして云つた。

「ちとお手傳を致しませうか。」

「いや。何も格別出てはをりません。」

實際格別何も出てはゐないのである。湯に行つたとき持つて行つたものをしまつて、不歸兒

兒に入れてゐる物を出せば、跡は着てゐる綿入をしまふより外に、何の用事もないのである。

博士は左の手で火鉢の縁を押へて、少し腰を浮かせた。

「一寸失敬して着換へませうか。」

小川は平氣で起たうともしない。兜兒から新しい朝日の包を出して、封を切つて一本吸ひ附

けてゐる。博士は、着換をするときに傍にゐられるのが氣にはなるが、その氣になるのを相手に知らせたくないといふやうな風で、ホワイト

シャツの引掛けてある衣桁の傍に往つて、着換をし始めた。そんな事には氣が附かずに、煙草を吞みながら話出した。

「先生。とうとう金毘羅にお出なさらずに、お立になりますなあ。」

詞が少しぞんざいになつてゐる。小川といふ男は人に逢つたときに、一應丁寧過ぎる程な挨拶をしてそれから段々家族的な詞を遣ふ。これが此男の交際家として重寶がられてゐる唯一

の性質なのである、なる程これは人に近づく一つの手段には相違ない。小川は嘗て幾分か此性質のお蔭で成功して、縣の先輩に東京へ連れ出された事もあつた。

併しどこか頭が鈍いところがあつて、人を觀察するといふことが出来ない。人にうるさがられても分らないことがある。それが此男の再び四國に舞ひ戻つた原因である

らしい。博士は此男のゐるのが氣になれば氣になる程、わざわざ念入に相手になつてゐるのである。博士は襟飾を結びながら云つた。

「はあ。何も意味があつて行かないのではないのです。又ゆつくり來たときに行くことにしま

すよ。」

「併し御參詣なさらずにお立になりますと、金毘羅は荒神だと申しますから、祟るかも知れません。今晚お泊りなされると、宴會にも御出が

來ますし、御參詣も出來ますのですが。はははは。」

「いや。諸君はわたくしを待つて下さつたのかも知れませんが、金毘羅様はわたくしが參詣し

ようなどとは豫期せられないと思ひます。」

「それでも山靈が待つなぞといふことを申しますから、何とも申されません。一體金毘羅に就

いては、いろいろな傳説があるやうに、承りま



やうに、すらすら瘧じ立てる。大抵舟乗が颯風に逢うて助かつたといふやうな筋であるが、中には病氣の直つた話もある。

博士は奇蹟といふことに就いては、多少考へて見たこともあるので、別に珍らしくも思はずに聞いている。全歐羅巴の貴賤老若がLiliesの岩窟へ押し掛ける世であつて見れば、金毘羅を信ずるもののあるのに不思議はない。かう思ふと同時に、博士は細君が金毘羅に詣ることのあるのを思出した。博士の細君は今熊本に隠居してゐる、一頃京橋邊にゐた人の如く、華族女學校を卒業したのだから、ルビの附いてゐない新聞位讀める。算術も、此方に極不得手な博士よりは達者である。併し、物の道理を考へて見ることは教へられなかつたものと見えて、理性の方面は頗る薄弱である。博士の處へ來てから同じ博士仲間、隣同志になつてゐる高山教授の奥さんと心安くなつて、子供が病氣などをすると、その奥さんに勧められて、虎の門の金毘羅へ祈禱を頼みに行く。それも念の入つた迷信をしてゐるのではない。隣の奥さんも行くから、自分も行くだである。考へて見て行くのではない。併し博士が金毘羅様の本家の直傍まで來たと知つたら、おれでも受けて歸つて

貰ひたく思ふかも知れない。博士は床屋の話を聞きながら、こんな事を思つた。床屋が歸ると、直に夕飯の饌が出た。酒を一滴も飲まない人であるから、十五分も掛からないうちで食べる。食べながら、博士はこれからどうしようかと考へた。此家に着いたときは、一晩泊る積でゐたのである。泊る積といふよりは、泊らうとも泊るまいとも、はつきりは考へずに、いづれどうかしようと思つただけで、このどうかしようが自然泊ることになるだらうと思つたのである。それが、夕飯を食べながら考へて見るうちに、何の目的もなく、一晩ここに泊るのは無駄だといふ氣になつた。それには博士の各な性分も手傳つてゐるかも知れない。博士は旅行をするのに、よく汽車に乗る。それは時間を節約するためであるのは無論である。併しその惜むものが時間だけであると云つては、博士の意中を十分に言ひ現はしてゐないのである。博士は儘に茶代を遣つて宿屋に泊るだけの金をも惜むに相違ない。それは著述家や或私立大學一教へに行つてゐる、収入の少ない博士の身に取つては餘り非難すべきではないかも知れないが、兎に角各だと云はれるのは爲方があるまい。唯その惜む金が溜まるのでないといふことを斷つ

て置いたら、博士に甚だしい宛を被せることにはならないだらう。そこで博士が琴平に泊ることに二の足を踏み出したのには、幾分か各な處が手傳つてゐるのである。そんなら、目的なしに時間と金を費すのが嫌だといふだけで、博士が泊ることを躊躇したかといふと、さうではない。今一つ其底に伏在してゐる動機がある。これは博士の名譽のために言つても好からう。博士は東京に残して置いた妻が戀しくなつたのである。

そこで博士は飯の給仕に來てゐる丸髷の女中に、舟の時刻を問うた。舟は晩の七時に出て、あくる日の午前五時に、大阪に着くといふのである。博士は直に女中に期定と車を雇ふ事とを言ひ附けた。

女中が茶を取りに下りて行つて、中二階のお客が夜舟で立つといふのを、小川が聞き付けて、女中と一しよに上つて來た。まだ湯にはひらなかつたと見えて、洋服の儘でゐた小川は、圓い膝を窮屈に曲げてすわつて、小さい目を無理に開けるやうにして、博士の顔を見て、かう云つた。  
「先生。泊らずにお立なさいますさうでございませぬ。」

る。どうも總てが紙の上の辯舌になつたやうな気がする。それから書いたときには論理が立派に整つてゐた積であつたのに、話してゐるうちに連絡を失つて、慌てて順序を變へたり、別的事を入れたりしたのを思ひ出して、嫌な心持になる。しまひには間違を言つて言ひ直した處、吃つた處、と切れた處まで思ひ出して氣にする。併しそれは皆形式ばかりの事だから、どうでも好いと、自ら辯護もして見る。そこで内容はどうかといふのに、講義をする前には、参考書は随分廣く調べる。そしてそれを雜然と並べて置くやうなことは決して爲ない。自分の立脚地から、相應な批評を加へる。跡で速記を読んで見ても、智力の上から概念を流して見て、別に不都合な處はない。それであるのに、ついぞ人を感動させた、人に強い印象を與へたと思つたことのないのが、氣に入らない。事に依ると思想までが紙の上の思想になつてしまつてゐるのではないかと思はれてならない。それに博士は、自分の判斷の標準になる立脚地といふものに満足してゐない。

博士は文科大學を一般の真中の席順で卒業して、籍を某私立大學に置いた處が、所謂頭の良い人なので、其學校の哲學科だけは殆ど自分

の物のやうになつて、間もなく洋行させられることになつた。さて伯林に往つたのが、丁度 Nietzsche 全盛の時代であつた。當時の小野君は、Nietzsche を多少の興味を以て讀んだ。併し一部の青年輩と一しよになつて、其奇矯な説に心酔するには、小野君は既に老成過ぎてゐた。超人といふ輕氣球に乗つて、Deceitance の淵から飛び上がることが出来なかつた。そんならこつとつと、自然科學に秋波を送つてゐる心理の研究なんぞに掛からうかと思ふと、Brunetiere が科學の破産と名づけたやうな潮流が、踏み締めるやうとする足をすくつて轉ばせる。そこで下宿屋の二階に轉んで、其頃むやみに掘り出される「青い花」の文學に耽つた。Nietzsche の死に先だつこと一年にして歸朝した小野君が、羅曼底格の思想といふ論文を土産に持つて來たのは、かうしたわけである。

小野君の歸朝土産は博士の學位を以て酬いられた。併し小野博士に堅牢な哲學上の立脚地のないことは、其博士論文の緣起から推して考へて見ても、別に不思議はないのである。

日記を草包にしまつた博士は、午前に高松で終つた講演の事を考へて見た。初の約束が、一週間で心理學を講ずるといふ事になつてゐた

ので、博士は Winant の小さい心理學に依つて日程を作つた。そこで最後の今日になつて、靈といふものを講ぜねばならないのだから、議論が形而上になつて來るに隨つて、博士の紙の上の辯舌は遺憾なく馬脚を露はしたのである。博士は脱した日金を拭きながら、いつもより一層強い不愉快を感じた。

博士は起つて甲板に出た。船の進行のために起る風は強いが、船體は殆ど動搖しない位である。灰色の霧に包まれた島々が船を流して又迎へる。暫く立つて見てゐたが寒くなつたので、便所に往つて歸つて、上衣を脱いで床にはひつた。

一寐入すれば大阪に着くから、早く寐ようと思ふが、腦髓の上に疲勞が鈍い重りを加へてゐる對に疲附かれない。何だか自分の生活に内容が無いやうで、平生哲學者と名告つて、他人の思想の受皿をしてゐるのに嫌なやうな心持がする。船の機關ががたがた云ふのが耳に附く。自分の體も此船と同じことで、種々な思想を載せたり卸したり、がたがたと運轉してゐるが、それに何の意義もないやうに思ふ。妻や子供心事を思つて見る。世には夫婦の愛や、家庭の幸福といふやうな物を、人生の内容のやうに

すが、本當は何を祀つたものでございませう。」  
「それはこんで高橋博士でも來られた時にお聞になるが好いでせう。原語は Kumbira で夜叉神ださうです。同じ語が星座の名や鰻の事になつてゐるのは、直接に關係を有してゐないといふことですが、船頭なんぞに拜まれるところを見ますと、何だか星や鰻にも縁がありさうな心持がしますよ。」

「へえ、先生はいづれ梵語も御研究になりましたのでございませう。」

「いや、一向進りません。Devanagari の文字を覺えて字書が引ける位が精々です。」

小川は「はあ」と云つたが、何の事だか分からなかつた。そのうち博士は洋服を着てしまつて、着換を革包にしまつて、机の上に置いてあつた日金を掛けた。小川は見送りに行く支度になつて下りて行つた。

夕霧の漂つてゐる中で、あちこちの家に火が附き初める頃、二臺の車は廻船問屋に着いた。狭い家にどれが客やら内ものやら見分が附き兼ねる程、船の出るのを待ち合はせる人が入り込んでゐる。あらゆる種類の小荷物が置き散らかしてあるので、足の踏み場もない土間から、きたない上草履の脱ぎ散らかしてある板の間に

上がる。女中がまごまごしてゐるので、小川は我家のやうに前に立つて博士を案内して、好い加減な明間にはひつて、手を叩いたり、どなたたりして、やうやうの事で、焚火を投げ込んだ火鉢に有り附く。博士が手を焼つてゐるうちに、小川は帳場に行つて世話を焼くのである。

火鉢の中の焚火がいがぶるのに、風がなくて寒さを覺えないので、博士は縁側に出一間間口の障子を明けて据わつてゐる。廊下は絶えず人が通つてゐる。駆けて通るのは内の男や女中で、のろろ通るのは使所に通ふ客である。客の中には大きな金毘羅のお札を背中に負つた儘で、使所に往くのもある。博士はこれを見てゐて、病人らしいものが少いだけが Lourdes より増だと思つた。

そのうち船が出ると云つて知らせに來た。小川は博士と一しよに船に乗つて、船まで送つた。博士のキャビンまで覗いて見て、暇乞する時の挨拶は、又改まつて、恭しくしたのである。

上等に乗る客は、幸に少なかつたので、博士はキャビンを一人で占領することが出来た。不得手な體操の眞似をして、高い處へ上つたり、人の寐がへりをしてきいさい云はせる下に寐てゐる必要はないと思つて、博士は心安心したの

である。室内は寒くないので、博士は外套を脱いで釣に掛けて、長椅子のやうにしてゐる處へ、革包を載せた。この長椅子のやうなものには、上等の客が込み合つた時には、三日の客が寐るために拵へてあるであらう。

そのうち船が動出した。併し動くのが殆ど分らない程、海が穏である。金毘羅は祟らないらしい。

博士は長椅子に腰を掛けて、革包の中から日記を出して、萬年筆で書き始めた。先づ高松で講演をしてしまつたことを書く。それから小川光に送られて、琴平華壇へ寄つて、船に乗つたことを書く。皆で二三行である。博士の日記はいつも粗い筋書で、讀み返して見れば興味索然たるものである。形式があつて内容がない。或は博士の生活その物もその通りで、回顧すれば興味索然たるものではあるまいか。

博士はいつも自分の偽た事を跡から考へて見て、その瑕瑾を氣にする人である。講義なんぞをするときには紙切に、あの事から此事と順序を書き附けて、所々に字眼のやうなものさへ書き入れて持つて出るのであるが、さて講義をして見ると、それに性命を吹き入れるといふやうな事が出來た事がない。それが第一に氣にな



受動的に、汽車に運ばれて行くといふ風である。單調な動搖と音響とに誘はれて轉寐を始めるものもある。長くなつてゐる連中は軀をさへ掻き出す。博士はこんな時、いつもNo.の書いた Lourdes の中の汽車の段を思ひ出す。あの小説は人が退屈だと云つて非難するのであるが、博士はその退屈なを面白く思つてゐる。汽車は進行を續けてゐる、絲で吊り下げてある種々な形の手荷物がぶらぶらするといふやうな句を反復して使つてゐる處が、博士には強い印象を與へたのである。總て No. の書いたものの退屈に感ぜられる位な、丁寧な處に、博士は敬意を表してゐるのである。

博士は頭の鈍いやうな感じになる。汽車が速度を緩めて停車場にはひつて、停車場を出て又速度を出すのを、單に機械的に自分の體に感ずる。これに、自分の體が翻弄せられてゐるやうな、多少不愉快な感じが交る。をりをり琵琶湖の死水が銅鐵いろに汽車の窓に映つたり、關が原前後で、緩い傾斜の赤土に低い松の竝んだ丘陵が、覺まつては又開いたりするのが、聞き馴染んだ俗語の旋律のやうに、薄明の意識を襲つて、忽ち消え去つてしまふ。をりをり又何の寫象の連鎖に引かされてか、東京にある子供の

ことなどを思ひ出す。想像力がはつきり子供の麥を目の前に結晶させて見せることさへある。姉娘を連れて銀座通りを歩いてゐる。Fontaine の石だたみを二三間走り抜けては振り返つて笑ふ。四辻になつてゐる處に来て、危いから廢せと云へば、一層早く走り抜けて、振り返つて笑ふのである。赤ん坊が女中に抱かれて門の外に立つてゐる。何か言つて顔を覗くと、目を細くして舌の尖を口から出して笑ふ。この笑ふのが只愉快で笑ふばかりではない。支那人は陪笑といふことを言ふ。あれはお世事に笑ふのである。お附合に笑ふのである。赤ん坊は確に陪笑をする時がある。博士は赤ん坊の泣く時なんぞに、顔を覗いて何か言つて見る。赤ん坊はすぐにいつもの笑顔をして、それから急いで泣き續けるのである。

こんな想像の起る時には、博士はいつも殆ど無意識にこれを抑制しようとする。空想なんといふものは、放任して置くと、どれだけ我儘になるかも知れない。若し自分の顔の表情筋までが我儘になつて、にやにや笑ひながら道を歩くやうになつては大變だと思ふのである。

博士は名古屋あたりを通るとき食堂にはひつた。博士は長く汽車に乗つてゐると、煙草に

酔ふと云つてゐる。これは自分が煙草を呑まないからさう思ふので、煙草のためばかりではあるまいが、頭痛がして来る。今日もそろそろ頭痛のして来る頃であつたので、食堂にはひると、心持が好くなつた。平野水を呑みながら何か食べた。博士は何か一品嫌な物に出くはすと、食事全體が嫌になるといふむづかしい人であるが、幸に嫌な物にも出くはさなかつたのである。

博士は午後になつてからは、目金を脱して兎兒にしまつて、外套を堅く體に巻き附けて、腰掛の背に寄り掛かつて、目を瞑つたり開いたりしてゐた。同じ一時間でも次第に延びるやうな心持がする。それでも欠など遠慮をして爲ない。側に遠慮をするのではない。善く人の云ふ自ら尊敬するだの、自ら欺くのだといふ語法で云へば、自分に遠慮をするといふやうなわけである。

日が暮れてから乗客全體が氣を揉み出す。頻りに時計を出して見て、汽車が停車場の灯の附いてゐる處を素通りをする度に、今は平家であつたとか、程が谷であつたとか云ふ。博士も時計を見なくなるのを、見たつて詰まらないとレフレクトして見ずにゐた。

云つてゐるものもある。併しそれも自分の空虚な處を充たすには足りない。妻も子供も、只因襲の朽ちた素で自分の機關に繋がれてゐるに過ぎない。あゝ、寂しい寂しいと思ひながら博士は寝た。

翌朝キャビンの外がさうざうしいので、博士は起きて上衣を着て、戸を開けて見ると、甲板には人が大勢出てゐる。河岸に並んでゐる家が目の前に見えて、河岸と汽船との狭い間を漕いで行く傳馬では、船頭が罵りかはしてゐる。急いでひつて顔洗つてゐるうちに船は止まつた。大阪に着いたのである。

博士は直に梅田停車場まで車で行つて、停車場の脇の茶店にはひつた。八時三十分の急行に乗る積で切符を買ふことを頼んで置いて、高松の小川の處へ出す葉書を書いた。一高松滞在中は種々御配慮に與り出發の際は應々琴平迄御見送を辱らし感謝に堪へず候。幸に金毘羅の祟も無之事と相見え、海上平穩に大阪に着し、此より汽車にて歸京の途に就き候。諸君に宜しく御傳被下度候。」宛名を書いて小女に渡すと、直に走つて出しに行つた。此店は急行に乗る客杯の休む處ではないのか、外に客もない。帳場に婆あさんが獨り据わ

つて烟草を呑んでゐる。土間の隅に据ゑてある圓卓の上に革包を置いて、その傍で立ちながら葉書を書いた博士は土間の真中に切つてある爐の傍に來て、そこに置いてある籐の椅子に腰を掛けた。爐に入れた焚落しは眞白に灰を被つてゐるが、掻き起さねばならぬ程寒くもない。帳場の婆あさんの處へは、職人體の男が來て話をしてゐる。雙方で知つてゐる家の噂話と見えて、固有名詞ばかり澤山出て、聞くともなしに聞いてゐる博士には、何の事か少しも分らない。郵便を出して來た小をんなは、何が珍らしいのか、少し隔たつた處に立つて博士を見てゐたが、婆あさんに叱られて土間續きの裏手の方へ引込んでしまつた。

博士は所在がないので、帳場の婆あさんにこゝとわつて置いて、外へ出た。そして停車場の前の廣場に立つて、暫く見廻してゐたが、廣場の物はがらんとしてゐて、をりをり停車場に乗り附ける人力車が冬の朝の灰色の静けさを破るばかりである。梅田町の方に倚つて、阪神電車通つてゐる通が一つあるが、その電車も客を待ち合せて止まつてゐる。曾根崎の方の繁華らしい、店の並んでゐる通へ曲つて、少し歩いて見ても、梅鉢の紋の附いた暖簾を下げて、栗

おこしを賣つてゐる店の外には、別に日に附くものもない。

博士はぶらぶらと元の茶店に戻つて來た。今まで見なかつた、絆纏を着た男がゐて、新橋行の二等の切符と急行券とを博士にわたして、もう時間が好いと云つた。博士が茶代を帳場に遣つて出掛けると、絆纏の男が革包を持つて先立たつた。

博士のはひつた二等室は可なり一ぱいであつた。神戸から乗つたにしても、まだ一時間しきや立たないに、もう何か盛んに食つてゐる連中がある。饑舌るものは割合に少ない。相變らず隣席のものが小さくなつて居るのに、朝から長くなつてゐる男が二三人ある。その一人が膝を立てて、足を揃へて出してゐる處に、丸髷の女が下駄を脱いで、腰掛の上に窓の方へ向いて、きちんと据わつてゐたが、それは長くなつてゐる男のお上さんだといふことが後に分つた。

博士は近視の度が半分強いので、汽車の中で物を讀むことを好まない。白人會といふ俱樂部の會にはひつてゐるので、汽車に乗ると併句を考へることにしてゐるが、何時も出來たことがない。今日も同じ事である。京都を過ぎてからは、乗客が皆黙つてしまつて、只貨物の行く

の意に満たない講義をして、夕方に歸つた。  
奥さんはやや不安らしい顔をして博士を待ち受けて、かう云つた。

「只今西田さんが入らつしやつて、丁度お歸になつた處でございしますが、赤さんの咳がどうも痙攣性の咳のやうだから、まだ確とは云はれないが、百合さんを一しよに置かないやうにするが好いと仰やるのでございます。」

「ふむ。それぢやあ百日咳かも知れないといふのだな。」

「多分百日咳ではあるまいが、用心はしなくてはならない。大學の病院にも大分本郷からはひつて來る子供があると仰やるのでございます。十分な事を云へば、赤さんを入院せると好いのだがと仰やつて、考へて入らつしやるやうでございました。」

内氣な、色の蒼い奥さんは、百合さんと同じやうな大きな目を睜つて、博士の顔を見て、力を附けて貰ひたいやうな様子である。博士は醫者の事は分らないから、西田醫學士の判斷以上の判斷は出來ない。そこで自分も不安に襲はれさうになるのを、なるだけ奥さんに知らせないやうに努めた。  
博士の住ひは渡廊下で贅いだ二棟になつてゐ

るので、百合さんを書齋の方に置いて、奥さんが赤ん坊を連れて、廊下の向うに越して行くことになつた。そして博士はをりをり向うの離れへ覗きに行く。百合さんが附いて來さうにするのを、離したり叱つたりして、獨で行くのである。そして半子の様子を見るのに、なる程をりをりする咳が、今日は四つ五つ續いて、その間にひいと云ふやうな聲をする。醫者が痙攣性だといふのはあれだなと思ふ。併し牛乳は相變らず盛んに飲んで、好いうんこをするといふことである。咳の外には何の變つた事もない。

こんな風で四五日立つた。博士は毎日子供の事を氣にしながら、學校で講義をして、夕方に歸る。赤ん坊の咳は次第に好くない。十ばかりも續けてして、その跡でひどく泣くやうになつた。それでも博士が行つて見て、いつもの通り「好い子、好い子」と云ふとちつとお父様の顔を見て、につこり笑ふ。笑つてしまふと又泣くのである。藥は始末が好い。牛乳を盛んに飲むので、其間に哺乳器の硝子管を藥の中に入れて、なんでも平氣で飲む。粉藥は哺乳器の奶頭にまぶつて置れば、これも平氣でしゃぶつてしまふ。なんにしる、この小さい體にも旺盛な生活の力が籠もつてゐるやうに思はれるので

あつた。

百合さんは博士の留守の間、兎角お母様の跡を追ふのを、無理に若い女中にお相手をさせて、博士の書齋に置くといふことである。博士が歸るとひどく喜ぶ中にも、子供ながら不安な顔をしてゐる。赤さんのやうに咳をするやうになるといけないから、決して赤さんの傍へ行つてはならないと言つて聞けると、さういふ博士の顔をぢつと見て全點々々をするのである。

博士の内には女中は二人しかゐなかつた。御飯炊と年の若いのである。年の若いのは赤ん坊の守をしてゐたのを、赤ん坊が病氣になつてから、百合さんのお相手にした。ところが此頃は奥さんが毎晩ろくろく寐られないので、手代りになる人を入れねばならないやうになつた。

こんな時に博士の内で呼んで來るお婆さんといふ女がある。忍藩の士族の娘で、博士の世話で一度よめに行つたところが其婿が當にしてゐた商行の試験を受け損なつて、身を持ち崩したので、財産其外のあらゆる權利を抛棄して離別をして貰つて、産婆になつたのである。もう三十七八になつてゐる、甲斐性のある女で、面白い顔をしてゐる。子供のおもちゃに頑笑ひといふものがある。お龜の顔の輪廓の中へ、子供



汽車はやうやう、廣い處に、燈の附いてゐる、暖やかなやうで寂しい新橋停車場に着いた。博士は、特別に寒いやうに思はれる夜の東京を、車で駒込へ歸つた。

西國から出した葉書を見て、内のものも大凡いつ頃歸るのだとは知つてゐたが、博士は無駄な事だといふので電報を打たないからいいよ何日何時に歸るか知らずにゐた。停車場の車が西片町の邸へ着いた時、家はもうひっそりしてゐた。奥さんは自分の部屋のランプを主人の書齋へ持つて来る。女中は革包を受け取つて書齋へ運んで来る。奥さんはすぐに立つて着換を持つて来て、書齋のランプに火を點しながら云つた。

「もう大抵お歸になる頃だとは存じましたが、只今とは存じませんで、もう少しで皆休んでしまふ處でございました。」

「子供はどうした。」

「二人とも好く休んでをります。赤さんが昨日から少し咳をいたしますので、なるだけ暖かにいたして、お歸になるまでに直してしまひたいと存じてゐました。ほんのちよいちよいなのでございます。」

「さうか。」

博士は別に氣にも留めなかつた。奥さんが湯を沸かさせようかと云ふのを、博士は留めて、鐵瓶の湯を金盥に取らせて、手水だけ使つて寢た。翌日は一月十二日、日曜日である。博士は留守中に來た郵便物を見てゐる。百合さんといふ、目の大きいお嬢さんは、お父様がお歸になつたのが嬉しいといふので飛び廻つてゐる。奥さんが赤ん坊の顔を洗つて綺麗にして連れて來た。

昨晩目を醒まして牛乳を飲む時に、一つ二つ咳をしたやうであつたが、血色も好いし、元氣も惡くない。博士が小さい手を握まへて「半子半子、半子は好い子だなあ」と云つて、ちつと顔を見ると、暫くお父様の顔を眺めてゐて、目を細くして、口を乳を飲むときのやうに開くして、舌の尖を少し見せて、につこり笑ふのである。

小野博士は子供に和洋共通の名を附けてゐる。姉妹は百合といふのは、Titieである。赤ん坊には Hans といふ名を附けて、半子と書かせた。これは博士が袁隨園の詩話か何かを讀んだとき、増を半子とけふといふことがあつたので、其字を取つたのである。百合さんはお伽話が好で、お父様から獨逸のお伽話を伺つて、ハンスとグレンテとの話などを好く知つてゐるので、赤ちゃんの名が半子といふのだと聞いた時は大

そう喜んで、「それでは今にわたしと一しよに往つて魔女を退治して遣るわ」と云つた。

博士は奥さんに問うた。

「乳は好く飲むかい。」

「ええ。待ち兼ねるやうにいたして、ぐいぐい飲んでしまひまして、いつでも足りないといふので、むつかりますでございます。もう少し量を増してはいかがかと存じまして、西山さんに伺ひましたが、丈夫な子は幾ら遣つても、跡を欲するのだから、規則通りより増しては好くないと仰るのでございます。」

西山といふのは、大學の廣澤教授の助手で、小野博士の家では、いつも子供の事を相談してゐるのである。

午過には空が好く晴れてゐて、暖いので、百合さんが庭で鞦韆をしてゐる。退紅色の友禪メリスの被布を着て、美しいふさふさした髪を靡かせて、索が水平になるまで揺るのを、博士は縁側に腰を掛けて、嬉しさうに見てゐた。

月曜日には博士は久しぶりで私立大學に出て見た。幾級も持つてゐて、下の級の爲めに語學まで教へるのであるから、博士は毎日出勤するのである。休暇で歸省した生徒がまだ半分位は歸つて來ないのでクラスは頗る寂しい。博士は例

いふものでせうね。」

「さあ。兎に角大分大きいお嬢さんですから、豫後が宜しいでせう。」

「さうです。大分大きくなつてゐるのですから、どんな處置でも出来ようといふものです。何か特別な手段はないものでせうか。」

「どうも對症療法しかありませんのです。百日咳には特功薬といふものが發見せられてゐないので、自然の経過を見て、對症療法を造つてゐるのです。」

「新薬なんぞはないのでせうか。」

「ええ。Pertussin だとか、Tuscol だとかいふものもあるのですが、まだ信用が少いので、廣澤先生なんぞもお用になりません。」

「さうですか。半子だからつて、百合だからつて、別に厚薄はないのですが、百合はこんなに大きくなつてゐるのですから、どうぞ精一ぱい出来るだけの事をして見て下さい。新薬なんぞも、機能がはつきりしてゐなくても好いから、毒にさへならないものなら、なんでも飲ませて見て下さい。」

「ええ。新薬も一つ聞き合せて見ませう。」

西田は検温器を抜いて見て、熱はないと云つた。それから半子にしたやうな處置を奥さんに

話して、處方を三枚書いて渡して置いて、暫く考へて、「いつそお二人とも入院をおさせなさつてはどうでせう」と云つた。博士は少し考へて看護婦でも雇つて、内で造つて見たいと答へた。

西田は新薬を聞き合せて見るといふので、近頃の電話のある内を問うて出て行つた。博士は車夫を傭つて薬を取りに遣る。奥さんは濕布の支度をする。半子の處から吸入器械を持つて來て、百合さんに吸入をさせる。そのうちに西田が歸つて來た。大學で不斷使はない新薬は、本郷附近の藥店にはない。やうやう資生堂に「Doy's」があるのを衝き留めたといふのである。博士はすぐに銀座の資生堂へ使を出した。

西田が又明日來ると云つて歸つた處で、博士は書齋の机を次の間へ出して、百合さんの處へ半子を連れ來させた。二人共百日咳と極まつて見れば、内中で一番廣い書齋へ一しよに置く方が手が省けて好いといふのである。百合さんは始終見たがつてゐた赤さんを傍に寝かしても、喜ぶ程の元氣もない。奥さんの拵へて來た粥を食べたのが、幸に居り合つたばかりである。

南向の書齋は丸で病院のやうになつた。博士の机を持ち出した北向の次の間の外に、廊下

つづきの小さい間が東の方にある。そこへ病人の爲めに入用な、いろいろの物を置くことになつた。博士夫婦は子供の寝かしてある書齋と、机の置いてある北向の間に、床を一つ宛敷かせて置いて、夫婦が代りあつて北向の間へ休みに行くことにした。書齋では、疲れて横になることがあつても、寝るといふやうには寝られないからである。

翌日博士が學校から歸つて見ると、看護婦が來てゐた。お登さんの知つてゐるもので、酒匂あたりの産だといふことである。餘りぎすぎすしなくて物わかりの好きさうな女であつた。名は藤江と云ふのである。お登さんはこれが來たので、得意先を見廻りに出た。尤もどの家へも博士の内の近所の電話番號が知らせてあつて、産の氣が附けば知らせる等になつてゐるから、晩には歸つて來ると言ひ置いたのださうだ。

病人の様子は別に變らない。只半子の方は咳をし出してからもう十二日目になつてゐるのに、瘦せもせず、むくむくと太つてゐて、泣聲にも力がある。牛乳も常のやうにぐいぐい飲んで、好いうんこをする。百合さんの方は昨日から咳をするのに、大病人のやうで、容貌まで變つてゐる。大小便も便器で濟ませて、少しも起

が目かくしをして目鼻を置く畫紙である。お登さんの顔は可哀らしい顔だが、どうも少し目隠しをして目鼻を置いたやうな處があると、誰やらが云つたことがある。併しそれは若い時の事である。段々年を取るに連れて、才氣の優れた、意志の強い人の表情が、顔に凝結して、ちつとも可笑しいことはなくなつてゐる。此人が泊りに來ることになつて、奥さんと交る交る赤ん坊の處で夜番をすることになつた。

病人は赤ん坊でも、離れの病室はなかなか大事である。病氣でなくとも、滅菌した牛乳を飲ませるにでも、複雑な哺乳器がある。そこへ吸入器械を買つて來て、度々吸入をさせる。吸入をさせない間も、火鉢の上に金盥を掛けて、蒸氣を立たせる。胸部に濕布がしてあるのを、乾けば取り換へる。種々な藥を、牛乳を造る時に、一しよに飲ませる。なかなか容易な事ではないのである。奥さんは一しよう懸命に造つてゐるが、その代りを勤めるのは、並の看護婦にもむづかしい。これが出来るのはお登さんの外にはないのである。

兎角するうちに、一月二十日になつた。博士は學校から歸つて思むべき新事實を聞いた。今日は百合さんが咳をするといふのである。稀に

一つ二つするばかりだといふが、牛子も初はさうであつた。博士は奥さんの心配らしい口氣を打消す勇氣がない。併し當人の百合さんが相變らず跳ね廻つて騒いでゐるのを、せめてもの心遣であつた。

夕飯が出た。赤ん坊をお登さんに任せて置いて、親子三人饌に向つた。百合さんは、「おや、キャベツ巻」と云つて箸を取つた。何より好きな菜である。そして一口食べると咳が出た。咳の数は三つ四つであるが、どうしたとか、百合さんは電氣に撃たれたやうに、仰向に倒れて、兩手を固く拳に握つて、胸の處に押し附けて、わつと泣き出した。奥さんが、「どうしたのだい、どうしたのだい」と云つて抱き起したとき、咳はもう留まつてゐるが、百合さんは食へたくない」と云つて、しくしく泣いてゐる。夫婦共飯を食ふ氣にもなれないので、すぐに百合さんを書齋に連れて行つて、床を取つてそこへ寢させた。

奥さんは牛乳を飲ませよう」と云つて、拵へに立つた。博士は娘の傍に附いてゐる。どうも様子が悪い。いつも元氣の好い子が、永く煩つても居たやうに、くたりとなつて寢てゐる。奥さんは牛乳を拵へて來て、無理に百合さんに勧めてゐる。牛乳は餘り好かないのである。奥さ

んはどうせ明日は西田さんが來るのであるが、何か手當があるかも知れないから、すぐに近所の車夫を頼んで迎ひに遣つたと云つた。此話のうちに、百合さんはやつと牛乳を飲んでしまつてゐるが、又咳が出て、泣きながら今飲んだ牛乳を吐いてしまつた。先の通りに拳を胸に引き附けて泣くのである。博士は、「おうおう、今に直る、今に直る」と云つて、娘を慰めようとしてゐる。心の中には丁度その反對の事を思つてゐるのである。

暮れてから西田學士が來た。診察をしてゐる間、赤ん坊はお登さんに任せ切で、夫婦共百合さんの傍に附いてゐる。胸部の打診や聽診をしてしまつて、體溫を測つてゐるとき、博士が口を出した。

「どうでせう。」

「さやうですね。」

と云つて考へてゐるうちに、百合さんが又咳をした。奥さんが背中をさすりさうにすると、百合さんが嫌だと云ふ。體に障られるのが苦しいと見える。奥さんは檢溫器の至んだのを直して、そつと押へてゐる。西田は詞を續けた。

「百日咳です。」

「牛子のより餘程急劇に來たやうですが、どう



受け取つて、少しお待ちなさいと云つて、奥へ抱いてはひつた。長い間待つてゐると、やうやうの事で唐紙が開いて、百合さんが出て来た。その跡からお醫者が板のやうに堅くなつた赤さんを兩手に載せるやうにして持つて出て、かう云つた。「お姉さんの方は大きいから生き戻りましたが、赤さんの方は駄目です」と云つた。目が醒めてから考へて見れば、その日の午過ぎに二人の子供を連れて湯に往つたとき、赤さんを洗つて遣る傍で、ひどく咳をしてゐる子があつた。それから内へ歸つて、赤さんが咳をし出したといふのである。奥さんは詞を續けてこんな事を云つた。

「つまらない事でございますが、西田さんにも、お心安いもんですから、夢の話をいたしたのでございますよ。西田さんの仰やるには、どちらもどちらがお亡くなりになつても行けないのですから、正夢だとも逆夢だとも申されませんねと、さう仰やるのでございます。」

博士は矢張黙つて聞いてゐたが、心の中では妙な事を思つた。夢は時間や空間の拘束を受けないものであるから、どんな事をも見ることが出来るには相違ない。併し好くも古風な小説家が拵へたやうな夢を見られたものだ。一月十

日には自分が高知から琴平へ着いて、象頭山の麓にある宿屋へはひつて、小川が一晩泊つて参詣しろと云ふのを、無理に参詣せずに立つたのである。丁度その日湯に入つた赤ん坊が咳をし出す。それは湯で風を引いたのであらうが、その時百日咳らしい子供に湯屋で逢つて、跡で赤ん坊が百日咳になる。お負にその晩に百合さんが同じ病氣になるのを豫言したやうな夢を細君が見る。それが溺れるといふ水難らしい夢にまでなつてゐる。今は小説にでもこんな事を書いたら、伏線が置いてあるに呆れるどころの騒ぎではない、百年も前の因果物語だと云つて、作者がひどい目に逢ふだらう。幸に細君は、本と云つては紅葉と天外との小説しか讀まない人で、學校を出てから歴史も地理も讀みないので、高知へ行つたものが琴平を通ることがあるやら、その琴平に金毘羅の本家があるやら知らないから好いやうなものだが、若し自分の金毘羅を冷遇したことが分かつたら、どんなにか氣にするだらう。兎に角、琴平での話はしない事だと思つたのである。

此晩には、其間看護婦を寐させたので、お盛さんが醒れへ寢に行つた。百合さんは晩に食べた弾が好く收まつて、割合に咳をすることが少

つた。赤ん坊も變つた事がなくて済んだ。中一日置いて二十四日に博士が學校から歸つて見れば、内が沈んだやうな、騒がしいやうな、變つた様子をしてゐる。いつもより低い聲で物を言ふ。それかと思ふと、又いつもより忙がしげに立ち騒いでゐる。博士は何か分からずに動悸を覺えた。子供の寢させてある處にはひつて見ると、百合さんがひどく苦しげに息をしてゐる。百合さんは二十日に夕飯を食べかけて倒れてから、可哀らしい顔に絶えず苦痛の表情が現れてゐる。苦痛が刻み附けられたとでも云ひたやうである。これが一層甚しくなつてゐるのである。

博士はどうしたのかと問はうと思つたが、その問を發して答を聴くのを憚るやうな氣になつて、咽さへ引き締められるやうなので、黙つて立つてゐる。奥さんがとうとう曇つた聲で、二人の子供の病況の變つたことを話し出した。今日は西田學士が百合さんの呼吸の工合が悪いといふので、精しく診察して見たところが少しカタル性肺炎の氣味がある。熱は三十八度で、肺炎にしては低い。それから赤さんをも精しく診察した。これも同じやうに肺炎らしい。これは熱が三十九度ある。薬は二人共變つて、其外

き上がらうとはしない。博士は半子の方を見ないやうにして、百合さんが咳をして苦むと、「今に直る、今に直る」と云つて慰めてゐる。奥さんが「あなたは何かちつとも半子を見てお遣んなさらないのですか」と云ふと、「あれはまだ慰めやうがないから」と答へてゐるが、實は顔を見て物を言ふと苦みながらお附合に笑ふのを見るに忍びないのである。

夜お望さんが歸つて來た。藤江さんに今夜は任せて、離れへでも行つて寝ることにして、これからは代りあつて貰ひたいと、奥さんが云つたが、これ迄の爲來りもあるから、今夜だけはしよにすると云つて、矢張病人の傍にゐた。

二十二日に、博士は心配しながら學校へ出て歸つて見たが、別に變つた事もなかつた。博士の考でも百合さんは固より、久しく悪い半子の方でも、まだ好くなつてゐるだらうと思ふわけには行かない。只悪くなつてゐなければ好いと思ふばかりである。

奥さんがこんな事を言つた。「赤さんの方はもう十三日立ちますから、迹が九十日足らずでございます。百合さんはまだ丸で、百日もありますから、可哀さうでございます。」博士は、なる程さう思ふのは無理もないが、百日咳といふ

のは只長い咳といふわけで、百日掛かると極まつたわけではないと答へた。これも慰めるやうに言ふ心持であつたが、そんな語氣にはならなかつた。

博士は二人の子供に被せてある布團の襟の處に、赤いフランネルの切が掛けてあるのが目に附いて、奥さんに問うた。

「あの赤い切はどうしたのか。」

奥さんは看護婦の顔をちよつと見て答へた。

「お叱りになるかと存じましたが、あれは金毘羅様に御祈禱をして戴いた切なのでございませう。」

かう口を切つて、奥さんは次の事を話した。

隣の高山博士の奥さんがおない年のお玉さんの處へ、久しく百合さんが遊びに行かないので氣が附いて、昨日わざわざ見舞に來た。そして金毘羅様に祈禱をして貰ひに往けと勧めた。その時は朝のうちで、まだ藤江さんも來てゐなかつたので、手が放されなといふと、それでは代りに往つてくれようと、親切に云つてくれた。その御祈禱をして貰つた切が今日届いたといふのである。

奥さんは叱られるかも知れないと冒頭に云つたが、博士はこんな時に叱つたことはない。博士

士は何かで、貧人の娯樂を奪つて、代りに與へる衣がないといふ譬喩を讀んだことがある。どんな迷信にもしろ、それを迷信だといふには、代りに遣る信仰がなくてはならない。それが自分にも無いと思つてゐるから叱つたことは無い。併しなる程さうかと同意しては、學者としての立場がなくなるやうな心持がするので、こんな時には笑つたり、抑搔つたりしたのである。奥さんが人に勸誘せられて、已むことを得ずにしたといふやうな語氣をするのは上擧であつて、實は半信半疑で、多少の望を此切に繋いでゐるのを察して見れば、氣の毒になつて、今日は笑ふことも抑搔ふことも出来ない。そこで博士は黙つて聞いてゐた。

奥さんは此話の序で、「これも取留もない事ではございますが」とことわつて、こんな話をした。丁度赤さんが咳をし出した十日の晩に夢を見た。子供を二人連れて湯に行くつと、どうした事か、二人とも湯の中へ落ちて溺れてしまつた。氣も狂ふばかりに驚いて、女中と二人して、ぐたりとなつてゐる二人の子供を抱へて、湯屋の直隣の太蘭といふお醫者の内へ往つた。このお醫者は、風なんぞを引いた時、ちよいちよい見て貰つたことのある人である。二人の子供を

後の體温は四十度に極まつてゐて、百合さんは熱がさ程にないのを見るに忍びない苦痛を續けてゐる。二人とも咳は少しも輕くならない。二つの小さい體が精一ぱい病氣に抵抗してゐるやうに見えるのである。赤ん坊は牛乳を催促しなくなつたが、造れば相變らず盛んに飲む。併しこれ迄飲み干すことになつてゐた瓶の底に、少しづつ牛乳が残る。大便の工合は好い。百合さんには粥を少しづつ食べさせるのであるが、それを吐かせないやうにといふので、咳の出た跡を見計らつて食べさせる。その相間に餘り好かない牛乳とスウプとを種々に調味して、少しづつ飲ませるのである。顔は水氣で腫れるだけ腫れて、その腫が引かずにゐる。

一月が過ぎて二月一日になつた。此の日は土曜日で、博士が又早く學校から歸つて、翌日へ掛けて絶えず子供を見ていることになつた。此頃になつて百合さんの目は、平生美しい大きかつたのが、小さくなつたばかりではない。目の中が血走つて來た。これは咳のひどいためだといふことである。咳はいかにもひどい。咳の出る時には、少し前から泣いてゐて、いよいよ咳になると、咳き入りながら、體中が痒いといつて身を悶える。掻いたり撫つたりして遣らう

にも、胸には濕布がしてあるから、思ふやうには出來ないのである。西田は赤さんを診察した跡でも、百合さんを診察した跡でも、不満足らしい顔をして黙つてゐる。赤さんの方にはこれ迄の藥の外に、Dialdozといふ藥を注入する事になつた。脈が少し惡くなつたからださうである。赤さんは注入の針をつと刺されると、いつもうんこをする時のやうに、兩足に力を入れて、うんと踏み仰ばして應へる。その足が相變らずむくむくと太つてゐて可哀らしい。奥さんは西田が診察する度に、「どうでございませう、どちらか一人は助かりませうか」といふやうなことを繰返し繰返し問ふ。西田は餘程困らしい様子で、言を左右に託するといふやうな答をしてゐる。

此日曜日から中一日置いて、四日の朝であつて。お登さんが氣が附いて、赤さんに少し水氣が出ましたやうでございませうと云つた。顔を洗ひ掛かつてゐた博士は、「どれ」と云つて起つて見に行つた。病氣になつてから、もう二十六日目になるのに、瘦せた目と目に立つ程は瘦せない子の、むつくりした手を返して、手掌を見ると、いつも見えてゐた筋が消えて平になつてゐる。それから足を見る。顔を見る。好く氣を附けて

見れば、しろうにも一體に薄く水氣が出てゐるのが分かるのである。赤ん坊はむくむくと太つた儘で、とうとう瘦せずに今日までゐて、腫が來るやうになつたのである。

博士は氣に掛けながら學校へ出て行つた。さつた夕かに歸つて、子供の衰させてある處にはひつて見れば、赤ん坊がゐない。はつと思ふとき、奥さんが「赤さんはあちらへ遣りました」とい、いつも西田の寝る小部屋を指さすのである。やつぱり死んでしまつたのかなと思つたが、さうではなかつた。死ぬるものと見極められたのであつた。それで病院の入備の室で、見限つた病人を屏風で圍ふやうに、赤ん坊は隣の間へ遷されたのであつた。

博士は赤ん坊を見に行つた。西田は「もう痛い目に逢はせなくても好いのだが」と獨言を云つて Dialdoz を注射して置いて歸つたといふことを、お登さんは不平らしい聲で話しながら、牛乳を拵へてしまつて、赤ん坊に奶頭を含ませた。赤ん坊はいつもの通りに、ぐいぐいと吾をさせて飲んで居る。腫も昨日から増さないで、顔は常のやうに可哀らしい。目をはつきり開いてゐる。博士はこれで死の極印を打たれてゐるといふのは、諺ではないかと思はれてならぬの



に百合さんは大きいからといふので胸に芥子泥を貼つた。今それを除けて濕布をした處である。いづれ廣澤先生に一度見せるが好い。西田自身は一應内へ歸つて、今夜は泊りに來るといふことである。

博士は赤ん坊を覗いて見たが、なる程少し息が忙しいやうではあるが、しろと目には大した變もない。それから百合さんを覗いて見た。この方はいつも咳と咳との間は、當前の呼吸であつたのが、はつきり忙しくなつて、その上喘鳴が絶えず聞える。ずうずうといふやうな音である。これまでも苦痛が顔に現れてゐたのに、咳と咳との間にも樂に息が出來ないやうになつたのだから、さぞ苦しからうと思ふと、博士は熬へられないやうな心持がするのである。百合さんはうとうとしてゐたのが、博士がぢつと見てゐるうちに目を開いたので、博士は「今は苦し

いのだが、すぐに直るから我慢してゐる、我慢してゐる」と云つた。百合さんは苦しうな顔で合點々々をした。奥さんは「開分が好いから可哀さうでございます」と云つたが、隠し切れない涙聲であつた。

此晩からは東側の次の間を取つて、西田に泊つて貰ふことになつた。西田といふ學士は

漂泊な男なので、「何か變つた事があつたらお起しなさいよ」と云つて、横になるかと思ふと、ぐうぐう寝てしまふ。それでも博士夫婦はひどく心丈夫に思ふのである。

あくる二十五日は土曜日なので、博士は午かた歸つて、二十六日の日曜日に掛けて、二人の子供の様子を絶えず見てゐた。赤ん坊は熱が四十度になつた。それでも容貌は殆ど變らない。牛乳を好く飲んで、うんと云つて、兩足に力を入れて、締まつた大便をする。泣くにも張のある聲をして活潑に泣く。しろと目には、これでも百日咳に肺炎を兼ねた重症かと、不思議に思はれる程である。それとは反對で、百合さんは病氣になつた日から、博士が苦痛を刻み附けたやうだと思ふ一種の表情をしてゐたのだが、今其の顔に腫が來て、並はづれて大きかつた目が細くなつて、丸で同じ子ではないやうになつた。變つたのは顔ばかりではない。聲も全く變つてゐる。苦しい間に、をりをり一言づつ云ふ詞が、濁音勝で母音を長く引くので、突然聞ては何の事だか分らないが、別に珍らしい事も云はないから、度度聞けば分かる。それでも一度なんぞは間違つて可哀さうな事があつた。土曜日の晩に博士が附いてゐるとき、百合さん

が何か云つた。それを看護婦が「うんこ」と聞いて「はいはい」と云ひながら便器をさし入れた。さうすると平常辛抱強い百合さんも、病氣で根がなくなつてゐると見えて、さも悔やしうに泣き出した。やうやう睡して問うて見れば「なんか」と云つたのであつた。「なんか」といふのは何か欲しいといふことで、こんな時には健康な時に好いてゐた、チョココレートの中へクリイムを入れたのなんぞを遺る。さうすると食べて見て、旨くないのに失望して、半分食べて置くのである。

日曜日には、奥さんが熊本の母へ始めて子供の病氣を知らせる手紙を書いてゐるとき、廣澤教授がちよつと來られた。西田に精しい話を聞いてゐると云つて、至極あつさり見て、何か西田學士に言ひ置いて歸られた。

これから一週間程といふものは、二人の病氣がその險惡な狀況を續けてゐて、病氣の経過を曲線に書いたなら、大抵上り詰めて、さて上つた儘に下らずに、ずつと留まつてゐるといふ工合であつた。此間にも二人共今日は右の胸が左の胸より悪いとか、今日は少し悪い處が廣くなつたとか狭くなつたとかいふやうな小波動のあるのを聞くのであるが、兎に角赤さんの午

に綿を詰過ぎたので、肩が締りなく開いて、哀な顔になつてゐた。

赤さんは宮詣の時着た黒地に竹の絡模様の縮緬の紋附に着替へられて、急いで縫つた白金巾の布圍に寝かされた。取り敢へず枕許には燭臺と香爐とが置かれて、香爐からは線香の煙が立ち昇るのである。

あくる六日には博士は學校に出た。受持の講義は、博士が自分で思ふ程、器械的なのが常になつてゐるためでもあるまいが、變つた事もなく済んだ。昨日までは頭の奥に、心配があつた。今日は一人残つてゐる百合さんに對する心配と、亡くなつた半子に對する悲哀とがある筈であるが、意外にもさうではない。只頭ががらんとして、空虚になつてゐるやうに感じるだけで、昨日まであつた心配さへ、はつきりとは感ぜられなくなつてゐる。博士はこれ迄も學校で子供の病氣の事なんぞをちつとも人に話したことはないが、今日なんぞも博士の言語舉動に、常に變つた處があるとは、誰も認めるものはあるまいと、博士は獨りで思つてゐた。

博士はいつもの時刻にぼんやり内に歸つた。玄關から上つて赤さんの遺骸の置いてある間の前を通ると、障子の一枚開いてゐる處から、屏風

の蔭の床が見える。博士の心安くしてゐる文科大學の學生が、袴を穿いて脇に据わつて、雑誌をひつくり返して見てゐる。線香の煙の絶えないうやうに番をしてゐてくれるのであらう。

北向の間に來たとき、百合さんの寢させてある書齋から、奥さんが蒼い顔をして出て來て、立ちながらかう云つた。

「あの葬儀屋の持つて參つたものを離れへ入れさせて置きました。牧野さんが晩にお出になつて、焼場へ連れて行つて下さるのでございいます。」

牧野さんといふのは、博士が舊主人の邸で、家從を勤めてゐる老人である。博士は黙つて頷いた。そして百合さんの處をちよつと覗いて見たが、別に變つた事もないらしかつた。

博士が茶の間に出て夕飯を食べてゐると、牧野の老人が來た。胡麻鹽頭の几帳面な爺さんである。牧野は離れにあつた道具を亡骸のある處へ持つて來て、白木の机に白木綿を掛け、赤さんの眞實を奥さんに出させて眞中に飾つて、燭臺や香爐を其前の低い机に並べた。それから小さい寢棺に赤ん坊を納れようとした。その時博士は、飯をそこそこにしまつて、奥さんと一しよに其場に立ち會つてゐたが、奥さんはさも間

の悪げに、夫と牧野を見て、かう云つた。「ちよつともう一度だつこいたして見たうございます。」

「さあさあ、どうぞ。」

かう云つたのは牧野であつた。博士は黙つて頷く。奥さんは小娘のやうに含羞んで、そつと赤さんを抱き上げて、生きてゐた時のやうに横に胸に押し當てて、暫くちつとしてゐたが、黙つて元の寢床に置いた。部屋隅に、此時まで見てゐた青年の學生は、なんと思つたか、突然僕らは失敬しますと云つて、走つて出て行つた。丁寧な博士は急いで玄關へ送り出したが、もう間に合はなかつた。牧野の爺さんは、奥さんの寢床に置いた赤ん坊の亡骸を、代つて抱き上げて寢棺の中に斂めたが、涙が皺の寄つた濃紅色の頬の上に光つた。

牧野が、連れて來た人足に寢棺を擔がせて出て行く提燈の光を、奥さんは北向の間の戸を開けて、火影の見えなくなるまで見送つてゐた。

七日に博士は學校に出てゐたが、その間は又百合さんがどうしたかといふ心配が頭の中を元のやうに往來してゐた。そんな心配が出来るだけ頭が恢復したのであらう。それから赤ん坊はどうしたか知らんと、ふと思つて、急にあれ

である。博士がかう思つてゐるのが分かつたのか、「でもお乳を半分しか上がらないやうになりましたよ」とお登が云つた。博士は突然赤ん坊に背中を向けて、百合さんのゐる方へ行つてしまつた。

その晩は西田をどこに寝かさうかと、奥さんが相談したので、博士は北向の間へ自分のと並べて床を取らせた。百合さんの方にも、赤ん坊の方にも、朝まで西田を起きねばならないやうな事はなかつた。

あくる五日はとうたう半子の死んだ日である。博士は強情に學校にだけは出て歸つた。留守の間に、西田が親布兒を度々注入したり、内服させたりして置いて、「先生のお歸になるまでは持ちます」と云つて歸つたさうである。今日も傍に附いてゐたお登さんが、「赤さんが行けないやうでございます」と云つて、百合さんの方にゐた奥さんと呼んだのと、博士が玄關で靴を脱いだのと、同じ瞬間であつた。博士は、長らく小さい大きい苦痛を包んでゐた、縹色に白く上がりて鶴龜の模様のある被布圍の前に、帽を被り、目金を掛け、外套を着た儘で立つて、これ程おそろしい病も愛らしさを奪ふことの出来なかつた顔の、少し色の褪めたばかりの唇か

ら、最後の呼吸の力なげに洩れ出るのを見たのである。

お登さんは黙つて俯向いてゐる。奥さんは「半子さんと半子さんや」と二聲呼んで、出さうになつた泣聲を隣の間に寝させてある百合さんに聞

せたくないの、我慢して出さずにゐる。日からは涙がぼろぼろ落ちるのである。その時博士は兼てこの赤ん坊が死んだらどんなにか悲しかうと思つてゐた、自分の悲みの意外に淡く意外に輕いのになら驚いた。期待してゐた悲痛は殆ど起らないと云つても好い。博士は只心

の空虚の寂しみを常より幾らか切に感じたばかりである。それと同時に、博士には此一間の光景が極端に客觀的に、憎むべき程明瞭に目に映じた。炭をくべる事を忘れたので、火の氣の弱つた火鉢に載せてある金盞の、煮え詰まつた濁水からは、絲を漏したやうな蒸氣が、低く微かに立つてゐる。二三枚の盆には、いろいろの内服薬や注射薬やが載せてある。口を切つたばかりのボオルの箱にはひつてゐる Disinfectant の瓶もある。今朝から哺乳器の奶頭を含まないやうになつたので、小さい茶碗に入れた牛乳を、お登さんが啗しの切に吸はせて、口に入れて遣つた残りもある。支那草包の上には、赤ん坊のお

しめが何枚か疊ねて載せてある。健康で眠つてゐるやうに見える、むつくりした赤ん坊の顔を覗き込んでゐる、蒼い頬のお登さん、泣いて赤くなつた顔の細君、それから立つてゐる自分までが、芝居の舞臺に出てゐる人物のやうに、よそよそしく而もはつきりと目に映じてゐるのである。そして博士には、自分がそんな風に傍觀者の位置に立つてゐるのが不愉快でたまらないのである。博士は奥さんにかう云つた。「己は少し考があるから、赤さんを此儘そつくりして置け。」

博士は忙がしげに靴を穿いて出て行つた。行く先は西片町から坂を下りて、橋下の處に住んでゐる博士と心安い石田といふ彫塑家の家である。夕飯の膳に向つて、啞酌の杯を手にした石田は、「これはお珍らしい」と笑顔をして迎へたが、博士の話の聞いて、忽ち容を改めた。どれ丈の悲痛が博士を驅つて自分の處へ來させたかと思つたからである。博士は石田に赤ん坊のマスクを取ることを頼んで、書生に石膏の雕と布とを持たせて出掛け石田と一しよに歸つた。半子の顔は生きてゐるやうに見えるから、マスクもそんな風に出来るだらうと、博士は思つたが、後に出來上がつて來たのを見ると、口



八度二分しかありません。どうも炎症のある肺の部が狭くなりませんし、それに心臓が心配なのです。デキタリスももう大分長い間用ゐたり止めたりしてゐますから。」

「さうですか。兎に角行けない迄も何分願ひます。」

「はあ。明日は廣澤先生にもう一度来てお貰ひなさつてはいかがでございます。」

「君がさう思はれるなら、言つて上げませう。」

「いゝえ。僕が明日御出勤がけにお寄になるやうに申しますから、宜しうございます。面倒な禮儀はお嫌な方ですから。」

「それぢやあどうぞ。」

話はこれで済んだ。

此晩は、博士のゐるとき瀑布を取り換へたので、博士は久し振に百合さんの裸を見た。そして今更のやうにびつくりした。角張つた骨盤の骨が半殻のやうな兩脚に續いてゐる處は、丸で毛をむしつた鶏のやうで、顔の水氣で膨んでゐるのが、別な人の首を接いだのではないかと思はれる位立つのである。永く瀑布をしてゐるので、胸と背には赤い發疹がしてゐる。咳が出る度に、これが痒いのであらう。博士は見えてゐられなくなつて胸へ向いた。

八日は土曜日であつた。今日は廣澤教授に見て貰ひなので、博士は午過に、どうなつたかと思ひながら歸つて来た。急いで百合さんのゐる間にはひつて見ると、奥さんが蒼い顔の目の縁だけを赤く腫れさせてゐる。博士は奥さんを机の置いてある間へ呼び出して、小聲で問うた。

「廣澤教授は何と云はれたか。」

奥さんの目からは涙がぼろぼろ翻れた。

「とても助からないさうでございます。もう一日持つか二日持つか分からないと仰やいますの。」

「ふむ。」

博士も言ふべき詞がない。奥さんは詞を續いだ。

「赤さんの方は可哀さうではございまして、まだ馴染が重なりませんねか、そんなにも存じませんが、百合さんが亡くなつてしまひましたら、どんなだらうと考へますと、堪りませんのでございます。來年は學校へ參るのでございます。鉛筆でこなひだ中書きました以呂波や畫なんぞを、跡になつてから見ましたら、どんなでございませう。それからいろいろな時のことを覚えてゐるのを、思ひ出さないわけには參りません。去年展覽會へ連れてまゐりましたと

き、ちよろちよろと先へ駈け抜けては、振り返つて笑ひましたのなんぞを、跡になつて思ひ出しましたら、どんなにかせつなからうと存じますと、どうもわたくしは。」

奥さんは噎せ入つてしまふのである。博士は何か思ひ付いたといふ様子でかう云つた。

「そんな馬鹿な事を言つては行けないと云ひた

いが、實は己も同じやうな心持がするのだ。なにしろ赤ん坊と違つて、いろんな記念を残してゐるのだから。玄關には赤い緒の小さい草履や下駄がある。どの間にも人形があるとか、小さい着物があるとかいふやうに、何かしらあるのだ。いよいよ行けないと聞いてから、それを見ては堪らない。草履を見れば、もうあれを穿くことはないのでなと思ふ。人形を見れば、もう抱いて歩くことはないのでなと思ふ。其度に神經を刺激するのだ。百合さんは生きてゐる間は、一時間でも一分間でも、飽くまで大切にしてお遣らねばならないが、あの方々に散らばつてゐる記念品々は、ちつとも早く皆片附けてしまふが好い。何かに入れて目に觸れない處に隠してしまふが好い。」

博士は實際にかう思つてかう云つたものではあるが、それに些ばかりの策略も雜つてゐた。そ

は亡くなつたのだづけと自ら打消して、物取し  
い、不快な感に打たれた。

内へ歸つて、机の置いてある間にはひると、  
百合さんがこれ迄にない、一種異様な低い聲で  
泣き續けてゐる。急いで外套を脱ぎ棄てて帽  
を其の上に掛けて置いて、唐紙を開けてはひつて  
見ると、百合さんは二日と見られないやうな苦  
痛の顔をしてゐて、異様な泣聲は、その四角に  
引張り開けたやうな口から、斷續して洩れてゐ  
るのである。百合さんの今日の顔を見れば、こ  
れ迄苦痛の容貌だと思つたのは、まだ本當の苦  
痛の容貌ではなかつたのである。

傍に附いてゐた奥さんが、この時やうやう顔  
を上げた。奥さんの顔はいよいよ若く、目はい  
よいよ大きくなつてゐる。

「餘程居り合ひましたのでございます。先刻一  
番ひどかつた時には、わたくしの手をこんなに  
致しましたの。」

奥さんは袖をまくり上げて博士に見せた。二  
の腕は蚯蚓腫になつてゐる。百合さんが苦し  
の餘りに引掻いたのである。

「西田君は何と云つたか。」

「尿毒症だとか仰やいましたやうでございま  
す。兎に角餘程。」

と云ひ掛けて、奥さんは百合さんをちよつと  
見て黙つてしまつた。目は涙ぐんでゐるのであ  
る。

二人の子供の病氣が、凡そ一月許の間、こ  
のか弱い女の胸に、包容し切れない程の苦勞を  
與へてゐる中に、百合さんだけは大きいから助  
かるといふことが、只一つの頼であつた。苦勞  
の淵に陥いつた身が、さう思ふばかりを浮木に  
して、一しよう懸命にそれを掴まへてゐた。そ  
れには例の怪しい夢も手傳つてゐたに違ない。  
今は此女の拘羈した細い指が、ししぶ浮木の  
枝を放さうとする利那である。

博士が暫くちつと見てゐるうちに、百合さん  
の泣聲は次第に切れ切れになつて、いつもの喘  
鳴を帯びた、忙しい呼吸に代つた。その時百合  
さんは目を少し開いて虚空を見詰めて、「あれ、  
蟲が來ます」と云つて、顔を覺めて手で逐ひ除け  
る眞似をした。奥さんが呆れて、「蟲なんかゐま  
せんよ」と四邊を見廻してゐると、博士は手で物  
を拂ひ除ける眞似をして、「蟲を逐つて遣るぞ、  
そら逃げて行く」と云つた。博士は親戚の或る  
男が重い瘰癧私になつたのを看病して、體語と  
いふものを見たことがある。併し其病人もこん  
な事は言はなかつた。何だか幻視とか錯視とか

云ふものらしく思はれるので、自分にもそれが  
見える振をして、百合さんを慰めようとしたの  
である。

暮れてから西田が來たのを、博士は東側の次  
の間に呼んで「百合さんの事を問はうと思つた。  
線香の煙の棚引いてゐる机の上には、煙場から  
持つて歸つた遺骨の壺が、白金巾の切に包んで、  
寫眞と一しよに載せてある。部屋隅に置いて  
ある火鉢の火を掻き起しながら、博士は只「どう  
でせう」と云つて、相手の顔を見た。西田は暫く  
黙つてゐて、慎重の語氣で、簡単に云つた。

「どうも行けますまい。」

「尿毒症ですか。」

「それは實ははつきりしてゐないのでございま  
す。午後に大さうお苦みになつたのが、どうも  
頭痛ではないかといふやうに思はれました。そ  
れから其時少し下肢が痙攣した様でございまし  
た。それで僕がつい、尿毒症かなと獨言を言つ  
たのを、奥さんがお聞になりましたのでせう。  
尿毒症なら、本當の痙攣を起すとか、吐が留まら  
ないとかいふ様な事がある筈でございます。」  
「そこで行けまいといふのは、どういふ處から  
さう思はれるのですか。熱でも出ましたか。」  
「體温は相變らず低うございます。今日も三十

百合さんは合點々々をした。博士は奥さんと目を見合せた。二人とも何となく驚異の念に打たれたのである。博士は暫くちつと考へてゐたが、何か心の中に決する所がある様子で、かう云つた。

「うむ。牛と葱を食べさせて遣らう。」

博士は急いで起つてパラダイスへ使を遣つた。上等のロースを挽肉にして、ピフテキのやうに焼いて柔い葱をバターでいためたのを附け合せてくれるやうにと、口上書をして遣つたのである。博士は百合さんの被布圍の上に掛けのある迷信の赤い切を信じない。そんなら醫者の口から出る、科學の食養生なら、絶對的に信ずるかといふと、さうでもない。養生や療治の事は、自分が知らないから、醫者の云ふとほりにしてゐる。併し絶對的に信じてゐるのではない。そこで今朝も濕布を止めさせようかと思つたのである。こん度は又始めて水氣の出た頃から、小便の量が減つて、昨今尿毒症ではないかとさへ疑はれるまでになつても、始終大便秘には別に變つた事のない百合さんが、醫者に所詮助からないと見限られてから、食べて見たいといふ牛と葱であるのに、それを拒むのは拘子定木だと思つたのである。葱はどうかといふや

うな顧慮もないではなかつたが、なに、食べたところで一口か二口だと打消してしまつたのである。

博士は座に返つて百合さんに「今に買つて來るから、待つてゐろ」と云ふと、百合さんは又合點々々をした。奥さんは呆れて博士の爲る事を見てゐる。勿論、所詮死ぬるものだから、食べさせるといふのだらうといふだけのわけは分かつてゐる。それだけのことは分かつてゐながら、死ぬると云はれたものも、助かることがあるかも知れないのに、そんな冒險はさせたくない、女性的に反對して見るだけの意志の働もない程、心が疲れてゐるのである。看護婦は不服に相違ないが、大人しい女なので、博士に遠慮して黙つて見てゐる。

そのうち牛と葱が來た。博士は勝手へ助けに出てゐたお登さんと呼んで、此一皿の西洋料理を温めることを言ひ附けた。その時さつき火鉢に掛けて置いた粥が、雪平の蓋を吹き上げるので、看護婦が蓋を切つた。

お登さんが出て、西洋料理を添へて、粥を百合さんに勧めた。百合さんは牛とか葱とかお粥とか、一口ごとに注文をして、とうとうピフテキを三分一程食べて、粥も少し装つたのではあ

るがお代りをした。此頃になく食が進んだのである。

さて食べさせはしたものの、博士は跡の成行を多少氣遣つたが、咳が出ては吐きもせず、その儘好く居り合つてしまつた。暫くして西田が泊りに來たが、誰も牛と葱の話をするものはない。

これが百合さんの病氣の好くなる初で、それから一日々々様子直つた。そこで赤ん坊の葬儀もこつそり済まされた。とうとう三月十日には、一旦腰の抜けたやうになつた百合さんが、床の上起きて据わつて、奥さんが柳行李に入れて隠したおもちやを、又出して貰つて、持つて遊んだ。

どんな名醫にも見損ふことはある。これに反して奥さんは、自分の夢の正夢であつたのを、隣の高山博士の奥さんと話し合つて、兩家の奥ではいよいよ金屋羅様が信仰せられてゐる。哲學者たる小野博士までが金屋羅様の信者にならねば好いが。



れは奥さんに何か器械的な爲事を授けて、まぎらして遣らうといふことを考へたのである。

果して奥さんは直にそこらにある百合さんの物を片附けはじめた。そして勝手からお惣さんを呼んで、百合さんの處へ遣つて置いて、自分はいち早く、博士の所謂記念品を片附けた。

博士は獨り茶の間へ出て、夕飯を食べてゐると、丁度又牧野の爺さんがお邸の用事を済ませて來た。これは赤ん坊の葬儀の事をしてくれる積で來たのである。博士は少し考へがあるから、二三日後にすると云つて、牧野を歸した。二三日したら、百合さんも骨になるだらう。二人の子供を一しよに葬つて遣らうと思つたのである。

此晩は百合さんが珍らしくすやすや寝た。をりをり咳をして目を醒まして、又すやすや寝るのである。博士はもう體が疲れ切つたのだなと思つた。

翌日の日曜日には、博士は朝から百合さんの傍を離れずに見てゐたが、思の外變つた様子もない。朝看護婦が濕布をしようとするとき、百合さんはいつものやうに、さもせつなさうな顔をする。傍で見てゐた博士は、ちよつと考へて、「それは少しせうに置いて下さい」と云つた。看

護婦の藤江は素直な性なので、「はい」と云つて手を引いた。奥さんは博士の顔をぢつと見た。

頭のぼうとなつてゐる奥さんにも、博士がもう駄目だから、厭がる事はすまいと思ふのだなといふことだけは、直に分かつたのである。

その時百合さんが「爲てえ」と云つた。奥さんが「え」と云ふと、「爲ない」と直らないからとはつきり云つた。博士夫婦ははつと思つた。そして隠して爲た惡事を人に知られたやうな恐ろしい思が、同時に二人の頭を掠めて過ぎた。百合さんは濕布が大嫌で、最初のうちいつも爲せまいとするので、爲ないと病氣が直らないからと言ひ聞せられてゐた。それで濕布を止めようとするのが分かつて、爲て貰ひたいと望んだのである。博士は看護婦に濕布をさせた。

西田學士は、教授の宣告を聞いた爲めでもあるまいが、午になつても來ない。朝牛乳だけであつた百合さんは、いつものやうに粥を少し食べた。そして食べてしまつてから、「なんか」と云つた。

「蜜柑を上げようね。」

奥さんがかう云つて、蜜柑の皮をむいて、筋を取つて遣ると、百合さんは細かい筋の残つたのを、丁寧にむしつて取つてゐる。奥さんはそ

の手附を指さして、博士に言つた。

「あんなに氣分がしつかりしてゐます。」

奥さんは流石百合さんの性命の爲めに精護するのである。博士も、しろう人子箇の身勝手かとは思ひながら、幾らか頼もしいやうな心持のするのを禁じ得なかつた。

午後になつて咳のあとで、泡のやうなものを澤山吐いた。奥さんが「おや」と云ふと、看護婦の藤江が、「こんなに用ましたのは好でございませう」と云つて、ガアゼで拭き取つた。

夕方の事である。お塾さんが小さい雪平に粥の支度をしたのを持つて來て、「あちらは火が燃がつてゐますから」と云つて、看護婦に渡すと、看護婦が受け取つて、蒸氣を立たせてある金盥を卸して、雪平を跡へ掛けた。その時百合さんが何か云つた。博士がちよつと聞き取り兼ねて、「え、なんだい」と問ひ返すと、百合さんはじれつたさうに、又同じ事を繰り返した。看護婦が側から通譯をした。

「牛と葱と仰やるやうでございますね。」

博士の耳には「にゆうとねい」といふやうに聞えて分らなかつたのである。博士は百合さんの顔の處に覗いて問うた。

「牛と葱が食べたのかい。」

いのだよ。

處女。あ。その事だけは、おつ母さん、どうぞ云はないで置いて下さいね。その事だけは、わたくしは考へても見たくございせんし、申したくもございせん。考へたり、申したり致すと、わたくしは頭痛が致してまゐりますから。

母。それ御覽な。お前の頭の痛いののは、春先のせゐばかりではないのだよ。お前の言ひたくないと言ふのを、何もわたくしが無理に彼此云ふのぢやあないが、どうせ何時迄も此儘にして置かれるものではないからね。

(處女眉を蹙めたるが、忽ち又思ひ返したる如く、素直に機を下り、母と向き合ひて坐す。間。)

わたくしは初の内は、お前が面白半分に、二人の方を綾なしてお出なのかと思つたのだ。だが、何事に附けても、輕薄がましい事の嫌なお前の事だから、まさかそんなわけでもあるまいと思つて、よく／＼見てゐると、お前は飽くまで眞面目だらうぢやないか。わたくしもねえ、かうなつて見ると、どうもお前の氣が知れなくなつてしまつたのだよ。それでお前の厭がるのを知つてゐながら、こんな事を

云ひ出すのさ。一體お前はどうしようと云ふのだい。

處女。さうでございますね。

母。さうでございますねぢやあ、分らないね。お前だつて何と思つてお出だから、頭痛もするのだらうぢやないか。一體どうしようと云ふのだい。

處女。それはねえ、おつ母さん、わたくしだつて思つてゐる事があるどころぢやございせんわ。思つてゐる事はございまして、どう致す事も出来ないのですもの。

母。變ぢやあないか。二人の内どちらかにお前が極めなくちやあ、治まりつこはないぢやないか。

處女。それはどうも極められせん。

母。おや／＼。それでは矢張極めないで置いて、二人であんなにおしのを、見てゐたいとお云のかい。

處女。なんの、わたくしが、それを見てゐたうございませう。わたくしはそれを見てゐるのが、つらくてならないのでございませう。

母。(少し聲色を變ます。どうもそれでは分らないね。この津の國に、服部の女子は澤山ゐても、お前の續つた續つ値が一番好いと云

はれる程、何に附けても器用なお前が、二人の男に思はれたからと云つて、まさか意氣地がなくて捌が附かないと云ふわけでもあるまいね。

處女。え。おつ母さんがなんと仰やつても、どう思つて仰やるといふことが分かつてゐますから、わたくしは腹を立てたり拗ねたりは致しません。おつ母さんの仰やるとほり、わたくしにはあのお二人を釣つて置くの綾なして置くのといふ心持もございせんし、それかと申して、わたくしだつてあのお二人に彼此云はれるので、只途方に暮れて、ぼんやり致してゐるのもございせん。わたくしが極められないと申しますのは。

母。ふん。お前が極められないとお云のは。

處女。極められないと申しますのは、それはあの、(徐かに立つ)人間の力に及ばない事でございませうまいかと、思ふからでございませう。

(二人暫く無言。忽ち群鳥の羽音、窓のあなたに聞ゆ。處女窓の戸を開け、向うをちつと見てゐる。)

母。なんだい。

處女。あの平張の打つてあるあたりから、鴨が

# 生田川

## 人物

満屋處女。

高く上げたる髪に白銀の釵子。黄楊の小櫛。時の花(紅梅)の挿頭。淡紫の蕨縷の表衣。紅染めの裙。白地に浪に鴛鴦の模様ある薄き裳。錦の裙帯。紫綾の領巾。

腰機に懸かりゐるとき傍に柱、櫓、茅筍を置く。

壁に懸け置く筍は、昔の市女笠。白袴の於須比を被りて戴く。

はひりに置く舄は丹舄。

處女の母。

背後に上げたる髪。細かき杵の櫛。釵子。朽葉色の衣。茜染めの裳。山藍指の裙。倭文布の裙帯。織物の守袋に綾染めの紐附けたるを腋に懸く。珠數。

火桶は白木。

壁に懸けたる笠は白き桑の垂衣附け

たる市女笠。

はひりに置く舄は秋二毛。

菱會壯士。

烏帽子。款冬色の衣、白き袴。淺縹の蕨縷の襖。烏皮の淺沓。葛卷の小太刀。葛靴に交刃したる鹿矢二列に八

日の鳴鏑矢一手を表指す。白檀の節木の反高なる弓。

茅渚壯士。

烏帽子。紺の縷の襖。白き衣。白布の袴。鹿夏毛の行腰。毛沓。黒漆の刀

子に織物の縫袋。白銀の口貫の太刀。黒葛靴に麒麟の矢を盛りたるに飲

矢一手を表指す。所々に緒纏したる梓の弓。

法師。

鈍色の衲衣。色々の羽を綴りたる糞掃衣。阿闍梨笠。麻鞋。左手に針。右手

に白銅の五銖鈴。

(衣裳考證 關保之助)

攝津國菟原郡蘆屋の里なる民家。左手

大黃楊の垣の間に門口。そこに沓。一間

の正面の中程より石壁。笠二つ懸く。壁

の前に機を立つ。中程より方窓。火

桶柳筍やうの物。

蘆屋處女、機を織りゐる。その母、手を

火桶に翳しゐる。

母。もう春が近いと見えて、窓の方を見る。生

田川の水がぬるんだと、髻髪どもが云つてゐ

た。わたしのやうな年寄でも、どうやら炭櫃

が疎ましくなつた。(少し火桶を押し遣る。)

處女。(機の手を停む。)ほんにさうでございま

せう。此間の雷から時候が變つてまゐりま

した。どうしたわけか、わたくしはかう頭を

押さへられるやうな心持が致してなりませ

んわ。

母。いや。それは時候のせむばかりではあ

るまいよ。血の道も手傳つてゐるかも知れな

い。それに年寄つて同じ事ばかり云ふとお思

かも知れないが、あの毎日のやうにお出にな

る二人の方に、いつも暖味な事ばかり云つて



三人顔を見合せて思入あり。暫く無言。

處女。どうぞおはひりなさいまし。

茅渚。御免下さい。

菟會。御免下さい。

(二人の壯士、處女の母に目禮し、各弓を俵に置き坐す。母の位置と三角形になる。處女は戸口に近き處に突居る。)

母。これはお二人ともお揃で、好うこそお出下さいました。

茅渚。丁度こなたへまゐらうと存じまして、あの平張の打つてあるあたりまでまゐりますと。

菟會。和泉のお客と落ち合ひまして。

茅渚。鴨一羽づつ取りましたのを。

菟會。お土産に持つてまゐりました。

(二人鴨を母の前に出す。)

母。まあ、揃ひも揃つた立派な鳥でございますね。娘。廚へ持つて行つてお置。

處女。はい。

(鴨を取りて、右手へ入る。)

茅渚。(菟會に。こなたの母刀自が、立派なと仰やつたので、あの鶴の事を思ひ出しました。

あれはまだあの儘浮いてをりませうかな。菟會。きつとあの儘をりませう。何處から飛ん

でまゐつたものか、今朝見たときからあの通りにちつとしてをりまする。

母。あの、鶴がゐると仰やいますか。

茅渚。さやうでござります。先程二人で鴨を射ますと、近くにゐた鴨の群は一度にはつと立ちました。

が、直その向うに鶴が一羽立たずに浮いてをりました。

小舟を出して射た鴨を取つてまゐりました時も、鶴は靜かに波を切つて、二丈ばかり退いたばかりで、矢つ張立たずに浮いてゐました。

菟會。雪のやうに眞白な、大きな鶴でござります。

母。それはまあ、珍らしい。(少し間を置き、思案したる様子にて、膝を進む。)

かう申すと、なんとやら差出がまじうござりますが、あなた方お二人で、その鶴を射て御覽なさいませんか。

二筋の矢に鳥は一羽。お中なすつたそのお方を娘の埒に致しませう。

茅渚。はつ。これは何よりの仰でござりまする。菟會のお方。いかがなものでござりまする。

菟會。なる程。御尤な母刀自の仰でござります。わたくしも異存ござりませぬ。

茅渚。かういふ内も心が急ぐ。直にこれから。

さあ。

菟會。さあ。

(二人弓を取りて立つ。處女右手より出で、立ちたる儘にて、ちつとこなたを見

る。二人の壯士、同時に處女の顔を見、さて同時に日を母の方に移す。)

茅渚。後程お目に掛かります。

菟會。後程お目に掛かります。

母。お待ちしてをりまする。

(二人の壯士。柴の戸を出て、左手に入る。)

處女。(二人の左手に入るまで、ちつと立ちゐて、徐かに母の傍に進み、向き合ひて坐す。)

父お出なさるのですつて。

母。こんで出なさるのは、多分どなたかお一人で、そのお方がお増さんだよ。

處女。何故なの。

母。(微笑む。何故だか當てて御覽。)

處女。分かりますわ。

母。(又微笑む。一好い思附があつたのだよ。)

(間。實はね、さつき二人で持つてお出の、あの鴨を射なすつたとき、大きな白い鶴が一羽、鴨が立つても丹が來ても、逃げずに浮いてゐたのだとき。その話をわたくしが聞いて、それ

立つたのでございます。(間。)

母。お前が極められないとお云のは、どなたかにお前が極めたら、残る一人の方が、その儘にはをられまいとお思なのだらうが、わたしはさうは思はないよ。(處女はぢつと外を見てゐる。)さうしたら、一人の方があきらめておしまひなさるだらうと思ふがね。(處女はぢつと外を見てゐる。)お前はさうはならないとお思のかい。

處女。(こなたへ向く。)それは大變な事になりは致すまいかと思ひますの。

母。はてね。そんならお前が殺されるとか、お前の極めた方のかたが殺されるとか、お思のかい。どうもお二人ともそんな氣の荒い方のやうではないのだがね。

處女。えゝ。そんな氣の荒い方々ではございませんと。

母。それではお前に捨てられた方のかたが死んでもおしまひなさらうと云ふのかい。

處女。(父母と向き合ひて坐す。)それは死んでおしまひなさいますわ。

母。(微笑む。)まあ。矢つ張利發なやうでも世間見ずだね。

すわ。

母。そんなら、お前の大變な事になるだらうとお云のは、その事なのだね。

處女。いゝえ。

母。はてね。(暫く考ふ。)その方に死なれては、お前達が濟まないとお云のかい。

處女。えゝ。それは二人の間に亡くなつた方の影が立つて入らつしやるのですもの。

母。ふん。お前の考も大抵分かつたよ。わたしの考では、少しお前が思過しをしてお出のやうだが、わたしだつてきつとさうでないとも云はれないのさ。併しそれはお前が出し抜けにどなたかに極めると云つたなら、捨てられた方のかたが、あきらめにくいかも知れない。どうだね。お二人の間で極まつてしまふやうにしたら。

處女。そんな事は出来せんわ。

母。(又微笑む。)何故。出来ないには限らないぢやないか。

(免會壯士、茅渚壯士、堀垣の外に現る。二人共人柄詞つき處女と母とよりは、稍時代なり。弓を持ち、鴨一羽づつを提ぐ。)

どなたがお出なされたやうだね。

免會壯士。(一歩下がりで、茅渚壯士に。)さあ。どうぞお先へ。

茅渚壯士。いえ。あなたこそ。

免會。わたくしは此土地のもの、あなたは隣國のお客ではござりませんか。どうぞ御遠慮なく。

茅渚。いつも同じやうな事を申すやうではござりますが、さう仰やると、つい愚癡な事も申したくなります。何故わたくしは思ふ人と、同じ津の國には生れずに、和泉の國に生れましたやら。

免會。これはお詞とも覺えません。道が遠ければ、お志の深きも知れるといふものではございせんか。

茅渚。志は劣らぬ積でござりますが、思ふ人とまだ片生の昔から、お識合のあなたこそ、お羨ましうござります。

免會。いや馴れては目にも止まらぬ暫でござります。珍らしく來られたあなたがお羨ましうござります。かう申してゐては、果てしがござりません。兎に角お先へ。

茅渚。そんならお許下さりませ。(柴の戸に手を掛く。)

(處女靜かに戸口に歩み出で、戸を開く。)

僧。依止根本識

五識隨緣現

或俱或不俱

如濤波依水

母。本當にその鳥に、矢が二本共立つたのなら、

お前が行つたつて極まりやあすまいぢやないか。

處女。(月口にて杏を穿く。)いゝえ、おつ母さ

ん。あの鵲が死にましたので、今日わたくしの身の上が、どうにか極まらなくてはならな

いやうに思はれますの。(語氣緩かに強く。)

人間の小さい智慧で、どうしよらの、かうし

ようのと、色々に思ひましたのも、夜が明けて見れば、烽火の小さい明りがあるかないか

知れないやうなものですわ。

僧。現前立少物

謂是唯識性

以有所得故

非實住唯識

處女。おつ母さん、門に入らつしやる坊様にお

上げなすつて下さいよ。

(處女僧に會釋して、月口にて意を決し

たる如く早足になり、左手に入る。窓の外薄暗くなる。母柳窩やうの物より錢を

僧。爾時住唯識

離二取相故

無得不思議

是出世間智

(僧入る。鐘の音。)

母。おう。姫が門で云つたことは、どういふ心

で云つたのやら。跡で思へば氣に掛かる。わたしもちよいと行つて見よう。(壁に懸けた

る今一つの笠を取る。幕)

### 蟋蟀

まどかなる

きりざりす

觸角を

物來れば

隱處の

人來れば

我を待ち居り

穴掘りて栖む

おちなき虫よ

長くさし伸べ

しざりかくろふ

庭長き子

かくろへ入りて

(「歌日記」の「夢がたり」より)

### わが墓

わが歩む

人あまた

地に質

穴の上へ

馳せめぐり

たもとほり

穴は我

入らでやは

われ道に

罵る人よ

いざ擧れ

道のゆくてに

穴ほりてをり

もとむるならじ

きはむるならじ

覆面の人

罵りはげます

見つつわれおもふ

墓ならじかと

わが墓ならば

倦むこと久し

覆面とりて

感謝の右手を

(「歌日記」の「夢がたり」より)



を取つて来た方を壻にしようと云つたのだ。

處女。まあ。そんならおつ母さんは、今朝から川に浮いてゐる、あの鵲を取つて来いと、お二人に仰つたのだ。

母。さうだよ。今朝から川に浮いてゐるとは、それをお前は知つてお出か。

處女。ええ。ここから好く見えますわ。大きい白い鵲ですもの。

母。さうかい。

(間。處女心配らしき様子。)

變な顔をお爲ではないか。又頭痛がして来たのかい。

處女。いゝえ。

母。ではどうしたといふのだえ。もしかわたし云つたことがお前の氣に入らないのかい。

處女。いゝえ。

母。分らないねえ。そんならお前の出来ないと云つたことが不思議に出来て、今日一日に極まるのを、悪いとお思ではないのだね。

處女。いゝえ。それが悪くはございませんの。

唯わたくしには久しい間、極まらないでゐた事が、そんなに急に極まるのが、恐ろしいやうでございしますの。それにあの大きな鵲を、今朝ふいと見た時から、なんだか氣に掛かつ

てゐたのに、あれが射られて極まるといふのも、恐ろしいやうでございしますの。

母。なんの詰まらない。さういふ内に、その鳥はもう射られたかも知れないのだよ。

處女。(獨語のやうに。)ほんに鵲はどうしたかしら。

(處女徐かに立ちて戸を開け、外を見る。)

(間。)

母。見えるかい。

處女。(見返らずに。)ええ。(語氣緩く。)綠に光る水の上に、閉めた網がなんそのやうに、眞つ白に見えてゐますわ。

母。二人の方はどうなすつたのだらうね。(間。)

川はつい其所だけれど、道が曲がつて附いてゐるから、まだお出なされぬかも知れない。

處女。あら。

母。なんだい。

處女。白い鳥が大きくなりましたわ。(間。)

鳥が流れますわ。(間。)

鳥の方へ舟がまゐりますわ。(間。)

人が二人乗つてゐますわ。(稍長き間。)

矢が立つてゐますわ。矢が二本。母。なんとお云だえ。矢が二本鳥に立つてゐるといふのかい。

處女。ええ。(間。)

母。(母も處女も暫く無言。處女はちつと窓の外の外を見てゐる。)

二人で鳥を中に置いて、動かずにお出なさいますの。

母。(心配らしき様子。)

處女。ええ。(間。)

母。(長き間二人無言。處女はちつと窓より見てゐる。鐘の音。窓の外次第に夕映にて赤くなる。此時僧侶の衣、受機器を持ちて登場し、戸の外に立つ。)

僧。煩悩謂貪瞋癡慢疑惡見隨煩惱謂忿恨覆惱嫉慳。

母。おや。托鉢の坊様がお出なすつたね。いつも朝の内なのに、こんなに遅くなつて。

處女。(靜かに窓を離れて、懸けたる笠を取る。)

あ、おつ母さん。わたくしは一寸行つて見て來ますわ。

ある。

尤も此女中は、本能的掃除をして、「舌の戦ぎ」をしても、活潑で間に合ふので、木村は満足してゐる。舌の戦ぎといふのは、ロオマンチック時代の或小説家の云つた事で、女中が主人の出た迹で、近所をしやべり廻るのを謂ふのである。

木村は何か讀んでしまつて、一寸顔を覺めた。大抵いつも新聞を置くときは、極authenticな表情をするか、さうでなければ、顔を覺めるのである。書いてあるのは毒にも藥にもならないやうな事であるか、さうでなければ、木村が不公平だと感ずるやうな事であるからである。そんなら讀まなくても好きさうなものであるが、矢張讀む。讀んで氣のない顔をしたり、一寸顔を覺めたりして、すぐに又時々とした顔に戻るのである。

木村は文學者である。

役所では人の手間取のやうな、精神のないやうな、附けたりやうな偽事をしてゐて、もう頭が禿げ掛かつて、まだ一向幅が利かないのだが、文學者としては多少人に知られてゐる。ろくな物も書いてゐないのに、人に知られてゐる。實に知られてゐるばかりではない。一旦人

に知られてから、役の方が地方勤めになつたり何かして、死んだもののやうにせられて、頭が禿げ掛かつた後に東京へ戻されて、文學者として復活してゐる。手数の掛かつた履歷である。

木村が文藝欄を讀んで不公平を感ずるのが、自利的であつて、毀られれば腹を立て、褒められれば喜ぶのだと云つたら、それは冤罪だらう。我が事、人の事と云はず、くだらない物が讀めてあつたり、面白い物がけなしであつたりするのを見て、不公平を感ずるのである。勿論自分が引合に出されてゐる時には、一層切實に感ずるには違ない。

ルウズエルトは「不公平と見たら、戦へ」と世界を説法して歩いてゐる。木村はなぜ戦はないうだらうか。實は木村も前半世では盛んに戦つたのである。併し其頃から役人をしてゐるので、議論すれば著作が出来なかつた。復活してから、下手ながらに著作をしてゐるので、議論なんぞは出来ないのである。

其日の文藝欄にはこんな事が書いてあつた。「文藝には情調といふものがある。情調はsituationの上に成り立つ。併しintellectualなものである。木村の關係してゐる雜誌に出てゐる作品には、どれも情調がない。木村自己

のものにも情調がないやうである。」

約めて言へばこれだけである。そして反對に情調のある文藝といふものが例で示してあつたが、それが一々木村の感服してゐるものでもなかつた。中には木村が、立派な作者があんな物を書かなければ好いと思つたものなんぞが擧げてあつた。

一體書いてある事が、木村には善くは分らない。シチュエーションの上に成り立つ情調なんぞと云ふ詞を讀んでも、何物をもはつきり考へることが出来ない。木村は随分哲學の本も、藝術を論じた本も讀んでゐるが、こんな詞を讀んでは、何物をもはつきり考へることが出来ない。

いかにも文藝には、アンデフィニツサブアルだとも云へばはれさうな、面白い處があるだらう。それは考へられる。併しシチュエーションとはなんだらう。昔からドラムやなんぞで、人物を時と所とに配り附けた上に出来るものを言ふではないか。ヘルマン・バルが舊い文藝の視ひ處としてゐる。豊富で、變化のある行為の緊張なんといふものと、差別はないではないか。そんなものの上に限つて成り立つといふのが、木村には分らないのである。木村はさ程自信の強い男でもないが、その分

# あそび

木村は官吏である。

或日いつもの通りに、午前六時に目を醒ました。夏の初めである。もう外は明るくなつてゐるが、女中が遠慮してこの間だけは雨戸を開けずに置く。蚊帳の外に小さく燃えてゐるランプの光で、獨寝の闇が寂しく見えてゐる。

器械的に手が枕の側を探る。それは時計を捜すのである。逡巡省で車掌に買つて渡す時計だとかで、頗る大きいニッケル時計なのである。針はいつもの通り、きちんと六時を指してゐる。

「おい。戸を開けんか。」

女中が手を拭き拭き出て来て、雨戸を繰り開ける。外は相變らず、灰色の空から細かい雨が降つてゐる。暑くはないが、じめじめとした空気が顔に當る。

女中は湯帷子に襦袢を肉に食ひ入るやうに掛けて、戸を一枚一枚戸袋に繰り入れてゐる。顔には汗がにじんで、それに亂れた髪の毛がこびり附いてゐる。

「ははあ、けふも運動すると暑くなる日だな」と思ふ。木村の借家から電車の停車場まで七八町ある。それを歩いて行くと、涼しいと思つて門口を出ても、行き着くまでに汗になる。その事を思つたのである。

縁側に出て顔を洗ひながら、今朝急いで課長に出す筈の書類のあることを思ひ出す。併し課長の出るのは八時三十分頃だから、八時までに役所へ行けば好いと思ふ。

そして頗る愉快げな、晴々とした顔をして、陰氣な灰色の空を眺めてゐる。木村を知らないものが見たら、何が面白くてあんな顔をしてゐるかと思ふことだらう。

顔を洗ひに出てゐる間に、女中が手早く蚊帳を疊んで床を上げてゐる。そこを通り抜けて、唐紙を開けると、居間である。

机が二つ九十度の角を形づくるやうに据ゑて、その前に座布団が鋪いてある。そこへ据わつて、マツチを擦つて、朝日を一本飲む。木村は爲事をするのに、差當りしなくてはな

らない事と、暇のある度にする事を別けてゐる。一つの机の上を綺麗に空虚にして置いて、その上へ其折々の急ぐ爲事を持つて行く。そしてその急ぐ爲事が片付くと、すぐに今一つの机の上に載せてある物をそつとへ持ち出す。この載せてある物はいつとも多い。堆積してゐる。それは緩急によつて疊ねて、比較的急ぐものを上にして置くのである。

木村は座布団の側にある日出新聞を取り上げて、空虚にしてある机の上に廣げて、七面の處を開ける。文藝欄のある處である。

朝日の灰の翻れる心を、机の向うへ吹き落しながら讀む。顔は矢張り晴々としてゐる。

唐紙のあつちからは、はたきと等との音が靜しく聞える。女中が急いで寢間を掃除してゐるのである。はたきの音が殊に脚しいので、木村は度々小言を言つたが、一日位直つても、又元の通りになる。はたきに附けてある紙ではたかずに、柄の先きではたきのである。木村はこれを「本能的掃除」と名づけた。殆ど卵を抱いてゐるとき、卵と白墨の角を刺したのと取り換へて置くと、矢張り白墨を抱いてゐる。目的は餘所になつて、手段だけが實行せられる。塵を取る爲めとは思はずに、はたきのためにはたき



木村は洋服に着換へて、封を切らない朝日を一ツ隠しに入れて玄關に出た。そこには辨當と蛸蝓傘とが置いてある。沓も磨いてある。

木村は傘をさして、てくてく出掛けた。停留場までの道は狭い町家続きで、通る時に主人の挨拶をする店は大抵極まつてゐる。そこは氣を附けて通るのである。近所には木村に好意を表してゐて、挨拶などをするものと、冷淡で知らない顔をしてゐるものがある。敵對の感じを持つてゐるものはないらしい。

そこで木村はその挨拶をする人はどんな心持でゐるだらうかと推察して見る。先づ小説なぞを書くものは變人だとは確かに思つてゐる。

變人と思ふと同時に、氣の毒な人だと感じて、プロテクトにしてくれるといふ風である。それが挨拶をする表情に見えてゐる。木村はそれを厭がりもしないが、無論難有くも思つてゐない。

丁度近所の人の態度と同じで、木村といふ男は社交上にも餘り敵を持つてはゐない。矢張り馬鹿にする氣味で、好意を表してゐてくれる人と、冷淡に構はずに置いてくれる人とがあるばかりである。

それに文壇では折々追治られる。木村は只人が構はずに置いてくれれば好いと

思ふ。構はずにといふが、著作だけはさせて貰ひたい。それを見當違に罵倒したりなんかせず置いてくれれば好いと思ふのである。そして少數の人がどこかで讀んで、自分と同じやうな感じをしてくれるものがあつたら、爲合せだと、心のずつと奥の方で思つてゐるのである。

停留場迄の道を半分程歩いて來たとき、横町から小川といふ男が出た。同じ役所に勤めてゐるので、三度に一度位は道連れになる。

「けさは少し早いと思つて出たら、君に逢つたと、小川は云つて、傘を傾けて、竝んで歩き出した。

「さうかね。」

「いつも君の方が先きへ出てゐるぢやあないか。何か考へ込んで歩いてゐたね。大作の趣向を立ててゐたのだらう。」

木村はかう云ふ事を聞く度に、くすぐられるやうな心持がする。それでも例の晴々とした顔をして黙つてゐる。

「こなひだ太陽を見たら、君の役所で、秩序的な生活と藝術的生活とは矛盾してゐて、到底調和が出来ないと云つてあつたつけ。あれを見たかね。」

「見た。風俗を壞亂する藝術と官吏服務規則

とは調和の出来やうがないと云ふのだらう。」

「なる程、風俗壞亂といふやうな字があつたね。僕はさうは取らなかつた。藝術と官吏といふだけに解したのだ。政治なんぞは先づ現状

の儘では一時の物で、藝術は永遠の物だ。政治は一國の物で、藝術は人類の物だ。」小川は省内での饒舌家で、木村はいつもうるさく思つてゐるが、そんな素振はしないやうに努めてゐる。先方は持病の起つたやうに、調子附いて來た。一併し君ルウズエルトの方々で遣つてゐる演説を讀んでゐるだらうね。あの先生が口で言つてゐるやうに行けば、政治も一時だけの物ではない。一國ばかりの物ではない。あれを一層高尚にすれば、政治が大藝術になるねえ。君なんぞの理想と一致するだらうと思ふが、どうかねえ。」

木村は馬鹿馬鹿しいと思つて、一寸顔を覺めなくなつたのをこらへてゐる。そのうち停留場に來た。場木が常で、朝出て晩に歸れば、丁度満員の車にばかり乗るやうになるのである。二人は赤い柱の下に、傘を並べて立つてゐて、車を二臺も送り過して、やつとの事で乗つた。

二人共吊革にぶら下がつた。小川はまだしや

からないのを、自分の頭の悪いせみだとは思はなかつた。實は反對に記者の爲めに煩る氣の毒な、失敬な事を考へた。情調のある作品として擧げてある例を見て、一層失敬な事を考へた。

木村の覺めた顔はすぐに晴々としてしまつた。そして一人者のなんでも整頓する癖で、新聞を丁寧に疊んで、居間の縁側の隅に出して置いた。かうして置けば、女中がランプの掃除に使つて、餘つて不用になると、屑屋に賣るのである。

これは長々と書いたが、實際二三分間の出来事である。朝日を一本飲む間の出来事である。

朝日の吸殻を、灰皿に代用してゐる石洗明具に棄てると同時に、木村は何やら思ひ附いたといふ風で、獨笑をして、側の机に十冊ばかり積み上げてある manuscriptsらしいものを一抱きに抱いて、それを用筆筒の上に運んだ。それは日出新聞社から頼まれてゐる應募脚本であつた。

日出新聞社が懸賞で脚本を募つたとき、木村は選者になつた。木村は息も衝けない程用事を持つてゐる。應募脚本を読んでゐる時間はな

い。そんな時間を拵へるとすれば、それは烟草の暇をそれに使ふ外はない。

烟草には誰も不愉快な事をしたくはない。應募脚本なんぞには、面白と思つて讀むやうなもの、十讀んで一つもあるかないかである。

それを讀まうと受け合つたのは、頼まれて不精不精に受け合つたのである。

木村は日出新聞の三面で、度々悪口を書かれてゐる。いつでも「木村先生」派の「風俗壞亂」といふ詞が使つてある。中にも西洋の誰やらの脚本を或劇場で興行するのに、木村の譯本を使つた時に此お極りの悪口が書いてあつた。それがどんな脚本かと云ふと、censureの可笑しい程嚴しいキインやベルリンで、書籍としての發行を許してゐるばかりではない、舞臺での興行を平氣でさせてゐる、頗る甘い脚本であつた。

併しそれは三面記者の書いた事である。木村は新聞社の事情には暗いが、新聞社の藝術上の意見が三面にまで行き渡つてゐないのを怪みはしない。

今讀んだのはそれとは違ふ。文藝欄に、縱令個人の署名はしてあつても、何のことわりがき

もなしに載せてある説は、政治上の社説と同じやうなもので、社の藝術欄が出てゐるものと見て好からう。そこで木村の書くものにも情調がない、木村の選擇に與つてゐる雜誌の作品にも情調がないと云ふのは、木村に文藝が分らないと云ふのである。文藝の分らないものに、なんで脚本を選ばせるのだらう。情調のない脚本が當選したら、どうするだらう。そんな事をして、應募した作者に濟むか。作者にも濟むまいが、こつちへも濟むまいと、木村は思つた。

木村は悪い意味でデレツタントだと云はれてゐるだけに、そんな目に逢つて、面白くもない物を讀まないでも、生活してゐられる。兎に角此一山を退治することは當分御免を蒙りたいと思つて、用筆筒の上へ移したのである。

書いたら長くなつたが、これは一秒時間の事である。

隣の問では、本能的掃除の音が聳んで、唐紙が開いた。膳が出た。

木村は根芋のはひつてゐる味噌汁で朝飯を食つた。

食つてしまつて、茶を一杯飲むと、背中に汗がにじむ。矢張り夏だと、木村は思つた。

ら晩まで著作をすることになったとして見る。此男は著作をするときも、子供が好きな遊びをするやうな心持になつてゐる。それは苦しい處がないといふ意味ではない。どんな苦痛を耐へたつて、障礙を凌ぐことはある。又藝術が笑談でないことを知らないでもない。自分が手に持つてゐる道具も、眞の鉅匠大家の手に渡れば、世界を動かす作品をも造り出すものだとは自覺してゐる。自覺してゐながら、遊びの心に持たつてゐるのである。ガンベッタの兵があるとき突撃をし掛けて鋒が鈍つた。ガンベッタが喇叭を吹けと云つた。そしたら進撃の譜は吹かないで、何の譜も吹いた。イタリヤ人は生死の境に立つてゐても、遊びの心持がある。兎に角木村のためには何をすることも遊びである。そこで同じ遊びなら、好きな、面白い遊びの方が、詰まらない遊びより好いには違ひない。併しそれも朝から晩までしてゐたら、單調になつて厭きるだらう。今の詰まらない爲事にも、此單調を破るだけの機能はあるのである。

此爲事を罷めたあとで、著作生活の單調を破るにはどうしよう。それは社交もある、旅もある。併しそれに金がある。人の魚を釣るのを見てゐるやうな態度で、交際社會に臨みたくはない。ゴルキイの標な *vousbouchnag* をして愉快を感じるには、ロシア人のやうな遺傳でもなくては駄目らしい。矢張けちな役人の方が好いかも知れないと思つて見る。そしてさう思ふのが、別に絶望のやうな苦しい感じを伴ふわけでもないのである。

或時は空想が愈々放縱になつて、戦争なんぞの夢を見る。喇叭は進撃の譜を奏する。高く擧げた旗を望んで駈歩するのは、さぞ爽快だらうと思つて見る。木村は病氣といふものをしたことがないが、小男で瘦せてゐるので、徴兵に取られなかつた。それで戦争に行つたことはない。併し人の話に、壯烈な進撃とは云つても、實は土囊を駈して匍匐して行くこともあると聞いてゐるのを思ひ出す。そして多少の興味を殺される。自分だつて其境に身を置いたら、土囊を駈して匍匐することは厭せない。併し壯烈だとか、爽快だとかいふ想像は薄らぐ。それから、縦横戦争に行くことが出来ても、輻重に編入せられて、運搬をさせられるかも知れないと思つて見る。自分だつて車の前に立たせられたら、挽きもしよう。後に立たせられたら、推しもしよう。併し壯烈や爽快とは一層縁遠くなると思ふのである。

或時は航海の夢を見る。屋上の如き浪を凌いで、大洋を渡つたら、愉快だらう。地極の水の上に國旗を立てるのも、愉快だらうと思つて見る。併しそれに矢張分業があつて、蒸汽機關の火を焚かせられるかも知れないと思ふと、*cauchousisme* の夢が醒めてしまふ。

木村は爲事が一つ片附いたので、その一括の書類を机の向うに押し遣つて、高い山から又一括の書類を卸した。初めは半紙の單紙であつたが、こんどのは紫板の西洋紙である。手の平にべたりと食つ附く。丁度物干竿と一しよに蛸輪を掴んだやうな心持である。

此時までに五六人の同僚が次第に出て来て、いつか机が皆集がつてゐた。八時の鐘が鳴つて暫くすると、課長が出た。

木村は課長がまだ腰を掛けないうちに、赤札の附いた書類を持つて行つて、少し隔たつた處に立つて、課長のゆつくり書類を *partoutille* から出して、硯箱の蓋を取つて、硯を磨るのを見てゐる。硯を磨つてしまつて、偶然のやうにこつちへ向く。木村よりは三つ四つ歳の少い法學博士で、日附鼻附の緊まつた、餘地の少い、敏捷らしい顔に、金縁の目金を掛けてゐる。

「昨日お命じの事件を」と云ひきして、書類を出



べり足りないらしい。

「君。僕の藝術観はどうだね。」

「僕はそんな事は考へない。」不精不精に木村が答へた。

「どう思つて遣つてゐるのだね。」

「どうも思はない。作りたいとき作る。まあ、食ひたいとき食ふやうなものだらう。」

「本能かね。」

「本能ぢやあない。」

「なぜ。」

「意識して遣つてゐる。」

「ふん」と云つて、小川は變な顔をして、なんと思つたか、それ切り電車を降りるまで黙つてゐた。

小川に分かれて、木村は自分の部屋の前へ行つて、帽子掛に帽子を掛けて、傘を立てて置いた。まだ帽子は二つ三つしか掛かつてゐなかつた。

戸は開け放して、竹簾が垂れてある。お爲着せの白服を着た給仕の側を通つて、自分の机の處へ行く。先きへ出てゐるものも、まだ爲事には掛からずに、扇などを使つてゐる。「お早う」位を交換するものもある。黙つて頗で會釋をするものもある。どの顔も蒼ざめた、元氣のない

顔である。それも其咎である。一月に一度位づつ病氣をしないものはない。それをしないのは木村だけである。

木村は、非常持出で書いた札の張つてある、煤色によごれた戸棚から、しめつぱい書類を出して来て、机の上へ二山に積んだ。低い方の山は、其日其日に處理して行くもので、その一番上に舌を出したやうに、赤札の張つてある一綴の書類がある。これが今朝課長に出さなくてはならない、急ぎの事件である。高い方の山は、相間相間にぼつぼつ進れば好い爲事である。當り前の分擔事務の外に、字句の訂正を要する爲めに、餘所の局からも、木村の處へ来る書類がある。そんなのも急ぎでないのは此中にはひつてゐる。

書類を持ち出して置いて、椅子に掛けて、木村は例の車掌の時計を出して見た。まだ八時までに十分ある。課長の出勤するまでには四十分あるのである。

木村は高い山の一番上の書類を廣げて、讀んで見ては、小さい紙切れに糊板の上の糊を附けて張つて、それに何やら書き入れてゐる。紙切れは幾枚かを紙擦で擦いで、机の横側に掛けてあるのである。役所ではこれを附箋と云つて

ゐる。

木村はゆつくり構へて、絶えずごつごつと爲事をしてゐる。その間隙は始終晴々としてゐる。かういふ時の木村の心持は一寸説明しにくい。此男は何をするにも子供の遊んでゐるやうな氣になつてしてゐる。同じ遊びにも面白いのもあれば、詰まらないものもある。こんな爲事はその詰まらない遊びのやうに思つてゐる分である。役所の爲事は笑談ではない。政府の大機關の一小齒輪となつて、自分も廻轉してゐるのだといふことは、はつきり自覺してゐる。自覺してゐて、それを遣つてゐる心持が遊びのやうなのである。顔の晴々としてゐるのは、此心持が現れてゐるのである。

爲事が一つ片附くと、朝日を一本飲む。こんな時は木村の空想も悪戯をし出す事がある。分業といふものも、貧乏籤を引いたもののためには、臨分詰まらない事になるものだなどとも思ふ。併し不平は感じない。そんならと云つて、これが自分の運だと諦めてゐるといふ Fataliste らしい思想を持つてゐるのではない。どうかすると、こんな事は罷めたらどうだらうなどとも思ふ。それから罷めた先きを考へて見る。今の身の上で、ランプの下で著作をするやうに朝か

が、あらゆる爲事に對する「遊び」の心持が、ノラでない細君にも、人形にせられ、おもちゃにせられる不愉快を感じさせたのであらう。

木村のために、此の遊びの心持は、與へられたる事實である。木村と往來してゐる、或る青年文士は、「どうも先生には現代人の大事な性質が開けてゐます、それは *devoid* です」と云つた。併し木村は格別それを不幸にも感じてゐないらしい。夕立のあとは又小降になつて餘り涼しくもならない。

十一時半頃になると、遠い處に住まつてゐるものだけが、辨當を食ひに食堂へ立つ。木村は號砲が鳴るまでは爲事をしてゐて、それから一人で辨當を食ふことにしてゐる。

二人の同僚が食堂へ立つたとき、電話のベルが鳴つた。給仕が往つて暫く聞いてゐたが、「少々お待ち下さい」と云つて置いて、木村の處へ來た。

「日出新聞社のものですが、一寸電話口へお出下さいと申すことです。」

木村が電話口に出た。

「もしもし。木村ですが、なんの御用ですか。」

「木村先生ですか。お呼立て申して済みません。あの應募脚本ですが、いつ頃御覽濟になり

ませうか。」

「さうですなあ。此頃忙しくて、まだ急には見られませんが。」

「さやうですか。」なんと云はうかと、暫く考へてゐるらしい。「いづれ又伺ひます。何分宜しく。」

「さやうなら。」

「さやうなら。」

微笑の影が木村の顔を掠めて過ぎた。そしてあの用算笥の上から、當分脚本は降りないのだと、心の中で思つた。昔の木村なら、「あれはもう見ない事にしました」なんぞと云つて、電話で訃報を買つたのである。今は大分おとなしくなつてゐるが、彼の微笑の中には多少の *brooding* がある。併しこんな、けちな悪意では、ニイチエ主義の現代人にもなれない。

號砲が鳴つた。皆が時計を出して巻く。木村も例の車掌の時計を出して巻く。同僚はもうとつくに書類を片附けてゐて、どやどや退出する。木村は給仕と只二人になつて、ゆつくり書類を戸棚にしまつて、食堂へ行つて、ゆつくり辨當を食つて、それから汗臭い満員の電車に乗つた。

## 前口上 (KIRABUND)

己は今机に向いて、

インキ帯にペンを衝つ込んで、

お祈を上げて、

詩を書いてゐる。

油のやうに滑に

前の句が後の句を生んで、句句互に相照す

もつと魂が詩の中にあつたらななどと、

問うて見るのは、たまの事だ。

魂は己にちつとも苦痛を與へぬ。

魂は己とはまるで交渉なしでゐる。

我と我が尊さに安んじてゐる。魂は、

裸で長椅子の上に寝てゐるのだ。

晩になると、己はボタン穴に

ダリアの花を挿して、魂を連れて散歩する。

己の名はスタニスラウスで、

魂の名はアマリイと云ふのだ。

す。課長は受け取つて、ざつと讀んで見て、「これで好い」と云つた。

木村は重荷を卸したやうな心持をして、自分の席に歸つた。一度出して通過しない書類は、なかなか二度目位で滞りなく通過するものではない。三度も四度も直させられる。そのうちには向うでも種々に考へて見るので、最初云つた事とは多少違つて来る。とうとう手が附けられなくなつてしまふ。それで一度で通過するのを喜ぶのである。

席に歸つて見ると、茶が來てゐる。八時に出勤したとき一杯と、午後勤務のあるときは三時頃に一杯とは、黙つてゐても、給仕が持つて來てくれる。色が附いてゐるだけで、味の無い茶である。飲んでしまふと、茶碗の底に滓が澤山淀んでゐる。

木村は茶を飲んでしまふと、相變らずゆつくり構へて、絶間なくどつどつと爲事をする。低い方の山の書類の處理は、折々帳簿を出して照らし合せて見ることがあるばかりで、ぐんぐんはかが行く。三件も四件も烟草休なしに済ましてしまふことがある。済んだのは、検印をして、給仕に持たせて、それ／＼廻す先きに廻す。書類中には直ぐに課長の處へ持つて行くもの

ある。

その間には新しい書類が廻つて来る。赤れのは直ぐに取り扱ふ。その外はどの山かの下へ入れる。電報は大抵赤札と同じやうにするのである。

爲事をしてゐるうちに、急に暑くなつたので、ふいと、向うの窓を見ると、朝から灰色の空の目えてゐた處に、紫黒かつた暗色の雲がまゐがつて居る。

同僚の顔を見れば、皆ひどく疲れた容顔をしてゐる。大抵下顎が弛んで垂れて、顔が心持長くなつてゐるのである。室内の濕つた空氣が濃くなつて、頭を壓すやうに感ぜられる。今のやうに特別に暑くなつた時でなくとも、執務時間がやや進んでから、便所に行つた歸りに、廊下からはひとと、悪い烟草の匂と汗の香とで噓せるやうな心持がする。それでも冬になつて、暖爐を焚いて、戸を締め切つてゐる時よりは、夏の此頃が廻かに増しである。

木村は同僚の顔を見て、「一寸顔を覺めたが、すぐに又晴々とした顔になつて、爲事に掛かつた。

暫くすると雷が鳴つて、大降雨になつた。雨が窓にぶつ附かつて、恐ろしい音をさせる。

部屋中のものが、皆爲事を置いて、窓の方を見る。木村の右隣の山田といふ男が云つた。

「むしむしすると思つたら、とうとうタウが來ましたな」

「さうですね」と云つて、咄々とした不斷の顔を右へ向けた。

山田は其顔を見て、急に思ひ附いたらしい様子で、小聲になつて云つた。

「君はぐんぐん爲事を拂らせるが、どうもはたで見えてゐると、笑談にしてゐるやうでならぬい。」

「そんな事はないよ」と、木村は恬然として答へた。

木村が人にこんな事を言はれるのは河過だか知れない。此男の表情、言語、舉動は人にかういふ詞を催使してゐると云つても好い。役所でも先代の課長は不真面目な男だと云つて、ひどく嫌つた。文壇では批評家が眞剣でないと云つて、けなししてゐる。一度妻を持つて、不幸にして別れたが、平生何かの機會で衝突する度に、「あなたはわたしを茶かしてばかり入らつしやつた」と云ふのが、其細君の非難の主なるものであつた。

木村の心持には眞剣も木刀もないのである



を傾けると、爺いさんがその様子を見て、かう云つた。

「どうも誠に相済みません。さぞおやかましくございませう。」

爺いさんのかう云ふ様子が、只一通りの挨拶でなく、心から恐れ入つてゐるらしいので、己は却て氣の毒に思つた。併しそれと同時に、聞けば聞く程怪しい物の言ひ振りなので、mischanceなやうだとは知りながら、どうした女だか聞いて見ようと決心した。

さうとは知らない爺いさんは、右の手尖だけを疊に衝いて、腰を浮かせた。そして己の顔を見て云つた。

「もう何も御用は。」

「さう。別になんにもないのだが、お前の方で忙しくないなら、少し聞いて見たいことがある。」

「いえ。どういたしまして。どうぞなんなりとも仰やつて下さいまするやうに。」腰は又落ち着けられた。

「どうだい。ここいらでは夏でもそんなに遅くまで起きてはゐないのだらうが、かうしてお前を引き留めて、話をしてゐても好いかい。」

「へえ。こちらなぞでは、宿屋と違ひまして、

割合ひに早く休みまするが、わたくしはどうせ今夜も通夜をいたしますのでございませう。」

「通夜をするといふのかね。それでは近い頃不幸が何かあつたのだね。」

「へえ。主人の母親が亡くなりましてから、明日で二七日になりますのでございませう。」

「ふん。さつき聞けば病人があるさうだし、それに思中では、さぞ宿なんぞを引き受けて、迷惑な事だらうね。實に氣の毒な事をした。併しもう御厄介になり序でだから爲方がない。縁側は少しは涼しいから、まあ、ちつとこちらへ来て話したら好いだらう。」

「難有うございませう。いえ。縣廳からお宿を仰せ附けられましたのは、此上もない名譽な事でございませう。かういふところへお留め申しまして、さぞ御迷惑でございませうが、當家ではこれもお上へ對しまして、報恩の一つでございませうから。」

爺いさんはかう云ひながら、蚊遣の煙の斷え斷えになつたのを見て、袋戸棚から蚊遣香を出して取り換へて、その儘そこに据わつた。そして己が問ふ儘にぼつぼつこんな事を話した。

\* \* \* \* \*

この穂積といふ家は、素と縣で三軒と云はれた豪家の一つである。

亡くなつた先代の主人は多額納税者で、貴族院議員になるころであつたが、病氣を申し立てて早く隠居してしまつた。佐久間象山先生を崇拜して、省儉録を死ぬるまで傍に置いてゐた。爺いさんは、「なんとかいふ、歌を四角な字ばかりで書いてある本」と云つた。

それでゐる佛法の信者であつた。なんでもこれからの人は西洋の事を知らなくては行けない。併し耶穌教になつてはならない。耶穌教の本を読んで見たが、皆淺はかなもので、佛敎の足元にも寄り附けないと云つてゐた。それで自分などにも、不斷佛敎の難有い事を話して聞せた。

それは別にむづかしい事ではない。只四恩といふのを忘れずにゐれば、それで好いと云ふ事であつたと、爺いさんは云つた。なる程さつきも、國家の義務だともいふやうなところを、

「報恩だ」と云つたつけど、己は思ひ合せて。先代の妻は實に優しい女で、夫の言ふことに何一つ負いた事がない。そして自分を始め、下下のものをいたはつて使つてくれた。あすで二七日になるといふのは、この女の事である。八十歳の長壽をして、こなひだ死ぬるまで、毎日

# 蛇

明け易い夏の夜に、なんだつてこんなさうざらしい家に泊り合はせたことかと思つて、己はうるさく煩のあたりに飛んで来る蚊を逐ひながら二間の縁側から、せせこましく石を据えて、いろいろな木を植ゑ込んである奥の小庭を、ぼんやり眺めてゐる。

座布團の傍に蚊遣の土器が置いてあつて、青い煙が器に穿つてある穴から、絶えず立ち昇つて、風のない縁側で渦巻いて、身のまはりをつつてゐるのに、蚊がうるさく顔へ来る。夕飯の饌に附けてあつた、厭な酒を二三杯飲んだので、息が酒の香がするからだらうかと思ふ。飲まなければ好かつたに、咽が乾いてゐたものだから、つい飲んだのを後悔する。

ここまで案内をせられたとき、通つた間敷を見ても、由緒のありげな、その割に人けの少な、大きな家の縫間かを隔てて、女ののべつにしやべつてゐる聲が、少しもと切れずに聞えてゐるのである。恐ろしく早言で、詞は聞き取れない。土地の

訛りの、にいと云ふ互適波が、珠數の數取りの珠のやうに、單調にしゃべつてゐる詞の間々に、はつきりと聞える。東京でねえと云ふところである。こは信州の山の中の或る驛である。

暫く耳を濟まして聞いてゐたが、相手の詞が少しも聞えない。女は一人でしゃべつてゐるらしい。

挨拶に出た爺いさんが二病人がありまして、おやかましうございませうと、あやまるやうに云つたが、まさか病人があんなにしやべり續けはすまい。

もしや狂人ではあるまいか。詞は分からないが、音調で察して見れば、何事かを相手に哀願してゐるやうである。懐中時計を出して見れば、十時である。

月が小庭にさしてゐる。薄濁りのしたやうな、青白い月の光である。きのふ峠で逢つた雨は、日中の照りに乾いて、けふは道が好かつたに、小庭の苔はまだ濡れてゐる。「こちらが少

しはお涼しうございませう」と云つて爺いさんに連れて來られた黄昏に、大きな蚊が一定いつまでも動かずに、をりをり口をばくりと開けて、己の厭がる蚊を食つてゐたのを思ひ出して、手巾鉢の向うを見たが、もうそこにはなんにもゐなかつた。

此縁側の附いてゐる八疊の間には、黒漆の太い床縁のある床の間があつて、黒ずんだ文人畫の山水が掛つてゐる。向うに締め切つてある襖には、杜少陵の詩が骨々しい大字で書いてある。何か物音がするやうに思つて、襖の方を見ると、丁度竹の筒を臺にした、薄暗いランプの附いてゐる向うの處で、一和氣日融々と書いてある、襖が開いて、古帷子に袴を穿いた、さつきの爺いさんが出て來た。

「あちらへお床を延べました。いつでもお休みになりますなら。」

「さうさね。まだ寐られさうにないよ。お前詞が土地の人と違ふぢやないか。」

「へえ。若い時東京に春公をいたしてをりましたから、いくらか違ひますのでございませう」と云つて、禿げた頭を掻いてゐる。

次第に家の内がしんとして來るので、例の女の聲が前よりもはつきり聞える。己は覺えず耳

は、見たことがない」と云つたさうである。お豊さんの小さいとき、祭禮やなんぞで、穂積の今の主人と落ち合ふことがあると、穂積の千足さんとお豊さんとは好い夫婦だと、人が好く押揃つたもので、兩家でなんの話しもないのに、お豊さんが東京へ稽古に行けば、あれは千足さんの處に嫁入をするとき、負けてはならぬから行くのだなどといふ噂さへあつた。それが十八になつて、穂積の息子と前後して都から歸つたのである。そこで二人の結婚は殆ど周囲から餘儀なくせられたやうな有様であつた。今の主人は此相談を母にせられたとき、どうでも好いと云つた。母の方では、東京のやうな風儀の好くない土地にゐて、女の事に就いて何事もなかつた倅の、遠慮深い口から、どうでも好いといふのは、喜んで迎へる氣になつてゐるのだと思つて、直ぐに話を運ばせた。先方では待つてゐたらしかつた。殊に娘さん自身が待つてゐたらしいといふことさへ、媒人の口から穂積家へ傳へられた。見合ひの済んだ頃には、珍らしい良縁だと、長野の新聞にまで出て、穂積の親類は勿論、知らぬ人まで讃めて、羨んで、妬んで、騒いでゐる中に、只清吉爺いさん一人は、若い主人の素振が腑に落ちないやうに思つた。それは自分に問屋

の主人が女房を持たせると始つて云つた時の事に思ひ較べて見たからである。自分は其時もう三十五になつてゐた。それまで死に身になつて嫁いだので、女と聞いて胸の蕪く時は徒らに過ぎ去つて、心が落ち着いてゐた。それでも只女房を持たせられると聞いたばかりで、どこか誰かといふ當てもないのに、二三日の間はそはして物が手に附かなかつた。主人のどうでも好いと云ふのが、隠居の思ふやうに、遠慮しての口上なら好いが、どうも素振までがどうでも好ささうに見える。稼業の事もどうでも好い。女房の事もどうでも好い。そんな筈はないがと、自分だけは思つたのである。

婚禮は首尾好く済んだ。翌朝の事である。朝飯の膳が並んだ。これまでは御隠居と若い主人とが上に据わる。自分は末座に連つて食べることになつてゐた。これは先代の主人が亡くなつた年からの爲來りである。御遺言もあり、並の本公人でないからといふので、御隠居がかう極めたのである。後家の身の上ではあるが、もう六十になつてゐるから、遠慮はいるまいといふことであつた。和類には口のやかましい人もあつたが、かういふ事に非難も出なかつた。その朝は主人が眞中にゐて、兩側に御隠居と嫁さん

とが据わつた。美しい嫁を取つたのが嬉しいと見えて、御隠居が樂しげに主人に話し掛ける。主人が返事をする。嫁さんは下を向いて聞いてゐたが、ろくに物も食はずに、誰よりも先きに黙つて席を立つてしまつた。自分は向ひで見えてゐたが、多分極まりが悪いので立つたのであらうと思つた。御隠居も主人もさう思つたことであらう。

併し午も晩も同じやうに、嫁さんだけ早く席を起つた。その次の日からは、用事にかこつけて、嫁さんは遅れて食べに出る。主人がなぜかと思つて問ふと、どうもお母あ様のお話が嫌ひでならないと云ふ。これは穂積家に限つてある事で、食事の時は何か近郷であつた嘉言善行といふやうな事を話すことになつてゐる。先代の主人のした流義が残つてゐるのである。二度新聞紙の三面記事の反面のやうな話である。若しこれといふ出来事がないと、誰でも前日あたりには本か何かで讀んだとか、人に聞いたとかいふ話をする。そのために人の話を聞くにでも、本を讀むにでも、食事の時の話の種子になるやうな事柄に耳を留めて聞く、目を留めて見るといふことになつてゐるのである。善行嘉言なんぞといふ主人も不思議に思つた。善行嘉言なんぞとい



十人宛のを食に二十五錢宛施すことになつてゐたので、近年は郡役所で貧窮のものを調べて、代り代り貰ひに來させることになつてゐた。若い奉公人の中には、「御隠居様のお客様と云つて、蔭で笑ふものがあつたが、貰ひに來るものの感情を害するやうな事をしたものはない。

此夫婦の間にどうしたわけか子がないので、ひどく歎いてゐると、明治の初年に奥さんが四十になつて妊娠した。夫婦は大層喜んだが、長野から請待した産科のお醫師が、これまで四十の初産は手掛けたことがないと云つて、眉を蹙めたさうである。

それでも無事に今の主人は生れた。小學校といふものが始めて出來た頃に、好物が出来るといふので、縣廳までも知られてゐた。その頃自分は商人にならうと思つて、主人の取引をしてゐる、日本橋の間屋へ奉公に出た。小僧の時から奉公したのでなくては使はないといふのを、主人の保證で番頭の見習をさせて貰つた。

西南の戦争の時、間屋が糧秣品を納めて、自分の利益を見てから、四五年立つた時であつた。いつか故參になつた自分は、女房を持たせて、暖簾を分けて貰ふことになつてゐると、先代の穂積の主人が卒申して、六十五歳で歿死した。

聞き取りにくい詞で、「跡の事は清吉に頼め」と云つたのが、御隠居さんにやつと分かつたといふことである。

自分は取るものも取りあへず、此土地へ歸つて來た。御隠居は五十を越してゐるのに、今の主人はやつと長野の中學校にはひつたばかりである。それからといふものは、穂積家一切の事を引き受けて、とうとう一生獨身で暮したのである。

好い子だと評判せられてゐた今の主人は、段々大きくなるに連れて、少し弱々しい青年になつた。學校の成績は相變らず好い。是非學士にすると云つてゐた、先代の遺志を紹いで、御隠居が世話をしてゐられた。先代の心安くした仕職のゐる或る等に泊つて、中學に通つてゐる主人の、暑中休暇や暮の休暇に歸つて來るのを、御隠居は楽しみにしてゐるのであつた。

その頃から今の主人はどうも體が悪い。少し無理な勉強をすると、眩暈がして卒倒する。講堂で卒倒して、同級のものに送られて寺へ歸ることなぞがあつた。

それでも中學は相應に卒業したが、東京へ出て、高等學校の試験を受けることになつてから、度々落第して、次第に神經質になつた。無理な

事をさせてはならないといふので、傍から勧めて早稻田に入れることにした。それから諦めて餘り勉強をしない。

そのうち適宜になつたので、一年志願兵の試験を受けたが、體格ではねられた。丁度日清戦争のある年に、早稻田の方が卒業になつて歸つた。

もう一人前の男になられたからと思つて、これまで形式的に御隠居に何づてゐた穂積家の經營の事を、そろそろ相談し掛けて見ても、「清吉、お前に任せるから、これまで通りに遣つてくれ」と云つて顧みようともしない。そんなら何か熱心にしてゐる事があるかと思つて、氣を附けて見ても、分らない。もう六十を越してゐた御隠居には優しくして、一家の事は自分に任せてゐるので、至極結構な御主人ではあるが、どうも張合のないやうな氣がして來た。

尤も不思議に思つたのは、東京から歸つた翌年、二十四歳で今の奥さんを迎へた時の事である。身代は穂積家より小さくても、同郡で舊家として知られてゐる家の娘に、これも東京に出て、高等女學校を卒業して歸つてゐるのがあつた。いつか越後の人が此娘を見て、自分の國は女の美しい國だが、お豊さんのやうに美しいの

決して感溺なぞはしてゐません。只薄志弱行だと云はれれば、それだけはいしたし方がありません。それにはわたくしに極まつた人生觀が無いのが原因になつてゐます。わたくしは病身で大學にははひることが出来ませんでした。が、色々な學科を修めました。何かわたくしの生活の基礎になるやうな思想があつて、それを貫くために、いかなるものをも犠牲にするといふ氣になられたならば、これまでにどうにか解決が附いたのでせう。世間の毀譽褒貶は顧みない。人が死んでも好い。自分が死んでも好いと云ふ事なら、解決が附いたのでせう。それが無いので、今にぐづぐづしてゐるのです。そして母はとうとう亡くなつてしまふ。妻もあんな風に氣が狂つてしまふ。わたくしもどうなるか知れません。」

主人の血走つた目は、ぢいつと己の顔に注がれてゐる。己はぢつとした。清吉爺いさんは腕組をして俯向いてゐる。十一時の時計が鳴つた。

「そんなら、さつきまで聲のしてゐたのが奥さんですね」と、己は問うた。

「さうです。いつでも十一時前まではあの通りです。幻覺か何かがある様子であんな工合にし

やべり續けてゐて、草臥れ切るまでは寢ないのです。」

「なる程。清吉さんの話では、奥さんが嘉言善行といふやうな話が嫌ひだと云つたのが、内輪の面内くなくなる初めだといふことでしたが、一體どういふわけだったのですか。」

「實に馬鹿げ切つてゐるのです。妻の考では人間に眞の善人といふものは無い。若し有るとしても、廣い國に一人あるとか、千百年の間に一人出るとかいふもので、實際附き合つてゐる人の中には、そんなものの有りやうがない。善い事をしたり言つたりするといふのは、爲めにする所があるので、自分を利するのである。卑劣である。これに反して、悪い事は誰もしたつてゐる方が好い。よし又言ふにしても、悪い事の方なら、正直に言ふのであるから、虚偽でもなければ、卑劣でもないといふのです。わたくしは妻が優しい顔をして、美しい聲でそんな事を言ふのですから、馬鹿らしくもあり、不思議にも思つてゐました。そのうちに妙な事があつたのです。去年でしたか、東京にゐた頃、學校で心安くした友人が温泉へ来たといふので、わたくしの所へ寄りました。その男がかう云

ふ事を言つたのです。妻を持つて子供が澤山出来た。ところが、其妻が authority といふものを一切認めぬ奴で、言ふ事を少しも聞かない。それでは親に濟むまいとか、お上に濟むまいとか、神様に濟むまいとか、佛に濟むまいとか、天帝に濟むまいとか云はうとしても、どれも此

女に濟まへさせる力草にはならない。どうも今の女學校を出た女は、皆無政府主義者や社會主義者を見たやうな思想を持つてゐるやうだと、さう云ふのです。其時はわたくしもこの男は随分思ひ切つた事を云ふと思つて聞いてゐましたが、好く考へて見ると、わたくしの妻などもオオソリチイは認めません。事によると、今の女は丸で動物のやうに、生存競争の爲めには、あらゆるものと戦ふやうになつてゐるのではないでせうか。一體どうしてこんな風になつて來たのでせう。」

「打違つて置けば、さうなるのです。赤ん坊は生れながらの egoist ですからね。」

「併しどうして男とは違ふのでせう。」

「それはなんと云つても、男の方は理性が勝つてゐるのでせう。君はさつき人生觀を持つてゐないと云はれたが、持つてゐないと云つても、社會に立つての利害關係は知つてゐる。利己

ふものは、人によつては聞いて面白くないといふこともあらう。併し別に聞くに堪へないといふわけのものではない。うるさくても辛抱してゐられない筈はない。なぜだらうと云ふので、嫁さんに問うて見た。さうすると、あんな假善の話は厭だと云つたさうである。

その事を聞いてから、御隠居は詞少なに、遠慮勝ちになつた。話されないとすると話して見たいやうに感ずるのが、人情の常である。それを我慢する。我慢するのが癖になつて、外の話のしたいのをも我慢する。

穂積家は沈黙の家になつた。

\* \* \* \* \*

ここまで話を聞いた時、さつき清吉爺いさんの出て来た、「和氣日融」と書いてある襖が、又、又と開いた。

見れば薩摩飛白に黒絹の羽織を着流した、四十恰好の品の好い男が出た。神經の興奮してゐるらしい聲で、かう云つた。

「わたくしは當家の主人で、穂積千足と申すものです。先生がお泊り下さいましたので、御挨拶にも出すにゐて、突然お席に参つたのですから、定めて變な奴だと思召すでせうが、全く二週

間程前から気分が優れませんで、休んでゐました。縣廳からの指圖で、那役所から通知がありまして、その時、忌中ではあるし、お歸り申さうかとも考へましたが、近來不爲合せな事が續きまして、この老人が大層心寂しく存じてゐる様子でして、名高い學者の方に泊つてお貰ひ申したから、何か心得になるやうな事が何はれるかも知れないと申すのです。それで御迷惑かとは存じながら、お宿をお引受け申しました。先刻から清吉が色々お話をいたした様子ですが、わたくし其一家は實に悲愴な境遇に陥つてゐるのです。わたくしは今少し前に、お次まで参つてゐました。教育を受けたものが、立聞きをしては悪いといふこと位は、わたくしも知つてゐます。併しお迎ひにも出ず、御挨拶にも出ずにゐて、突然伺ふのが、儼り不躰な様です。から、躊躇してゐたのです。清吉ぢぢいの申す通り、わたくしは小さい時から母に苦勞を掛けてゐながら、母を寂しい家で死なせてしまひました。それは物質的な奉養は出来るだけ盡した積りで、併し母は晩年になつて、わたくし共夫婦のために、恐ろしく寂しい生活をしたのです。そんなら妻を離別した好からうと、人は云ふでせうが、それがさう容易く行くものではありません。

せん。どう云ふわけか長い間子がなくてゐる妻ですから、それを離別する程容易な事はない様です。併し民法もある世の中です。妻にこれと云つて廉立つた悪いことはありません。母に優しくない。それだと云つて、別に手荒い事もない。よしやわたくしが離別しようとしたつて、妻は勿論同意しません。妻の積りでは、かうして一日一日と過すうちに、いつかは楽しい生活に入る時が来るだらうと思つてゐたのです。妻がさう云ふ風で、合意が成り立たないのに、わたくしがどうしようとし申したつて、聖父の親類が承知しません。何をわたくしは理由にしませう。話をたんとしない。それが何の理由になりませう。無論法廷で争ふ理由なんぞにはなりません。その上世間體といふものもありません。穂積といふ家は、信州では多少人も知つてゐる舊家です。その内輪を新聞に書かれたくはありません。さういふ次第で、とうとう十四五年といふものが立つてしまつたのです。清吉ぢぢいなんぞは、こんな律義な男で、それに非常耐忍力が強いのですから、黙つて内の事をしゐてくれましたが、腹の中ではわたくしを意氣地がないやうに思つたり、妻に感憤してゐるやうに思つたりしてゐるやうです。わたくしは



居様を疎々しくなされた罰だなんぞと囁き合つてゐるらしい。こんな事を知つたら、なんといふか分からないと存じますから、それからはお佛間には人を入れないやうにいたしましたをります。實はこれにをられます主人には、直ぐに相談いたしましたのが、なに、あんなきかないものをいぢらなくとも事だ、いつか逃げてしまふだらうと申して取り合ひません。迷信とか申すものかと存じますので、誠に恥ぢ入ります次第でございますが、先生がお出でになりましたら、伺つて見たいと存じます。」

主人は苦々しさうな顔をして、黙つてゐる。「今でもゐるのか」と、己は爺いさんに問うた。

「はい。ぢつとしたしてをります。」

「さうかと云つて、己は話をする間飲んでゐた葉巻を棄てて立つた。「一寸わたしに見せて貰ひませう。」

爺いさんは先きに立つて案内する。佛間に入つて見れば、二間幅の立派な佛壇に、蠟燭が何本も立てて、大きい銅の香爐に線香が焚いてある。眞中にある白い位牌が新佛のであらう。香爐の向うを覗いて見ると、果して蛇がある。

大きな青大將である、ひどく營養が好いと見えて、肥満してゐる。尾はづん切つたやうなの

が、とごろを巻いてゐる體の前の方へ五寸ばかり出てゐる。

己は佛壇の天井を仰いで見た。幅の廣い、立派な檜の板で張つてあるのが、いつか反り返つた體に古びて、眞黒になつてゐる。

爺いさんは据わつて、口の内に佛名を唱へてゐる。主人は *gommuable* のやうな歩き付きをして、跡から附いて來たのが、己の背後にぼんやり立つてゐる。

己は爺いさんを顧みて云つた。「近い處に米のはひつた藏があるだらうね。」

「はい。直き一間先きに、戸前の廊下に續いてゐる藏がございます。」

「そこから出て來たのだ。動物は習慣に支配せられ易いもので、一度止まつた處には又止まる。外へ棄てても、元の栖家に歸る。何も不思議な事はないのですよ。兎に角此蛇はわたしに貰つて行かう。」

爺いさんは目を圓くした。「さやうなら、若い者を呼びまして。」

「いや。若い者なんぞに二度とは見せないといふ、お前さんの注意は至極好い。蛇位はわたしだつて猶ほある。毒のある蛇だと棒が一本いる。それで頭を押へて、項まで棒を轉がして行

つて、頭の直ぐ根の處を握むのです。これは俗に云ふ青大將だ。棒なんぞはいらない。わたしの荷物の置いてある處にきのふ岩魚を入れて貰つた畚がありまます。あれを御苦勞ながら持て來て下さい。」

爺いさんは直ぐに畚を持つて來た。

己は蛇の尾をしつかり握んで、ずるずると引き出して、ちゆうに吊るした。蛇は頭を持ち上げて、自分の體を繩を纏つたやうに巻いたが手までは届かない。己は蛇を畚に入れて蓋をした。

丁度時計が十二時を打つた。

\* \* \* \* \*

翌朝立つ前に、己は主人の妻をどんな醫者が見てゐるかと思つて問うて見ると、長野から呼んだのも、精神科専門の人ではないと云つた。己はこれ程の大家の事であるから、是非東京から専門家を呼んで見せるが好いと勧告して置いた。

主義ばかりで推して行けば、自分の立場がなくなるといふことだけ知つてゐる。Dogmaは承認しない。勿れ勿れの教には服せない。併し利害の打算上から、むちやな事はしない。女だつて理性の勝つてゐる女は同じ事でせう。只そんな女は少いのです。人間は利害關係だけでも本當に分かつてゐれば、むちやな事は出来ない。基督の山の説教なんぞを高尚なやうに云ふが、あれも利害に憑つてゐるのですからねえ。」

「なる程さうです。赤ん坊は赤い物に目を刺戟せられれば、火をでも攫む。それと同じやうに、女は我慾を張り通して、自分が破滅するのですね。」

「まあ、そんな物でせう。だから、赤ん坊を泣かせて、火を攫ませないやうにする。赤ん坊を大人と一しよには扱はない。無政府主義者でも、社会主義者でも、下の下までの人間を理性のある人間と一緒に扱はうとしてゐるから間違つてゐるのです。一般選舉權の問題でからがさうです。多数政治なんといふものも、將來これに代るべき、何等かの好い方法が立てば、棄てられてしまふかも知れません。詰まり Justiceといふ思想が根本から間違つてゐるのですね。女だつて遠くが見えない爲めに、自分の破滅を

招くやうな事をすれば、暴力で留めなくてはならないでせう。」

「先生はさうお思ひですか。獨逸では小學校の教師に鞭で生徒を打つことが許してある。それから夫たるものは妻を打つても好いことになつてゐるとか聞きましたが、先生のお考では、あれも差支がないのでせうか。」

己は暫く微笑んだ。「わたしなんぞもそれ程まで踏み込んだ考を持つてゐるわけではありませんが。先頃もフランスで誰やらが、英國の管刑が好結果を齎してゐると新聞に書いた。すると、Bernard Shawがわざわざ反駁書を出しました。兎に角打つなんといふことは非常手段ですから、教師だから打つても好い、大だから打つても好いといふやうに、法則にして置くのは不都合でせう。」

「なる程さうでせう。兎に角わたくしも或る場合には打つても好いといふ位な、堅固な意志を持つてゐましたら、可哀相に妻を愛した物にはしませんでしたらう。ああ。亡くなつた母も氣の毒ですが、妻も實に氣の毒です。」

主人はちつと考へ込んでゐる。

己は問うた。「一體氣の變になられたのは、どう云ふ動機からですか。」

腕組みをしてゐた清吉のいさんが、手をほぐして膝を進めた。「實に申し上げにくい事でございますが、先生が理學博士で入つしやるよ承りまして、お泊りを願ふことが出来ましたら、それを伺つて見たいと存じてをりましたのでございます。初七日の晩でございました。奥さんが線香を上げに、佛壇を覗かれますと、大きな蛇のとぐろを巻いてゐましたのが、鎌首を上げて、ちつと奥さんのお顔を見たらさうでございします。きやつとぶつて倒れておしまひになりましたが、それから只今のやうにおなりになりました。わたくし共も驚きまして、若い者の中に好く蛇杯をいぢるものがございますので、掴まへさせまして、野原へ棄てに遣りました。主人は新しい學問もいたしてゐるものでございますから、なに、蛇といふものは氣障なんぞを鋭敏に感ずるものだから、暴風雨の前なんぞには、馴れた棲家を出て、人家にはひり込むことがあるさうだ。佛壇にゐたのは全く偶然だと申してをりました。ところが、翌朝になつて佛壇を見ますと、蛇はちゃんと歸つてゐるのでございます。わたくし此度は前より一層驚きました。なんでもこんな事を下々に聞かせてはならない。昨日奥さんの御病氣になられたのでからが、御隠

を破つて、獨逸といふ野蠻な響きの詞にどつしりした重みを持たせた半ルヘルム第一世がまだ位にをられた。今のキルヘルム第二世のやうに、chemischな威力を下に加へて、抑へて行かれるのではなくて、自然の重みの下に社會民政黨は喘ぎ悶えてゐたのである。劇場では Ernst von Willenbruch が、あの Hohenzollern 家の祖先を主人公にした脚本を興行させて、學生仲間の青年の心を支配してゐた。

甚は講堂や Laboratorium で、生き生きした青年の間に立ち交つて働く。何事にも不器用で、癡重といふやうな處のある歐羅巴人を凌いで、輕捷に立ち働いて得意がるやうな心も起る。夜は芝居を見る。舞踏場にゆく。それから珈琲店に時刻を移して、歸り道には街燈だけが寂しい光を放つて、馬車を乗り廻す掃除人足が掃除をし始める頃にぶらぶら歸る。素直に歸らないこともある。

さて自分の住む宿に歸り着く。宿と云つても、幾處もあるおほ家の入口の戸を、邪魔になる大鍵で開けて、三階か四階へ、蝦マツチを擦り擦り登つて行つて、やうやう chambre garnie の前に来るのである。

高机一つに椅子二つ三つ。寢臺に箒筒に化粧

棚。その外にはなんにもない。火を點して着物を脱いで、その火を消すと直ぐ、寢臺の上に横になる。

心の寂しさを感じるのはいふ時である。それでも神經の平穩な時は故郷の家の様子が傍に立つて来るに過ぎない。その幻を見ながら寐入る。Nostalgie は人生の苦痛の餘り深いものではない。

それがどうかすると寐附かれない。又起きて火を點して、爲事をして見る。爲事に興が乗つて来れば、餘念もなく夜を徹してしまふこともある。明方近く、外に物音がし出してから一寸寐ても、若い時の疲勞は直ぐ恢復することが出来る。

時としてはその爲事が手に附かない。神經が異様に興奮して、心が澄み切つてゐるのに、書物を開けて、他人の思想の跡を辿つて行くのもどかしくなる。自分の思想が自由行動を取つて来る。自然科學のうちで最も自然科學らしい醫學をしてゐて、exact な學問といふことを性命にしてゐるのに、なんとなく心の飢を感じて来る。生といふものを考へる。自分のしてゐる事が、その生の内容を充たすに足るかどうだかと思ふ。

生れてから今日まで、自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ驅られてゐるやうに學問といふことに齟齬してゐる。これは自分に或る働きが出来るやうに、自分を爲上げるのだと思つてゐる。其目的は幾分か達せられるかも知れない。併し自分のしてゐる事は、役者が舞臺へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。その勤めてゐる役の背後に、別に何物かが存在してゐなくてはならないやうに感ぜられる。策うたれ驅られてばかりゐるために、その何物かが醒覺する暇がないやうに感ぜられる。勉強する子供から、勉強する學校生徒、勉強する官吏、勉強する留學生といふのが、皆その役である。赤く黒く塗られてゐる顔をつか洗つて、一寸舞臺から降りて、靜かに自分といふものを考へて見たい、背後の何物かの面目を覗いて見たいと思ひ思ひしながら、舞臺監督の鞭を背中に受けて、役から役を勤め續けてゐる。此役が即ち生だとは考へられない。背後にある或る物が眞の生ではあるまいかと思はれる。併しその或る物は目を醒まさう醒まさうと思ひながら、又してはとうとうとして眠つてしまふ。此頃折々切實に感ずる故郷の戀しきなんども、浮草が波に揺られて遠い處へ行つて浮



# 妄

# 想

目前には廣々と海が横はつてゐる。

その海から打ち上げられた砂が、小山のやうに盛り上がり、自然の堤防を形づくつてゐる。

アイルランドとスコットランドとから起つて、ヨオロツパ一般に行はれるやうになつた

といふ語は、かういふ處を斥して言ふのである。

その砂山の上に、ひよるひよろした赤松が簇がつて生えてゐる。餘り年を経た松ではない。

海を眺めてゐる白髪の主人は、此松の幾本かを切つて、松林の中へ嵌め込んだやうに立てた

小家の一間に据わつてゐる。

主人が元と世に立ち交つてゐる頃に、別荘の眞似事のやうな心持で立てた此小家は、只二間と臺所とから成り立つてゐる。今据わつてゐる

のは、東の方一面に海を見晴らした、六疊の居間である。

据わつてゐて見れば、砂山の岨が松の根に縦横に縫はれた、殆ど鉛直な、所々中窪に崩れて断面になつてゐるので、只果もない波だけが

水と一帯の中洲とがある。

河は迂回して海に灌いでゐるので、岨の下では甘い水と鹹い水とが出合つてゐるのである。

砂山の背後の低い處には、漁業と農業とを兼ねた民家が疎らに立つてゐるが、砂山の上には

主人の家が只一軒あるばかりである。

いつやらの暴風に漁船が一艘跳ね上げられて、松林の松の梢に引つ懸つてゐたといふ話

のある此砂山には、土地のものは恐れて住まな

い。

河は上總の夷瀨川である。海は太平洋である。秋が近くなつて、薄霧の掛かつてゐる松林の中

の、清い砂を踏んで、主人はそこらを一廻りして来て、八十八といふ老僕の拵へた朝餉をし

つて、今自分の居間に据わつた處である。あたりはひつそりしてゐて、人の物を言ふ聲も、犬の鳴く聲も聞えない。只朝風の浦の静かな、鈍い、重くろしい波の音が、天地の脈搏のやうに聞えてゐるばかりである。

眞向うの水と空と接した處から出た水平線を基線にして見てゐるので、日はずんずん昇つて行くやうに感ぜられる。

それを見て、主人は「間」といふことを考へる。生といふことを考へる。死といふことを考へる。

「死は哲學の爲めに、眞の氣息を嘘さ込む神である、導きの神(Musagetes)である」とPlaton、Pythagoras は云つた。主人は此語を思ひ出して、それはさう云つても好からうと思ふ。併し死といふものは、生といふものを考へずには考へられない。死を考へるといふのは生が無くなる

と考へるのである。

これまで種々の人の書いたものを見れば、大抵老が迫つて來るに連れて、死を考へるといふことが段々切實になると云つてゐる。主人は過去の經歷を考へて見るに、どうもさういふ人々とは少し違ふやうに思ふ。

\* \* \* \* \*

自分がまだ二十代で、全く處女のやうな官能を以て、外界のあらゆる出來事に反應して、内には嘗て挫折したことのない力を蓄へてゐた時の事であつた。自分は伯林にゐた。列強の均衡

だとはつきり考へても見ずに、知らずに、それ  
を無くしてしまふのが口惜しい。残念である。  
漢學者の謂ふ、醉生夢死といふやうな生涯を送つ  
てしまふのが残念である。それを口惜しい、残念  
だと思ふと同時に、痛切に心の空虚を感じる。  
なんとともかと言はれない寂しさを覚える。

それが煩悶になる。それが苦痛になる。

自分は伯林の *Berlin* の寐られない夜  
なかに、幾度も此苦痛を嘗めた。さういふ時は  
自分の生れてから今までした事が、上邊の徒ら  
事のやうに思はれる。舞臺の上の役を勤めてゐ  
るに過ぎなかつたといふことが、切實に感ぜら  
れる。さういふ時にこれまで人に聞いたり本で  
讀んだりした佛教や基督教の思想の断片が、次  
第もなく心に浮んで来ては、直ぐに消えてしま  
ふ。なんの慰藉をも與へずに消えてしまふ。さ  
ういふ時にこれまで學んだ自然科学のあらゆる  
事實やあらゆる推理を繰り返して見て、どこか  
に慰藉になるやうな物はないかと探す。併しこ  
れも徒勞であつた。

で、なぜハルトマンにしたかといふと、その頃  
十九世紀は鐵道とハルトマンの哲學とを齎し  
たと云つた位、最新の大系統として賛否の聲が  
喧しなかつたからである。

自分に哲學の難有みを感じさせたのは錯迷の  
三期であつた。ハルトマンは幸福を人生の目的  
だとすることの不可能なるを證する爲めに、錯  
迷の三期を立ててゐる。第一期では人間が現世  
で福を得ようと思ふ。少壯、健康、友誼、戀  
愛、名譽といふやうに數へて、一々その錯迷を  
破つてゐる。戀なんでも主に苦である。福は  
性欲の根を斷つに在る。人間は此福を犠牲に  
して、纔かに世界の進化を翼成してゐる。第二  
期では福を死後に求める。それには個人とし  
ての不滅を前提にしないでならぬ。ところが  
個人の意識は死と共に滅する。神經の幹はこ  
こに絶たれてしまふ。第三期では福を世界過  
程の未來に求める。これは世界の發展進化を前  
提とする。ところが世界はどんなに進化して  
も、老病困厄は絶えない。神經が鋭敏になるか  
ら、それを一層切實に感ずる。苦は進化と共に  
長ずる。初中後の三期を閲し盡しても、幸福は  
永遠に得られないのである。

だけ善く造られてゐる。併し有るが好いか無い  
が好いかと云へば、無いが好い。それを有らせ  
る根元を無意識と名付ける。それだからと云つ  
て生を否定したつて、世界は依然としてゐるか  
ら駄目だ。現にある人類が首尾よく滅びても、  
又或る機會には次の人類が出來て、同じ事を繰  
り返すだらう。それよりか人間は生を肯定して、  
己を世界の過程に委ねて、甘んじて苦を受けて、  
世界の救済を待つが好いと云ふのである。

自分は此結論を見て頭を掉つたが、錯迷打破  
には強く引き附けられた。 *Disillusion* にはひ  
どく同情した。そしてハルトマン自身が錯迷の  
三期を書いたのは、*Max Stirner* を讀んで考  
へた上の事であると告白してゐるのを見て、ス  
チルネルを讀んだ。それから無意識哲學全體の  
淵源だといふので、溯つて、*Schopenhauer* を  
讀んだ。

スチルネルを讀んで見ると、ハルトマンが紳  
士の態度で言つてゐる事を、無賴漢の態度で言  
つてゐるやうに感ずる。そしてあらゆる錯迷を  
破つた跡に自我を残してゐる。世界に恃むに足  
るものは自我の外には無い。それを先きから先  
きへと考へると、無政府主義に歸着しなくて  
は已まない。

いてゐるのに、どうかするとその捲れるのが根に響くやうな感じであるが、これは舞臺でしてゐる役の感じではない。併しそんな感じは、一寸頭を擧げるかと思ふと、直ぐに引つ込んでしまふ。

それとは違つて、夜寐られない時、こんな風に舞臺で勤めながら生涯を終るのかと思ふことがある。それからその生涯といふのも長い、か短いか知れないと思ふ。丁度その頃留學生仲間が一人塞扶斯になつて入院して死んだ。講義のない時間に、Quarantéへ見舞に行く、傳染病室の硝子越しに、寐てゐるところを見せて貰ふのであつた。熱が四十度を超過するので、毎日冷水浴をさせるといふことであつた。そこで自分は醫學生だつたので、どうも日本人には冷水浴は危険だと思つて、外のものにも相談して見たが、病院に入れて置きながら、その治療方針に容喙するのは不都合であらうし、よしと言つたところで採用せられはすまいといふので、傍觀してゐることになつた。そのうち或る日見舞に行くと昨夜死んだといふことであつた。その男の死顔を見たとき、自分はひどく感動して、自分もいつどんな病に感じて、こんな風に死ぬるかも知れない、ふと思つた。それ

からは折々此儘伯林で死んだらどうだらうと思ふことがある。

さういふ時は、先づ故郷で待つてゐる二親がどんなに歎くだらうと思ふ。それから身近い種類の人の事を思ふ。中にも自分にひどく懐いてゐた、頭の毛のちぢれた弟の、故郷を立つとき、まだやつと歩いてゐたのが、毎日毎日兄いさんはいつ歸るかと思ふといふことを、手紙で言つてよこされてゐる。その弟が、若し兄いさんはもう歸らないと思はれたら、どんなにか歎くだらうと思ふ。

それから留學生になつてゐて、學業が成らずに死んで済まないと思ふ。併し抽象的にかう云ふ事を考へてゐるうちは、冷かな義務の感じのみであるが、一人、人具體的に自分の境遇の跡を尋ねて見ると、矢張身近い親戚のやうに、自分に Neigung から苦痛、情の上の感じをさせるやうにもなる。

かういふやうに廣種々の負傷的な豐稟的思想が、次第もなく簇がり起つて来るが、それがとうとう *Einzelnen* な自我の上に歸着してしまふ。死といふものはあらゆる方角から引つ張つてゐる絲の湊合してゐる、この自我といふものが無くなつてしまふのだと思ふ。

自分はいさゝか時から小説が好きなので、外國語を學んでからも、暇があれば外國の小説を讀んでゐる。どれを讀んで見てもこの自我が無くなるといふことは最も大いなる最も深い苦痛だと云つてある。ところが自分には單に我が無くなるといふことだけならば、苦痛とは思はれない。只、物で死んだら、其初めに肉體の痛みを覚えるだらうと思ひ、病や藥で死んだら、それぞれの病症藥性に相應して、窒息するとか痙攣するとかいふ苦みを覚えるだらうと思ふのである。自我が無くなる爲めの苦痛は無い。

西洋人は死を恐れないのは野蠻人の性質だと云つてゐる。自分は西洋人の謂ふ野蠻人といふものかも知れないと思ふ。さう思ふと同時に、小さい時二親が、侍の家に生れたのだから、切腹といふことが出来なくてはならないと度々諭したことを思ひ出す。その時も肉體の痛みがあるだらうと思つて、其痛みを忍びなくてはならないと思つたことを思ひ出す。そしていよいよ屍體野蠻人かも知れないと思ふ。併しその西洋人の見解が尤もだと承服することは出来ない。そんなら自我が無くなるといふことに就いて、平氣でゐるかといふに、さうではない。その自我といふものが有る間に、それをどんな物



自然科学の分科の上では、自分は結論だけを持つて歸るのではない。將來發展すべき萌芽をも持つてゐる積りである。併し歸つて行く故郷には、その萌芽を育てる雰圍氣が無い。少くも、まだ無い。その萌芽も徒らに枯れてしまひはすまいかと氣遣はれる。そして自分は「Forschung」な、鈍い、陰氣な感じに襲はれた。

そしてこの陰氣な闇を照破する光明のある哲学は、我行李の中には無かつた。その中に有るのは、シヨオペンハウエル、ハルトマン系の厭世哲學である。現象世界を有るよりは無い方が好いとしてゐる哲學である。進化を認めないではない。併しそれは無に醒覺せんがための進化である。

自分は錫蘭で、赤い格子縞の布を、頭と腰とに巻き附けた男に、美しい、青い翼の鳥を買はせられた。籠を掛けて舟に歸ると、フランス舟の乗組員が妙な手附きをして、「Herrn Meyer」と云つた。美しい、青い鳥は、果して舟の横濱に着くまでに死んでしまつた。それも果敢ない土産であつた。

\* \* \* \* \*

自分は失望を以て故郷の人に迎へられた。そ

れは無理も無い。自分のやうな洋行歸りはこれまで例の無い事であつたからである。これまでも洋行歸りは、希望に耀く顔をして、行李の中から道具を出して、何か新しい手品を取り立てて御覽に入れることになつてゐた。自分は丁度その反對の事をしたのである。

東京では都會改造の議論が盛んになつてゐて、アメリカの A とか B とかの何處明かにある、獨逸人の謂ふ Wolkenbruch のやうな家を建てたいと、ハイカラア連が云つてゐた。その時自分は都會といふものは、狭い地面に多く人が住むだけ人死が多い、殊に子供が多く死ぬる、今まで横に並んでゐた家を、堅に積み疊ねるよりは、上水や下水でも改良するが好からうと云つた。又建築に制裁を加へようとする委員が出来てゐて、東京の家の軒の高さを一定して、豁然たる外觀の美を成さうと云つてゐた。その時自分は「そんな兵隊の並んだやうな町は美しいは無い、強ひて西洋風にしたいなら、寧ろ反對に軒の高さどころか、あらゆる建築の様式を一軒づつ別にさせて、エネチアの町のやうに參差錯落たる美觀を造るやうにでも心掛けたら好からう」と云つた。

食物改良の議論もあつた。米を食ふことを

廢めて、澤山牛肉を食はせたいと云ふのであつた。その時自分は「米も魚もひどく消化の好いものだから、日本人の食物は昔の儘が好からう、尤も牧畜を盛んにして、牛肉を食べるやうにするのは勝手だ」と云つた。

假名遣改良の議論もあつて、コイストヨワガナワといふやうな事を書かせようとしてゐると、「いやいや、Orthographie はどの國にもある、矢張コヒステフワガナハの方が宜しからう」と云つた。

そんな風に、人の改良しようとしてゐる、あらゆる方面に向つて、自分は本のオ阿彌説を唱へた。そして保守黨の仲間へ逐ひ込まれた。洋行歸りの保守主義者は、後には別な動機で流行し出したが、元祖は自分であつたかも知れない。

そこで學んで來た自然科学はどうしたか。歸つた當座一年か二年は Laboratorium にはひつてゐて、ごつごつと馬鹿正直に働いて、本の空欄彌縫に根據を與へてゐた。正直に試行して見れば、何千年といふ間満足に發展して來た日本人が、そんなに反理性的生活をしてゐよう筈はない。初から知れ切つた事である。

さてそれから一步進んで、新しい地盤の上に新しい Forschung を企てようといふ段にな

自分はぞつとした。

ショ・オペンハウエルを読んで見れば、ハルトマン・ミヌス・進化論であつた。世界は有るよりは無い方が好いばかりではない。出来るだけ悪く造られてゐる。世界の出来たのは失策である。無の安さが誤まつて攪亂せられたに過ぎない。世界は認識によつて無の安さに歸るより外はない。一人一人の人は一箇一箇の失策で、有るよりは無いが好いのである。個人の不滅を欲するのには失策を無窮にしようとするのである。個人は滅びて人間といふ種類が残る。この滅びないで残るものを、滅びる寫象の反對に、廣義に、意志と名付ける。意志が有るから、無は絶対の無でなくて、相待の無である。意志が Kant の物その物である。個人が無に歸るには、自殺をすれば好いかといふに、自殺をしたつて種類が残る。物その物が残る。そこで死ぬるまで生きてゐなくてはならないといふのである。ハルトマンの無意識といふものは、この意志が一變して出来たのであつた。

自分はいよいよ頭を掉つた。

\* \* \* \* \*

兎角する内に留學三年の期間が過ぎた。自分

はまだ均勢を得ない物體の動搖を心の中に感じてゐながら、何の師匠を求めににも使ひの好い、文化の國を去らなくてはならないことになつた。生きた師匠ばかりではない。相談相手になる書物も、遠く足を運ばずに大學の圖書館に行けば大抵間に合ふ。又買つて見るにも注文してから何箇月日に來るなどといふ面倒は無い。さういふ便利な國を去らなくてはならないことになつた。

故郷は戀しい。美しい、懐かしい夢の國として故郷は戀しい。併し自分の研究しなくてはならないことになつてゐる學術を眞に研究するには、その學術の新しい田地を開闢して行くには、まだ種々の要約の關けてゐる國に歸るのには殘惜しい。敢て「まだ」と云ふ。日本に長くゐて日本を底から知り抜いたと云はれてゐる獨逸人某は、此要約は今闕けてゐるばかりでなくて、永遠に東洋の天地には生じて來ないと言告した。東洋には自然科學を育てて行く夢國氣は無いのだと言告した。果してさうなら、帝國大學も、傳染病研究所も、永遠に歐羅巴の學術の結論を取り續く場所たるに過ぎない筈である。かう云ふ判斷は、ロシアとの戦争の後に、歐羅巴の當り狂言になつてゐた。

ヒンコンなん

ぞにも現れてゐる。併し自分は日本人を、さう絶望しなくてはならない程、無能な種族だとも思はないから、敢て「まだ」と云ふ。自分は日本で結んだ學術の果實を歐羅巴へ輸出する時もいつかは來るだらうと、其時から思つてゐたのである。

自分はこの自然科學を育てる夢國氣のある、便利な國を跡に見て、夢の故郷へ旅立つた。それは勿論立たなくてはならなかつたものではあるが、立たなくてはならないといふ義務のために立つたのでは無い。自分の願望の秤も、一方の皿に便利な國を載せて、一方の皿に夢の故郷を載せたとき、便利の皿を吊つた緒をそつと引く、白い、優しい手があつたにも拘らず、慥かに夢の方へ傾いたのである。

シベリア鐵道はまだ全通してゐなかつたので、印度洋を経て歸るのであつた。一日行程の道を往復しても、往きは長く、復りは短く思はれるものであるが、四五十日の旅行をしても、さういふ感じがある。未知の世界へ希望を懷いて旅立つた昔に比べて寂しく又早く思はれた航海中、籐の寢椅子に身を横へながら、自分は行李にどんなお土産を持つて歸るかといふことを考へた。

投げ掛けて、死と目と目を見合はす。そして死の目の中に平和を見出すのだと、マインレンデルは云つてゐる。

さう云つて置いて、マインレンデルは三十五歳で自殺したのである。

自分は死の恐怖が無いと同時にマインレンデルの「死の憧憬」も無い。

死を怖れもせず、死にあこがれもせずに、自分は人生の下り坂を下つて行く。

\* \* \* \* \*

謎は解けないと知つて、解かうとしてあせらないやうにはなつたが、自分はそれを打ち棄てて願ひずにはゐられない。宴會嫌ひで世に謂ふ道楽といふものがなく、恭も打たず、象棋も差さず、球も撞かない自分は、自然科學の爲事場を出て、手に試験管を持たなくなつてから、稀に畫や彫刻を見たり、音楽を聴いたりする外には、境遇の與へる日の要求を果たした間々に、本を讀むことを餘餘なくせられた。

ハルトマンは人間のあらゆる福を錯迷として打破して行く間に、こんな意味の事を言つてゐた。大抵人の福と思つてゐる物に、酒の二日酔をさせるやうに跡腹の病めないものは無い。

それの無いのは、只藝術と學問との二つだけだと云ふのである。自分は丁度此二つの外にはする事がなくなつた。それは利害上に打算して、跡腹の病めない事をするのではない。跡腹の病める、あらゆる福を生得好かないのである。本は随分讀んだ。そしてその讀む本の種類は、爲事場を出てから、必然の結果でがらりと變つた。

西洋にゐた時から、Archiv とか Jahresbericht とか云ふやうな、専門の學術雜誌を初巻から揃へて十五六種も取つてゐたところが、爲事場に出ない事になつて見れば、實際の細かい記録なんぞを調べる必要がなくなつた。元來かう云ふ雜誌は學校や圖書館で買ふもので、個人の買ふものではなかつたのを、政府がどれだけ雜誌に金を出してくれるやら分らないと思ふのと、自分がどこで爲事をやるやうになるやら分らないと思ふのと、數千卷買つて持つてゐたが、自分は其中で専門學科の沿革と進歩とを見るに最も便利な年報二三種を残して置いて、跡は悉く官の學校に寄附してしまつた。そしてその代りに哲學や文學の書物を買ふことにした。それを時間の得られる限り讀んだのである。

只その讀み方が、初めハルトマンを讀んだ時のやうに、饑えて食を食するやうな讀み方ではなくなつた。昔世にもてはやされてゐた人、今世にもてはやされてゐる人は、どんな事を言つてゐるかと、聲へば道を行く人の額を辻に立つて冷澗に見るやうに見たのである。

冷澗には見てゐたが、自分は辻に立つてゐて、度々帽を脱いだ。昔の人にも今の人も、敬意を表すべき人が大勢あつたのである。

帽は脱いだが、辻を離れてどの人かの跡に附いて行かうとは思はなかつた。多くの師には逢つたが、一人の主には逢はなかつたのである。

自分は度々此脱帽によつて誤解せられた。自然科學を修めて歸つた當座、食物の議論が用たので、當時の權威者たる Voit の標準で駁撃した時も、或る先輩が「そんならフォイトを信仰してゐるか」と云ふと、自分はそれに答へて、「必ずしもさうでは無い、姑くフォイトの邊に據つて敵に當るのだ」と云つて、ひどく先輩に冷かされた。自分は一時の權威者としてフォイトに脱帽したに過ぎないのである。それと丁度同じ事で、一頃藝術の批評に口を出して、ハルトマンの美學を根據にして論じてゐると、或る後進の英雄が云つた。「ハルトマンの美學はハルト



と、地位と境遇とが自分を爲す事場から撥ね出した。自然科学よ、さらばである。

勿論自然科学の方面では、自分なんぞより有力な友達が、大勢あつて、跡に残つて奮闘してゐてくれるから、自分の撥ね出されたのは、國家のためにも、人類の爲めにもなんの損失にもならない。

只奮闘してゐる友達には氣の毒である。依然として零層氣の無い處で、高層の下に働く潜水夫のやうに喘ぎ苦んでゐる。零層氣の無い證據には、まだ Forschungs といふ日本語も出てゐない。そんな概念を明確に言ひ現す必要をば、社會が感じてゐないのである。自體でもないが、「業績」とか「學問の推挽」とか云ふやうな造語を、自分が自然に學界に置土産にして來たが、まだ Forschung といふ意味の簡短で明確な日本語は無い。研究なんといふぼんやりした語は、實際役に立たない。載籍詁林も研究ではないか。

\* \* \* \* \*

かう云ふ悶壓をして來ても、未來の幻影を逐うて、現在の事實を蔑にする自分の心は、まだ元の儘である。人の生涯はもう下り坂になつて行くのに、遂うてゐるのはなんの影やら。「奈何にして人は已を知ることを得べきか。省察を以てしては決して能はざらむ。されど行爲を以てしては或は能くせむ。汝の義務を果さむと試みよ。やがて汝の價値を知らむ。汝の義務とは何ぞ。日の要求なり。」これは Cicero の詞である。

日の要求を義務として、それを果して行く。これは丁度現在の事實を蔑にする反對である。自分はどうしてさう云ふ境地に身を置くことが出来ないだらう。

日の要求に應じて能事畢とするには足ることを知らなくてはならない。足ることを知るといふことが、自分には出来ない。自分は永遠なる不名家である。どうしても自分のゐない筈の所に自分がゐるやうである。どうしても灰色の鳥を青い鳥に見ることが出来ないのである。

道に迷つてゐるのである。夢を見てゐるのである。夢を見てゐて、青い鳥を夢の中に尋ねてゐるのである。なぜだと問うたところで、それに答へることは出来ない。これは只單純なる事實である。自分の意識の上の事實である。自分は此儘で人生の下り坂を下つて行く。そしてその下り果てた所が死だといふことを知つて居る。

併しその死はこはくはない。人の死に、老年になるに従つて増長するといふ「死の恐怖」が、自分には無い。

若い時には、この死といふ目的地に達するまでに、自分の眼前に横はつてゐる謎を解きたいと、痛切に感じたことがある。その感じが次第に痛切でなくなつた。次第に薄らいだ。解けずに横はつてゐる謎が見えないのではない。見たてゐる謎を解くべきものだと思はないのでもない。それを解かうとしてあせらなくなつたのである。

その頃自分は Philip Mainländer が事を聞いて、その男の書いた救拔の哲學を讀んで見た。

此男は Hartmann の迷の三期を承認してゐる。ところであらゆる錯迷を打ち破つて置いて、生を肯定しろと云ふのは無理だといふのである。これは皆洋だが、死んだつて駄目だから、迷を追つ掛けて行けとは云はれない筈だと云ふのである。人は最初に迷ひ死を望み見て、恐怖して面を背ける。次いで死の廻りに大きい圈を畫いて、震慄しながら歩いてゐる。その圈が漸く小さくなつて、とうとう疲れた腕を死の項に

凌ぐ。

書物の外で、主人の翁の顔であるのは、小さいLoupeである。砂の山から摘んで来た小さい草の花などを見る。その外、顕微鏡がある。海の雫の中にある小さい動物などを見る。Mezの望遠鏡がある。晴れた夜の空の星を見る。これは翁が自然科學の記憶を呼び返す、折々のすきびである。

主人の翁はこの小家に來てから幻影を追ふやうな昔の心持を無くしてしまふことは出来な。そして既往を回顧してこんな事を思ふ。日の要求に安んぜない權利を持つてゐるものは、恐らくは只天才ばかりであらう。自然科學で大發明をするとか、哲學や藝術で大きい思想、大きい作品を生み出すとか云ふ境地に立つたら、自分も現在に満足したのではあるまいか。自分にはそれが出来なかつた。それでかう云ふ心持が附き纏つてゐるのだらうと思ふのである。少壯時代に心の田地に卸された種子は、容易に根を絶つことの出来ないものである。冷眼に哲學や文學の動搖を見てゐる主人の翁は、同時に重い石を一つ一つ積み重ねて行くやうな科學者の學作にも、餘所ながら目を附けてゐるのである。

Levee des Deux Mondesの主筆をしてゐた舊教徒Prunetteが、科學の破産を説いてから、幾多の歳月を聞しても、科學はなかなか破産しない。凡ての人の爲のものの無常の中で、最も大きい未來を有してゐるものの一つは、欠張科學であらう。

主人の翁はそこで又こんな事を思ふ。人間の巨大難になつてゐる病は、科學の力で豫防もし治療もすることが出来る様になつて來た。種痘で痘瘡を防ぐ。人工で培養した細菌やそれを種ゑた動物の血清で、室扶斯を防ぎ實扶の里を直すことが出来る。Tubercleのやうな猛烈な病も、病原菌が發見せられたばかりで、豫防の見當は附いてゐる。癩病も病原菌だけは知れてゐる。結核も、Tuberculinが豫期せられた功を奏せないでも、防ぐ手掛りが無いこともない。癌のやうな惡性腫瘍も、もう動物に移し植ゑることが出来て見れば、早晚豫防の手掛りを見出すかも知れない。近くは梅毒がSILVERMANで直るやうになつた。Eins Meischkoffの樂天哲學が、未來に屬してゐる希望のやうに、人間の命をずつと延べることも、或は出来ないには限らないと思ふ。かくして最早幾何もなくなつてゐる生涯の殘餘を見果てぬ夢の心持で、死を怖れず、死にあこがれずに、主人の翁は送つてゐる。その翁の過去の記憶が、稀に長い鎖のやうに、刹那の間に何十年かの跡を見渡させることがある。さう云ふ時は翁の炯々たる目が大きく睜られて、遠い遠い海と空とに注がれてゐる。これはそんな時と書き棄てた反古である。

## 夏の盛 (DEHMEL)

わが故郷を日が染める、黄金色に。高樺が熟してふくれる、パンの温さに。黄金色であつた子供時代と同じに。大地よ。われ汝に謝す。

燕はわれを呼ぶ、瑠璃色の空へ。白雲は光の上に光を積む塔の高さに。瑠璃色であつた青年時代と同じに。太陽よ。われ汝に謝す。

(『沙雅の木』の「謠詩より」)

マンの無意識哲學から出てゐる。あの美學を根據にして論ずるには、先づ無意識哲學を信仰してゐなくてはならないと云つた。なる程ハルトマンは自家の美學を自家の世界觀に結び附けてはゐたが、始くその連鎖を斷つてしまつたとして見ても、彼の美學は當時最も完備したものであつて、而も創見に富んでゐた。自分は美學の上で、矢張り一時の權威者としてハルトマンに脱帽したに過ぎないのである。ずつと後になつてから、ハルトマンの世界觀を離れて、彼の美學の存立してゐられる、立派な證據が提供せられた。ハルトマン以後に出た美學者の本をどれでも開けて見るが好い。きつと美の Motivation と云ふものを説いてゐる。あれはハルトマンが寂めたのでハルトマンの前には無かつた。それを誰も彼も説いてゐて、ハルトマンのハの字も言はずにゐる。默殺してゐるのである。

\* \* \* \* \*

形而上學と云ふ、和蘭寺院樂の諧律のやうな

組立てに倦んだ自分の耳に、或時ちぎれちぎれの Apfornismen の旋律が聞えて來た。

生の意志を挫いて無に入らせようとするシヨオペンハウエルの Quenchive に服従し兼ねてゐた自分の意識は、或時懶眠の中から鞭うち起された。

それは Nietzsche の超人哲學であつた。

併しこれも自分を養つてくれる食餌ではなくて、自分を酔はせる酒であつた。

過去の消極的な、利他的な道德を家畜の群の道德としたのは痛快である。同時に社會主義者の四海同胞觀を、あらゆる特權を排斥する、愚かな、とんな群の道德としたのも、無政府主義者の跋扈を、歐羅巴の街に大が吠えてゐると罵つたのも面白い。併し理性の約束を棄てて、權威に向ふ意志を文化の根本に置いて、門閥のため、自我のために、毒藥と匕首を用ゐることを憚らなう Cereus Brachia を、君主の道德の典型としたのなんぞを、眞面目に受け取るわけには行かない。その上ハルトマンの細かい倫理説を見た目には、所謂評價の革新さへ幾分の新しみを殺がれてしまつたのである。

そこで死はどうであるか。「永遠なる再來」は慰藉にはならない。Nuradmetus の末期に筆を

下し兼ねた作者の情を、自分は憐んだ。それから後にも Faulstich の流行などと云ふことも聞て來たが、自分は一切の折衷主義に同情を有せないで、そんな思潮には觸れずにしまつた。

\* \* \* \* \*

昔別荘の眞似事に立てた、膝を容れるばかりの小家には、佛者の百一物のやうになんの道具も只一つしか無い。

それに主人の翁は壁といふ壁を皆棚にして、棚といふ棚を皆書物にしてゐる。

そして世間と一切の交通を絶つてゐるらしい主人の計に、西洋から書物の小包が来る。彼が生きてゐる間は、小さいながら財産の全部を保管してゐる Von Arnim の手で、利足の大部分が西洋の某書肆へ送られるのである。

主人は老いても黒人種のやうな視力を持つてゐて、世間の人が懐かしくなつた故人を訪ふやうに、古い本を讀む。世間の人が市に出て、新しい人を見るやうに新しい本を讀む。

倦めば砂の山を歩いて松の木立を見る。砂の濱に下りて海の波瀾を見る。僕八十歳の薦める野菜の膳に向つて、飢を



ふわけでもあるまいが、毎朝五時が打つと二階へ上がつて来て、寝てゐる女中の布団を片端からまくつて歩いた。朝起は勤勉の第一要件である。お爺いさんのする事は至つて殊勝なやうであるが、女中達は一向敬服してゐなかつた。そればかりではない。女中達はお爺いさんを、蔭で助兵衛爺さんと呼んでゐた。これはお爺いさんが爲めにする所あつて布団をまくるのだと思つて附けた渾名である。そしてそれが全くの冤罪でもなかつたらしい。

暮に押し詰まつて、毎晩のやうに忘年會の大一座があつて、女中達は目の廻るやうに忙しい頃の事であつた。或る晩例の日刺の一疋になつて寝てゐるお金、夜なかにふいと目を醒ました。外の女ならこんな時手水にでも起きるのだが、お金は小用の遠い性で、寒い晩でも十二時過ぎに手水に行つて寝ると、夜の明けるまで行かずに済ますのである。お金はほんやりして、廣間の眞中に吊るしてある電灯を見てゐた。女中達は皆好く寐てゐる様子で、所々で齒ぎしりの音がする。

その晩は雪の夜であつた。寝る前に手水に行つた時には綿をちぎつたやうな、大きい雪が盛んに降つて手水鉢の向うの南天と竹柏の木とに

大ぶ積つて、竹柏の木の方は飲み過ぎたお客のやうに、よるけて倒れさうになつてゐた。お金はまだ降つてゐるかしらと思つて、耳を澄まして聞いてゐるが、折々風がごとと鳴つて、庭木の枝に積もつた雪のなだれ落ちる音らしい音がする外には、只方々の戸がごとと震ふやうに鳴るばかりで、まだ降つてゐるのだか、もう歇んでゐるのだかわからない。

暫くすると、お金の右隣に寝てゐる女中が、むつくり銀杏返し頭の頭を擡げて、お金と目を見合せた。お松と云つて、瘦せた、色の淺黒い、氣丈な女で、年は十九だと云つてゐるが、その頃二十五になつてゐたお金が、自分より精々二つ位しか若くはないと思つてゐたと云ふのである。

「あら、お金さん。目が醒めてゐるの。わたし大ぶ寐たやうだわ。もう何時。」

「さうさね。わたしも目が醒めてから、まだ時計は聞かないが、二時頃だらうと思ふわ。」

「さうでせうねえ。わたし一時間は儼かに寐たやうにから。寝る前寒かないことね。」

「宵のうち寒かつたのは、雪が降り出す前だつたからだ。降つてゐる間は寒かないのさ。」  
「さうかしら。どれ憚りに行つて来よう。お金

さん附き合はなくなつて。」

「寒くないと云つたつて、矢つ張寝てゐる方が勝手だわ。」

「友通申愛のない人ね。そんなら爲方がないから一人で行くわ。」

お松は夜着の中から滑り出て、髪んだ細帯を締め直しながら、梯子段の方へ歩き出した。二階の上がり口は長方形の間の、お松やお金の寝てゐる方角と反対の方角に附いてゐるので、二列に頭を衝き合せて寝てゐる大勢の間を、お松は通つて行かなくてはならない。

お松が電灯の下がつてゐる下の處まで歩いて行つたとき、風がごとと鳴つて、だだだあと云ふ音がした。雪のなだれ落ちた音である。多分庭の眞ん中の立石の傍にある大きい松の木が雪が落ちたのだらう。お松は覺えず一寸立ち留まつた。

此時突然お松の立つてゐる處と、上がり口との中途あたりで、「お松さん、待つて頂戴、一しよに行くから」と叫ぶやうに云つた女中がある。

さう云ふ聲と共に、むつくり烏田蓑を擡げたのは、新參のお花と云ふ、色の白い、髪の練れた、おかめのやうな顔の、十六七の娘である。

心

中

お金(きん)がどの客(きやく)にも一度(ひと)はきつとする話(はなし)であつた。どうかして間違(まちが)つて二度話(にどわ)し掛けて、その客(きやく)に「ひゆうひゆうと云(い)ふのだらう」なんぞと、先(まづ)を越(こ)して云(い)はれようものなら、お金(きん)の悔(く)やしがりやうは一通(ひと)りではない。なぜと云(い)ふに、あの女(をんな)は一度來(き)た客(きやく)を忘(わす)れると云(い)ふことはないと云(い)つて、ひどく自分の記憶(きおく)を恃(たも)んでゐたからである。

それを客(きやく)の方(かた)から頼(たの)んで二度話(にどわ)して貰(もら)つたものは、恐(おそ)ろくは僕(ぼく)一人(ひとり)であらう。それは好(よ)く聞いて覺(し)えて置(お)いて、いつか書(か)かうと思(おも)つたからである。

お金(きん)はあの頃(ころ)いくつ位(くらい)だつたかしら。「をばさん、今晩(こんばん)は」なんと云(い)ふと、「まあ、あんまり可哀(かわい)さうぢやありませんか」と眞面目(まじめ)に云(い)つて、救(きう)を求(もと)めるやうに一座(いざ)を見渡(みわた)したものだ。「おい、萬年新造(まんねんしんぞう)」と云(い)ふと、「でも新造(しんぞう)だけは難有(ありがた)いわねえ」と云(い)つて、心(こ)から嬉(うれ)しいのを隠(かく)し切れなかつたやうである。兎(う)に角(かく)三十(さんじゅう)は儲(も)かに越(こ)してゐた。

僕は思(おも)ひ出(だ)しても可笑(おか)しくなる。お金(きん)は妙な癖(くせ)のある奴(やつ)だつた。妙な癖(くせ)だとは思(おも)ひながら、あいつのゐないところで、その癖(くせ)をはつきり思(おも)ひ浮(う)べて見(み)ようとしても、どうも分(わ)からなかつた。併(お)し度々(たびたび)見るうちに、僕はとうとう覺(し)えてしまつた。お金(きん)を知(し)つてゐる人は澤山(たくさん)あるが、こんな事(こと)をはつきり覺(し)えてゐるのは、これも矢(や)つ張(はり)僕(ぼく)一人(ひとり)かも知(し)れない。癖(くせ)と云(い)ふのはかうである。

お金(きん)は客(きやく)の前(まえ)へ出(で)ると、なんだか一寸(ちと)坐(す)わつても直(す)ぐに又(また)立たなくてはならないと云(い)ふやうな、落(お)ち着(ず)かない坐(す)わりやうをする。それが随分(ずいぶん)長く坐(す)わつてゐる時(とき)でもさうである。そしてその客(きやく)の親疎(しんそ)によつて、「あなた大層(たいそう)お見限(みか)りで」とか、どうなすつたの、馳(も)の道(みち)はひどいわ」とか云(い)ひながら、左(ひだり)の手(て)で右(みぎ)の袂(たもと)を撮(と)んで前(まえ)に投(な)げ出(だ)す。その手(て)を咄(は)の下(した)に持(も)つて行(い)つて襟(えり)を直(す)。直(す)すかと思(おも)ふと、その手(て)を下(した)へ引(ひ)くのだが、その引(ひ)きやうが面(おも)白い。手(て)が下(した)まで下(くだ)りて來(き)る途(と)中で、左(ひだり)の乳房(ちち)を押(お)さへるやうな運(う)動(どう)を

する。さて下(くだ)りたかと思(おも)ふと、その手(て)が直(す)ぐに又(また)上(あ)がつて、手(て)の甲(うで)が上(うへ)になつて、桌(しやう)の下(した)を右(みぎ)から左(ひだり)へ横(よこ)に通(とお)り掛(か)つて、途(と)中で留(とど)まつて、口(くち)を掩(おほ)ふやうな怪好(かいこう)になる。手(て)をかう云(い)ふ位(くらい)に置(お)いて、いつでも何(なん)かしやべり續(つづ)けるのである。尤(尤も)も乳房(ちち)を押(お)さへるやうな運(う)動(どう)は、折々(しばしば)右(みぎ)の手(て)ですることもある。その時(とき)は押(お)へられるのが右(みぎ)の乳房(ちち)である。

僕はお金(きん)が話(はな)した儘(まま)をそつくりこに書(か)かうと思(おも)ふ。頃(ころ)日(ひ)僕(ぼく)の書(か)く物(もの)の總(くわ)ては、神理(しんり)なる評論(ひんろん)が、一(ひと)上手(うへ)な落語(らくご)のやうだと云(い)ふ紋切形(もんきぎやう)の一言(ひとこと)で褒(ほ)めてくれることになつてゐるが、若(わか)し今度(こんど)も同じ(おな)じマンシヨ・オノレエルの頂戴(ちやうたい)したら、それをそつくりお金(きん)にお祝儀(いわいぎ)に遣(や)れば好(よ)いことになる。

\* \* \* \* \*

話は川柳(かえりやう)と云(い)ふ料理店(りやうりてん)での出来事(きずな)である。但(ただ)し此料理店(りやうりてん)の名(な)は遠慮(えんりょ)して、わざと諷(ふう)の名(な)を書(か)いたのだから、そのお積(おし)りに願(ねが)ひたい。そこで川柳(かえりやう)には、此語(このことば)のあつた頃(ころ)、女中(にようぢゆう)が十四五人(しやうご)ゐた。それが二十疊敷(にじゅうでしき)の二階(にかい)に、日刺(ひさ)を並(なら)べたやうに寝(ね)ることになつてゐた。まだ七十近い先代(せんだい)の主(しゆ)人が生(い)きてゐて、隠居(いんきよ)爲(な)事(こと)にと云(い)ふ

を見て、うるさく品行を非難するやうな事をせずに「君は僧侶になる柄の人ではないから、今のうちに廢し給へ」と云つて、寺を何がなしに逐ひ出してしまつた。そこで佐野さんは、内情を知らない親達か、住職の難癖を附けずに出家を止めるのを聞いて、げにもと思ふらしいのに勢を得て、お蝶より先きに東京に出て、或る私立學校に這入つた。お蝶が東京に出たのは、佐野さんの跡を慕つて來たのであつた。

佐野さんはその後、度々川柳へお蝶に逢ひに來て、一寸話しては歸つて行く。お客になつて來たことはない。お蝶の親元からも度々人が出て來る。塔取の話が矢張續いてゐるらしい。皆は機屋と取引上の關係のある男で、それをこゝわつては、機屋で困るやうな事情があるらしい。佐野さんは、初めはお蝶をなだめ賺すやうにしてあしらつてゐる様子であつたが、段々深くお蝶に同情して來て、後にはお蝶と一しよになつて、機屋一家に對してどうしようか、かうしようかと相談をする立場になつたらしい。

かう云ふ入り組んだ事情のある女を、その儘使つてゐると云ふことは、川柳ではこれまでついぞなかつた。それを目をねむつて使つてゐる

には、わけがある。一つはお蝶がひどくお上さんの氣に入つてゐる爲めである。田舎から出た娘のやうではなく、何事にも好く氣が附いて、好く立ち働くので、お蝶はお客の褒めものになつてゐる。國から來た親類には、随分やかましい事を言はれる様子で、お蝶はいつち神妙に俯向いて話を聞いてゐても、その人を歸した跡では、直ぐ何事もなかつたやうに彈力を回復して、元氣よく立ち働く。そしてその口の周圍には微笑の影さへ漂つてゐる。一體お蝶は主人に間違つた事で小言を言はれても、友達に意地悪くいぢめられても、その時は困つたやうな様子で、謹んで聞いてゐるが、直ぐ跡で機嫌を直して働く。そして例の微笑んでゐる。それが決して人を馬鹿にしたやうな微笑ではない。伶俐で何もかも分かつて、それで堪忍して、おこるの怨むのと云ふことはしないといふ微笑である。

「あの、笑席よりは、口の端の處に、際にもよいとした皺が寄つて、それが本當に可笑うございました」と、お金が云つた。僕はその時リオナルド・オグア キンチのかいたモンナ・リザの畫を思ひ出した。お客に褒められ、友達の折角も好い、愛敬のあるお蝶が、此内のお上さんに氣に入つてゐるのは無理もない。

今一つ川柳でお蝶に非難を言ふことの出來ないわけがある。それは外の女中がいろいろの口實を拵へて暇を貰ふのに、お蝶は一晩も外泊をしないばかりでなく、晝間も休んだことがない。佐野さんの來るのを傍輩が彼此云つても、これも生帳面に素話をして歸るに極まつてゐる。どんな約束をしてゐるか、どうぶち中から分らないが、みだらな振舞をしないから、不行跡だと云ふことは出来ない。これもお蝶の信用を固する本になつてゐるのである。

お金は宵に大分遅くなつてから、佐野さんが來たのを知つてゐる。外の女中も知つてゐる。こんな事はこれまであつたが、女中達が先きに寝て、暫く立つてから目が醒めて見れば、いつもお蝶はちやんと來て寝てゐたのである。それが今夜は二時を過ぎたかと思ふのに、まだ床に戻つてゐない。何と云ふ理由もなく、お金にそれが直ぐに氣になつた。どうも色になつてゐる二人が逢つて話をしてゐるのだと云ふ感じではなくて、何か變つた事でもありはしないかと氣遣はれるやうな感じがしたのである。

\* \* \* \* \*

お花はお松の跡に附いて、「お松さん、そんな



「来るなら、早く、おし。」お松は寝巻の前を掻き合せながら一足進んで、お花の方へ向いた。

「わたしこいから我慢しようかと思つてゐたんだけど、お松さんと一しよなら、矢つ張行つた方が好いわ。」かう云ひながら、お花は半身起き上がつて、ぐづぐづしてゐる。

「早くおしよ。何をしてゐるの。」

「わたし脱いで寝た足袋を穿いてゐるの。」

「じれつたいねえ。」お松は足踏をした。

「もう穿けてよ。勘辨して頂戴、ね。」お花はしどけない風をして、お松に附いて梯子を降りて行つた。

便所は女中達の寝る二階からは、生憎遠い處にある。梯子を降りてから、長い、狭い廊下を通つて行く。その行き留まりにあるのである。廊下の横手には、お客を通す八疊の間が、雨側に二つ宛並んでゐてそのはづれの處と便所との間が、右の方は女竹が二十本立つてゐる下、小さい石燈籠の据ゑてある小庭になつてゐて、左の方が茶室裏ひの四疊半があるのである。

いつも夜なかに小用に行く女中は、竹のさらさらと摩れ合ふ音をこはがつたり、花崗石の石燈籠を、白い着物を着た人がしがんでゐるやうに見えると思つてこはがつたりする。或る時又用を足してゐる間ぢゆう、四疊半の中で、女の泣いてゐる聲がしたので、歸りに障子を開けて見たが、人はゐなかつたと云つたものがある。これは友達をこはがらせる爲めに、造り事を言つたのであるが、その話を聞いてからは、便所の往き返りに、兎角四疊半が氣になつてならないのである。殊に可笑しいのは、その造り事を言つた當人が、それを言つてからは四疊半がこはくなつて、とうとう一度は四疊半の中で、本當に泣聲がしたやうに思つて、便所の歸りに大聲を出して人を呼んだことがあつたのである。

\* \* \* \* \*

お金は二人が小用に立つた跡で、今まで氣の附かなかつた事に氣が附いた。それはお花の空床の隣が矢張り空床になつてゐることであつた。二つ並んで明いてゐるので、目立つたのである。

そして、「ああお蝶さんがまだ寝てゐないが、どうしたのだらう」と思つた。お花の隣の空床の主はお蝶と云つて、今年の夏田舎から初春公に出た、十七になる娘である。お蝶は下野の結

城で機屋をして、困らずに暮してゐるものゝ人娘であるが、婿を嫌つて逃げ出して來たと云ふことであつた。間もなく親元から連れ戻しに親類が出たが、強情を張つて歸らない。親類も川柳の店が、料理店ではあつても、堅い店だと云ふことを存み込んで、とうとう娘の身の上を此内のお上さんに頼んで置いて歸ってしまった。

それが歸ると、又間もなく親類だと云つて、お蝶を尋ねて來た男がある。十八九ばかりの書生風の男で、浴帷子に小倉袴を穿いて、麥藁帽子を被つて來たのを、女中達が假いて見て、高麗藏のした「魔風戀風」の東吉に似た書生さんだと云つて騒いだ。それから寄つてたかつてお蝶を擲擲つたところが、おとなしいことはおとなしくても、意氣地のある、張りの強いお蝶は、

佐野と云ふその書生さんの身の上を、さつぱりと友達に打ち明けた。佐野さんは親が功さんにすると云つて、例の殺生石の傳説で名高い、源翁禪師を開基としてゐる安穩寺に預けて置くと、お蝶が見初めて、いろいろにして近附いて、最初は容易に聴かなかつたのを納得させた。婿を嫌つたのは、佐野さんがあるからの事であつた。安穩寺の住職は東京で新しい教育を受けた、物分りの好い人なので、佐野さんの人柄

それから顔を見合せた。二人共相手の顔がひどく青いと思つた。電灯が小さいので、雪明りに負けてゐるからである。

ひゆうひゆうと云ふ音は、此時これまでに近く近く聞えてゐる。

「それ御覽なさい。あの音は手水場でしてゐるのだわ。」お松はかう云つたが、自分の聲が不斷と變つてゐるのに氣が附いて、それと同時にぞつと寒けがした。

お花はこはくて物が言へないのか、黙つて合點合點をした。

二人は急いで用を足してしまつた。そして前に便所に這入る前に立ち留まつた處へ出て來ると、お松が又立ち留まつて、かう云つた。

「手水場の障子は破れてゐなかつたのねえ。」

「さう。わたし見なかつたわ。それどこぢやないのですもの。さあ、こんなところにゐないで、早く行きませう。」お花の聲は震へてゐる。

「まあ、ちよいとお待ちよ。どうも變だわ。あの音をお聞き。手水場の中よりか、矢つ張この方が近く聞えるわ。わたしきつとこの四疊半の中の障子だと思ふの。ちよつと開けて見ようぢやないか。」お松はこん度當の聲が出たので、自分ながら氣に思つた。

「あら。およしなさいよ。」お花は慌てて、又お松の袖にしがみ附いた。

お松は袖を攫まへられながら、ちつと耳を澄まして聞いてゐる。直き傍のやうに聞えるかと思ふと、又さうでないやうにもある。儘かに四疊半の中だと思はれる時もあるが、又どうかすると便所の方角のやうにも聞える。どうも聞き定めることが出来ない。

僕にお金が話す時、どうしても方角がしつかり分からなかつたと云ふのが不思議ぢやありませんか」と云つたが、僕は格別不思議にも思はない。聴くと云ふことは空間的感覺ではないからである。それを強ひて空間的感覺にしようと思ふと、ミューンステルベルヒのやうに内耳の迷路で方角を聞き定めるなどと云ふ無理な議論も出るのである。

お松は少し依怙地になつたのと、内々はお花のゐるのを力にしてゐるのとで、表面文は強さうに見せてゐる。「わたし開けてよ」と云ひさま、攫まへられた袖を拂つて、障子をさつと開けた。

廊下の硝子障子から差し込む雪明りで、微かではあるが、薄暗い廊下に慣れた目には、何もかも輪廓文はつきり知れる。一目室内を見込む

や否や、お松もお花も一しよに聲を立てた。

お花はその儘氣絶したのを、お松は棄てて置いて、廊下をばたばたと母屋の方へ駆け出した。

\* \* \* \* \*

川舩の内では一人も残らず起きて、廊下の隅隅の電灯まで附けて、主人と隠居とが人勢のものを騒ぐのを制しながら、四疊半に來て見た。

直ぐに使を出したので、醫師が来る。巡査が来る。續いて刑事係が来る。警務署長が来る。

氣絶してゐるお花を隅の明間へ抱へて行く。狭い、長い廊下に人が押し合つて、がやがやと騒る。非常な混雑であつた。

四疊半には鋭利な刃物で、氣管を横に切られたお蝶が、まだ息が絶えずに倒れてゐた。ひゆうひゆうと云ふのは、切られた氣管の疵口から呼吸をする音であつた。お蝶の傍には、佐野さんが自分の頸を深く刻つた、白鞘の短刀の柄を握つて死んでゐた。頸動脈が斷たれて、血が夥しく出てゐる。火鉢の火には灰が掛けて埋めてある。電灯には血の痕が附いてゐる。佐野

さんがお蝶の吭を切つてから、明りを消して置いて、自分が死んだのだらうと、刑事係が云つた。佐野さんの手で書いて連署した遺書が床の

に急がないで下さいよ」と云ひながら、一しよに梯子段を降りて、例の狭い、長い廊下に掛かつた。

二階から差してゐる明りけ廊下へ曲る角までしか届かない。それから先きは側所の前に、一燭ばかりの電灯が一つ附いてゐる丈である。それが遠い、遠い向うにちよんぼり見えてゐて、却てそれが見える爲めに、途中の暗黒が暗黒として感ぜられるやうである。心理學者が「闇その物が見える」と云ふ場合に似た感じである。

「こはいわねえ」とお花は自分の足の指が、まきに立つて歩いてゐるお松の踵に障るやうに、食つ附いて歩きながら云つた。

「笑談お言ひでない。」お松も實は餘り心丈夫でもなかつたが、半分は意地で強さうな返事をした。

二階では稀に一しきり強い風が吹き渡る時、その音が聞えるばかりであつたが、下に降りて見ると、その間にも絶えず庭の木立の戦ぐ音や、どこかの開き戸の蝶番の弛んだのが、風にあふられて鳴る音がする。その間に一種特別な、ひゆうひゆうと、微かに長く引くやうな音がする。どこかの戸の隙間から風が吹き込む音でもあるのだらうか。その斷えては續く工合が、俾

へば人がゆつくり息をするやうである。

「お松さん。ちよいとお待ちよ。」お花はお松の袖を控へて、自分は足を止めた。

「なんだねえ。出し抜けに袖にぶら下がるのだもの。わたしびつくりしたわ。」お松もかうは云つたが、足を止めた。

「あの、ひゆうひゆうと云ふのはなんでせう。」

「さうさねえ。梯子を降りた時から聞えてるわねえ。どこかここの隙間から風が吹き込むのだけ。」

二人は暫く耳を欬て聞いてゐた。そしてお松がかう云つた。「なんでもあんまり遠いところやなくつてよ。それに板の隙間では、あんな音はしまいと思ふわ。なんでも障子の紙かなんかの破れた處から吹き込むやうだねえ。あの手水場の高い處にある小窓の障子かも知れないわ。表の手水場のは硝子戸だけれども、裏のは紙障子だわね。」

「さうでせうか。いやあねえ。わたしもう手水なんか我慢して、二階へ歸つて寝ようかしら。」

「馬鹿な事をお言ひでない。わたしそんなお附合ひなんか御免だわ。歸りたけりやあ、花ちゃんひとりでお歸り。」

「ひとりではこはいから、そんなら一しよに行

つてよ。」

二人は又歩き出した。足歩くとに、ひゆうひゆうと云ふ音が、心持近くなるやうである。障子の穴に當たる風の音だらうとは、二人共思つてゐるが、なんとなく變な音だと云ふ感じが底にあつて、それがいつまでも消えない。

お花は息を屏めてお松の踵に附いて歩いてゐるが、頭に血が昇つて、自分の耳の中であらういふ音がする。それでゐて、ひゆうひゆうと云ふ音丈は矢張際立つて聞えるのである。お松も餘り好い氣持はしない。お花が陽にお松を力にしてゐるやうに、お松も陰にはお花を力にしてゐるのである。

便所が段々近くなつて、電灯の小さい明りの照し出す範圍が段々廣くなつて來るのがせめてもの頼みである。

二人はとうとう四疊半の處まで來た。右手の壁は腰の邊から上が硝子戸になつてゐるので、始めて外が見えた。石燈籠の笠には雪が五六寸もあらうかと思ふ程積もつてゐて、竹は何本か雪に掩んで地に着きさうになつてゐる。今立つてゐる竹は雪が積ちた跡で、はね上がったのであらう。雪はもう降つてゐなかつた。

二人は覺えず足を止めて、硝子戸の外を見て、



## 百物

語

何か事情があつて、川開きが暑中を過ぎた後に延びたる年の當日であつたかと思ふ。餘程年も立つてゐるので、記憶が稍おぼろけになつてはゐるが又却てそれがために、或る廉々がアクサンチュエエせられて、窮んだ、濁つた、しかも強い色に彩られて、古びた想像のしまつてある、僕の脳髓の物質の隅に轉がつてゐる。

勿論生れて始めての事であつたが、これから後も先づそんな事は無さうだから、生涯に只一度の出来事に出くはしたのだと云つて好からう。それは僕が百物語の唄しに行つた事である。

小説に説明をしてはならないのださうだが、白愼は誰にもあるもので、此語でも萬一ヨロツバのどの國かの語に翻譯せられて、世界の文學の仲間人をするやうな事があつた時、餘所の讀者に分らないだらうかと、作者は途方もない考を出して、行きなり説明を以て此小説を書きはじめた。百物語とは多勢の人が集まつて、蠟燭を百本立てて置いて、一人が一つ宛化

物の話をして、一本の蠟燭を消して行くのださうだ。さうすると百本目の蠟燭が消された時、眞の化物が出ると云ふことである。事によつたら例のフアキールと云ふ奴がアルラ・アルラアを唱へて、頭を掉つてゐるうちに、靦面に神を見るやうに、神經に刺戟を加へて行つて、一時幻視幻聴を起すに至るのではあるまいか。

僕を此催しに誘ひ出したのは、寫眞を道樂にしてゐる薮君と云ふ人であつた。いつも身綺麗にしてゐて、衣類や持物に、その時々流行を趁つてゐる。或時僕が脚本の試みをしてゐるのを見てこんな事を言つた。どうもあなたのお書きになるものは少し勝手が違つてゐます。

ちよいちよい芝居を御覽になつたら好いでせう。これは親切に言ってくれたのであるが、こつちが却つてその勝手を破壊しようと思つてゐるのだとは、全く氣が附いてゐなかつたらしい。僕の試みは試みてしまつて、何等の成功をも見なかつたが、後繼者は段々勝手の逆つた物を出し出して、芝居の面目が今では

大ぶ改まりさうになつて來てゐる。詰まり振れた時代を超越したやうな考は持つてもゐず、解せようとしなかつたのが、薮君の特色であつたらしい。さ程深くもなかつた交が絶えてから、もう久しくなつてゐるが、僕はあの人の飽くまで穩健な、目前に提供せられる受用を、程好く享受してゐると云ふ風的生活を、今でも羨ましく思つてゐる。薮君は下町の若旦那の中で、最も聰明な一人であつたと云つて好からう。

この薮君が僕の内へ來たのは、川開きの前日の午過ぎであつた。あすの川開きに、兩國を跡に見て、川上へ上つて、寺島で百物語の催しをしようとなつたのだが、行つて見ぬかと云ふ。主人は誰だ。案内もないに、行つても好いのかと、僕は問うた。「なに。例の飾磨屋さんが催すのです。大ぶ大勢の積りだし、不參の人もありさうだから、飛入をしても構はないのですが、それで徳義上行かれぬなんぞと、あなたの事だから云ふかも知れない。併し二三日前に逢つた時、あなたにはわたくしから話をして見て、來られるやうなら、お連れ申すかも知れないと、勝兵衛さんにことわつてあります。わたくしが一しよに行くのが好いが、外へ廻つて行かなくて

間に置いてあつて、其上に佐野さんの銀時計が文鎖にしてあつた。お蝶の名丈はお蝶が自筆で書いてゐる。文面の概略はかうである。「今年の暮に機屋一家は破産しさうである。それはお蝶が親の詞に背いた爲めである。お蝶が死んだら、債権者も過酷な手段は取るまい。佐野も東京には出て見たが、神經衰弱の爲めに、學業の成績は面白くなく、それに親戚から長く學資を給してくれる見込みもないから、お蝶が切に願ふに任せて、自分は甘んじて犠牲になる。」書いてある事は、ざつとこんな筋であつたさうだ。

川樹へ行く客には、お金が一人も残さず話すのだから、此話を知つてゐる人は世間に澤山あるだらう。事によると、もう何かに書いて出した人があるかも知れない。

### 川は靜に流れ行く

(KLABUND)

川は靜に流れ行く。  
同じ早きに、  
波頭の  
白きも見えず。

覗けば黒く、  
渦巻く淵の險しさよ。  
こはいかに。いづくゆか。  
我を呼ぶ。

顧みてわれ  
色を失ふ。  
漂へるは  
我儕ゆゑ。

(『沙羅の木』の「譯き」より)

### 又 (KLABUND)

お前又忍んで來たね、  
闇の夜に。

あるたけのお前の智慧が  
向不見のお前の熱に負けたのだ。

そして又昔のやうにしると  
お前はじにねだる。  
せつなかつたかい。  
お前泣いてゐるね。

### 熱 (KLABUND)

折折道普請の人夫が來て、  
石を小さく割つてゐる。  
そいつが梯子を掛けて、  
己の脳天に其石を敲き込む。

己の脳天はとうとう往來のやうに堅くなつて、  
其上を電車が通る、五味車が通る、板車が通る。

階下から人が出て乗り込む。中には女禪の赤い袖がちら附いて、「一しよに乗りたいわよ、こつちへお出よ」と友を誘ふお酌の甲走つた聲がする。併し客は大抵男ばかりで、女は餘り交つてゐないらしい。皆乗り込んでしまふまで、僕は主人の飾磨屋がどこにゐるか知らずにしまつた。又部君にも逢はなかつた。

船宿の二階は、戸は開け放してあつても、一ぱいに押し込んだ客のいきれがしてゐたが、舟を漕ぎ出すと、すぐ極好い心持に涼しくなつた。まだ火花を見る舟は出ないので、川面は存外込み合つてゐない。僕の乗つた舟を漕いでゐる四十恰好の船頭は、手堀によれた根附の牙彫のやうな顔に、極めて真面目な表情を見せて、器械的に手足を動かして櫓を操つてゐる。飾磨屋の事だから定めて祝儀もはずむのだらうに、嬉しさうには見えない。「勝手な馬鹿をするが好い。己は舟で漕いでゐれば済むのだ」とでも云ひたさうである。

僕は薄縁の上に胡坐を掻いて、麥藁帽子を脱いで、ハンケチを出して額の汗を拭きながら、舟の中の人の顔を見渡した。船宿を出て舟に乗るまでに、外の座敷の客が交つたと見えて、さつき見なかつた顔が大ぶある。依田さんは別の

舟に乗つたと見えて、とうとう知つた顔が一人もなくなつた。そしてその知らない、幾つかの顔が、矢張二階で見た時のやうに、ぼんやりして、てんでに勝手な事を考へてゐるらしい。舟には酒肴が出してあつたが、一々どの舟へも、主人側のものを配ると云ふやうな、細かい言ひ事はしてなかつたのか、世話を焼いて杯を侑めるものもない。かう云ふ時の習として、最初は一同遠慮をして酒肴に手を出さずに、只脱みの羽織を着た、五十恰好の赤ら顔の男が、「どうです、皆さん、切角出してゐるものですから」と云つて、杯を手にとると、方々から手が出て、杯を取る。割箸を取る。盛んに飲食が始まつた。併し話は矢張時候の挨拶位のものである。

「どうです。かう天氣續きでは、米が出来ますでせうなあ。」「さやうさ。又米が安過ぎて不景氣と云ふやうな事になるでせう。」「そいつあ悩ひませんぜ。鶴龜鶴龜。こんな對話である。僕のある所からは、すぐ前を漕いで行く舟の艫の方が見える。そこにはお酌が二人乗つてゐる。傍に頭を五分刈にして、織地の儘の蘭紬の除紋附に袴を穿いて、羽織を着ないでゐる、能役者のやうな男がゐて、何やら言つてお酌を擁掖

ふらしく、きやつきやと云はせてゐる。

舟は西河岸の方に倚つて上つて行くので、廣橋手前までは、お蔵の水門の外を通る度に、さして来る潮に浚む水の面に、蘆や、鉤屑やら、傘の骨やら、お丸のこはれたのやらが浮いてゐて、その間に何事にも頓着せぬと云ふ風をして、鴨が波に揺られてゐた。諏訪町河岸のあたりから、舟が少し中流に出た。吾方橋の上には、人が大ぶ立ち止まつて川を見卸してゐたが、その中に書生がゐて、丁度僕の乗つてゐる舟の通る時、大聲に「馬鹿」とどなつた。

舟の着いたのは、木匠寺邊であつたかと思ふ。生憎風がぱつたり歇んでゐて、岸に生えてゐる葦の葉が少しも動かない。向河岸の方を見ると、水蒸氣に飽いた、灰色の空氣が、橋場の人家の輪廓をぼかしてゐた。土手下から水際まで、狭い一本道の附いてゐる處へ、かはるがはる舟を寄せて、先づ履物を陸へ揚げた。どの舟もどの舟も、載せられるだけ大勢の人を載せて來たので、お酌の小さい雪踏などは見附かつて、客の多數の穿いて來た、世間並の胸下駄は、鑑定が容易に附かない。眞面目な人が跣足で下りて、あれかこれかと扱してゐるうちに、無頓着な人は好い加減な心を着いて行く。中には横着で



はならないから、一足先きへ御免を蒙ります」との事であつた。

時刻と集合の場所とを聞いて置いた僕は、丁度外に用事もないので、まあ、どんな事をするか行つて見ようと思ふ位の好奇心を出して、約束の三時半頃に、柳橋の船宿へ行つて見た。天気はまだ少し蒸暑いが、餘り強くない。南風が吹いてゐて、涼し好かつた。船宿は今取り拂はれた河岸で、丁度龜清の向側になつてゐた。多分増田屋であつたかと思ふ。

かう云ふ日に日貫の位置にある船宿一軒を借り切りにしたものと見えて、しかもその家は近所の雑沓よりも雑沓してゐる。階上階下とも、どの部屋にも客が一ぱい詰め掛けてゐる。僕は人の案内する儘に二階へ昇つて、一間を見渡したが、どれもこれも知らぬ顔の男ばかりの中に、鬚の白い依田學海さんが、紺緋の銘掛の着流しに、薄羽織を引つ掛けて据わつてゐた。依田さんの前には、大層身綺麗にしてゐる、少し太つた青年が恭しげに据わつて、話をしてゐる。僕は依田さんに挨拶をして、少し隔たつた所に割り込んだ。簾越しに川風が吹き込んで、人の込み合つてゐる割に暑くはなかつた。

僕は暫く依田さんと青年との對話を聞いてゐるうちに、その青年が壯士俳優だと云ふことを知つた。俳優は依田さんの意を迎へて「なんでもこれからの俳優は書見をいたさなくてはなりません」と云つてゐる。そしてさう云つてゐる態度と、讀書と云ふものが、此上もない不調和に思はれるので僕はおせつかないが、傍で聞いてゐて微笑せざるを得なかつた。

同時に僕には書見と云ふ詞が、極めて滑稽な記憶を呼び醒ました。それは昔どこやらで舊俳優のした世話物を見た中に、色若衆のやうな役をしてゐる役者が、「どれ、書見をいたさうか」と云つて、見臺を引き寄せた事であつた。なんでもそこへなまめいた娘が薄茶か何か持つて出ることになつてゐた。その若衆のしらじらしい、どうしても本の讀めさうにない態度が、書見と云ふ和製の漢語にひどく好く適合してゐたが、此滑稽を舞臺の外で、今繰り返して見せられたやうに、僕は思つたのである。

そのうち僕はかう云ふ事に気が附いた。しらじらしいのは依田さんに對する壯士俳優の話ばかりではない。此二階に集まつた大勢の人は、一體に詞少なで、それがたまたま何か言ふと、皆しらじらしい。同一の人が同一の場所へ請待した客でありながら、乗合馬車や渡船の中で落ち

合つた人と同じで、一人一人の間になんの共通點もない。ここかしこで互に何か言ふのは、時候の挨拶位に過ぎない。ぜんまいの戻つた時計を振ると、セコンドがちよつと動き出して、すぐに又止まるやうに、こんな會話は長くは持たない。忽ち元の沈黙に返つてしまふのである。

僕は依田さんに何か言はうかと思つたが、どうも矢張りしらじらしい事しきや思ひ附かないので、言ひ出さずにしまつた。そしてそこ等の人の顔を見てゐた。どの客もてんでに勝手な事を考へてゐるらしい。百物語と云ふものに呼ばれては來たものの、その百物語は過ぎ去つた世の遺物である。遺物だと云つても、物はもう亡くなつて、只空き名が残つてゐるに過ぎない。客觀的には元から幽霊は幽霊であつたのだが、若それに無い内容を嘘き入れて、有りさうにした主觀までが、今は消え失せてしまつてゐる。怪談だの百物語だのと云ふものの全體が、イブセンの所謂幽霊になつてしまつてゐる。それだから人を引き附ける力がない。客がてんでに勝手な事を考へるのを妨げる力がない。人も我もぼんやりしてゐる處へ、世話人らしい男が來て、舟へ案内した。此船宿の棧橋ばかりに屋根船が五六艘着いてゐる。それへ階上

ゐない。どの顔を見ても、物を期待してゐるとか好奇心を持つてゐるとか云ふやうな、緊張した表情をしてゐるものはない。

丁度僕がはひつた時、入口に近い所にゐる、裾の長い、紗の道行を着た中爺いさんが、「ひどい蚊ですなあ」と云ふと、隣の若い男が、「なに蚊政ですから、明りを附ける頃にはゐなくなつてしまひます」と云ふその聲が耳馴れてゐるので、顔を見れば、部君であつた。部君も同時に僕を見附けた。

「やあ。お出なさいましたか。まだ飾磨屋さんを御存じないのでしたね。一寸御紹介をしませう。」

かう云つて部君は先きに立つて、「御免なさい、御免なさい」を繰り返しながら、平手で人を分けるやうにして、入口と反對の側の、格子窓のある方へ行く。僕は黙つて跡に附いて行つた。

部君のさして行く格子窓の下の所には、外の客と様子の變つた男がゐる。しかも随分込み合つてゐる座敷なのに、その人の周囲は空席になつてゐるので、僕は入口に立つてゐた時、もうそれが目に附いたのであつた。年は三十位でもあらうか。色の若い、長い顔で、髪は刈つてから大ぶりが立つてゐるらしい。地味な縞の、

鈍い、薄青い色の縞つた何やら、單物に袴を着けて、少し前屈みになつて据わつてゐる。微夜をした人の目のやうに、軽い充血の痕の見えてゐる目は、餘り周囲の物を見ようとせず、

大抵直前の方向を凝視してゐる。此男の傍には、少し背後へ下がつて、一人の女が附き添つてゐる。これも支度が極地味な好みで、その頃流行つた紋織お召の單物も、帯も、帯止も、只管目立たないやうにと心掛けてゐるらしく、薄

い鼠が根調をなしてゐて、二十になるかならぬ女の裝飾としては、殆ど異様に思はれる程である。中肉中背で、可哀らしい圓顔をしてゐる。

銀香返しに結つて、體中で外にない赤い色をしてゐる六分珠の金釧を挿した、たつぷりある髪、鬢のおくれ毛が、俯向いてゐる片頬に掛かつてゐる。好い女ではあるが、どこと云つて鋭い、際立つた線もなく、凄いやうな處もない。僕は一寸見た時から、此男の傍に此女のゐるのを、只何となく病人に看護婦が附いてゐるやうに感じたのである。

部君が僕を此男の前に連れて行つて、僕の名を言ふと、此男は僕を一寸見て、黙つて丁寧に辭儀をただけであつた。部君はそこらにゐた誰やらと話をし出したので、僕はひとり

縁側の方へ出て、いつの間にか薄い雲の掛かつた、暮方の空を見ながら、今見た飾磨屋と云ふ人の事を考へた。

今紀文だと評判せられて、あらゆる豪遊をすることが、新聞の三面に出るやうになつてからもう大ぶ久しくなる。けふの百物語の催しなれどでからが、いかにと思ひ切つて奇抜な、時代の風尚にも、社會の狀態にも頓着しない、大膽な所作だと云はなくてはなるまい。

原來百物語に人を呼んで、どんな事をするだらうかと云ふ、僕の好奇心には、さう云ふ事も多少傳つてゐたのである。僕は慥かに空想で飾磨屋と云ふ男を盡き出してゐたには違ひないが、そんならどんな風をしてゐる男だと想像してゐたかと云ふと、僕もそれをはつきりとは言ふことが出来ない。併し不遠慮に言へば、百物語の催主が氣遣染みた人物であつたなら、どつちかと云へば、必ず躁狂に近い間違方だらうとだけは思つてゐた。今實際に見たやうな沈鬱な人物であらうとは、決して思つてゐなかつた。此時よりずつと後になつて、僕はゴリキイのフオマ・ゴルヂエフを讀んだが、若しけふあのフオマのやうに、飾磨屋が客を捉まへて、隅

新しさうな物を選んで穿く人もある。僕はしかしたが、ないからなるべく跡まで待つてゐて、残つた下駄を穿いたところが、齒の斜に踏み耗らされた、随分歩きにくい下駄であつた。後に聞けば、飾磨屋が物物の間違つた話を聞いて、客一同に新しい駒下駄を贈つたが、僕なんぞには不駄だと云ふ遠慮から、此贈物をしなかつたさうである。

定めて最初に着いた舟に世話人がゐて案内をしたのだらう。一般の舟が附くと、その一般の人が、下駄を捜したりなんかして、まだ行つてしまはないうちに、もう次の舟の人が上陸する。そして狭い道を主手へ上がつて、土手の内の田圃を、寺島村の誰やら別荘をさして行く。その客の群は切れたり續いたりするが、切れた時でも前の人の後影を後の人が見失ふやうなことはない。僕も齒の歪んだ下駄を引き摩りながら、田の畔や生垣の間の道を歩いて、とうとう目的地に到着した。

ここまで来る道で、幾らも見えやうな、小さい屋敷である。高い生垣を繞らして、寇木門が立ててある。それをはひると、向うに燈けたやうな古家の玄関が見えてゐるが、そこまで行く間が、左右を外圍よりずつと低いかなめ垣で爲

切つた道になつてゐて、長方形の花崗石が飛び飛びに敷いてある。僕に背中を見せて歩いてゐた、偶然の先輩者はもう無事に玄關近くまで行つてゐる頃、門と玄關との途中で、右側のかなめ垣がとぎれてゐる間から、お酌が二人手を引き合つてこはかつたわねえと、首を縮めて囁き合ひながら出て来た。僕は、何があるのだい、と云つたが、二人は同時に僕の顔を不遠慮に見て、なんだ、知りもしない奴の癖にとでも云ひたさうな、極く愛相のない表情をして、玄關の方へ行つてしまつた。僕はふいと馬鹿げた事を考へた。昔の名君は一瞥一笑を惜んださうだが、こいつ等はもう只で笑はないだけの修行をしてゐるなと思つたのである。そんな事を考へながら、格別今女の子のことはがつた物の正體を確めたいと云ふ熱心もなく、垣のとぎれた所から、ちよつと横にはひつて見た。

そこには少し引つ込んだ所に、不斷は植木鉢や等でも入れてありさうな、小さい物置があつた。もう物置は少し薄暗くなつてゐて、物置の奥がはつきり見えないのを、覗き込むやうにして見ると、髪を長く垂れた、等身大の幽霊の首に白い着物を着せたのが、薔か何かを束ねて立てた上に覗かせてあつた。その頃まで寄席に出

怪談師が、明りを消してから、客の間を持ち廻つて見せることになつてゐた、出来合の幽霊である。百物語のアリン・ゲウはこんな物かと、稍馬鹿にせられたやうな氣がして、僕は引き返した。

玄關に上がるときに見ると、上がつてすぐ突き當る三疊には、男が二人立つて何か忙がしさうに囁き合つてゐた。どうしやがつたのだなあ。「それだからおいらが蠟燭は舟で来る人なんぞに持せて来ては行けないと云つたのだ。差當り燭臺に立ててあるのしきやないのだから」と云ふやうな事を言つてゐる。樂屋の方の世話も焼いてゐる人達であらう。二人は僕の立つてゐるのには構はずに、奥にはひつてしまふ。入り替つて、一人の男が覗いて見て、黙つて又引つ込んでしまふ。

僕はどうかと思つて、暫く立ち竦んでゐたが、右の方の唐紙が明いてゐる、その先きに入聲がするので、その方へ行つて見た。そこは十四疊ばかりの座敷で、南側は古風に刈り込んだ松の木があつたり、雪見燈籠があつたり、泉水があつたりする庭を見晴してゐる。此座敷にもう二十人以上の客が詰め掛けてゐる。矢張り船宿や舟の中と同じ様に、餘り話ははずんで



護婦のやうだと思つた、あの刹那の印象である。僕がぼんやりして縁側に立つてゐる間に、背後の座敷には燭臺が運ばれた。まだ電燈のない時代で、瓦斯も寺島村には引いてなかつたが、わざわざランプを廢めて燭燭にしたのは、今宵の特別な趣向であつたのだらう。

燭臺が並んだと思ふと、跡から大きな盥が運ばれた。中には鮓が盛つてある。道行觸のをぢさんが、「いや、これは御趣向と云ふと、傍にゐた若い男が、「湯灌の盥と云ふ心持です」と注釋を加へた。すぐに跡から小形の手桶に柄杓を投げ入れたのを持つて出た。手桶からは湯氣が立つてゐる。先つきの若い男が「や、関佛桶」と叫んだ。所謂関佛桶の中には、番茶が麻の囊に入れて漬けてあつたのである。

この時玄關で見掛けた、世話人らしい男の一人が、座敷の眞ん中に据わつて「一寸皆様に申し上げます」と冒頭を置いて、口上めいた挨拶をした。段々準備が手おくれになつて濟まないが、竝の飯の方を好む人は、もう折詰の麦度もしてあるから、別間の方へ來て貰ひたいと云ふ事であつた。一同鮓を食つて茶を飲んだ。僕には番君が牛紙に取り分けて、持つて來てくれたので、僕は敷居の上にしやがんで食つた。「お

茶も今上げます。盥も手桶も皆新しいのです」と番君は言ひわけをするやうに云つて置いて、茶を取りに立つた。併しそんな言ひわけらしい事を聞かなくても、僕は飲食物の入物の形を氣にする程、細かく尖つた神經を持つてはゐないのであつた。

僕が主人夫婦、いや、夫婦にはまだなつてゐなかつた、いやいや、矢張夫婦と云ひたい、主人夫婦から目を離してゐたのは、座敷に背を向けて、暮れて行く庭の方を見ながら、物を考へてゐた間だけであつた。座敷を見てゐる間は、僕はどうしても二人から目を離すことが出来なかつた。客が皆飲食をしても、二人は動かずにちつとしてゐる。袴の襷を崩さずに、前屈みになつて据わつた儘、主人は誰に話をするでもなく、正面を向いて目を据ゑてゐる。太郎は傍に引き添つて、退屈らしい顔もせず、何があつても笑ひもせずに、をりをり主人の裾を横から覗いて、機嫌を窺ふやうにしてゐる。

僕は障子のはづしてある柱に背を寄せ掛けて、敷居の上にしやがんで、海苔卷の鮓を頬張りながら、外を見てゐる振をして、實は絶えず飾磨屋の様子を見てゐる。一體僕は兎賊と習慣と種々な關係から、どこに出ても傍觀者にな

り勝である。西洋にゐた時、一頃大そう心易く附き合つた爺いさんの學者があつた。その人は不治の病を持つてゐるので、生涯無茶で暮した人である。その位だから舞踏なんぞをしたことはない。或る時舞踏の話が出て、傍の一人が僕に舞踏の社交に必要なのを説明して、是非格古をしろと云ふと、今一人が舞踏を未開時代の遺俗だとしての觀察から、可笑しいアネクドット交りに舞踏の弊害を列べ立てて攻撃をした。

その時爺いさんは黙つて聞いてしまつて、さてかう云つた。「わたくしは御存じの體ですから、舞踏なんぞをしたことはありません。自分の出來ない舞踏を、人のしてゐるのを見ます度に、なんだかそれをしてゐる人が人間ではないやうな、神のやうな心持がして、只目を瞬つて視てゐるばかりでございますよ」と云つた。爺いさんのかう云ふ時、顔には微笑の淺い影が浮んでゐたが、それが決して冷冽な嘲の微笑ではなかつた。僕は生れながらの傍觀者と云ふことに就いて、深く深く考へて見た。僕には不治の病はない。僕は生れながらの傍觀者である。子供に交つて遊んだ初から大人になつて社交に尊卑種種の集會に出て行くやうになつた後まで、どんなに感興の涌き立つた時も、僕はその渦卷に

田川へ投げ込んだつて、僕は今見たその風采ほど意外には思はなかつたかも知れない。

飾磨屋は一體どう云ふ男だらう。錯雜した家族的關係やなんか、新聞に出たこともあり、友達の噂話で耳に入つたこともあつたが、僕はそんな事に興味を感じないので、格別心に留めずにしまつた。併し此人が何かの原因から煩悶した人若くは今もしてゐる人だと云ふことは疑がないらしい。大抵の人は煩悶して焼け

になつて、豪遊をするとなつて、きつと強烈な官能的受用を求めて、それに依つて意識をぼかしてゐようとするものである。さう云ふ人は躁狂に近い態度にならなくてはならない。飾磨屋はどうもそれとは違ふやうだ。一體あの沈鬱なやうな態度は何に根ざしてゐるだらう。あの目の血走つてゐるのも、事によつたら酒と色とに

夜を更かした爲めではなくて、深い物思に夜を穩に眠ることの出来なかつたためではあるまいか。強ひて推察して見れば、この百物語の催しなんども、主人は馬鹿げた事だと云ふことを飽くまで知り抜いてゐて、そこへ寄つて来る客の、或は酒食を食ふ念に驅られて來たり、或はまた迷信の霧に理性を鎖されてゐて、こはい物見たさの癖に好奇心に動かされて來たりす

るのを、あの血絲の通つてゐる、マリシヨオな、デモニツクなやうにも見れば見られる目で、冷かに見てゐるのではあるまいか、こんな想像が一時浮んで消えた跡でも、僕は考へれば考へるほど、飾磨屋と云ふ男が面白い研究の對象になるやうに感じた。

僕はかう云ふ風に、飾磨屋と云ふ男の事を考へると同時に、どうも此男に附いてゐる女の事を考へずにはゐられなかつた。

飾磨屋の馴染は太郎だと云ふことは、もう全國に知れ渡つてゐる。併しそれよりも深く人心に銘記せられてゐるのは、太郎が東京で最も美しい藝者だと云ふ事であつた。尾崎紅葉君が頬杖を衝いた寫眞を寫した時、あれは太郎の眞似をしたのだと、みんなが云つたほど、太郎の寫眞は世間に廣まつてゐたのである。その紅葉君で思ひ出したが、僕は此藝者をけふ始めて見たのではない。

此時より二年程前かと思ふ。湖月に宴會があつて行つて見ると、紅葉君はじめ、硯友社の人達が、客の中で最多數を占めてゐた。床の間に梅と水仙の生けてある頃の寒い夜が、もう大ぶ更けてゐて、紅葉君は火鉢の傍へ、脇枕をして寐てしまつた。尤も紅葉君は折々狸寐入をする人

であつたから、本當に寝てゐたかどうだか知らない。僕はふいと床の間の方を見ると、一座は大抵好物を着てゐるのに、黒二重の紋付と云ふ異様な出立をした長田和清君が床柱に倚り掛かつて、下太りの血色の好い顔をして、自分の前に据わつてゐる若い藝者と話をしてゐた。その藝者は少し體を屈めて据わつて、沈んだ調子の靜かな聲で、只の娘らしい話振をしてゐたが、島田に結つた髪や、頬のふつくりした顔が、いかにも可哀らしいので、僕が傍の人に名を聞いて見たら、君まだ太郎を知らないのですかと、その人がさきも驚いたやうな返事をした。

太郎が藝者らしくないと云ふ感じは、その時から僕にはあつたのだが、けふ見れば大ぶ變つてゐる。それでも矢張り藝者らしくはない。先きの無邪氣な、娘らしい處はもうなくなつて、その時つつましい中にも始終見せてゐた笑顔が、今はめつたに見られさうにもなくなつてゐる。一體あんなに飽くまで身綺麗にして、巧者に着物を着こなしてゐるのに、なぜ藝者らしく見えな

いのだらう。そんならあの姿が意氣な奥様らしいと云はうか。それも適當ではない。どうも僕には欠張つききはひつた時の第一の印象が付き纏つてゐてならない。それはふと見て病人と看

にしゃがんで云つた。「今あつちの座敷で辨當を上げてゐなすつた依田先生が、もう怪談はお預けにして置いて歸ると云はれたので、飾磨屋さんは見送りに立つたのです。もう暑くはありませぬから、これから障子を立てさせて、狭くても皆さんにここへ集まつて貰つて、怪談を始めさせるのださうです」と云つた。僕はさつき飾磨屋を始めて見たとき、あの沈鬱なやうな表情に氣を附け、それからこの男の瞬きもせず、ぢつとして据わつてゐるのを、稍久しく見て、始終なんだか人を馬鹿にしてゐるのではないかといふやうな感じを心の底に持つてゐた。此感じが鋭くなつて、一刹那あの目をデモニツクだとさへ思つたのである。さうであるのに、この感じが、今依田さんを送りに立つたと云ふだけの事を、薮君の話に聞いて、なんとなく少し和げられた。僕は薮君には、只自分もそろそろ歸らうかと思つてゐると云ふことを告げた。僕は最初に、百物語だと云つて、どんな事をするだらうかと思つた好奇心も、催主の飾磨屋がどんな人物だらうかと思つた好奇心も、今は大抵満足させられてしまつて、此上雇はれた話家の口から、古い怪談を聞かうと云ふ希望は少しも無くなつてゐたからである。薮君は留め

ようともしなかつた。

改まつて主人に暇乞をしなくてはならないやうな席でもなし、集まつた客の中には、外に知人もなかつたのを幸に、僕は黙つて起つて、舟から出るとき取り換へられた、齒の斜に耗らされた古下駄を穿いて、ぶらりとこの怪物屋敷を出た。少し目の慣れるまで、歩き廻んだ夕闇の田圃道には、道端の草の蔭で、蟬が微かに鳴き出してゐた。

\* \* \* \* \*

二三日立つてから薮君に逢つたので、「あれからどうしました」と僕が聞いたら、薮君がかう云つた。「あなたのお歸りになつたのは、丁度好い引上時でしたよ。暫く談を聞いてゐるうちに、飾磨屋さんがゐなくなつたので聞いて見ると、太郎を連れて二階へ上がつて、蚊屋を吊らせて寐たと云ふぢやありませんか。失禮な事をして構はないと云ふやうな人ではないのですが、無頓着なので、そんな事をするのですね」と云つた。

琥珀枕 (『歌日記』の「無名草」より)

琥珀のまくら  
人夢に來ず  
朝日あくれば  
苔に花ちる  
明鏡の塵  
拂ふものうく  
髻のみだれを  
春の風ふく

ふみ (『歌日記』の「無名草」より)

はじめて讀めば  
みこゑさやかに  
ひびくなり  
ふみのうちゆ  
ここに相見る  
人や見し  
くりかへし  
絶えにけり  
ふたたび三度  
讀めばみ聲は  
いづくゆか吹く  
我夏瘦の  
肌に染む



身を投じて、心から楽しんだことがない。僕は人生の活劇の舞臺にゐたことはあつても、役らし役をしたことがない。高がスタチストなのである。さて舞臺に上らない時は、魚が水に住むやうに、傍観者が傍観者の境に安んじてゐるのだから、僕はその時尤も其所を得てゐるのである。さう云ふ心持になつてゐて、今飾磨屋と云ふ男を見てゐるうちに、僕はなんだか他郷で故人に逢ふやうな心持がして來た。傍観者が傍観者を認めたやうな心持がして來た。

僕は飾磨屋の前生涯を知らない。あの男が少壯にして鉅萬の富を譲り受けた時、どう云ふ志望を懷いてゐたか、どう云ふ活動を試みたか、それは僕に語る人がなかつた。併し彼が藝人附合を盛んに出して、今紀文と云はれるやうになつてから、もう餘程の年月が立つてゐる。察するに飾磨屋は僕のやうな、生れながらの傍観者ではなかつただらう。それが今は慥かに傍観者になつてゐる。併しどうしてなつたのだらうか。よもや西洋で僕の師友にしてゐた學者のやうな、オルガニツクな缺陷が出来たのではあるまい。さうして見れば飾磨屋は、どうかした場合に、どうかした無垢の創痕を受けてそれが癒えずにのる爲めに傍観者になつたので

はあるまいか。

若しさうだとすると、その飾磨屋がどうして今宵のやうな催しをするのだらう。世間にはもう飾磨屋の破産を云々するものもある。豪遊の名を一時に擲にしてから、もう大ぶ久しくなるのだから、内證は或はさうなつてゐるかも知れない。それでゐて、こんな催しをするのは、彼が忽ち富豪の主人になつて、人を凌ぎ世に傲つた前生活の精力ではあるまいか。その精力に任せて、彼は依然こんな事をして、丁度作家が同時に批評家の眼で自分の作品を見る様に、過ぎ去つた榮華のなごりを、現在の傍観者の態度で見えてゐるのではあるまいか。

僕の考は又一轉して太郎の上に及んだ。あれは一體どんな女だらう。破産の噂が、殆ど別な世界に栖息してゐると云つて好い僕なんぞの耳にはひる位であるから、惻惻らしいあの女がそれに氣が附かずにある筈はない。なぜ死期の近い病人の體を強が離れるやうに、あの女は離れないだらう。それに今の飾磨屋の性質はどうだ。傍観者ではないか。傍観者は女の好んで擇ぶ相手ではない。なぜと云ふに、生活だの生活の喜だのと云ふものは、傍観者の傍では求められないからである。そんなら一體ど

うしたと云ふのだらう。僕の頭には、又病人と看護婦と云ふ印象が浮んで來た。女の生涯に取つて、報酬を豫期しない看護婦になると云ふこと、しかもその看護を自己の生活の唯一の内容としてゐると云ふこと、偉大なる犠牲は又とあるまい。それも夫婦の義務の鎖に繋がれてゐて、イブセンの謂ふ幽霊に祟られてゐてすると云ふなら、別問題であらう。この場合にそれはない。父戀愛の欲望の鞭でむちうたれてゐてすると云ふなら、それも別問題であらう。この場合に果してそれがあらうか、少くも疑を挟む餘地がある。さうして見ると、財産でもなく、生活の喜でもなく、義務でもなく、戀愛でもないとして考へて、僕はあの女の捧げる犠牲のいよいよ大さくなるのに驚かすにはゐられなかつたのである。

僕はこんな事を考へて、酢を食つてしまつた跡に、生姜のへがしたのが残つてゐる半紙を手についた儘、ぼんやりして矢張り二人の方を見てゐた。その時一人の世話人らしい男が、飾磨屋の傍へ來て何か囁くと、これまで殆ど人形のやうに動かずにゐた飾磨屋が、つと起つて奥にはひつた。太郎もその跡に引添つてはひつた。暫くすると部君が僕のゐる所へ來て、縁側

は、ことわるまでもない。  
「岡田さんを御覽なさい」と云ふ詞が、屢々お上さんの口から出る。

「どうせ僕は岡田君のやうなわけには行かないさ」と先を越して云ふ學生がある。此の如くにして岡田はいつとなく上條の標準的下宿人になつたのである。

岡田の日々の散歩は大抵、道筋が極まつてゐた。寂しい無縁坂を降りて、藍染川のお齒黒のやうな水の流れ込む不忍の池の北側を過つて、上野の山をぶらつく。それから松源や雁鍋のある廣小路、狭い賑やかな仲町を過つて、湯島天神の社内に這入つて、陰氣な臭橋寺の角を曲がつて歸る。併し仲町を右へ折れて、無縁坂から歸ることもある。これが一つの道筋である。或る時は大學の中を抜けて赤門に出る。鐵門は早く鎖されるので、患者の出入する長屋門から這入つて抜けるのである。後に其頃の長屋門が取り拂はれたので、今春木町から衝き當る處にある、あの新しい黒い門が出来たのである。赤門を出てから本郷通りを歩いて、栗餅の曲橋をしてゐる店の前を通つて、神田明神の境内に這入る。そのころまで目新しかつた目金橋へ降りて、柳原の片側町を少し歩く。それからお成道

へ戻つて、狭い西側の横町のどれかを穿つて、矢張臭橋寺の前に出る。これが一つの道筋である。これより外の道筋はめつたに歩かない。

此散歩の途中で、岡田が何をするかと云ふと、ちよいちよい古本屋の店を覗いて歩く位のものであつた。上野廣小路と仲町との古本屋は、その頃のが今も二三軒残つてゐる。お成道にも當時その儘の店がある。柳原のは全く廢絶してしまつた。本郷通のは殆ど皆場所も持主も代つてゐる。岡田が赤門から出て右へ曲ることのめつたにないのは、一體森川町は町幅も狭く、窮屈な處であつたからでもあるが、當時古本屋が西側に一軒しかなかつたのも一つの理由であつた。

岡田が古本屋を覗くのは、今の詞で云へば、文學趣味があるからであつた。併しまだ新しい小説や脚本は出てゐぬし、抒情詩では子規の俳句や、鐵幹の歌の生れ先であつたから、誰でも唐紙に摺つた花月新誌や白紙に摺つた桂林一枝のやうな雑誌を読んで、槐雨、夢香なんぞの香奩體の詩を最も氣の利いた物だと思ふ位の事であつた。僕は花月新誌の愛讀者であつたから、記憶してゐる。西洋小説の翻譯と云ふものは、あの雑誌が始めて出したのである。なんでも西洋の或る大學の學生が、歸省する途中で殺

される話で、それを談話體に譯した人は神田孝平さんであつたと思ふ。それが僕の西洋小説と云ふものを讀んだ始であつたやうだ。さう云ふ時代だから、岡田の文學趣味も漢學者が新しい世間の出来事を詩文に書いたのを、面白がつて讀む位に過ぎなかつたのである。

僕は人附合ひの餘り好くない性であつたら、學校の構内で好く逢ふ人にでも、用事ななくては話をしない。同じ下宿屋にゐる學生なんぞには、帽を脱いで禮をするやうなことも少かつた。それが岡田と少し心安くなつたのは、古本屋が媒をしたのである。僕の散歩に歩く道筋は、岡田のやうに極まつてはゐなかつたが、脚が達者で縱横に本郷から下谷、神田を掛けて歩いて、古本屋があれば足を止めて見る。さう云ふ時に、度々岡田と店先で落ち合ふ。一好く古本屋で出くはすぢやないかと云ふやうな事を、どつちからか言ひ出したのが、親しげに物を言つた始である。

其頃神田明神前の坂を降りた曲角に、釣なりに縁臺を出して、古本を曝してゐる店があつた。そこで或る時僕が唐本の金瓶梅を見附けて亭主を問ふと、七圓だと云つた。五圓に負けてくれと云ふと、先刻岡田さんが六圓なら買

# 雁

## 臺

古い話である。僕は偶然それが明治十三年の出来事だと云ふことを記憶してゐる。どうして年をはつきり覚えてゐるかと云ふと、其頃僕は東京大學の鐵門の眞向ひにあつた、上條と云ふ下宿屋に、此話の主人公と壁一つ隔てた隣同士になつて住んでゐたからである。その上條が明治十四年に自火で焼けた時、僕は焼け出された一人であつた。その火事のあつた前年の出来事だと云ふことを、僕は覚えてゐるからである。

上條に下宿してゐるものは大抵露科大學の學生ばかりで、其外は大學の附屬病院に通ふ患者なんぞであつた。大抵どの下宿屋にも特別に幅を利かせてゐる客があるもので、さう云ふ客は第一金廻りが好く、小氣が利いてゐて、お上さんが箱火鉢を控へて据わつてゐる前の廊下を通るときは、きつと聲を掛ける。時々其箱火鉢の向側にしやがんで、世間話の一つもする。部屋で酒盛をして、わざ／＼肴を拵へさせた

り何かして、お上さんに面倒を見させ、我儘をするやうでゐて、實は帳場に得の附くやうにする。先づさつとかう云ふ性の男が尊敬を受け、それに乘じて威福を擅にすると云ふのが常である。然るに上條で幅を利かせてゐる、僕の隣の男は頗る趣を殊にしてゐた。

此男は岡田と云ふ學生で、僕より一學年若いのだから、兎に角もう卒業に手が届いてゐた。岡田がどんな男だと云ふことを説明するには、その手近な、際立つた性質から語り始めなくてはならない。それは美男だと云ふことである。色の蒼い、ひよろひよろした美男ではない。血色が好くて、體格ががつしりしてゐた。僕はあんな顔の男を見たことが殆ど無い。強ひて求めれば、大分あの頃から後になつて、僕は青年時代の暗い眉山と心安くなつた。あのとうとう窮境に陥つて悲慘の最期を遂げた文士の川上である。あれの青年時代が一寸岡田に似てゐた。尤も當時競漕の選手になつてゐた岡田は、體格では廻かに川上なんぞに優つてゐたの

である。

容貌は其持手を何人にも推薦する。併しそれほどばかりでは下宿屋で幅を利かすことは出来ない。そこで性行はどうかと云ふと、僕は當時岡田程均衡を保つた書生生活をしてゐる男は少からうと思つてゐた。學期毎に試験の點數を争つて、特待生を狙ふ、勉強家ではない。遣るだけの事をちやんと遣つて、級の中位より下には下らずに進んで來た。遊ぶ時間は極つて遊ぶ。夕食後に必ず散歩に出て、十時には間違なく歸る。日曜日には舟を漕ぎに行くか、うでな

いときは遠足をする。競漕前に選手仲間と向島に泊り込んでゐるとか、暑中休暇に故郷に歸るとかの外は、壁隣の部屋に主人のゐる時刻と、留守になつてゐる時刻とが狂はない。誰でも時計を號砲に合せることを忘れた時には岡田の部屋へ叩ひに行く。上條の帳場の時計も折々岡田の懐中時計に據つて匡されるのである。周囲の人の心には、久しく此男の行動を見てゐればゐる程、あれは信賴すべき男だと云ふ感じが強くなる。上條のお上さんがお世辭を言はない、破格な金遣ひをしない岡田を褒め始めたのは、此信賴に本づいてゐる。それには月々の勘定をきちんとすると云ふ事實が與かつて力あるの



の方へ向いて出掛けて、例の格子戸の家の前近く来た時、先きの日の湯歸りの女の事が、突然記憶の底から意識の表面に浮き出したので、その家の方を一寸見た。壁に竹を打ち附けて、横に二段ばかり細く削った木を渡して、それを夢で巻いた脇掛窓がある。その窓の障子が一尺ばかり明いてゐて、卵の殻を伏せた萬年青の鉢が見えてゐる。こんな事を、幾分かの注意を拂つて見た爲めに、歩調が少し緩くなつて、家の眞前に來掛かるまでに、數秒時間の餘裕を生じた。そして丁度眞前に來た時に、意外にも萬年青の鉢の上の、今まで鼠色の闇に鎖されてゐた背景から、白い顔が浮き出した。しかもその顔が岡田を見て微笑んでゐるのである。

それからは岡田が散歩に出て、此家の前を通る度に、女の顔を見ぬことは殆ど無い。岡田の空想の領域に折々此女が闖入して來て、次第に我物顔に立ち振舞ふやうになる。女は自分の通るのを待つてゐるのだらうか、それともなんの意味もなく外を見てゐるので、偶然自分と顔を合せることになるのだらうかと云ふ疑問が起る。そこで湯歸りの女を見た日より前に、溯つて、あの家の窓から女が顔を出してゐたことがあつたか、どうかと思つて考へて見るが、無縁坂

の片側町で一番騒がしい爲立物師の家の隣は、いつも綺麗に掃除のしてある、寂しい家であつたと云ふ記念の外には、何物も無い。どんな人が住んでゐるだらうかと疑つたことは慥かにあるやうだが、それさへなんとも解決が附かなかつた。どうしてもあの窓はいつも障子が締まつてゐたり、簾が降りてゐたりして、その奥はひっそりしてゐたやうである。さうして見ると、あの女は近頃外に氣を附けて、窓を開けて自分の通るのを待つてゐることになつたらしいと、岡田はとうとう判斷した。

通る度に顔を見合せて、その間々にはこんな事を思つてゐるうちに、岡田は次第に窓の女に親しくなつて、二週間も立つた頃であつたか、或る夕方側の窓の前を通る時、無意識に帽を脱いで禮をした。其時微白い女の顔がさつと赤く染まつて、寂しい微笑の顔が華やかな笑顔になつた。それから岡田は極まつて窓の女に禮をして通る。

夢

岡田は廣初新誌が好きで、中にも大鐵樺傳は全文を暗誦することが出来る程であつた。それで餘程前から武藝がして見たいと云ふ願望を持

つてゐたが、つい機會が無かつたので、何にも手を出さずにゐた。近年競漕を始めてから、熱心になり、仲間へ推されて選手になる程の進歩をしたのは、岡田の此一面の意志が發展したのであつた。

同じ廣初新誌の中に、今一つ岡田の好きな文章がある。それは小青傳であつた。あの傳に書いてある女、新しい詞で形容すれば、死の天使を闇の外に待たせて置いて、徐かに脂肪の粒を凝すまでも云ふやうな、美しさを性命にしてゐるあの女が、どんなにか岡田の同情を動かしただであらう。女と云ふものは岡田の爲めには、只美しい物、愛すべき物であつて、どんな境遇にも安んじて、その美しさを愛らしさを護持してゐなくてはならぬやうに感ぜられた。それには平生香體の詩を讀んだり、sentimental な、feminine な明清の所謂才人の文章を讀んだりして、知らず識らずの間にその影響を受けてゐた爲めもあるだらう。

岡田は窓の女に會釋をするやうになつてから餘程久しくなつても、其女の身の上を探つて見ようとしなかつた。無論家の様子や、女の身なりで、園物だらうとは察した。併し別段それを不快にも思はない。名も知らぬが、強ひ

ふと仰やいましたが、おことわり申したのです」と云ふ。偶然僕は工面が好かつたので言値で買った。二三日立つてから、岡田に逢ふと、向うからかう云ひ出した。

「君はひどい人だね。僕が切角見附けて置いた金瓶を買つてしまつたぢやないか。」

「さうさうな君が値を附けて折り合はなかつたと、本屋が云つてゐたよ。君欲しいのなら譲つて上げよう。」

「なに。隣だから君の讀んだ跡を貸して貰へば好いさ。」

僕は喜んで承諾した。こんな風で、今迄長い間壁隣に住まひながら、交際せずにゐた岡田と僕は、往つたり來たりするやうになつたのである。

## 貳

その頃から無縁坂の南側は岩崎の邸であつたが、まだ今のやうな鏡々たる土塀で圍つてはなかつた。きたない石垣が築いてあつて、苔蒸した石と石との間から、商榘や杉葉が覗いてゐた。あの石垣の上あたりは平地だか、それとも小山のやうにでもなつてゐるか、岩崎の邸の中に這入つて見たことのない僕は、今でも知らな

いが、兎に角當時は石垣の上の所に、雜木が生えたい程生えて、育ちたい程育つてゐるのが、往來から根まで見えてゐて、その根に茂つてゐる草もめつたに刈られることがなかつた。

坂の北側はけちな家が軒を並べてゐて、一番體裁の好いのが、板塀を繞らした、小さいもた屋、その外は手職をする男なんぞの住ひであつた。店は荒物屋に烟草屋位しななかつた。中に往來の人の目に附くのは、甚縫を教へてゐる女の家で、晝間は格子窓の内に大勢の娘が集まつて爲事をしてゐた。時候が好くて、窓を明けてゐるときは、我々學生が通ると、いつもベ

ちやくちや盛んにしやべつてゐる。娘共が、皆顔を舉げて往來の方を見る。そして又話をし續けたり、笑つたりする。その隣に一軒格子戸を綺麗に拭き入れて、上がり口の叩きに、御影石を塗り込んだ上へ、折々夕方に通つて見ると、打水のしてある家があつた。寒い時は障子が締めである。暑い時は竹簾が卸してある。そして爲立物師の家の賑やかな爲めに、此家はいつも閑静立つてひっそりしてゐるやうに思はれた。

此話の出來事であつた年の九月頃、岡田は郷里から歸つて間もなく、夕食後に例の散歩に出て、加州の御殿の古い建物に、假に解剖室が

置いてあるあたりを過ぎて、ぶらぶら無縁坂を降り掛かると、偶然一人の湯歸りの女が彼爲立物師の隣の、寂しい家に這入るのを見た。もう時候が大が秋らしくなつて、人が涼みにも出頃なので、一時人通りの絶えた坂道へ岡田が通り掛かると、丁度今例の寂しい家の格子戸の前まで歸つて、戸を明けようとしてゐた女が、岡田の下駄の音を聞いて、ふいと格子に掛けた手を停めて、振り返つて岡田と顔を見合せたのである。

紺縮の單物に、黒縋子と茶獻上との腹合せの帯を締めて、鐵い左の手に手拭やら石鹺籠やら褌袋やら海綿やらを、細かに編んだ竹の籠に入れたのを懈げに持つて、右の手を格子に掛けた儘振り返つた女の姿が、岡田には別に深い印象をも與へなかつた。併し結び立ての銀香返しの髪が蟬の羽のやうに薄いのと、鼻の高い、細長い、稍寂しい顔が、どこの加減か顔から頬に掛けて少し局たいやうな感じをさせるのとが日に留まつた。岡田は只それ丈の利那の知覺を聞取したと云ふに過ぎなかつたので、無縁坂を降りてしまふ頃には、もう女の事は綺麗に忘れてゐた。

併し二日ばかり立つてから、岡田は又無縁坂

い性質の未造は、わざわざ探るともなしに、此嬢が玉と云ふ子で、母親がなく、親爺と二人暮らしてゐると云ふ事、その親爺は秋葉の原に館細工の宋吉を冊してゐると云ふ事などを知つた。そのうちに此裏店に革命的變動が起つた。例の簷下に引き入れてあつた屋臺が、夜通つて見てもなくなつた。いつもひつそりしてゐた家とその周囲とへ、當時の流行語で言ふと、開化と云ふものが襲つても來たのか、半分こはれて、半分はね返つてゐたとぶ板が張り替へられたり、入口の模様替が出來て、新しい格子戸が立てられたりした。或る時入口に靴の脱いでゐるのを見た。それから間もなく、此家の戸口に新しい標札が打たれたのを見ると、巡查何の何某と書いてあつた。未造は松永町から、仲徒町へ掛けて、色々な買物をして廻る間に、又探るともなしに、館屋の爺いさんの内へ侵入のあつた事を憶めた。標札にあつた巡查がその増なのである。お玉を目の球よりも大切にしていゐた爺いすさんは、こはい顔のおまはりさんに娘を渡すのを、天狗にでも撈はれるやうに思ひ、その増殿が自分の内へ這入り込んで來るのを、此上もなく窮屈に思つて、平生心安くする誰彼に相談したが、一人もことわつてしまへとはつきり云

つてくれるものがなかつた。それ見た事か。こつちとらが宜い所へ世話しようと思ふのに、一人娘だから出されぬのなんのと、面倒な事を言つてゐて、とうとうそんなことわり憎い増さんが來るやうになつたと云ふものもある。お前方の方で厭なのなら、遠い所へでも越すより外あるまいが、相手がおまはりさんで見ると、すぐにどこへ越したと云ふことを調べて、その先へ掛け合ふだらうから、どうも逃げ果せることは出來まいと、威すやうに云ふものもある。中にも一番物分かりの好いと云ふ評判のお上さんの話がかうだ。「あの子はあるない器量で、お師匠さんも藝が出來さうだと云つて褒めてお出だから、早く藝者の下地子にお出しと、わたしがかう云つたぢやありませんか。一人もこのおまはりさんと來た日には、一軒一軒見て廻るのだから、子柄の好いのを内に置くと、いやおうなしに連つて行つてしまひなさん。どうもさう云ふ方に見込まれたのは、不運だとあきらめるより外、爲方がないね」と云ふやうな事を言つたさうだ。未造が此噂を聞いてから、やつと三月ばかりも立つた頃であつたらう。館細工屋の爺いさんの家に、或る朝戸が締まつてゐて、戸に「貸家差配松永町西のはづれにあり」と書いて

張つてあつた。そこで又近所の噂を、買物の序に聞いて見ると、おまはりさんには國に女房も子供もあつたので、それが出し抜けに替ねて來て大騒ぎをして、お玉は井戸へ身を投げると云つて飛び出したのを、立聞をしてゐた隣の上さんがやうやう止めたと云ふことであつた。おまはりさんが増に來ると云ふ時、爺いさんは色色の人に相談したが、その相談相手の中には一人も爺いさんの法律顧問になつてくれるものになかつたので、爺いさんは戸籍がどうなつてゐるやら、どんな肩がしてあるやら、一切無頭屑でゐたのである。巡查が聲を括つて、手續は萬事己がするから好いと云ふのを、少しも疑はなかつたのである。その頃松永町の北角と云ふ雜貨店に、色の白い圓顔で腰の短い娘がゐて、學生は「噫なし」と云つてゐた。この嬢が未造にかうぶつた。「本當にたあちゃんば可哀さうでございませうねえ。正直な子だもんですから、全くのお増さんだと思つてゐたのに、おまはりさんの方では、下宿したやうな積になつてゐたと云ふのですもの」と云つた。坊主頭の北角の親爺が傍から口を出した。「爺いさんも氣の毒ですよ。町内のお方にお恥かしめて、此儘にしてはゐられないと云つて、西島越の方へ越して



て知らうともしない。標札を見たら、名が分かるだらうと思つたこともあるが、窓に女のある時は女に遠慮をする。さうでない時は近慮の人や、往來の人の人目を憚る。とうとう庇の蔭になつてゐる小さい木札に、どんな字が書いてあるか見ずにゐたのである。

## 肆

窓の女の種性は、實は岡田を主人公にしながらはならぬ此話の事件が過去に屬してから聞いたのであるが、都合上ここでざつと話すことにする。

まだ大學醫學部が下谷にある時の事であつた。灰色の瓦を漆喰で塗り込んで、基盤の目のやうにした壁の所々に、腕の太さの木を壁に竝べて嵌めた窓の明いてゐる、藤堂屋敷の門長屋が寄宿舎になつてゐて、學生はその中で、ちと氣の毒な申分だが、野獸のやうな生活をしてゐた。勿論今はあんな窓を見ようと思つたつて、僅かに丸の内の櫓に残つてゐる位のもので、上野の動物園で獅子や虎を飼つて置く檻の格子なんぞは、あれよりは廻かにきやしやに出来てゐる。

寄宿舎には小使がゐた。それを學生は外使

に使ふことが出来た。白木綿の兵児帯に、小倉袴を穿いた學生の四物は、大抵揃まつてゐる。所謂「羊羹」と「金平糖」とである。羊羹と云ふのは煉芋、金平糖と云ふのははじけ豆であつたと云ふことも、文明史上の參考に書き残して置く價値があるかも知れない。小使は一度の使賃として二錢貰ふことになつてゐた。

この小使の一人に末造と云ふのがゐた。外のは鬚の栗の殻のやうに伸びた中に、口があんごり開いてゐるのに、此男はいつも綺麗に剃つた鬚の痕の青い中に、唇が堅く結ばれてゐた。小倉服も外のは汚れてゐるに、此男のはきつぱりしてゐて、どうかすると唐棧か何かを着て前掛をしてゐるのを見ることがあつた。

僕にいつ誰が好て贈をしたか知らぬが、金がない時は末造が立て替へてくれると云ふことを僕は聞いた。勿論五十錢とか一圓とかの金である。それが次第に五圓貸す十圓貸すと云ふやうになつて、借る人に證文を書かせる。書替をさせる。とうとう一人前の高利貸になつた。一體元手はどうしたのか。まさか二錢の使賃を貯蓄したのでもあるまいが、一匹の人間が持つてゐる丈の精力を一事に傾注すると、實際不可能な事はなくなくなるかも知れない。

兎に角學校か下谷から本郷に遷る頃には、もう末造は小使ではなかつた。併しその頃池の端へ越して來た末造の家へは、無分別な學生の出入が絶えなかつた。

末造は小使になつた時三十を越してゐたから、貧乏世帯ながら、妻もあれば子もあつたのである。それが高利貸で成功して、池の端へ越してから後に、醜い、口やかましい女房を嫌く思ふやうになつた。

その時末造が或る女を思ひ出した。それは自分が練堀町の裏からせまい露地を抜けて大學へ通勤する時、折々見たことのある女である。どぶ板のいつもこはれてゐるあたりに、年中戸が半分締めてある、薄暗い家があつて、夜その前を通つて見れば、簾下に車の附いた屋臺が挽き込んであるので、さうでなくても狭い露地を、體を斜にして通らなくてはならない。最初末造の注意を惹いたのは、此家に稽古の味線の音のすることであつた。それからその三味線の音の主が、十六七の可哀らしい娘だと云ふことを知つた。貧しさうな家には似ず、此娘がいつも身綺麗にしてゐて、着物も小ざつぱりとした物を着てゐた。戸口にゐても、人が通るとすぐ薄暗い家の中へ引つ込んでしまふ。何事にも注意深

さうと思つて、自分も一しよに寐入つてしまつて、大きな口を開いて、女らしくない癖をしてゐる。亭主が夜賃金の利廻しを考へて、いつまでも眠らずにゐるのは常の事なので、女房は何時まで亭主が目を開いてゐようが、少しも氣になんぞはせぬのである。末造は腹のうちに可笑しくて溜まらない。考へつつ女房の顔を見てかう思つた。「まあ、同じ女でもこんな面をしてゐるものもある。あのお玉は大ぶ久しく見ないが、あの時はまだ子供上がりであつたのに、おとなしい中に意氣な處のある、震ひ附きたいやうな顔をしてゐた。さぞ此頃は女振を上げてゐるだらうな。顔を見るのが樂みだな。かかあ奴。不氣で寐てけつかる。己だつて、いつも金のことばかり考へてゐるのだと思ふと、大違ひだぞ。おや。もう蚊が出やがつた。下谷はこれだから厭だ。そろそろ蚊屋を吊らなくちやあ、かかあは好いが、子供が食はれるだらう。」こんな事を思つては、又家の事を考へて見る。どうか、かうか隣案に到着したらしく思つたのは、一時過ぎであつた。それはかうである。「あの池の端の家は、人は見晴しがあつて好いなんぞと云ふかも知れないが、見晴しは此家で澤山だ。家賃が安いが、借家となると何やかや手が掛かる。そ

れになんとなく開け廣げたやうな場所、人の目に着きさうだ。うつかり窓でもあけてゐて、子供を連れて仲町へ出掛けるかかあにでも見られようものなら面倒だ。無縁坂の方は陰氣なやうだが、學生が散歩に出て通る位より外に、人の餘り通らない處になつてゐる。一時に金を出して買ふのはおつくうなやうだが、木道具の好いのが使つてゐるわりに安いから、保険でも附けて置けばいつ賣ることになつても元値は取れると思つて安心してゐられる。無縁坂にしよう、しよう。己が夕方にでもなつて、湯にでも行つて、氣の利いた支度をして、かかあに好い加減な事を言つて、だまぐらかして出掛けるのだな。そしてあの格子戸を開けて、ずつと這入つて行つたら、どんな鹽梅だらう。お玉の奴め。猫か何かを膝につけて、さびしがつて待つてゐるのだ。着物なんぞはどうでもして遣る。待てよ。馬鹿な錢を使つてはならないぞ。質流れにだつて、立派なものがある。女一人に着物や頭の物の贅澤をさせるには、世間の奴のするやうな、馬鹿を盡さなくても好い。隣の福地さんなんぞは、己の内より大きな構をしてゐて、數寄屋町の藝者を連れて、池の端をぶら附いて、

書生さんを羨ましがらせて、好い氣になつてゐなさるが、内證は火の事だ。學者が聞いてあきれらあ。筆尖で旨い事をすりやあ、お店ものだつてお拂箱にならあ。おう、さうさう。お玉は三味線が弾けたつけ。爪弾で心意氣でも聞せてくれるやうだと好いが、巡査の上さんになつたより外に世間を知らずにゐるのだから、駄目だらうなあ。お笑ひなさるからいやだわとか、なんと云つて、弾けと云つても、なかなか弾かないだらうて。ほんになんに附けても、はにかみやあがるだらう。顔を赤くしてもぢもぢするに違ひない。己が始て行つた晩には、どうするだらう。」空想は縦横に馳騁して底止する所を知らない。彼此するうちに、想像が切れ切れになつて、白い肌がちらつく。囁きが聞える。末造は好い心持に寐入つてしまつた。傍に上さんは相變らず 癖をしてゐる。

## 陸

松原の目見えと云ふのは、末造が爲めには一の二の三であつた。一口に爪に火を點す杯とは云ふが、金を溜める人にはいろいろある。細かい所に氣を付けて、摩紙をふたに切つて置いて使つたり、用事を葉書で済ますために、顕微鏡

## 伍

行きましたよ。それでも子供衆のお得意のある所でなくては、元の商賣が出来ないと云ふので、秋葉の原へは出てゐるさうです。屋臺も一度賣つてしまつて、佐久間町の古道具屋の店に出てゐたのを、わけを話して取り返したと云ふことです。そんな事やら、引越やらで、随分掛かつた筈ですから、さぞ困つてゐますでせう。おまはりさんが國の女房や子供を干し上げて置いて、大きな顔をして酒を飲んで、上月でもない爺いさんに相手をさせてゐた間、まあ、一寸樂隠居になつた夢を見たやうなものですなと、頭をつるりと撫でて云つた。それから後、末造は爺屋のお玉さんの事を忘れてゐたのに、金が出来て段々自由が利くやうになつたので、ふいと又思ひ出したのである。

今では世間の廣くなつてゐる末造の事だから、手を廻して西島越の方を尋ねさせて見ると、柳盛座の裏の車屋の隣に、館細工屋の爺いさんのゐるのを突き留めた。お玉も娘でゐた。そこで或る大きい商人が妾に欲しいと云ふがどうだと、人を以て掛け合ふと、最初は妾になるのはいやだと云つてゐたが、おとなしい女だけに、とうとう親の爲めだと云ふので、松源で檀那にお目見えすると云ふ處まで話が運んだ。

金の事より外、何一つ考へたことのない末造も、お玉のありかを突き留めるや否や、まだ先方が承知するかせぬか知れぬうちに、自分で近所の借家を捜して歩いた。何軒も見た中で、末造の氣に入つた店が二軒あつた。一つは同じ池の端で、自分の住まつてゐる福地源一郎の邸宅の隣と、その頃名高かつた蕎麥屋の連玉庵との眞ん中位の處で、池の西南の隅から少し連玉庵の方へ寄つた、往來から少し引つ込めて立てた家である。四つ日垣の内に、高野槇が一本とちやぼ繪葉が二三本と植ゑてあつて、植木の間から、竹格子を打つた肘懸窓が見えてゐる。貸家の札が張つてあるので、這入つて見ると、まだ人が住んでゐて、五十ばかりの婆あさんが案内をして中を見せてくれた。その婆あさんが問はずがたりに云ふには、主人は中國邊の或る大名の家老であつたが、廢藩になつてから、小使取りに大藏省の屬官を勤めてゐる。もう六十幾つとかになるが、綺麗好きで、東京中を歩いて、新築の借家を捜して借りるが、少し古びて来ると、すぐ引き越す。勿論子供は別になつてしまつてから久しくなるので、家を荒すやうな事はないが、どう

せ住んでゐるうちに古くなるので、障子の張替もしなくてはならず、疊の表も換へなくてはならない。そんな面倒になる丈せぬやうにして、さつさと引き越すのだと云ふのである。婆あさんはそれが厭でならぬので、知らぬ人にも夫の壁訴訟をする。「この内なんぞもまだこんなに綺麗なのに、もう越すと申すのでございますよ」と云つて、内ぢゆうを細かに見せてくれた。どこからどこまで、可なり綺麗に掃除がしてある。末造は一寸好いと思つて、數金と家賃と差配の名とを、手帳に書き留めて出た。今一つは無縁坂の程にある小家である。それは札も何も出てゐなかつたが、賣りに出たのを聞いて見に行つた。持主は湯島も通しの質屋で、その隠居がついて、此間まで住んでゐたのが亡くなつたので、婆あさんは本店へ引き取られたと云ふのである。隣が裁縫の師匠をしてゐるので、少し騒がしいが、わざわざ隠居所に木なんぞを選んで立てたものゆゑ、どことなく住心地が好さうである。八口の格子戸から、花崗石を塗り込めた蹴きの庭まで、小ざつぱりと奥床しげに出来てゐる。末造は一呎床の上に寝轉んで、二つの中どれにしようかと考へた。傍には女房が子供を寐か



にして育てたお玉を、貧すれば鈍するのとやら云ふわけで、飛んだ不實な男の慰物にせられたのが、悔やしくて悔やしくてならないのだ。爲合せな事には、好い娘だと人も云つて下さるあの子だから、どうか堅氣な人に遣りたいと思つても、わたしと云ふ親があるので、誰も貰はうと云つてくれぬ。それでも團物や妾には、どんな事があつても出すまいと思つてゐたが、堅い檀那だと、お前さん方が仰やるから、お玉も來年は二十になるし、餘り臺の立たないうちに、どうかして遣りたさに、とうとうわたしは折れ合つたのだ。さうした大事なお玉を上げるのだから、是非わたしが一しよに出て、檀那にお目に掛からなくてはならぬ」と云ふのである。

此話を持ち込まれた時、末造は自分の思はくの少し違つて來たのを嫌う思つた。それはお玉を松源へ連れて來て貰つたら、世話をする婆あさんになる丈早く歸してしまつて、お玉と差向ひになつて樂まうと思つたあてがはづれさうになつたからである。どうも父親が一しよに來るとなると、意外に晴がましい事になりさうである。末造自身も一種の晴がましい心持はしてゐるが、それはこれまで抑へ抑へて來た欲望の縛を解く第一歩を踏み出さうと云ふ、門出の

よろこびの意味で、*leaving day* はそれには第一要件になつてゐた。ところがそこへ親父が出て來るとなると、その晴がましきの性質が丸で變つて來る。婆あさんの話に聞けば、親子共物堅い人間で、最初は妾奉公は厭だと云つて、二人一しよになつてこわつたのを、婆あさんが或る日娘を外へ呼んで、もう段々稼がれなくなるお父つきんに樂がさせたくはないかと云つて、いろいろに説き勧めて、とうとう合點させて、その上で親父に納得させたと云ふことである。それを聞いた時は、そんな優しい、おとなしい娘を手に入れることが出来るのかと心中竊かに喜んだのだが、それ程物堅い親子が揃つて來るとなると、松源での初對面はなんとなく埒が指父に見參すると云ふ風になりさうなので、その方角の變つた晴がましきは、末造の熱した頭に一杓の冷水を浴せたのである。

併し末造は飽くまで立派な實業家だと云ふ觸込を實にしなくてはならぬと思つてゐるので、先方へはおほ様な處が見せたさに、とうとう二人の支度を引き受けた。それにはお玉を手に入れた上では、どうせ親父の身の上も棄てては置かれぬのだから、只後ですることが先になるに過ぎぬと云ふ諦めも手傳つて、末造に決心させ

たのである。

そこで當前なら支度料幾らと云つて、纏まつた金を先方へ渡すのであるが、末造はさうはしない。身なりを立派にする道樂のある末造は、自分丈の爲立物をさせる家があるので、そこへ事情を打ち明けて、似附かはしい二人の衣類を眺めた。只寸法丈を世話を頼んだ婆あさんの手でお玉さんに問はせたのである。氣の毒な事には、この油斷のない、吝な末造の處置を、お玉親子は大そう善意に解釋して、現金を手に入れたぬのを、自分達が尊敬せられてゐるからだと思つた。

## 漆

上野廣小路は火事の少し所で、松源の焼けたことは記憶にないから、今もその座敷があるかも知れない。どこか靜かな、小さい一間をと眺へて置いたので、南向の玄關から上がつて、眞つ直に廊下を少し歩いてから、左へ這入る六疊の間に、末造は案内せられた。

印絆纏を着た男が、襷紙の大きな目覆を巻いてゐる最中であつた。

「どうも暮れてしまひますまでは夕日が入れますので」と、案内をした女中が説明をして置いて

がなくしては讀まれぬやうな字を書いたりするの  
は、どの人にも共通してゐる性質だらうが、そ  
れを絶学的に自己の生活の全範圍に及ぼして、  
眞に爪に火を點す人と、どこかに一つ穴を開け  
て、息を抜くやうにしてゐる人とがある。これ  
まで小説に書かれたり、芝居に爲組まれたりし  
てゐる守銭奴は、殆ど絶学的な奴ばかりのや  
うである。活きた金を溜める男には、實際さ  
うでないのが多い。吝な癖に、女には目がない  
とか、不思議に食著だけはするとか云ふのがそ  
れである。前にもちよつと話したやうであつた  
が、末造は小綺麗な身なりをするのが道樂で、  
まだ大學の小使をしてゐた時なんぞは、休日  
になると、お定まりの小倉の筒袖を脱ぎ棄てて、  
氣の利いた商人らしい着物に着換へるのであつ  
た。そしてそれを一種の樂みにしてゐた。學生  
どもが稀に唐棧づくめの末造に邂逅して、びつ  
くりすることのあつたのは、かうしたわけであ  
る。そこで末造には、此外にこれと云ふ道樂が  
ない。藝妓なんぞに掛かり合つたこともな  
ければ、料理屋を飲んで歩いたこともない。蓮  
玉で蕎麥を食ふ位が既に奢發の一つになつてゐ  
て、女房や子供は餘程前まで、かう云ふ時連れて  
行つて貰ふことが出来なかつた。それは女房

の身なりを自分の支度で吊り合ふやうにはして  
ゐなかつたからである。女房が何かねだると、  
末造はいつも「馬鹿を言ふな、手前なんぞは己  
とは違ふ、己は附合があるから、爲方なしにし  
てゐるのだ」と云つて撥ね附けたのである。そ  
の後大ぶ金が子を生んでからは、末造も料理屋  
へ出這入することがあつたが、これはおほ勢の  
寄り合ふ時に限つてゐて、自分支が客になつ  
て行くのではなかつた。それがお玉に見えを  
させると云ふことになつて、ふいと晴がましい  
「Chien!」な心持になつて目見えは松源にしよ  
うと云ひ出したのである。

さていよいよ目見えをさせようとなつた時、  
避くべからざる問題が出来た。それはお玉さん  
の支度である。お玉さんのばかりなら好いが、  
爺いさんの支度迄して遣らなくてはならないこ  
とになつた。これには中に立つて口を利いた婆  
あさんも頗る窮した。爺いさんの云ふことは  
娘が二も二もなく同意するので、それを強ひて  
抑へようとする、根本的に談判が破裂しない  
にも限らぬと云ふ状況になつたから爲方がな  
い。爺いさんの申分はざつとかうであつた。  
「お玉はわたしの大事な一人娘で、それも餘所  
の一人娘とは違つて、わたしの身よりと云ふも

のは、あれより外には一人もない。わたしは亡  
くなつた女房一人をたよりにして、寂しい生  
涯を送つたものだが、其女房が三十を越して  
の初産でお玉を生んで置いて、とうとうそれが  
病附で亡くなつた。貴乳をして育ててゐると、  
やつと四月ばかりになつた時、江戸中に流行つ  
た麻疹になつて、お醫者が見切つてしまつたの  
を、わたしは商賣も何も投造にして介抱して、  
やつと命を取り留めた。世間は物騒な最中で、  
井伊様がお殺されなすつてから二年目、生麥で  
西洋人が斬られたと云ふ年であつた。それから  
と云ふものは、店も何もなくなつてしまつたわ  
しが、何過もいつその事死んでしまはうかと思  
つたのを、小さい手でわたしの胸をいぢつて、  
大きい目でわたしの顔を見て笑ふ、可哀いお玉  
を一しよに殺す氣になられないばつかりに、出  
來ない我慢をして一日一日と命を繋いでゐた。  
お玉が生れた時、わたしはもう四十五で、お負  
に苦勞をし續けて年より更けてゐたのだが、一  
人口は食へなくても二人口は食へるなどと云つ  
て、小金を持つた後家さんの所へ、人憎に世話  
をしよう、子供は里にでも遣つてしまへ」と、親切  
に云つてくれた人もあつたが、わたしはお玉が  
可哀さに、そつてもなくことわつた。それまで

注文をした。間もなく「おとし」を添へた酒が出たので、先づ爺いさんに杯を侑めて、物を言つて見ると、元は相應な暮しをしただけあつて、遽に身なりを拵へて座鋪へ通つた人のやうではなかつた。

最初は爺いさんを邪魔にして、苛々したやうな心持になつてゐた末造も、次第に感情を融和させられて、全く予想しなかつた、しんみりした話をする事になつた。そして末造は自分の持つてゐる限のあらゆる善良な性質を表へ出すことを努めながら、心の奥には、おとなしい氣立の、お玉に信頼する念を起さしめるには、此上もない、適當な機會が、偶然に生じて來たのを喜んだ。

料理が運ばれた頃には、一座はなんとなく一家のものが遊山にでも出て、料理屋に立ち寄つたかと思はれるやうな様子になつてゐた。平生妻子に對しては、お玉のやうな振舞をしてゐるので、妻からは或るときは反抗を以て、或るときは屈從を以て遇せられてゐる末造は、女中の立つた跡で、恥かしさに赤くした顔に、つつましいやかな微笑を湛へて酌をするお玉を見て、これまで覺えたことのない淡い、地味な歡樂を覺えた。併し末造は此席で幻のやうに浮かんだ

幸福の影を、無意識に直覺しつつも、なぜ自分の家庭生活にかう云ふ味が出ないかと反省したり、かう云ふ餘所の感情を不斷に維持するに、どれだけの要約があるか、その要約が自分や妻に充たされるものか、充たされないものかと商量したりする程の、緻密な思慮は持つてゐなかつた。

突然塀の外に、かちかちと拍子木を打つ音がした。續いて「へい、何か一枚御最良様を」と云つた。二階にしてゐた三味線の音が止まつて、女中が手摩に掴まつて何か言つてゐる。下では、「へい、さやうなら成田屋の河内山と音羽屋の直侍を一つ、最初は河内山」と云つて、聲色を使ひはじめた。

銚子を換へに來てゐた女中が、「おや、今晚のは本當のでございます」と云つた。

末造には分からなかつた。「本當のどの、諷のど」と云つて、色々ありますかい。」

「いえ、近頃は大學の學生さんが造つてお廻りになります。」

「矢つ張鳴物入で。」

「えゝ。尺度から何からそつくりでございます。でもお聲で分かります。」

「そんなら極まつた人ですね。」

「えゝ。お一人しか、なさる方はございません。」女中は笑つてゐる。

「姉えさん、知つてゐるのだね。」

「こちらへもちよいちよい入らつしやつた方だもんですから。」

爺いさんが傍から云つた。「學生さんにも、御器用な方があるものですね。」

女中は黙つてゐた。

末造が妙に笑つた。「どうせそんなのは、學校では出來ない學生なのですよ。かう云つて、心の中には自分の所へ、いつも來る學生共の事を考へてゐる。中には随分職人の眞似をして、小店と云ふ所を冷かすのが面白いなどと云つて、不器用な職人のやうな詞遣をしてゐる人がある。併しまさか眞面目に聲色を造つて歩く人があらうとは、末造も思つてゐなかつたのである。

一座の話を黙つて聞いてゐるお玉を、末造がちよつと見て云つた。

「お玉さんは誰が最良ですか。」

「わたしは最良なんかございませんの。」爺いさんが詞を添へた。「芝居一向まゐりませんのですから。柳盛座がぢき近所なので、町内の娘さん達がみな張しまゐりまして、お玉はちつともまゐりません。好きな娘さん達



下がった。眞偽の分からぬ肉筆の浮世繪の軸物を掛けて、一輪挿しに山梔の花を活けた床の間を背にして座を占めた末造は、鋭い目であたりを見廻した。

二階と違つて、その頃からずつと後に、殺風景にも競馬の埒にせられて、それから再び滄桑を閲して、自動車の競走場になつた、あの池の縁の往來から見込まれやうにと、切角の不忍の池に向ひた座敷の外は籬塙で圍んである。塙と家との間には、帯のやうに狭く長い地面がある切なので、固より庭と云ふ程の物は作られない。末造の据わつてゐる所からは、二本寄せて植ゑた梧桐の、油雜巾で拭いたやうな幹が見えてゐる。それから春日燈籠が一つ見える。その外には飛び飛びに立つてゐる、小さい側柏があるばかりである。暫く照り續けて、廣小路は往來の人の足許から、白い土煙が立つのに、この塙の内は打水をした若が青々としてゐる。間もなく女中が蚊遣と茶を持つて來て、注文を聞いた。末造は連れが來てからにしようと思つて、女中を立たせて、ひとり煙草を吞んでゐた。初め据わつた時は少し熱いやうに思つたが、暫く立つと本所や便所の邊を通つて、いろいろの物の香を、微かに帯びた風が、廊下の方から折

折吹いて來て、傍に女中の置いて行つた、よごれた團扇を手取るには及ばぬ位であつた。

末造は床の間の柱に寄り掛かつて、煙草の煙を輪に吹きつつ、空想に耽つた。好い娘だと思つて見て通つた頃のお玉は、なんと云つてもまだ子供であつた。どんな女になつたらう。どんな様子をして來るだらう。兎に角爺いさんが附いて來ることになつたのは、奈何にもまづかつた。どうにかして爺いさんを早く歸してしまふことは出来ぬか知らんなぞと思つてゐる。

二階では三味線の調子を合せはじめた。廊下に二三人の足音がして、「お連様が」と女中が先へ顔を出して云つた。「さあ、ずつとお這入なさいよ。檀那はさげけた方だから、遠慮なさんぞなさらないが好い。」轡蟲の鳴くやうな調子でかう云ふのは、世話をしてくれた、例の婆あさんの聲である。

末造はつと席を起つた。そして廊下に出て見ると、腰を屈めて、曲角の壁際に躊躇してゐる爺いさんの背後に、怯れた様子もなく、物珍らしさうにあたりを見て立つてゐるのがお玉であつた。ふつくりした圓顔の、可哀らしい子だと思つてゐたに、いつの間にか細面になつて、體も前よりはすらりとしてゐる。さつぱりとした

銀杏返しに結つて、こんな場合に人のする厚化粧なんぞはせず、殆ど素顔といつても好い。それが想像してゐたとは全く趣が變つてゐて、しかも一層美しい。末造はその姿を目に吸ひ込むやうに見て、心の内に非常な満足を感じた。お玉の方では、どうせ親の貧苦を救ふために自分を賣るのだから、買手はどんな人でも構はぬと、捨身の決心で來たのに、色の淺黒い、鋭い目に愛敬のある末造が、上品な、日立たぬ好みの支度をしてゐるのを見て、捨てた命を拾つたやうに思つて、これも刹那の満足を感じた。

末造は爺いさんに、「ずつとあつちへお通りなすつて下さい」と丁寧に云つて、座鋪の方を指しながら、目をお玉さんの方へ移して、「さあ」と促した。そして二人を座鋪へ入れて置いて、世話をする婆あさんを片蔭へ呼んで、紙に包んだ物を手に握らせて、何やら喋りた。婆あさんはお齒黒を剝がした痕のきたない齒を見せて、悲しいやうな、人を馬鹿にしたやうな笑ひやうをして、頭を二三遍屈めて、その儘跡へ引き返して行つた。

座鋪に歸つて、親のものの遠慮して這入口に一塊になつてゐるのを見て、末造は愛想よく席を進めさせて、待つてゐた女中に、料理の

お玉は一度も来ない。  
最初一日二日の間、爺いさんは綺麗な家に這入つた嬉しさに、田舎出の女中には、水汲や飯炊丈させて、自分で片附けたり、掃除をしたりして、ちよいちよい足らぬ物のあるのを思ひ出しては、女中を仲町へ走らせて、買つて来させた。それから夕方になると、女中が臺所でことごと音をさせてゐるのを聞きながら、肘掛窓の外の高野槇の植ゑである所に打水をして、煙草を喫みながら、上野の山で鴉が騒ぎ出して、中島の辨天の森や、蓮の花の咲いた池の上に、次第に夕霧が漂つて来るのを見てゐた。爺いさんは難有い、結構だとは思つてゐた。併しその時からなんだか物足らぬやうな心持がし始めた。それは赤子の時から、自分一人の手で育てて、殆ど物を言はなくても、互に意志を通じ得られるやうになつてゐたお玉、何事につけても優しくしてくれたお玉、外から歸つて来れば待つてゐてくれたお玉がゐぬからである。窓に据わつてゐて、池の景色を見る。往來の人を見る。今跳ねたのは大きな鯉であつた。今通つた西洋婦人の帽子には、鳥が一羽丸で附けてあつた。その度毎に、「お玉あれを見い」と云ひたい。それが無いのが物足らぬのである。

三日四日となつた頃には、次第に氣が苛々して来て、女中の傍へ来て何かするのが氣に障る。もう何十年か奉公人を使つたことがないのに、原來優しい性分だから、小言は言はない。只女中のする事が一々自分の意志に合はぬので、不平でならない。起居のおとなしい、何をしても物に柔に當るお玉と比べて見られるのだから、田舎から出たばかりの女中こそ好い迷惑である。とうとう四日目の朝飯の給事をさせてゐる時、汁椀の中へ搦指を突つ込んだのを見て、「もう給仕はしくなくて好いから、あつちへ行つてゐておくれ」と云つてしまつた。

食事をしまつて、窓から外を見てゐると、空は曇つてゐても、雨の降りさうな様子もなく、却つて晴れた日よりは暑くなくて好きさうなので、氣を晴さうと思つて、外へ出た。それでも若し留守にお玉が来はすまいかと氣遣つて、我家の門口を折々振り返つて見つつ、池の傍を歩いてゐる。そのうち茅町と七軒町の間から無縁坂の方へ行く筋に、小さい橋の掛つてゐる處に來た。ちよつと娘の内へ行つて見ようかと思つたが、なんだか改まつたやうな氣がして、我ながら不思議な遠慮がある。これが女親であつたら、こんな隔てはどんな場合にも出来まいのに、不思議だ、不思議だと思ひながら、橋を渡らずに、欠張池の傍を歩いてゐる。ふと心附くと、丁度末造の家が溝の向うにある。これは口入の婆あさんが、こんで越して來た家の窓から、指さしをして教へてくれたのである。見れば、なる程立派な構で、高い土塀の外廻に、殺竹が斜に打ち附けてある。福地さんと云ふ、えらい學者の家だと聞いた、隣の方は、廣いことは廣いが、建物も古く、こつちの家に比べると、けばけばしい所と慥めしげな所とがない。暫く立ち留まつて、書も嚴重に締め切つてある、白木造の裏門の扉を見てゐたが、あの内へ這入つて見たいと思ふ心は起らなかつた。併し何をどう思ふでもなく、一種のはかない、寂しい感じに襲はれて、暫く茫然としてゐた。詞にあらはして言つたら、落ちぶれて娘を亥に出した親の感じとでも云ふより外あるまい。

は、あのどんちゃんどんちゃんが聞えては内におつとしてはゐられませんかうで。」  
爺いさんの話は、つい娘自慢になりたがるのである。

### 捌

話が極まつて、お玉は無縁坂へ越して來ることになった。

ところが、末造がひどく簡單に考へてゐた、此引越にも多少の面倒が付き纏つた。それはお玉が父親をなれる丈近い所に置いて、ちよいちよい尋ねて行つて、氣を附けて上げるやうにしたいと云ひ出したからである。最初からお玉は、自分が貰ふ給金の大部分を割いて親に送つて、もう六十を越してゐる親に不自由のないやうに、小女の一人位附けて置かうと考へてゐた。さうするには、今まで住まつた鳥越の車屋と隣合せになつてゐる、見苦しい家に親を置かなくても好い。同じ事なら、もつと近い所へ越させたいと云ふことになった。丁度見合ひに娘ばかり呼ぶ筈の所へ、親爺が来るやうになつたと同じわけで、末造は妾宅の支度をしてお玉を迎へさへすれば好いと思つてゐたのに、實際は親子二人の引越をさせなくてはならぬ事になつたのである。

勿論お玉は親の引越は自分が勝手にさせるのだから、一切檀那に迷惑を掛けたいやうにしたいと云つてゐる。併し話を聞せられて見れば、末造も丸で知らぬ顔をしてゐることは出来なない。見合ひをして一層氣に入つたお玉に、例の氣前を見せ遣りたい心持が手傳つて、とうとうお玉が無縁坂へ越すと同時に、爺と末造が見て置いた、今一軒の池の端の家へ親爺も越すといふことになった。かう相談相手になつて見れば、幾らお玉が自分の貰ふ給金の内で萬事済ましたいと云つたと云つて、只す見す苦しい事をするのを知らぬ顔は出来ず、何かにつけて物入がある。それを末造が平氣で出すのに、世話を焼いてゐる婆あさんの口を睨めることが度々であつた。

兩方の引越騒ぎが片附いたのは、七月の中頃でもあつたか。うひうひしい詞遣や立居振舞が、ひどく氣に入つたと見えて、金貨業の方で、あらゆる峻烈な性分を働かせてゐる末造が、お玉に對しては柔和な手段の限を盡して、毎晩のやうに無縁坂へ通つて來て、お玉の機嫌を取つてゐた。ここにはちよつと歴史家の好く云ふ、英雄の平面と云つたやうな趣がある。

末造は一夜も泊つて行かない。併し毎晩のやうに來る。例の婆あさんが世話をして、菊と云ふ、十三になる小女を一人置いて、臺所で子供の飯事のやうな眞似をさせてゐる丈なので、お玉は次第に親相手のない退屈を感じて、夕方になれば、早く檀那が來てくれれば好いと待つ心になつて、それに氣が附いて、自分で自分を笑ふのである。鳥越にゐた時も、お父さんが商賣に出た跡で、お玉は留守に獨りで、内職をしてゐたが、もうこれ又爲上ければ幾らになる、さうしたらお父つさんが歸つて驚くらうと勵んでゐたので、近所の娘達と親しくしないお玉も、退屈だと思つたことはなかつたのである。それが生活の上の苦勞がなくなると同時に、始て退屈と云ふことを知つた。

それでもお玉の退屈は、夕方になると、檀那が來て慰めてくれるから、まだ好い。可笑しいのは、池の端へ越した爺いさんの身の上で、これも波世に追はれてゐたのが、急に樂になり過ぎて、自分も狐に擬まれたやうだと思つてゐる。そして小さいランプの下で、これまでお玉と世間話をして過した水入らずの晩が、過ぎ去つた、美しい夢のやうに戀しくてならない。そしてお玉が尋ねて來さうなものだと、絶えずそればかり待つてゐる。所がもう大分日が立つたのに、



氣も食べぬと云はれた事があつたので、若し梅なんぞが不満足に思つてはならぬ、それでは手厚くして下さる檀那に濟まぬといふやうな心から、わざわざ坂下の肴屋へ見せに遣つたのである。ところが、梅が泣顔をして歸つて來た。どうしたかと問ふと、かう云ふのである。肴屋を見附けて通入つたら、その家はお内へ通を持つて來たのとは違つた家であつた。御亭主がゐないで、上さんが店にゐた。多分御亭主は河岸から歸つて、店に置く丈の物を置いて、得意先きを廻りに出たのであらう。店に新しい肴が澤山あつた。梅は小鉢の色の好いのが一山あるのを目を附けて、値を聞いて見た。すると上さんが、「お前さんは見附けない女中さんだが、どこから買ひにお出だ」と云つたので、これこれの内から來たと話した。上さんは急にひどく不機嫌な顔をして、「おやさう、お前さんお氣の毒だが歸つてね、さうお云ひ、この内には高利貸の妾なんぞに賣る者はないのだから」と云つて、それ切り横を向いて、烟草を吞んで構ひ附けない。梅は餘り悔やしいので、外の肴屋へ行く氣もなくなつて、驅けて歸つた。そして主人の前で、氣の毒さうに、肴屋の上さんの口上を、きれぎれに繰返したのである。

お玉は聞いてゐるうちに、顔の色が唇まで蒼くなつた。そして良久しく黙つてゐた。世馴れぬ娘の胸の中で、込み入つた種々の感情がカオスをなして、自分でもその織り交ぜられた絲をほぐして見ることは出來ぬが、その感情の入り亂れた儘の全體が、強い壓を賣られた無垢の處女の心の上に加へて、體ぢゆうの血を心の臓に流れ込ませ、顔は色を失ひ、背中には冷たい汗が出たのである。こんな時には、格別重大でない事が、最初に意識せられるものと見えて、お玉はこんな事があつては梅がもう此内にはゐられぬと云ふだらうかと先づ思つた。

梅はぢつと血色の亡くなつた主人の顔を見てゐて、主人がひどく困つてゐると云ふこと丈は曉つたが、何に困つてゐるのか分らない。ついで腹が立つて歸つては來たが、午のお茶がまだないのに、此儘にしてゐては濟まぬと云ふことに氣が付いた。さつき貰つて出て行つたお足さへ、まだ帯の間に挿んだ切りで出さずにゐるのであつた。「ほんとにあんな厭なお上さんでありやしないわ。あんな内のお者を誰か買つて遣るものか。もつと先の、小さいお稻荷さんのある近所に、もう一軒ありますから、すぐに行つて買つて來ませうね。」懇めるやうにお玉の顔を見

て起ち上がる。お玉は梅が自分の身になつてくれた、刹那の嬌しさに動されて、反動的に微笑んで頷く。梅はすぐばたばたと出て行つた。お玉は跡にその儘動かずにゐる。氣の張が少し弛んで、次第に湧いて來る涙が溢れさうになるので、快からハンカチーフを出して押へた。胸の内には只悔やしい、悔やしいと云ふ叫びが開える。これが彼の混沌とした物の發する聲である。肴屋が賣つてくれぬのが憎いとか、賣つてくれぬやうな身の上だと知つて悔やしいとか、悲しいとか云ふのではないことは勿論であるが、身を任せることになつてゐる末造が高利貸であつたと分かつて、その末造を憎むとか、さう云ふ男に身を任せてゐるのが悔やしいとか、悲しいとか云ふでもない。お玉も高利貸は厭なもの、こはいもの、世間の人に嫌はれるものは、仄かに聞き知つてゐるが、父親が質屋の金しか借りたことがなく、それも借りた金高を番頭が因業で貸してくれぬことがあつても、父親は只困ると云ふ丈で番頭を無理だとぶつて怨んだこともない位だから、子供が鬼がこはい、お廻りさんがこはいのと同じやうに、高利貸と云ふ、こはいものの存在を教へられてゐても、別に痛切な感じは持つてゐない。そんなら何が

はれない。丁度人に對して物を言ふ時に用ゐる反語のやうに、いつそ娘が憎くなつたら好からうと、心のう邊で思つて見るに過ぎない。

それでも爺いさんは此頃になつて、こんな事を思ふことがある。内にばかりゐると、いろんな事を思つてならないから、己はこれから外へ出るが、跡へ娘が来て、己に逢はれないのを残念がるのだらう。残念がらないにしたところが、切角來たのが無駄になつたと丈は思ふに違ひない。その位な事は思はせて違つても好い。こんな事を思つて出て行くやうになつたのである。

上野公園に行つて、丁度日蔭になつてゐる、ろは臺を尋ねて腰を休めて、公園を通り抜ける、母衣を掛けた人力車を見ながら、今頃留守へ娘が來て、まごまごしてゐはしないかと想像する。

この時の感じは、好い氣味だと思つて見たいと云ふ、自分で自分を驗して見るやうな感じである。此頃は夜も吹抜亭へ、圓朝の話を、駒之助の義太夫を聞きに行くことがある。寄席にゐても、矢張娘が留守に來てゐるだらうかと云ふ想像をする。さうかと思ふと、又ふいと娘が此中來てゐるはせぬかと思つて、銀杏返しに結つてゐる、若い女を選り出すやうにして見ることなどがあつた。一度なんぞは、中入が済んだ頃、その

時代にまだ珍らしかつた、パナマ帽を目深に被つた、湯帷子掛の男に連れられて、背後の二階へ來て、手摩に握まつて据わりしなに、下の客を見卸した、銀杏返しを女を、一刹那の間お玉だと思つたことがある。好く見れば、お玉よりは顔が圓くて春が低い。それにパナマ帽の男は、その女ばかりではなく、背後にまだ三人ばかりの島田やら桃割やらを連れてゐた。皆藝者やお酌であつた。爺いさんの傍にゐた書生が、「や、吾曹先生が來た」と云つた。寄席がはねて歸る時に見ると、赤く「ふきぬき亭」と斜に書いた、大きい柄の長い提灯を一人の女が持つて、藝者やお酌がぞろぞろ附いて、パナマ帽の男を送つて行く。爺いさんは自分の内の前まで、此一行と跡になつたり、先になつたりして歸つた。

### 玖

お玉も小さい時から別れてゐたことのない父親が、どんな暮らしをしてゐるか、往つて見たとは思つてゐる。併し檀那が毎日のやうに來るので、若し留守を明けてゐて、機嫌を損じてはならないと云ふ心配から、一日一日と思ひながら父親の所へ尋ねて行かずに過すのである。檀那は朝までゐることはない。早い時は十一時

頃に歸つてしまふ。又けふは外へ行かなくてはならぬのだが、ちよいと寄つたと云つて、箱火鉢の向うに据わつて、煙草を吞んで歸ることもある。それでもけふは檀那がきつと來ないと思つて、極めて附いた日といふのでないの、思ひ切つて出ることが出来ない。書間出れば出られぬことはいない筈だが、使つてゐる小女が子供と云つても好い位だから、何一つ任せて置かれぬ。それになんだか近所のものに顔を見られるやうな氣がして、書間は外へ出たたくない。初のうち

は坂下の湯に這入りに行くにも、今頃は透いてゐるか見て來ておくれと、小女に様子を見て來させた上で、そつと行つた位である。

何事もなくても、こんな風に怯れがちなお玉の膽をとりひしいだ事が、越して來てから二日目にあつた。それは越した日に八百屋も、肴屋も通帳を持つて來て、出入を頼んだのに、その日には肴屋が來ぬので、小さい梅を坂下へ遣つて、何か切身でも買つて來させようとした時の事である。お玉は毎日有なんぞが食ひたくはない。酒を飲まぬ父が體に障らぬお數でさへあれば、なんでも好いと云ふ性だから、有り合せの物で御飯を食べる癖が附いてゐた。併し隣の近い貧乏所帯で、あの家では幾日立つても生腥

り、返事を手間取らせたりすることは最初にもあつたが、今晚なんぞの素振には何か特別な仔細がありさうである。

「おい、お前何か考へてゐるね」と、末造が烟管に烟草を詰めつつ云つた。

わざわざ片附けてあるやうな箱火鉢の抽斗を、半分抜いて、捜すものもないのに、中を見込んでゐたお玉は、「いいえ」と云つて、大きい目を末造の顔に注いだ。昔話の神祕は知らず、餘り大した祕密なんぞをしまつて置かれさうな目ではない。

末造は覺えず覺めてゐた顔を、又覺えず晴やかにせずにはゐられなかつた。「いいえぢやありません。困つちまふ、どうしよう、どうしよう」と、ちやんと顔に書いてあらあ。」

お玉の顔はすぐに眞つ赤になつた。そして姑く黙つてゐる。どう言はうかと考へる。細かい器械の運轉が透き通つて見えるやうである。

「あの、父の所へ疾うから行つて見よう、行つて見ようと思つてゐながら、もう随分長くなりましたもんですから。」

細かい器械がどう動くかは見えても、何をするかは見えない。常に自分より大きい、強い物の迫害を避けてはゐられぬ蟲は、HUBBARD

を持つてゐる。女は諺を衝く。

末造は顔で笑つて、叱るやうな物の言様をした。「なんだ。つい鼻の先の池の端に越して來てゐるのに、まだ行つて見ないでゐたのか。向ひの岩崎の邸の事なんぞを思へば、同じ内にゐるやうなものだぜ。今からだつて、行かうと思へば行けるのだが、まあ、あすの朝にするが好い。」

お玉は火箸で灰をいぢりながら、偷むやうに末造の顔を見てゐる。

「でもいろいろと思つて見ますものですから。」  
「笑談ぢやないぜ。その位な事を、どう思つて見やうもないぢやないか。いつまでねんねえでゐるのだい。」こん度は聲も優しかつた。

此話はこれ丈で済んだ。とうとうしまひには末造が、そんなにおつくうがあるやうなら、自分が朝出掛けて來て、四五町の道を連れて行つて遣らうかなどとも云つた。

お玉は此頃種々に思つて見た。横那に逢つて、頼もしげな、氣の利いた、優しい様子を目の前に見て、此人がどうしてそんな、厭な商賣をするのかと、不思議に思つたり、なんとか話をして、堅氣な商賣になつて貰ふことは出来まいかと、無理な事を考へたりしてゐた。併しま

だ厭な人だとは少しも思はなかつた。

末造はお玉の心の底に、何か隠してゐる物のあるのを微かに認めて、探りを入れて見たが、子供らしい、なんでもない事だと云ふのであつた。併し十一時過ぎに此家を出て、無縁坂をぶらぶら降りながら考へて見れば、どうもまだその奥に何物かが潜んでゐさうである。末造の物馴れた、鋭い觀察は、この何物かを丸で見通してはをらぬのである。少くも或る氣まづい感情を起させるやうな事を、誰かがお玉に話したのではあるまいかとまで、末造は推測を遣うして見た。それでも誰が何を言つたかは、とうとう分からずにしまつた。

### 拾壹

翌朝お玉が、池の端の父親の家に來た時は、父親は丁度朝飯を食べてしまつた所であつた。化粧の玉間を取らないお玉が、ちと早過ぎはせぬかと思ひながら、急いで來たのだが、早起の老人はもう門口を綺麗に掃いて、打水をして、それから手足を洗つて、新しい疊の上によがつて、いつもの寂しい食事を済ませた所であつた。

二三軒隔てては、近所待合も出來てゐて、夕方になれば騒がしい時があるが、兩隣は同じ。



悔やしいのだらう。

一體お玉の持つてゐる悔やしいと云ふ概念には、世を怨み人を恨む意味が甚だ薄い。強ひて何物をか怨む意味があるとするなら、それは我身の運命を怨むのだとも云はうか。自分が何の悪い事もしてゐぬのに、餘所から迫害を受けなくてはならぬやうになる。それを苦痛として感ずる。悔やしいとは此苦痛を斥すのである。

自分が人に騙されて棄てられたと思つた時、お玉は始めて悔やしいと云つた。それからたつた此間、妾と云ふものにならなくてはならぬ事になつた時、又悔やしいを繰り返した。今はそれが只妾と云ふ丈でなくて、人の嫌ふ高利貸の妾でさへあつたと知つて、きのふけふ「時間」の齒で咬まれて角が剥れ、「あきらめ」の水で洗はれて色の褪めた「悔やしさ」が、再びつきりした輪廓、強い色彩をして、お玉の心の目に現はれた。お玉が胸に纏結してゐる物の本體は、強ひて條理を立てて見れば先づこんな物でもあらうか。

暫くするとお玉は起つて押入を開けて、象皮襪の靴から、自分で縫つた白金巾の前掛を出して腰に結んで、深い溜息を銜いて臺所へ出た。同じ前掛でも、絹のは此女の爲めに、一種の晴

着になつてゐて、臺所へ出る時には掛けぬことにしてある。かれは湯帷子にさへ領垢の附くのを厭つて、髪や髭の障る襟の所へ、手拭を折り掛けて置く位である。

お玉は此時もう餘程落ち着いてゐた。あきらめは此女の最も多く経験してゐる心的作用で、かれの精神は此方角へなら、油をさした機關のやうに、滑かに創く習慣になつてゐる。

### 拾

或る日の晩の事であつた。末造が来て箱火鉢の向うに据わつた。始めての晩からお玉はいつも末造の這入つて来るのを見ると、座布団を出して、箱火鉢の向うに敷く。末造はその上に胡坐を掻いて、烟草を飲みながら世間話をする。お玉は手持不沙汰なやうに、不斷自分のゐる所にゐて、火鉢の縁を撫でたり、火箸をいぢつたりしながら、恥かしげに、詞數少く受答をしてゐる。その様子が火鉢から離れて据わらせたら、身の置所に困りはすまいかと思はれるやうである。火鉢と云ふ胸壁に據つて、僅かに蔽に當つてゐると云つても好い位である。暫く話してゐるうちに、お玉はふと調子附いて長い話をする。それが大抵これまで父親と二人で暮し

てゐた、何年かの間に聞して來た、小さい喜怒哀樂に過ぎない。末造はその話の内容を聴くよりは、籠に飼つてある鈴鼠の鳴くのをでも聞くやうに、可哀らしい、囁の聲を聞いて、覺えず微笑む。その時お玉はふいと自分の鏡香つてゐるのに氣が附いて、顔を赤くして、急に話を端折つて、元の詞數の少い對話に戻つてしまふ。その總ての言語舉動が、いかにも無氣で、或る向きには頗る銳利な觀察をすることに慣れてゐる末造の目で見れば、澄み切つた水體の水を見るやうに、隅々まで隠れる所もなく見渡すことが出来る。かう云ふ差向ひの味は、末造がために、手足を働かせた跡で、加減の好い湯に這入つて、ぢつとして温まつてゐるやうに愉快である。そして此味を味ふのが、末造がためには全く新しい經驗に屬するので、末造は此家に通ひ始めてから、猛獸が人に馴れるやうに、意識せずに一種の culture を受けてゐるのである。

それに三四日立つた頃から、自分が例の通りに箱火鉢の向うに胡坐を掻くと、お玉はこれと云ふ用もないに立ち倒れたり何かして、兎角落ち着かぬやうになつたのに、末造は段々氣が附いて來た。はにかんで目を見合せぬやうにした

その側の横町には如燕の佃煮もある。」

「まあ。あの柳原の寄席へ、お父つきさんと聞きに行つた時、何か御馳走のお話をして、その旨きこと、己の店の佃煮の如しと云つて、みんなを笑はせましたつけね。本當に福々しいお爺いさんね。高座へ出ると、行きなりお尻をくるつとまくつて据ゐるのですもの。わたくし可笑しくつて。お父つきさんもあんなにお太りなさるやうだといいわ。」

「如燕のやうに太つて溜まるものか」と云ひながら、爺いさんは煎餅を娘の前へ出した。

そのうち茶が來たので、親子はきのふもおとつひも一しよにゐたもののやうに、取留のない話をしてゐた。爺いさんがふと何か言ひにくい事を言ふやうに、かう云つた。

「どうだい、工合は。横那は折々お出になるかい。」

「ええ」とお玉は云つた切、ちよいと返事にまごついた。末造の來るのは折々どころではない。毎晩顔を出さないことはない。これがよめに往つたので、折合が好いかと問はれたのなら、大層好いから安心して下さいと、晴れ晴れと返事が出来るのだらう。それがかうした身の上で見れば、どうも横那が毎晩お出になるとは、氣が

咎めて言ひにくい。お玉は暫く考へて、「まあ、好い工合のやうですから、お父つきさん、お案じなさらなくつても好ござんすわ」と云つた。

「そんなら好いが」と爺いさんは云つたが、娘の答にどこやら物足らぬ所のあるのを感じた。問ふ人も、答へる人も無意識に含糊の態をなして物を言ふやうになつたのである。これまで何事も打ち明け合つて、お互の間に秘密と云ふものを持つてゐたことのない二人が、厭でも秘密のあるらしい、他人行儀の挨拶をしなくてはならなくなつたのである。前に悪い癖を取つて騙された時などは、近所の人に面目ないとは思つても、親子共胸の底には曲彼に在りと云ふ心持があつたので、互に話をし合ふには、少しも遠慮はしなかつた。その時とは違つて、親子は一旦決心して纏めた話が旨く纏まつて、不自由のない身の上になつてゐながら、今は親しい會話の上に、暗い影のさす、悲しい味を知つたのである。暫くして爺いさんは、何か娘の口から具體的な返事が聞きたいやうな氣がしたので、「一體どんな方だい」と、又新しい方角から問うて見た。

「さうね」と云つて、お玉は首を傾げてゐたが、獨語のやうな調子で言ひ足した。「どうも悪い

人だとは思はれせんわ。まだ付も立たないのだけれども、荒い詞なんぞは掛けないのですもの。」

「ふん」と云つて、爺いさんは得心の行かぬやうな顔をした。「悪い人の答はないぢやないか。」

お玉は父親と顔を見合せて、急に動悸のするのを感じた。けふ話さうと思つて來た事を、訃せは今が好い折だとは思ひながら、切角暮らしを樂にして、安心をさせようとしてゐる父親に、新しい苦痛を感じさせるのがつらいからである。さう思つたので、お玉は父親との隔たりの大きくなるやうな不快を忍んで、日蔭ものと云ふ秘密の奥に、今一つある秘密を、こゝまで持つて來た儘蓋を開けずに、そつくり持つて歸らうと、際どい所で決心して、話を餘所に逸らし

てしまつた。「だつて随分いろいろな事をして、一代のうちに身上を拵へた人だと云ふのですから、わたくしどんな氣立の人だか分からないと思つて、心配してゐたのですわ。さうですね。なんと云つたら好いでせう。まあ、をとこ氣のある人と云ふ風でございします。眞底からそんな人なのだから、それはなかなか分からないのですけれど、人にさう見せようと心掛けて何か言つたりしたりしてゐる人のやうね。ねえ、お父

やうに格子戸の締まつた家で、殊に朝のうちは、あたりがひっそりしてゐる。眩暈から外を見れば、高野槿の枝の間から、爽やかな朝風に微かに揺れてゐる柳の絲と、その向うの池一面に茂つてゐる蓮の葉とが見える。そしてその縁の中に、所々に薄い紅を點じたやうに、今朝開いた花も見えてゐる。北向の家で寒くはあるまいかと云ふ話はあつたが、夏は求めても住みたい所である。

お玉は物を辨へるやうになつてから、若し身に爲合せが向いて來たら、お父つさんをおもひ上げて上げたい、かうもして上げたいと、色々に思つても見たが、今日の前に見るやうに、こんな家にかうして住まはせて上げれば、平生の願が慥つたのだと云つても好いと、嬉しく思はずにはゐられなかつた。併しその嬉しきには一滴の苦い物が交つてゐる。それがなく、けさお父つさんに逢ふのだつたら、どんなにか嬉しからうと、つくづく世の中の儘ならぬを、じれつたと思ふのである。

箸を置いて、湯呑に注いだ茶を飲んでゐた爺いさんは、まだつひぞ人のおとづれたことのない門の戸の開いた時、はつと思つて、湯呑を下に置いて上り口の方を見た。二枚折の霞簾屏

風にまだ姿の遮られてゐるうちに、「お父つさん」と呼んだお玉の聲が聞えた時は、すぐに起つて出迎へたいやうな氣がしたのを、ちつとこらへて据わつてゐた。そしてなんと云つて遣らうかと、心の内にせはしい思案をした。「好くお父つさんの事を忘れずにゐたなあ」とでも云はうかと思つたが、そこへ急いで這入つて來て、懷かしげに傍に來た娘を見ては、どうもそんな詞は口に出されなくなつて、自分で自分を不満足に思ひながら、黙つて娘の顔を見てゐた。

まあ、なんと云ふ美しい子だらう。不圖から自慢に思つて、「貧しい中にも荒い事をさせずに、身綺麗にさせて置いた積ではあつたが、十日ばかり見ずにゐるうちに、丸で生れ替つて來たやうである。どんな忙しい暮らしをしてゐても、本能のやうに、肌と垢の附くやうな事はしてゐなかつた娘ではあるが、意識して體を磨くやうになつてゐるきのふけふに比べて見れば、爺いさんの記憶にあるお玉の姿は、まだ珠の儘であつた。親が子を見て、老人が若いものを見て、美しいものは美しい。そして美しいものが人の心を和げる威力の下には、親だつて、老人だつて屈せずにはゐられない。

わざと黙つてゐる爺いさんは、濛い顔をして

ゐる積であつたが、不意ながら、つい氣色を仰げてしまつた。お玉も新しい氣色に身を委ねた爲めに、これまで小さい時から一日も別れてゐたことのない父親を、逢ひたい逢ひたいと思ひながら、十日も見ずにゐたのだから、話さうと思つて來た事も、暫くは口に出すことが出來ずに、嬉しげに父親の顔を見てゐた。

「もうお膳を下げまして宜しうございませうかと、女中が勝手から顔を出して、尻上がりのは早言に云つた。馴染のないお玉には、なんと云つたか聞き取れない。愛を慇懃にした小さい頭の下に太つた顔の附いてゐるのが、いかにも不釣り合である。そしてその顔が不遠慮に、さも驚いたやうに、お玉を目守つてゐる。

「早くお膳を下げて、お茶を入れ替へて來るのだ。あの棚にある青い分のお茶だ。」爺いさんはかう云つて、膳を前へ荷き出した。女中は膳を持つて勝手へ這入つた。

「あら、好いお茶なんか戴かなくつても好いのだから。」

「馬鹿言へ。お茶受もあるのだ。」爺いさんは起つて、押入からブリキの籠を出して、菓子鉢へ玉子煎餅を盛つてゐる。これは寶丹のちき裏の内へ拵へてゐるのだ。此邊は便利の好い所で、



に遭遇して觀察をせずには置かない。道で行き合つても、女は自己の競争者として外の女を見ると、或る哲學者は云つた。汁椀の中へ親指を衝つ込む山出しの女でも、美しいお玉を氣にして、立聽をしてゐたものと見える。

「ぢやあ又來るが好い。檀那に宜しく言つてくれ。」爺いさんは据わつた儘かう云つた。

お玉は小さい紙入を黒縞子の帯の間から出して、幾らか紙に擦つて女中に遣つて置いて、胸下駄を引つ掛けて、格子戸の外へ出た。

末造の床は一番奥の壁際に、少し離して取つてゐるが、その晩は据わつて俯向加減になつてゐて、末造が蚊屋の中に這入つて來たのを知つてゐながら、振り向いても見ない。

たよりに思ふ父親に、苦しい胸を訴へて、一しよに不幸を歎く積で這入つた門を、我ながら不思議な程、元氣好くお玉は出た。切角安心してゐる父親に、餘計な苦勞を掛けたくない、それよりは自分を強く、丈夫に見せて遣りたいと、努力して話をしてゐるうちに、これまで自分の胸の中に眠つてゐた或る物が醒覺したやうな、これまでに人にたよつてゐた自分が、思ひ掛けず獨立したやうな氣になつて、お玉は不忍の池の畔を、晴やかな顔をして歩いてゐる。

ある晩末造が無縁坂から歸つて見ると、お上さんがもう子供を寢かして、自分丈起きてゐた。いつも子供が寢ると、自分も一しよに横になつてゐるが、その晩は据わつて俯向加減になつてゐて、末造が蚊屋の中に這入つて來たのを知つてゐながら、振り向いても見ない。

もう上野の山を大ぶはづれた日がくわつと照つて、中島の辨天の社を眞つ赤に染めてゐるのに、お玉は持つて來た、小さい蝙蝠をも挿さずに歩いてゐるのである。

「どうしたのだ。まだ寐ないでゐるね。」お上さんは黙つてゐる。

末造も再び讓歩しようとはしない。こつちから婦和を持ち出したに、彼が應ぜぬなら、それまでの事だと思つて、わざと平氣で煙草を吞んでゐる。

「あなた今までどこにゐたんです。」お上さんは突然頭を持ち上げて、末造を見た。春公人を置くやうになつてから、次第に詞を上品にしたのだが、差向ひになると、ぞんざいになる。やうやう「あなた」女が維持せられてゐる。

「あなた今までどこにゐたんです。」お上さんは突然頭を持ち上げて、末造を見た。春公人を置くやうになつてから、次第に詞を上品にしたのだが、差向ひになると、ぞんざいになる。やうやう「あなた」女が維持せられてゐる。

「あなた今までどこにゐたんです。」お上さんは突然頭を持ち上げて、末造を見た。春公人を置くやうになつてから、次第に詞を上品にしたのだが、差向ひになると、ぞんざいになる。やうやう「あなた」女が維持せられてゐる。

「あなた今までどこにゐたんです。」お上さんは突然頭を持ち上げて、末造を見た。春公人を置くやうになつてから、次第に詞を上品にしたのだが、差向ひになると、ぞんざいになる。やうやう「あなた」女が維持せられてゐる。

「あなた今までどこにゐたんです。」お上さんは突然頭を持ち上げて、末造を見た。春公人を置くやうになつてから、次第に詞を上品にしたのだが、差向ひになると、ぞんざいになる。やうやう「あなた」女が維持せられてゐる。

拾貳

末造は鋭い目で一日女房を見たが、なんと云はない。何等かの知識を女房が得たらしいとは認めても、その知識の範圍を測り知ることが出來ぬので、なんとも云ふことが出來ない。末造は妄りに語つて相手に材料を供給するやうな男ではない。

「もう何もかも分かつてゐます。」鋭い聲である。そして末の方は泣聲になり掛かつてゐる。

「變な事を言ふなあ。何が分かつたのだい。」さも意外な事に遭遇したと云ふやうな調子で、聲はいたはるやうに優しい。

「ひどいぢやありませんか。好くそんなにしらばつくてゐられる事ね。」夫の落ち着いてゐるのが、却つて強い刺激のやうに利くので、上さんは聲が切れ切れになつて、湧いて來る涙を襟袢の袖でふいてゐる。

「困るなあ。まあ、なんだかさう云つて見ねえ。丸つ切り見當が附かない。」

「あら。そんな事を。今夜どこにゐたのだから、わたしにさう云つて下さいと云つてゐるのに。あなた好くそんな眞假が出來た事ね。わたしには商用があるのなんのと云つて置いて、閑物なんぞを指へて。」鼻の低い赤ら顔が、涙で曇つたやうになつたのに、こはれた丸唇の鬚の下か

つさん。心掛ばかりだつてそんなのはいいぢやございせんか。」かう云つて、父親の顔を見上げた。女はどんな正直な女でも、その時心に持つてゐる事を隠して、外の事を云ふのを、男程苦にしはしない。そしてさう云ふ場合に詞数の多くなるのは、女としては餘程正直なのだ云つても好いかも知れない。

「さあ。それはそんな物かも知れないな。だが、なんだかお前、檀那を信用してゐないやうな、物の言ひやうをするぢやないか。」

お玉はにつこりした。「わたくしこれで段々えらくなつてよ。これからは人に馬鹿にせられてばかりはゐない積なの。豪氣でせう。」

父親はおとなしい一方の娘が、めづらしく鋒を自分に向けたやうに感じて、不安らしい顔をして娘を見た。「うん。己は随分人に馬鹿にせられ通しに馬鹿にせられて、世の中を渡つたものだ。だがな、人を騙すよりは、人に騙されてゐる方が、氣が安い。なんの商賣にしても、人に不義理をしないやうに、恩になつた人を大事にするやうにしてゐなくてはならないぜ。」

「大丈夫よ。お父つさんがいつもたあ坊は正直だからとさう云つたでせう。わたくし全く正直なの。ですから、この頃つくづくさう思

つてよ。もう人に騙されることだけは、御免を蒙りたいわ。わたくし、諺を衝いたり、人を騙したりなんかしない代には、人に騙されもしない積なの。」

「そこで檀那の言ふことも、うかとは信用しないと云ふのかい。」

「さうなの。あの方はわたくしを丸で赤ん坊のやうに思つてゐますの。それはあんな目から鼻へ抜けるやうな人ですから、さう思ふのも無理はないのですけれど、わたくしこれでもその人の思ふ程赤ん坊ではない積なの。」

「では何かい。何かこれまで檀那の仰やつた事に、本當でなかつた事でもあつたのを、お前が氣が附いたとでも云ふのかい。」

「それはあつてよ。あの婆あさんが度々さう云つたでせう。あの人は奥さんが子供を置いて亡くなつたのだから、あの人の世話になるのは、本妻ではなくつても、本妻と同じ事だ。只世間體があるから裏店にゐたものを内に入れることは出来ないのだと云つたのね。ところが奥さんがちやあんとあるの。自分で平氣でさう云ふのですもの。わたくしびびくりしてよ。」

爺いさんは目を大きくした。「さうかい。矢つ張嫉人口だなあ。」

「ですから、わたくしの事を奥さんに、種々内諺にしてみるのでせう。奥さんに諺を衝く位です。ですから、わたくしにだつて本當ばかり云つてゐやしませんわ。わたくし眉毛に唾を附けてゐなくつちやあ。」

爺いさんは飲んでしまつた烟草の吸殻をはたくも忘れて、なんだか急にえらくなつたやうな娘の様子をぼんやりと眺めてゐると、娘は急に思ひ出した様に云つた。「わたくしけふはもう歸つてよ。かうして一度来て見れば、もうなんでもなくなつたから、これからはお父つさんとこへ毎日のやうに見に来て上げるわ。實はあの人が往けと云はないうちに來ては悪いかと思つて、遠慮してゐたの。とうとうゆうべさう云つてことわつて置いて、けさ來たのだから。わたくしの所へ來た女中は、それは子供で、お午の支度だつて、わたくしが歸つて手傳つて遣らなくては出來ないの。」

「檀那にことわつて來たのなら、午もこつちで食べて行けば好い。」

「いいえ。不用心ですわ。またすぐ出掛けて來てよ。お父つさん。さやうなら。」

お玉が立ち上るとたんに、女中が慌てて履物を直に出た。氣が利かぬやうでも、女け女

あつたのだ。最初は月々極まつて爲送りをしてゐたところが、今年になつてから手紙もよこさなけりや、金もよこさねえ。そこで女が先方へ掛け合つてくれると云つて已に頼んだのだ。どうして已を知つてゐるかと思ふだらうが、吉川さんは度々己の内へ來ると人の目に附いて困るからと云つて、己を七曲の内へ呼んで書換の紙なんぞをした事がある。その時から女が己を知つてゐたのだ。己も随分迷惑な話だが、序だから掛け合つて遣つたよ。ところがなかなか埒は明かぬ。女はしつこく頼む。己は飛んだ奴に引つ掛かつたと思つて持て扱つてゐるのだ。

お負に小綺麗な所で店賃の安い處へ越したいから、世話をしてくれと云ふので、切通しの質屋の隠居のゐた跡へ、面倒を見て越させて遣つた。それやこれやで、こなひだからちよいちよい寄つて、烟草を二三服呑んだ事があるもんだから、近所の奴が彼此言やあがるのだらう。隣は女の子を集めて、爲立物の師匠をしてゐると云ふのだから、口はうるさいやな。あんな所に女を圍つて置く馬鹿があるものか。」こんな事を言つて、末造はさげすんだやうに笑つた。

お上さんは小さい目を赫かして、熱心に聞いてゐたが、此時甘えたやうな調子でかう云つ

た。「それはお前さんの云ふ通りかも知れないけれど、そんな女の所へ度々行くうちには、どうなるか知れたものぢやありませんか。どうぞお金で自由になるやうな女だもの。」お上さんはいつか「あなた」を忘れてゐる。

「馬鹿言へ。己がお前と云ふものがあるのに、外の女に手を出すやうな人間かい。これまでだつて、女をどうしたと云ふことが、只の一度でもあつたかい。もうお互に焼餅喧嘩をする年でもあるめえ。好い加減にしろ。」末造は存外容易に辯解が功を奏したと思つて、心中に凱歌を歌つてゐる。

「だつてお前さんのやうにしてゐる人を、女は好くものだから、わたしやあ心配さ。」

「へん。あが佛尊しと云ふ奴だ。」

「どう云ふわけなの。」

「己のやうな男を好いてくれるのは、お前ばかりだと云ふことよ。なんだ。もう一時を過ぎてゐる。寝よう。」

### 拾夢

眞實と作爲とを綯交にした末造の言分けが、一時お上さんの嫉妬の火を消したやうでも、その効果は勿論 Multitude なのだから、無縁坂上に

實に在してゐる物が、依然實在してゐる限は、藤口やら壁訴訟やらの絶えることはない。それが女中の口から「今日も何某が権那様の格子戸にお這入になるのを見たさうでございます」と云ふやうな詞になつて、お上さんの耳に届く。併し末造は言分けには窮せない。商用とやらが、さう極まつて晩方にあるものではあるまいと云へば、「金を借る相談を朝つばからする奴があるものか」と云ふ。なぜこれまでは今のやうでなかつたかと云へば、「それは商賣を手廣に遣り出さない前の事だ」と云ふ。末造は池の端へ越すまでは、何もかも一人でしてゐたのに、今は住まひの近所に事務所めいたものが置いてある外に、龍泉寺町にまで出張所とも云ふやうな家があつて、學生が所謂金策のために、遠道を踏まなくても済むやうにしてある。根津で金のいるものは事務所に駆け附ける。吉原でいるものは出張所に駆け附ける。後には吉原の西の宮と云ふ引手茶屋と、末造の出張所とは氣脈を通じてゐる。出張所で承知してゐれば、金がなくても遊ばれるやうになつてゐた。宛然たる遊蕩の兵站が編成せられてゐたのである。

末造夫婦は新に不調和の階級を進める程の衝突をせずに、一月ばかりも暮してゐた。詰ま



「一握へばり附いてゐる。潤んだ細い目を、無理に大きく睜つて、末造の顔を見てゐたが、ずつと傍へゐざり寄つて、金天狗の燃えさしを撮んでゐた末造の手に、力一ぱいしがみ附いた。」

「廢せ」と云つて、末造はその手を振り放して、疊の上に散つた烟草の燃えさしを採み消した。

お上さんはしやくり上げながら、又末造の手にしがみ附いた。「どこにだつて、あなたのやうな人があつてせうか。いくらお金が出来たつて、自分ばかり横那顔をして、女房には着物一つ拵へてはくれずに、子供の世界をさせて置いて、好い氣になつて妄狂ひをするなんて。」

「廢せと云へば。」末造は再び女房の手を振り放した。子供が目を覺すぢやないか。それに女中部屋にも聞える。「窮めた聲に力を入れて云つたのである。」

末の子が寢返りをして、何か夢中で言つたので、お上さんも覺えず聲を低うして、「一體わたしどうすればいいのでせう」と云つて、今度は末造の胸の所に顔を押し附けて、しくしく泣いてゐる。

「どうするにも及ばないのだ。お前がが好いもんだから、人に挟み附けられたのだ。妾だの、園物だのつて誰がそんな事を言つたのだい。」

かう云ひながら、末造はこはれた丸髷のぶるぶる震へてゐるのを見て、醜い女はなぜ似合はない丸髷を結ひたがるものだらうと、氣樂な問題を考へた。そして丸髷の震動が次第に細かに刻むやうになると同時に、どの子供にも十分の食料を供給した、大きい乳房が、懷爐を抱いたやうに水落の邊に押し附けられるのを末造は感じながら、「誰が言つたのだ」と繰り返した。

「誰だつて好いぢやありませんか。本當なんだから。」乳房の壓はいよいよ加はつて来る。

「本當でないから、誰でも好くはないのだ。誰だかさう云へ。」

「それは言つたつてかまひませんとも、魚金のお上さんの。」

「なに丸で狸が物を言ふやうで、分かりやあしはない。むにやむにやのむにやむにやさんのとはなんだい。」

お上さんは顔を末造の胸から離して、悔やしさうに笑つた。「魚金のお上さんだと、さう云つてゐるぢやありませんか。」

「うん。あいつか。おほ方そんな事だらうと思つた。」末造は優しい目をして、女房の逆上したやうな顔を見ながら、徐かに金天狗に火を附けた。新聞屋なんかが好く社會の制裁だのなん

のと云ふが、己はその社會の制裁と云ふ奴を見た事がねえ。どうかしたら、あの金持引なんかが、その制裁と云ふ奴かも知れねえ。近所中のおせつかいをしやがる。あんな奴の言ふ事を眞に受けて溜まるものか。己が今本當の事を言つて聞いて造るから、好く聞いてゐる。」

お上さんの頭は霧が掛かつたやうに、ぼうつとしてゐるが、もしや騙されるのではあるまいかと云ふ猜疑だけは醒めてゐる。それでも熱心に末造の顔を見て謹聽してゐる。今社會の制裁と云ふことを言はれた時もさうであるが、いつでも末造が新聞で讀んだ、むづかしい詞を使つて何か言ふと、お上さんは氣おくれがして、分からねなりに屈服してしまふのである。

末造は折々烟草を呑んで煙を吹きながら、矢張女房の顔を暗示するやうにちつと見て、こんな事を言つてゐる。「それ、お前も知つてゐるだらう。まだ大學があつちにあつた頃、好く内に來た吉田さんと云ふのがゐたなあ。あの金縁目金を掛けて、べらべらした着物を着てゐた人よ。あれが千葉の病院へ行つてゐるが、まだ己の分の勘定が二年や三年ぢやあ埒が明かれないんだ。あの吉田さんが寄宿舎にゐた時から出來てゐた女で、こなひだまで七曲りの店を借りて入れて

お常は只胸の中が湧き返るやうで、何事をもはつきり考へることが出来ない。夫に對してどうしよう、なんと云はうと云ふ思案も無い。その癖早く夫に打つ附かつて、なんと云ふはなくてはゐられぬやうな氣がする。そしてこんな事を思ふ。あの蝙蝠傘を買つて来て貰つた時、わたしはどんなにか喜んだらう。これ迄こつちから頼まぬのに、物なんぞ買つて来てくれたことはない。どうして今度に限つて、みやげを買つて来てくれたのだらうと、不思議には思つたが、その不思議と云ふのも、どうして夫が急に親切になつたかと思つたのであつた。今考へれば、おほ方あの女が頼んで買つて貰つた時、ついでにわたしのを買つたのだらう。きつとさうに違ひない。さうとは知らずに、わたしは難有く思つたのだ。わたしには差されもしない、あんな傘を貰つて、難有く思つたのだ。傘ばかりでは無い。あの女の着物や髪物も、内で買つて遣つたのかも知れない。丁度わたしの差してゐる、毛縞子張の此の傘と、あの舶來の蝙蝠とが違ふやうに、わたしとあの女とは、身に着けてゐる程の物が皆違つてゐる。それにわたしばかりではない。子供に着物を着せたいと思つても、なかなか持へてくれはしない。男の子には

筒つぼが一枚あればいいものだと思ふ。女の子だと、小さいうちに着物を揃へるのは損だと云ふ。何萬と云ふ金を持つた人の女房や子供に、わたし達親子のやうななりをしてゐるものがあるだらうか。今から思つて見れば、あの女がゐたお蔭で、わたし達に構つてくれなかつたかも知れない。吉田さんの持物だつたなんと云ふのも、本當かどうか當にはならない。七曲りとかにゐた時分から、内で圍つて置いたかも知れない。いや。きつとさうに違ひない。金廻りが好くなつて、自分の着物や持物に贅澤をするやうになつたのを、附合があるからだのなんのと云つたが、あの女がゐたからだらう。わたしをどこへでも連れて行かずに、あの女を連れて行つたに違ひない。ええ、悔やしい。こんな事を思つてゐると、突然女中が叫んだ。

「あら、奥さん。どこへ入らつしやるのです。」  
お常はびつくりして立ち留まつた。下を向いてずんずん歩いてゐて、我家の門を通り過ぎようとしたのである。  
女中が無遠慮に笑つた。

# 拾肆

朝の食事の跡始末をして置いて、お常が胃物

に出掛ける時、末造は烟草を吞みつゝ新聞を讀んでゐたが、歸つて見れば、もう留守になつてゐた。若し内にゐたら、なんと云つて好いかは知らぬが、兎に角打つ附かつて、むしやぶり附いて、なんとでも云つて遣りたいやうな心持で歸つたお常は拍子抜けがした。午食の支度もしなくてはならない。もう間もなく入用になる子供の給の縫ひ掛けてあるのも縫はなくてはならない。お常は器械的に、いつものやうに働いてゐるうちに、夫に打つ附からうと思つた録録は次第に挫けて來た。これまでもひどい勢で、石垣に頭を打ち附ける積りで、夫に衝突したことは、度々ある。併しいつも頭にあらがふ筈の石垣が、腕を避ける暖簾であるのに驚かされる。そして夫が滑かな舌で、道理らしい事を言ふのを聞いてゐると、いつかその道理に服するのではなくて、只何がなしに萎やされてしまふのである。けふはなんだが、その第一の襲撃も旨く出来さうには思はれなくなつて來る。お常は子供を相手に午食を食べる。喧嘩をする子供の裁判をする。給を縫ふ。又夕食の支度をする。子供に行水を遣はせて、自分も使ふ。蚊遣をしながら夕食を食べる。食後に遊びに出た子供が遊び草臥れて歸る。女中が勝手から出

りその間は末造の詭辯や功を奏してゐたのである。然るに或る日以外な邊から破綻が生じた。

さいはひ夫が内にゐるので、朝の涼しいうちに買物をして來ると云つて、お常は女中を連れて廣小路まで付た。その歸りに仲町を通り掛かると、背後から女中が袂をそつと引く。「な

んだい」と叱るやうに云つて、女中の顔を見る。女中は黙つて左側の店に立つてゐる女を指さす。お常はししぶその方を見て、覺えず足を駐める。そのとたんに女は振り返る。お常と女の女とは顔を見合せたのである。

お常は最初藝者かと思つた。若し藝者なら、數寄屋町に此女程どこもかしこも揃つて美しいのは、外にあるまいと、せはしい暇に判斷した。併し次の瞬間には、此女が藝者の持つてゐる何物かを持つてゐないのに氣が附いた。その何物かはお常には名狀することは出来ない。それを説明しようと思へば、態度の誇張とでも云はうか。藝者は着物を好い恰好に着る。その好い恰好は必ず幾分か誇張せられる。誇張せられるから、おとなしいと云ふ所が失はれる。お常の日に何物かが無いと感ぜられたのは、此誇張である。

店の前の女は、傍を通り過ぎる誰やらが足を

駐めたのを、殆ど意識せずに感じて、振り返つて見たが、その通り過ぎる人の上に、なんの注意すべき點をも見出さなかつたので、蝙蝠傘を少し内廻轉をさせた隙の間に寄せ掛けて、帯の間から出して持つてゐた、小さい蝦蟇口の中を、項を屈めて覗き込んだ。小さい銀貨を捜してゐるのである。

店は仲町の、南側の「たしがらや」であつた。

「たしがらや」俄さに讀めばやらした」と、何者かの言ひ出した、珍らしい屋號の此店には、金字を彫刷した、赤い紙袋に入れた、齒磨を賣つてゐた。まだ鎌齒磨なんぞの舶來してゐなかつたその頃、上等のざら附かない製品は、牡丹の香のする、岸田の花王散と、このたしがらやの齒磨とであつた。店の前の女は別人でない。朝早く父親の所を訪ねた歸りに、齒磨を買ひに寄つたお玉であつた。

お常が四五歩通り過ぎた時、女中が囁いた。

「奥さん。あれですよ。無縁坂の女は。」

黙つて頷いたお常には、此詞が格別の効果を與へないので、女中は意外に思つた。あの女は藝者ではないと思ふと同時に、お常は本能的に無縁坂の女だと云ふことを嗅つてゐたのである。それには女中が只美しい女がゐると云ふ

で、袖を引いて教へはしない筈だと云ふ判斷も手傳つてゐる、今一つ意外な事が發覺してゐる。それはお玉が隙の所に寄せ掛けてゐた蝙蝠傘である。

もう一月餘り前の事であつた。夫が或る日廣濱から歸つて、みやけに蝙蝠の日傘を買つて來た。柄がひどく長くて、張つてある切れが割合に小さい。春の高い西洋の女が手に持つておもちやにするには好からうが、ずんぐりむつくりしたお常が持つて見ると、極端に言へば、物干竿の尖へおむつを引つ掛けて持つたやうである。それでその儘さずにしまつて置いた。その傘は白地に細かい辨慶縞のやうな形が、藍で染め出してあつた。たしがらやの店にゐた女の蝙蝠傘がそれと同じだと云ふことを、お常はつきり認めた。

酒屋の角を池の方へ曲がる時、女中が機嫌を取るやうに云つた。

「ねえ、奥さん。そんなに好い女ぢやありませんでせう。顔が平べつたくて、いやに春が高くて。」

「そんな事を言ふものぢやないよ」と云つた切、相手にならずにずんずん歩く。女中は當がはづれて、不平らしい顔をして附いて行く。



でも好い人間だから、相手にはならないでせう。さうね。ゐてもゐなくつてもぢやない。ゐない方が好いに極まつてゐるのだづけ。」

「いやにひねくれた物の言ひやうをするなあ。ゐない方が好いのだつて。大違だ。ゐなくては困る。子供の面倒を見て貰ふばかりでも、大役だからな。」

「それは跡へ綺麗なおつ母さんが来て、面倒を見てくれますでせう。繼子になるのだけど。」

「分からねえ。二親揃つて附いてゐるから、繼子なんぞにはならない筈だ。」

「さう。きつとさうなの。まあ、好い氣な物ね。ではいつまでも今のやうにしてゐる積なのね。」

「知れた事よ。」

「さう。別品とおたふくとに、お揃の蝙蝠を差させて。」

「おや。なんだい、それは。お茶番の趣向見たいな事を言つてゐるぢやないか。」

「ええ。どうせわたしなんぞは眞面目な狂言には出られませんか。」

「狂言より話が少し眞面目にして貰ひたいなあ。一體その蝙蝠でえのはなんだい。」

「分かつてゐるでせう。」

「そんなら言ひませう。あの、いつか横濱から蝙蝠を買つて来たでせう。」

「それがどうした。」

「あれはわたしばかりに買つて下すつたのぢやなかつたのね。」

「お前ばかりでなくて、誰に買つて遣るものかい。」

「いいえ。さうぢやないでせう。あれは無縁坂の女のを買つた序に、ふいと思ひ附いて、わたしのをも買つて来たのでせう。」

「さつきから蝙蝠の話はしてゐても、かう具體的に云ふと同時に、お前は悔やしが込み上げて来るやうに感ずるのである。」

「お手の筋だとしても云ひたい程適中したので、末造はざくりとしたが、反對に呆れたやうな顔をして見せた。『べらぼうな話だなあ。何かい。』

その、お前に買った傘と同じ傘を、吉田さんの女が持つてゐるとでも云ふわけかい。」

「それは同じのを買つて遣つたのだから、同じのを持つてゐるに極まつてゐます。」

聲が際立つて鋭くなつてゐる。

「なんの事だ。呆れたものだぜ。好い加減にしろい。なる程お前に横濱で買つて遣つた時は、サンプルで来たのだと云ふことだつたが、もう

今頃は銀座邊でさらに賣つてゐるに違ない。芝居なんぞに好くある奴で、これがほんとの無實の罪と云ふのだ。そして何かい。お前、あの吉田さんの女に、どこで逢つたとしても云ふのかい。好く分かつたなあ。」

「それは分かりますとも。ここいらで知らないものはないので。別品だから。」

い聲である。これまでは末造がしらばつくれると、ついさうかと思つてしまつたが、今度は餘り強烈な直覺をして、その出来事を目前に見たやうに感じてゐるので、末造の詞を、なる程さうでもあらうかとは、どうしても思はれなかつた。

末造はどうして逢つたか、話でもしたのかと、種々に考へてゐながら、此場合に根掘り葉掘り問ふのは不利だと思つて、わざと追跡しない。

「別品だつて。あんなのが別品と云ふのかなあ。妙に顔の平べつたいやうな女だが。」

お前は黙つてゐた。併し憎い女の顔に難癖を附けた夫の詞に幾分か感情を融和させられた。

「此晩にも物と言ひ合つて興奮した跡の夫婦の中直りがあつた。併しお常の心には、刺された」と

とげの抜けないやうな痛みが残つてゐた。

て来て、極まつた所に床を取つたり、蚊帳を吊つたりする。手水をさせて子供を寝かす。夫の夕食の膳に飯除を被せて、火鉢に鐵瓶を掛けて、次の間に置く。夫が夕食に歸らなかつた時は、いつでもかうして置くのである。

お常はこれ丈の事を器械的にしてしまつた。

そして團扇を一本持つて蚊屋の中へ這入つて据わつた。その時けさ途で逢つた、あの女の所に、今時分夫が往つてゐるだらうと云ふことが、今更のやうにはつきりと想像せられた。どうも體を落ち着けて、据わつてはゐられぬやうな氣持がする。どうしよう、どうしようと思ふうちに、ふらふらと無縁坂の家の所まで往つて見たくなる。いつか藤村へ、子供の一番好きな田舎饅頭を買ひに往つた時したて物の師匠の内の隣と云ふのは此家だなと思つて、見て通つたので、それらしい格子戸の家は分かつてゐる。ついあそこまで往つて見たい。火影が外へ差してゐるか。話聲が微かにでも聞えてゐるか。それ丈でも見て來たい。いやいや、そんな事は出来ない。外へ出るには女中部屋の後廊下を通らぬわけには行かない。この頃はあの廊下の所の障子がはづしてある。松はまだ起きて雜物をしてゐる筈である。今時分どこへ往く

のだと聞かれた時、なんとも返事のしやうがない。何か買ひに出ると云つたら、松が自分で行かうと云ふだらう。して見れば、どんなに往つて見たくても、そつと往つて見ることは出来ない。ええ、どうしたら好からう。けさ内へ歸る時は、ちつとも早くあの人に逢ひたいと思つたが、あの時逢つたら、わたしはなんと云つただらう。逢つたら、わたしの事だから、取留のな事はばかり言つたに違ひない。さうしたらあの人が又好い加減の事を言つて、わたしを騙してしまつただらう。あんな利口な人だから、どうせ喧嘩をしては慥けない。いつそ黙つてゐようか。併し黙つてゐてどうなるだらうか。あんな女が附いてゐては、わたしなんぞはどうなつても構はぬ氣になつてゐるだらう。どうしよう。

こんな事を繰り返し繰り返し思つては、何處か思想が初の發足點に踰戻をする。そのうちに頭にぼんやりして來て、何がなんだか分からなくなる。併し兎に角烈しく夫に打つ附かつたつて駄目だから、よさうと云ふこと丈は極めることが出來た。

そこへ末造が這入つて來た。お常はわざとらしく取り上げた團扇の柄をいぢつて黙つて

ゐる。

「おや。又變な様子をしてゐるな。どうしたのだい。」上さんがいつもする「お歸りなさい」と云ふ挨拶をしないでゐても、別に腹は立たない。機嫌が好いからである。

お常は黙つてゐる。衝突を避けようとは思つたが、夫の歸つたのを見ると、悔やしさが込み上げて來て、まるで反抗せずにはゐられさうになくなつた。

「又何か下らない事を考へてゐるな。よせよせ。」上さんの肩の所に手を掛けて、二三通ゆさぶつて置いて、自分の床に据わつた。

「わたしどうしようかと思つてゐますの。歸らうと云つたつて、歸る内は無し、子供もあるし。」

「なんだと。どうしようかと思つてゐる。どうもしなくなつたつて好いちやないか。天下は太平無事だ。」

「それはあなたは太平樂を言つてゐられますでせう。わたしきへどうにかなつてしまへば好いのだから。」

「をかしいなあ。どうにかなるなんて。どうなるにも及ばない。その儘であれば好い。」  
「たんと茶にしてお出なさい。ゐてもゐなくつ

時の方が機嫌が悪い。そこで内にゐまいとすれば、強ひて内にゐさせようとする。さうして見れば、求めて己を内にゐさせて、求めて自分の機嫌を悪くしてゐるのである。それに就いて思ひ出した事がある。和泉橋時代に金を貸して遣つた學生に猪飼と云ふのがゐた。身なりに少しも構はないと云ふ風をして、素足に足駄を穿いて、左の肩を二三寸高くして歩いてゐた。そいつがどうしても金を返さず、書換もせずに逃げ廻つてゐたのに、或日青石横町の角で出くはした。「どこへ行くのです」と云ふと、「おきそこの柔術の先生の所へ行くのだよ。例のはいづれそのうち」と云つて摩り抜けて行つた。己はその儘別れて歩き出す眞似をして、そつと跡へ戻つて、角に立つて見てゐた。猪飼は伊豫紋に遣入つた。己はそれを突き留めて置いて、廣小路で用を達して、暫く立つてから伊豫紋へ押し掛けて行つた。猪飼双流石に驚いたが、持前の豪傑氣取で、藝者を二人呼んで馬鹿騒ぎをしてゐる席へ、己を無理に引き摩り上げて、「野暮を言はずにけふは一杯飲んでくれ」と云つて、己に酒を飲ませやがつた。あの時己は始めて藝者と云ふものを座敷で見たが、その中に凄いやうな意氣な女がゐた。おしゆんと言つたつけ。そいつが

酔つ拂つて猪飼の前に据わつて、何が癪に障つてゐたのだから、毒づき始めた。その時の詞を、己は黙つて聞いてゐたが、いまだに忘れない。「猪飼さん。あなたきつさうな風をしてゐても、まるでいく地のない方ね。あなたに言つて聞せて置くのですが、女と云ふものは時々ぶんなぐつてくれる男にでなくつては惚れません。好く覺えて入らつしやい」と云つたつけ。藝者は限らない、女と云ふものはさうしたものかも知れない。此頃のお常奴は、己を傍に引き附けて置いてふくれ面をして抗つてばかりしうとしゃがる。己にどうかして貰ひたいと云ふ様子が現れてゐる。打たれたいのだ。さうだ。打たれたいのだ。それに相違ない。お常奴は己がこれまでも食ふ物もろくに食はせないで、牛馬のやうに働かせてゐたものだから、獸のやうになつてゐて、女らしい性質が出ずにゐたのだ。それが今の家に引き越した頃から、女中を使つて、奥さんと云はれて、大夫人間らしい暮らしをして、少し世間並の女になり掛かつて來たのだ。そこでおしゆんの云つたやうにぶんなぐつて貰ひたくなつたのだ。

旦那と云つてお辭儀をする。踏まれても蹴られても、損さへしなれば好いと云ふ氣になつて、世間を渡つて來た。毎日毎日どこへ往つても、誰の前でも、平蜘蛛のやうになつて這ひつくばつて通つた。世間の奴等につき合つて見るに、目上に腰の低い奴は、目下にはつらく當つて、弱いものいぢめをする。酔つて女や子供をなぐる。己には目上も目下もない。己に金を儲けさせてくれるものの前には這ひつくばふ。さうでない奴は、誰でも彼でも一切あるもゐないも同じ事だ。てんで相手にならない。打ち遣つて置く。なぐるなんと云ふ餘計な手数は掛けない。そんな無駄をする程なら、己は利足の勘定でもする。女房をもその扱ひにしてゐたのだ。お常奴己になぐつて貰ひたくなつたのだ。當人には氣の毒だが、こればかりはお生憎株だ。債務者の脂を柚子なら苦い汁が出るまで絞るとは己に出来る。誰をも打つことは出来ない。末造はこんな事を考へたのである。

## 拾陸

無縁庵の人通りが繁くなつた。九月になつて、大學の課程が始まるので、國々へ歸つてゐた學生が、一時に本郷界隈の下宿屋に戻つたの



# 拾伍

末造の家の空氣は次第に沈んだ、重くろしい方へ傾いて來た。お常は折々只ぼううつとして空を見てゐて、何事も手に附かぬことがある。そんな時には子供の世話も何も出来なくなつて、子供が何か欲しいと云へば、すぐにあらあらしく叱る。叱つて置いて氣が附いて、子供にあやまつたり、獨りで泣いたりする。女中が飯の菜を何にしようかと問うても、返事をしなかつたり、「お前の好いやうにおし」と云つたりする。末造の子供は學校では、高利貸の子だと云つて、友達に擯斥せられても、末造が綺麗好で、女房に世話をさせるので、目立つて清潔になつてゐたのが、今は五味だらけの頭をして、凝びた儘の着物を着て往來で遊んでゐることがあるやうになつた。下女はお上さんがあんなでは困ると、口小言を言ひながら、下手の乗つてゐる馬がなまけて道草を食ふやうに、物事を投擲して、鼠入らずの中で着が腐つたり、野菜が干物になつたりする。

家の中の事を生帳面にしたがる末造には、こんな不始末を見てゐるのが苦痛でならない。併しかなつた元は分かつてゐて、自分が悪いの

だと思ふので、小言を言ふわけにも行かない。それに末造は平生小言を言ふ場合にも、笑談のやうに手輕に言つて、相手に反省させるのを得意としてゐるのに、その笑談らしい態度が却つて女房の機嫌を損ずるやうに見える。

末造は黙つて女房を観察し出した。そして意外な事を發見した。それはお常の變な素振が、亭主の内にゐる時殊に甚しくて、留守になると、却つて醒覺したやうになつて働いてゐることが多いと云ふ事である。子供や下女の話を聞いて、此關係を知つた時、末造は最初は驚いたが、伶俐な頭で色々考へて見た。これはする事の氣に食はぬ己の顔を見てゐる間、此頃の病氣を出すのだ。己は女房にどうかして夫が冷淡だと思はせまい、疎まれるやうに感ぜさせまいとしてゐるのに、却つて己が内にゐる時の方が不機嫌だとすると、丁度藥を飲ませて病氣を悪くするやうなものである。こんな詰まらぬ事はない。これからは一つ反對に見ようと思つた。

末造はいつもより早く内を出たり、いつもより遅く内へ歸つたりするやうになつた。併しその結果は非常に悪かつた。早く出た時は、女房が最初は只驚いて黙つて見てゐた。遅く歸つ

た時は、最初の度によつても勘ねて見せる消極的手段と違つて、もう我慢がし切れない、潮怒の袋の緒が切れたと云ふ風で、あなた今までどこにゐましたの」と詰め寄つて來た。そして爆發的に泣き出した。その次の度からは早く出ようとすると、「あなた今からどこへ行くのです」と云つて、無理に留めようとする。行先を言へば諍だと云ふ。權はずに用ようすると、是非聞きたい事があるから、ちよいとでもいい、待つて貰ひたいと云ふ。着物を擧まへて放さなかつたり、玄關に立ち塞がつたり、女中の見る目も厭はずに、出て行くのを妨げようとする。末造は氣に食はぬ事をも笑談のやうにして荒立てずに済ます流義なのに、むしろやり附くのを振りに放す、女房が倒れると云ふ不體裁を女中に見られた事もある。そんな時に末造がおとなしく留められて内にゐて、さあ、用事を聞かうと云ふと、「あなた、わたしをどうしてくれる氣な」とか、「かうしてゐて、わたしの行末はどうなるでせう」とか、なかなか一朝一夕に解決の出来ぬ難問題を提出する。要するに末造が女房の病氣に試みた早出遅歸の對症療法は全く功を奏せなかつたのである。

末造は又考へて見た。女房は己の内にゐる

かしい人柄だと思ひ初めた。それから毎日窓から外を見てゐるにも、又あの人が通りはしないかと待つやうになつた。

まだ名前も知らず、どこに住まつてゐる人か知らぬうちに、度々顔を見合はすので、お玉はいつか自然に親しい心持になつた。そして自分の方から笑ひ掛けたが、それは氣の馳んだ、抑制作用の麻痺した刹那の出来事で、おとなしい質のお玉にはこちらから戀をし掛けようとは、はつきり意識して、故意にそんな事をする心はなかつた。

岡田が始めて帽子を取つて會釋した時、お玉は胸を躍らせて、自分で自分の顔の赤くなるのを感じた。女は直覺が鋭い。お玉には岡田の帽子を取つたのが發作的行爲で、故意にしたのではないことが明白に知れてゐた。そこで窓の格子を隔てた覺束ない不言の交際が愛に新しいepochに入つたのを、此上もなく嬉しく思つて、幾度も繰り返しては、その時の岡田の様子を想像に畫いて見るのであつた。

妾も横那の家にゐると、世間並の保護の下に立つてゐるが、圍物には人の知らぬ苦勞がある。お玉の内へも或る日印絆纏を裏返して着た三十

前後の男が来て、下總のもので國へ歸るのだが、足を傷めて歩かれぬから、合力をしてくれと云つた。十錢銀貨を紙に包んで、梅に持たせて出すと紙を明けて見て「十錢ですか」と云つて、にやりと笑つて、「おほ方間違だらうから、聞いて見てくんねえ」と云ひつつ投げ出した。

梅が眞つ赤になつて、それを拾つて這入る跡から、男は無遠慮に上がつて来て、お玉の炭をついでゐる箱火鉢の向うに据わつた。なんだか色色な事を言ふが、取り留めた話ではない。監獄にゐた時どうかと云ふことを幾度も云つて、息張るかと思へば、泣言を言つてゐる。酒の匂が胸の悪い程するのである。

お玉はこけて泣き出したのを我慢して、その頃通用してゐた骨牌のやうな形の青い五十錢札を二枚、見てゐる前で出して紙に包んで、黙つて男の手に渡した。男は存外造作なく満足して、「半助でも二枚ありや結構だ、姉えさん、お前さんは分りの好い人だ、きつと出世しますよ」と云つて、覺束ない足を踏み締めて歸つた。

こんな出来事があつたので、お玉は心細くてならぬ所から、「隣を買ふ」と云ふことをも覺えて、變つた菜でも拵へた時は、一人暮らして

ある右隣の裁縫のお師匠さんの所へ、梅に持たせて造るやうになつた。

師匠はお貞と云つて、四十を越してゐるのに、まだどこやら若く見える所のある、色の白い女である。前田家の奥で、三十になるまで勤めて、夫を持つたが間もなく死なれてしまつたと云ふ。詞遣が上品で、お家流の手をよく書く。お玉が手習がしたいと云つた時、手本などを貸してくれた。

或る日の朝お貞が裏口から、前日にお玉の遣つた何やらの禮を言ひに來た。暫く立話をしてゐるうちに、お貞があなた岡田さんがお近づきですな」と云つた。

お玉はまだ岡田と云ふ名を知らない。それでゐて、お師匠さんの云ふのはあの學生さんの事だと云ふこと、かう聞かれるのは自分に辭儀をした處を見られたのだと云ふこと、此場合では厭でも知つた振をしなくてはならぬと云ふことなどが、稻妻のやうに心頭を掠めて過ぎた。そして迎疑した跡をお貞が認め得ぬ程速かに、「ええ」と答へた。

「あなたお立派な方であつて、大層品行が好くてお出なさるのですつてね」とお貞が云つた。

「あなた好く御存じね」と大膽にお玉が云つた。

である。

朝晩はもう涼しくても、書中はまだ暑い日がある。お玉の家では、越して来た時掛け替へた青簾の、色の褪める隙のないのが、眩掛窓の竹格子の内側を、上から下迄透間なく深く鎮してゐる。無聊に苦んでゐるお玉は、その窓の内、曉齋や是真の畫のある團扇を幾つも挿した團扇挿しの下の柱にもたれて、ぼんやり往來を眺めてゐる。三時が過ぎると、學生が三四人づつの群をなして通る。その度毎に、隣の裁縫の師匠の家で、小雀の轉るやうな娘達の聲が一際喧しくなる。それに促されてお玉もどんな人が通るか、と、覺えず氣を附けて見ることがある。

その頃の學生は、七八分通りは後に言ふ壯士肌で、稀に紳士風なのがある、それは卒業直前の人達であつた。色の白い、目鼻立の好い男は、兎角淺薄らしく、利いた風で、懐かしくない。さうでないのは、學問の出来る人が其中にあるのかは知れぬが、女の目には荒々しく見え、厭である。それでもお玉は毎日見るともなしに、窓の外を通る學生を見てゐる。そして或る日自分の胸に何物かが芽ざして來てゐるらしく感じて、はつと驚いた。意識の關の下で眩を結んで、形が出來てから、突然躍り出したやうな

想像の境に驚かされたのである。

お玉は父親を幸福にしようと思ふ目的以外に、何の目的も有してゐなかつたので、無理に堅い父親を口説き落すやうにして人の妾になつた。そしてそれを墮落せられるだけ墮落するのだと見て、その利他的行爲の中に一種の安心を求めてゐた。併しその横那と頼んだ人が、人もあらうに高利貸であつたと知つた時は、餘りの事に途方に暮れた。そこでどうも自分一人で胸のうやもやを排し去ることが出来なくなつて、その心持を父親に打ち明けて、一しよに苦み悶えて貰はうと思つた。さうは思つたものの、池の端の父親を尋ねてその平穩な生活を目のあたり見ては、どうも老人の手にしてゐる杯の裡に、一滴の毒を注ぐに忍びない。よしやせつない思ふにしても、その思を我胸一つに疊んで置かうと決心した。そして此決心と同時に、これまで人にたよることしか知らなかつたお玉が、始めて獨立したやうな心持になつた。

此時からお玉は自分で自分の言つたり爲たりする事を竊に觀察するやうになつて、末造が來てもこれまでのやうに嬌まりのない直情で接せずに、意識してもてなすやうになつた。その間別に本心があつて、體を離れて傍へ退いて

見てゐる。そしてその本心は末造をも、末造の自由になつてゐる。自分を嘲つてゐる。お玉はそれに始て氣が附いた時ぞつとした。併し時が立つと共に、お玉は慣れて、自分の心はさうなくてはならぬものやうに感じて來た。

それからお玉が末造を遇することは愈厚くなつて、お玉の心は愈末造に疎くなつた。そして末造に世話になつてゐるのが難有くもなく、自分が末造の爲向けてくれる事を恩に被らないでやうに感ずる。それと同時に又なんの機をも受けてゐない蕪なしの自分ではあるが、その自分が末造の持物になつて果てるのは惜しいやうに思ふ。とうとう往來を通る學生を見てゐる、あの中に若し頼もしい人がゐて、自分を今の境界から救つてくれるやうにはなるまいかとまで考へた。そしてさう云ふ想像に耽る自分を、忽然意識した時、はつと驚いたのである。

此時お玉と顔を識り合つたのが岡川であつた。お玉のためには岡川も只窓の外を通る學生の一人に過ぎない。併し際立つて立派な紅顔の美少年でありながら、已惚らしい、氣障な態度がないのにお玉は氣が附いて、何とはなしに懐



の杖を、柳原の方へ向いてぶらぶら歩いて行く。川岸の柳の下に大きい傘を張つて、其下で十二三の娘にかつぽれを踊らせてゐる男がある。その周囲にはいつものやうに人が集まつて見てゐる。末造がちよいと足を駄めて踊を見てゐると、即半纏を着た男が打つ附かりさうにして、避けて行つた。目ざとく振り返つた末造と、その男は目を見合せて直ぐに背中を向けて通り過ぎた。「なんだ、目先の見えぬえとつぷ

やきながら、末造は袖に入れてゐた手で懷中を捜つた。無論何も取られてはゐなかつた。この攫徒は實際目先が見えぬのであつた。なぜと云ふに、末造は夫婦喧嘩をした日には、神經が緊張してゐて、不斷氣の附かぬ程の事にも氣が附く。鋭敏な感覚が一層鋭敏になつてゐる。攫徒の方ですらうと云ふ意志が生ずるに先だつて、末造はそれを感じる位である。こんな時には自己を抑制することの出来るのを誇つてゐる末造も、多少その抑制力が弛んでゐる。併し大抵の人にはそれが分らない。若し非常に感覺の鋭敏な人がゐて、細かに末造を観察したら、彼が常より稍能辨になつてゐるのに氣が附くだらう。そして彼の人の世話を焼いたり、人に親切らしい事を言つたりする言語舉動の間に、どこ

か慌ただしいやうな、稍不自然な處のあるのを認めるだらう。

もう内を飛び出してから餘程時間が立つたやうに思つて、川岸を跡へ引き返しつつ懷時計を出して見た。まだやつと十一時である。内を出てから三十分も立つてはゐぬのである。

末造は又どこを當ともなしに、淡路町から神保町へ何か急な用事でもありさうな様子をして歩いて行く。今川小路の少し手前にお茶漬と云ふ看板を出した家が其頃あつた。二十錢ばかりでお膳を据ゑて、香の物に茶まで出す。末造は此家を知つてゐるので、午を食べに寄らうかと思つたが、それにはまだ少し早かつた。そこを通り過ぎると、右へ廻つて組橋の手前の廣い町に出る。此町は今のやうに駿河臺の下まで廣々と附いてゐたのではない。殆ど袋町のやうに、今末造の來た方角へ曲がる處で終つて、それから醫學生が蟲株突起と名づけた狭い横町が、あの山岡鐵舟の字を柱に据りつけた社の前を通つてゐた。これは袋町めいた、組橋の手前の廣い町を盲腸に譬へたものである。

末造は組橋を渡つた。右側に飼鳥を賣る店があつて、いろいろな鳥の賑やかな囀りが聞える。末造は今でも残つてゐる此店の前に立ち

留まつて、櫓に高く吊つてある鸚鵡や茶吉了の籠、下に置き並べてある白鳩や朝鮮鳩の籠杯を眺めて、それから奥の方に幾段にも積み重ねてある小鳥の籠に目を移した。暗くにも飛び廻るにも、この小さい連中が最も聲高で最も活潑であるが、中にも目立つて籠の数が多く、賑やかなのは、明るい黄いろな外國種のカナリア共であつた。併し猶好く見てゐるうちに、沈んだ強い色で小さい體を彩られてゐる紅雀が末造の目を引いた。末造はふいとあれを買つて持つて往つて、お玉に飼はせて置いたら、さぞふさはしからうと感じた。そこで餘り賣りがりもしなさうな様子をしてゐる爺いさんに値を問うて、一つがひの紅雀を買つた。代を拂つてしまつた時、爺いさんはどうして持つて行くかと問うた。籠に入れて賣るのではないかと云へば、さうでないといふ。やうやう籠を一つ頼むやうにして賣つて貰つて、それに紅雀を入れさせた。幾羽もゐる籠へ、羞びた手をあらあらしく差し込んで、二羽握み出して、空籠に移し入れるのである。それで雌雄が分かるかと云へば、しづしづへえと返事をした。

末造は紅雀の籠を提げて組橋の方へ引き返した。今度は歩き方が緩やかになつて、折々

「上條のお上さんも、大勢學生さん達が下宿してゐなすつても、あんな方は外にない」と云つてゐますの。」かう云つて置いて、お貞は歸つた。お玉は自分が寝められたやうな氣がした。そして「上條、岡田」と口の内で繰り返した。

### 拾漆

お玉の所へ末造の來る度数は、時の立つに連れて少くはならないで、却つて多くなつた。それはこれまでのやうに極まつて晩に來る外に、不規則な時間にもよいちよい來るやうになつたのである。なぜさうなつたかと云ふに、女房のお常がうるさく附き纏つて、どうかしてくれ、どうかしてくれと云ふので、ふいと逃げ出して無縁坂へ來るからである。いつも末造がそんな時、どうもすることはない、これまで通りにしてゐれば好いのだと云ふと、どうかしなくてはゐられぬと云つて、里へ歸られぬ事や、子供の手放されぬ事や、自分の年を取つた事や、詰まり生活狀態の變更に對するあらゆる障礙を並べて口説き立てる。それでも末造はどうもするとはない、どうもしなくても好いと繰り返す。そのうちにお常は次第に腹を立てて來て、手が付けられぬやうになる。そこで飛び出すことに

なつてゐる。何事も理窟つぽく、數學的に物を考へる末造が爲めには、お常の言つてゐる事が不思議でならない。丁度一方が開放されて、三方が壁で塞がれてゐる間の、その開放された戸口を背にして立つてゐて、どちらへも往かれぬと云つて、悶え苦む人を見るやうな氣がする。戸口は開放されてゐるではないか。なぜ振り返つて見ないのだと云ふより外に、その人に對して言ふべき詞はない。お常の身の上はこれまでより樂にこなつてゐるが、少しも壓制だの窘迫だの掣肘だのを受けてはゐない。なるほど無縁坂と云ふものが新に出來たには相違ない。併し世間の男のやうに、自分はその爲めに、女房に冷淡になつたとか、苛酷になつたとか云ふことはない。寧ろこれまでよりは親切に、寛大に取り扱つてゐる。戸口は依然として開放されてゐるではないかと思ふのである。

無論末造のかう云ふ考へには、身勝手が交つてゐる。なぜと云ふに、物質的に女房に爲向ける事がこれ迄と變らぬにしても、又自分が女房に對する詞や態度が變らぬにしても、お玉と云ふものがゐる今を、ゐなかつた昔と同じやうに思へと云ふのは、無理な要求である。お常がために目の内の刺になつてゐるお玉ではないか。

それを抜いて安心させて遣らうと云ふ意志が自分には無いではないか。固よりお常は物事に筋道を立てて考へるやうな女ではないから、そんな事をはつきり意識してゐるが、末造の謂ふ戸口が依然として開放されてはゐない。お常が現在の安心や未來の希望を覗く戸口には、重くらしい、黒い影が落ちてゐるのである。

或る日末造は喧嘩をして、内をひよいと飛び出した。時刻は午前十時過ぎでもあつただらう。直ぐに無縁坂へ往かうかと思つたが、生憎女中が小さい子を連れて、七軒町の通にゐたので、わざと切通の方へ抜けて、どこへ往くと云ふ氣もなしに、天神町から五軒町へと、忙がしさに歩いて行つた。折々「糞」畜生などと云ふ、いかがはしい單語を口の内でつぶやいてゐるのである。昌平橋に掛かる時向うから藝者が來た。どこかお玉に似てゐると思つて、傍を摩れ違ふのを好く見れば、顔は雀斑だらけであつた。矢つ張お玉の方が別品だなと思ふと同時に、心に慍懣と満足とを覺えて、暫く足を橋の上に駐めて、藝者の後影を見送つた。多分買物にでも出たのだらう、雀斑藝者は講武所の横町へ姿を隠してしまつた。

その頃まだ珍らしい見物になつてゐた眼鏡橋

から頭がぼううつとして來たので、午飯を食つてからばらばら出掛けると、妙な事に出逢つてねえ。」岡田は僕の顔を見ずに、窓の方へ向いてかう云つた。

「どんな事だい。」

「蛇退治を遣つたのだ。」岡田は僕の方へ顔を向けた。

「美人をでも助けたのぢやないか。」

「いや。助けたのは鳥だがね、美人にも關係してゐるのだよ。」

「それは面白い。話して聞かせ給へ。」

### 拾玖

岡田はこんな話をした。

雲が慌ただしく飛んで、物狂ほしい風が一吹二吹衝突的に起つて、街の塵を捲き上げては又息む午過ぎに、半日讀んだ支那小説に頭を痛めた岡田は、どこへ往くと云ふ當てもなしに、上條の家を出て、習慣に任せて無縁坂の方へ曲がつた。頭はぼんやりしてゐた。一體支那小説はどれでもさうだが、中にも金瓶梅は平穩な敘事が十枚か二十枚かあると思ふと、約束したやうに怪しからん事が書いてある。あんな本を讀んだ跡だからねえ、僕はさぞ馬鹿げた顔をして歩い

てゐただらうと思ふよ」と、岡田は云つた。

暫くして右側が岩崎の屋敷の石垣になつて、道が爪先下りになつた頃、左側に人立ちのしてゐるのに氣が附いた。それが丁度いつも自分の殊更に見て通る家の前であつたが、その事実は岡田が話す時打ち明けずにしまつた。集まつてゐるのは女ばかりで、十人ばかりもゐただらう。大半は小娘だから、小鳥の囀るやうに何やら言つて喋いてゐる。岡田は何事も辨へず、又それを知らうと云ふ好奇心を起す暇もなく、今までの道真ん中を歩いてゐた足を二三歩その方へ向けた。

大勢の女の目が只一つの物に集注してゐるので、岡田はその視線を追つてこの騒ぎの元を見附けた。それはその家の格子窓の上に吊るしてある鳥籠である。女共の騒ぐのも無理はない。岡田もその籠の中の様子を見て驚いた。鳥はばたばた羽ばたきをして、啼きながら狭い籠の中を飛び廻つてゐる。何物が鳥に不安を興へてゐるのかと思つて好く見れば、大きい青大将が首を籠の中に入れてゐるのである。頭を柳のやうに細い竹と竹との間に押し込んだものと見えて、籠は一寸見た所では破れてはゐない。蛇は自分の體の大きな入口を開けて首

を入れたのである。岡田は好く見ようと思つて二三歩進んだ。小娘共の肩を並べてゐる背後に立つやうになつたのである。小娘共は言ひ合せたやうに岡田を救助者として迎へる氣になつたらしく、道を開いて岡田を前へ出した。岡田は此時又新しい事實を發見した。それは鳥が一羽ではないと云ふ事である。羽ばたきをして逃げ廻つてゐる鳥の外に、同じ羽色の鳥が今一羽もう蛇に銜へられてゐる。片方の羽の全部を口に含まれてゐるに過ぎないのに、恐怖のためか死んだやうになつて、一方の羽をぐたりと垂れて、體が綿のやうになつてゐる。

此時家の主人らしい稍年上の女が、慌ただしげに、しかも遠慮らしく岡田に物を言つた。蛇をどうかしてくれるわけには行かないかと云ふのである。「お隣へお爲事のお稽古に來て入らつしやる皆さんが、すぐに大勢で入らつしやつて下すたのですが、どうも女の手ではどうする事も出来ませんでございます」と女は言ひ足した。小娘の中の一人が、「この方が鳥の騒ぐのを聞いて、隙子を開けて見て、蛇を見附けなすつた時、きやつと聲を立てなすつたもんですから、わたし共はお爲事を置いて、皆出て來ましたが、本當にどうもいたすことが出来ません



籠を持ち上げては、中の鳥を覗いて見た。喧嘩をして内を飛び出した気分が、拭ひ去つたやうに消えてしまつて、不審此男のどこかに潜んでゐる、優しい心が表面に浮び出てゐる。籠の中の鳥は、籠の揺れるのに怯れてか、止まり木をしつかり獲んで、羽をすぼめるやうにして、身動きもしない。末造は覗いて見る度に、早く無縁坂の家に持つて往つて、窓の所に吊るして置きたいと思つた。

今川小路を通る時、末造は茶漬屋に寄つて午食をした。女中の据ゑた黒塗の膳の向うに、紅雀の籠を置いて、日に可哀らしい小鳥を見心に可哀らしいお玉の事を思ひつつ、末造は餘り御馳走でもない茶漬屋の飯を旨さうに食つた。

### 拾捌

末造がお玉に買つて遣つた紅雀は、岡らずもお玉と岡田とが詞を交す媒となつた。

此話をし掛けたので、僕はあの年の氣候の事を思ひ出した。あの頃は亡くなつた父が秋草を北千住の家の裏庭に作つてゐたので、土曜日に上條から父の所へ歸つて見ると、もう二百十日が近いからと云つて、篠竹を澤山買つて来て、女郎花やら藤袴やらに一本一本それを立て副へ

て純つてゐた。併し二十日は無事に過ぎてしまつた。それから二百二十日があぶないと云つてゐたが、それも無事に過ぎた。併しその頃から毎日毎日の雲のたたずまひが不穩になつて、暴模様が見える。折々父夏に戻つたかと思ふやうな蒸暑いことがある。哭から吹く風が強くなりさうになつては又歎む。父は二百十日が「なしくづし」になつたのだと云つてゐた。

僕は或る日曜日の夕方に、北千住から上條へ歸つて来た。書生は皆外へ出てゐて、下宿屋はひっそりしてゐた。自分の部屋へ這入つて、暫くぼんやりしてゐると、今まで誰もゐないと思つてゐた隣の部屋でマツチを磨る音がする。僕は寂しく思つてゐた時だから、直ぐに聲を掛けた。

「岡田君。ゐたのか。」

「うん。返事だか、なんだか分からぬやうな聲である。僕と岡田とは随分心安くなつて、他人行儀はしなくなつてゐるが、それにしても此時の返事はいつもとは違つてゐた。

僕は腹の中と思つた。こつちもぼんやりしてゐるが、岡田も矢つ張ぼんやりしてゐたやうだ。何か考へ込んでゐたのではあるまいか。かう思ふと同時に、岡田がどんな顔をしてゐるか見た

いやうな気がした。そこで重ねて聲を掛けて見た。君、邪魔をしに往つても好いかい。」

「好いどころぢやない。實はさつき歸つてからぼんやりしてゐた所へ、君が歸へ歸つて来てがたがた云はせたので、奮つて明りでも附けようと思ふ氣になつたのだ。こん度は聲がはつきりしてゐる。

僕は廊下に出て、岡田の部屋の障子を開けた。岡田は丁度鐵門の裏向ひになつてゐる窓を開けて、机に肘を衝いて、暗い外の方を見てゐる。壁に鐵の棒を打ち附けた窓で、その外には大走りに積ゑた側柏が二三本埃を浴びて立つてゐるのである。

岡田は僕の方へ振り向いて云つた。「けふも又妙にむしむしするぢやないか。僕の所には蚊が二三疋ゐてうるさくてしやうがない。」

僕は岡田の机の横の方に胡坐を掻いた。「さうだねえ。僕の祖父は二百十日のなし崩しと稱してゐる。」

「ふん。二百十日のなし崩しとは面白いねえ。なる程さうかも知れないよ。僕は空が曇つたり晴れたりしてゐるもんだから、出ようかどうかしようかと思つて、とうとう午前間の間中寝轉んで、君に借りた金瓶梅を讀んでゐたのだ。それ

い日曜日にちようびの午後ごごに無縁坂むえんざかを通るものはなかつたが、此小僧こそうがひとり通り掛つて、括繩くわくじようで縛つた徳利とくりと通帳とうちやうとをぶら下げた儘、蛇退治へびひらいを見物けんぶつしてゐた。そのうち蛇へびの下半身したはんしんが麥門冬まうもんとうの上に落ちたので小僧こそうは徳利とくりも帳面ちやうめんも棄てて置いて、すぐに小石こいしを拾つて蛇へびの創口そうこうを叩いて、叩く度にまだ死に切らない下半身したはんしんが波なみを打つやうに動くのを眺めてゐたのである。

「そんなら小僧こそうさん済みませんが」と女主人おんなしゅじんが頼んだ。小さい女中にようぢゆうが格子戸かきどから小僧こそうを連れて内へ這入つた。間もなく窓に現れた小僧こそうは萬年青まんながせの鉢はちの置いてある窓板まどいの上に登つて、一しう懸命けんめい伸びをして籠かごを吊るしてある麻絲あしを釘からはずした。そして女中にようぢゆうが受け取つてくれぬので、小僧こそうは籠かごを持つた儘窓板まどいから降りて、戸口に廻つて外へ出た。

小僧こそうは一しよに附いて出た女中にようぢゆうに「籠かごはわたしが持つてゐるから、あの血ちを掃除そうじしなくちや行けませんぜ、疊たたみにも落ちましたからね」と、高慢かうまんらしく忠告ちゆうこした。「本當ほんとうに早く血ちをふいておしまひよ」と、女主人おんなしゅじんが云つた。女中にようぢゆうは格子戸かきどの中へ引き返した。

岡田おかだは小僧こそうの持つて出た籠かごをのぞいて見た。一羽ひとの鳥とりは止まり木とまりぎに止まつて、ぶるぶる顫ふるへ

てゐる。蛇へびに衝つへられた鳥とりの體からだは半分以上口の中うちに這入つてゐる。蛇へびは體からだを截きられつつも、最期さいごの瞬間しゆんかんまで鳥とりを吞のまうとしてゐたのである。

小僧こそうは岡田おかだの顔かほを見て、「蛇へびを取りませうか」と云つた。うん、取るのは好いが、首くびを籠かごの眞ん中の所ところまで持ち上げて抜くやうにしないと、まだ折れてゐない竹たけが折れるよ」と、岡田おかだは笑ひながら云つた。小僧こそうは首くびを抜き出して、指さし尖とがで鳥とりの尻しりを引つ張つて見て、「死んでも放しやあがらない」と云つた。

此時このときまで残つてゐた裁縫さいほうの弟子達でしは、もう見る物が無いと思つたか、揃そろつて隣となりの家の格子戸かきどの内に這入つた。

「さあ僕わがもそろそろお暇いそをしませう」と云つて、岡田おかだがあたりを見廻した。

女主人おんなしゅじんはうつと何なにか物ものを考かんがへてゐるらしく見えてゐたが、此詞このことばを聞いて、岡田おかだの方ほうを見た。そして何か言ひさうにして躊躇ちゆうちよして、目を脇わきへそらした。それと同時に女おんなは岡田おかだの手に少し血ちの附いてゐるを見附けた。「あら、あなたの手てがよれてゐますわ」と云つて、女中にようぢゆうを呼んで上り口へ手水盥てすいぐわんを持つて來させた。岡田おかだは此話このはなしをする時とき女おんなの態度たいどを細こまかには言はなかつたが、「ぼんの少しばかり小指こさしの所ところに血ちの附い

てゐたのを、よく女おんなが見附けたと、僕は思つたよ」と云つた。

岡田おかだが手てを洗つてゐる最中に、それまで蛇へびの吭のどから鳥とりの死骸しかいを引き出さうとしてゐた小僧こそうが、「やあ大變だいへん」と叫んだ。

新しい手拭てぬぐいの疊たたみんだのを持つて、岡田おかだの側に立つてゐる女主人おんなしゅじんが開けた儘ままにしてある格子戸かきどに片手ひとてを掛けて外そとを覗いて、「小僧こそうさん、何なにと云つた。

小僧こそうは手てをひろげて鳥籠とりかごを押さへてゐながら、「もう少しで蛇へびが首くびを入れた穴あなから生きてゐる分の鳥とりが逃げる所でした」と云つた。

岡田おかだは手てを洗つてしまつて、女おんなのわたしたした手拭てぬぐいでふきつつ、「その手てを放さずにあるのだぞ」と小僧こそうに言つた。そして何かしつかりした絲いとのやうな物ものがあるなら貰もらひたい、鳥とりが籠かごの穴あなから出ないやうにするのだと云つた。

女おんなはちよつと考かんがへて、「あの元結もとむすではいかでございませう」と云つた。

「結構けいこうです」と岡田おかだが云つた。

女主人おんなしゅじんは女中にようぢゆうに言ひ附けて、鏡臺きやうだいの油斗あぶらから元結もとむすを出して來させた。岡田おかだはそれを受け取つて、鳥籠とりかごの竹たけの折れた跡あとに縦横じようへいに結び附けた。

「先づ僕わがの爲事ためごとは此位このくらいでおしまひでせうね」と

の、お師匠さんはお留守ですが、入らつしやつたつてお婆あさんの方ですから駄目ですわ」と云つた。師匠は日曜日に休まずに一六に休むので、弟子が集まつてゐたのである。

此話をする時岡田は、「その主人の女と云ふのがなかなか別品なのだ」と云つた。併し前から顔を見知つてゐて、通る度に挨拶をする女だとは云はなかつた。

岡田は返辭をするより先に、籠の下へ近寄つて蛇の様子を見た。籠は隣の裁縫の師匠の家の方に寄せて、窓に吊るしてあつて、蛇は此家と隣家との間から、庇の下をつたつて籠にねらひ寄つて首を挿し込んだのである。蛇の體は繩を掛けたやうに、庇の腕木を横切つてゐて、尾はまだ隙の柱のさきに隠れてゐる。随分長い蛇である。いづれ草木の茂つた加賀屋敷のどこかに住んでゐたのが此頃の氣壓の變調を感じてさまよひ出て、途中で此籠の鳥を見附けたものだらう。岡田もどうしようかとちよいと迷つた。女達がどうもすることの出来なかつたのは無理も無いのである。

「何か刃物はありますか」と岡田は云つた。主人の女が一人の小娘に、「あの臺所にある出刃を持つてお出で」と言い附けた。その娘は

女中だつたと見えて、稽古に隣へ来てゐると云ふ外の娘達と同じやうな湯帷子を着た上に紫のメリンスでくけた襷を掛けてゐた。着を切る庖丁で蛇を切られては困ると思つたか、娘は抗議をするやうな目附きをして主人の顔を見た。「好いよ、お前の使ふのは新らしく買つて造るから」と主人が言つた。娘は今點が行つたと見えて、駆けて内へ這入つて出刃庖丁を取つて来た。

岡田は待ち兼ねたやうにそれを受け取つて、穿いてゐた下駄を脱ぎ棄てて、脇掛窓へ片足を掛けた。體操は彼の長技である。左の手はもう庇の腕木を握つてゐる。岡田は庖刀が新しくはあつても餘り銳利でないことを知つてゐたので、初から一撃に切らうとはしない。庖刀で蛇の體を腕木に押し附けるやうにして、ぐりぐりと刃を二三度前後に動かした。蛇の鱗の切れ目、硝子を砕くやうな手ごたへがした。此時蛇はもう羽を銜へてゐた鳥の頭を頬のうちに手繰り込んでゐたが、體に重傷を負つて、波の起伏のやうな運動をしながら、獲物を口から吐かうともせず、首を籠から抜かうともしなかつた。岡田は手を弛めずに庖刀を五六度も前後に動かしたかと思ふ時、鋭くもない刃がとうとう

蛇を組上の肉の如くに兩斷した。絶えず體に波を打たせてゐた蛇の下半身が、先づばたりと麥門冬の流れである雨垂落の上に落ちた。續いて上半身が這つてゐた窓の鴨居の上をはづれて、首を籠に挿し込んだ儘ぶらりと下がつた。

鳥を半分銜へてふくらんだ頭が、可なりに撓められて折れずにゐた籠の竹に交へて抜けずにゐるので、上半身の重みが籠に加はつて、籠は四十五度位に傾いた。その中では生き残つた一羽の鳥が、不思議に精力を消耗し盡さずに、まだ羽ばたきをして飛び過つてゐるのである。

岡田は腕木に據んでゐた手を放して飛び降りた。女達は此時まで一同息を屏めて見てゐたが、二三人はこゝまで見て裁縫の師匠の家に這入つた。「あの籠を叩して蛇の首を取らなくては」と云つて、岡田は女主人の顔を見た。併し蛇の半身がぶらりと下がつて、切口から黒ずんだ血がぼたぼた窓板の上に垂れてゐるので、主人も女中も内に這入つて吊るしてある麻絲をはずす勇氣がなかつた。

その時籠を叩して上げませうかと、とんきやうな聲で云つたものがある。集まてゐる一同の目はその聲の方に向いた。聲の主は酒屋の小僧であつた。岡田が蛇退治をしてゐる間、寂し



と云ふ事である。さて品物は何にしようか、藤村の田舎饅頭でも買つて遣らうか。それでは餘り智慧が無過ぎる。世間並の事、誰でもしきつらな事になつてしまふ。そんならと云つて、小切で肘衝でも縫つて上げたたら、岡田さんにおぼこ娘の戀のやうで可笑しいと思はれよう。どうも好い思附きが無い。さて品物は何か工夫が附いたとして、それをつい梅に持たせて遣つたものだらうか。名刺はこなひだ仲町で拵へさせたのがあるが、それを添へた丈では、物足りない。ちよつと一筆書いて遣りたい。さあ困つた。學校は尋常科が濟むと下がつてしまつて、それから手習をする暇も無かつたので、自分には満足な手紙は書けない。無論あの御殿奉公をしたと云ふお隣のお師匠さんに頼めばわけは無い。併しそれは厭だ。手紙には何も人に言はれぬやうな事を書く積りではないが、兎に角岡田さんに手紙を遣ると云ふことを、誰にも知らせたくない。まあ、どうしたものだらう。

丁度同じ道を往つたり來たりするやうに、お玉はこれ丈の事を順に考へ、逆に考へ、お化粧や臺所の指圖に一旦まぎれて忘れては又思ひ出してゐた。そのうち木造が來た。お玉は酌をしつとも思ひ出して、何をそんなに考へ込んでゐる

のだい」と咎められた。「あら、わたくしなんにも考へてなんぞおはしませんわ」と、意味の無い笑顏をして見せて、私に胸をどき附かせた。併し此頃は太夫修行が詰んで來たので、何物かを隠してゐると云ふことを、鋭い未造の目にも、容易に見抜かれるやうな事は無かつた。末造が歸つた跡で見た夢に、お玉はとうとう菓子折を買つて來て、急いで梅に持たせて出した。その跡で名刺も添へず手紙も附けずに遣つたのに氣が附いて、はつと思ふと、夢が醒めた。

翌日になつた。此日は岡田が散歩に出なかつたか、それともこつて見はづしたか、お玉は戀しい顔を見ることが出来なかつた。その次の日は岡田が又いつものやうに窓の外を通つた。窓の方をちよつと見て通り過ぎたが、内が暗いのでお玉と顔を見合せることは出来なかつた。その又次の日は、いつも岡田の通る時刻になるとお玉が草席を持ち出して、格別五味も無い格子戸の内を丁寧に掃除して、自分の穿いてゐる雪路の外、只一足しか出して無い胸下駄を、右に置いたり、左に置いたりしてゐた。「あら、わたくしが掃きますわ」と云つて、臺所から出た梅を「好いよ、お前は貴物を見てゐておくれ、わたし用が無いからしてゐるのだよ」と云つて追ひ

返した。そこへ丁度岡田が通り掛かつて、筒を脱いで會釈をした。お玉は帯を持った儘顏を眞つ赤にして棒立に立つてゐたが、何も言ふことが出来ずに、岡田を行き過ぎさせてしまつた。お玉は手を焼いた火箸をばはり出すやうに帯を棄てて、雪路を脱いで急いで上がった。

お玉は箱火鉢の傍へすわつて、火をいぢりながら思つた。まあ、私はなんと云ふ馬鹿だらう。けふのやうな涼しい日には、もう窓を開けて覗いてゐて可笑しいと思つて、餘計な掃除の眞似なんぞをして、切角待つてゐた癖に、いざと云ふ場になると、なんにも言ふことが出来なかつた。檀那の前では間の悪いやうな風はしてゐても、言はうとさへ思へば、どんな事でも言はれぬことは無い。それに岡田さんにはなせ聲が掛けられなかつたのだらう。あんなにお世話になつたのだから、お禮を言ふのは當前だ。それがけふ言はれぬやうでは、あの方に物を言ふ折は無くなつてしまふかも知れない。杓を便にして何か持たせて上げようと思つても、それは出來ず、お目に掛かつて、物を言ふことが出來なくては、どうにも爲様がなくなつてしまふ。一體わたしはあの時なせ聲が出なかつたのだらう。さう、さう。あの時わたしは儘かに物を言

云つて、岡田は戸口を出た。

女主人は「どうもまことに」と、さも詞に窮したやうに云つて、跡から附いて出た。

岡田は小僧に聲を掛けた。「小僧さん。御苦労にその蛇を棄ててくれなにか。」

「ええ。坂下のどぶの深い處へ棄てませう。どこかに蛇は無いかなあ。」かう云つて小僧はあたりを見廻した。

「蛇はあるから上げますよ。それにちよつと待つてゐて下さいな。」女主人は女中に何か言ひ附けてゐる。

その際に岡田は「さやうなら」と云つて、跡を見ずに坂を降りた。

ここまで話してしまつた岡田は僕の顔を見て、「ねえ、君、美人の爲めとは云ひながら、僕は随分働いただらう」と云つた。

「うん。女のために蛇を殺すと云ふのは、神話めいてゐて面白いが、どうもその話はそれ切りでは済みさうにないね。」僕は正直に心に思ふ通りを言つた。

「馬鹿を言ひ給へ、未完の物なら、發表しはしないよ。」岡田がかう云つたのも、矯飾して言つたわけではなかつたらしい。併し假にそれ切

りで済む物として、幾らか殘惜しく思ふ位の事はあつたのだらう。

僕は岡田の話を聞いて、單に神話らしいと云つたが、實は今一つすぐに胸に浮んだ事のあるのを隠してゐた。それは金瓶梅を讀みさして出た岡田が、金蓮に逢つたのではないかと思つたのである。

大學の小使上がりで今金食しをしてゐる末造の名は、學生中に知らぬものが無い。金を借らぬまでも、名丈は知つてゐる。併し無縁坂の女が末造の妾だと云ふことは、知らぬ人もあつた。岡田はその一人である。僕は其頃まだ女の種性を好くも知らなかつたが、それを裁縫の師匠の隣に圍つて置くのが末造だと云ふことは知つてゐた。僕の智識には岡田に比べて一日の長があつた。

## 貳拾

岡田に蛇を殺して貰つた日の事である。お玉はこれまで目で會釋をした事しか無い岡田と親しく話をした爲めに、自分の心持が、我ながら驚く程急劇に變化して來たのを感じた。女には欲しいとは思ひつつも買はうとまでは思はぬ品物がある。さう云ふ時計だとか指環だとか

が、硝子窓の裏に飾つてある店を、女はそこを通る度に覗いて行く。わざわざその店の前に往かうとまではしない。何か外の用事でその前を通り過ぎることになると、きつと覗いて見るのである。欲しいと云ふ單みと、それを買ふことは所詮企て及ばぬと云ふ諦めとが一つになつて、或る痛切で無い、微かな、甘い哀傷的情緒が生じてゐる。女はそれを味ふことを楽しみにしてゐる。それとは違つて、女が買はうと思ふ品物は其女に強烈な苦痛を感じさせる。

女は落ち着いてゐられぬ程その品物に惱まされる。縦ひ幾日か待てば容易く手に入ると知つても、それを持つ餘裕が無い。女は暑さをも寒さをも夜闇をも雨ずをも厭はずに、衝動的に思ひ立つて、それを買ひに往くことがある。萬引なると云ふことをする女も、別に變つた木で刻まれたものではない。只この欲しい物と買ひたい物の境界がぼやけてしまつた女たるに過ぎない。岡田はお玉のためには、これまで只欲しい物であつたが、今や忽ち變じて買ひたい物になつたのである。

お玉は小鳥を叩けて貰つたのを縁に、どうかして岡田に近寄りたいと思つた。最初に考へたのは、何か品物を梅に持たせて禮に遣らうか

これまで薄ら寒い雨の日などが續いて、二三日も岡田の顔の現れられぬことがあると、お玉は塞いでゐた。それでも飽くまで素直な性なので、梅に無理を言つて迷惑させるやうな事はない。ましてや末造に不機嫌な顔を見せなんぞはしない。唯そんな時は箱火鉢の縁に肘を衝いて、ぼんやりして黙つてゐるので、梅が「どこかお悪いのですか」と云つたことがある丈である。それが岡田の顔が此頃續いて見られるので、珍らしく浮き浮きして來て、或る朝いつもよりも氣輕に内を出て、池の端の父親の所へ遊びに往つた。お玉は父親を一週間に一度宛位はきつと尋ねることにしてゐるが、まだ一度も一時間以上腰を落ち着けてゐたことは無い。それは父親が許さぬからである。父親は往く度に優しくしてくれる。何か旨い物でもあつたと、それを出して茶を飲ませる。併しそれ丈の事をしてしまふと、すぐに歸れと云ふ。これは老人の氣の短け爲めばかりでは無い。奉公に出したからには、勝手には引かぬ。お玉が二度目か三度目に父親の所に來た時、午前のうちは檀那の見えることは決して無いから、少しはゆつくりしてゐても好いと云つたことがある。父親は承知しなかつた。「な

程これまではお出がなかつたかも知れない。それでもいつ何の御用事があつてお出なさるか知れぬではないか。檀那に申し上げておひまを戴いた日は別だが、お前のやうに冒物に出て寄つて、ゆつくりしてゐてはならない。それではどこをうろついてゐるかと、檀那がお思なされても爲方が無い」と云ふのであつた。若し父親が末造の職業を聞いて心持を悪くしはすまいかと、お玉は始終心配して、尋ねて往く度に様子を見るが、父親は全く知らずにゐるらしい。それはその筈である。父親は池の端に越して來てから、暫く立つうちに貸本を讀むことを始めて、書間はいつも眼鏡を掛けて貸本を讀んでゐる。それも實録物とか講談物とか云ふ書き本に限つてゐる。此頃讀んでゐるのは三河後風土記である。これは大ぶ冊数が多いから、當分此本丈で樂めると云つてゐる。貸本屋が「讀み本」を見せて勸めると、それは讀の書いてある本だらうと云つて、手に取つて見ようともしない。夜は目が草臥れると云つて本を讀まずに、寄せへ往く。寄せで聞くものなら、本當か諺かなどとは云はずに、落語も聞けば義太夫も聴く。主に講釋ばかり掛かる廣小路の席へは、餘程氣に入つた人が出なくては往かぬので

ある。道樂は只それ丈で、人と無駄話をする云ふことが無いから、友達も出來ない。そこで末造の身の上などを聞き出す因縁は生じて來ぬのである。

それでも近所には、あの隠居の内へ尋ねて來る好い女はなんだらうと穿鑿して、とうとう高利貸の妾ださうだと突き留めたものもある。若し兩隣に口のうるさい人でもゐると、爺いさんがどんなに心安立をせずにもゐても、無理にも厭な噂を聞せられるのだが、爲合せな事には一方の隣が博物館の屬官で、法帖なんぞをいぢつて手習ばかりしてゐる男、一方の隣がもう珍らしいものになつてゐる板木師で、篆刻なんぞには手を出さぬ男だから、どちらも爺いさんの心の平和を破るやうな虞はない。また並んでゐる家の中で、店を開けて商賣をしてゐるのは蕎麥屋の連玉庵と煎餅屋と、その先きのもう廣小路の角に近い處の十三屋と云ふ櫛屋との外には無かつた時代である。

爺いさんは格子戸を開けて這入る人のけはひ、輕げな駒下駄の音又で、まだ優しい聲のおとなを聞かぬうちに、もうお玉が來たのだと云ふことを知つて、讀みさしの後風土記を下に置いて待つてゐる。掛けてゐた目金を脱して、



はうとした。唯何と云つて好いか分からなかつたのだ。「岡田さん」と馴々しく呼び掛けることは出来ない。そんならと云つて、顔を見合せて「もしもし」とも云ひにくい。ほんにかう思つて

見ると、あの時まごまごしたのも無理はない。かうしてゆつくり考へて見てさへ、なんと云つて好いか分からないのだもの。いやいや。こんな事を思ふのは矢つ張わたしが馬鹿なのだ。聲なんぞを掛けるには及ばない。すぐに外へ駆け出せば好かつたのだ。さうしたら岡田さんが足を駐めたに違ひない。足さへ駐めて貰へば「あの、こなひだは飛んだ事でお世話様になりました」とでも、なんとも云ふことが出来たのだ。お玉はこんな事を考へて火をいぢつてゐるうちに、鐵瓶の蓋が跳り出したので、湯氣を洩らすやうに蓋を切つた。

それからはお玉は自分で物を言はうか、使を遣らうかと二様に工夫を凝らしはじめた。そのうち夕方は次第に涼しくなつて、窓の障子は開けてゐにくい。庭の掃除はこれまで朝一度に極まつてゐたのに、こなひだの事があつてからは、梅が朝晩に掃除をするので、これも手が出しにくい。お玉は湯に往く時刻を遅くして、途中で岡田に逢はうとしたが、坂下の湯屋までの道は

餘り近いので、なかなか逢ふことが出来なかつた。又使を遣ると云ふことも、日数が立てば立つ程出来にくくなつた。

そこでお玉は一時こんな事を思つて、無理に諦めを附けてゐた。わたしはあれ切り岡田さんにお禮を言はないでゐる。言はなくては濟まぬお禮が言はずにあつて見れば、わたしは岡田さんのしてくれた事を恩に被てゐる。このわたしに恩に被てゐると云ふことは岡田さんには分かつてゐる筈である。かうなつてゐるのが、却つて下手にお禮をしてしまつたより好いかも知れぬと思つたのである。

併しお玉はその恩に被てゐると云ふことを端緒にして、一刻も早く岡田に近づいて見たい。唯その方法手段が得られぬので、日々人知れず腐心してゐる。

お玉は氣の勝つた女で、末造に圍はれることになつてから、短い月日の間に、周圍から陽に貶められ、陰に羨まれる姿と云ふものの苦しさを味つて、そのお蔭で一種の世間を馬鹿にしたやうな氣象を養成してはゐるが、根が善人、まだ人に揉まれてゐぬので、下宿屋に住まつてゐる書生の岡田に近づくのをおどくおつ

うに思つてゐたのである。

そのうち秋日和に窓を開けてゐて、又岡田と會釋を交す日があつても、切角親しく物を言つて、手拭を手渡ししたのが、少しも接近の階段を形づくらずにしまつて、それ程の事のあつた後が、何事もなかつた前と、なんの異なる所もなくなつてゐた。お玉はそれをひどくじれつた

と思つた。  
末造が來てゐても、箱鉢を中に置いて、向き合つて話をしてゐる間に、これが岡田さんだつたらと思ふ。最初はさう思ふ度に、自分で自分の横着を責めてゐたが、次第に平氣で岡田の事ばかり思ひつつも、話の調子を合せてゐるやうになつた。それから末造の自由になつてゐて、日を亙つて岡田の事を思ふやうになつた。折々は夢の中で岡田と一しよになる。煩はしい順序も運びもなく一しよになる。そして「ああ、嬉しい」と思ふとたんに、相手が岡田ではなくて末造になつてゐる。はつと驚いて目を醒まして、それから神經が興奮して寐られぬので、じれて泣くこともある。

いつの間にか十一月になつた。小春日和が続いて、窓を開けて置いても日立たぬので、お玉は又岡田の顔を毎日のやうに見ることが出来た。

これまでになく美しく見えた。一體お玉は無縁坂に越して来てから、一日一日と美しくなるばかりである。最初は娘らしい可哀さが氣に入つてゐたのだが、此頃はそれが一種の人を魅するやうな態度に變じて來た。末造は此變化を見て、お玉に情愛が分かつて來たのだ、自分が分かつて造つたのだと思つて、得意になつてゐる。併しこれは何事をも鋭く看破する末造の目が、笑止にも愛する女の精神狀態を錯り認めてゐるのである。お玉は最初主人大事に奉公をする女であつたのが、急劇な身の上の變化のために、煩悶して見たり省察して見たりした舉句、横着と云つても好いやうな自覺に到達して、世間の女が多くの人に觸れた後に纔かに贏ち得る冷靜な心と同じやうな心になつた。此心に觸弄せられるのを、末造は愉快な刺戟として感ずるのである。それにお玉は横着になると共に、次第に少しづつじだらくなる。末造はこのじだらくに情慾を煽られて、一層お玉に引き附けられるやうに感ずる。この一切の變化が末造には分らない。魅せられるやうな感じはそこから生れるのである。

お玉はしやがんで金盞を引き寄せながら云つた。「あなた一寸あちらへ向いてゐて下さいましな。」

「なぜ」と云ひつつ、末造は金天狗に火を附けた。

「だつて顔を洗はなかつたや。」

「好いぢやないか。さつさと洗へ。」

「だつて見て入らつしやつちや、洗へませんわ。」

「むづかしいなあ。これで好いか。」末造は煙を吹きつつ縁側に背中を向けた。そして心中に

「なんと云ふあどけない奴だらうと思つた。」

お玉は肌を脱がずに、只領だけくつろげて、忙がしげに顔を洗ふ。いつもより餘程手を抜いてはゐるが、化粧の祕密を藉りて、疵を蔽ひ美を粧ふと云ふ弱點も無いので、別に見られてゐて困ることはいない。

末造は最初背中を向けてゐたが、暫くするとお玉の方へ向き直つた。顔を洗ふ間末造に背中を向けてゐたお玉はこれを知らずにゐたが、洗つてしまつて鏡臺を引き寄せると、それに末造の紙巻を銜へた顔がうつつた。

「あら、ひどい方ね」とお玉は云つたが、その儘髪を撫で附けてゐる。くつろげた領の下に項から背へ掛けて三角形に見える白い肌、手を高く舉げてゐるので、肘の上二三寸の所まで見える

ふつくりした脛が、末造のためにはいつまでも厭きない見ものである。そこで自分が黙つて待つてゐたら、お玉が無理に急ぐかも知れぬと思つて、わざと氣樂げにゆつくりした調子で話した。

「おい急ぐには及ばないよ。何も用があつてこんな早く出掛けて來たのではないのだ。實はこゝにだお前に聞かれて、今晚あたり來るやうに云つて置いたが、ちよいと千葉へ往かなくてはならない事になつたのだ。話が旨く運べば、あすのうちに歸つて來られるのだが、どうかするとあさつてになるかも知れない。」

櫛をふいてゐたお玉は「あら」と云つて振り返つた。顔に不安らしい表情が見えた。

「おとなしくして待つてゐるのだよ」と笑談らしく云つて、末造は巻煙草人をしまつた。そしてついで立つて戸口へ出た。

「まあお茶も上げないうちに」と云ひさして、投げるやうに櫛を櫛箱に入れたお玉が、見送りに起つて出た時には、末造はもう格子戸を開けてゐた。

朝霞の曙を臺所から運んで來た梅が、膳を下に置いて、「どうも濟みません」と云つて手を衝

可哀い娘の顔を見る日は、爺いさんのためには祭日である。娘が来れば、きつと目金を贈す。目金で見た方が好く見える筈だが、どうしても目金越しでは隔てがあるやうで気が済まぬのである。娘に話したい事はいつも溜まつてゐて、その一部分を忘れて残したのに、いつも娘の歸つた跡で気が附く。併し「槽那は御機嫌よくてお出になるかい」と末造の安否を問ふこと丈は忘れない。

お玉はけふ機嫌の好い父親の顔を見て、阿茶の局の話を聞せて貰ひ、廣小路に出来た大千住の店店で買ったと云ふ、一尺四方もある輕燒の馳走になつた。そして父親が「まだ歸らなくて好いかい」と度々聞くのに、「大丈夫よ」と笑ひながら云つて、とうとう正午近くまで遊んでゐた。そして此頃のやうに末造が不意に來ることのあるのを父親に話したら、あの歸らなくても好いかと云ふ催促が一層劇しくなるだらうと、心の中で思つた。自分はいつか横着になつて、末造に留守の間に來られてはならぬと云ふやうな心遣をせぬやうになつてゐるのである。

## 貳拾壹

時候が次第に寒くなつて、お玉の家の流しの

前に、下駄で踏む處丈板が土に填めてある、其板の上には朝絹が眞つ白に置く。深い井戸の長い吊瓶繩が冷たいから、梅に氣の毒だと云つて、お玉は手袋を買つて遣つたが、それを一々嵌めたり脱いだりして、臺所の用が出来るものでは無いと思つた梅は、貰つた手袋を大切にしまつて置いて、矢張素手で水を汲む。洗物をさせるにも、雑巾拭をさせるにも、湯を沸かして使はせるのに、梅の手がそろそろ荒れて來る。お玉はそれを氣にして、こんな事を言つた。「なんでも手を濡らした跡を其儘にして置くのが悪いのだよ。水から手を出したら、すぐに好く拭いて乾かしてお置。用が片附いたら、忘れないでシャボンで手を洗ふのだよ。」かう云つてシャボンまで買つて渡した。それでも梅の手が次第に荒れるのを、お玉は氣の毒がつてゐる。そしてあの位の事は自分もしたが、海のやうに手の荒れたことは無かつたのにと、不思議にも思ふのである。

朝目を醒まして起きずにはゐられなかつたお玉も、此頃は梅が、「けさは流しに米が張つてゐます、少しお休になつて入らつしやいまし」など云ふと、つい布団にくるまつてゐる様になつた。教育家は妄想を起させぬために青年に

床に入つてから寐附かずにゐるな、目が醒めてから起きずにあるなと戒める。少壯な身を暖かい衾の裡に置けば、毒草の花を火の中に吹かせたやうな寫象が萌すからである。お玉の想像もこんな時には随分放恣になつて來ることがある。さう云ふ時には目に一種の光が生じて、酒に酔つたやうに臉から頬に掛けて、紅が漲るのである。

前晩に空が晴れ渡つて、星がきらめいて、曉に霜の置いた或る日の事であつた。お玉は大ぶ久しく布団の中で、近頃覺えた不精をしてゐて、梅が疾つくに兩戸を繰り開けた表の窓から、朝日のさし入るのを見て、やつと起きた。そして細帯一つでねんね半纏を羽織つて、縁側に出て楊枝を使つてゐた。すると格子戸をがらりと開ける音がする。「入らつしやいまし」と愛想好く云ふ梅の聲がする。其儘上がつて來る足音がする。

「やあ。寐坊だなあ。」かう云つて箱火鉢の前に据わつたのは末造である。

「おや。御免なさいましよ。大そうお早いぢやございませんか。」衝へてゐた楊枝を急いで出して、唾をバケツの中に吐いてかう云つたお玉の、少しのぼせたやうな笑顔が、末造の目には



象が往來してゐる。一體女は何事によらず決心するまでには氣の毒な程迷つて、とつおいつする辭に、既に決心したとなると、男のやうに左顧右盼しないで、Ogilby を装はれた馬のやうに、向うばかり見て猛進するものである。思慮のある男には疑懼を懷かしむる程の障礙物が前途に横はつてゐても、女はそれを屑ともしない。それでどうかすると男の敢てせぬ事を敢てして、おもひの外に成功することもある。お玉は岡田に接近しようとするのに、若し第三者がゐて觀察したら、もどかしさに堪へまいと思はれる程、逡巡してゐたが、けさ末造が千葉へ立つと云つて嘔乞に来てから、追手を帆に孕ませた舟のやうに、志す岸に向つて走る氣になつた。それで梅をせき立てて、親許に返して遣つたのである。邪魔になる末造は千葉へ往つて泊る。女中の梅も親の家に歸つて泊る。これからあすの朝までは、誰にも撃射せられることの無い身の上だと感ずるのが、お玉のために先づ愉快で溜まらない。そしてかうとんとン拍子に事が運んで行くのが、終局の目的の容易に達せられる前兆でなくてはならぬやうに思はれる。けふに限つて岡田さんが内の前をお通なさらぬことは決して無い。往反に二度お通なさ

る日もあるのだから、どうかして一度逢はれずにしまふにしても、二度共見のがすやうなことは無い。けふはどんな犠牲を拂つても物を言ひ掛けずには置かない。思ひ切つて物を言ひ掛けるからは、あの方の足が留められぬ筈が無い。わたしは卑しい妾に身を墮してゐる。しかも高利貸の妾になつてゐる。だけれど生娘でゐた時より美しくはなつても、醜くはなつてゐない。その上どうしたのが男に氣に入ると云ふことは、不爲合な目に逢つた物怪の幸に、次第に分かつて來てゐるのである。して見れば、まさか岡田さんにも二もなく厭な女だと思はれることはあるまい。いや、そんな事は確かに無い。若し厭な女だと思つてお出なら、顔を見合せる度に禮をして下さる筈が無い。いつか蛇を殺して下すつたのだつてさうだ。あれがどこの内の出来事でも、きつと手を藉して下すつたのだと云ふわけではあるまい。若しわたしの内でなかつたら、知らぬ顔をして通り過ぎておしまひなすつたかも知れない。それにこつちでこれ丈思つてゐるのだから、皆までとは行かぬにしても、此心が幾らか向うに通つてゐないことはない筈だ。なに。案じるよりは生むが易いかも知れない。こんな事を思ひ續けてゐるうちに、

小桶の湯がすつかり冷えてしまつたのを、お玉はつめたいとも思はずにゐた。

膳を膳棚にしまつて箱火鉢の所に歸つて据わつたお玉は、なんだか氣がそはそはしてちつとしてゐられぬと云ふ様子を見てゐた。そしてけさ極が綺麗に飾つた灰を、火箸で二三度掻き廻したかと思ふと、つと立つて清物を清換へはじめた。同朋町の女髮結の所へ行くのである。これは不斷来る髮結が人の好い女で、餘所行の時に結ひに往くと云つて、紹介して置いてくれたのに、これまでまだ一度も往かなかつた内なのである。

## 貳拾貳

西洋の子供の讀む本に、釘一本と云ふ話がある。僕は好くは記憶してゐぬが、なんでも車の輪の釘が一本抜けてゐたために、それに乘つて出た百姓の息子が種々の難儀に出會ふと云ふ筋であつた。僕のし掛けた此話では、青魚の未精煮が丁度釘一本と同じ効果をなすのである。僕は下宿屋や學校の寄宿舎の「まかなひ」に饑を凌いでゐるうちに、身の毛の竝立つ程厭な菜が出來た。どんな風通しの好い座敷で、どんな清潔な膳の上に載せて出されようとも、僕の目

いた。

箱火鉢の傍に掘わつて、火の上に被さつた灰を火箸で掻き落してゐたお玉は、「おや、何をあやまるのだい」と云つて、につこりした。

「でもついお茶を上げるのが遅くなりまして。」

「ああ。その事かい。あれはわたしは御挨拶に云つたのだよ。梅那はなんとも思つてはお出なさらぬいよ。」かう云つて、お玉は箸を取つた。

けさ御膳を食べてゐる主人の顔を梅が見ると、めつたに機嫌を悪くせぬ性分ではあるが、特別に嬉しさうに見える。さつき一何をあやまるのだい」と云つて笑つた時から、ほんのりと赤く勻つた頬のあたりをまだ微笑の影が去らずにゐる。なぜだらうかと云ふ問題が梅の頭にも生ぜずには濟まなかつたが、飽くまで單純な梅の頭にはそれが根を卸しもしない。只好い氣持が傳染して、自分も好い氣持になつた丈である。

お玉はちつと梅の顔を見て、機嫌の好い顔を一層機嫌を好くして云つた。「あの、お前お内へ往きたかなくつて。」

梅は怪訝の目を睜つた。まだ明治十何年と云ふ頃には江戸の町家の習慣律が情力を持つてゐたので、市中から市中へ奉公に上がつてゐても、藏入の日の外には容易に内へは歸られぬこ

とに極まつてゐた。

「あの今晩は梅那様が入らつしやらないだらうと思ふから、お前内へ往つて泊つて來たけりやあ泊つて來ても好いよ。」お玉は重ねてかう云つた。

「あの本當でございますの。」梅は疑つて問ひ返したのでは無い。過分の厚恵だと感じて、此詞を發したのである。

「誰なんぞ言ふものかね。わたしはそんな罪な事をして、お前をからかつたり何かしやしないわ。御飯の跡は片附けなくとも好いから、すぐに往つても好いよ。そしてけふはゆつくり遊んで、晩には泊つてお出。その代りあしたは早く歸るのだよ。」

「はい」と云つてお梅は嬉しさに顔を眞つ赤にしてゐる。そして父が車夫をしてゐるので、車の二三臺並べてある入口の土間や、箒箒と箱火鉢との間に、やつと座布團が一枚布かれる様になつてゐて、そこに爲事に出不い間は父親が据わつてをり、留守には母親の据わつてゐる所や、鬘の毛がいつも片頬に垂れ掛かつてゐて、肩から襷を脱したことのめつたに無い母親の姿などが、非常な速度を以て入り替りつつ、小さい頭の中に影繪のやうに浮かんて來るのである。

食事が済んだので、お梅は膳を下げた。片附

けなくとも好いとは云はれても、洗ふ物丈は洗つて置かなくてはと思つて、小桶に湯を取つて茶碗や皿をちやら／＼言はせてゐると、そこへお玉は紙に包んだ物を持つて出て來た。「あら、矢つ張り片附けてゐるのね。それんばかりの物を洗ふのはわけは無いから、わたしはするよ。お前髪はゆうべ結つたのだからそれで好いわね。早く着物をお着替よ。そしてなんにもお土産が無いから、これを持つてお出。」かう云つて紙包をわたした。中には例の骨牌のやうな恰好をした半圓の青い札がはひつてゐたのである。

梅をせき立て、出して置いて、お玉は申妻平妻しく襷を掛け袂を端折つて裏所に出了。そしてさも面白い事をするやうに、梅が洗ひ掛けで置いた茶碗や皿を洗ひ始めた。こんな爲事は昔取つた杵柄で、梅なんぞが企て及ばぬ程迅速に、しかも周密に出来る筈のお玉が、けふは子供がおもちやを持つて遊ぶより手ぬるい洗ひやうをしてゐる。取り上げた皿一枚が五分間も手を離れない。そしてお玉の顔は活氣のある淡紅色に赫いて、目は空を見てゐる。

そしてその頭の中には、極めて樂觀的な寫

泥の中から救拔する。僕の想像はこんな取留  
のない處に歸着してしまつた。

坂下の四辻まで岡田と僕は黙つて歩いた。

眞つ直に巡査派出所の前を通り過ぎる時、僕は  
はややう物を言ふことが出来た。「おい、凄  
い状況になつてゐるぢやないか。」

「ええ。何が。」

「何も無いぢやないか。君だつてさつき  
からあの女の事を思つて歩いてゐたに違ない。  
僕は度々振り返つて見たが、あの女はいつまで  
も君の後影を見てゐた。おほかたまだこつちの  
方角を見て立つてゐるだらう。あの左傳の、目  
迎へて而してこれを送ると云ふ文句だねえ。あ  
れをあべこべに女の方で遣つてゐるのだ。」

「其話はもうよしてくれ給へ。君にだけは顛末  
を打ち明けて話してあるのだから、此上僕をい  
ぢめなくても好いぢやないか。」

かう云つてゐるうちに、池の縁に出たので、  
二人共ちよいと足を停めた。

「あつちを廻らうか」と、岡田が池の北の方を指  
ざした。

「うん」と云つて、僕は左へ池に沿うて曲つた。

そして十歩ばかりも歩いた時僕は左手に並ん  
でゐる二階の家を見て、「ここが櫻庭先生と末

造君との第宅だ」と獨語のやうに云つた。

「妙な對照のやうだが、櫻庭居士も餘り廉潔ぢ  
やない」と云ふぢやないか」と、岡田が云つた。

僕は別に思慮もなく辯駁らしい事を言つた。

「そりやあ政治家になると、どんなにしてゐたつ  
て、難癖を附けられるさ。」恐らくは福地さんと  
末造との距離を、なる丈大きく考へたかつたの  
であらう。

福地の邸の板塀のはづれから、北へ二三軒目  
の小家に、つい此頃川魚と云ふ看板を掛けた  
のがある。僕はそれを見て云つた。「此看板を見  
ると、なんだか不忍の池の有を食はせさうに見  
えるなあ。」

「僕もさう思つた。しかしまさか梁山泊の豪傑  
が店を出したと云ふわけでもあるまい。」

こんな話をして、池の北の方へ往く小橋を渡  
つた。すると、岸の上に立つて何か見てゐる學  
生らしい青年がゐた。それが二人の近づくのを  
見て、「やあ」と聲を掛けた。柔術に凝つてゐて、  
學科の外の本は一切讀まぬと云ふ性だから、岡  
田も僕も親しくはせぬが、さうかと云つて嫌つ  
てもゐぬ石原と云ふ男である。

「こんな所に立つて何を見てゐたのだ」と、僕  
が問うた。

石原は黙つて池の方を指ざした。岡田も僕  
も、如色に濁つた空気を透かして、指さす  
方角を見た。其頃は根津に通ずる小溝から、今  
三人の立つてゐる汀まで、一面に草が茂つてゐ  
た。其草の枯葉が池の中心に向つて次第に疎に  
なつて、只根津の櫻樓のやうな葉海綿のやうな  
房が基布せられ、葉や房の莖は、種々の高さに折  
れて、それが鋭角に聳えて、景物に荒涼な趣  
を添へてゐる。此のBryum色の莖の間を縫つ  
て、黒ずんだ上に鈍い反射を見させてゐる水の面  
を、十羽ばかりの雁が緩やかに往來してゐる。  
中には停止して動かぬものもある。

「あれまで石が屑くか」と、石原が岡田の顔を見  
て云つた。

「屑くことは屑くが、中るか中らぬかが疑問だ」と、  
岡田は答へた。

「遣つて見給へ。」

岡田は躊躇した。「あれはもう窺ふのだらう。  
石を投げ附けるのは可哀さうだ。」

石原は笑つた。「さう物の裏を知り過ぎては困  
るなあ。君が投げんと云ふなら、僕が投げる。」

岡田は不精らしく石を拾つた。「そんなら僕  
が逃がして遣る。」つづてはひゆうと云ふ微か  
な響をさせて飛んだ。僕が其行方をちつと見て



が「一たび其菜を見ると、僕の鼻は名狀すべからざる寄宿舍の食堂の臭氣を嗅ぐ。煮有に羊栖菜や相良鮓が附てあると、もうそろそろ此嗅覺のInhibitionが起り掛かる。そしてそれが青魚の未醬煮に至つて窮極の程度に達する。

然るにその青魚の未醬煮が或日上條の晩飯の膳に上つた。いつも膳が出ると直ぐに箸を取る僕が躊躇してゐるので、女中が僕の顔を見て云つた。

「あなた青魚お嫌ひ」

「さあ青魚は嫌ぢやない。焼いたのなら随分食ふが、未醬煮は閉口だ。」

「まあ。お上さんが存じませんでもんですから。なんなら玉子でも持つてまゐりませうか。」かう云つて立ちさうにした。

「待て」と僕は云つた。「實はまだ腹も透いてゐないから、散歩をして來よう。お上さんにはなんとでも云つて置いてくれ。菜が氣に入らなかつたなんて云ふなよ。餘計な心配をさせなくて好いから。」

「それでもなんだかお氣の毒様で。」

「馬鹿を言へ。」

僕が立つて袴を穿き掛けたので、女中は膳を持つて廊下へ出た。

僕は隣の部屋へ聲を掛けた。

「おい。岡田君ゐるか。」

「ゐる。何か用かい。」岡田ははつきりした聲で答へた。

「用ではないがね、散歩に出て、歸りに豊國屋へでも往かうかと思ふのだ。一しよに來ないか。」

「行かう。丁度君に話したい事もあるのだ。」

僕は釘に掛けてあつた帽を取つて被つて、岡田と一しよに上條を出た。午後四時過ぎであつたかと思ふ。どこへ往かうと云ふ相談もせずに上條の格子戸を出たのだが、二人は門口から右へ曲つた。

無縁坂を降り掛かる時、僕は「おい、ゐるぜ」と云つて、肘で岡田を衝いた。

「何が」と口には云つたが、岡田は僕の詞の意味を解してゐたので、左側の格子戸のある家を見た。

家の前にはお玉が立つてゐた。お玉は窺れてゐても美しい女であつた。しかし若い健康な美人の常として、粧映もした。僕の目には、いつも見た時と、どこがどう變つてゐるか、わからなかつたが、兎に角いつもと丸で違つた美しさであつた。女の顔が照り赫いてゐるやうなので、僕は一種の羞明さを感じた。

お玉の目はうつとりとしたやうに、岡田の顔に注がれてゐた。岡田は慌てたやうに帽を取つて禮をして、無意識に足の運を早めた。

僕は第三者に有勝な無遠慮を以て、皮々背後を振り向いて見たが、お玉の注視は頗る長く繼續せられてゐた。

岡田は尙向き加減になつて、早めた足の運を緩めずに坂を降りる。僕も黙つて附いて降りる。僕の胸の中では種々の感情が戦つてゐた。

此感情には自分を岡田の地位に置きたいと云ふことが根柢をなしてゐる。しかし僕の意識はそれを認識することを嫌つてゐる。僕は心の内で、「なに、己がそんな卑劣な男なものか」と叫んで、それを打ち消さうとしてゐる、そして此

抑制が功を奏せぬのを、僕は憤つてゐる。自分を岡田の地位に置きたいと云ふのは彼女の誘惑に身を任せたいと思ふのではない。只岡田のやうに、あんな美しい女に慕はれたら、さぞ愉快だらうと思ふに過ぎない。そんなら慕はれてどうするか、僕はそこに意志の自由を保留して置きたい。僕は岡田のやうに逃げはしない。僕は逢つて話をする。自分の清潔な身は汚さぬが、逢つて話だけはする。そして彼女を、妹の如くに愛する。彼女の力になつて造る。彼女を

荷造をする。それからWさんに附いて九州を視察して、九州からすぐに Messagerie Maritime 會社の舟に乗るのである。

僕は折々立ち留まつて、「驚いたね」とか、「君は果斷だよ」とか云つて、随分ゆるゆる歩きつつ此話を聞いた。積であつた。しかし聞いてしまつて時計を見れば、石原に分れてからまだ十分しか立たない。それにもう池の周圍の殆ど三分の二を通り過ぎて、仲町裏の池の端をはづれ掛かつてゐる。

「此儘往つては早過ぎるね」と、僕は云つた。「蓮玉へ寄つて蕎麥を一杯食つて行かうか」と、岡田が提議した。

僕はすぐに同意して、一しよに蓮玉庵へ引き返した。其頃下谷から本郷へ掛けて一番名高かつた蕎麥屋である。蕎麥を食ひつつ岡田は云つた。「一切角今まで造つて来て、卒業しないのは残念だが、所詮官費留學生になれない僕が此機会を失すると、ヨオロッパが見られないからね。」

「さうだとも。機逸すべからずだ。卒業がなんだ。向うでドクトルになれば同じ事だし、又其ドクトルをしなくたつて、それも愛ふるに足りないぢやないか。」

「僕もさう思ふ。只資格を拵へると云ふだけだ。俗に隨つて聊復爾りだ。」

「支度はどうだい。随分慌ただしい旅立になりさうだが。」

「なに。僕は此儘で往く。Wさんの云ふには、日本で洋服を拵へて行つたつて、向うでは着られないさうだ。」

「さうかなあ。いつか花月新誌で讀んだが、成島柳北も横濱でふいと思ひ立つて、即座に決心して舟に乗つたと云ふことだつた。」

「うん。僕も讀んだ。柳北は内へ手紙も出さずに立つたさうだが、僕は内の方へは精しく言つて遣つた。」

「さうか。羨ましいな。Wさんに附いて行くのだから、途中でまごつくことはあるまいが、旅行はどんな騷擾だらう。僕には想像も出来ない。」

「僕もどんな物だかわからないが、きのふ柴田承桂さんに逢つて、これまで世話になつた人だから、今度の一件を話したら、先生の書いた洋行案内をくれたよ。」

「はあ。そんな本があるかねえ。」

「うん。非賣品だ。旅鼠連中に配るのださうだ。」こんな話をしてゐるうちに、時計を見れば、もう三十分までに五分しかなかつた。僕は岡田

と急いで蓮玉庵を出て、石原の待つてゐる所へ往つた。もう池は闇に鎖されて、辨大の朱塗の扉が模範として露の中に見える頃であつた。

待ち受けてゐた石原は、岡田と僕とを引つ張つて、池の縁に出て云つた。「時刻は丁度好い。渚者な雁は皆時を變へてしまつた。僕はすぐに爲事に掛かる。それには君達がここにおゐて、號令を掛けてくれなくてはならないのだ。見給へ。そこの三間ばかり前の所に蓮の莖の右へ折れたのがある。其延線に少し低い莖の左へ折れたのがある。僕はあの延線を前へ前へと行かなくてはならないのだ。そこで僕がそれをはづれさうになつたら、君達がここから右とか左とか云つて修正してくれるのだ。」

「なる程。Paralysms のやうな理窟だな。しかし深くはないだらうか」と岡田が云つた。

「なに。存の立たない氣遣はない。」かう云つて、石原は素早く裸になつた。

石原の踏み込んだ處を見ると、泥は膝の上までしか無い。驚のやうに足を躊躇ては踏み込んで、ごぼりごぼりと遣つて行く。少し淫くなるかと思ふと、又淺くなる。見る見る二本の蓮の莖より前に出た。暫くすると、岡田が右と云つた。石原は右へ寄つて歩く。岡田が又左と

みると、一羽の雁が擡げてゐた頸をぐたりと垂れた。それと同時に二三羽の雁が鳴きつゝ羽たきをして、水面を滑つて散つた。しかし飛び起ちはしなかつた。頸を垂れた雁は動かずに故の所にゐる。

「中つた」と、石原が云つた。そして暫く池の面を見てゐて、詞を繼いだ。「あの雁は僕が取つて来るから、其時は君達も少し手傳つてくれ給へ。」

「どうして取る」と、岡田が問うた。僕も覺えず耳を竦てた。

「先づ今は時が悪い。もう三十分立つと暗くなる。暗くさへなれば、僕がわけなく取つて見せる。君達は手を出してくれなくても好いが、其時居合せて、僕の頼むことを聴いてくれ給へ。」

雁は御馳走するから」と、石原が云つた。

「面白い」と、岡田が云つた。「しかし三十分立つまでどうしてゐるのかい。」

「僕は此邊をぶらついてゐる。君達はどこへでも往つて來給へ。三人ここにゐると目立つから。」

僕は岡田に言つた。「そんなら二人で池を一周して來ようか。」

「好からう」と云つて岡田はすぐに歩き出した。

## 貳拾參

僕は岡田と一しよに花園町の端を横切つて、真照宮の石段の方へ往つた。二人の間には暫く詞が絶えてゐる。「不しあはせな雁もあるものだ」と、岡田が獨言の様に云ふ。僕の寫象には、何の論理的連繫もなく、無縁坂の女が浮ぶ。

「僕は只雁のある所を狙つて投げたのだから」と、今度は僕に對して岡田が云ふ。「うん」と云ひつつも、僕は矢張女の事を思つてゐる。「でも石原のあれを取りに往くのが見たいよ」と、僕が暫く立つてから云ふ。今度は岡田が「うん」と云つて、何やら考へつゝ歩いてゐる。多分雁が氣になつてゐるのであらう。

石段の下を南へ、辨天の方へ向いて歩く二人の心には、兎に角雁の死が暗い影を印してゐて、話はきれぎれになり勝であつた。辨天の鳥居の前を通る時、岡田は強ひて思想を他の方向に轉ぜようとするらしく、「僕は君に話す事があるのだつた」と言ひ出した。そして僕は全く思ひも掛けぬ事を聞せられた。

其話はいかゞである。岡田は今夜己の部屋へ來て話さうと思つてゐたが、丁度己にきそはれたので、一しよに外へ出た。出てからは、食事を

する時話さうと思つてゐたが、それどころやら駄目になりさうである。そこで歩きながら據い据まんて話すことにする。岡田は卒業の期を待たずに洋行することに極まつて、もう外務省から旅行券を受け取り、大學へ退學届を出してしまつた。それは東洋の風土病を研究しに來たドイツのフレイツェル博士が、往復旅費四千マルクと、月給二百マルクを給して岡田を傭つたからである。ドイツ語を話す學生の中で、漢文を樂に讀むものと云ふ注文を受けて、「三行三教授が岡田を紹介した。岡田は築地にWさんを尋ねて、試験を受けた。素問と難經とを二三行づつ、傷寒論と病原候論とを五六行づつ譯させられたのである。難經は生憎三焦の一節が出て、何と譯して好いかとまどがついたが、これはCHINGと音譯して済ませた。兎に角試験に合格して、即座に契約が出來た。Wさんはごんごさんの現に籍を置いてゐるライプチヒ大學の教授だから、岡田をライプチヒへ連れて往つて、ドクトルの試験はWさんの手で引き受けてさせる。卒業論文にはWさんのために譯した東洋の文獻を使用しても好いと云ふことである。岡田はあす上條を出て、築地のWさんの所へ越して往つて、Wさんが支那と日本とで買ひ集めた書物の



「なんだつて圓錐の立方積なんぞを計算し出したのだ」と、僕は石原に言つたが、それと同時に僕の日坂の申程に立つて、こつちを見てゐる女の姿を認めて、僕の心は一種異様な激動を感じた。僕は池の北の端から引き返す途すがら、交番の巡査の事を思ふよりは、此女の事を思つてゐた。なぜだか知らぬが、僕には此女が岡田を待ち受けてゐるに思はれたのである。果して僕の想像は僕を欺かなかつた。女は自分の家よりは二三軒先へ出迎へてゐた。

僕は石原の目を掠めるやうに、女の顔と岡田の顔とを見較べた。いつも薄紅に勻つてゐる岡田の顔は、確に一入赤く染まつた。そして彼は偶然帽を動かすらしく粧つて、帽の底に手を掛けた。女の顔は石のやうに凝つてゐた。そして美しく勝つた日の底には、無限の殘惜しさが含まれてゐるやうであつた。

此時石原の僕に答へた詞は、其聲が耳に入つただけで、其意は心に通ぜなかつた。多分岡田の外套がどぶくれになつてゐて、圓錐形に見える處から思ひ附いて、圓錐の立方積と云ふことを言ひ出したのだと、辯明したのであらう。石原も女を見ることは見たが、只美しい女だと思つただけで意に介せずにしまつたらしかつ

た。石原はまだ饒舌り續けてゐる。「僕は君達に不動の秘訣を説いて聞かせたが、君達は修養が無いから、急場に臨んでそれを實行することが出来さうでなかつた。そこで僕は君達の心を外へ轉せさせる工夫をしたのだ。問題は何を出しても好かつたのだが、今云つたやうなわけで圓錐の公式が出たのさ。兎に角僕の工夫は好かつたね。君達は圓錐の公式のお蔭で、Tut-tut-tutの態度を保つて巡査の前を通過することが出来たのだ。」

三人は岩崎邸に附いて東へ曲る處に來た。一人乗の人力車が行き違ふことの出来ぬ横町に這入るのだから、危險はもう全く無いと云つても好い。石原は岡田の側を離れて、案内者のやうに前に立つた。僕は今一度振り返つて見たが、もう女の姿は見えなかつた。

僕と岡田とは、其晩石原の所に夜の更けるまでゐた。雁を肴に酒を飲む石原の相伴をしたと云つても好い。岡田が洋行の事を噫氣にも出さぬので、僕は色々話したい事のあるのをこらへて、石原と岡田との間に交換せられる飲酒の經歷談などに耳を傾けてゐた。

上條へ歸つた時は、僕は草臥と酒の酔とのた

めに、岡田と話することも出来ずに、別れて寢た。翌日大學から歸つて見ればもう岡田はゐなかつた。

一本の釘から大事件が生ずるやうに、青魚の煮肴が上條の夕食の饌に上つたために、岡田とお玉とは永遠に相見ることを得ずにしまつた。そればかりでは無い。しかしそれより以上の事は雁と云ふ物語の範圍外にある。

僕は今此物語を書いてしまつて、指を折つて數へて見ると、もう其時から三十五年を経過してゐる。物語の一半は、親しく岡田に交つてゐて見たのだが、他の一半は岡田が去つた後に、圖らずにお玉と相識になつて聞いたのである。譬へば實體鏡の下にある左右二枚の圖を、一の影像として視るやうに、前に見た事と後に聞いた事を、照らし合せて作つたのが此物語である。

讀者は僕に問ふかも知れない。「お玉とはどうして相識になつて、どんな場合にそれを聞いたか」と問ふかも知れない。しかしこれに對する答も、前に云つた通り、物語の範圍外にある。只僕にお玉の情人になる要約の節についてゐぬことは論を須たぬから、讀者は無用の臆測をせぬが好い。

云つた。石原が餘り右へ寄り過ぎたのである。忽ち石原は足を停めて身を屈めた。そしてすぐに跡へ引き返して來た。遠い方の蓮の莖の邊を過ぎた頃には、もう右の手に提げてゐる獲ものが見えた。

石原は太股を半分泥に汚しただけで、岸に着いた。獲ものは思ひ掛けぬ大さの鹿であつた。石原はざつと足を洗つて、着物を着た。此邊は其頃まだ人の往來が少くて、石原が池に這入つてから又上がつて來るまで、一人も通り掛かつたものが無かつた。

「どうして持つて行かう」と僕が云ふと、石原が袴を穿きつつ云つた。

「岡田君の外套が一番大きいから、あの下に入れて持つて貰ふのだ。料理は僕の所でさせる。」

石原は素人家の一間を借りてゐた。主人の婆あさんは、餘り人の好くないのが取柄で、獲ものを分けて遣れば、口を噤ませることも出来さうである。其家は湯島切通しから、岩崎邸の裏手へ出る横町で、曲りくねつた奥にある。石原はそこへ雁を持ち込む道筋を手短かに説明した。先づここから石原の所へ往くには、由るべき道が二條ある。即ち南から切通しを經る道と、北から無縁坂を經る道とで、此二條は岩崎邸の

内に中心を有した圈を畫いてゐる。遠近の差は少い。又此場合に問ふ所でも無い。障礙物は巡查派出所だが、これはどちらにも一箇所づつある。そこで利害を比較すれば、只賑かな切通しを避けて、寂しい無縁坂を取ると云ふことに歸着する。雁は岡田に、外套の下に入れて持たせ、跡の二人が左右に並んで、岡田の體を隠蔽して行くが最良の策だと云ふのである。

岡田は苦笑しつつも雁を持つた。どんなに持つて見てても、外套の裾から下へ、羽が二三寸出る。其上外套の裾が不恰好に横がつて、岡田の姿は圓錐形に見える。石原と僕とは、それを口立たせぬやうにしなければならぬのである。

### 貳拾肆

「さあ、かう云ふ風にして歩くのだ」と云つて、石原は僕と二人で、岡田を中に挟んで歩き出した。三人で初から氣に掛けてゐるのは、無縁坂下の四辻にある交番である。そこを通り抜ける時の心得だと云つて、石原が盛んな講釋を出した。なんでも、僕の聴き取つた所では、心が動いてはならぬ、動けば隙を生ずる、隙を生ずれば乗ぜられると云ふやうな事であつた。石原は虎が醉人を喰はぬと云ふ譬を引いた。多分

此講釋は柔術士先生に聞いた事を其儘繰返したものと思はれた。

「して見ると、巡查が虎で、我々三人が醉人だね」と、岡田が冷かした。

「Silentium」と石原が叫んだ。もう無縁坂の方角へ曲る角に近くなつたからである。

角を曲れば、茅町の町家と池に出うた屋敷とが背中合せになつた横町で、其頃は兩側に荷車や何か置いてあつた。四辻に立つてゐる巡查の姿は、もう角から見ええてゐた。

突然岡田の左に引き添つて歩いてゐた石原が、岡田に言つた。「君圓錐の立方積を出す公式を知つてゐるか。なに。知らない。あれは造做はないさ。基底面に高さを乗じたものの三分の一だから、若し基底面が圓になつてゐれば、 $\frac{1}{3}\pi r^2 h$ が立方積だ。 $\pi r^2 h$ のだと云ふことを記憶してゐれば、わけなく出来るのだ。僕は目を數點下八位まで記憶してゐる。 $\pi r^2 h$ に

なるのだ。實際それ以上の數は必要だよ。」かう云つてゐるうちに、三人は四辻を通り過ぎた。巡查は我々の通る横町の左側交番の前に立つて、茅町を根津の方へ走る人々車を見てゐたが、我々には只無意味な一瞥を投じたに過ぎなかつた。

其日は暮方から風が歇んで、空一面を蔽つた薄い雲が、月の輪廓をかすませ、やうやう近寄つて来る夏の温さが、兩岸の土からも、川床の土からも、露になつて立ち昇るかと思はれる夜であつた。下京の町を離れて、加茂川を横ぎつた頃から、あたりがひつそりとして、只舳に割かれる水のささやきを聞くのみである。

夜舟で寝ることは、罪人にも許されてゐるのに、喜助は横にならうとせず、雲の濃淡に従つて、光の増したり減じたりする月を仰いで、黙つてゐる。其額は晴やかで目には微かなかがやきがある。

庄兵衛はまともにには見てゐぬが、始終喜助の顔から目を離さずにある。そして不思議だ、不思議だと、心の内で繰り返してゐる。それは喜助の顔が縦から見ても、横から見ても、いかにも楽しさうで、若し役人に對する氣兼ねがなかつたなら、口笛を吹きはじめるとか、鼻歌を歌ひ出すとかしさうに思はれたからである。

庄兵衛は心の内に思つた。これまで此高瀬舟の宰領をしたことは幾度だか知れない。しかし載せて行く罪人は、いつも殆ど同じやうに、目も當てられぬ氣の毒な様子をしてゐた。それ此男はどうしたのだらう。遊山船にでも乗つ

たやうな顔をしてゐる。罪は弟を殺したのださうだが、よしや其弟が悪い奴で、それをどんな行拂りになつて殺したにせよ、人の情として好い心持はせぬ筈である。この色の白い瘦男が、その人の情と云ふものが全く缺けてゐる程の、世にも稀な悪人であらうか。どうもさうは思はれない。ひよつと氣でも狂つてゐるのではあるまいか。いやいや。それにしては何一つ辻褄の合はぬ言語や舉動がない。此男はどうしたのだらう。庄兵衛がためには喜助の態度が考へれば考へる程わからなくなるのである。

暫くして、庄兵衛はこらへ切れなくなつて呼び掛けた。「喜助。お前何を思つてゐるのか。」「はい」と云つてあたりを見廻した喜助は何事をお役人に見咎められたのではないかと氣遣ふらしく、居すまひを直して庄兵衛の氣色を伺つた。

庄兵衛は自分が突然問を發した動機を明して、役目を離れた應對を求める分疎をしなくてはならぬやうに感じた。そこでかう云つた。「いや。別にわけがあつて聞いたのではない。實は、己は先刻からお前の島へ行く心持が附いて見たかつたのだ。己はこれまで此舟で火勢の人

を島へ送つた。それは随分いろいろな身の上の人だつたが、どれもこれも島へ行くのを悲しがつて、見送りに来て、一しよに舟に乗る親類のものゝ、夜どほし泣くに極まつてゐた。それにお前の様子を見れば、どうも島へ行くのを苦しめてはゐないやうだ。一體お前はどうか思つてゐるのだい。」

喜助はにつこり笑つた。「御親切に仰やつて下さつて、難有うございます。なる程島へ行くといふことは、外の人には悲しい事でございませう。其心持はわたくしにも思ひ遣つて見ることが出来まます。しかしそれは世間で樂をしてゐた人だからでございます。京都は結構な土地でございますが、その結構な土地で、これまでわたたくしのいたして参つたやうな苦みは、どこへ参つてもなからうと存じます。お上のお慈悲で、命を助けて島へ遣つて下さいます。島はよしやつらい所でも、鬼の栖む所ではございませう。わたくしはこれまで、どこと云つて自分のゐて好い所と云ふものがございませんでした。こんどお上で島にゐると仰やつて下さいます。そのゐると仰やる所に落ち着いてゐることが出来ますが、先づ何よりも難有い事でございませう。それにわたくしはこんなにかやわい



# 高瀬舟

で、不快な職務として嫌はれてゐた。

高瀬舟は京都の高瀬川を上、下する小舟である。徳川時代に京都の罪人が遠島を申し渡されるとき、本人の親類が牢屋敷へ呼び出されて、そこで暇をすることを許された。それから罪人は高瀬舟に載せられて、大阪へ廻されることであつた。それを護送するのは、京都町奉行の配下にゐる同心で、此同心は罪人の親類の中で、主立つた一人を大阪まで同船させることを許す慣例であつた。これは上へ通つた事ではないが、所謂大目に見るのであつた。黙許であつた。

當時遠島を申し渡された罪人は、勿論重い科を犯したものと認められた人ではあるが、決して盗をするために、人を殺し火を放つたと云ふやうな、極悪な人物が多数を占めてゐたわけではない。高瀬舟に乗る罪人の過半は、所謂心得違のために、想はぬ科を犯した人であつた。有り觸れた例を擧げて見れば、當時相對死と云つた情死を謀つて、相手の女を殺して、自分だけ生き残つた男と云ふやうな類である。

さう云ふ罪人を載せて、入相の鐘の鳴る頃に漕ぎ出された高瀬舟は、黒ずんだ京都の町の家を兩岸に見つ、東へ走つて、加茂川を横ぎつて下るのであつた。此舟の中で、罪人と其親類の者とは夜どほし身の上を語り合ふ。いつもいつも悔やんでも還らぬ縁音である。護送の役をする同心は、傍でそれを聞いて、罪人を出した親戚眷族の悲惨な境遇を細かに知ることが出来た。所詮町奉行の白洲で、表向の口供を聞いたり、役所の机の上で、口書を讀んだりする役人の夢にも窺ふことの出来ぬ境遇である。

此時只うのさいと思つて、耳を掩ひたく思ふ。冷淡な同心があるかと思へば、又しみじみと人の哀を身に引き受けて、役柄ゆる氣色には見せぬながら、無言の中に私に胸を極める同心もあつた。場合によつて非常に悲惨な境遇に附つた罪人と其親類とを、特に心弱い、涙脆い同心が宰領して行くことになる、其同心は不覺の涙を禁じ得ぬのであつた。

そこで高瀬舟の護送は、町奉行所の同心仲間といつて可い頃であつたか。多分江戸で白河樂翁侯が政柄を執つてゐた頃の頃ででもあつただらう。智恵殿の標が人相の鐘に散る春の夕に、これまで類のない、珍らしい罪人が高瀬舟に載せられた。

それは名を喜助と云つて、三十歳ばかりになる、住所不定の男である。固より牢屋敷に呼び出されるやうな親類はないので、舟にも只一人で乗つた。

護送を命ぜられて、一しよに舟に乗り込んだ同心猪田庄兵衛は、只喜助が弟殺しの罪人だと云ふことだけを聞いてゐた。さて牢屋敷から桤橋まで連れて来る間、この瘡肉の、色の蒼白い喜助の様子を見るに、いかにも神妙に、いかにもおとなしく、自分をば公儀の役人として敬つて、何事につけても逆はぬやうにしてゐる。しかもそれが、罪人の間に往々見受けるやうな、温順を装つて權勢に媚びる態度ではない。庄兵衛は不思議に思つた。そして舟に乗つてからも、單に役目の表で見張つてゐるばかりでなく、絶えず喜助の舉動に、細かい注意をしてゐた。

に無理はない。其心持はこつちから察して遣ることが出来る。しかしいかに桁を違へて考へて見ても、不思議なのは喜助の慈のないこと、足ることを知つてゐることである。

喜助は世間で爲事を見附けるのに苦んだ。それを見附けさへすれば、骨を惜まらずに働いて、やうやう口を糊することの出来るだけで満足した。そこで牢に入つてからは、今まで得難かつた食が、殆ど天から授けられるやうに、働かずに得られるのに驚いて、生れてから知らぬ満足を感じたのである。

庄兵衛はいかに桁を違へて考へて見ても、ここに彼と我との間に、大いなる懸隔のあることを知つた。自分の扶持米で立てて行く暮しは、折々足らぬことがあるにしても、大抵出納が合つてゐる。手一ぱいの生活である。然るにそこに満足を感じたことは殆ど無い。常は幸とも不幸とも感ぜずに過してゐる。しかし心の奥には、かうして暮してゐて、ふいとお役が御免になつたらどうしよう、大病にでもなつたらどうしようといふ疑懼が潜んでゐて、折々妻が里方から金を取り出して来て穴堀をしたことなどがわかると、此疑懼が意識の隅の隅の上に頭を擡げて来るのである。

一體此懸隔はどうして生じて来るだらう。只上邊だけを見て、それは喜助には身に係累がないのに、こつちにはあるからだといつてしまへばそれまでである。しかしそれは諷である。よしや自分が一人者であつたとしても、どうも喜助のやうな心持にはなられさうにない。この根柢はもつと深い處にあるやうだと、庄兵衛は思つた。

庄兵衛は只漠然と、人の一生といふやうな事を思つて見た。人は身に病があると、此病がなかつたらと思ふ。其日其日の食がないと、食つて行かれたらと思ふ。萬一の時に備へる「蓄」がないと、少しでも蓄があつたらと思ふ。「蓄」があつても、又其蓄がもつと多かつたらと思ふ。此の如くに先から先へと考へて見れば、人はどこまで往つて踏み止まることが出来るものやら分らない。それを今日の前で踏み止まつて見せてくれるのが此喜助だと、庄兵衛は氣が附いた。

庄兵衛は人さらのやうに驚異の目を睜つて喜助を見た。此時庄兵衛は空を仰いでゐる喜助の頭から毫光がさすやうに思つた。

庄兵衛は喜助の顔をまもりつつ又、「喜助さ

ん」と呼び掛けた。今度は「さん」と云つたが、これは十分の意識を以て稱呼を改めたわけではない。其聲が我口から出て我耳に入るや否や、庄兵衛は此稱呼の不適當なのに氣が附いたが、今さら既に出た詞を取り返すことも出来なかつた。

「はい」と答へた喜助も「さん」と呼ばれたのを不審に思ふらしく、おそるおそる庄兵衛の氣色を覗つた。

庄兵衛は少し間の悪いのをこらへて云つた。

「色々の事を聞くやうだが、お前は今度島へ遣られるのは、人をあやめたからだといふ事だ。已に序にそのわけを話して聞せてくれぬか。」喜助はひどく恐れ入つた様子で「かしこまりました」と云つて、小聲で話し出した。

「どうも飛んだ心得違で、恐ろしい事をいたしましたして、なんとも申し上げやうがございませぬ。跡で思つて見ますと、どうしてあんな事が出来たかと、自分ながら不思議でなりません。

全く夢中でいたしたのでございます。わたくしは小さい時に二親が時疫で亡くなりまして、弟と二人跡に残りました。初は丁度軒下に生れた狗のうにふびんを掛けるやうに町内の人達がお恵下さいますので、近所中の穴

體ではございますが、つひぞ病氣をいたしたことはございせんから、島へ往つてから、どんなつらい爲事をしたつて、體を痛めるやうなことはあるまいと存じます。それからこん度島へお遣下さるに付きまして、二百文の鳥日を戴きました。それをここに持つてをります。一かうぶひ掛けて、喜助は胸に手を當てた。遠島を仰せ附けられるものには、鳥目二百鎧を遣すと云ふのは、當時の掟であつた。

喜助は語を續いだ。「お恥かしい事を申し上げなくてはなりませぬが、わたくしは今日まで二百文と云ふお足を、かうして懷に入れて持つてゐたことはございませぬ。どこかで爲事に取り附きたいと思つて、爲事を尋ねて歩きまして、それが見附かり次第、骨を惜まずに働きました。そして貰つた錢は、いつも右から左へ人手に渡さなくてはなりませなんだ。それも現金で物が買つて食べられる時は、わたくしの工面の好い時で、大抵は借りたものを返して、又跡を借りたのでございます。それがお牢に還入つてからは、爲事をせずに食べさせて戴きます。わたくしはそればかりでも、お上に對して濟まない事をいたしてゐるやうでなりませぬ。それにお牢を出る時に、此二百文は戴きましたので

ございます。かうして相變らずお上の物を食べてゐて見ますれば、此二百文はわたくしが使はずに持つてゐることが出来ます。お足を自分の物にして持つてゐると云ふことは、わたくしに取つては、これが始でございませぬ。島へ往つて見ますまでは、どんな爲事が出来るかわかりませんが、わたくしは此二百文を島でする爲事の本事にしようと思ひ込んでをります。かう云つて、喜助は口を噤んだ。

庄兵衛は「うん、さうかい」とは云つたが、聞く事毎に餘り意表に出たので、これも暫く何も云ふことが出来ずに、考へ込んで黙つてゐた。

庄兵衛は彼は初老に手の届く年になつてゐて、もう女房に子供を四人生ませてる。それに老母が生きてゐるので、家は七人暮しである。平生人には吝嗇と云はれる程の、儉約な生活をしてゐて、衣類は自分が役目のために着るもの外、寝巻しか拵へぬ位にしてゐる。しかし不幸な事には、妻を好い身代の商人の家から迎へた。そこで女房は大の貫ふ扶持米で暮しを立てて行かうとする善意はあるが、裕な家に可哀がられて育つた癖があるので、夫が満足する程手元を引き締めて暮して行くことが出来な

い。動もすれば月末になつて勘定が足りなくな

る。すると女房が内證で里から金を持つて来て帳尻を合はせる。それは夫が借財と云ふものを、意盡のやうに嫌ふからである。さう云ふ事は所詮夫に知れずにはゐない。庄兵衛は五節句だと云つては、甲方から物を貰ひ、子供は五三の祝だと云つては、甲方から子供に類せ貰ふのでさへ、心苦しく思つてゐるのだから、暮しの穴を填めて貰つたに氣が附いては、好い顔はしない。格別平和を破るやうな事のない羽田の家に、折々波風の起るのは、是が原因である。

庄兵衛は今喜助の話を聞いて、喜助の身の上をわが身の上に引き比べて見た。喜助は爲事をして給料を取つても、右から左へ人手に渡して亡くしてしまふと云つた。いかにも哀な、氣の毒な境界である。しかし一轉して我身の上を顧みれば、彼と我との間に、果してどれ程の差があるか。自分も上から貰ふ扶持米を、右から左へ人手に渡して暮してゐるに過ぎぬではないか。彼と我との相違は、謂はば十露盤の杓が違つてゐるだけで、喜助の難有がる二百文に相當する貯蓄だに、こつちはないのである。

さて杓を違へて考へて見れば、鳥目二百文をでも、喜助がそれを貯蓄と見て喜んでゐるの



しはなんでも一と思ひしなくてはと思つて膝を  
撞くやうにして體を前へ乗り出しました。弟  
は衝いてゐた右の手を放して、今まで喉を押へ  
てゐた手の肘を床に衝いて、横になりました。  
わたくしは剃刀の柄をしつかり握つて、ずつと  
引きました。此時わたくしの内から締めて置い  
た表口の戸をあけて、近所の婆あさんが這入つ  
て來ました。留守の間、弟に藥を飲ませたり  
何かしてくるやうに、わたくしの頼んで置い  
た婆あさんなのでございます。もう大ぶりのな  
かが暗くなつてゐましたから、わたくしは婆  
あさんがどれだけの事を見たのかわかりませ  
んでしたが、婆あさんはあつと云つた切表口  
をあけ放しにして置いて驛け出してしまひまし  
た。わたくしは剃刀を抜く時、手早く抜かう、  
眞直に抜かうと云ふだけの用心はいたしました  
が、どうも抜いた時の手應は、今まで切れてゐな  
かつた所を切つたやうに思はれました。刃が外  
の方へ向いてゐましたから、外の方が切れたの  
でございませう。わたくしは剃刀を握つた儘、  
婆あさんの這入つて來て又驛け出して行つたの  
を、ぼんやりして見てをりました。婆あさんが  
行つてしまつてから、氣が附いて弟を見ます  
と、弟はもう息が切れてをりました。創口か

らは大それた血が出てをりました。それから年  
寄衆がお出になつて、役場へ連れて行かれます  
まで、わたくしは剃刀を傍に置いて、目を半分  
あいた儘死んでゐる弟の顔を見詰めてゐたの  
でございませう。」  
少し俯向き加減になつて庄兵衛の顔を下から  
見上げて話してゐた喜助は、かう云つてしまつ  
て視線を膝の上に落した。  
喜助の話は好く條理が立つてゐる。弟と條  
理が立ち過ぎてゐると云つても好い位である。  
これは半年程の間、當時の事を幾度も思ひ浮べ  
て見たのと、役場で問はれ、町奉行所で調べら  
れる其度毎に、注意に注意を加へて浚つて見  
させられたのとのためである。  
庄兵衛は其場の様子を目のあたり見るやうな  
思ひをして聞いてゐたが、これが果して弟を殺  
しと云ふものだらうか、人殺しと云ふものだら  
うかと云ふ疑が、話を半分聞いた時から起つ  
て來て、聞いてしまつても、其疑を解くことが  
出來なかつた。弟は剃刀を抜いてくれたら死  
なれるだらうから、抜いてくれと云つた。それ  
を抜いて遣つて死なせたのだ、殺したのだとは  
云はれる。しかし其儘にして置いて、どうせ  
死ななくてはならぬ弟であつたらしい。それ

が早く死にたいと云つたのは、苦しさに耐へな  
かつたからである。喜助は其苦を見てゐるに忍  
びなかつた。苦から救つて遣らうと思つて命を  
絶つた。それが罪であらうか。殺したのは罪に  
相違ない。しかしそれが苦から救ふためであつ  
たと思ふと、そこに疑が生じて、どうしても  
解けぬのである。  
庄兵衛の心の中には、いろいろに考へて見  
た末に、自分より上のものの判斷に任す外ない  
と云ふ念、オオトリテに從ふ外ないと云ふ念  
が生じた。庄兵衛はお奉行様の判斷を、其儘  
自分の判斷にしようと思つたのである。さうは  
思つても、庄兵衛はまだどこやらに腑に落ちぬ  
ものが残つてゐるので、なんだかお奉行様に聞  
いて見たくてならなかつた。  
次第に更けて行く曉夜に、沈黙の二人を載  
せた高瀬舟は、黒い水の面をすべつて行つた。  
附 高瀬舟縁起  
京都の高瀬川は、五條から南は大正十  
五年に二條から五條までは慶長十七年に、  
角倉了以が掘つたものださうである。そこ

使などをいたして、飢え凍えもせず、育ちました。次第に大きくなりまして職を捜しますにも、なるたけ二人が離れないうらにいたして、一しよにゐて、助け合つて働きました。去年の秋の事でございます。わたくしは弟と一しよに、西陣の織場に這入りまして、空引と云ふことをいたすことになりました。そのうち弟が病氣で働けなくなつたのでございます。其頃わたくし共は北山の掘立小屋同様の所に寝起をいたして、紙屋川の橋を渡つて織場へ通つてをりました。が、わたくしが暮れてから、食物などを買つて歸ると、弟は待ち受けてゐて、わたくしを一人で稼がせては濟まない濟まないと申してをりました。或る日いつものやうに何心なく歸つて見ますと、弟は布團の上に突つ伏してゐまして、周囲は血だらけなのでございます。わたくしはびつくりいたして、手に持つてゐた竹の皮包や何かを、そこへおつぱり出して、傍へ往つて『どうした、どうした』と申しました。すると弟は眞蒼な顔の兩方の頬から眼へ掛けて血に染つたのを擧げて、わたくしを見ましたが、物を言ふことが出来ませぬ。息をいたす度に、口でひゅうひゅうと云ふ音がいたすだけでございます。わたくしにはどうも様子がわかりませ

んので、『どうしたのだい、血を吐いたのかい』と云つて、傍へ寄らうといたすと、弟は右手を床に衝いて、少し體を起しました。左の手はしつかり腿の下の所を押へてゐますが、其處の間から黒血の固まりがはみ出してゐます。弟は口でわたくしの傍へ寄るのを留めるやうにして口を利きました。やうやう物が言へるやうになつたのでございます。『濟まない。どうぞ堪忍してくれ。どうぞせなほりさうにもない病氣だから、早く死んで少しでも兄きに樂がさせたいと思つたのだ。笛を切つたら、すぐ死ぬるだらうと思つたが息がそこから漏れるだけで死ねない。深く深くと思つて、力一ぱい押し込むと、横へすべつてしまつた。刃は齧れはしなかつたやうだ。これを旨く抜いてくれたら已は死ねるだらうと思つてゐる。物を言ふのがせつなくつて可けない。どうぞ手を借して抜いてくれ』と云ふのでございます。弟が左の手を弛めるとそこから又息が漏ります。わたくしはなんと云はうにも、聲が出ませんので、黙つて弟の喉の創を覗いて見ますと、なんでも右の手に剃刀を持つて、横に笛を切つたが、それでは死に切れなかつたので、其儘剃刀を、刮るやうに深く突つ込んだものと見えます。柄がやつと二寸ばかり創

口から出てゐます。わたくしはそれだけの事を見て、どうしようと思案も附かずに、弟の顔を見ました。弟はちつとわたくしを見詰めてゐます。わたくしはやつとの事で、待つてゐてくれ、お歸者呼んで来るから』と申しました。弟は怨めしうな目筋をいたしましたが、又左の手で喉をしつかり押へて、嚔聲がなんになる、ああ苦しい、早く抜いてくれ、轢ひと云ふのでございます。わたくしは途方に暮れたやうな心持になつて、只弟の顔ばかり見てをります。こんな時は、不思議なもので、目が物を言ひます。弟の日は『早くしろ、早くしろ』と云つて、さも怨めしうにわたくしを見てゐます。わたくしの頭の中では、なんだかから車の輪のやうな物がぐるぐる廻つてゐるやうでございまして、弟の日は『早くしろ、早くしろ』と云つて、それに其目の怨めしうなのが段々險しくなつて來て、とうとう敵の顔をでも睨むやうな怖々しい目になつてしまひます。それを見てゐて、わたくしはとうとう、これは弟の言つた通にして違らなくてはならないと思ひました。わたくしは『しかたがない、抜いて遣るぞ』と申しました。すると弟の目の色がからりと變つて、暗やかに、さも憎しうになりました。わたくし

# 阿部一族

從四位下左近衛少將兼越中守細川忠利は、寛永十八年辛巳の春、餘所よりは早く咲く領地肥後國の花を見來て、五十四萬石の大名の晴々しい行列に前後を圍ませ、南より北へ歩みを運ぶ春と俱に、江戸を志して参勤の途に上らうとしてゐるうち、圖らず病に罹つて、典醫の方療も功を奏せず、日に増し重くなるばかりなので、江戸へは出發日延の飛脚が立つ。徳川將軍は名君の譽の高い三代日の家光で、島原一揆の時賊將天草四郎時貞を討ち取つて大功を立てた忠利の身の上を氣遣ひ、三月二十日には松平伊豆守、阿部豐後守、阿部對馬守の連名の沙汰書を作らせ、針翳以策と云ふのを、京都から下向させる。續いて二十二日には同じく執政三人の署名した沙汰書を持たせて、曾我又左衛門と云ふ侍を上使に遣す。大名に對する將軍家の取扱としては、鄭重を極めたものであつた。島原征伐が此年から三年前寛永十五年の春平定してから後、江戸の邸に添地を賜はつたり、鷹狩の鶴を下されたり、不

斷然難を盡してゐた將軍家の事であるから、此度の大病を聞いて、先例の許す限の慰問をさせたのも尤である。將軍家がかう云ふ手續をする前に、熊本花畑の館では忠利の病が革かになつて、とうとう三月十七日中の刻に五十六歳で亡くなつた。奥方は小笠原兵部大輔秀政の娘を將軍が養女にして妻せた人で、今年四十五歳になつてゐる。名をお千の方と云ふ。嫡子六丸は六年前に元服して將軍家から光の字を賜はり、光貞と名告つて、從四位下侍從兼肥後守にせられてゐる。今年十七歳である。江戸参勤中で遠江國濱松まで歸つたが、訃音を聞いて引き返した。光貞は後名を光尚と改めた。二男鶴千代は小さい時から立田山の泰勝寺に遣つてゐる。京都妙心寺出身の大端和尚の弟子になつて宗玄と云つてゐる。三男松之助は細川家に舊縁のある長門氏に養はれてゐる。四男勝千代は家臣南條大膳の養子になつてゐる。女子は二人ある。長女藤姫は松平周防守忠弘の奥方になつてゐる。

二女竹姫は後に有吉頼母英長の妻になる人である。弟には忠利が三齋の三男に生れたので、四男中務大輔立孝、五男刑部興孝、六男長岡式部寄之の三人がある。母には稻葉一通に嫁した多羅姫、島丸中納言光隆に嫁した麗姫がある。此萬姫の腹に生れた爾々姫が忠利の嫡子光尚の奥方になつて來るのである。目上には長岡氏を名告る兄が二人、前野長岡兩家に嫁した姉が二人ある。隠居三齋宗立もまだ存命で、七十九歳になつてゐる。此中には嫡子光貞のやうに江戸にゐたり、又京都、其外遠國にゐる人達もあるが、それが後に知らせを受けて歎いたのと違つて、熊本の館にゐた即の人達の歎きは、分けて痛切なものであつた。江戸への注進には六島少吉、津田六左衛門の二人が立つた。三月二十四日には初七日の替みがあつた。四月二十八日にはそれまで館の居間の床板を引き放つて、土中に置いてあつた柩を引き上げて、江戸からの指圖に依つて、飽田郡春日大曲雲院で遺骸を茶甕にして、高麗門の外に山に葬つた。此靈屋の下に、翌年の冬になつて、護國山妙解寺が建立せられて、江戸品川東海寺から深庭和尚の同門の聖室和尚が來て住持になり、それが寺内の臨流庵に隠居してから、忠利の二



を通ふ舟は曳舟である。原來たかせは舟の名で、其舟の通ふ川を高瀬川と云ふのだから、同名の川は諸國にある。しかし舟は曳舟には限らぬので、利名鈔には釋名の「艇小而深者」曰「艇」とある。艇の字をたかせに當ててある。竹柏閣文庫の和漢船用集を借覽するに、「おもて高く」とも、よこともにて、低く平なるものなり」と云つてある。そして圖には篙で行る舟がかいてある。

徳川時代には京都の罪人が遠島を言ひ渡されると、高瀬舟で大阪へ廻されたさうである。それを護送して行く京都町奉行附の同心が悲しい話ばかり聞せられる。或るとき此舟に載せられた兄弟殺しの科を犯した男が、少しも悲しがつてゐなかつた。其仔細を尋ねると、これまで食を得ることに困つてゐたのに、遠島を言ひ渡された時、銅錢二百文を貰つたが、錢を使はずに持つてゐるのは始でだと答へた。又人殺しの科はどうして犯したかと問へば、兄弟で西陣に傭はれて、空引と云ふことをしてゐたが、給料がなくて暮しが立ち兼ねた、其内同胞が自殺を謀つたが、死に切れなかつた、そこで同胞が所詮助からぬから殺してくれと

頼むので、殺して遣つたと云つた。

此話は翁草に出てゐる。池邊義象さんの校訂した活字本で一ペエジ餘に書いてある。私はこれを讀んで、其中に二つの大い問題が含まれてゐると思つた。一つは財産と云ふものの觀念である、錢を持つたことのない人の錢を持つた喜は、錢の多少には關せない。人の欲には限がないから、錢を持つて見るといくらあればよいといふ限界は見出されないものである。二百文を財産として喜んだのが面白い。今一つは死に掛かつてゐて死なれずに苦んでゐる人を、死なせて遣ると云ふ事である。人を死なせて遣れば、即ち殺すと云ふことになる。どんな場合にも人を殺してはならない。翁草にも、教のない民だから、惡意がないのに人殺しになつたと云ふやうな批評の詞があつたやうに記憶する。しかしこれはさう容易に拘り定めて決してしまはれる問題ではない。こゝに病人があつて死に瀕して苦んでゐる。それを救ふ手段は全くない。傍からその苦むのを見てゐる人はどう思ふであらうか。縱令教のある人でも、どうせ死ななくてはならぬものなら、あの

苦みを長くさせて置かずに、早く死なせて遣りたいと云ふ情は必ず起る。ここに麻醉藥を與へて好いか悪いかと云ふ疑が生ずるのである。其藥は致死量でないにしても、藥を與へれば、多少死期を早くするかも知れない。それゆゑ遣らずに置いて苦ませてゐなくてはならない。從來の道德は苦ませて置けと命じてゐる。しかし醫學社會には、これを非とする論がある。即ち死に瀕して苦むものがあつたら、藥に死なせて、其苦を救つて遣るが好いと云ふのである。これをユウタナジイといふ。藥に死なせると云ふ意味である。高瀬舟の罪人は一度それと同じ場合にゐたやうに思はれる。私にはそれがひどく面白い。

かう思つて私は「高瀬舟」と云ふ話を書いた。中央公論で公にしたのがそれである。

て死んで功にはならない。それが大死であると同じ事で、お許し無いに殉死しては、これも大死である。偶にさう云ふ人で大死にならないのは、値遇を得た君臣の間に默契があつて、お許しなくともお許があつたのと變らぬのである。佛涅槃の後に起つた大乘の教は、佛のお許はなかつたが、過現未を通じて知らぬ事の無い佛は、さう云ふ教が出て来るものだとして懸許して置いたものだとしてある。お許が無いのに殉死の出来るのは、金口で說かれると同じやうに、大乘の教を説くやうなものであらう。

そんならどうしてお許を得るか云ふと、此度殉死した人々の中の内藤長十郎元續が願つた手段などが好い例である。長十郎は平生忠利の机廻りの用を勤めて、格別の御懇意を蒙つたもので、病牀を離れずに介抱をしてゐた。最早本復は覺えないと、忠利が情つた時、長十郎に「末期が近うなつたら、あの不二と書いてある大文字の懸物を枕許に懸けてくれと言ひ附けて置いた。三月十七日に容態が次第に重くなつて、忠利が「あの懸物を懸けえ」と云つた。長十郎はそれを懸けた。忠利はそれを二目見て、暫く睨目してゐた。それから忠利が「足がだるい」と云つた。長十郎は撫卷の裾を徐かにまく

つて、忠利の足をさすりながら、忠利の顔をちつと見ると、忠利もちつと見返した。

「長十郎お願がござりまする。」

「なんぢや。」

「御病氣はいかにも御重體のやうにはお見受申しまするが、神佛の加護、良藥の功驗で、一日も早う御全快遊ばすやうにと、祈願いたしてをりまする。それでも萬一と申すことがござりまする。若しもの事がござりましたら、どうぞ長十郎奴にお供を仰せ附けられますやうに。」

かう云ひながら長十郎は忠利の足をそつと持ち上げて、自分の額に押し當てて戴いた。目には涙が一ぱい浮かんでゐた。

「それはいかんぞよ。」かう云つて忠利は今まで長十郎と顔を見合せてゐたのに、半分寝返りをするやうに脇を向いた。

「どうぞさう仰やらずに。」長十郎は又忠利の足を戴いた。

「いかんいかん。」顔を背向けた儘で云つた。

列座の者の中から、「弱輩の身を以て推參ぢや、控へたら好からう」と云つたものがある。長十郎は當年十七歳である。

「どうぞ。」咽に支へたやうな聲で云つて、長十郎は三度目に戴いた足をいつまでも額に當

てて放さずにゐた。

「情の無い奴ぢやな。」聲はおこつて叱るやうであつたが、忠利は此詞と俱に二度頷いた。

長十郎は「はつ」と云つて、兩手で忠利の足を地へた儘、床の背後に俯伏して、暫く動かずにゐた。その時長十郎が心の中には、非常な難所を通じて行き着かなくてはならぬ所へ行き着いたやうな、力の弛みと心の落着きとが満ち溢れて、その外の事は何も意識に上らず、佛後臺の上に涙の灑れるのも知らなかつた。

長十郎はまだ弱輩で何一つ際立つた功績もなかつたが、忠利は始終目を掛けて側近く使つてゐた。酒が好きで、別人なら無禮のお咎めもありさうな失禮をしたことがあるのに、忠利は「あれは長十郎がしたのでは無い、酒がしたのぢや」と云つて笑つてゐた。それでその恩に報いなくてはならぬ、その過を償はなくてはならぬと思ひ込んでゐた。長十郎は、忠利の病氣が重つてからは、その報酬と賠償との道は、殉死の外無いと牢く信するやうになつた。併し細かに此男の心中に立ち入つて見ると、自分の意で殉死しなくてはならぬと云ふ心持の旁、自分が自分を殉死する筈のものだと思つてゐるに違ひないから、自分は殉死を餘儀なくせられてゐ

男で出家してゐた宗玄が、天岸和尚と號して跡継ぎになるのである。忠利の法號は妙解院殿臺雲宗伍大居士と附けられた。

岫雲院で茶毗になつたのは、忠利の遺言によつたのである。いつの事であつたか、忠利が方目狩に出て、此岫雲院で休んで茶を飲んだことがある。その時忠利はふと腰蓑の伸びてゐるのに氣が附いて住持に刺刀は無いかと云つた。住持は盥に水を取つて、刺刀を添へて出した。忠利は機嫌よく兒小姓に蓑を刺らせながら、住持に云つた。「どうぢやな。此刺刀では亡者の頭を澤山刺つたであらうな」と云つた。住持はなんと返事をして好いか分からぬので、ひどく困つた。此時から忠利は岫雲院の住持と心安くなつてゐたので、茶毗所を此寺に極めたのである。丁度茶毗の最中であつた。柩の供をして來てゐた家臣達の群に、「あれ、お鷹がお鷹が」と云ふ聲がした。境内の杉の木立に限られて、鈍い青色をしてゐる空の下、圓形の石の井筒の上に笠のやうに垂れ掛かつてゐる松櫻の上の方に、二羽の鷹が輪をかいで飛んでゐたのである。人々が不思議がつて見てゐるうちに、二羽が尾と嘴と觸れるやうに跡先に續いて、さつと落して來て、櫻の下の中に這入つた。寺の門

前で暫く何かを言い争つてゐた五六人の中から、二人の男が駈け出して、井の端に來て、石の井筒に手を掛けて中を覗いた。その時鷹は水底深く沈んでしまつて、商桑の茂みの中に鏡のやうに光つてゐる水面は、もう元の通りに平らになつてゐた。二人の男は鷹匠衆であつた。井の底にくぐり入つて死んだのは、忠利が愛してゐた有明、明石と云ふ二羽の鷹であつた。その事が分かつた時、人々の間に、それではお鷹も殉死したのかと騒ぐ聲が聞えた。それは殿様がお隠れになつた當日から一昨日までに殉死した家臣が十餘人あつて、中にも一昨日は八人一時に切腹し、昨日も一人切腹したので、家中誰一人殉死の事を思はずにゐるものは無かつたからである。二羽の鷹はどう云ふ手ぬかりで鷹匠衆の手を離れたか、どうして日に見えぬ獲物を追ふやうに、井戸の中に飛び込んだか知らぬが、それを穿鑿しようなどと思ふものは一人も無い。鷹は殿様の御寵愛なされたもので、それが茶毗の當日に、しかもお茶毗所の岫雲院の井戸に這入つて死んだと云ふ丈の事實を見て、鷹が殉死したのだと云ふ判斷をするには十分であつた。それを疑つて別に原因を尋ねようとする餘地は無かつたのである。

中陰の四十九日が五月五日に済んだ。これまでは宗玄を姑として、既西堂、金兩堂、天授庵、聽松院不二庵等の僧侶が勤行をしてゐたのである。扱五月六日になつたが、まだ殉死する人がぼつ／＼ある。殉死する本人や親兄弟妻子は言ふまでもなく、なんの由縁も無いものでも、京都から來るお針燈と江戸から下る御上使との接符の用意なんぞはうはの空でしてゐて、只殉死の事ばかり思つてゐる。例年暮に聳く端午の菖蒲も摘まず、ましてや初轡の祝をする子のある家も、その子の生れたことを忘れたやうにして、静まり返つてゐる。殉死にはいつどうして極まつたともなく、自然に掟が出來てゐる。どれ程殿様を大切に思へばと云つて、誰でも勝手に殉死が出来るものではない。泰平の世の江戸參勤のお供、いざ戦争と云ふ時の陣中へのお供と同じ事で、死天の山三途の川のお供をするにも是非殿様のお許を得なくてはならない。その許もないのに死んで、それは大死である。武士は名聞が大切だから、大死はしない。敵陣に飛び込んで討死をするのは立派ではあるが、軍令に背いて拔駈をし



の支度(しど)は女中(にようちゆう)に言ひ附(つ)けてあるが、姉(し)が食(た)べると云(い)はれるか、どうか分(わ)からぬと思(おも)つて、よめは聞きに行(い)かうと思(おも)ひながらためらつてゐた。若(も)し自分(じぶん)が食(た)べの事(こと)なぞを思(おも)ふやうに取(と)られはすまいかとためらつてゐたのである。

その時(とき)兼(かね)て介錯(けいさく)を頼(たの)まれてゐた關小平次(かんへいぜい)が來(き)た。姉(し)はよめを呼(よ)んだ。よめが黙(もく)つて手(て)を衝(つ)いて機嫌(きげん)を伺(うかが)つてゐると、姉(し)が云(い)つた。

「長十郎(ちやうじやうらう)はちよつと一休(いっけい)すると云(い)うたが、いかい時(とき)が立(た)つやうな。丁度(ていど)關(かん)殿(だん)も來(き)られた。もう起(お)して遣(や)つてはどうかやらうの。」

「ほんにさうでござります。餘(あま)り遅(おそ)くなりません方(か)が。」よめはかう云(い)つて、すぐに起(お)つて夫(そ)を起(お)しに往(い)つた。

夫(そ)の居間(いま)に來(き)た女房(にようばう)は、先(まづ)に枕(まくら)をさせ時(とき)と同じやうに、又(また)ちつと夫(そ)の顔(かほ)を見(み)てゐた。死(し)なせに起(お)すのだと思(おも)ふので、暫(しばらく)は詞(ことば)を掛け兼ね(かか)ねてゐたのである。

熟睡(じくすい)してゐても、庭(には)からさす晝(ひる)の明(あ)りがまばゆかつたと見(み)えて、夫(そ)は窓(まど)の方(かた)を背(そむ)にして、顔(かほ)をこつちへ向(む)けてゐる。

「もし、あなた」と女房(にようばう)は呼(よ)んだ。

長十郎(ちやうじやうらう)は目(め)を醒(さ)まさない。

女房(にようばう)がすり寄(よ)つて、聳(そび)えてゐる肩(かた)に手(て)を掛(か)け

ると、長十郎(ちやうじやうらう)は「あ、あ」と云(い)つて臂(ひで)を伸(の)ばして、兩眼(りやうがん)を開(ひら)いて、むつくり起(お)きた。

「大(おほ)そう好(こ)くお休(やす)みになりました。お袋(ふくろ)様が餘(あま)り遅(おそ)くなりはせぬかと仰(おほ)やりますから、お起(お)し申(まゐ)しました。それに關(かん)様(さま)がお出(い)でになりました。」

「さうか。それでは午(ひる)になつたと見(み)える。少しの間(ま)だと思(おも)つたが、醉(よめ)つたのと疲(つか)れがあつたのとで、時(とき)の立(た)つのを知らずにゐた。その代(か)りひどく氣分(きぶん)が好(よ)うなつた。茶漬(ちまじき)でも食(た)べて、そろそろ東光院(とうくわういん)へ往(い)かずばなるまい。お母(おかあ)あ様(さま)にも申(まゐ)し上げてくれ。」

武士(ぶし)はいざと云(い)ふ時(とき)には飽食(はうじき)はしない。併(併)し又(また)空腹(くうぷつ)で大切な事(こと)に取り掛(か)かることも無い。長十郎(ちやうじやうらう)は實際(じつじやう)ちよつと寐(ね)ようと思(おも)つたのだが、覺(おぼ)えず氣持(きぢ)好(よ)く寐(ね)過(へ)し、午(ひる)になつたと聞(き)いたので、食(た)べ事をしようと思(おも)つたのである。これから形(かたち)ばかりではあるが、一家(いけ)四人(にん)のものが不(ふ)斷(だん)のやうに膳(ぜん)に向(む)かつて、午(ひる)の食(た)べ事(こと)をした。

長十郎(ちやうじやうらう)は心(こころ)靜(しず)かに支度(しど)をして、關(かん)を連(つ)れて菩提所(ぼだいじよ)東光院(とうくわういん)へ腹(はら)を切(き)りに往(い)つた。

長十郎(ちやうじやうらう)が忠利(たうり)の足(あし)を戴(いた)いて願(ねが)つたやうに、平牛恩顧(へいぎうおんこ)を受けてゐた家臣(けしん)の中で、これと前後(ぜんご)

して思(おも)ひ思(おも)ひに殉死(じゆんし)の願(ねが)をして許(ゆる)されたものが、長十郎(ちやうじやうらう)を加(か)へて十八(じゅうはち)人(にん)あつた。いづれも忠利(たうり)の深(ふか)く信(しん)頼(らい)してゐた侍共(さむらいども)である。だから忠利(たうり)の心(こころ)では、此人(ここのひと)々(々)を子息(しよし)光尙(くわうじやう)の保護(ほご)のために殘(のこ)して置(お)きたいことは山々(やまやま)であつた。又(また)此人(ここのひと)々(々)を自分(じぶん)と一(ひと)しよに死(し)なせるのが殘(のこ)刻(こく)だと十分(じふぶん)感(かん)じてゐた。併(併)し彼等(かれら)一人(ひとり)一人(ひとり)に許(ゆる)す」と云(い)ふ一言(いちごん)を、身(み)を割(き)くやうに思(おも)ひながら與(あた)へたのは、勢(いきなり)已(や)むことを得(え)なかつたのである。

自分(じぶん)の親(おや)しく使(つか)つてゐた彼等(かれら)が、命(いのち)を惜(おぼ)まぬものであるとは、忠利(たうり)は信(しん)じてゐる。隨(したが)つて殉死(じゆんし)を苦痛(くるつう)とせぬことも知(し)つてゐる。これに反(はん)して若(も)し自分(じぶん)が殉死(じゆんし)を許(ゆる)さずに置(お)いて、彼等(かれら)が生(い)きながらへてゐたら、どうであらうか。家中(かみうち)一同(いどう)は彼等(かれら)を死(し)ねべき時(とき)に死(し)なぬものとし、恩知(おんち)らずとし、卑怯者(ひけな)として共に斷(こと)せぬであらう。それ丈(そればかり)ならば、彼等(かれら)も或(ある)は忍(しの)んで命(いのち)を光尙(くわうじやう)に捧(たも)げる時(とき)の來(き)るのを待(まち)つかも知(し)れない。併(併)しその恩知(おんち)らず、その卑怯者(ひけな)をそれと知らずに、先代(せんだい)の主人(しゆじん)が使(つか)つてゐたのだと云(い)ふものがあつたら、それは彼等(かれら)の忍(しの)び得(え)ぬ事(こと)であらう。彼等(かれら)はどんなにか口惜(くち)しい思(おも)ひをするであらう。かう思(おも)つて見(み)ると、忠利(たうり)は「許(ゆる)す」と云(い)はずにはゐられない。そこで病苦(びやうこ)にも増(ま)したせつない思(おも)ひをし

ると、人にすがつて死の方向へ進んで行くやうな心持が、殆んど同じ強さに存在してゐた。反面から云ふと、若し自分が殉死せずにゐたら、恐ろしい屈辱を受けるに違ひないと心配してゐたのである。かう云ふ弱みのある長十郎ではあるが、死を怖れる念は微塵も無い。それだからどうぞ殿様に殉死を許して戴かうと云ふ願望は、何物の障礙をも被らずに此男の意志の全幅を領してゐたのである。

暫くして長十郎は兩手で持つてゐる殿様の足に力が這入つて少し踏み伸ばされるやうに感じた。これは又だるくおなりになつたのだと思つたので、又最初のやうに徐かにさすり始めた。此時長十郎の心頭には老母と妻との事が浮かんた。そして殉死者の遺族が主家の優待を受けると云ふことを考へて、それで己は家族を安穩な地位に置いて、安んじて死ぬことが出来ると思つた。それと同時に長十郎の顔は晴々とした氣色になつた。

四月十七日の朝、長十郎は衣服を改めて母の前に出て、始めて殉死の事を明かして暇乞をした。母は少しも驚かなかつた。それは互に

口に出しては言はぬが、けふは母が切腹する日だと、母も疾うから思つてゐたからである。若し切腹しないとでも云つたら、母はさぞ驚いたことであらう。

母はまだ貰つたばかりのよめが勝手にゐたのを其席へ呼んで只一度が出来たかと問うた。よめはすぐに起つて、勝手から兼ねて用意してあつた杯盤を自身に運んで出た。よめも母と同じやうに、夫がけふ切腹すると云ふことを疾うから知つてゐた。髪を綺麗に撫で附けて、好い分の不躰着に着換へてゐる。母もよめも改まつた、眞面目な顔をしてゐるのは同じ事であるが、只よめの目の縁が赤くなつてゐるので、勝手にゐた時泣いたことが分かる。杯盤が出ると、長十郎は弟左平次を呼んだ。

四人は黙つて杯を取り交した。杯が一順した時母が云つた。  
「長十郎や。お前の好きな酒ぢや。少し過してはどうぢやな。」

「ほんにさうでござりまするな」と云つて長十郎は微笑を含んで、心地好げに杯を重ねた。

暫くして長十郎が母に言つた。「好い心持に酔ひました。先日か彼此と心遣を致しましたせぬか、いつもより酒が利いたやうでござ

ります。御免を蒙つてちよつと一休みいたしませう。」

かう云つて長十郎は起つて居間に這入つたが、すぐに部屋の人中に轉がつて、杯をかき出した。女房が跡からそつと這入つて、杯を出して當てさせた時、長十郎は「ううん」とうなつて寢返りをした丈で、又杯をかき續けてゐる。女房はちつと夫の顔を見てゐたが、忽ち體てたやうに起つて部屋へ往つた。泣いてはならぬと思つたのである。

家はひつそりとしてゐる。丁度主人の決心を母と妻とが言はずに知つてゐたやうに、家來も女中も知つてゐたので、勝手にやらせながら、笑聲などは聞えない。

母は母の部屋に、よめはよめの部屋に、弟は弟の部屋に、ちつと物を思つてゐる。主人は居間で軒をかいて寝てゐる。開け放つてある居間の窓には、下に風鈴を附けた吊菰が吊つてある。その風鈴が折々思ひ出したやうに微かに鳴る。その下には丈の高い石の頂を掘り窪めた手水鉢がある。その上に伏せてある松物の柄杓に、やんまが一疋止まつて、羽を山形に垂れて動かずにゐる。

一時立つ。二時立つ。もう午を過ぎた。食事

菊物語を世に残したお菊が孫で、忠利が愛宕山へ學問に往つた時の幼友達であつた。忠利が其頃出家しようとしたのを、鷲かに諫めたことがある。後に知行二百石の側役を勤め、算術が達者で用に立つた。老年になつてからは、君前で頭巾を被つた盛座座することを免されてゐた。當代に追腹を願つても許されぬので、六月十九日に小脇差を腹に突き立ててから願書を出して、とうとう許された。加藤安太夫が介錯した。本庄は丹後國の者で、流浪してゐたのを三藏公の部屋附本庄久右衛門が召使つてゐた。仲津で狼藉者を取り押さへて、五人扶持十五石の切米取にせられた。本庄を名告つたのもその時からである。四月二十六日に切腹した。伊藤は奥納戸役を勤めた切米取である。四月二十六日に切腹した。介錯は河喜多八助がした。右田は大作家の浪人で、忠利に知行百石で召し抱へられた。四月二十七日に自宅で切腹した。六十四歳である。松野右京の家縁田原勘兵衛が介錯した。野田は天草の家老野田美濃の伴で、切米取に召し出された。四月二十六日に源覺寺で切腹した。介錯は恵良半衛門がした。津崎の事は別に書く。小林は二人扶持十石の切米取である。切腹の時、高野勘右衛門が介錯した。林は南羽

下田村の百姓であつたのを、忠利が十人扶持十五石に召し出して、花畑の館の庭方にした。四月二十六日に佛蘭寺で切腹した。介錯は仲光半助がした。宮永は二人扶持十石の臺所役人で、先代に殉死を願つた最初の男であつた。四月二十六日に淨照寺で切腹した。介錯は吉村嘉右衛門がした。此人々の中にはそれぞれの家の菩提所に葬られたものもあるが、又高麗門外の山中にある靈屋の側に葬られたものもある。切米取の殉死者はわりに多人數であつたが、中にも津崎五助の事蹟は、際立つて面白から別に書くことにする。

「お前も男ぢや、お原々の衆に負けぬ様におしなされい」と云つた。津崎の家では往生院を菩提所にしてゐたが、往生院は上の御山緒のあるお寺だといふので憚つて、高琳寺を死所と極めたのである。五助が墓地には入つて見ると、兼て介錯を頼んで置いた松野總勘助が先に來て待つてゐた。五助は肩に掛け浅葱の裳を卸してその中から飯行本を出した。蓋を開けると握飯が二つ這入つてゐる。それを犬の前に置いた。犬はすぐに食はうともせず、尾を掉つて五助の顔を見てゐた。五助は人間に言ふやうに犬に言つた。

「おぬしは奇生ぢやから、知らずにをるかも知れぬが、お主の頭をさすつて下されたことのある體様は、もうお亡くなり遊ばされた。それで御恩になつてゐなされたお原々は掛け腹を切つてお供をなさる。己は下司ではあるが、御扶持を戴いて繁いだ命はお原々と變つたことはない。體様に可哀がつて戴いた有難さも同じ事ぢや。それで己は今腹を切つて死ぬるのぢや。己が死んでしまつたら、おぬしは今から野ら犬になるのぢや。己はそれが可哀さうでならん。體様のお供をした鷹は助雲院で井戸に飛び込んで死んだ。どうぢや。おぬしも己と一しよに死



ながら、忠利は「許す」と云つたのである。

殉死を許した家臣の数が十八人になつた時、五十餘年の久しい間治亂の中に身を處して人情に飽くまで通じてゐた忠利は病苦の中にも、つくづく自分の死と十八人の侍の死とに就いて考へた。生あるものは必ず滅する。老木の朽枯れる傍で、若木は茂り榮えて行く。嫡子光尙の周圍にゐる少壯者共から見れば、自分の任用してゐる老成人等は、もうゐなくて好いのである。邪魔にもなるのである。自分は彼等を生きたがらへさせて、自分にしたと同じ奉公を光尙にさせたいと思ふが、其奉公を光尙にするものは、もう幾人も出来てゐて、手ぐすね引いて待つてゐるかも知れない。自分の任用したものは、年來それぞれの職分を盡して來るうちに、人の怨をも買つてゐよう。少くも姻戚の的になつてゐるには違ひない。さうして見れば、強ひて彼等にながらへてゐると云ふのは、通達した考ではないかも知れない。殉死を許して遣つたのは慈悲であつたかも知れない。かう思つて忠利は多少の慰藉を得たやうな心持になつた。

殉死を願つて許された十八人は、寺本八左衛門直次、大塚喜兵衛種次、内藤長十郎元續、太田小十郎正信、原田十次郎之直、宗像加兵衛景

定、同吉太夫景好、橋谷市藏重次、井原十三郎吉正、田中意徳、本庄喜助重正、伊藤太左衛門方高、右田因幡統安、野田喜兵衛重綱、津崎五助長季、小林理右衛門行秀、林與左衛門正定、宮永勝左衛門宗祐の人々である。

寺本が先祖は尾張國寺本に住んでゐた寺本太郎と云ふものであつた。太郎の子内膳正は今川家に仕へた。内膳正の子が左兵衛、左兵衛の子が右衛門佐、右衛門佐の子が與左衛門で、與左衛門は朝鮮征伐の時、加藤嘉明に屬して功があつた。與左衛門の子が八左衛門で、大阪籠城の時、後藤基次の下で働いた事がある。細川家に召抱られてから、千石取つて、鐵砲五十挺の頭になつてゐた。四月二十九日に安養寺で切腹した。五十三歳である。藤本猪左衛門が介錯した。大塚は百五十石取の横目役である。四月二十六日に切腹した。介錯は池田八左衛門であつた。内藤が事は前に言つた。太田は祖父傳左衛門が加藤清正に仕へてゐた。忠廣が封を除かれた時、傳左衛門と其子の源左衛門とが流浪した。小十郎は源左衛門の二男で兒小姓に召し出された者である。百五十石取つてゐ

た。殉死の先登は此人で、三月十七日に春日寺で切腹した。十八歳である。介錯は門司源兵衛がした。原田は百五十石取で、お側に勤めてゐた。四月二十六日に切腹した。介錯は鎌田源太夫がした。宗像加兵衛同吉太夫の兄弟は、宗像中納言氏貞の後裔で、親源兵衛景延の代に召し出された。兄弟いづれも二百石取である。

五月二日に兄は流長院、弟は蓮政寺で切腹した。兄の介錯は高田十兵衛、弟のは村上市右衛門がした。橋谷は出雲國の人で、尾子の末流である。十四歳の時忠利に召し出されて、知行百石の側役を勤め、食事の海味をしてゐた。忠利は病が重くなつてから、橋谷の膝を枕にして寝たこともある。四月二十六日に西岸寺で切腹した。丁度腹を切らうとすると、城の太鼓が微かに聞えた。橋谷は附いて來てゐた家縁に、外へ出て何時か聞いて來いと云つた。家縁は歸つてしまひの四つ丈は聞きましたが、總體の秤数は分りませんと云つた。橋谷を始として、一座の者が微笑んだ。橋谷は「最期に好う笑はせてくれた」と云つて、家縁に羽織を取らせて切腹した。吉村甚太夫が介錯した。井原は切米三人扶持十石を取つてゐた。切腹した時河部彌一右衛門の家縁林左兵衛が介錯した。田中は阿

ながら、月が累り年が累るに従つて、それが次第に改めにくなつた。

人には誰が上にも好きな人、厭な人と云ふものがある。そしてなぜ好きだか、厭だかと穿鑿して見ると、どうかすると捕捉する程の據りどころが無い。忠利が彌一右衛門を好かぬのも、そんなわけである。併し彌一右衛門と云ふものはどこかに人と親み難い處を持つてゐるに違ひ無い。それは親しい友達との少いので分かる。誰でも立派な侍として尊敬はする。併し容易く近づかうと試みるものが無い。稀に物數奇に近づかうと試みるものがあつても、暫くするうちに根氣が續かなくなつて遠ざかつてしまふ。まだ猪之助と云つて、前髪のおつた時、度々話をし掛けたり、何かに手を借して遣つたりしてゐた年上の男が、「どうも阿部には附け入る隙が無い」と云つて我を折つた。そこを考へて見ると、忠利が自分の癖を改めたく思ひながら改めることの出来なかつたのも怪むに足りない。兎に角彌一右衛門は何度願つても殉死の計を得ないでゐるうちに、忠利は亡くなつた。亡くなる少し前に、「彌一右衛門奴はお願と申すことを申したことはござりません、これが生涯唯一のお願でござります」と云つて、ちつと忠利の顔を

見てゐたが、忠利もちつと顔を見返して、「いや、どうぞ光尚に奉公してくれい」と言ひ放つた。彌一右衛門はつくづく考へて決心した。自分の身分で、此場合に殉死せずに生き残つて、家中のものに顔を合せてゐると云ふことは、百人が百人所詮出来ぬ事と思ふだらう。大死と知つて切腹するか、浪人して熊本を去るかの外、爲方があるまい。だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い。かう思つて一日一日と例の如くに勤めてゐた。

そのうちに五月六日が来て、十八人のものが皆殉死した。熊本中只その噂ばかりである。誰はなんと云つて死んだ、誰の死様が誰よりも見事であつたと云ふ話の外には、なんの話しもない。彌一右衛門は以前から人に用事の外の話をし掛けられたことは少かつたが、五月七日からこつちは、御殿の詰所に出てゐて見ても、一層寂しい。それに相役が自分の顔を見ぬやうにして見るのが分かる。そつと横から見たり、背後から見たりするの分かる。不快で溜らない。それでも己は命が惜しくて生きてゐるのでは無い、己をどれ程悪く思ふ人でも、命を惜む男だとはまさかに云ふことが出来まい、たつた今で

も死んで好いのなら死んで見せると思ふので、昂然と項を反らして詰所へ出て、昂然と項を反らして詰所から引いてゐた。

二三日立つと、彌一右衛門が耳に怪しからん噂が聞え出して来た。誰が言ひ出した事か知らぬが「阿部はお許の無いを、幸に生きてゐると見える、お許は無うても追腹は切られぬ筈が無い、阿部の腹の皮は人とは違ふと見える、鷹簞に油でも塗つて切れば好い」と云ふのである。彌一右衛門は聞いて思ひの外に事思つた。悪口が言ひたくばなんとも云ふが好い。併し此彌一右衛門を堅から見ても横から見ても、命の惜しい男とは、どうして見えようぞ。げに言へば言はれたものかな、好いわ。そんなら此腹の皮を鷹簞に油を塗つて切つて見せう。彌一右衛門は其日詰所を引くと、急使を以て別家してゐる第二人を山崎の邸に呼び寄せた。居間と客間との間の建具を外させ、嫡子權兵衛と二男彌五右衛門次にまだ前髪のある五男七之丞の三人を傍にをらせて、主人は威儀を正して待ち受けてゐる。權兵衛は幼名權十郎と云つて、島原征伐に立派な働きをして、新知二百石を買つてゐる。父に劣らぬ若者である。此度の事に就いては、只一度父に、お許は出ま

なうとは思はんかい。若し野ら犬になつても、生きてゐたいと思つたら、此握飯を食つてくれい。死にたいと思ふなら、食ふなよ。」

かう云つて犬の顔を見てゐたが、犬は五助の顔ばかりを見てゐて、握飯を食はうとはしない。「それならおぬしも死ぬるか」と云つて、五助は犬をきつと見詰めた。

犬は一聲鳴いて尾を掉つた。

「好い。そんなら不便ぢやが死んでくれい。」かう云つて五助は犬を抱き寄せて、脇差を抜いて一刀に刺した。

五助は犬の死骸を傍へ置いた。そして懷中から一枚の書き物を出して、それを前にひろげて、小石を重りにして置いた。誰やらの邸で歌の會のあつた時見覺えた通りに半紙を横に二つに折つて「家老衆はとまれとまれと仰あれどとめてとまれぬ此五助哉」と、常の詠草のやうに書いてある。署名はして無い。歌の中に五助としてあるから、二重に名を書かなくても好いと、すなほに考へたのが、自然に故實に慨つてゐた。

もうこれで何も手落は無いと思つた五助は、「松野様 お頼申します」と云つて、安坐して肌をくつろげた。そして犬の血の附いた儘の脇差を逆手に持つて、「お鷹匠衆はどうなさりまし

たな、お犬衆は只今参りますぞ」と高聲に云つて、「鷹快よげに笑つて、腹を十文字に切つた。松野が背後から首を打つた。

五助は身分の軽いものではあるが、後に殉死者の遺族の受けた程の手當は、跡に残つた後家が受けた。男一人は小さい時出家してゐたからである。後家は五人扶持を貰ひ、新に家屋敷を貰つて、忠利の三十三回忌の時まで存命してゐた。五助の甥の子が二代の五助になつて、それから代々觸組で奉公してゐた。

忠利の許を得て殉死した十八人の外に、阿部彌一右衛門通信と云ふものがあつた。初は明石氏で、幼名を猪之助と云つた。夙から忠利の側近く仕へて、千百石餘の身分になつてゐる。島原征伐の時、子供五人の内三人まで軍功によつて新知二百石づつを貰つた。この彌一右衛門は家中でも殉死する筈のやうに思ひ、當人も亦忠利の夜御に出る。順番が来る度に、殉死したいと云つて願つた。併しどうしても忠利が許さない。

「そちが志は満足に思ふが、それよりは生きてゐて光尙に奉公してくれい」と、何度願つて

も、同じ事を繰り返して云ふのである。

一體忠利は彌一右衛門の言ふことを聴かぬ癖が附いてゐる。これは餘程古くからの事で、まだ猪之助と云つて小姓を勤めてゐた頃も、猪之助が「御膳を差し上げませうか」と伺ふと、「まだ空腹にはならぬ」と云ふ。外の小姓が申し上げると、「好い、出させい」と云ふ。忠利は此男の顔を見ると、反對したくなるのである。そんなら叱られるかと云ふと、さうでも無い。此男程精勤をするものは無く、萬事に氣が附いて、手ぬかりが無いから、叱らうと云つても叱りやうが無い。

彌一右衛門は外の人の言ひ附けられてする事を、言ひ附けられずにする。外の人の申し上げてする事を申し上げずにする。併しする事はいつも背筋に中つてゐて、間然すべき所が無い。

彌一右衛門は意地ばかりで奉公して行くやうになつてゐる。忠利は初なんとも思はずに、只此男の顔を見ると、反對したくなつたのだが、後には此男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた。憎いと思ひながら、聰明な忠利はなぜ彌一右衛門がさうなつたかと回想して見て、それは自分が爲向けたのだと云ふことに氣が附いた。そして自分の反對する癖を改めようと思つてゐ



「どりや、おつ母さんに言うて、女子達に暇をさせうか。」かう云つて權兵衛が席を起つた。

從四位下侍從兼肥後守光尚の家督相續が済んだ。家臣にはそれぞれ新知、加増、役替などがあつた。中にも殉死の侍十八人の家々は、嫡子にその儘父の跡を繼がせられた。嫡子のある限りは、いかに幼少でもその數には漏れない。未亡人、老父母には扶持が與へられる。家屋敷を拜領して、作事までも上から爲向けられる。先代が格別入懇にせられた家柄で、死生の旅の御供にさへ立つたのだから、家中のものが羨みはしても妬みはしない。

然るに一種變つた跡目の處分を受けたのは、阿部彌一右衛門の遺族である。嫡子權兵衛は父の跡をその儘繼ぐことが出来ずに、彌一右衛門が千五百石の知行は細かに割いて弟達へも配分せられた。一族の知行を合せて見れば、前に變つたことは無いが、本家を繼いだ權兵衛は、小身ものになつたのである。權兵衛の肩幅の狭くなつたことは言ふまでも無い。弟共も一人一人の知行は殖えながら、これまで千石以上の本家によつて、大木の蔭に立つてゐるやうに思

つてゐたのが、今は權家の春競になつて、有難

いやうで迷惑な思をした。

政道は地道である限は、各の歸する所を問ふ

ものは無い。一旦常に變つた處置があると、誰の

捌きかと云ふ詮議が起る。當主の御覺めでたく、

御側去らずに勤めて居る大目附役に、林外記と

云ふものがある。小才覺があるので、若殿様時

代のお側には相應してゐたが、物の大體を見る

事に於ては及ばぬ所があつて、兎角苛察に傾き

たがる男であつた。阿部彌一右衛門は故殿様のお許を得ずに死んだのだから、眞の殉死者と彌

一右衛門との間には境界を附けなくてはならぬ

と考へた。そこで阿部家の俸祿分割の策を獻じ

た。光尚も思慮ある大名ではあつたが、まだ物馴れぬ時の事で、彌一右衛門や嫡子權兵衛と懇意でないために、思造が無く、自分の手元に使つて馴染のある市太夫がために加増になると云ふ處に目を附けて、外記の言を用ゐたのである。十八人の侍が殉死した時には、彌一右衛門は御側に奉公してゐたのに殉死しないと云つて、家中のものが卑んだ。さて位かに二三日を隔てて彌一右衛門は立派に切腹したが、事の當否は拵いて、一旦受けた侮辱は容易に消え難く、誰

も彌一右衛門を褒めるものが無い。上では彌一

右衛門の遺骸を靈屋の側に葬ることを許した

のであるから、跡目相續の上にも強ひて境界を

立てずに置いて、殉死者一同と同じ扱をして

好かつたのである。さうしたなら阿部一族は面

目を施して、舉つて忠勤を酬んだのであらう。

然るに上で一段下つた扱をしたので、家中の

ものの阿部家侮蔑の念が公に認められた形に

なつた。權兵衛兄弟は次第に傍輩に疎んぜられ

て、怏々として日を送つた。

寛永十九年三月七日になつた。先代の殿様

の一週忌である。靈屋の傍にはまだ妙解寺は出

來てゐぬが、向陽院と云ふ堂宇が立つて、そこに妙解院殿の位牌が安置せられ、鏡首座と云ふ僧が住持してゐる。忌日に先だつて、紫野大徳寺の天祐和尚が京都から下向する。年忌の營みは晴々しいものになるらしく、一箇月ばかり前から熊本の城下は準備に忙しかつた。

せなんだか」と問うた。父は「うん、出んぞ」と云つた。その外二人の間にはなんの詞も交されなかつた。親子は心の底まで知り抜いてゐるので、何も言ふには及ばぬのであつた。

間もなく二張の提燈が門の内に這入つた。三男市太夫、四男五太夫の二人が殆ど同時に支那に來て、雨具を脱いで座敷に通つた。中陰の翌日からじめじめとした雨になつて、五月闇の空が晴れずにゐるのである。

障子は開け放してあつても、蒸し暑くて風がない。その轆轤臺の火はゆらめいてゐる。螢が一匹庭の木立を縫つて通り過ぎた。

一座を見渡した主人が口を開いた。「夜陰に呼び遣つたのに、皆好う來て呉れた。家中一般の噂ぢやと云ふから、おぬし達も聞いたに違ひない。此彌一右衛門が腹は瓢箪に油を塗つて切る腹ぢやさうな。それぢやによつて、己は今瓢箪に油を塗つて切らうと思ふ。どうぞ皆で見届けてくれい。」

市太夫も五太夫も鳥原の軍功で新知の百石を貰つて別家してゐるが、中にも市太夫は早くから若殿附になつてゐたので、御代替りになつて人に羨まれる一人である。市太夫が膝を進めた。「なる程、好う分かりました。實は傍輩が言

ふには、彌一右衛門殿は御先代の御遺言で續いて御來公なさるさうな。親子兄弟相變らず揃うてお勤めなさる、めでたい事ぢやと云ふのでござります。其詞が何か意味ありげで尚弄うござりました。」

父彌一右衛門は笑つた。「さうであらう。目の先ばかり見える近眼其を相手にするな。そこでその死なぬ筈の己が死んだら、お許しの無かつた己の子ぢやと云うて、おぬし達を侮るものもあらう。己の子に生れたのは運ぢや。せう事が無い。恥を受ける時は一しよに受けい。兄弟喧嘩をするなよ。さあ、瓢箪で腹を切るのを好う見て置け。」

かう言つて置いて、彌一右衛門は子供等の面前で切腹して自分で首筋を左から右へ刺し貫いて死んだ。父の心を測り兼ねてゐた五人の子供等は、此時悲しくはあつたが、それと同時にこれまでの不安心の境界を一步離れて、重荷の一つを卸したやうに感じた。

一兄きと二男彌五兵衛が嫡子に言つた。一兄弟喧嘩をするなと、お父さんは言ひ置いた。それに誰も異存はあるまい。己は鳥原で持場が悪うて、知行も貰はずにゐるから、これからはおぬしが厄介になるぢやらう。ぢやが何事が

あつても、おぬしが手に握かな權一本はあると云ふものぢや。さう思うてゐてくれい。」

「知れた事ぢや。どうなる事か知れぬが、己が貰ふ知行はおぬしが貰ふも同じぢや。」かう云つた切り權兵衛は腕組をして顔を曇めた。

「さうぢや。どうなる事か知れぬ。追腹はお許しの出た殉死とは違ふなぞと云ふ奴かあらうて。」かう云つたのは四男の五太夫である。

「それは目に見えてを。どう云ふ日に逢うても。」かう言ひさして三男市太夫は權兵衛の顔を見た。一どう云ふ日に逢うても、兄弟離れ離れに相手にならずに、固まつて行かうぞ。」

「うん」と權兵衛は云つたが、打ち解けた様子も無い。權兵衛は弟共の心にいたはつてはゐるが、やさしく物を言はれぬ男である。それに何事も一人で考へて、一人でしたがる。相談と云ふものをめつたにしない。それで彌五右衛門も市太夫も念を押したのである。

一兄い様方が揃うてお出なさるから、お父さんの惡口は、うかと言はれますまい。」これは前髪の七之丞が口から出た。女のやうな聲ではあつたが、それに強い信念が籠つてゐたので、一座のものの胸を、暗黒な前途を照らす光明のやうに照らした。

した。權兵衛の所行は不埒には違ひ無い。併し亡父彌一右衛門は冤に角殉死者の中に數へられてゐる。その相續たる權兵衛で見れば、死を賜ふことは是非が無い。武士らしく切腹仰せ付けられれば異存はない。それに何事ぞ、奸盗かなんどのやうに、白晝に縛首にせられた。此の様子で推すれば、一族のものも安穩には差し置かれまい。縦ひ別に御沙汰が無いにしても、縛首にせられたものの一族が、何の面目あつて、傍軍に立ち交つて御奉公をしよう。此上は是非に及ばない。何事があらうとも、兄弟分かれ分かれになるなど、彌一右衛門殿の言ひ置かれたのは此時の事である。一族計手を引き受けて、共に死ぬる外は無いと、一人の異議を稱へるものも無く決した。

阿部一族は妻子を引き纏めて、權兵衛が山崎の屋敷に立て籠つた。

穩ならぬ一族の様子が上に聞えた。横目が偵察に出て來た。山崎の屋敷では門を嚴重に鎖して靜まり返つてゐた。市太夫や五太夫の宇は空屋になつてゐた。

計手の手配が定められた。表門は側者頭竹内數馬長政が指揮役をして、それに小頭添島九兵衛、同野村庄兵衛が随つてゐる。數

馬は千百五十石で鐵砲組三十挺の頭である。譜第の乙名島德右衛門が供をする。添島、野村は當時百石のものである。裏門の指揮役は知行五百石の側者頭高見權右衛門重政で、これも鐵砲組三十挺の頭である。それに目附畑十太夫と竹内數馬の小頭で當時百石の千場作兵衛とが随つてゐる。

計手は四月二十一日に差し向けられることになつた。前晩に山崎の屋敷の周圍には夜廻が附けられた。夜が更けてから侍分のもが一人覆面して、堀を内から乗り越えて出たが、廻役の佐分利嘉左衛門が組の足輕丸山三之丞が討ち取つた。その後夜明まで何事もなかつた。

兼ねて近隣のものは沙汰があつた。縦ひ當番たりとも在宿して火の用心を怠らぬやうにいたせといふのが一つ。計手でないのに、阿部が屋敷に入り込んで手出しをすることは嚴禁であるが、落人は勝手に討ち取れと云ふのが二つであつた。

阿部一族は計手の向ふ日を其前日に聞き知つて、先づ邸内を隈なく掃除し、見苦しい物は悉く焼き棄てた。それから老若打寄つて酒宴をした。それから老人や女は自殺し、幼いものは手手に刺し殺した。それから庭に大きい穴を

掘つて死骸を埋めた。跡に残つたのは究竟の若者ばかりである。彌五兵衛、市太夫、五太夫、七之丞の四人が指圖して、障子襖を取り拂つた廣間に家業を集めて、鉦太鼓を鳴らさせ、高聲に念佛をさせて夜の明けるのを待つた。これは老人や妻子を弔ふためだとは云つたが、實は下人共に臆病の念を起させぬ用心であつた。

阿部一族の立て籠つた山崎の屋敷は、後に齋藤勘助の住んだ所で、向ひは山中又左衛門、左右兩隣は柄本又七郎、平山三郎の住ひであつた。此中で柄本が家はもと天草郡を三分して領してゐた柄本、天草、志岐の三家の一つである。小西行長が肥後半國を治めてゐた時、天草、志岐は罪を犯して誅せられ、柄本だけが残つてゐて、細川家に仕へた。

又七郎は平生阿部彌一右衛門が一家と心安くして、主人同志は固より、妻妾までも互に往來してゐた。中に彌一右衛門の二男彌五兵衛は槍が得意で、又七郎も同じ技を嗜む所から、親しい中で廣言をし合つて、「お手前が上手でも某には慊ふまい」「いや、某がなんでお手前に負けよう」などと云つてゐた。



上下である。下々の者は御香篋を拜領する。

儀式は滞なく済んだが、その間に只一つの珍事が出来た。それは阿部權兵衛が殉死者遺族の一人として、席順によつて妙解院殿の位牌の前に進んだ時、焼香をして退きしに、脇差の小柄を抜き取つて、警を押し切つて、位牌の前に供へたことである。この場に詰めてゐた侍共も、不意の出来事に驚き呆れて、茫然として見てゐたが、權兵衛が何事も無いやうに、自若として五六歩退いた時、一人の侍がやうやう我に返つて、「阿部殿、お待ちなさい」と呼び掛けながら、追ひ絶つて押し止めた。續いて二三人立ち掛つて、權兵衛を別間に連れて這入つた。

權兵衛が諸衆に尋ねられて答へた所はかうである。貴殿等は、某を亂心者のやうに思はれるであらうが、全く左様なわけでは無い。父彌一右衛門は一生瑕瑾の無い御奉公をいたしたればこそ、故殿様のお許を得ずに切腹しても、殉死者の列に加へられ、遺族たる某さへ他人に先だつて御位牌に御焼香いたすことが出来たのである。併し、某は不肯にして父同様の御奉公が成り難いのを、上にも御承知と見えて、知行を割いて弟共、に御遺なされた。某は故殿様にも御當主にも亡き父にも一族の者共にも傍輩にも面

目が無い。かやうに存じてゐるうち、今日御位牌に御焼香いたす場合になり、唯、唯の間に感懐胸に迫り、いつその事武士を棄てようと思つた。お場所柄を顧みざるお咎は甘んじて受ける。亂心などはいたさねと云ふのである。

權兵衛の答を光尚は聞いて、不快に思つた。第一に權兵衛が自分に面當がましい所行をしたのが不快である。次に自分が外記の策を納れて、しなくても好い事をしたのが不快である。まだ二十四歳の血氣の盛れで、情を抑へ欲を制することが足りない。恩を以て怨に報いる寛大の心持に乏しい。即座に權兵衛をおし籠めさせた。それを聞いた彌五兵衛以下一族のものは門を閉ぢて上の御沙汰を待つことにして、夜陰に一同寄り合つては、皆に一族の前途のために評議を凝らした。

阿部一族は評議の末、此度先代一週忌の法會のために下向して、まだ逗留してゐる天祐和尚に絶がることにした。市太夫は和尚の旅館に往つて一部始終を話して、權兵衛に對する上の處置を軽減して貰ふやうに頼んだ。和尚はつくづく聞いて云つた。承れば御一家のお成行氣の毒千萬である。併し上の御政道に對して彼此云ふことは出来ない。只權兵衛殿に死を賜はると

なつたら、きつと御助命を願つて進ぜよう。殊に權兵衛殿は既に墓を掘はれて見れば、桑門同様の身の上である。御助命文はいかやうにも申して見ようと思つた。市太夫は頼もしく思つて歸つた。一族のものは市太夫の復命を聞いて、一條の活路を得たやうな氣がした。そのうち日が立つて、天祐和尚は歸京の時が次第に近づいて來た。和尚は殿様に逢つて話をする度に、阿部權兵衛が助命の事を折があつたら言上しようと思つたが、どうしても折が無い。それは其咎である。光尚はかう思つたのである。天祐和尚の逗留中に權兵衛の事を沙汰したらきつと助命を請はれるに違ひ無い。大寺の和尚の詞で見れば、等閑に聞き棄てることはなるまい。和尚の立つのを待つて處置しようと思つたのである。とうとう和尚は空しく熊本を立つてしまつた。

天祐和尚が熊本を立つや否や、光尚はすぐに阿部權兵衛を井手の口に引き出して、縛首にさせた。先代の御位牌に對して不敬な事を敢てした、上を恐れぬ所行として處置せられたのである。彌五兵衛以下一同のものは寄り集つて評議

兵衛、五男が即ち數馬である。

數馬は忠利の兄小姓を勤めて、島原征伐の時殿様の側にゐた。寛永十五年二月二十五日細川の手のものが城を乗り取らうとした時、數馬が「どうぞお先手へお遣し下されい」と忠利に願つた。忠利は聽かなかつた。押し返してねだるやうに願ふと、忠利が立腹して、「小伴、勝手にうせをれ」と叫んだ。數馬は其時十六歳である。「あつ」と云ひさま駈け出すのを見送つて、忠利が「怪我をするなよ」と聲を掛けた。乙名島徳右衛門、草履取一人、槍持一人が跡から續いた。主従四人である。城から打ち出す鐵砲が烈しいので、島が數馬の着てゐた猩々緋の陣羽織の裾を掴んで跡へ引いた。數馬は振り切つて城の石垣に攀ち登る。島も是非なく附いて登る。とうとう城内に這入つて働いて、數馬は手を負つた。同じ場所から攻め入つた柳川の立花飛彈守宗茂は七十二歳の古武者で、此時の働振を見てゐたが、渡邊新彌、仲光内膳と數馬との三人が天晴であつたと云つて、三人へ連名の感狀を遣つた。落城の後、忠利は數馬に關兼光の脇差を遣つて、祿を千百五十石に加増した。脇差は一尺八寸、直焔無銘、横鏢、銀の九曜の三竝の日貫、赤銅絛金拵である。日貫の穴は二つ

あつて、一つは鉛で填めてあつた。忠利は此脇差を秘藏してゐたので、數馬に遣つてからも、登城の時などには「數馬の脇差を貸せ」と云つて、借りて差したことも度々ある。

光尚に阿部の計手を言ひ附けられて、數馬が喜んで詰所へ下がると、傍輩の一人が睨いた。「好物にも取柄はある。おぬしに表門の采配を振らせるとは、林殿にしては好く出来た。」數馬は耳を赤てた。「なに此度のお役目は外記が申し上げて仰せ附けられたのか。」

「さうぢや、外記殿が殿様に言はれた。數馬は御先代が出格のお取立をなされたものぢや。御恩報じにあれをお遣りなされい」と云はれた。物怪の幸ではないや。」

「ふん」と云つた數馬の眉間には、深い皺が刻まれた。好いわ、討死するまでの事ぢや。」かう言ひ放つて數馬はついで起つて館を下がつた。

此時の數馬の様子を忠利が聞いて、竹内の屋敷へ使を遣つて、「怪我をせぬやうに、首尾好くいたして參れ」と云はせた。數馬は難有いお詞を慥かに承つたと申し上げて下されい」と云つた。

數馬は傍輩の口から、外記が自分を推して此度の役に當らせたと聞くや否や、即時に討

死をしようと思ひ決した。それがどうしても動かすことの出来ぬ程堅固な決心であつた。外記は御恩報じをさせると云つたと云ふことである。此詞は圓らず聞いたのであるが、實は聞くまでも無い、外記が薦めるには、さう云つて薦めるに極まつてゐる。かう思ふと、數馬は立つても据

わつてもゐられぬやうな氣がする。自分は御先代の引立を蒙つたには違ひない。併し元服してから後の自分は、謂はば大勢の近習の中の一で、別に出色のお扱を受けてはゐない。御恩には誰しも浴してゐる。御恩報じを自分に限つてしなくてはならぬと言ふのは、どう云ふ意味か。言ふまでも無い、自分は殉死する筈であつたのに、殉死しなかつたから、命掛の場所に遣ると云ふのである。命は何時でも喜んで棄てるが、前にしおくれた殉死の代りに死なうとは思はない。今命を惜まぬ自分が、なんで御先代の中陰の果の日に命を惜んだであらう。謂はれの無い事である。畢竟どれ丈の御入懇になつた人が殉死すると云ふ、はつきりした境は無い。同じやうに勤めてゐた御近習の若侍の中に殉死の沙汰が無いので、自分もながらへてゐた。殉死して好い事なら、自分は誰よりも先にする。それ程の事は誰の目にも見えてゐるやうに思つ

き鳥歌とりうたふ春はるであるのに、不幸ふかうにして神佛しんぶつにも人にん

して、長押ながしに懸かけた手槍てやりを卸おろし、鷹たかの羽はの紋もんの附つ

二男は七郎右衛門、三男は次郎太夫、四男は八



小姓は静かに相役の胸の上に跨がつて止めを刺して、乙名の小屋へ往つて仔細を話した。「即座に死ぬる筈でござりましたが、御不審もあらうかと存じまして」と、肌を脱いで切腹しようとした。乙名が「先づ待て」と云つて權右衛門に告げた。權右衛門はまだ役所から下がつて、衣服も改めずにゐたので、其儘館へ出て忠利に申し上げた。忠利は「最の事ぢや、切腹には及ばぬ」と云つた。此時から小姓は權右衛門に命を捧げて奉公してゐるのである。

小姓は筋を負ひ半弓を取つて、主の傍に引き添つた。

寛文十九年四月二十一日は麥秋に好くある薄曇の日であつた。

阿部一族の立て籠つてゐる山崎の屋敷に討ち入らうとして、竹内數馬の手ものは拂曉に表門の前に來た。夜通し鉦太鼓を鳴らしてゐた屋敷の内が、今はひとつそりとして空屋かと思はれる程である。門の扉は鎖してある。板塀の上に二三尺伸びてゐる夾竹桃の木末には、蜘蛛のいが掛かつてゐて、それに夜露が眞珠のやうに光つてゐる。燕が一羽どこからか飛んで來て、つと

塀の内に入つた。

數馬は馬を乗り放つて降り立つて、暫く様子を見てゐたが、「門を開けい」と云つた。足輕が二人塀を乗り越して内に這入つた。門の廻りには敵は一人もゐないので、鉦前を打ちこはして貫の木を抜いた。

隣家の柄本又七郎は數馬の手ものが門を開ける物音を聞いて、前夜結細を切つて置いた竹垣を踏み破つて、駆け込んだ。毎日のやうに往來して、隅々まで案内を知つてゐる家である。手槍を構へて臺所の口から、つと這入つた。

座敷の戸を締め切つて、籠み入る討手のものを一人一人討ち取らうとして控へてゐた一族の中で、裏口に人のけはひのするのに、先づ氣の附いたのは彌五兵衛である。これも手槍を提げて臺所へ見に出た。

二人は槍の穂先と穂先とが觸れ合ふ程に相對した。や、又七郎か」と、彌五兵衛が聲を掛けた。

「おう。衆ての廣言がある。おぬしが槍の手並を見に來た。」

「好うわせた。さあ。」

二人は一歩しづつて槍を交へた。暫く戦つたが、槍術は又七郎の方が優れてゐたので、彌五兵衛の胸板をしたたかに衝き抜いた。彌五兵

衛は槍をからりと棄てて、座敷の方へ引かうとした。

「卑怯ぢや。引くな。」又七郎が叫んだ。

「いや逃げはせぬ。腹を切るのぢや。」言ひ棄てて座敷に這入つた。

その刹那に「をち様、お相手」と叫んで、前髪の七之丞が電光の如くに飛んで出て、又七郎の太股を衝いた。入懇の彌五兵衛に深手を負はせて、覺えず氣が弛んでゐたので、手練の又七郎も少年の手に掛かつたのである。又七郎は槍を棄てて其場に倒れた。

數馬は門内に入つて人数を屋敷の隅々に配つた。さて眞つ先に玄關に進んで見ると、正面の板戸が細目に開けてある。數馬が其戸に手を掛けようとする、島徳右衛門が押し開けて、詞せはしく囁いた。

「お待ちなさいませ。殿は今日の總大將ぢや。某がお先をいたします。」

徳右衛門は戸をがらりと開けて飛び込んだ。待ち構へてゐた市太夫の槍に、徳右衛門は右のめを衝かれてよろよろと數馬に倒れ掛かつた。日を衝かれてよろよろと數馬に倒れ掛かつた。「邪魔ぢや。」數馬は徳右衛門を押し退けて進んだ。市太夫、五大夫の槍が左右のひはらを衝き抜いた。

てゐた。それに疾うにする筈の殉死をせずにゐた人間として極印を打たれたのは、かへすがへすも口惜しい。自分は雪ぐことの出来ぬ汚れを身に受けた。それ程の辱を人に加へる事は、あの外記でなくては出来まい。外記としてはさもあるべき事である。併し殿様がなぜそれをお聴納になつたか。外記に傷けられたのは忍ぶことも出来よう。殿様に棄てられたのは忍ぶことが出来ない。島原で城に乗り入らうとした時、御先代がお呼止なされた。それはお馬廻りのものがわざと先手に加はるのをお止めなされたのである。此度御當主の怪我をするなど仰やるのは、それとは違ふ。惜しい命をいたはれと仰やるのである。それがなんの難有からう。古い創の上を新に鞭うたれるやうなものである。只一刻も早く死にたい。死んで雪がれる汚れではないが、死にたい。犬死でも好いから、死にたい。數馬はかう思ふと、矢も楯も溜まらな。そこで妻子には阿部の討手を仰せ附けられたと丈、手短かに言ひ聞せて、一人ひたすら支度を急いだ。殉死した人達は皆安堵して死に就くと云ふ心持でゐたのに、數馬が心持は苦痛を逃れるために死を急ぐのである。乙名島徳右衛門が事情を察して、主人と同じ決心をした外には、

一家のうちに數馬の心底を汲み知つたものが無い。今年二十一歳になる數馬の所へ、去年來たばかりのまだ娘らしい女房は、當歳の女の子を抱いてうるうるしてゐるばかりである。

あすは討入と云ふ四月二十日の夜、數馬は行水を使つて、月題を削つて、髪には忠利に拜領した名香初音を焚き込めた。白無垢に白礪、白鉢巻をして、肩に合印の角取紙を附けた。腰に帶びた刀は二尺四寸五分の正盛で、先祖島村彈正が尼崎で討死した時、故郷に送つた記念である。それに初陣の時拜領した兼光を差し添へた。門口には馬が嘶いてゐる。

手槍を取つて庭に降り立つ時、數馬は草鞋の緒を男袴にして、餘つた緒を小刀で切つて捨てた。

阿部の屋敷の裏門に向ふことになつた高見權右衛門は本と和田氏で、近江國和田に住んだ和田但馬守の裔である。初蒲生賢秀に随つてゐたが、和田庄五郎の代に細川家に仕へた。庄五郎は岐阜、關原の戦に功あつたものである。忠利の兄與一郎忠隆の下に附いてゐたので、忠隆が慶長五年大阪で妻前田氏の早く落ち延びた

ために父の勲氣を受け、入道体無となつて流浪した時、高野山や京都まで供をした。それを齋が小倉へ呼び寄せて、高見氏を名告らせ、番頭にした。知行五百石であつた。庄五郎の子が權右衛門である。島原の戦に功があつたが、軍令に背いた罪で、一日役を召し上げられた。それが暫くしてから歸參して側者頭になつてゐたのである。權右衛門は討入の支度の時黒羽二重の紋附を着て、兼て祕藏してゐた備前長船の刀を取り出して帶びた。そして十文字の槍を持つて出た。

竹内、數馬の手に島徳右衛門があるやうに、高見權右衛門は一人の小姓を連れてゐる。阿部一族の事のあつた二三年前の夏の日に、此小姓は非番で部屋に晝寝をしてゐた。そこへ相役の一人が供先から歸つて眞裸になつて、手桶を提げて井戸へ水を汲みに行き掛けたが、ふと此小姓の寝てゐるのを見て、「己がお供から歸つたに、水も汲んでくれずに寝てをるか」と云ひざまに枕を蹴つた。小姓は跳ね起きた。

「なる程。目が醒めてをつたら、水も汲んで遣らう。ぢやが枕を足蹴にするなど云ふことがあるか。此儘には濟まんぞ。」かう云つて拔打に相役を大袈裟に切つた。

黒羽二重の衣服が血みどれになつて、それに引上ひきあの時小屋の火を踏み消した時飛び散つた炭や灰がまだらに附いてゐたのである。

「いえ。かすり創すりでござりまする。」權右衛門は何者かに水落をしたたかに衝かれたが懷中してゐた鏡に中つて穂先がそれた。創は僅かに血を鼻紙ににじませた穴である。

權右衛門は討入の時の銘々の働きを精しく言上して、第一の功を單身で彌五兵衛に深手を負はせた隣家の柄本又七郎に譲つた。

「數馬はどうぢやつた。」

「表門から一足先に駆け込みましたので見届けません。」

「さやうか。皆のものに處へ這入れと云へ。」

權右衛門が一同を呼び入れた。重手で自宅へ昇あいて行かれた人達の外は、皆芝生に平伏した。働いたものは血によれてゐる。小屋を焼く手傳ばかりしたのは、灰ばかりあびてゐる。その灰ばかりあびた中に、畑十太夫がゐた。光尙が聲を掛けた。

「十太夫。そちの働きはどうかぢやつた。」

「はつ」と云つた切り駄つて伏してゐた。十太夫は大兵の臆病者で、阿部が屋敷の外をうろついてゐて、引上ひきあの前に小屋に火を掛けた時、

やつとおづおづ這入つたのである。最初討手を仰せ附けられた時に、お次へ出る所を劍術者新免武藏が見て、「冥加至極の事ぢや、随分お手柄をなささい」と云つて背中をぽんと打つた。十太夫は色を失つて、弛んでゐた袴の紐を締め直さうとしたが、手が震へて締まらなかつたさうである。

光尙は座を起つ時云つた。「皆出精であつたぞ。歸つて休息いたせ。」

竹内數馬の幼い娘には養子をさせて家督相續を許されたが、此家は後に絶えた。高見權右衛門は三百石、千場作兵衛、野村庄兵衛は各五十石の加増を受けた。柄本又七郎へは米田鹽物が承つて組頭谷内藏之允を使者に遣つて、賞詞があつた。廻廊朋友がよろこびを言ひに来ると、又七郎は笑つて、「元龜天正の頃は、城攻野合せが朝夕の飯同様であつた、阿部一族討取りなどは茶の子の茶の子の朝菜の子ぢや」と云つた。二年立つて、正保元年の夏、又七郎は創が癒えて光尙に拜謁した。光尙は鐵砲十挺を預けて、「創が根治するやうに湯治がしたくばいたせ、又府外に別莊地を遣すから場所を望め」

と云つた。又七郎は益城小池村に屋敷地を買つた。その背後が數山である。「數山も遣さうか」と、光尙が云はせた。又七郎はそれを辭退した。竹は平日も御用に立つ。戦争でもあると、竹東が澤山いる。それを私に拜謁しては、氣が済まぬと云ふのである。そこで數山は、三代御預けと云ふことになつた。

畑十太夫は追放せられた。竹内數馬の兄八兵衛は私に討手に加はりながら、弟の討死の場所に居合せなかつたので、閉門を仰せ附けられた。又馬廻の子で近習を勤めて居たまは、阿部の屋敷に近く住まつてゐたので、「火の用心をいませ」と云つて當番を免され、父と一しよに屋根に上つて火の子を消してゐた。後に切角當番を免された思召に背いたと心附いてお暇を願つたが、光尙は「そりや臆病では無い、以後はもう少し氣を附けるが好いぞ」と云つて、其儘勤めさせた。此近習は光尙の亡くなつた時殉死した。阿部一族の死骸は井出の口に引き出して、吟味せられた。白川で一人一人の創を洗つて見た時、柄本又七郎の槍に胸板を衝き抜かれた彌五兵衛の創は、誰の受けた創よりも立派であつたので、又七郎はいよいよ面目を施した。



添島九兵衛、野村庄兵衛が続いて駆け込んだ。徳右衛門も猪手に屈せず取つて退した。

此時、裏門を押し破つて滑入つた高見権右衛門は十文字槍を揮つて、阿部の家隼共を衝きまくつて座敷に來た。千場作兵衛も續いて籠み入つた。

裏表、二手のものが入り違へて、をめき叫んで衝いて來る。障子襖は取り拂つてあつても、三十疊に足らぬ座敷である。市街戦の惨状が野戦より甚だしいと同じ道理で、血に盛られた百蟲の相咬ふにも譬へつべく、目も當てられぬ有様である。

市太夫、五太夫は相手嫌はず槍を交へてゐるうち、全身に數へられぬ程の創を受けた。それでも屈せずに、槍を棄てて刀を抜いて切り廻つてゐる。七之丞はいつの間にか倒れてゐる。

太股を衝かれた柄本又七郎が裏所に伏してゐると、高見の手のもが見て、「手をお負なされたな、お見事ぢや、早うお引きなされい」と云つて、奥へ通り抜けた。

「引く足があれば、わしも奥へ這入るが」と、又七郎は苦々しげに云つて齒咬をした。そこへ主の跡を慕つて入り込んだ家隼の一人が駈け附けて、肩に掛けて退いた。

今一人の柄本家の被官天草平九郎と云ふものは、主の退口を守つて、半弓を以て日に掛かる敵を射てゐたが、其場で討死した。

竹内數馬の手では島徳右衛門が先づ死んで、次いで小頭添島九兵衛が死んだ。

高見権右衛門が十文字槍を揮つて働く間、半弓を持つた小姓はいつも槍脇を詰めて敵を射てゐたが、後には刀を抜いて切つて廻つた。ふと見れば鐵砲で権右衛門をねらつてゐるものがある。

「あの丸はわたくしが受け止めます」と云つて、小姓が権右衛門の前に立つと、丸が來て中つた。小姓は即死した。竹内の紐から抜いて高見に附けられた小頭千場作兵衛は重手を負つて裏所に出て、水瓶の水を呑んだが、其儘そこにへたばつてゐた。

阿部一族は最初に彌五兵衛が切腹して、市太夫、五太夫、七之丞はとうとう皆深手に息が切れた。家隼も多くは討死した。

高見権右衛門は裏表の人数を集めて、阿部が屋敷の裏手にあつた物置小屋を崩させて、それに火を掛けた。風のない日の薄曇の空に、煙が眞つ直に升つて、遠方から見えた。それから火を踏み消して、跡を水でしめして引き上げた。

臺所にゐた千場作兵衛、其外重手を負つたものは家隼や傍輩が肩に掛けて續いた。時刻は丁度未の刻であつた。

光尙は度々家中の立立つたものの家へ遊びに行くことがあつたが、阿部一族を計りに遣つた二十一日の日には、松野左京の屋敷へ押曉から出掛けた。

館のあるお花品からは、山崎はすぐ向うになつてゐるので、光尙が館を出る時、阿部の屋敷の方角に人聲物音がするのが聞えた。

「今討入つたな」と云つて、光尙は駕籠に乗つた。

駕籠がやうやう一町ばかり行つた時、注進があつた。竹内數馬が討死をしたことは、此時分かつた。

高見権右衛門は討手の總勢を率ゐて、光尙のゐる松野の屋敷の前まで引き上げて、阿部の一族を残らず討ち取つたことを執奏して貰つた。光尙はちきに逢はうと云つて、権右衛門を書院の庭に廻らせた。

丁度卯の花の眞つ白に咲いてゐる垣の間に、小さい枝折戸のあるのを開けて這入つて、権右衛門は芝生の上に突居た。光尙が見て「手を負つたな、一段骨折であつた」と聲を掛けた。

もうさう遠くまでは行かれせん。どうか爲様はありますまいか。」

「さうですね。わたしの通ふ鹽濱のあるあたりまで、あなた方がお出なさると、夜になつてしまひませう。どうもそこで好い所を見附けて、野宿をなさるより外、爲方がありますまい。わたしの思案では、あそここの橋の下にお休なさるが好いでせう。岸の石垣にびつたり寄せて、河原に大きい材木が澤山立ててあります。荒川の上から流して來た材木です。晝間は其下で子供が遊んでゐますが、奥の方には日も差さず、暗くなつてゐる所があります。そこなら風も通しますまい。わたしはかうして毎日通ふ鹽濱の持主の所にゐます。ついそこの梓の森の中です。夜になつたら、藁や薦を持つて往つてあげませう。」

子供等の母は一人離れて立つて、此話を聞いてゐたが、此時潮波女の傍に進み寄つて云つた。「好い方に出逢ひましたのは、わたし共の爲合せでございます。そこへ此つて休みませう。どうぞ藁や薦をお借申したうございます。せめて子供達にでも敷かせたり被せたりいたしたうございます。」

潮波女は受け合つて、梓の林の方へ歸つて

行く。主従四人は橋のある方へ急いだ。

荒川に掛け渡した應化橋の袂に一群は來た。潮波女の云つた通りに、新しい高札が立つてゐる。書いてある國守の掟も、女の詞に違はない。

人買が立ち廻るなら、其人買の詮議をしたら好ささうなものである。旅人に足を留めさせまいとして、行き暮れたものを路頭に迷はせるやうな掟を、國守はなせ定めたものか。不束な世話の焼きやうである。併し昔の人の目には掟である。子供等の母は只さう云ふ掟のある土地に來合せた運命を歎くだけで、掟の善悪は思はない。

橋の袂に、河原へ洗濯に降りるものの通ふ道がある。そこから一群は河原に降りた。なる程大層な材木が石垣に立て掛けてある。一群は石垣に沿つて材木の下へ潜つて入つた。男の子は面白がつて、先に立つて勇んで這入つた。

奥深く潜つて入ると、洞穴のやうになつた所がある。下には大きい材木が横になつてゐるので、床を張つたやうである。

男の子が先に立つて、横になつてゐる材木の

上に乗つて、一番隅へ這入つて、「姉えさん、早くお出なさい」と呼ぶ。

姉娘はおそるおそる弟の傍へ往つた。

「まあ、お待ちなせ」と女中が云つて、背に負つてゐた包を卸した。そして着換の衣類を出して、子供を脇へ寄らせて、隅の處に敷いた。そこへ親子をすわらせた。

母親がすわると、二人の子供が左右から纏り附いた。岩代の信夫郡の住家を出て、親子はここまで來るうちに、家の中ではあつても、親子の隣より外らしい所に寝たことがある。不自由にも次第に慣れて、もうさう程苦にはしない。

女中の包から出したのは衣類ばかりではない。用心に持つてゐる食物もある。女中はそれを親子の前に出して置いて云つた。「ここでは焚火をいたすことは出来ません。若し悪い人に見附けられてはならぬからでございます。あの鹽濱の持主とやらの家まで往つて、お湯を貰つてまゐりませう。そして藁や薦の事も頼んでまゐりませう。」

女中はまめまめしく出て行つた。子供は樂しげに粗糲やら、乾した果やらを食へはじめた。暫くすると、此材木の隣へ人の這入つて來る足音がした。「姥竹かい」と母親が聲を掛けた。

「姥竹かい」と母親が聲を掛けた。

# 山椒大夫

越後の春日を経て今津へ出る道を、珍らしい旅人の一群が歩いてゐる。母は三十歳を踰えたばかりの女で、二人の子供を連れてゐる。姉は十四、弟は十二である。それに四十位の女中が一人附いて、草臥れた同胞二人を、「もうぢきにお宿にお着なさいませ」と云つて、勵まして歩かせようとする。二人の中で、姉は足を引き摩るやうにして歩いてゐるが、それでも氣が勝つてゐて、疲れたのを母や弟に知らせまいとして、折々思ひ出したやうに彈力のある歩附をして見せる。近い道を物詣にでも歩くのなら、ふさはしくも見えさうな一群であるが、笠やら杖やら甲斐甲斐しい出立をしてゐるのが、誰の目にも珍らしく、又氣の毒に感ぜられるのである。

道は百姓家の斷えたり續いたりする間を通つてゐる。砂や小石は多いが、秋日和に好く乾いて、しかも粘土が雜つてゐるために、好く固まつてゐて、海の傍のやうに踝を埋めて人を惱ますことはない。

蕨の家の何軒も立ち並んだ一構が杵の林に圍まれて、それに夕日がかつと差してゐる處に通り掛かつた。

「まああの美しい紅葉を御覽」と、先に立つてゐた母が指さして子供に言つた。

子供は母の指さす方を見たが、なんとも云はぬので、女中が云つた。「木の葉があんなに染まるのでございますから、朝晩お寒くなりましたのも無理はございませんね。」

姉娘が突然弟を顧みて云つた。「早くお父様様の入らつしやる處へ往きたいわね。」

「姉えさん。まだなかなか往かれはしないよ。」

弟は賢しげに答へた。

母が諭すやうに云つた。「さうですとも。今まで越して來たやうな山を澤山越して、河や海をお船で度々渡らなくては往かないのだよ。毎日精出して大人しく歩かなくては。」

「でも早く往きたいのですもの」と、姉娘は云つた。

向うから空桶を擔いで來る女がある。潮濱から歸る潮波女である。

それに女中が聲を掛けた。「申し申し。此邊に旅の宿をする家はありませんか。」

潮波女は足を駐めて、主従四人の群を見渡した。そしてかう云つた。「まあ、お氣の毒な。生憎な所で日が暮れますね。此土地には旅の人を留めて上げる所は一軒もありません。」

女中が云つた。「それは本當ですか。どうしてそんなに人氣が悪いのでせう。」

二人の子供は、はづんで來る對話の調子を氣にして、潮波女の傍へ寄つたので、女中と三人で女を取り巻いた形になつた。

潮波女は云つた。「いゝえ。信者が多くて人氣のいい土地ですが、國守の掟だから爲方ありません。もうあそこにとひきして、女は今來た道を指さした。『もうあそこに見えてゐますが、あの橋までお出でなされると、高札が立つてゐます。それに精しく書いてあるさうですが、近頃悪い人買が此邊を立ち廻ります。それで旅人に宿を貸して足を留めさせたものにはお咎があります。あたり七軒巻添になるさうです。』」

「それは困りますね。子供衆もお出なさるし、



自分は岩代のものである。夫が筑紫へ往つて歸らぬので、二人の子供を連れて尋ねに往く。姥竹は姉妹の生れた時から守をしてくれた女中で、身寄のないものゆゑ、遠い、覺束ない旅の伴をする事になつたと話したのである。

さてここまでは来たが、筑紫の果へ往くことを思へば、まだ家を出たばかりと云つても好い。これから陸を行つたものであらうか。又は船路を行つたものであらうか。主人は船乗であつて見れば、定めて遠國の事も知つてゐるだらう。どうぞ教へて貰ひたいと、子供等の母が頼んだ。

大夫は知れ切つた事を問はれたやうに、少しもためらはずに船路を行くことを勧めた。陸を行けば、ちき隣の越中の國に入る界にさへ、親不知子不知の難所がある。削り立てたやうな巖石の裾には荒浪が打ち寄せる。旅人は横穴に這入つて、波の引くのを待つてゐて、狭い巖石の下の道を走り抜ける。其時は親は子を顧みることが出来ず子も親を顧みることが出来ない。それは海邊の難所である。又山を越えたと、踏まへた石が一つ擦げば、千尋の谷底に落ちるやうな、あぶない峭道もある。西國へ往くまでにはどれ程の難所があるか知れない。それとは違つ

て、船路は安全なものである。慥な船頭にさへ頼めば、ゐながらにして百里でも千里でも行かれる。自分は西國まで往くことは出来ぬが、諸國の船頭を知つてゐるから、船に載せて出て、西國へ往く舟に乗り換へさせることが出来る。あすの朝は早速船に載せて出ようと、大夫は事なげに云つた。

夜が明け掛かると、大夫は生從四人をせき立てて家を出た。其時子供等の母は小さい囊から金を出して、宿賃を拂はうとした。大夫は留めて、宿賃は貰はぬ、併し金の入れてある大切な囊は預つて置かうと云つた。なんでも大切な品は、宿に着けば宿の主人に、舟に乗れば舟の主に預けるものだ云ふのである。

子供等の母は最初に宿を借ることを請うてから、主人の大夫の言ふ事を聽かなくてはならぬやうな勢になつた。提を破つてまで宿を賃しにくれたのを、難有くは思つても、何事によらず言ふが儘になる程、大夫を信じてはゐない。かう云ふ勢になつたのは、大夫の詞に人を押し附ける強みがあつて、母親はそれに抗ふことが出来ぬからである。その抗ふことの出来ぬのは、どこか恐ろしい處があるからである。併し母親は自分が大夫を恐れてゐると思つてゐな

い。自分の心がはつきりわかつてゐない。母親は餘儀ない事をするやうな心持で舟に乗つた。子供等は風いだ海の、青い藍を敷いたやうな面を見て、物珍しさに胸を跳らせて乗つた。只姥竹が顔には、きのふ橋の下を立ち去つた時から、今舟に乗る時まで、不安の色が消え失せなかつた。

山岡大夫は纜を解いた。櫓を岸を一押押すと、舟は搖めきつつ浮び出た。

山岡大夫は暫く岸に沿つて南へ、越中境の方角へ漕いで行く。霧は見る見る消えて、波が日に赫く。

人家のない岩蔭に、波が砂を洗つて、海松や荒布を打ち上げてゐる處があつた。そこに舟が二艘止まつてゐる。船頭が大夫を見て呼び掛けた。

「どうぢや。あるか。」

大夫は右の手を舉げて、大抵を折つて見せた。そして自分もそこへ舟を舫つた。大抵だけ折つたのは、四人あると云ふ相圖である。

前から見た船頭の一人は宮崎の郎と云つて、越中宮崎のものである。左の手の拳を開

併し心の内には、杵の森まで往つて来たに  
しては、餘り早いと疑つた。姥竹と云ふのは女中  
の名である。

這入つて来たのは四十歳ばかりの男である。  
骨組の逞しい、筋肉が一つ一つ肌の上から數へ  
られる程、脂肪の少ない人で、牙彫の人の形や  
うな顔に笑を湛へて、手に數珠を持つてゐる。

我家を歩くやうな、慣れた歩附をして、親子の  
潛んでゐる處へ進み寄つた。そして親子の座席  
にしてゐる材木の端に腰を掛けた。

親子は只驚いて見てゐる。仇をしさうな様子  
も見えぬので、恐ろしいとも思はぬのである。

男はこんな事を言ふ。「わしは山岡大夫と云

ふ船乗ぢや。此頃此地を人買が立ち廻ると云  
ふので、國守が旅人に宿を貸すことを差し止め  
た。人買を掴まへることは、國守の手に合はぬ  
と見える。氣の毒なは旅人ぢや。そこでわしは

旅人を救うて遣らうと思ひ立つた。さいはひわ  
しが家は街道を離れてゐるので、こつそり人を  
留めても、誰に遠慮もいらぬ。わしは人の野宿

をしさうな森の中や橋の下を尋ね廻つて、これ  
まで大勢の人を連れて歸つた。見れば子供衆が  
菓子を食べてゐるが、そんな物は腹の足し  
にはならぬ。齒に障る。わしが所ではさした

る響應はせぬが、芋粥でも進ませよう。どうぞ  
遠慮せずに來て下されい。」男は強ひて誘ふで  
もなく、獨言のやうに言つたのである。

子供の母はつくづく聞いてゐたが、世間の掟  
に背いてまでも人を救はうと云ふ難い、志  
に感ぜずにはゐられなかつた。そこでかう云つ  
た。「承はれば殊勝なお心掛と存じます。貸

すなと云ふ掟のある宿を借りて、ひよつと宿主  
に難儀を掛けようかと、それが氣掛かりではご  
ざいますが、わたくしは兎も角も、子供等に温

いお粥でも食べさせて、屋根の下に休ませるこ  
とが出来ましたら、其御恩は後の世までも忘れ  
ますまい。」

山岡大夫は頷いた。「さてさて好う物のわか  
る御婦人ぢや。そんならすぐに案内をして進ぜ  
ませう。」かう云つて立ちさうにした。

母親は氣の毒さうに云つた。「どうぞ少しお  
待下さいませ。わたくし共三人がお世話になる  
さへ心苦しうございますのに、こんな事を申す

のはいかかと存じますが、實は今一人連がござ  
います。」

山岡大夫は耳を欬てた。「連がおありなさる。  
それは男か女子か。」  
「子供達の世話をさせに連れて出た女中ござ

います。湯を貰ふと申して、街道を三四町跡へ  
引き返してまゐりました。もう程なく歸つてま  
ゐりませう。」

「お女中かな。そんなら待つて進ませよう。」山  
岡大夫の落着いた、底の知れぬやうな顔に、  
なぜか喜の影が見えた。

ここは直江の浦である。日はまだ來山の背後  
に隠れてゐた、紺青のやうな海の上には薄い霧  
が掛かつてゐる。

一群の客を舟に載せて、纜を解いてゐる船頭  
がある。船頭は山岡大夫で、客はゆうべ大夫の  
家に泊つた主従四人の旅人である。

應化橋の下で山岡大夫に出逢つた母親と子供  
二人とは、女中姥竹が缺け損じた桶子に湯を貰  
つて歸るのを待ち受けて、大夫に連れられて宿

を借りに往つた。姥竹は不安らしい顔をしたが  
ら附いて行つた。大夫は街道を南へ這入つた  
松林の中の草の家に四人を留めて、芋粥を進

めた。そしてどこからどこへ往く旅かと問う  
た。草臥れた子供等を先へ寢させて、母は宿の  
主人に身の上のおほよそを、微かな燈火の下で  
話した。

「たはげが」と、佐渡は髪を掴んで引き倒した。「うぬまで死なせてなるものか。大事な貨ぢや。」

佐渡の二郎は索綯を引き出して、母親をくるくる巻にして轉がした。そして北へ北へと漕いで行つた。

「お母あ様お母あ様」と呼び續けてゐる姉と弟とを載せて、宮崎の三郎が舟は岸に沿うて南へ走つて行く。

「もう呼ぶな」と宮崎が叱つた。「水の底の鱗介には聞えても、あの女子には聞えぬ。女子共は佐渡へ渡つて粟の島でも逐はせられることぢやらう。」

姉の安壽と弟の厨子王とは抱き合つて泣いてゐる。故郷を離れるも、遠い旅をするも母と一しよにすることだと思つてゐたのに、今別れずも引き分けられて、二人はどうして好いかわからない。只悲しさばかりが胸に溢れて、此別が自分達の身の上をどれだけ變らせるか、其程さへ辨へられぬのである。

午になつて宮崎は餅を出して食つた。そして安壽と厨子王にも一つ宛くれた。二人は餅を

手に持つて食べようとせず、目を見合せて泣いた。夜は宮崎が被せた苫の下で、泣きながら寐入つた。

かうして二人は幾日か舟に明かし暮らした。宮崎は越中、能登、越前、若狭の津々浦々を賣り歩いたのである。

併し二人が稱ひのに、體もか弱く見えるので、なかなか買はうとぶふものがない。たまに買手があつても、値段の相談が調はない。宮崎は次第に機嫌を損じて、「いつまでも泣くか」と二人を打つやうになつた。

宮崎が舟は廻り廻つて、丹後の由良の港に來た。ここには石浦と云ふ處に大きい邸を構へて、田畑に米麥を殖ゑさせ、山では獵をさせ、海では漁をさせ、蠶飼をさせ、機織をさせ、金物、陶物、木の器、何から何まで、それぞれ職人を使つて造らせる山椒大夫と云ふ限者がある、人なら幾らでも買ふ。宮崎はこれまで、餘所に買手のない貨があると、山椒大夫の所へ持つて來ることになつてゐた。

港に出張つてゐた大夫の奴頭は、安壽、厨子王をすぐに七貫文に買つた。「やれやれ、鬼鬼共を片付けて身が輕うなつた」と云つて、宮崎の三郎は受け取つた錢を懷に

入れた。そして渡止場の酒店に這入つた。

一抱に餘る柱を立て竝べて造つた大奥の奥深い廣間に一間四方の爐を切らせて、炭火がおこしてある。其向に茵を三枚疊ねて敷いて、山椒大夫は凡に靠れてゐる。左右には二郎三郎の二人の息子が狛犬のやうに列んでゐる。も

と大夫には三人の男子があつたが、太郎は十六歳の時、逃亡を企てて捕へられた奴に、父が手づから烙印をするのをちつと見てゐて、一言も物を言はずに、ふいと家を出て行方が知れなくなつた。今から十九年前の事である。

奴頭が安壽、厨子王を連れて前へ出た。そして二人の子供に辭儀をせよと云つた。

二人の子供は奴頭の詞が耳に入らぬらしく、只目を睨つて大夫を見てゐる。今年六十歳になる大夫の、朱を塗つたやうな顔は、額が廣く膠が張つて、髪も鬢も銀色に光つてゐる。子供等は恐ろしいよりは不思議かつて、ちつと其顔を見てゐるのである。

大夫はぶつた。「買うて來た子供はそれか。

いつも買ふ奴と違つて、何に使うて好いかわからぬ、珍らしい子供ぢやと云ふから、わざわざ



いて見せた。右の手が貨の相圖になるやうに、左の手は錢の相圖になる。これは五貫文に附けたのである。

「氣張るぞ」と今一人の船頭が云つて、左の臂をつと仰べて、一度拳を開いて見て、次いで示指を堅てて見せた。此男は佐渡の二郎で六貫文に附けたのである。

「横着者奴」と宮崎が叫んで立ち掛ければ、「出し抜かうとしたのはおぬしぢや」と佐渡が身構をする。二艘の舟がかしいで、舷が水を告つた。

大夫は二人の船頭の顔を冷かに見較べた。「慌てるな。どつちも空手では還さぬ。お客様が御窮屈でないやうに、お二人づつ分けて進ぜ

る。貨錢は跡で附けた値段の割ぢや。」かう云つて置いて、大夫は客を顧みた。「さあ、お二人づつあの舟へお乗なされ。どれも西國への便船ぢや。舟足と云ふものは、重過ぎては走りが悪い。」

二人の子供は宮崎が舟へ、母親と姥竹とは佐渡が舟へ、大夫が手を執つて乗り移らせた。移らせて引く大夫が手に、宮崎も佐渡も幾緞かの錢を握らせたのである。

「あの、主人にお預けなされた囊は」と、姥竹

が主の袖を引く時、山岡大夫は空舟をつと押し出した。

「わしはこれでお暇をする。儘かな手から籠かな手へ渡すまでがわしの役ぢや。御機嫌好うお越しなされ。」

總の音が忙しく響いて、山岡大夫の舟は見る遠ざかつて行く。

母親は佐渡に云つた。「同じ漕を漕いで行つて、同じ港に着くのでございませうね。」

佐渡と宮崎とは顔を見合せて、聲を立てて笑つた。そして佐渡が云つた。「乗る舟は弘誓の舟、著くは同じ彼岸と、蓮華峰寺の和尚が云うたげな。」

二人の船頭はそれ切り黙つて舟を出した。佐渡の二郎は北へ漕ぐ。宮崎の三郎は南へ漕ぐ。「あれあれ」と呼びかはす親子主従は、只遠ざかり行くばかりである。

母親は物狂ほしげに、舷に手を掛けてのんびり上がつた。「もう爲方がない。これが別だよ。安壽は守本尊の地藏様を大切に。厨子王はお父様の下さつた護刀を大切に。どうぞ二人が離れぬやうに。」安壽は姉妹、厨子王は弟の名である。

子供は只「お母あ様、お母あ様」と呼ぶばかり

である。

舟と別とは次第に遠ざかる。後には餌を待つ雛のやうに、一人の子供が聞いた口が見えてゐて、もう聲は聞えない。

姥竹は佐渡の二郎に「申し船頭さん、申し申し」と聲を掛けてゐたが、佐渡は構はぬので、とうとう赤松の岸のやうな淵に墮つた。「船頭さん。これはどうした事でございませう。あのお娘様、若様に別れて、生きてどこへ往かれませう。奥様も同じ事でございませう。これから何をたよりにお暮らしなさいませう。どうぞあの舟の行く方へ漕いで行つて下さいませう。後生でございませう。」

「うるさい」と佐渡は後様に黙つた。姥竹は舟答に倒れた。髪は亂れて、髪に掛かつた。姥竹は身を起した。「ええ。これまでぢや。奥様、御免下さいませう。」かう云つて眞つ逆様に海に飛び込んだ。

「こらと云つて船頭は臂を差し伸ばしたが、間に合はなかつた。母親は紐を脱いで佐渡が前へ出した。「これは粗末な物でございませうが、お世話になつたお禮に差し上げます。わたくしはもうこれで、お暇を申します。」かう云つて、舷に手を掛けた。

卸して置いて、すぐに一荷刈つてくれた。

厨子王は氣を取り直して、やうやう午までに一荷刈り、午から又一荷刈つた。

濱邊に往く姉の安壽は、川の岸を北へ行つた。さて潮を汲む場所に降り立つたが、これも潮の汲みやうを知らない。心で心を勵まして、やうやう杓を卸すや否や、波が杓を取つて行つた。

隣で汲んでゐる女子が、手早く杓を拾つて戻した。そしてかう云つた。「潮はそれでは汲まれません。どれ汲みやうを教へて上げよう。右手の杓でかう汲んで、左手の桶でかう受ける。」

とうとう一荷汲んでくれた。

「難有うございます。汲みやうが、あなたのお蔭で、わかつたやうでございます。自分で少し汲んで見ませう。」安壽は潮を汲み覺えた。

隣で汲んでゐる女子に、無邪氣な安壽が氣に入つた。二人は午餉を食べながら、身の上を打ち明けて、姉妹の誓をした。これは伊勢の小萩と云つて、二見が浦から買はれて來た女子である。

最初の日はこんな工合に、姉が言ひ附けられた三荷の潮も、弟が言ひ附けられた三荷の柴も、一荷づつの勸進を受けて、日の暮までに首

尾好く調つた。

姉は潮を汲み、弟は柴を刈つて、一日一日と暮らして行つた。姉は濱で弟を思ひ、弟は山で姉を思ひ、日の暮を待つて小屋に歸れば、二人は手を取り合つて、筑紫にゐる父が戀しい、佐渡にゐる母が戀しいと、言つては泣き、泣いては言ふ。

兎角するうちに十日立つた。そして新參小屋を明けなくてはならぬ時が來た。小屋を明ければ、奴は奴、婢は婢の組に入るのである。二人は死んでも別れぬと云つた。奴頭が大

夫に訴へた。大夫は云つた。「たはけた話ぢや。奴は奴の組へ引き摩つて往け。婢は婢の組へ引き摩つて往け。」

奴頭が承つて起たうとした時、二郎が傍から呼び止めた。そして父に言つた。「仰やる通に童共を引き分けさせても宜うございませう。童共は死んでも別れぬと申すさうでございます。愚なもののゆゑ、死ぬるかも知れ

ません。刈る柴はわづかでも、汲む潮はいささかでも、人手を耗すのは損でございます。わた

くしが好いやうに計らつて遣りませう。」

「それもさうか。損になる事はわしは嫌ぢや。どうにでも勝手にして置け。」大夫はかう云つて脇へ向いた。

二郎は三の木戸に小屋を掛けさせて、姉と弟とを一しよに置いた。

或日の暮に二人の子供が、いつものやうに父母の事を言つてゐた。それを二郎が通り掛かつて聞いた。二郎は郎を見廻つて、強い奴が弱い奴を虐げたり、誑をしたり、盜をしたたりするのを取り締まつてゐるのである。

二郎は小屋に這入つて二人に言つた。「一父母は戀しても佐渡は遠い。筑紫はそれより又遠い。子供の往かれる所ではない。父母に逢ひたいなら、大きうなる日を待つが好い。」かう云つて出て行つた。

程經て又或日の暮に、二人の子供は父母の事を言つてゐた。それを今度は二郎が通り掛かつて聞いた。二郎は寝鳥を取ることが好で郎の内の木立木立を、手に弓矢を持つて見廻るのである。

二人は父母の事を言ふ度に、どうしようか、かうしようかと、逢ひたさの餘りに、あらゆる手立を話し合つて、夢のやうな相談をもする。け

連れて來させて見れば、色の蒼ざめた、か細い童共ぢや。何に使うて好いかは、わしにもわからぬ。」

傍から三郎が口を出した。末の弟ではあるが、もう三十になつてゐる。「いやお父つさん。さつきから見てもれば、辭儀をせいと云はれても辭儀もよぬ。外の奴のやうに名告もせぬ。弱々しく見てもしぶといふ共ぢや。奉公初は男が柴刈、女が潮汲と極まつてゐる。其通にさせなさい。」

「仰しやるとほり、名はわたくしにも申しませぬ」と、奴頭が云つた。

大夫は嘲笑つた。「愚者と見える。名はわしが附けて遣る。姉はいたつきを垣衣、弟は我名を萱草ぢや。垣衣は漬へ往つて、日に三荷の潮を汲め。萱草は山へ往つて日に三荷の柴を刈れ。弱々しい體に免じて、荷を輕うして取らせる。」

三郎が云つた。「過分のいたはり様ぢや。こりや、奴頭。早く連れて下がつて道具を渡して遣れ。」

奴頭は二人の子供を新參小屋に連れて往つて、安海には桶と杓、厨子王には鎌と鋤を渡し、どちらにも午餉を入れる櫛子が添へてあ

る。新參小屋は外の奴婢の居所とは別になつてゐるのである。

奴頭が出て行く頃には、もうあたりが暗くなつた。此家には燈火もない。

翌日の朝はひどく寒かつた。ゆうべは小屋に備へてある食が餘りきたないので、厨子王が藪を探して來て、舟で苦をかついたやうに、二人でかついて寢たのである。

きのふ奴頭に教へられたやうに、厨子王は櫛子を持つて厨へ餉を受け取りに往つた。屋根の上、地にちらばつた藁の上には霜が降つてゐる。厨は大きな土間で、もう大勢の奴婢が來て待つてゐる。男と女とは受け取る場所が違ふのに、厨子王は姉のと自分のと貰はうとするので、一度は叱られたが、あすからは銘々貰ひに來ると誓つて、やうやら櫛子の外に、面桶に入れた餉と、木の椀に入れた湯との二人前をも受け取つた。餉は鹽を入れて炊いてある。

姉と弟とは朝餉を食べながら、もうかうした身の上になつては、運命の下に項を屈めるより外はないと、けなげにも相談した。そして姉は漬邊へ、弟は山路をさして行くのである。

大夫が邸の三の木戸、二の木戸、一の木戸を少しよに出て、二人は霜を履んで、見返り膝に左右へ別れた。

厨子王が登る山は百良が鼠の窟で、石桶からは少し南へ行つて登るのである。柴刈る所は、麓から遠くはない。所々紫色の岩の露れてゐる所を通つて、稍廣い平地に出る。そこに雜木が茂つてゐるのである。

厨子王は雜木林の中に立つてあたりを見廻した。併し柴はどうして刈るものかと、暫くは手を着け兼ねて、朝日に霜の融け掛かる、茵のやうな落葉の上に、ぼんやりすわつて時を過した。やうやう氣を取り直して、一枝二枝刈るうちに、厨子王は指を傷めた。そこで又落葉の上にすわつて、山でさへこんなに寒い。漬邊に往つた姉の様は、さぞ潮風が寒からうと、ひとり涙をこぼしてゐた。

日が餘程昇つてから、柴を背負つて麓へ降りる、外の樵が通り掛かつて、「お前も大夫の所の奴か、柴は日に何荷刈るのか」と問うた。

一日には荷刈る筈の柴を、まだ少しも刈りませぬと厨子王は正直に云つた。

一日に三荷の柴ならば、午までに二荷刈るが好い。柴はかうして刈るものぢや。」樵は我荷を



紐を解いて、袋から出した佛像を枕元に据ゑた。二人は右左にぬかづいた。其時齒をくひしばつてもこらへられぬ額の痛が、掻き消すやうに失せた。掌で額を撫でて見れば、創は痕もなくなつた。はつと思つて、二人は目を醒ました。

二人の子供は起き直つて夢の話をした。同じ夢を同じ時に見たのである。安壽は守本尊を取り出して、夢で据ゑたと同じやうに、枕元に据ゑた。二人はそれを伏し拜んで、微かな烽火の明りにすかして、地藏尊の額を見た。白毫の右左に、鴈で彫つたやうな十文字の疵があざやかに見えた。

二人の子供が話を三郎に立聞せられて、其晩恐ろしい夢を見た時から、安壽の様子がひどく變つて来た。顔には引き締まつたやうな表情があつて、眉の根には皺が寄り、日は遙に遠い處をい詰めてゐる。そして物を言はない。日の暮に濱から歸ると、これまでは弟の山から歸るのを待ち受けて、長い話をしたのに、今はこんな時にも詞少にしてゐる。厨子王が心配して、「姉えさんどうしたのです」と云ふと、「どう

もしないの、バ丈夫よ」と云つて、わざとらしく笑ふ。

安壽の前と變つたのは只これだけで、言ふ事が間違つてもをらず、爲る事も平生の通である。併し厨子王は互に慰めもし、慰められもした一人の姉が、變つた様子をするのを見て、際限なくつらく思ふ心を、誰に打ち明けて話さことも出来ない。二人の子供の境界は、前より一層寂しくなつたのである。

雪が降つたり歇んだりして、年が暮れ掛かつた。奴も婢も外に出る爲事を止めて、家の中で働くことになつた。安壽は絲を紡ぐ。厨子王は藁を搗つ。藁を搗つのは修行はいらぬが、絲を紡ぐのはむづかしい。それを夜になると伊勢の小萩が来て、手傳つたり教へたりする。安壽は弟に對する様子が變つたばかりでなく、小萩に對しても、詞少になつて、動もすると不愛想をする。併し小萩は機嫌を損ぜずに、いたはるやうにして附き合つてゐる。

である。常は諍をする、厳しく罰せられるのに、かう云ふ時は奴頭が大目に見る。血を流しても知らぬ顔をしてゐることがある。どうかすると、殺されたものがあつても構はぬのである。

寂しい三の木戸の小屋へは、折々小萩が遊びに來た。婢の小屋の賑はしきを持つて來たかと思ふやうに、小萩が話してゐる間は、陰氣な小屋も春めいて、此頃様子の變つてゐる安壽の顔にさへ、めつたに見えぬ微笑の影が浮ぶ。

三日立つと、又家の中の爲事が始まつた。安壽は絲を紡ぐ。厨子王は藁を搗つ。もう夜になつて小萩が來ても、手傳ふに及ばぬ程、安壽は紡錘を廻すことに慣れた。様子は變つてゐても、こんな静かな、同じ事を繰り返すやうな爲事をするには差支なく、又爲事が却つて一向になつた心を散らし、落着を與へるらしく見えた。姉と前のやうに話をするこの出来ぬ厨子王は、紡いでゐる姉に、小萩がゐる物言つてくれるのが、何よりも心強く思はれた。

水が温み、草が萌える頃になつた。あすからは外の爲事が始まると云ふ日に、二郎が町を見

ふは姉がかう云つた。「大きくなつてからでなくは、遠い旅が出来ないと云ふのは、それは當り前の事よ。わたし達はその出来ない事がしたいのだわ。だがわたしは好く思つて見ると、どうしても二人一しよにここを逃げ出しては駄目なの。わたしには構はないで、お前一人で逃げなくては。そして先へ筑紫の方へ往つて、お父様にお目に掛かつて、どうしたら好いか何ふのだね。それから佐渡へお母様のお迎に往くが好いわ。」三郎が立聞をしたのは、生憎この安壽の詞であつた。

三郎は弓矢を持つて、つと小屋の内に這入つた。「こら。お主達は逃げる談合をしてをるな、逃亡の企をしたものには烙印をする。それが此郎の掟ぢや。赤うなつた鐵は熱いぞよ。」二人の子供は眞つ蒼になつた。安壽は三郎が前に進み出て云つた。「あれは誰でございます。弟が一人で逃げたつて、まあ、どこまで往かれます。餘り親に逢ひたいので、あんな事を申しました。こなひだも、弟と一しよに、鳥になつて飛んで往かうと申したこともございいます。出放題でございます。」

厨子王は云つた。「姉えさんの云ふ通りです。いつでも二人で今のやうな、出来ない事はか

し言つて、父母の戀しいのを粉らしてゐるのです。」

三郎は二人の顔を見較べて、暫くの間黙つてゐた。「ふん。誰なら誰でも好い。お主達が一しよになつて、なんの話をすると云ふことを、己が儘に聞いて置いたぞ。」かう云つて三郎は出て行つた。

其晩は二人が氣味悪く思ひながら寝た。それからどれ丈寐たかわからない。二人はふと物音を聞き附けて目を醒ました。今の小屋に來てからは、燈火を置くことが許されてゐる。その微かな明りで見れば、枕元に三郎が立つてゐる。

三郎は、つと寄つて、兩手で二人の手を握まへる。そして引き立て、戸口を出る。蒼ざめた月を伴ながら、二人は月見えの時に通つた、廣い馬道を引かれて行く。階を三段登る。廊を通る。廻り廻つて前の日に見た廣間に這入る。

そこには大勢の人が黙つて竝んでゐる。三郎は二人を炭火の眞つ赤におこつた爐の前まで引き摩つて出る。二人は小屋で引き立てられた時から、只「御免なさい御免なさい」と云つてゐたが、三郎は黙つて引き摩つて行くので、しまひには二人も黙つてしまつた。爐の向側には茵三枚を疊れて敷いて、山椒大夫がすわつてゐる。大

夫の赤顔が、座の右左に伏してある燈火を照り反して、燃えるやうである。三郎は炭火の中から、赤く焼けてゐる火筋を抜き出す。それを手に持つて、暫く見てゐる。初め透き通るやうに赤くなつてゐた鐵が、次第に黒ずんで来る。そこで三郎は安壽を引き寄せて、火筋を顔に當てようとする。厨子王は其肘に絡み附く。三郎はそれを蹴倒して右の膝に敷く。とうとう火筋を安壽の額に十文字に當てる。安壽の悲鳴が一座の沈黙を破つて響き渡る。三郎は安壽を衝き放して、膝の下厨子王を引き起し、其額にも火筋を十文字に當てる。新に響く厨子王の泣聲が、稍微かになつた姉の聲に交る。三郎は火筋を棄て、初め二人を此廣間へ連れて來た時のやうに、又二人の手を握まへる。そして一座を見渡した後、廣い母屋を廻つて、二人を三段の階の所まで引き出し、凍つた土の上に衝き落す。二人の子供は創の痛と心の恐とに氣を失ひさうになるのを、やうやう堪へ忍んで、どこをどう歩いたともなく、三の木戸の小家に歸る。臥所の上に倒れた二人は、暫く死骸のやうに動かずにゐたが、忽ち厨子王が「姉えさん、早くお地藏様を」と叫んだ。安壽はすぐに起き直つて、肌守袋を取り出した。わななく手に

にきつくり切れた。

あくる朝、二人の子供は背に籠を負ひ腰に鎌を挿して、手を引き合つて木戸を出た。山椒大夫の所に來てから、二人一しよに歩くのはこれが始である。

厨子王は姉の心を忤り兼ねて、寂しいやうな、悲しいやうな思に胸が一ばいになつてゐる。きのふも奴頭の歸つた跡で、いろいろに詞を設けて尋ねたが、姉はひとり何事かを考へてゐるらしく、それをあからさまには打ち明けずにした。

山の麓に來た時、厨子王はこらへ兼ねて云つた。「姉えさん。わたしはかうして久し振で一しよに歩くのだから、嬉しがらなくてはならないのですが、どうも悲しくてなりません。わたしはかうして手を引いてゐながら、あなたの方へ向いて、その禿になつたお頭を見ることが出来ません。姉えさん。あなたはわたしに隠して、何か考へてゐますね。なぜそれをわたしに言つて聞かせてくれないのです。」

安壽はけさも毫光のさすやうな喜を顔に湛へて、大きい目を赫かしてゐる。併し弟の

詞には答へない。只引き合つてゐる手に力を入れただけである。

山に登らうとする所に沼がある。汀には去年見た時のやうに、林華が縱横に亂れてゐるが、道端の草には黄ばんだ葉の間に、もう青い芽の出たのがある。沼の畔から右に折れて登ると、そこに岩の隙間から清水の湧く所がある。そこを通り過ぎて、岩壁を右に見つゝ、うねつた道を登つて行くのである。

丁度岩の面に朝日が一面に差してゐる。安壽は熟なり合つた岩の、風化した間に根を卸して、小さい葉の咲いてゐるのを見附けた。そしてそれを指さして厨子王に見せて云つた。「御覽。もう春になるのね。」

厨子王は黙つて頷いた。姉は胸に秘密を蓄へ、弟は愛ばかりを抱いてゐるので、兎角受應が出来ずに、話は水が砂に沁み込むやうにとぎれてしまふ。

去年柴を刈つた木立の邊に來たので、厨子王は足を駐めた。「ねえさん。ここで刈るのです。」

「まあ、もつと高い所へ登つて見ませうね。」安壽は先に立つてずんずん登つて行く。厨子王は訝りながら附いて行く。暫くして雑木林よりは

餘程高い、外山の頂とも云ふべき所に來た。

安壽はそこに立つて、南の方をぢつと見てゐる。日は、石浦を経て由良の港に注ぐ大雲川の土流を辿つて、一里ばかり隔つた川向に、こんもりと茂つた木立の中から、塔の尖の見える中山に止まつた。そして「厨子王や」と弟を呼び掛けた。「わたしが久しい前から考事をしてゐて、お前ともいつもの様に話さないのを、變だと思つてゐたでせうね。もうけふは柴なんぞは刈らなくても好いから、わたしの言ふ事を好くお聞。小萩は伊勢から賣られて來たので、故郷から此土地までの道を、わたしに話して聞かせたがね、あの中山を越して往けば、都がもう近いのだよ。筑紫へ往くのはむづかしいし、引き返して佐渡へ渡るのも、たやすい事ではないけれど、都へはきつと往かれます。お母あ様と御一しよに岩代を出てから、わたし共は恐ろしい人ばかりに出逢つたが、人の運が開けるものなら、善い人に出逢はぬにも限りません。お前はこれから思ひ切つて、此土地を逃げ延びて、どうぞ都へ登つておくれ。神佛のお導で、善い人にさへ出逢つたら、筑紫へお下りになつたお父様のお身の上も知れよう。佐渡へお母あ様のお迎に往くことも出来よう。籠や鎌は棄て



廻る序に、三の木戸の小屋に來た。「どうぢやな。あす爲事に出来るかな。大勢の人の中には病氣でをるものもある。奴頭の話を聞いたばかりではわからぬから、けふは小屋小屋を皆見て廻つたのぢや。」

藁を掃つてゐた厨子王が返事をしようとして、まだ詞を出さぬ間に、此頃の様子にも似ず、安壽が絲を紡ぐ手を止めて、つと二郎の前に進み出た。「それに就いてお願がございます。わたくしは弟と同じ所で爲事がいたしたうございます。どうか一しよに山へ遣つて下さるやうに、お取計らひなすつて下さいまし。」蒼ざめた顔に紅が差して、目が赫いてゐる。

厨子王は姉の様子を二度目に變つたらしく見えるのに驚き、又自分になんの相談もせずにて、突然柴刈に往きたいと云ふのを訝しがつて、只目を睜つて姉をまもつてゐる。

二郎は物を言はずに、安壽の様子をぢつと見てゐる。安壽は外にない、只一つのお願でございます、どうぞ山へお遣なすつて」と繰り返して言つてゐる。

暫くして二郎は口を開いた。「此郎では奴婢のなにがしになんの爲事をさせると云ふことは、重い事にしてあつて、父がみづから極める。

併し垣衣、お前の願はよくよく思ひ込んでの事と見える。わしが受け合つて取りなして、きつと山へ往かれるやうにして遣る。安心してゐるが好い。まあ、二人の釋いものが無事に冬を過して好かつた。」かう云つて小屋を出た。

厨子王は杵を置いて姉の側に寄つた。「姉えさん。どうしたのです。それはあなたが一しよに山へ來て下さるのは、わたしも嬉しいが、なぜ出し拔に頼んだのです。なぜわたしに相談しません。」

姉の顔は喜に赫いてゐる。「ほんにさうお思ひのは尤もだが、わたしだつてあの人の顔を見るまで、頼まうとは思つてゐなかつたの。ふいと思ひ附いたのだもの。」

「さうですか。變ですなあ。一厨子王は珍らしい物を見るやうに姉の顔を眺めてゐる。」

奴頭が鎧と鎌とを持って這入つて來た。

「垣衣さん。お前に潮波をよさせて、柴を刈りに遣るのださうで、わしは道具を持つて來た。代りに桶と杓を貰つて往かう。」

「これはどうもお手数でございました。」安壽は身輕に立つて、桶と杓とを出して返した。

奴頭はそれを受け取つたが、まだ歸りさうにはしない。顔には一種の苦笑のやうな表情が

現れてゐる。此男は山椒大夫一家のものの言附を、神の託宣を聴くやうに聴く。そこで隨分情ない、苛酷な事をもためらはずにする。併し生得、人の聞え苦んだり、泣き叫んだりするのを見たがりはいらない。物事が惡かに進んで、そんな事を見ずに済めば、此方が勝手である。今の苦笑のやうな表情は人に輕信を掛けずには済まめとあきらめて、何か言つたり、したりする時に、此男の顔に現れるのである。

奴頭は安壽に向いて云つた。「さて今一つ用事があるて。實はお前さん、柴刈に遣る事は、二郎様が大夫様に申し上げて拵へなされたのぢや。すると其座に二郎様がをられて、そんなら垣衣を大章にして山へ遣れと仰つた。大夫様は、好い思附ぢやとお笑なされた。そこでわたしはお前さんの髪を貰うて往かねばならぬ。」傍で聞いてゐる厨子王は、此詞を胸を刺されるやうな思をして聞いた。そして目に涙を浮べて姉を見た。

意外にも安壽の顔からは喜の色が消えなかつた。「ほんにさうぢや。柴刈に往くからは、わたしも男ぢや。どうぞ此鎌で切つて下さいまし。」安壽は奴頭の前に項を伸ばした。

光澤のある、長い安壽の髪が、鋭い鎌の一振

りに驅け降りて、沼に沿うて街道に出た。そして大雲川の岸を上手へ向かつて急ぐのである。

安壽は泉の畔に立つて、葦木の松に隠れては又現れる後影を小さくなるまで見送つた。そして日は漸く午に近づくのに、山に登らうともしない。

幸にけふは此方角の山で木を樵る人がないと見えて、坂道に立つて時を過す安壽を見咎めるものもなかつた。

後に同胞を捜しに用た、山椒大夫一家の討手が、此坂の下の沼の端で、小さい墓廬を一足拾つた。それは安壽の履であつた。

中山の國分寺の三門に、松明の火影が亂れて、大勢の人が籠み入つて来る。先に立つたのは、白柄の薙刀を手挟んだ、山椒大夫の息子三郎である。

三郎は堂の前に立つて大聲に云つた。「これへ參つたのは、石浦の山椒大夫が族のものぢや。大夫が使ふ奴の一人が、此山に逃げ込んだのを、健に認めたものがある。隠れ場は寺内より外にはない。すぐにここへ出して貰はう。一附いて来た大勢が、「さあ、出して貰はう、出して貰はう」と叫んだ。

本堂の前から門の外まで、廣い石疊が續いてゐる。其石の上には、今手に手に松明を持つた、三郎が手のものが押し合つてゐる。又石疊の兩側には、城内に仕込んでゐる限の僧侶が、殆ど一人も残らず簇つてゐる。これは討手の群が門外で騒いだ時、内陣からも、庫裡からも、何事が起つたかと、怪んで出て來たのである。

初め討手が門外から門を開けいと叫んだ時、開けて入れたら、亂暴をせられはすまいかと心配して、開けまいとした僧侶が多かつた。それを住持曇猛律師が開けさせた。併し今三郎が大聲で、逃げた奴を出せと云ふのに、本堂は戸を閉ぢた儘、暫くの間ひつそりしてゐる。

三郎は足踏をして、同じ事を二三度繰り返した。手のものの中から和尚さん、どうしたのだと叫ぶものがある。それに短い笑聲が交る。

やうやうの事で本堂の戸が靜かに開いた。曇猛律師が自分で開けたのである。律師は偏衫一つ身に纏つて、なんの威儀をも續けず、常燈明の薄明を背にして本堂の階の上に立つた。丈の高い嚴整な體と、眉のまだ黒い塵張つた顔とが、擦めく火に照らし出された。律師はまだ五十歳を越したばかりである。

律師は徐に口を開いた。騒がしい討手のものも、律師の姿を見ただけで黙つたので、聲は隅隅まで聞えた。「逃げた下人を捜しにこられたのぢやな。當山では住持のわしに言はずに人は留めぬ。わしが知らぬから、そのものは當山にゐぬ。それはそれとして、夜陰に劍戟を執つて、多人數押し寄せて參られ、三門を開けと云はれた。さては國に大亂でも起つたか、公の城逆人でも出来たかと思つて、三門を開けさせた。

それになんぢや。御身が家の下人の詮議か。當山は勅願の寺院で、三門には勅額を懸け、七重の塔には宸翰金字の經文が藏めてある。ここで狼藉を働かれると、國守に檢校の責を問はれるのぢや。又總本山東大寺に訴へたら、都からどのやうな御沙汰があらうも知れぬ。そこを好う思つて見て、早う引き取られたが好からう。悪い事は言はぬ。お身達のためぢや。一かう云つて律師は徐かに戸を締めた。

三郎は本堂の戸を睨んで齒咬をした。併し戸を打ち破つて踏み込むだけの勇氣もなかつた。手のもの共は只風に木葉のざわつくやうに騒ぎかはしてゐる。

此時大聲で叫ぶものがあつた。「その逃げたと云ふのは十二三の小わつぱぢやあらう。それ

て置いて、櫓だけ持つて往くのだよ。」

厨子王は黙つて聞いてゐたが、涙が頬を傳つて流れて來た。「そして、姉えさん、あなたはどうしようと思ふのです。」

「わたしの事は構はないで、お前一人でする事を、わたしと一しよにする積でしておくれ。お父様にもお目に掛かり、お母あ様をも烏からお連申した上で、わたしをたすけに來ておくれ。」

「でもわたしはゐなくなつたら、あなたをひどい目に逢はせませう。」厨子王が心には烙印をせられた、恐ろしい夢が浮ぶ。

「それは意地めるかも知れないがね、わたしは我慢して見せます。金で買った婢をあの人は殺しはしません。多分お前がゐなくなつたら、わたしを二人前働かせようとするでせう。お前の教へてくれた木立の所で、わたしは柴を澤山刈ります。六荷まではゐれないでも、四荷でも五荷でもゐりませう。さあ、あそこまで降りて行つて、籠や鎌をあそこに置いて、お前を麓へ送つて上げよう。」かう云つて安政は先に立つて降りて行く。

厨子王はなんとも思ひ定め兼ねて、ぼんやりして附いて降りる。姉は今年十五になり、弟

は十三になつてゐるが、女は早くおとなびて、その上物に憑かれたやうに、聴く賢くなつてゐるので、厨子王は姉の詞に背くことが出来ぬのである。

木立の所まで降りて、二人は籠と鎌とを落葉の上に置いた。姉は守本尊を取り出して、それを弟の手に渡した。「これは大事なお守だが、こん度違ふまでお前に預けます。此地藏様をわたしだと思つて、護刀と一しよにして、大事に持つてゐておくれ。」

「でも姉えさんにお守がなくては。」

「いゝえ。わたしよりはあぶない目に逢ふお前にお守を預けます。晩にお前が歸らないと、きつと計手が掛かります。お前が幾ら急いでも、あたり前に逃げて行つては、追ひ附かれるに極まつてゐます。さつき見た川の上手を和江と云ふ所まで往つて、首尾好く人に見附かれずに、向河岸へ越してしまへば、中山までもう近い。そこへ往つたら、あの塔の見えるゐたお寺に這入つて隠しておもらひ。暫くあそこに隠れてゐて、計手が歸つて來た跡で、寺を逃げてお出。」

「でもお寺の坊さんが隠して置いてくれるでせうか。」

「さあ、それが運験しだよ。開ける運なら坊さ

んがお前を隠してくれませう。」

「さうですね。姉えさんのけふ仰やる事は、まるで神様が佛様が仰やるやうです。わたしは考へを極めました。なんでも姉えさんの仰やる通にします。」

「おう、好く聴いておくれだ。坊さんは善い人で、きつとお前を隠してくれませう。」

「さうです。わたしにもさうらしく思はれて來ました。逃げて都へも往かれます。お父様やお母あ様にも逢はれます。姉えさんのお迎にも來られます。」厨子王の目が姉と同じ様に赤いて來た。

「さあ、麓まで一しよに行くから、早くお出。」二人は急いで山を降りた。足の運も前とは違つて、姉の熱した心持が、暗赤のやうに弟に移つて行つたかと思はれる。

泉の湧く所へ來た。姉は櫓に添へてゐる木の枕を出して、清水を汲んだ。「これがお前の門出を祝ふお酒だよ。」かう云つて一口飲んで弟に差した。

弟は櫓を飲み干した。「そんなら姉えさん、御機嫌好う。きつと人に見附からずに、中山まで參ります。」

厨子王は十歩ばかり残つてゐた坂道を、一定



拜むと、すぐに拭ふやうに本復せられた。

師實は厨子王に還俗させて、自分で冠を加へた。同時に正氏が謫所へ、赦免状を持たせて、

安否を問ひに使を遣つた。併し此使が往つた

時、正氏はもう死んでゐた。元服して正道と名

告つてゐる厨子王は、身の塞れた程歎いた。

其年の秋の除目に正道は丹後の國守にせられ

た。これは遙授の官で、任國には自分で往か

ず、椽を置いて治めさせるのである。併し國守

は最初の政として、丹後一國で人の賣買を禁

じた。そこで山椒大夫も悉く奴婢を解放して、

給料を拂ふことにした。大夫が家では一時それ

を大きい損失のやうに思つたが、此時から農作

も工匠の業も前に増して盛になつて、一族はい

よいよ富み榮えた。國守の恩人墨猛律師は僧都

にせられ、國守の姉をいたはつた小菰は故郷へ

還された。安寺が亡き迹は、懇に申はれ、又人

水した沼の畔には尼寺が立つことになつた。

正道は任國のためにこれだけの事をして置い

て、特に假寧を申し請うて、微行して佐渡へ渡

つた。

佐渡の國府は維太と云ふ所にある。正道はそ

こへ往つて、役人の手で國中を調べて貰つたが、

母の行方は容易に知れなかつた。

或日正道は思案に暮れながら、一人旅籠を出

て市中を歩いた。そのうちいつか人家の立ち並

んだ所を離れて、畑中の道に掛かつた。空は好

く晴れて日があかあかと照つてゐる。正道は心

の中に、「どうしてお母あ様の行方が知れないの

だらう。若し役人なんぞに任せて調べさせて、自

分が捜し歩かぬのを神佛が憎んで逢はせて下さ

らないのではあるまいか」と思ひながら歩

いてゐる。ふと見れば、大ぶ大きい百姓家があ

る。家の南側の疎な生垣の内が、土を蔽き固め

た廣場になつてゐて、其上に一面に蔭が敷いて

ある。蔭には刈り取つた粟の穂が干してある。

その真ん中に、襦袢を著た女がすわつて、手に

長い竿を持つて雀の來て啄むのを逐つてゐる。

女は何やら歌のやうな調子でつぶやく。

正道はなぜか知らず、此女に心が牽かれて、

立ち止まつて覗いた。女の亂れた髪は塵に塗れ

てゐる。顔を見れば盲である。正道はひどく哀

れに思つた。そのうち女のつぶやいてゐる詞

が、次第に耳に慣れて聞き分けられて來た。そ

れと同時に正道は瘡病のやうに身内が震つて、

目には涙が湧いて來た。女はかう云ふ詞を繰

り返してつぶやいてゐたのである。

厨子王戀しや、ほうやれほ。

鳥も生あるものなれば、

疾う疾う逃げよ、遂はずとも。

正道はうつとりとなつて、此詞に聞き惚れた。

そのうち臍が煮え返るやうになつて、黙めい

た叫が口から出ようとするのを、滴を食ひしば

つてこらへた。忽ち正道は縛られた繩が解けた

やうに垣の内へ駆け込んだ。そして足には粟の

穂を踏み散らしつ。女の前に俯伏した。右の

手には守本尊を捧げ持つて、俯伏した時に、そ

れを額に押し當ててゐた。

女は雀でない、大きいものが夢をあらしに

來たのを知つた。そしていつもの詞を唱へ罷め

て、見えぬ目でちつと滴を見た。其時干した貝

が水にほとびるやうに、兩方の目に潤ひが出

た。女は目が開いた。

「厨子王」と云ふ叫が女の口から出た。二人

はびつたり抱き合つた。

ならわしが知つてをる。」

三郎は驚いて聲の主を見た。父の山椒大夫に見まがふやうな親爺で、此寺の鐘樓守である。親爺は詞を續いで云つた。「そのわつははな、わしが午頃鐘樓から見てをると、築泥の外を通つて南へ急いだ。かよいい代には身が軽い。もう大分の道を行つたぢやろ。」

「それぢや。平日に童の行く道は知れたものぢや。續け」と云つて三郎は取つて返した。松明の行列が寺の門を出て、築泥の外を南へ行くのを、鐘樓守は鐘樓から見て、大聲で笑つた。近い木立の中で、やうやう落ち著いて寝ようとした鴉が二三羽又驚いて飛び立つた。

あくる日に國分寺からは諸方へ人が出た。石浦に往つたものは、安壽の入水の事を聞いて來た。南の方へ往つたものは、三郎の率ゐた討手が田邊まで往つて引き返した事を聞いて來た。中二日置いて、曇猛律師が田邊の方へ向いて寺を出た。鹽ほどある鐵の受罎器を持つて、腕の太きの鉤杖を銜いてゐる。跡からは頭を剃りこくつて三衣を著た厨子王が附いて行く。二人は眞直に街道を歩いて、夜は所々の寺に泊つた。山城の朱雀野に來て、律師は權現堂で休んで、厨子王に別れた。一守本尊を大切にしていって、父母の消息はきつと知れると言ひ聞かせて、律師は師を旋した。亡くなつた姉と同一事を言ふ模様だと、厨子王は思つた。都に上つた厨子王は、僧形になつてゐるので、東山の清水寺に泊つた。

徳堂に寝て、あくる朝日が醒めると、直衣に烏帽子を着て指貫を穿いた老人が、枕元に立つてゐて云つた。「お前は誰の子ぢや。何か大切な物を持つてゐるなら、どうぞ己に見せてくれい。己は娘の病氣の平癒を祈るために、ゆうべここに參籠した。すると夢にお告があつた。左の格子に寝てゐる童が好い守本尊を持つてゐる。それを借りて拜ませいと云ふ事ぢや。けさ左の格子に來て見れば、お前がゐる。どうぞ己に身の上を明かして、守本尊を貸してくれい。己は關白師實ぢや。」

厨子王は云つた。「わたくしは陸奥藤原氏と云ふものの子でございます。父は十二年前に筑紫の安樂寺へ往つた切り、歸らぬさうでございます。母は其年に生れたわたくしと、三つになる姉とを連れて、岩代の信太都に住むことになりました。そのうちわたくしがだいぶ大きくなつ

たので、姉とわたくしとを連れて、父を尋ねに旅立ちました。越後まで出ますと、恐ろしい人習に取られて、母は佐渡へ、姉とわたくしとは丹後の由良へ賣られました。姉は由良で亡くなりました。わたくしの持つてゐる守本尊は此地蒔様でございます。かう云つて守本尊を出して見せた。

師實は佛像を手に取つて、先づ額に當てるやうにして禮をした。それから面背を打ち返し打ち返し、丁寧に見て云つた。「これは氣れて聞き及んだ、童い放光王地藏菩薩の金像ぢや。百濟國から渡つたのを、高見王が持佛にしてお出なされた。これを持ち傳へてをるからは、お前の家柄に紛れはない。仙洞がまだ御位にをらせられた永保の初に、國守の迹格に連座して、筑紫へ左遷せられた平正氏が嫡子に相違あるまい。若し還俗の望があるなら、追つては受領の御沙汰もあらう。先づ當分は己の家の客にする。己と一しよに館へ來い。」

關白師實の娘と云つたのは、仙洞に傳いてゐる養女で、實は妻の姫である。此方は久しい間、病氣でゐられたのに、厨子王の守本尊を借りて

通の上杉侍従家、櫻田霞が關の松平少將家の三家がその主なるものであつた。加賀の前田は金澤、上杉は米澤、淺野松平は廣島の城主である。

文政の初年には龍池が家に、父母伊兵衛夫婦が存命してゐて、そこへ子婦某氏が來てゐた。龍池は金兵衛以下數人の手代を諸家へ用聞に遣り、三日式日には自身も即々を挨拶に廻つた。加賀家は肥前守齊廣卿の代が齊泰卿の代に改まる直前である。上杉家は彈正大弼齊定、淺野家は安藝守齊賢の代である。

父伊兵衛は恐らくは帳簿と書出にししか文字を書いたことはあるまい。然るに龍池は秦星池を師として手習をした。狂歌は初代彌生庵雛麿の門人で雛龜と稱し、晩年には桃の本鶴廬又源仙と云つた。又俳諧をもして仙塲と號した。

父伊兵衛は恐らくは遊所に足を入れなかつたであらう。然るに龍池は劇場に往き、妓樓に往つた。龍池は中村、市村、森田の三座に見物に往く毎に、名題役者を茶屋に呼んで杯を取らせた。妓樓は深川、古原を好とし、品川へも内藤新宿へも往つた。深川での相手は山本の勘八と云ふ老妓であつた。吉原では久喜萬字屋の明石と云ふお職であつた。

龍池が遊ぶ時の取巻は深川の遊民であつた。櫻川由次郎、鳥羽屋小三次、十寸見和十、乾坤坊良齋、岩窪北溪、尾の丸小兼、竹内、三竺、喜齋等がその主なるものである。由次郎は後に吉原に遷つて二代目善孝と云つた。和十は河東節の太夫、良齋は落語家、北溪は狩野家から出て北齋門に入つた浮世繪師、竹内は醫師、三竺喜齋は按摩である。

龍池は祖儀の金を奉書に裹み、水引を掛けて、大三方に堆く積み上げて出させた。

龍池は涓滴の量になかつた。杯は手に取つても、飲むまねをするに過ぎなかつた。又未だ曾て妓樓に宿泊したことがなかつた。

爲永春水はまだ三鶯と云ひ、楚滿人と云つた時代から龍池と相識になつて此遊の供をした。龍池が人情本中に名を留むに至つたのは此に本づいてゐる。

龍池は我名の此の如くに傳播せらるゝを思まなかつた。嘗にそののみではない。龍池は自ら洋國名所と題する小冊子を著して印刷せしめ、これを知友に頒つた。これは自分の遊の取巻供を名所に見立てたもので、北溪の畫が挿んであつた。

文政五年に龍池の妻が男子を生んだ。これが

攝津國屋の嗣子で、小字を子之助と云つた。文政五年は午であるので、俗習に循つて、それから七つ日の子を以て名となしたのである。二代目津藤として出藍の譽をいかがはしい境に馳せた香以散人は此子之助である。

### 三

わたくしが香以の名を聞いたのは、彼人情本によつて津藤の名を聞いたのと、餘り迅速は無かつたらしい。否或は同時であつたかも知れない。其後には此名のわたくしの耳目に觸れたことが幾度であつたか知れぬが、わたくしは始終深く心に留めずに、忽ち聞き忽ち忘れてゐた。そして其間龍池香以の父子を混同してゐた。

それから或時香以と云ふ名が、わたくしの記憶に常住することとなつた。それは今住んでゐる團子坂の家に入つた時からの事である。

此家は香以に縁故のある家で、それを見出したのは當時存命してゐたわたくしの父である。父は千住で醫業をしてゐたが、それを廢めてわたくしと同居しようとおもつた。そして日々家を捜して歩いた。その時此家は眺望の好い家として父の目に止まつた。

團子坂上から南して根津權現の裏門に出る組



# 細木香以

細木香以は津藤である。攝津國屋藤次郎である。わたくしが始めて津藤の名を聞いたのは、香以の事には關してゐなかつた。香以の父龍池の事に關してゐた。攝津國屋藤次郎の稱は二代續いてゐるのである。

わたくしは少年の時、貸本屋の本を耽讀した。貸本屋が笈の如くに積み疊ねた本を背負つて歩く時代の事である。其本は讀本、書本、人情本の三種を主としてゐた。讀本は京傳、馬琴の諸作、人情本は春水、金水の諸作の類で、書本は今謂ふ講釋種である。さう云ふ本を讀み盡して、さて貸本屋に「何かまだ讀まない本は無いか」と問ふと、貸本屋は隨筆類を推薦する。これを読んで伊勢貞丈の故實の書等に及べば、大抵貸本文學卒業と云ふことになる。わたくしは此卒業者になつた。

わたくしは初め馬琴に心酔して、次で馬琴よりは京傳を好くやうになり、又春水、金水を

讀み比べては、初から春水を好いた。丁度後にドイツの本を讀むことになつてからズワデルマンよりはハウプトマンが好だと云ふと同じ心持で、さう云ふ愛憎をしたのである。

春水の人情本には、デウス・エクス・マキナアとして、所々に津藤さんと云ふ人物が出る。情知で金持で、相愛する二人を困厄の中から救ひ出す。大抵津藤さんは人の對話の内に潛んでゐて形を現さない。それがめづらしく形を現したのは、梅曆の千藤である。千葉の藤兵衛である。

當時小倉松仲間の通人がわたくしを教へて云つた。「あれは攝津國屋藤次郎と云ふ實在の人物ださうだよ」と。モデエルと云ふ語はかう云ふ意味にはまだ使はれてゐなかつた。

此津藤セニヨオルは新橋山城町の酒屋の主人であつた。その居る處から山城河岸の櫓那とも呼ばれ、又單に河岸の櫓那とも呼ばれた。姓は源、氏は細木、定紋は移であるが、店の暖簾には一文字の下に三角の鱗形を染めさせるの

で、一鱗堂と號し、書を作るときは龍池と署し、俳句を吟じては仙鳩と号し、狂歌を詠じては桃江兩又鶴の門鶴龜、後に源徳と云つた。

龍池は父を伊兵衛と云つた。伊兵衛は龍池が祖父の番頭であつたのを、祖父が人物を見込んで養子にした。攝津國屋の店を藏造にしたのは此伊兵衛である。奥藏を建て増し、地所を買ひ添へて、山城河岸を代表する富家にしたのは此伊兵衛である。

伊兵衛は七十歳近くなつて、龍池に店を譲つて隱居し、山城河岸の家の奥二階に住んでゐた。隱居した後も、道を行きつゝ、古草鞋を拾つて歸り、水に洗ひ日に曝して自ら割み、出入の左官に與へなどした。しかし伊兵衛は卑劣では無かつた。某年に芝泉居士赤穂四十七士の年忌が營まれた時、綿服の老人が墓に詣でて、納所に金百兩を寄附し、氏名を告げずして去つた。寺僧が怪んで人に尾行させると、老人は山城河岸攝津國屋の暖簾の中に入つた。

## 二

龍池は家を繼いでから酒店を開きて、二三の諸侯の用達を専業とした。これは祖先以來の出入先で、本郷五丁目の加賀中將家、櫻田縣

夏に、香以が三十八歳で江の島、鎌倉を廻つた紀行の草稿であつたらしい。

岸の上の小さな家は、今は過半空地になつてゐる。大正四年に母が七十の賀をする代に、部屋を建てて貰ひたいと云つたので、わたくしは母の指圖に従つて四疊半の見積を大工に命じた。そのうち母が大病になつた。わたくしは母の存命中に部屋を落成させようとして工事を急いだ。五年三月に部屋は出来て、壁の中塗だけ済んだ。母はこれに臥所を従して喜んで、間もなく世を去つた。今わたくしが書齋にしてゐるのが此部屋で、壁は中塗のまゝである。昔岸の上の小さな家の臺所であつた邊が、此部屋の敷地である。

父母と共に岸の上の小さな家に移つた時から、わたくしは香以の名を牢記してゐる。既にわたくしは此家の舊主人小倉が後に名を是阿彌と云つたことを知つた。香以は相模國高座郡藤澤の清淨光寺の遊行上人から、許多の阿彌號を受けて、自ら壽阿彌と稱し、次でこれを河竹其水に譲つて梅阿彌と稱し、其後又方阿彌と改め、其他の阿彌號は取巻の人々に分贈した。是阿彌は其一つださうである。

香以は明治三年九月十日に歿した。翌四年の

一周忌を九月十日に親戚がした。後に取巻の人は十月十日を期して、小倉是阿彌の家に集まつて佛事を營み、それから駒込願行寺の香以が墓に詣でた。此法要の場所は即ち岸の上の小家であつたのである。

## 五

香以の子之助は少年の時經を北靜庵に學び、筆札を松本重齋に學んだ。靜庵は子之助が十四歳の時、既に七十に達して、竹川町西裏町に隠居してゐた。子之助は總に字を識るに及んで、主に老莊の道を問うたさうである。重齋は董其昌風の書を以つて名を得た人で、本石町鹽河岸に住んでゐた。

子之助が生れてから人と成るまでの間には、年月を詳にすべき事實が甚だ少い。文政六年には父龍池の師秦足池が六十一歳で歿した。子之助が市で二歳の時である。八年七月二十九日には祖父伊兵衛の妻が歿した。法益を臨照院相譽迎月大姉と云ふ。子之助が四歳の時である。十一年には父の友楚滿人が狂訓亭春水と號した。子之助が七歳の時である。

父龍池が此頃の友には、春水、良齋、北溪よりして外、猶勝田諸持があつた。諏訪町の

狂歌師千軒庵用口翁翁の後を襲いで、二世千軒庵と云ふ。一中節の名は都一閑齋である。後に別派を立てて宇治紫文と更め、池の端に住んだのが此人である。龍池は當時北溪に席畫を作らせ、諸持に狂歌の興をさせ、春水、良齋等を引き連れて花柳の巷に遊んでゐた。

子之助は天保九年に十七歳になつた頃から、料理屋、船宿に出入し、藝者に馴染が出来、次で内藤新宿、品川の妓樓に遊んだ。

天保十二年の頃には、龍池、香以の父子が相踵いでクリジスに遭つたらしい。子之助と其姉とを生んだ龍池の妻は此頃離縁になつた。子之助の姉は外櫻田堀通の上杉彈正大崩齋憲の奥に仕へてゐた。龍池は尋で三十間堀住の十人衆

三村清左衛門の分家、竹川町の鳥羽屋三村清吉の姉すみを納れて後妻とし、同時に山王町に別宅を構へて妾を置いた。

未だ幾ならぬに、龍池は將に刑辟に觸れんとして縁に免れた。これは女郎賣案内を作つて上梓し、知友の間に煩つた事が町奉行の耳に入つたのである。頼に加賀町の名主田中平四郎がこれを知つて、密に龍池に告げた。龍池は急に諸役人に金を贈つて彌縫し、妾に暇を遣し、別宅を賣り、遊所通を止めた。内山町の

道に似た小徑がある。これを藪下の道と云ふ。

そして所謂藪下の人家は、當時根津の社に近く、此道の東側のみを占めてゐた。これに反して團子坂に近い處には、道の東側に人家が無く、道は岸の上を横切つてゐた。此家の前身は小徑を隔てて其崖に臨んだ板葺の小家であつて、岸の上は向隅から王子に連なる丘陵である。

そして崖の下は島や水田を隔てて、上野の山と相對してゐる。彼小家の前に立つて望めば、右手に上野の山の端が見え、此の端と忍岡との間が豁然として開けて、そこは遠く地平線に接する人家の海である。今のわたくしの家の樓上から、濱離宮の木立の上を走る品川沖の白帆の見えるのは、此方角である。

父は此小家に目を著けて、度々崖の上へ見に往つた。小家には崖に面する窓があつて、窓の裡にはいつも圓頂の壺がゐた。「綺麗な比丘尼」と父は云つた。

父は切繪圖を調べて、綺麗な比丘尼の家が、本世尊院の境内であつたことを知つた。世尊院は今舊境内の過半を失つて、西の隅に片寄つてゐる。

父はわたくしを誘つて崖の上へ見せに往つた。わたくしは此崖をも此小家をも兼ね知つてゐた。

ゐたが、まだ父程に心を留めては見なかつたのである。眺望は好い。家は市隱の居處とも謂ふべき家である。そして窓の竹格子の裡には綺麗な比丘尼がゐた。比丘尼はもう五十を越してゐたであらう。若し壺をも美人と稱することゝ出来るなら、此比丘尼は美人であつたと云ひたい。

父はわたくしの同意を得てから、此家を買はうとして、家の持主の誰なるかを問ふことにした。團子坂の下に當時千樹園と云ふ植木屋があつた。父は千樹園の主人を識つてゐたので、比丘尼の家の事を問うた。

千樹園はかう云つた。崖の上の小家は今住んでゐる壺の所有である。壺は高木ぎんと云つて、小倉と云ふものの身寄である。小倉は本質屋で、隠居してから香以散人の取巻をしてゐたが、あの家で世を去つた。壺は多分あの家を賣ることを惜まぬであらうと云つた。

#### 四

千樹園が世話をして、崖の上の小家を買ふ相談は、意外に容易く纏まつた。高木ぎんの地所は本稍廣い平地であつたのを、角だけ先づ賣つたので、跡は崖に面した小家のある方から、

團子坂上の街に面した方へ鉤形に残つてゐる。その街に面した處に小さい町家が二軒ある。一つは地所も家も高木のもので、貸店になつて居り、一つは高木の地所に舊頭の石田が家を建てて住んでゐる。ぎんは取引が済んで此貸店に移つた。

父は千住の大きい家を疊んで、崖の上の小家に越して來た。千住の家は徳川將軍が鷹野に出る時、小休所にしたと云ふ岡田氏の家で、これに殆ど小さい病院のやうな設備がしてあつたのである。父は小家に入つて「身輕になつたやうだ」と云つた。そこへわたくしは太田の原の借家から來て一しよになつた。

小家は三間に臺所が附いてゐる。三間は六疊に、三疊に、四疊半で、四疊半は茶室造である。後に此茶室が父の終焉の所となつた。

茶室の隣の三疊に反古張の襖が二枚立ててある。反古は俳文の紀行で、文字と挿畫とが相半してゐる。巻首には香以散人の半身像がある。草畫ではあるが、圓顔の昨大漢だと云ふことだけは看取せられる。崖の上の小家は父の歿後に敗屋となつて、補繕し難いために毀れた。反古張の襖も剝落し盡してゐた。今にして思へばこれは安政六年の



で歿した。法諡は樂善堂壽德昌善士である。墓は願行寺先塋の中にある。龍池の師、靜庵も此年八十三歳で歿した。壽阿彌學齋の歿したのも同年である。壽阿彌と龍池父子とは相識ではあつただらうが、其交の奈何を詳にしない。しかし後に子之助は清淨光寺から壽阿彌號を受けて、間接に眞志屋の阿彌號を襲いだのである。三年に龍池の友諸持が都派を脱して宇治紫文と稱した。安政元年に龍池父子の最眞にした八代目團十郎が自刃した。二年は地震の年である。江戸遊所の不景氣は未曾有で、幫間は露肆に天麩羅を賣り、町藝妓は霞餐張におでん、烟酒を賣いださうである。山城河岸の雨露はこれを露し盡すことが出来なかつたであらう。

安政三年の夏龍池は病に臥した。次で九月廿日に世を去つた。法諡は白雲外龍池善士と云ふ。亦願行寺に葬られた。手代等は若檀那子之助の前途を氣遣つて、大坂町に書肆を開いてゐる子之助の姉婿攝津國屋伊三郎を迎へて、家督相繼をさせようとした。子之助の姉は上杉家の奥を下つて婿を取り、分家を立ててゐたのである。然るに子之助の繼母三村氏すみは義理ある子之助の廢居の否運に逢はせては、自分の庇護が至らぬやうに世間の目から見られ

よう云つて、手代等の議を拒んだ。子之助は遂に山城河岸の本家を嗣いだ。時に年三十五である。序に云ふ、龍池の狂歌の師初代彌生庵、繼庵は龍池と同年同月に歿した。

# 七

父龍池の後を繼いで二世藤次郎となつた子之助は、繼母三村氏すみ其他の親族、最故參の金兵衛以下大勢の手代があるもので、暫らくは謹慎を守つてゐたが、四十九日の配物が済んだ頃から遊所に通ひはじめ、漸く馴れては傍人の思はくをも顧みぬやうになつた。女房はまだ部屋住でゐた時に迎へて、もう子供が二人ある。里方は深川木場の遠州屋太右衛門である。しかし女房も岳父も只手を束ねて傍看する外無かつた。

王侯貴人が往々文藝の士を羅致して、聲威を張り儀容を飾る具となすやうに、藤次郎は俳諧師、狂歌師、狂言作者、書家、彫工、畫工と交つて、その多數を待つこと殆ど幫間と擇ぶことが無かつた。父龍池は毎に狂歌を弄んだが、藤次郎はこれに反して主に俳諧に遊んだ。その友を集へた席は、長谷川町の梅の家、萬町の柏木亭等であつた。

藤次郎は子之助時代に鯉角と號し、一に半蟻とも署してゐたが、家を繼いだ後、關爲山から梅の本の稱を受け、更に吾永機に吾の字を貰ひ、自ら香以と號し、又好以、交以、孝以とも署した。偶々狂歌を作るときは何酒屋と署した。

劇場では香以は河原崎權十郎を最眞にした。後の九代目團十郎である。香以は最眞の連中を組織して、荒磯連と名け、其掟文と云ふものを勝田諸持に書かせた。九代目の他日の成功は半香以の庇陰に因つたのである。又八代目が自刃した後、權十郎の實父七代目團十郎の壽海老人が江戸に還つてゐたので、香以はこれをも最眞にした。此父子の他、俳優にして香以の雨露に浴したものは、猶市川小團次、中村鴻藏、市川米五郎、松本國五郎等がある。

香以の通つた山樓は初め古原江戸町一丁目玉屋山三郎方で、後角町稻本樓である。玉屋には濃紫、稻本には二世小稱がゐた。引手茶屋は玉屋に通つた時、初め近江屋半四郎、後大坂屋忠兵衛、稻本に通つた時仲の町の鶴彦であつた。

香以が取巻は殆ど數へ盡されぬ程あつた。中にはこれを取巻に酬ふるは或は階に失するかも知れぬと思はれる人もある。しかし區別して論ずることも亦容易でない。

盲人百島當シ家を遊所として諸持等を此に集へることになつたのは當時の事である。

子之助は此年十二月下旬に繼母の里方鳥羽屋に預けられた。これは新宿、品川二箇所の引手茶屋に借財を生じたためである。子之助時に二十歳であつた。

然るに龍池の遊所通は罷んでも、子之助のは罷まなかつた。天保十三年三月の頃から五ヶ月題の子之助は丁稚兼吉を連れて、鳥羽屋を出で、手習の師匠松本、狂歌の宗匠梅屋鶴壽等を訪ふことになつたが、其歸途には兼吉を先に還らせて、自分は劇場妓樓に立ち寄つた。兼吉は綽號を鳥羽繪小僧と云つた。想ふに鳥羽屋の小僧で、容貌が奇怪であつたからの名であらう。即ち後の偶名垣魯文である。

劇場は木挽町の河原崎座であつた。最良の俳優は八代目團十郎である。作者勝謗をば部屋に訪うて交を結んだ。謗は後の河竹新七である。

妓樓は主に品川の鳥崎湊屋、土藏相模で、引手茶屋は大野屋萬治方であつた。湊屋のお染は尤も久しい馴染であつた。

取巻は河原崎座の作者岩井紫玉、同座附茶屋の主人武田屋馬平、品川の都岡富本登名太夫、

同殿太夫、櫻川善二坊、其他切形師牧乙身、力士勢藤吾等であつた。紫玉は後の正傳師家元春富士、乙身は後の冬映である。

## 六

龍池の水引を掛けた祝儀は壯觀ではあつても、費す所は甚だ多きに至らなかつた。これに反して子之助は、人に界ふる物に種々の趣向を凝らし、其値の高下を問はなかつた。丸利、丸上、山田屋等の袋物店に拂ふ紙入、煙草入の代は莫大であつた。既にして更衣の節となつた。子之助は單羽織と袴とを遊所に持て來させて著更へ、脱ぎ棄てた古渡唐棧の袴羽織、絲織の縮入、琉球紬の下著、縮緬の胴著等を籤引で替開藝妓に與へた。

龍池は子之助の遊蕩が愈募つて、三村氏が放任して顧みぬことを聞き知り、自ら手を下してこれを制せようとした。六月中旬の事である。子之助が品川の湊屋にゐると、龍池は四手を飛ばして大野屋に來た。そして子之助に急用があるから來いと言つて遣つた。

子之助は父を畏れて、湊屋の下座敷から庭に飛び下り、海岸の淺瀬を涉つて逃げようとしたが、使のものに見附けられて捉へられた。

龍池は子之助を拉して歸り、幸町で持地面に置いてある差配人佐兵衛に預けた。そして勘當の手續をしようとした。しかし手代等の扱によつて、子之助は山城河岸に歸り、父の監督を受けることとなつた。

幸に龍池は僞善を以て子を恨みしやうとはしなかつた。自分の地味な遊には子之助を待せしめて、これに教ふるに酒色の筵にあつても品位を墜さぬ心掛を以てした。子之助の態度は此に一變した。これが子之助の二十一歳になつた時の事である。

龍池の最良にした七代目團十郎は、此年六月二十二日に江戸を追放せられ、龍池の親しい友爲永春水は此年七月十三日に牢死した。これも間接に山城河岸の父子をして忌諱を知らしむる媒となつたであらう。

これから安政三年に至るまでの間には記すべき事が少い。如く二三の消息を注すれば、先づ天保十四年に河原崎座が、先に移つた中村、市村兩座と共に猿蓑町に移つて、勝謗が立作者柴吾作となつた。芝宇田階町にゐたからである。河竹新七の名は暫らく立つてから、三代目櫻田治助の勸に依つて襲いだ。嘉永元年六月二十七日に、子之助の祖父伊兵衛が七十餘歳

遣つた。當時二十五兩包を切餅と稱したからである。交山は下戸であつた。

香以は屏風巻上始末を書いて惡措に措らせ、知友の間に伝つた。そして屏風を玉屋山三郎に遣つた。しかし山三郎には此屏風は女郎の床には立てぬと云ふ一札を入れたのであつた。

安政四年になつて銀鎖の煙草入が流行つた。

香以は丸利に誂へて數十箇を作らせ、取巻一同に與へた。古波唐棧の羽織を揃へ爲立てさせて、一同に昇へたのも此頃である。

此年の春竹川町の三村氏が香以に應舉の鯉一幅を贈つた。香以はこれを獲て應舉の鯉三十六幅を集めようと思ひ立つた。書畫骨董商は京阪地方をまで搜して幅數を揃へた。しかし交山、柴田是真等に示すに、其大半は贋物であつた。香以は憤つて更に現存の書家三十六人を選んで鯉を畫かせた。そして十一月に永機を招いて鯉の聯句を興行した。此時配つた半歌仙には鳥居清滿が鯉の表紙畫をかき、香以が暫のつらねに擬した序を作つた。其末段はかうである。

「點ならぬ即點に、素襖の柿のへたながら、太刀の切字や手術遠波を、正して點をかけ烏帽子、惡く誇らば片つばし、椿を背負つた擧句の

果、此世の名殘執筆の荒事、筆のそつ首引つて抜き、硯の海へはふり込むと、ほゝ敬つて白す。」

此年の秋猿蓑町市村座で、竹河新作網模様の燈籠菊桐が興行せられた。享保中の遊女玉菊の事に網打七五郎の事を併せて作つたものである。香以は河原崎權十郎、市川小團次の二人に引幕一張宛を贈り、藝者おさんに扮した市川米五郎と櫻川善孝に扮した中村鴻藏との衣裳持物を寄附した。これは皆權十郎を引き立てるためであつた。

香以が淺草日輪寺で遊行上人に謁し、阿彌號許多を貰ひ受けたのも此頃の事である。香以自己は諱阿彌と號し、幾くもなくこれを河竹新七に譲つて、梅阿彌と更めた。此年香以は三十六歳であつた。

## 九

安政五年の三月市村座に、江戸櫻清水清玄と云ふ狂言が演ぜられた。場面は仲の町引手茶屋の前である。源之助の番頭新造が吉六の側、諧師東榮の胸倉を取つてゐる。これは東榮が所謂性惡をして、新造花川に負いたために、曲輪の法で眉を剃り落されさうになつてゐるところ

である。鳴藏竹助の妓夫が東榮を引き立てて暖簾の奥に入る。次で國五郎、米五郎、小半次、三太郎、鳥藏の侍等が花道を出て、妓夫に案内せられて奥に入る。三十郎の遊女揚巻父押上村新兵衛が白酒賣となつて出る。侍等が出て白酒を飲んで價を償はずに花道へ入る。小團次の黒手組助六が一人の侍の手を振ち上げて花道から出て侍等を懲す。侍等は花道を逃げ入る。此時權十郎の紀伊國屋文左衛門が暖簾を擧げて出る。其指は唐棧の羽織を著、脇差を差し駒下駄を穿いてゐる。背後には東榮が蛇の日傘を持つて附いてゐる。合方は一中節を奏する。文左衛門は助六を呼んで戒飭する。舞臺が廻ると、揚巻の座敷である。文左衛門が揚巻の身受をして助六に妻せる。揚巻は初め榮三郎、後梅幸であつた。

狂言の文左衛門は、此頃遊所で香以を今紀文と稱へ出したに因んで、此名を藉りて香以を寫したものである。東榮は牧冬映である。二人の衣裳持物は都て香以の贈で文左衛門の銀装の脇差は香以の常に佩びた物である。此狂言の作者は香以の取巻の一人河竹新七であつた。吉六は東榮に扮した後、畢生東鯉と號したが、東は東榮の役を記念したので、鯉は香以の鯉角か



俳諧師には既に擧げた爲山、永機の外、鳥越等哉、原田梅年、牧冬映、野村守一がある。梅年は後六世雪中庵と稱した。風雪、吏登、蓼太、完來、對山、梅年と云ふ順序ださうである。守一、通稱は新藏、鶴歩庵と云つた。

狂歌師には勝田諸持と其子福太郎と、室田鶴壽、石橋眞國がある。福太郎は綽號を油德利と云つた。後に一中節に於いて父の名を襲ぎ、二世紫文となつた人である。鶴壽は梅屋と云つた。通稱は又兵衛、長谷川町の待合茶屋である。眞國は通稱七兵衛である。

狂言作者には河竹新七、次で瀬川如阜がある。新七は元の柴登助である。

彫工には石黒某がある。書家には取巻に算すべからざる人もあるが、松本交山、狩野晏川、月岡芳年、柴田是眞、鳥居清満、辻花雪、福島隣春、四方栢彦がある。館書家には宮城玄魚がある。

商人若くは商家の隠居には先づ小倉阿猿がある。團子坂の質屋の隠居で、後に是阿彌と云つた。阿心庵は佛がある。谷中三河屋の主人である。大津屋古村がある。船宿の隠居である。金屋仙之助の坐仙がある。竹川町の饒吳服商である。

醫師に石川市淳がある。外科専門であつた。俳諧の號を雁伍と云つた。落語家には乾坤坊良齋、五明樓玉輔、春風亭柳枝、入船米藏がある。玉輔は馬生の後の名である。講談師には二代日文平、桃川燕國、松林伯園がある。燕國は後の如燕である。

## 八

專業の幫間で、當時山城河岸の家に出入してゐたものは、櫻川善孝、荻江千代作、都千國、香野のん子等である。千國は初の名が荻江露助、後に千中と云ふ。玄治店に住んでゐた。又吉原に往つた時に呼ばれたものは都有中、同權平、同米八、清元千藏、同仲助、櫻川六、花柳鳴助等である。中にも有中は香以が其頼才を稱して、常に傍に侍せしめた。

吉原の女藝者は見番大黒屋庄六方から、きわ、ぎん、春、鶴等が招かれた。きわは後花柳壽輔の妻になつた。春は當時既に都權平の妻になつてゐた。駿河屋の鶴は間もなく香以の圖物にせられた。

香以は暫く吉原に通つてゐるうちに、玉屋の濃紫を根引した。其時濃紫が書いたのだと云つて「紫の初元結に結込めし」は千代のか

ためなりけりと云ふ知照が玉屋に残つてゐた。本妻は濃紫との折合が悪いと云つて木場へ還された。濃紫は女房くみとなり、女でふきと改めた。これは仲の町の引手、屋駿河屋とのく抱擁が引かせられたより前の事である。

家にゐての香以の生活は餘り後澤ではなかつた。料理は不斷南銅町の伊勢堀から取つた。蒲燒が好で、尾張屋、喜多川が常に出入した。特に人に馳走をする時などは、大抵數寄屋町の島村半七方へ往つた。香以を得意の棚那としてゐた駕籠屋は銀座の横町にある方角と云ふ家で、郵便のない當時の文使に毎日二人宛の輿丁が攝津國屋に詣めてゐた。

濃紫が家に來た後も、香以の吉原通は息まなかつた。遊に慣れたものは煙燭を死ねた煙の趣味を忘るゝことを得ない、次の相手は同じ玉屋の若紫であつた。

或日香以は松本交山を深川富が岡八幡宮の境内に訪うて、交山が松竹を一隻の金屏風に畫いたのを見た。これは某が江戸町一丁目和泉屋平左衛門の抱泉州に贈らむがために畫かせたものであつた。

香以は此屏風を横奪して、交山には竹川町點心堂の簡に、銀二十五兩を切餅として添へて

香以は闇に紛れて茶屋へ引き取り、きわには辭を識して謝し、「金は店からすぐ届け」と云ひ畢つて四手に乗り、山城河岸へ急がせた。

これは香以が三十八歳の時の事であつた。此年三月二十三日に、最良役者七代目團十郎の壽海老人が、猿若町一丁目の家に歿した。香以は鶴壽と謀つて追善の捐物を配つた。晝は蓮生坊に扮した肖像で、豊國がかいた。香以の追悼の句の中に「かへりみる春の姿や海老の殻」と云ふのがあつた。

文久元年の夏深川に假宅のある時であつた。香以は舊交を温ねて玄魚、魯文の二人を數寄屋町の鳥村半七方に招いた。取持には有中、米八が来た。宴を撤してから舟を鞘町河岸に繋ぎ、松井町の稲本に往つた。小稻花鳥はもうゐなかつた。三代目小稻と稱してゐたのは前の小稻の突出右近である。香以は玄魚と魯文との相方を極めさせ、自分は有中、米八を連れて辭し去つた。

此年香以は四十歳であつた。香以は舊に依つて謙遜を事としながら、漸く自己の運命を知ると至つた。一年四十露に氣の附く花野哉。「山城河岸の酒席に森積園が人を叱したと云ふ話も、此頃の事であつたらしい。

文久二年は山城河岸没落の年である。香以は店を繼母に渡し、自分は隠居して店から爲送を受けることとし、玄鶴には暇を遣り、妻ふさと伴慶次郎とを連れて、浅草馬道の猿寺境内に移つた。蕭條たる草の庵の門には梅阿彌の標札が掛かつてゐた。

## 十一

猿寺の住住ひに遷つた香以は、山城河岸の店から受ける爲送の補足を賣文の一途に求めた。河竹新七の紹介によつて、市村座の作者になり、番附に梅阿彌の名を列する。梅の本の名を以てして俳諧の判をする。何廻家の名を以てして狂歌の判をする。註文に依つて店開の散しを書か。此等は固より此時に始まつたのではない。文堂堂所藏の「狂歌本朝二十四孝」「狂歌調子笛」等は早く嘉永六年に印刷せられたものである。只それが職業となつたのである。しかし此職業は幾何の利益をも齎さなかつた。

これに反して所謂庵室は昔馴染の藝人等の遊所となつた。俳優中では市川新車、同市藏、同九藏、坂東家橘等が常の客であつた。新車は後の門之助、家橘は後の五代目菊五郎である。香以は今藝人等と對等の交際をする身の上にな

つて、祝儀と云ふものは出さぬが、これに對する酒飯の價は聊の賣文錢の能く償ふ所ではなかつた。何時頃からの事か知らぬが、香以の家の客には必ず膳が据えられ、茶は鹽辛杯一二品に過ぎぬが、膳の一隅には必ず小さい紙包が置いてあつた。それには二分金がはひつてゐたさうである。香以は又負債に困められて、猿寺の陣地から更に退却しなくてはならなくなつた。

これが香以の四十一歳になつた年である。文久三年の春であつた。親戚某が世話をして、香以は下總國千葉郡寒川の白旗八幡前に浪隠した。寒川は漁村である。文字を識つて俳諧の心得などのあるものは、僅に二三人に過ぎない。香以は濱の砂地に土俵を作らせ、村の子供を集めて相撲を取らせて、勝つたものには天保錢一枚の纏頭を遣りなどした。

しかし寒川と日本橋との間をば魚介を運ぶ舟が往來する。それに託して河竹新七、永機、竺仙等は書を寄せて香以を慰めた。又偶には便船して自ら訪ふこともあつた。當時此人々は濃紫のおふさが木綿著物に纏を掛けて、かひがひしく立ち働くのを見て感心したさうである。「針持つて遊女老いけり雨の月」は香以が實境の句であつた。

ら取つたのである。

此年八月二十六日に市川權十郎は藝道を襲ひ、最良に負かぬと云ふ誓文を書き、父七代目團十郎の遺骸老人に奥書をさせて香以に贈つた。

香以の此頃往つた妓樓は稻本、相方は二代目小稻であつた。所謂お側去らずの取巻は冬映、最も愛せられてゐた幫間は都有中であつた。

有中は素更紗染屋の出身で、遊藝には通じてゐても文字を識らなかつた。そこで貸本に由つて智識を求め、最も三國志を喜んだ。香以は有中が口を開けば孔明を稱するのを面白がつて、金を出して遣つて孔明祭を修せしめた。今の富豪が乃木祭を行ふ類である。それから是有中に陣太鼓の綽號が附けられた。

香以は此年三十七歳であつた。恐らくは其盛名の絶頂に達した時であつただらう。取巻の一人勝田諸持は、此年二月二十二日に六十八歳で歿した。彼學者の瀧江拙齋、書家の市川米庵、乃至狂歌師仲間の六衆園荒井雅重、家元仲間の三世清元延壽太夫等と同じく、虎列拉に胃されたのかも知れない。諸持は即ち初代宇治紫文である。

安政六年には香以の身代が稍傾きはじめた。

らしい。前田家、上杉家等の貸附は略取り立ててしまひ、家に貯へた古金銀は概ね沽却せられたさうである。しかし香以の豪遊は未だ衰へなかつた。

香以は此年江の島、鎌倉、金澤を巡覽した。同行したものは爲山、等哉、永機、笠仙等であつた。小倉是阿彌の茶室の張交になつてゐた紀行が果して此遊を敘したものであつたなら、一行には女も三人加はつてゐた筈である。有中は供に立つ約束をして置きながら、出發の間に合はなかつたので、三枚肩の早打で神奈川臺へ駆け附け、小判五枚の褒美を貰ひ、駕籠舁も二枚貰つた。

香以は途次藤澤の清淨寺に詣で、更に九つ阿彌號を遊行上人から受けて人に與へた。

# 十

香以は旅から歸つた後、舊に依つて稻本に通つてゐた。相方は小稻であつた。然るに此頃同じ家に花鳥と云ふ妻三がゐた。花鳥は恐るべき經歷を有してゐた。或時は人の圍ひものとなつてゐて情夫と密會し、暇を取る日に及んで、手切金を強請した。或時は支度金を取つて諸侯の妾に住み込み、故意に所所に溺して暇にな

つた。そして其姿態は妖嬈であつた。

花鳥は廊下で香以に逢ふごとに秋波を送つた。或夕小稻が名代床へ往つて、香以が獨無聊に苦んでゐると、花鳥の使に死が來た。香以はうつかり花鳥の術中に陥つた。

數日の後であつた。大引過の夜は寂としてゐた。香以は約を履んで花鳥の屏風の中に入つた。忽ち屏風をあららかに引き退けて飛び込んだものがある。それは小稻の番新豊花であつた。

香以は豊花に拉いて往かれて座敷に坐つた。鶴彦は急使を以て迎へられた。翼育の豊花が甲走つた聲に誘はれて、無遠慮な男女は廊下に集まり、次の間の障子は所々濡らした指尖で穿たれた。

此時留女として現はれたのは藝者きわである。豊花と鶴彦とを次の間に連れて往つて、小稻花鳥へ百兩宛の内済金を出すことに話を附け、それを香以に取り次いだ。しかし香以の懷

には即金二百兩の持合せがなかつた。きわは豊花を待たせて置いて、稻本を馳せ出で、兼て香以の恩を受けた有中、米八、權平等を座敷座敷に歴訪して、財布の底をはたかせたが、其金は合計五十兩には足らなかつた。きわは高利の金を借りて不足を補つた。



た。卷中の香以の影畫には上に引いた「針持つて」の句の短冊が貼してある。わたくしの見た此書は文淵堂の所藏である。

明治元年に山城河岸の店は鎖された。當時香以の姉夫は細木伊三郎と稱して、山玉町に書肆を開いてゐた。山玉町は今の宗十郎町である。香以はふさと慶次郎とを連れて、此伊三郎方に同居した。時に年四十七であつた。

明治三年九月に香以は病に臥して、十日に瞑目した。年四十九。法諡は梅餘香以居士。願行寺なる父祖の塋域に葬られた。遺稿の中に。

冬枯れてゐたは貴様か梅の花  
紅梅に雪も好けれど加減もの  
只遊ぶ 萍も経る月日かな  
つごもりや由なき芥子の花あかり  
盗まれむ葱も作りて後の月  
待事のありげに残る蛋敷かな  
値の高い水に砂吐く 蛭かな  
地に著かぬ中ぞ長閑けき舞ふ木葉

自像

花に賣る一本物や江戸鯉

自傲

霧晴て皆こちら向く山のなり

寒川

鯉切の鈍くも光る寒さかな

所思

わびぬれば河豚を見棄てて菜大根

絶筆

己れにも厭きての上か破芭蕉

明治四年十月十日の事である。親戚の誓むべき一周忌にわざと一月遅れて、昔香以の恩蔭を被つた人々が、團子坂の小倉是阿彌の家に集まつて舊を話し、打連れて墓に詣でた。諸持、鶴齋、花雪、文山は死して既に久しく、書家董齋の如きは、香以と同じ年の四月に死んでゐる。

狩野晏川、河竹新七、其角堂永機、竺仙、紫玉、善孝等は此群の中にゐた。

此墓の落葉むかしの小判哉 永機

香以去後に凋落して行く遊仲間のみまを示さん

爲山は明治十一年、玄魚は十三年、隣春は十五年、等裁は二十三年、是眞は二十四年、晏川と清満とは二十五年、永機は三十七年である。

香以の履歴は主に資料を假名垣魯文の「再來紀文廊 花街」に仰いだ。今紀文曲輪の花道と訓むのださうである。鈴木春浦さんが小説の種にもと云つて貸してくれた本を、遺忘のために

手抄して置いたのである。

其他根本吐芳さんの「大通人香以」の如きも、わたくしは参照した。しかし根本氏と雖わたくしと同じく魯文の文に據つたことであらう。鈴木氏の筆記に係る益田香遠、久保田米億二家の談話、弟、潤三郎の藏儲に係る竺仙事橋本素行の刊本「恩」はわたくしのために有益であつた。

十三

本郷の追分を第一高等學校の木柵に沿うて東へ折れ、更に北へ曲る角が西教寺と云ふ寺である。西教寺の門前を過ぎて右に桐の花の咲く宿舎の横手を見つゝ行けば、三四軒の店が並んでゐて、又一つ寺がある。これが願行寺である。

願行寺は門が露丈の奥に南向に附いてゐて、道を隔てゝ寄宿舎と對してゐるのは墓地の外圍である。此外圍が本は疎な生垣で、大小高低さまざまの墓石が、道行人の目に觸れてゐた。今は西教寺も願行寺も修築せられ、願行寺の生垣は一變して堅固な石柵となつた。唯空に聳えて鬱蒼たる古木の兩三株が其上を蔽うてゐるだけだが、昔の姿を存してゐるのである。

或日天氣が好くて海が穏なので、香以は濱邊に出てゐた。そこへ一隻の舟が着いて中から江戸の相撲が大勢出た。香以が物めづらしさに顔を見ると、小結以上の知人もゐた。相撲は香以を認むるや否や領き合つて進み寄つて、砂の上に平伏した。「これはこれは、河岸の檀那、御機嫌宜しう、こちらに御逗留でございますか。どうぞ初日には御見物を。」相撲を迎へに出た土地の人達は、皆驚いて目を睜つた。「攝津國屋の隠居はえらい人だと思へて、關取衆が土下座をさつしやる」と囁き合つたさうである。香以は交着一籠を相撲等に贈つて、これがために一月餘の節儉をした。

香以は文久三年から慶應二年まで、足掛四年寒川に住んでゐた。四十二歳から四十五歳に至る間である。此間元治元年には梅屋鶴壽が歿した。慶應元年には辻花雪が歿した。花雪は狂歌合と云ふことを始めた人である。

慶應二年に香以は山城河岸に歸つた。今は家業の振はぬ店の隠居で、昔の友にも往來するものが少かつた。此頃新堀に後藤進一と云ふものがあつて、新堀小僧の結名を花柳の巷に歌はれ、頗る豪遊に誇つてゐた。後藤は香以の歸郷を聞いて、先輩としてこれを饗せむと思ひ立ち、木場

## 十二

の岡田連吟と云ふものに語り、香以が昔の取巻、芳年、梅年、紫玉、空仙等を驅り集め、香以を新橋の料理屋に招いた。香以は「倒されたる大いなるもの」として、此席に面を曝すことを喜ばなかつたが、忍んで後藤等の請を容れた。

主人側の後藤等は此宴會の興を添へむために、當時流行の幫間松廼家花山を呼んだ。花山は裸踊を以て名を博した男である。袖鼻禪にだけ著けずに眞裸になつて踊つた。しかのみならず裸の儘で筆にし難い事をもした。主人側のこれと呼んだのは、固より流に隨つて波を揚げたのであるが、其中で紫玉一人は兼て花山の所爲を惡んでゐたので、若し我目前で尾籠の振舞をしたら、懲して遣らうと待ち構へてゐた。

芳年が紫玉の意を付つて、これを花山に告げた。花山は援を茶弘に求めた。茶弘は新橋界隈に輒を利かせてゐた俵客で、花山が親分として戴いてゐたのである。

茶弘は花山の請を容れた。筵會の場所も自分の繩張の内である。單身これに赴いて將に屈辱を受けんとしてゐるものは自分の子分である。此請を容れぬわけには行かない。しかし何の手

段を以てこれを救はうか。茶弘はかう考へて、最も簡易な買収の法を取つた。後藤の取巻一同には茶弘の祝儀包が配られた。

紫玉は包を座の上に抛つて茶弘を罵つた。後藤が折角の催しも此校風景のために興を破られて客は程なく散じた。

香以は累の後藤に及ばんことを恐れて、翌日紫玉を家に呼んで諭した。紫玉をして罪を茶弘に謝せしめようとしたのである。しかし紫玉は聽かなかつた。材能技藝を以て奉承するは男藝者の職分である。廉恥を棄て、金銭を食ふものと斷するは、その敢てせざる所である。

紫玉が花山を排したのは曲が花山にあつたのである。紫玉が祝儀を卻けたのは曲が茶弘にあつたのである。紫玉は堅く此説を持して動かなかつた。

香以は已むことを得ぬので、人に託して後藤と茶弘との和解を謀つた。二人は久保町の賣茶亭に會見して、所謂手打ちをしたさうである。これは香以が四十五歳の時の事である。後藤は後に名を庄吉と改めて米の仲買を業としてゐた。

慶應三年に辻花雪三回忌の影畫合「くまなきかげ」が刊行せられて、香以は自らこれに序し

「願行寺にある攝津國屋の墓を知つてゐるでせうね」と、わたくしは問うた。しかし翁も、姪も耳が遠いので、わたくしは次第に聲を大きくして二三度繰り返さなくてはならなかつた。

奥にゐる姪が先にわたくしの詞を聞き分けて、「あのほそきさんですか」と云つた。わたくしは此に依つて一度香以の苗字を「ほそき」と訓むこととして、此稿を排印に付した。しかし彼香以と親しかつた笠仙が「さいき」と書するを見て、「猶さいき」の正しかるべきを思つた。

わたくしは香以の裔の芝にゐる女の名を問ひ、其夫の名をもたしかめようと思つたが二人共に一つ知らなかつた。

只姪がこんな事を言つた。「大それた金持だつたさうでございますね。あの時々の少しばかりで好いから、お金が残して置いて貰はれたらと、いつもさう仰います。」

わたくしは翁の手に小銀貨をわたして、橋を香以が墓に供することを頼んだ。

「承知いたしました。もう暮れましたから明朝の事にいたします」と、翁は答へた。

わたくしは其後願行寺の住職を訪はうともせず、遂に香以の裔の事を詳にせぬままに、此稿を終つてしまつた。頃日高橋邦太

郎さんに聞けば、文士芥川龍之介さんは香以の親戚ださうである。若し芥川氏の手に籍つて此稿の謬を匡つことを得ば幸であらう。

## 十五

嗜昔の日わたくしは鹿嶋屋清兵衛さんの逸事に本づいて「百物語」を著した。文中わたくしの鹿嶋屋を斥す詞に、稍論議に類するものがあつた時、一の批評家がわたくしの「僧越」を責めた。その評なることは今わたくしの記憶に存せぬが、彼批評家には必ずや文集があるべく、これを繕ひたら、百物語評を検出することも亦容易であらう。

鹿嶋屋は「大盡」である。寒生のわたくしが其境界を窺ひ知ることを得ぬのは、乞丐が帝王の標度（ひょうど）を付度（ついで）することを得ぬと同じである。是に於てや僧越の諺が生ずる。

人生の評價は千殊萬別である。父が北千住に居つた時、家に一婢があつた。肥白にして愛想好く、舉止も亦都雅であつた。然るに此婢の言ふ所は、一々わたくし其兄弟姉妹の耳を驚かした。

婢は幼くして吉原の大籠に事へ、忠實を以て稱せられてゐた。その千住の親里に歸つたの

は、年二十を踰えた後である。

婢は「おいらん」を以て人間の最尊貴なるものとしてゐる。公侯伯子男の華族さんも、大臣次官の官員さんも婢がためには皆野暮なお客である。貸座敷の高樓大廈と其中にある、婢藏獲とは、おいらんと奉承し裝飾する所以の具で、貸座敷の主人はいかに色を粧にし威を振ふとも此等の雜輩に長たるものに過ぎない。

婢の思量感懷は悉くおいらんを中心として發動してゐる。婢の日を以て視れば、吉原は文、吉原以外は野、吉原は華、吉原以外は夷である。それは吉原がおいらんのいますレジダンスだからである。

「よしや、何かお話をしておくれ」と弟が云ふ。よしは婢の名であつた。

「さあ、入らつしやい。お話をいたませう。」

よしは臺所の板の間におとなしくすわつて、弟を圓く堆い膝の上に引き寄せる。聲は清く朗である。「昔おいらんがございました。」

其おいらんは日つちかちでございます。そこへお客がまゐりました。其お客はあばたでございます。朝お客が歸る時、おいらんが送つて出て、柚子來なますと申しました。そら、あばたの顔は柚子見たいでございませう。するとお



わたくしは或日香いが一家の墓を訪はうと思つて、願行寺の門を入つた。門内の杉の木立の中に、細飛白の浴衣を着た肌漢が鐵啞鈴を振つてゐて、人の來たのを顧みだにしない。本堂の東側から北裏へ掛けて並び立つてゐる墓石を一つ一つ見て歩いた。日はもう傾きかゝつて來るに、尋ねる墓表は見附からなかつた。

忽ち稗子の笑ふ聲がしたので、わたくしは振り向いて見た。顔容の美くしい女が子を抱いてたゞずんで、わたくしの墓表の文字を讀んで歩くのを見てゐた。

わたくしは搜索を中止して、「あなたはお寺の方ですか」と問うた。

「はい。どなたのお墓をお尋なさいますのです。」女の聲音は顔色と共にはればれとしてゐて、陰鬱なる周圍の光景には調和してゐなかつた。

「攝津國屋と云ふものです。苗字はさいきでせうか。」魯文の記事には「さいき」とも「ほそき」とも傍訓がしてあるが、わたくしは「さいき」が正しい訓であるのを、偶植字者が「ほそき」と誤つたものかと思つてゐたのである。

「では細いと云ふ字を書くのでせう。」此女は文字を識つてゐた。

「さうです。御存じでせうか。」

「えゝ、存じてゐます。あの衝當にあるのが攝津國屋の墓でございます。抱かれてゐる稗子はわたくしを見て、頻に笑つて跳り上がつた。

わたくしは女に謝して墓に詣つた。わたくしはなんだか新教の牧師の妻とでも語つたやうな感じがした。

本堂の東側の中程に、眞直に石塀に向つて通じてゐる小徑があつて、其衝當に塀を背にし西に面して立つてゐるのが、香いが一家の墓である。

向つて左側には石燈籠が立てゝあつて、それに「津國屋」と刻してある。

墓は正方形に近く、稍横の廣い面の石に、上下二段に許多の戒名が彫り附けてあつて、下には各命日が註してある。

#### 十四

攝津國屋の墓石には、遠く祖先に溯つて戒名が列記してあるので、香以の祖父から香以自身までの法諡は下列の左の陣に竝んでゐる。

詣で畢つて歸る時、わたくしは父子を抱いた女の側を通らなくてはならなかつた。わたくしは女に問うた。

「親類の人が參詣しますか。」

「えゝ。餘所へおよめに往つた方が一人残つてゐなすつて、忌日には來られます。芝の炭屋さんださうで、たしか新原元三郎とぶふ人のお上さんだと存じます。住職は好く存じてゐます。只今留守でございます。なんなら西教寺とこちらとの間に花屋が件つてゐますから、聞いて御覽なさいまし。」

わたくしは再び女に謝して寺を出た。そして往來に立ち止つて花屋を物色した。

西教寺と願行寺との間の町家は皆新築の小さい店になつてゐる。其間に挟まれて、殆ど家とは云ひ難い程の小家の古びたのが一軒あつて、霞簀が立て廻してある。わたくしはそれを見て、曾つて其前に橋のあるのを見たことを想起した。

わたくしは霞簀の中に這入つた。家の内はもう殆ど眞暗である。瞳を定めて見れば老いさらばうた翁媼が蹲つてゐる。家も人も偶然開化の舌に舐め残されたかと感ぜられる。又お伽話の空氣が闇の裡に浮動してゐるかと感ぜられる。

「もしもし」と云ふと、翁が立つて出迎へた。媼は蹲つたままでゐた。

得るまでに淨寫した美麗な巻で、一勇齋國芳の門人國友の描畫數十枚が入つてゐる。

此游は安政二年乙卯四月六日に家を發し、五日間の旅をして歸つたものである。巻首に「きのとの卯といへるとし、同じ月始の六日」と云つてある。又巻末に添へられた六山眞の七古の狂詩に、「四海安政乙卯年」「拾衣四月毎日樂」「往來五日道中穩」等の句がある。乙卯は冬大地震のあつた年である。

巻中に名を列してゐる一行は酒落翁、國朝、仙鶴、宗理、仙廬、晴閑齋、經榮、小三次、鳥羽、國友、片常、仙高、料虎、按掌、按摩、幸助、以上十二人である。酒落翁は龍池であらう。此中に伊三郎がゐたさうであるが、その號を詳にしない。香以は「親爺の供をしては帽が利かぬから御免だ」と云つて往かなかつたさうである。

一行が歸るとき迎へに出た人々は、香以、雁伍(石川市淳)、余瓶、以白、集雨(玄々眞人)以上五人である。

「集へもどる親まつ鳩のもろ音哉。香以。」跋文は香以が自ら草してゐる。其他數人の歌併及古今體狂詩が添へてある。按ずるに乙卯は龍池の歿する前年で、香以は三十四歳になつてゐた。わたくしの芥川氏に

聞いた事は略此に盡きてゐる。

わたくしに香以の事を語つた人は、獨り芥川氏のみではない。一知人はかう云ふ事を言つた。「明治の初年に今戸橋の傍に湊屋といふ藝者屋があつた。主人は河野と云つて春の低い胖太漢であつた。その妻は吉原の引手、湊屋の女みなといふもので、常にみいちゃんと呼ばれてゐた。藝者屋の港屋と號するも、吉原の湊屋の號より取つたものであつた。明治四年二月の頃、此家の抱へは貫六、萬吉、留八の三人であつた。此河野は香以の息だと聞いた」此話は正確を保し難い。且未だ芥川氏にも尋ねて見ない。併し河野が果して香以の息であつたならば、即慶三郎のなれの果ではなからうか。

香以の交遊諸人に關しても、わたくしは二三の報を得た。尾道の古怪庵加藤氏は云ふ。「香以傳に香以の友香永機を出し、その没年を明治三十七年としたのは誤であらう。今の機一君の父も永機、祖父も永機であつた。香以の友は祖父の方であらう。そして明治三十七年に没したと云ふは父の方であらう。」わたくしは其角堂の世系を詳にせぬから、或は此の如き誤をなしたかも知れない。そこで淺草の文淵堂主人に問ひ合せて。文淵堂の答書はかうである。

「香以の友であつた永機は父九代目市川團十郎、五代目尾上菊五郎とも交が深かつた。團十郎の筆蹟は永機をつくりであつた。此永機は明治初年の頃に向島の三團社内の其角堂に住み、後芝園山邊に家を移して歿した。歿した日は明治三十七年一月十日で、行年八十二歳であつた。寺は其角と同じく二本板上行寺である。」文淵堂の言に従へば、わたくしの記事には誤がなかつたらしい。猶考すべきである。

香以の其他の友に關して、近隣の梅本高節さんは語つた。「香以の友阿心庵是佛が谷中三河屋の主人なることは傳に見えてゐた。是佛の俗稱は齋藤權右衛門であつたと云ふのである。わたくしはこれを聞いて始めて是佛の狹谷知之生父なることを知つた。齋藤權右衛門には三子があつた。長を權之助といふ。是が四世清元延壽太夫である。諸書に此人の俗稱を源之助と書いてあるが、或は後に改めたものか。仲は狹谷三平懷之、披帶甲之の質子(の養子)三右衛門矩之である。季が父の稱を襲いで權右衛門と云ひ、質店の主人となつたと云ふ。」梅本氏は又香以の一人の友小倉是阿彌の事を語つた。「是阿彌は高木氏で、小倉は其屋號であつた。その團子坂上の質商であつたことは傳

客が、日つかち四つかち時分には来ようよと申しましたとき。よしのお伽話にはおいらんとお客とのみが人物として出るのである。

人生の評價は千殊萬別である。佛も王とすべく、魔も王とすべきである。大盡王香以、清兵衛を立つるときは、微塵數のバルヴェニューは皆守銭奴となつて懺悔し、おいらん王を立つるときは、貞婦烈女も賢妻良母も皆わけしらずのおぼことなつて首を俛るであらう。

名僧智識の宗教家王たるべきが如く、小説家王たるべきものもあらう。碩學大儒の哲學者王たるべきが如く、批評家王たるべきものもあらう。出版業者王たるべきものもあらう。新聞經營者王たるべきものもあらう。人生の評價は千殊萬別である。

わたくしは伊澤蘭軒、澁江拙齋を傳した後、偶來つて此細木香以を傳した。粹才わたくしの如きものが敢て文を作れば、その選ぶ所の對象の何たるを問はず、又努で論評に涉ることを避くるに拘らず、僭越は免れざる所である。

右の細木香以傳は匆卒に稿を起したので、多少の誤謬を免れなかつた。わたくしは此にこれを訂正して置きたい。

香以傳の末にわたくしは芥川龍之介さんが、香以の族人だと云ふことを附記した。幸に芥川氏はわたくしに書を寄せ、又わたくしを來訪してくれた。是は本初對面の客ではない。打絶えてゐただけの事である。

芥川氏のいはく。香以には姉があつた。其母が山王町の書肆伊三郎である。そして香以は晩年を此夫婦の家に送つた。

伊三郎の女を儒と云つた。儒は芥川氏に適いた。龍之介さんは儒の生んだ子である。龍之介さんの著した小説集「羅生門」中に「孤獨地獄」の一篇がある。其材料は龍之介さんが母に聞いたものだからである。此事は龍之介さんがわたくしを訪ふに先だつて小島政二郎さんがわたくしに報じてくれた。

わたくしは又香以傳に願行寺の香以の墓に詣る老女のあることを書いた。そして其老女が新原元三郎といふ人の妻だと云つた。芥川氏に聞けば、老女は名をえいと云ふ。香以の嫡子が慶三郎で、慶三郎の女が此えいである。えいの夫の名は誤つてゐなかつた。

わたくしはいえいが墓參の事を言ふ序に附記したい。それは願行寺の橋賣の翁媼の事である。えいの事をわたくしの問うた此翁媼は今や

亡き人である。先日わたくしは第一高等学校の北裏を歩いて、ふと橋屋の店の鎖されてゐるのに氣が付いたので、近隣の古本屋をおとつれて、翁媼の消息を聞いた。翁は四月頃に先づ死し、まだ百箇日の過ぎぬ間に、媼も踵いで死したさうである。わたくしは多少心を動かさざることを得なかつた。これを記してゐる處へ、丁度宮崎虎之助さんの葉書が來た。「合掌禮拜。森君よ。ずつと向うに見えて居るのは何でせう。あれは死ですね。最も賢き人は死を確と認め居ますね。十二月七日。新詩。」

次にわたくしは芥川氏に聞いた二三の雜事をしるして置く。香以の氏細木は、正しくは「さいき」と訓むのださうである。併し「ほそき」と呼ぶ人も多いので、細木氏自ら「ほそき」と稱したことがあるさうである。

芥川氏は香以の辭世の句をわたくしに告げた。わたくしは魯文の記する所に従つて「絶筆、おのれにもあきての上か破芭蕉」の句を擧げて置いた。併し眞の辭世の句は「梅が香やちよつと出直す垣隣」ださうである。梅が香の句は灑脫の趣があつて、此方が好い。

芥川氏の所蔵に香以の父龍池が鎌倉江の島、神奈川を歴遊した絶行一卷がある。上木し



# 古い手帳から

## Platon

Platon は何故に共產主義者とせられてゐるか。此人は人の心を植物性、動物性、精神性の三つに分つた。植物性は營養、動物性は感情、精神性は智慧である。此人は又これと併行して社會を勞働者、防禦者、思考者の三つに分つた。勞働者は農、工、商である。防禦者(soldiers)は兵である、軍人である。思考者は哲學者で、同時に政治家である。さて上の思考者と中の防禦者とのために金錢と婦女とを私蓄することを禁ぜよとした。上中の二階級のために共產主義を要求したのである。

昔は支那でも宰相が死んで葬をする錢のないのを憂へた。又軍人が錢を愛するのは悪いとした。女色に溺れてはならぬのは上にあるものの務であつた。又印度でも僧尼は獨身者で、乞食は淨行であつた。基督教の無配偶者(celibates)乞食者(mendicants)もこれに似て

ゐた。Platon は社會上中の二階級のためにこれを制度化して、妻孥財寶の繫縛を脱せしめ、全力を擧げて國家のために盡せよとしたのである。

國家のために盡すとはどうするか。國民をして公正(Justice)を得しむるの謂で、これは寡廉各相殊なるものをして適材の適處に居るに至らしむるに外ならぬのである。國家の幸福はこれより生じて来る。即富國強兵策である。そして下の階級たる農工商は總て問題外に置かれてゐる。これが狭義の人民(begans)で、Platon はこれを蔑視すると明言して憚らない。實にそれのみではない。其下には又奴隸が必要の一團として存在せしめてある。

此下の階級の中に今相對峙してゐる資本家と勞働者とが打して一丸をなして入れてあるのが可笑しい。營々役々として鎖銖の利を爭つて、成功して資本家となつてゐるものも、これを羨望しつつ勞働者となつてゐるものも、Platon の目から見れば等しく賤業者(the base)であ

る。此に個人主義と民政主義との不適合ある。Platon の理想國は上中二階級のためには共產主義、下一階級のためには非個人主義、非民政主義を以て組織せられてゐる。概括して言へば Platon は貴族主義者である、非平等主義者である。

## Aristoteles

Platon は人生の幸福を、絶て自己の利害を顧みずに國家のために盡すの中に求めた。これに反して Aristoteles の政論は人生の幸福を、我が有となすものがあつて始めて成立すべきものとなした。彼は純利他である。此は自利があつた上の利他である。ここに Platon の國家集産主義に對する Aristoteles の個人主義がある。

この自利があつた上の利他は何處から出て来るか。Aristoteles はこれを人間天賦の仁(love)に求めた。仁は社會的感情である。そして此感情は人間の平等を待つて始めて生ずるものではない。相異なる人と人との間にも亦能く生ずる。そして自利の心はこれに由つて調節せられる。此調節を制度の目的となして、ここに有機物たる國家が成り立つ。

に云ふが如くである。是阿彌の妻をぎんと云つて、其子を佐平と云つた。又佐平に息眞太郎、女啓があつた。然るに佐平も其子女も先づ死して、未亡人ぎんが残つた。是が崖上の家の女主人であつた。「わたくしは此に由つて、父が今の家を是阿彌の未亡人の手から買ひ取つたと云ふことを知つた。」

香以の他の友人二人の事は文淵堂主人が語つた。石橋眞國と柴田是眞との事である。「石橋眞國は語學に關する著述未刊のもの數百卷を造した。今松井簡治さんの藏館に歸してゐる。所謂やはらかものには「隱里の記」といふのがある。これは阿場所の沿革を考證したものである。眞國は唐様の手を見事に書いた。職業は奉行所の腰掛茶屋の主人であつた。柴田是眞は氣概のある人であつた。香以とは極めて親しく、香以の摺物には此人の畫のあるものが多い。是眞の逸事には云ふ事がある。或時は眞は息と多勢の門人とを連れて吉原に往き、俄を見せた。席上には酒肴を取り寄せ、門人等に馳走した。然るに門人中坐容を崩すものがあつたのを見て、大咄して叱した。遊所に足を容るゝことを嫌はず、物に拘らぬ人で、其中に謹嚴な處があつた。」

京はわが先づ車よりおり立ちて古本あさり日をくらす街  
識れりける文屋のあるじ氣狂ひて電車のみ見てあれば甲斐無し  
夕霽は宇治をつつみぬ兒あまた竝居る如き茶の木を消して  
木津過ぎて網棚の物おろしつづ窓より覗く奈良のともし火  
奈良山の常盤木はよし秋の風木の間木の間を縫ひて吹くなり  
奈良人は秋の寂しき見せじとや社も寺も丹塗にはせし  
萬かづら絡む築泥の崩口の土もかわきていさぎよき奈良

(「奈良五十首」より)

## 庭

露おもき花のしづえに片袖をはらはれて  
入る庭のしをり戸  
葉がくれのかくれ葉さへぬるるまでさみだれつづく青桐のには  
いたはりし花庭なれどうなの子に野分のあとはまかせはててん  
あさまだきおきわかれゆく風流士が指貫そぼつ庭のしらつゆ  
をじねはず賤が小庭に枝たわみ袖の實柿の實色つきにけり  
畑に出でて人なきしづが前庭におち穂ひろひて庭鳥あそぶ  
松の雪なだる音にまどあけてはじめて庭を見いでつるかな  
うらうらと小春日和ののどけさに雀むれあそぶ庭の山茶花  
木つきのうつぽをつつく響して夕日かげろふ山ずみのは  
われもまたいつしか慣れて庭の松に風ふかぬ日はさびしかりけり  
とりどりにふしあれとわが庭にうゑて樂む竹のひとむら

(「常盤園詠草」より)

とし、人間の多数を只形のみ獸に異なりとする (Kluthes) が如き此派は民政主義に向つては進まなかつた。實に然るのみではない。その理想とする哲人の國は、Platon のそれと同じく、財産と婦女とを私有せしめない國である。貨幣をだに造らない國である。此國には敵は無い。民族の限界が撤廢せられて、四海同胞であるからである。(Diogenes Laertius) 又 Platon の高等共產主義が再現した。そしてその中に新に人權 (Jus generis humani) の思想が頭を擡げた。

世界の愛の國際主義と哲人の國の精神的貴族主義との間には、永遠に填むことの出来ない窟壑がある。

## Epikuros

Epikuros の自利は自己の快適を以て人生の唯一目的とするに在る。しかし共同生活に待つことあるが故に利他を棄てはしない。只其利他は人類を愛する故の行でもなく、人類の存続を欲する故の行でもなく、畢竟自己の快適を得むがための打算である。國法は個々の人民をして快適を得しめむがための契約で、亦復

打算である。それゆゑに Epikuros の社會は功利の社會に外ならない。

此より後希臘には哲學上に社會を視ることが疎んぜられて、Platons は政を論ずるは學者の務でないとさへ云つた。

## 希臘及羅馬時代

社會方面から觀れば、希臘時代は威力を以て勞働者を抑壓してゐた時代だといふことは、奴隸の存在を以て證せられる。只思想上に哲學的共產主義が有つたのである。

民政方面から觀れば、これに反して希臘には、思想上に Aristoteles の凡俗政治が説かれ、これと共に事實上に民政國が有つた。

最初の民政は農夫と牧人との立てたものである。憲法上には今の瑞西の民政に似てゐる。これは奴隸を除外して云ふものなることは勿論である。雅典市の民政には三期を劃することが出来る。第一期には男女公民の間に正當に生れた人に參政權があつた。しかし實際は生計に餘裕のあるものが此權を行使した。第二期には奴隸に非ざるものが皆有權者となつた。生計に餘裕のあるものが此權を行使したことは上に同じである。

る。第一期を Solon (594 a. Chr.) から Kleisthenes (508) まで、第二期を Kleisthenes から Aristoteles (430) までと算する。此間に波斯戰がある。農業が衰へる。商工業が盛になる。勞働者奴隸を除くが公民になる。そこで民政が第三期に入つて Perikles は民會に出るものに始て手當を給した。(403) そしてこれまで民會の決議は立法であつたのに、今はすぐに行政になつた。其述は專制に類する。Aristoteles はこれを無憲法だと評しつゝゐる。(Politik IV) 此時始て職業的政治家 (Bourgeois) が出て、嘗て佞臣が暴君に媚びたやうに、人民に媚びた。(Politik V)

羅馬時代に入つた後も、まだ社會上には奴隸があつて、威力の抑壓がこれに加へられてゐた。しかし奴隸がもはやこれに安んじてゐない。Julia の奴隸一揆 (49 a. Chr.) は希臘、Makedonia から小亞細亞までも波及した。羅馬は全力を鎮壓に費して二萬人を磔刑に處した。(132) 尋いで Aristoteles が Perikles につけて、あらゆる階級の雄略を唱へた。羅馬は此一揆を滅すために手段を選ばに迫あらず、井



Platon の國家は上二階級をして全く自利の心を棄てさせようとしたものである。此の如き機械的國家は成り立たない。よしやそれが成り立つたとしても望ましくない。何故といふに、若し自利の心がなければ人の事業に勵みがない。緊張がない。緊張がなくては發展がない。文化が減る。

國家は私産を認め、結婚を認めて、此處み、此緊張を助成しなくてはならない。ここに共產主義が否定せられる。

私産を認め、結婚を認めると、貧富不幸が生ずる。國家の制度は此懸隔が大きくならぬやうに調節して行くべきである。(Politik VII.)

ここに Aristoteles の社會政策がある。Platon の理想國は上二階級が人人皆君子でなくては成り立たない。Aristoteles の國家は凡俗の團體である。しかし凡俗をして小人より遠ざかり、君子に近づかしめようとしてゐる。此向上の動機が即仁である。仁は個人の存續(自利)を抑へて、人類の存續(利他)を揚げようとする自然の手段である。國家は凡俗の國家であるから、凡俗をして政に參せしめなくてはならない。此時に當つて、君子に近い凡俗は政のために有利で、まだ小人より遠ざからな

い凡俗は政のために不利である。是は已むことを得ない。國家は少數の君子へ貴族に特權を與へず、自恣を敢てせしめないで、同時に多數の小人をして横暴ならしめざることを努めなくてはならない。珍物の君子をもありふれた物(小人)をも併せ用ゐて料理の獻立は出来るのである。(Politik III.)

Aristoteles は此政治上公平をして經濟上公平と併行せしめようとした。國家は多數をして適度の富を有せしめなくてはならない。(Politik VII.) 國家は個人の需要を超過する蓄財を抑制し、黄金を以て人生の最貴重物とするが如き射利を禁遏すべきである。(Politik I.)

### Stoa 派

Stoa 派も亦人間が自己を存続せむと欲する心、自利の心を人生觀の發足點とする。自利は人の第一策(πρῶτον ὄντα)である。(Beneu.) 人に此心を賦して其種屬を存続せしむるのは自然の詭謀である。(Aulus Gellius) それゆゑに自然は又人にこれを調節すべき共同生活の策(πρῶτον ὄντα)を與へた。種屬の利害は主にして、個々の利害は従である。(Diogenes) 人間は自利から發足

して利他に到着せざることを得ない。此人生觀は此派の汎神教と關聯してゐる。萬物を支配する唯一の理性は、個々の人にも行きたつてゐる筈である。哲人は自利のために隱遁しないで、やはり衆人と伍する。小人が利他に入ることが出来なくて、自利を以て終始するのは惡の極である。(Diogenes)

Aristoteles の仁は此派に至つて非常に發展した。これに溫みが加はつて愛になり(Pantheism)、基督敎の基礎を据ゑた。又これに廣さが加はつて世界を覆ふに至つた。前には希臘人の日中に只希臘人があつた。印度人が印度人をのみ人(Human)としたと同じである。支那人が版圖外の人を夷狄としたと同じである。然るに、歴山大帝の遠征の後に、東方の異民族が希臘に流れ込んで來た。そしてそれが學問藝術の上に異能を發揮した。Stoa 派の鼻祖 Zeno は來歴不明の人であるが、とにかく東方から來た。希臘人は始めて希臘人でない人も亦人だと曉つた。そして人を品評するには民族を以て高下すべからず、徳性を以て高下すべし(Brutiennes)と云つた。仁は世界の愛となつて、ここに國際主義が萌芽した。しかし精神的貴族(Beneu)を唯一の貴族なり

次に田地を質入し、又手放した。大地主が出来た。(同上 Josaph V 8.) 賄賂が法廷を腐敗せしめた。(同上 Amos VI 12; 王第二書 IV 1; Amos II 6; Josaph I 21, V 7, X 1.)

貧者の叫は漢言者 Jesu's の口を藉りて發せられた。聖王を待つ聲は少壯なる Josia 王を動かして、Deuteronim の制が敷かれた。第七日の休暇は今の労働者の要求に似た制限である。第三年の收穫は擧げて貧人に與へられる。第七年には田地が故主に還され、奴隸が解放せられる。法廷は生計に必須なる物品を差押ふことを得ない。(321 a. Chr.) 法はまことに美である。しかしこれを實施せむことは難かつた。そこで後には第七年の田地還主、奴隸解放が第五十年に改められた。所謂 Jubel 年制 (Hebraicus Jubel 金數) である。

希臘は早く開けた國で、古來田地は私有であつた。そして親が子に分つ慣習のために個人所有地の面積は次第に小さくなる傾向を有してゐた。又人口過多の結果 (前八、七世紀)、地中海沿岸の殖民を見るに至つた。(前六世紀) 海上貿易の開けたのは、穀物を輸入せむがた

めである。富豪が頭を擡げて、田地を合併した。農民が負債して、奴隸にせられた。金相場の上昇は活潑で、金利は一八%であつた。田地を失つて小作人になつた小農に *éktemnoi* の名があつたのは六分農の義である。收穫の六分の五は地主が取つた。

此時初め君主政の行はれた Attike (Athens) は貴族政に一變してゐて、實權は大地主の手にあつた。人民の要求する所は田地の制換、班田收授である。Drakon の法は頗る富人をして進歩せしめた。(623 a. Chr.) Solon は中裁者 (Rakarch) と稱せられたが、中裁 (居中調停、勞資協商) とは階級闘争の中裁を謂つたものである。奴隸を解放する。貨幣を小にする。輸出を禁ずる。油は此限に在らず。是が社會政策であつた。(594 a. Chr.) Athens は是より民政の初中後三期に入つた。初期は此より Kleisthenes に至り (—413) 後期は Pericles に至る (—403) 中裁者 Solon は一切の時、一切の所の中裁者の否を代表してゐる。上流はその氣併してゐる田地の債券有標を抜き去られたのを憤つた。下流は田地の制換を求めて得ないのを怨んだ。中流は新制度が下流をして我利圖を侵さし

めるのを惡んだ。そして新制度が血を流す革命を防いだことを首肯するものは絶て無かつた。Solon は悄然として亡命した。

Solon 去後の Athens は機に投じて、私を營む策士の手に墮ちた。當時上流を平野人 (Mekakroi) と云つた。主として大地主より成る。中流を沿海人 (Pekakoi) と云つた。商工より成る。下流を山居人 (Bekakoi) と云つた。農より成る。此下流を使喚して Peisistratos は起つた。陽に貧人の身方富人の敵と稱して Solon の法の輪廓を保存しつつ、專制の政を行つたのである。(560 a. Chr.) Kleisthenes は此人の死後に選舉權を擴張して民政主義の歩を進めた。(初中期の限界。) 後 Pericles (後期末) に至つて、民政主義は盛を極めた。Platon の理想國は民政の下に按れた智識階級の夢である。

Pericles の後六十五年 Athens は Chaireneia の戰に敗れ、(386) 後又十六年 Artimenes の下に選舉資格を定むるに資産額を以てし、議員の手當を廢し、民政は此に減びた。

支那の周は魯より七年還主制に先だつたと五百年以上 (基督前十二世紀以上) である。

を毒するに至つた。其手段は毒瓦斯よりも酷である。尋いで Scilla の一揆が再舉を謀つて、内計は五年に及んだ。(101) 尋いで伊太利本土に力士一揆が起つた。Padua の武裝指南所で遊戯に供する力士を奴隸の中から養成してゐたのが一揆の源になつて、智略ある Spurlatus を首領に戴いたのである。羅馬がこれを平定したとき、羅馬から Padua に通ずる本街道だけに礮六六百を敷へたさうである。(71)

羅馬時代には事實としての民政は無かつた。

所謂羅馬の共和政は只一面より命ぜられた名で (Polybia) 實は貴族政であり、君主政であつた。(Niese)

## Essaiot

希臘人の Essaiot 又 Essenoit と稱する徒黨が猶太にあつた。此名の由來する所は不明である。Hecataeo 語から出たとすると、christian 信者を語源としなくてはなるまい。Chaldaei 語から出たとすると、癒療する、醫師を語源とすることとなるであらう。

此黨の籍に入るものは私産を擧げて黨の金庫に納める。戦争を忌んで、兵器を造ることを肯

ぜない。都會は罪惡の淵藪なるが故に住まない。商業は貪婪の本なるが故に従事しない。人は人に使役せらるべきものでないとするが故に首領を敷かない。奴隸制度を以て人道に背くものとする。勞働を以て人生の義務とする。標識に嚴禁と桎梏とを選んだ所以である。今この語を以て言へば、此黨は一種の生産組合である。又類例を以て云へば、天香西川氏語の唱道する所が種種の點に於てこれに近似してゐる。

然れば Essaiot には共產主義者である。しかし希臘哲學の共產が善 (katoxyntia) を成さむとする道德上の手段に過ぎなかつたと同じく、此黨の共產は神に仕へむがための宗教上の手段に過ぎない。只希臘人は口に共產を説いたのみであるのに、此黨は身にこれを行つた。彼も此も共產を以て人生の目的とする今の共產主義とは別である。

Essaiot の思想は源を何所に發したかを知らない。或るひとは希臘最古の Pythagoras の説が希臘に再興せられて、それが此思想を生んだといふ。一朋友は一切の物を共有する「(koinon te to diacon) 4 Pythagoras は云つたのである。或るひとは Stoic 派の四海同胞國の共產から出たといふ。又或るひとは佛教から來たといふ。

若し佛教から來たとすると、西川氏の思想と同源だといふことに歸着するだらう。

Essaiot には Jerusalem より死海の沿岸に及び、吾に及び、Pneumonia の全土に瀰漫し、千餘人を算した。基督前百五十年より起つて、基督誕生後に至つても其跡を絶たなかつた。基督が密に希臘哲學の影響を受けたのみでなく、亦此の黨の思想 (Essenismus) に影響せられたことは疑を容れない。

## 猶太希臘の古田制

古代民族の間に貧富の懸隔を生じたのは、主權家が田地を兼併するがためであつた。

猶太の地には初め武力を以てこれを占有した小土家が割據してゐた。其間に民衆は次第に遊牧より稼穡に移つて、葡萄橄欖が栽培せられた。織、鍛冶、木匠、陶工等は只家庭の需要に應ずるに過ぎなかつた。既にして商業が Kenana より傳へられて、權家がこれに手を下し、富を致した。そこで金銀は國に滿ちて、(舊約全書 Jesajin II 7) 富者は貧者を蹂躪した。(同上 Amos IV 1) 農民は負債した。先づ收穫を人手にわたし、



産である。私有財産は横奪である。」

記載は此の如くであるが、使徒行傳の文には旁證が無い。若し其産園があつたとしても、それは範圍の狭い、繼續の短いものではなかつたか。師父等の言論は唯主張のみなることが語氣の間に現れてゐる。

Renn一派が基督と使徒とを共產主義の宣傳者兼實行者であつたとするのは、歴史上の根據に乏しい。

## Karpokrates

基督教の師父に一人の奇僻なるものがあつた。それは Alexandria 生れの人で、第三世紀の前半に Kephallenia の寺院に住んだ Karpokrates である。

素と宗教を説くに理を以てせむとする Enochian の流派に屬してゐたが、推理上より、「基督は人である、未來世に於ては基督より大なる人があつて出て來るかも知れない」と云ふに至つた。又靈魂が肉體と結合するのは快樂を得むがためであるとも云つた。

Karpokrates は此の如き思索の傾向から進んで遂に財産と婦女との共有を主張した。概ね

基督教の師父は財産の共有を以て望ましい事としてゐたが、婦女の共有を以て不徳なりとし、これを勸説した Platon を排斥するを例としてゐた。然るに今婚姻を廢すること、私有財産を廢することが師父の口から唱へ出されたのである。

Karpokrates は口これを説くに止まらず、これを實世間に適用しようとして、一の秘密社を創立した。後に其子 Piphianos が社長になつた。入社するには財産をも妻をも共有になくしてはならなかつた。男女の信徒が夜間燈を滅して會合したと云ふ記録 (Clement's Alexandinus II, 2) があるが、眞偽不明である。

Karpokrates は基督教界に於ける殆唯一の旗幟鮮明なる共產主義者で、其思想は共產的無政府主義を以て目すべきである。しかし此人は此の如き思想を有すると同時に、基督教の圖外に逸出して、破戒無愆の人として教界の齒せざる所となつた。

此より後歐洲の基督教國は久しく「神の國」と云ふ想像の下に項を屈してゐた。羅馬の帝王主義が滅びて、猶太の神政 (Theokratie) が基督

教中に復活し來つたのである。「神の國が理想境であると共に、現實世界は初より惡魔の所生であるから、其間には社會方面に對する哲學を容るべき餘地が無い。

## Augustinus

中世の神の國と云ふ思想は四五世紀の間に出了 Aurelius Augustinus の書 De civitate Dei (Libri XXII) をして代表せしめることが出来る。人間の住してゐる世俗の國 civitas terrena は人欲の私に本づいて立てられてゐる。即ち罪惡の造る所である。(後に法皇 Gregor VI. の如きは一步を進めて惡魔の造る所と云つた。) 其中にあつて聲望のある人は光ある罪(世間の德)の人である。此の如き國は必然滅亡しなくてはならない。

社會問題は資本家も労働者も皆人欲を主張するより起る。世俗の國の非常の顯象として視るべきである。要するに皆無用の争である。

世俗の國を超越して神の國 civitas Dei が存在する。此國は神の愛に本づいてゐる。然らば神の國は全く世俗の國と交渉がないかといふに、さうではない。人類の善良なる心は神の



長宗我部信親

(敘事詩)

上 戸次川

頃<sup>ころ</sup>は天正十四<sup>てんしやうしよ</sup>年<sup>ねん</sup>  
しはす十二<sup>じふに</sup>日の朝<sup>あさ</sup>まだき、  
筑紫<sup>ちくし</sup>のはても冬<sup>ふゆ</sup>關<sup>かん</sup>けて、  
靈山<sup>りやうざん</sup>おろし吹<sup>ふ</sup>きすさむ  
戸次<sup>とつぎ</sup>の川<sup>がは</sup>の岸<sup>きし</sup>ちかく、  
仙石<sup>せんごく</sup>權兵衛<sup>けんべゑ</sup>ノ尉<sup>ゑう</sup>が家の子<sup>こ</sup>  
三好<sup>みよし</sup>田宮<sup>でんぐう</sup>が率<sup>りつ</sup>ゐたる  
一千<sup>せん</sup>餘<sup>よ</sup>騎<sup>き</sup>のつはものども  
先<sup>さき</sup>を爭<sup>あらそ</sup>ひ押<sup>お</sup>し寄<sup>よ</sup>せたり。  
岸<sup>きし</sup>のあなたに控<sup>かへ</sup>へたる  
烏津<sup>うつづ</sup>中務<sup>なかつぶ</sup>ノ大輔<sup>だいほ</sup>家久<sup>けいく</sup>は  
二萬<sup>ふたまん</sup>騎<sup>き</sup>あまりに將<sup>しやう</sup>として、  
去<sup>さ</sup>ぬる九月<sup>くがつ</sup>のころほひより  
大友<sup>たゆう</sup>勢<sup>せい</sup>を駈<sup>か</sup>け備<sup>び</sup>まし、  
しきりに勝<sup>かち</sup>に乘<sup>のり</sup>じつつ、  
上方<sup>かみかた</sup>よりの後<sup>ご</sup>詰<sup>つめ</sup>たる  
太閤<sup>たかう</sup>麾下<sup>か</sup>の長宗<sup>ちやうそう</sup>我部<sup>がべ</sup>

仙石<sup>せんごく</sup>とやらん疾<sup>はや</sup>く來<sup>き</sup>よかし、  
目<sup>め</sup>にもの見<sup>み</sup>せてくれんずと、  
用意<sup>ようい</sup>おろそかならざりけり。  
かかればけふの戰<sup>たたかひ</sup>は  
門出<sup>かどで</sup>の砌<sup>せき</sup>太閤<sup>たかう</sup>が  
わが大<sup>おほ</sup>軍<sup>ぐん</sup>の至<sup>いた</sup>らんまで  
ゆめゆめ卒爾<sup>そつぜん</sup>のいくさすなと  
戒<sup>い</sup>め給<sup>たま</sup>ひし旨<sup>めがね</sup>に垂<sup>た</sup>けり。  
しかのみならず向<sup>むか</sup>ひなる  
岸<sup>きし</sup>邊<sup>へ</sup>は木<sup>き</sup>立<sup>たち</sup>連<sup>れん</sup>なりて、  
伏兵<sup>ふくへい</sup>あらんも計<sup>はかり</sup>られず。  
川<sup>がは</sup>を渡<sup>わた</sup>らば渡<sup>わた</sup>り來<sup>き</sup>る  
なかばを撃<sup>う</sup>ててふ兵法<sup>へいぽう</sup>の  
をしへを知らぬ敵<sup>てき</sup>ならず。  
さすが思<sup>おも</sup>慮<sup>り</sup>ある長宗<sup>ちやうそう</sup>我部<sup>がべ</sup>は  
軍議<sup>ぐんぎ</sup>の席<sup>せき</sup>に仙石<sup>せんごく</sup>を  
しきりに諫<sup>いさな</sup>めたりしかど、  
無謀<sup>むぼう</sup>の仙石<sup>せんごく</sup>聲<sup>こゑ</sup>嘶<sup>せ</sup>まし、  
心<sup>こゝろ</sup>おくれし土佐<sup>どさ</sup>武士<sup>ぶし</sup>ども  
攻<sup>う</sup>めじとならば我<sup>われ</sup>ひとり

手勢<sup>てせい</sup>を以<sup>もつ</sup>て攻<sup>う</sup>めんずと  
うけひかざれば、長宗<sup>ちやうそう</sup>我部<sup>がべ</sup>も  
是非<sup>ぜいひ</sup>なくいくさを出<sup>だ</sup>だしけり。  
さる程<sup>ほど</sup>に三好<sup>みよし</sup>田宮<sup>でんぐう</sup>等<sup>ら</sup>が  
馬<sup>うま</sup>を揃<sup>そろ</sup>へて眞<sup>ま</sup>つ先<sup>せん</sup>に  
川<sup>がは</sup>のなかばに騎<sup>き</sup>り入<sup>い</sup>るよと  
思<sup>おも</sup>ふ間<sup>ま</sup>あらせず向<sup>むか</sup>ひなる  
木立<sup>こだ</sup>のうちよりつるべかけ  
打ち出<sup>だ</sup>す玉<sup>たま</sup>の雨<sup>あめ</sup>霰<sup>せん</sup>に  
十五<sup>じふご</sup>六<sup>ろく</sup>騎<sup>き</sup>のつはものは  
打<sup>う</sup>たれて水<sup>みづ</sup>にぞ沈<sup>しづ</sup>みける。  
あなや敵<sup>てき</sup>には伏兵<sup>ふくへい</sup>あり、  
引<sup>ひ</sup>けやと叫<sup>こゑ</sup>ぶ聲<sup>こゑ</sup>と共に、  
馬<sup>うま</sup>に鞭<sup>むち</sup>うち引<sup>ひ</sup>き返<sup>かへ</sup>す。  
その時<sup>とき</sup>烏津<sup>うつづ</sup>の先手<sup>せんて</sup>なる  
伊集院<sup>いじけいん</sup>右衛門<sup>ゑもん</sup>が五千<sup>ごせん</sup>餘<sup>よ</sup>騎<sup>き</sup>  
竹中<sup>たけなかつ</sup>の小瀬<sup>せ</sup>を打<sup>う</sup>ち渡<sup>わた</sup>り、  
驚<sup>おどろ</sup>き強<sup>つよ</sup>く仙石<sup>せんごく</sup>が  
本陣<sup>ほんじん</sup>日<sup>ひ</sup>がけて切<sup>き</sup>り入<sup>い</sup>つたり。  
續<sup>つづ</sup>いて大將<sup>だいしやう</sup>烏津<sup>うつづ</sup>家久<sup>けいく</sup>  
八千<sup>はっせん</sup>餘<sup>よ</sup>騎<sup>き</sup>の旗<sup>はた</sup>もともて  
勢<sup>いきさ</sup>たけく攻<sup>う</sup>めかかれば、  
仙石<sup>せんごく</sup>勢<sup>せい</sup>と並び進<sup>すす</sup>みし  
大友<sup>たゆう</sup>左兵衛<sup>さべゑ</sup>が手<sup>て</sup>のものども



國に向ひ近づくことを希ふ。Augustinusはこれを徒勞でないと考へた。人類は累世の發展 (evolution) を以て神の國に接近する。是は人類の進化を承認したもので、近世に至つて歴史哲學の萌芽として著目せられた。

## Karl der Grosse

神の國の思想は實用方面に於て羅馬寺院の權威の由つて立つ所となつた。法皇の「基督共和國」(Republika christiana)は神の國を目前に現するものと視られるのである。そして現在の國家は只其存在を認容せられる。有るが故に有らしめる。始より無きには若かない。羅馬の目より見れば、國家は惡人を制馭するために設けてある牢獄の如くである。

これに反抗して起つたのが、ローマ大帝の世界の王國である。國王はさながらに司祭である。(聖彼得寺戴冠式)國民の宗教行爲は法令の中に編入せられた。是は宗教の力を王權の下に屈せむと謀つたものである。

宗教的共產主義者の小さい集團は四世紀に北

アフリカに孤立してゐたが、(D nismus)加特方教の成立と共に衰亡した。

未來に千年の神の國が實現せられるといふ思想 (Chiliasmus) は、若干の小集團があつて久しくこれを護持してゐた。そして宗教的共產主義者が去つてこれに投じた。しかし寺院は所謂「千年の神の國」は聖書の基督復活を以て實現したものだとした。(約翰傳 二) 未來を過去に移したのである。此等の小集團も漸く衰亡した。

## 上からの聲 (OEHMEL)

不思議な印が新に神の手から受けたいなら、  
働け。

不思議無しに昔の神に似たいなら、  
活きよ。

神らしい物が少しも欲しく無いなら、  
やけになれ。

(「沙羅の木」の「詩」より)

## 靜物 (OEHMEL) (「沙羅の木」の「詩」より)

春になる。霞み初める。

村の沼で  
或る蛙、ころ。

初蛙。

ころころ和すら蛙。

さて追追と數か殖え、

ころころころころと鳴く、

上には

日がける。

ゆらめく青い蝶一つ。

めでたや。

## 野薔薇 (GOETHE) (「沙羅の木」より)

ひとり咲ける野薔薇、あはれ飽かぬ色を  
誰か捨てん。野薔薇、紅き野薔薇。

如何で一枝折りて行かん、されど折らば  
手をや刺さん、野薔薇、野薔薇、紅き野薔薇。

ひとり咲ける野薔薇、あはれ手をば刺せど  
終に折りぬ。野薔薇、野薔薇、紅き野薔薇。

身方は多く討たれぬれど、  
此場を切り抜け逃れんと  
さほど難くはよもあらじ。  
されどもけふの戦は、  
仙石殿の指圖ながら、  
太閤殿下の御旨には  
初よりして背きたり。  
縦ひ軍議のむしろにて  
諫めとどめしことありとも、  
かく見苦しき敗北を  
いかにして申解くべきぞ。  
生き存へて父上に  
仕へんとおもふ者共は  
こころを置かで落ち延びよ。  
われは此場を去らずして  
討死せんとぞ申しける。  
石谷はじめ古つはもの等、  
げにいしくも宣給ひしよ、  
承ればものもののふの  
本意はさこそ候はめ、  
物數ならねど、某等も  
死出のおん供仕らんと  
詞涼しくいらへつつ、  
敵追ひ來べき道筋を

## 中 中津留川原

島津が二陣を率ゐたる  
新納武藏の守忠元は  
場數を積みしつはものにて、  
打痕槍痕七十餘箇處、  
世におぼえあるものなるに、  
はからずけふの戦に、  
郎黨あまた失ひし  
むくいをせでやあるべきと  
落ち行く敵を逐ひ慕ひ、  
中津留川原に近づきぬ。  
待ち設けたる土佐勢は  
追ひ來る敵をきつと見て、  
さては新納はわが方に  
みづから向ふとおぼえたり、  
敵に取りては不足無し、  
最期のいくさは今ぞとて  
主従たがひにはげましあひ、  
百騎に足らぬ殘兵も  
決を死してはわろびれず、  
日に餘る敵を引き受けて

ここをせんとと戦うたり。  
中にも大將信親は、  
唐綾緞の甲を着、  
蛇皮の冑を戴きて  
馬を縦横に馳せめぐらし、  
四尺三寸の長刀を  
閃く稻妻石撃つ火と  
見まがふ迄に打ち揮ひ、  
敵八人を切り伏せつ。  
乗りたる愛馬内記黒も  
數箇處のいたでに倒れければ、  
徒立となり、長刀棄て、  
太刀抜き放つて戦ひぬ。  
そも此太刀は信親が  
元服のをり引出物に  
總見院殿の賜はりし  
二尺七寸の左文字なるを、  
けふしもおもふよしありて  
日ごろ佩きたる兼光の  
太刀に代へてぞ帯びたりける。  
又はわざ物手は冴えたり、  
向ふに前なきありさまを、  
新納忠元きつと見て、  
あれこそ敵の大將ならめ、

一たまりもたまりえて、龍王が城をこころざしわれ先にとぞ逃れける。仙石勢は程遠き豊前の國なる小倉まで夢路をたどる心地してひた走りにこそ馳せ去りけれ。そも長宗我部信親は身のたけ六尺一寸ありて、いとおとなびては見えけれども、年まだ二十二歳にてこたびの後詰にえられしを、父元親は故郷にて聞くより心やすからず、西の空のみ打ち眺めはるばる物をおもはんより、我子の陣に赴きて、うしろ見せばやと決定し、去ぬる霜月の末つた舟路をいそぎ渡り來ぬ。かかればけふのいくさには親子鑑を並べつつ、仙石勢の敗るをば、かねて期したる事なれば、

手勢三千を引きしめて脇津留村の片ほとりにわざとさがりて陣を取り、陣帥の紋染めさせたる旗一ながれ押し立てて、しづまりかへつて控へたり。その時島津が二陣なる新納武藏の守忠元はこれも精兵三千騎を一手にまとめて馳せ向ひ、心憎き敵の舉動よな、逃げ行く身方に目もくれで待ち受けたるこそしをらしけれ、薩摩軍人の鋒を受けても見よやとまつしぐらに討つてかかれば、わたりあひ新納が手のもの二百人またたく際に討ち取りぬ。流石にたけき薩摩勢もしばしためらふその際に、元親親子は山崎の岬の方へ落ちて行く。新納ふたたび追ひすがれば、こなたも同じく引きかへし

しのぎを削る折しもあれ、島津が率ゐる三の陣本多主税が二千の兵佐古の口よりまはり來て親子が陣の横合より鉾鋭く切り込んだり。身方は左右に敵を受けふた手にわかれて戦ふうち、父元親は料らずも我子の影を見うしなひ且戦ひ且退きぬ。信親は又舅なる石谷兵部を始として、吉良細川等ともろ共に二十餘丁を引き退き、中津留川原に疎なる士卒をまとめて折敷かせ、追ひ來る敵を待たんとす。その時桑名太郎左衛門主の馬前に跪き、戦もはやこれ迄なり、父上待たせ給ふらん、おん供せんとぞ申しける。信親答へてぶひけるやう。



おもふせなりとやおもひけん、  
 討ち残されし家の子を  
 數般の舟に分ち載せ、  
 伊豫の岸より遠からぬ  
 日振の島にぞ退さける。  
 元親島にいたり着き、  
 谷忠兵衛ノ尉忠澄を  
 假屋に召して云ひけるやう。  
 汝が主は年老いて  
 心つたなくなりたるぞ。  
 おくれ先だつ世の習は  
 今更の事ならねども、  
 中津留川原に討死せし  
 子息信親が上こそは  
 未録ながらも忘れね。  
 せめては亡骸のみなりとも  
 迎へ取らんとおもふなり。  
 汝はいまより使者として、  
 さいはひこたびも在陣せる  
 惠日寺もろとも、豊後なる  
 島津が陣に赴きて  
 事の次第を聞えよと、  
 面をそむけていひつたり。  
 忠澄返さん詞も無く

舟路をいそぎ惠日寺と  
 島津がもとに渡りゆき、  
 しかじかとこそ傳へけれ。  
 家久聞きて涙を流し、  
 げに尤なる仰よな、  
 御使なくともなたより  
 送りとどけまゐらすべきを、  
 事のまぎれに怠りしは  
 面目なくこそ候へと、  
 人して使者を信親が  
 遺骸のところに案内させつ。  
 忠澄惠日寺兩人は、  
 年頃親みまゐらせし  
 これが若殿なりけるよと、  
 一日見るよりはふり落つる  
 涙の雨をせきかねて、  
 霞のおくにさく花の  
 色みえわかぬおもひせり。  
 しばらくありて惠日寺は  
 涙を拂ひて申すやう。  
 いかに谷殿聞き給へ。  
 近頃館のおんさまを  
 つらつら伺ひ奉るに、  
 愛子におくれ給ひしより、

恩愛の絆斷ち難く  
 煩惱の闇に迷ひ給ひて  
 寢食をだに安んぜられず。  
 今若しわれ等若殿の  
 生けるが如きおん骸の  
 おん供申して歸りなば、  
 館の迷を增すのみにて、  
 御國の爲め臣下の爲め  
 膝を喰む悔なからずやは。  
 たとひ一時のおん怒に  
 御勘氣うくことありとも、  
 ここにて茶毗しまゐらせて、  
 御遺骨をば首に掛け  
 歸らんとこそおもひ候へ。  
 御思案いかにと申しければ、  
 忠澄げにもとうけがひて  
 おん亡骸をとり斂め、  
 茶毗所に昇かせ行きにけり。  
 さて焚焼にさきだちて、  
 おん骸をば一間に据ゑ、  
 香華を供養しまゐらせつ。  
 威儀おごそかに惠日寺は  
 拂子を揮ひて立ち向ひ、  
 唱聲叱二窮鬼一

いで打取らんと馳せ寄れば、  
郎黨どもは押し隔て、  
主に代りて死なんとす。  
信親は又敵六人  
またたくひまに討ち取りぬ。  
近寄るものなきを見て  
腹掻き切らんとするところに  
烏津がたの軍奉行  
鈴木大膳馳せ寄りて、  
おん大將に見参と、  
隙間もなくぞ切りかくる。  
信親につこと打ち笑みて、  
殊勝の敵よ土佐武士の  
最期を見よとわたりあひ、  
思ふ儘に太刀打して、  
二十二歳を一期とし、  
地にもたまらぬ暖國の  
雪より先きに消えにけり。  
郎黨石谷本山等は  
主に先だちはや討たれぬ。  
細川源左はけなげにも  
大將新納と槍を合せ、  
敵のゆん手を突き破り、  
槍さへ地上におとさせしが、

主の危急に馳せつけし  
伊勢兵部にぞ討たれける。  
その外名ある家の子等  
三十餘人を始とし、  
物數ならぬ雜兵まで  
ひとりも残らず討死して、  
中津留川原の石原を  
韓紅に染めなししは  
あはれなりける事どもなり。

## 下 日振の島

宮内の少輔元親は、  
我子の上の氣遣はしく、  
新納が一手のものどもに  
追はれながらも幾度か  
引き返しては槍を合せ、  
わざと時刻を移しつつ  
一歩一歩と退きて、  
後詰の爲めにさいつ頃  
新に細張させたりし  
上原の城郭に  
一まつ手勢を繰り入れて、  
胸安からぬ夜をあかしつ。

翌十三日の晩に  
物見のものを遣だし遣り、  
軍のあとをたづねれば、  
中津留川原の血戦に  
子息信親主従が  
一騎ものこらず失せしこと  
もはやかくれはなかりけり。  
あはれなるかな、元親は  
五十路に近き老の身の  
君命あるにもあらずして  
九州の地に押し渡り、  
戈を枕に陣營の  
霜夜の夢を結びあへず  
明し暮すも信親が  
上を氣遣ふゆゑなりしに、  
きのふひと日の戦に  
屍を曝しし身方の兵  
七百人のその中に  
わが愛子をさへ數へんとは  
思ひがけ無き事かなと  
不覺の涙に暮れにけり。  
されども流石名を惜む  
大將なれば、この儘に  
ふるさと土佐へ歸らんこと

烏津中務ノ大輔家久は一萬騎あまりに將とし

て 烏津の兵數は、編年紀事略一萬餘に作る。されど南海通記には二萬五千人とせり。豐薩軍記に據れば、當時の陣立兵數左の如し。

一番 伊集院美作守 五千人 二番 新納大膳 正 三千餘人 三番 本莊主稅助 二千餘人 本陣 烏津中務大輔 八千餘人

此篇の陣立は紀事略に従ひ、其兵數は豐薩軍記を參取したり。右の諸書には本陣を修理ノ太夫義久としたれど、薩摩の國人加藤雄吉氏の考證によりて、家久と改む。以下倣之。

流石思慮ある 長宗我部は 軍議の席に仙石をしきりに諫めたりしかど 此長宗我部は元親なり。されど信親異議あるべくもあらねば、こ

とさらに元親ぞとことわることを要せざるべしとおもひて、かくは物しつ。

仙石勢は程遠き豊前の國なる小倉まで夢路をたどる心地しひた走りにこそ馳せ去りけれ。

紀事略に従ふ。豐薩軍記には豊前に奔りしを大友勢とし、仙石は長宗我部と共に伊豫に奔ることとせり。恐らくは誤ならん。( )

親子鑓を並べつ (中略) 手勢三千を引きしめて 紀事略の註には、長宗我部と仙石の兵數合せて六千餘人とする説と、八千餘人とす

る説とを併せ載せたり。南海通記に據れば、長宗我部仙石の兩軍合せて六千餘人にて、長宗我部が三千の兵は、左の如く部署せられたりき。

桑名太郎左衛門 千人 彌三郎信親 千人 宮内少輔元親旗下一千人

醉帥の紋染めさせたる旗一ながれ押し立てて 長宗我部謹に「家紋鳩醉帥」とあり。寫本聚樂武鑑に、「家紋鳩醉帥、黒餅」として圖を出だせり。鳩醉帥といふ紋は紋帳などに無し。

好く醉帥とす。眞書太閤記に、秦ノ能後技手大門兩郷三千貫文を知行し、京都の大番を勤めし時、一日天盃を賜はりしに、盃の中に

醉帥の葉浮びたるをもて、定紋となしぬと云へり。長原止水君のカタバミを初板の表紙の裝飾に用ひ給ひしも、これに本づけるなり。

本多主税が二千の兵佐古の口よりまはり來て 佐古の口は豐薩軍記に「迫ノ口」に作り、セコノクチと傍訓せり。

中にも大將 信親は唐綾織の甲を着 蛇皮の冑を戴きて 戸次川の戦には、信親いかなる装

したりしか、諸書に見えず。新納が後に元親に贈りぬと云ふ甲冑もいかなる製作なりしを知らず。本文は眞書大閤記太閤四國攻の條を

取る。其文に云はく。「長宗我部彌三郎元親、旗本勢を三段に分ち島雲の陣を張て待掛たり 信親其日の出立は唐綾織の鉤に蛇皮の甲を着し 栗毛の馬の疾鬼と名付て九寸に餘る逸物に金覆輪の鞍を置き朽葉の厚織掛け金の折敷の前立物前傾きに指し四尺の大太刀を眞向に差翳し」云云。此時の太刀は備前長義の新身なりきと下文に見えたり。

そも此太刀は信親が元服の折引出物に總見院殿の賜はりし 信親の信ノ字は織田信長に受けしなり。

日振ノ島 伊豫ノ國北宇和郡に屬す。三浦半島の西、戸島の南に位せり。承平以後海賊の巢窟たりき。元親はここに退きて、太閤の九州攻を待ちしなり。

あはれなるかな元親は五十路に近き老の身の元親は天文八年己亥の誕生なれば、天正十四年には四十八歳なり。後慶長四年己亥五月十九日(一)に三月五日に作る。六十一歳にてまかりぬ。室は齋藤内藏ノ助利三の女なりき。

異國のむかし Troyaにて Homeros が Ilias の中に出てたり。



赤脚走二刀山一  
好通二線路一  
脱却ス界關と  
聲高らかに引續し、  
紅顔綠鬢痕も無く、  
烟とこそはなしたりけれ。  
壺にをさめし遺骨に  
天府常舜居士といふ  
一紙の戒名を取り添へて、  
日振の鳥に持ち歸る  
僧俗二人の使者と共に、  
島津とぶらひのつかひを遣れば、  
これを聞きたる新納さへ  
いと懇に消息して、  
最後のいくさに信親が  
身に着たりしかたみなる  
甲冑をおくりけり。  
異國のむかしににて  
愛子 Icedor が屍を  
敵の陣所に乞ひ得たる  
Primos 王が恨にも  
まさる恨は日振なる  
假屋の軒に元親が  
最愛の子の亡骸を

あだに待ちける恨なり。

### 長宗我部信親自註

長宗我部信親 此小敘事詩は、弘田長君の囑に依り、薩摩提督として作れるなり。長宗我部氏の祖先は、仲哀天皇の頃歸化せし支那人にて、秦ノ始皇の裔と稱しき。衛府に列りて秦氏を賜ふ。用明天皇の時、土佐ノ國長岡の郡宗我部の郷に居て、長宗我部を氏とす。その支族は香美ノ郡に住めるを、香宗我部と云ふ。後秦ノ元秀土佐ノ一條家に仕へ、一條兼定の豊後ノ國に遷るに及びて、元秀の孫元親土佐ノ七郡を領す。彌三郎信親は元親の子なり。此篇は全く事實に據りて結構す。一の虚構だに無し。而して其事實は主に谷子の所藏寫本土佐國編年紀事略を取れり。此原書は南海治亂記、土佐軍記、元親記、鶴ヶ城合戦記、十河談、其他古文書數種を參照して、戸次川の戦を敘したり。

戸次川 豊後ノ國の川にて、直人の郡三宅ノ郷より發し、東流して大野郡大飼に至り、大野川又大飼川と名づけらる。それより北折し

て大分郡戸次に入る。これを戸次川と云ふ。此古戦場の地理を考ふるに宜しき書は、先づ指を唐橋世濟の豊後國志に屬すべし。此書は一たび活字本として頒たれしことあれど、多く坊間に残せず。予は豊前ノ國小倉に在りし時、當時の出板人に就いて、僅かに一本を求め得たり。されど此活字本は豊後ノ國全圖一葉を載するのみにて、諸郡の截圖を缺きたり。截圖は帝國圖書館に藏せり。唯だ紙幅太だ大にして、坡間に使ならざるを憾とす。截圖の此古戦場を圍める部分には、軍記に見えたる地名の過半を逸せり。大日本地名辭書などにも亦多くこれを載せず。其地を實踐せし人あらば、問ひたださんとおもひしかど、廢稿に至るまで其人を得ずして已みぬ。

靈山おろし吹き荒む 靈山は古戦場の西に在り。豊後國志に「推古天皇元年、天竺僧那伽者登此山、愕然歎曰、我鶻降、何年飛來于此、遂留錫營寺」云云とあり。戸次川の戦は、天正十四年十二月十二日なるに、是日の天候詳ならず。唯だ豊薩軍記に「插もの馬じるしを西風に吹き靡かせ」とあり。靈山といふ地名もめでたければ、靈山おろしと書きぬ。

船舟に經をゆづりて、  
川の緯漕ぐわたし船。

房州と人呼ぶ聞きし  
牙彫めくをち櫂とりて  
中流のゆふあげ潮を  
皺みたる腕にしのご。

はや近しさんや棧橋。  
水棹には芥まつはり、  
浮木觸れ、水底草の  
乞兒ぎぬ千斷れ靡けり。

にび色の川浚水の  
渦卷に、雌雄か、白鳥  
竝ぶ。こやさすらひ人の  
ふりし日の風流の記念。

舟人よ。あの鳥を見よ。

「はあ。ありやあかごめでがさあ。」  
氣ちかきにおちぬさま見よ。  
「臭くつて食はれませんかや。」

## 三枚一錢

足早き角の怪、電車  
さやぎつつ來てはとどまる  
かねやすが門邊の遠。

降るる乗る蜉蝣の群に  
聳り立つ麥稈帽子。  
何か爲る。汝、壯漢。

籠のうちゆとり出でて呼ぶ。  
「昨日の新開三枚一錢。」

さやぎつつ電車過ぎ行く。  
「昨日の新開三枚一錢。」

## 旗ふり

戀人は辻の旗ふり。  
物買ひに通ふゆきずり、  
顔見れば君が手にふる  
赤旗の色にぞ出づる

わが丹の頬。さはれいそしき  
目の前を、線鳴りひびき、  
ゆきかへる百の車を

留むる赤、放ち遣る青、  
軍行の時をはかりて  
鼓うち金うつに似て、

あからめは暫しもえせぬ  
君なれば、かへりみぞせぬ。  
あたらしや使はるる身の

口わるきわが内ぎみの  
目をぬすみ、しつる妝  
いたづらになれど、わが戀

赤旗のともるとおもふな。  
横町にはやくも立名。

## 火事

目に見えぬ帯うちふり  
四辻のマカダム道を  
夜の風横ざまに掃く。

店窗に電燈照れど  
見かへらで行く靴尖に

沙  
羅  
の  
木

沙羅の木

褐色の根府川石に  
白き花はたと落ちたり、  
ありとしも青葉がくれに  
見えざりし沙羅の木の花。

日下部

汽車待つ間木枕借りて  
横になる竹縁の足  
漬す水ちよろちよる流る。

御き目に見つつ眠りし  
水いつか枕をぬけて  
耳の根をちよろちよる流る。

朝の町

朝あけ大路しめやかに  
立ち竝ぶ店まだ醒めず。  
けはひひろびろ。

搏風檐壁をいりどるや  
塗繪廣告繪看板  
露にぞ映ゆる。

刹那ちりぼふひと群の  
素足わらうづ破帽子、  
新聞くばり。

雨

寒き雨電車を籠めつ。

ゆきかひに縋きしろへば  
迷ひる青き火二つ。

人いきれ夢るガッスを  
まじろかで暫まもりぬ。

窗面の半小紋の  
二つ三つ寄りては流る。

わが思そこはかと無く  
浮び来るやがてぞ消ゆる。

鐸は鳴る神田須田町。

都鳥

初夏の日暮。みどりの  
ただ中に夕ばえ煉瓦  
迷かざるまらうどと立つ。  
高鳴るや嘲る汽笛し

機關の不斷の鞭に  
むちうたれはためき過ぐる



つねに行く丘のつかさに。  
槌のおと俊き絶えず、  
月をだに踰えぬあひだに、  
天そそり立つ杉むらと  
肩並むる家ぞ出でまし。  
湖の、見はるかしつる  
上みれば、晴れたるに虹、  
かけわたす長橋。これも  
束の間のいささめづくり。  
石まがひ白くかがやき、  
その影は水にも映り、  
中島の赭塗祠  
つねよりも小さく見えぬ。  
見よ、家は空洞なる家。  
薄板を重ねだにせぬ  
壁打たば、琴の極のごと  
鳴りなまし。見よ、長橋も  
ぬり色の一重のさかえ。  
人跡まば、日の照す箱。  
かがやける色は消ぬべし。  
しかはあれどこに寄り来る  
千萬の寶の數を  
列ねんと、家をぞ作る  
その寶見に来ん人の

便にと妻問します  
彦星のためならなくに、  
鶴の橋をもわたす。  
疑の心抑へて、  
塵泥と崩えん日に逢ふ  
うつろなる法を造しし  
いにしへの聖をぞおもふ。

## 人形

うなむ子に人の贈りし  
豆ほどの人がたいくつ、  
たひらけき折敷の上に  
立てなんとすれば出る。  
立て難きこの人形に  
さも似たる「論」いく條、  
あるみ行く舟の卓に  
索張りて皿置くがごと、  
手づつにも立つとする間に、  
咀はれし手まづ疲れて  
いきの絲やがて絶ゆべし、  
「系統」はにCでなして。

## 海のをみな

海の邊に立てり。  
身赤裸なり。  
足元に伏せる  
黒ずめる岩に  
かかれる緑の  
藻なせるわが髪  
風にぞ亂る。  
廣き、廣き濱、  
紺青の水を  
湛ふる海原。  
ひなし曲れる  
一筋の白き  
小小縁は碎け散る  
波の水沫。  
ここのたの女子  
皆裸なるが  
沙に伏すもあり、  
波かづくもあり。  
眞白き肉むら  
あるは黄なる目を  
射返しかがよい、

觸れて舞ふ新聞反故。

鐘をちこち。馳する提燈。

馳する影。そよや忙しき

鈴鐸の聲耳もとに、

地蔵く。人は蜘蛛手に

馳せちがふ。おどろおどろし、

ぼんぶ遣る眞赤の車。

### Model

なりはひにまだ慣れぬ身の  
みじろかでよくぞ有りしと  
手にわたす黄金に、四つの  
少女の目異しう笑まひぬ。

まゐらす此花束は  
名無しびとふたりがしつる

なりはひの始のやがて  
果に得し黄金のむくい。

### 後影

眞晝時。うち見るきはみ

青黍を刈りし畑上。

畦道を騎り過ぐる民

閒卻す手の中の鞭。

目鏡持つ人呼ぶ、臆の

髯黄なり、敵と口疾に。

火閃く。仲長駟歩の

後影黍畑横に。

### かるわざ

立見塞く幕を卸しし

薄あかり。むかしの都盧の

裔か。子を竿にのぼらす。

しだり葉の蛙とすがり、

鳥と狐根のし、蝙蝠と

さがり垂る。見る人はやす。

立見塞く幕を卸しし

薄あかり。體日か。あらず。

見よ。子落つ、劍の上に。

さるをなぞ。泣きいざちこそ

聞え來れ。奥江城無言。

鈍き目に衆人見やる。

立見塞く幕を卸しし

薄あかり。肩ぎぬの人

おごそかに汝も呼びぬ。

第二の子のぼりぬ。落ちぬ。

然あるべき戲のごと

鈍き日にもろ人見やる。

立見塞く幕を卸しし

薄あかり。登りて落つる

子いくたり。鵬のはやにへ。

鰯は魚をぞ祭る。

幕の闇とはに貫呼ぶ、

人鈍き日に見る前に。

### 空洞

うつろなる家こそ立てれ、

留守を使へど、まのあたり  
歸るを見つと、上がり来る。

「是非高作の掲載を  
こたひは許し給はりて

添へん次號の光彩を。」

「生憎何も出来合ひて  
あらず、颯や消切りし、

インスピレーション無沙汰して。」

「そこを押してぞわれ願ふ。

たとひ詰まらぬ作にても  
お名前あれば人は買ふ。」

金縁目がね、バイシクル  
人は見掛によらぬもの、  
此直言を取てする。

燈　　ともしび

とはにをぐらき奥の間の  
しきみに近く立つ汝が  
手にともしびぞ微かなる。

このおくの間にともすれば  
あやしき姿見ゆといふ、  
こもともし火を手にとりて。

あやしきものの消え失せし  
あとにのこりてうち見やる  
闕のうへに旅寒し。

あやしきもののともしびの  
くしき油を一しづく  
など承けざりし、なが血に。

## 小　　犬

ゆきかひ繁きよつ辻に  
なれて伏したる小犬あり。  
前あし長くさしのべて、

ひる過ぐる日のまばゆきに、  
たゆき臉を垂れんとす。

垂れるは誰そや、さし引の  
うるしかがやく人力車、  
あなや、小犬の足一つ

ひき碎きつつ過ぎゆきぬ。

高く叫びて立ちあがり  
狂ふ小犬は、鼎なす

三つのあしぶみ危くも、  
大路をよきて今ゆ後

なれぬちまたに迷ふらん。

あはれ此世の兎狩、  
煮られしむかしならねども、

あしなえ大こそ多からめ。  
われは歌はん行路難

## 閑　居

風のむた都大路のとよみをも聞けど長閑き  
すみかなりけり

とひもせじとはれもせじのかたくなをいさ  
めん友もあらずなりにき

こもりゐて見る空黄なる都邊の塵の中には  
入らじとぞおもふ

(「當世物語」より)



あるは水の面に  
隠れて、しばらく  
青魚の背なす  
勻をぞ見する。  
女子の顔は  
いづれもいづれも  
笑まひを帶ぶれど、  
口差ただならず  
憎き嘲の  
色に照り映えぬ。  
あなや。そがひとり  
馳せ來と見るまに、  
右手わが左手に  
緊しくからみぬ。  
振り放たんとす。  
離れず。かなたへ  
ただ引きにぞ引く、  
美しき口を  
方に見ゆるまで  
開きて笑へり。  
目石決明の貝を  
返したる如く  
きらきらと照れり。  
鱗光る

蛇のひしと  
纏はれたるにや臂へん。  
わが髪は空さまに  
立ち、肌栗立つ。  
わが右手には利き  
劔を持ちたり。  
さはれ切りつべき  
心は起らず。  
兵率ふ  
人の驅引に  
取る劔のごと、  
ただ劔をひしと  
握り持ちてあり。  
われは女子を  
見、目をめぐらして  
持たる刃を見、  
引かれじとのみぞ  
すまふ。ふと見れば、  
海なる陸なる  
女子の限  
知らぬ詞もて  
囁りかはして、  
われ等のめぐりに  
輪を作り集ふ。

魚市の如き  
腥き臭  
我鼻を揆てり。  
輪はせばまり來ぬ。  
わが左手取れる  
女の體と  
輪をなす女の  
體と相觸る。  
左手引く力  
加はり加はる。  
波打際へぞ  
やうやう引かるる。  
わが右手には利き  
劔を持ちたり。  
輪をなす女も  
身にはえぞ觸れぬ。  
あな、我は斯くて  
海のいづくへか  
引かれて行くらん。

直言

今縁目がね、パイシクル。

彼人はわが日のうちに身を投げて死に給ひ  
けん來まさずなりぬ

君が胸の火元あやし時刻に拍子木打つて  
廻らせ給へ

我と云ふ大海の波汝と云ふ動かぬ岸を打て  
ども打てども

接吻の指より口へ傳へて三とせになりぬ  
衣なりき

握い撫でば火花散るべき黒髪の纏に我身は  
縛られてあり

散步着の襟鈕の孔に挿す料に摘ませ給はん  
花か我身は

顔の火はいよよ燃ゆなり花束の中に埋みて  
冷やすとすれど

護謨をもて消したるままの文くるむくつ  
け人と返してけり

爪を脱む「何の曲をか弾き給ふ」あらず汝  
が目を引き搔かんとす

み心はいまだ落ちぬす蜂去りてコスモスの  
莖ゆらめく如く

まゐらすのおん古里の雛棚にこの Tanager  
の人形一つ

籠のうちに汝幸ありや 鶯よ戀の牢に我は  
幸あり

わが魂は人に逢はんと抜け出でて壁の間を  
くねりて入りぬ

善惡の岸をうしろに神通の帆掛けて走る戀  
の海原

好し我を心ゆくまで責め給へ打たるため  
の木魚の如く

厭かれんが早きか厭くが早きかと争ふ或や  
戀と云ふもの

頬の尖の鬚子一つひろごりて面に満ちぬ戀  
のさめ際

うまいするやがて逃げ出つ美しき女なれ  
ども齒きしりすれば

Messina に似たる女に憐を乞はせなば  
さぞ快からん

利き爪に汝が膚こそ破れぬれ鎖取る我が  
力馳みて

氷なすわが目の光泣き泣きていねし女の  
項を穿つ

貌花のしをれんときに人を引くくさはひに  
とて學び給ふや

美しき限集ひし宴會の女獅子なりける君  
か斯くても

汝が笑顔いよいよ匀ひ我胸の悔の腫ものい  
よいようづく

此戀を猶續けんは大詰の後なる幕を書かん  
が如し

彼人を娶らんよりは寧我日和も雨も無き  
國にあらん

慰めの詞も人の骨を刺す日とは知らずや默  
あり給へ

富む人の病のゆゑに白がねの匙をぬすみて  
行くに似る戀

聞はぬ女夫こそなければ舌もてし拳をもてし  
簾をもてする

處女はげにきよなるものまだ售れぬ荒物  
店の箒のごとく

觸れざりし人の皮もて飲まざりし酒を盛る  
べき囊を縫はん

黒檀の臂の紅蓮の掌に銀盤盛げ酒を俯む  
る

一時の外の御座にいます大君の聲喉に耳傾  
けてをり

註文すわが心臓を盛る料に焔に堪へん白金  
の壺

拙なしや課役する人煎酒飲おなじくはわ  
ん朝から飲まん

我<sup>わが</sup>

百<sup>ひやく</sup>

首<sup>しゅ</sup>

斑駒の骸をはたと抛ちぬ Olympus なる神のまゝに

もろ神のゑらぎ遊ぶに釣り込まれ白き齒見

せつ Nazareth の子も

天の華石の上に降る陣痛の斷えては續く獸めく聲

小き釋迦摩揭陀の國に惡を作す人あるごと

に青き糞する

我は唯だこの菴沒羅葉に於いてのみ自在を

得ると丸呑にする

年禮の山なす文を見てゆけど麻姑のせうそ

こ終にあらざる

憶ひ起す天に昇る日籠の内にけたたましく

も孔雀の鳴きし

此星に來て栖みしよりさいはひに新聞記者

もおとづれぬかな

或る朝け翼を伸べて目にあまる穢を掩ふ

大き白鳥

雪のあと東京と云ふ大沼の上に雨ふる鼠色の日

突き立ちて御濠の岸の霧にめに枯柳切る絆縛の人

大池の鴨のむら鳥朝日さす岸に上りて一列

にある

日の反射店の陶物、看板の金字、車のめぐ

る輻にあり

惑星は軌道を走る我生きてひとり欠し仰せ

んために

重き言やうやう出でぬ吊橋を渡らんとして

卸すがごとく

空中に放ちし征箭の黒星に中りしゆゑに神

を畏るる

脈のすぢ汝達喘ぐ老人に同じと藥師云へど

信ぜず

「友ひとり敢ておん身に紹介す。」かかる樂

器に觸れん我手か」

綴ぶみに金の薄してあらぬ名を貼したる如

く或人見れば  
寡慾なり火鉢の縁に立ておきて煖まりたる  
紙巻をのむ

おのがじし靡ける花を切り揃へ束に作りぬ  
兵卒のごと

一夜をば石の上にも寝ざらんやいで世の人の

讀む書を讀まん

獸あるに若かずとおもへど批評家の餓ゑん

を恐れたまきかに書く

あまりにも五風十雨の序ある國に生れし人

とおもひぬ

伽羅は來て伽羅の香、檀は檀の香を立つべ

きわれは一星の火ぞ

すきとほり眞赤に強くさて甘き Nig-joree

の酒二人が中は

今來ぬと呼べばくるりとこち向きぬ回轉椅

子に掛けたるままに

うまいより呼び醒まされし人のごと圓き日

をあき我を見つむる

何事ぞあたたら 若さの黄金を無縁の民に投

げて過ぎ行く

君に問ふその唇の紅はわが眉間なる皺

を熨す火か

いにしへゆもてはやす徑すくとぶ珠二つま

で君持たり日に  
舟ばたに首を俯して掌の大きな海を見ん  
がごとき日



# 年譜

文久二年 (一歲)

正月十九日石見國中津和野町横堀に生る。父は靜男、母は峰子、家代々藩主龜井家の典醫たり。

慶應二年 (五歲)

藩儒米原綱善に就て四書五經の素讀を受く。

慶應四年 (七歲)

藩醫養老館に入る。

明治二年 (八歲)

版籍奉還によつて養老館廢せらる。その以後は父に就て蘭學を修め、又藩醫室良悅に蘭文典を學ぶ。

明治五年 (十一歲)

父に伴はれて東京に赴き、十月本郷壹岐殿坂進文學舎に入りて獨逸語を學ぶ。神田小川町西周氏の邸に寓して通學す。

明治七年 (十三歲)

下谷藤堂邸跡の東京醫學校豫科に入學。後本郷元富士町に移りて東京大學豫備門と改稱の時、その寄宿舎に入る。

明治九年 (十五歲)

官費生徒となる。

明治十年 (十六歲)

東京大學醫學部と改稱せらるゝと共に本科生となる。

明治十四年 (二十歲)

七月四日卒業。九月十七日讀賣新聞に「河津金泉君に質す」を出す。知友の談によれば、新聞に初出の文なりと云ふ。十二月十六日任陸軍軍醫副。東京陸軍病院課係被仰付。

明治十五年 (二十一歲)

二月十七日敘從七位。五月十一日免本職。陸軍軍醫本部課係被仰付。主として普魯西の陸軍衛生制度の取調に従事す。

明治十七年 (二十三歲)

三月フレイゲルの「陸軍衛生制度書」を基礎として「醫政全書稿本」十二巻を編し、この月之を官に納む。六月七日獨逸國留學被仰付。八月二十三日出發。十月十二日伯林着、ライプツヒ大學に入る。

明治十八年 (二十四歲)

五月二十七日往陸軍一等軍醫、七月二十五日敘正七位。十月ドレスデンの軍醫講習會に列す。

明治十九年 (二十五歲)

五月ミュンヘン大學に入り、翌年「ピールの利尿作用に就て」、石竹科種子の解毒に就て」及び「日本兵士の食餌に就て」の三業績を「衛生學 實 函」に發表す。

明治二十年 (二十六歲)

四月伯林大學に入り業塾。伯林市水道に於ける病的細菌に就て」を「衛生學 雜誌」に發表す。

明治二十一年 (二十七歲)

七月、日本住家の人類學的衛生學的研究」を「人類學會論文集」に發表す。七月三日伯林を發し、英佛を経由し、九月八日東京に着す。同日補軍醫學令教官。十二月十三日内費を以て非日本食論將失其根據」を出版す。この月軍醫學舎を軍醫學校と改稱。二十八日補軍醫學校教官兼陸軍大學教官。

明治二十二年 (二十八歲)

三月雜誌「衛生衛誌」を創刊す。六月軍醫學校より「陸軍衛生教程」を出版す。七月五日

怏れたる男子なりけり Alsinthe したたか  
飲みて拳銃を取る

ことわりをのみぞ説きける金乞へば貸さで  
戀ふると云へば嫌か

世の中の金の眼を皆遣りてやぶさか人の驚  
く顔見ん

大多數が事にのみ起立する會議の場に唯  
列び居り

をりをりは四大假合の六尺を眞直に豎てて  
譴責を受く

勳章は時時の恐怖に代へたと日日の消化  
に代へたとあり

とこしへに餓ゑであるなり千人の乞兒に米  
を施しつつも

輕忽のわざをぎ人よ己がために我が書かざ  
りし役を勤むる

「愚」の壇に犠牲ささげ過分なる報を得つと  
喜びてあり

火の消えし灰の窪みにすべり落ちて一寸法  
師目を睜り

寫眞とる。一つ目小僧こはしちふ。鳩など  
出だす。いよ怖しちふ

まじの符を、あなや、そこには貼さざりき  
檻子を覗く女の化粧

書の上にすばかりなる女來てわが讀みて行  
く字の上にある

夢なるを知りたるゆゑに其夢の醒めんを恐  
れ胸さわぎする

かかる日をなどうなだれて行き給ふ櫻は土  
に咲きてはあらず

仰ぎ見て思ふところあり 寒の春に向ひて  
開ける窗を

何一つよくは見ざりき生を蹈むわが足あま  
り 徒なれば

世の中を駈けめぐり尋ね逢ひぬれど喘止ま  
ねば物の言はれぬ

十字鐵貫ひて歸りぬいづくにか埋もれてあ  
らん我を掘ると

狂ほしき考 浮ぶ夜の町にふと燃え出づる  
火事のごとくに

魔女われを老人にして 髯長き侏儒のまとい  
の眞中に落す

一曲の胸に響きて門を出で猛火のうちを大  
股に行く

死なんことはいと易かれど我はただ冥府の  
門守る犬を怖るる

防波堤を蹈みて踵を旋さず早や足跡は石に  
觸れねど

省みて恥ぢずや 汝詩を作る胸をふたげる穢  
除くと

我詩皆怪しき 臆物ならざるは無しと人云ふ  
或は然らん (明治四十二年五月一日)

我足の跡かとぞ思ふ 世世を歴て蹈み窪めた  
る石のきざはし

圓應の凝りたる波と見ゆる野に夢に生れて  
夢に死ぬる民

舟は遠く遠く走れどマトロスは唯爐一つを  
めぐりてありき

をさな子の片手して弾くピアノをも聞きて  
いささか樂む我は

Wagner はめでたき作者ささやきの人に聞  
えぬ曲を作りぬ

彈じつつ 頭を掉れば立てる 髪帯の如く天  
井を掃く

日新聞」第六千號記念號に投ず。富人の死財を散ずるを戒め、有益なる事業に投資せんことを勸告せしものなり。

明治三十三年 (三十九歲)

一月一日「福岡日日新聞」に「鵲外漁史とは誰ぞ」を掲ぐ。二月、弟、篤次郎雜誌「歌舞伎」を創刊す。三月、春陽堂より「寒美新説」を出版す。此年北清事件起り、第十二師團にも出征命令下らんとする形勢ありしを以て九月二十日、戦時糧餉談」を講ず。

明治三十四年 (四十歲)

一月一日「福岡日日新聞」に「倫理學說の岐路」及び「小倉安國寺の記」を載す。十二月二十三日小倉僧行社に於て「北清事件の一面の觀察」を講演す。

明治三十五年 (四十一歲)

一月一日「福岡日日新聞」に「即非年譜」を、「門司新報」に「和氣清庵と足立山」を載す。二月、春陽堂より「審美極致論」を出版す。二十五日「めざまし草」第五十六號を以て廢刊す。三月十四日免本職、楠第一師團軍醫部長。二十四日小倉僧行社に於て「洋學の盛衰を論ず」を講ず。四月、竹柏會大會に於て「マアテルリ」の脚本」を講ず。六月二十五日上田鶴博

士の「藝苑」と合同して雜誌「藝文」を創刊す。八月、第二號刊行後、出版書肆と衝突し、十月同人資を捐て「萬年草」を創刊す。九月「即興詩人」を春陽堂より出版す。十二月「歌舞伎」の號外として脚本「玉篋兩浦嶋」を出す。後「我一葦物」に收む。

明治三十六年 (四十二歲)

一月、伊井荊峰一座市村座に兩浦嶋を演ず。二月、畫報社より久米桂一郎と同撰「藝用解剖學・骨論」部」を出版す。六月六日東京高等師範學校國語漢文學會に於て「ゴビノオの人種哲學梗概」を講ず。(十月、春陽堂より出版す。) 九月十五日國光社より筑前琵琶歌「長宗我部信親」を出版す。弘明醫學博士の囑による。十一月五日軍事教育會よりクラウゼwitz著「大戦學理」卷一、卷二の譯本を出版す。原著頗る難解を以て聞ゆ、曩に小倉に於て之を講じ、獨逸原本の題號「ユウベル・デ・ン・クリイヒ」に従ひて「戰論」と題し、第十二師團石印を以て印行す。今年陸軍士官學校卷三以下を佛譯本を以て譯出し、佛譯本に依て「大戦學理」と題し、合本して印刷に附せしなり。二十八日早稻田大學課外講義としてサムソン・ヒンメルスチルナの「黃禍論梗概」を

講演す。翌年五月、春陽堂より出版す。日露間の風雲切迫せるを以て、十二月二日軍醫學會に於て「一八二二年拿破崙第二世露國侵入時の軍隊病類」を講ず。

明治三十七年 (四十三歲)

露國に對して宣戰宣告せられ、二月、第二軍軍醫部長被仰付、「萬年草」廢刊す。三月、「歌舞伎」臨時號に脚本「日蓮上人辻説法」を發表す。後「我一葦物」に收む。四月、八百藏、羽左衛門、梅等「歌舞伎座」に於て辻説法を演ず。九月十三日、敍從四位。十一月二十九日、敍勳三等授瑞寶章。

明治三十九年 (四十五歲)

一月、元旦昌圖出發。七日、宇品着、十二日東京に凱旋す。四月一日、敍功、授授金、勳章及勳二等旭日重光章。八日、竹柏會大會に於て「ゲルハルト・ハウプトマン」を講ず。七月十二日祖母清子歿す。八月十日、軍醫學校長事務取扱、被仰付。

明治四十年 (四十六歲)

七月、博文館より「衛生學大意」を出版す。八月十三日、美術審查員被仰付。九月、春陽堂より「歌日記」を出版す。十一月十三日、任陸軍軍醫總監、補陸軍省醫務局長。次で



兵食試験委員被仰付。二十四日東京美術學校美術科美術解剖學講師賜託。八月「國民の友」第五十八號に於て「母影」を發表す。十月五日免本職、立兼職、軍醫學校二等軍醫正教官心得被仰付。十月二十五日、雜誌「しがらみ草紙」を創刊す。この年獨逸文雜誌「東漸」に「決闘論」を掲ぐ。

### 明治二十三年 (二十九歲)

一月、國民の友第六十九號に創作「舞姫」を出す。伯林を話説の地とす、後の「うたかたの記」に「又つかひ」と共に留學中の記念なり。この月、雜誌「醫事新論」を創刊す。六月六日任陸軍二等軍醫正、補軍醫學校教官、三十日兼補陸軍衛生會議議員。八月「柳草紙」第十一號に「うたかたの記」を出す、ミューンヘンを話説の地とす。九月「衛生新誌」、「醫事新論」を合して「衛生療病誌」とす。この年「ふた夜」、「惡因縁」、「うきよの波」、「埋木」等を譯出す。

### 明治二十四年 (三十歲)

一月「新著百種」第十二號「文つかひ」を出す。ドレスデンを話説の地とす。二月二十八日陸軍兵衣試驗委員被仰付。八月二十四日醫學博士を授けらる。十二月二十八日敘從

六位。

### 明治二十五年 (三十一歲)

七月「永夜集」を春陽堂より出版。十一月「柳草紙」に即興詩人を譯載す。三十四年二月、九星霜を以て完結す。

### 明治二十六年 (三十二歲)

三月軍醫學校より「軍醫學校業務之部第一」を出版し、小池正直と共著「壁紙檢定報告」を載す。七月七日免本職軍醫學校校長心得被仰付。十一月十四日任陸軍一等軍醫、補軍醫學校長。十二月十六日敘正六位。

### 明治二十七年 (三十三歲)

日清戰役起り、八月二十四日中路兵站軍醫部長被仰付。十月一日第二軍兵站軍醫部長被仰付。十一月二十四日敘勳六等授瑞寶章。柳草紙「衛生療病誌」應刊す。

### 明治二十八年 (三十四歲)

四月二十一日任陸軍軍醫監。六月滿洲より臺灣に轉任、八月第二軍兵站軍醫部長被免、臺灣總督府陸軍軍醫部長被仰付。九月二日東京に凱旋、軍醫學校長事務取扱被仰付。二十日敘功四級授金鵄勳章及單光旭日章。十月三十一日補軍醫學校長。十一月十五日敘從五位。

### 明治二十九年 (三十五歲)

一月雜誌めざまし草紙を創刊す。四月四日父靜男歿す。十一月二十五日敘勳五等授瑞寶章。十二月論文及び雜錄に「木竹」の劇評を附したる「月草」を春陽堂より出版す。

### 明治三十年 (三十六歲)

一月「公案醫事」を創刊す。三月二十三日陸軍武官官等長改正せられ、陸軍軍醫監は陸軍一等軍醫正と改稱。五月翻譯及び隨筆に小金井喜美子の作品を添へて「かけこ」と題し春陽堂より出版。六月小池正直と共著「衛生新篇」を出す。後水く陸軍の參考書となり、屢版を重ねたり。

### 明治三十一年 (三十七歲)

十月、日免本職補近衛師團軍醫部長兼軍醫學校長。十一月「西周傳」成り、男爵西純六郎之を刊行す。十二月畫報社より久米武洋村、大村三氏と合著「洋書手引草」を出版す。

### 明治三十二年 (三十八歲)

六月八日任陸軍軍醫監、補第十二師團軍醫部長。二十九日春陽堂より「寢美綱領」を出版す。七月十日敘正五位。九月十六日我をして九州の富人たらしめばを稿し、「福岡日

スト」第二部を、同月親山書店より翻譯戯曲集『新一幕物語』を出版す。この月二十七日より五日間、近代劇協會「ファウスト」を帝國劇場に演ず。五月、實業之日本社より翻譯集『十八十話』を、六月親山書店より創作史實小説集『意地』を、七月創作集『走馬燈及び分身』を、警醒社よりシエクスピアの『マクベス』を、十一月イブセンの戯曲『ノラ』を、富山房より「ファウスト」の別冊として「ファウスト考」と「ギョオテ傳」とを陸續出版す。

### 大正三年 (五十三歲)

一月「中央公論」に「大鹽平八郎」を出す。元月十月の同誌に「興津彌五左衛門の遺書」を出せしより、二年一月の「阿部一族」四月の「佐橋甚五郎」等、徳川時代の史實に立脚せる小説を書き始めつ。四月親山書店より創作集「かやうに」を、五月鳳鳴社より創作「天保物語」を、現代社よりホフマンスタールの戯曲「謎」を、九月春陽堂より縮刷「即興詩人」を、十月鈴木三重吉編「現代名作集」第二編として創作「堺事件」を出版す。十一月十日敘從三位

### 大正四年 (五十四歲)

一月雜誌「心の花」に「歴史其儘と歴史離れ」を出し、前年來の執筆の傾向に就て記す所あり。

「中央公論」に「山椒大夫」を出す。同月國民文庫刊行會「泰西名著文庫」の一として翻譯集「諸國物語」を、二月至誠堂より「大正名著文庫」第十四編として「評論及び隨筆集」「妄人妄語」を出版す。四月二十四日敘勳一等授瑞寶章。五月、陛下より詩作を徴され、五言律を謹書して獻上す。同月親山書店より創作「雁」を、九月詩歌集「沙羅の木」を、十月通一舎より「千桑山房叢書」として、翻譯戯曲「秘妻」を出版す。十一月八日大禮參列のため京都に赴き、十八日歸京す。「東京日日」「大阪毎日」兩新聞に「盛儀私記」を掲げ、後自費出版して知人に配布せり。十二月千章館より創作集「塵泥」を出版す。

### 大正五年 (五十五歲)

一月一日より八日まで「東京日日」「大阪毎日」に「相原品」を十三日より五月十七日まで「江州齋」を掲ぐ。三月二十八日母峰子歿す。四月十二日免本職依願豫備役被仰付。醫務局長、在職中の功績としては、第一「軍隊に腸チフス豫防接種を斷行せし事、第二、脚氣豫防調査會を設置せし事、第三、陸軍軍醫團を設置し、軍醫の學術向上を獎勵せし事を重なるものとす。五月十八日より

六月二十四日まで「前記兩新聞」に「斎阿彌の手紙」「六月二十五日より「伊澤蘭軒」を續出す。七月二十二日、四年十一月七日附を以て日獨戰役の功に依り、旭日大綬章及び従軍記章を賜ふ。八月十三日「水沫集」縮刷本を出す。

### 大正六年 (五十六歲)

一月一日より七日まで「東京日日」「大阪毎日」に「都甲太兵衛」を掲ぐ。七月春陽堂より「滔滴を」「還魂錄」と題して、一名家傑作集「第十二編」として出版す。九月五日「伊澤蘭軒」完結し、六日より十八日まで「鈴木藤吉郎」を、十九日より十月十三日まで「細木香以」を、十月十四日より二十八日まで「小島資孝」を、三十日より「北條霞亭」を掲げ、十二月二十六日に至りて新聞と關係を絶つ、こはその前日二十五日任常室博物館總長兼圖書頭の辭令を受けたるを以てなり。十一月富山房より「ファウスト」の縮刷本を出版す。

### 大正十年 (五十七歲)

二月帝國文學に「北條霞亭」の續を載す。春陽堂より創作集「高瀬舟」を出版す。九月堀越秀銅像銘を作る。十一月正倉院暖涼のため奈良に赴く、これより毎年年なり。

紋正四位

### 明治四十一年（四十七歲）

一月十日弟篤次郎歿す。五月三十日臨時脚氣豫防調査會長被仰付。六月獨逸コッホ博士來朝す、十六日當局之を歌舞伎座に招待して觀劇會を催す、これに先つこと數日、囑によりてその筋書を獨譯す。二十六日文部大臣の官邸に開會の臨時假名遣調査委員會に於て、陸軍を代表して現在の假名遣に對する意見を述べ。二十九日棠陰會の名を以て編纂したる『能久親王事蹟』を春陽堂より出版す。九月二十六日教科用圖書調査委員會委員被仰付。

### 明治四十二年（四十八歲）

一月一日雜誌『婦』創刊され、第一號に脚本『ブルムウラ』を發表し、以後再び文壇に活躍を開始せり。同月春陽堂より『阿育王事蹟』を出版す。六月翻譯脚本集『一幕物』を易風社より出版す。七月一日『スバル』第七號に『キタ・セクスアリス』を載せ、發行人を禁止せらる。二十四日文學博士の學位を受く。八月十日自ら立案せし、東京方眼圖を春陽堂より出版す。十月『スバル』第十號に小説『金毘羅』を載す。『國民新聞』に『ジョン・カブリエ

ル・ボルクマン』を連載し、後志振社より出版す。次で自由劇場によりて公演せらる。

### 明治四十三年（四十九歲）

一月易風社より續『一幕物』を、春陽堂より翻譯集『黃金杯』を出版す。四月一日、中央公論第二十四年第四號に脚本『生田川』を載す。（後に、我『一幕物』に收む）五月二十八、九の兩日自由劇場有樂座に於て『生田川』を演ず。七月新潮社より創作集『涓滴』を出版す。八月一日『三田文學』第一卷第四號に『そび』を掲ぐ。十月大倉書店より翻譯集『現代小品』を出版す。この月文部省美術展覽會審査委員被仰付。是より毎年年例となる。十二月日本橋植物町割烹店藏多主人のために引札の文を作る。

### 明治四十四年（五十歲）

一月一日中央公論第二十六年第一號に『蛇』を掲ぐ。この月春陽堂より翻譯脚本集『人の一生』『飛行機』を、二月創作集『烟塵』を出版す。三月『三田文學』第二卷第三號に『妄想』を掲ぐ。（後創作集『分身』に收む）五月十六日文藝委員會官制公布せられ、十七日同委員被仰付。七月金尼文淵堂よりハウプトマンの戯曲を譯せし『寂しき人々』を出版す。

八月『中央公論』第二十六年第八號に『心中』を掲ぐ。九月一日『スバル』第三年第九號より『雁』を掲げ始め、斷續して大正二年二月第五年第五號に至る。この月春陽堂より『かげぐさ』改訂版を出版す。十月中央公論第二十六年第十號に『百物語』を掲ぐ。『蛇』『心中』『百物語』は後に創作集『走馬燈』に收む。この月二十六、七兩日自由劇場、寂しき人々を帝國劇場に演ず。十二月金僱堂よりイブセンの戯曲を譯せし『幽霊』を出版す。

### 明治四十五年 大正元年（五十一歲）

四月春陽堂より大村西崖と共著『希臘羅馬諸神傳』を出版す。七月、榎山書店よりシュニツレルの翻譯『みれん』を出版す。この月土曜劇場『飛行機』を有樂座に演ず。八月、榎山書店より創作集『我一幕物』を出版す。九月、榎山書店より『一幕物』正續篇を合冊して出版す。

### 大正二年（五十二歲）

文藝委員會委員として譯せし『ファウスト』第一部を富山房より出版す。二月現代社、近代脚本叢書第一編として、シュニツレルの戯曲『戀愛の味』を、榎山書店より創作『青年』を出版す。三月二十二日富山房より『ファウ



昭和二年十二月二十五日印刷  
昭和三年一月一日發行

現代日本文學全集 第三篇

著者 森 林 太 郎

發行者 山 本 美

服 權  
所 有

印刷者 杉 山 愛 二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ二

東京市麹町區內幸町一丁目三番地

發 兌

東京市麹町區內幸町一丁目三番地  
幸ビルデイング 壹階

改 造 社

振替 東京 〇五七四  
電話 銀座 座 四八三二  
銀座 座 番 番番番番

大正八年（五十八歳）

五月、玄文社「田文選」の別冊として翻譯集『蛙』を出版す。九月五日帝國美術院規程公布せられ、八日帝國美術院長被仰付。十二月、春陽堂より新聞所載創作集「山房村記」を出版す。

大正九年（五十九歳）

一月「帝國文學」廢刊し、「北條霞亭」再び中絶す。十月雜誌「アラ、ギ」に續稿「霞亭生涯」の末一年を載せ十年十一月を以て完結す。金錦社より「天保物語」を出版す。

大正十年（六十歳）

一月雜誌「明星」創刊され、『古い手帳より』を掲げ始む。三月圖書寮に於て撰述せし『帝室考』成り、百部を印刷配布す。次で「元號考」の著述に従ひしも完成に至らざりき。六月二十五日臨時國語調査會會長被仰付。七月善文社、脚本名著選集第一編として、ストリンドベルヒの戯曲「ベリカン」を出版す。十月、春陽堂より「森林太郎譯文集」巻一として『獨逸新戯曲篇』を出版す。十一月一日「霞亭生涯」の末一年を完結す。この頃より時々下肢に浮腫あり、營養も幾分衰へ、腎臓病の徴を現はす。

大正十一年（六十一歳）

六月に至り病大に進み、二十日臥床、二十八日讀山醫學博士の診察によりて恭縮腎と確定、七月七日、兩陛下より葡萄酒下賜、八日攝政宮殿下より御見舞品下賜、此日特旨を以て位一級被進叙從二位。九日午前七時薨去。

わたくしは家兄薨去直後より年譜の編輯に着手し、辭令書、著書、原稿、親戚知友の談話及び自己の見聞によりて組織して見たが、古い所は記憶してゐる人も無い。大學卒業前後の改進新聞（キタ・セクスアリス）には自由新聞とあるが、實は、改進と聞いたと思ふに投書したのを見たいと思ふが、同新聞は帝國圖書館にも無く、まだ手に入らぬ。家兄は以前新聞切替を貼込んだ帳を澤山持つてゐたが、日露戰爭前頃餘り蟲喰が甚しいため廢棄したのは、今考へると非常に惜しい。左様なわけで年譜も未だ完成しないが、改造社からの請求により、稿本の中から抜萃し、所々に説明を加へて責を塞ぐ事とした。この表中雜誌に掲げた

分は同社の「森鷗外集」に收めると聞いたもの、外は或一部に止め、沙羅の木は只れだけ抄出されるか分らぬので、たい刊行された年月のみを記し、著作の劇に演ぜられたのは初演だけを擧げて置いたが、それも本略譜に掲げた分だけに止めた。單行本は出版毎に大概、家兄から贈られたので、それに依つて第一版發行の年月の所に記入した。しかしわたくしは江戸時代史を専攻してゐるから、史傳方面の記載は注意もし、家兄も「大鹽平八郎」の如き史實小説が出る、と、雑誌の誤植を朱で訂正して直ぐに送つて來る様な次第で比較的正確と思ふが、他の創作小説や、殊に翻譯物の方面は全く門外漢であるから、洩れたものが多少ありはしないかと恐れてゐる。

昭和二年十二月二十一日

森 潤三郎





GTU Library  
2400 Ridge Road  
Berkeley, CA 94709  
(510) 649-2500

GTU LIBRARY



3 2400 00559 7798

アイドアリガトウ  
中川書店





改造社